梅園全集

下巻

三浦梅園先生肖像　帆足萬里贊　片山東籬畫

佐野長次郎氏所藏

梅園先生述志詩並序

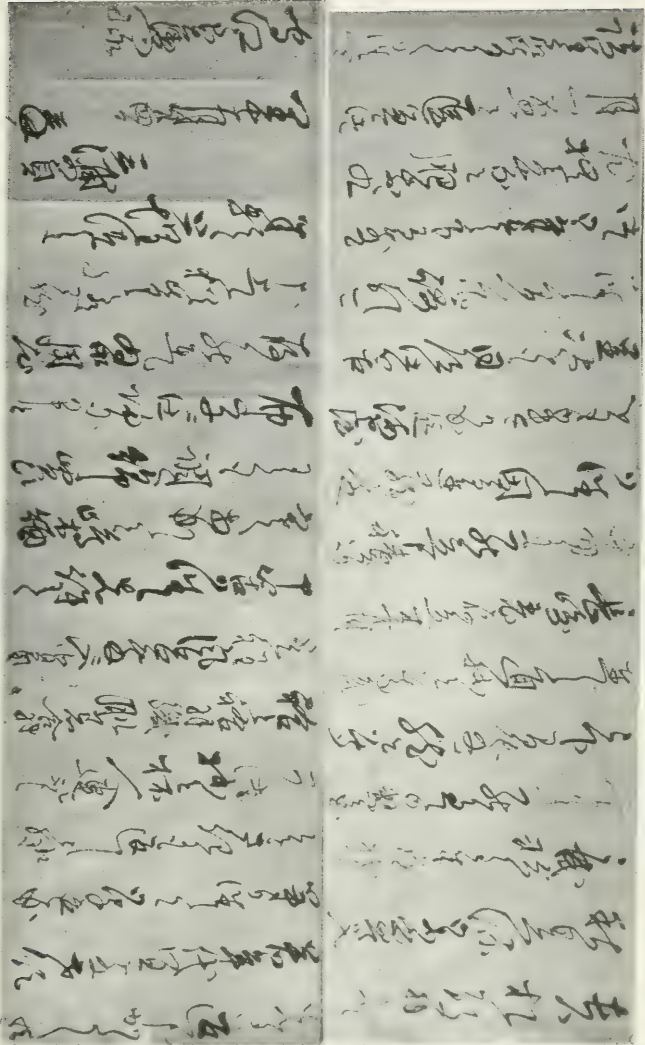
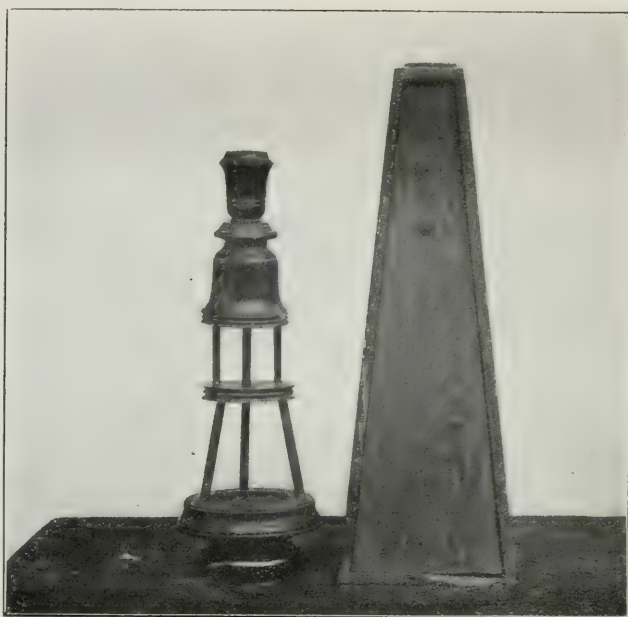
井坂豐俊氏所藏

梅園先生書翰

綾部佐太郎は絅齋先生の令孫にして
富坂先生の令息即ち輔之なり

梅園先生書翰

河野登氏所藏

安永七年七月梅園先生六十五歳長崎旅行前
門人宇江達藏の父貞右衛門に寄せたるもの

顯微鏡（長崎の古人吉雄幸作より梅園先生に寄せたるもの）

三浦榮二郎氏所藏

梅園先生の佩刀

同上

藤井專蹟氏藏

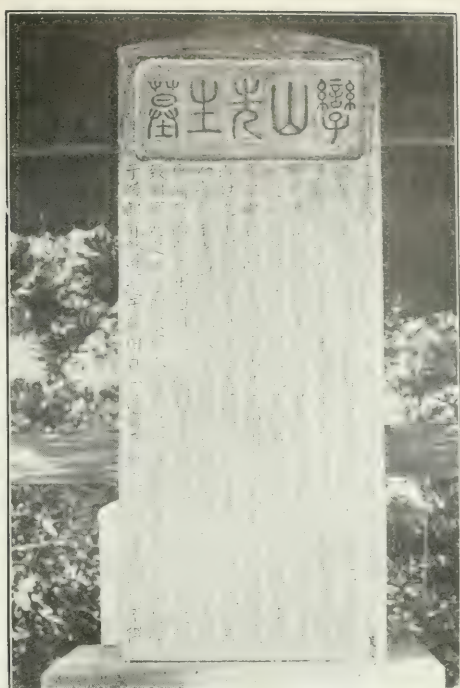
紫田森作氏藏

佐野長次郎氏藏

梅園先生遺墨

清原勘治氏所藏

佐野長次郎氏所藏

梅園先生墓碑

梅園先生の故宅

圖中の人は後嗣三浦榮二郎氏なり

二子山

梅園先生手栽の杉林及銀杏樹

土製の書額　梅園先生筆蹟

藤原政一氏寄贈、梅園文庫所藏

梅園文庫（明治四十五年二月四日開庫　杵築町久保坂に在り）

家屋は佐野令三氏の寄附に係る

梅園全集下卷

凡例

一、此卷には梅園叢書三卷、梅園拾葉三卷、梅園後拾葉一卷、梅園拾英一卷、愉婉錄二卷、養生訓一卷、塾制一卷、梅園讀法一卷、子歳漫錄一卷、詩轍五卷、獨嘯集一卷、春遊草一卷、梅園詩集二卷、梅園詩稿一卷、梅園文集一卷、書翰集一卷、都べて十六種、二十六卷、及び附錄二十二種を收む。

一、梅園叢書。 隨筆體の著述にして先生の著書中最も平易なるものなり、先生の人情世態に關する所感及訓言を此内に發見することを得べし。 著作年時詳ならず、拾葉の跋に寛延三年庚午九月既望三浦安貞撰とあり、寛延三年は二十八歳なり、此年に叢書並に拾葉を草了せしものとは見るべからず、恐くば其頃より書き初めたるものなるべし。 本書の刊本は廣く世に行はれたり。

一、梅園拾葉。 刊本には本書も亦梅園叢書と稱し彼を初集此を後集と稱せり、然れども本書は隨筆物にはあらず、應答、記事、論說、物語等隨時の筆札を集蒐せるものにして拾葉の名其實に稱へり、本書も亦廣く世に行はれたり、就中戲示學徒の一篇は最も廣く世に知らる。天明元年五十八歳の九月題言を書し、翌年睦月小野春樹跋文を書す。

一、梅園後拾葉。 梅園拾葉と同性質の著述なり、世に行はるる鐵漿訓及奉公之道二十ヶ條は此内に收まれり、集成年時詳ならず。

一、梅園拾英。 梅園全集編纂の際、慈悲無盡興行旨趣の如き孤行せる短篇を拾蒐して七篇を

得たり便宜一括して拾英と命名せしなり。

一、愉婉錄。　書名は愉色婉容養其志の語に取れるものなり。　子女を教へんが爲め忠臣孝子節婦義僕三十八名の美談を記したるものにして讀者をして回光反照せしめ發憤興起せしめんことを期せり。　天明三年六十一歲の睦月成る。

一、養生訓。　杵築藩の素封家荒卷氏闔族夭死す、先生其孤兒の爲に養生法を說きて貽れるものの是れなり。　末尾に記して曰く、若し能く之を受用せば瑣瑣たる小言なれども人を壽域に上らしむることを得んと以て此篇の說く所を察すべし。　安永七年五十六歲の六月成る。

一、塾制。　私塾梅園の規則なり。　明和三年四十四歲の正月二十日始めて之を制定し、其後明和四年霜月十一日、安永二年四月七日、及安永三年五月の三回に亘りて修訂を加へたり。日本教育資料に收められてより廣く世に知らる。

一、梅園讀法。　音韻の書なり。　安永二年五十一歲の八月新塾生池部子昌の爲に讀書法の梗概を說けるものにして梅園家塾獨得の讀法を窺ふべし。　安永九年五十八歲の六月不の字に關する龍野草廬今城周右衞門の說を附記す。

一、子歲漫錄。　詩話五則、助字異同辨十二則、讀法五則を收む、安永九年庚子の作か。

一、詩轍。　子弟に詩學の軌轍を授けんが爲に作りしものなり。　天明元年日出藩文學喬維嶽序を作り程赤城之を書す、天明四年伏見藩文學龍草廬叙を作る中に嘗有關西夫子之稱焉の語あり、天明五年六十三歲自ら跋を書す、翌年八月刻成る。

一、獨嘯集。元文五年より寛保三年に至る即ち十七歳より二十一歳に至る五年間の詩集なり。先生十五歳にして詩に志し、舊稿積て案に堆し、消閑の暇筆删して一百首を得たり錄して一卷となす即ち是れなり。先生年少時代の詩想を見るべし。附錄に夢中得る所の句數則を記す。

一、春遊草。天明元年五十九歳の二月二十日發程、高田宇佐中津小倉の各地に遊び三月十五日歸山せし時の紀行詩存なり。久留島侯先生を聘せんとの意あることを傳へたるものあり又小倉藩の大夫先生を小笠原侯に薦めんとの意あることを傳へたるものあり、先生何れも詩を以て之を謝絶したるは此の旅行中の出來事なり。述志の一篇先生の志を見るべし。本書の詩、梅園詩集の詩と重複するものあれども已に各纒りたるものなれば今は各之を存せり。且述志之序は詩集の所載と字句の異る所頗る味ふべきものあり、讀者其の題面の同じきを以て輕々に看過する勿れ。收むる所の詩二十七首。

一、梅園詩集。延享元年二十二歳より天明六年六十四歳までの詩三百七十六首を收む、天明六年自序を作る、天明七年程赤城之を書す、同年十一月刻成る、翌年題後を書す。

一、詩園詩稿。全集編纂の際詩稿を蒐集するや、孤節上下二冊、梅園詩稿三冊、梅園集後編及梅園集拾遺等あり、而各冊收むる所のもの錯雜重複頗る混沌たり、干支を追ひ、前三種詩集に漏れたる所のものを拾錄整理し之を一括して梅園詩稿と名けたり。收むる所の詩九百三十首。通計詩存一千四百三十一首。

一、梅園文集。文稿亦數冊あり頗る錯雜重複せり、全集編纂に臨み、便宜整理分類して五十八

篇を存し之を梅園文集と名けたり。

一、書翰集。全集編纂に際し極力蒐集して七十通を得たり、先生の書翰唯月日を書して年次を書するもの殆之なし故に叙列唯蒐集の順に隨ふ。

一、梅園玄語贅語刻料。天明八年即ち先生長逝の前年十一月、手野村周平、佐野玄仙、小原爲次郎、雨子文平及海老屋壽助の五氏發起となり、銀米を醵出して玄語贅語の上木を計れる時の醵金募集の趣意書、刻料大積即出版費豫算、並に出銀者の名簿なり。其方法は出銀十箇年の利子を以て刻料に充て、出版完成の後元錢にて返辦するものなるがごとし。但中には返銀に及ばずと書せるものあり。此の方法に依り玄語を後にして贅語を先にし、贅語の上木大半に及びたるも遂に完成せず玄語には全く着手せずして事已みたるものの如し。

一、杵城遺事。本書は梅園先生の編纂せしものにして安住養國禪寺碑銘梅園撰、龍溪源公行狀（綱齋撰）の二篇及び伯章綾先生詩三十一首、山本健齋詩二十九首より成る。然るに安住養國禪寺碑銘は梅園文集に收め、龍溪源公行狀及び伯章綾先生詩は花王園集に具はれるを以て玆には唯山本健齋詩のみを存す。

一、家庭指南。先生の師綾部綱齋の著述なり。綱齋名は安正、字惟木、又の字を伯章といふ、通稱は進平、綱齋正德二年伊藤東涯の門に遊び正德四年此書を著す、時に年二十九歲。綱齋が室鳩巢に見へたるは後十年即四十九歲の時なり。家庭指南は數葉の小著に過ぎずと雖も、其師鳩巢が享保九年に作れる讀家庭指南には實際之學と稱し、東涯も亦享保十年其

後に書して宣可レ信而可レ傳也と評し、絅齋の子伊承の友なる大坂の中井竹山も亦安永九年跋を作りて自レ非下先生崇二正術一之深、務二實踐一之篤上、惡得レ若レ茲と嘆じたり以て其人其學を知るべきと同時に梅園先生德風の淵源を窺ふべし、絅齋謙德を以て深く之を篋底に藏す、令嗣伊承之を世に公にせんと欲して果さず、令孫輔之先人の志繼がず祖訓の以て傳ふるなきを慨して遂に奮然之を刻するに當り梅園時に年六十三、條理に依りて精細なる傍批を加へ且つ卷首に序文を書し鳩巢、東涯竹山の跋文を後に附せり、正德四年を距る實に七十年也。

一、和文家庭指南。著作年月未だ詳ならず、絅齋の女高橋家に嫁せる時、家庭指南の大意を和文に認めて與へられたるものなり、絅齋の女自筆の和文家庭指南今猶高橋家に傳ふ。

一、有終綾部先生花王園集。本書は綾部絅齋先生の詩文を蒐集類纂せしものにして附錄に師友唱和應酬の詩文を集載せり。梅園先生、門人として之が編纂校正の勞を執られたり。本書は家庭指南と相待て絅齋先生の學殖德風を窺ふに足るのみならず、梅園先生が恩師に酬ひんことを努められたるものの如何に深かりしかに見るべし、

一、祭孿山先生文。讀賛語賦寄三浦修齡、及寄三浦修齡在京師の三篇は蘭室集略より之を採れり、脇儀一郞、名は長之、字は子善、愚山と號し又蘭室菊園等の號あり、豐後速見郡小浦に生る、蘭室二十二歲の時初めて梅園先生に謁す、先生時に年六十三歲なりき、蘭室は實に之を梅園に承けて萬里に傳へし南豐文運の橋梁たり、此の三篇聊か以て偉人と偉人との間に於ける氣息の呼應を窺ふに足らんか。

一、梅園先生肖像之贊。石谷の筆に成れる肖像讃に萬里先生の贊せし原本は杵築佐野雋達

氏の家に傳はる、晩近之を石版摺となし廣く世に頒布せらる。
本邦大儒の一篇は肆業餘稿より之を採り、鶴溪の一首は帆足先生文集より之を採る、萬里先生自ら持するもの極めて高く容易に人に許さず、然るに梅園先生に對しては贊辭を盡くし尊崇を極む、亦以て梅園の如何に高かりしかを認むべし。

一、圖翼引。門人矢野雖愚、三語に跋せんと欲して起稿せしものなり、然れども其志を遂げずして歿せり、友人弓崎恕之を悲み、修正を加へて其志を成せり、現今敢語の跋文は即ち是れなり。雖愚手書の原稿は今猶其後裔たる速見郡別府町清原道彥氏の家に藏す。

一、祭洞仙先生文。讀玄語、及び梅園贅語上梓引の三篇は矢野毅卿の焦園集より之を取る、毅卿名は弘、焦園と號す、杵築の人、梅園門下の高弟なり條理學を傳へて條理余譚一册を著せり、其詩文を集めたるものを焦園集となす。

一、復三浦安定書翰。麻田剛立は梅園の師綾部絅齋の第二子にして天文學の大家なり、梅園との交情極めて厚かりき、僅に一篇の書翰に過ぎざれども偉人と偉人相許し相徵する高調の友誼を看取すべし、特に書翰中玄語贅語及家庭指南に付云云せるものの參考の好資料たり。

一、寄加藤周平書翰。令嗣三浦修齡の書翰なり、大阪加藤周貞といへる人の死は玄語贅語の出版に一頓挫を來し終に再擧する能はざるに至りしものの如し、亦梅園著書刊行に關する好箇の參考資料なり、本書に收むる所以。

一、思堂先生行狀。辻達撰、思堂先生は梅園先生の令嗣修齡なり、思堂杵築侯に仕へて教授と

なり又郡奉行を兼ねたり、而して終身先人の著述を校正するを以て己が任とせり、故に梅園を知らんと欲するものは又思堂を知らざるべからず、玆に其行狀を收むる所以なり。
辻達は玄陽と號し梅園の門人にして思堂の女婿たり。

一、書杵築菅廟碑稿本之後。　篠崎小竹。　小竹は速見郡八阪村の人、加藤吉翁の子なり、大阪の篠崎三島に養はれ其の嗣となる、梅園歿する時小竹年九歲、後關西文壇の名家となれり、此書後は小竹晚年の筆に成る而も先生を以て深山大谷に比す、亦以て先生の當時の學海に重きを爲せしことを見るべし。

一、帝國大學玄語贅語借覽公文書。　明治三十二年史料編纂上參考の爲め玄語贅語の二部貸付方井上文科大學長より三浦大明宛の依賴狀、右請取狀、明治三十九年坪井文科大學長より三浦榮二郎宛返送狀並に濱尾帝國大學總長よりの深謝狀等公文書四通を存す、斯くて梅園先生の著書は明治聖代の最高學府より公然深重なる敬意を拂はれたるものといふべし。

一、作者之聖。　元田直。　元田直氏は帆門の長者を以て推されし元田竹溪氏の令息にして南豐と號す、舊杵築藩の宿儒今に存するもの獨り氏を推す、氏の梅園觀は偶、梅園文庫開庫の祝辭に於て之を見ることを得たり、即ち梅園先生を以て作者の聖となし日本の聖人世界の大人物と推さんと欲する旨を述べられたり。

一、梅園先生逸話集。　本書は全集編纂者が先生に關して先輩故老より聞きし所のものを存錄せしものに係る庶幾くば又偉人の一側面を窺ふに足らんか。

梅園全集下卷目次

卷首

本文目次

附錄目次　八一五

目次終

梅園叢書卷之上

目錄

梅園叢書卷之上

豐後　三浦晋安貞　著

詩を說て道に志す人に喩す

詩曰。厭浥行露。豈不夙夜。謂行多露。まことに道に志ん人は、此詩を味ふべし。是は女子淫人をたつの言なりといへども、詩はその意ひろし。厭浥とうるほへる行のほとりの露繁ければ、夙におき夜におきて君に隨ひたくは思へども、露にぬれん事の傷ましけれとて、おもひとどまりたるなり。人各聖人にあらざれば、情にひかれ慾に動されざるはなし。或は色により財により酒食により、あるひは憤怒により好樂により親愛による。されど是はかくはあるまじき事なりと、身の汚を露にぬるる如く、よく〳〵道のあるべき所をもとめて、慾をとゞめんは、誠に君子の人なるべし。

酒食欲の誡

酒食欲の三、是人の大害といふべし。酒は少し呑ときは憂をはらひ欝をひらき氣血を循環す。されど飮酒の人節をしらず。あくまでのみ狂走喧嘩などして宛も狂人にことならず。小にしては病を醸し、大にしては禮をうしなふ。むかし邵康節酒をこのむ。酒を名づけて太和湯といふ。只のんで微醺して止む。故にその詩に

性喜飮酒。飮喜微酡。飮未微酡。口先吟哦。吟哦不足。遂及浩歌。浩歌不足。無可奈何。

といふ心は、生質酒を好む、のむにやや酒氣面にめぐる事をおぼえ、詩など朗詠してやむとなり。よく酒をのむの道を得たり。近き比松平伊豆守信綱は一時の賢君なりしが、ある夜咄の序、臣等酒の德をのべ君にすすむ。信綱の宣けるは、汝等みな子あり、その子の悉く酒を呑ん事を願ふか、飮ざらん事を願ふかと有ければ、臣等暫く默して居たりしが、子は酒を飮ざら

んこそ親のこころやすく候へとこたへける。人の至て愛するは子なり。酒若美物ならば、豈子の呑む事をいとはんや。是千古の公論といふべし。上戸と下戸とは氣禀なり。醉と醉ざるとは節にするにあり。壯にして少艾をしたふ。人情の常なり。ひとり人のみならず、水にすむ鳥、山になく鹿も、皆その偶をもとむ。しかはあれど、人は義方のおしえあり。媒をまたずしてめとり、牆をこへて處女をひく。人としもいはんや。是學者入德工夫の第一也。花の顏春を妬み、柳の眉月を欺き、目に挑み心にひかば、鐵心忽融し鋭氣忽碎けん。故に氣千里をのみ、勢萬人をとりひしぐも、ここに至つて過ざるはすくなし。朱子も世上無如人慾險。幾人到此誤平生とて自警玉へり。白樂天が詩に狐假女妖害猶淺。一朝一夕迷人眼。女爲狐媚害即深。朝朝夕夕迷人心といへり。學者心をとどめざるべけんや。安東省庵いへることあり。無求是至貴。知足是至富。安心是至樂。予其地にいたらずといへども、ふかく其言葉にふくす。身萬乘の君となり、富四海を有てども、長生を欲し福田をもとめて身を勞し、終にその貴きことをしらず。近比太閤秀吉公は匹夫より起り、已に日本を掌握し、其心猶あきたらず。朝鮮をせめ明にいらんとす。天もし是に年をかし、且勝事を得さしめば、その心明にしてとどまらじ。一生何の日かあくことあらん。利にひかれ慾に動さるれば、富陶朱猗頓を欺き、貴きこと人の位を極ても、憂愁の地を離れず。故に富貴の外に富貴あり。樂の内に不樂あり。

生前死後の理

死生の說明ならず。ややもすれば異端の說にまよふ。予易を讀て原始反終といふにいたつて、豁然として悟る事あり。死しての後は生ざる前の如し。生ざる前吾しらず。死しての後吾いづくんぞしらん。むべなるかな聖人其しる

べき所をもとめて、其知べからざる所をいわざる事を。かたへの人の曰、しからば人死して靈なし、祭祠も無用の事なるべし。曰然らず。人死して靈なしといふにあらず。又有といふにあらず。生ざる前しるべからず。死しての後吾何ぞ知ん。故に孔子も、未生をしらず何ぞ死を知んと宣り。火きえて尚煖なるものは。其氣存することあればなり。況人情已に死したりといひて、道行人にわかれたる如く、跡とふ事もなく打捨おかるべきや。是人情止事を得ざるよりおこれり。然る時にいたつて、吾心ありしむかしの事などつど／＼に思ひ出られ、なき面影かく社有し、かくぞせしとおもひつづけて誠をつくし、祭る時その誠の心おほふべからず。鬼神感格洋洋乎として上にあるが如く、左右に在が如し。この境よく／＼思ふべし。

禍福は命なりといふ論

世俗巫祝の道を信じ、災を得難に臨み病にかかるの時、願を結びて佛神に祈る。是固に所謂なきにあらず。周公旦兄武王病にかゝり給ひ、成王(武王の御子也)尚幼かりしかば、爪をきつて天にいのり給ひしとぞ。親兄或は君上の病をうる時、子となり弟になり臣となるもの、寢食する事能ず。いかんともすべからず。爰を以て天にいのり、鬼神にいのる。固にこの心かくの如くならざる事を得ず。我身に於てはしからず。太甲曰。天作孼猶可違。自作孼不可活といへり。不意にして孼にあふは、吾招く所にあらざれば、終には免るべし。又君をうらみ、父母兄長にさかひ、人を譏し人を殺し、あらゆる積惡誠に己より出たる者は、己に歸る習なり。或は酒にやぶれ色につかれ、吾天年を損す。みな自もとむる所なり。顧て身を悔べし。神にへつらい天を欺きて、此孼のがるべけんや。孔子病給ひしとき、子路(孔子の弟子)祈らんと乞しかば、丘がいのること久しと宣り。其いのるとは平

生の動作道にそむかず、今此病にあふものは是命也。しかるを何ぞ鬼神にいのるべきぞ。子路固に孔子に告ずして祈る事あらば、弟子惻惻の心なるべし。邵康節の詩に禍如許免人須諂福若待求天可量といへり。是よくいひつくせり。自禍の階をなし、是を悔顧ることをしらず。鬼神に祈て免るべくば、鬼神にも賣僧すべし。鬼神も善を善とし悪を悪とする事能はずんば、幽冥の中恐るるにたらず。まことに諂て免るべし、吾行いまだ福を得べき基なく、天に求て得べく、天も又邪正虚實を分つ事能はずば、天もはかるべし。人すら賢き人は賄、賣僧の爲に贔負偏頗の沙汰に及ばず。增てや鬼神は冥冥として昭昭たり。天は高きに居てひくきを見る。蒜を食ふものは必臭く、酒を飲ものは面酡し。其箸をとり盃を酌を見ずといへども、其事自明なり。己が私の智を以てこの過をかくさんとするは愚也。蒜の臭と酒の氣とは猶かくすべし。天はかならず。欺べからず。心を勞し身を苦しめて祈んよりは、かへりて我徳を修むべし。此上にて災あらんは、是命也と思ふべし。禍福は命あり。人力の及ぶ所に非ず。此理をさとらざる人は、網を結ばずして魚を羨み、わなをすてて兎を求るなり。決て此理なし。偶祈て得ること有と雖も、是偶然なり。祈が爲にして得たるにあらず。譬ば小兒に待人を問が如し。待人歸るべしと謂て歸りたりとて、是小兒の占委しき故といふべからず。ただ偶然なり。もし祈願の志有て求ることあらば、齋戒清淨にして衣服を改め心をひそめ妄意を動さず天に告べし。今の俗然らず。或はこの災のがるべく、此病さるべくば堂塔を建立すべし鐘を鑄るべし鳥居を立べしなど噪ぎあへり。畢竟是等は佛神と商ひするなるべし。是は猶病に臨み難にあふのとき、一身主とする所なき人はかくもあるべき事なり。或は訴論色慾に

より奸佞嫉妬により、人を害さん事を計るともがら、神木に釘をうち佛像を倒になしていのる。此事ゆめゆめ人にあたるべからず。自らその災にあふべし。むかし漢武帝鬼神の説に迷ひ、殊更越の巫を信向ありしに、董仲舒と云臣しば〳〵諫め奉りしに、武帝彼巫をめし仲舒を詛さしめ給ひける。仲舒正して南面して經論を誦詠しけるが、何事もなく、巫即時に死しけり。神は非禮をうけずといふも、ここをいへる事なるべし。

織田信長恩賞を賜ふ話

たとへば家に失火事あらんに、平生家の者にいましめて火を大事にし過ちなかりし人は賞せられず、火事にのぞみて鬚をやき眉を焦せし人は大に賞せらるるが如し。されば常に火を愼しみけるこそ火事出來て働きし人よりは手柄なるべきを、かへりて何の沙汰もなし。織田信長今川義元と沓掛山にて戰のとき。梁田出羽守計をすすめて、終に勝軍となり、毛利新介大に働き、義元の首を取てけり。信長馬より下りざる內、沓掛村三千貫を出羽守に與へ、馬より下りて新介を賞せられけり。誠に信長に非ざりせば、出羽守の功名新介に次ぐべかりしを。

雨森彦太郎軍功を讓る事

加賀利長松山の城を陷いれたまひけるに、利長の小性大音藤藏とし十六なりしが、先登して首をとる。雨森彦太郎これにつづひて城にのり、おなじく首をとり、はやく馳かへりけるに、利長祐筆に命じて一番首と記さしめたまふ。彦太郎辭謝して、否一番首は大音藤藏にて候。某はその次にて候とぞ申ける。一番首をとりたるよりも遙にまさりてけなげなり。武士は誠にかくこそありたけれ。

武田信玄の知言

武田信玄の曰、人は唯我したきと思ふ事をせ

ずして、いやと思ふ事をするならば、分分體體全く身をたもつべしとなり。

後世を願ふに心得違多き事

今の人、後世願ふも施しをするも、十が八九名と慾となり。人と毫釐の利をあらそひとりて堂塔の建立し、奴僕にからき目見せてかたへに施し、口舌爭論の片手に念佛申すは、却行(あとしざり)して道を急ぐが如し。いまの後世ねがひ施しする人を見るに、阿鼻焦熱の物語りに肝をけし、九品蓮臺の上に生れて百味の飲食に全盛の盡したき慾よりなるべし。さなきは彼人こそかかる善根をなしつれと、人の稱讃にあはん事をもとめてなり。然れどもその身五戒を外にし十惡を事とし、傍に佛に諂はんは、醫師の藥をすてて能書をよみ、疾の痊んことをもとむるが如し。先五戒を守り慈悲ふかく物にあらそふ事なくして、心しづかに後世ねがはんは、まことの道心者なるべし。

上たる人の心得下たる者の痛となる說

一村の長は一村の人の命、是にかかる。一縣の長は一縣の人の命これに係る。一國の主は一國の人の命是に係る。天下の主は四海の人の命これにかかる。人の命ここにかかるといふ事をしらば、其任の重き事をしるべし。夫一个の民は惡をなし罪科に行はるといへど、自らなしてみづから其咎をうくるのみ。假にも人の長ともなるべきものは、我慮り一度誤れば、なべての人その難をうく。暫も薄氷をふむの心をわするべからず。又貧しき人富る人の隔あるべからず。曹子建が詩に、十指有長短。痛惜皆相似、といへり。小指は母指よりほそく、母ゆびは中指より短しといへども、其病をうくるに臨んでは、小ゆびの痛も母指のいたみも皆異ならず。富貴の人の榮辱にあふも、貧賤の人の榮辱にあふも、富貴の人の憂苦も、貧賤の人の憂苦も、十の指の長き短き違ひはあれど、そ

のいたみことならざるがごとく、人に貴賤貧富の差等はあれど、憂苦哀樂の違あるべからず。

恕の道の說

世話に身をつめりて人の痛さを知れとは、賤しき俚語ながらよく道にかなへり。身の痛き事をしらば、人もいたかるべしとしりて人に施さぬなり。よろづにつき人の善惡は見えて身の善惡は見えぬものなり。さるを人の善を見ては是にしたがひ、惡を見ては身にこりなば、いづれかおしへの道にあらざらん。或は我子のわれに不孝なるを見ては、われこの道を以てわが父につかへず、我弟のほしいままなるを見ては、我此道を以てわが兄につかへざれ。我身に骨の折る事は人の身にもほねをれ我身に悲しき事は人の身にもかなし。一切みなしかなり。是を恕といふ。大學には絜矩の道といへり。宋の王旦といひし人、寇準と云し人と同じくつかへて、王旦は中書にあり、寇準は樞密院にありしが、中書より出しけるものに印を倒につきて遣しけり。寇準速に人を遣して行譴しけり。そののち樞密院より出しけるもの、亦あやまりて印を倒につきけり。時に中書の者ども右のごとくにせんといひけるを、王旦聞てさきの樞密院よりの仕方よしと思ふやあしとおもふやといへば、あしければこそといひけるを、人の惡きと知りてその惡きを學ぶ事やあるとて、其事は止にけりとぞ。陶淵明小者をおきて子に遣すとて、是もまた人の子なり、愛して使ふべしとなり。是等はみな道をみること明かなるが故に事に泥まず。或人、ひとの物を無體に所望しけるに、貴殿のほしきほどわれも惜きなりといひしとかや。わがをしきものは人もをしきなり。此理をわきまへざるは、理にくらければ也。崇峻天皇の御時、山猪を獻ずるものあり。時の大

臣蘇我馬子奢恣なりしかば、天皇これをにくみ給ひ、いつか我きらふ所の人をきる事この山猪のごとくならんと宣ひしを、馬子に告ぐるものあり。馬子おそれて東漢直駒といふものをして天皇を弑さしむ。是より直駒馬子が寵を得て、其第宅に出入して内外の隔なく、大臣の女河上姫にかよひけり。是はもと崇峻天皇の嬪御なりし人なり。馬子この事を聞つけ大に怒り、直駒が髮を庭前の木の枝にかけて、弓を取て是に向ひ、汝わが言を用て天皇を弑す、汝愚にして我いかりを慮らず、我を諫めずして天皇を弑すと、一つの罪を數ふるほどに箭一筋をはなつ。直駒いかりて敢て伏さず。吾其時は大臣ある事を知つて天皇の尊き事をしらざるのみ、餘事我辭謝せじと、さんざんに罵りけり。馬子腹をすえかね、劍をぬき腹を潰し、そののち首をきりけるとかや。其身正からず忠ならずして、人のよからん事をもとむとも、人いかでか其罪に伏せん。たとへば火をたかずして湯の熱むことをもとむるが如く、酒をすすめて醉なといふが如し。

物事に一得一失の理ありといふ説

金は天下の至寶なり。これを貯ゆるものは家富めり。されど是によりて身を失ふ者あり。人參黄耆は藥の隨一なり。されどこれを服して命をおとすものあり。劍術兵法は身を衞るものなり。されど是によりて身を殺すものあり醫術は人を救ふもの也。されど是によりて人をころすことあり。飲食は生を養ふものなり。されど是によりて我體をやぶることあり。國の大臣は國を治むべき者也。されど是によりて國を亂るものあり。此さかひ能能工夫すべし。

交際の道こころえあるべき事

權貴の家と女多き家とには、屢出入すべからず。あるじ留守の家ながゐすべからず。主人欠伸せばはやく立べし。人來り問ふ事ありとも、

志他にあらば詳かに說べからず。吾好事なりとも人このまざることをば語るべからず。朋友にも深切の異見再三にして可(きか)ずんば止むべし。我なすべしと思ひ立たる事は、明日ありと思ふべからず。貧しき人は疎みやすく、富貴の人は親みたきものと知べし。金銀にのぞみては爭心起るものとしるべし。

　和歌を引て材藝ある人の箴を說

勝ことをこのむは人情の常、まされるをにくむは人慾のつねなり。この故に材藝有人はなほ愼むべし。木林を出れば風かならず折といへり。近頃材智は身讎と云こころを、中院通躬卿の御歌とてうけたまはり侍りし、

人に見よ、おのがえならぬ、花の香に、
　をりつくさるる、梅の下枝。

　人のあしきを捨よきを取といふ訓

愚ならん人のいふ事もよく〳〵察しよきことあらばもちゆべし。ましてや賢人の言をや。

今人過ありて、其非を人に正さるれば、昔の誰某もかかるあやまちはありし、況吾等ごときの人をやなどとて悛る事をばしらず、是小人の過は必文るといへるなるべし。人のよき所をすてて、其惡き所のみを取て手本となさば、何の際限あるべき。たとへば料理をするが如く、魚鳥の羽鱗骨腸なんどあしきものをばとりすて、そのよき所をとり、その上にも鹽梅して、酢を加へ酒をさして旨からん事をこそもとむれ。旨き肉をばすて、羽鱗骨腸を用ひ、筍は籜をもちひ、飯はもみを炊ぎたらんには、いかでか是をよしといはんや。米は五穀の首、鶴鯉は魚鳥の最上なれども、今の如く拵へたらんには、藿の汁藜の和物にも劣るべし。ものの直からん事を欲せば、準繩規矩を用ゆべし。是をばさしおきて、杓子を取て定規とせんには、千萬年を歷るとも直くはなるまじきことなり。今の人あしきをとりて身の過を覆ふは、是ぞ

誠の杓子定規なるべし。

繼母と前家子との話

世に繼母繼子の中とて、十に七八はよからぬものなり。是說あり。實の親はたとひ杖をとりて指南などするとても、恩愛たがひに深きがゆへに、暫有ては互に如在なくなりゆき、他人も見咎もせぬものなり。繼しきは世の習ひとて、子ははや、定めて繼母なれば、心中に打とけはし玉ふまじと思ふもの已に胸中に横たはりてうせず。これ不和をなすの基なり。よりて假初にいふ事もむかへて聞故にむねに逆ふ也。ましてやその子に敎訓などせんに、左なきだに金言耳に逆ふならひなれば、わが過は思はずして、是をまましき故なり、誠の親ながらへてあらばかかる憂目にはあはじなど、世をうらみ述懷し、ぐわんぜなきわかき同志、理非わかたぬ隣の媼や孀など、その品は何ともしらで、すはや此人も繼子にくみするとて、彼子と呼きかたり、長しき異見は露なくて、いろいろとそぞろをかはれ、互にへだて多く重り、果は怨敵の思ひをなす。むかし或人の家に屛損じたりければ、其子のいひけるは、かく屛の損じ候、盗人こそ入べけれといひける。暫くして隣の人來りて、その子のいひしごとく、屛の損じ候、ぬす人こそ入べけれといひしが、果してその夜盗人にあひけり。かの親、吾子をば智ありてよく察したりとおもひ、隣の人をばこの人かくこそいひし、もしや盗人の手引などしつらんかと疑ひけるとなん。さればそのいふ詞も同じ言にして、聞く人も同じ人ながら、子と他人とのへだてあれば、その思ふやう雲泥萬里のたがひとなる。おなじ秋の夜も、少年遊樂の燈の前にはあけやすきをうらみ、孤婦愁思の閨の中には明やらぬをかこつ。秋の夜に違ひはあらざれども、志し各ことなればなり。今まことの親生て再びいふとも、そのことば

假令同じ事もあるべけれども、巳に繼子の心に隔あれば、おなじことばも怨のはしとなる。閔子騫幼し時母におくれ、父ふたたびめとりて三人の子をぞまふけける。この母常に閔子をにくみ、冬のきものには蘆の穗などつみて絮となしきせける。されど閔子すこしもかへりみず。母を敬ひ弟を愛しみけり。其後父この事をしりて大に怒り、母を追出さんとしけるを、閔子とどめていふやうは、母ましまさば某ひとりこそ寒からめ、母もし歸り給はば三人ともに寒からんと、さまざまにしてなだめけり。母も此事に感じて遂に慈母となりけるとぞ。誠に親のみあしきと思ふべからず。又繼母となる人も、始のほどは嗜みて最愛みけるが、とかくする內子などまふけ長るにしたがひて、いつしか兄弟の分を忘れ、我子を世に立んと思ふより、枕の上の寢物語にも、長子のよきことをばすくなくいひ、我子のよき事のみかぞへたてていふより、男の親も何れをいづれのへだてはなけれど、その詞十度ももたびにかさなれば、さては此子は愚なりけり、この子こそ賢りけれとおもひつき、是は次第にしたしくなり、彼は次第にうとくなり行ことおり。不幸にして此變に逢ん人はよく〳〵慮るべし。曾參は孔門の內にてもわきて孝行なる人なりしが、その母機をおられけるに、一人來りて曾參こそ人を殺しけれと云。母はたをおる事やまず。すこしも騷げる色なく、吾子は人などころすやうなる者にてはなしとて手やめもせず。かかる所に又一人來りて曾參人をころすといふ。されども母前の如くいひて驚かず。時にまた一人きたりてかく云ければ、さてもかかる事あるにやと抒をすてて逃けり。後にきけば曾子と同じ名の人にてありけりとぞ。曾子の賢親子のしたしき中さへ、度かさなればうたがひのこころ起るなり。まして常て

いの人の中をや。

盗人の名目種種あるといふ説

盗人はすまじきものなり。盗のすまじきといふ事を知らば、是より義に進むべし。傍の人の曰、盗はすこしく志ある人はせず。頑愚の人にとくべし。豈中人以上の失ならんやと。予が曰然らず。盗人も數あり。壁を穿ち垣をこえて人の財を盗む、これ穿踰の盗人といふ。或は人の家におし入、あるひは往還に待伏し、人をきり衣裳をはぎとる、是を野伏强盗といふ。足下の云所は是等の盗人なり。足下一をしりて其餘をしらず。上君に事るの忠なく、下國を治るの術なく、中自の職分に怠り、坐に大祿をはむ、是位をぬすむの盗人なり。謀をめぐらし僞を行ひ、君を弑し國を奪ふ、是國をぬすむの盗人なり。詩書を腰にし口法語を絶ず、退て其蹤をうかがへば、父子相爭ひ、兄弟相鬩ぐ、これ儒をぬすむの盗人なり、頭をまるめ三衣をまとひ、我慢偏執のこころつよく財利にふける、是法をぬすむの盗人なり。人のよき言をぬすみ自の利口とし、我行のあしきをいひまはして愧る事を知らず、是言をぬすむの盗人也。ひそかにあらゆる惡心をおこし、顯に善を示して外面堂堂たる君子あり、是善をぬすむの盗人なり。心に無量の僻事をふくみ、色をかいつくろひ肩をそびやし諂ひわらふ是色をぬすむの盗人なり。人の志の在所をはかり、其人の機をかんがへ、その喜ぶべき事をなし、忌所をさけ、父子のしたしき情をさかせ、兄弟の恨を起し、夫婦恩愛の中をやぶり、朋友の交りを失はしめ、その惡至らざる所なく、猶自ら人の腹心と思はるる如き、是心をぬすむの盗人なり。盗人の至て大なるものは、心をぬすむの盗人なり。その次は國をぬすむの盗人なり。穿踰の盗人の如きは、盗人の至て小きもの也。國を盗むものは侯となり、鈎をぬすむものは誅せらるとい

へり。まことなるかな穿踰はかろき事ながら察せずんばあるべからず。壁をうがち墻をこゆる事はあらねども、一紙半錢の事により交易の間子の親の物に於る、弟の兄における、奴僕の主人における、盗人の例なるべし。したしければとてぬすむべきやうはなし。諺にも針とるもの車をとると云り。色に耽り博奕を好める人を見るに、十に九此失なきはなし。吾輩の如き、天地の間に悠悠として、少壯の努力べきをしらず。老の至りなんとすることをはからず。飽まで食ひ暖かに衣て、自ら守るの節なく、人をおしゆるの術なく、幾か間中の好光陰をぬすむぞや。

村松喜兵衛の辭世

近頃淺野内匠頭長矩の家臣、村松喜兵衛入道隆圓、大石良雄等の義士と、吉良義秀をうち、つゐに終を全しける辭世に

命にも、かへぬひとつを、うしなはば、
　　にげかくれても、ここをのがれん。

人の至て大切なるものは命なり。命にもかへぬひとつとは、義にあらずして何ぞや。村松是を求て是を得たり。むべなるかな四十七士の員につらなり、名一天を動しける事。

技藝勝れたる人愼かたの事

技藝は人の嗜むべき事なり。藝勝れたらんはつつしみもまたいよいよ重かるべし。さなきは人の妬にあふものなり。倩これを鑑るに、我に甚まされる者をばその失をもとめてそしる。我に少しく勝れる者をば妬む。我と相敵する者をば吾よりおとれりとす。我より劣れるものをばあなどりあざける是藝に遊ぶ人の病なり。

劣れる者は見わけやすく勝れたる者は見わけがたしといふ説

西施愛江、嫫母棄鏡といへり。西施は昔の美人なり。江に臨み自の影のうつるを愛す。嫫母は

悪女なり。我影をにくみて終に鏡をすつ。我身と人とを見るに、われより勝れるもの、我よりおとれるものあり。我より劣れるものは見やすかるべし。われよりまされるものは見がたし。蟷螂の臂をはりて車に向ふは自らのちからをはからざればなり。高雄の文覺、西行がふるまひをききてかたはらいたく思ひ、その法師來らばしたたかに打べしなどつねぐ〵罵りけるに、或とき西行高雄に至りけるに、文覺これをむかへてける。文覺が弟子など定て例の荒氣、よも唯事にはあらじと思ひけるに、さはなくて、むかしより知れる人に逢たる如く、ことごとしく色代して遠く送りて別ける。弟子等不審におもひ、其事を文覺にとへば、いやとよ西行は我にうたるべき者にあらず、動すれば我をこそ打べき氣色あれと云しとかや。されば人此所に暗して、みづからまされる人の上にたたんとす。或は其及ばざる事を知るといへども、及ずとすることを忌憚りて、その人の過をたづねてそしり、我能をかぞへてかざりほこり。尚甚しきは怨みそねみ、はては害心を起すなり。人各聖人にあらざれば其非を見付ていはんには、誰かあやまちなかるべき。譬ば刀は紙を切り揚枝をけづり梨柿の皮を剝が如き、一切日用の事にもちいんには小刀には遙におとりぬべし。さらばとて敵にのぞみ戰をいどむにあたりて、小刀何の用にか立べき。小刀のよき所あり。刀のよき所あり。刀のなす所小刀用にたゝず、小刀のなす所刀用にたゝずといへども、其一體を論ずるに、小刀は刀と同じく論ずべき物にあらず。ひとり是のみならず、不學にして學者ぶり。人に問ふ事をはぢ、不才にして能をてらふ、貧くして富るをまなび、賤くして貴ぶる、孔子常なき人を、なけれども有とし。虛けれども盈りとすとのたまへり。是等の類なるべし。

贔負といふ言葉はいふまじきといふ說

贔負といふ事は假にも云まじき事なり。理非を正さば理のある所なり。何ぞ是を贔負といはん。今勢ひにつく人、手を入れ足をいれ、誰人のひいき、誰人の引懸にあづかると、嗚呼がましく時めき悅ぶは何の心ぞや。あさましき事どもなり。芝居の役者野郞などのいはんには相應の言なるべし。

物の命をたつもまた助るの理ありといふ論

物を殺すはよきことにあらずといへども、一我意に殺生せずと心得たらんも惡かるべし。なるほどその道を修する出家道人は、蚤虱ごときものもみだりに殺さざる事は、其律あればなり。豆をうへ粟を蒔んに、その蓬莠をかりすて、その上にもあしき苗をばとり捨生育るにぞ登るものなり。今日政事などに預るべき人は、其利害の大小を考ふべし。江海の鱗を漁り、山林の羽毛をとるも、これに命をつなぐものなり。就中野猪の稼をそこない、熊狼の人をくらひ、小にしては雉兎鼠等の災をなす。ころさざればその費あげて數ふべからず。盜人の國中を橫行し、或は恣にして上の法度を背き、或は人を殺害するごとき、皆その尤きものなり。是いはゆる蓬をとり莠をさるのたぐひなり。瘭疽といへる腫物の甚しきを、指を切りて療治する事あり。齒などのゆるぎいたむに、此齒をぬきて去る事あり。此指此齒をしきに違はなけれども、總身の苦痛にはかへがたし。此者どもも可愛がらぬにあらねども、多くの人の歎にはかへがたし。然れどもかねて國人に仁義の道をおしへず、飢寒に及ぶ樣になして、其民罪をおかし盜をせんは、敎と政のいたらざる故なり。おしへずしてひとのよからん事を願ふは、手習させずして物を書んことを求るが如し。民を貧しからしめて盜人を禁ずる

は、田をほして稻のあしきをにくむが如し。國に罪人多きは執政の愧なり。一縣一邑を主どる身も此心得大切なるべし。むかし秦穆公秘藏の馬を亡れけり。時に岐下といふ處の民三百餘人是をころして食ひけり。官人ども是を見付て、法度に行んと云けるを、畜生の故に人を殺すべからず、馬の肉を食ひて酒を飲ざれば人にあたるものなりとて、酒などたびて赦されけり。其後隣國と戰おこり、穆公すでに危ふかりし時、かの三百人のものども命をすてゝ拒ぎ戰ひ、終にかち軍となりけり。されば天地の間春夏は物を生じ長じ、秋冬は物をからす、そのからすといふものも、草木五穀みなみのりて來年生ずべきものゝ基をなせば、からす內に生ずるの理あり。今物をころし人を殺さんも、助るが爲にしてころさばさもありなん。此理をしらずしてみだりに物の命をたゝば、大惡無道の人なるべし。

學に志し藝に志す者の訓

今の人、或は學に志し、あるひは藝にこゝろざすもの、一旦憤を起し、晝夜をわかたずつとめはげむといへども、已に一月を經半月をすぎ、怠る心はやく生じ、吾つとめの至らざるとはいはで、生質の過に誘す。馬ははやしとて朝暫はしりてやまんに、いかでか牛の終日ありかんに及べき。谷間の石の磨け、井幹のまるくなるも、豈一朝一夕の力ならんや。今日やまず、明日やまず、今年止ず、明年やまず、然して後そのしるしあり。人一生の力をその道に用るさへ、尙その奧儀にいたるはやすからず、況我一月半月、乃至一年半年のつとめを以て、他人一生の功に比せんとす。思はざるの甚しきなり。むかし李白書を匡山によむ。漸倦て他行せし時、道にして老人の石にあてゝ斧をするにあふ。是をとへば針となすべきとてすりしと云けるに感じて、勤めて書をよみ、終にその名をな

せり。小野道風は、本朝名譽の能書なり。わかゝりしとき手をまなべども、進ざることをいとひ、後園に躊躇けるに、墓の泉水のほとりの枝垂たる柳にとびあがらんとしけれどもとゞかざりけるが、次第〳〵に高く飛で、後には終に柳の枝にうつりけり。道風是より藝のつとむるにある事をしり、學でやまず。其名今に高くなりぬ。

知ることは易く行ふことは難しといふ說

知る事はやすく、おこなふことはかたし。然れども委しくしらざれば行ふべからず。たとへば農業のごとき、時をたがへず蒔、草かり糞かへばよくみのるとは誰もしれど、唯その事をしりてせざれば益なし。又そのしるにも、時を考へ、培のかひやう、鋤やう、鍬のつかひやう、夫々に付てその子細ある事、つとめざれば知がたし。善をすればよく、惡をすればあしきとはしれたることながら、よきにも子細ある事なり。つとめてまなばざれば其理わかちがたし。今しるといふものは、多くはしらざるなり。西施の美きことは知ざるものなし。然れども西施のために心を傷しむる者はなし。東隣の娘そのかほよきこと西施に及ばざれども、心この爲にうごく。甘露は天下の至て甘きものなり。しかれども飲たきと思ふ慾なし。牀頭の醴は時として好むことあり。是しるにも厚薄のちがひあればなり。圍碁は小藝なり。然してその勝べき理をたづぬれば、たゞ先をするにあり。先をすればかつと云ことはしりやすき事なり。さりとて先はしにくきものなり。善事のよきはしりやすくして、善事をするはかたき事なり。

よしとほむるもあしと毀るも必察すべしといふ說

毀譽は人の大節なり。然といへども世擧りて

譽るもかならず察すべし。人こぞりて毀るも必さつすべし。況一人はほめ一人はそしるをや。たとへば訟事あらんに、兩方理なりと思へばこそ、互にいひつのりてやまざるものなり。是を奉行のさばかんに、兎角ひとりはかち一人はまくべし。かちたる人は奉行をほめ、負たる人はそしることとなり。又あしき人なりとも、それにともなふ人は、是をよしと思へばこそ交るなれ。我よしと思ふをばほめ、我あしゝと思ふをばそしる習ひなれば、その毀譽によりてその人の善惡も分ちがたし。おなじ一盃の酒ながら、上戸は醉ひておもしろきものなりといひ、下戸はゑひて苦しきものなりといふ。まして人傳などにきかんことは覺束なきことなり。昔人ありて、其子をある寺へつかはし置けるに、暫ありてにげかへり、住持のことを誹りけるは、我に月代それといひければ、例の如く剃けるを、そりやうのわきてあしきとさんざ〳〵にしかられ、あるとき我厠にゆきけるを見て、何とて厠へは行し不屆なり、向後厠へゆくべからずといひ、其後朝飯たくとて味噌をすりけるに、これも味噌をするがきこえぬとて、理不盡の次第殆困窮におよぶとてかたりけるを、親きゝて、さりとて、出家にも似合ざる事なりとて、いそぎ山へ登り右の事ども語りけるに、住持きゝていや〳〵さやうのことにてはなし、常々髮よくそる故、このごろそらせけるにいたく眠りて、これ見たまへこのごとく切こみ候とて是をみせ、そのうへ厠も常の厠へはゆかで、奥なる隱所へ行をとがめ、味噌も常のみそをさしおき、客へ遣ふべきをつかふ、是等の指南をこそかへす〴〵もいたしつれと申けるにぞ、親もことはりに伏しける。

信濃の國その原といへる所に木あり。遠くより見れば帚のかたちの如し。よつて是を帚木といふ。されど近づきてみれば帚に似たる所

もなく打繁れりとかや。誠に遠より見聞くと、親しくみきくは、多く此帚木の類なるべし。凡人の物を批判するも、吾このむ所をこそほむるものなれ。俠士に歌よむ人の評判させ、日蓮宗に眞宗の評判させんに、いかでか公[illegible]あるべき。同じ道を二人して行むに、一人は健かにしてこの道ちかしといひ、一人はつかれて遠しといはん。是みちに違ひあるにあらず。心にちがひあればなり。たとへば義經のことを論じて、義經をよしと思ふ人のいはんには、此人誠に幼より常人にてはおはしまさざりけり、共に天を戴かざる讎を報せんと、夜夜院を出て劔をうち、遙に秀衡が人となりをみたて、是より飛鳥も落るばかりの勢の平家を二三年のうちにせめほろぼし、亡父の恥辱をすゝぎ、法皇の宸襟をやすめ奉り、再たびたえたる源氏をおこし、兄頼朝を天下の武將と仰しめたりと云。又義經に不滿人は、なるほど此人戰爭一通りは自由を得たる人ながら、平氏を亡し恣に忠盛の女をいれ、梶原景時と詮なき口論、大將たらん人のしわざに似ず、腰越より追かへされしも、いはれなきにあらず。然るを都に逃のぼり、頼朝追討の院宣を申うけ、芳野山にてはひとりの靜にわかれかね、兒女子の涙をしぼられしなど、一人の義經、よしと思ふ人の論と、あしゝとおもふ人の論は、まことに雪と墨なるべし。其あしき所をすて、よき所をとる、是人を用ゆるの道なり。その惡きをばあしゝとし、よきをばよきとする。是公の論なり。また其分分の相應について云ことあり。鼠を甚大なりといふとも牛の小きには及ばじ。蛇を甚短しといふとも、蚯蚓よりは長かるべし。今日人をよしといひて譽るも、惡しと云て毀るもその場〱を考ふべし。

梅園叢書卷之上終

梅園叢書卷之中

目錄

梅園叢書卷之中

豐後　三浦晉　安貞　著

早分別に後悔多しといふ說

かりそめにおもふと、とくと考へはかると相違あるべし。むかしある君樓をかまへ、是に登りて詠られしに、遠近の風景限なくおもしろかりけり。只一方にその臣何某が家の森ふかくしげりて、眼をさへぎりけり。よつてかの臣をめして、かれはかねてさときものなれば推量すべしとて、此樓より四方の風景を望べしとなり、かの臣心づき、家にかへり、我あたりの樹の目の障ればこそ、かくはまねき玉ひつらめとて、已にきらんとせしが、いや／＼君の心をよく察するものとおもはれては、行末むづかしとて、しらぬふりして打捨おきけり。其後君何やらん計の有しとき、心さとき臣等疑をうけゝるが、此臣ばかり右の事思ひ出給ひ、何

のうたがひもなかりしとかや。善となく悪となく、一旦の早分別に後悔する事多きものなり。あるひは友達の中よく交りて義の兄弟と云しも、一朝の怒に敵のおもひもなすものなり。古語に逢人只說三分話未可全抛一片心と。多くは左様御尤の世の中なれば、始の程はしたしきものなり。その時心の奥底もなく云つくして後日に悔む事あるものなり。さりながら是は一通の論にして、唯世のありさまをとくものなり。もし義にあつく信を守る人あつて、おなじく心をあはせんは、其上の事やはあるべき。又幼約束とて、まだ幼後紐子供などを、時の中よきにまかせ、言名付して悦ぶことあり。此事誠に變なくんばよかるべし。されど人間十年憂も悦も打かはるならひなれば、あるは富むが貧しくなり、あるは身上の難にあひ、あるは病あるは不和、終に人のわらひとなるもまゝある事なり。又はかりそめに通ひなれて、曉の鳥をうらみ、來ぬ夜の鐘に待わびなどして、偕老同穴と誓けるが、一入染の薄紅葉、いつしかに心うつろひて、夜かれの床をうらみかこつ心のやるかたなく、日香嫉妬の端となり、恩愛忽引かへて、神にのろひ佛にいのり、或は理不盡の心中、或はひとり縊れ、一門親族の面をけがす。是等はもとすでに正しからざればいたむにたらず。或は若き女などの新に夫におくれ、生て世にあるべくも覺ぼへず、いづくの淵瀬にも身を投んなどおもへども、さすがに死にもやらで髮などきりたるが、月日の立にしたがひて、いつとなく心もかはり髮のばすもあり。嬉しさのあまり憤の餘におもひたることは後には違ふものなり。賴朝石橋山の合戰にうちまけ給ひけるに、佐々木が粉骨をつくしけるを感じ、吾天下を得ば、日本半國を以て賞すべしと有しかども、後には此沙汰なかりけり。

理窟と道理との辨

理窟と道理とへだてあり。理窟はよきものにあらず。たとへば親羊をぬすみたるはおやの悪なり。親にてもあれ悪は悪なれば直に訴ふべしといへるは理窟なり。親羊を盗しは悪ながら、親悪事あれば迪子是をいふべき様なしとてかくしたるは道理なり。人死してはふたゝびかへらず、歸るべきみちあらば、なげきても歎くべし。かへらぬみちなれば歎きて益なしといへるは理窟なり。人死して再かへらず、歸るべき道あらば歎ずともあるべけれど、かへらぬ路こそ悲しきなど歎くは道理也。

分限相應こそ長久の術といふ説

老子曰美好不祥之器と。是によつて思ふに、我家衣服道具にいたるまで、我分限相應ならんこそ長久の術なるべけれ。詮ずる所、大厦千間夜臥八尺、良田萬頃日食二升とて、たとひ大なる家に金銀をちりばめたらんも、坐する時は膝をいれ、臥時は足をのばすばかりにすぎず。たとひ萬町の田あり、膳に山海の珍味をつくすとも、腹をふくらかすまでの事なり。きものは寒をふせぎ、道具は用に適ばたりぬべし。刀はよくきれ、印籠は藥をだによくもたば、切羽(せつぱ)鎺(はゞき)は銅にて、根付は小き瓢箪なりとも事たりぬべし。夫よき物を貯れば、我は人にほこるの氣あり。人はうらやみ愧るの心あり。刀をよく飾りてさしける男、ある人の刀のあしかりけるを笑ひけるに、拵のあしければとてきれぬ物かとて打果しける事ありし由、間際筆記などにもみえたり。鹽冶判官は妻の美に身を失はれ、伊豆守仲綱は馬の良に命をおとせり。宋の孫甫といふ人にある人硯をあたへけり。その直三十千となり。孫甫この硯何故にかくは價の高きぞとゝへば、此硯常に濕あり、墨をすらんとする時息を以て呵すれば水流るとぞこたへけり。孫甫是を聞、硯たとひ一日に一擔

の水をつくすとも、纔にあたひ三錢にすぎず。此物何にかせんとて、終にうけざりしとなり。又宋の呂蒙正に鏡を獻ずるものあり。曰、此鏡よく二百里を照すと。蒙正わらつて、我面小し、何ぞ二百里を照すの鏡をもちいんとて、二度その鏡の事をいはずとなん。古賢奇物を尊ざることかくの如し。人の姿は天に得るものながら、今男女美質あるものはいどむもの多し。挑者多ければ節を失ふ事多し。質醜ものはいどむもの少し。挑者すくなければ節を失ふ事すくなし。老子の詞、果して吾をあざむかず。

物に譬へて子たる者の敎を說

庭に栽る草木も伸たるを抑へ、倒たるをたすけ、繁れるを洗し、長きをたちてこそ自然とおもしろき姿も出來るものなれ。又直にのばさんとなれば、小枝をかきゆがめるを揉などすれば、直にのぶものなり。うちすてゝ閣たらんには、さのみおもふほどにはなり難かるべし。

人の子を生育んも、有のまゝにして敎なからんはおしき事なり。五穀も生たるまゝにてくさぎる事もなく、培ふ事もなくばかならずよくはみのるべからず。兎角手を入てだによく登る事は稀なるもの也。生付よしとておしへざるはよき刀とてねたばつかぬが如し。よき刀のうへにねたば付たらんには、なを〳〵よくきれぬべし。生質うつくしからんも、裸になして出したらんには文なくぞあるべき。うつくしき人にうつくしく衣紋引つくろひたらんこそ、本意なるべけれ。よきといふにかぎりなく、理に窮なければなり。聖人の智も學事をすてず、ましてや其以下の人をや。犬は無智のものながら、よく敎たるはさとく、おしへざるは用に立ず。又は愛に溺れて、わきの人の指南さへ親の心に僻事とおぼへ唯さむからんひもじからんとのみいひ思ひ、その我儘氣隨もやがて直らん。長ならば家業にもとづくべ

しとおもふ內、月日人をまたねば、早指南の頃もすぎぬ。心ありてよき事いふをば、渠をにくむと心得、白地にそしりにくむ。是劔のうへに蜜をぬりて小兒にあたふるが如し。一旦あまく快よしといふとも、遂には舌をやぶるべし。

世の中の、痲は跡なく、成にけり、
心のまゝの、よもぎのみして、

といふ如く、痲なくしては、よもぎもおもふまゝにゆがみねぢれて蔓るべし。おやたらん人の分には、それ〴〵の師をもとめ、よく〳〵おしゆべし。其上にあしからんこそ子の罪なるべけれ。いとおしき子を杖におしへよとは、道にかなひたる諺なり。しかればとて子の心に、吾は親の教ざればとて親の過の如くに心得んは子の道にあらず。雖父不父子不可不以子といふ事あり。親たとへ教ずとも、子たらんものつとめてその道其藝をしるべし。吾もとめば得ずといふ事はなかるべし。或は博奕に耽り、又色をこのむが如き、親のおしへなしといへども至らざる所なし。この心を移して道をもとめば、何事か求がたからん。

上たる者は下の邪正をよく察せよといふ說

大小のわかちはあれども、人の上に立ん人は其心得有べき事なり。兎角人の上たらん人には、其下に立ものはいかにもして其人の氣に入らんとのみ思ふものなり。故に顺を動せば左にわしり、眸を動せば右にはしり、勝負をあらそへば得をさせ、理窟をいへば道理を附、其者の心にも僻事とおもひても、十に九ツはいはざるものなり。色を好めば色を勸め、味を好ば味をすゝめ、故なき是式の進物に酒肉は更なり、幣帛財寶唯その人の氣色のよからん事を希ふ。肩をそびやしてへつらひわらひ、御髭の塵を拂ふ。是等はよく〳〵心に明なる所なければ賣僧衒（てれん）の堺分難くして、正直律義の人

と見なすものなり。得るに臨んで義を思ふとて我ために宜しき事あらん時は、是義は不義かと其わかちを考べし。强金銀ていの事のみには非ず、義に當ては舜、堯の天下をうくれども、へつらへりといふべからず。義にあらずんば一錢の錢半片の紙なりともいかでか心に快らん。むかし宋の子罕（襄十七年）と云し人に、玉を獻ずるもの有けり。子罕うけずして、我は貪ざるを以て寶とす、汝は玉を以て寶とす、爾が寶をうけんとすれば、吾寶を失ふなりとて、終に還しけるとなり。左こそならめ、音物のなきにより心につるぎをとぎ、或は正しく諫言にても云人をば、此節かれより辱をうけたりとて、其ひまを伺ひ取ておとす。誠に慾なきより淸きはなく、慾あるより汚しきはなし。又正しき人は人わらへども、然とおもはざれば、容悅をとつて笑はせず。與れども義をはかりて漫にとらず。事の沙汰につきても、非をまげて

是とせず。人の氣色のあしければとて、その爲に身を屈せず。或は時として異見を云事情に親切なる事のみいふゆへに是らは結局無禮者、苦者、或は佞者などゝ怪めらるゝもの也。勿論一流、人の心に障る事のみいひて、手柄の樣に心得たるもの有といへども、是は道理にたゝぬ事をいふものにて、正しき人とは其わかち分明なり。人にいさめ正さるれば、かれがやうにいへども、渠もこの過ありとて、還てさきの人の惡を搜しもとめて、露改ることをしらざるもの也。とて我心に僻なる事を多くいふ人はよき人と心得、うまき事のみいはん人はよく／＼察すべし。此事貴賤によらずと雖、尤人の上たらん人のおもふべきことなり。左程に心得ても人の氣に入ざる事はいはぬものなり。又その異見を聞て、夫通例の事、その方差圖に預るべきかなど、橫ざまの利口に正しき人は口を噤み、痒き所を搔やうなる人の

み集り、我身の過はいふ人なければ、しることとなくなりゆくものなり。左いふ人定て親切ならんかとおもふに、一旦勢ある時に手をつき、足をかゝへしには似ぬものなり。是を炎涼の世態とて、火あり煖なる中こそ、打會て手を炙るものなれ、炎つき火きえては、そのほとりをみやる人もなきものなり。又勢ある時より、左のみ媚諂もせざりし人は、零落たりとて、むかしにかはる心はなし、君子之交淡如水小人之交甘如醴といへり。一旦膝を交へ、手を携へ、兄弟の如くいひ睦しも、恨纖芥の間におこり、腕を握り齒を切る事あり。醴は甚あましといへども、久しては香うつり味變ず。水は始より味もなく香もなしといへども、幾年をかさねてもかはる事なし。故に君子の親み交るを和といふ。小人の親み交るを同といふ。和とは鹽梅の如し。たとへば一杯の羹といへども、あるひは鹽をさし、或は水をいれ、いろ〳〵とそのよき樣に正して作ざるゆへに、きはめて旨き味となる。同とはその心の合たるにまかせ、善惡の差別もなく、成程尤と同ずる計にて正す事なければ、水に水をいるゝが如し。幾久しくかゝりてもよき味にはなるべからず。是同也。

堂塔建立の説

宇治殿平等院を建立し、阿彌陀堂供養有けるに、山僧何がしの阿闍梨を社導師に請じ給へるに、施主分に、此御堂造立の故に、地獄に落させ給んこそ淺猿く侍れとかかれければ、聽聞の人人興をさましける。供養過て、いかゞして此罪懺悔し侍らんと有ければ、この御堂造立の間、非分に人を惱し給へる分を、御得分の物にて償返し給はば目出度侍りなんと申されければ、そのゝち悉く尋きゝ、人夫迄もいとまの分をぞ給ひける。今日堂塔供養裝嚴とて、徐義なく人をすゝめ、あるひは金銀の利足に人を潰し、夫役にくるしめ、玉をまき、金をちりば

め、我はがほなるはかの阿闍梨のいひし地獄にこそ落べけれ。心だにその道に適なば、堂塔の奇麗にはよらざるべし。近ごろ

縦横の、五尺にたらぬ、草の庵、

結もつらし、雨なかりせば

と讀し人もあり、瞿曇の敎はいざしらざる事ながら、人情をもつてはかるに、恐くはその道とする所、大厦廣門の謂にはあらじ。堂塔寺院輿馬僕從、衣服家具は、たとへば匣の如し。我道とするものは、たとへば玉のごとし。匣いかばかりいみじくよそほひたりとも、玉なくば何にかせん。匣そこ〳〵にしつらひたりとも、玉だにあらば人誰か是をいとひすつべき。

おとし物したる主と拾たる者と曲直裁判の話

宋朝夫婦餅をうりて生業とする者、あるとき道の傍に銀の軟挺六囊に入ておとしけるを見付けるに、もとより正直なるものどもにて、何とぞ返さばやと普く觸けるに、その主といふ者來りければ、是をわたしけるに、三をば御邊に奉らんと云けるが、おしくや成けん此銀七ありしに、六あるこそ不審に候へと怪ける を、ひとつとり候心に候へば、何しにかくは返し申べきといへども、兎角して論果ず所の太守へ訴へける。太守見付たる者をば正直とみながら、別の處に妻をめし、事の子細を問るゝに、夫の詞に違ず。よつて奉行、見付たるもの夫を引籠らずして、元の主に返さんとするは正直なり、今主といふもの七あるを落したるなれば、この軟挺にはあらざりけり、是をば夫婦の者にたぶべし、彼ぬしは七あらんを求て取べしとぞ判れける。

物の性の辨

靈驗は、我信の有所にあり、强何の神何の佛とさすべきにもあらず。鰯の頭も信向せん人は、その驗を得べし。佛舍利なりとも信ぜざらん

人にはしるし有べからず。もの我心より靈なるはなし。心のむかふ處自その信あり。鳴物もたゝくときにはなり、たゝかざればならず。我一生餘念なく信向せんに、などかその感應なからん。磁石の鐵をすふも、磁石鐵をすふの誠あるゆへに、鐵感ずる事ありてよる。唯の石を以てすはせんとせば、いかでその驗有べき。幻術者の幻をなすも、平日の力すべて爰にあれば、人の目を奪ふ樣の事もあるものなり。一向そのしるしなしといはんも偏なり。むかし唐汝南鯛陽といふ所に、田にしてひとつの麞を得たり。主いまだ取ざる內、商人ども車に物をつみて通りけるが、是をみてとり、車にのせ去けり。不意の物なればとて、鮑魚一喉をその處に殘し置けり。頃有て、その主往てみるに、最前の麞はなくして、鮑魚のみ有けり。因て大に怪しみをなし、偏くかたりつたへけるに、次第に發向して病をいのり、福をもとむるもの引もきらず。終に宮をたて、鮑君神とあがめ、巫など數十人集り、もてはやしける程に、數百里きゝつたへ〳〵、その事大かたならず。其後程へてかの商人來り此由をきゝ、是は我おきし魚なりとて、堂に上り取てすてけるが、そのゝち何のしるしもなく成行けり。物之所聚斯有神、人共奬成之耳、といへり。一喉の鮑魚、さまで禍福をいかでかなし得ん。されども人の信仰するに至ては、この心迷ふがゆへに、病ましぬれば運盡たりと思ひ、或は神のうけなきと明らめ、驗あれば神の德とおもふ。物每我心にかく有んとおもへば左ある樣に覺ものなり。鷄はいつもその鳴聲にかわりはなけれどもコツケコウロとなくかと思へば、コツケコウロといふが如し。東天光と啼かとおもへば、東天光といふが如し。取てかへろときけば、とつてかへろと云が如し。和州菩提山の忠寛正信房といひしは、よく眠る人にて、人眠の正信と云ける

がある夜鷄のなきけるを、寐耳に、御所より忠寛とめすとき丶なして、あはただしく御前へ參りけり。是は何事ぞと有ければ、召れ候つると申ける。さる事なしと仰ければ、猶鷄の聲する方をさして、あれ、忠寛と御召の候つるぞと申ける。燈はひとつ光りながら、目を病人のみるには、五色の輪相かさなり、虹の如く煙の如し。一物もなき大虛も、花ちり蟲の翔るが如し。何の音なき所にても、耳をやむ人の爲には、嵐のはげしく吹しきり、蟬のかまびしく鳴が如し。實に此事あるにあらざるも、一心顚倒すれば、種種無量の變怪、眼に遮り耳にそふ。我かつて史をよみし時、秦の二世皇帝、關羽、張飛など夢み、詩集をけみせし時、孫光憲などゝ詩などつくりし夢を見けり。是によつて思へば、僧徒の或は極樂にゆき、閻羅王にあひ、地獄の有さまなど夢に感ずる事さも有べし。夢はもと心の影像にしてあやしむにたらず。ある人

のかたりし、おもひもよらぬ事を夢にもみるなれど、傘さして鼠の穴にはいる夢はみずといひしを、かたへの人の、此話きゝたらん人はみる事有べしといひしは、尤におぼへ侍る夢は心の靈より發すれば、偶さきの事にあふ夢も有べけれど、夢ごとに左あるものにもあらず。或は五臟の病により、あやしき夢もあるものなり。ある人のいひし、或はよき夢みたりとて嬉しともおもはず、あしき夢みたり迚あしくも思ず、あしき夢をばよき夢のさしつぎとなし、よき夢をばあしき夢のさしつぎとなすと云し。一時の戲言ながら、おもしろく聞へ侍る。右云ごとく、神に祈り佛にちかふも、我靈所自然に感ずる事あり。又病いゑなんとし、或は災已にさらんとする時にあたりて、その驗の如く思るゝ事あり。又狐狸の業として、色々のあやしき事などしいだして世にはやる事あり。一旦その言しるしある事もあれども、

久しくはその驗なきものなり。又機をまふけ或は幣を動し、あるひは佛に光明さゝせするごとき事をこしらへ、人をたぶらかすものあり。是も大勢ゆく中には、病なほるもあり。死病にあらざればのちはよきものなり。是等のものいかでか人の禍福をなす事あらん。中にもわけてかなしきは、病難災苦にあひ、物の辨もしらぬ神子山伏やうの者ども、こと〳〵しく鬮などとりて、其神の祟、其佛の祟と驚せば、大に恐れわなゝぎ、家財重寶もおしまず取出し賴むにぞ、過分の得して、驗なければ主人の信心なきを云、供物のたらぬなどのゝしる。やゝこゝろよき時は、大にほこりおごりこそやすからね。もし吾行ひ理にもとるに於ては、その神其佛と限るにもあらず。天神地祇或は人誰か是をいからざらん。神や佛のしわざにもあらざるを、神佛に僻事いひかけてん、佛神照覽あらば、いかでか是をにくまざらん。神は

人を護り、佛は世をすくふとこそきき待れ。木一本きり候花一枝をり候、あるひは參り年のあしかりけりなどとて、無下なる目に人をあわせんは、人だに長しき人はかゝる偏執はなき事ぞかし。是等も皆病苦災難は時としておるものといふ事をしらぬゆへなり。もし又かゝる非分の祟をなす佛神あらば、その祠ともいへ堂ともいへ毀ちすつべし。其權なからん人は左樣の所にゆかざるべし。唐の狄仁傑といひし人は、淫祠千七百處を毀ちけるとかや。豐前小倉の城内に一の小き祠有けり。何の神といふ事をしらず。城主此地穢多し、城外清淨なる地を撰みうつすべしと有けるに、俄に眼痛出し甚しかりけり。人人是は神の祟なるべし、祠を移す事しかるべからずと云ければ、城主いかつて穢しき地を清淨の所に移さんと云に、吾なんの過かある、夫に祟をなす神ならば、邪神なり、恐るゝにたらずとて、急ぎ其祠

をこぼち、城外に持出し焚拂けるに、眼もおひ〱にいえけるとなん。又一種妖怪あり。ひとり狐狸のわざのみならず、犬猫蜼猿やうのもの、木石深山大川、いろ〱の精怪あるものなり。されど正しき人をば犯し得ざるものなり。むかし魏元忠公、未家にゐられし時、ひとりの婢ありけるが、庭にひとつの猿來りて火を焚けるをみて、大に驚、かくと申ければ、我僕なきをしりて、手傳するに社と云て見やらず。又公家來のものを呼けるに、犬人の聲して答へけるを、孝順なる狗とてほめられけり。又獨坐して居られしに、鼠など大分集り前に手を拱して居たりけるを、汝が輩食にうへたりやとて食をあたへけり。又ある夜鵂鶹の家の軒に來りてなきけるを、家のものどもうたんとてひしめきけるを、かれは晝目のみえぬゆへに夜飛ものなり、南のかた越にゆくとも、北のかた胡に行とも、彼が心にまかすべしとて、打捨おかれけり。又ある夜女ども多く集り、公のまへに立けり。公是をみて、我床を堂の下におかんやといひければ、あつまり昇きおろしけり。又もとの所にやりてんやと云ければ、もとの處にもち行けり。しからば持て市にゆきてんやと云ければ、女ども再して、是寛厚の長者なり、犯すべからずとて皆逃ちりけるが、そのゝちは何事もなかりしとなり。又漢の張遼といふもの田を買けるに、田の中に大なる木あり。耕作の邪魔となりければ、人をきりに遣しけるに、切口より血出けり。人人驚き返てかくと申ければ、老たる樹は汁出るものなりとて、自下知してきらせけるに、中に大なる穴ありて、長四五尺ばかりなる白髮打垂たる人の如き物出て、張遼が方に歩よる。張遼むかへて打ころしければ、つゞひて箇様成物四迄いでけるを、盡打ころしてける。よの者は怖て地にふして居たり。子細に是を見るに、人に非獸にあら

ず、怪しげなるものなり。遂に其木をば切取けり。その年天子より司空に辟れ、待御史袁州刺史となりけり。天地のかぎりなき、其變怪も又かぎりなしといへども、是正人君子をおかすにたらず。變怪にあらざれども、變怪とみれば自變怪なり。化物にあひたりといふ、多くは夜なり。勿論かゝるものは陰物にて、夜氣に乘じて出といへども、夜は朧にして物の文目もわかたぬものなれば、松の木の繁れる、石の立たる、尾花の戰まで、あやしくみゆるものなり。これをうろたへものゝ、見誤りて唱たるが多し。かゝる事をかたるものは、必慥に見たるごとくかたるものなり。又平生虚をいひなれたるものは、跡かたもなき事をも理窟よく拵てかたるものなり。成程世上にかゝるものなしといふにもあらねど、さまで澤山なる事にもあらず。こはおそろしと思ふ時は、其虚に乘じていろ〳〵のもの變怪をなすことあり。むかし

あるもの妻の死しける。出やせまじとおもひ居けるが、むかしの有さまの如くよる〳〵來りける男大に難義して、祈禱手をつくしけれどもしるしなく、ある道人にゆきて問けるに、道人碁をうち居けるが、碁子を一握かれが手に入れ、かの幽靈にむかひ是何ぞと問べし。これをしらずば必きたるまじ。若しらば黑か白かをとへと云ければ、いそぎかへり是は何ぞと問ければ碁子といふ。黑か白かと問ければ、その色をこたへけり、男おそれて又道人にかくと告ければ、さぞあらん、直にその碁子を持行、數はいくつと問べし、幽靈けつして數をしらじ、その時此碁子を投付なば、幽靈全く來るまじといひけり。男又立かへり數はいくつと問ければ、答ず。ときに碁子を取て投付けるに、搔けすやうにうせけるが、再來らずとなり。吾心の妄想より起るものなれば、我しる事をばかれもしる。碁子の數は我知らざる故彼しら

ず。彼しらざる時にはけつして出ず。吾こゝろ決定する故、目明にして眼花なく、耳さわやかにして蟬も嵐もなきが如し。故に眞言陀羅尼、是によつて魔魅決して近づかじと決定する故、是をおかすものなし。漢のとき、汲の令應彬といふ者、主簿杜宣と云人に見けるに、ともに酒を酌けるが、高き處に弩をかけ置けるが、杜宣が盃に映ひ、宛然蛇のごとくみへける。快ずは思ひけれども、しゐて是をのみけるに、其日より胸腹裂が如く、療養手をつくせどもしるしなし。其後應彬行て事の子細をきゝ、きつとかの弩をみつけて、强て杜宣をおこし、もとの所におき酒を酌せけるに、かの弩の影うつりて蛇の如し。よつて是は弩の影なりとさとしければ、杜宣大に悦び、是より疑とけ病いゑけり。是は此あたりの事なりし。ある禰宜、小村祭の返りに夕立にあひ、大鼓もちながらぬれぬれて過けるを、是をばしらで又壹人同じく、雷の鳴がおそろしさに耳など押へて走りけるが、俄に雷ものして霹靂しければ、あわや我かしらのうへに落かゝりけるかと覺えて、かたへの溝へ落込けるに、禰宜も同じく上に落かさなりて、互に肝を潰し只一息に迯けるが、其後我こそ正しく鳴神といふ物みたりといふに、いか成物ぞととへば、隣の村の禰宜何がしに少もかわらずと云ければ、人人噴出しけるに、左なの給ひそ、慥に大鼓までもちて居られたりと云けるとぞ。世上の妖怪おもふに此類多かるべし。夫一生の間を觀ずれば、慶あり、哀あり。貴しては公侯となり、零落しては非人乞食ともなり、生るゝ事あり、死する事あり。此世の中の姿なり。花ちれば子を結び、葉落れば芽を生ずるが如し、この所をよくしりて、非分のもとめをやめ、君臣父子夫婦兄弟の道をつくして、生死貧富は命に委すべし。左いへばとて、我生業をもすてよといふにはあらず。すこし

も非分のもとめをせず。生業をいとなみ、此上を命にまかすべし。まへにいふごとく、父母兄長の災をいたみ、天に祈るがごとき尤なり。人はもとより天地の間に妊れ、天はちゝ地ははゝなれば、或は年の旱にあひ不熟にあはんには、雨をいのり、年をいのる、すべて吾實にあり。或は大赦を行、窮民をすくひ、奢を省き、人の心大に悦び和する樣にして、年をいのり雨をいのらんに、などか感應なからん。人の心和なれば、天地も感應するものなり。香花をそなへ僧巫に祈らしめんは、抑末なるべし。今の人神に諂佛にまふで、何事をつぶやくとおもへば、或曰家運長久、或曰子孫繁昌、或曰二世安樂、又曰七難即滅、すべて我勝手によき事のみ取あつめて、神の正直、佛の寂滅なるものをばとり失ひ、災難にかゝれば、世の中には神も佛もなき事かと騒あへり。死生有命、富貴在天、といふ事をしらば、かゝる非分のもとめはあらじ。今日

のことにも、吾敬ふべき人には、衣服を改め物ごとに念を入、麁忽なる事もいはぬ樣につゝしむものなり。いかに神ものたまはぬとて、心やすくおもひ慢り、人にさへ云がたき事を、この者は我妬くおもひ候へばころしてたび候へ、此女にあわせてたび候へ、富貴になしてたび給へなど、是非分の望にあらずや。上に立ん人に、かれをばころしてたべ、是をば我に下しおかれよ、米下され、金下されと、理不盡の望せんに、誰か尤とおもふべき。たとひその事かなふとも、神のしるしにや、又もとより左あるべき筈にやありけん、しるべからず。一ツ二ツかゝる事有ても、すべて有べきとにもあらず。近世はやる富といふものゝ如し。千百人の内に仕合なるもの有て、一人金を取たるとて、吾もさこそと、生業も打すてかゝらんに、取事も有べし、大かたはとらぬものなり。中に小賢しきものはその得失を考へ、始よりかわぬほど

に、損もなく得もなし。ある人の曰、然ば神も佛も無用のもの。予が曰、左にあらず。天照太神は我國の太祖として、天皇孫長く此國を治め給ひ、御座北極の星とともに動かず。人は更なり、雲にかける鳥、水に潜む魚まで、その德澤を蒙ざる物あらんや。仰ても恐有、その有がたき所を渇仰すべし。尚その所々の德澤ある、神しかく愼守べし。我親方の如く心得たらんは、いかばかりか勿體なき事なるべし孔子曰、敬鬼神而遠之となり。遠ざくとは、なれあなどるべからずといふことなり。

佛舍利の辨

佛子の舍利ある事を稱揚して儒者にほこる、古來種種の辨あり。おもふに是は氣血のこれるもの、燒によつてなるもの也。儒者は火葬をいむ。その有無はしるべからず。このもの有とも何にかせん。

誠といふの說

一勺の水を海に入て、海の水增たりといはんは愚なり。まさずといふは妄なり。水をくわゆる所は我にして、增と增ざるとは我にあらざる物は、しゐて其辨をもとめずして可也。我に在處のまことをつくす、是君子の道なり。誠とは、うそをいはざる事とのみと心得たらんは愚なる事なり。ある人司馬溫公に誠にいる方を問ければ、妄語せざるより入とぞ。成程妄に語らず、うそをいはぬより、誠の道には入なれども、虛言をいはぬを誠とはいはぬ也。いつわりをいはぬに對する信は小し。僞なきに對する誠は大なり。罌粟の子煙草の實は至て小きものなり。地におとさば目にもかゝらぬ樣なれども、內に一ツの誠といふ物あつて、奪べからず。隱すべからず、昧すべからず、覆べからず。その時いたるに及んでは、芽を出し葉を生じ、花を開き實を結ぶ。その子を水に腐し、火にやきて芽を出さずといふは、その子の尤ならん

や。是によりて物の子を實といふは、實に則誠なり。一ッも誠ならざるもの有て、腐たるものは生ず。痛たるは苗痒く。人の誠も尙かくの如し。昔衞の靈公と云し君、夜夫人南子と共に坐し給ひけるに、遙に車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過て又鳴けり。靈公誰なるべきやと、南子にとひ給ひければ、是は蘧伯玉なるべし、禮に下公門式路馬、といふ事あり、忠臣と孝子とは不爲昭昭信節、不爲冥冥惰行、といへり、蘧伯玉は衞の賢人なり、夜なればとて禮を廢じと云ける。靈公人を使して見さしめけるに、果して伯玉にて有ける。人しるまじきとて欺くは妄也。四知といひて人しらずとおもひても、天しる地しる神しる吾しる、いかでかおゝひかくすべき。たとへば一升の米、日日に二三十粒をとらんとも、措ともしれざるべし。然ども久しくおく時はまし、とる時はへる、草木も朝みしいろも、暮にみし色も、きのふみしもけふみしも、さしてかはらぬ樣なれども、誠といふものすこしの間斷なき故に、いつ太るともなけれども次第にふとるものなり。人のみぬ間とて間斷あらば、草木もおもふまゝにはのびもせまじ。深き谷の蘭も、遙なる山の紅葉も、人なしとてもよく薫りうつくしく照ばこそ、人至りたるときも香きよく色麗しけれ。人の至を待て香をはなち色を出さんとせば、窘にあふ事あるべからず。常々心にかけて帚灑したらん座席と、俄に蜘の圍とり柱ふきたらんは、いかでか見まがふべき。人平生をたしなまずして、その期に臨み僞に文は、誠の俄掃除なるべし。如見其肺肝、とて、人欺くべからず。我心を欺なり。

僞も、人にいひては、やみなまし、
心のとはゞ、いかゞこたへん。

この歌のごとく、人をば欺くべけれども、心に心を顧て、いかに今の如く誠ならざる事をば

せしぞいひしぞ、人をば欺に、などて自の心を自は欺けると咎たらんには、自恥かしくなり、ひとり居ても額より汗出べし。畠山重忠、鎌倉殿の不審を蒙し時、僞なき旨を起請を以て申上べしと有ければ、我一生いつわりを云し事なし、いつわりなきと申上は、此事に限りて起請をばかくまじきとて、終に書ざりしこそ、勝れていみじくきこえ侍る。人は我意の有ものゆへに、一旦我いひ出せし詞は、たとひ悪しと案じ當りても是非に云募りて我を立る物なり。是腐たる實のごとし。實といふ物を探題うしなひたるなり。常式の者この意あれば、人に惜み疎せられ、人の主人となり、奉行頭人なんどこの意あれば、人をやぶり國をそこなふ。北條泰時政をしられける時、下總國のある地頭、領家の代官と相論あり。對決に及とき、領家尤なる道理申立けるとき、地頭手をはたとうち、泰時のかたにむかひ、あらまけやと云ければ、並居ける人々一同に笑ける。泰時うちきゝて、いみじくも負けるものかな、某代官として久しく成敗しつれども、かゝる事うけ給らず、あわれまけぬるときこゆる人も、適はぬ迄も陳ずる習ひ成に、前の一通さもときこゆる所、領家の御代官申さるゝ所肝心ときこゆるに付、何事なくまけ給へる事、返〳〵もいみじく聞へ侍り、正直の人にて御座けりとて、打泪ぐみ感じ申されければ、始わらひける人人はにがり切てぞみえける。是によつて訴論殊更の僻事もなかりけるにこそとて、まけ樣を感じ、六年の未進の物、三年迄ゆるしけり。たとひ訴論まけになり、いかなる事にあはんとも、いつわりはいふべからずと、わが心を欺かぬ誠ゆへ、人をもかくは感せしなり。

碁將碁に遊ぶ人の箴

碁象碁握槊その品はかはれども、人の心を奪ふ事は同じ。或は一二の遊侶を迎へ、或旅路の

憂をわすれ、鬱をはらき生を慰んにはよし。又何もつとむるいとなみもなく、手を拱き人ことなどいはんよりは、物ごと相忘れんはよかるべし。平生の勢力を是につくしてんは、その器小きに似たり。誠に局にのぞむときは、盛衰勝敗ありて、甚おもしろきもののゆへ、夜のあけ日のくるゝもしらざる物なり。よつて是を木野狐ともいへり。晉の陶侃といひし人枰を江にしずめしも、事に害ある事を察してなり。近頃黒田如水軒、石田三成と怨をむすばれしも、その事碁より起れり。畠山が讒にあひしも、平賀武藏守と、六郎重保と碁を爭ふよりおこれり。さいへばとて此事しらざれといふにもあらず。身謙り、人と爭ひいかるの心をやめて遊ばゞ、時として養生の道ともなるべし。

書をよむは身を脩るのためといふ說

書をよむにも、日用の事に交るにも、一ッ〳〵かへりみて我身のためにせば、あしき事は制となり、よき事は鑑となり、日日にその德すゝみて、時として書にはおこたるとも、學には益すゝむべし。學はまなぶと訓じて、鳥のとびならひ、猫の玉をとるも、みな夫〳〵の方をまなぶなり。人は人の道を學が學なり。四書六經も、人となるの道人を治るの道をこそとき給へれ。是によつておもへば、日日の事みな學なり。書をよむとも、身をかへりみ察する事なくんば、一向草紙淨瑠理本をよみて心を慰むべし。鏡をみるはかたちをつくるためなり。書をよむは身を修るためなり。笠置の解脫上人、如法の律儀興隆の志ふかく、六人器量有氣なるものを見たて、持齋律學せしが、その內一人のちには持齋もやぶれ、己が房に兒どもあまたおき愛しけるが、さを川といふ川にて魚をとらせ、自下知して弟子の僧に火をたかせけるに、鍋の湯あつくなるまゝ、魚跳出けるを、兒是をとり、手水桶の水にすゝぎ鍋に入けり、房主悅

び、よし〳〵よくしたり、兒どもは夫底におめぬがよしと謂ける。同宿の僧、是は犯戒にては何ぞとゝひければ、聲聞戒には波逸提、菩薩戒には波羅夷なりと答へけるしらずば無知ともいふべきを、愆に戒相明に說けることをかしけれ、されどもひとり此僧のみにあらず此轍をふまざる事はかたき事なり。書を讀ん人この僧のために笑るゝ事なるべし。或は過をかざり人にほこるの具と心得、手にもたらぬものなど取つめ、或は身の過など人の異見にあへばいろ〳〵勝手によき事とり集め辨にまかせて云まぐる、たとへば食は身を養ふべきものなるを饐して人をも食傷させ、吾も食傷したるが如し。

梅園叢書卷之中　終

梅園叢書卷之下

目錄

梅園叢書卷之下

豐後　三浦晉　安貞　著

五行家の說害多しといふ論

物として其弊あらざるはなけれども、陰陽家の說、尤人に害ある事多し。その事はもと陰陽五行を推して旺相死囚勞の理を出ずといへども、遂には枝により葉により、大に理に戻る事あり。四季に大將軍遊行の方ありて、春は東、夏は南、秋は西、冬は北を塞りとして、諸事動作にいむ。正月丑、二月辰、三月未、四月戌、五月子、六月卯、七月午、八月酉、九月亥、十月寅、十一月巳、十二月申の如き月塞とし、六十甲子、寅より午に至り金神遊行の方とし、日を以ていへば、子の日に子の方、丑の日に丑の方をいむ。又方に金神七殺の方あり。九坎、五貧、八貧、十死、歸亡、往亡、凶會、大禍、赤口、赤舌、狼藉、滅門、沒日、滅日、黑日などいひて、多く事を廢する事あり。成程一通俗にしたがひ、冠昏の如き大事には、吉日をゑらむもよかるべけれども、物ごとに忌嫌ふの心ふかく、時を失ふ事愚なるに似たり。諺にも陰陽師の門に蓬たへずとて、あまりつよく物をいめば、草とる日とてもなくなり侍る。よき日なりとて惡事をなしなばあしかるべし。惡日なりとも善事なしなばよかるべし。目のあたり試べき事には、天火地火の日なりとも、五穀を植て、よく培ひ耘りたらんには、よき日を擇て植、培ず耘らざるよりは遙によかるべし。もし又麥の春の霜にいたみ、稻の秋の風にあれんは、吉日にうゑたるも、惡日に植たるも、おなじく損るべし。もし又鴻水火難等に逢んには、吉日に建たる家も、惡日に建たる家も、おなじく波にゆられ、又一片の燼となるべし。武王以甲子興、紂以甲子亡といふ事あり。周の武王殷をせめ、甲子の日にあたりて殷紂王を亡し給へり。同甲子なれども、武王の爲には吉日にして、紂

王のためには惡日なり。湊にかゝる船の、東にゆくは西風を順風といひ、東風を惡風といふ。又西にゆく船の爲には、東風順にして、西風不便なり。もとより風に順逆はなく、吾ゆくに順逆あり。日に吉凶なし。我に吉凶あり。とかく惡き事をする日はすべて惡日なり。よき事をする日はすべて吉日なり。吉凶豈外にもとむべけんや。適日を擇ずして成就せざる事あれば、手をうつて日時をゑらまざる故なりといひおもふ。左あらば吉日選てんには、千が千成就すべきや。世の中の吉凶禍福は人間の常にして、たとへば糾る墨の如く、上になるもの下になり、下なるもの上になり、變化定なきものなり。たとへば一握の糠をとりて水にながさんに、先だちて流るゝあり、後れて流るゝ有。風にふかれて何かたともなく吹ゆくもあり。又先だちたるか石に礙られておくれ、後たるが先だつも有。おなじく掌に入、一同に掌をはなれても、そのゆく處各同じからず。又一本の木なりとも、一段は神を彫佛を造り、首をかたぶけ手を合て人に貴れ、一段は踏板足駄の類となりて人に踏れ、木屑は薪となりて灰汁桶の苦にあふ。おなじく生をうけながら、その用らるゝ處は天壤也。よつておもへば年月日時をくり合せ、易の六十四卦に配し、一代の吉凶をとくは覺束なき事なり。且甚しき害ともいふべきは、その生年によつて、女男をころす事有。男女をころす事有。弟に丑の年の者あれば嫡家に祟有など、口にいふのみならず、書に筆し人を誤る事勝て歎くべからず。諺に、盲千人、目明千人といへども、盲千人目明一人にも及がたければ、一人の手一河の流支がたく、人の心に城をなし郭をなし、その惑ときがたし。異朝にもかゝる事ありしにや。齊威王の少子に靖郭君田嬰と云し人の妾懷妊して、五月五日に子を生けり。その頃の諺に、五月五日に生たる子

は、男子なれば父を害し、女子なれば母を害と
いへり。是に因て田嬰快ずおもひ、努々是を生
育べからずといひけるを、其母かくして是を
養ひ田文と謂けり。長てその兄弟へ頼み、父田
嬰に逢けり。田嬰悦ず。その母に謂けるは、吾こ
の子を養ふ事なかれといひしに、何ゆへにか
くはこしらへけるぞと云ければ、田文畏て、何
故かくは五月の子を忌給ふやと問けるに、五
月の子者長與戸齊、將不利其父母と答ふ。田文
きゝて、人生れて命を天に受るか、又命を戸に
うくるか、もし命を戸に受るとならば、随分そ
の戸を高ふすべし、誰かその戸とひとしかる
べきと云ける。田嬰も理に屈し、その後は餘子
とおなじくつかへけるが、田嬰子供四十餘人
ありし中にも、此田文こそ孟嘗君とて、齊の國
も此人有しゆへに、隣國よりもおもくおもは
れける。今男をころす女、女をころす男などい
へるも、往往しるしをたてゝみるべし。盡く左

あるに非。又その外の年の人も、早く夫に後れ
妻に離るるもいくばくぞや。是はその人人の
幸不幸なり。全く年のしわざにあらず。明の太
祖、天下を得給ひてのち、朕と年月日時を同し
て生れたらんものは、いかゞ有べしと思召、あ
まねく尋給ひしに、一人をもとめ來れり。見た
る所やせつかれたる野夫なり。汝何を業とす
るぞと問給ひければ、蜜十三籠をやしなひて
世をわたる由こたへけるに、此もの何事をか
なすべきとて放しかへし給ひしとなり。或は
畜をもとめ木をきり、首途家移、方を立日時を
改め、禁忌甚多し。東家之西、西家之東とて、東の
かたの家の西は、西の家の東也。南におるとお
もふ人も、又その南におる人のためには北也。
屋敷は水難なかるべく、山潮など來ず、月日の
影正しくうくる所をよしとす。されどもある
じの心あしくば、家退轉の基なるべし。婦は婦
德正しく、從順至孝ならば、方あしくとも繁昌

すべし。鳥のなき、犬の咎、鼬梟やうの物のなき、菌の生、燈のきえるにも、忌嫌な僻のふかくてこゝろを惱すごとき、笑ふべし。孟嘗君がいへるごとく、吾命を天にうけなばさもあらん。もし命を鳥犬などにうくるとならば、彼等いかんぞ人に禍をなすべき。口あるものは鳴き、羽あるものはとぶ。人の物いひかたるが如し。禽獸はもとより天地の偏氣にして、無智のものなり。夫に萬物の靈として天地と並び立て、三才ともなるほどの人、かの無智の禽獸に教られなば、人はた禽獸の下に立べきか。たとへば數代相傳の君、譜代の家來につかへたるがごとし。皆理といふものをしらざるよりおこれり。いたむべし。

人の所長を擇ふべき事

間際筆記にのす。伴氏生質、寡欲也。尾山氏吝嗇なり。相交る事睦じ。ある人伴氏にとふて曰、其元と尾山氏このむ處同からず、然るに甚むつまじきは何ぞや。伴氏の曰、尾山は才藝我にまされり唯財に嗇し、このゆへに我この人と交る事十餘年に及べども、渠に我ためとして一錢を費さしめず、是を以て相善といへり。人誠に長き所あり、短きところ有。その長き所に交り、短きところに交らずば德を得る事多かるべし。むかし歐陽永叔、易の繫辭を以て孔子の書とせず。文中子とるべからずとす。韓魏公これと相したしかりしが、此事をしりて終に話こゝに及ざりしとかや。永叔もふかく韓魏公の德に服して、百歐陽修を累ぬとも何ぞあへて韓公を望まんといへり。朋友の道、義において忠に告正すべき事あり勢いふべからざる事あり。能々工夫あるべし。ひとり朋をとるのみならず、君の臣をつかふもしかなり。人の才同からず。國の政をしるべき才あり。敵をきり旗を奪ひ城をのり山を碎くの才あり。國の財を量り用をとゝのへるの才あり。他國へ使し君命

を辱ざる才ありよく君をいさめ人を規すの才あり。その品さま〴〵なり。たとひ是等の才ありても、その場〴〵に使ざれば、吾存分の働なりがたし。大工の木をつかふがごとし。いかによき材木を集めたりとも、梁となるべき木を柱とし、柱となすべき木を棟となさば用には立まじ。漢の高祖を名君といひしも能能その人人の能を見たて、張良を師とし、蕭何を相とし、韓信を將とせし故なり。もし韓信を師とし、張良を先鋒となし、蕭何を行人なんどなさんにはたとひかちをとるともその驗おそかるべし。近頃片桐石見守は茶人のきこえありけるが、烟草の火入唐金のわたり物にて、いかにもおもしろき器也、人みなよき香爐なりと云けれども、石州そのまゝにして閣れける。ある人その子細をとふ。石州の曰、是火入とすれば上品なり、香爐とすれば下品也となり。誠にこの心をもちて人をつかはゞ、人人己一盃の器量をつくし、國家の益ともなるべきか。

吝嗇儉約の辨

吝嗇はしわき也。儉約は始末なり。おなじ事のごとく心得たらんは僻事なり。その跡似たりといへども、その用處大に同からず。夫財寶は限あるものにして、望は窮なき物なり。限ある財を以て、窮なき望を遂んとならば、日日に萬金を費し、天下をあげてその用をなすとも、つくる事有べからず。入をはかりて出し、財を節にし用をつゝしむは、天の道なり。しわきは、財をおしむ。始末は財を節にす。節はふしといふ字にして、竹に節有ごとく、よき程々にて止る事ある。しわきは多く財を貯んと也。始末は用る所あるが爲也。孔子、夏禹王を謂く、菲飲食而致孝於鬼神、惡衣服而致美乎黻冕、卑宮室而盡力乎溝洫と。平日吾口體を養ふもの菲きは、鬼神に亨祀する者は豐に潔せんとなり。常の衣服を文らざるは、祭の衣冠を鮮にせん爲

なり。吾おる家を卑ふするは、非手溝塘ごときをいとなまんとなり。是はかしこき君の教、下々迄もその分々相守るべき事なり。青砥左衞門夜に入て出仕しけるに、いつも燧袋に入てもちたる錢を、十文誤て滑川へおとしけるを、其邊の人家へ人走かし、錢五十文出して炬十把かひ、是をともして終に十文の錢をもとめたり。さて云けるは、十文の錢は、只今覔ずば長く水底にしづみて失ふべし、五拾文の錢は商人の手にありてうせず、彼にあると吾に在と、何の差別かあるべき、かれ是六十文の錢をうしなはず、豈天下の利ならずやと云しとかや。是吝嗇なる人のすべき事にあらず。東坡李公擇に與る書に、口腹之欲、何窮之有、毎加節儉、惜福延壽之道といへり。誠にいろは性をきるの斧、味は腹をとらかすの藥なり富貴の家を見るに、情慾味もとむるに隨ひて有ゆへに、一時心をこゝろよくし、口を爽にするを悅て、身の勞るゝをしらず、中壽をたもつ人はすくなし。山野の人は求むべき貯もなく、日日東にはしり西にはしり、慾と味ももとめがたく、故に多くは壽し。是東坡が惜福延壽といふ所なり。今海内久しく太平の化にほこり、奢侈の風日日にきそふ。謹んで古をおもふに、武田信玄の制詞に、妻子之衣類、一萬石所持之士者、京染等の小袖、五千石より下は薄板、五百石より下は袖、百石の内外は布子たるべき事。又いはく、親族の間、一とせの内振廻の義二度、二汁三菜之外可停止事。又三好筑前守義長志を得てのち妻の衣帶を京にもとむるとて、一曰、表は無紋の綾、うらは國紬、二曰、表は國紬の長濱染、裏は示太山絹、三曰、奥紬の小袖、兩面無紋の黑、附たり紅梅の帶五條と云云。二百年になんくとして、その風すでにかくのごとし近來酒店遊里次第にひろく、農をいとなむものは少く、そのうへ莨烟草ごとき無用のもの世にひろま

る。是國家の貧しきもといなるべし。慶長十四年東照宮かつて烟草を禁じ給ふも、深く益なき事を察し給ひてなるべし。

謙を守れとの説

易の謙の卦は、艮の卦を下にし、坤の卦を上にす。䷎坤は地なり。艮は山なり。山の地のうへに高く出たる、時として騫崩るゝことあり。山地の下にかくれてその高きを示さず。坤は順にして、艮は止るなり。物に順ひとゞまるべき所にして、進むことをもとめずして止るゆへに、人のきらひ妬もなし。是謙の德なり。謙はへりくだるといふ字にて、物に高ぶらす、吾をつゝしみ、奢らざるなり。故に易の彖傳に、天道虧盈而益謙、地道變盈而流謙、鬼神害盈而福謙、人道惡盈而好謙。仰で天を見れば、日高く昇れば昃き、月正に滿れば虧。ふして地を觀れば、潮も滿ればひき、水も流れて卑につく。鬼神造化のあとも、草木繁りては枯れ、人盛にしてはおとろふ。人情も奢恣なるものをばにくみ、へりくだり恭しきをば愛す。甲斐の信玄、板垣彌次郎が扇に、

誰もみよ、みつればやがて、かく月の
いざよひの空や、人の世の中、

と。この歌をかきて賜しは、謙德をつゝしめとなるべし。人の至つて貴きは天子なり。されども九五の位にます。易の乾の卦䷀下よりかぞへて五にいたる、是九五なり。是猶上に一爻をのこし、天の道をおそれみつつしみ給ふなり。故に易の上爻は、亢龍有悔とて、龍の天にのぼるがごとし。盡くのぼりつめたる時は下らねば適はぬゆゑに、始て悔しく成たる也。是天子のみの事をいふにあらず。かりにたとへていふ也。一升入る器あり。一斗入器あり。一石入いる器あり。一升入る器に九合いれ、一斗いる器に九升いれておく時は氣遣なし。一升いる器に一升、一斗入器に一斗いるゝ時は、すこ

し障ても打こぼして、剩器さへ損ざすやうになりゆくもの也。ましてや一升入ものに二升もいれんとはかるをや。易の象に、亢龍有悔、盈不可久也といへり。足利鹿苑院義滿は太上天皇とまでなりしも、譽る人はなし。秦の李斯といひし人は、上蔡と云所の人にして、博學にして多才なり。秦の始皇につかへ、位宰相となれり。されども、その心あくまでおそろしきものにて、書籍あれば人いろ〳〵の事をしりて、上のしおきをもいふ物なりとて、天下の書をあつめて燒すて、儒者をあつめ坑にいれうめ殺し、始皇崩じて、その太子扶蘇と、大將蒙恬などを殺て、扶蘇の弟胡亥を位につけ、二世皇帝と號し、民富ば謀反をするなどして、成敗きびしく、年貢つよく取立、督責の術とて民をなやましける。右いふごとくみちてはかくる習なれば、又趙高といふものゝ讒にあひ、咸陽の市にてきられけるとき、その子にむかひ、故郷の上蔡にして犬をつれ兎かりせし貧しきむかしをくやみなげきしかど、夫さへかなはぬ身となり、一門從類ことごとくころされけり。李斯忠をもちて君につかへ、民を憐み、世をすくはば、この後悔はあるまじ。是らも易の亢龍のいましめをしらざる也。人人その己が分といふことをしれば悔なし。子は子の分あり。臣は臣の分ありたとひ天下に並なき忠をつくし孝をつくしたりとも、是臣となり子となるものゝ分なり。吾こそ世にもかくれなき忠孝をなしたりとて、それを鼻にかけ、親にほこり、君におごらんは、謙の道にたがひ、忠臣孝子といふべからず。孔子謙の心を釋て、勞而不伐、有功而不德、厚之至也との給へり。手柄ありても、身に勞しても、我こそと人におごるの心なからんこそ德のあつきなれ。わが分をしらざるより。賤しくして高ぶり、貧くして富るを學び、一段づゝも吾おるべきところよりさきへ〳〵

とすゝむ程に、藍縷きつるときは木綿布子ゟ羨しかりしが、布子にもあへば小袖きたくなり、夫より綾羅錦繡もかざりたくなる。歩行する時は馬も羨しが、馬にのれば駕籠、駕籠より乘物輿と只管に高大になれる事、是を借上といふ。約體なくともいふべき歟。布子きるべきものは布子歩行すべきものはいつもかちと、分限の外をしたふべからず。高席につきたるは勿體ありてよきものゝ樣なれども、親よりも一段上に座したらんは、片腹いたくこそ有べけれ。みな謙の道をしらずして奢り恣なるよりおこれり。八佾は天子の樂なるを、季氏もちひたりとて、孔子ふかく歎きたまひしも、その分をしらざる故なり。家に貯ふべき道具も、我分限より過たらんは、却て恥べき事なり。唐の文宗のときの相國王涯が娘、資訓といひし人の妻となりけるが、かへりて父にいひけるは玉の釵のきわめて細工手をつくせるあり、

價七十萬錢なりといひける。王涯きゝて、七十萬錢は我一月の俸給なれば、汝におしむにはあらねども、釵ひとつにして七十萬といへば、これ妖物なり、かならず禍と相隨んといへり。數月の後女又かへりて、員外郎馮球といふものゝ妻もとめたりとかたりける。王涯きゝて、わづかに郎吏の妻として、首の飾七十萬ならば久しくあるべからずといひしが、はたして程なくその身も亡けり。賴家のとき、山門一揆をおこしける。佐々木左衞門太郎重綱も討手にむかひけるが、父高綱法師これをおくり、重綱が武具の美しきを見て涙を流しける。高綱の兄入道經高、入道盛綱そのよしをとひければ武具の美なるは身に害あり、かれ兵をしらず、此度生てかへらじといひしが、はたして討死しける。討死はもとより武士の本意とはいひながら、武具の美なるは早く人の目にもつくものゆゑに、賴義もうつくしきを亡瑞の鎧

とて、ふかくいましめ給へり。

善人惡人盛衰夭壽の解

ある人問て曰、治れる世はすくなく、亂れる世は多く、惡人は多くさかへ善人はおとろへ、惡人は富、善人は貧しく、惡人は壽く、善人は夭きがごときは如何。予こたへて曰、是説あり。善は陽の正しき也。惡は陰の邪氣なり。陰陽は互に消長するものなり。夏さり冬來り、夜翌日晏るゝが如し。然どもあしき事は耳にいりて心にさかわず。目に見て心を悅しむ。人の君たるもの、すこしく防ぎ守るの心おこたれば、佞人きそひ進むものなり。佞人すゝめば親子夫婦の中をへだて、兄弟君臣の怨をなす。是みだれの階なり。佞人は計を廻しへつらひをなし、いかにもして君の心に適はんとたくむものなれば、現在惡人とはみへぬものなり。操狂言にするごとく、惡人なりとて面あかく眼ふとく、かりそめにも方外なる事を聲ありたけにさけびていふ物ならば、誰かこれに迷ふべき。惡人は智ふかく詞あまくして、たえてその氣さきみへぬものなり。酒をのみ色をこのむがごとき、人間の至てたのしく面白きもの、是に過たるものなしたとへばかくのごとし。終に身の讎となるは、後にぞおもひ合するものなり。いかなる發明の人もこゝに迷ざるはなし。むかし楚の平王の臣郤宛といふ人あり。正しき人にて、國人もあつくなつきけり。時に吳國より、掩餘燭庸などゝいふを大將として楚をせめけるに、吳の國内亂ありて君ころされけるゆへ、掩餘燭庸も皆よの國に出奔しける。此とき郤宛楚の大將として拒ぎ戰しが、此亂をきゝて人の亂に乘ずるは不祥なりとて、直に師を引入けり。平王の出頭に費無極といふもの有。郤宛をにくみ時の令尹子常にゆきていひけるは、郤宛何とぞ令尹を招き酒をすゝめ度由念頃に申候と云、又郤宛がかたに行て令尹この

宅へきたり酒をのまんとなりといひければ、郤宛悦び、賤しき我宅へ令尹來らるべき事、身の面目此うへなし、さりながら何ぞ饗應のしなもなしといひけるを、費無極きゝて、令尹は武具を甚このめり、もし來らるゝ日は武具を門につらぬべし、令尹きたらばみるべし、時に是をとりて獻じられよといひ、さて其日に成ければ、郤宛かたの如くとりしつらひて待ける。無極いそぎ令尹にゆき色を變じ、さて〱某君を誤んとせし、郤宛が門には武具森然と立ならべたり。是二心の色と見へたり、先達て呉の軍にも呉の賄をうけて一軍にも及ばずかへれり、いよ〱疑し、疑給はば人を使して見給へと云ける。人を使してみせしむれば、太刀鋒弓箭無極がことばに違なくつらねたり。令尹大に怒、燒討にして郤宛をほろぼしける。慶長の頃、太閤秀吉薨じ給ひ、人ごゝろもまだ靜ならざりし時、五大老ありといへども、東照宮

と加賀利家卿の右に出るものなし。石田三成、增田長盛とはかりて、この兩人心をあはせ給はば、吾輩志を得ることあるべからずとて、石田增田中よからぬ眞似して、增田は神君におもねり、石田は利家にへつらひ、隙をうかがひける。一日利家東照宮を招請あらんとて、東照宮も渡御あるべきにきわまりしに、增田來りて、利家はかりごとありゆき給ふべからずとて、しゐてとゞめ申けるゆへ、病に託しゆき給はず、增田又利家の宅にいたり、前つかたすこしあしくさゝへ候ものの有つて事はたさず、この度招請あらば然るべきよし申にぞ、利家まへかたの事吾も心に恥る事あり、また〱欺をうけば人にあふべき顏なしと申けるを、增田さきの事内府（東照宮なり）もふかく後悔し給ふ、この度まねき給はばかならずきたり給ふべしとなり。よつて招請の日定り、その日になりしかば、增田また東照宮にいたり、利家姦謀あ

りかならず往給ふべからずと、詞をつくしてとゞめけれども、東照宮このころも約にたがひ、心甚こゝろよからず、再約に違ふべからずとて、已にいでんとし給ひけるを、増田僞りて書狀をしたゝめしをふところより出し捧奉る。東照宮あやしみ給ひ、俄に故障有とて此日も延引遊しける。利家この事をふかく憤り給ひ、細川忠興をよび給ひわれ年老、人の爲に侮られ候事かくの如し、一生の恥とこそおもひ候へ、路を足下の領分丹後にかり、加賀にかへるべしとの給ひしを、忠興きゝ給ひ、この恨は尤に候へども、今かくのごとくにして歸らば、世の人は怯(つたな)しといふ、威權もすたれ、秀吉の顧命にもそむき給ふにあらずやとゞめ給ひけるゆへ、増田がはかりごともむなしくなりけり。よく／＼姦人の心はにたるものなりかくのごとく手を入あしを入するほどに、いかなる人をも迷し、一旦さかへるものなれども、

夕立の漲り來るごとく、岸も堤もくづしもてゆく樣なれども、只一時のことにして、費無極もころされ、増田石田もほろびたり。又正しき人は物にへつらはず、此方よりもとめては、立どころに富貴を得るといへどもせず、計をまうけて我身の快する事をせず、賄にふけらず、あしきをいさめたつほどに、あしき人の樣に俄に炎のもへ出る樣の事はなし。物に憐ふかく、利にふけらず貪ものなり。又よき人は、いつ迄いきても人に愛せられあかぬゆへに、長いきしても猶おしまるゝなりあしき人は、四十そこらにして死ても、人にうとみあき果られ、長生せしごとくおもはるゝなり廿日のてりたるは一日ともおもはず三日雨の降たるは十日もふりたる心地するが如し。百年の歡樂は短かきに似て、一日の憂は長に似たり。一斗の水、一握の泥をいるれば、その水こと／＼く泥の如し。百人のうち五人七人の溢れもの

あれば、そのさとはこと〴〵く溢ものゝ様におもはるゝなり。よきもあしきも命はかぎり有ものなれば、よき人とてながいきすべきにもあらず。あしき人とて早く死すべきにもあらず。されども一度さかへ一度衰る内、善をつむ家はさかへ、悪をつむ家はおとろふ事多し何の里何の國なりとも、鑑てしるべし。ある人の曰、此理かくのごとし、又あしき事はきゝやすくよき事はきゝがたきはいかに。予が曰、酒は口にあまくして病をかもし、色は心に快して人をつからす。朝寝する人は、など左は朝寝するとておこしたるは忠なれど、ねたきときは入ざる事とおもふものなり。よし〳〵ねよといふは諂也。されどねたき時はうれしきものなり。かゝるかりそめの事にだによき事は耳にさかふ。まして大事にのぞみてをや。よく〳〵工夫なくんば、入ざる事とおもふべし。旁観八目とて、是を隣の息の事になしてみよ。いかに闇なる人とも、早くおきよと云しが忠と思べし。

陰悪必ず禍を蒙るの説

惜ても惜むべき者は、なき事を造り云て、人に悪名をとらするもの、毒飼して人をころすもの、我は賢人のふりしてひそかに人を陥に入れ、又人をば毒飼し、己は長く世に生はたかり、榮曜し旨き事に逢んとは、さり迚は黒き心ばへなり。これよりみれば、或はさしちがへ、或は討はたすがごとき、その心に害なし。然ども天はたかきに居て卑をみる。その事顯その禍を蒙ざるはなし。その罪牛裂すべし。

分別なき者におぢよとの説

太閤秀吉、御咄のもの伴内といふもの有。ある夜話の時、世の中に何物が至ておそろしきぞと問給ひけるに、皆上様ほどおそろしきはなしと云。伴内きゝて、いや〳〵上様は正直にまし〳〵て、身に過なければ氣遣なし。世の中に

無分別者ほどおそろしきものは候はず、無分別者は物の聞わけなく用捨をしらず、我儘をはたらき、理非の辨なければ、何か渠が氣にあたり、いか成事をかいひやぶり、思はざる難をやなしなんと云ければ、太閤悦び感じ給ひしとなり。誠に世の中に理非のわかちしらぬものの程おそろしきはあらじ。物は理によりて服する樣にありてこそその分もあれ、百姓の水論じけるをきゝしに、ひとりの男何やらんいひて、此事が目にはかゝらざるか、目は何の爲のものなるやといひければ、我目は面の文なりと、すこしも負る色なし。かくいはんには肝心の理いはんとも、瓢箪にて鯰おさゆる類なるべし。人食犬の樣なるものなれば、僻事いはんとも除て通すべし。

忠臣國の爲に命を惜みまた身をおしまずといふ話

趙の國の臣に、廉頗、藺相如といふ二人の臣あり。廉頗は手づよき大將にて、しば／＼戰數かつ。そのゝち秦の國より、いろ／＼として趙をとらんとしけれども、此二人ありてはかり難し。因て趙王に約して、澠池といふ處にて、秦王會しられけり。酒酣にして秦王、趙王にこひて琴を奏する。趙王琴をひかれけるとき、秦の御史前んで、その年月その日、趙王にことをひかしむと書とゞめける。相如缻をとりて、秦王にすゝめうてと云ける。秦王いかつてうたず。相如進で缻をとり跪き、君もし缻を擊ずんば、五歩の內頸を血を以て大王をけがすべしと。左右のもの相如をころさんとしけるを、相如目を張して叱りければ、恐れてあとへしざりけり。秦王是非なく缻をうつ相如趙の御史をめし、その年月日、秦王に缻を擊しむと書せけり。秦の羣臣、趙の城十五を秦に獻せよといひければ、相如秦の都咸陽を以て趙に獻せよと、始終酒宴おはるまで、一分の辱をうけずして國

にかへりけり。この功により、その位廉頗が上に出けり。廉頗憤り、我軍の功を以て、彼が口さきの功名の下にたゝんこそ安からね、相如にあはばおもふさまに恥をあたゆべしとていかりけるを、相如きゝて、廉頗出る日は病と稱し出ず。ある日途にて廉頗が來るをみて、車をかへして避匿けり。相如か臣等無念に思ひ、吾等親にわかれ妻子をすて君につかゆるは、君の人となりをしたひてなり、然るに廉頗にかくまで雑言せられ、おぢ恐るゝ事かくの如し、常式の者とてもかゝる恥辱は蒙らず、吾等もとより身不肖に候へば、いとまを賜りかへるべしと云ける。相如とゞめて、汝等廉頗と秦王はいかにぞと云はる。それは秦王勝れりと云。そのとき相如、秦王の威あるさへ我是を辱たり、われ怯しといふとも一人の廉頗恐るゝにはあらねども、秦我趙を攻ざるものは、我と廉頗と二人あるを以てなり、二人あらそはゞ一人は傷べし、然らば國の爲にあらず、國の急難をすて、私の恨を快せんは忠臣にあらずと云ける。廉頗是を聞大に身をくひ、相如が家にゆき、涙を流し罪を謝し、是より刎頸の交をなし、趙の國おだやかなりし。朱雀院の馭宇、あやしき星出けり。天文博士是は大將の家の禍なるべしと勘がへける。時に小野宮實頼右大將にして、枇杷仲平左大將なり。小野宮右大將の家には是を禳ふとて、祈禱のしな〴〵つくされけり。枇杷左大將の家には何事もなし。ある人其子細を問ひければ、左大將、星もし禍を大將の家に降さば、我と實頼となり、吾已に年老身不肖なり、實頼年壯に才あり、我もし禍を免るゝ事あらば、實頼に利あらじ、我皇家の爲にこの人をおしむ、故に禳ずとかたられけり。藺相如の國のために命をおしみ、是は國の爲に身をおしまず。その君に忠ある所は一也。

醫に望聞問切の四ッありといふ説

今人病をうけ、醫師を招かば、明なる處にふし、委しく病の始末をとき、脉を察せしむべし。病人多くはくらき所にふし、病の様子もかたらず、唯脈ばかりによつて療治をもとむ。醫者も名醫とおもはれんとて、𨈟々にとはず。古の神醫も望聞問切の四を以てす。望とはそのいろを望み様子をさつし、聞とは聲氣にきゝ、問とは病の次第をくわしくとひ、さて脉を切て藥をあたへしなり。今の醫、神醫に比せばその及ざる事千萬億。その及ざる技を以て脉一いろにて病をわかたんは、决してこの理なし。病家も醫に困させんとならばよし。もし病をいやさんとならば、醫に望聞問切をつくさしむべし。これ吾言にあらず。雲林の龔廷賢いへり。

醫は仁の術といふ論

醫は仁の術なり。しかれども醫者をさして仁の術を行ふものとはいふべからず。醫道はちかくは身を護、遠くは人をすくふ。誠に仁の術なるべし。されども多くは書籍にあきらかなりといへども、身をまもるにはうとく、色にふけり酒に長じ、貧家の病を疎にし、富人の治に心をつくす。いはんや、人、扁鵲が手なければ、誰か過なからん。過ときは人を破、甚ければ人をころす。百人を治して百人をいかすとも、百人はいくべきの理あるものをこそ活せ、死すべきものをいかすにあらず、扁鵲が技を以てすら、吾よくいくるものをいかす、死せる人をいかすにあらずといへり。その壹人はいくべきものをころすなりしからばその功と罪と、いづれかおもかるべき。されども是は醫道の罪にあらず。醫を學もののゝ過なり。故に醫は仁の術といふべし。醫者は仁の術を施者といふべからず。もし人あつて、吾萬人治して萬人を活すといふとも、我はまことゝせじ。死すべき人ならば、十人治して十人死すとも、醫者の罪にあらず。

美服珍膳世の弊を矯るの說

人激する事あれば、吾衣食の爲にせず、溫飽の爲ならずといへり。是まことに男子の志ながら、これやすき事にあらず。船に枕して馴ぬ旅寐の波にゆられる商買、暑きより寒きにいたり、春より秋を凌ぎ、田に耕し畠に耘る徒はいふにたらず。馬に跨り刀をよこだへ、墨のころもに世を背るがごときも、十に七八衣食にはしる人ならずや。故に金もつものは利根ものと時めかれ、貧しきものはうるさしとあざけらる。誠に色に酒に、博奕放埒に家をやぶるもあれば、邪慾不道に富るもあり。貧福貴賤にては人の賢愚はさだむべからず。又衣服うるはしく着かざりては人にほこるの心あり。楚楚(おろそか)ならんは、人に恥るの心あり。人と交るにも膳に美味を羅ね、酒に歡をかさねて、是を親切といふ。是によつておもへば、吾輩ごときもの、容易(たやすく)こしやすき關にあらず。もし衣服の美惡に心なく、又は吾したしき友ならんには、饗應の心つかひなく、麥をかしぎ菜を煮て、心のおく底もなくかたりあいなんは、誠の友なるべし。今はしらず。怨憤やゝもすれば飲食の間におこるが故に、こゝに心を勞す。心を勞すればしばしの會合も稀なり。稀なればしたしからずあるひははじめよろしくもてなせども、終つがざればかへりて辱もとるなり。左いへばとて客をあしくあしらへといふにはあらず。是はしたしからん友の事なり。

米に譬へて五倫の道を喩す

米はおなじく米なれども、水を入て炊ときには、飯となり粥となり、炊て是を釀すときは、酢となり酒となり、むなしく倉廩の下にすておけば、むしとなり土となる。釀して酢酒となり、捨て塵土となるものをみて、米にあらずといはゞ、人信とせんや。その同じき所の米、一度酒屋の手にいりて酒となる時は、その性熱し、血

脉を通じ、憂をわすれ、興を催しむ。又その糟を醱て、燒酒となすとき、その熱やくよりも烈しく、火を點ずれば油よりも猛なり。性大熱となり、よく人を傷る。又釀すときは美酒となり、その味蜜よりもあまし。酢となれば性溫にしてよく收斂す。醴となるときは下戸の唇を潤し、ときに脾胃の氣をたすく。その本を尋れば米なり。ひとり米のみならず、一切のものしかなり。麻は直にのぶものゆへに、蓬その中に生るときは自然とよくのぶものなり。蓬のみだれがはしき中にはえたらんには、生れつき直なるあさもはたいるならん。されば此の心を道遙院の歌に、

まじりなば、麻もかへりていかならむ、
心のまゝに、しげるよもぎは、

とよみ給へり。人もおなじく人ながら、その習ふ處の道により、いつとなくその心までおなじからずなりゆくものなり。今佛者は、儒を小なりとし、儒は佛を誕なりとおもひ、佛氏も宗派をたてゝ心をとく事同からず。儒者も門戸をたてゝ道をとく事同からず。おの／＼その道にいるもの、其道におゐて發明す。ひとりこの事のみならず。盜人となり遊俠となり、あるひはかたましく、あるひはへつらひ、あるひは人をあざむきいつはり、その品いたつてかぞへがたしといへども、その本をとへばおなじく天をいたゞき地をふみ、父と母とありて生れざる人はなし。已に天をいたゞき地をふみ、父と母とありて生れたるよりしてみれば、父母兄弟則天倫といふものにて、この外に道なしとしるべし。親と子とあるがゆへに、君と臣との禮あり。兄と弟とあぬがゆへに、朋友の交あり。天をいたゞき地をふむゆゑに、夫婦の道あり。たとひ我いとなみは、士となり、農となり、商人職人とかはるとも、此外には出べからず、是より工夫するときは、道おのづからあきら

かならん。酒にもあらず、酢にもあらず、米の米なる處をしるべし。米はよく人の命をのべ人をやしなひ、害なきものなり。酒となり酢となりては、一時の味をきわむれども、本來の米には及がたし。人も人の道たらんは、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、夫夫たり、婦婦たるの間にあり。是本來の人の性なり。よく〳〵考べし。又その我このむ處によりて物をみる事も、米の酢酒と變ずるが如し。是を好む處におもねるといふ。たとへていはんに、月はおなじく大空にすむものなれども、船をうかべては水上の月とし、林下にやすらひては木間の月といひ、池に臨ばその影池にあり、露を弄ばその光つゆにとゞまるがごとし。ある人五倫の道を人にときて、兄は弟をいとおしみ、弟は兄をうやまへとおしへけるに、弟きゝてあれきゝ給へ、兄たらん人は弟をばいとおしむものにて候とて、我勝手よき事のみきゝ覺ける。又子路は、百里の外に米をおひ、父母を養し事をかたりければ、子路はことの外健なる男にてこそ有けめと云ける。又ある人の、かたわらにおもひものもちて、それを妻のしりて、事にふれてつれなきよしなどわびけるを、聖人の教にも妬あればさるとてさりける。誠に婦は物にあらそはず、妬ざそはらんこそその道にもかなひなん。さしての事もなからんに、嚚(ひすかし)にかたかましきが、妾などありたるに、道なく妬んはにくむべし。さなきに我存分の僻事をはたらきて、婦人に聖人の道をのぞまんも、時宜によりてはおとなげなし。是等は酢酒むしつちを米と見、露にやどり溝にすむかげを月とおもふ類にして、わが心のわたくしにひかれ、我こゝろを公にせざる過なりわが私、心におらば、たとひ聖人のことばをきくとも、我わたくしをなすの媒なるべし。

施しをなしまた施しを受るの心得

人に施してはわすれがたきものなり。人のほどこしをうけたるはわすれやすきものなり。

梅園叢書卷之下 訖

梅園拾葉題言

匪花匪實。翩其墜矣。寧可供之於人之觀哉。唯子睦愛我之切。不忍於捨乎。拾而收焉。諺曰愛其人及屋烏。於是乎觀之。其意可謝。其實可恥。及還題數言以言命名之意。天明辛丑

天明改元秋九月

三浦晉

梅園拾葉卷之上

目錄

梅園拾葉卷之上

豐後　三浦晉　安貞　著
加藤修　子睦　輯

答上田養伯

賢胤の昏議、御親戚を置、遠く存問に預り候事、ふして相考候に、今世態人情の事に候はゞ、うときこなた迄に及候はん由なく候。誠に易にいはゆる、同人于野の意にや、君子の貞に利すと申候へば、敢てきける處をのべて、正しく對ずんば有べからず候。嫁娶は人倫の本、夫婦義あつて、父子親むとも、古典に出候。さる程に、妻をめとるは、人に父たるの道をしり、夫に嫁するは、人に母たるの道をしり候て、夫婦なるべく候。依て周公禮を立、男子をして三十にして娶らしめ、女子をして二十にして嫁せしむと定め給へり。されども禮は經にて、經常の義をのべ候。人常世態は常ならぬものに候へば、喪

あり、疾あり、百の事故ありて、たしかには定がたければ、三十二十は、粗其頃を擧て、準を立候ものにて、究屈に心得べき事には有まじく候。さればこそ孔子も十九にして宋の开官氏に娶り、二十にして、伯魚を設給へり。又嫁娶の禮、上古は定りし事もなかりしならん。其後殷周のたがひ有。聖人の禮をまふけ給へるは、親疎をば服の輕重にわかち給へり。服は大概斬衰齊衰に三年期あり。然して大功九月、小功五月、緦麻三月、それより遠きは服つくる也。是によりて、禮の喪服小記にも、上殺下殺旁殺して親畢ると有。上殺は、己が身より上父祖曾高、この四を過ては服なく候下殺は、己が身より下子孫曾玄、是より下又服なし。是より旁とは己と父母を同しうする者は兄弟なり。父と父母を同しふするの同行は、從父兄弟也。祖父と父母を同しふするの同行は、再從兄弟なり。曾祖父と父母と同しふするの同行は、三從兄弟也。上高祖父にて殺候へば、高祖と父母を同しうするの同行は、服なきの親よりわかれ候ゆへ、服なく候。されどもわかれて遠からぬ故、四從兄弟の死に祖免いたし候。高祖の父のわかれ五世は祖免す。その父より分れたるは、六世にして祖免もなし。よりて殷の制は六世になれば、ゆるして婚姻を通じき。周の禮は、姓をうごかぬものと定め、世隔れば姓より族を生じ、木に枝の生ずる如く、族はさま〴〵かはれども、姓は決して替らぬものと定めたり。猶こなたにて、新田足利邊見武田など數限なく分れても同じ清和の源なるが如し。さありて祖をまつるに、族人昭穆を以て皆集りまつる故に、百世經ても同姓は婚姻を通せずと定め給へり。されば我邦は君臣の分正しき事、萬國に類なく、神の御代より今の世にいたる迄、高御座うごきなく、拱を九重の内にたれ、四海浪穩に治まる事、世に有がたき例に候。されば社、外より稱

して君子國ともいひ、孔子もいやしき事あらじとて、桴を浮めてをらんと欲し給ひし由に候。されども男女の事は、大様いまだ開けず候き。恐多く候得共、世々のふみにも候へば、一二をあげ申候。彦火々出見尊少童命の長女豐玉姫を娶り、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊をうみ給へり。葺不合尊は豐玉姫の妹玉依姫をめとり給ひて、神日本磐余彦尊をうみ給へり。即神武天皇也。是は外戚につきての小母也。さて人皇十二代景行天皇は、垂仁天皇の御子にして、日本武尊をうみ給ふ。此尊東夷征伐の歸路伊勢能褒野にしてかんさりましませしかば、一生日嗣をしろしめさず。其御子ぞ成務天皇の讓をうけ給ひて、帝位にのぼらせ給ひき。是即仲哀天皇也。抑此天皇の御母は兩道入姫と申て、垂仁の御子景行天皇倭姫命の爲にも、おなじく妹にてわたらせ給へば直に日本武尊の爲めには、姑君にてましませし也。第三十代欽明天皇は、宣化天皇と同じく繼體天皇の御はらからにてまし〳〵き。然るに宣化帝の皇女石媛をいれ給ひて、敏達天皇をうみ給へり。其後もかゝる例ども多く侍りし程にや、源氏物語などの根なし言にも、いろ〳〵の見ぐるしき事ども思ひつゞけて書つらねけるに社と、歎はしく候。さる程に男女の道、人そろ〳〵としりて、恥らふ樣にもなりしは、儒敎ひろまり候故と覺候。誠にその後とても自然と人その甚しき非を存候迄にて制作の汰沙もなく候へば、むかしに因準して行なりの風俗に候。聖人の文には、兄弟の子は猶子のごとしとありて、同行父母は吾より小父小母の輩行にてあしらひ候程に、うちつけにはかゝる物語りもいむ程にこそ候を、こなたはむかしよりのならはしにて、王公大人よりして、此沙汰はなき事にて、御來書の通、滔々たるもの皆是に候へば、起つて聖人の禮に從はんも、因準して國風に

從はんも、非しる人もほむる人も有まじく候。され共晉が兼て存候は、親族はいつ迄も久しく替らずむつばずして叶はぬ物に候。夫婦は禮をもて合ひ、義をもて離るゝ物に候。義をもて離れ候ても、むつばぬむかし程は心よからぬ物に候。遠き慮なければ必近き憂ありと、是等も聖人制作の旨、遠慮のひとつにて候しかもしらず。よりて婚姻は疎族がよき物と兼て存候。賢胤弱冠、足下猶日月に富せられ候時勢の可否をはかり、義理に斟酌御取はからひ候はゞ、いづれ賢慮に過候事有まじく候。不悉。

同

一、檀弓禮不下庶人といふ句、是は下の刑不上大夫といふ句と相對したる句也。それを兩節にわかちたらは、陳澔の誤と見えたり。禮不下庶人とは、禮に天子公卿大夫士の禮あり。故に士婚禮、士喪禮、士冠禮、士相見禮など有て、庶人の婚禮冠禮相見禮など云事なし。すべて庶人はやつ〱しく、物事そなはらぬものなれば、古の作者迄の禮を制したり。故に先儒の說にも、庶人事あれば士の禮を假て、これを行ふことあり。刑不上大夫といふも、刑に大夫を刑すると云所を制せず。此故に庶人事あれば、士の禮をかつて行ふ大夫罪あれば、惡人の刑を以て行ふ也。むかし刑を制する日、大夫を刑する制を立ず。禮を制する日、庶人の行ふ禮を制せざるなり。禮を庶人に行はず、刑を大夫に行はずといふ事にては、あらざるか。

一、禮と儀と別なりといへども、儀も亦通じて禮といふなり。

一、左傳、畜龍の事見えたり。管見を以てこれを見るに、蓋古帝王の時、雲の瑞あれば、雲にて官名を紀し、龍の瑞あれば、龍にて官名を紀したり。雲とつけ、龍とつけても、雲にも龍にもあづかる事ともみえず。それが時代遙におしうつり、纔に豢龍氏、御龍氏などいふ名のみ殘りた

るゆへ、終にあやしき事附會したると見えたり。古の龍畜れ候へば、今の龍もかはれ候。末世には、箇様の事ども、附會多く候て、書も見にくき事多く候。たとへば太神の無名雉を天雅彦に使し給ひし事を、無名雉を鳥といひなしたるの類なるべし。

天狗説

客來り、天狗をとふもの有。主人こたへていひけるは、我きける處數多し。大空をとぶ星をよばひ星といふ。そのうちに聲あるとのふたつあり。聲なきをば枉矢といひ、聲有をば天狗といふ。舒明天皇の頃、星飛で聲雷の如し。僧旻天狗なりと奏せし事あり。よばひ星は、呼び星にやあらん。又經のほしのうちに、井宿の分に一座七星、南にたれてかゝれるを天狗とよべり。又天狗は夜をつかさどる、天鷄は晨をつかさどるといふは、斗牛之間天鷄とならべる星にして、井宿の天狗にはあらざるべし。又獾といふけだものは、狸の類にして、土に穴をほりすむものなり。蜀の國にては天狗といふよし、本草にも見えたり。爾雅にはかはせびといふ鳥をも、天狗としるせり。又山海經には陰山に狸に似て首しろきけだもの有、天狗といふよしなり。獾とは別なるにや。又同じ書に、天犬といふも侍り。是は赤して犬の類と見えたり。その下る所に兵有よしなれば、常にあるものにはあらざるべし。又蝦夷より能登の方の海には、いかにも鼻ののびたる魚ありて、處の俗天狗魚といふよし聞侍る。かゝるたぐひにやといひたれば、客頭をふりて、いなさにはあらず、世に天狗となんいふものは、所々高き山のいただきに處をしめ、さだかには人目にもかゝらず、畫にかけるかたちを見るに、そのさま人の如くにして、面いぶせく、目とく、鼻高く、爪甚長し、肩の後に翅生えたり、かしらに頭巾をいたゞき、身に袈裟をまとへり、されば虚空を飛行

して、ちさとのくまもまたたきのひまにかけり、人間をうかゞひては、驕りあなどる心あるをばともなひもてゆくなれど、剛なる人をば得をかさず、己が心にさかふものをば、或はつかみ、絶巘喬木の上にかけ、或はもとの所にかえす、風を生じ、火を化し、身を變化して、人ともなり、鳥ともなり、顯るゝもかくるゝも自在なり、されど日に三度熱鐵の湯をのみ苦む事限なし、終に身死して蘇り又飛行自在なりといへり、造化の間かゝる怪異のものも侍るべきにやといひたれば、主人おしまづきをはなれ、我幾度もかうやうのものみつといひたれば、客眉をひそめ、あなあやし、いかで幾度もかうやうのもの見るべきといふにぞ、いざとよいかでか欺き申さん、さらばかたり侍らん、それ己たかきに居て、人を見おろすは、高山にすむにあらずや、頭巾は、悪魔降伏の相をあらはし、袈裟まとへるさまは、しめやかにおとなしく

見え侍るにあらずや、さあつて物をよくやぶるは、爪のながきにあらずや、己才にほこり、人をば皆おろかなる樣におもひあなどるなどは、鼻の高きにあらずや、人の恥らひかくす事をばさぐりあばくは、目のときにあらずや、仇をせんとては、敵ながらもみかたと見え、ひが事ながら理と心まどへるは、變化自在にあらずや、尋もとめて黨をむすぶは、そのともをかたらふにあらずや、かしこき人をさくるは、剛なる人をばをかさゞるにあらずや、吾にさからふものをばさかしらをかまへ、笞杖徒流死のかなしみをかけ侍るは、絶巘喬木にかくるにあらずや、さればかゝる身は、もろ人にうとみにくまれ、公につみせられ、いろ〳〵とわざはひにあひ侍るは、熱鐵の湯をのむにあらずや、されどからうじて命たすかれば、こりあらたむる心はなくて、やがて又かれをうらみ、これを猜み、よしなきむかしに立歸るに、又よみ

がへり飛行自在にあらずや、されば唐の大和の昔の文より、今のうき世の有さまになずらへて、つく〲とかうがへ侍れば、唯このものゝ生かへり死かへり、家國こゝろのさまたげをなし待る社、淺間しけれ、北條高時入道の酒宴の席に、天王寺のゆうれい星とうたひしは、わずかに其あとを人に見咎られたるなるべし、いでやかゝるおそろしきものをふせがんずる術は、心すなほにして、まされるをうやまひ、おとれるをいとおしみ、かりにもおかしあなどる心なく、物毎に己が爲につとめなば、いづくか鬼のすみかなるべき、穴賢、なしとな思ひ給ひそと、いひければ、問ける人も心得て、誠やこの頃の人の心の時雨の空の、照るも曇るも定なきより、積れる雪のあしたの賴かたなきも、人の世の中にたとへ侍れば、此書の如くおもひなされ候とてまかりぬ。時は明和改元後の師走十二日、かたれるまゝに梅園の南の窓にて書つけ待る。

津加美佐志の說

花は生るも投いるゝも、各その法ありとぞいふなる。されどかたゐなかなる人はしらず。知らずとて花のめでたからぬかは。軒に牛垢つきたる花桶のかたくなゝるを、心ぼそくもいとにかけて、花のおほかるおほからぬは、童山賤の手にまかせつゝ、捨やらず、取つくろはず、つかみさせば、おのがまに〱亂あひて、仰ぐべきはたれ、ひきかるべきは高く、おもふまゝならぬも、人の世になぞらへておかし。花の名殘はさら也、枝あぢきなくかれ、葉哀におとろへぬるが、興ふかければ、いつもさゝがにの蛛のすみかとなるまで、かへやらで、舊きに新なるをかさぬれば、餘所目さぞいぶせからん。隣なる龜てふ童の、此ころ櫻おし氣なく折來て、元てふ子にさゝせたるが、風にさそはれ、文のはし硯の面に散かゝりて、人の心をなやませ

しも、いつかきのふのむかしにて、あとはわか葉のわづかなる水を命とも知らず、みどりをそへ、花しべ艶にのこれり。行春のかたみと思へば、いかで捨やはやるべき。蝶や蜂の來なれて、尋まよふも心ぐるしく、椿しやがよふのもの折そへぬれば、かれも所得顔に遊びたはむれつゝ、萬物靜に觀れば、皆自得といふ事など思ひ出て口ずさみけり。かの枝をわかね葉をすかし、花ぶさをつみ、色うつろへば、やがて情なくかひやり捨るを口をしとは、われひとりしておもふ事にや。

答辻玄養

人の稱に、姓と氏と行第と名との四つ有。氏は族ともいへり。今苗字といふ。行第は呼名なり。假名ともいふ。名は名乘とも實名とも稱する也。夫姓は天子より賜はるものにして、木に幹あるが如し。故に氏は姓より出、又その一族をわかつ程に、時として變化する事もあれども、

姓は萬世かはらぬものなり。故に姓につぎて重きものは氏に候得ば、故なく物好によりて他苗を冐す類、祖先に對し、不敬の至なるべし。いかんとなれば、氏は竪に貫くものにして、是によりて誰が先祖誰が子孫もわかるゝものなれば也、さて行第のある處、是を苗字にそへて呼名とする也。太郎次郎三郎是なり。餘五將軍維茂とは將軍の號にあらず。もと十五男なる故に、餘五郎と稱せしによりて也。もろこしにても是等の事あり。沈三佺期、杜五審言、などいへる此類なり。されど和漢隔別の事なり。もろこし行第の事は東涯先生輩行説に、詳にその事を辨じられたり。幼き時は外に名ありて元服の時實名をつくるなり。是は烏帽子親の役也。近頃通字といふ事をいひならはして、世々かしらの字を通じて用る事あり。惜成故實なし。祖先より子孫にいたりて、氏竪につらぬけば、外に通る字意義なし。其上父の名の字を

冒す事、禮にあらず。兄弟は横に貫くものゆえに、其字を通す事もあり。今の通字といふもの、兄弟に用るは、然るべきかに候名乘の事返し候て歸納もしらべ候への由、此道小子も學びて、わかき時は人にもかへし遣し候ひしが、大に義理なき事をさとり候て、後はいづかたも需を拒み候也。近古の俗にも、源義朝の名、梟に返り候て、父を害せしなど、音の清濁もしらぬ人のいひ出せし妄言に候。反切と申事も、昔はなき事にて、漢人は韻にくわしく、音にうとく、梵は音にくわしく、韻にうとく候ひしかば、梵漢音韻を合し歸納を得て、聲音をしらべし物に候。すべて世の中の吉凶といふ物をしらんとならば、天爲人爲を辨へ、當遇の天命に達すれば、箇樣の事より生ずる物にあらざる事を理會いたす事に候。今の名乘を返すと申事は、先易の吉卦を安んじ、音の五行を見て、生克の順逆を定め、字書をかぞへ、歸納の字を撰む事を面と致候。聖人の道の上に、易の六十四卦に、吉卦凶卦と申事なく候。五行生克は、周の末より起り候て、物に配當して造化を論じ候。是又聖人の學になく、天地自然に適はぬ事に候。其上醫家にて申候得ば唇は土、喉は金、齒は水と配し候を、音家にては、喉は土、唇は水、牙は木、齒は金と配し候類、五行配當の内にても自相戻り候事に候。字は世々に變じ候て、むかし夏禹の頃の文字は、岣嶁山の碑とて、今に殘りて、少しも今の文字に似よる事もなく候。周の頃は初は大篆とて御座候。宣王石鼓の文とて、今にありて讀ぬ物に候。孔子の頃は、蝌斗迚かへる子の形の樣なる字行れし也。今の隷字といふものは、やう〳〵秦の始皇の頃、事繁く字むづかしければ、下つかた役人ども手はしりよき爲に設けたる物に候。かゝる事に候へば、今の隷字に限り、其書造化の機密に合し候はん樣なく候。音に五行を配し候は、もろこしの音に

候。今これを呼候は和音に候。和漢の音、唇舌牙歯喉おなじからざるもの有疑、和はギと呼び、漢はイ、とよび、曉、和はキヤウとよび、漢はヒヤウと呼の類に候。さ候へば支那國の韵鏡は用立まじく候。さり迚こなたの韵鏡もこれなく候。又文字の音韵をしらべ候には、音を用ひ、名を呼候には和訓を用候はば、いづれの音に從ひ候はんや。畢竟技者糟をてらひ口を餬ふの術と覺候。この故に、名はくらからぬ人により、出處正しき文字をゑらび、もちひ給はん事、尤可然奉存候也。九月盡。

手野村貞平行狀並墓志記

我豐國東の郡武藏の鄕手野村に貞平といへる者あり。ことし四十六。父は又助とて貧しく暮しけるが、ふたりの子をもてり。田がへし草きる營もつきて、姉なるよしといへるは十九、貞平十歳になりたるを引具し、妻とともに、寛保の頃、世わたるよすが求めて、筑前國志摩の郡本岡村といへるに足を止め、十七年經ぬ。其内又助も身まかり、たのむ木陰もなき心地して、又故鄕にかへりけり。里人あはれがりて、やう／＼疊五疊ばかり敷ける小家つくりておくり、むかし親の作りすてし地の少し有けるをかへし渡しぬ。己もとより唖なれば、物かたり物きく事もかなはず、母は年老ぬそれさへあるに姉なるものゝやめるが上に、目もさやかならず、朝食夕食の煙だに有かなきかに、世を過しぬ。されども此者天性至孝にして、こゝろの及ぶ限りは、母姉に志を盡しける。其貧しき事いはん限なし。されども其潔き心からに、菜をつみて飯にかえ、水をわかして湯となし、春はいびら様の物（綿束束見、豐後の民荒年にはくらふ、方言いびらといふ）あさり、飢渇をしのび、或は日傭などとりて、人にこひ求むる事をなさず。たまたまやむ事を得ず物かる事のあれば、指を出して日をかぞへ、かへすべき期を違へず。さりし安永五年

中の霜月、その母死しけり。貞平かなしびにたへず。三日の間、物くらふ事能はず。親族いろいろとすかしすゝめて、漸く食事をすゝめけり。さてかゝる樣なれば、母葬らん事もいかゞあらんと、かたへよりも思ひ煩ひけるに、終焉の設は、とくより覺悟して、被ぐべき衣米味噌樣の物まで、隣なる村へ在ける小父にあづけ置、いかに乏しき事有りても、其代りをそなへざれば、これを用ひず。去程に其期に臨みては、終を送る心遣ひなし。母なくなりて、姉を母の如くいとおしみつかへけり。あまり貧しければ、姉袖乞せんなど思ひ立けれど、貞平其氣色見て、殊の外なげき、手をひろげてさへぎりとゞめ、涙をながし、袖をひかへ、己働き養はんずる眞似をして出さず。ひそかに聞けば、姉のなからんの後のそなへも、母のそなへの如くいとなみつる由なり。去年酉の夏、孝狀國の守にもきこえ、褒美なさしめ給ひける。貞平痛く悅べる氣色して拜納し、是にて母の石碑建なん事をはかる。口ものいはざれば、情もるゝに由なしといへども、心にいかばかりか、君の賜を榮とも思ひぬらん。推はかられて哀なり。むかし子路の賢を以ても、親につかふる事の思ふ儘ならざる事を、孔子に對して、いたましきかな貧しき事、生けるには以て養をなす事なく死せるには以て禮をなしがたしとて歎けり、かくばかり貧しきが中にも、廉恥の志たゆまず、親に孝に姉に友なる事、松の綠の霜雪に色かへぬ心地して、我同盟の人に告げ、其涸轍の難を救はん事をこひ願ふ。其おもむき左の如し。

人と禽獸との相さる事、いくばくもなし。只慈愛廉恥の心をうしなふと、失なはざるとの間なり。慈愛廉恥、即仁義の心也。この心を存する時は、子としては孝に、臣としては忠に、父としては慈に、君としては惠に、衆にあつくは爭はず。若此心を失ふ時は、子としては不孝に、臣と

しては不忠に、父としては不慈に、君としては、下を惠むの志なく、衆にあつてはもとよりそむく。それ生を惜しみ、死を恐れ、親子の恩愛、夫婦の情慾、生としいけるものこれなきはなし。されどこれを人にたくらぶるに、只愛を推し、恥をしるの心こそ、彼になくして、我に有するものならめ。其禽獸になくして、人のみ獨有するものをもちながら、其心にすさみなば、己自禽獸の域におちいるともいふべし。されば古人の言にも、園林雖好主人之心則荒むといへり。いかに衣服うつくしく着なし、居宅結構をつくせりとも、心の底の塵はらはざらんには、いかばかり心おとりせらるらん。此者かく困苦の内にありといへども、人に乞ひ求むるの心なし。其操のたてばなり。されば世の人を觀るに、爵位のすゝまん事を願ひ、福澤しげからん事を求むる故に、肩をそびやかして、人にこびへつらひ、又は己を利せんとて、人を苦しめ、道ならず財寶を積て、外はいかめしく晴がましき樣なるも、いかでこの男の心の隈なく照る月の秋の夜のいさぎよきが如くなるには及ぶべき。されば孝は百行の本といへり。此者もとより不具の身なれば、賢き聖の敎きけるにもあらず、禮に親の喪を執るに、水漿口にいらざる事三日とあり。己孝心の厚ければ、自然と其本文にもかなふなるべし。此男の髮鬅鬙として、藍縷うちき、いとあはれなるさまなるも、内には聖賢にも恥ざる心抱けり。人もし此心にのつとらば、官に臨みては貪らず、孝悌忠信の基も立、禮義廉恥の心も生じ、文のはしくれにてものぞき見るものゝ、一文不通の人に及ばざるは、憤激勉勵の始ともなりぬべし。しからば少しく己が慈愛の心をひらき、力を合せて其孝思をもたすけよと、同盟の人にすゝめ、同盟ならずとも、これをあはれとも、とめん人は、同じ志をはこべかしと、其行狀をしるし

て、此人の志をも助よかしと、つげ侍る事しかり。安永戊戌五月日。

其後その志を感じ、遠近の贈り物多く集れり。殊に久留島候の上大夫吉澄氏へいかゞしてつたへけん、此記いたりて、方金二個賜りぬ。野人の榮、何かこれに勝るべき。

梅園拾葉卷之上終

梅園拾葉卷之中

目錄

梅園拾葉卷之中

豐後　三浦晉　安貞　著
加藝修　子睦　輯

子嗣の辨

人家不幸にして子なき時、弟あれば其弟を子とし、孫あれば其孫を子とし、女子あれば婿をとりて其家を繼しめ、猶なき時は異姓にもとめ、其家の絕ざれば、其家の老や幼き輩も是に手より、老はやすく終をとり、幼は孤とならずしてひとゝなれるなり。もろこしの法は其血脈をおもんずる事にて、同族までに養ふべきものなければ、其家は斷絕する事なり。女子は有ても家督とせざる風なり。されども他族より養ふ事も絕てなきといふにはあらず。さるを贅婿といへり。贅はこぶといふ字にて、こぶは身の外に身の樣なる肉を結べるものゆゑに、これより轉じていへると見えたり。戰國の時の淳于髡もその人なり。漢書賈誼傳かに、家貧しく子衆ければ、出て贅すといふ語ありし樣に覺ゆ。又あの方の宦官といふものは、陰をたちて君につかふるもの故に子なし。是等又人の子を養ひて家を讓る。魏の曹操などいへるも、かゝるものゝ末なり。右のごとく、もろこしにては、女子ありてだに、其家はつづかずとする風ゆゑに、贅婿は人賤しむ事と見えたり。我國の風は、是には異なる事あり。帝統の如きは格別の事にして、其人ならずして繼べき樣なし。末の人に至りては、已事を得ざる日は、他族をも養ふなり。法は人の立たるものにして、風は其國のならはしなり。男女は人の陰陽にして、男は家に居て、他族の女子をむかへて配偶し、女子は父の家を出て、他族に嫁し、其家を家とする事、天地の條理なればとかくいふべき事なし。されども不幸にして、男子なきにあひては、女子とても父母の血脈に相違なけれ

ば、女子は家を續べからずといふも、人の立たる法なり。女子も其家を續べしと立たるも。人の法なり。男子あらんには男子家を有すべし。梅の條も接けば桃の木にもつぎ、橘の條も接けば柚の木にもつぐよりして見れば、天地に此理なきにしもあらず。さあれば男子なからん日、女子はありても斷絕と同じと立たるも、畢竟隘なる說なり。今の學者、からの書に見なれ、からの教にあはざる事をば疑ひあやしむも、學習の蔽なるべし。徂徠諸侯の國の事を論じて、子なき時は天こをれ絕なれば、國除すべしといへり。熊澤子は人は盡天地の子なり、他族もつぐべしといへり。名分にをゐては、徂徠の說正しき樣なれども、今一國の衆、その君により、老を養ひ、孤をめぐみ、妻子從類を扶助するもの幾ぞやそれを名分に拘り、人の父母妻子を凍餓して、溝壑に轉せしむ、天地生生の德に負く、達者の見にあらず。もろこしの事はいざ知らず。我國のならはしより、今の人情に考へ、天地生物の德におし本づけてこれを見るに、なるべき程は、同族親戚に求め、もとめて得ずんば他に求むるも苦しからじ。熊澤子人は悉天地の子なりと觀たるも、已事を得ざるの上の達見なり。本邦にて、養子の始をいはゞ、太神宮素盞鳴尊の御子天忍穗耳尊を養ひ、天津日嗣となさしめ給ひしぞ、其始なるべからん。女子にして統をたれ給ひしは、是又太神宮を始とし奉り、推古、欽明の御子として、崇峻帝の讓をうけ給ひ、元正天武の御孫として、文武の統を嗣給ひし類、その例多し。下つかたにもむかしさぞ是等に類せる事も多かりしならん。鎌倉の頃、北條政事を沙汰せしには、專女子父の家をつぐ例も多かりし事なり。さて我百歲の後、託すべき子なければ、我子ならぬ人を養ひて子とする事なり、其子とするにつきてはさま〳〵の難義あり。難義といへるは、譬ば伯

兄なる人に子なく、其仲弟を養ひて子とせんに、猶叔季の弟あり、己兄の子となれば、叔季の弟、其日より席を改め、嚴然として、叔父季父の位に居其兄退ひて姪の禮をとるべきや。又孫二人あらんに、弟たるもの故ありて重を承けて、祖父の後たらんに、其兄をして從子の列につかしむべきや。又己女子あり、他より一人を養ひ得て、偶配せんに、子といへば、同胞相配するに似たり、婿といへば、他族の稱なり。婿養子といへるは、子なきにより、引とりて子として家を讓れるとしたるなるべし。されども、婿といへば子にあらず。子といへば婿とへだてあり。名稱いづれにも穩ならず。此頃或人の問けるは、こゝに人あらんに、其家あるじなくなり、おさなきむすめのみひとりあらんに、配偶すべきとて、わきよりひとりむかへ置てんもの、いく程なく身まかり、あとつぐべき人なくてやみがたしとて、又他の子求めて、其家の後と定めなんに、さきの死せるものゝ跡なれば子なり。子なれば其幼き女子は母の列なり、其おさなきを他に嫁せんには血脈をたつなり、其死せるを父とせざらんには、其鬼をして祭をうくる處なからしめん、かゝらんかたにゆきなんずる人は、いかゞなづけ、いかゞ處して、義理に害なからんかとなり。晋こたへける樣は、是等は誠に世の難義とする處なり。我を以てこれを見れば、これ難義にあらず。世に名稱の明ならざるより起れるなり。其所謂名稱とは、人の倫理、子といふあり、嗣といふあり。子嗣の辨明ならず。此難義となれる也。それ子は父の後を續ぐものなれば、父の嗣なり。嗣は子なきによりてあるものなれば、子と差別あり。さて子は嗣なりといふ内にも、世の中の事、常あり、變ある習なれば、嫡長必其家をつぐにもあらず。嫡長にして其家をつげば、嫡長即其家の嗣なり。叔季にして其家をつげば、叔季即其嗣な

り。嫡長繼べからずして、庶子つぐ事あれば、庶子即父の嗣なり。然れば子即嗣なりといへども、嗣誰と定れる事なければ、子の父に嗣ぐも亦差別あり。右いへる如く、子なくて嗣を求むれば、其嗣は子なきに起る事なれば、子と稱を同じふせざる事分明なり。故に嗣伯仲叔季庶に求め、兄弟にもとめ、從兄弟從子にもとめ、孫に求め、親族に得ざれば、他族にも求むる也。彼方にては弟つぐをば及ぶといふ。及ぶといへば、やはり弟兄の家督をつぐ事にして、其父母をば同じ父母とすると見えたり。是を兄死弟及ぶといへり。殷の世には、大抵兄より位をば次第して弟に及ぼせしなり。さる程に、微子は殷の紂王の兄なり。周に歸して宋國を賜りし後、その國を弟微仲に讓りしも、殷人には珍しき事にもあらず。天下も夏の禹王より後は、子に讓り嗣しむるといふ法たちたれども、五帝の頃は、天下は天下の天下にして、一人の天下にあらずとして、同族の内にて賢德ある人を撰み拔きて、是に位を讓れり。此故に舜は堯の嗣にして、堯の子にあらず。禹は舜の嗣にして、舜の子にあらず。嗣の字は、虞書に、舜讓于德弗嗣として、下に正月上日受終于文祖とうけたれば、其終をうくるはつげるなり。是嗣の出處也。謹んで本邦帝統の序をいふに、神武天皇は鸕鷀草葺不合尊の御四男にましませしかども、葺不合尊の御跡をば、此帝つぎ給ひ、御子綏靖天皇も、御兄神八井耳手研耳の二尊を置き、神武の嗣となり給へり。白髮帝は雄略の御子にて、雄略帝は允恭帝の御子也。白髮帝崩じ給ひ、御嗣なかりければ、履仲帝の御孫弘斗億斗の二君を求め得たり。履仲帝は允恭帝の御兄にして、共に仁德帝の御子なれば、此二君は白髮帝の再從兄弟にてましませしが、二君共に位を讓りあひ給ひ、弟億斗の君讓りまけさせ給ひ、帝位につき給ふ。是顯宗天皇也。然りしか

ば、兄弘斗の君儲の宮にまし〳〵顯宗ほどなくかくれ給ひ、その跡を嗣給へり。皇極帝位を孝德帝に讓り給ひ、孝德帝崩御の後、再度位をふませ給ひしが、重祚前の位と同じふしがたきゆゑにや、御一人の御身なれども、謚號も前には皇極と號し奉り、後には齊明と申し奉り、世次も三十六代皇極天皇、三十七代孝德天皇、三十八代齊明天皇と數へ奉れば、始は孝德皇極帝に嗣給ひ、後には齊明孝德帝に嗣給ひし事分明なり。已に後の日嗣となり給ひ、さきの帝かくれ給はん日は、四海父母をうしなひ奉る事、祖宗に對し、天下に對し、御一人のわたくし事にあらざれば、諒闇の儀式、例の如くにぞとり行ひ給ひけん。しかれば嗣に父子の親み有て、兄も弟に繼べく、子も母に讓るべき理にて、嗣子分明に別也此故に北畠親房の神皇正統記にも、世と代とを分ちてしるしたる例もあり。これに准して見る時は末〳〵にいたりても其家督たらん人は、子にあらざればあたはずと定めしは、いにしへの道にはあらじとおもはる。まして其家にあらん女子は、猶いとけなき打たれ髮ならんものならば、此子年長じたらん上、媒たちて後配偶すべきなれば、其子の不信不貞なし。禮典に、婚をいるゝの事ありても、故あればかへすといふ事あり。一旦婚姻の約ありては、婚禮なくとも其節を守るべしといへる本文は見あたり侍らず。さて畏こくも、天すべらぎの御事を、賤しき末〳〵の事に引奉るは、はゞかり多かる事なれども、賢き文の中にも、君子動而世爲天下道、行而世爲天下法、言而世爲天下則、とありて、君子の德を風とし、小人の德を草とする事なれば、上の跡をたれ給ふ處、四海の效ひ法る事、もとより下の道なり。僭上とはいふべからずと、こたへける。又其人の問けるは、子と嗣とその隔てあり。父と嗣を養ふ人といかん。曰古人我子を同姓に

遺はしては、かれに養父といひ、これに本生父といへり。嗣たらん人の爲に、兄にもせよ、小父にもせよ、祖父或は他人にもせよ、父の位にある人なり。此故に嗣と子と別ありといへども、畢竟これは子の中にその別を論ずる事にて、嗣即子の位なれば、其義甚したしみ即父子なり。古人養父嗣父の名あり、相通ずべしといへども、嗣父の稱尤正し。父といへば、義といひしたしみといひ、實の父子にことなるべからず已に嗣の父といへば、兄を兄とし、小父を小父とし、祖父を祖父とし、他族を他族とするに妨なし天地は有のまゝなる物なり。有のまゝにすればむづかしからず。しかるを人の智惠にて有のまゝに細工をまじゆるに、いとゞむづかしく相なるなり。此一事に限れる事にもあらず。しからば養子といへる名はあたるべからざるか。いな、子なきによりて、養ひて子とすれば、養子即嗣なり。實の子なれば、養の字なし。唯子といふ字になづみて、我家督を譲るものは是即子なりといへるやまひあり。唯嗣といへらんが勝れりとかたりし。其あらましを遺忘にもそなへよと、書つゞけ、ひそかに自子嗣の辨と名づけ、其人に送り侍る事しかり。安永戊戌七月。

櫻島火變の説

ことし安永己亥九月廿九日の夜より翌十月朔日、南にあたつて雷の如くにして雷にあらず、天鳴ともいふべくして然にあらず、石火矢などつるべ放つ樣に聞ゆ。肥州阿蘇山燒るかなどいへり。程へてきくに、薩摩麑島より南にあたり、櫻島とてめぐり十里もある樣なる島あり。晝夜八九十度も地震り南北の端より火起り、大石を飛すこと六七里の外に及び、風起り黑煙東南に吹覆ひ、人死傷其數いまだしれずといへり。門生其故を問にこたへける樣、去年以來伊豆の大島などもやくるよし沙汰せ

り。是は櫻島よりは火勢ゆるく久しき樣にきけり。是誠に稀代の變なり。されども天地より見れば常理なり。一體地といふ物は、水燥のふたつの氣にて、絪縕造化の用をなすものなり。地の中は菌瓣蜂窠の如しと、古人もいひて、菌のうちの理の如く、蜂の窠のあなの如く、蠹ばみたる木の如く、始終あちこちと穴あるものなり。燥とは地の氣なり。故に體はなし。水の對偶のものなり。我輩かくのごとくねつおきつ、噓噏を通ずる處も、其氣のうちなり。地中すべて此氣と水とふたつあり。水は高きに結び、卑き處に化する故、地上にうかみ、燥は地下に生じ、天中に化するもの故よく地中に伏す。水は川谷を道路として、處によりては伏流するもあり。燥は地中の穴を往來して鬱してあつまれば火となる。其氣穴山岳の間に通ずれば風となるものを風穴とし、火出るものを火穴とし、又時あつて雲霧を起す處ともなる事、皆燥

氣の變なり、燥氣の火となるは、水の氷となると同じ理にて、冬の雨露をむすびて霜雪となる子、夏の溫熱を鬱して雷電となるも一つ事なり。肥後の阿蘇、信濃の淺間などいふの、其氣の外にぬくるなり。其處は地膩とて、硫黃地溲樣の地あぶらの結ぶ處にあり。さる處は冷水の中にも火もゆるなり。其外平俗に地獄といふも、ひとつものにして、溫湯といふは、其氣脈の上を水の通る所にて、水の煖まりたる也。さる故に其處を流れ過れば、本性に復してひゆるなり。海の底にも其氣通ずる處いくつとはなくあり。此うちに右の陽氣伏し月に厭れば、其氣わきへ行ゆゑ潮かれ、月側なれば陽氣下よりおこり水に入て水泝る也。水本性は下るものなり。陽氣そのうちに入れば、釜の內の水のわく如くのぼりゆくなり。されどその陽氣は客氣ゆゑに、外にぬけ出ればもとの水となり、又流れて下るなり。右の燥氣地中の空穴に

貯へ硫黃等の物を釀し、一時に欝發を致すなり。寶永の頃富士山のやけしも同じ事なり。其内此度の如きは尤大變とみえたり。地震は其欝氣發する勢なり。右の陽氣地に欝し、地面を陰に閉られ、無理に其處へ發すれば地震なり。天間の陰氣に閉らるれば雷電なり。秋の初いなずまとてひかるも、夏の地面の陽氣のこれるを、秋陰の氣に粛せらるゝ故に發して散ずるなり。雷の微にして聲なきなり。天鳴とて天のなるも雷の如くして聲ある也。此節櫻島の火も雷と同一理としるべし。傳へ聞に、鹿島は北極の出地三十一度位のよし也。此地は三十五度餘りなり。此處によくその音の聞へたれば、中國あたりにも定めて聞けん。雷百里をうごかすとは、唐のみちのりにして、日本の十里にもとゞかぬことなり。誠に雷の音ほどたかきものはなき樣なれども、十里にみたず。此節の鳴動は百里にも及ぬれば、物の音にかゝる

大なるものはあるまじく覺ゆる也。水の流れ、火の起り、土地の出沒するも、世界にたへぬことにして、もろこしの碣石といふは、世に類なき大石にして、むかしは陸なりしが、今は海の中に島の樣に見ゆると聞り。からの西南のはての海に、萬里といひて、東西は二三百里、南北は七八百里も砂石のみ茫々としてあり。そのあたりはことの外嶕多く、阿蘭陀船など深くつゝしむ所なり。是むかしは國にてありしが、海に沈みしといゝつたへたり。歷史などにも地陷るといふ事多し。空穴ひしぐる故と見えたり。是は遠き事なれば、定かにもさしがたし。出雲の國秋鹿の郡の北なる海黑島といふ有しが、天慶三年十二月上旬、俄に落いりて、今は其跡とて大石など殘れる事、著聞集にも見えたり。又天武天皇の十三年地震あり。伊豫の溫泉つき埋め、土佐の田苑五十餘萬頃沒して海となり、天おびたゞしく鳴り、伊豆の島の西北

三百餘丈の高山出來たる事、日本紀にも見えたり。さつまあたりに此度の樣の變にて山出來たる事、同じ紀かにある樣にも覺へたれども詳記せず。ちかく慶長元年の七月、大地震速見高碕山なども石崩れ落ち、火出たるよし、府内の記事に見えたり。この時かのあたり人七百餘も損じたりとあり。寛永の頃、八丈が島のあたり一島を湧出し、年號をとりて寛永島ともいひ、寶永の頃、富士に火起りて一丘を生じ、寶永山ともいふ。水火は時としてかはる物なれば、むかしは富士の烟とよみしも、今はたゝずなり、下野むろのやしまの煙なども、今はたへぬ。越後蒲原郡如法寺といへるには、正保二年三月よりあつくなき火燃出て、百有餘年をへて今にたえず。是等の事を思ひ合せ、水火の用の工夫あるべきなり。霜月望。

　重記火變

其後薩藩の知學事山本正誼の櫻島炎上の記を得てよむに、安永八年己亥九月廿九日夜より十月朔日にいたり、薩城及東南北數十里の間、地震ふ事しきりなり。其日未の刻を過て、城下東方對岸櫻島の上火起る。火もゆれば地震ひ、地ふるへば火もえ、聲雷よりもとゞろき、光電よりもかゞやく。火騰る事數丈、石を激しく空中に相擊つ。五日を經て其勢漸く衰ふ。されども或は三四時をわたり、あるひは一二日を隔て、伏發常ならず。また東北五六里の海底より炎上る。其響隱々として、日夜やまず。既にして海上一洲を出す。水を出ること二丈餘、周り半里なるべし。一月を經て、變動の勢やうやくふるきに復す。こゝにおひて櫻島の形勢、高低參差舊觀にあらず。石つむもの、五六丈に及ぶ有。灰埋めて二三十尋にいたるあり。地の下風にあるものは沙石ひるが如し。藩は上風にあるを以て甚しきにいたらず。飛鳥走獸は砂石にあたり、魚鼈は海底の炎に傷らる。人この災

にかゝるもの百四十有四人。島に村すべて十八あり。火の起る事古里村有根村瀬戸村黒神村高免村の上にあたる。是を以てこれらの村民死するもの多し。麋鹿或は海をしのぎて吉野といふにいたるものありといへり。さきに失記する者、續日本紀曰、廢帝天平寶字八年十二月、西方有聲似雷非雷、時當大隅薩摩兩國之堺、烟雲晦冥、奔雷去來、七日之後乃天晴、於麑島信爾村之海、沙石自聚化成三島、炎氣露見、有如治鑄之爲形勢、相連望似四阿之屋、爲島被埋者、民屋六十二區、口八十餘人、とあり。薩州にても其地今は定かならざるにや。正誼もこの島なるべしといへり。その後文明八年に焼たるよし、福昌寺の舊記に見えたりとあり。その遺跡炎崎とてあるとなん我右火變の圖を得て後に出す。正誼の記に公命して畫のみる所、夜のみる所の二圖を畫しむとあり予が得るところは、いかなる人の圖せるものにやしらず。また傳へきゝけるやうは、火變の前猪鹿狸狐やうのもの、盡く山林を出て村落に群り、田圃をあらしたりと。火氣下にうごきて、起居安からざりしゆゑなるべし。

答多賀墨卿

一混淪鬱渟の義御尋御座候夫人は天地を宅とし居るものに候へば天地は學者の最先講ずべき事に御座候尤天文地理天行の推歩は西學入して段段精密にいたり候へ共それはそれ切にして天地の條理にいたりては今に徹底と存する人も不承候かく廣き世の中にかく悠久の年月をかさねかく數限なき人の思慮を費して日夜に示して隱すことなき天地を何故に看得る人のなきとなれば生れて智なき始より只見なれ聞馴れ觸なれ何となしに癖つきて是が己が泥みとなり物を怪しみいぶかる心萌さず候泥みとは所執の念にして佛氏にいはゆる習氣にて候習氣とれ不

中候事は何分心のはたらき出來らず候阿難はさとられしかども前生猴にて有しゆゑ猴の習氣やまざりしと中候是よきたとへに候とかく人は人の心を以て物を思惟分別する故に人を執することやみがたく古今明哲の輩もこの習氣になやまされ人を以て天地萬物をぬりまはし達觀の眼は開きがたく候其習氣とは人はゆく事をば足にてなし捋る事をば手にてなすゆゑ運歩作用に手足の習氣これありさる程に蛇の足なく魚の手なきどふやら不自由に思はれ候天は足なくして日夜にめぐり造花は手なくして花をさかせ子を給はせ魚をもつくり鳥をもつくり出し候もし己に執する處有候へば其運轉造化甚あやしむべき事に候あやしむべき事にしてあやしむ人もなく候は是も朝暮に見なれ空空として貪着なしに打過るにて候物の上よりして見る時は天地も一物にして水火も各一物草木鳥獸も各一物我となり人となるも各一物にて候それを人には人癖つき候て我にあるものを推して他を觀候なづみやみがたく候夫故人の癖には何にても人になして見もし思ひもし候子ども遊びの繪本に鼠の嫁入ばけ物づくしなどいふあるをみるに其鼠を鼠のまゝにをき候へば鼠本來の面目に候を其鼠を悉く人になし聟殿は社袴大小嫁子は打かけ綿帽子のり物つらせ徒士若黨すべて人の樣に成し候又ばけ物の本を見るに傘の茶臼にばけ箒の手桶に變りたる圖はなし只あるとあらゆる物目鼻手足出來りとかく人の樣なる物に化ざるはなし涅槃像の圖を見るに其龍王といふ物は衣冠正しき人體にてその本體の龍形は火事頭巾かづける樣に畫がきなしぬかゝる心を以て天地を思推する程に天には上帝地には堅牢風の神鳴神なんど形はさもいやらしく描きぬれども足を以

て身を運び手を以て技を出すさる故に風は嚢に蓄はへ雷は大皷に聲をくもし誠に嚢あらば何を以て製するやもし誠に大皷あらば何の皮にてはる事にやいとあやしもしかからましかば天も足なくてはゆかれまじ造化も手なくては細工出來まじ猶ちかきに引つけていはばすべて動物は牝牡有りて草木には牝牡なし牝牡なくて生生せざるは動物の習にして牝牡なくても生生に事缺ざるは草木の習なり己が習ひをもちて己にあらざる物に推さばいかで其理に通ずべき又譬をとりていはんに火に意ありて水を思はんに水いかがして物を燒かん水いかがして物を燥かす覽と己がかたにある物のみ推してかれになき所にもとめ水も亦意ありて水にある物を火に求めば其智力を盡し其生涯を窮めたりとも知るに益はなかるべし約をいるる事牖よりすといふ事も候へば最さとしやすき物がたり又ひとつ申べしむかし何れの帝にてかおはしましけん堺によき藤あるよしきこし召れ勅して九重の内に移し栽しめ給ひしに帝ある夜の御夢にいときよらかなる女の打しほれける氣色して

思ひきや堺の浦の藤浪の

都のまつにかかるべしとは

と打ずんずると御覽じて夢さめ給ひ花も故郷や思ふとて二度堺に返し給ひしとぞ、これ等の物がたりは世に多き事なり草木意なし夢入るべき物にあらず別れては馴れし故郷をしたひ過てはこしかたをおもふは人の心にして我心の動く處めで給ふ花に感じ常になれてもて遊び給ふ歌をなしける物にして藤のあづかる處にあらずあづかる所なき花にも我情態をこれに移さば花もまた人なり古來明哲の輩も品は異なる事はあれども此病に座せられ人の境に居て人を離るることを能はず目の翳障をなすなりさる故になれ癖

に貪着なく是がなづみとなりて物をあやしみいぶかる心なき故に一生を醒るがごとく醉がごとくにして終るなりさらば物を怪しといぶかる心なくばなきにしてやむかとおもへばさにもあらず神鳴り地震るゝたりといへば人ごとに頸を撚りいかなる譯にやといひののしる我よりして是を觀ればその雷地震をあやしむこそあやしけれ故いかんとなれば其人他動くを怪しみて地の動かざる故を求めず雷鳴る所を疑ひて鳴らざる所をたづねず是盔盔の見ならずや此故に皆人のしれたる事とおもふは生れて智の萠さざる始より見なれ聞きなれ觸れなれたる癖つきて其知れたると思ふは慣れ癖のつきたる事なり我人に石を手にもちて手を放せば地に落るはいかなる故ぞとゝへばそれは重きによりて下に落る也知れたる事也といふ是も其人知りて知れたる事といふにはあらずなれ

くせにて貪着なしにしれたりとおもふなり然ればば是醒たるがごとく醉たるが如しといはんも我過言にはあらざるべし此故に其うたがひあやしむべきは變にあらずして常の事也孔子の生を知らずいづくんぞ死をしらんとおしへ給ふもこの事なり人の死後はいかがなるらんいかがある覽と怪しめども見在かくしてをる事も悉皆しれざる事なり俗語にも前の瀨わたりて後の瀨とこそいへしかるに世の人前の瀨を置き後の瀨の事のみおもふ我怪しむ所なりしかれば石物いふといふとも夫より己が物いふを怪しむべし枯木に花咲たりといふとも先生木に花さく故をたづぬべしかく物に不審の念をさしはさまば月日のゆきかへり造化の推遷るは更にして己が有と占め置ける目のみへ耳のきこゆるも態をなす手足も物をおもふ心もひとつとして合點ゆきたる事はあるまじく候そ

を世の人いかがすますとなれば筈といふものをこしらへてこれにかけてしまふ也其筈とは目は見ゆる筈耳は聞ゆる筈重き物は沈む筈かろき物は浮ぶ筈是はしれたる事なりとすますなり然れば其次手に雷は鳴る筈にて鳴り地震は動く筈にて動き枯木に花さかんもさけばさく筈石の物いはんもいへばいふ筈とすまし度物なり又少し書讀るなどいふ人は雷は陰陽の闘などいひて人をさとすなり其人に陰陽といふものをとへばしらず爰において我その智と愚とを辨ずる事能はずこの故に智を天地に達せんとならば雷をあやしみ地震をいぶかる心を手がかりとして此天地をくるめて一大疑團となしたき物に候猛獸まさに摶んとすれば必形を伏す鷙鳥まさに擊んとすれば必翼を歛むとも申けるとき事をせんとてはふかくとどまる事をなす事に候弓をひくにも矢の弓手に遠くゆくは馬手にふかく引ゆへなり疑ひ多き人さとる事とし疑なき人のさとる事鈍きは弓に滿を持せずして矢を放てるがごとし此故に世の人の天地をしらざるは慣れ癖に貪着なく習氣を秘藏する故にて候是に因て天地を達觀せんと思召て平生慣れて常とする事を疑の初門とし觸るる事悉御不審を起され我かくおもひかくうたがふものもと人なれば人の執氣ある處を御かへり見有べく候世に所謂天地に通ずるとは天象地理を記し日月星辰の運行を推步する人の事に候なる程其學を專門につとむる人は思思の念其學精密にも至るべく候へども前段に申せしごとくそれはそれ切にて日は何故に一歲に天を一周し天は何ゆゑ一日に地を一周し緯行は何故一度は南し一たびは北するとうら返し候へば是も只然あるによりて然かそゆるのみに候へば達觀とは申間敷候諸書籍と申候物

もむかしの人の面面の見たる所を書つけたる物にて造物者の書たる物にてなく候へば其人の通じたるかたは明にも候へ其塞がるかたの候てたとへば人の物いふには通じ候へども臭をかぐ事は塞がりて犬猫に劣り候樣の物に御座候されどもむかしより書にても著はし候程の人はみな常の人には等を躐へたる人に候へば最初書によるもよく候へども天地を得と臍の下に入れて書たる書もなく候へば執する所ありて徴を正にとらざれば是又大習氣の種子に候書を大習氣の種子と申を激論の樣にも思しめすべく候へども目のあたりある事にて申候はんに人生れて嬰孩の時猶天然の眞を失せず其子を一人は淨門の僧となし一人は日蓮下の僧となし各其師に從つて學ぶ事十年歸り會して各所見を呈せんに十年の習氣氷炭相反し死すといへども其守をかへず嬰孩天然の眞をもとむともいかでか再度かへる事を得ん此故に書に因て自得是即徹底造物起り來て自談ずとも此外あるべからずとおもふとも是即習氣人に憑つてしからしむるかはしるべからず候此故に門を尋ねて其主人にあひ其主人に請ふて己が耳目を具する者をば我是を風化の人とて從前の事跡を考へ荒外の地理など察し候樣の事には古今の變化沿革東西の遠近離屬その外百爾の方法我見聞の及ばざる所をのせ世世の人の發明をもあわせ照さんには書まことに主に候へども天地はむかし新しき天也にもあらず今古き天地にもあらずいつもかはらぬ無鹽にして我爐中の火即萬里の外の火にして我盆中の水即千古の前の水なれば此天地をしり此水火をしらんとならば先此無鹽に試みて傍書籍に參考しあはざる處を置きあふ處をとるべし此故に天地達觀の位には聖人と稱し佛陀と號する

ももとより人なれば畢竟我講求討論の友にして師とするものは天地なり天地を師とする時は古の聖賢より諸子百家今日蒭蕘狂夫の言葉にいたる迄等の隔てはあるべけれどもともに文を以て友を會する位にして取舍は各あるべき事に候天地は廣き量にて候程にいれざるものなく候容れざる者なく候程に達觀の位に學流の門戸なく候前かた或人來りて我已に此天地を呑却すといひし程に天地大なり天地を呑却する人幾百千萬億をか容るらんと謂て咲ひし事ありいかに廣大精微を說き出し候ても天地にある廣大精微に候いかに超越不群の人に候ても此天地の內に立ち此天地の內をゆく人に候其達觀する處の道は則條理にて條理の訣は反觀合一捨心之所執依徵於正のみに候捨心之所執とは習氣を離るる事にして依徵於正とは徵と見えながら徵にあらざる徵ありたとへば日

月は慥に西にゆくの徵あれども其實は東に行く水は正しく火の讎と見ゆれども火は水によつてなるが如し天地の道は陰陽にして陰陽の體は對して相反する反するに因て一に合す天地のなる處なり反して一なるものあるによつて我これを反して觀合せて觀て其本然を求むるにて候此故に條理は則一有二二開一二なるが故に粲立して條理を示し一なるが故に混成して罅縫を越沒す反觀合一は則これを繹ぬるの術にして反觀合一する事能はざれば陰陽の面目をみる事能はず未陰陽の面目を見る事能はずんば博識多覽聰明穎悟の人といふとも天地の室をうかがひ見ることは得あるまじく候此故に條理を天門の鎖鑰とも申候條はもと木のゑだにして理は其すぢ也是を木に就ていふに其一本の身木根を有し標を有し根には次第に根をわかち標には次第に標をわかつ其分るる內子

細にみればすぢ有其すぢといふもの何の爲のすぢなれば世其筋に從つて運び形其氣の運びによつて成るにて候是を一つ水に移していはんに田に水を灌がんとしては必溝を拵らゆる也其溝即水の理也理のわかるる處條わかれ千條萬枝になりしかも其理たち候へば數限りなき田地にても水其理に從ひ灌ぐによりある程の田の稻の數數葉の末穎の先までも從ひ達し申候此故に天氣東西に轉じ日月順逆の行をなすも川流れ潮泝るも鳶飛び魚躍るも氣理に從つて運ぶ事に候試に何なりとも草木の葉をとりて御覽候べし大理小理をさき眼精の及ばざる迄も理はしき候て氣運び己己が形をなし候此故に理といふ物は天にも地にも山にも水にも乃至鳥獸魚鼈蟲豸菌寓の類にも形は氣の運ぶに成り候へば氣運ぶべき理なきはなく候此故に條理の理は古人の說ける理も其內の事には候へども死活の隔ある事に候人身の脈といへるも即此理にして他物にはあらず理を以て形はなるものなれば美醜長短も皆此理のなす處なりされど是も慣れて繹ぬる貪着なければ人の體のひくつきなりと濟し其上は秦越人王叔和の言を造物者の直決の如く是を金科玉條となして偶疑をきざしても小智は菩提のさまたげとぞ見し一生明堂の蒙茸に取つき候も本意なき事に候人の經脈みな一身に氣血を運ぶ道路にして唯其間氣質の分あり古人經脈の名目をば設けながら其說は分明なる事も不承是又慣るるに安んじ書籍の習氣を執し徵に正による事能はず其造言の始の人を神聖とたてこれを造物者の位に置き候是即天地を師とせず人を師とするの弊にて御座候天地を師と致候は反觀の工夫にて反觀の工夫熟し候へば天地になき事はしらず幽と隔て玄とふかく候とも天地にあ

る程の事は推しいたるべき事に候條理は則物中に具する性體にして性もと一體をひらくに至つては一陽一陰相反す故に一は二を有し二は一を開た故に一即二にして二は則萬物の位一は則統べざる所なきの位なり初心の間は只仰いて蒼蒼として碧瑠璃のごとくなるものを見て天とおもひ俯して磅礴として土石の塡ことるを見て地を談じ候是もさる事には候へども是は至て麁底の天地にて此位より天地を窺ひ候へば所謂天文地理運行の推步にとどまり候てある物を數へ候に過ず候天地とはもと氣物の成名にして氣天を成し物地を成す物に候へば一物あれば一天地萬物あれば萬天地古人の所謂物物各具一太極にて恒河沙の世界と申候へば事事敷多かる樣にきこへ候へ共恒河乃沙の內已に恒河沙の世界をそなへ候へば天地は幾恒河沙をかさねてもつくす事にあらず是即二の位にて候是を二の位と申候は天地かくの如く紛紛擾擾として物多き樣に見へ候へども只かたちある物ひとつかたちなきもの一つ此外に何も物なく候其かたち有物を物と申かたちなき物を氣と申候かたちなき物は目にさへぎらず手にさはらず候程にむかしの人も心得違ひて虛空なり無なりとおもひ候勿論地の實に反して其體虛し地の質あるに反して質なく候へば天を質なき虛體の物と心得候へばよく候へどもさなくしてあながちに虛無虛空と心得候ては大なる間違に御座候もし其さす處の空無眞の空無に候はば日月星辰もかかる所なく我も物も居る處なかるべし日月星辰も已に其內にかかられ物も我も已に其內に遊ばるれば此虛體あるに相違はなしあるものをさして無といふ是顚倒の念ならずや此故に地は實にして體をなす實の體有て山原湖海これに列なり虛の

體あつて日月雲雨これに居るここにおいて精細によく思量すれば氣は實體の地中にも虛體の天中にも一杯に充塞して纎毫の罅障なし是を人の身の上にて申さんに此身は則實體の地にして溫動を以て立つの氣は則天なり溫動にかたちなければとて是をなきものといふべからず其溫動の精英即人の神にして名を分ち命ずればこれを心と名づくる也此故に此有體の身は則神の入物にして無體の神は畢竟物の命なり此故に氣聚まれば物結ぶ物結べば神立つ人は小物なり天地は大物なり小物も神と物とを以て成り大物も神と物とを以て成る一一粲立の手足よりしていふ時は天地の物は天地の物にして萬物の物は萬物の物なり天地の神は天地の神にして萬物の神は萬物の神なりここに一一剖析の理を考がふるにかく森羅萬象競立つ樣なれども資る所に變態ありて給する處に二つなし故に其森羅萬象同一神物を混成す是反して合一する處を觀る也何ゆゑに反して合一する處を觀るとなれば物一一となるかたち本來必和反す本來よく反する故に合すれば一つと成る是を人工の上にていへば柄と鑿となり柄の中高にさし出たるに反して鑿は中窪に落入るなり其凹凸に少しにても無理あれば或はきしみ或はくつときひしと合す反せざれば一を成さざるゆゑんなり此故に造物のたくみ反する時は條理粲立すれども合ふ時は混成して其縫目を見ず此故は神はかたちなうして活し物はかたち有つて立つかたちよく其神を容れて活し神よく其かたちに居て立つしからば神その狀いかがぞといへば唯活潑潑地俗にいはゆるひちひちなり條理の道次第に天地を剖析し剖析にしたがひて其反態も變化を盡し然して物の分るゝ處各各一神物を成立すれば其なりの

出來様と其ひちつきのし様とは千態萬貌異なれども火は火の體をなして火のひちつきをなし水は水の體をなして水のひちつきをなし魚鳥魚鳥の體にして魚鳥にひちつき天地天地の體にして天地にひちつく其ひちひちをさして欝渟といふ事にして混淪は則物立ちて見はるゝ貌なり古人はもと地の貌を磅礴といふに對して天の貌を混淪といひしなれども今こゝに混淪といふは天地をくるめて物となし神の欝渟に對して形容せる言葉なりさる程に各各成就の上にていへば蝦の小むづかしきかたちも蛞蝓の太平なるなりも皆己己の混淪なり混淪の上にていへば地は坱坱たる内に一點の中をなして居る者なり其一點小き事形容すべき物なし其一點よく地を載せ天をのせて撓まず中の一點小き事形容すべからずとは一點中に内なければなりもし僅にも内あれば至つて小き物に

あらず中の一點内なきが故に其外の大なる事外をなさず外をなさざるもの即無窮也こゝにおいて物其中の一點に巍乎として立無際涯にいたるもの是大物の混淪なり此故にとこはてもなき物をたててひちひちとする神を其内に活す是を神欝渟として活し物混淪として立つといひ小物皆己がかたちを此混淪にとり己が神を此欝渟に資りて天地の間にならひたち各各の作用をなすことなりさて右に蒼蒼として碧瑠璃のごとく磅礴として土石の塡てるは麁底の天地と申候半氣に精粗有て物を沒露致候先この精麁沒露の態を辨じてかく蒼蒼たるものを戴きかく磅礴たるものを踏むことも見え可申其精麁とは麁なる處の氣其體を沒すといへども猶其場所をもてり精しき所の氣は物の内に居て其場所をもたず場所をもつもたずといふことは先水入れにていはんに水入れを拵ゆる

始め先孔を二つあくる也其二つの孔の作用いかにとおもんみるに此水入れの量水壹升をいるるとみていまだ水をいれざる内に水壹升をいるる程の場此器の內にあり水なき內にも只空物にはあらずすなはち此沒體の氣を一盃充て居れりさる故に此器に水をいるる時には一方の孔より氣出づ水出る時には又一方の孔より氣入る是其場のしばらくも虛無にして居ることのならざればなり此故に地のあらざる所は天其場所をなす此場所ある故に日月も此內にかかり山川も此內に列なり風も此內に吹雨も此內に降りわれと物とも皆此內に遊ぶなりここにおいてかたちあるものを露體といひかたちなきものを沒體といふ其體を沒すといへども猶其場を有する者は廉中に天をなして精中よりこれをみれば其天猶地のごとくなり然して鬱渟の神にいたりては其場を占めず其場を占

めざる故に水成れば水鬱渟として活し火成れば火鬱渟として活す天地の大なるよりして散小の萬物にいたつて其物物に鬱渟たりこれ中庸にいはゆる物に體して遺さずといふ位也此故に鬱渟として活し此混淪を立るものは物に體して其體なし沒して天をなし露して地をなす物は畢竟地中の天地にして蒼蒼の天歷歷の曜块块たり無際涯に歸し一大結物の地にして鬱渟たる神の成れる天に有せらる故に天大地小と見る眼は天地を達觀する眼にあらずもしよく天地に達し條理に吐食ある事をしらば地なんぞ天より小ならん天又何ぞ地より大ならん此故に神物混成の處をみれば物よく宅をなして其鬱渟の神をいれ神よく活をなして其混淪の物をたつ只廉底にしてよく沒して虛の體をなし露して實の體をなし一大結物中に天地を開くも精廉並び分れて沒露並び立つ其沒する物

を天機とし其露するものを性體とす此性體といふは露して物を成すの性體にして性一體二といつて陰陽をたつる所の性體とは名同じうして差別あり天機は沒して天地をなし性體は露して天地を成す天は天地を宇宙になし機は天地を轉持になす成し得て未天地を物に露はさず體は虚實を以て天地をなし性は水火を以て天地をなし成し得て已天地を物に露はす體をあらはさざる物宅をなして露はるるもの其內に居る此天機性體の四つのものは棊盤の四つの脚のごとく一脚なく候ても餘の三脚自立事を得ず候此宇宙の字を古來古往今來を宙といひ天地四方を宇といふと解したり是にて大概すみ候へ共言の病有之候程に唯衮衮として通ずるを宙塊塊として塞がるを宇と御覽可被成候されば今布を織り候にも經と緯と合せざればならず家を立るにも箱をさすにも縱横の道具

なくしてはならず是經緯也何故に經緯なくては物ならざるなれば此世界もと經緯にて織たるもの故其間に成るもの其道によらざればならず候さる程に前つかた竹を網代に組たる團扇に一辭を請はれたる事有之時我

一直一圓一經一緯人造有資織諸元氣

と書て遣し候さる程に物ごとに經緯なきはなしちかく己が身にとりていへば此身緯となり此命經となるなり其古き解に言の病ありといふは大物にもと六つと定れる數もなく古往き今來るといふ言も是より己往をいひ遺せり先是を小物にこゝろみて漸くに推して經緯の大なる物を知り大なる經緯をしりて天地萬物經緯に織らるゝ事をしるべし其宇宙の面目を觀るには先この露體の天地水火を除きて其經緯をしるべし今日を閉て思惟を下さんにしばらくかりに此天地を掃却したりとも衮衮として通じて押移るの時

と塊塊として塞りて物を置く處は除き盡さざるべし衰衰とは水のひた流に流るる樣にいつより始るともいつに終るとも其端を見ざる貌にして塊塊とは日月星辰もなくふむべき地載くべき天を分たざれば指すべき東西南北たたず立べき上下もわかたざれども唯いづくを限ともしらざる貌なり押移るを通ずるといひあらぬ處なきを塞がるといふ塞がるとは充塞の塞にして窒塞の塞にあらず窒塞とはかけ樋など水の通ふべきがあり木の葉樣の物通ひを閉て水通はざる樣の事にして充塞はいづくまでも行わたりてひまなき事なり其衰衰として通ずる物時にして經となりゆく物みな是を通るによりて萬物の路となる其塊塊として塞がるもの處にして緯と成り居る者皆是に居るに因りて萬物の宅となる此故に日月此衰衰として經に通ずる時に刻みをつけて夜となり晝となり月となり歲となる天也此塊塊として塞がる處に位を定めて東となり西となり上となり下となる是經緯の本にして小物の經緯知らず織らざれども自然と此則に從ふなり天地もと活物機を含んで動止す氣は外に居て其方より動き物は內に居て其方よく止まるうごく物は圓にして止まる物は直なり圓なる內に相反して動く故に一は東にめぐり一は西にめぐり直なる內に相反して動く故に一は上り行く一は下り行く爰において塊塊の內內直にして持し外圓にして轉ず轉天を成し持地をなして宇宙轉持の沒天地を成す是皆氣にして物ならざるによりて天地有といへども未目にさへぎらず手に觸れず沒は露の偶にして沒あれば露あり天地はもと始もなく終りもなく行末の果もなき物なり是も人に始終ある習氣を離れざる故とかく始終を立てざれば心すますざる程に佛氏は此世界

に成住壞空などといふ事をたてゝ空より次第に天地を成し終には壞し空却に歸し又成し又空するとも說き邵康節などは混沌開闢の說を增益して天は子に闢け地は丑人は寅に開け酉の會にして天を閉ぢ戌の會にして地を閉し亥にして人をとづるなどと思ひ思ひの自論にて杜撰をなせども皆條理をしらざるよりして天人を混ずるの妄說なりさる程に天機性體に先だつにもあらず性體天機に後るゝにもあらずたとへば一匹の錦裏と表と一時になり一卵の縠左翼右翼一時になるがごとし此故に沒中の天地を先說くとて沒先なるとするにもあらず露中の天地を後說くとて露後なるにもあらず此故に己に一物あれば其物に沒する氣を有し露する體を有するなり其有する體二つにわかるれば虛實なり虛の體よく天を成し實の體よく地を成し然して其陰性無際涯より內に收めて地を結び陽氣に噴れて水をなす陽性中の一點より發して天に散じ陰氣に聚められて火を成すこゝにおいて日月星辰上にかかり山原湖海下に羅なる兒女の輩地といふ物は金輪際といふよりはえぬき天といふものは淨玻璨の樣なる物にて天井のごとくはりまはして其間は唯何もなく空空たる空物にて東西南北の海はさきよりさきにひたつづきにつづきて占めつかす月日は地の下をくぐり來る樣に心得天地の眞形一圓球にして地その核子なるをしらず夫天地の眞形は地球の圓其さし出たる處國となり落入たる處海となり上下四方人取りまはし海もろともに圓にして天块块たりといへども又圓にして天象をいるゝなりされども人天を載き地をふむの習になづみ水は傾けばこぼるゝなどいふ左徵にゐつき智惠働かず此故に物には必始あり終あり地は平にして天は長く月日は西に

むかひ水は傾けばこぼれ火に煎ずれば水はつき水を灌げは火は滅し候などいふ樣のなづみつきそれをよき證據と確く覺込候故何分にも智の働き出ず其事語りても只石に水を投ずるがことくに候さる程に天地をしらんとならば先此箆底の天地の形體日月の運行を尋ね知るべきなり運行は推歩家あり形體は天文地理の書あり西洋の學入りしよりこれを實徵實測に試みて次第に精密になれり猶ゆくゆく開くべく覺ゆ世に其人ある事なれば就て學ぶに不自由なる事なし然してそろそろと自分の眼を生じ古人の謬說に惑はざるべし先初入いづれにも天地をまろくなすべし天地とくとまろく成ぬれば水を倒にしてこぼるる處なく東を西にさしてもまどふ處なしさて晝夜かはるかはる長短し春秋一時に有之がごとき反觀合一の工夫も實に試むる處出來り然して後はじめて我習氣に泥まされしといふことをもさとり稍々智の働き出來り達觀の楷梯となりぬべし此故を以て天地達觀の初門は天地の形體日月の運行をしるにしくはなし古今の書籍は牛に汗し棟に充ても猶あまり有る事に候へどもみな習氣の內より書たる物ゆゑ其なづみをさるの良藥と存するは見あたらず候しか申候へば只手まへ申候事のみよき樣に候へどもさにても無御座候天地に條理あり分れて粲立し合して罅縫を沒する處は天地本來の面目古人ときいたらざる所と自は斷じ候へ共むかしの人も皆是天地密合と存せず候て說をなしたる人もなく我も亦天地にあらざれば我習氣の僻必多かるべし故に三語數十萬言天地に合する處あらば天地に歸し天地に合さる處晉にて可有之候しかれば必我說御信用に及ばずこれを天地に質して戾る所唯其正を冀ふ事に候さる程に世の師の門に

遊ぶ人その師說に違ふ事を心ぐるしく思ひ師家の人も少しはいむ氣味あり氣にみへ候是人を以て師とする故に候晋は天地を師と心得候へばたとひ少年輩我より句讀を授け候ても同門の明友に候へば何かいむ事の候べき如此心得候へど常には申候事に御座候此故に學問に書上の學問と事上の學問と御座候書上の學問とはたとへば論語に季文子の三度おもふて行ふを孔子の再度すとも是可なりとの給ひしいや再度せば是可也なりと其當否を論じ候樣の事なり是を事上にうつしていへば多念にわたり猶豫孤疑致す樣になり果決なきは用立ず早く決斷覺しき場あり幾度も千慮萬思の上に決すべきあり再たびせば可也といふ時再たびせばの工夫を下し再びすとも可なりといふ時大概是に違はなしと見定めたりとも猶熟念して後悔を遺すべからざるの工夫を下すべくして仕家の是非にあづからざる處あり候此故に書生の學問は其師の立說を主張する癖ありてそれに我意をくはへ敵味方とわかるるなりしからば文義はいづれに見ても苦しからずと聞給はば是又我言を執し給ふといふ物に候さる故に親もてる人は徂徠學にても朱子學にてもよく候親に孝なる樣に學びたく候鎗つかはん人は素鎗にても十文字にてもよく候人をつく程になり度候それを猶是よく彼よしと論じ候はあたらぬと申にてはなく候へども畢竟手前かたやの論にて上戶下戶の昔より饅頭と酒の美不美を爭ひて今に定まらざるがごとし天地の是非善惡といふものは學者もわかれ素人もわかれ君もにくみ民もにくみ佛者もほめ儒者もほめ候物に候それ者同志の是非得失をみな己がおもふままにせんとおもふは世の中の人の顏を一つ樣にせんとおもふ樣なる者にて候造物の手に

さへ合ざる事を己がおもふ樣にせんとおもふは大なる不了見に候さいへば又しからばみな惡みいとふ惡もつくり直されまじき程にといはば又さきの言になづめる也とかく天地は活物故に活手段なく候てはよき事も用をなし難く候天地隱さず人に示し候へば書を讀むにも人にきくにも及ばざる譯には候へども又書にもより人にも問はず候へば智も開け不申候程に愚蒙の言も達觀の楷梯とも思し召し候は天地に御合せあるべく候諸家の人のいふをきくに我道はかく立るなり彼はかく立るなりなどいふ也天地は我立る者にはあらず其立ちたる者に我したがふ事に候へば天地を全觀する事も人事を精しく察する事も唯有る通りそのままにみるより外に細工なく候さる程に合點致候も火は合點せざる前の通にもえ水は合點せざる前の通りにながるる事に候故に名は人のつけ

候物に候へば難波のあし伊勢の濱荻ともかはるべく候へ共實は我を以てみだるべからず候さる程に天機性體を以て此天地を全觀する事を得ば經通緯塞の内虛動實地の天地を容れ日月上に轉じ水土下に持し我と萬物と其路をゆき其宅に居るの眞面目を得んさる程に我目物に目くるめく間は萬物紛紛擾擾たるがごとくなれども己に天地手に入りてみれば天地位を定め火上に照し水下に湛ふる迄にして是が活物なるにより絪縕摩盪して有意温動の動物と無意冷止の植物と只此二種を釀し出して其物と神とを千態萬貌に變化するなれば至擾還て至簡の至りに候右の趣に候へば天地をしるは我私の意を入れずあるままに天地に從ひて天地を師とするにしくはなく候されども天地物いはず人人のおもふ樣に見らるる物にして正す處の人千差萬別に候へば口舌を以て爭はんには

盡期なく自得にしくはなく候されども其自得も心心にて天地はあちなる物に候さる程に組て落る處は臭味同じきもの打より語らふ事に候さるによつて我說人に強不申此頃も人來りて我說を破する人ある事共物がたりしける間それにてよしと申してかへし候是も一無窮非も亦一無窮無窮の間に遊ぶことに候しからば賢にももし古今に歷試し天地に考へ合處ありとせば拙き言も魚兎の筌蹄となるべく候よつてかさねて申入候人は人の境に住み候へば人よりして智をひらくも據なき事に候されど智をひらくに推すと反すると心得べき事に候人よりして人を察するには柯を執て柯をきるの理にて我悅ばしき事人の悅ぶ事にして我かなしき事人の哀しむ事なり己にあらざる物を察するには火の好み水に推すべからず魚の好み鳥に推すべからず故に反觀にあらざれば我にあら

ざるものに通ずる事能はず推觀にあらざれば人に恕する事能はず恕の義は俗に身をつみて人のいたさをしるにして古人の解も數多みえ候へば略し候反觀前にも申候へ共又一物を擧げくり返し動植の上に就て申さん動は鳥獸の總名にして植は草木の總名なり然して動は意あり身溫にしてよく動く植は意なし身冷にしてとどまる動は內處するを以て養を上口より內にとり植は內實するを以て養ひを下體より表にとり動本を上にし末を下にし植本を下にし末を上にし動牝牡よりして子を下竅に生じ植花實よりして子を上頭に結び動地を離れて橫行し植地に就て竪立し動の枝は數定りて下りむかひ植の枝は數定まらずして上にむかひ動生ては暖に死しては冷ゆ植生ては冷えかれては暖也といふがことし山水にていへば山は本合して末わかれて中高く水は本わかれて末合し

て中おちいる晝夜にていへば晝は地上の物を示して天上の物をかくす夜は天上の物を示して地上の物をかくす是を天地の物にいへば天にある物は燥てうかみ夜明を發す地に在る物はうるほつてしづみ晝影をおさむ天地の物皆かくのごとく反すれば天地の物をつくさずんば其反をかぞへ終るべからず故に反せざれば天を知る事能はず推さざれば人をしる事能はず已に人と生ては才古今に秀でたりとも限天地を容すとも人を出る事は能はざる也然る時は學ぶも修するも人事なり是を以て入て内にありても出て外にありても貴うして君公の位にありても賤しうして奴婢皂隸にいたりても只人の間なれば只孝悌忠信禮義廉恥の間也もしこの人の外に道をたて人事に害をなさば是通天下の非なるべし故に道は衆を安んずるより大いなるはなく功は衆を利するよりすぐれたる

はなく候これを以て上一人より下億兆にいたる迄其品にたがひはあるとも天生生の德にならひ天物を損はず分分體體造化をたすけんと志さば天地の大德にそむかざるべきか人生れて各己に其一箇の天地を有し各其混淪の體を立て各その鬱浡の神を活すれば權を以て下を御しし是を控掣すといへどももし其德を失すれば人情糜沸して其權もちゆる所なし其心の鬱浡其身の混淪と同異居を同しうすれば千人の面おなじきごとく千人の心同じ千人の面同じからざるごとく千人の心同じからず故に世に處するの道意智の明研究すべしといへども人情の變化熟せずんばあるべからず民之失德乾餱以て遇つと申もこの處にて御座候さる故に世の中の或はみだれ或は治まり或はたすけ或は殺し悅びかなしみ泣うたふも皆皆の鬱浡の所作にしてよく此鬱浡の所作をしらば己を修め

人をもよくし長にかの天命にやすんずべく
候かしく
安永丁酉臘月二日　孖山　三浦晋

再答多賀墨卿

終日驅不得其到處。非馬力之罪。實取途之非也。臟腑之說。漢與西洋雖有精麁。未得于條理。晋說之數萬言。猶未脫藁。而子問而不已。欲答之。則非短簡之所盡。欲不答。則殆負友誼。託秦伯龍南還。陳一二以塞其責。夫臟者肉也。腑者皮也。腑以保內。臟以營外。蓋天地一氣物。物虛實其體。以開天地。氣陰陽其性。以活水火。虛體爲大物之府。實體爲大體之藏。水火絪縕於其間。乃化動與植。是故動植元一之分。雖反意之有無。機之動止。俱資之於天地之給。是故臟腑之理。若近取譬。則觀之於一顆之粟粒。亦足通之於己也。蓋粟之爲物。稃能保米。米能營稃。稃米相得。生意通其中。稃米相失。生意絕其間。極之於其所給。則天轉以保地。地持以營天。推之於人間。人能營室而居。室能保人而立。唯以物分而異其態焉爾。是以人身一臟一腑。臟則在內之肉。以能藏氣。腑則在外之皮。以能容質。古之人不能取內景以融之於外體。故歸皮肉於外。歸臟腑於內。雖立言固然。融之於天地。則臟腑與皮肉同一物。以分用有意之文。終致皮肉臟腑之別。故何則咽胃腸脬。皮而裏物。漸踰肛門。與所包身首之皮合。臟者爲繫於皮肉。筋脈以維之。動植已隔意之有無。無意者不用用意之文。有意者不得不用用意之文。於是植無臟腑之目。而動兼皮肉之文。蓋人身以頸分上下之體。上具耳目鼻舌之文。交彩聲臭味之氣於皮裏。下具手足陰乳之文。接配嗣器地之質於皮表。內而咽胃腸脬。以皮納畜收送水穀便溺之質。心肺肝腎。以肉保運化持天地神本之氣。故臟腑本別體。其不同。猶衣與絮。故其本一臟一腑。各分內外。爲二臟二腑。各各擴親疎之用。爲二臟二腑。古之立言者。知臟腑之在內。而不知在外。其內者亦從目之所觸而數。不知剖析之理有所反而合焉。五其臟數而不

合則又六其臟於是其所可統而反剖之其所可剖而合之其所可剖而合之者何咽以能納水穀其體常虛胃以能畜水穀其體常實其當數之也捨其實者捨其虛者腑者一條之皮囊岐有膀胱但畜外來之客質而膽不與腑相與膽者屬系其系上屬肝臟下著胃口化精於飲食之氣爲脈之根與臍之收天氣爲息之原對蓋兒之在胎宮中卵體閉氣於其中無假于天息地食唯一條之臍帶繫胞以與母通血脈生動活育唯特斯一路與菓蓏之蔕承營養於本幹同矣其已出胎也混沌正死臍帶已斷關竅於天門地戶噓噏已通飲哺已求於是先天之養移居後天之室於是營養之氣自膽起衛護之氣朝宗于臍故膽後天而斷臍先天之氣而說者取以屬腑顚倒錯置甚矣其所可統而剖之者何命門者腎之一片脾者肝之一片有臟必有薄膜包之何特於心立包絡耳目鼻舌系皆繫于心而說者配之於五臟雖是失實徵猶言其所本也至手足臍乳則汎而不問其佗若肝本著右而謂之著左脾本在胃下而謂之在上脈與經同出心而有氣質之分而不知焉唯憒憒而說之類不可復枚擧夫儒者以通三才而自負至觀人之形骸讓之於醫與而不察醫人無識不知素靈周季佞者之妄言意若有造物者爲之面授口訣至若五行配當則最能糊人之耳目人身有氣液骨肉何必有木火土金水焉而於佗之四行則一之於火則分君相以爲造化之樞要無用之辨不急之　聚訟譊譊余嚬盈耳是猶方行者問路於越揭標曰北於是乎北轅走越取途愈遠其迷愈深不亦悲乎雖然千古之成說人皆濡目於茲染心於茲未可猝以示條理故今唯爲子言勿遺諸傍人致他鬩其詳姑竢所著成安永己亥四月望

梅園拾葉卷之中　終

梅園拾葉巻之下

目録

梅園拾葉巻之下

豐後　三浦晉　安貞　著
加藤修　子睦　輯

三答二多賀墨卿一

神氣本氣の分、並に前書贍者其系上屬二肝臟一下着レ胃只化二精於飲食之氣一爲二脈之根一與レ臍之收二天氣一爲レ息之原上對の文、かさねて御尋に御座候。醫家素難を金科玉條とし、從來依レ樣て葫蘆を書き候故、其垢心を染て、物の眞體みえかね候。條理の道は、天門の鎖鑰にして、流に沿て分れ、源に泝つて合し、聊も意巧造作にて安排をなすべきもにあらず候。蓋大物より萬物に至つて、其物を成すにおいては、氣天物地の中性體といふものを具す、然ふして體よく用を分ち、性よく體を分ち候。神本の二氣は、唯人にのみ有る物にはあらず、もと天の有するものを人資て己が有とするものに候。本氣とは體成てよ

く其體を用ゆるの氣也。神氣とは性具してよく其性を運ぶの氣なり。故に神氣人におゐては其有する所の意也。本氣人におゐてはかく活動する生の氣なり。意中に心性ありて心の運びて思ひ慮かり知り辨ゆるものを意智といふ。性の感じて愛憎欲惡するものを情慾といふ。即是性にして、これを運して、守禦の態、和激の聲、行止予奪の事をなすは、其才也。生中に天より得るものあり。天より得るもの、物に依らざれば立難し。其物によるとは、天氣を呼吸して、よく表を衛り、地質を飲食して、よく裏を營み。即これ用にして、これに體して、臟腑の文、筋骨の維、膏血溫動の物をなすは其體也。人かかる身をいかがして有するぞとおもふに、これもと天の有する處にして、それを人に給し、人これを天にとりてなるものにして、給資の間に始繼の二氣あり資始むるもの、保持奉役の精力なり。資繼もの、營養衛護の息食なり。資を始むるものは、天に得るものにして、資て繼ものは、息に天氣をかり、食に地質を資りて、其資始の氣を營養衛護するものなり。故に精力は營衛を以て立つ。營衛敗れをうくれば精力困しむ。精力已に盡れば、營衛用る所なし。故に保持奉役、營養衛護して、其本氣全く、思慮知辨、愛憎欲惡して、その神氣全し。神は神妙不測の靈にして、物混淪として立つの中に活し、物は磅礴無邊にして、神鬱浡として活するの表に立つ。立に就て本氣といひ、活するに就て神氣といふ。萬物に通じて皆しかなり。蓋其本氣の立や、資て始むるものあり、資て繼くものある故に候。神氣の活するや、性感ずることあり、才運することある故に候。精いかんかして此身を保するとなれば、内持するものあり、大物にていへば地なり。外保するものあり、大物にていへば天なり。力いかんかして此神を奉ずるとなれば、物其神を奉ずるの力あり。人にていへば

臣の奉戴也。氣其物を役するの力あり。人にていへば權柄也。性いかんかして感ずるとなれば、情慾好惡するを以てに候。才いかんかして運するとなれば、意智よく知運するを以てに候。こゝに於て神氣神を用ひて意をなし、本氣物を立てゝ人をなし候。是を以て物を見て善と知り、惡しと知り、愛憎慾惡の感應より、或は予へ、或は奪ひ、或は活し、或は殺し、譽め毀り、興り亡ぶるも、共に有意の所作にして、思ひに運び、知るに辨まへ、好惡に感應いたし候。このゆゑに神氣は君の位にして、本氣は民の位なり。君民の事、位をいへば、君尊く民卑し。序をいへば、民本にして君標なり。其故は人衆ありてこれを治むる爲に、君長たつ。君長たちて後、人衆を設くるにあらず。然れ共位は君在レ上。然ふして號令控製の權をとる。民在レ下。然ふして奔走驅馳の役をとる。故に本氣は民の如く、神氣は君の如し。本氣本にして、神氣標なり。神氣尊にして、本氣卑し。故に奉ずるは、神氣の爲に基をなして、其神氣を奉ずるなり。役するは、神氣の爲につかはれて、これに奔走驅馳するなり。此故に物混淪として立ものは、本氣の幹するなり。意鬱浡として活するものは、神氣の運するなり。其本氣即天にして、神氣即人なり。天人の差別は、有意無意の間にて御座候。古來有意無意の辨未レ立候故、先達も是を混淆して、天を觀る事、皆人意の私に落候。此故に天は無意、人は有意と分つて、其人の中にも亦天人あり。其故は天成レ人。人成レ于レ天を以てに候。天の成す處は無意にして、人の成る處は有意に候。是又人の天人を平分する故に候。其天成レ人者は、本氣にして、人成レ于レ天者は、神氣に候。此無意なる者あつて生の本をなし、有意なる者有て生の精華を發する事に候。先此大分を御理會ありて下文御熟玩可レ有候。尤文面は天にあるものを書留候にて、文面を離れ、眞物をよく御察し可

被ㇾ成候。眞物よく面前にあらはれ候へば、拙文に謬誤あらば、謬誤直に御目にかかるべく候。夫氣は物を離れず、物は氣を離れぬ物に候。古人天地未ㇾ成以前溟濛混沌たる氣のみある樣に說きなせしは、氣を知らざる故に候。故いかんとなれば、物はなく只氣のみはある事能はざるものに候。火といへば燒るもの其中に發し、燒るといへば火其中にあるが如し。故に身獨活せず、神によりて靈をなし、神獨立たず、人の體を宅として活し候。人の體は保持奉役天に得るものにして、營養衞護の物によるに依て立つ事に候。衞護とは、今提燈に火袋あるも、衞護させんとの設也。夫火袋の用たるや、風吹き雨降りても、これが外を衞護するにより、よく燈の防ぎをなすなり。營養とは、提燈の蠟燭を、具ふるが如し。蠟よく火を養ひ、其天に得る處の火の光をも熱をも營み繼て、とこしなへにあらしむるが如し。火袋よく外來の風雨を防げども、膏膩の養なき時は火存せず。膏膩これを養へども、外來風雨の防ぎなき時は火又立たず。保持奉役は、天より得るよりしていへども、さとしやすきにしたがひ、提燈の器につひていふに、蠟燭の營養によれども、蠟燭又臺なければ立たず。臺また箱棒くさり等の保持をとり、よく其火を奉じ、火よくこれにとりて、光を役す。火は膏と心とに養を資り、膏心よく養を火に給し、絪緼その間になり、火を營し出す。萬物皆しかれば、人身もとより同一理にして、其常に寒を衝き暑に觸れ、霜露を犯し、雨雪を凌げども、これをして病しめざるものは、わが保持奉役するものを衞護すればなり。もし苟此衞りを失へば、風雨寒暑瘴癘の毒、こもごも外より傷るなり。營は一身氣血精神の仕出しにして、絪緼また其內になる故に、男授け女受け、子その內になり母乳し子吸ひ、養その內になるも、同じ絪緼の營みなり。春は花さき葉

生ひ、秋は葉脱し實結ぶも同じ天地の絪縕なり。故に養は生生を物給し我資るの間にして、水穀鹽蔬酒漿肉味の給する所を資り、我氣液骨肉となし候。此營養に傷れをうけ候へば、氣液骨肉營養の源竭きて、吐瀉閉癃血液湧溢せざれば、乾枯骨立を致し、終に天成の元氣を戕賊す。故に函籠全ふして、膏膩盡るも、膏膩備つて、函籠そこぬるも、提燈の用成ざるにおゐては一に候。其營養といふものは飲食胃に入り畜ふるに、肝上より覆ひ、脾下より捧げ、胃をさしはさみて、皷動をなし、飲食の精をとり、轉じて氣液骨肉となし、一身に周布して、造化の用をなし、其查滓腸中に下り肛門に出づ。小便は古說異同ありといへども、其大概水穀一所に混入し、然して後、便溺泌別すと觀る故に、小便も泉を覓にてうくる樣に思ひなし、其泌別の處をそれとさし、或は膀胱に上口ありなど、壁越し推量の說のみにして、徹見の說なく候。阿蘭陀などにては、奇巧勝れたる國ゆゑ、微細の器あり、よく其小經を導ひて、水を膀胱にうくる隧道を得る術もありと聞り。是れ實徵の上然あるも知らず。よしや此隧道あるにもせよ。溺の道路全く其道より洩れ注ぐとせば、造化の用はなし難かるべし。予が觀る所を以てすれば、便溺の事大に同じからず。大便は右いふ如く其道あり。小便は其口なし。此處よく工夫すべし。人は小天地といふも、造化に異なる事なければなり。易にも雲行は雨施して、品物形を流くといへり。先造化の用を觀るに、雲天を覆ひ、雨上より下るといへども、雲雨はもと地の濕氣蒸蒸として騰り、淸際に閉られて、雲のかたちを顯はし雨を結ぶ事、口より出る氣の物なければ消て見るべからざれども、鏡を前に置ときは曇りとなりて露を結び候。是も小雨露に候也。今雨降らんとして、礎濕ひ絃緩ふも、雨の本を水土にとるの一徵に候。是を以て

造化の狀下に水土の質あり此もの氣の絪縕により、忽蒸騰して雲霧となり、雨其中に結び、むすべは其質空にとどまる事能はず、下り灑ひで萬物を潤澤生育し、潤澤生育の餘は、終に川谷に注ぎ海に歸し候。若此地際水土の氣天間に充溢せず、夫より只下ざまに流れ入らば、萬物を潤澤生育することはあるべからず候。然れば我天地造化の用も知るべく候。水穀の質胃内に蓄へ、其氣胃外に蒸騰し、肝脾の鼓動によつて、一身に充溢し、潤澤生育我身に雲霧雨露の用をなし、其查滓下に歸し、膀胱に滲入し、川谷の用をなす。かくの如くにして、屎に其口あり溺に其口なきの態、然らざる事を得ず。是を以て營氣は下飮食を胃中に畜ふといへども、消化運轉の用は、全く肝脾の鼓動にあり。臟腑といふものは、腑は皮を以て相續ぎ、筋よく維持す。臟は肉にして箇箇別物、脈あつてこれを聯綴す。脈といふものは肝に始まり、腎に

至り、枝椏蒙茸として、一身いたらざる所なし。飮食の精氣、氣液の運動みなこゝに導かれて行と見えたり。膽は肝葉の内にかくれ、精汁を蓄はへ、脈の根となり、膽外枝椏あり上肝葉の内に著き、下胃の瀉口のさき腸の上頭、西洋の人はここを十二指腸といつて、蛕蟲の窠窟とする所あり。その上に著く。是腑と臟との接する所にして、是より脈に接するに依て脈根なり。營養の氣は地膩に資り、衞護の氣は天氣に資る。地膩口を門とし、天氣鼻を門とす。それより喉嚨に下り肺に入り、その經心に着き、其末腑に朝す。前書に先天後天の氣といへるは、馴たる言を以ていふものにして、先天とは資て始むるの謂にして、後天とは資て繼ぐの謂なり。それ兒の胎に在る、資て繼ぐの氣未用ひず。故に口鼻の二門猶閉づ。此門開くるや兒即生る。生るるや呼吸飮食資て繼ぐの氣を開く。我ある人にきく事あり。兒初生已に死するが如

き者、臍帶を按ずるに、渟渟として動氣あるものの、猶生を望むべし。急に艾をとり臍帶に灸すべし。活する者ありと。我未試ずといへども、亦此理なきにしもあらず。呼吸の事、呼ものは故きを出し、吸ものは新しきを納れ、其事は飮食の精をとり、査滓を去ると同じく候。故に膽は營元なり。臍は衞元なり。營衞は一身を立るものにして、資て繼ぐの用有ㇾ之候。精力は一身の立つものにして、資て始むるの用有ㇾ之候。精奉ずるとは、物の神を挑ぐるにて、提燈にていへば、蠟燭たてにて御座候。營養すべき蠟燭もあり、衞護すべき火袋もあり、照すべき火ありても、蠟燭たての奉なければ提燈ならず候。此蠟燭たて眞直に下より燭火を奉じ候へば、營養衞護もととのひ、そこにて火の照す事明かに、高し卑し、水あり石ありと見する故、其火に敎へられて、上るとも下るとも飛ともまはるとも、其精力其令に從へば其役をとるなり。是を力役すといふ。故に奉は上につかゆるにして、役は上につかはるるなり。これを以て手まひ足踏み、目見耳聞き、大小便行んと欲れば、其道を開き、忍ばんと欲すればまどろみても其守りを失はず。是を力の役といふ。其力役を執らざるに至りては、遺尿遺矢、手足癱瘓、精神恍惚、百患萠動する事に候。故に精力は、資格の氣にして、營衞を天地にたのむ。營衞は資繼の氣にして、精力を天成にたのむ。精力已に盡れば、營衞存する事能はずして、我天地閉づ。營衞病めば精力疲る。精力支ふる所あれば營衞醫すべし。思慮知辨愛憎欲惡の神も、これを己が本宅として、用をこの上に施すに候。以上の條理とくと御考候ば、神氣本氣の別可ㇾ爲二判然一候。天成ㇾ人、人成ㇾ于ㇾ天の故に、有意の神は初生の時は猶混沌として開けず、老後は朦朧たりやすし。晝よく明なりといへども、夜は必本氣に歸す。前に申す如く、神本の二氣、天地も萬物も皆これ

を具へ候。されども物によつて長短有レ之候。天地は神本に優劣なし、故にかくの如く悠久なり。物ふたつながら全ふせざるは二の態に候故に、神氣長ずる者は本氣短し、本氣長ずる者は神氣短し植物本氣に長じ、動物神氣に長ずるは、其大分にして、其神氣に長ずるの內又長短あり。又人よりして鳥獸を觀るに、鳥獸神氣に短し。故に本氣長ず。是を以てその生たる生冷堅硬の物を食つて傷られず。雨雪霜露を衝て犯されず。產育困しまず。喜怒相引かず。人は密室に爐を擁し、重綿醇酒に寒をふせげども、風軒水樓にたかく倚り、絺綌水漿に暑を避れども、猶時として時氣に病む。米は糠を去り、肉は骨をさり、猶水火の調熟をかり、姙娠の調護、嬰孩の抱負、本氣の短きことかくの如し。本氣の短きこと如レ此を以て、神氣の長きことと萬物にまさる。是を以て天の遠きも是を測り、地の厚きも是を察す。羽翮なしといへども、空に翀るの鳥を繳し、鱗鬣なしといへども、水に潛むの魚を漁す。肌膚寒暑にたへざれば、麻を績み、繭を繰くり、支體雨雪にたへざれば、傘屐を製し、神氣の有餘を以て本氣の不足を補ふ。是より擴めて、二氣の物たる所、御考可レ被レ成候。以上。

安永庚子暮春。

戲示二學徒一

一。學問は飯と心得べし。腹にあくが爲なり。かけ物などの樣に人に見せんずる爲にはあらず。

一。書物は金かしの帳のやうなるもの也。金なき人のもたらむは、澁紙ふむほどの用にこそ。

一。學文はくさきなの樣なり。とくとくさみをさらざれば用ひがたし。少し書を讀めば少し學者臭し。餘計書をよめば餘計學者くさし。こまりものなり。

一。學文を芥の樣におもふべからず。上に浮た

がる程に下地の水も今はのまれす。臍の下よし鼻の先惡し。
一、學文は置所によりて善惡わかる。臍の下よし鼻の先惡し。
一、學文は輕業のやうにするがあしし。輕業は人を目の下に見おろし、人の天窓をふむものなり。
一、衣裳うつくしくかざり、人にすかれんとするは賣女なり。人の見る時所躰をなし、人に譽られんとするは歌舞戯のものなり。今の學者はどふやう此眞似する樣なり。
一、碁のうち樣は、いつにても、先をとればまけぬものと、我もしれり。とかく道理はのみこみよし。態のきかぬが笑止なり。
一、足の皮はあつきがよし。つらの皮はうすきがよし。人諸共に小賢しく口はきけど、行ひは女童に見限らる。さる故面の皮あつくなり、足の皮うすくなり、株ふむ事多し。よく心得てつつしむべし。

長州赤間關二人のうかれ女

長州赤間は文字の關と相望みて、行かふ船たへず。山陽鎭西の間只一帶の海を隔てたれば、行かふ船たへず。さる故にいなり町とて花街家ごとに遊妓たくはへて、水は花を誘ひ花は水に伴ふが中に、大阪屋淺間といへる者あり。もと同じ國なる船木といへる里の貧しきものの子なり。朝食夕食の烟もたえ〴〵なれどふたりが中にひととなりて十三になれり。このとし母いたくなやみけるが、卯月の頃むなしくなりぬ。歎きのもとに秋も來ぬ。鰥ぐらしの世を經がたくや思ひけん。父此子にむかひいひける樣は、家貧しくして母なく、霜雪のふせぎも心のままならず、萩にはたよりのかたもあり、しばし行てんとて携へて出けるが、娘みちのさあらぬ樣なるをあやしみ、萩にはかくは行まじものをといひければ、いなとよ是は關のかたへ通ふ道なり、かなたにて少しの用事ととのへ、夫

より萩へ行べしとて、程なくかの大阪屋へ行、十年期にうり、金とり、其身はやがて歸りけり。娘始て其事をしり、唯ふし沈み、なき暮しなき明しけるが、せんかたなければ日數經つつやや心とり直し、これもそむかましかば、不孝ならんとおとなしくつかへて翌る十四にはうかれ女のつとめに出けるが、只ひたすらに故郷の父こひしく思へども、山川へだてぬれば、便だにおもふままならず、色色と心を盡しやや少しの才覺し、人して關のかたへ下り給へとすすめければ、父も世渡る道にくるしみ、殊に我子の招くかたなれば、やがて來り、これをたのみに家かりて住けるにぞ、淺間も少し思ひなぐさむ事となりて、主に願ひ日ごとにとふていたはり、心あしき時つきそふ程の事こそあらね、心のおよびつかへける。此處の法に十年身をうり、期あきて三年の禮奉公つとめ、其始ありつきし日にいとまとることなり。心ならざる月日も水の流るゝごとく十三年過しいとまとるべき年きたれり。さあればことし四月母十三年遠忌にして、いとまとるべきは八月なり、淺間おもひ煩ひける樣は、かかる身して母の遠忌つとめんも心ぐるし。苦しとていかがせん。只願くはもとの身となりて、位牌にむかひ手を合せば、艸葉の陰のなき魂も、手むくる水のいかに心よからんと思ひ、かつ言葉にももれければ、此事いひ傳ふる人有て、孝女の志とげざらん事を本意なく思ひ、主にかくときこへけれども、わきの妨とや思ひきかず。これを哀れときく人多くなりて、男のみかは女まで其夫にすすめ物し金遣し、終に隙とらせぬ。淺間いはんかたなくうれしければ、家にかへり僧を請じ、本意のごとく佛事つとめ、終には船本なる伊兵衛といへるをまねき、うら町に北國屋と號し、侘しき住居ながら心よく父につかへけり。抑此伊兵衛といへるも

の、いかなる縁にしぞととふに、淺間いとけなき時、大阪屋に同じく在けるが、かりそめの枕かはし馴しを、主のしりてその身追やられぬ。夫より身をうき草の根をたえ、難波にさまよひ、長崎におもむき、後はあづまのかたにゆき、からうじて年月を送りける。淺間いとまとりて、老たる親も養ひてんとさそふ水もありしかども、父が心に得ざりければ、おもひとどまり、手弱女のひとりも過しがたければ、其思ひける樣は、かの伊兵衛は誠にかりの契ながら、我ゆゑに世にたよりなき身とはなれり。事とひてみんと、人していひおこせたりければ、これも其志すてがたくや思ひけん、はるばると下り、長き妹脊となりにけり。世の中の幸不幸過不過は、誠に人力の及ぶ處にあらず。淺間が松の操をすてたるは父の爲なり。時めくかたになびかざるは、父の爲に操を顯したるなり。かりそめの枕に、伊兵衛に信を立しは、遊妓の貞といふべし、遊妓の貞といふうちに、己純孝の者なれば、我親にもよくつかへてんは、兼てしれりけるにこそと思ひやられぬ。今は名もかへて石といふよしなり。予が友溝部秀實、安永乙未國の事ありて、赤間に行て滯りしに、此女の孝狀ききしかど、船いそぎければ、つぶさにとふ事なくて還りぬ。しかるに翌る申の暮、又國の事につき、赤間にとどまる事數旬、孝女の名おぼえはすれ、彼此と物色しける處に、淺間は北國屋の妻となり、猶八入といへる女あり、己が親のまづしければこのとし頃、我食の半をわかちて是をやしなふよしなり。折柄淺間が舊里なる十兵衛といふ者にあふて、其こまかなる事どもかたりていひけるは、親に孝なるものは他人にも厚し、我同鄕のちなみなればかつて訪ひし事有しに、かたへに獨打ふしたる男あり、いかなる人にやととへば、遠き所の人なり、此町某の家に手代つとめ居れり、

然るに此頃恙にかゝり、便るかたなきが哀におぼえ侍る程に宿しつる也と語れり。さらば久しく相しれるにやと、かへして問ければ、いなさにあらず、我つまひさしく漂泊し、身病はしき頃は、世に情ある人ありて慈愛うけ、とかくして今日のあるなりさりとて遠國波濤の末言傳ふるほどの事だになし、人の上をこなたの事と思ひなせば、いとど哀に覺え、我夫いたわり給ひし方に、聊恩を謝する心に思ひ侍るなりといひしよし、物語て共にひちりこの中に蓮の花見つけたる心地しつ。秀實かゝらん人には目のあたりあひてこそ、家產にもせめとて、やがて北國屋を訪ひけるに、皆むつまじげによりつどひて、父は目はさやかならねども猶健にみへまらうど來り給ふなど、親子して酒出しさかな清に取つくろひ、しばらく酒くみ、孝女の物語きけるに、親の己をいとふいとおしみて、心地少しにても例ならねば、

神に祈り佛に賴み、賽のたゆる間もなきなどかたり笑ひ興じ、夫より引手ものどもとらせて、旅舍にかへりぬ。孝子とて世にも聞ゆるは稀なるに、猶彼家にはその人あるよし奇異なる樣に思ひ、又八入が行狀を人に問へば、幼より孤となり、人に養はれ、其父もむなしくなり、母とたのみしもの、己十三の年より病の床にふして、誰たのむべきもののなき程に、主に願ひ、日ごとに隙こひ、湯水寢起の介抱し、もとより炊ぐべき糧とても貯へなき程に、主より己にあたれる養をなかばわかち、十七のことしに至るまで養ひ侍るよしなり。秀實瓜田に履をいるると、人も咎めんなれど、みずしてやまんも、本意なく、此者をよびて逢ける。このものことし十六色もこと木に劣りて見へける。酒など出したうべけれどももとより絲竹のしらべもなく、只しめやかに物語どもしつ。秀實こゝにはいかにして來たれるぞ、なれが身

の上物語せよといひければ、八入袖かき納め、さる事に候、我は世にたぐひなき薄命なるものにて候つ、もと赤間町粟の屋何某と申者の子にて候ひしが、生れてふたつにして、父を失ひ侍り、其時我にひとりの兄侍り、母なるものも蜑の小船の揖をたへ、世渡る道のあらざれば、人のはからふにまかせ、兄をも人に遣し、わらはをば外濱町喜三郎といへるものに託し、其身はさるかたに嫁しぬ、それより喜三郎夫婦を父母とたのみ候、頼し親も家貧しく、五つといへるに、身をここにうられ夢現をもわきまへず、程なく十三といふに成ぬ、然るに此年父と頼し喜三郎あやまつて非に落入り、人の介抱にて引上たるをみれば、纔に息はありながら、身は只あけになりぬといひけるが、今の様にや思ひなされけん、たまりかねて泣出せり。暫ありて、心苦しき月日さへたてばたつものにて頼む力も今はなく、八十餘日ながらへて、終にはかなくなり侍りき、それさへあるに、又母と頼みし人も病起りて身かなはず、幼心のやるかたなく、人の賜はるものあれば、たすけにもなれかしとすれども、手に川水をせく心地しぬ、只主の情ありて、朝な夕なの事とひて、飯炊ぎ湯わかして、これを世にある人の抱きかかへとも思ひなしぬるも、ことし十六、今はうかれ女の習ひ、身にもまかせがたく、かりのいとまもある時は、かへりとひい慰むることもあれども、又いとまなき時は、心にこめておもふ許り、母は身のなやましきに他事なければ、今朝は遅かりし、きのふはとはざりしなど、聞え侍るもきくに苦しく、ままならぬ身をうらみ候、せめて我かたちも人におとらず、他事なくおもはるる方もありて、かかるうさの便とも頼むべき人にても有侍らば、おもひ慰むかたも候べきに、かたちだに人におとり、よしなき身を恨み候とて、さめ〲と泣ける。

秀實かさねて實の母の行衞いかにと問ければ、されば其事にて候、是も今は身を人にまかせ候へば、かかる賤しき子もてるなど人にきこえなば、猶うき事のありもやせんと、深く我身をかくし候へば、風の音信さへ餘所に聞なし、戀しき時は、手を合せそなたと拜むばかりなりと、又さしうつむきて啼けるにぞ滿座岩木にあらざれば、袖しぼらぬものもなかりけり。げにや先には諸共に親に捨られし子なり。孝思厚ければ、今ははや親の心にも杖とも柱ともいかに他事なくおもうらん。世に不是底の父母なしと、古賢のいひし言葉ども思ひ出て感じ侍りぬ。秀實もあまりに哀になりて、我も古郷には父母もてる身なり、かれが物語聞につけてもただつみふかく覺へ侍るなり、よしや身は河竹のうきふしに沈むとも、久堅の天津神地津神もみそなはし照し給ふべし、彌志撓まずば、などかくてくちはつべき、かならず志とぐる日あらん、心ぐるしくとも時のいたるを待べし、今暫はわれ隙得させん、とく歸りて心靜に母の介抱せよとて、隙遣して別れぬ。秀實關より歸り、我を訪ひて、此事をかたりて哀ども催し、八入が行狀國守の聞にも達し、素意とげよかしと、ともに祈り思ひけり。誠に世に教を立て、人に品流を分つ時は、儒中に異端をいむ。業に俳優娼妓を退てよはひせずといへども其人の志行は、道の異類によつて異らず。業の拙きによりて拙からず。此故に天地よりして觀る時は、君子のをり場に隔なし。其をる處の賤しければとて、其德を仰がずんば天地の心にそむくべし親の命のそむきがたければ、心にそまざれども源賢の儕となり、淺間は遊妓たらざるを得ず。誠に女の道は、「さなきだに、おもきが上の、小衣ごろも、我つまならぬ、つまなかさねそ」と社守れども、不幸にして身を落しいるる處も、其身のとがにはあらず。

かつて人に聞し事あり。京師の遊妓三五といへるが、「貞女兩夫にまみえずといへども、我はたらちねのために、身を川竹のうきふしにけふのつまを待とて」、と書て

たぞやたぞ、誰かはけふの、つまならむ、

定めなき世に、さだめなき身は、

と書捨しよし。其情尤憐むべし。明末南京の院妓林秋香といへるもの、人に嫁して後、むかしちぎりしものの、人していひ送りける事の有けるにこたへて、

昔日章臺舞細腰。任君攀折嫩枝條。
如今寫入丹青裡。不許春風再動搖。

これ光武のいはゆる、東隅に失して、桑楡に收むるにて、一旦節を失するも、貞潔の操立ことあり。これを花にみる時は、梅白く桃紅に、薔薇の色の紫も、己がいろ〳〵を春の風に綻ばすぞ、げに天地の心なるらん。これらの事思ひつゞけてかんがふるに、淨僧のふたたび遠流の命をめぐらし、淺間がいとまとくとりし、初が夜ふけて親のもとめかなへし、金左衞門が鴨を得し、事に輕重ありといへども、皆至誠のしからしむるなり。己怠るの心より、かかる事は及ばじとおもふ物から、かなふべきもとめだに得かなへずして過すなり。

二妓の事、秀賓が探り得る所にして、便稀なるかたなれば、ふたたび人に徵する事もかたく、覺束なき筆の跡ながら、優なる心ばへを餘所に聞なさんも罪ふかく、きけるままにしるし侍る。近き程たよりあるかたの人は、よく其實を得て、かうがへ給ふべし。此餘は力の及びたづねとひ侍れば、おほかたはたがふ事あらじと、おもひ侍る。

豐前僧禪海

豐前中津川は、源豐後山中より出て、羅漢寺の下にそそぎ、衆流と相會し、終に中津の城をめぐり、海にそそげる大河なり。是にそふて一條

の路あり。豊南に通へる往來にて、人馬ひまなくゆきかふ所なり。しかるにその間岩尾高くそびへ、激浪岩根にそそぎ、春雨五月雨などいとふ降り、または夕立の俄に川上に催せる頃は、人馬行なやみ、あやまつて、水に溺るるもの年毎の事なり。しかるに享保の頃、江戸より回國の僧禪海といふもの來りこれを見て、誓て此岩をきり闢き、後來溺沒の難を救はんと願を起しける。されども碧嶂丹厓雲を吐納し、垂蘿長松うちしげり、空翠雨なきもつねに濕ひがちに、苔むし道滑なれば、世にその名さへ腐道といひならはして、中中此岩をうがたん事、愚公が山なり人みなあやしみ笑ひける。されども此僧氣を屈せず、經營やむことなし。其誠怠らざれば、次第に人感化し、吏民力を合する事ともなり、石工の償出來り、終に三十餘年の星霜を經、かの岩をきりうがつこと三所、すべての長さ百間、堅横二丈四方、洞中幽邃にして、太陽明通せざれば、處處岩に窓をうがち、これ仙宮にも通ふらんと思ふばかりなり。人馬幾ばくうちつどひても、何さはる事なき坦途とはなれりげに念力岩を通すといへる諺を、むかしは耳にきく、今は目に見はべり。しかれば百の事廢するは、みな懈の心よりして、天地をも感動させ、目にみへぬ鬼神をも役するは、誠のやまざるよりなるべし。

梅園拾葉巻之下 終

梅園拾葉跋

青柳のいと長くして、ことたらざるぞあなる此に、すすむ大人の梅園拾葉をここに見よとあたへ給ふ。條條言葉数なくみじかくて、物よく其理をさとし給ふ。大人は足引の山のふところを立も出ず窓のもとにかしの實のひとりなり出て、誰を師としつかへず、遠くふるき世のさかしきから書に目を遊しめつつあるに、求めずして問よる人の多きは、ただ三史五經のかどかどしきのみとおもひをりしに、皇御國の古にもよくさとり給ふよ。春樹身さかりのむかしより、今六十年の老にいたるまで、遠き國に心やらずして、我生出し皇御國の禮ありしむかしのことのかたはしも知ることのあれかしとおもひをる心肝にこたへ、涙の出くることの多が餘り、そのしりへにほめ詞してしかいふ。

天明二つのとしむ月

小ののはる樹しるす

秋の嵐松よりつたへて、夜の雨芭蕉におとづるる燈の下に獨坐して、人情世態思ひつづくるにしたがひ、藻鹽艸のよしなし事どもを書集めて、かいやりなんもいかがとて暫巻となし侍りぬ。さらばこれを反故といわんもよかるべし。

寛延三年庚午九月既望　三浦安貞　撰

梅園後拾葉目次

梅園後拾葉

豐後杵築　三浦晋　安鼎　著
島永胤　君祚　輯

鐵槳訓

人いとけなき時はさだかにおもひとめたる事もなく只父母のひざの下に遊び戯れ年月送りむかふるなるが打たれ髮もあぐべくなるに從ひてなにとなく物に恥らふ心も出來親子はらからのかたらひよりこしかた行すへ萬の事におもんぱかりたしなむ樣になりそれより程なく夫は室をむかへ女は人に嫁し人の父ともなり母ともなれるなればわらは心もすべておさおさ敷人となれる故に古の人そのさかひをあらためてかしらにかざりをくわへわらはおとなの隔をなし遊びたはぶれし心を置きおのこは家をおさめ業を修し近くは身遠くは國をもととのへ

女は人の家に行夫舅姑につかへ家の人にむつび我子人の子をもはごくみそだつ習なりおのこのかしらにかざりをくはふるを元服といへり元服とはかしらの服といふ事にてはじめて烏帽子かうぶる也女もひとしきことはりなれば始て髮をあげかうがいをさすなり

伊勢物語闕疑抄君ならずしてたれかあぐべきの下にあぐるはかみをあぐるなり女はその事來ればかんざしするなり男の元服の事なりとあり

今の男の頭なかばそり物かうぶる事を不敬とする事は大樣は足利氏天が下しりし時よりの事なるよし平家物語に鬼界が島のことを男はゑぼしもさす女はかみもさげずとは中津國のならにおなじからざる事をいへるなり風俗は時につけうつりかはるものなれども禮義のまことはことなることなし禮は

外にあらはるるのかたちにして義はそのかたちをふくめるの故なり男女ともにむかしはかみをたれしを中頃よりあぐる事になれりあぐるとはゆふ事にして結の字なり今のさげ髮其遺風にして下つかたはみな折てこれをつがぬるなりつがぬればつがぬをとどむるものをもちゆこれ則今のかうがいなりかうがいの名ふるき世の事はしらず源の順の和名抄に簪(カンザシ)の字を用てかんざしと訓じかふりにさすくきと註し蒼頡(サウケツ)篇を引て簪は笄(カウカイ)なりかふりをかしへて落ざらしむと有笄は男女ともに用ゆるものにして男はかふりと髮をつらぬき女は髮まくものかんざしといへり笄かみをまくの解は喪服小記の註にみへたりされども今の世にはかんざしといふもの別にありて笄をばかうがいといひて其名をわかてり然れば今のかうがいはむかしのかんざしにして

今のかんざしは釵の字あたる樣なれども釵は笄の如くにしてふたまたにわりてある迄の物にやそのかたち今樣よりはふとくおもはる今のかんざしはかみかくにのみ用ゆればかみかきといはんもそむかじなれど插頭より起れる名なるべしましてかみかきといふ物は擽鬢髮刷など書てかみすぢなづるものなればかうがいかんざしかみかき各わかち有て笄首飾の禮服なるべし笄いにしへかんざしといひしをいつの頃よりかかうがいといひけむむかし漢の武帝寵姬李夫人のさせる玉の簪をとりて御髮かかせ給ひしそののち簪を搔頭といひしことあれば之もかみかきより轉じて其名おこれるなるべし今の武士の刀にかふがいとてさすも烏帽子かぶる爲の物をとどめて遺せるものにして武の用にはあらずとある禮家の話にきけり

これを用ひてわらは髮をあらためおとな髮となすものにして禮の女子十五にして笄す許嫁をしてかうがいするの面にてかうかゆれば婦人のかしらの飾はかうがいよりおもきはなし然ればうゐかうがいぞ女の元服にして聖人の禮にかなふといふべし

左傳僖公經八年伯姬卒の註に婦人許嫁而笄猶大夫之冠とあり

我國の風は齒を染るを先とせりかれこれあわせてみるにうゐかうがいのとき即新はぐろして眉をはらひ袖をとめわらはのかたちを人の妻たるべく人の母たるべきにあらたむるの時なり

今の世のならはしはかうがいはわらはめももらひかねは十三の年筆始といはび十六七は人に嫁すべきころなれば大樣はこの頃ぞはをそめ侍る又十六のとし六月十六日を其期とするともきけり定かにはし

らず六月十六日は仁明天皇御代さかゆべきことを祈らせ給ひしより今に嘉祥とていはふ日なり、ふりそでもいはた帶結べるのち迄とめさる人なく眉も子にはみせぬ物ともいふならはしゆゑ子もたぬ人ひとに嫁せざる人もこれになぞらへておとなすがたつくれるなりされどわらはべおとなのさかひかくしばしばあるべき様なし振袖は男女ともにわらはの服なり今とてもおのわらはは元服の時袖をとむれば女も初笄の後もちひん様なし堂上の人うゐかうぶりのとき眉をはらひ給へば是又わらは姿なりふり袖いわた帶をすきす眉子を抱くに過ざればこれみな人に母たるの容(カタチ)なりしかれははくろ袖とめ眉はらふはおとなめのかたちなればみなうゐかうがいの時の儀なりさる事を得ずみや古の人の眉は有ながら齒のみそむるをふくみか

ねといへるもかねのまた早きより起れる名なるべし世に義をわきまへ禮を講ずる人なく男はそのわかやかなるかたち愛し女は春の面影を惜めるよりかくしばしばする事とはなれるなるべし櫛は髮のみだれをおさむるものなれば少長のへだてはあらじまして神代よりの物なればかうがいとともに禮の服となすべしいま人のつまの夫にをくるればかうがいをさり髮をきりあるひはかねをふくまざるは佛のおしへ世に行れてあまとなれるのかたちなれば佛のおしへにいる人のみにぞさあるべきをなべてのかたちとなし侍るもし禮經の心によらば笄にもと吉凶の別あればその制によりて夫のありあらぬをわかてる道もありぬべしかくいへばなべてのならはしを我いやしき身もてあらためまほしくやおもふなどいふ人もあらんなれど

さにもあらずたとひ世は世のまゝにあり
あるとも禮の義はかゝるものぞと其故を
しり侍らばうゐかうがいして人に母たる
の敎に本づき齒ぐろして人に妻たるまも
りをしり夫におくれて文飾をすつるの節
をしり侍らば女の德にたすけあらんかと
かくはいひ侍る
禮の品はすべてその物を見て身のいましめ
とする事聖人の敎なりかうがいは正しきう
つはものなればみだれをつがねかたちをた
だすおしへありかねはもと鐵の液なりいに
しへのふみの言に忠臣二君につかへず貞女
兩夫にまみえずと有是臣婦のさだまれるの
りなり子は父臣は君女は夫を綱とすること
なれば我夫をば君とも天とも仰ぐ義なり女
は父の家を家とせず夫の家をわが家とさだ
むる故によめいるといふ字は女の家とかき
又歸るといふ字も用ゆるなり然れば夫はそ
の家のあるじにして我身は夫に献せし身な
りさる故にもしもかたへより橫ざまなるよ
しなし事どもいはんには命すてゝもみさを
をまもるを婦人の第一節とすればかりにも
風になびける青柳のいとたははなるさまあ
るべからずこれかよはき女の身としておそ
ろしきくろがねを口に含めるの義なりおの
この齒をそむることは
鳥羽の御門にはじまると承ればさのみふる
き事にもあらず是も臣たらんものは二君に
つかへじとのちかひとぞちかき頃にも小田
原北條の家士はみな齒をそめて君につかふ
るの義とせしなり故にこれをふくむときよ
くそのかねの剛をもちて水となりふたたび
かたき齒にとゞまりうるはしき色なせる所
をおもふべし水はやはらかにして高きにお
らず物にあらそふ所なし女の身もそのごと
く操は萬仭の峯と聳へ物に接する事は水の

ながれに順ふごとく身をへりくだり物いひ立居ふるまひもわきてしどやかに耳にさかひ心にもとる事ありともかりにも面にあらはさず夫の父母を我父母とおもひ夫のはらからを我はらからとおもひまま子我子のへだてなくおのが手業におこたらず仕あらまほしけれさるを引かへて人あればあるじの言葉もまたずわれかしこきに世の事人の噂し己かさかをばかへりみず

風吹ば沖津しら波立田山　夜半にや君がひとりこゆらん

などかしこき女の跡をばはぢず只かたくなりねたましきこころよりかほに紅葉の色をうかめかれこれあらそひわめくにぞいつしかたのみつる我つまにも秋のいなばの風そよぎかれがれのそらとなり行なり女の形は身に綺羅をまとひ面に紅粉をよそへとにはあらず衣きよらかにあらひ髪かたちよきほどにとりつくろひしめやかに物いひ出たらんこそ心にくかるべけれ女のかしこきはうしのあたひとらずといやしきことわざにもありておんなの徳は只苧うみつむぎ織縫によりのみくふべき心づかひしまらうどなど有んにはあるじまふけなどよきにはかろふべくば何かは是にくはふべき人のつまたらんものはあるじのあらざらん程こそわきてこころくるしかるべけれかかる折しもうるはしくよそほひ出たるは無下に心をとりせらるる物ぞ世にはぬれ衣かつぐといふ事もあればうとからん人は更なりしたしきかたの人なりともおのこには間へだてなれなれ敷たはれたるさまあるべからずさて男は刀をたからとし女はかが見を寶とせりかたなは決断の義にとりかがみはあきらかにてらすの義にとれりかがみはあかがねもてつくれるのみ鏡にはあらず人にみよ女のはらく

ろく人の見きくもかへりみずいきほひ猛にいかりののしるさまいかに見よきぞやひかりをめぐらしてわが身をかへし照すべし又何によらず世にははやりといふ物ありて髮あけかたちつくろふよりかしらのかざり衣のもよふうつりかわるものなりそれにしたがひてくるしからぬもありくるしとみゆるも有大かたは遊女野郎の學びそよぐわきまへあるべきなり紋は父の家の紋もちゆるものなりこれもと其家のしるしなればなりうゐかうがいの後はわらはやうの髮あるべからずいもせの中はなれむつまじきものなればいつしかおこたりの心いづるなり百とせになりて家もたずとは女のためしにいへる言なり往て爾の家に行き筆をとりかゞ見にむかふことが此かねのおしへにそむかざらましかば松の二葉の色ふかみいく年月を送るともかはらぬ契をかさぬべし

天明改元かのとうしの小春

答西垣徤良

或は酒色により或は名利により或は喜怒により或は毀譽により或は人のそゞろ言により貧苦艱難百の事故心を惑はし智を昧し人の葛藤をなすに依ていかがすれば此累にまどはされずして、心治れるにやのよし御問尤切なる事に候畢竟こゝに心を用ひては得がたし只其要を得て守約なる事に候君子の道は射のごとく志す所は的ひとつわきにいかなる物有てもそれには目も觸れず候來書に凡夫君子と御わけ候へども是又第二義なり故いかんとなれば情慾と意智とは誰人の心にもみなあるものなれば聖凡のへだてなし唯其間に主客の辨ある事に候情慾と意智心にたたかひ意智の明かちて情慾これに從ふ時は君子なり情慾の私かちて意智これに役せらるれば小人なり今日世に君子小人共に

ありて君子かつ世は太平に小人かつ世は亂るゝと同じことはりに候今學者の天理人慾と說き道心人心と說善惡の性と說佛魔と說き眞如無明などと說くも人想像の異るよりあし濱荻と名づけかへたるにて本來に別ものあらん樣なく候情慾は學ばざれども知りおしへざれども能しおのづから其私に入るものにして意智は學びて知り習ひて能し思惟分辨して其公に就くものなり此故に人才異なるにはあらず治亂は君子小人戰の勝敗にあり人心別あるにはあらず君子小人は情慾意智戰の勝敗にあり故に一旦慨然として男子の志を立んとならば自家情慾意智の態をよく探りわかち意智を以て情慾にかたしむべしこゝにおいて大憤を發し大勇猛を以て是に繼ぐべし其憤は舜も人なり我も人なりいかなれば我は祿祿の徒たるやと口惜くおもふ事なりされど勇猛のこれに繼ぐものなければやがて退屈を生じ安をぬすむの心にくみしかるゝなり士不可以不弘毅任重而路遠仁以爲己任不亦重乎死而後已不亦遠乎といふもこれなり毅とは俗にいふ精强きなり重を荷ふ力は有ても終日荷ひとぐる精なければさきに荷ひし力も用たたず孟子に浩然の氣を養ふといふもこの工夫なり憤れば志たつ毅もつて其志を遂る時は情慾終に使令となる今それ女子は物に恐れ驚きやすく心根甲斐なきものなりされども怨むる事あり憤ることあれば丑の時參りとて深更に忍び出往來も絕絕なる深山幽谷の神佛にも狐狸豺狼の恐れもなくひとり詣づるなり無賴の强盜奸賊といへども道をさけ息を潜む今道に志さんとして種種の葛藤に足手をまとはさるゝものは憤發らず志立ざる故半途にして廢れんとするなりむかし宇喜田秀家の長臣稻葉內匠主人に怨あり異心をさしは

さみ病と稱し來りとふものあれば劫しに質をとり是に從はしめしが上田土佐とて鐵炮頭つとめける士かかるたくみ有ともしらず何心なく尋ねけるに稻葉壯士七八人に使令して劫して我に從へしめんとす上田限にかどを立友をとふは一旦の禮君につかふるは終身の義友をたすけて君にそむく道やはある面面身の不義に陷るをば恥ず義者をそこなはんとはかるよな我首は地に落よ節をばいかで奪ふべき稻葉にあはばさし違へて死なんず物を逐ざれば力なしと刀を撫(ヲサ)へ中をはたとにらんで立けるが七八人の壯士氣を呑れ手ざすものもなかりしとぞこれ上田君につかふる事を一筋におもひこみたる故に惡黨犯すことを得ず上田ここに趑趄嗫嚅せばいかんぞ兇徒に擾られず節を全ふし身を損なはざることを得んや是を以てかの女子丑の時參りの志を善道にたて土佐が他なき勇を養はん誰かは我葛藤をなすべきよく思ひ給ふべし以上天明壬寅霜月

追腹考

予が觀る所を以てすれば追腹は人皇世を御してより百一代

後小松天皇明德三年庚子に起りて百十三代

靈元天皇寬文八年戊申實に　嚴有院殿(家綱公慶安四年代立)在職の十八年にあたりてたえ前後貳百七十七年の間なり其濫觴を尋るに足利家開國の元老細川武藏守入道常久は仁惠あつき人にてふかく士の心を得たり入道の內に三島外記入道といふものあり武州と同年にして武勇の名もかひがひしかりけりさる程に武州もわきてなさけを懸けられしが外記入道これを感じつねに武州に申けるは我不肖の身として叨に君寵を擅にせり我身君に先だち侍らんは是非なしもし不幸にして君我にさきだち給ふともあらば一日も後れ

は中まじと常々申居たりしが武州損舘とき
くよりやがて念珠とり從者を供し屋形へは
ゆかず勘解由小路より朱雀の道場の側ふか
き御堂のあるに立より西にむかひて手を合
せ南無教主彌陀善遊極重惡人無他方便の本
願誤らせ給はず今日の新幽儀武藤入道の靈
並に從死外記入道を引接し給へとて腹十文
字に搔切り刀を咽に突たて手を合せて死し
けるを世の人凡人の家僕たるもの戰場にて
主と同じく討死するも腹を切るも古今に多
かるべし病死の別をかなしみて正しく腹を
切て同じく其途に趣く事前代未聞の振舞か
なとみな人感じて稱しける明德記時戰國にあ
たり人道をしらず唯任俠を好み鈌鈌たるも
のを義とおもふよりこれを節義報恩と心得
終に殉死の風きそひいやしくも然らざれば
怯懦の名をうけ嘲弄の辱をとり人の間に立
事を得ざる程に豪傑の士は是を僻事とお

もひながらも滔々の勢いかんともしがたく
幾ばく英雄をかむなしく地下の寃魂となし
けんこれ三島入道不學蒙昧にして非義の義
をとめて義とせしより時學の道たえ是非を
分てる人なく三島が非義の義を稱して和せ
しより志士の氣を激し
垂仁天皇已降千四百年來已に愈るの舊疵を
ふたゝび發し毒を後世に流しけり三島が罪
誠に天地に入べからずして學道廢れたる弊
こゝに顯れたり當時文明此非をてらす事な
くんば此禍いつかやむにいたらん其追腹行
れし日の事をおもふに人心の明はいまだか
つてやまざるものなれば豪傑の徒其僻事を
しりて禍を轉じて福となせし事ども多かり
是照代蒙殉の漸ともいふべき類されば天正
海內糜沸の頃豐筑肥薩瓜のごとく裂け各雄
を爭ひしに豐後屋形より立花丹後入道道雪
を西國の鎭として筑後高良山にさし置る道

雪行年七十二陣中に卒去あり遺言して山下に葬らしむ此時薩兵誠波濤の驚き風雨の至るがごとく氣已に九州をのむ筑前立花の城大友咽喉の要害なるにより息飛驒守統虎これを守り太閤秀吉の援をまつ時に高良主將を失ひ衆議未決せず由布雪荷なるもの淚を拭ひ吾輩相從つてここに來り主將の遺骸をここにすて恝然として歸るに忍んや我願くば腹をきり黃泉に追從せんといひければ衆みな是に同せり時に薦(コモ)野彌助といふもの從はずしていひけるはもししからば先使を遣し立花にましますを統虎をもむかへ自害をすすめ其後各殉死し給へ今此座中の面面いづれか統虎の股肱心膂にあらざるしかるを各腹切て四面敵をうけたる孤城に若年の大將を殘し置きいひがひなき死をさせ參らせん事本意なるべきや先退ひて君と一所になり死力を盡さん社入道殿の幽魂をも慰め奉らん死するは易し生て功を立るはかたしといひければ衆議是に一決し立花に退き薩兵を防ぎ終に、太閤の兵をむかへ二度運を開きたり（戸次軍記）又備陽の宇喜多侯病あつかりし時左右をかへり見て我死なば誰か我に從はんと有ける左右未答ざるに老臣花房すすみ出人鬼途異り冥漠の中いづくんぞ臣僕を從ゆる事を得ん君の左右はみな嗣君の肺腑耳目にして邦國を補佐すべき者共なり無用の地にすつべからずもしやむ事を得ずとならば國中豈老高僧なからんや殺して道びかしめんと諫けり（閑齋筆記）おもふに此老臣さぞ文にても讀けん陳子元以殉葬非禮也雖然彼疾當養者。孰若妻與宰の意あり滑稽に似たりといへども慨然として世習を傷むの意言外にあらはる國初藤堂和泉守高虎在國の時ひとつの箱を書院に置き領地伊賀伊勢にて我に殉死せんとおもふものは各性名をしるし此箱內に

入べしと令し其後箱を開て四十餘人を得又駿府にて三十餘人を得たり高虎其姓名をしるせる簡を携へて　東照公にいたり是臣が御先を仕御用にたたん者どもなり嚴命を以て殉死を御とどめ給はり候へと願ひ退いて此趣を右の人人に示されけるに其內一人右の腕不具なるがありて某はかかる身なればながらへて用なし我ひとりはゆるし給へと願ひける　君聞し召和泉守は我世世の先手なり命に違ふものあらば和泉が先手取あぐべしと仰出されけるにぞこれも大に恐れをなしておもひとどまりぬ藤堂は伊勢阿濃の津の城主にて尤要害の地なればある時土井利勝に對し我子不肖にして大事の地に居らしむべからず宜しく其人を撰んで任ずべし是を台聽に達し封を轉じ給はば臣が幽魂地下に安からんとて地圖を捧げ其要領を指點し其守を代ん事を奏しける　君つぶさに聞

し召敢死の士七十餘人あり舊封うつすべからずとの給ひ子孫今に此地を守らる近代碎王話是皆死の益生に如ざるをみればなりされどもなべての風習好尙をなし是を勇とし義とし忠としからざるをば不勇不忠不義とせし時の榮辱いかんともすべからず寛文元年七月水戸權中納言賴房卿薨御の節眞木左京、山野左衞門太夫、田代三郞左衞門等を始として誰彼追腹の覺悟なるよし嗣君光圀卿きき給ひ自左京が宅へいり給ひ殉死の義にあらざる事をいと念頃にさとし給ひけるほどに其輩みなその理に服し感泣してやみける西山遺事かかる事どもにいつとなく其理ひらけけるにぞ松平伊豆守信綱老中たりしとき數代因循の非をかんがみ　嚴有院殿に此非を改んことをこふ　君英斷果決ましまし其令を下し給ひぬ駿臺雜話その來由を考るに御父　大猷院殿家光公の御時の老中阿部對馬守重次は

天下の政道にも取はからひ宜しかりし故御覺も他に異なりよつて其才を惜ませ給ひ我百歳の後後の將軍を輔すべし從死の儀あるべからずとの遺命に背きおしみても猶おしむべき身なれどもおしからぬ道に死ぬる物かな

と辭世して五十三歳殉死あり　嚴廟あらたに世をしろし召ふかく重次をおしませ給ひ御年長じさせ給ふにつき彌無益の事に思召

寛文三年五月廿日に下し給ひける令

一、殉死は古より不義無益の事なりといましめ置といへども被仰出無之故近年追腹の輩數多有之向後左樣の存念有之者は常常其主人より殉死不仕樣に堅く可申含候若以來有之においては亡君不覺悟の法度たるべし跡目の息をも不押留義不屆に被思召候也

しかるに奥平九八郎信昌の孫美作守忠昌下野國宇都宮にて十萬石を領せられしが同八年戊申七月卒去あり家臣杉原右衛門兵衛といふもの〻いかが心得けん追腹す是近年かたく制禁の處違犯の義に因て同八月三日嫡子大膳亮昌能を　殿中へ召れ上意の趣大膳亮儀父美作守死去の砌召仕候者追腹仕候殉死禁制は先年被仰出の處右之仕合大膳亮不屆に思召急度仕置にも被仰付べしといへども御代代御奉公相勤其上美作守事當御代部屋住の時分　大猷院樣へ御付被成候筋目有之につ い て 御寛免なされ羽州山形において九萬石下し置る旨老中列座にて酒井雅樂頭演說あり同五日在江戶諸大名並諸番頭物頭をめされ白書院に置て此旨酒井雅樂頭より命を傳へらる偖右衛門兵衛が子杉浦吉右衛門稻田吉十郎斬罪聟奥平五太夫孫稻田瀨兵衛追腹ありここにおゐて天下の宿酲初てとけたり集秘錄　嚴廟より殉死は右より不義無益

の事といましめ置とある事は是　東照宮の神慮をさすなるべしその故は　台廟同腹の御弟松平薩摩守忠吉公慶長十二年三月五日品川の驛にて卒去の時武德成記大増上寺にて取置有けるに近習の侍三人殉死の由駿州にて東照宮聞し召し死は古よりある事なれども用にも立ざる事なりかく迄主人を大切におもふならばつぎの主人につかへて身命を抛つべき事なるを犬死をとぐる事畢竟主人のうつけ故なり江戸老中どもさしとめずしてかなわざる儀なり猶とどまらざるにおいては將軍さしとむべきとて御機嫌あしく駿河土産慶長十四年閏四月八日　宮の御次男權中納言從三位兼行三河守源朝臣秀康卿享年三十四歳にして越前福井において逝去同九日寵臣永見右衛門長次一萬七千石心月寺にて殉死陪從田村金兵衛介錯し終つて又下從(カジウ)す同寵臣七屋左馬助昌春大野城代萬五千石　三孝顯寺にて殉死宰臣本田次郎太夫富正亡君の遺旨を言上のうへ殉死せんとするのきこへありければ台廟より御墨印　神君より御内書を老臣に下さる其文に曰

就中納言死去追腹切可仕と申者共有之由被及聞召候致其死者易立其主者難若於有左樣之意者越前者肝要之地候間別而手置可被仰付候中納言在宿之輩者左樣之儀有間敷候若於有之者子孫迄可有御絶御意候也

閏四月廿四日

越前老臣中へ

老臣集會して富正に向ひ足下殉死せられば幼君忠直主の封をとどめらるべき重き命あるよしをさまざまに諫めければ富正なくなく思とどまり薙髮しけると武德編年也さる程に東照宮　台廟さばかりの大德重華なりしかども下從の人なかりし事駿河土産常に其非を

近臣にさとし給ひし故とみへたり然れば此禁　嚴廟より出といへどももとより　東照宮　台廟の御意にしていまだ其令なかりしなるべし大なるかな此擧數百年の舊習をめぐらし將來億兆の命をすくひ給ふのみならず人をして大義のある所忠のむかふ所をしり以て死生の故に惑はず天下を擧て是とするもの却て非にして天下を非とするものの是なるをしらしむいにしへより君師とつづき教化といひ天下に師とし教ゆるは君の任なり天下に君たる人にあらずしていかでか擧世の是とする所を轉じて非とする事を得んや將來天下を有する人ここにかんがみ給ふべき事猶多かるべし前に千四百年以降といへるはむかしも此ためしなきにもあらずされどもむかしは生ながら人をとりてこれを土中にうづめ近代は人自すすみて死を獻せしなり

垂仁天皇三十二年皇后日葉酢媛命を葬らんとして從死の不可なるをいたみいかがせんと思召けるに野見宿禰埴を取て人馬種種の葬にしたがふべき物のかたちをつくり是にかへんと請しかば天皇喜んでその土物(ハニモノ)を日葉酢媛の墓にたて是を土輪(ハニワ)と名づけ後葉の法となし其功を嘉し土師臣(ハシノオミ)と姓(カバネ)を改め給へり日本紀　是より明德三年にいたりて實に千三百九十年なり菅原も此末にしてかかる永久の德を垂ける故にぞ瓜葛今に連綿として清門たる事を失はず是によりて是をおもへば昭代の行末も千代萬代とさかふべし東涯先生の弟長準久留米にみやづかへしに郊外人形原といふに泥人其大さは人ほどにして狀もろこし人に似たるが數技いかにも物ふり倒れ横はりてあるをあやしみて兄に問れしに東涯は和名抄に埴輪は山陵の緣邊に埴の人形の車の輪のごとく立るといふことあれ

ば古の泥偶の環(クダ)り立て侍るをなせし物の遺れるならんと考られしが（盍簪錄）必さる事どもなるべし戰國の頃の事猶久しからざれども今よりして思ふに君寵ありてことごとく追腹するにもあらず其差別いかんといふ事にや詳ならず又大將分の人追腹といふ事もきかず織田信長明智にうたれ給ひ元龜十年六月十一日訃音秀吉の尼ヶ崎の陣にいたる秀吉これを聞し召しやがて剃髮あり時に池田勝三郎信輝入道して勝入と號し高山右近友祥入道して南の坊と號せり（三河後風土記）秀吉薨去の時も淺野長政石田三成增田長盛等各剃髮せり此時の風主恩をうくる者其喪にあへば剃髮して（秀吉家譜）長く剃ると髮を蓄ふるは心次第の事とみえたりおもふに是等の事殊遇をうけし大將分なる類の人の禮なるべし文祿四年七月八日關白秀次太閤秀吉に見捨られ高野にて生害の時雀部淡路守介錯して其刀を持て自殺せしはさも有べし山本主殿不破萬作山田三十郎各十八歲ともに殉死せしは寵遇の人人なりけらん東福寺の僧際西堂なるも殉死せしとなん（落穗集）方外の徒何の故なりけんあやし鱗岳法師が勝頼の難につきしたがひ天目山にて打死せしとは懸隔の沙汰なるべし此頃富田藏主といへる武勇の僧あり關白秀次是を稱して一萬石の所領を給はりて有しが秀次生害の時富田殉死せんとて北野の堂に赴きしを朋友ども集り諫けるは足下の殉死何事ぞや恩顧にあづかるといふにもあらず一萬石の知行は槍先にて取たれば是又恩寵といふにもあらず無益の殉死其用なしといふに思ひとゞまりたる事あり（三河後風土記）時の人笑ひし他なれども死なざりしはさもあるべくおもはる是等の事をおもへば武邊の功はさるにもあらず殊遇昵近のみしかありしにや加藤清正卒去の時大木土佐とい

ふもの朝鮮人金官と共に追腹しけるに三宅角左衛門樣子を見させても武邊に適ひたる侍かな異國本朝にて數度の忠功を致し厚恩を蒙り今又黃泉にて御供致す事うら山敷武士かなとて土佐が死骸より流れ出たる血をとりて手にいれいただきてなめたる事あれば（清正記）これは武功に專なる樣にあれども内恩より出たる事もあるにや三宅はかく羨みて死ざれば是は死ざる故ありとみへたり重次は老中也永見大屋も大臣なり富政又宰臣なり承應三年黑田筑前守忠之卒去の時家臣黑田五郎兵衛（一萬石）從死（祕錄集）これ等昵近ともいひがたし定めてかかる人は格別の故ありしにやつらつら思ひめぐらし侍れば國初にいたつては戰國の頃よりは殉死の勢いやましに成りしにやたとへば信長志津が岳の七本槍の類いづれか殊遇にあらざらんされど一人も從死なく又傍より其死なざりしを嘲りし沙汰もなしいづれにも從死の徒は子細ある事なるべし分明の事臆度に得がたし大かたは始めは殊遇眷顧の人なりしを是を忠義と思ひあやまる故大臣外臣も是をいさぎよしとせしならん猶他日の考をまつ松平薩摩守忠吉卿品川薨御の節遺骸を增上寺に收めける尾州犬山の城主小笠原和泉守有司をよび今度の儀殉死の輩棺四ツととのふべしと有ける有司退いて其一人をとふに石川主馬稻垣將監中川清九郎三人と聞へし程にかさねて和泉守にうかがひければいらざる事とふ物かな才覺してあまりなば我殉ふべしとていかりける程に有司あやしとおもひながら四ツととのへて置けるに其時に臨みはたして三人のみぞ黃泉の供は有けるさて和泉守子に監物といふもの薩州の勘氣を得て松島にありけるが父よりかくとしらせけるほどにほどなくはせ來り落髮の體に長上下を

着し太刀折紙を携へ主僧存應に志をのべける程に存應牌前に向ひ勘氣のわびを願ひ終に腹を切しとぞ落穂集是は義に似たるほどに學ざる人は誤りて義とおもはんこれ賢者は過るのいひなるべし國禁の後かならずいふべきにあらず赤穂の變不和數右衛門長矩に勘氣をうけて居たりしが大石等と復讐の志をとげ泉岳寺にて皆燒香せしにおのれひとりは勘氣の身なれば拜禮を恐れてひかへたるを大石勘氣のゆるしを願ひ燒香をとげ同じく上の命に隨ひ死をとげしとは明鏡記大に隔ありと覺ゆ今の婦人夫に後れて髮をきる事は烈女傳などに見えたるはきわまれる俗にはあらじ節を守る婦人を無理に志を奪はんといへば耳をそぎ髮をきりいかにも見ぐるしきかたちとなりて世の人の情をたつなり今の髮をきるは剃ると同じ事にて尼のかたちなり　柳營不諱の時をきくに侍姫殊遇あるもの皆願ひて剃髮すとかや是等の事男子剃髮の風はやみ婦人剃髮の風は猶殘れるなるべし髮をきるは夫なくして首飾をすつる事さも有べしもろこしは文も盛に周公孔子の國なるにちかき元明猶今の胡淸にいたりても夫死すれば自經して身を殉ずるを貞烈の樣にも心得公にもこれを旌表し儒者等も稱賛する程に今にたえずとみえたりうろたへたる事なり男女の愛は他に異なるものなれば其嘆にしづめる頃死するは易き事なるべし夫已に死する日は婦人は男にかわり舅姑につかへ子孫の敎はごくみも己ひとりに歸する身の故なき死をいたし舅姑父母のなげきをまし子孫を孤獨となし狂者と同じものなるを賞する事こそ怪しけれさて佛家に火定水定などあり正しく弘法も入定のよしなりかのおしへには定めて子細功德ありとする事なるべけれども有國者はその愚をか

なしみかかる事は禁制ありたき事なり近き頃此あたりにても淫佛の徒一兩輩定に籠れり佛中の殉といふべし又思ふに保元のむかし源義朝勅により弟乙若十三龜若十一鶴若九歳天王七歳なるを船岡山にてはたのの次郎に命じて是をきらしむ其時天王のめのとを内記平太といへるが別れを惜みひたたれのひもとき天王を肌にあてゝこしかたのことどもかきくどきよしや命存らふとも千年萬年歸べきや死出の山三途の川をたれかかいしやく申べき恐しく思しめさんにつけても先我をみて尋給はめ生て思ふはくるし主の御供仕らんと腹をきり格勤(カクゴ)二人有けるもともにさしちがへて死けり是を時の人合戰の場に出て主君と共に討死し腹をきるは道の習なれどもかかる例はいまだなしとて譽しとぞ（保元物語）是近代の追腹に似たれば其始ともいふべき樣なれども是は君辱らるれば臣死するにて後世追腹の濫觴とはなしがたし

天明壬寅霜月

答上田養伯

終りを愼しみ遠きを追ふは本に報じ始に反るの道なれば尤切なる御問に候されどもこなたには愚に解れるこゝろより聊これとおもひ付たる事もなく只世と推移り候歳首年尾朔望等只時なう物をすゝめ候今はおしなべて浮屠氏の敎に化し春秋二分を到彼岸とし中元を于蘭盆とし皆幽魂を祭る事にして新亡は七日ごとに僧を招き五七日盡七日百ヶ日小祥忌大祥忌七年十三年二十五年三十三年それより五十年百年忌日を用ひてまつる檀那寺の僧招き親しき輩打集り素饌を薦め讀經とり行ふ事上一人より下億兆にいたるまで定れる法なりこれを僧徒にきくに佛子の敎は四十九日を過れば生を他に託するとする故追善作福これを盡してやむ地藏本願

經といふには七日より百年の追福もみえたれども此經は僞經の部にいれりとぞ小祥大祥儒教の禮にしてその以上は我國のちかきならはしなるべしされども今はおほやけの法となれば晉も此儒にとり行ふ事に候且こなたは山ふかく閉籠り人と行かふ事も稀なれば餘所の事はしらず此あたりの風俗は盆には田なつもの畑つものくだものあらゆる品ども枝ながらつみ穗ながらとりてすすむる事なり禮記に禮庶人に下らずとは庶人は禮をおこなはずといふ事にはあらずいやしきものは己が口に糊ひ身に着るいとなみより凡百のことまでみなみづから役をとる事なれば禮の儀をそなふる事能はざる故粟飯を椎の葉によそひてあるじまうけたれる樣にて貧敷やつやつしき下樣はそこそこに備れることなきのいひなればあまり野なる樣なれども我國のいにしへ幣を眞賢木の枝にかけひとの國の太羹玄酒の遺風にてかからんもまたしかるべし耶蘇の亂ありてより尊きもいやしきも一人として葬祭佛を奉せざる事なく皆入道の法論を奉ず戰國の頃君の殊恩をうけたる人はかならず一度は髮を剃しが今の世はやみたりされど婦人の夫に後れたるは髮をきりて入道の形と成其頃の風のなかば殘れるなるべし公法年ごとに宗旨改とて宗門の奉行ありて邪宗の濫入を禁ずるゆゑ居住嫁娶につけても是を出れば彼にいる旅におもむく往來の劵にも某某の宗門に紛れなきことをのせてこそ關路も通ふぞかしさる程に今の住持は王公の祿をうけ死屍を檢し非常の姦を監し鬼錄をつかさどれば世捨人にはあらで職掌もてる官人なり故に身は輿馬にのり格錄の先後大小を論じ從者劒戟を列らね身綾羅錦繡をまとふ是を以て今葬送佛をもちゆるは其道に歸依不歸依

によらず只公の法令なり禮典にも非㆓天子㆒不㆑議㆑禮とて下たらんものは愼んで其公法を奉ずべき事なりもろこしのみちは祭と忌との別あり先父母沒して三年の喪あり喪は凶禮にして祭は吉禮なり忌日は終身の喪とて凶禮なりめぐりてもとにかへるなり忌日の事古は甲子を用ひて一年六度とする事古學文集に考出せり今は何月幾日と定むる故一年一日の忌日なり甲子のめぐりにてとる時は正月なるべきものの二月春なるべきものの夏ともなるべければ今のならはしには行ひがたし今のならはしに任せ月日相あたるを正忌日と定め月ごとに其日のめぐり來るを月ごとの忌日と定め追慕をのべなん事人情に適ひて恰好なるべし忌日はなき人に別れし日なれば忌の内のごとく酒肉をしりぞけ絃歌を用ひず慶賀遊宴にあづからざる程の事は大樣は行はるべし喪服をつくることは世に

怪しげにぞみえん菅家は八月十五日家忌にあたれる故生涯月見の宴にあづかり給はざりしとみゆ今唯さかなくはぬ事のみとおもへるは淺ましき樣なれども亦告朔の餼羊なればせめての事とおもひ侍る祭は四孟に日をトし或は冬至に其祖を祭り朔望に奠あるの類酒肉茶菓そなへ祭ることなり今春秋二分中元の祭といふもともに誦經寺まうで吉凶禮の別あるにあらず諸侯の家或は士太夫等の家たまたま儒家の禮を用る人もあれど先公の佛法を修せざる事を得ずさてその祭の義は感格を主とすることにて散齋三日致齋七日不淨をさくる爲に明衣とて上には布の衣を着もろもろの心を擾る事に接せずそのものいみする思㆓其居處㆒思㆓其笑語㆒思㆓其志意㆒思㆓其所㆑樂思㆓其所㆑嗜つひにその爲にものいみする所のものをみる祭之日入㆑室優然必有㆑見乎㆓其位㆒周旋出㆑戶。肅然必有㆑聞乎㆓其容聲㆒出㆑戶而

聽レ之。愴然必有レ聞レ乎二其嘆息之聲一然して後よく感格を致すとなりげに誠ならざれば物ならざるにてしかありたる事なりされど我疎懶無狀にして凡百自とれるのいたつかはしきなど折そへてかくいみじく取行ふことなりかたく我分ほどの誠をとりて冥漠の間につかふるなり我もと寒鄕の一墮農儒者にもあらず佛者にもあらず王化の内に遊べる身なれば局にあたれる人の碁を傍觀する樣にて肉饌を供ふるも素饌をもちひるも如在をつくすの上に異なることもあらじむかし貧女の魂祭すべきものもなければ蓮の葉をとりて

　たてまつる蓮のうへの露ばかり
　　是や衾と三世の佛に

といへるを人みな美談とすること是を大牢の滋味にかゆべくおもへばなりさて右ほどの事ゆゑ吾はあながち追善作福の力をかり化者を安養淨土にいたらしめんと云にもあらず只王者の法にしたがひ至誠にして神の感格を致ほどの事こそあたはざらめ誠に敬ふ心をもて本に報じ始にかへるの美をあつくすれば冥漠に接するに遺憾なくおもひ侍る其故は今の世にたとひ儒家の制を用ひんとも先あらはには僧徒を招き其法を修しひそかに家にこれを用ゆるほどの事なりしかせざる時は僧徒等公法をさしはさみとやかく小事いひてやまずさるほどに祭法用ひんとならば世法のほか四孟伏臘の外に祭侍らんなどは時制にそむくにもあらざれば心の儘なるべしされども我はあらためてしかるほどの事もなしいつも位牌には素饌なり墳墓なども棺の上には土を封し神道の右に石碑を置近來古學紹述二先生の墳墓などしかなりされどかかる高名の人は其名不朽にたるる事なれば後には舊跡となり昔をしのぶ跡

ともなりなんかたいなかなる人のかからんには樵夫山童碑下を埋骨の地とし封土をば閑地となしたとひ發掘なくとも豈牛羊上丘壠の嘆なからんや遠慮あるべき事なり今の世は服の名ありて服なし我藩中は忌の間孝子はあら布の衽衿十德を服すさもありけなり是はひろく施して然るべき風なり戴記曰、君子行禮、不求變俗、祭祀之禮、居喪之服、哭泣之位、皆如其國之故、謹修其法、而審行之、とあれば我なすわざも或は古人にそむかざらんかさるほどに今御問にこたふる程の事もなく候猶事しれる人に御問御正し可然事に候以上

天明乙巳夏四月

小門山記

國東郡の東北海に近うして一峯を挺んづ峨眉山といふ寺あり文珠仙寺と號す

按ずるに國東郡源順の和名抄には國埼とかけり洞院實熈の拾芥抄には國崎とかけり崎の字埼正しきよしは東厓の盍簪錄に辨せり大友の頃より細川三齋小倉を鎭せられし頃迄は國東とかきしが後又國崎とかけり正德の頃古に從ひて埼の字を用ひたり東厓の說によれるにや今はまた國東とかけり鄕の名には和名抄に國前(クサキ)とみへたり此峨嵋山むかしは靈鷲山といひしよしみゆ文珠より淸瀧の觀音といふに詣づる道に鷲の翼を戢(ヲサ)めて立るがごとく下小く中大に首は西にむかふたる樣の岩ありこれを天竺鷲の御山になぞらへていひしにや

此東南にあたつて一峯競ひ峙つ小門(ヲドム)山といふ

按ずるにおどむれもと雄牟禮とかけり豐の山、栂(トガ)牟禮、角牟禮、熊牟禮、猪(キノ)牟禮、などむれと號する所多し日本記に山といふ字をむれとよめりこれ韓語なるべし韓人鴨綠江

をありなれといへり彼方人山をむれ川をなれといふにやしらず晉考ふるに峨眉山とおどむれとの間に地藏が尾とて嶺あり是より東につたひ行ばおどむれに上るなりその道に小き石門のやうなる處あり里人針のみみといへり小門を古をとといひ山をむれといひたれば古義に從ひて今字を小門山とかけり字は新なる様なれども義はふるきにかなふべし

足曳の嶺より望めば雙翠宛然として宛も處女黛を拂ふがごとし峨眉の名ここにとれるにやその小門山の頂城塹の跡のこりて古戰場のよし傳ふれども口碑の徵とすべきなしこの頃人家にして一幣冊子を得て是をよむに大友系統のあづかる所にならずこの冊もまた後人の耳聞をしかせるものと見えて齟齬少からずといへども大友家乘の脱漏を補ふにたれば愚案まじへてここにしるし侍る

其說蓋大友十五代豐前守親繁

按ずるに召心源寺殿心源道法公菴主男子六人あり嫡を五郎左衞門大夫政親といふ次男七郎親能三男次郎備前守親治五男見友傳六男七郎次郎親歲なり

按ずるに此次弟誤るに似たり見友は親治の院號なり入江の系圖に就て考るに五郎左衞門太夫政親母は親隆の女親隆息川田四郎親滿早世により十一代の屋形親著の子親繁を養子とし己が子に配して十五代の家を繼がしむこれ政親をうむ政親の弟を七郎親胤といふ又の字親勝此小子いはゆる親能なり親能は一法師能直の假父齋院次官の名なれば親胤實なるべし三男日田六郎親常四男七郎次郎親歲五男次郎備前守親治法名見友院見友梅屋其次に僧又五郎親照又戶次親一と稱す

然るに七郎親能は肥後にさり五男親治高崎

の城を守れり親繁沒して政親政親沒しての
ち嫡子五郎修理太夫義右相續て十七代の屋
形たり
按ずるに此人の名本書に材親とあり
軍書等に義右とあり田原系圖五郎修理太
夫始材親後右義又義豐といひ童名鷹房丸
といひ猶同胞の女子二人みえたりよつて
ここに義右と書せり
此人いく程なく世に即きて備前守親治府內
の城にいり甥の跡をつぎ大友十八代にたち
嫡子修理太夫親元に國を讓れり
按ずるに政親の法諱海藏寺殿從四位下行
兼三州大守珠山如意公菴主寺は臼杵門前
村羽衣山にありしが今はあれて其跡のみ
殘れりといふ義右即大智寺殿前匠作大監
兼二州大守傳芳成眞大居士寺は府內にあ
り修理太夫親元軍書等大友の系圖にも義
長とあり入江系圖を按ずるに親元童名は
鹽坊師丸五郎修理太夫後義長とも義親と
も號すとあり
是を十九代とす因て十七代修理太夫義右の
子五郎義鑑かはつて高崎の城にあり
按ずるに是即到明寺殿前匠作兼六州大守
松山紹康大居士到明寺は佐伯きり畑村に
ありといふ始の名は親安又親敦と云天文
十九年庚戌二月十二日卒す年四十九
是即親元の徒弟剛勇にして嫡孫たり時に豐
前見岳の城主田原中務小輔親直高崎に來る
事あり
按ずるに是紹忍の曾祖父なり田原の系圖
にみへたり
親直義鑑のごとく宗領たるにより是をすす
め親治親元を追ひ其嫡流に復せんことをす
すむ義鑑悅んで密書をしたため速見郡木付
の城主木付紀伊守親實に此事を告げ
按ずるに此紀伊守親實は木付氏十三代の

主也木付氏は大友左近將監能直の子利根四郎大炊介親秀の子長子は大炊介頼泰とて大友の家をつぐ次戸次左衛門尉重秀次野津修理亮能泰次狹間四郎大炊介直重次野津五郎親直

按ずるに田原系圖に始親直と稱し後頼宗と稱す次親重末の弟田北兵衛親泰其弟に由僧良慶その次親盛とて早世なり親重親泰頼重と同母三浦肥前前司家連の女にして建長元己酉大友より此地を賜ひ翌二年庚戌二月將軍頼嗣に謁し速見郡武者所をさづけ大炊六郎肥前守左衛門と號し速見氏と稱せしが親重の子木付太郎大炊介能重の時に木付氏となれり相續く事十七世三郎左衛門統直文祿二年義統朝鮮の役勇なきにより改易歸國のみぎり此事をくちをしく思ひ同六月二十一日豐前門司浦にて生害入水よつて闕國となれり統直辭世

いにしへをしとふも文字の夢の月
いざいりてまし阿彌陀寺の海

法名香壽院殿幻應宗心大居士此親實は木付氏十三代にあたる建長元年より文祿二年迄三百四十五年といふ此年宮部善祥坊中務卿法印桂俊高田より木付に來り北四郡に竿を入古來六尺五寸竿三百六十坪を三百坪となす南四郡は山口玄番頭多多良正張奉行たり文祿四年より前田徳善院僧正玄以大坂五奉行の一人かの地より木付を兼帶あり翌慶長元年杉原伯耆守平長房二萬石にて木付に來り慶長四年細川家の領となり松井佐渡守康之有吉四郎左衛門立行これを守れり三十年を過て寛永五年細川に從ひて肥後八代にうつり同九年丙申に至り小笠原壹岐守忠知木付に入たまふ十四年を經正保二年乙酉　松平東市正重

賴公高田より木付にうつり給ふ此君一の諱は　英親世に　宗閑公と唱奉るこれなり　宗閑公の御孫　松平豐前守源重保公即龍溪院殿正德二年壬辰八月十四日杵築といふ字にかへ給ふ

時は永正二年乙丑六月十三日由布岳に相圖の猛烟をあげければ由布豐後風土記には柚富とかきたり

按ずるに此時の將軍は足利義澄朝臣也

親實より入田丹後守山下和泉守小田原土佐守に三千親實より古庄藏人

按ずるに古庄は大友左近將監能直豐後守護職を賜はり鎭西奉行に補せられ建久丙辰鎌倉を發せし時古庄四郎重吉といふもの三百餘人にて能直の前駈たり首藤衞藤高山舞材甲斐瀨矢野等の諸士旗本たり同三月十日豐後につき豐後の舊家大神惟義一族大野九郎泰基と直入郡神角の城に楯籠りて拒むをせめて利あらず再び鎌倉より援兵をこふてこれを平らげ田染牧及鳥帽子岳の城主として世世ここに居れり朽網、小田原、波多、草地、高田、寒田原尻、永富、村上等これよりわかれたりその末大永の頃右馬助長方といふ者其子を中務大丞長範といつて天文の頃の人なりその子右馬允某天正六年吉弘左近太夫鑑理に屬し日州耳川に戰死せしより家おとろへ此時其子九歲なりある一族家督をむさぼる事あり流落して豐前四日市眞照寺に歸して圓頂方袍終に鸞徒となり卒ぬ

臼杵山城守に三千餘の兵をさづけ高崎におもむかしむ義鑑此兵を得て同六月二十日府內に押よせ辰の刻より酉の下刻迄火を出してせめ戰ふ城中うたるるもの三百餘寄手は五百の餘に及べりされども寄手勢盛にして城中ささへ難く親治嫡子修理太夫親元弟次

郎親敦その弟十郎重治親元の夫人及家臣藤原信濃守近清、永松刑部太夫春政、本庄九郎左衞門滿末、本多與二郎輿英、都合三百二十三人ひそかに府内の城を出六月二十三日國東伊塚の城にいる

按ずるに伊塚の城は國東安國寺村にあり伊塚の城主田原中務太輔親述これをいれ

按ずるに田原は左近將監能直の十一男親秀の弟左近藏人泰廣といふより分れて始て田原と稱す泰廣の次男二郎藏人基直その子次郎藏人盛直卽寶陀寺殿左近將監直平の父なり盛直の弟豐後藏人直貞其子豐前前司貞廣、貞廣の弟正堅より吉弘、其弟直幸より富永、其弟直泰より俣見の族出たり貞廣の子豐前權守氏能落髮して上總入道と號す又大内と號す横手妙德山泉福寺を建立ありし月桂山永照寺の開山　傳仁公和尚大姉は此人の母上總入道の妻なり如法寺の一統は氏能の弟若狹守氏信如法寺と號せしよりわかれたり氏能の子讃岐守親貞にして武藏田原は親貞の弟二郎上野介親昌より出親直は親昌の曾孫にして紹忍は親直の曾孫なり豐前妙見龍王豐後今市はみな此一統の城なり親貞の子六郎左近藏人親幸入道道秀是を大儀寺殿實田秀公大居士といふ其子伊豫守親憲其弟常陸介氏忠其子治部少輔親宗薙髮して宗傳といふ蓑崎にて討死す墓燈籠臺の畔にあり其子卽中務太輔親述なり其子常陸介親宏又親實といふ大友の爲に戰功多し親宗法名宗傳定林院と號す安國寺は此人きづかれしなるべし親述の弟新九郎政定武藏田原にあり安國寺は兄にして武藏親宏大有院宗龜と號して現に其塔牌安國寺に存せり紹忍八代の祖上野介親昌武藏田原と稱して代代相續せりしかるに親述の弟新九

郎政定また武藏田原とありおもふに紹忍は豐前妙見の城にありしかど一族ゆゑに此人むさしを次で武藏にありしかもしらず是等を考へて思ふに今如法寺と號する地は來浦にちかし大内は田原の上流小野村にあり小野に別墅あり如法寺に一城をかまへ安岐の城により如法寺を一派の別號とし武藏田原にわかちしなるべし親實の事大友の弟を親宏養ひて家をつがしめたりと家系にみへたり大友の弟とは誤りなるべし鞍掛籠城の濫觴大友の息女をめとるべきより起りたればもし養子ならば田原家より得て嗣しめたるなるべし大友興廢記にも養子とあり

郡の北邊文珠兩子龍下山の衆徒及原蕓長野熊毛岐部伊美床並影山八庄の人を從へ

按ずるに本書八庄とありて七ヶ處あり一ヶ所脫漏と見へたり今考ふべからず床並影山は今成佛村の內にあり成佛村は後世にしてむかし床並影山とよびしやしらず

永正三年寅三月事始して小門山の頂に城を築き翌卯の正月にして功を終ふ爰に於て三山八庄の徒みなその指揮に從ふ

按ずるに當時天下の制國の下郡あり郡の下鄕庄あり其下皆村を以て稱す村を以て稱せらるものは城下津浦の類なり今拾芥抄和名抄等をみるに國の管するもの郡、郡の管するもの鄕とも庄とも其名なし國崎郡の管する所里人のいふ所にしたがへば鄕あり庄あるに似たり和名抄國東郡に管する處武藏來繩國前田染安岐津守伊美國崎郡津守なし是は大分郡なるべしこれを除いて六つ里人田染伊美眞玉等を庄といひて武藏來繩國崎阿岐を鄕といへりされど六鄕の字和名抄に從ふべし屋山長安寺大友の頃は六鄕滿山の學頭にして大友家

の祈願寺として屋形よりの書簡とも猶多く殘れり其古記どもを見るに六郷を東西にわかちて東三郷安岐武藏津守とし西三郷を伊美來繩田染とせり津守は國崎郷とすべし閑居口號東西各三郷の說國崎につくるもの是なり國崎郡は養老年中仁聞菩薩といふ有て一郡に寺をひらき本山中山末山數百ヶ寺有すべて六郷山延力寺といへり延力寺とは猶金剛峯寺延力寺などいふ類にて一院の名にあらず一郡中にみてるの名なりさて六郷山は六郷八庄二十八谷といへりされば今の里人伊美田染を庄と稱すれども共に郷なるべし郷庄の別は周南の爲學初問に賴朝下知に從はぬものを心ままに征伐せん爲總追捕使といふ事申賜り國國には守護職をすゑ追捕に事よせて濫妨し國司の權を奪ひ庄には地頭をつけ軍役に事よせて所務をおさへ狼藉す

庄園とは公家官人神社佛家等の私領なりこれを領家といふ賴朝表面は是を制する體にて裏には是を許して朝家をかたむけ國を奪はんとすと有此事もと承久紀にもみへたり其書に曰承久亂の故を尋れば地頭領家の相論とぞ承る古は下司庄官といふばかりにて地頭はなかりしを鎌倉右大將朝敵追討のけんしやうに惣追捕使に補せられて國國に守護職を置き郡郷に地頭をすゑ段別兵粮をあてとらるる間領家は地頭をそねみ地頭は領家をあだとすとありかれこれ相考れば國は郡を管し郡は郷を管し郷の内領家の私するを庄といひしなるべし然れば古郷司庄司の名郷司は郡司のすうる處にして郡司は國司のすうる處なるべし然して庄司は領家の屬官とみえたり予が家弘安八年注進狀といふものあり弘安は九十代

後宇多帝の治世にして鎌倉親王將軍第二代北條時宗執權の時の事なり其狀に伊美田染鄕とありその最初に豐後國中神社佛事權門勢家庄園國領公領田及領家領所地頭辨濟吏等の交名の事とあり然れば名といふもの地頭辨濟吏にあづかるにや兼並の跡とみえて定かにはあらねども名と號するは多くは地頭御家人と註せり然れば庄司名主又別なり本文八庄とあるは今にて考れば村なり注進狀に國崎に庄と書たるは都甲香香地眞玉草地のみなりしかれば古は庄にのみ庄司ありて名にのみ名主はありけんさるを今は村長を通じて名主とも庄屋ともいへり是に因ておもへば此頭村の事を又庄といひしかもしるべからず

又按ずるに地頭の子細並に反別の事木燥卿の撈海一得にくわしく出たりここに出して曰賴朝建言して曰諸國に追捕使を置て盜賊反逆の徒を制し段別に兵粮米をあて此武士を養ひ其頭を地頭といふ一州の統領を守護といひ六十六州の追捕使の總統を自つかさどりて日本の總追捕使といはんと是國司の權を奪ふの始なり地頭の名目は唐書に大曆元年地頭錢每畝二十とあり此已前は是等の事なき故盜賊處處にありて人をなやましが是より世の中靜になれり

又按ずるに今村長の下に辨差といへるかろき役あり弘安の頃の辨濟使なるべし使の字つけば上よりおかる人とみえたり今の人辨濟ともいへりいにしへは勢ありし役人とみえたり

ここにおいて義鑑府內の城に入り大友二十代の屋形となり少將より四位の上にすすめりここに居る事七年永正十年戊酉田原より

其受領のうち八庄親治より押領のよし訴るよしにて

按ずるに此時親述は義治にくみしたるとみへたれば此田原親直なるべし

討手として田原親直に牒し合吉弘石見守直氏

按ずるに吉弘は田原豐前藏人直貞入道正曇嫡子は豐前前司貞廣とて田原の家をつぎ其弟正堅吉弘又次郎と稱す正堅の三男土佐守直輔入道して了曇と號すその子直意直意の二男石見守綱重綱重の次男藏人親利其子即石見守氏直なり今ここに直氏とあるは誤なり其子伊豆守鑑直其子太郎鎭信其子太郎統運即石垣原にて討死せし吉弘嘉兵衞なり嘉兵衞は三代ともに嘉兵衞と稱せしと傳へたり我屋山長安寺に遊びて正しく嘉兵衞尉鎭信の書し書簡ども見たり

寒田三河守親將古庄原の徒と同八月二十八日小門山の麓に屯し原蓑山下の陣は京蘭を極め

按ずるに京蘭は今の成佛村にあり

文殊影山處處に陣をとる都合五千餘の兵その日の卯の刻より軍はじまり申の刻迄三日三夜手痛くせめけれども城中粮富み水多くひるむ色なかりしかば寄手已に引かんとしけるを影山四郎左衞門近末といふものよく案内をしり嶮岨を凌いで鹿垣結まはしたる堀一重のかたにつきにけり寒田三河守是より士卒に下知し松明を手に手に投かけさせければ是に焔つき火さかんに風つよく程なく城中防戰に力つき親治嫡子修理太夫親元二男五郎親敦を始め家臣本庄九郎左衞門末滿永松形部太輔政清本田與次郎興英竹田津兵部烝政時等三百餘人討死すその隙に備前守親治三男菊地十郎重治藤原信濃守近清太田

民部少輔小田原四郎安國長野次郎左衛門助元上下六騎きりぬけ由布岳の麓塚原を過けるに田原親直あらかじめ回文を出し備置けるほどに鶴見の郷司に要られ終に生害あり義鑑九國の探題となり義鑑より義統二十二代の威盛なびかぬ草もなかりけり

按ずるに此記に親治の謚號を見友院殿月海道意大禪定門とあり親治は見友院殿梅屋友公大居士にして嫡親元即十二代の義長にして大雄院殿大眞昭公大居士とあり木付十二代六郎左京亮親家を柏泉院殿月海道意大禪定門とあり書寫の人二名をしるす時一は院號の下を遺し一は院號を遺し誤つて一名となしたるにてぞあらん且此記にて見れば木付紀伊守親實は田原親直と一味し親治を府内に追出せし人なり豐陽志並に木付安住寺位牌の記親實は十三代にして右京亮親家は十二代なりしかるに小門山の軍に木付氏の事みえずさるに記の末に月海道意の法名をあげ豐陽志にも此人は由布岳の麓塚原において生害とあれば親治と一所に死せしとみえたり父子敵味方と分れしにや是より木付の家も代代續きて大友につかへしなれば義鑑にそむきしにはあらず實にあやしむべしよつて思ふに紀伊守親實親直にくみし親治をせめしは傳記の誤なり其故は親實より入田丹後守山下和泉守小田原土佐守に三千さしそへ高崎を攻しといふ事非なり其故は入田山下は大友家の老中なり小田原土佐守同じく大友の家中なり木付氏の臣にあらず是一徴なり永昌五年親治の命にて若宮修造の事あり是二徴なり親家塚原にて生害す是三徴なり豐陽志に考へししかれば親直木付に牒し合けれども親實兵を出さず父親家親治と籠城し塚原にて

節に死し大友の家靜まりて再び親實是に屬せしなるべし

又按ずるに此吉弘石見守寒田三河守は是より二十二年を過ぎ天文三年甲午周防大内義隆の勢ひ襲ひ來りし時是を防ひて同四月六日山香鄕大群野にて討死せり諏訪拙齋の閑居口號には吉弘石見守氏直寒田三河守鑑重討死の日は四月十六日とあり此時岡崎の諸士多くは討死兩子寺福萬坊法印其死骸を得て勇士の官途實名を記し石塔をたてしとあり

永松氏の女に贈りしふみ

通かむかしをきくに其先は足輕にやかろきみやづかへしけるものの末なりしとぞ身退いて灘手といふ里にすみしが世にいたうすみわび蕎麥七升かりしことありしがつくなふべきよすがなく年月うつりけるにいつしか二石あまりになり今ははたりにむくふべきものなくひとりもてるむすめをわたしける此むすめ其家にゆきてひとりのむすめを設けたり其あるじなる人の娘大内山といへる所の村長に嫁する時この娘をつけて遣しける此ものの大内山に行きてをのこふたりむすめ貳人ありその姉なるもの通が母にして其弟を文七といひ其弟何とかいひけん海わたるとてふかにとられて死しぬ大内山の長もいくほどなく夫婦ともに身まかり男子なきほどに家おとろへただ三人の女子ども有ける文七男づからたがへしくさぎり懐にし手をひき年月を過しけるかたはらよりもみするすみにてはいかで事辨ずべき妻むかへよとすすめしかど頭をふり我先人の下部たる事をあまんじ我ごときものをうみ出して人にもよはひせられぬものとなしぬ我いかに妻むかへていひがひなきものそだてやはすべきとて潔居して主人の娘どもかたつけ

やすく世を終ぬ其姉妹うられて糸原村清末氏の婢となれりあねふたりの子あり兄は權平といひいもうとは通なり此時清末のあるじは春榮とて世にときめかれたる醫師なり兄は春榮弟に遣して通は自つかひけるか春榮は情ふかき人にていとねもごろに遇しける程なく春榮病にそみしが空しくなり妻やもめとなりしがこしけといふ病にそみ二年ばかりなやみて同じく世をさりぬ春榮男子三人女子一人あり兄は雲にはうつの志切にして都のかたに遊び今は東の邸につかへ侍る季は人の家に養れて行きぬなか又都のかたにあそべり通ひとりして病をたすけし隙には薪こり田がへしいをぬるひまもなき程に目もあかくはれやせおとろへて色黒く其かたちどもみえず足はひびあかぎれになりてひたすらに忠貞をつくしける春榮世に有し時似合しき所ありてこれを嫁せんといひしかどもきかずなほあるじのすすめければ我此家を出て外にはゆかじとて古き井の有けるにかくれけるもし主人たまたまにしかる事あれば唯おのがなすわざのおこたる故とおもふにや力を倍してつとめける世の中の下部のくせにははたちにもすぐればひまとるたくみのみしていとなみにも怠り早く己家あらんことをおもひあるじしかる事あれば病と稱して業につかず其下部といふをいとひつかへし家にはいつしか遠ざかるぞ常なるに通はそれに引かへおとろへし家をかたく守りけるあるじ都のかたよりかねて通か志のあつきをしり母をいだきかかへし事どもいと念頃にいひ送り都に上り老をやしなへとすすめしかど今はこの家守る人なし墓のちり位牌の香花も誰に託して他にゆくべき家の杜のひとつにならんずる迄はちかつて出侍らじと野もせ山もせにあさりて心

ほそくも明しくらしける都なるあるじの弟其後かへりければ通悦びつかへけるに此人物くるほしき生れにて世のいとなみにも怠りけるほどにひたすらに諫ける金言耳にさからふならひにて通を追出しぬ通いとかなしく出もやらでありしかどもいかりのつよかりければやむ事を得ずちなみのかたにたより年月を過しけるかかるよしなりければ春榮夫婦の墓のしるしもたたざりけるをなげき都のあるじにはからんとて旅立とも思ひ立しが都より石牌も下り猶夜のものの手ぢかき調度どもとりそへて遣しけるを追出されし主の兒に送らんとてふかくおさめて其ひととなるをまてり我家この家とゆかりの有ければ通がひととなりをしれる故に御身永松の家に嫁する時招きてつけ遣しぬ通身にまとふもののもなかりし程にかたくいなみしかども其頃は御身が母も猶世に在しほど

に相はかり呼とり取つくろひ遣せしがそのさま見ぐるしと見し人も多かりけめされどかかる有がたき人そへて遣しつる親は心やすくもありき御身の家の父上夫なる人の情あつく其志の世の常ならざるを感じ夏冬のふせぎも心をつけられけるほどに今はかれが身に事たりぬこれもよくおもへ我家なれか家の情にもあらずもとかれが誠人しらざれどもそらに通じて天津御神のめぐみ給ふぞこの頃も我かたに來り數月とどまりしがもはや六十字もこえ侍ればを事とるもものうかるべきをさらに其恐もみへず朝はとくおき夜はおそくいね筋骨のつかるるをしらず唯心のかぎりはたらくほどによめなるもの便のふおもひしばしばやすみてよといへども我はただこそ居侍るとて猶他事なく事をとる折から我も心あしく子やむすめも恙ありて藥せんじなんとすればさへぎりてな

つのあつきに火にあたればわづらはしさまし候ぞとて己ひとりしてなあらひ飯かしぐまにこれをせんじ物ごと怠ることなしわきて勝れて覺え侍るはみづからなしたることもさあらぬ體にもてなしとものふ人には我よめのなしたる樣嫁にはとものふ人のなしたるやうによきをばゆづりてみづからおらずこをもておのづから人とむつまじかかるわざは事微なりといへども中中世の常の人の及ぶ所にあらず今は老の身の行末たのむかたもなき身なればよきにいたはり其德をたうとみ御身のいひなす事どもこの人にならひ舅姑につかへ夫につかへなば我まくらのやすく獨ねの夢も心よくぞ結び侍らんかしく天明丙午の秋

奉公の道

奉公の道御尋にて御座候つかへ候事なく候へば存候事無之無覺束候得共思出候事ども

書付懸御目候

一、受用と申事御座候大切の事にて御座候人中にて一人前の塵を拂ひ理非をもいひ世の事どもとかく取沙汰し候事はみな致す事にて御座候されども受用とは是を我身に引うけて行ふ事にていと難き事に御座候むかしの人首の貌は直しと人に正されてやすき事ぞとおもひ其事を行はんとせしかば殊の外力入しと申事御座候腹たてな忍堪せよなど人の多くいふ事に候へども受用の上にては容易には致しがたく候君につかふるに其の身をいたすといふ事は論說の首編に出候へば人人よく覺え候事に御座候へども受用にて申候はかたき事にて御座候致すとはいたらずにて我身を君にいたらするにて候さる程にとく身は君の身ぞと心得候へば私有べき樣御座なく候士たる者危きを見て命を授くとと

申て何事ぞといふ時は我一命を献じ候事いと難きことに候へ共かかる太平の御代には命を奉ずる程の事はあまりなき事にして偶かかる大事に臨んでは或は客氣に激せられ時のはずみにて不圖一命をすて候類平生思慮の外手際あるまじきもしれず候身を致すといふは命を授くといふよりは易き樣に候へども命を授くる工夫も身を致す内にそなはり候何も我を我とおもふ事をすて君の一體分身ぞと心得候へば君に隱して私曲有べき樣も無之身を思て尻込することとも無之見込て忠とおもふ事あらばわれに顧る事も有まじく候一切の事身を致さざる故官途のいさぎよき事出來不申候

一、人は先志を立ると申か肝心にて志す所はいろいろあるべく候へ共先身はたとひ賤しくとも志は高く有たく候今の碌碌の人くらべて身を行はんには行ひ出したる所とかく人並に候むかしの賢人君子の事どもよくききよくかんがへ其人とたけくらべせんと心得べし行ひ出したる事少しよければ今のたれよりはまさる誰よりはよしと思ふは志のひききより也古の人舜何人ぞといひしはここの事也

一、自の才を慢し人に驕りほこり功をたのむ類は我器の小き故早くみちて溢るるとしるべし

一、君は只一人にて一圖に君につかへ奉ればどもも道といふ物尊きものにて君といへども是にそむかせ給と事成がたし此故に道をまげて君の氣に入るといふはなき事に候

一、諸候につかゆる人の日當とすべきは　公儀を大切に社稷民人を大切に心得候へば

君につかゆる道其内に具り候

一、身を致すといふ事をしらざれば己が身を大切事とおもふ心生ずる物にて身を大事とおもひ候へば人の心に適ひたくなる物にて君はもとよりの事權ある人には身をかばふより怪我せまじきとおもふ事のつよくなるなり眉をそびやかしてへつらひわらひわき目には狗の食をもとめて尾をふるさまにひとしく候それより足をふみこむ程にどうなりともして其心に適はんとのみする程に道を離るる事遠くなり候これを詭遇と申て君子の甚媿る事にて御座候

一、首尾は一時の面目にて皆首尾よきを好み候されども是も一通の事にて首尾よからんことをこひ願へば詭遇の心きざし候唯義に志してあながち首尾のよしあしに心をとどめんは仕官の本意にあらず古人も道をまげて首尾よきを利榮首尾あしきを利辱と申榮辱ともに耻と致し道を以て首尾よきを義榮首尾あしきを義辱と申榮辱ともに規模と致候

一、家に親方子方の別は候へども尊きは唯父母に歸し候國に君方臣方はわかれ候へども尊きは唯君に歸し候

一、大勢になべてよき人とほめ候は俗に結構人と申候君子は鄉愿と申候てとらず候其故は君子は義を見て行ふものに候へばさきの心にあはず候て見だしがたく候鄉愿者流はいづかたも左樣尤よき人にもあひ惡しき人にもあふものに候孔子は是等の人をばふかくにくみ給ひ候

一、世の中ほめそしりと申すものは人人の愛憎好惡より起り候へばとかく申候てはなきものに候ほめられんと心がけ候へど鄉愿となり候そしられんとすべき樣はな

く候へども我是道ぞとおもひこみ候はば毀譽は頓着に不及候

一、職掌と申事は各上より仰付られたる役分のつとめなりたとへば牛をかへと申付られ候も草場もわたるべしわらもわたるべし左ありて其牛飢つかれば牛飼の怠りなりもしわら草牛かふ程たまわらずば牛かふ事を斷いふべし銘銘の職掌は官の守といふ者あり時うちが時を打損じ候へばとがめ有之候民を掌れとある命をうけて民をつからかすは官の守をうしなふなり

一、物を恤れむ心のなきは人の本意をうしなふなり我身に火の子とびかかり蚤蚊さし候へば直にそれを營護致候事我身を恤れむに候仁者の心は天下を一人と見候人のうえこごえうきつらき皆身の上の事となし候これを恕と申候

一、鳥獸ははずかしきといふことをしらず只人ばかり恥かしきといふ事をしり候然ればば天より恥といふものをたもふは人ばかりに候義はこれを種子として生じたるものに候かかる大切のたまものをすて候はかたちばかり人にて心は禽獸にて候半

一、芭蕉の發句に物いへば唇寒し秋の風と御座候我甚此句を愛し候人とたがひに是非を論ずるに我辨ずれば人も辨じ候我も荷擔する人あれば人を荷擔する人有之やむ事を得ざる事あらん日は是非なき事に候其外大かたは辨せずして有たき事に候是を辨せんとする者は人の理の伸て我理の屈するか我おもふ所あらざるほどに我理を伸し人の理の屈せんことをおもへばなりされど孔子の時にも天下の人皆孔子に服するにもあらず釋迦の時天下の人皆釋迦を信ずるにもあらず今に到て其是非を爭ふ事に候我いかにおもひ候ても我を信

ずる人あれば彼を信ずる人あり屈伸を度外に置き是非は人にまかすべしあながちにせめぎあふ樣俗氣鼻をうつ殺風景を出でて一段風流の場あり

一、世の人百年はいきはせずどうなりともして過すがよしと思ふ人多し皆志たたざるによる

一、たとへば參宮するがごとし京大阪大和めぐりなど處處遊覽する處もあれども大神の廣前にいたらざれば志はとげず候君は一人なればたとひ傍にたのむべき木隱ありとも只一筋に君にむかふ心を忘るべからずされども詭遇の心し候へば駒の繋場考へ候ていづれの木しかるべきやと無用の心選びせられ候

一、炎涼の世態と申事御座候たとへば冬の頃爐に火あれば我人より集りて手をあぶる火盡き灰冷なれば見かへる人なし世に時きめかるれば鼠を虎とあがめ世に捨てらるれば虎を鼠とさげすむ習なりさる程に世にある時は問はずとも有べし世に捨らる日は風の音信も有たし炎涼の態は君子の媿る處也されど我落ぶれたらん時とふ人なからんは炎涼も世の常ぞとおもひなして何かとがむる事のあるべき

一、墻を踰え壁を穿つて物をとるを穿踰の盜人と申候小盜人にて御座候其樣以の外いやしく御座候私をさしはさみ威權をかり要路に立て下を侵漁するもの威儀さかんに候へば自も人前にて君子の威義をかり候へばうづだかくみえ候得ども底心あしきものに候人をつかさどるものは此境よくよくわきまふ事に候人しらじとおもひ候へども是は其人におふていはざる故に候世にはさかんにその事となく候て實其身自しらざるにて候おそるべき事に候此

事を我禍巢レ干レ睫辱燭レ干レ背と申候
一、屋宅衣服調度もなきは不自由に候へども分を過て見え候は識者の目にはいかが敷候
一、橘良基は諸州を治めて令名あり其子治政の道をといひければ雖レ有二百術一不レ如二一清一と申候我甚此語を愛し毎度書て人に遣し悪筆には候へども御志の切なる故一紙書付て進候御佩服有之候はば此上なき御事に御座候以上

天明丙午秋八月　　三浦　晋

吉武莊助樣

（右原本は國東町吉武則久氏所藏）

梅園後拾葉終

梅園拾英目次

梅園拾英

三浦晉　安貞　著

慈悲無盡與行旨趣

一村のうちはよき事あればうちよりて喜び惡しき事あればうちよりて悲しむ事たとへば一家兄弟のごとしさるによりて病人をばたすけあひ貧人をばすくひあひ口舌爭論をばなだめあひ惡事をばいさめあへばおのづから中よくむつまじく又我うきしづみにつけても捨てをかねばあながちに人の事とはをもふべからずされば我親をうやまへば其家にそだつ子も亦是を見慣て自然と我にも孝行なり我夫婦の中惡ければ我婦やも子も是を見慣ひて自然と家も睦じからず惡事も善事も類をひくものと心得柔和正直にしてよきかたを志しかりにも不義放埓にして虛言をこのみ上の法度をも守らず傍輩のよしみをも

失ふ者には交るべからず鳥も我巣をば我かけ我哺をば我ひろふて命を活るものなればつねに家業の油斷すべからずたとひ人なみにむまれても朝はひだるく晩は寒ければあしき手業にうつろふを世話にも貧の盜といふ家業に怠ざるときはかやうの邪念も終にうせ惠む心の生ずるを世話にもあるに繼子なしといふかつ貧富にも品多し分限をしらず綺羅をこのみ金銀を遣ふこと砂のごとく無禮不義にして人に憎まれ終に尾はをからすもあり無精にして徒居をこのみ爪に楊枝をつかひ眉にけぬきをあて百姓とも町人ともしれぬ筑浦者になりてつゐに世帯をしまふもあり酒をこのみ色に耽り明日の事をも考へず親兄弟の異見にもつかず行つぶるる者も有富博奕賭にすきうきまふけを心にかけはては盜人非人となり處の住居ならぬも有又邪智ふかくして私慾を宗とし人の物をかすめ奪ひ道ならぬ富人もあり人の難義もかへりみず算用稠敷理屈つよく從類には辛き目みせ無理無慈悲の利をこのみ出入買賣には人と爭ひ僥倖の仕合を己が手柄と鼻をならし人をばみな愚鈍にて貧なる樣におもひ侮るものも有是一旦の榮耀にほこるとも人ににくまれ天理に背き行すへの程覺束なしたとひ佛前に香を焚神前に御酒を供へ子孫繁昌延命息災といのるとも惡を加護する佛神なければ納受決して有べからずさればこそ天滿宮の御うたにも

　こころだに誠のみちにかなひなば
　いのらずとても神やまもらん

唯我家業に懈らず人の爲に心を盡し老たるをば敬ひ稚をばいとをしみ柔和慈悲なる時はその家自然と長久にして行末の繁昌たのもしし又家業をもしり儉約をもなしながら病難賊難火難水難又は從類多くおもひの外に

躓て一生難義を致す事是誠の貧にして尤哀れなる事なりそのうちにも無子老孤かたわ病身にしてくるれば家なくあくれば食なく春は飢冬は凍へさらばひまはる類身に引うけてみる時はいかに悲しき事ならずやかやうなる輩には一飯の食を分てば半日の命を繫ぎ一杯の湯を與れば一朝の腹をあたたむ蛇の蛙をのむをみても是をたすけぬ人はなしましてやおなじ人に生れ同じ里に長り其哀を蛙ほどにも思ずば人の心をうしなふなりつくづく貧人の有さまをみるに風雨に中られ餓寒にやぶられおもひの外の病をひき非命の死を致す事おもへばむねをさくがごとしかかるものは恨むまじき人をもうらみかこつまじき事をもかこつ事なれば醫者たらんものは施藥をなし加持祈禱をなさん人はその心をつくし願祈禱に寶を費さしめずとめる人は相應のすくひをなし商人は高利をとらずをのをの心をつくすべし我はあく迄にくひあたたかにきしらず顔にて人を見殺しにするならば上は天の怒にあひ下は人倫の道たへ處を加護する神なからん罪を天に得ればいのる所なしとは此事なり衆力功をなす時は塵つもりて丘となる一村志を運び力を合せすこしづつの餘資をあつめ貧者萬分一の苦をすくふとならば身には假初の事にして彼には廣大の慈悲なるべし世の中の淵瀨はけふあすをもしらざれば皆身の上の事とおもひ行々此事に懈怠なくば一村の交は水と魚との如くにして面面の冥加を天にいのるといふ物なるべし

約　束

一、其家のあるじたらん人は此道理を妻子家内にも合點致させ可申事

一、夏は麥秋は米冬は錢多少にかぎらず老弱男女各志を運び可申事

一、世話人立合錢穀相ととのへ帳面にて村役人たのみかし付無懈怠年年元利可致算用事

一、借主相應の質於無之てたとひ口入人慥候ともかし申間敷事

一、五年の間は此銀まづ救にはいたすまじき事

一、難儀なる者へは無理に出させ申間敷事

一、此銀は村中の浮銀にて無主と各可致存事

一、役人世話人立合評議の上輕重をわきまへ至極の難義を先としすくひ可申事

一、此銀決して一人の存寄を以て我儘に用間敷事

一、或は孝行或は忠貞等の人有之候はゞ是人の手本となる人に候へば此のうちにて非常の世話たりともいたすべき事

一、評議の節私の意趣をさしはさみ贔負のかたへ遣し申間敷事

一、出銀拾匁米一斗已上に成候人をば是を施主と號し施主帳にしるし永永末につたへ出つ多分の人をば千一末末難儀に及候節はすくひの筋宜敷世話可致事

右之通約束相違致間敷候間御見屆懈怠無之候樣御世話賴候已上

寶曆丙子十二月吉日　　富永村世話人

彌曾八殿

武左衞門殿

忠助殿

施主

備考（編纂者附記）

本書慈悲無盡興行の旨趣に基き當時醵出せられし金穀今は慈悲無盡田と稱へて村内の共有財産となり村の當局吏員之を主宰し年年利米を得て本書に示されたる貧民を救助すること怠らず百五十年を經たる今日に至るまで爲めに飢

寒を免るるの民衆其算を知らず先生の恩惠無窮に傳はるの一端を見るべし

人は常

人は常を大事とすべし常によき人は世のさかしらにあひても人常におもひくらべて信とせず常のあしければあらぬ事も人の疑うくるもの也寶暦それのとしの卯月かと覺え侍る我富永の下にとなれる恒清といふ村に小松生茂れる所あり下に麥畑あり其村のもの朝とく草かりに來りしに十二三とも覺しき童口に物込縊りころしたるありここは松平圖書頭釆地にして代官は藤永何かしといへり其立會える内に彼富永に多年出入れる男あり其屍をよくよく見るに此春しばらく小保村槌といへる者の藤永に幼き子あれば遊び伽にもとて暫置しが後には其家を出て袖乞して吟ひけるやと見つ槌ならば額に疵あるべしとて改めぬるにあり又腰に古き記着をさげたるを開き見るに彼藤永の家の紋龜甲に三星小兒のすさみしとみえて紙に書きたるあり彌かの槌に徵あり困て小保に人遣し母親族をもよびみせける親族死骸を檢するに相違なしうけとりかへり僧侶きて葬れり此母なるものかねて子にも夫にも愛うすきものにて折にふれては氣疎き事共多かりきさるによりみな人みな母のしわざなりとおもひもし言もしみな齒喫して憎み詈りけり我も近ければ行てみつ程なく夏過秋來りてかの槌所所流浪せしが歸りぬ里人みて驚き怪しむ事限なし其土中に埋みし者何者なるをしらずそれより所所吟味しけるにはしかみといへる里に夫婦の者ありしが夫は江戸にありける際其妻密夫あり元よりの子ありけるが後の事顯れん端とや思ひけん又時の碍とや思ひしやすかし出して殺したるにてぞありけるよりてはしかみより人遣しか

の土中の屍ほり出し歸葬しぬ因てその者は其所を追放されき世に間違多かる中にかかる符節合せたる間違當世に稀なるべし實や其母と見し時は人人母を憤りきりさいなみもし度程に思ひその政に從ふべきあまりに物をかいやる樣にいひ思ひしが事定りて後に人其老煉を感じける誠に世の諺をきかん事はあらましにてありがたかるべし是にて思ひしられぬされば此槌の母なるものかねてよく舅姑につかえ夫にもよくつかえ子をいとをしみなばかかる疑もうけん誰うけ度人も有まじ幸に天誠を照し給ふにてあやふき難をまぬかれたり

名利を戒む

名利につかわれてしつかるいとまなく一生をくるしむこそをろかなれ財多ければ身をまもるにまとし害をかひ累ひをまねくなかだちなり身ののちには金をして北斗をささそふとも人のためにぞわづらはるべきをろかなる人の目をよろこばしむるたのしみ又あじきなし大なる車肥たる馬金玉の餝もこころあらん人はうたて愚なりとぞ見るべきこがねは山にすて玉は淵になぐべし利にまどふはすぐれておろかなる人なり理もれぬ名をながき世に殘さんこそあらまほしかるべけれくらゐたかくやんごとなきをしもすぐれたる人とやはいふべきをろかにつたなき人も家にむまれ時にあへば高き位にのぼる奢をきわむるもありいみじかりし賢人聖人自いやしき位にをり時にあわずしてやみぬるまたおかしひとへにたかきつかさくらゐを望も次におろかなり智惠と心とこそ世にすぐれたる譽ものこさまほしきをつらつらおもへばほまれを愛するは人の過をよろこぶ也ほむる人そしる人ともに世にとどまらずつたへてきかむ人またまたすみやかにさ

るべし誰をかはおたれにかしられむ事をねがはんほまれはまたそしりのもとなり身の後の名殘りてさらに益なしこれをねがふも次におろかなりけりしゐて智をもとめ賢をねがふ人のためにいはゞ智惠いでては僞りあり才能は煩腦の增長せるなりつたへてききまなびてしるはまことの智にあらずいかなるをか智といふべき可不可は一條也いかなるをか善といふまことの人は智もなく德もなく功もなく名もなし誰かしり誰か傳へん是德をかくし愚を守にはあらずもとより賢愚得失の境にをらざればなりまよひの心をもちて名利の要をもとむるにかくのごとし萬事は皆非也いふにたらずねがふにたらず

氣質問答

問

地の圓なると申候儀とかく不審に御座候處近來始てとくと合點致候氣は昇り質は降申候儀は隨分わかり申候しかし氣に決して降無御座と申候事にや昇降は有之候へども終に昇り申候といふ儀に御座候や此處不審に御座候古人の四時の氣の昇降を說候は不宜候や氣に決して降なきと申候へば一寸申候へば磁石の針を吸申候も尤感應の變には可有御座候へども一通存候處は磁石の氣が降りて鐵質を引あげると被存候斯樣なる儀ども多多御座候如何わかち可申候や承度奉存候

答

地體の圓なる儀近日とくと御理會被成候段珍重に奉存候氣昇質降の義御不審は無御座候へども氣は唯昇り候迄にて決して降なきやしかれば磁石の類もその氣降り候て鐵を引あげ候由御尤奉存候すべて事物を觀候事そのまゝにして少しも造意を加ふべからず候其語の用心〇その通に御座候氣質はもと

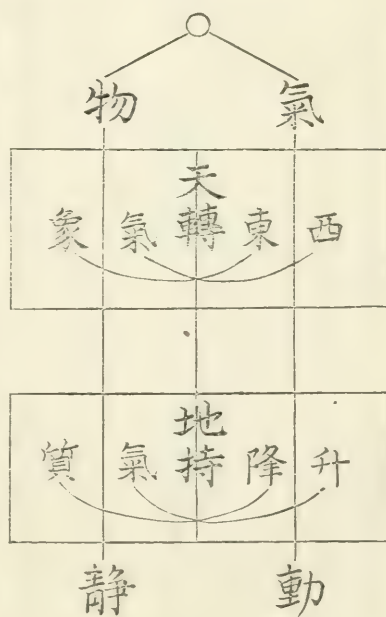
氣質にして昇降はもと昇降に御座候畢竟文字にのせ候はその釋にて御座候故にこれを口に上せ筆に下すに臨みては或は相比類し或は相對釋し或は相形容し終に二義に落候故に氣は昇り質は降り氣は虛也質は實す氣は動く質は靜也氣は天也質は地也と申類同樣にて虛實は虛實天地は天地氣質は氣質昇降は昇降是本來の面目なり體性をそなへ氣用をなすに至つては天地かくのごとくならざる事を得ざるの勢を具す五行家配當を以て天地の眞面目とす故に南は火也北は水也赤きは火の色也黑きは水の色などと含糊の說をなす唯南は南火は火赤きは赤き黑きは黑きにて御座候玄語に合轉持弁象質氣物以分と書置候又轉有東西持有昇降とも書置候この故に象質も亦各氣を具して氣象氣質ありここに於て天象東し天氣西し地質降り地氣昇り天の氣象地の氣質を合せて物といふ

天の東西地の昇降を併せて氣といふ圖していはば

氣　物

天轉　西　東　氣　象

地持　升　降　氣　質

動　靜

大樣個樣なる事なりこの故に物體をさだめ氣神を用候へば象東し氣西し氣昇り質降り候は條理に候條理の道常あれば變あり候此故に星行逆して西し地氣逆して降るされば昇降と申候へども地一圓物なるより見候へば降ると申は內に收る也昇ると申は外に發する也唯天をいただき地を履より見候へば昇降也春夏は氣地より發す是昇る也秋冬は

氣地に收む是下る也されば地に南北の差別ありて大陽南によれば北地の氣はすべて收り大陽北によれば南地の氣はすべて收り候此に收る時即かれに發する時也故に天地之間、一動一靜而已、動在外則東西、在內則昇降、東西與昇降、同氣也、地之爲物南寒則北熱、北寒則南熱、故一邊氣昇、則一邊氣降、物隨之一長一消、とも申置候舊稿にはいまだ無御座候ひしや覺不申候此故に氣は決して昇り昇るものは決して氣なりと申事にてなく候へども神爲の用氣昇り質降るに相違なく候昇降の氣氣質の物二ならざるが故に氣昇り質降り昇降は氣氣質は物一ならざるが故に氣昇降に用ひ物氣質に體し候磁石鐵を引くがごときは磁石の性鐵を收る事地の諸質を收ると同様に御座候地は四方八方諸質を收め磁石は四方八面鐵を收め申候此故に鐵上にあり磁下にあれば鐵を下に引磁上にあり鐵下に在れば鐵を上に引候感應と申候は彼一此一天地の間に並び生じて並に銘銘の一氣物を相そなへ候上にて彼此交接する上にてかの氣とこの氣と向背順逆いたすもの有之候是神爲の往來にて御座候たとへば茂德の人の芳豪傑來り親み艶女の美吉士來り睦ぶがごとし磁氣鐵氣をこのみ鐵氣磁氣にはしる此故に磁石よりいへば磁氣鐵を吸にして鐵の神を遺す鐵氣磁氣にはしるにして磁の神にいたらず兩神用をなすがごときは磁石の感往き鐵の應來るここに於て兩活性を見る磁の氣はゆけども鐵にあらざれば來らず是我呼んで彼應せざるの感應にして感應の變なるべく候磁引鐵來るは感應の常にしてわれ呼んで彼應ずるの類なるべく候此故に磁上にあり鐵下にありて鐵を引あげ候そのあがり候もの收るものにて下り候とみえ候氣發するものにて候はん○面に芥あり口を以

て吸ふに芥必のぼる是神爲の用〇〇〇にあらず口氣下りゆき芥を攝し上るにあらず〇〇〇氣中にある芥起りて隨ふ也是は口氣の神爲に勢したがわざる事を得ざる也
右あらあら管見を以上御答申上候あたらざる事ども可多候半と恐入候猶よきに御敎可被下候以上
明和己丑九月十七日　　孖山　三浦晋
鳳渚喬文學案下
　諺孝子
論語よみて論語よまずとはふるき諺にして論語よまずして論語の敎に適ふこそわきてたうとく覺へ侍る論語に士以て剛毅ならずんばあるべからず、任重うして道遠しといへり剛とはたとへば力なり毅とはたとへば精なり任とは我擔へるところにして道とは我身を終るまで行ふべき所なり凡人の品たかき賤しきはあれども君は民を安んずる事を擔ひ臣は君をうやまふことを擔ひ子は孝、婦は順、各その任なきはなし是を擧ること輕からず故に力をもちゆ是を擔ふ事程久し故に精をもちゆたとひ其人百鈞を挙得ともああおもしとて打置かば夕立のふりしきりて物すさまじき樣なるも時を終へずしてはれ行ごとくなるべし今我國東富永の里に淸右衞門といふものあり姓は神山なるよしいひ傳へりことし天明癸卯年已に六十二妻はやもいそじにひとつたらぬ程にして父六兵衞とて八十八になりぬ六兵衞さりし丑のとしより目耳しひ左右の足かなはず心さへほれぼれとなりてひるは眠れども夜はよもすがらいねず飮食よくすすみ煙草たゆる隙なく好めり食事を求むる事晝夜大凡七八度或は餛飩せよといひて小麥なくなりぬと訴ふれば蕎麥きりすすめよなどいふにある程は是にそなへなきをばあたりにこひあるじ已に年老

い家貧しければ晝は薪こり草きり煮かしぎのいとなみに障なきだにあるを夜はいをいねがたしとて夜ふくるほど柴火けむらせ子や嫁に物がたりせよ淋敷などいひて時を移しいねたるひまも或はをき或はかへり或は煙草或は飲食二便の通利など冬の夜は十度にあまるとも時としてあれば帯とかざる事已に三年に及びぬちかごろしきりに實のらざるほどに朝四暮三の術もつき家にわづかのたくはへもなく身は裾を肩にむすび心ばそき月日をも志たゆまず奉養怠らずといへども家已に懸罄し侍りさる志の有がたければとてとなりふたり心情ありて米まもりのことぶきして贈りものども猶所の長よりもありて露の命の消やらぬ程に過しぬ打そへてこのとしは畑つものたなつものなく米の價もむかしよりなき程にたうとかりけるほどに今までの志のつゞかざらましかば孝婦の志のいかばかりかかなしからんせめては論語よめる身の論語よまざる人にあやかれかしかつ此翁餘命いくばくぞや我と志を同じうする人ありて涸轍の難をすくはん事を希ふ

眉の山集

梅花の楚辭にのこされ菊の萬葉にもれしはうらみあれど牡丹のはじめて李唐にしられしより世世その富貴をあらそふ物なきもおかし此山は養老のむかし仁聞大士ひらかれ鷲の御山に似たればとて靈鷲山といひしが遙にをしうつり役優婆塞眉の山にかたどり蛾嵋と名づけぬ山開けてよりはや千と勢も過ぎ百とせになん〳〵とす谷はいつも雲霧にうづみおほそらささふ樹の風になびくひまにむかしがたりの玉依の姫の姫島も黛はらへるさま夕月にたたへては嫦娥の面影誰みよとやとどむ覽梵音獅子窟の中紫の雲よ

り落ち鐘聲華鯨樓の上松の嵐よりつたふ猶秋の夜半にましら聞ゆる巖春のあしたに花を濯ふ溪などつきぬながめ塵の世のさまともおぼえずされど處の鄙なれば騷人韻士の賞咏も傳らざるを先人虎角居士いまそがりし日本意なければとて豐筑に事はじめしらぬ火のあとさき崑山の片玉桂林の一枝ひろひて一集となし櫻板にことぶき文殊谷とぞ名づけき續きて一集の志有けれども西に傾く日かげ招くべき才なく紅葉ちりゆき花飛さりいつしか三十年ちかく經ぬさるをことし天明乙巳五月雨の小止ける隙中田なる一笑子の予をさそひ出し山めぐりし見處多かる中に十四の境をさだめ精舍の東のかた契ありてしめや置けんとおもふばかりの巖のあるに處から名にしおへばとて芭蕉翁の枯枝の發句石にきざみ古したふ跡とどめんと結構し又四方の風雅の士に句をもとめ

先人の志をつがん事をはかる予は此道にうとけれどむかしのゆかりにはしつくりせよと硯さしむけられいなぶねのさすがいなみもやりがたくて其あらましをつづり待る事しかり

二子山人　平之晋

峨嵋山十四境

獅子窟　甘露門　指月亭　華鯨樓　小角祠
龍王祠　仙人掌　天女洞　十里嶂　濯花溪
聽猿巖　靈鷲巖　小山門　玉女島

道齋隨筆字訓

道齋隨筆の義御尋に付申入候一體杜譔多相みえ候宜敷事も多く候へども怪說も多候有眼候得ば此書をまたず無眼候得ば魚眼を以て玉に混申候先表題に省字を用候又開卷にも道齋之齋齊と書候是は古字通用と申よりの事にみえ申候されども後世齊齋書わけ候へば後世にしたがひ度候筆を廿冠に從ひ候

も略字法とる事にあらず
上一ノヲ李拯是は字彙の音に従ひ申候セウ
よく候蒸の韻の字に御座候
葉公　セウトカナツケソロ　セフニテソロ
玉拙は音シユクト覺申候
ニノヲ烏瓜の切ニアノ音はなく候
越王　是ハ連聲濁にて字音にあらず　あつめ候な別にて部を出し度候
鄭袖（但夫記にシヤウト有之かとも覺候）　鄭玄と同に御座候是又　吳音よみくせに候得は　別部に此類集め申度候
星宿　ホシナレヒシヤト申候説有之候へども　日ノヤドリナレバ宿よしと辨正有之候
金莖　キンケイハ非ナリカウ漢音キヤウ　吳音常ハキンケウトコツヨミ申度候
苕雲　シヤウサツ　拙者テウトウト覺申候拙誤にや改不申候
黔驢　黔首クロキノ音黔中地名　一一ハ黔中の驢と覺候左候へはキンロ也
揖讓　イフノカナ也
訛謬　グハビウト覺申候
檀弓　是又吳音古讀今書に對してはタンキウト　よむ蓋桓武帝ノ令に從ふ也
孟浪　杜譔ヨミクセナリ
石橋　同前

訓解　本キユンクンチキユンチ轉ズル也キンハ中　畧也綸中畧ノリン六中畧ノリクトヨムノ類　也
龍光　是は詩經の字寵光の筈也　龍チテウトヨムニハアラズ
復關　詩經叶韻ニテヨム也　叶韻にあらざる處はクハン也
轂率　孟子の註に隨は　コウリツトアルト覺候
阿監　阿監ト覺タリ阿兄阿爺阿戎　阿難皆同樣阿彌陀ノ阿と同じからず
脈　貌と同ジク漢音バク吳音　ミヤク平生脈脈クルシカラズ
南斗北斗　イヅレモトヨミ　古今句會に辨ある樣に覺候
松江　稱江院をサケ奉る由稱光院あつて稱江院な　く江光これをさけ候は大なる博士家の誤な　り唐音まじへよむ事行脚行燈靈隱寺副司何　ほどもある事也
南縣四百八十字　十入聲字也十平ニナル也　緣涙東西南北水紅關三百九十　橋ノ類也
甫　ホノ音ナシ古實にホトヨム事アヤシ
行宮　本邦ノ古音ニアラズ　唐音ノ訛也古讀トハ云ベシ古音トハイフベ　カラズ
無乃　ムシロニアラズ無寧ナリ無乃大箇乎なり先　儒辨アリ
中巻
回也賜也全語助にて意思なしとは非也也の

上の物をさす言也回の字をさす也和語のゾの字なり不改其樂者は回也ゾの意なり始てともに詩をいふべき者は賜也ゾなり

曰云ノ別曰イヒヤウ云イヒカタ句尾に云ノ字ヲツカヒ曰ノ字句尾に用ざれば別あるに似たりされども大意一つなりさる故に他書には詩ニ曰とありて大學には詩ニ云とあり他書には子曰とありて防記には子云とあり可考

下

幾望　既望と同じ隱居數言に出とあり此說しらす既望八月十六日也月幾望は易の語たり易によれば幾望は十四夜とすべし

別　另ニ作るとあり另も意ハ別と同じけれども音レイと覺たりさる故に另ノ字の時ハレイレイト僕ハヨメリ

卷作写　卷も略なる事徂徠の說にて何か見候樣に御座候乍去暗記不仕候右は只帅帅相考不申候事のみに御座候へば他見は御用捨被下度候殊に御信用は被下間數候

故コトサラ格別の樣に申候

コトサラノ時ハ折角ワザワザノ事ニソロ

梅園拾英 終

凡例

一、本藩之所管、在速見國東二郡、孝子在管內者、士人則直揭其姓名、庶人則曰鄉、曰邨、曰町、同國而異管者、或標其郡、或標其鎮、異國者則稱其國、示內外之別也、

一、此書本爲諭子女輩而作、故意之所往、感之所動、聞見之所及、典籍之所載、關孝子之事、與不關、意動而筆隨焉、所以猥雜也、雖然孝者百行之本、修孝則衆善備焉、所提耳於子女、不妨乎舐犢之情、

一、和漢將軍之裔、玉碎不失其清、而諸史不收之、赤星氏之依義就死、莫愧乎子路之結纓、筑人豈可殤之哉、而孝子傳遺之、此書首擧忠孝、尾言令終、於是乎不得不拾此焉、

一、此書主本藩、而後及本州、至佗邦、非有抑揚乎其人、

一、此雖小冊子、事君父師長之跡、愛子弟臣婦之事、發憤立身、取舍予奪之道、如粗具然、要覽者之回光反照、

杵築藩　二子山　三浦晋　記

愉婉錄

目錄

附　肥後國權三郎
小野氏の寡婦
山本氏の寡婦
五田村平介
久米村久米
野田村了玄
附　府内瑞光寺功岳
臼杵曇華道人
魚町兵吉
紺屋町はつ
附　山城國義兵衛
糸永村矢野雖愚
手野村貞平
日出藩岩野藤内
大分郡高城村金左衛門夫婦
附　本郡拂田村紋作
豐前國矢部村彌平妻
附　武藏國野口氏の妻

常陸國與次右衛門妻
玖珠郡今宿村介八
玉手襷
附　長州谷石翁
只しばし
附　筑前國宗像正助逸事
紀州高野遍阿法師
古狸
府内桃路新作
筑後赤星新六郎
附　篠才藏

愉婉錄上

豐後　杵築　三浦晋安鼎　著

淨國寺卓榮
上總國市兵衛
豐前國規外禪師
伊美次八

論語開卷先學の字をかかげ然して孝弟忠信とついでたり夫より孝忠にして信ならば未だ學ばずといふとも吾かならずこれを學ぶといはんと子夏の語を引り孔門親炙の人の編る所豈微意なかるべけんや管子齋國を治るに禮義廉恥の四をかかげこれを四維といへり維とは是にて民心を維ぐなり後世終に孝弟忠信禮議廉恥の八つを以て人道の要として世にすたれたるものを忘八と呼も此八を忘るるといふことなり世の中は高き賤しきより人の教まで岐多くふめる道もひとしからぬ様なれどもつらつら思へば同じく天を戴き同じく地をふみ同じく渇してのみ餓へて食ひ同じく意智情慾をたくはへて同じく此人の世に遊べば同じき者は同じうして孝弟忠信禮義廉恥かくる時は非人乞丐の徒といへどもこれをにくむ事をしるむかしより道を論ずる人内外をあらそふ事ありされども天地より見るときは内よく外をなし外よく内をなすものなり今米鹽水火は外にあり是を内にみちて内にある性をたもつ内にある性も外にあらはれて用をなす夫天地の間生としいけるが多かる中に孝弟忠信禮義廉恥をしり分てる性をば只人にのみ與へたもふさるほどにつやつやものよくいひ出たりとも人の性とする所にそむかば鸚鵡猩猩にたぐひして心に忌憚る事なうしてほしいままならば一旦は天にもかつべしたとひ天にかちしばらくの榮を極むとも燈火の消な

んとして光りをますの類にしてまた物にたとへていはんに庭なる花を魔と見て其枝を手折もてこれを挿頭(かざし)にするがごとししばしかはらぬさまと見るも世にたのみなき色香ならずや故に天下の大道は上一人より下億兆の人非人乞丐にいたるまで往通ふづきものにして僧俗男女のへだてなし今佛子のみ通ふべく儒者のみ通べくそれぞれの人のみかよふべき道は誠の大道にはあらじ孝弟忠信禮義廉恥はたとへば米鹽水火のごとし貴きもいやしきも百家小技にいたるもかならず同敷ゆく道なり欣譽(ごんよ)上人は我國東郡安岐郷淨國寺といへる淨刹あり開基より六世卓譽上人の弟子にして卓榮といへり父は近藤氏母は西村氏なり本府杵築と安岐との間に守江といふ所潮音庵と號する小庵ありしが所隷さだかならざりけるにこそ杵築侯の菩提所長昌寺と爭ひ出きたりて事本府にて決しがたく終に東に詣り公の裁斷を仰ぎけるに卓譽の非に定りて八丈島に流されぬ卓榮此たび師に隨ひ東にありしが此事をふかくなげきおもひのやるかたなきまま翌の日泣なく公廳に出夫と辨ずる言はなく唯仰ぎ願くば我師を歸參させしめたまへと涙ともにねがひける　公の罪定れることをかく物しける事なれば大に怒られあらけなく追出されぬされどもふかくおもひ込ける事なればば翌の日つとめて　公廳に出かはらぬことを願ふにぞ法をとれる人いとどいかりてこれを追ふ僧志し撓まず氣屈せず雨ふり風吹暑さ至り寒さかはれども來る年を迎へゆく年を送り髮はのび衣はうがつに任せつつ瘦さらぼひ日毎に　公廳に出歎き訴る事已に十六年きく人みな其義氣の切なるに感涙を催しける至誠やむ事なければや此事　台廳に達しその志しを哀と思しめし師の僧の歸

參を赦させたまひ此僧には下總古河に十念寺といへる淨刹の年久しくあれ居たるを賜はり此寺の中興となられしが下總におひて享保六年八月九日師の卓譽に先だちて同卓譽九年正月九日遷化終られき徂徠集をよむに上總國市原縣姉崎村次郎兵衛が下人市兵衛が事是と類す其大略次郎兵衛村の長たり村民惣兵衛なる者猪を逐ふて誤て鐵砲にて里人の妻をうちたり次郞兵衛此事をかくして告ざる罪により五町八段の田地沒收し伊豆の大島に流されけり次郎兵衛父年老妻に六歳の女子三才の男子あり此時難產してなやめり下人市兵衛三歳の子を懷にして里の乳あるかたにこひ人の田をかりその所得と己がむすめとをうり金八兩を得て小廛借りとやかく飢寒をしのばせけり己も妻ありけるが子あらんことを恐れて床を同じふせざること十一年次郎兵衛罪につくの日江戶にいたり官廳に出ねんごろに身を以て次郎兵衛に代らん事を願ひける姉崎江戶をさる事二十餘里往來三日の行程なるを其時より每月或は一度或は二度いたりて是を請ふ事十一年父なるもの已に八十三市兵衛老の相見ずして死なんことをふかくいたみ此般は容しくかへらじとちかひて出老の死なん事を歎き暫くの赦をたまひ父子の對面をゆるし給へその後わか擅訴の罪を以て身首處を殊にすとも辭せずと辭色きく人を動しける　公に其忠誠を感じたまひ次郎兵衛罪赦さざるに在次郎兵衛が田宅其忠誠を感じ市兵衛に賜はると命下りけり市兵衛命を奉せず主人の爲に是を始め己が爲にこれを卒らん事義にあらず願くば主人の孤萬五郎に給はれと願ひければ再度此事　公に達し市兵衛が願のままに命下りきと事絕て欣譽と似て欣譽は本意を遂ぬ親につかふるを孝といひ君につかふ

るを忠とわかてども是も一通りの差別にして君は民の父母民は君の赤子四海一家と見る時は忠孝の德別にあらず忠とは己をつくすなどいへば遠き樣なれども畢竟俗にいふ身をはむるなり身をはむるとはたとへばのがるる所なき路にて猿子などにせまられたるがごとし傍觀するものはあたらざれどものがるる道なきものは死をおしまず身をかへり見ず人の勇怯といふも顧みざるとしばしばかへり見るとの間なりされば此僧此奴進むことを有て退くをしらず死を分として生をかへり見ず是を以て　台聽をも感動せしめり回天の力といふべし本朝國史を修する日特行傳にものすべしむかし中津を鎭せられし一諸侯驕奢にして酒色に沉湎し諫むるもの手打或は斥逐義臣尸を以て諫るもののあれども容受なし終に國削られ封轉せり害提寺大雄山法性寺の住僧規外禪師侯の不君にして方正日日に盡き姦邪志を得國祚のかたむくを見るに忍びず屢直諫誘導有しかども用ひられず師爰におゐて飮食を退け貞享三年丙寅終に寂を示さる侍者感ずる事あり進んで問、擧㆓人才㆒國治與、師曰人才不㆑如㆓天吏㆒と偈あり

我有㆓一途吉祥呪㆒　時中長伸㆓兩脚㆒眠
無問無說眞般若　佛祖從來驀鼻穿

衣㆓人之衣㆒者抱㆓人之憂㆒食㆓人之食㆒者死㆓人之事㆒三衣一鉢樹下石上に身を托するは眞の出家也たとひ圓頂方袍たり共其廬に居り其食をくらはば去住に心をとどめざるべけんや僧徒の中この眞男子ありかくのごとき輩は天下の大道を行く人なり世に大同と各好尙との別はたとへば筆づかひに唐と大和の樣ありわかれて限りなき流有がごとし其流にたどりて趣きを求むれば其さまざまの味あれども終には同じ文字也道を立る人各好尙する

所より敎わかるる故これかれの求各ことなる事もあれど是は畢竟通天下の道としがたし右にいへる人のごとき内外貴賤の隔なく通天下の人をして節を撃しむもし是を置て別に向上の一道ありといはば是即その家學なり古人恥をしるは義に近しといへり禽獸を人にくらべておもひ見るに雌雄の相慕ひ子母の相むつび順境にたのしみ逆境にかなしみさして人にかはるとも見らずされども物に恥らふ心ばかり人にのみありて禽獸にはなしと覺ゆきんじうにあらざるものをもはら養んずるこそ肝心なるべけれ恥をしれば義をしる義をしれば禮を守り廉潔の操もたつ是もつて人の人たるを維ぐ所なり堯舜の道も孝弟のみなれば孝弟よりさきなるはなし忠信は是を用ゆるの德にして禮義は是を行ふの道かりにも禽獸とならん事をはぢば此道をすてていづれをかふむべき

いかばかり綾羅錦繡をかざり廣廈大堂にありとても物に恥らふ心なくば人非人といはんも辭すべからず世の中の人の家貧しく衣などうがち位賤しき樣の恥ましきことをばいたくはぢ又はまのあたり赤面する樣なることを恥て誠に恥べき事をばかたへの人いはんもつきなしとて其人に對してはふかくつつみかくししらぬ振し其人のあらぬかたにてぞとかく沙汰するもの也故に世にうしろ指といふなりあなたより指さしなんは事已に破れに臨みてこそ面辱には及ぶなれしかれば我まことに恥べきは人のかたらぬ内に自とがめかへり見るべき所にあり予嘗て幼き時故老の物がたりにきけることあり伊美の里に次八といへる乞兒あり甚愚なる者にてありしが物こふて口を餬ふにも是は餕なりとて與ゆれば饑れども食はず其母麥にて小實といふもの造るとて臼に取つきて死

けり是を心に籠てぞ有けん身終る迄小實食ざりしとなり其愚さはさることとなれども操の廉にしていさぎよく母に遺愛の深かりしは蓼莪の篇讀心地して足を寒泉に洗ひ衣を千仭の岡にふるふがごとし世に智惠ありて敏き人は智なき人をば咲ひ侮るものなり智ありてよからぬ人は愚なる人よりもおそろしきものなれば智はたのみがたきもの也我身次八を愚なりとあざけりても其遺愛の厚き操の潔きことはいかで及ぶべき然れば我はその愚なるより愚なり我を敏しとおもひて其愚なるにはぢずんばいつかおごりほしゐままなる心を制せんまたわかき輩の物がたりに是は儒なり是は佛也彼は愚なり已は智なりなど差別して大道の其間に行はるるをしらず今身を出して君につかへ其位に尸し其錄をむさぼり危きを見てさけ國家の傾廢を隱默し唯五斗米に匏繫せられてそぞろに其くつがへるを見る何の面目ありてか此規外に對せん

木付中務少輔鎭直
同三郎左衞門尉統直

古より業をはじむるの主は賢明に亡國の主は愚暗なる事世の常なりしかれども世變の問しからざるものあり吾今の杵築鎭はむかしの木付なり大友左近將監能直の子利根の四郎親秀の六男式部太夫賴泰同腹の弟大炊介親重に兄賴泰より速見郡武者所とし木付八坂歲田の三庄國東郡眞玉田染の兩庄等さきあたへられしよりここにいたり建長改元の年臺山の城を築子孫連綿として文錄二年癸巳亡日に至つて三百四十五年にいたる親重より十六世の孫を木付中務少輔鎭直（しげなを）といへり世世宗國大友に服事せり時海內鼎のごとく湧き穩なる月日もなかりしが鎭直小地僻邑にありといへども沈勇にして謀ことあ

りよく士卒を撫育して衆の死力を得たり時宗國宗麟は勇略ありといへども暴戾にして下を憐まず其子左兵衛督義統惰にして衆を御すること能はず島津家と連年九州の探題を爭ひしが日州耳川の一戰麾下の勇鋭ことごとく討死せし處鎮直の父紀伊守鎮秀ぞひとり軍を全うし麾下を護して引とれりそれより島津勢勝に乘じ太閤の援將長曾我部仙石等を討取豐中に亂れ入るほどに宗麟は丹生島につぼみ天正十四年十二月十二日義統府内にささふる事能はず高崎の城に退けば十四日には島津家久入かはる義統高崎にもたまり得ず豐前龍王の城にぞはしりける島津の大將新納武藏忠元速見國東を討隨へんと多勢を卒ひて速見郡に馬を入れ日出の城にとりかけ城主大神紀伊守鎮房を亡し大神兵部太輔鎮勝がこもれる深江の城をぬき潮の湧がごとく木付の城に攻よせたり島津の

勢巳に筑肥の諸城をせめ轟かし勢ひ破竹のごとくなればわづか數百人籠れる小城ささふべくもみえざりけり此城陷るに及んでは國東一郡及に血ぬらずして收むべしと城下にひたひたと着き只一もみにともみたれども鎮直少しも氣を屈せず鐵石と相さへ寡を以て衆にあたり戰ふ事するどく守る事嚴なりかかりしかば其年も巳にくれ春も半を過ぬれどもはかばか敷軍もなく進むに道なく退くに後を恐れ唯あぐみてぞ居たりける鎮直寄手の勞れて怠るをはかり精兵をすぐり二月廿二日卒然としてきつて出で死力をつくして戰ふ程に薩兵大に敗北し府内さして引取ぬここにおひて國東の一郡枕を泰山のやすきに置太閤の軍をまちうけたり依義統も府内に歸城し鎮直の勇武を感ぜられ父子より牒を以て今度の働き比類なきのよし褒賞あり程なく朝鮮の役起り鎮直の子三郎

左衛尉統直其子甚九郎直清と渡海せしが直清は彼地にて討死しぬ其後義統軍法にそむく事あり領國を沒收せられ安藝中納言輝元にあづけられ麾下の士もみなちりぢりになりにけり統直はうき旅ながら我子かばねをうづめし地なれば名殘もおしまれつ父母したふ故郷もたのむ木陰の雨そぼち心づくしの波風をうらざひしくも手とり來て水無月の末船を文字の浦につなぎ夜いたうふくるまま波間にうかむ月にむかひ舷に彷徨として國恥を無念におもひこしかたゆくすへあぢきなき世を感じ

いにしへをしたふも戀の夢の月
　いざ入てまし彌陀寺の海

とかきすて腹かき切て海にしづみぬ訃音木付に傳へければ父鎮直夫人を招き君辱らるれば臣死我死すべき時至れりといひければ我ひとりいかで後れ申べきと同じく死をぞ

とげにける是文祿二年六月廿五日なりされば曩祖親重は文事武備かねそなはり文永の頃は鎌倉にあり宗尊親王に近侍せしが親王その文雅を愛し常に傍に侍らひしがある日からやまとの物がたりども有しに親重古今を援引し辨懸河のごとくなりしかば親王手をうちたまひ文場におゐて汝を和漢將軍とすとのたまひし程に府中の人みな和漢將軍とのみ稱しける弘安年間には蒙古襲來の日兄賴泰に代り三百七十餘騎を率ひ筑前博多にはせむかひ蒙古五千餘を攻なびけ戰艦五艘を奪ひ得てかへれり沒後其靈を金鷹山にまつりて和漢將軍の祠と稱し春秋の祭り今に廢せず遺愛の民心に存するかくのごとくなれば家の訓の世世をへて傳はりしにぞ世亡び嗣たつに至つて猶其芳をのこしけむ宗國傾敗の時にあたつて吉弘統運の君を諫し石垣原に戰死せし、事成て其名揭焉たり鎮直

父子忠といひ勇といひ楠氏の家風にもあやかるべきをしるして傳ふる人もなく春はすみれつばなまじりの徑、秋は蔦紅葉散敷野邊に苔むす孤墳荒涼として殘れり古をおもひ今を感じ弔祭人なく名沒するをいたみここに書載侍る是忠の事なり此記ののすべきにあらずといふ人に答へけるを左にしるして人の子たらん者に孝の大意をしらしむそれ孝は始於事親、中於事君、終立於身といへり一人有慶兆民賴之は天子の孝なり保社稷和民人諸侯の孝なり保祿位守宗廟は卿大夫の孝なり忠順不失事其上は士の孝なり謹身節用以養父母は庶人の孝なり故に孝は天の經地の緯にして百行みなここにすぶ禮記に孝の道をのべて惡言不出於口忿言不及於身不辱其身不羞其親ともいひ身者父母之遺體也行父母之遺體敢不敬乎居處不莊非孝也涖官不敬非孝也朋友不信非孝也戰陳無勇非孝也ともいひ孝弟發諸朝廷行乎道路至乎州巷放於獀狩修乎軍旅衆以義死之而弗敢犯也ともいへり故に身を立るに終るとは父につかへ君につかへ我身天地の間に立て道に媿る事なきなれば君父とわかるれども身をたて父母を辱しめざるに至つて孝のかぬる處なり故に孝を要道とはいふなり又小孝は力をつくし大孝は匱しからずといふも大小は孝の優劣にはあらず小孝は小節目大孝は大規模にして匱からずとは孝の德あまねければ宗廟をたもつも庶民をしたしむも我衞生によきも産業につとむるも友交の信も戰陳の勇も匱しからざればこそ身はたつなれ鎭直のごとき分てば忠に屬すといへども匱しからざる孝に近かるべし世に君父よりおもきなければ忠孝はもとよりなり妻を睦び子を愛するもいづれかおろか有べきなれども事變にのぞみ其道兩つながら全ふしがたきは義と

いふものに斟酌して其おもきに隨へば一をかくといへども全きにそむかず赤穗復讎のむかしをおもふに近松勘六行重老母を奉じあづまにてゆかりのかたにあづけ置晨昏定省ねんごろなりしが復讎明夜に相決しける時母にいとまごひすとて來りまみへ某し事重々國恩を請し身のおしからぬ命存らへ候も何とぞあだをむくひせめては先君の怨を地下に慰めんとおもへばなり今はかり事已に極れば相見奉らんことも今を限りとおぼえ候身の死するは惜むにたらず候へども君の御年老よるべなきことをおもひ奉れば心うく侍るなりされども上國恩にそむき父母の名をはづかしめ生を偸んでいきん事忠にも孝にも缺候へば何とぞ老を愛護したまひ月日を送りたまへとかたりければ母吾老ぬ且ゆふべをはからぬ身なりしかるに我子節に死し名を古烈士に比せんずること是にまされる嬉しきなしとくきかましかば猶名殘もをしむべきにといふをさん候さも存候へどもかくと聞たまはばその思ひにやつれ給はんがかなしくて今までつつみ候とてさしうつむく母げにさも有べき事なりとて奥に入けるが時をうつして出ざればおやしとおもひ行て見れば早劍にふして空しくなりぬ老婦の故に慮をわかたば汝が志のたゆまんことを思ふほどに我先死して報國の志を一にするよしなどねんごろに書てかたはらに在行重他のあやしまんことを恐れ我牢浪のくるしさを母にかたりければ母難遁の色動きしか存らへて我を煩はすることを悔てぞかくはなられけん今は悔れども益なし我親しき友に相はかり明日これを葬らんそれまで屍を守り給はれとて金若干と終焉のことどもしるし屍の傍に置あすは來らんといひて其夜難におもむきける親も不慈の親に

あらず子も不孝の子にあらず楠正成がいひしごとく義のおもきにひかるる也

安岐郷野原左平次

諏訪拙齋の閑居口號を按ずるに安岐郷下原村といふに善長寺といふ廢刹ありそのかみ此寺盛なりし頃此あたり野原閑竹といふ人あり此人いとけなくて父に後れこの寺に投じて薙染し隣寺淨國莫無とともにあづまのかたにおもむきけるが莫無はあつく佛の道をもとめしに此人はひたすらに丹青の道に心をそそぎ終に其妙を極め天正十五年郷にかへり歸俗し野村閑竹と號せりそののち推移り慶長の頃は此地細川忠興領となり長臣長岡佐渡杵築の城を守りしが其畫を愛しかつ諸藝も堪能なりし程に釆地百石をあたへ召つかはれけり閑竹の子を市左衛門といつて又繪をよくせり市左衛門子を鬼松といへり市左衛門父なくなりて後常なき事を觀じ世をはかなくやおもひけん鬼松三つのとし妻とともにふりすて身を雲水にまかせ行がたなくなれり妻は伊勢の海士の船ながしたる心地してよるべを波のかたかたにみどり子を懷にしうき年月を送しが細川侯豐前より肥後に鎭を轉せられ佐渡も杵築より八代に移りぬ鬼松がをば聟平非何某その孤なるを憐み七つ八つのころかなたに呼むかへ名を左平次と改め養ひ育ける左平次ひととなるに從ひ明くれ父の事戀しく思ひ情にたへず肥後を辭し父の跡をしたひさまよひ終に中國に入防長二州をくまなくたづね求けれどもあらず夫より藝州へ志し廣島の城下を物色しけるにある人さもありげなるがしばらく此地にも留りて繪どもかきしが畫に用ゆる調度ども其ままに引ちらし忽然として跡を晦しされり今はいづくにあるやしらずといふに力を落し又備州岡山におもむき人

にとへばとあるかたに草の庵をむすびて一人の老僧すめりもし尋る人にあらずやといふに左平次うれしくかの庵にのぞけば一人の老翁座せりされど左平次襁褓のうちにして別れたる事なれば見知べき樣もなし在し事共かたりもしその人にはあらずやと問ければかの翁そなたには父をたづぬる人とやいとおしの御事や父ならいかばかりか嬉しからん余所ながら墨染の袖しぼりぬ誠に世に有がたき人とこそ存候へ我その人をしれり是はさる里にて幾年ばかり前に空しくなりたまへば今は甲斐なきこととなりとく歸國するにしかじけふは日もかたむきぬこなたにて夜をあかしたまへとてとどめいと念頃にもてなしてわかれぬ左平次は袖の涙の露ならば消も入たき心地せしがさてしもやむべきにあらざればなくなく古鄕にかへりけり其後程へて風の便りにきけば此翁こそ左平次が父にてこそ有しかどおもひ切し煩惱再び妄執の雲に迷はんこと菩提の妨ぞと心つよく思ひとりすかして返せしにてぞ有けるが程なく其身も無常の嵐に誘はれて九重の泉路に趣きしよしなれば一滴の水一線の香なき魂をまつりて薄命をいためり後の柞葉侯その志をかんじ招かれて後には伊藤作兵衞と名のりしとぞ中村惕齋の姬鏡を見るに發心集を引て日中頃筑紫にすみける何がしとかやいひて門田など多くもちて家豐なるもの有けりある時世の常なき事を思ひてふと菩提心をおこし家をすててひそかにのがれ出まづ都のかたへとのぼりけるを相しれる人見付て遺しかるさまを其家にしらせければ家こぞりて驚きつつ我さきにと追行ける中にも年十二三なるむすめ有けるが追つきて父が袂にすがりこはそもいづくへとてかゆきたまふぞとどまらせ給へといとい

たう啼さけびけるをいでや汝にさまたげられじとて袂を引はなちて刀をぬき其髮をおしきりけるにぞ恐れてしばし立のきけるかくて父は紀伊國高野の山にのぼり終に法師となりて何がしの院に入行ひすましてゐたりけり南筑紫の上人と人はよびける也むすめは猶かなしさになくなく父をしたひて行けるが女をいむとてかの山へは得のぼらで其麓に庵をむすびあまとなり居て明くれ父がことをばつとめけるとぞ此法師は白河のおりゐの帝にあひたてまつりけるときこゆ其頃の事なるべしとぞ西行法師は鳥羽院の御時北面左兵衛尉藤原憲清といひしが出離のおもひふかく不幸の頃

世の中を夢とみるみるはかなくて
　　猶驚ぬ我心かな

世のはかなき事とも思ひつづくるにつけてころは秋月すみ風あはれなりければ

をしなべて物をおもはぬ人にさへ
　　心をつくる秋の初風

さて秋も暮ぬ願はくば三寶この度の出家さまたげあらせ給ふなといのりとのゐよりかへり夕かた宿にさし入れば年ごろいとをしくおもふむすめの日にてよにらうたげなるさまに何心なく椽に走り出で父のおはしますを嬉しさよなどやをそく御歸り有ける君の御ゆるしなかりけるにやなどいひてよにいとけなきなでしこの姿にて狩衣の袂にすがりけるをたぐひなくいとをしくはおもへどもすぎにしかた出家を思ひとどまりしも此むすめゆへなりされば第六天の魔王は一切衆生の佛になることをさへむがため妻子といふきづなをつけ置出離をさまたぐといへり是を知りながらいかで愛着の心をなさんやこれこそ陣の前の敵煩惱の紲をきる始也と娘を椽より下へ蹴落しければちいさき手

をかほにおほひ猶父をしたひ泣けれども聞入れず内にいりけるに彼女房もさぞかなしかりけん、なれど志しのかへらざるを知てやさりげなくむかへけるに

　露の玉消ればまたもあるものを
　　たのみもなきは我身也けり

これ生の得がたく死後の樂土をおもふなり

　世をすつる人はまことにすつるかは
　　すてぬ人をぞすつるとはいふ

是彝倫の情義を煩惱と見たるなり夫人と生れ來ては人倫より重きはなしいづくに往としてか人倫の際ならざらん是人の道をして人に遠ざかるといふものなりかの敎とても人を苦しめ歎かしめ功德といふ事は有まじくこそ思はるれされば深草の元政上人は蓮門の巨擘なり親につかへて愛養いたらざる所なし二十四の孝僧傳を著し佛門の孝を性とする事をとけり棄恩入道曷勞定省是又僅聞無爲報恩之言而不解其所以棄恩報恩引後世闡提之黨背眞向妄同入火坑といへり千光國師は始て日本に禪敎をひらかれし人なれば我國の達磨なり備中の人にて叡山に在しにも父母の病をききては速に山を下り湯藥懈らず後求法の爲に入宋有しが彼地にて秋を感じ

　もろこしの梢もさびし日の本の
　　ははその紅葉ちりやしぬらん

此うた續古今集に收められたりかかる釋門の高僧皆その志かくのごとく理を以て推に親に孝の道あれば子に慈の道なき事能はずしかるを妻子を惡魔怨敵に比することは此身のとどめがたく靄のごとく電のごとく定めがたきより死後苦樂の說にまよひ不退化樂の地にいたらんことを願より君をすて親ををき妻をやもめとなし子をみなし子となし其かなしみなげくをかへりみず後世を願

ふ事今の世にもおほかる事なり聖人の道よりしてみれば義をしらずして利心にひかるるなりそれ生死は大にしていへば造化なりきのふの日化して收むべからずけふの日現をなし將來にむかつて生生やまず往に隨つて生じ去に隨つて化す天地すらきのふをけふに還すこと能はずまして人をや伊川程子韓持國とものがたりの序に持國けふの日も暮ぬと嘆せんと挨拶あり持國日往けば老もともに行といひしを程子さあらば公は留り給へ持國いかでかとどまる事を得ん程子能ずんば去て可なりと是誠に徹底の理なりされど往をかなしみ死をいたむも人情の常なれば持國が嘆もやむべからざるもの也ここにおひて幽明の故をしり死生の理に達せざれば我持する所の神識を生前に推し死後にひき無中に有を生じて海市の樓臺人馬を微茫に認るがごとしあらゆる態、偶なき物なし

生の死に偶するは明の暗に偶するがごとし暗きをしらんとならば手にもてる燈をけせば踵をめぐらさずして暗し我明なるものをすてず暗を求めんこと得べからず哀樂悲歡禍福賞罰いける所の用を携へて死後をおもふ死出の山三途の川焔魔の廳蓮臺のたのしみ刀山劍樹のくるしみ生を携へて死をみると同じ火をかかげて暗をしめすもし此思慮をひさげ去らば盡未來際いかで輪轉せざる事を得ん是反觀の故をしらざればなり野原筑紫はいふにたらず西行はさばかりの豪傑なりしかども此境には迷へりまして世の滔滔たるものをや世に蘇生の物語まままきこゆ氣絶して又よみがへるは病邪擁蔽すること有て神氣しばらく内につぼむさる程に心下かならずあたたかにして家人殯殮にまつ事あり神氣内につぼむがゆへに其間夢をなすきくもの幽明の故を辨せず死したるものま

た活くとす閑際筆記に有馬の僧石文氣絶して十九日にして蘇す生前湖中にあそび湖山の風景をふかく愛しけるに氣絶の間た湖山風景の内に遊びしとなりさすがに禪人故に天堂地獄の夢は結ばざりしと見えたり彼より說を下さば是を中有といふなるべし中有實に是好消息

富樫

はや年あまた經しと覺へぬ晋冬の頃本府に遊び河村何がしの亭にて夜ふかく物がたりけるに主恕の字の義をとふ晋答へける樣は恕とは諺に身をつみて人の痛さをしるといふ是なるべし唯其者の身とならずわきよりとかくいひてんは事理あたりたる樣にてもかれが情にあらざること多からんたとへば强き碁の下手のうつを見てなどかくあしき手はするぞとせむるがごとしもとよりさる事なれどもよはきものはいかにも心をつくしおもひはかれども是よりよき手胸中になければ無念とおもひてもせんかたなししかればよき手はよき手なれどもしらざる人にその手うてとおもふは下手の身とならず己がつよき心より人をとがむる故ならずやされば世の中の情慾愛利に溺るる心よりあらぬ淺猿しき事どもし出し人にわらひあざけらるるも君子ならん人ならば先其愚さを哀とも見てさとし敎へ其上に其非を告んにぞ自ら悔ひ責る心もきざしてんしからば己が妻子眷屬にもせよ我おもふままならぬとてなど人をばとがむべき只人の心の明らかならぬをとがむれども己が鏡も曇るなり彼より見ばおなじやうともおもふべしたとへば器をくらき所におきあるじあやまちて損ひたらんには下部おき樣のあしきを咎んも奴婢そこなひなばなど足探りせぬ杯罵らん勢我に爭はずともいかでか心に服すべきさ

る故に怨とは彼をとがむるの心をもて己をとがめ己をゆるす心をもて人を恕すなり賭碁うちて樂しむ人博奕うつ人に異見加ふれども服せず是も己は事ことなりとおもふべけれどもかの人よりは己が田をすてて人の田を草ぎるを病とおもふなるべし只先の愚なるかたをのみいふにもあらず賢愚利鈍となく何事につけても唯とくとむかふかたになり淺しと見ゆる谷水もくむ人ならでいかで底の心はしるべき前つかた人の安宅を謠ふをききし事ありしに滿座みな辨慶が忠心を感じ涙を催しけるに晋聞ていひける樣それはさる事ながらつらつら富樫が心を推量すればわきて哀れに覺え侍る辨慶は己が主人とたのみたる義經にして生死をともにせんと思ひ定めて出立しことなればさも有べき事なり富樫は義經贋山伏となり此處通らんとて其爲にのみ關を設け選れて關守と

なりたればかからめとりて鎌倉に獻せんと思はであらんやうなし富樫も已に此任にあたるものなればむげのうつけならん樣なしまして草も木ものべふす鎌倉の勢にて嚴重の命行はれ命にかへんもはかりがたき務なればなど容易には通すべき紅は園生に種てもかくれなし十二人の山伏まぎるべきにもあらず其よろほへる樣なるを義經ぞと見しはさすが眼に精力ありござんなれ赦すまじとする所を武藏坊とも覺しき男秘術を盡し辨をふるふといへども猶のがれ難ければ金剛杖とりのばしあらけなく打しを見て富樫心におもひけんこれこそ慥に義經なるをよくも思ひ切ては打けるぞ嗽銅の熘に座し鐵の丸かせのむよりもくるしかりけんかかる忠義の志たとひ我身鎌倉に召れ重きとがめを蒙るともよしや腹きるまでのことなり彼が志いかで無下にはなすべきぞ我だに世にう

づけものとならば彼が志は立べしと思ひ定めて通しけん矢長に哀なるさまいはんかたなししかるを只辨慶をのみ感じて富樫が心を汲ざらんは本意なきことならずや是を己にすると人を己に隔つるとのさかひなり君は人をつかふものなりつかふ情のみ知りて人につかはるる情をしらず子は親に抱かるる者なりいだかるるおもんぱかりのみ有ていだくものの心を得ず大内義隆在京の頃簾中義隆のおもひものに

　身をつみて人のいたさぞしられける

　　悲しかりけり戀しかるらん

と讀で贈られしとぞ此人もおもひものの身に成て見ければぞ我と同じ悲しさの隔なき程に露ねたむ心もなかりけん世の人かうやうに人の心の底をくみ其上を禮義に正さば人いかでか悦服せざるべきとかたりし事有されば孝は百行の本ともいひ至德要道ともいへり至德とは親に孝なれば君にも忠に家にも和する也要道とは肝心の道といふことなり肝心の道といふ事は先我身親になり子をおもふ心を推て見るべし幼より人となれるに至りても病やせまじあやまちやあらましばし見ぬ程もあれば何かたにや行けんなど又君につかふれば不忠ならん事を恐れ人と交れば信ならざらん事を恐れ妻むかへ嫁れば其むつまじく榮行ことを天長地久と祈つつ限り有命もて果なきおもひするものなりまして酒に長じ色に耽り口甘旨にあき身遊樂にすさみ終に病を醸すをやかくのごとき輩は私しにしては人と怨をかまへ公にしては刑辟に觸れ父母よりたまはる天壽を促め庶人は身をそこなひ王侯は國を破るなり此故に己が德を損はん程のこといづれをか親のおもんぱかりの外の事ならん已に親の慮の内ならば顯然として親の志にそむく

なり已に親の志にそむかば孝に乏しといはざらんや今わづかばかりの物なりとも親のかたみとて遺し給はる物あらば是をつつみ是を箱にし珍重愛護せん況我身は父母の遺體なり何れか是より貴からん父母全して是をうめり已全してこれをかへさんことを思ふべし然れば深き淵に臨めるごとく薄き氷をふめるごとく一度言を出さんにも一度足を擧んにも身を辱しめ憂をなさんことを恐るべしさる程に孝行とは親いませるいまさぬにはよらず我身を没てやむ者なり我身に恥を蒙るは父母のかたみを糞土にすつる也病を醸し法を犯し其身をそこなはんは父母のかたみを滅裂するなり此故に人の子の親いまさん日のつかへば更也男子は君につかへて忠に人に信あり其家の務に怠たらず妻子にむつまじく女は舅姑によくつかへ松の操の色かへず夫にむつまじく家のものをあはれみ苧をうみつむぎに怠らず心さま優にやさしからんにぞ孝の道全からん只親の思ひにそむかじとおもへば百行ともに修まるなれば至德とも要道ともいふなるべし

中西伊兵衛

肥後小國權三郎

さきに本藩に一士あり中西伊兵衛といへり本姓は記せず中西の家を來り嗣り天性至孝にして老萊子の風あり養父後は老耄氣味にしていろいろのそぞろごとどもいひ出てもそむかずそのうへ踊をこのみて家にかへればば其踊らん事をもとむ伊兵衛刀をくよりはやく時をうつしてうたひ踊れり猶もあかずして催せばさつてもおすきそれ〳〵と又立あがり日くれ夜ふけて自勞るるをしらず親なくなりて後は官を辭し跡をひそめ其終る所をしらざりしと誠に有がたき人なり星霜推うつりて其言行さぐりもとむる所なしを

しむべき事なり此頃肥藩村井見卜子肥中の孝子紀事を見しに小國權三郎といふものの事こそたえてこれと似たれ權三郎は小國赤馬場村の農夫なり父孫右衛門子六人もてるが中にいと季にして女子は出て嫁し伯叔は別居し己二親と同居せしが享保丁酉といふに父病にふしあけの二月世をむなしくしぬ權三郎ふかくなげき母ひとりなればいとど他事なくしばしの隔をもをしみしかば農のいとなみも怠りいよいよ貧しかりけりさるにより木をもとめ木履をひきこれをひさぎて日を送れり母は老たるがうへに心も耄耄敷物狂をして折ふしは慘澹としてたのしまず孝子は何とぞして只母の悦ばん事をのみもとむる程に母鷺のごとくたて雀のごとく躍れなどいへば大の男の身として片足立小躍し又は馬のいななく眞似牛の吼る眞似せよ又は猫又は犬或は鼠のごとくはしれなどいふにまかせていなむいろなし老母それも常となり或日氣むすぼれける折外のかたうちながめ耕したな覆ひする人のおほくむらがるを見て權三郎に早くかの人人を招き我門に市をたてよといひける權三郎親の命いなみがたく直にはしり出て田の面の人にうちむかひ我母年老心も心にあらず手足の病ありて心のうかむかたへ立出て慰むよすがもなし鬱鬱として月日を送り侍りけるに各のかく物したもふを見て何とぞ我門に集まり市をなし萬の物うりかふ態し給はんことをこひ願ふかかる事いひ出んには各のいかり罵りにあはんことをおもふといへども老て旦夕をまたぬ身のいふことの切にあはれに覺へ侍る我不幸にして母の心を慰むることあたはず君の輩を煩す願はくは母の爲にしばらく此たはむれをなし餘年をたのしましめ給へと念ごろにいひけるにぞ田にある

人人その誠に感じ孝子のもとめ辭すべからずとて各うちむれ其門にてしばらく市のたはむれしけり此母平生いら蟲をきらひけるがある時ふとおもひ出してそこにありかしこにありそれ驅れとて權三郎へさがさせけるにあらざりしかば其ままにこたへけるを母實とせず常にしたしめるにもあらざる市原村吉藏といへるおのこ呼て見せよといふ權三郎心にも得ざれども親の心に得そむかずその村にいたり吉藏にあひ其むねをのべければ吉藏欣然として來りさがしいやいら蟲はあらずと告ければ母合點してやみにきかかる老の身なれば病の床も潔からざるを夜ごとに溺器をそそぎ衣衾を洗ひ隆冬盛夏怠ることなしあたり成人人權三郎ひとり其勞をとるをあはれみ妻を迎んことを催すに權三郎頭を掉てうけがはず親其子にあらざれば寢食をやすんせず子たる者の心親をやすんせざるを以て憂とすもしめとる所ふ幸にして不順ならば我親に不順をなすなり親百歲の後は人人のことはをもおもふべし今其時にあらずとて彌あつくつかへけるが享保己亥十月廿六日母七十四歲にして身まかりける此時權三郎二十九歲事君に達しあつく恩賜有ける權三郎悅にたへずやがて父母の憤墓を修し塔などたてけるとぞ是によつてこれをおもふに至誠の人を感せしむること金石つらぬくべし我つねに碎玉話にのせたる夜盗を退けし女の事を愛し誠を說くの話柄とす諳記なればたがひもやせん見ん人本書にてらすべしむかし天正永祿世の中靜ならざりし頃美濃尾張のかたはわきて四達の地なれば盜賊ども處處に嘯聚し多く村に押入て人の物掠め奪ひなどするがある村落を夜盜とも押入せんとめぐりうかがひけるにひとつの家に夜ふかく一女子ひとり飯か

しぎてありけるが其體甚閑雅人なしとて怠れる容なし飯の熟やうを見るとて飯粒を箸にはさみ蓋の上におき指にておしてこころみけるをうかがひて多くの人人なき所にてはかならず容すさみ行墮るものなりさるに此女暗室を以てみづから欺かずかかる家をば侵さぬ物ぞとてよぎて行けるとぞ是即誠の感なり至誠はやむ事なしとふるき文にもありて只積む上にしてあらはるるなり釣瓶の索の柔なるも月をつみ年をかさぬれば石の非幹もうがつわづかみなもとは手に掬ふばかりの岩清水もながれてやまざる末のかたは黿鼉蛟龍をもすましむなり酒杯の臺の雫には芥を置て沈むその同じ水なれどもつみて湖海をなす時は艨艟巨艦を重しとせず此女の力よく强盜を退け權三郎田間の農夫隣村の人を遊戯の間につかふこと手の指をつかふがごとくなるも必ず一朝一夕のしからしむるにあらずわれうたよむ道はしらざれども

　久かたの雲非にまがふ沖津浪
　　むすぶ岩間の水としらずや

といひて子弟をはげまし侍る日に見へぬ鬼神も誠にはうごくなりましてや人におけるをやされども誠の道は善は善をつみて感じ惡は惡をつみて感ずる事影と響とのごとし易の文に霜をふみて堅氷いたるの語を釋して子父を弑し臣君を弑する事一朝一夕の故にあらずといふも誠の行はるるさまなり故いかにとなれば是非の心は天性にして誰か親のしたしく君のたふときをしらざるものあらんされど人情は心にそむきもとることあれば氣内にふづくみ是が外にのぶる時はもとり入れはもとり出る習ひにてたとひ上下尊卑をへだつともとはあるまじかくはあるまじなどおもふことのちり塚の塵いつし

かに船車にもつむべくなりてうらみ終には骨髓に徹しよしや親にもせよ君にもあれ憤りはらさでやみなんやと邪路の一念を激して船をうかぶる水またよく船をくつがへすなりたとへば明智光秀がごとき始信長に依歸せしときはさぞ忠をもつくし力をもつくさんとこそ思ひけめそれをひたすらにうとみ辱め犬を追ふて墻にせまりし故一生の功業を一日につくされたり光秀本能寺の擧をおもひ立しとき

心しらぬ人は何ともいはばいへ
　名をもいとはじ身をもいとはじ

此うたにより明智が憤り一朝一夕にあらざることとしるべし是誠に臣子の大逆不道といへども君父もまた自禍を招くことあり積油の氣火を起し終に焚灼の變をなすつむもの上にあらはれず發するに臨みてはいなびかりの起るごとくいかづちの撃ごとく誠に迅雷耳をおほふに及ばざるなり故に平安の日にあたつてその機をつつしむ事視ざる所におぢおそれきかざる所に戒しめつつしまずんば不虞の過必ずあるべし是臣子にいましむる所といへども君父もまた恐れずんばあるべからず是誠の感應を說くによつて不善のつめる所も感應のある所つつしまずんばあるべからずと君父のためにしかいへり

小野氏の寡婦

女德は詩書に先いで猶世世の文にもあつく聞へ侍りぬ天質の美はいふにや及ぶおしへの至れるにあらずんば或る事かたかるべし婦人かんざししては人に嫁するをおもしとす已に嫁しては舅姑の心に從ふよりまされるはなし女憲に意を一人に得る是を永畢といひ意を一人に失ふ是を永訖といふといへりされば意を主夫に得ることは必らず舅姑の已を愛するによれり恩義もしそむきぬれ

ば進んでは父母の恥を増し退ひては君子のわづらひをますと班氏の文にも沙汰し侍りぬ家にありて父兄に孝弟なるはもしくば得べし骨肉のしたしみなればなるべし人にゆきて夫に順なるはすでに得がたし舅姑に孝なるは彌かたし舅に孝なる猶得べし姑に孝順なる至りて得がたし婦の性相いれがたければなるべし富るはつとめて成るべし約しきにいたりては性美はしく志のあつきにあらずんばいかでか孝順のつとめにたゆべけんやここにおひておとろへざる有ば天これをかへり見ざらんや財津氏名は利與年二十一にして小野仙菴に嫁し二子をうめり長子七ツ次子二ツ仙菴病をうけて終れり財津氏廿九姑八十七長子月俸を賜り家もとより貧し財津氏よく家を治め老姑を養ひ二子におしへ奴婢をなづくるの道各誠に出てやすらかなり故に姑心をやすくしてうれふる所なしことし姑九十七財津氏寡居十一年志をあらためず孝養いよいよ厚し邦君これをきき給ひ感悦ましましてことしの春賜して賑はし給ふされば誠のおほふべからざるにや其子猶少し人のとひ來ることなく隣家といへども其身を知る事まれなり此比かつてつかへし下部の言葉をきくに老姑耳うとくなりぬ人來り去れば婦よく其言を告傳へり夜夜起臥十度あまりにしてそひふすいとまなきにみづからつとめて其勞をいはず二子に垢つける衣をきせても奉養のそなへかかず眠をしのぶのいとまには道ある文を見て獨たのしめりとなんかたりぬここにいたりて邦君の明にして惠かしこき事を信じて悦ばざるはなし世の人姑の慈ならざるをせむる事至りて婦の孝ならざるをなだむるにあつし道の明ならざるによれり財津氏の孝順なるがごとき慈ならざるの姑あらんや天下不

是庭の父母なしと聞く信ならずや予おもふ二子其德に化して能孝によく弟ならん天かならず福を下して小野氏の家榮る事を得るのみか婦の道たぐひをなして幾家の福をや給ふならん二子予に來りて學べりこれが爲に其狀の大概を顯して賀して是をさづけ侍るものなり

此篇は有終先生の文なり有終先生とは五田村平介が傳に見へたる綾部安正なり紺屋町はつが傳に安胤といへるは先生の子なり後に出たる魚町兵吉が傳は先生のむすめ高橋氏の寡婦千賀の筆なり

山本氏の寡婦

すむが妻の父寺島定盛（五郎右衞門老て洞雲と稱す）本姓は山本氏家兄定道（善右衞門と稱す）侯につかへて江戸の邸にあり江戸の北八里ばかり赤山といへる里より妻むかへて住けるが寶曆八年九月の頃身まかりぬその子安兵衞がつまは攝州尼崎侯松平遠江守の邸中供頭つとめける齋田清兵衞といふ者のむすめにして名をりゑといへり世の中は末の露もとの雫のならひとて安兵衞すこしなやめる事有しが父に後るる事わづか五年同十三年臘月二日あら玉の春をだに得むかへず老たる母をのこして世を早うしぬこの時りゑがよはひ猶はたちにみたず芦葉霜老て鴛鴦の眠ひややかに菱花影くらうして孤鸞むなしく鏡にまふさま余所の袖だにしぼりぬなき人をば品川天龍寺に葬り子とてもいまだあらざればさるかたより養子もとめて其跡を繼しかどもおさおさ敷心のなくてつゐに邸を出て行がたなく成り今はたのむよすがもなきほどに老母やもめにむかひ我は赤山のむまれなればふるきちなみも多かりかなたにさりて心やすく老をも送り侍らんそなたには猶をしむべき齡ぞかしさとのかたへ歸り給へかくてぞ

父母の御心もやすからん猶行すへは人のはからふにまかせ給へなどいひ慰めけるにやもめいかなる事を仰せ候ぞ我山本の家に嫁してより身を外に託する心なしまして母人の御齢ひもかたむき給へばかよはき女の身ながらも我夫にかはりおきふしを見奉らで何かたへ歸るべきいかなる山の奥野のすゑとも御あとしたひ御行すへ見奉るべしと申ける老母其心をば感じながらいかにもしてかへさんといろいろになだめけれども得うけず老母側しかねていかにの給ふとも我はひとりこそ行べけれわかき人をば得つれじといひければやもめは涙にむせび今は力なき事に侍るさりとて我にかへらんかたなし御供かなはずともみえかくれに御あとをばしたひ奉るべし赤山にて御家の内おきふしかなはずとも今迄のよしみと覺しめしあはれ軒の下だにかし給らばよそながらうしろ

影を拜し候ほどは御ゆるし給はれとなげきけるにぞ老母も其人のいとおしきにこそかくはいひつれいかでかかくはつれなからん田舍住居のわびしきをも我に伴ひ給はば我子もいまだ世にある心地しておもひなぐさむべしとて赤山のかたにつれだちちなみの家のほとりに庵むすびすみけりやもめはなれぬ事のみを薪こり水汲あつく老母をやしなひけり我　老公（松平對馬守源親盈公）此貞淑をきこし召近侍岡田匡隆（源左衞門と稱す）を使として念頃に仰ごとありて奥にめしけりやもめ謹んで申けるはまことに有がたき仰には候へども我一度夫に後れ邸中を退きし時二たび人間に出まじとおもひそめ候きまして老たる母も我ひとりをこそたのみ侍るよきに傳へたまへとて出ずなをかさねて命ありしかども我初心にそむかじとてかたく辭してうつらず此時使たりし岡田匡隆に老母かたりける

は此婦の貞淑至孝世に又とあるべくも覺へずあなたに見へたる杜の内天神の社あり我日ごとに詣づる事にて侍り雪ふれる朝などはやみても有べきにとくおきて箒とり通ひ路の雪うちはらひ我をたすけまうで侍る此一事にても他事おもひやり給へなどむかし夫の友なればいと細細と物がたり有けり匡隆は聖の道にも心をよせ義にいさむ人なりしかばしばしば我とともがらに對し其高節を嘆じて感涙を催されき其後尼崎侯よりも聞及びたまひ奥のかたにめしたまひけれども我夫のつかへし君の召をも辭し侍る老の行する見とげ侍るの外世に望なしとて出ず今はや三十年の霜雪に常盤の松の色ふかく母子恙なくて赤松にすめるよし折折風の便に傳へ侍る

五田村平助

我杵築前四世の邦君　龍溪公あつく學をこのませたまひ正德の頃國中の孝子貞婦等錄さしめ每度褒賞あり齡八十をこえ宗族むつまじきにいたりてはまのあたり御覽じ御めぐみあり鄕の代官長吏をもしたしく召れ民の利病をとはせ給ひける公の儒臣綾部安正あるとき友人と城外を散步し湯たうべんとてとある家に立よりしに賤の家のならひいかにも貧しきさまながら垣ほ正しくゆひたてちり拂ひ淸らかに住なせり入て見るにあるじはあらず主の名を妻にとへば平介とこたふ內に入て見るに新敷疊一疊しき老母其上にあり事のよしども問ければ老母にじり出て我身をいたはりていつもかくやはらかなる疊してしかせ候とてそれより平介が孝狀どもくはしく物がたりけるほどに安正感じ家にかへり心ざしある人人にかたり傳へ送り物とりしたため遣しけるより平介が事も世にしれける所は城北牛道ばかり五田と

いふ村なり君其孝狀を感じたまひ折節侍臣に平介はいかがしてあるぞ見て參れとて其安否を問給ひけるいと有がたき事になん侍る今その行狀をとふに年月隔てつればしれる人もなし粗その人を聞に溫厚至誠を以て人に接し稼穡につとめ租徭に後るゝ事なし溫凊につとめ出るに告し歸りて面合する時は四方のめづらしき事ぐさどもつみもて來り物がたりて老を慰むる事にて冬のそらにはとく薪とり閭のひまふさぎ夏の頃農のつとめ終夕餉ねもごろにとゝのへ母にむかひ今夜もあつし川邊に出給へとて手ひき脊をひ道すがら己が稼あればよしあしかたり烟草火繩茶菓子樣の物あるにまかせ子等にたづさへさせむつまじく物がたりし歸ること を常にして有ける母時としては平介が勞をいとひ家にあるときはさのみあつしともおぼへず此ままにてあらんもやすしといへば

平介本意なげに己が妻子にむかひああ母人の川邊に出て涼み給はで我獨ゆき涼んはさびしく物うし母人の何とて今夜は出給はぬぞ我もあつさ忘れん物をとつぶやくにぞなれ行てすずみとらば我も行てんといふ平介心よげにうちゑみ行てあつさ忘れんとて例のごとく肩にかけ行けるとぞある時　君侍臣淺井政鄕なるものと安正とをつかはされ汝母につかへて孝なるをきくいとめでたしいかがつかへけるぞと問しめられければ平介恐れ入我いかで孝の道しり侍らん唯家まづしく老たる母に艱難させ候こそ心うく侍るとさしうつむきける是等の事につけても其愉色婉容おもひやられ其志を養ふの厚き事國君を感動せしならんさるほどに此　君は世に有がたき　君にて孝を以て下を導びき給ひしかば平介がごときものまでもその孝心にめで給ひ其起居時時問せたまひし事

類ひ少き御心と感じ奉りぬされば此　君は不幸短命にまし〱て正徳五年纔に二十五歳にして江戸の邸にして世を捨たまひしかば御在職八年ばかりの事なれども國人思ひしたひ奉ること只父母のごとくさて此處は七島といへる草を田に夥しく作り秋の頃はふたつにさき晝は日にほし雨露をいとふ物ゆへ暮がたにはとく取納ることとなり此　君江府にて終らせ給ふ訃音來りける時城外さばかり廣き海濱に隙なくほしける草郷民等その訃音うけたまはり唯すごすごと鹽たれて己が家に歸りたり收むる者もなかりしと今につたへて美談とせり此　君ある時近習の微臣御前に侍りけるにいかゞしけん袂に橘入て有けるが誤りて落しけるを御覽じて汝母に饋るかとのたまひける此人老ての後までも此事をかたり出てなきけるとぞ國初福島正則扈從の兒菓子を懷より落したるを怒りて小刀尻こぶたに立られ腹きらせんとのゝしられしとおもひくらべてみんに其隔いかばかりぞ不幸にしてかゝる威猛の下に立んには只針のむしろに坐する心地こそせめ安き心はあらじ予しれる翁ありそのかたりける樣は吾孤にして祖父にそだてられたり我祖父に其頃の人の心はいかゞ有しやと問ければ何となく氣のびやかに覺へてこゝろづかはしき事なく春の日の暖なる內に在がごとくなりしと答へしとぞ是を御行狀に考へ合せ見るに　君ある時羹をめしけるに膳宰誤りて調和を失せしかども事急に臨みいとなみかふるいとまなくこれを奉り戰恐して在しが却て御顏やはらがせたまひ御かえありてすゝみたまひしとぞ此御德の下迄及びたるにぞ國人春風和煦の思ひはなしけん我家君自筆し給へる苦寒の詩を藏む其詩

凜凜風刀寒冽膚　開窓呵爪想農夫

可憐茅屋竹扉裡　酒食衣衾有又無

下たるものかく恩眷を蒙りてんには心は恩の爲につかはれ命は義によりてかろき習ひなれば火をふみ水に入とても群臣いかでか是をいなむべき是等實に　君の細行なりといへども是によつて此事を思ふに前にいへる廉恥の心を養ひたまふ處大かたならず凡人をなすの道人に恥あたへぬ樣にすべき事肝心なり此故に妻子はさらなり奴婢の類ひにいたるまでも大抵恥辱をあたへまじきことなり常に恥辱をあたふる時は終にはそれが常となり恥べき事も恥ずなりもて行なりさればもろこしの文を見るに聖の代には禮を以て敎へたまひしが降りての世には律といふもの起りて恥の人に切なる事なくなれりさる程に位相將を極むる人にても一旦罪あれば獄屋に繫がれ又其罪もはるる日は顏押拭ひふるき位にもかへるなり我國にても律を用ひたまひし事もあれど敦厚の風俗ゆへかかる淺ましきことはあらず今はその律もすたれ物ごと穩なる世なりさる程に若一旦縲絏の辱めにもあはんには志つたなき人なりともいかで人の朝廷をばけがすべき此故に賢愚は同じくありといへども朝廷の清肅あにまた漢土の類ひならんやつくづく思ふに人の惡をなす事もみな恥をしらざるより起るなりむかし後漢の末に王烈字は彦方といふ賢者ありき其あたりに牛盜めるものありしが事あらはれてけり其時かの盜人牛をうしなひし人にむかひ我いかなる刑戮にあはんもつくり出せる罪なれば甘なふてこれをうくべしあなかしこ此事王彦方に知しめたまふなといひける王烈聞き惡をはづるの志を賞し布一端を送れりそののち人あり道にて劍をおとせりよもあるまじとは思ひながら立歸て尋ねけるに日暮に及び道のほ

とりに一人かの劍を携へ待居てこれに渡し
けり是をたそとよくとへばさきの牛を盜み
し男にてぞ有けるかかる人だにかくなる習
ひあればまして世の常の人よく養ひ得んに
はいかで汚辱の行をばなすべき此　君の御
行狀は儒臣綾部安正著して世に傳ふる事に
して此野史の載べき事にもあらざれども孝
道廉恥を以て下を率ひ給ひし事見ん人の百
載の下興起せん事をこひ願ふものなりさる
處に喧嘩を過料にてとりはからふ事ありそ
の所のもの我かたに來るもの有しに其頭其
里とかくいふ噂の有ければ我その事を問し
に誠にさること候ひし我も其事に立あひつ
れど家貧しければ金すくなくておもふ程に
人の腹も得ふまずあはれ今少し家とみなば
おもふままにふむべき者をと語れり我もあ
まりに興さめてちとおとなしき心ばへせよ
とてさとしやりし事あり恥しらぬ人は我思

ふままにこととり行ひて善惡の差別なし我
四ツの莫の字を以て自いましむる事あり其
四は莫賤レ於レ乞、莫辱レ於レ偸、莫慘レ於レ奪、莫虐レ於レ殺、是
なり殺すといふは惡德の頂上なりその殺す
といふものはもと我有にあらざるものを奪
んとして奪ひ得ざるにおこるなりその奪ふ
といふ端は偸まんとして偸むことを得ざる
よりおこるなり其偸むといふ源は人の物を
我物となさまほしきに始るなり今乞兒非人
の類人のいやしむは人の物を乞ふを業とす
るゆへ也我ほしきとおもはん物はなどさき
の心をおしはからざるよしやさきにはをし
む心なくとも我自乞兒の業をならふ樣やあ
るこふてやまずついにぬすむぬすみてやま
ず奪ひ殺すの慘虐もここに始る古歌に

よしの川その源をたづぬれば
　むぐらの雫萩の下露

といへればこれかりそめなりとてふかくか

へりみつつしまざらんや只その乞兒草鞋の徒は其身を人と齒ひせぬに捨つればいふにたらず其身を人なみなみの位に置世のよしあしをも沙汰し衣鮮に打着髮かたち淸らかに出立つつぬすみ奪ひして果は人をあらぬ罪に落し勢猛にいひののしり恥る心の露なきはいかにかくは生れつきて人をも恥ず天をも畏れざるぞやよく其源を思ふべし只恥をしるとしらざるとの間也子どもの集ていさかひけるにひとりの子己ばくちうちとて罵りけるにおさな心にあしき物ぞと思けん大にせきて泣けるをさとしてばくちといふ物は只人にあざなせられてだにかく穩ならぬ物ぞましてて手など觸なんにはいかばかりか朽おしからん年とりて今の心なゆめゆめ忘れそと敎し事あり今の人只その名目をばいみて其實をばこのむなりあやしき事なり今世行はるる富てふ物あり其好まざる人の

論をきくに利なし損なりといふなりこれは利あらば買んずる人なり己が有にあらざらん物を己が有にせんと思ふきたなき心よりぞおこるらん利を得たらんこそ己が心のきたなさはしる人の多くなりて恥る事も大ひなるべし此故にもし人の心に恥をだにしり侍らば人見ず知らざる境とも心にとがむる程の事ははづかしからぬことや有べき恥しらぬ人のわるさせぬは盗する犬の人多かるときかひまがり何をもはまぬさましていねたるがごとし人の見ぬ間覺束なし此故に我に從遊の輩には只恥をしれとさとし侍るなりさて其　嗣君　心源公國しりたまふても平介は親はなかりしかども其身は恙なくて重て恩賜の榮にあづかりけり

久米村久米

久米村久米は名主田邊九左衞門といふものの娘なり九左衞門嗣べき男子なかりしかば

しるべのかたより嗣もとめて久米に配偶し村の長をも譲りて有けるが夫やがてこと心出來て其家をばいで近きあたりにやづくりし脇より色ある女むかへ村の司はしつ世に時めきてくらしけり久米それより節を改めずおとろの髮風に梳り自耘りつま木こり他事なく二親につかへけり親はまづしくて病るが中にも心を得て父は八十餘りにして寛延元年辰のとし久しき恙の爲に身を終りぬ母はながらへて有ながら中風といふ病にそみ手足適はざる事廿三年病に苦みてや折節は物狂はしきこともあれど色養おとろへず自もはや六十路の齡こえぬれど晝は田畑のいとなみに怠らず夜は病の床につきまとひ年荒ることありても租税は早く納けり己も老の身の目もさやかならず耳も遠かりければ無頼の惡盜ども毎度はいりてわづかのたくはへども情なくとりされりさるほどに冬の空とても衣ひとつの儲にて己はわらむしろなど敷て起臥し春はくづゝいびら（いびらは豐の方言なり救荒本草の綿束兒なり凶年にはほりむしてくふ）などいふ草の根ども堀て露の命を繋ぎながら親には衣さむからず取つくろひ洗ひすすぎもきよらかに魚求めつ酒買つ念頃につかへけるが寶暦二年中の卯月終にむなしく成ける隣里かねて貧しければ嘸終焉の營もいぶせからんと思ひけるが思ひ外に鮮なる衣ども化者にはかつがせ野邊には幕うちはり僧あまたよび布施引き寺には二人が祠堂の料までいれなき跡には朝な夕なの香火おこたらずしれるかたより送りものあり訪もし力合する事などあれば牌前に手を合せ任せる人にいふごとく其事を告げる又そのかれがれになれる夫の産土神に夏秋の田なつ物畑つ物すすめてしばらくもそひし人の末長かれと祈けるさらぬ人はこれを己が心にくらべて其人咀ふな

どいひし人もあれど只其潔き心には忘らるる身をば思はずかりそめにもつまと頼みし人なればあしからじよからんとてぞ祈りけんさるをかくいふめるはいと罪ふかく覺へ侍る孝狀　國の守にも聞へ八木二俵賜りけるに又も盜人とり去ぬあたりの人人驚きとぶらひて悔がたりければ久米こたへける樣いやとよさにあらず我に孝狀なく然るを人人とりはからひて上に達したり孝なくして孝子の賜をうく天の奪ふ所なり何かふかく人をとがむべきとなり我其時是を聞ていたく心肝に銘じき我もその人をしれりかたちいかにも氣うとくすさみ果たるさまなりしがかかる有がたき人なりき褐を着て玉を抱くといひつべし今は死して二十年にもなりもやすらん

野田村了玄法師

府内瑞光寺住僧功岳

臼杵曇華道人

本郡伊美の庄野田村に善光寺といへる小庵里人はつねに通り堂といひ慣はせり是に了玄といへる世捨人すめり此僧俗姓は安西氏野田の東の丘をへだてて楠來といへる里の人なり父には早く後れ母によくつかへて有き伊美は其里より一里ばかり有てここに八幡の宮ありまつりの頃は市立ことありまた其頃は髮そらで有けるが友どち打むれて市に遊び酒など飲で樂しひけるに酒店の主人鮮らけき鱠の斬きよらかに作りて出しけるを箸を下しわきて味よく覺へければかかる物いかに獨してはくふべきとて主に器かりこれをもりつと立て一里ばかりの山路を捧げながら歸りこれを母にすすめける其孝養に速なることかくのごとしさて此人薄命にして兄弟も多く家僕もあまた有けるが皆死果て只兄の子のみぞ殘ける其上身の病がち

にして耕の道もなりがたく世渡るいとなみの心くるしくなりて持る田地など人に譲り先人月ごとの忌日に僧の經讀んずる永きはからひより母の衣もし食ひもせん料など寺親敷方にたのみ債家の物も思ふ程に償ひわづかに殘れる畑などをばありける從子に託し母の薪水の勞を賴み終に世をばそむきぬ其後天の惠あり年月經るに從ひ宿疾もやや心よく此堂にすみながら母に志を盡しける母なる人の日もいつしか西山にかたむきぬ孝子日を惜しむのならひ何かな心なぐさめまほしく遠からぬ神佛もうでなどいひ出し事に觸れすすめけるされど今は年老ぬいかでさることのあるべきなどいなみけるをそれは我にまかせ給へとて笈の樣なるもの作り四ツの隅に柱をたてよき程の頃に座すべき板をまふけ脊合せにわゆがけ老を前の柱にすがりうしろによりかからせ道よき所は

手をひきいこふ時は腰かけとなし宇佐のかた羅漢寺など經めぐり彥の高根宰府のかたなどすすめけれど旅やうかりけん子のいたはりやいとひけん歸るべきよし聞へければ十四五日經てかへりぬかくて出離の後十餘年母も天壽を終へけりさすがに禪門に遊ぶからに法に繫縛せらるるやうとも見へず月花の情にもうとからず年月おもしろく過せり今の世の人は髮など剃て功德せんとては多く佛像佛具堂塔のいとなみをこそすなるに此法師はすめる庵は有しまま雨もらぬ程にして虀打はらひ只ひたすらに道をつくることをこのめり先道あしき所あれば其あたり立やすらひつくづくと心に經營して扱其處の長にいたり願ふ樣は我は杜多なりここらあたり乞食して往かふなるが道荒れ橋危くして老の足踏なやめり許し給はらば道つくりてんされども老の獨の力の及びがたけれ

ばあはれ少壯の力少し合せ給へなどいふにぞ人も心よくうけがひぬ扨そこにて已も諸人と共に汗流し鋤つがひ土運びあるひは石工招き其償ひも人にもとめずされど里人の心ありていかで此法師に石工の料まではたるべきといへばさらば心にまかせ給とてあらそふこととなしさるほどに其あたりは人これに化し岨は險をひらき谷は石を架し狹きはひろく危きは安く牛馬にいたるまで其賜をうけぬ我思ふ所よりしてみる時は天地の德は生生に間斷なくこれもて萬物をやしなふなりわきて人は用廣く費やす事多し是もやむ事を得ざるの道なれば無益をなして有益を害せず用を節にし費を省き天の惠をわれ人と共にせん事をおもふべし是廼儉德にして造化を賛くるのひとつなりされば孔門子羔の德を稱するにも方長不折といへりしかれば故なく天地の人をすくひ物をたすくる生材を貪ぼり失なはんは天地の德にそむく也又おもふに僧俗の差引は家にあると家を出るの間にして心の設け異なるなり家にあるものは內にして父子兄弟外にして君臣長幼より士農工賈のいとなみ皆そのつとめなり已に家を出る身は此境をいで此いとなみをはなれ山林に抖擻してうき世の塵の外に心隈なく過すものなればあらそふべき位階もなくきそふべき營利もなしされど其法世に廣ごり其徒各萬を以て數ふれば邪正賢愚其內に渾じ卑きは衆と群をなし高きは王侯と貴きを爭ふ程に是を檢校する人なき事あたはず僧正僧都などいふ官出來れり正はたゞすを義とし都はすぶるを義とす又一國に一ヶ寺づゝ國分寺といふを置僧の非法を監せしめ給へれば僧都より僧正にのぼりては序を以て其事を惣裁せしならん其他和尙上人などいへるは德の標號にして門跡院家

など在家の位の序なり今はなべて德の厚薄はかくれ末徒は金を出して位序衣帶をかひ本山は金を收めて衣食をこれになす大かたは漢の中項より粟を入れて爵をかひし樣なりさる程に其徒宗派に別あり品階に序あり敎旨を異にし衣服制を同じうせす居るに自他の隔ありゆくに先後の爭あり官階を帶び所屬を有し已が門戸を張るより異なるをとがめ同じきを悦び得るを欲しうしなふを憂ひては家を出るもの二度家に歸りすつべき我をやしなひ長し柔和忍辱の形をかへ甲冑劍戟を帶し輿をむすび類をひき動もすれば公命を拒めり國家起つて其弊を改め風やや厚きに歸し其樣やや家を出る樣なれども國家天主の濫を治め給ひしより諸宗在家の葬祭に各所隷をわかち檀那と定め寺院の生産となして區域相わかれ宗旨の異見を以て其口をくちもらひ天下の爲に死屍を檢する一

有司となるここにおゐて彼我の相彌わかれ黨をたて群をわかち隊を逐ひ行に隨ひ家屋什器輿馬僕從豈三衣一鉢樹下石上といふべけんやしかれば其誠の道にこころざし眞の敎を手どらん人は吾輩かたへよりおもふよりも猶いぶせくおもふなるべしむかし玄賓世に高德のきこへありしかば弘仁の天子是を律師に任せんとし給ひしかども

三輪川の淸き流に洗ひてし
　衣の袖はけがれざりけり

とてうけず猶やみがたく思しめし大僧都さづけんとし給ひしに

外國は水くさ淸し事多し
　君が都はすまぬまされり

とて跡をくらましてさりぬ本邦洞門の初祖道元禪師輦轂の下をいとひ跡を越路に避られしに後嵯峨帝その德をしたはせ給ひ徽號を贈り紫衣をたまひ固辭ゆるし給はざりし

かば

永平雖山淺　勅命重重重

郤被猿鶴咲　紫衣一老翁

と偈を献じ長くこれを高閣に奉じ終身體にかけられざりしとぞ民汗に耨つて養ひ女寒に呵て織れる布粟即王侯士大夫もこれを生ずるに勞し給ふ物なれば徒をつらぬ帛をかさね宅を王公に比し造化に贅なく安然としてこれをくらひ徒衛としてこれを衣んには天地生生の德王公士大夫匹婦匹夫の勞豈思はざるべけんやもしこれをおもはば無益を省きこれを生民有益にもちひ其大悲願を發し天造王公の賜を同じくうけ四民の勞を謝せずんばあるべからずされば此僧產を破りしは病の爲なり麻衣草坐しばしばむなしきは僧の本色なり家に在つては孝なり家を出ては位階榮利に心なし莘莘として道を修理するは世の弊を矯る樣なれどその人にはこの心も有まじ是も化育をたすくるのひとつなれば彼君子素餐せざるの詩にもそむかじと覺ゆ

聖武天皇の御時行基法師過る處白骨あればひろひうづめてこれを供養し橋を架し險をひらき耕すべき地はこれをひらき水すべき所は堤を築き飢たるに食をあたへ病るに藥を贈りしとぞきくなる今世に信心といふものは己正覺をとらんとにもあらず世の人の苦すくはんとにもあらず己來らん後の世に獨たのしみなんずる慾より金銀財寶を拋ち現當無事子孫繁榮なを不退快樂の淨土を睽らんとすさる程に一旦無常を觀ずる時は數世恩眷の主君をもすて倚門舐犢の父母をも忘れ杖とも見柱とも己をおもふ妻子をも煩惱なりとてかへり見ざるごときその敎はさもあらばあれ人間の敎にはそむくなり他をすて己よからんとはいやしき心なり佛の敎

よりすとも猶三毒の惡龍にくるしめらるるや覺束なし元和の頃竹中釆女正重興府内を鎭じられたり重興の父伊豆守重隆は國東郡高田の城主たり重興の足輕に安部德右衞門といふものあり肉をくらはず妻をいれず長齋僧のごとし重興あやしび其事を問れしにこたへける樣は臣もと國東郡高田の生れなり幼きより薙染して身を禪門に託したりしかるに家貧しくて父母身を託する所なし子たる者傍視するに忍ひず耕すべきの地なし故に身を出して先君につかへ父母を養ふ時兵革のやまざるにあひ朝鮮の役九州所所の取合ひしばしば艱苦をなめ侍れども一旦歸俗は父母の爲なり我あへて初心にそむかずと申ければ重興大に感じ我汝を役するに忍びずとて命じて蔣山萬壽寺丹山に就て剃度せしめ瑞光寺に住せしむ法諱を功岳と稱す功岳の志のごときこそ誠に愛たくおもはれ侍るこれも儒者の方よりは妻子を蓄へざるにはいろいろの說もあるべしされども此人かたちをしばらく父母の爲に俗流にかへすといへども心は在家にかへさずかりの形によつて論ずる事にあらず了玄法師菴は雨もらぬほどにちりうちはらひ居るに堂搭修造の功罪を論ぜんに情願の人あり歸依する處有て事を興さんはさも有べし今たくみをめぐらし緣をつのり官の司處の長などにはいろいろの術ひをなしいなゐるかたにもせめはたり無上の功德己もしつ人にもさせつとおもふはいかがならん昔宇治殿平等院建立し給ひ阿彌陀堂供養ありけるに山僧何某の阿闍梨導師たりしが說法の間君御堂建立の故に地獄に落させ給はんこそ淺ましく侍れとのべければ聽聞の人みな興をさましけり供養了りて宇治殿罪懺悔し給はんよしをとひ給ひければさる事に候御堂造立の間人をな

やまし給へるを御得分にてあがめり給はばめでたからんといひしにぞ宇治殿感じ給ひ罪を消滅したまひしとぞもし此僧の說處是ならば今日結構の罪を見て消滅の功德なきはいぶかし夫父母に孝順に往來に義井をまうけ渡りに橋をかけ嶮しき路をひらく樣のことは家を出るの教にも福田の數にかぞへたりさるにより萬行ただ布施の功德を大なりとし鳩の秤(はかり)のためしもあり己にとるものは應量の器あり、しかればもろもろの飲食財貨をうけんにも、蜂の養ひを花にとりて其色香を損はざるごとく、身を行ふにも、牛かふ童の杖をとり、よき水草に養ひて、人の苗稼に妨げず、衆生に苦をぬき樂みを與ふるぞ佛の心なるべしさるを僧のたまたますくふべきことあるを佛物とてあたへず我にとるに蜂牛のいましめなきは己のみか佛の心を誣るに似たり慈悲勝念千聲佛、作惡徒燒萬炷香、といへり我むかし山陽道を經過せしに周防國佐波川といふ所あり里人のかたりしはむかし俊乘坊重源大佛再造の爲にもろこしにわたり緣を募り金あまた持歸りしが此所歲みのらず民いたう飢けるを見て金ことごとく捨て其處を救ひしとぞ道人の心さもあるべし了玄法師のすゝめる里は我もゆかりのかたありて通ひなれ其塵なく淸くいさぎよき心にめではなさゝく朝紅葉ちるゆふべなどとひもて最(いと)二なくうちかたらふにぞ心なぐさみ侍る誠に此法師成功に大小こそあらめ福田に種子を下し化育に贊あり檀波羅密の行にそむかざればこれも菩薩の徒ならんと我は尊くおもひ侍る此僧うへし夕顏ののきにかかるを見て狂歌しけるは

己が葉を着たりしいたりなるふくべ
　風ふかばふけあばらやの軒

歌のさまはともあれ心のもとづく所煙火の

氣をみずされば世に世をすつるの名はありて位序榮利の心なきは其人にかたし我かつて金剛經をよみしに讀さり讀來り只一箇の我の字を消釋するにあり今の世風とことなるに似たり臼杵曇華道人のごとき誠の世捨人なるべし孝子の事にあらずといへども其高風を仰げとて書て此篇を結びぬ道人は本國臼杵侯の菩提寺月桂寺の徒なり美濃の國某のさとに久しくすみけり其庵のほとりの處女身おもくなりひとりの子をうめり其父驚きいぶかりて事のよし娘にとひければ我なれし人のいひがたくてや有けん庵の僧にかたらひなれて設けたりといふ父怒りにたへず右の兒抱き庵にいたりあくまで罵り投すてて歸りぬ道人何と辨ずる事もなく抱きとりて乳をこひ飴を含ませ他事なくいとをしみて生育しかばきく人唇をかへし爪彈きせぬはなかりけりしばらくありて彼女さすがに道人にぬれ衣かつがせし事のやすからずや有けん其由かくと人に告ければ父又驚き庵にいたり罪を謝し子たびてんといひければ僧ほほゑみ此子にも又父ありやとてかへしけり此事世にかまびすしく傳へて人しきりに其德を仰ぎければ其處をのがれ紀の路なる熊野にかくれて出ず偈あり

人生難期七十年　病身豈不當多錢
紅塵堆裏拂衣去　眠熟江南白鳥前

道人の風標壁立萬仞雲を凌ぎ風に御す衆情よりしてみる時は世の謗りの忍びがたき事いづれか是より甚しからんしかるをうけて自若たり無得なる心のしからしむるなるべしもし一等を降していふ時は我忍辱するときは他の惡もあらはれずみどり子も生育すべしともおもひしにや俗慮のはかる所にあらず本傳に曰一叟宗智菴主號曇華道人自幼侍鐵帚師于香林爲人慕和菴主之風師三以月

桂招不返

魚町兵吉

杵築魚町に兵吉といふ者あり後に十右衛門といふは
やく父にをくれて母を養ふこと至て孝なり
家貧しくしてすぎはひいとまなく勤むとい
へども母の衣食さへ兵吉心に足ことなく冬
の寒きよなよなは母のあしを己がふところ
に入あたためけるに或夜市中時を告るの勤
に出るとて炬燵なんどいふもなく火鉢に火
をうづみ木をゆひたて衣をかけ母をふさし
めけるに何とかしけん衣に火うつりつゐに
もえたちぬ人人よりあつまり水はこびけし
あへり其時兵吉は二三町わきのかた城近廣
き道のかたはらに母をいだき居けり人みな
立よりとふに兵吉しかじかとこたへ火をあ
やまちたるとがをおそれいふなる中にもた
ゞ母のさむからんことをいたはる誠色にあ
らはれ言葉にあらはる人みな感涙をもよほ
しける　君にも聞し召れよねをくだしたま
はりぬ又母目をやみけるに或人いふやうあ
たりちかき岩のほとりのゐびすを祭りすへ
たる其岩よりながれ出る水をうけいただき目
をあらひ猶のみて目の病いゆるとなん兵吉
ききて悦び明てのあしたとくまふでいの
り水を受かへりて母の目をあらひさてのま
しめんとせしが折節冬の寒さはげしければ
水の冷かなるをおそれたへがたくおもひ母
の口には得いれず我のみけるそれより朝ご
とにかくし侍るとみづからかたり誠をもて
いただき侍れば吾のみて母の目いゑ侍ると
言ける母身まかりて後生るにつかふるがご
とし朝夕膳をそなへて己食し又外へ出るに
はいづかたへまかり侍るとかへりてはけふ
しかじかの事侍りしなど其日のありし事ど
もを告ける六月廿五日天神祭禮ありて市中
行幸の道なれば清くちり拂ひ見物の諸人家

家にすだれかけならべにぎはしきに兵吉も我屋ちりはらひ清らかにして母の位牌を出しすへかたはらに居て今は何こそ通り侍れ誰は何をつとめぬなど告けるとそのあたりの者いふやう世にうつけものこそあなれ祭の日に位牌を店にかざり己も居てしかじか告けるとわらふかたはらより是を聞それ必ず孝子ならんかしと其名をとへは重右衛門といふ其餘の事心ざしの厚きしられぬ一とせ巡檢使の有し時所の孝子書つけ出し侍れとの仰事ありしにも是かれ多かる中にもなをゑらびて魚町兵吉こん屋町初二人をぞ申出たまひ　公の御記錄にもしるされけん誠に有難き事になん其時も國の　君よりも二人ともに恩賜にあづかりぬ今は重右衛門妻とともにありとなん

予此傳をよみて誠の拚ふべからずして人を感動せしむるをしる火をとりはなてる過は大かたならずあやまちながらも公のとがめを蒙るぞ常なるに兵吉は火をあやまてるより其德あらはれ孝狀公にも達し人の筆の跡にもとどめられ世の模範ともなりぬ世のきたなき心たくは へ天を欺むき人をたぶらかしさあらぬさまして辨にまかせいひめぐらすのともがら願くは少しくみづからかへり見て善にむかふの道をひらけかしとおもふされば此男はむくつけなる樣なりしかども心ばへのやさしくて老母の風引て鼻のつまるを見てみづから吸あげけるとなんちかき頃此人も鬼錄にのぼりぬをしむべき事ならずや

愉婉錄下

豐後　杵築　三浦晋　安鼎　著

紺屋町はつ

山城國儀兵衞

糸永村矢野雖愚

紺屋町初は幼ふして父に後れ老病の母一人ありもとより家とてもなく定七といふもの不便におもひ己が木部屋有けるをかし置けりまづしければ七ッ八ッの頃よりくだ物様のものうりて母を養ひしにある日母けふのあしは多くしてあすの事心やすしと悦びければかはり少き日は母のとぼしからんことをかなしむにぞ人人あはれみ買とりてやりける十歳をも過ぬればあるは糸を引機を織り人の衣をあらひ縫ひあるは人に遣れて母の薬を求めあたへ衣食かひとゝのへなど心をつくしける其人人のもとへ行事も朝より暮までを約しゆふべは歸り省る事を常とせりさるほどに此事國の　公に達し十六歳の年恩賞にあづかれり母ある時恙有ていたくなやみしに初いろいろと心をつくせども食念たへてなかりけり初かなしく折折何をがなとたづねけるに或夜鹽からに少しく酒鹽さしてんにはいかがあらんといひければ初うれしく夜丑三つばかり直に器ひさげて出るをかたへの人とどめけるは夜ふけ月暗し且酒肆魚店戸をたたくともおきもやらじ今暫せば夜も明なんまちて行けといひけれども得やまず直に去て魚の店にいたれば折から入船有てうほもとむるにあひてたやすく鹽辛手に入ぬ夫より酒屋に行けるに今夜は大夫の家に宴ありて燈はりつつおき居たり思ひの外にことととのひ老母の望もかなひける母身まかりて後うれふる色面に顯れそれとはなしに喪に居れる人のごとし二度

邦君の褒賞ありしにみづから用ることなく母の願ふ品などに用ひたるの餘にて母の石碑を立けるが母の母なるもの石碑なしとて又己が衣をぎのりて其事を終へぬある人公の賜にて母の塔たてしはさるべき事なりみづからの衣をぎのりて外祖母の塔たてんはしづかにはかりてもよからん物をといひければ初こたへていなわれ今母の塔たてて心甚悦べり此心を推しておもへば母の母の塔たてざりしはさぞ遺憾なりしならんかくしてぞ母の心の地下にやすからんといへり是親につかへて志をつくすといふものなるべし定七も此者の志厚きにめで己が子和吉といへるにめあはせまほしく思ひ粗その聞へも有けりさるに此和吉行ひ宜しからずあまつさへ博奕様の物好みひそかに親の家を質に入銀六拾目かりとり是をも程なく遣ひすて夫より家中に僕となり主人の供して江戸に行しが明和元年江戸の屋敷をも出亡しぬ定七せんかたなく脇より養子もとめけれども是又よからぬ者にて程なく家を出で行かたなくなれり初男ともなり女ともなり身をうり人にみやつかへし親とたのみし人なりとて母にかはらずつかへしが同五年正月より定七手足かなはずなれり初不浄なるあらひすすぎもいときよらかに心の及ぶ處誠をつくさざる事なかりしかば定七感にたへず折ふし病の床より手を合せて拜みける初は恐れみおもへどもせんかたなくかげのかたよりかへし拜みしける程なく其十月定七はてぬ、はついたくなげきあとのいとなみ其物からに見ぐるしからず取つくろひ祠堂の料も寺に入墓詣なども怠らざりけりかかる生質故に己がみやづかへするあるじにもふかく心を獲られ他事なくおもはれけり、しかるに安永三年七月かの和吉江戸より歸り亡命

の身なれば郭には入がたく治の南猪の尾といへる所にゆかり有ければ夜にまぎれここにつき旅の裝とく間もなく初はいかがと問けるに恙なきよしいらへければ打よろこび人頼みて初を招きけるされども初がゆかりのものの心を得て探りけれどもことなる子細もなきよしなれば人してはつを遣しぬ和吉歸りける樣は旅中にて從前の過悔る心の出來り身をうらみことし十月七日父の七回忌なれば何とぞ忍びがてにも墓詣し身の過を詫まほしく思ひなして歸れる也程なく初も來れるにぞ和吉も涙を催しさんざん我不孝にして鄉里をさりぬこなたの人なかりせば親水にうへ衣にこごえいかなるうきめにやあひ給はんさるを無狀の我にかはり心くるしき事もなく世を過されし事皆そなたよりの賜なり旅にして一度悔心きざしてよりいたみ心肝に發ししきりに故鄉戀しくなり侍ればすごすごと歸りがたくいろいろの艱苦を忍びいささかの志しつとて裝の內より紬のひとへもの一ッ縮緬の男帶一筋取出し是は父のいませる時の心にて持來れり牌前にそなへ我罪を謝し給はれしかる後はいかにもし給へと又木綿一端是は年回の更衣に志し侍りぬ（豐の俗年回ごとに亡者の衣かゆるとて布もめんのるい牌前にそなふるなり）金子三兩とり出し是は我親の家を質に入れ置たり今いか程になりやしぬらん是にてうけ返しそなたの住所ともなせよかしと又木綿一端銀三枚取出しあつく多年の禮謝を述此上は何とぞ宜敷人をもかたらひ親の跡をもたてよ我は年回事終らば此あたりにていかにもして世をわたり侍らんといひければ初感涙をおさへ家質の事はかねて心にかけ侍ればやうやうにつぐのひ侍りぬ今一兩ばかりも有らん二兩は入用なし香花の料も己になしつ是有ても何かせん此後世わたるよ

すがともし給へといへどもそれはそなたの物にして我志にあらずとて得うけず此事終に　官に達し直に歸參をゆるされ初ことしみやづかへしける家よりもいとま給り本宅をあかのり返しぬ和吉その身はちなみのかたに宿し其宅に初を置き老女やとひ、すまさせ人取結びすゝめけれどもはるばるの道かへれるは親追薦の爲なるぞそれを置ていかで身をやすくする營すべきとて晝は通ひて家の取つくろひし夜はちなみの方に歸り佛事つとめ其年の暮にいたり人の取はからへるにまかせ合巹の事あり夫婦むつまじく人の覺へも淺からず暮しけるおもへば世の人はあやしき事を好むものなり紫の雲起れり泉出たり鬼顯れたりなどいふ事をば感應して妙なることにいへり今此女至孝の誠此無頼の和吉を千里の外に感せしめ終に可人となしけるこそ類稀なることなるべし郡監綾部妥胤（やすたね）（華名文右衛門）ははつが久しくつかへし主人なり妥胤安永丙申の冬國の事有て大坂にゆかれしに大坂學校懷德堂の教授中井竹山先生よりかの初に贈物有て其事を嘉しられたりそれを謝するとて初手拭ひとつ妥胤の便に託してかの先生に遣しける先生孝子の贈物とて大に悅明て正月廿日其家の節會とて親族舊識門人など百數十人集り文よみ詩作り酒などたうべて遊ぶ事なりしに其日の手水場には山城なる川島村儀兵衛が家の竹にて手拭かけを作りかのてのぐひに自ら豐後杵築孝女初手製と書てかけたり妥胤も其日の賓に預れり竹山衆賓を揖しかの帨架をしめし是みな孝子の贈物なり殊にけふの賓妥胤は孝子のみやづかへし主人なりいざよりてまのあたり其孝狀を聞給へと有しかば滿堂の衆賓まど居してこれをきき皆嘆稱せしはまた孝女の榮にあらずや川島孝子の事は

大坂加藤氏がつゞりて梓にちりばめたれば世の人のしる所なりされどもその人最榮とすべき事は故ありて其文にものせず竹山これが爲に詩作つて傳ふ妥亂の許より得てここにしるしみん人の興記せんことをこひ願ふ

西岡美談近赫如、遠邇奔波訪其廬、有人貌取成一幅、贊揚頌述懇于予、艱苦經營洞屬狀、京邑有刻纖悉書、但惜刻中脫旌典、人唯見慘不見舒、徐慶自成山九仞、何言一簣從我初顚末甚所可道也、待我毫端娓娓攄、嗟哉䋝義天禀美、攀曾援閔眞孝子、吾人徒讀書五車、談上口時心先恥、人是草島一隷農、邑是太傅藤公封、我詳其蹟非一日、夫也本我姻家傭、屢思愛助諭里司、告府勸奬是事宜、邑中父老頑如石、唇焦舌乾無一唯、還家更念推挽策、俚言諄諄具事迹、普鼓親舊鳴不幸、欲極凋轍眼前阨、民彝不泯樹風聲、四方馳布與雷爭、余識不識齋投贈、俄頃金錢滿吾籯、江䋝齋將親轉致、母子驚喜拜且祭、余言此慶我何力、大誘羣衷遂汝生、擧邑狂呼走紛紜、纔知淑慝涇渭分、父老相議勢如此、公若詰問何所言、向我稽顙謝不敏、顚躓造府始陳聞、藤公激賞召義至、褒錫復除恩意懃、西岡草木被光風、徐睡接洛日藹葱、誰傳余狀入紫禁、一朝獻納長信宮

太后袖去御楓宸、

天顏有喜讀躬親、

睿心感動篇末畢、對與

太后需龍巾、

玉音言是上古事、豈謂明和年裏民、

勅賜大官蔗霜果、中之御府錠子銀、中使一一慇懃說、

　德意何須嫌漏泄、䋝義惶恐謝無辭、聞報萬人齊擊節、　天子明聖時隆治、不隔九天與九地、市井臣善亦何幸、附驥　丹扆達名字、君不見

元明

元正坤御日、側微旌表炤ニ史筆ニ千歳上兮千歳下、寧樂平安其揆一、今對ニ此像ニ更長吁、負擔窮相陋且穉、世間無ニ限輕肥子、渾把ニ天倫ニ作ニ秦胡、雄才顯績　亦多矣、麟閣雲臺皆煥乎、若就ニ本源ニ論ニ端的ニ應ニ謝西岡餓隸圖、

誠に一窮民として直に　天子の賜を拜する事孝の貴きにあらずんばいかでか得ん孝子多くは窮乏の人にあり子路も貧敷は孝道のさまたげなる事をいためり中井の勸奬により程なく義兵衛も心よく親を奉養せり誠に孝子貞婦忠奴の類みん人はかくこそあらまほしけれ國君だにそのあはれみをたれ給ふことなれば隣里郷黨したしみあらん人はせめては其孝心をなりともたすけたし世の人病にあひ災にかかれば神に祈り佛にもとむされども罪を天に得ればいのるに所なしといへり只罪を天に得ざらん祈は父母に順なるに始るべしこの頃駿州の忠奴八介が行狀をよむに其貞忠　台廳に達し鳥目そこばく賜りけるに隣の人その賜を有がたくおもひこなたより錢米の類もち行てかなたの賜少しづつこひ是よりはかわりよろしくして遣したりし程に八介が賜いと過分になり主人の介抱もいよいよ心よくつとめしとぞ尤良法なり一は君の賜を賞し一は孝子の貧をたすけ且我善心を感發すされば禮記にも仁者の粟を求めて祀るとあれば今日追薦作福の志神まうでかへりもうしなどせんするには必孝子の物を　て用んこそ聖賢の心ならめしかればかの八介が賜をこひし事世に心ある人の誘ひしなるべしと所がらまで奥ゆかしく思ひ待る

又按ずるに善を家になして賞を國にとるとて忠貞の徒は國に君たる人是を賞する事當典なりしかれども其用心例に從ふと中心に出るとの異あるに似たり今の肥後

侯は紀州侯とならべ稱して世に西海出麒麟南海生鳳凰といへる君なり肥の孝子記壹をよむに孝子の賜歳ごとにありとあり去歳の賞ことしの孝を助くるにたらざる故なるべし四國遍路せし人の物語をききしに土佐にて孝子の里に孝行杜とて標を立たるを見しといへりこれ旌表門閭なり薩州佐宿に孝子あり所の人石碑を立て久しく傳んことをはかれり其用心異なれども其孝を欽するの意貴むべし

さて初が孝は天性にして和吉はよく過を改るものなり天性の美はよしといへども不美に生れなば力なしつとめて自ら新にすべし此時學ぶ處はつにあらずして和吉に在聖人君子といへども過はあるものなれば凡庸の人はさらなり此故に古の人過を强てとがめず過をあらたむるをよしとし過に從ひ過をかざるをふかくいましめ置れたりよつて我

門生矢野雖愚がことを思ひ出るにまかせてしるし待る生れ得て謹厚四子五經の大義にも粗通し晉が觀る所の大意をも會し天文推步にもやや通じける親につかへて甚其觀心を得たり此ごろも我妻此生の事をかたりていひける予戶を鎖して書をよむかれ戶外を過る事あれば必ず鞠躬磬折まのあたり見るにことならずしばしばすといへども其うやうや敷を變せずといへり冥冥の爲にその敬をゆるべざる南子遽伯玉の事どもおもひあはせて追感の淚を催しき其書をよむや書を見臺淨几にのべざれば必ずこれを扇にのせ拜してよみ始めよみ了り拜して是を納む惰容を以て書にのぞむをみずかれ十五にして學に我につく本より酒量あり我これを敎へて道に志す者口腹を以てその德を損ずべからずといひければ一たび諾して再度一滴を脣に觸ず數年を經て性これと化し實に自の

無事、能はざるにいたる世に勇といへば目を怒かしただむきをかかげ聲あらく物いふことのやうに思へどもみづからの非をしればかくすみやかにあらたむるこそまことの勇者なれ世の豪傑を以て期する人心を用ゆることなくんば是等の人にはづる事なからんや雖愚死して二十餘年謹厚いまだ此生のごときを見ず病篤きに臨みて身のしなんことをばいはず父母のなげかん事をいたみしが天壽をかさず唯一堆の土饅頭をとどめり我其頃舊廬に過りて

如今合向九皐鳴　獨搏天風入月明
鶴駕不歸年再暮　望中無處不鍾情

雖愚名は懋一の字は子粲追念のいたるごとに此詩を誦してかなしむ

手野村貞平　附邳州崔長生

戴記に禮は天より下るにもあらず地より出るにもあらず只人情より出とありまことに天質美なる人のなせる態はおのづから聖の敎へにもかなふなり武藏の郷手野村貞平さる頃恩賜ありし事ども委しく尋るに其父は又介とて世渡る業にくるしみ貞平十歳の時あねなるよしといふとふたりを携へ夫婦ながらうかれ出筑前志摩郡本岡村といふにとどまりぬ是寛保の頃の事なりとかくして十七年の星霜を送りける内父又助も身まかりたのむかたもなきまま又故郷にかへりけり里人あはれがり小き家むすび父がつくりすてし畑の少し有けるをそへて渡しぬされども此貞平もとより瘂にして母は年老ぬ姉は手足さへかなはぬに目見えずいとなむことも心のままならねば貧しきこといふばかりなししかりといへども故なければ一飲いやしくも人にはまず一錢みだりに人にとらずたまたま人にかる事あれば日を刻んで其期をたがへず租税を官にいるるにあたつては

明日喰ものなきが爲に一嚢を家に遺さずこれを以て年ごとに租税の壅滯なしさる程に着るべき衣にあらざれば着ずくらふべき食にあらざればくらはずなき時は短褐水飲みづから守る安永丙申母なくなりけりかたへよりも彼いかがして母葬るいとなみもすらんと思ひし處に流の上なる挾間といへる村に舅のありけるに棺に用ゆべき箱錢米味噌樣のものとくととのへ預け置きかづくべき衣も鮮なるを取出し己が分にたらざることなく野邊の送りしけりひそかにきけば姉のなからん跡のいとなみもかくそなへあるよしなり母死して後は姉をやしなふこと母のごとし家貯ゆるものなければひたすらに日庸など取薪樵り力の限りつとめはたらきて月日を送れりあまりにまづしき程に姉袖乞せんと思ひ立る振を見て涙を流し己いとなみはたらく眞似をして抱とどめて出さず右

恩賜の八木を得て悅びの色面にあらはれ姉に奉養し且母の墓のしるしをたてぬ口物いはざれども君の恩賜をもて母のなきしるしなせし事大かたならず榮ともおもふ事なるべし禮に父母の喪をのべて水漿口にいらざる事三日杖して起つとあるも凡の人の情よりして見れば虛文の樣なるが此母終焉の事をきくに其かなしむ事限なし三日を過れども物くらふこと能はず其舅なるものやうやくに拵へて始て箸をとりけるとぞ口瘖るものは耳必らずしゆる習なればかしこき敎へもしらん樣なし處の人の來り語りしにぞ禮制の本づくところをさとりて彌己が薄きを恥侍る我その家をとふらいて其一室に在ながら姉のいふ處弟きくことを得ず弟のするさま姉見ることを得ず面相對すといへども事胡越を隔てたるをみて覺へず袖をしぼりぬ此あはれさを慰むる方もやと其あらまし

を書つゞけて是を哀れとも見ん人はしばらくのくるしみをも救ひたまへかしと友どちに見せければ各力をそへ村長隣伍ねんごろにいたはり今はむかしにくらぶれば凋轍のくるしみもやゝうすく聞え侍る久留島侯豊后玖珠の太夫久留島通高號右門は君を輔け民を惠み世の賢能の名ありいかがして此記のつたへけん遙に助力孝子とて方金二贈り來れり野人の榮何かはこれにまさるべき思ふに清貧といふものは貞平が貧のごときなるべしみだりに財寶を費してまづしからんは貧とはいふべし清とはいふべからずさて世には似たる事もあるものなり此頃清の張山來の虞初新志を見侍りしに邳州に崔長生といふものあり口瘖り手攣りもとより家貧しかりければ傭工して親を養ひしが其後年荒れていかにすべき樣もなく終に行行市に乞けるに市人其志をしり糟糠糝糈あるにまかせて與ふれば携へて跛なる父病る母に送り己は草を掘り木を剝ぎてくらひ恙なく其春を送れり其者厚き生れにて道にて反故を見れば跪ひて是を拾ひ收め朔望に先聖孔子の廟にいたり拜してやき其灰を收めて黃河に流しけるかかゝる孝感にや一日拾ひける故紙に遺金あり返さんとたづぬれどもその人なし又母豬ひとつをかいけるに蕃息して父母衣服の用たりぬ親の喪にあふて水漿口にいらざる事三日慟哭の聲きく人涙を落しけるとぞ地千里を異にし世百年を隔て流離艱苦よく貞平に似たり

日出藩岩野藤内

虞舜の親につかへたまひしに始のほどは親の心を慰めかね給ひしかど愛敬の誠をつみ終には其よろこびを致せしとかや天明甲辰の秋日出藩足輕岩野藤内が行狀を聞て誠をつむの久しうして母の性嚴なるも和らぎし

德に驚く藤内淳撲至誠人に接する事和厚ひとりの母に他事なくつかへけり今は八十字を越目黑白を辨ぜざる事久し家至つて貧しければのみくふよりあつさ寒さのそなへも心にまかせざれども夏は蚊を扇ぎ冬は衣をあたゝめをきふしのつかへもまめやかに只母の心にたがはんことをのみ恐れけり母常にたばこを嗜めり其價の乏しければ己夫妻は得すはで母に供しけるを母の心のやすからねば各吸てよいかで我獨やはたのしむべきといふに畏りていなむべうはあらざれども價のあらざればこと草の枯葉などまじへ空すひして母の心をやすんじけり一日縮賣聲のしけるに母求まほしき氣色あるを察し價のなきに心を苦しめしがやむべきにあらずとて跡追はへてやうやくにかりもとめ味つくりてすゝめ母のひとり烟草すはざりし事共をかんがへ己等もくらひて母の志を養ひけるある頃すこしつゝがありて藩の西二里ばかりぬくみといふ里の溫泉に浴せしが內侍養の人なければ日ごとに通ひぬ道すがら口にかなふものあれば袖にし歸り又錢なき日は晝餉をそのまゝに携へ饋りける其道に小浦といへる處あり城をさる事一里ある日爰を過るに饅頭のこしきより今上りて湯氣蒸蒸としていかにもむまげなるを見過しがたくかひとゝのへあたゝかなる間にと足ばやにいそぎかへり母にすゝめ又その身は湯あるかたにおもむきけりさる程に菹漬物味噌樣の物母のふた覆ひたるは命なければひらかず一年江戶にゆきほどへて歸りけるに藤內もてりしひとりの男子を地の領に俳優する物に賣けり妻は藤內が思ふ樣にもあらずかゝる事につけ姑をうとみ己が操も正しからざりしにやさそふ水に身をまかせぬ藤內家に入るに我をむかふべき妻子も見へ

ずあやしと思ひながら母の恙なきを悦びさてかねてともなふ人共に事のよしきき彌さあらぬ體にもてなしひそかにかねなどととのへ俳優の里にゆきいろいろことのわけかたりて隙もらひつれかへりぬ其後ふたたび配偶の事有けるが是も母の心を得ずと見とりて歸しぬ親しき人共よりつどひやむべきにあらずとすすめて今の妻を入けるが前の人にかはり、いとねもごろにつかへけるほどに妹兄の中もむつまじくぞあかし暮しけるいくほどなく又江戸のつとめのきこえ有ければ母の齢闌に愛日の情切なりしかば遠く離れん事をかなしみ尚强仕の頃なりしかども仕をかへし專らに母につかへんとす此藩の法にかろきものの身退きせんすべなきをば番人とて給の半をあたへ城門を監せしむ其つかさなる人どもあはれがり、はからひて番人させいささか奉養のたすけとなしけり

此母常に鹽辛き肴をこのみ猶猫を愛することふかく猫に肉なき時は母食をあまんせずさる程に力をつくしてうろくづ樣の物もとめ藩にとぼしきときは朝の霜をふみ夕の雪をはらひ小浦頭成などいふかたをさがし求めさて猫みえざれば近きあたりとほき藪草むら嵐ふき雨そぼふるにも尋ねあるきいだき歸りて母をなぐさむかく忠誠のいたるほどに母の心も結びし氷りとけあひて隣あたりもむつまじく中垣の一重のへだてだに今はなくいとまある頃は老を背負ひ茶物がたり共して歸るを今暫と會釋せらるれば心よげに託して程なくむかへにゆき藤内こそ參り候へとてたすけ歸る又其家の人送り來る時は時をうつさずいたり謝することになん侍るとぞ此時邦君木下千勝猶いとけなくおはしましけれども此事をききたまひあつき惠みし給ひぬされば論語にも色かたしとあ

りて然も有まじと思ふ事には、しばらく內につつみても色にあらはるるは世の通情なり身歩卒の列たりといへども腰に刀も帶する身の家まづしければとて子を俳優樣の者にうりては便なふもおもてぶせにもおもひけめども露色に見へぬ程にありしは仁義の勇にあらずしてはいかで心を制し得んわなみ常人のははだてて及ぶ所にあらざればこれぞ誠に堯舜の民なるべしとその德を仰ぎ侍る孟子に天爵人爵の分あり人爵とは公卿太夫の類にして天爵とは仁義忠信のいひなれば人爵直に爵にして天爵即德のいひなり世の人みな人爵に鞠躬磬折することをしりて德を尊むことをしらずむかし先王の天下を治め給ひしや大學に高德の老人を請じ萬乘の尊を屈しみづから弟子の禮をとり袒ひで牲をさき醬を執て饋し爵を執て酳し冕して干を摠り其昇位にたち養老の禮終りて言をこひ給ふ周の武王の太公望に丹書を乞たまひしも三日齋して端冕北面じて其言をうけ給へり魏の信陵君の抱關鼓刀の人に其貴きを屈せしも賢を禮する故ならずや爵の貴きはたとへば山のごとし自高きに居て人を仰がしむ仰がざるものあれば桎梏干戈を以てもこれを服す德の尊きはたとへば水のごとし己物ときそはず、いよいよひききを選んで物只自然にこれに歸す故に爵ありといへども德なければ其位をたもつことあたはず断崩れ石落るの狀なり德あるものは爵にかからず崩れ潰ゆる物みなその流に歸す故に古より賢君は有德の人を尊み有德の人はいさぎよからざる地におらずむかし葉公といひし人龍を好み居宅調度のかざりにいたりて龍を雕鏤圖畫してたのしみしが龍我を好むと思ひ葉公の家に降りければ葉公恐れてにげ去しと傳へたり今孝經の講あらんといは

ば人人經を懷にし其席におもむくべしまのあたり其至德要道を行ふ人をかひやりて置侍らば又葉公の龍なるべしかくのごとき人仰ずんばあるべからずといふを子や婿共の壽をなさんといふに從遊の人にも志しを同じうして人していささかの送り物しけるに其頭も夫婦老を扶けとなりの方に行茶たうべてありしが老もふたりがそこなき事ども語り出て悅びわれは子の罰や蒙りけんかく命つれなくながらへ侍るなどかたりけるとぞ

大分郡高城村金左衛門夫婦

本郡拂田村紋作

大分郡高城村は日州延岡侯の所領なり金左衛門といふ者夫婦至孝の聞へあり延享二年丑正月侯より特恩ありて銀一貫目給はりける其村庄屋銀介組頭淸右衛門安右衛門平右衛門連署して官に奉れる記を見てかくのごとき人の此地に有けるに驚けりこの年金左衛門年四十一妻は木上村といふより迎へて三十二親久左衛門七十四久左衛門後妻六十四子供男女五人あり金左衛門四の年うみの母に後れ六のとしより今の母にそだてられたり幼き時より親をうやまひひとなるにしたがひ彌孝心あつく家を出れば親の前に手をつきその行べき所歸るべき時をつげ歸れば草鞋ながら先つと內をのぞき親のつつがなき體を見て其後足あらひ手をつき遲かりしとかりし猶見聞せしこと共物がたりちかきあたりの徘徊にも出告入面のつつしみ廢することなし夜親の用を辨ずる度ごとに夫婦先おきて扶けかかへざることなし家のいとなみ必らず親に問ひ其指揮にそむく事なし朔望廿八日にはかならず氏神佛院にまうで村の役人隣伍には月に三度はかならずとへり家もとより貧しきに老と幼きとがう

ちかさなり衣食にくるしみ持來れる田地も年を追てへり人の田などかりて貸し猶たらず此四五年はちかき日斤村といふに月に廿日ばかり日をわけて身をうり上は租税に給し下は舊債をつぐのひ主人に願ひ夜ふすべき隙には歸り夜とともに種子まき草とり力をつくすといへども冬とても身には給ひとつ布子ひとつの外たくはへなし夜の寒きには親の眠るをまち己が布子をもて父をおほへば妻も着たる衣をぬぎて母を覆へり他事是にておもひやられたり親老るに從ひ寺まうでもかなはずあはれ佛一體のあらましかばと願ひければかれこれとたづねて田尻村といへるにひとつの阿彌陀あるよしを聞出しあたふべき物なければつまもてる衣をおぎのり是をもとめ親の志しをとげさせけり一年冬寒さも例ならず父心わづらはしく見ひとつ給なばとのぞみける金左衛門いかにもしてすすめんと思へども家一錢のたくはへなければ力およばず只忘られず心にこめて思ひけるが誠に孝感の致す所にや師走末つかた朝とく口斤へ行とてわたる川筋に釣瓶の淵とておもて五六段もある所あり見れば手負たる鳬ひとつ漂へり金左衛門何とぞ近づかんとすれども水ふかく岸滑なればせんかたなく唯守り居ける所に又川上より五六間ばかりなる竹ひとつ流れ來れり金左衛門うれしく衣をぬぎ水にひたり淺きかたよりつたひ其竿をとり終に鳬を得て家に歸りけるに身體こごえてしばしは物も覺へず妻柴火折くべ己にして人心つきよき程に味つくりて親にすすめける誠に王祥が鯉孟宗が笋にもはづべきにあらず隣伍の人の言に此者幼きより老にいたる迄終に親の命にそむきしを見ずと也つらつら此人の行ひをかんがうるに世の常の人ならず嘸言行の傳ふべ

き物多かりけん今我里正官に奉れる記をよみてしるせることとここにとどまる世に孝子は稀なるに夫婦ともに孝なるは彌稀なり古人も孝は妻子に衰ふとて大かたは是より父母に遠く猶愚なる人は是より父母にうらみを結び恩愛を長く絶もあり露は霜とかはり霜また氷となるなればよくよく思ふべきことなり本郡高田は肥前島原侯の領なり部内都甲挑田村紋作天明元年此者年四十一父を小平といひて八十六歳父母恙なかりし内より志あつく家に財なければ農の暇を偸み薪を擔ひ市に出米鹽酒肴好むに任せ飲食みづからとゝのへ冬は柴の垣戸の風ふせぐに物なく苫のごときわらの屛風を立て親の枕のかたをふせぎ夏はふたりの中にふして終夜蚊を追へり母病んで牀にあること五年是を看ずる事始終一のごとし母已に沒し父猶在り父紋作が養炊の態までも己獨つとむるを見てこれを憐み森といふ村より嫁むかへて有けるが程なく男子一人を得たりさるに家のまづしければにや妻の親につかへ樣心ならず思ひ折にふれいさめ道引けれども心にかなふ程のことなかりけるにや妻をよび我かく汝にともなふことひとりの老を安んぜんとなりさることなくばさるにはしかじけふ隙とらすなり、かへるべしといひければ妻はあかぬわかれをかなしみいろいろくどきけれども紋作きかず妻ひざの上の子をかきなで朝夕に此子をこそ月とも花ともながめ侍るこれを置ては得かへらじさあらば此子をも我に給へといひければ親にかへん物なしとて子をそへて出しけりすべて最愛の間は格別の情あり子はまた妻よりも愛ふかしさる程にわりなきむつごとより父母にうとくなるものなりさなきも子出來れば子の行末は千代萬代とおもふなれば其子にひか

れあしと見てもさりがたきものなり紋作此果斷世の常の人の及ばざる所なり隣伍も此事を見きく人みな感涙を催しけるこれより布織衣ぬふ人もなければ裾をかたに結びてありけれども父にはとかくして見ぐるしからず夏冬の衣服取つくろひ甘旨の奉も怠らず親族うちつどひかくてあるべきにあらずとてすすめて野邊といふ村より又妻いれけるがこれはかたのごとく老をいたはりけるほどにいとむつまじくくらしぬされどまづしさはいやまし終には己が地とてもなくなり人の田などかり心ぼそくも月日を送りけるがきかば親の此ことをなげかんことをうれゐさあらぬ事にもてなしいつも心よき物がたりどもして親を慰めける是より島原は數十里の行程にして年年かり出しとて中間奉公に米とりて行事なり處のものその貧苦を見かねこれに行幸つまたるものも父の心にかなふなれば此米とりて養ひなば奉養の爲且世渡る爲にもよからんと勸けれども八十有餘の親を手弱き女に託し數十里の外にむかふ道やはある今暫くの月日をかし給へ親終焉の後は家も身もいらず唯うきことを父にきかしむるに忍びずとなげきけるにぞ其事もやみてけり里正此さまを感じ官に達しければ八木拾俵褒賞あり老を悦ばしめ鄕黨の美談をなしき

豐前矢部村彌平が妻
武藏國野口氏の妻
常陸國與次右衛門妻

この頃孝婦いち女が事きけるにぞ哀を催し侍るいち女は豐前宇佐郡御許山の陽矢部村彌平といふものの妻なり彌平まづしくてひとりある母も目しひ其身も程なく人のいとふ病にしづみ目はなうがち手足ただれあやしくいぶせきかたちとなりさらぼひによへ

るさま餘所目だに忍びがたきをいち女志いよいよかたく病看するいとま晝は彌平がおさなき弟あるを携へ終日たがへしくさぎりよるはうすづきつづれさしいをぬるひまも稀にふたりをはごくみやしなひけり彌平其勞を見るに忍びずある時枕本に招き汝我にかはり母によくつかへ我見ぐるしきをいとはず多年淺からざる志謝するに處なし宿病ゆくゆく愈なん事有べからず此上は家に歸り今のうさ忘るるかたも人のいふに任すべしかからばせめて宿債をもつぐのひ深恩をも謝しいささか心も安かりなんといひければいちききて涙を流し我此家に來りしより誓つて他適の志なし君無事の日は相そひまいらせ君やめる日は見すて參らせんなどさもしき心ばへあらんや君かく淺ましき身となり給ふも天命なり我君につれそひ參らするも天命なり天命いづれの處にかのがるべきとてうけひかず彌あつくつかへけるが雪に霜をかさぬ其弟も又兄のごとき病を得ひとりの手弱女にやみさらぼひたるをやしなふにぞもとより糧となすべき物もなく是より宇佐の市へ行程一里ばかり岩坂とてけはしき道ありこれを薪こり日に二度づつこへ米鹽やうのものととのへ飢をしのぎける寛保辛酉の秋彌平空しくなりければいち死骸にとりつき痛哭のこゑ隣をうごかすもとより葬りいとなむべき貯もなくかれこれかりもとめて其事も終ぬ程なく盡七日にもなりければちなみの人ども集り追善の事終りていちが孝貞世に類ひあらじされどもかくて月日を送らんにはいつしか人の門にも立なんせめてさらずもあれかしとおもふなり此上は故郷にも歸れかしと念頃にすすめけるいちけうがる顏して心得ぬことをこそ承る物なれ目しひる姑病る小しうとあり朝な夕

なの烟も我なくばたれかあげん垢づける衣うるほへる床も我なくばたれかすすがん夏の日のあつき冬の夜の寒きも我なくば誰か扶けんたとひ身乞兒となるともここをすていづくにかゆかんとて操たゆまずあかし暮しけるが月日とどむる關もなくあら玉の春は近づけども姑にそなへんものなし家に唯一柄の鍬をあませりこれを典りて錢八十文を得たり此あたひにて鹽をもとめ若鹽とて貧しきもののすなるわざに盆にのせ家ごとに初春のことぶきするにぞ里人も哀れにたへで米粟などむくひけるを種として野面川面の草あさりからふして其春もわたりぬ去程に其苦節清操世につたへて程なく中津奥平侯にきこへける侯ひそかに人をして其狀をうかがはしむるに路にて破れたる衣うがてる草鞋をどろの髮うちみだし薪をいただきて市に行を見耕するおのこにとへば孝女いちと答ふよつて跡をふみ其家にいたりて見るに雨露をだにふせぎやらぬおばらやにふたりのもの床にあり市けふとどのへたるものを煮かしぎすすむるさま色和し容うやうやしく宛も賓主のごとし急ぎかへり其體容溫柔つぶさに達しけるにぞたぐひなく感んじ給ひ米そこばくを賜はり盡なば又有司に告よとおもき惠をうけけるも今はむかし語となりぬ近き頃の文ども見るが內に事たへて似たることども多かりあはせ見よと其あらましをここにしるして照代其人にとぼしからざるを悅び婦人には夫を綱とする・の教をしらしむ藤井懶齋の常盤木は武藏刀禰川のほとりに住し野口氏なるものの妻松女が節をのせたり松嫁してより程なく夫あやしき病にて形そこね手足かがまり家のいとなみもならずもて行程に有し下部もちりぢりになり田がへすべき地すむべき廬もな

くなり此川のほとり篁のしげれる中にあやしき庵引むすびをのれは日ごとに五六町もへだてたるかたに人家有けるに米つき水くみなど習はぬ業に人にすがりとやかくして夫をはごくみける父は小澤の何がしとていとゆゆ敷くらしけれどむこなるものの病をいとひ何とぞ松を呼返さまほしく色色すかしいかりすすめけれども女得きかざる程に猶心もや替るとていとつれなくぞ打過けるされど松は色かへぬみさほふかくつかへける夫こよなう哀に思ひて松にいとまを遣すべきよしいひ出ける松うち笑ひて人はよきもあしきも皆生れ來りしより定りたる事とこそ承れかく定まりたる我身もてさらにいづこに誰をかもとめん命あらん限火水の中にありても唯人とともにへん世こそあらまほしけれ益もなき事に御心なうごかしたまひそ何事も唯我にまかせ給へといと甲斐甲斐敷なぐさめていささかたゆまず日ごとに里に行通雪をふみ雨にそぼち物求めて養ひけるに夫あまりに切に覺へある夜妻のむまく寢入たるをうかがひ忍び出川のふかき處もとめ身を投なんとしけるを松目さましあやしとしたひ來りこの樣見ていだきとどめもしさあらんには我もともにここの水屑となりてんと思ひ切たる氣色我身はおもひ定めながら人の命の惜まれて又ともなひ歸り十年あまりの病もをこたらず夫死して三年が程は家にいもふごとくして暮しける此事江戸に聞へふるき檢非使なりける石谷何某の入道きひていたう感じかのあたりの郡司とはかり、やもめを府にめし入れ家一つを申下し是をとどめて婦女の鏡ともなさばやとしきりに沙汰せられしが猶薄命やたらざりけん其入道も病にいねたらず成行しが里人たうとみて世は安く送りけるが延寶の頃ま

だかたむかぬよはひ成しが世を早うしぬと見へたり又西山遺事を見侍れば水戸義公西山にいませし時封内那珂郡野上村といへるを過給ひしにあらぬさまなる女の田のおもにうなひてつかれたるさまなるを見給ひ情なき主もてる婢にや繼しき母もてる子にやとみとがめ給ひ人遣して事の由聞せたまへばその村與次右衛門といふものの妻安といふ女にて夫は揚梅といふ病をやみそこね面山崩れ眼海陷り雄の元もなくなり見る人面を掩ふばかりなりしが安厚く最惜みくまなくつかへけるが終には家產つき下部馮などもなくなり老たる母とおのれらふたりのみぞ殘りける與次右衛門妻の淺からぬ志を感じ我は我身に得たる病なり己は家にかへり父母につかへよといひけれど泪にむせび君かくなり給ふとていかですて參らせ異木の春やはながむべき御身已に病の床にあり我なくば誰か母上の抱きかかへもせめと口說けるを夫思ひ定め猶しきりに歸るべきよしいひければ自害せんとしける程に夫あはてをしとどめかかる心としらで申侍るさあらば親子の行末たのみ侍るとてとどめける安悅び彌ねもごろにつかへけるのにてぞ有ける義公大に感じ給ひ其家に行給ひかのものども慰勞したまひ金一包を賜り御嗣綱條公にいひ送り給ひければかの者田畑の租稅を永くゆるしたまひし程に風聲相及び處の人の餽り物どもつどひ世を安く過しけるとぞ此三節婦三幅一對といひつべしよまん人心をとどめよと書つらね侍る夫愛敬は仁義の情實父母につかふるの道にして夫につかへ子を養ふも君につかへ民にのぞむも只愛敬を擴むるなり此ともがら天性の美彫琢をからずして粹然たる明珠色養恭敬古人に耻ず體九原の土に埋むも芳は千里の外に流る嗚

呼堂堂たる七尺の男子として筱あれば就き筱つくればかへりみず恩にそむき義をすて上主恩を忘れ下友朋のよしみをうしなふもの此節婦に耻ざらんや

玖珠郡今宿村介八

玖球森の管内今宿の驛は速見より日田に通へる路にして由布山の麓なり我郷人此道を過ける頃しばしやすらはんとて垣生の小屋のあるに立よれば五十あまりの縲あり床にあやしげなる座を設け位牌を置香花そなへたり行過て宿りけるかたにて此事ども物がたりけるに是は介八とて介九郎といふもの子也ことし安永酉年五十三父母につかへて孝なり廿九にして父に後れ母によくつかへけるが従りむかふる月日もいつしか七回忌を過ぬある時母嘆じていひけるは我不孝にして生涯を貧しく過し今はつれそふ人にも後れせめては世の神佛にもまうで思ひ慰めんとすれば足たたずなりぬ餘命の盡を待のみといひけるを介八聞てさばかり思ひたまふならば子こそ候へいかでやみやみとは過すべきといらへける母喚ひて今は僅に隣るかたにだに行かふことの心にまかせざるに山をへだて江を渡り遠き旅路におもむかんはおもひよらずといふをそれは我思ひ設けし事あり心やすかれとて了玄法師がたくみし樣の笈をつくり豐前にして宇佐の神朝を拜し羅漢寺の幽洞に入り彦の高根をよぢ筑前に下り宰府安樂寺にまうで肥後にむかひ阿蘇の岳に上り道すがら溫泉にあへば老を浴してかへりぬ翌の年は伊勢におほん神拜せんとて路のたくはへもなかりしかど不敵におもひ立けるが行かふ人宿かすかたも同じく是を憐み其志をたすけ恙あらず八十餘日を經てかへり其後いく程なく母もなくなりしかば其笈を靈座とさだめ香花供ふ

かかるよしども邦君久留島信濃守きき給ひあつく褒賞ありしよしこまかに語りけるかの郷人歸るさま又介八を尋ねてそなたには親にあつく自脊負ひはるばる伊勢路にも下られし事淺からざりし孝思かななど會釋しければ介八孝などいふは我おもひよらず只參宮にいざなひしはわれこそ母の蔭に入り路程も人の惠ふかく思ひの外の神まうでしつと答へけるにぞ其言にも孝子の志あらはれぬと事の始末かたるにそのまま筆にとめんも覺束なく便あるかたより玖珠藩の事うかがひければ彼ものの行狀君に達し寶曆十二年午七月十八日褒賞ありしと日記にとどまると云云

玉手襷

長州谷石翁

すすむかし長崎に遊びたりし時谷石翁といへるをあるじとして十餘日とどまりき是は長州萩府の人なり朝とくおき家洒掃し暮かたには事とくしまひて人相の頃はいと物閑なりそのいひける樣は世の中の物は何によらずつかへばつかはるるものなりさなき時は物また我をつかふなり物に怠る心よりあしたは日におこされ夕は夜に催されしづ心なく過すなり我日に先だちておき朝の事どもしまひて日にその出るを催すべし暮に先だちて晝のことを終へ日にそのいるを催すべし賤の女の歌にいつ來て見ても玉手襷かといひてうたふなり人いつとても玉手襷かけたらんには月日といへ其つかふべしといへり我その時肺腑に銘じ四十年一日今にわすれはやらざれども懈れる心より忘れたるにひとし誠に舜邇言を察すといへるもかかる類ひなるべし土佐の士何がしが娘の嫁するを送るとて書たる餞草といふものの中によしやよしなやうらむまじみだれ車よわが

わるひといふをあげて反求の道をおしへし事みへたり遜言もおもへば格言なり聖賢の言といへどもかへり見る心なき時は非をかざり人をせむるの具となるなり此言いやしき里巷の言なれども力をつけて服膺せば天をもうらみず人をもなめざる境なるべし人によりて少し文のはしにても見侍ると物しらぬ人をば無下に見下し彼何をかしるらんなど思ひあなどるよりあらぬ悔も生ずるなりまして人の已にせちにいはん事などかりそめにきき侍らんは德のかろきの至りなるべし此故に狂夫の言も必ず察すといへり予おもひ合せたることありある夕ぐれ山寺の下過けるに乞兒の衣ほころび折から雪氣の寒きに肩そびやかし通りしが物狂おしき者と見へて獨つぶやきける樣は此寺へ立よりて物こひてんやいやいや寺には物ほどこすものなり物こはんよしなしとて打過たり人いやしくも身に省察の心なくんば身士君子となりても取捨の心は時として此乞兒にも耻ざらんや

只しばし

筑前宗像正介が逸事

高野山遍阿法師

論語に孔子の色難しとの給へるは心に欲せぬ事をつとめてなす時はなせどもとかく顏くせのよからぬものなりかほくせよからぬは親も無心におもふ物からひかへて得いはぬなり禮記に孝子の深愛あるものは和氣あり和氣あるものは愉色有愉色あるものは婉容ありといふも其處にて生れつき孝なる人は其人とても親のなす事にこれはさなくともあるべき物をとおもふことなくては叶はざる事なり是も親の大なる過ちあらんには是非たがはぬ事もならざるべし是即罪を隣里鄕黨に得せしめんよりはむしろむまくい

さめよといふ所にして易には母の蠱に幹たり貞にすべからずといへり此母といふ字は男子の中正にあらざる所をたとへていへればあながち女の親といふ事にはあらず外の事なりせば巳が心にそまずともつとめてなすことの只我心より出てなしなん程にむらましかば親の心のいかに嬉しからんさて是は親につかふるが爲にしていへれどもおしわたしていはばいづれの人にもかくあらんこそめでたかるべけれさる程に孝は百行の本ともいふなるべしわれ筑前の人に宗像の正介が事を聞り此事は本傳には見へず是に類せる事他の孝子行狀にもしばしは見へ侍れば人をたがひけるかもしらず正介何やらん普請ありて役たちして行けるにかた足にはわらぢはきかた足には足半（あしなか）といふ物はきてつとめけるを奉行見とがめてたづねけるに前の夜えだちせんとて支度しけるに正介が父なるものは足半はきてよといひ母なる者はわらぢぞよからんといふに正介思ひわづらひてかくしたるにぞ有ける愉色婉容はかかる間にもあらんまことにかく質あつく生れつきなんは甚うらやましき事ながらむまれつきは天なればもとめて得べきことにあらず只其質あつき人のなしたらんことを手本にして人一度してよくする事をおのれ百度して何とぞ其人に似んことをもとむべし我紀の南龍公の事とて承れる事あり定かにはしらずある時いづかたにか管內通り給ふこと有しに君通らせたまふとて萬民皆道をさしはさみ出て見奉りし中に老さらぼへる女を念頃に介抱してうづくまり居けるを御覽じ其子の志しを賞じ給ひ恩惠ありけるに其恩惠をうらやみ思ふも有てかさねて通行し給ふ時路のほとりに老女をかたのごとくいたはりて君を拜することを又前のごと

く賞賜ありしかるを其事をしるものありてかれは實の孝子にあらず前日君の恩賜ありしをうらやみかくこしらへける不敵の者なりと申ければいなとよ學ぶとは眞似することなり不孝ならんものの孝なるをよしと見て眞似せんは志のよきなり是も孝子なり汝等つとめてよき事の眞似せよとの給ひしとぞ故に學ば生知安行の上よりは困しんでしり利して行ふにこそわきて入るべき事なれわざわざとまねすべきことなり愉色婉容正介ごとき質美なる人はつとめずしてしかあるなるべし第二等に下りては强てつとむる事なりかの小野道風書にこころをそそぎうみける折から庭の泉水に柳の枝打たれたる下より蛙のとびあがらんとしけれどもとどかざりしが、しばしば飛つつはてには枝に飛うつりけるを見て只つとむるにあることをさとり終に入木成就しけるごとく不都合なる所をひたまねにまね眞似とげんには天質の美にはぢざるべし我この事をつねに人にかたりて下戸の酒のまざるは手がらなし上戸の酒やめてんこそ手柄なれといふ所なり我ひとり然おもふにもあらざるにや先年中津にて藤田敬所先生とかたりし事あり敬所は東涯先生に從遊せし人なりある時東涯の許へ熊本の士何某きたりてかたりけるに話赤穗義士に及べりその時其士いひけるは死はかたき物と覺へ侍る右の輩死はとく決せる面面なりされども自裁の命下るを聞て容貌自若として動作平生にことならざりしは良雄なりといひければ東涯此ときにあたりて色はとふべき事にあらずといはれしにぞ右之士面に微紅を發せし由かたられし事あり誠にとくと思ひ見れば死をかたんずる人の死につくこそ猶けなげなる事ならぬ是につけて善をせん樣を人にききて今に切に覺

へたること有そのいひける樣は人惡と見てせん樣なし惡と見てやまざるは情慾の爲にひかるればなり其情慾を制せん樣は久しき事にあらず只しばしゝのぶべし誰にもせよ、たとひいかほどの情慾うごくともしばし忍ぶる事のならざる樣やはあるしばしゝのばばまたしばししばしにしばしし侍らば其ことは過ざるべしさるほどに何とも力をつけてなすことは只しばしのことぞかしいかでつとめざるべきと語りきまことに心にかたんずる事もしばしにしばしし侍らば程なく其時もうつりて又四方八方のおかしき事におしうつるべし又死のかたきも只しばしの事なるべし是は只親につかふるの事のみにはあらずなべて覺悟すべき事にて君臣内外もののまじはりなす事にも順境あり逆境あり順境ならば何事なし逆境にあひなば此言おもふべし時宜におゐて忍びてやむべからざる事もあるべけれどもそれも忍びて後の忍びざるなるべしさてかくかたりし人は寶暦の頃高野より來りし遍阿といへる僧なりわれこの僧には方外の交りわきて深かりき指を屈して數ふれば此人世を辭して已に二十余年此事をしるすにつけても賤のをだまきくり返しむかしを今になす心地して思ひ出る其事どもをとめて子等にも見よと遺し侍るこの僧の筑紫にさまよひしはもと日向の古月禪師をしたひてなり渡海の頃は古月既に世をされりよつて後席の下に臘に座しそののち身を雲水にまかせここにも遊べり三年ばかりとどまりて心のくまなくうちかたらひしが此人威儀甚だ端嚴三年の間終に跛倚のかたちを見ずいつもあさしののめにはおき趺座して日の出るをまつ衲衣身をはなつことなし予五十年來接する所かかる端嚴の人を見ず物よく書詩歌もたしなめり佛の

道説けるさまも世の常とは同じからずある時人々集りて道のさまざま物がたりけるにかたはらより何やらんいひ出て是は佛の言にてもよからぬなどいひければいやとよ然にあらずほとけはあしき事いはず佛の言にしてあしくはいかで佛とはいふべきたとひその言經文に書たりとてもけふ能仁ここに出現してとくとてもあしからんは佛の言にあらず狂夫癡人にもせよいひ出でよからんは皆佛の言なりといへり又其人の難じけるは夫男女の道は天地自然の道理にして陰陽の道なり、しかるを其間をわかちて道をたてたるはあやしといひしに僧こたへて僧は世を捨て道を修するものにしてこれ聲聞のさまなり家にあるも同じ佛のかたちなり何かへだてのあるべきされども道を修するため一旦形を聲聞に託せばいかで世の塵にはそむべきとかたりける予が隣に老婢あり主人門おとろへ産つき有し家も人にうり世をわたるいとなみもなかりしかば十六より身をうり租徭をつくのひ家の老父母八十有餘主人夫婦已が母兄に衣をぬぎ食を給しなき跡の弔等もつとめたり其頃は亭主の婦はやみ老母はつかれて床に有しが身をうりたる主人にしばしのいとまもらひ老たる主人の冬の衣せんとすれどもせんかたなきとて苦にやみけるを此僧來りあひてきき折から己も衣せんとて木綿買て携たりしが其物語聞てさても目出たき志かなとて是を投じてさりぬ物にふれて義にいさむ事かくのごとし寶暦四年閏二月二十九日年三十九速見郡小浦風月庵にして寂を示す遺偈有

如是如是更如是　生如是兮死如是
即今天地踏翻來　松風蘿月只如是

左手五鈷を持し右手金剛峯をさし澹然として逝けり道の爲に千里の波濤を冒せしもあ

だにはならざりしと見ゆ此僧たへて俗姓をかたらず後にきけば藝州上田主水につかへし安宅左仲といひしが遁世せしにてありしとぞ此前の秋月いとあかきに月前露

風ふけばちるともしらでかすがのの
草葉の露にやどる月影

といふ歌ありしが歌の識とこそ思ひなされ侍れ

古狸

先年伊勢より安樂房といへる僧來りしがそのかたりけるやう今は久しき事なれば處はさだかに覺へずある侍其つまこと心ありてうらのつい地越てかよへるものありつつむとすれど人目よきがたくいつしか瀨瀨の網代木あらはれて世の人も沙汰するばかりになりぬしかるに此あるじなる夜弓矢たばさみうらのかたに出けるがしばしありて、やれもの共火とぼし來れあやしのものの射とめつといふに下部どもさはぎ提灯提げ行て見れば大なるふる狸ひとつ矢負ひ死したりそこにてあるじいひけるは我ちかきころうらの築地をこえ來るものありあやしと思ひうかがひけるが狸にて有けるとて取すてさせたりまた此ことを世につたへて彼家には狸よなよな通ひけるなど噂しけるそれより三十日ほどありて其妻を何となく親ざとにかへしやりぬ其事は世にも噍しりけんなれども人其智を感じけるとぞ妻を出しては嫁すべからしむといふ古語など思ひ合せ感じけるまことに妻もてる人はききてもあらまほしき物がたりなりあるじ家道正しくは德に化し女の心もおさおさしかるべきなれども男女の中は人の大慾の存する所なれば或は多年空房を守り又はさなきもあまのしほやのたく烟風になびきそめなんも鄭衞の聲のみ耳にききふれ方正の敎きかざらん人はあやま

つまじきことにあらず古へのひじりの道は不孝の罪を第一とし不貞をば淫なれは去るとありされども今の風俗は見苦しきをば斬てすつるも夫の道とすれば不孝よりも重しきりたればとて家の教の正しからざりしゐやまちは補ふべからずむかしの文にはこれを惡を昭らかにすとて不祥の事にせりあやまち補ふべくんば補ふべし補ひがたき日は風俗なれは下策ながらも腰ぬけといはれんにはまさるべし古賢の教には正しき道はあれども過の補ひ樣は多く見えずさもあるべき事なりされ共つくづく世の中を見るに愚にとりまどへるよりよきかたに手とるべき道しらず雪上に霜を置とやらん見ぐるしさに數かさぬることぞ多かるたとへばわかき頃人目しのびの戲れ或は博奕遊俠事にのぞみて短慮のふるまひ進退事きはまり或は鄕里をさり或は白刄の上に死し家名をけがし屍を路頭にさらし一族までの面ぶせになり生死をへだてても事とはぬ樣になるは甚多き事なりわかき頃親のいましめ師の教へきかざるはにくむべきなれどもそのおろかなるよりまよへるは又あはれむべき事なり是をにくみてこれをたてばかの人の子をそこなふ是を衣服にたとふれば破れ綻び垢きたりとてそれをばすてあたらしくせんはいさぎよけれども破れそこなひたらんには補ひつづり垢づけるをば洗ひぬれなばほし幾度も着るべき樣にせんこそ家をたもつの良法ならめ詩にも兄弟墻にせめげども外其あなどりをふせぐといへるはたとひ家にてはとかくいひ恨むること有とても他人に對して弟は兄のさかつつみ兄は弟のよしなし事いかであらはすべき誠に親の惡顯るるは子のはぢにして夫の惡外にもるるは妻の恥ならずや妻子眷屬朋類にいたりても世はなべて

しかるべきことなればにや舜も悪をかくして善をあぐと有楚王群臣と宴ありしにとぼし火きえしひまひとりの臣酒をめぐらせし宮女の袖を引しを宮女その臣の冠の纓引きりて燭いたらば見給へと申せしを人に酒をすゝめ酔ふを罪せん由なしとて群臣に命じ一同に冠の纓をたたしめし事世の美談にあらずやされば若き人もつとめて行ひを正すべき事なれどももし進退に難澁なることあらば智ありておとなしきちかき人に身のあやまち事の難澁をうちあかして身の進退をはかるべし加ならず慮りみじかく命捨つ家出しつせんことつつしむべし己も今迄の非をさとり改らるる事は改むべしもはや改がたき事あらばはづかしくとも親兄弟にも遠慮せんはかへつて罪ふかかるべし其故は其人にげたりとて死したりとて其恥きゆべしや是も廉恥の心ながら廉恥の用ひ場あしきなりこゝにて其恥すすがんとならば一旦の面伏をしのび従前の非をあらため再たび身を新にしふるき恥辱をすゝぐべし聖人にもあやまちはあるものなり過つて改るをよしとす其あやまちにせまり人にもかたりがたきなど遠慮して君父に不忠不孝をなす人あり又これをきく親兄弟のたぐひ己はあやまちせぬ人の様にいかめしく力みかへり水に溺るる人を見捨にせんは甚だ不仁の至りなりとかくあやまてる身にはみづからはいかんとも處しがたきものなりわきより人目つくらふ道をひらきよくいさめなぐさめなだめ過をあらたむること己が心より生せしむべし必いかりののしり犬を追て墻にせまるべからずさりとて衣の綻び破れ數かさなり衣となすべき道なくばいさぎよからんこともよかるべし遠慮なくしてはらくろにこなたより時のこゝろをあげ塗に塗をつけ血を血

にてあらはば似たるうづけものなるべし時宜により手いたく取行はんは千思萬慮の上なるべしこれまた格別の事なり唯平生家の心づかひといふものは火とりはなさぬ樣にと心得べし火とりはなしたる上は類燒出來ぬが肝心なるべしかねていへるごとく廉恥の心なきは禽獸にひとしきなり此故に父子夫婦は至つて心やすきものなれども相たがひにつつしみて身をきよく潔く互に恥らふべし隔心にあれといふにはあらず心得ちがひたらんにはよくいさめあふべしそれを夫は妻の髮引ずり女は夫に人のあるを幸ひにあらぬ善惡などいひちらすいかにはしたなき態なるぞやあしく心得たる女は大かた諫にしたがはぬもの也從はざるは唯暇遣すまでの事なるべし然る故にかへすがへすも廉恥の心を養はざればたかきもいやしきも用たらず男ぶりよくうつくしき衣着馬駕籠にのりても恥しらざれば妾人するものなり

今の世は學好まざる人は士太夫といへども文ひもとくにいたらずまして下ざまの男女聖人彝倫の教生涯にもきかずそれさへあるに淨瑠璃歌舞戯樣のものはやり唯人の情慾にかなひその心をとらかし激する樣の事を見て義理ぞ恩愛ぞと覺へ淫奔私昵の情内に動き男女君父の家をさそひ出あるひは白刄の上に死を共にし是をいざなひ道引人を恩愛のふかきとし是にあづかる人いつしか咨嗟感羨のあまりその陷穽に落いるむかしは三絃小うた樣のものは瞽女座頭のいやしき業にして時のうさばらしには呼てかなでさせうたはせてきく事はあれど手に觸るるものにはあらざりしが今はむすめそだつれば針絲のいとなみより先是等の事を先としてむかし聖の御世には天子の后といへどもこかひ

して御衣を織給ひしをこれをば人の前にては下女樣の業のやうに恥らひあやしき心を誘ふほどに先入るもの主となり後には父母の心をいたむる事ともなりゆくは勢ひのしかる所なりさるほどに髮かたち染模樣にいたるまでもおとなしきを學ばんとはするものなくいやしき遊女野郞の眞似する程に男子も社祢立居のふるまひ俳優のとりなりに似まほしき事をもとむる世となり風俗日日におところへゆくゆく其弊恐るべしその上其淨瑠璃狂言の恩愛義理だてを誠の道とこころえ父母の命媒妁の言もまたず袖のふり合せ手をとりそめし信をたて男をたつるの女をたつるのと意地をはり君父の恩惠にそむき一生を野倒者となすいとなげかしさるほどに夫婦の道のあらましをここにしるして文よまぬ人に告侍るさて君子の道は端を夫婦になすとて人倫のおもき禮なり去程に親媒の見はからひ有て六禮とて一に其人を見さだめて言入るを納采といひ二に女の名をとひ吉凶をうらなふを問名といひ三にうらかたよき事を告るを納吉といひ四に緣むすびたるしるしを納徵といふ今いふ結納なり五に娘とる月日を約するを請期といひ六に聟みづからむかゆるを親迎といふ暮かたの物なるほどに昏禮といふ今とても問名納吉を除きては其事行はるるなり然ふして婦に成婦といふ事あり成婦とは其家の婦人たる事を成就したる也此六禮をそなへて迎ふるを妻とす此禮なくて來るを走るといふ走るものは妾とす親媒のなくて合ふを野合といふ此方にては腐合ふといふ野合の人いかでか成婦たる事を得ん曾子孔子に昏禮巳に幣を納れ吉日を定めし女の父母不幸あらばいかにと問

にそれは婿のかたより人を遣して弔はしむ聟のかたの不幸もこれに同じ婿の家の不幸に其親方なる人より女のかたにいひ遣はすは某し不幸にして父母の喪にあへば不レ得三嗣爲二兄弟一使して先の命を致すとなり不レ得三嗣爲二兄弟一とは夫婦は兄弟の義あればなりこなたにて妹兄といふがごとし女子の家命をうけて後喪終るを待再度縁を結ぶも結ばずとも心次第也女の家の不幸も同じと孔子こたへ給へり又孔子の言に親迎の後三月而廟見稱二來婦一也擇レ日而祭レ於レ禰成レ婦是己にむかへて三月なれば一季を經其後新婦祠堂に相見祭祀終りて後始て婦人となりとぐる也曾子又女未廟見せずして死なばいかんと有しに孔子の答に不レ遷レ於レ祖不レ祔二於皇姑一是祠堂に配食せざる也さて不レ杖不レ菲不レ次服ばかりにて喪の制をそなへざるなり歸二葬於女子之黨一猶夫婦をなしとげざるほどに女家の黨の人なりとぞ又女をめとらんと欲して吉日を定めて其女死するには婿齊衰し弔し終つて服をのぞく婿の死するも同じとなり是を以て我平生婦人の道禮を以て合し義を以て離るといふかかる聖人の禮ある事をしらず淨瑠璃狂言を手本とし女は男にまみへては離れぬを貞と思ひ男は女をすてざるを義と思ひ彌男女の道を失するなりかく聖人の禮あれば親媒のはからひにて一旦縁談ありたりとも夫とすべきもの死したりとて去就道あり女子の節に瑕なしここをしらで意地をはり父兄に物おもはするは道ならぬ事とおもはるまして誤りて野合の事あらん輩は早く前非をくひ別れ離るるをよしとすしかるを我情慾のむすびを貞の義のといひののしり其臭をかさぬるこそあはれなれ論語にも信義に近ければ

言復べしと見へたり義なきの信はふむべからずあらたむる社見事なれたとへば辻ぎりせんと人に約したるが如し是道ならざる事をしらば早くやむにはしかじ

府内桃路新作

此事年序詳ならず爲人抄に出たれば大かたは慶長あたりの事なるべし本國府内の事なり園田作右衞門桃路齋宮といへる兩士口論の事あり作右衞門終に齋宮を討て立退き加賀の國に跡をひそめ山下伊織と姓名を變じ兵法の師をして在けり齋宮にひとりの小兒あり新作といへりおさなかりしかば未だちちの過し故をもしらず手習師のかたにて伴ふ子供と相撲をとりて勝にけりまけたる子はらをたておのれ臆病ものとてののしりけり新作かちて臆病なるものやあるといひければ我親を人にうたせ敵の有無をも得しらぬは臆病者にあらずやといひけるをききとがめて事のよしども始て聞いたくかなしみ無念に思ひ母にいとまをこひ跡をしたひ終に加賀にいたり春の頃伊織が草履取となりしが折節伊織時行の病にそみていたうくるしみける新作力をつくし看病しけるが六月の末やうやくこころよくなりぬここにおゐて新作すすんで申けるは我は御邊が手にかけし桃田齋宮が子なり復讐の爲はるばる是までしたひ來りし處折から御邊がやめるにあひ病者と勝負を決せん事男子の志にあらずと力をつくして介抱せり今は病もいえぬれば正しく親の敵なりうらみの太刀こころみよと告ければ伊織よくこそと日を約し野外に出て伊織が寸槍新作が太刀と三たびあふて三度わかれ勝負の色も見へざりけり時に伊織槍をすてはだをぬぎ其方千里の路をしたひ來れるこころざしをおもひやりて殺すに忍びず我首を送るなり早く來りて本

望とげよと頭を出して坐したりけり新作刀をとりてむかひしがうちもやらずやや久しくありて終に刀を納め相伴ひて歸りしとぞ思ふに伊織は兵術老練の士三度あひ三度わかるるの間新作をよき程にあひしらひしなるべし其年少の身としてよく其氣をふるひ千里の雲山波濤をわたり已にむかひ我病るを見て人を厄にくるしめず其勇力の復するを待ち直に己れが槍先にあたるの志氣を感じその孝をなさんとせしなるべし新作は三度あひ三度わかるる間かの槍先するどきのうち已にあらそはざる所あるをしりしなるべし爭闘のよる所しるべからず伊織義を以て命を新作にさづく新作伊織が義を白及交るの間にしる截斷の一刀まことにほどこすべからず然りといへども義不戴天にあればべからず然りといへども義不戴天にあれば其情感ずべしといへ共又したしみ交るべきにあらずさきには讐をうたざるを難事とし今は讐をうつを以て難事とす我新作がその殺さざるをあやしまずして相携へて歸るをあやしむ思ふに此時戰爭の時節なればあるひは君の爲に一死力の士を得て國に忠をなさんと欲するにやよむ人願くは左すべからず右すべからず一線路上において一轉身の語を下せ

筑後赤星新六郎

篠才藏

むかしの人孝子の行を擧て草木のまさに長ずるを折らず昆蟲の蟄を啓くをふまずといへり故ありやむ事を得ずして殺すといふこともあるなれども無益の殺生はいにしへの良將も首としていましめ置れたりげに我口腹器玩の爲に物の命をたつことは是を業とする人ならずばやみて有たき事なりわれ幼き時川に遊び小魚三ッ四ッとらへ石鉢に入て遊びたりしを先君子見給ひ籠鳥の雲をし

たふといふ事をしらずや鳥は林に巳がまにまに飛かけり魚は流に我を忘れすむなるをこれを器の中に入れ彼がくるしみをもて巳がたのしみとする事やあるいそぎはなてとて追やられし事あり先君子吾輩子ともなふる樣の事あれば人をくるしめてたのしまずともなともろともにたのしまざるといましめられ又ある時人來りてさる處に火事有車馬旁午上下混雜せし事ども語りけるを我見ば一興ならんといひしを先君子眉をひそめくるしき處をば火宅とこそいへ人のさばかりなげきかなしむを一興とは何の心ぞと叱り給ひしも遺音耳にのこりて六十字の年巳にすぎぬ人によりては殺生せぬ子は甲斐なしとて心おとりする樣に思ふもあれど甲斐なくてしかるもあるべし誠の勇者も又しかるべしある人蟲ふまぬとて一番槍なるまじきかといひしをきけり仁義の勇はしかるこ

そあるらん物のくるしみなやむを見て哀とおもふ心なくば本心をうしなふに近かりなん人さかんなりとて天道をおそれざらんや足利の末皇綱紐を解き柳營の勢かろく天正の頃にいたりては諸國瓜のごとく分れ鬪爭やむひまもなかりけり時龍造寺隆信は肥前佐賀に在蒲池鎭並は筑後柳川にあり此時赤星統家は蒲池が妻の兄なれども勢やむ事を得ずして嫡子新六郎とて十四歲になりけるを龍造寺に質に遣し置けり龍造寺赤星の心をあやしむ事ありて招きけれども得いたらずよりて成吉木下などいへる家臣を遣して事の由糺さしめけり折から赤星内にあらず二人の吏これをいかり新六郎がいもとの八歲になるがありしをとらへて歸りける龍造寺いよいよ野心なりと憤りて二人の子ども筑肥の界なる竹井原に引出しはつつけにぞかけにける武士ども今ぞ最後なるぞ念佛申

せ西にむけんといひければ新六郎
我面西になむけそ赤星の
親にうしろをむけしとおもへば
とよみて刑に就きにける年纔に
古子路纓を結びしにもおさおさはぢず死に
臨みてもいさぎよく家の風をかほらせしは
たぐひ稀なる事なるべし造次顚沛ここにお
ゐてするみさほ士たるものの師表となすべ
しさて祉統家も志を決し島津に身を託し龍
造寺も終に島津に身をうしなひぬある説に大友新六郎をころすとありうたがふべし不仁のいたす處なるべしさ
て此文は此ほとりちかく見聞ける孝子の事
ども其名の後に傳へざらんも本意なし我人
を道びく德もなければ女文字に書つらねて
家の子等にものこしなからんあとにも我と
見て庭の紫荊の日にそへて枝葉しげからん
事をおもふ赤星の事ども伊蒿子の孝子傳に
載さるも遺憾なりいとけなき身の難にのぞ
み確然として終をとりしが勇勇敷ければ此
文の結びとはなしぬ夫身は父母の遺體なれ
ばふかき淵にのぞむごとく薄き氷をふむご
とく全ふして父母にかへすを孝の終とする
なりこの故に其酒に長じ色に耽り利慾にく
らみ身をうしなふ共に不孝の數なりさる程
に戰戰兢兢として爪髮にいたるまでも大事
にしてかへすを道の常とせりされども世の
中は常あれば變あり事變ずれば道も又常な
らず故に曾子一度は身體髮膚あへてそこな
ひ傷らずといひ一度は戰陣勇なきは孝にあ
らずとありされば今の人のむかしの勇士の
事をおもふにはただにはやり過たるあらも
のの樣に思ひなさるれどもよくその事を考
ふればかならずしも然にあらずされぱむか
し箕田綱坂田公時に人の剛ならん樣をとひ
ければ臆病になれといひしも此さかひにし
て臆病とはかひ打ふつてにぐる事にはあら

ず君父まさかの用に立なん身なれば常に大事にたもつべきなり今ふたつなき身を酒色にそこなひ一朝のいかりに朝ゆふへをかへりみず父母一生のいたはり君上數代のいつくしみにも用立ざる事不忠不孝にあらずして何ぞやされば福島正則の家臣可兒才藏は時に名だかき勇士にして關ヶ原の戰にも一番首をとり猶あまたの首どもとりて　神君より篠の苗字を賜りし程の者なり我これを藝人にきけり正則廣島にありし時才藏湯屋にゆき湯あみける事ありしが同志のわかもの不圖喧嘩し出しけるに才藏は刀おつ取其處をはづしけり他日ある人御邊程の人のかかる處をば何とてかくはさられしといひければ才藏我に私の命なしと答へけるとぞ古勇者の用心察すべし父母は我をたのみ妻子は我を天とし君は國家社稷のたすけに扶持し給ふ身なれば我身とて我身にあらずたとへば龍泉大阿を佩るがごとしまさかの一割は惜む處にあらずといへ共つねづね拂拭してかりにも鏽をいたさしむべからずこれをおもひて我身の重きをしらば人の身も又重きをしるべしかく身はおもきものゆへ故なうして人を殺すべからず道にそむひて身をころすべからず故に死するに死すべき所ありて生るにいくべき所ありさる程に篠が用心を曾子の教にかんがへて身の進退をゑらむべし

かくしるし侍りておもひつづくるに竹馬のむかしも足はやみいつしか双鬢雪をたれ六十字にあまる春をむかへぬ恃み恃みしかぞいろも只風樹葉落遺容のみ眼中にありて幾年のむかしとはなりぬさありて豚犬の輩やうやく粟ゝ菜とをばわかてりしかればひとへに子の道のみいひて子等にしめすも己が田をすてて人の田を耨るを病に近からんよ

つて思ふに我猶慶を具へし日父虎角府君我にいひ給ひし事あり其言に我齢已に古稀に及べりつらつら世の人をみるに年老れば心耄するものなり耄しては自耄したりとおもふべきにつやつや物もわかれぬ程いとどみづからには心正しと思ふなり我老て猶自らむかしにかはらず思ふも耄してかくや思ふらん汝が輩我あしからんとおもふをば必ず告よ我かならず從はんとの給ひきかかる有がたき庭の訓をききつつ子等にわけなき心づかひさせてんは空おそろしき事ぞかしおのが田をすてて人の田を草ぎるを病むとはおのが田に草の茂れるをばおきて何がしの田こそ草生ひたれかくしてはいかで田なつものの實のるべきゆくゆくかれが身の上いかがするらんなど苦に病むがごとし人の田のあれなんもさる事なれどもそれはその人のみづからせむべき事にして先おのが田のみのらざらんこそなげくべき事なれ只世の中の情子は子の道を講せずして親の子に慮する道のみをいひ親は親の道を忘れ子のよからぬのみ說只人の田の草をのみやみておのが田のあるるをかへりみずもし各をのが田の草耨らんとならば子は子の道をつとめ親は親の道を修め度事なり後來新婦今爲婆にて子なりとおもひしもはや親になりぬ予愚にして家におしゆる程の事ならずとももてあましたる親かなと世におもはれざる程にはせめてあれかしと心に籠めて思ひ侍る世へだたり時うつれば古のいみじきことば行ひもむなしくなりやすきが本意なきほどに府君の敎給ひし事數多きが中つまびらかに記せし事をとどめて兒孫に送るものなり府君は常にあはれみの心をおもとし給へり寒きものを見ては衣を解き飢たるものを見ては食を推し輔頬舌のことあればみづから

往てその難を和し給ひき一年秋大にみのらず春に及び飢るものおほきによりいろいろ心をつくし給ひける中に半里もへだてたるかたのかねてしれるにもあらねど飢つかれて往すへ溝壑にみたれんも覺束なしとかたるもの有ければそはきかざりし非よとて米味噌樣の物饋り猶も心のやすからずとて老の杖引ずり二十町ばかり見もしらぬ人の門問給ひしに足門に入らんとする時家慟哭の聲を發せしかば悲歎してかへり給ひき我におしへ給ひしは人は只慈悲を主とすべし隣に飢る人あらば食をうまく食ふべからず貧家にうらみあるものなり我ものを我にして着我にしてくらふに何うらむる樣やあるといはんなれど是は理屈といふものなりたとへば汝の身を飢てくらふの食なくこごえてきるの衣なからしめ老たるや幼きが呻吟するに風かよひ雨もる蓬生の小屋にあかしくらしなばかたへの人の衣うるはしく滋味にあき遊侶あつまり歌うたひ酒などたうべんに人はかくもあるものをといかでうらやむ心生せざらんそのうらやむ心即うらみなりかならず人にうらみなむすびそとなを耳底にとまりて今の樣に思ひなされぬかかることども永く家にいひ傳へて世世のまもりとなすべきなり

天明三年癸卯睦月　三浦すゝ武しるす

愉婉錄下終

養生訓

豐國東郡　三浦晋　安貞　著

物二つながら全ふしがたきことはりは、翼有るものに手なく、牙あるものに角なきにも、思ひ知るべきことなり、さる程に、松の千年を色かへず吹雪すなる冬の空、霞める春の朝とても同じ常盤の色なるは、梅櫻樣の、えならず麗はしき花は開かず、是れ天の道といふものにして、『誰も見よ、滿ればやがて缺く月の、いさよふ影や、人の世の中』とよめるも盈るをいとひて謙に益すといへる、ひじりの文の心にかなふなるべし、人も萬物も、同じく天地にはらまれて、同じくこれに化育せらるるものなれば、尊きも卑きも、富るも貧きも、只天道に背かじと、恐れて愼むべきことなり、そふじて災を天に得ば、祈るにところなかるべし、

美好者、不祥の器といふ事あり、美好の愛すべきは、誰とても知る事なれども、美好の不祥の器なる事は、情慾の私にひかるる故とは知り難し、妻は色かたちいみじきに、あふ坂山のさねかずら長きちぎりを願ひ、馬はけはしき岨荒き浪をも恙なく、主しを乘せて渡さんをこそ賴みて、秘藏する事なり、さる程に、我よしと思ふものは、人もよしと認むる習ひにして、秋の紅葉、春の花、色香異木に勝るれば、手折れる人も多く、松樫樣のつれなく立るには、さそふ嵐、ともなふ水の心づかひもなきに、何れか劣り勝るらん、この故に、妹兄の契むすびてんにも色かたち艷に、あかずむかはまほしき程、又おもひ苦しむ事も多かることはりなり、されぱこそ、鹽谷判官高貞は其の妻の美に家を亡し、伊豆守仲綱は、木の下陰の駿足に、一門從類をば竭せしなれ、今富と貴きとは、思ふ事、心の儘なるべきさかひなれば、人人足をつまだて、頭を引て、其地をこひ願ふ事にして、其不祥

なる事を露はども考えず、富貴の位は、假令ば器に物を十分みてて、手にさゝへる如く、高き梢によりて憩ふが如し、物器に滿たざれば、手たゆみても物をこぼすに及ばず、低きにたてる身は、足を失しても、身を害ふ程の事はあらず、さる程に、貧賤ならん人は、天より福を給ふと思ひ、富貴に生れんずる人は、天より禍をあたふると、恐れみ謹み、施與を好み、節儉をつとめ、其富み貴きに淫せられ、易に、山澤上にあるを、損の卦とせり、山澤上にあれば、上なるものなだれて下に滿す、故に損の卦に繼ものは、益の卦なり、この事を序卦に、損而不レ已、必受ルニレ之以テスレ益チ、而不レ已、必決ス、故ニ受ルニレ之以テスレ夬ヲ、乾の上九に亢龍有レ悔といへるも同じ持滿のいましめなり、然るを桃李の麗はしきに、松の千年を籠めてある樣に思はんは、愚なる心なるべし、此故に古人、花は看ヨ二半開ヲ一酒ハ飲メ二微醉ニ一といへり、

山野と城市との人をたとへてみんに、奉養飲食、衣服に至りて、田野の家の主人、城市の人の奴婢と相似るべし、城市に長壽壯健の人あらず、田野に多病不壽の人あらずと云ふにはあらねども、其大抵をいはんには、城市富貴奉養の家には、不圖多病の人多く、田野貧賤の家には、壯健長壽の人多し、城市も貧賤の人は健なるが多く、田野を奉養の家病める者多し、夫れ田野の農民は力に食めるものにして、其農の利、商賈と異りて、租税を公に奉れば良農夫總に老幼を養ふにたり其次は、飢渇を免かれ難し、さる故に、夏の夜も釣べき蚊屋も多くは持たず、冬の夜の寒きにも、夜の衾とてもあらず、脫ぎかふる衣もてるは、これを重ね着て、夜も明れば、柴木一とつ二つ折りくべ、やがて霜蹈分け、己れがいとなみにつく、これ農の藝なる樣なれども、晝に行て茅かやかり、夜は索を綯ひ屋根を葺き、垣結ひ、薪こり、女は飯かしぎ、子はごくめるいとま、布織り衣の綻び補ふ、歲を

迎ふる夜とても静心なく、新玉の年立かへれば、井手溝の浚えし、塘土堤を繕ひ、耕種子蒔く用意より、田なつ物畑つ物生なんずる頃は、猪鹿雉子兎、稼を妨ぐるが爲に、これを逐はんとて、日暮れば出で、日出れば農に就く田植る頃より、人毎に水競ひ取る事なれば、夜水引とて、終夕田うち巡り、曉方には、田のくろ河のほとりに草打敷き、夢結ぶ程もなく、日照る日は、日に畑にさらされ、雨降る日は、雨に田にそぼてり、五穀といへる物は、かくばかり民の辛若艱難して、生殖する物なれば富めるとて、故なく費し侍らんは、天理恐れある事ならずや、さる故に、古人、請見盤中飧、粒々是辛苦、とも詠じ置けり、さて右程の事なれば、其子育つるも種蒔き草きる頃は、終日舂負ふ事も成難ければ、木陰よく茂れる方見たて、よき程にこしらえ遊はし歸るさま溪水に汗かきあらひ、冬はつゞれ一つ二つ打着それにて雪霜も凌ぐなり、誠にかゝる身は、それにつけて、不時の病を得てなやめる事もあり、飢渇の爲に命を失ふ樣の哀なる事もあれど、富貴奉養の人と、筋骨腠理をたくらべんには、きたへる金と、鍛はざるかねとの如し、其しるしには、富貴の人の强くたくましきと、艱苦の人の筋骨弱きとをならべて、あくるより暮るまで、つとめて勞苦の働きさせんに、始の程は由由敷みきはまさりと見えなんも、かの弱く早斐なき男の、終日の振舞は得とけまじ、さる故に、手枕のすき間の風にも、感じ、山路の霧、草むらの露にも、冒され易し、農夫は俗に卯月の卯の花腐しと云へる雨より、五月雨と打つづき、夫より水に浸りそめ、秋の半の頃までは、夜晝水に有ながら、風濕の患もあらず、この故に、田野には七八十にしても、猶壯健なるは殊に多く覺ゆ、誠に桃李の麗はしき姿は無けれども、色變へぬ綠は松にこそあれ、

人の氣は、常に動くを好み、人の身は常に靜なるを好めり、動くを好む者には、靜なるを以て養ひ靜なるを好むには、常に勞を用ゆ、是養生の道なり、氣は眼に見えぬ物故に、人ゆるがせに思えども至つて大切なるものなり、人は唯飮み食ひすれば、命はたつものの樣に、思ふは條理に疎き故なり、人はもと天地にうけて出來たるこの身なれば、此身を養ふも、天地に資らざれば養ひがたし、天は氣にして、地は質なり飮食は質にして呼吸は氣なり、呼吸は天の人を養ふなり、飮食は地の人を養ふなり、この故に古人、鼻を天門と名づけ、口を地戶といへり、この天の養ひを塞ぐときは頃刻の命も保ち難し、さる程に發汗の藥を用ひて汗を得ざれども、心に恥かしと思ふ時は惣身汗にうるほふ、終夜飢て食を思ふと雖も、もし胸ふくるる樣の音信にて聞んには、一粒咽に下る事能はず、此故に一旦の喜怒憂患といへども、生命にあづかる事大なるべし、されど人間の習なれば、其憂ふべき事も憂へず、怒るべき事も怒らざれと云ふにはあらず、唯心を養ふ道を知らざる故、樂しむべき境を苦しと見、安き世を六ヶ敷住なし、或は男女の情に羈され、或は名聞利用にひかれ、或は愛憎喜怒の道を失ひ、或は我慢嗔恚に思ひを焦す事、佛氏の所謂火宅なり、人の道とは、只子としては孝に、臣としては忠なる事にして、太史公の言にも、命泰山よりも重く、鴻毛よりも輕しとありて、君に仕るにも、親に仕るにも、命は只一つあるものなれば、尤も大切なるものなり、常に衞生の道を知り、身を壯健に保たずんば、父母には唯其病を憂へしめ、君の爲には、まさかの働もなりまじければ、百年の君恩も何を以てか報じ奉らん、さる故に、義に臨みての一命は、實に鴻毛よりも輕けれども、君父の恩を報せん心懸けは、只一命を泰山よりも重んずるにあり。

流水不朽、戸樞不蠹とて、氣は只安らかに、物に泥まず、水の滯らざる如くなるべし、水物にさへられて、流れざる處は、沫を結ぶ、是痰の症なり、醫典に、疹は長流水の如しと云ふ事あり、痰長流水の如きにあらず人の身健なれば、氣血循環して、長流水の如し其流れやらざる處、砂積み塵置き沫むすびて、疹の形をなす、さる故に、氣は只流れの滯なき如く、又青柳の絲の、春の風に吹亂すかと見れば、やがて跡より解けあへる如くむつかしからず、又もつれたる絲をおさむる如くなるべし、世の中の事は、慰まんと思ひても樂しまんとしても、親子夫婦の間より君臣同僚、世のいとなみにつけても、心ならぬ事のみ多かる事なれば、只心長く、其もつれを、おさむべし、若し心みじかく絲口引なば、其結びは、再度解け難かるべし、此故に、心は安く靜なるを貴とめども、身は安逸に害あるものにて、樞は常にあけたての繁ければ、むし

はむいとまのなき如し、たとへば少し食過たらんと思ふ時、一入身を勞する事あれば、消化して氣平なるが如し、常に身を勞せざる人は、氣内に伸びず、液隨つて凝り、癥となり瘕となり、或は鬱症勞瘵の類ともなり、或は痿躄偏枯の類ともなり、癇症顛狂の類となり、癰疽痔漏の類ともなり、變症百出人の、精神を苦しめ、果ては生命を害のふ、この故に、養生の道知らざるは、不幸不忠の一端にして、國に君、家に父たらん人は、不仁不慈の一端なるべし、さる程に、心は行く水の物にたえざる如く、身は樞の常にやすまずして、動くが如くならば、天よりいたらん恙は力なく、病をこなたより釀すには至らざるべく、人は各天職のあるものなれば、何事も思はず慮らずして、過ごせと云ふにはあらず、只心の泥まざらん樣は、水の曲れる處、曲れば行きて巡り、險しければ、波をさかまけども、さえぬ物からに、千里を順流して勞るる

事なし、世の中の、月に村雲、花に風と、思ふままならぬにも、心結ばぬ道はあるべし、天職といふ物は、人の天に仕ふるの道なり、天子は上なき尊き御身にておはしませども、四海に父母たらせ給へば、四方八方の端しまで、波風なく治め給ふの職あり、公侯は其四海を治め給ふ手傳へなる故に輔佐と稱し、分憂の吏など云ふなり、農工商賈は、財を生造通用して、造化を助くるものなり、造化を助くるとは、雲行き雨施して品物形をしく時、天もとより、人に借る事なしといへど、人の世は人と伴なふ習なれば、其亂るべきを治め苦むべきを安じ、飢るには其食に就かん事を謀り、凍るには、其衣着なん事を謀り、人家のさび病るをば助け安んじ、幼き孤など救ひはごくむ樣ぞ、造化を助ると云ふものにして上御一人の御身より、下士農工商に至つて唯造化を賛くる事のみこそ、人の天に仕ふるの道なれ、是我私の言にあらず、易の繋辭に、天地之大德曰レ生、聖人之大寶曰レ位、何以守レ位曰人、何以聚レ人、曰財、理レ財正レ辭、禁二民之爲一レ非曰レ義、とあり天地は只生生を德とするものなり、民の父母は、其生生の德を助け、民を天德に安んぜん爲の位なり、身已に其位に居給へば、よく其財を理さめ、人を聚め給ふべき道なり、其財を理さむるには、無益無用の物は、人の目を悅ばしめ、心をとらかすのみなれば奇技淫巧とて、造化の害とこそなるなれ、書の旅獒にも、不レ作二無益一害二有益一、功乃成、不レ貴二異物一賤二用物一、民乃足とあり、此故に淫巧奇技は、却つて人の性命に害ある事にして、造化を賛する所作は、唯日夜孳孳として、有益の事を力むるにあり、用物を貴とび、有益をなし、よく財を理め世の生民親あつて、幼きを人となし、老を助け病るを救はん事、貴ときも賤しきも、日夜怠る事あるべからず、怠る事なき時は、四體も懈墮安逸せざる程に、氣血鬱滯の患もなく、天命を保つ、

なり、是即人よく天に仕へ、天また人を惠むの理りなり、世の人此理りを知らず、已世を安く過さむとて、淫巧奇技をなし、人をして其德を失ひ、其志を亂さしめ、四民の作り出せる物を、人を養ひ救ふものに費ひしめず、そぞろに無益に用ひ盡さしむる事、あたら惜しき事ならずや、古より五穀菜蔬をそこなふ蟲に譬しも同じことはりなればなり、富貴奢侈の風行はれて人の生業をば賤きものの樣に心得、人の妻は機織り衣縫ひ中饋の事に與かるをば隱し、農夫は耕し草ぎり、商人は交易するをば、人目いぶせく思ふ樣なり、若ししかあらば、士にして馬を馳せ劍を試むるを恥ぢ、僧にして看經を厭ふをもよしと見るべしや、恐れても猶恐るべき風なり、されば天照太神も齊機殿にて神衣を織らせ給ひしこそ傳へ侍れ、又近く織田信長は、三十餘國を掌握せられし人なれども筋力の怠をいとひ、自ら米をうすづき給ひし

とぞ承る、もろこしにても蜀の先主は、久しく馬に乘らずして、股の肉肥たるを歎じ、晉の陶侃は百枚の瓦を、朝は門外に持出で暮には門内に運び入れしなど、かかる例は數多かる事なり、しかある程に、孔子も道に志して惡衣惡食を恥るものは共に謀るに足らずとの給へり、衣惡しく食惡しきとて、などかは人に恥べき、只子として親に孝ならず、臣として君に忠ならず、女として操なく、吏として廉ならず、富で施す事能はず、貧ふしてまたなき志もちなんなどこそ人の恥べき事ならめ、古人、出輿入輦、命曰蹷痿之機、洞房淸容、命曰寒熱之媒、皓齒蛾眉、命曰伐性之斧、甘脆肥醲、命曰腐腸之藥、と云へり、是尤も養生の要語なり、右に云ふ如く、天子を始め奉り、下士農工商に至るまで各、其職を分つて天に仕へ、其大德を贊くるを、人の道とする事なれば、假令造化を贊くる程なくとも、せめて造化を害する程の事はたしなみ度

事ならずや、手は天より我に賜はりたるやつ子にして、足は天より我に賜はりたる乘物なり、其やつ子を置き其乘物を棄て、一時の安をもとめ、人を苦しめて、己が安を求むる故手足はありながら、終には手足の用もなさず、人身の表には、衞氣と云ふものありて、内を保護する事、例へば提灯の火袋の雨風を塞ぎて、燈に災せしめざる樣なり、富貴奉養の輩は、衞氣の内を保護する物なるを知らず、假初めの暑さ寒さ、纔の雨つゆも只管にいとひ戶さし深く、衣あつく打ちきせ、其表の守りをゆるめ、火氣酒力に腠理をひらき、天地の氣に慣れしめざる故、提灯を大事と、風も通はぬ所に圍こひ、黴いたう入り、しみ處處むしばめるを、やむことを得ざる時、ともして風雨を冒すが如し、大事にせし故、敗れをとり假初の風も入り、纔の雨も漏れて、燈の災とぞなりぬべし、鳥獸は、其心の愚なる故、情慾の感應も、自ら時ありて、雌雄のかたらひも、其節に止るなり、人は其聰明の多智多情に妨げられ、感應常なく、其節を知らず、それ男女は、人の陰陽にして、情慾の動は、發生の氣感、其氣感じて節を知らず、内にして性を伐り、外にして德を損ふ物故に、聖人これが禮を制し、配して夫婦の道を修め子孫其血脈を嗣ぎ、親疎其族を分つなり、只人慾にまどはされ、生生の天意を倒用して、不壽の基とす、禮に男子三十ニシテ有ㇾ室、女子二十ニシテ而嫁と云ふも、年猶若き時は、人の父母とならん道もしらず、且其發生の氣を早く斲喪せしめじとなり、斲喪の人はこれを水に譬ゆれば、源の涸るる如く、これを火に譬ゆれば、薪の盡るが如し、大風先倒ス無根ノ樹、傷寒偏ニ死ス下虛ノ人といひ、又眼藥千朝不ㇾ如ニ猶眠一宿一とも、戒しめ置けり、芙蓉のかんばせ、嬋妍の眉、丹花の唇、窈窕の腰、目いどみ心ひき、慣れそめぬ始は、墻燒く浦の風をいたみ、思はぬかたになびくを歎き、別れて後は、又あふ

事をかたいとの、よるべなく思ひ亂れ、恥をも忘れ、命をも惜しと思はぬ物なれば、百萬の敵を無援の孤城に防ぐの勇なくんば、あやまたざる事難かるべし、蔡文忠公濟州に倅たりしに日日酣飲してありけるに賈存道聖君寵重シ龍頭ノ選ニ慈母恩深鶴髮垂君寵母恩倶未報酒如シ成レ病悔トモ何ゾ追ンといふ詩を作りて進めたれば、文定公痛く懲りて敢て飮まざりしとぞ、人の親子たるもの豈に此詩を誦せざるべけんや、

人の腸胃はもと禽獸と違ひ、弱く脆きものなり、其故は、禽獸は、木の實草の芽、生ふるものけふとても、其儘にて呑み食ひて、障る事なし、人は五穀も、皮を去り、糠を除き、魚の肉、草木の實も、唯其肥脆を選び取り、鹽に和し水に浸し、猶火の薫蒸炮炙をとり、漸く身を養ふに堪えたり、さばかり甲斐なき腸胃をもち、禽獸より多慾の性を持し、外衞氣の守りを失ひ、内限なき忘念に心を沒し、酒食の慾を極むる事、弊竇を瓊して、攻兵の怒を益が如し、豈危きの甚しきにあらずや、昔の人は長壽壯健にして、今の世の人の多病不壽なるも、天地かく異なるにはあらず、昔しは割據鬪爭の世なれば、筋骨腠理のきたいよろしく、心剛に慣れて、いなみ危ぶむ事少く、今の世の人は、太平の化を君の德ぞと共有がたき世なるを知らず、此上にも猶望み起り、美味調膳に腸を腐し、紅紛青嫁に姓をきり、只世を安樂世界に住し、自由自在に慾を極むる故、人壽に古今の別をなせり、昔は茶と云ふものもとよりなし、酒と云ふものはあれど、今の世の様に、飮みて朝の日を花の下に暮し、汲て夕の月を山の端に送る夜なる事は、少なかりけん、人の腸胃は、大概飯を主として、菜蔬菓肉は、これにかなふべし、飮み物は又食ひ物に適ふべし、今の世は、茶酒盛なる世故、渇を止むるの外に、其味をたしむ、茶あれば菓子あり、酒呑めば吸物あり、はては酒渇愛スノ口淸キヲ餘酣

漱晩汀にて豪飲すれば水をひく、酒はもと、よく鬱を開き、氣血を廻らし食毒を消す物にて、世に忘憂物とも呼れ、邵康節は、大和湯とも號し、常に用ひしかども、只微燻してやまれしなり、されど酒は興あるものにて、我もとめ人すすめ、ひとつ〳〵の數重なり、常にたしなみし心も、守りを忘れ、大事と思ひ込めたるも、我を忘れ、わき目いぶせき振舞など多し、古人これを狂藥ともいへりされども酒人はまた一種の議論あり、是酒を狂藥と云へば、彼下戸を惡客とののしる、堯舜千鍾孔子百觚子路嗑、尚飮百榼天若不愛酒、星不在天、地若不愛酒、地應無酒泉、など戯れて、實に思にもあらざれど、興じ樂む事なり、昔松平伊豆守信綱の前にて、近臣ども物語して有けるに、酒は好きものに候へば、君にもすすみ給えかしと申しければ、各子やある、世の中に我身にも代えて愛するものは、子なり、子持てる親の心には、其子の酒飲むや安き、酒呑ぬや安きとありければ、各畏りて、子は酒飲ざらんこそ、親の心の安く候はめと云ひけるに、己が身に代へて愛する子に、のまであれかしと思へば、酒はよからぬものぞと仰けるにぞ、皆理りに服しけるとぞ、是公論と云ふべし、酒は心を亂る物故に、佛の教にも、五つの戒の一つには數へたり、德を損ひ家産を破り、人の性命をも害する故、書には酒浩、詩には賓之初筵の戒めあり、醉ざめに、醉し頃の物くるはしき心とも思ひ出では、露うけじとも思へども、酒杯に向へば變る心にて、かく柔脆の腸胃を持ちて、悍猛の氣にあたり、衛氣の怠る處、風濕これを犯し心神亂るる處、情慾是をいざなふ、或は老の花の色香に故、蝶の夢を結びさなきは眞雅僧正の、岩手の山の岩つつじ、いはぬ色の媒ともなれり、これを甘餐毒藥戯猛獸之爪牙といへり、かくして病魔膏肓にひそまり、きのふしらず、けふ覚えず、いつしか病

の城廓をかまへぬれば、歳あれ穀つきて、賊徒城に栖籠るが如し、進みて攻んにも、穀つきて兵馬なく、退ひて守にも、國に野心の者あれば、手を拱ひて一揆の濫妨をみる、稲は水を好むものなれども、水過る處はほし、また實らんする前は、水を引きてよし、或は雨年、又水多き處は、水負けとて實のり惡しし、惡きは猶可なり、蟲となり病となりてつくるなり、人も朝暮に水用ゆる物なれども、是は自然と知りて、渇きを生ずるなり、それに茶酒などいふは、臨時の水なり、吉益東洞、今の人の病、十に七八、水なりと云へるは此事にして、今の人に流飲なんど多きも、この故なり、夫人の身體髮膚は、父母にうけたり、全うして返すは孝の道なり、君が一日の恩を感じ、我百年の身を獻ずるは、臣たる者の義なり、然れば口腹、安逸の爲に其身を病の器となし、上君孝の道をかき、下妻子眷屬にも、あらぬ思ひさせてん事、よく／＼思はざるべけんや、養生は平生の用心にして、醫者の知る事にあらず、療治は臨時の設施にして、醫の任とする處なり、病は絪縕の變化なれば、稟受厚うしても、養生よしとても、絪縕の開毒結び、これに感ずる時は、病となるものなり、まして起臥飲食、時なる事を得ず、驚悸憂慮辛勞艱苦も世の習なれば、譬ひ聖人君子とても、これに役せられざる事は有べからず、然れば其病身短壽もあながちに、其人の自ら招ける咎とは定め難し、此故に王子晋の賢も、僅かに十五、顔子の聖人に近きも、三十歳に過ず、而して盜跖が暴戻縦慾も、八十有餘の天壽を終ぬ、されども養生の道に背く人は、その天壽を戕絨して、父母の遺體を害ふなり、これ養生の缺ぐべからざる處なり、然れども一旦病を釀しては、養生の平和にては、其勢ささへ難く、只病邪勢輕く、元氣猶缺ざる時は一時の勝敗はさる事にして、藥さされども、恢復の功あり、病邪勢盛な

る時は、早く元氣の爲に援兵を出し、其病を攻め擊つべし、其養生は平生といふ事は、これを國家にていへば、常に國民を撫で安んじ、飢渴凍餒の憂なからしめ孝悌忠信の敎をも粗さとし、芻糧甲兵のたくはへも、備へある時は、國民の內偶々惡しきたくみする者ありとても、大勢の和に叶ひ難く、湯をもて雪を消すが如く、火をもて毛を燒くが如く、いつしか干戈のことにも及ばず、跡なくなり行くものなり、然るを平生其用心なく、下はつかへば使はるゝもの、財ははたれば出るものと覺て、其元氣を耗衰せしめつれば、下其苦の忍び難く、ちと遲亂もあれば、花の散りなんとして、誘ふ嵐を待つ如く、千丈の堤蟻穴に崩る如何ばかりの事かあらんと思ひあなどりしも、思の外に事結びて、一國騷ともなり行くなり、さて左樣に成りては、只撫で安んじ、忠孝の道敎えんとても、彌賊徒のあなどりうくる如く、養生の道ばかり

にては、中中賊徒の退散思ひ寄らず、故に病に臨みての攻具は、亂を攘ふの日の干戈なり、人胎を託するは、資つて始るの氣なり、胎を出れば、鼻呼吸の天氣を通じ、口飯食の地質を容る、是を資つて繼ぐの氣といふ、その繼ぐものは、水穀鹽蔬、太平の良藥にして、病に臨みて藥石を用ゆる事は亂世の干戈なり、この故に、已に病を得るに臨みては、水穀鹽蔬の味、禮樂揖讓の和にては治め難き程に、その醫を招きて病を託する事壇を築て將を爲し、閫外の任を託するなり、醫將壇に上り、疾病の賊徒を退治するを以て、わが任とする時、種種の攻具あり、或は針灸、或は湯液、或は餌食、或は導引、或は浴熨、或は敷貼、或は順にして是を下し、或は逆にして是を吐し、或は表にしてこれを汗し、或は裏にしてこれを和し、この故に、醫は人の死生を託する築壇の將なれば、平生心をひそめ其道を硏究すべし、又人主など、醫を扶持し給はん

には、弄臣と同じく、嬉戯の俗となし給ひ、方書にても閲し、病人にても伺はしめ給はざるは、尊き御身、まさかの恙にかからせ給ふ時の御備となし難かるべし、千金の子は堂にほとりせずと云ふ事もあれば、富豪家などは、我死生存亡を託するの醫なれば、不幸にして其醫貧しく、稽古尋求の力も乏しからんには、惠みて其資料をも給し、其力にて少しく活人の手段を學び得ば鷄林より人參を求め、西洋より通天犀などあかのり、不時の用に備えんには、と比ぶべくにあらず勝れる事なるべし、さて醫の巧拙は病人の知る處にあらず、是ぞよき醫と命を託し、死生をあやまられんは、遺憾ながらも力なし、此故に病家も、恙を得て醫に託するは、戰場に臨めるが如し、一旦其醫に裏切せられては、いかで虛虛實實の難を免かれん、この故に、昔より、病を得て藥を用ひざるを中醫とはいへるなり、右の如く醫者は不時に裏切するものなれば甚だ恐しきものなり、さる程に、何卒成るべき程は、醫にかからぬ用心すべし、其かからぬ用心とは、只養生の事なり、養生は外衞氣の保護を敗らず、內營氣の運轉を害せざる事なり、衞氣は鼻の天門より氣を取て內を保護し、營氣は口の地戶より質を取て外を營養す、地戶より取るの質、即水穀鹽蔬なり、畢竟毒藥と分つ日は、水穀鹽蔬、人を養ふの良藥にして、湯液針灸、病を攻むるの毒藥なり、良藥なる故に、人の生を繼ぐ、毒物なるが故に、病を逐ふ、毒藥斯の如くなれども、病を釀す時は毒にして、病を治する時は藥なり、其毒藥の轉變は全く用ゆる者の宜不宜にあり故に毒と云ふものも、用ゆるに其宜敷に叶へば病を去る、水穀鹽蔬の人を養ふ良物たるも、其よろしきを失ふ時は、ならび起て害をなす、故に兵は凶器にして、凶器を用ゆるは、時の止む事を得ざるに出づ、古人君臣の間をたとへて、水能

浮レ舟ヲ水能覆スレ舟ヲと云り、君を有がたしと尊み奉るも、この民なり、君をうらめしと覆し奉るも、この民なり、民に相違なし、用ゆる人の巧拙なり、よく愼むべし、

元氣賫て此生を初め、營衞の氣、賫てこの生を繼ぐものなり、醫典には、營血衞氣と云へるを、ここには只營氣衞氣といへるは、子細ある事にて、此文には、事長き故略せり、夫營衞は上にして呼吸、下にして飲食を以て人の命を繼ぐものなれば、一日も缺ぐ事叶はぬものなり、さる程に、人先飮食に臨みては、是即人の性命を養ふが爲めの、天の賜と云ふ事を得て心得べし、故に食事は昔より、よき程を計りて、三度と定めたり、よき規矩あひなり、夜はもと物食ふ時にあらず、時節は大概己が家の定まれる頃に、遲からず早からざるがよし、其故は、腸胃に癖つくものなればなり、平生食事の量も揃ふがよし、されども、下地病ある人は、時として進み、時として進まぬものなり、それを無理に量を同じふせよと云ふにはあらず、食は十分に食ふべからず、口に飽くと思ふ頃は腹には過るものなり、美食は兎角過ぎ安く、麁食は兎角七八分にて止まるなり、人の食事に、食鏡食鑑など云ふ類ありて、禁好物を論ずる事なれども、是又あらましの規矩合ひなり、故いかんとなれば、糕はつかゆる物なれども、好める人には泥まず、小豆は下す物なれども食へば瀉の止む人あり、下戸酒に醉ふ時は、頭痛惡寒して、心神苦しみ、上戸酒に醉ふ時は、氣開け體溫まり、心欣欣然として樂しむ、是等に類へる事、數ふとも盡し難かるべし、水穀鹽蔬及菓肉の類に至りても、天の人を養なふ物にして、人人の好不好は其人人の好不好にして本草にも記されず、其他は民生に日日に用ひて、其害を見ず、其害を見ざれば、畢竟無徵の言なり、無徵の言なれども、金科玉條となし、食進まんとする病人に

も、堅く禁じ食念の終りたえ、枯死するに至らしむるは、古に滯り、書に泥めるより起る禍なり、しか云へばとて、病に臨で時宜の斟酌せず、病人の好むに任せよと云ふにはあらず、只活法に求むべし、只食鏡の表にて、無徴の言になづみ着き、それは寒なり、これは熱なり、無毒有毒と云ふ程に、其よろしきと云ふものは、又病人の忌む物、或はとかく有らぬ品などにて、時の求めにあい難し、さなきだに、飯は菜蔬肉味醯醤の力借りてこそ進むものなるを、物味氣なき折柄、其食進むべき羽翼を殺ぎ、彌食念に遠ざからしむ、愼のいたりを以て、不忠不孝を致す事、不運の至りなり、小兒など、餘りに大事に思ふ人は、食鏡の面に照して、天の賜を與へず、飯は量にかけ、湯漬燒鹽等の物與へ外は綿絮火氣に衞氣を損なひ、資て繼ぐべき後天の氣なく、枯疲骨立に至る事、悲しむべきの至なり、さなきは、又ひたすらに其可愛きに任せ、又は泣を止めんとて、常に甘き物を貯へて與る程に、腸胃に膏膩停滯して、熱を醸し、蟲を生じ、疲衰へ、手足力なく、目しゐ腹ふくれ、色色の病となる、すべて云へば、先皆疳なり、此故に疳といふ字は、甘きものの上に病と云ふ字を加えたり、小兒は生發の氣強き事、葦の芽の進むが如く、竹の子の延べるが如し、飲食大概は飽く程に與へ川狩などさせ、犬など追はせ、雨降る時は氣儘に雨の中にぬれ、跣に土など踏み、雪降らば、雪などまろばし竹馬かくれんぼ、あぶなからざる遊びは、營衞の氣の助けにして、追て士は弓馬、農夫の子供は鍬鎌筋骨柔弱の癖つかざる内に、其道に導びけば、たとへば物の苗生ひ延びざる内に移し植るが如し、此故に富貴奉養の守にては、夜風は毒、朝露は濕、水練はあぶなしとて、營衞のきたひをなさざる故、果して夜氣にも朝露にも犯されかねず、世に荒し子と云ふ者も、天地に賴みて別に造れる人にも

あらず、此理を好く考へて、只貧賤艱難、山野の人の子供育てん樣ならば、筋骨よくととのひ、氣血よくめぐり、胃氣健に、腠理密し、必ず其人健ならん、尙書に殷の高宗の事を述べて、時舊勞于外、爰曁小人、作其即位、不敢荒寧、嘉靖殷邦、肆高宗之享國五十有九年、とあり、古は天子の御子だに、かく外にて末末ともなひ、生育て給へり、さる程に下の辛苦艱難をよくしろしめし、且つ長壽をも保ち玉へり、是は好き花木なりとて、求め得て、あまり是を大事に思ひ、朝になで夕に顧みて、是を煦せんとする日を覆ひ、是を惠まんとする露を防ぎ折節水も冷なりとて、湯にわかし、其本にそそぐが如し、たとひかれずとも、麗はしき花は開き難し

氣は逸するをよしとす、身は仕るをよしとす、顏燭の言に、無事以當貴といへり、世の中は安くて過す道あるものなり、然るを我むつかしくふみなして行なやむが多きなり、例へばよき道あれど、是は遠しとて、己が才覺に見渡して行なんに、始めの程は行かふ路も、さまでは變る樣もなきに、そろそろ茅かや棘櫟のもの生ひ茂れども、最早今少しと見なし、岩かど踏み、蔦蔓攀ぢ、繼ぎ足して、もはや手もとどく程になりて、岩尾そびえ路絶え下千尋の谷に臨み激波雪を卷き、鳥ならで通ふべき路なし、還らんとすれば日暮れ雲鎖し、問ふべき人なく、風にただへて、ましら啼き、山彦こたへて、豺狼の餌ともなり、然なきうえつかれ、指を裂き足を傷け辛じて、又遙遙と元の道に歸りて、再度本道に、隨ひ行が如し、孔子、富貴若し求むべくんば、執鞭の士と云ふとも我これをせん、若しもとむべからずんば、我が好む處に從はんとのたまへり、富貴利達は、孟子の所謂求の益なきものなり、只人は富むも貴きも、貧きも、賤きも天より己相應の地を與へ給ふものなれば、天より己に賜ふ分なり、其分あれば其職あり、

君は四海を治め、臣僚はこれを助け、四民は其用を達するの職あり、この故に、子は子の分に居て、子の職を守るべし弟は弟の分に居て、其職を守るべし、猶人のみにはあらず、犬をかひ猫を畜ふも、其職を守らざれば、主人怒りて追放つものなり、人智惠謀慮ありと雖も、天には爭ひ勝つべからず、それに暗くして、人の有をも掠めて己が有となし、人の位を奪ひて己が位とせんなど、あらぬ心を生じ、後の苦の種子とはなし侍る、さる程に、只人の祈り求むべきは無事なり、無事を求め願ふと雖も、世の勢に連れられて、事なきことを得ざらんは力なし、

春は花、秋は月見て、只くらせ、
佛になるな、あたら此身を、

と云へる如く、唯世の中のことは、もとめある心にこそ、思ひ苦しめらるるものなれば、例ひ身天下を掌握しても、もとめあるよりたらざるなり、かく心のとぼしければ、富貴の人といひ難し、太閤秀吉、朝鮮征伐におもむかせ玉ふ時、行脚の僧、其行裝の夥敷を見て

太閤にけふはかりこそ劣りけれ
きのふは過る昨日は知られす

この時太閤や富める、此僧や富める、よくよく思ふべし、筑後安東省庵の言に、無求是至貴知足是至富、安心是至樂、この言誠に佩服すべし、各敎中自有樂田地」とは、是等の事なり、足れる事を知れば、自ら求むる事もなし、求むる事なければ、或は貪ぼり畏るる事なし、貪ぼり畏るる事もなければ、心はゆくに從つてやすかるべし、世の中の態なれば、勢につれられては火に入り水に溺るるも、天の命ずる處は、逡巡畏縮せんこそ、却つて心の安からざるなれ、是は忠臣義士、松の操を歳の寒きに顯はす事なれば、別段の事なり、其外は唯己だに安からん心にあれば、世に我を苦しむる者もあらじ無事を好み、世の中の六ヶ敷事を見ては、さけのが

れよと聞かんはよしなし、只安き世を、むつかしく住む程に、あたら富貴を拾はず、天より賜はる壽きをもしじめ、健なるべき身をも病がちに送れる、ふたつの岐分けてよと思ふものから、かく云ふなり、世の中の事は、例ひ富貴を有しても、思ふ儘にはならざるものなり、それを吾思ふ儘にせんと思ふより、身をうらみ人をとがめ、喜怒も常ならずなれるなり、さて己口あり體あれば、己が衣食を今求めん樣なし、其人に求めん樣なしとは、人の養をうくるは、心苦しきものなればなり、されば、狗も其家の食をはめば、其家の門を守る、古人の言に、衣ル二人之衣ヲ一者ハ、抱ク二人之憂ヲ一、食フ二人之食ヲ一者ハ、死ス二人之事ニ一といへり、人の衣食をうけて、これに報ずる心なき時は、狗に劣ると云はんも可なり、此故に我この言を誦して、毎度悚然として、恐るる故、我は何とぞ、我力に衣食せん事を心に込めて思ふなり、己が力に食まんとすれば、老幼我を頼み、窮人我を待ち、猶不虞のそなへも、入るものなれば、身物に懈りてはなし難し、朝はとく起き晝は各其業をとりて、筋骨をつかひ、氣血を循環させ、夜もしばらくは時を移すべし、さあれば寢心もよく、情慾も收まりて安く、かほどよき道には怠り、按摩法師に筋骨の調理を賴むは、前後したる了見なり、藥を呑むに發汗の劑などは、衾あつくうち覆ひむすといふともあれども、凡の藥は行藥とて、暫く歩行すれば、藥石めぐるといへり、積聚痞痛などいふ類は、別して行藥すべし、食後は猶身を動すべし、消化の力を助るなり、勞働する事あれば、腹早くへるにて知るべし、朝寢すれば朝飯もうまからず、長夜の飮とて、殷の紂王酒を好み終夜痛飮したるをば、限りなき惡事に數へたり、然るを今の人は通じて好む事になれり、紂も今の世に生れたりせば是等は罪の數には入まじ、

春夏秋冬の氣は、天地の正令にして、邪氣にあ

らず、我營衞の調護よければ、人を傷るものにあらず、例へば、國の禮刑あるが如し、已過つ事なければ、何となく其恩惠にこそ浴すれ、人を害する事なし、或は飢渴節を失し、或は衣服宜しきに適はず、甚寒大暑を犯す事あり、露臥晨行、雨を衝き雪をふむ、斯の如きは、自罪を犯して刑罰に觸るるが如し、自犯して其禍にあふは、自の罪ながら、人の世の中は、身さへ心に任せがたければ、是毒なりとしりても食ひ、是病なんと覺悟しても、其氣を犯さざる事を得ず、斯る時平生きたひ宜しからざるは、其氣に堪へず、邪氣と云ふものは春夏秋冬の令、風雨霜雪の外、天地の間一團の結毒ありて人を犯す、此氣其境に滿れば人皆其氣中にあり、絪縕の間、其感に應ずれば病む、應せざれば染まず其染むと染まざるとは鬼神不側の地にして、羸弱の質も恙なく、强壯の人も其氣に感ず、痘疹痲疹瘟疫の類みな是なり、又體より體に傳ふ

るは、疥瘡黴毒の類なり斯る類は、其絪縕の感應にて、病の輕重深淺分るる事なれば、其酷烈の氣にあへば、火事の樣なるものにて、平生營衞の調護なき時は、空宅に火かかれる如く、ふせぐ人なければ、消べき樣なし營衞調護よろしとても、酷烈の氣に應ずる時は新宅に火かかれる如し、養生好しとても强壯なりとても、遁れ難き處なり、されども平生養生よく、又禀受厚き人は少しく恢復の萌しを得れば、生氣勃勃として、成康一旅の師、一成の田、再度夏の天下を復するが如し、是一旦喪亂に逢ふと雖も夏の元氣强きが故なり、さる程に營衞調護して元氣を養ふ事肝要と雖も、酷烈の毒に身を失ふものを、皆調護を失せりと咎むべきものにはあらず、勞瘵の因、多くは父母に基づき、又黴蟲氣鬱になれるものあり、一旦其症の人にあへば、斲喪の致す處陰虛火動と咎むるも、病人の寃なるべし、疥瘡は肌膚の病なり、瘡危

險の症一時の快を取らんとて、頑童淫妓の爲に百年の命を過つ事、惜むべき事ならずや、古人云へる事あり、貧看天上月、失却掘中珠、飲食の用心は、平生淡泊なるがよし、平生淡泊ならん人は、時時厚味もよし卑賤にして勞する人は、筋肉固し、酒肉厚味にて得たる肉は、ふはふわとして堅實ならず、芋虫の樣になりて、立居歩行さへ心にまかせず、寒さ防ぐ爲にはなるやは知らず、暑さには堪へで、呉牛月に喘ぐの面影など、思ひ出らる、又積内にむすびて、氣血循環の道を塞げる人、ほや〱と肥たるあり、皆病なり、古人肥たるは瘦たるにしかず、白きは黒きにしかずなど云ふも、此あたりからの事なるべし、人により肥滿をうらやむ者もあれど、只衡にかかる時、重きを人の珍らしくもてなすより外、しだしたる事もなければ、うらやむべき事とも思はず、古人、晩食以當肉、安歩以當車、といへり、車馬の用は、身を安からしめん爲めなり、そろ〱歩めば、車に乘るに同じ、肉味を好むは、口に甘きが爲めなり、ちと晩く食ふ時は、うまく覺ゆる程に、肉食にあつべしとなり、好く足る事を知るの言なり、卑き諺に叔父を見て荷の重きを覺ゆといふ事あり、馬駕籠あると思ふ心より、歩むこと苦しく覺ゆるなり、其位なる人は馬も引かず、駕籠も從がへる事なれども、人事の苦しみをも思ひ遣る時、暫く下りて人馬の勞を休むるなり、其身も暫く歩む時は、四方の眺望も遥かに行止も心に任せ、若し語ろふ友もあれば、彼是と氣もくつろぎ、四體和して、筋骨の養を得るなり、食事も厚味は終になつみ出來る故に、身を折角勞し、麥飯糠味噌、さいは無くとも好からんなれど、口に適へる一種は、飯を進むる爲にもよかるべし、甘美の物は、病を釀し安し、生冷厚粘は消化し難し、腸胃に入りて消化し易きは、鬆脆のものなり、さて人事に接れば、茶出で、菓子出で、酒出で

肴出で、吸物出でするものなり、腸胃に飲食の相寄事たへず、是人事のつとめなれば、僧の持介する樣に隨意の振舞となり難かるべし、唯心に、食事は三度、酒肉をして食の氣に傾かしむべからずと云ふ定法を忘るべからず、金花の朱彥修、飲食の箴をつくりて、

睠彼味者、因縱口味、五味之過、疾病蜂起、病之生也其機甚微、饞涎所牽、忽而不思、病之成也、飲食俱廢、憂貽父母、醫禱百計、山野貧賤、淡薄是諳、動作不衰、此身亦安、均氣同體、我獨多病、悔悟一萌、塵開鏡淨とあり、富貴奉養の人の、肥肉柔脆に似ず、山野の人のきたひ難く、風寒暑濕に强く、たとひ、食事分に過ぎても障らず、朝より夕まで、筋骨を勞らしても、疲れざるは、天地別に體を與へたるにあらず、只きたひの異なる故なり、古來よりの食品、若し人に毒ならば、昔の人懲りて、食料には入置まじ、只毒といふ物は、只重過の二字と心得べし、酒の氣血を化し、水穀の生生を助るも、重酒過酒、色食過食に破らるれば、天の我生生を助くべき賜を倒用して、我戕賊する物となす事、豈天に恐れなからんや、

嗜味の人好んで、河豚を食ふ、この物往往人を殺す、其毒まれに發する故、おもんぱかりなき人、好んで、これを食ひ、其毒發するに臨みては、臍をかめども甲斐なし、昔しいづれの諸侯にてかありけん、河豚を好まれしに、大人の用ひ玉ふべきものにあらずと、屢屢諫めけれども承引なし、猶諫むる臣のあれば、河豚毒なし、其毒あるものは別種なり、それ試みよとて、其毒ありと云ふ河豚を、罪人に試みられしに罪人更らに恙なかりければ、其君始めてさとり、我毒を含めるは河豚中の別種なりと思へり、今其毒ありとする物に毒あらざれば、其毒はかるべからず、我是より絕んとてやめられしとぞ、其初の過ちはさる事なれども、後の果斷は、さすがに大名の果斷なり、浪花の中井履軒幽

人は我も久敷書信を通ずる人なり、其著せる所の敝箒の内祭食河豚死者文あり、ここにかゝげて爽口者の戒とし、履軒丁寧の意をひろむ。

履軒幽人、適野經于墓間、見石上併勒三人名、趺之狀類于魚、其腹漲然大矣、怪而問焉、墓人應之曰、歲之仲春、百濟巷人烹河豚而食焉、同食者三人皆死、染指而病、藥而免者二人、死者火于是丘、其里人憫之、且欲示戒於世之人、爲醵錢立名而表焉、趺之魚、河豚是也、履軒幽人、蹙然曰、咄、自取焉耳、既曰、善哉里人之擧也、去而反者再、遂俾僮擠憤之前、抽行硯記文、酹玄酒而醉之、告曰、

嗚呼食河豚死者之靈、肯聽吾言乎、蓋爾輩、固不識一丁字、實蠢愚、細民、適饕一杯之美、斯隕七尺之身、哀哉、由君子觀之、惡足措於齒牙間、今乃欲告之以理之言、不徒勞脣吻乎、雖然爾亦人也、受中於天地而生、向之迷亂、縱人之情也、其死也無情、復起于天性、庶幾乎可以告矣、借曰不識字亦既鬼而神靈、吾其以意誦焉、爾其以神聽焉、夫天之生物、豈苟然哉、山之膻兮、林之禽、沼池之鮮兮、江海之鱗、小之肉兮、大之食、以至乎羸介之屬兮、其麗不億、舍其不可食兮、可食之食、夫口腹之欲兮、亦可以足矣、胡輙以父母之遺體兮、嘗於馬肝之毒哉、爾之父兮、爾之母、其既先焉、何顏兮見於地下、幸而無恙、行見擠溝壑兮、殄于道塗、爾有妻乎、爲寡矣、爾有子乎、爲孤矣、其何爲也哉、匪爾口腹兮、一夕之歡不叔之故邪、世俗呼河豚爲鐵砲中之善也、又譬諸蟻赴火、愚之甚也、死者無歲不有、爾豈弗聞、蓋蔽於所嗜、不以爲偶然則以爲謡傳、今果偶然邪、將謡傳邪、凡世稱毒殺人者、必欲親試焉、縱令弗死、彼其心孝邪、不孝邪、噫爾瞑眩、狂痛號呼之際、必深悔焉、不特厭躬之愛、必親之思、吾執其必者、以爾之秉彝、吾欲世之人、以爾爲戒而不屆乎爾之悔、又恐其以爲偶然謡傳而弗恤也、故有取乎里人之爲、今而後、其或知所艾哉、

則歳若干人、免乎札瘥夭昏、是爾三人者爲世界、歳生斯若干人也、設以浮屠氏功徳立論、安知爾之死、不愈於生焉、爾其已矣、抑亦有所分其罪哉、市鄽之辟、防民之戾、擅粥火藥者有辟、必合其契擅粥毒石者有辟、必會其劑、獨粥河豚者、莫是敢規也、律條有之、曰、君子死于河豚者、絶是以君子畏之、不啻蛇蝎、小人不幸不知所怵、往相踵于覆轍、雖有挺及之罪、不均乎不敎而殺乎哉、嗟呼上之人矣、胡爲乎恝然弗之恤痛哉、悍無知小人不幸離斯孽、豈獨尤於小人之餐、夫我乃汗爾之事、而憫爾有悔心而弗及、又哀爾之不幸、憾乎政綱之不令、嗚呼自爾之死、誰其遇爾而揖者、其惟有爾之父、爾之母、爾之寡、爾之孤、攀墳飲聲而泣、嗚呼爾之靈、聽邪、弗聽邪、

此外山野の人菌の毒にあひ、往往死するものあり、或はかろうじて助るものあり、この毒に當らん人は、早く糞汁をそそぐべし、醫書に菌の毒あるものは夜光ありといへり、我求菩提山彦山に、日暮れ雨を冒して探しに草間耿耿として光るもの處處にあり、案内のものに問へば、毒菌といへり、よし光らずとも覺束なきは食ふべからず、嗜婆草又よく人を毒す、されど殺すに至らず、よく見知りて置くべし、

療治は病を治するなり、罪を犯すものありて刑を用ひ亂を起すものありて、兵を出すが如し、病無き日は、灸も藥も無用なり、病なくして藥を服する事、古人も仇なきに兵を動かすに譬へたり、兵もと凶器なり、仇あらば兵を起し、これを打ち鎭むべし、仇なきに仇の用心とて、無用の兵出さんには大に國家の害ならずや、藥は總て毒物なり、人に可なるものにあらず、故に療治は、兎角に津液に損あるものなり、されども、病除けば、氣血循環して、其損を補ふといふ程の事なり、如何となれば、外治に針灸あり、内治に汗吐下和あり、針灸は膚を僞る、傷かれて後毒さりていゆれども、肌に痕は殘るな

り、和劑は頗る穩なり、されども和して癒ざる病には汗吐下も用ひざる事を得ず、病津液の間に潜まりて居る時は、津液と病とを別ち病ばかりを汗吐下すべき術なし、故に汗吐下は津液を兼て逐ひ病の毒されば、人夭に資れる一團生活の氣再度復するなり、さる程に古き書には、藥といふべき處に、以二五毒一攻レ病ともあり、毒酒とあるべき所に藥酒をすすむるとも、毒藥の名通用せり、此義深く思ふべし、今の世は、醫師さへ其義にうとく、人參黃耆などいへば、漫りに無き元氣も出で死すべき命も活する樣に心得、動かざる病人と見れば、對症不對症の差別なく、金銀を費さしめ病家も、石膏大黃にて、殺したるをばとがむれども、人參にて殺せしをば、命に歸して咎めず、もし對症の藥ならば大黃石膏にて死したるも、人參にて死したると同じ、不對症の藥ならば、人參の害をなすも、大黃石膏に異なることはあらじ、予幼年の頃までは、人附子を恐るること、砒霜の如く、偶偶用ゆるとても、只人を害せんことを恐れしが、今は人參と同じ樣に心得、附子のあやまちは論せず、只藥は皆毒と云ふ事を知らざる故に、藥に敵身方出來て、斯る思ひの、人の方寸に城廓をなしたり、試に世の中のならはしは、味なるものなり、されどかたる人なければ、獨り思ひ侍るなり、夫れ人の命を養ふ品は、穀肉野菜と數へたる人もあれども、水穀鹽蔬を切なりと思ふべし、其故は肉菓は喰はざる人もあれども、水鹽は斷ち難し肉は人の肌肉を增すなれば、營養の助けをなすと見えたり、其性を撰み、營養の助となるものをば餌食すべし、菓類は生冷なるものなれば、食つて食氣は進むる事はあるべし、衞生のかたにはなくても事足るものなり、先胃の腑といふものの用は、飲食をうけて貯へ肝脾これを皷動して、其飲食の氣を轉じ、一身の氣液膏血となし、以て

よく活動し、其査滓は、腸中より肛門に送り、餘瀝は一身の雨露となり、膀胱を溝瀆として、營養用つきて、送られて小便となるなり、故に肝脾鼓動の時、蒸蒸淳淳として、雲の如く霧の如し膀胱に歸する時は、淋漓の雨地を潤ほし、草木にそそぎしあまり、溝壑に歸するが如し、此故に、胃は人身營養の本腑、物實せざれば飢ゆ、窒しければ死す、毒なるものあへば、營養の機關癈す、其輕きものは吐下してやむ、人は溫暖の氣にて立つものなり、療治の時は、格別なり養生の日には、木草の能毒も强く賴みにもならず、只過食重食過飲重飲を第一の禁とし、粘滯の物硬にして化し難きもの、生冷なるもの、多く用ゆべからず、自死のもの腐敗のものの食ふべからず、時ならざるもの遠慮すべし、菌には念を入るべし、馬を食つて、馬肝を食はず、未味を知らずとせずといへば、身の父母の道體なる事を知る者は、いかでか箸を河豚に下すべき、鳥魚の類は狩りすなどりする者より、錢を出し買ひて食ふべし、已口腹の爲に物の命を斷つ事は、不仁のしわざなり、物各の能あれば、一概にいふ可からざれども、先づ大概をいはば、五穀人の生をつくるものなり、菜蔬これを助くるものなり、水これを浸し火これを熟し辛き物鬱滯を開き苦き物、消化の氣を助け、酸きもの壓し、甘き物ゆるめ鹹きものかはかず、丹溪の辛辣香膩は火を動かすとて、老母に與へざりしは、已陽有餘陰不足の見立しより、此まとひを生じたり、すべて食事の法は、食の氣を主とし、藥に君臣佐使といふをたてたるが如く、其外の物は食の臣たり、佐使たらしめて、飯の氣にかたしめず、飯食重過だになき時は、養老の道に害なし、藥はもとより毒物なれば、病なき日には、益なきのみならず損あり、其上男は癖つく物にて、久しく用ゆれば、なるるものなり、今にても、奧蝦夷の人は、五穀は食はず、肉食を以て

主とす、日本の船、偶偶漂ひて其地に至り、米を出し飯を炊げば、彼ものども集り見て、疑怪の體を爲すとなり、されば煙草は毒草なり、世に廣りて久しき物にもあらず、其初めて是を吸ふに當りて、氣血錯亂し、胸塞り、目くるめき、大に苦むものなり、斯るものも、日數經て、腸胃に慣れば、何ともあらず、藥も朝夕吞ときは、腸胃に馴れて、まさかの時病を攻る道具を失ふ、只療治は、病に臨みての事にして、平生は、養生の道忘るべからず、世に時めかれてありし程は、多病なりしが、落ぶれて身健になれる人どもあるは、自然と養生の道に叶へる故なり、唯富貴奉養の人、身を貧賤寒苦の地に置き、筋骨を勞し、氣血を循環させは、上よく天にそふこそ、下己が長壽を保つべし

昔張毅といへる人は、人事のつとめ、出入のまもり、暑さ寒さの防まで、心を用ひしかども、內酒食にすさみ、熱を醸して死しけり單豹といひし人は、衞生のかたは厚かりしかども、外のまもりなかりしかば、山路過るとて虎に逢ひ食殺されしとなり、故に養生の道、內外兼ね廢すべからず、內養生の道を知りても、外のまもりに怠れば、天命の保ち難き事一なり、此方の心の及ぶ處ふせぎ、意外の變、又は道の爲に身をすつる時は、天命なれば、これに居て疑はざるべし、船は止む事を得ざる日の用なり、やむことを得べくば無用なり、君子、こみちせず、船せずといふも、このこころなり、矢瀬にや乘らん、瀬田にや行んとする時は、いつにても瀬田よし、やばせは難なく、瀬田の橋にて盜賊に逢ひ、災を得んは天命なり、瀬田をやめて、矢瀬にかかり、比叡おろしにあはんは、非命なり、人は少しく年もとり、父母の道知りて、配偶もありたし、是禮の男子は三十、女子は二十と云へるこれなり、子持る人の、可愛さの餘り、孔子も十九にして妻をめとり給へりと、心得、早く配偶

をもとめ、病をかもし、不壽の媒をなすもあり、馬は危ふし、擊劍は危ふしとて武夫の家に生れ、其道は怠らん樣はあらず、井ほりも木のぼりも屋根葺なんする人も、天地の間には、無くて叶はざる物なれども、危きを犯し、險をふみ、人と爭ひ好み、一旦の心よきに溺れ、身を失ふ事恐るべし、曾子終に臨み、門弟子を招き、手足まで、きずつきやぶるるかたはなきかと見せ、我この父母の道體を奉じ、此身を辱め、きずつけなん事を、深き淵に臨み、薄き氷を踏める如く思ひしに、今は早只しばらくの餘命なれば、斯る罪をも免かれんと、安堵せしぞよと語られし事、論語にも、人の子たらんものの手本にせよと、書記せしなり、わきて親たらん人の心苦しきは、子の短慮なり、短慮の破れは己のみにあらず、或は公の罪をも犯し、父母妻子從類まで、如何なる憂身に逢んも覺束なし、この故に子持んする人は、おほやけにそぶく事、いきみしかき過ちの大なることを、明け暮にいましめ、家門斷絕の防ぎを爲すべきなり、さて內外養生の事、稽康養生論を著して、其道つぶさに設けり、鍾會と云ひし人は時に勢ある人なりしが、稽康が高風を聞き、これを訪ひける、稽康は、鍛冶を好み、折から右の業にかかりて有けるが、元來豪逸なるおのこにて、鍾會にとりあはず、鍾會無興にして立ざらんとしける時、稽康何を聞てか來り、何を見てか去るといひければ、鍾會聞く處あつて來り、見る處あつて去ると、衣を拂つて去りしが、終に此事をふくみ、讒をかまへて殺したり、是養生の道を知りて、養生の行ひをなさず、單豹が災にあひしなり、世の人、由井の正雪を智謀ある者にて、頗る楠正成にも似たる樣にいひ沙汰する人もあり、大なる心得違ひなり、楠も遂には家族失ひけれども、是は國家の爲に身を殉へ、家の敎も正しければこそ、子孫家名を辱しめず、忠

烈義氣、秋霜烈日と其輝を爭ひき、正雪は愚人なり、斯る太平にして、四海一家、萬民業を樂むを、己纔に狡黠の智を以て、國家を亂さんと思ひ、蟷螂の臂に立車のむかひ難きを知らず、たとひ己れが謀圖に叶ひ、一ヶ所二ヶ所燒拂ひたればとて四方藩籬のかたきを如何がせん、それだに叶はず、己が一門從類のみか、他族にまで、禍をつらね、首を梟木の上にさらされ、後世に惡名を傳ふ、斯る愚なる者を、智ある樣に思ふは、その人の道ふみ迷ひならんかと、恐ろしくぞ覺え侍る、

忠節と云ふ字、禮記の內に出たり、今の人の飯食の道、客は主人の食をしゐ、酒をしいるを、主人の馳走とし、主人も、客の機嫌にかのふを主とし、客酒すすめ、あらぬさまに成れるを、馳走と思ひいろある女子ども集め、酒より色とも、推うつり、人に德損はせ、己も德損なひて、厚き志しなりと思ふ、若しさなき時は、賓主ともに無興なりと思ふなり、人に其德を損はしめ、人の氣血を破らせ、人に病を送り、相共に歎ぶは、如何なる事にやあやし、昔陳敬仲、齊の桓公を饗せしに、日も暮れ猶興のありければ、燭をともして、夜飲をなさんと有しを、臣日を卜して夜を卜せずとて、宴を徹せし事、美談として、今に傳る事なり、今日かやうの事あらば、君はをき、朋友なりとも、以の外の事なるべし、桓公など、さまで德には勝れたる程に稱せざれども、昔の人は斯くばかり德に厚くして、今の人のあるべき事とも思はず、さる程に、親に仕へ子をそだつるにも、只口腹の慾に、一重に從はずとも忠養の心得第一なるべし、我まれ人に飯食を强てすすめず、人をして德を損はしめ、病を釀さしめて歎とせん樣なし、

平生食をひかゆべしといふ事は、皆知れることなれども、食せざるも養生なりといふことは、くすしさへ大かたは知らぬなり、天竺にては、病

にあへば、數日食を斷ちて病を治する事をするなり、今の俗佛神に祈りて、斷食するは、其遺法とみえたり、唐の義淨三藏の南河寄歸傳考ふべし、其斷食して病を養ふ道は、未だ試ざれば知らず、今飮食傷等の如きは、飮食の爲に、消化の氣つかれたるなり、又若きともがらは、半は、飽食の爲に、胃氣運轉を生せるなり例へて云はば、人に限りなく骨折らせたらんには、篤と休ますするを、良法とするが如し、もと食事にもてあましたるより病る病なれば、飮食は進めず、病人胃氣復し、飮食を思ふを待ち、消化し易き物を少しづつすすめて、過食をいたさしめざるべし、食鬱と見て、胃氣復せざるに、猶飮食をすすむるは、賊の爲に援兵をやるにひとし、飮食傷を固として日を重ね月をかさぬる症を云にはあらず、養生の道は麁略にすべからず、又大事にし過すべからず、所謂中道を知るべきことなり、外邪など、熱津液を煎するに

當つては、大渴を發するなり、湯を好むもあれども、實熱は大方水を好むなり、大便など閉ぢ、小便赤澁ならんには、水を以て救はずんば、眉を燒くの急救ひ難し、たとひ汗せんと欲すとも、汗となすべき津液なからんには、何に資りてか汗を發せん、山野の人、ほしのままに水を呑み、一旦灑然して汗を得るは、守敏僧都、天下の藏を禁せしを、弘法大師天竺無熱池の藏を得て、雨を降らせしに等しからむ、貴人の病には前後左右に、守敏の徒充ち滿ちて、天下の藏を禁ずれば、終に淋雨を求むる道なし、いたましき事なり、されど其症に臨みて、取捨なしにみだりに水を用ゐよといふにはあらず、冷水胃に堪えず、大便滑瀉をいたし、又結胸の患なきにあらず、故に活法定法を以ていひ難し、水を好むに、わかしさましを、水より性やはらからなる樣に心得用ゆるは、わかしさましの性を知らざるの誤なり、香川秀庵の說に見えたり、

さもあるべく覺ゆ、香月子巻懷食鏡、河漏の條下に、東垣脾胃論、切禁濕麪、如食之覺快、則勿禁、と云ふを引て、是東垣の活法なりとほめたり、此活法、麪類に限らん様なし、病家はくわしの言を守るものなれば、醫師工夫の用ゆべき處なり、さいへば、飲食はすべて病人の食念にまかせよと云ふ様にききなすべし、左にはあらず、兎にも角にも、活手段なき人はさとすに道なし、

病は多く貴賤に通じて病める内に、勞瘵床を下らず、痝床に上らずといふ諺あり、故に痝は卑しきものの病とて、わらは病ともいつれど、貴人も通じて病る病なり、勞咳とは、病の症と因とにして、病名は瘵なり、瘵は貧賤の人には稀なれば、誠に床を下り難き病なり、貧賤の人は、世渡る道の難ければ、日夜孳孳として、脊負ひ擔ひ、朝とく起き、夕にをそく寐ね、東にいそぎ西に奔り、筋骨活動に助けある故に、沈滯鬱悶する事なければ、氣血循環流通して積脱肛痞悶など云ふ様の症稀にして癱中風なども、末末には數少く覺て侍る、かかる病は、皆肢體を勞せずして、運轉消化の氣停滯し、思惟謀慮の間に、杆格多くして、其氣勞し、淫慾に身を溺らして、發生の氣を澌喪し、終に天與の壽を保つ事能はず、總て病といふものは一旦胎に託しては、我生む所の子に遺す事もあるものなれば、愈愼しむべき事なり、勞瘵なども、始はしかる事より萠すと雖も、已に其病なれる上は、其毒、男授け女うくるの間にかくれて、災を子孫に遺すなり、

肉食家、よく氣血を增し、人に益ある様にいへども、一偏には心得べからず、病ありて氣血耗衰したる類に、其人によろしき品は餌食の道あり、病なき人には針灸湯液餌食すべて無用なり、肉を食ひて、小瘡など發するは氣血、毒を逐ふの徴といふも、さる事なれども、又その物

に毒を持てるにあり、はじ漆にまけたる類、氣血の毒を逐ふにもあらず、雉子の諸濕瘡を發するも、又然かなり、野猪の肉なども、濕毒ある人には、毒を助くる如く見ゆるなり、總て肉は滯り安き物なり、脫肛痔など、酒肉家には、尤病醸しやすし、無病の養生は、淡薄酒肉に勝れる事遠し、總て我口腹の爲に、物の生命を絕つ事は、仁者の忍び難き處なり、斯る處にも心をつけ、筋骨を勞し、氣血を循環させしむる人には病必ず少し、

女は百年の身を人にまかせ、おふさきるさに心つかふもの故、婦人には鬱悶痞積等多し、さて病の貧賤の人に少く、奉養の家に多きを知りて、其病の生ずるの故を考ふべし、衞生保養の道、いつとても怠るべきにはあらざれども、病をうくるに臨みては、先づつとむべき事あり、外感の人は、湯に浴し、水に入り、風にあたり、寒をつくの類、勞役斷喪の人は氣を勞し、心を結び、色に近づく類、逆上痫氣味の人は、愼恚忤逆の類、内損じて、飲食消化傳導の力なき人は、飮食の禁忌む愼むべし、其禁を守らずして、灸藥を用ゆるは、薪を添へて火を消すが如く、往往ゆるがせに思ひ、斷喪の人に、氣はらしとて色をすすめ、胃弱の人に甘脆肥膩をすすめ、酒をゆるし、手つけ難きに臨みて、急に其功を收めんとす、いはゆる六日の菖蒲なれば、これを醫人に咎むべからず、

癥瘡は、淫慾より生ずといふ人もあれど、つらつら見る處、多く傳染より起る、誠に人の病なれば、其身に醸しなすもあるべし、これ百中の一二ともいふべきか、只一朝一夕の歡に溺れ、百年の身を過つ事なかれ、我知りし人、德行堅固に有しが、曾て我に語りしは天下の人、皆癥を病める人と心得れば、身を過つ事なしといへり、確言なり、佩服すべし、

婦人の經水初めて斷え十日の内は血海きよ

くして、妊娠この間にあり、夫より漸く血海瘀を貯へて、妊娠する事能はずと、子玄子產論にいへり、げにや末の十日にも至りては、月信のまさにいたらんとする候なれば、必ず妊娠の憂はある間敷覺ゆ、

生兒は、生發の氣鋭ふして、體の溫なる事、大人の類にあらず、溫飽甘膩に過れば、生發の氣鬱屈して、濕熱内に釀し、百般の病となる、さては氣血まさに散せんとす、溫暖の氣も乏しく、消化の氣もおとろふ、其の甘膩酒關、ころもも暖にすべし、是老幼の別なり、

婦人の妊娠は病にあらず、老て髪白くなるも病にあらず、もし其間に病を得ずんば、みだりに灸藥用ゆるに及ばず、只氣血大脱の後なれば營養の氣いたつて乏ぼし、奉養の人は、產婦を椅子に座せしめ、其氣を延びしめず、其血を廻らさしめず、貧賤の人は、早く勞働につきて、氣血資る處なく、又婦人の態にて、早く盥漱梳飾を事とするにより、病をなす故に、產後病にあらずと雖も、氣血大脱といふ事を知るべきや、

老てころべば、中風起る、轉ばぬ樣にとかたへより、心を添るは、世の常なり、ころばざる樣にとは、轉びては身を過つ程に、愼むべきことはりなり、この病を見れば、手足不隨になる程に、踏む足杖つく手、叶はざれば、用心もやく立つまじ、兼ていへる重過飲食は恐るべし、重も過の類なり、飲食胃中に入るの用は、其飲食の氣を運轉消化して氣血となし、骨關を養ふの爲なり、其飲食の分、運轉消化の量に過ぐれば、其氣鬱滯困悴して氣血骨關を營養する事能はず、軍中野心の者、夜嚴の怠りを見て急に起りたるが如し、只食鬱のみにて起らんにもあらざれども、野心のものの切て出づべき隙をあたへたる程の事あるべし、世を閱するに、飲食後の卒倒は多きなり、香月牛山、河漏の條に、腥

胃虛弱の人及有微恙人少食則無害今人食濕麪不滿腹不止故往往中傷とあり、重過の失は、胃氣廻らざるにあらはる、中風は蕎麥切のみにあらず、飽食は、いとど運轉を妨ぐる程に、用心あるべし、世にかかる事はつつしまずして、徵もなき煎藥に、川魚灸に、人神、血忌、瘟瘽日など、堅く心得、機會を失する事多し、頓死頓病處きらはずと、俗にもいふ如く、其折柄卒病起らんも圖り難ければ、合點したる醫者も、後難のおもんぱかりに、貴人には遠慮もすれども、これは醫者の身の爲の事にして、病人の身の爲にはあらず、高貴の人は、此果決あらば、くすしにはよく其意をさとし、醫師を咎めざるべし、我手野といへる村にて、十四年來の舌疽を三年程に、廿七萬程灸して治したり、この男來り語りける、我三年灸せざる日なし、人神血忌の徵なきを、明に知るといへり、是自ら試みて知るものなり、此人姓は淸成、名は和右衛門、今壯健なり、とふて正すべし、

佛典に顚倒といふ事を設けり、其顚倒といふ事は苦しむべき事を顚倒して樂しみ、悲しむべき事を、顚倒して喜び、善き事を顚倒して惡しと思ふ樣のことなり、養生家深くこれを思惟して顚倒の念をなすべからず、假令ば、婦人の人に嫁し、長く其家にあらんと思はば、夫に異心なく、舅姑によく仕へ中饋のことに怠らざらんと思はず、牆を越て他の花鳥を追が如し、身の健ならん事を願ひて、酒肉を縱にし、徵瘡の傳染を恐れて、頑童淫妓を近づけ、身の榮利を思ふて、公罪を犯し家の富ん事を求めて、貨財を費し君子と人の稱せん事を思ひて、陰に惡をなす、猶あとしざりして、前なる人に追つかんことを願ふが如し、朝夕、只この顚倒の事をなし、歎さり、かなしひ來り、たのしみ盡き、患いたれば有まじき事の有る樣に驚き騷ぎ、天をうらみ人を咎め、水の內より火の出たる

様に、悔ひ歎けども、汝より出たるものの、汝に返ることはりにして、もと天道の常なり、世の人もしこのさかさまの思ひをやめば、まさきのかつら長きよの、盡きぬ樂に心を安んじ、蓬が島も遠からず、天與の壽きを保ち天與の幸をうけ、己々が分に從ひて、其樂を極むべし、

荒卷氏者。杵築藩之豪家。雖下以二乾沒一爲上レ業。世以二長者一稱。如何天奪二其福一。闔族短壽。仰彼蒼天。使二人憫一焉。今玆安永戊戌夏六月。晉遊二城中一。山田俊藏。携二其孤一見レ晉。晉察二其像貌一。肖二其大人一。雖下晉未上レ有二深交一于二此家一。與二此孤已四世一。俱有二一面之識一。與二山田子一語二其故一。愴然。由二所レ觸而感一。著二此篇一以貽。豈謂二其言當一哉。唯思二共煮芹之美一焉。

孖山　三浦晉　謹記

人惟貴二受用一。苟不二受用一。雖二聖賢之語一。何益二于人一。若或受用。瑣瑣小言。上二人於壽域一。

三浦晉　重記

養生訓終

塾制

三浦晋

學頭

塾中は各その制を守り久しく睦じく金蘭の交り身を沒る迄たえずあらまほしき事なり群居は不善におよびやすきものなり學頭は入門之先輩事に熟する人たるべし吾耳目の及ぶところ遠からねば諸兄弟の言行中人の規正たるべし塾制違はずつとめて日日に新にしあはれんで敬ひ正してかたよらず月盡に其成功を告べし闕る日は其次の人を以て補ふべし

補正

學頭耳目のおよばざる處あるべし學頭蹉跌あるべし是をたすくる人なくんば塾中治るべからず學頭と異同出入して靜謐をはかるべししからずんば功罪學頭にひとしかるべし闕るにあはば是よりゑらみて補ふべし

威儀監

安永二年迄は監事一人なり四月七日よりわかつて兩かんとなすいぎかんのしよくは威儀にあづかる事をしるなり柝一對これをいぎ柝とす常に身に佩べしいぎみだれん事あらんにはいつたりともうちて衆を警むべし衆の出入威儀監これを引一歩趨一起座一出入一講師一喧噪是を大綱とす餘は時に臨んで宜しきをはかるべし

門監

婦女商人門内に入べからず門はほしみゆるを以て閉ぢ夜陰の出入板を擊夜陰は人の出入を禁ずひるといへども門外に出なんは皆この監の知るべき事なりこれはいぎかんの兼務する所なり本邦古より佛道を尊む事諸國の類にあらず國家起て已後是を寺社監に隸して其勢漸くそぐといへども天朝の典禮

ふるきによれば其俗猶古のごとしこれを以故に緇流桂錫の徒これを上座とす緇流もと東西南北の人規矩自其祖法あり已に察別に構へぬればその徒相ともに警べし

學正

先進後進となく學にすすめる人吾にかはりて問をかくべし後進己より勝らば謹んでこれを讓るべし

監事兩人

兩務監は日日の闕事を監しかつ役をとるべし諸兄弟日輪相つとむべし其監務は別紙にしるし渡し侍る通の瑣事なり前の監事怠あらば連日たりとも後の監事うけつぐべからず但十三未滿の小兒このつとめにあづからざるべししかし學頭この役を除く輔正その羊をのぞく

給仕番

賓いたるの日烟酒茶等の役この人にあり尤四書未その兒此つとめに服すべし闕る日にあはば其他より補ふべし

僕

薪水の役鄙事すべて此者にありつとめて諸兄弟をうやまひ趨走の事に怠るべからず次闕るにあはば諸兄弟相ともにつとむべししかし學正此役をのぞく

諸兄弟半は富貴幸養の子弟なり家に在て奴僕を使令し奴僕の苦辛をしらずと道を學ばん事必文學のみにしもあらず鄙賤の辛苦をしるも其一事なりしかれば塾中の諸生貴となく賤となく茅屋の鄙事敢て筋骨の勞をかる

位次

晉は孖山之農夫なり負擔して繇役をとるわが分なりしかるを幸に先人の餘貲を以て傭作をかりて負擔之役をみずからせざることを得たるものは先人の賜なりしかれば我肩

をならぶべきものは工商なり我後につくべき者は俳優賣婬乞児屠人にきすもとより位次のあらそふべき望もなししかるを蝙蝠の質を以て誤て島の名をぬすむ似べくもあらぬ一日の長を二三兄弟に推さるもとより人を教ふべき學をつまねにて嚴然として諸兄弟之上にたたんも面羞氣なりしかれども妄に一日の長を推され待れば辭する事を得ず塾中の主人たり長を我に推すは諸賢の恭なり教授の德なきは我自しる處也さるを以て門内の位次はしばらく貴介の人を凌ぐ事をゆるさるべし門を出れば一田夫なり貴賤の公あり晉豈犯すべけんや塾中又士庶の二等をわかつ士の子弟父兄の階級より齒德相はからふべし庶人の子弟は氏族の次第も有べけれども塾中の議すべき事にあらず等位に階級なければ入門の先後にしたがふ是晉が門内の制なり其郷黨にありて氏族年齒職業に從ひ謙遜の風をうしなはず先だつべき人に先達べからず然れば外其宜をうしなはず其次第を失はざるべしこの故に塾中の位次は讓るに及ばず各その位に有べししかれども後進等位を出たらん人あらば是より位次を定むべし

去就

晉が竊名の爲に來る人も品多かるべし薦りかたらはんとする人も有べし來りかたらふ人は我客なり禮賓主にあり位し學ぶ人は師弟たらざる事を得ず物をむさぼるとにはあらねども贄をもつて來り學ぶの一語なきは我賓なり塾生の爲には尊客なり禮一等をあつふすべし講習討論の間におゐては意を隔つべからず又かたちつき心つかざるあるべし心つきかたちつかざるあるべし鐘鼓うつに隨つて響應す人をとがむべきにあらずよろこぶべきにあらず又つく日はしたがひ去

日はすつる人も有べしさきに入門の約あるを以て其人を責んはうるさし或は朋友を以て接し或は賓主を以て接す來る者ほだすべからず去者追べからず是晋が役なり諸兄の交も亦しかるべしたとひ離群索居すとも心だに同じからば相ともに規諫磨礪すべし忠につけよく道びけども志他にあらばしばしばして疏せらるべからずかくいふものは交をたち路人の看をなすべきことにはあらず唯約を心にとめざれば人にとがむべきの罪もなく吾にうらむべきの事もなし且人各業とするところあり志すところあり漁者は谷にはしり獵者は山にはしる事なればその志をつけさすかたの師をもとむべし諸賢の志にしたがふべし

杖

つらつらいきとしいけるものをみるに親子之恩愛雌雄の感想生を惜み死を恐るるより善怒哀樂にいたる迄人に具はるものは彼にそなふしかるに物を羞る心ばかりを人より外になしと思はれ侍るしかれば人の禽獸にことなるものは耻を知るより大なるはなし晋不肖の身を以て人の掌上之珠をあづかる事恐れて餘りある事なりされば畜生は言を以てつかふべからず鞭策を恐れ苦痛の爲に人の使令をうく諸賢堂堂たる五尺の身即父母之遺體なり耳有て聞智有て辨ず晋が口より出るものは諸賢の胸臆にいるものなりなんぞ牛馬のごとく鞭策を以て御すべけん晋がむかしより杖を用ひざるは牛馬にあたることをしれば也されどひとつの杖をば設け侍る園三分に盈たす事非法を禁ずるにあり人の肌膚をそこなはんとにあらず唯人羞べきことをしる侍る事事におさおさ敷かるべしましてや人之藏中をうかがひ或者牆をこえ穴隙をきり或は人を貨財にたぶらかし或

は飲酒博杖の類においてをや千一藏をうかがひ牆をこゆるの類あらばしれる處の人人責善の日杖を几上に置席の中に置くべし不言の責なり猶已ざるに於ては吾處する處あるべしさるによりてわが杖は羞惡の心をうしない侍る人に用ひ侍れば吾をして身を終る迄此杖をとらしむべからざらんこそあらまほしけれ諸賢あなかしこ羞惡の心をうしない給ふべからず

責善　毎旬一五會讀　吟詩在此日

各その地教授の師なきにあらずさるを膝下の養にたがひ各ことに遊ぶ事抑何の故ぞや磨勵の力をくはへて汝を玉にせんとなり螢雪の功怠るべからず群居して言義に及有ざるは聖人のいましめにして善を責るは朋友の道なり一五にしも限る事にあらざれども人情の私にひかれんことを恐れて一五を責善之日とは定め侍る夫人を教るものは身を以て表とす人とつて規矩とす吾無似にて其任にあたらず塾中幸に一君子有われと諸賢とこれを模範となすべし蓋塾生十數輩の間愛にあつき人有義にいさむ人有苦節勉勵の人あり施惠和順の人あり各一長なきはなし是を集めて一成德の君子あり其長を見ては我其人にこれを學ぶ是吾が學の設也ともに我と諸賢と同じく此師に學ぶもの也古語に後れたるに鞭うつといふ事ありこれぞ人に長ずる處あり短かき處あり短かきは我後れたる也道にすすむはここに鞭うつにあるべし學文は修身の具也さるをすこし書籍を見侍れば子細らしく人にとき聞せ我こそしりつれとおもふ顏色にてほこるがうるさく淺ましくみえ侍れそれのみか人に惡まれあざけられ終には禍をかふ媒とは成侍る同列の人にあらずんば必文學の話に及ぶべからず

洒掃

洒掃は每朝の役たりといへども每月望前月盡の兩日內外掃除し事了りて手洗ひ髮ゆひ朔望の儀をたゞすべし

禁

一、竊盜

一、婬慾

霜を履んで堅氷いたるといへればはじめ小なりといへども終に醜名四方にきいふ此故に路に導ひて手をとるに始りて鄉を離れ死を同じふするにいたる竊盜は更なり婬慾ふかく相たゞすべし不言の責行れず事吾耳にもれ侍らば十四已上一同に塾中逗留の事辭し侍るべしさりながら此時ありあわざる人はあづからざるべし男色の戒同じき事に候まして黴瘡傳染の恐れも侍れば同床にふし候事有まじき事也

一、博

棊將戲志うみ體つかるゝ時鬪を開くにまかすべし其他かたく禁ずべし

一、欺詐

ふかく相たゞすべし屢やまざるに於ては列次一等を下すべし

一、口論并毆擊

この事は平生別に諸賢にたのみ置き侍る事なれば違犯に及ばん日は雙方二日塾外に出す香をたき非をなす故を思惟し行末をつゝしむ基となすべし唯四度計なく荒び侍らんは讀書懈怠の例に準ずべしもし又異議あり事忍びがたきにいたらば學中相議し吾に告べし是より相正すべししからずんば事たとひことはりに出るとも罰遁れがたかるべし

一、讀書懈怠

日課に怠り侍らんは監事より線香二炷をすゝめて讀書せしむべし尤日課相了

り候ば其外たるべし其他の小過すべて
これに準ずべし
一、亂位次
罰同じかるべし
一、敷蒲團
寒の地たりといへども用ふべからず病
ある時は制の限にあらず
一、飲酒并煙
此方しり候外用ふべからず煙はかねて
吸來りし人は其まゝに侍らん時を極め
打より吸べし不行儀に吸事はかたくい
ましむべし塾中にて吸ならひ侍らんは
無用なりもし此制をやぶり侍らば衆中
各鳥目一百銅を出し罪をあがなふべし
罰錢は吾得て饑渴の者にあたふべし
一、飲食不法
三度の外食事かたく制すべし菓子等尾
籠にとるべからず菜蔬は拂底に侍れば
調膳のかたより相出し候外ほしゐまゝ
にすべからず幾久しく用ふべき也
一、履屐亂著
罰錢一銅を出しかさねて他人亂著の間
履屐のことを監すべし他人亂著の日つ
つしんで亂著の履屐を改め役を其人に
ゆづるべし
一、調度不次
烟盆烟管碁局碁子巾櫛等一切調度旬輪
に相しらぶべし讀書未了の人の役なる
べし
一、愼火
竈下烟斗火鉢すべて互に相いましむべ
し
一、看病
互に介抱飲食起臥して心を用ふべし病
人種種の制禁沙汰にわたるべからず其
外種種の節目互によろしきに隨ふべき

もの也

明和三年丙戌正月二十日　　三浦晉識

同四年丁亥追加の一件霜月十一日已後

一、もし夜陰に忍び出侍らん人あらんには有合候はん面面罰錢百二十銅これと心をあはせ候はん人二百銅時之監事二百銅但監事の二百銅はその內八十銅平人よりつぐなひをとり候べし若し一同にこなたへひそかに訴へ侍らん上はその沙汰に及ばじその上はこれより時宜にしたがひはからひ侍らんかし

一、安永三年甲午五月より定め候塾中逗留の人銀錢年行事へ相わたし一錢も其身たづさへ申間敷事

梅園讀法目次

梅園讀法

豐　二子山　三浦晋　安貞　著

大意

人ノ動イテ外ニ見ハルル者言行ノ二ツ也言フモノハ言辭トナリ行フ者ハ事業トナルコレヲ言テ言辭ニ見ハシコレヲ行テ事業ニ見ハス者豈他アランヤ使令異ルヲ以テ其技異ル事カクノ如シ技異リトイヘドモ其主他ナシ故ニ體ノ用悉コレヲ言語ニ上スベク聲ノ用コトゴトクコレヲ事業ニ施スベシ聲ハ發スルニ從テ滅ス滅スレバ尋ヌ可ラズ然シテ技ヨクコレヲ駐ムコレヲ文字トス文字ハ聲ノ體ナリ聲音ハ口ニ發シテ耳ニ入ル文字ハ手ニ發シテ目ニ入ル意匠ノ巧ナリ大ナル哉文字ノ道、天地萬物ノ體、鬼神造化ノ用、盡コレヲ集メテ序デシム我天地ノ一大造用ナリ蓋混焉タル一地球海水環匝シテ地其中ニ居ル

大ナル者ヲ洲ト云小ナル者ヲ島ト云區域相畫スル者コレヲ國ト云蓋各域相隔レバ法度各別ニ言語遞ニ異リ言語殊ル者ハ其條理同ジカラズ是意匠技巧ノ異ナリ然シテ其殊ナル者ヲ合スレバ事實他ナラザル者ハ言行ノ道コレヲ思辨ニ歸シテ亦他ナケレバナリ已ニ意匠技巧ノ異ルヲ以テ書體讀法亦同ジカラズ今天下昇平萬國往來シテ狄鞮象胥通ゼザル所ナシ合セテコレヲ思フニ書體讀法大端二ツニ出ズ其二ツトハ書法ハ横寫ト竪寫ト也言法ハ韻ト音ト也韻ヲ以テスル者ハ一韻獨成テ義其中ニ具ス支那ノ語コレナリ音ヲ以テスル者ハ數音合成シテ義其間ニナル萬國ノ語皆然リ萬國皆然リトイヘドモ其體ハ則各各異リ他邦ハ姑ク天竺ト日本トノ如キ土壤遙ニ隔タリ言語殊異ナリトイヘドモ數音合成シテ義其間ニ具スルニ於テハ一也數音合成ナリトイヘドモ意匠技巧ノ別ヲ以テ合成同ジカラズ日本モト字ナシ上古ノ事皆口傳ニ出ヅ國史ニ出タルヨリスレバ應神ノ朝阿直岐王仁ヲススメ聖經ヲ菟道稚郎子ニ傳ヘ奉リテヨリ和人ニシテ漢典ヲ讀コトヲ得タリ漢字和人本來ノ面目ニアラズ故ニコレヲ讀ム事多方ニシテ纔ニ其志ニ通ズルコトヲ得タリ漢典ヲ玩ブ事漸ク久シク今ハ和語本來ノ面目ヲ幷セテ失ヒシカバ駕洛ニモアラズ野馬堆ニモアラズ終ニ筑浦ノ海ニ漂ベリ故ニヨク書ヲ讀ム者和漢語脉ノ條理ヲ分別シテヨク運法ノ異ヲ審ニシ獨成合成ノ離合ヲ辨ジ音ニ古今漢呉アルヲ知リ然シテ後和語以テ漢典ヲ讀ムベシ漢語ハ音韻ヲ以テ立チ韻音ニ依テ居ル音ア喉カ牙サ齒タ舌ナ舌ノ濁ハ脣ノ濁ヤ喉ノ濁ラ半舌ワ喉ニ出デズ然シテ聲ニ平上去入ノ四等アリ蓋言語ノ道主アツテ聲アリ主ハ其實ナリ聲ハソノ名ナリ主ヨクソノ用ヲナス故ニ聲主

ニ體スル者アリ主ヲ運スル者アリコヲ以テ字モ亦主ニ體スルト主ヲ運スルトアリ運法一ナラズ主客ニヨツテ上下スル者アリ字ヲカツテ運スル者アリ夫和語ハ合成シテ義ヲ具スル者ナリ故ニ音一一義ヲ具スルニアラズタトヘバアト云メト云ツト云チト云キト云未義ヲ具セズアメニ合スレバ天(アメ)キニ合スレバ秋(アキ)ツチニ合スレバ地(ツチ)キニ合スレバ月(ツキ)合成シテ義其間ニ具ス故ニ無意自然ノ音合シテ義其間ニナル支那ノ言ノ如ク韻ヲ以テ立者ハ合成ノ變化ナシ音韻本一故ニ音ヲ用ル者モ韻ヲ廢スル事能ハズ韻ヲ用ル者モ音ヲ廢スル事能ハズ故ニ支那ノ韻語音ト混成シテ平上去入相守リ脣舌牙齒喉呼法最子細ナリ合成ヲ用ル者ハ各音錯綜シテ四聲ヲ事トスル所ナシ漢語運法句頭ニアルニ反シテ運法專句尾ニアリ圓覺經不二(ニ)隨順(ス)トハ隨順(ス)不二(ニ)ト書ベキヲ梵語ヲ未譯シ盡サザル故トアレバ合成句尾ニ接スルノ意隱然トシテ知ルベシ然シテ合成ノ道平上去入用ル所ナケレバ長短高低意ニ從フ運用字尾ニアレバ體ヲ先ンジテ用ヲ後ニス故ニ韻轉換シ音相通ヲ以テ變ズ故悉曇(シッタン)字記ヲ考フルニアイウヱオハ本天竺ノ韻法ニテ各長短ノ兩韻ヲ分テリ然レバ我邦ニ用ル所ノ五音五位モト印度ヨリ來レル者ナレドモ口ヨリ出ル所ノ聲此條理ノ外ニ出ザレバ悉曇未至ラザル已前ノ語コレヲ五音五位ニ求メテ得ザル所ナキ者ハ自然ノ道理ナリ悉曇家ハ音未合成セザルノ前ニ於テ箇箇種種ノ義ヲ說ク阿ト云吽ト云ガ如キコレナリコレモ亦意匠ノ巧ノミ然レドモ其國ニ就テ其語ヲナス又自然ノ條理ヲ具ル事アリ和語ノ如キモ仔細ニ看來レバ力ハ日ノ用ヲナス日火ト同體ナリ故ニ日滿(カミ)上髮神日暮(カクル)隱藏火升(カホル)烝力ノ字ノ用皆上ニヲルノ意アリシノ字水ノ用ヲナメシメル、シヅク、シ

グル、シダル、ナド下ニ垂ルルノ意アリ外國ノ語ラリルレロ語ヲ發シテ和語ハラリルレロヲ以テ發スル者一モナシ然シテ母トナル者アリ子トナル者アリ轉傳假借相通上中下略等ノ方アリ支那ノ語ノ如キハ音發スレバ則義自具ス四聲三十六母一百有七韻四千二百七十九音四萬有餘ノ文字以テ言語ノ變ヲ盡ス合成ヲ用ルノ國ハ音ノ外義ヲ具スルノ字ヲ用ヒズ故ニ字數多キヲ用ヒズ音ニ從テ義ヲナス者ハ字多カラザルコトヲ得ズ字已ニ多ケレバ聲母音韻開口合口卷舌咬牙細齒齊齒ナド六カシキ呼法ナキ事能ハズ故ニ支那音ハ二合音アッテ和音ト不類ナリ蓋字ハ聲ノ譜ナリ言ノ舍ナリ字ヲタタヒテ聲ヲ得聲四等ヲ分ッテ音韻其間ニナル音ハ首ナリ韻ハ尾ナリ音三十六韻一百七其音韻ノ成ル者其聲或ハ平カニ或ハ側ッ側ッニ上ルト去ルト入ルトアリ故ニ文字ヲシラブル事韻學ニアラザレバ盲人ノ五色ヲ辨ズルガ如シ

漢音呉音

本邦韻學ヲ講ズル者意ニ滿ル者ナシ獨近來京師了蓮寺無相上人著スル所ノ書ヲ見ルニ大ニ音韻ノ肯綮ヲ得論ズル所證據精確大ニ人意ニ滿ツ其著スル所ノ三音正譌ヲ見ルニ其意ニ曰呉音コレ本邦讀書ノ舊音即今佛氏用ル所ノ音ニシテ應神ノ朝百濟ノ王仁菟道稚郎子ニ教シ者也此時別音ナシ故ニ古書皆呉音也故ニコレヲ日本音トモ云漢音ハ今儒家傳ル所ノ音コレ也其始　桓武ノ朝ニ草創ス日本後紀ニ云延暦十一年十一月辛丑、勅、明經之徒、不可習呉音、發聲誦讀、既致訛謬、熟習漢音、延暦十七年格、令讀漢書、勿用呉音、ト此說尤明白也吾コレニ從フ和漢共ニ漢呉古今アリ和漢共ニ謬訛アリ先漢呉ノ別ヲ知テ古今謬訛論ズベシ韻譜多シトイヘドモ唐音ノ正ヲ得ル者韻鏡ヨリ善キハナシ然シテ韻ハ梁ノ

沈約ノ定ル所ニヨル今韻書人ノ朝暮ニ用ユル者僧虎關ノ撰メル聚分韻略ナリ俗コレヲ三重韻ト云ヿ本ノ音ハ唐音ヲ主トスル故ニ宋明ノ音ハ合ズ故ニ字彙ナドソノ儘用ヒ難シ三重韻ハ本廣韻禮部韻ニヨルニ由テ最正シ今三重韻ノ韻ノ次第人ノ諳ジヨム所甚胡亂ナリ齊青眞侵和音分チ難キニアヘバ訓ヲ以テシテヒトシアヲシヲカスナド謂テヨミ分テリ上肴下豪同例ト見エタリ誠ニ和音ヲ以テ漢字ヲ讀ム音混ズル者アレバ清濁ヲ以テコレヲ分ツ事アリ襄息亮反、論昭ト混ズルヲ以テヨンデ讓ノ如シ情疾盈切、性ト混ズルヲ以テ專吳音ヲ用ユ艮坤ノ爲ニ濁リ鹹甘ノ爲ニ濁ル宋ニ仁宗神宗アリ五山ニ仁義仁宗神神宗ト云類也シカレバ諳ニイフ時ハ訓ヲ用ユルモヨカルベシ順ニヨミ下スニハ然ルベカラズ例ヲ以テイハンニ一東二冬和音相混ズサレドモ一訓一音トモ分タズ上下ノ字モ

用ヒズ諳ニ稱スル時一二ノ次第ヲカル事アリ故ニ今漢吳ヲ分別シ訓ヲサリ童蒙ノ爲ニ指南ス

吳音

平	上	去	入
東	董	送	屋
冬鍾	腫	宋用	沃燭
江	講	絳	覺
支脂之	紙旨止	寘至志	
微	尾	未	
魚	語	御	
虞模	麌姥	遇暮	
齊	薺	霽	
佳皆	蟹駭	泰	
灰咍	賄海	卦怪夬	
		隊廢	
眞諄臻	軫準	震稕	質術櫛
文欣	吻隱	問焮	物迄

平	上	去	入
元魂痕	阮混很	願恩恨	月沒
寒桓	旱緩	翰換	曷末
刪山	潸產	諫襉	黠鎋
先仙	銑獮	霰線	屑薛
蕭宵	篠小	嘯笑	
肴	巧	效	
豪	晧	號	
歌戈	哿果	箇過	
痲	馬	禡	
陽唐	養蕩	漾宕	藥鐸
庚耕清	梗耿靜	敬諍勁	陌麥昔
青	迴	徑	錫
蒸登	拯等	證嶝	職德
尤侯幽	有厚黝	宥候幼	
侵	寑	沁	緝
覃談	感敢	勘闞	合盍
鹽添	琰忝儼	豔㮇釅	葉帖業
咸銜	豏檻范	陷鑑梵	洽狎
嚴凡			乏

漢音

平	上	去	入
東	董	送	屋
冬鍾	腫	宋用	沃燭
江	講	絳	覺
支脂之	紙旨止	寘至志	
微	尾	未	
魚	語	御	
虞模	麌姥	遇暮	
齊	薺	霽	
佳皆	蟹駭	泰	
灰咍	賄海	卦怪夬	
		隊廢	
眞諄臻	軫準	震稕	質術櫛
文欣	吻隱	問焮	物迄
元魂痕	阮混很	願恩恨	月沒
寒桓	旱緩	翰換	曷末

平	上	去	入
刪山	潸産	諫襉	黠鎋
先仙	銑獮	霰線	屑薛
蕭宵	篠小	嘯笑	
肴	巧	効	
豪	晧	號	
歌戈	哿果	箇過	
麻	馬	禡	
陽唐	養蕩	漾宕	藥鐸
庚耕清	梗耿靜	敬諍勁	陌麥昔
青	迥	徑	錫
蒸登	拯等	證嶝	職德
尤侯幽	有厚黝	宥候幼	
侵	寑	沁	緝
覃談	感敢	勘闞	合盍
鹽添	琰忝儼	豔㮇釅	葉帖業
咸銜	豏檻范	陷鑑梵	洽狎
嚴凡			乏

右平韻三十一部細ニ分テバ五十七

上韻三十部細ニ分テバ五十五
去韻三十一部細ニ分テバ五十八
入韻十八部細ニ分テバ三十四
總計一百一十部細ニ分テバ二百有四韻

右一百十韻韻鏡ニハ一百七韻ト定メタリ其故ハ嚴凡ハ平字バカリ也故ニ儼上釅去ノ平ニ入レテ鹽韻ニ合シ凡ハ范上梵去ノ平ニ入レテ咸ニ合スコヽニ於テ乏范梵ノ入聲ニ歸ス隊灰平ノ去聲ニ合シテ廢又微平ノ去ニ歸ス故ニ一百七韻トナル是聚分韻略ト韻鏡トノ異也

○音ト云者ハ韻ノ首ナリ韻ト云者ハ音ノ尾也聲ト云者ハ其節ナリ節ニ平上去入ノ四等アリ和語ニタトヘテイフニ蛛雲橋箸ナド分ルヽハ節ナリ眞ノ四聲ニ合フニハアラネドモ孔子告子同音ニシテ呼トコロ異ナルヲ以テ人マガフ事ナキニ由テ其義察スベシ一韻中ハ音異ナリトイヘドモ韻ハ一也故ニ一百

七韻尾ヲ跳タル字ハ跳タル内ニアリ引タル字ハ引タル内ニアリ音トハ韻ノ首ナリ其音ノナル所脣舌牙歯喉ノ五トスコレヲ五音五位トス

アイウエヲ　喉音
カキクケコ　牙音
サシスセソ　歯音
タチツテト
ナニヌネノ
ハヒフヘホ
マミムメモ　脣音
ヤヰユヱヨ
ラリルレロ　舌音
ワヰウヱヲ

コレハモト天竺ヨリ出タル者ナリ支那ニハモト韻法有テ音法ナシ天竺ニハ音法有テ韻法ナシ天竺ノ音法ト支那ノ韻法トヲ參ヘテ反切ノ道始メテ備ハレリ蓋韻トイヘバ聲音其内ニアリ韻學モト古書ナシ魏ノ祕書孫炎始メテ反切ヲ作リ沈約始メテ四聲ヲ定ム然シテ後梵僧呼音ノ法ヲ定メテ韻學終ニ全シ其名見ハレタルハ釋神珙切韻ノ圖ヨリス其備ル事ハ宋ノ司馬温公也日本ノ音ハ專唐音ヲ主トスル故張麟之ノ韻鏡最好シ韻ヲ調ブルハ二百四韻ニヨル音ヲ調ブルハ三十六字母ニヨル三十六字母トイヘバ何カカハレル樣ナレドモ和ニイフ五音ト一ツ事也三十六字母漢呉ノ別

呉音

幫滂並明　非敷奉微　脣音
端透定泥　知徹澄孃　舌音
見溪群疑　牙音
精清從心邪　照穿牀審禪　歯音
影曉匣喩　喉音
來　半舌
日　半歯

漢音
幫滂並明　非敷奉微
端透定泥　知徹澄孃
見溪群疑
精清從心邪　照穿牀審禪
影曉匣喩
來
日

幫滂ハハヒフヘホ呉音並ハバビブベボ明ハマミムメモ並漢音ハヒフヘホ明バビブベボ也端透知徹漢呉トモニタチツテト定澄漢音ハタチツテト呉音ハダヂヅデド泥孃漢音ハダヂヅデド呉音ハナニヌネノ見溪漢呉トモニカキクケコ群漢音ハカキクケコ呉音ハガギグゲゴ疑ハ漢呉トモニガギグゲゴ精清從心邪照穿牀審禪漢音濁ナシ從邪牀禪呉音濁影喩漢呉トモニヤイユエヨアイウエヲワイウヱヲ曉漢呉トモニカキクケコ匣漢ハ清テ呉ハ濁ル來ハ漢呉ラリルレロ日漢ハザジズゼゾ呉ハナニヌネノナリ五音ノ次第竪ニ讀メバ音調フ横ニ讀メバ韻調フヨク漢呉ノ別ヲ審ニシ漢音以テ音韻ヲ合シテ呼ベバ漢音成ル呉音以テ音韻ヲ合シテ呼ベバ呉音成ル音ハ唐音ノ正ニヨル宋元明ノ譌ニ從フベカラズ故ニ専顧野王ノ玉篇孫愐ノ廣韻ニヨリ韻鏡以テコレヲ調ブレバ正誤了然トシテ蔽フ可ラズコレ讀書者第一ノ急務字彙ノ訛音ハ近ゴロ無相ノ字彙莊岳音ニ出タリ初學コレニテ改メズンバ共儘用ユベカラズマミムメモナニヌネノ支那ニテハ半濁ト云先大槩漢音ニハコノ半濁音ナシバビブベボダヂヅデドノ本濁トナル也七日ナドチノツクハ呉音也漢音ナレバ七日トツトナル也

古音今音

支那ニテハ魏ノ孫炎反切ヲ搬メ梁ノ沈約四聲ヲ分チ胡僧梵學ヨリ字母ヲ定メ音韻ノ道

備ハレリコレヨリ以前ノ音ヲ古音トシコレヨリ後ノ音ヲ今音ト云故ニ古音考ヘ難フシテ今ノ音宋元明アリ日本ハ上古ヨリ彼方ヘ通ジタル樣ナレドモ定カニ我國ノ記錄ニモ見ヱタルハ應神ノ朝ヨリ也サレドモ其比ハ彼方ニサヘ慥ナル韻書モ無カリシカバ此方ニハ猶アルベキ樣ナシ其後シバラク世移リテ唐ノコロニハコナタニモ學マスマス開ケテ搢紳シキリニ海ニ航シ學ヲ彼ニ傳フ故ニ我邦彼ニ法ル者專唐也ココニ於テ音モ亦專唐ニヨルシカレバ則玉篇廣韻ノ正ニヨリ韻鏡以テ講トスベシ然レバ王仁ノ敎ヱシ吳音　延曆帝ノ改メ給ヒシ漢音今ノ韻譜ニアラザレバイカナル調(シラベ)ニテヤ有ケン知ラズ然レバ和音モ支那音モ今ニシテ昔ニ泝リ難キコトハ一也支那人ノ今ノ讀書ハ洪武音ナリ洪武音卽明音ナリ支那ノ人ノ呼ニハ唐明サマデノ差別モ無キ樣ナレドモ和音ヨリシテコレヲ觀レバ往還ト云者アリテ謬誤灼然トシテ掩フベカラズサテ四聲ノ事沈約已前ハ知ルベカラズサレドモ今ハ無クテハ讀ムベカラズ終ニ洪武ノ音ニヨッテ四聲ヲ分ツコレ今ノ漢兒ノ讀トコロ也我邦合成ノ語モト四聲ニ慣フ事ナケレバ無用ノ長物也故ニ支那音ニ習熟スル者ニアラザレバコレヲ知ル事能ハズ故四聲守ラズ音訓混雜顚倒錯綜シテ讀ム我邦ノ讀法ナリ彼方ハ韻ヲ以テ通ズル故呼法至テ密也詩賦ソノ他言語韻カナハザレバ語ヲナサズ韻書ナカリシ昔ハ口ヲ發スレバカナフ事アリシヤソレヨリ後イカヾ類聚シケルニヤ知ラズ上古ハ姑置ク文選ナドノ詩ニ至リテモ今ノ一百七韻ト合ハズ合ザル故ニ協韻ト云事アリ詩一首ヲ引テ例トス

彼茁(タル)拙音者(ハ)葭。加音壹發五豝。巴音于嗟乎騶(シユ)虞(ガ)。牙叶音

彼茁(タル)者(ハ)蓬。壹發五豵。宗音于嗟乎騶(シユ)虞(ゴウ)。紅叶五反

騶虞二章

騶ハ七逾反趨ト同音漢呉トモニ音シユ也虞模ノ韻ハ和音短呼也芻測遇反ニテ音ス也然ルニ世ニ長呼シテスウトヨムコレニ混ジテニヤ趨騶皆スウトス故ニ漢呉トモニ騶七逾反虞虞倶反正ナリ虞ニシテ豝ニ叶フ虞豝ノ反ナレバ音牙也從ノ字音宗トアレドモ其實音蔥ナリ蔥ト紅ト第一等ノ字也虞蔥反音睨トナル五紅反モ虞蔥反モ同ジ事ナリ其佗推シテ知ルベシサテコノ叶韻ノ事古音ニアラズトテ無相モ疑ヒ其外彼方ニテモ疑ヒ且取ザル人モ多シ取ザル人ハ古音ハ今ノ局促タルガ如キニアラズ韻ヲ取ル事廣シトイヘリ其是非ノ如キハ遽ニ斷ジ難シサレドモ古音考ヘ難ケレバ彼方今ノ書ヲ讀ム者沈約ノ定メシ四聲ヲ用ヒ孫炎ノハジメシ反切ニヨル然フシテ今童子ニ句讀ヲ授クル印本朱子輯ル所ノ四書朱詩蔡書陳禮程朱ノ易胡氏ノ春秋ニ

從テ讀ムコレ等皆叶韻ヲ用ヒ來レリ叶韻ノ行ハル丶事世已ニ久シ故轍ニ從テ讀ムモ亦非トスベカラズ故ニ梅園ノ讀法ハ叶韻ヲ用ユ蓋古詩賦ノ體大抵助字ヲバ韻ニトラズ

南有喬木。不可休。息漢有游女。不可求。思

息ト思トハ助字也休ト求トハ韻ナリ助字ハ和人ノ口ニハアラズ讀ム可ラズ

○韻鏡ニ就テ正スニ漢呉ノ正音誠ニ辨知シ難キニアラズ只知リ難キハ古音古音知リ難キヲ以テ訛謬辨ジ難シ蓋近來釋無相韻學ヲ以テ天下ニ横行ス韻鏡ヲ祖述シテ韻鏡ノ調ニ合ザルヲ概シテ俗音トス俗音中訛謬非ノ三ヲ分テリ訛トハ龍漢音リヨウ呉音リユコレヲ訛リテリウトシ通漢音トウ呉音ツコレヲ訛リテツウトスルノ類也謬トハ篠先鳥反シヤウヲ條徒聊反チヤウ呉音濁漢音清ナルヨリチヤウトシ恕絮審母ニ屬シテ清音ナルヲ如日母人諸反ノ濁音ナルヨリシテ濁リ楚疎疏魚ノ韻

ニシテ魚ノ韻ソノ音ナシ然ルヲ字彙ニヨリテ音ソートスルノ類也非トハ硫黄ヲユワウトヨミ鍛冶ヲカヂトヨムノ類也蓋本來和語漢語トアヅカラズ漢字一タビ入テ和語ヲ寫スルニ漢字ヲ以テスソノ和語ヲ寫スル其意ヲ以テ其字ヲ譯スルト其音ヲ假テ和語ヲ寫スルト大端二ツニ出ズ意ヲ以テ字譯スルトハ字ハ漢字ニテ其讀ハ和語也其音ヲカッテ和語ヲ寫スルハ其言ハ和語ニシテ其音ハ漢字ノ音也意ヲ以テ字ヲ譯スルハ御杜男ノ類也音ヲ假テ和語ヲ寫スルハ美簸旨邏烏等孤ノ類也コレ無相ノ意也無相ノ意蓋音ノ古今ヲ辨ゼズ一ニ韻鏡經緯ノ道ヲ以テコレヲ斷ズ晉ココニ於テ疑ナキ事能ハズ其條理ニヨルニ東冬支微魚虞佳灰尤皆同ジク短呼ニシテ江蕭肴豪陽庚蒸青ヲ長呼トス其他ハイートンート入聲ノフツークチーキートナリ是其條理ナリ然レドモ今ニシテ古音ヲ察スルニ條理ヲ以テ

斷ジ難シ其故ハ本邦修文ノ古語音馴雅ヲ好ミ宛轉淸和ナル者ヲ貴ンデ激烈噭噭トスル主角アル者ヲ取ラズ故ニ音雅俗ヲ分ッテ其内取舍アリ取舍トハタトヘバタノ音ニシタガヘバタ、トイトウテトナルベシチ、ノ音ニシタガハバチヤチチユチエチヨナルベシツニ従ハバツアツイツウツエツチナルベシ然ルニトイチエナド云音ヲ取ズ漢ノ撰ト同ジカラザル所也故チヅ讀ンデジズトナシヂヤヂヨ讀ンデジヤジヨトナスコレ音ニ取舍アル所也又按排ヲナシテ例ヲナスベカラザル者アリタトヘバ春昌脣反シユン也コレヲ用ヒテ例ス可ンバ倫力迍反リユン壼困閭反キユンナルベシ崒慈郵反（慈從母漢音淸吳音濁郵審母漢吳共淸）シユツ也コレヲ以テ例ス可ンバ律呂郵反リユツ橘居聿反キユツナルベシ（聿餘律反モトイユツ中畧ノ例ナリ）一東入聲第三等ノ如キ福叔ニ例シテコレヲ推スニ六音リユクニシテ目莫六反音ビユク菊居六

反音キユクナドトユクベキヲコレ等ニハ中略ト云法ヲ立テテ中ノユノ響ヲサル也濁直角反直澄母ニ屬シ角覺ト同音ナレバ漢音タク呉音ダクナルベキヲヂヨクト讀習ハセリヨツテ思フニ偪ヲヒヨク謬ヲビユウ屯ヲチユン黜ヲチユト讀ムノ類音正シトハイフベシ古音トハ聞ヘズ彪必幽反ヒウ古來班彪トヨメルモヒウノ音ノ用ヒ難ケレバナルベシ株ヲチウ厨ヲヅナドヨムモ圭角ヲイトヘルニヤ磨光韻鏡ヲケミスルニ皀ノ音アリマスマス音ノ新ナルヲ覺ユ故ニ今書ヲ讀ム者ツトメテ其正ヲ以テ古音ニヨラザル事モ有リトイヘドモ和音按排ノ法廢ス可ラズコレ一難事ナリ又按ズルニ和語ノ用專音ニ在テ韻ニナシ殊ニ古人彼方ヨリ傳ル所モ簡略ニシテ韻ニ一定ノ守リナシ音相通アツテ通音相轉ズル事和語ノ常也所謂魚イチツチ夢ユメイメノ類ナリ故ニ目之子マナコトナリ手之心トハ中心ノ事也池心水心ミナ同ジタナゴコロトナル又韻守ラザル者ハ酒坏サカヅキ雨雲アマグモ竹叢タカムラノ類ニシテマルキヲ鋺鞠宮處ヲ都ナド云モ同義也故ニ和語ハ首ニ相通ノ變アリ尾ニ轉換ノ道アリコノ習ヲ以テ漢字ヲヨム今韻譜ノ横竪井然トシテ撮口卷舌齊齒細齒確乎トシテ移スベカラザル者ト同ジカラズコレ我古音ノ全ク韻譜ニヨリ難キ所ナリタトヘバ支微虞魚短呼ニ屬スレバ長呼ハ固ニ譌謬ニ歸スベシ然リトイヘドモ女御女院女房夫子夫婦工夫長呼トナシ龍乳龍ハ冬ノ韻呉音短呼乳ハ虞ノ韻漢音人短呼セズ弑ニシテ弑トヨミ四ニシテ四時トヨムコレ必古博士ノ讀法ナルベシ母婦斗酒壽尤ノ韻ニシテ漢音ヲ用ル人猶短呼シ遇隅株芻虞ノ韻ニシテ人好ンデ長呼スココニ於テ世俗通用ノ音虞ノ韻讀ンデ尤ノ韻ノ如ク尤ノ韻讀ンデ虞ノ韻ノ如キモノ多シ至善至道意氣喟然ナド近來マデ多ク長呼

セシガ今ハ長呼スル者少シ又車馬ノ車長呼スル人アリ今按ズルニ僧徒誦經ノ音スベテ長呼トナス爾時無盡意菩薩ト云ガ如シコレラヨリシテ通ハツウ龍ハリウトモナリシニヤ本音短呼ニ相違ナシトイヘドモ長呼モユルシタルニヤ又韻譜ナカリシ昔ハ短長深ク貪着無リシニヤ養德播磨但馬讃岐因幡相模對馬武藏信濃伯耆美作駿河愛宕當麻信樂相良敦賀コレ等ハ韻ヲ轉ジテ和語ニ合シタル也安房隱岐壹岐又ユキトモ葛西吉良昆陽野鬪雞野コレ等ハ韻ヲ截テ用ヒタリ又備前備中備後豊前豊後ハ語路ニヨッテ勝手次第ニ跳タリ促タリ讀ミツケタリト見エタリ其外才色蘭冷泉レイゼイトモ紫宸殿面目相模ナド參考スレバ古音髣髴ニ得ベシ音モ馬鳴敏馬正調ヲ得ルトイヘドモ但馬對馬ハ相通ニ從フ（マハ訓ト云人モアレド鞍馬ノマハ訓也對馬但馬ノマハ音ナリ）

愛漢呉同ジクアイニシテ愛宕愛宕愛智相通ヲ用ユ壹岐或ハユキト云期碁ゴニ通ジ施是セゼトナリ博士ハカセトナル除ハ魚ノ韻ニシテ除目掃除トヨミ修ハ尤ノ韻ニシテ御修法トヨム極ハ職ノ音ニシテ職呉音シキナレバゴキヲ順トスレドモ世ニゴクトヨメリ極臈漢音ノ正ニシテ大極殿ハコク也族昨木反ニシテ從母ニ屬スレバ漢音ソク呉音ゾクナレドモ華族ノ時シヨクト讀ミ來レリ署ハ舒呂反魚ノ韻ナレバソトモ讀ベケレドモ其沙汰モナシ鼠楚疎呉音ソトセンモ苦シカラジ初位初夜ハソイソヤトモ讀ミ來レリ於央居反飫依倨反ヲヲト讀ルモ同音トミヘタリ是等ヲ并セ見ル時ハシヨクソクキヨクコクシヨソヨヲ相通ジ猶メマシセキコシユシナド廣ク通テ音韻一定ノ守モ無リシナルベシ戟九劇反隙綺隙反清音ナレバケキナルベシサレドモゲキノ音ニナシテヨムモリユンキユンソ

ノママニ讀ミ難ノ例ナルベシ今古ヨリ讀ミ來レル者ヲ盡廢シコレヲ譌謬非ノ三ツニ歸セントスコレ古ヲ廢スルノ道ナラズヤ夫古

皇朝ノ盛ナル圭ヨク文藝ヲ躬ミヅカラシ給ヒ衣冠ノ士方外ノ徒海ニ航スル者タエズ今日ノ和漢胡越ヲ隔ツル者ニアラズ今朝廷ノ威儀官階ノ品秩宮室ノ制衣冠ノ美國郡ノ章律令ノ體猶存スル者ハ　先王能文ノ治ノ遺レバ也垂拱以來五百年來文學講ゼザレバ音韻ノ譌謬尤スクナキニアラズトイヘドモ堂堂タル朝廷綿綿相繼グ搢紳ノ徒盡ソノ瓜葛ナリ豈コトゴトク受クル所無ウシテカク譌謬ヲ致スベケンヤ故晉ハ則意フ和漢同ジク音ニ古今アリ漢ノ古音稽フ可ラズシテ和ノ古音猶稽フベシ我古音相通轉換ノ守ラザルアリ故成式ヲ守ルヲ要トス相通轉換スル者ト譌謬非ナル者ト又常ニ相混ズ故ニヨク音ノ古今ヲ辨ジ古音ヲ譌謬非ノ外ニ求ムベ

シタトヘバ韻古來讀ンデ音イントス諸韻書スベテ問ノ韻ニ收メテ音運トス玉篇ゴクヘンヒトリ震ノ韻ニ收メテ爲鎭反トス幸ニ玉篇有テ其謬ニ非ザル事ヲ正ス事ヲ得タリカカル類終ニ謬譌ニ歸シテ知レザル者豈無ランヤ故我斷ズル所古音垂拱以前ニ稽ヘテコレヲ韻譜ニ求メズ今音玉篇韻鏡ニ正シテ垂拱後ニ出ル者ヲ斷ジテ譌謬非ニ歸ス然フシテ疑シキ者因循ニ從フ是其大概ナリ又意フニ儒先聖經ヲ讀ムニ延暦帝明經ノ徒ニ漢音ヲ習熟セヨトノ勅ニ從ヘバツトメテコレヲ漢音ニ調ベテ謬ル可ラズ緇流ノ佛書ニ於ルモ意フニマサニ然ルベシ業已ニ謬ヲ正シ正ニツクニアレバ聖經宜シク漢音ニ正スベシ其他諸子百家漢呉相雜フル者古音交廢スベカラズ故譌謬非ツトメテ正スベシトイヘドモ古音遽ニ韻譜ヲ以テ斷ズベカラズ最仔細ナラン事ヲ要ス故ニ聖經佛典讀ミ難キニアラズ惟和典ノ舊貫ニ

ヨル雜書ノ斟酌ヲナス意ニ從テ讀ム者定準ナケレバ其事易シトスベカラズ今一條ヲ擧テコレヲ例セン院音ヱン書院ノ名アレバ正音猶殘レリ然トイヘドモ院ハ天子退居ノ宮稱朝廷吟味ナクシテカク謬ルベキコトニモアラザレバ音イントスル者ヨラザル事ヲ得ズ唯漢典ニ於テハコレヲ正スモ亦可ナリ且世人イノ韻ヲ謬リテヱノ韻トス鄭衞齊ヲ鄭衞齊ト讀ガ如シイエモト別韻イヲ轉テヱノ長呼トナスベカラズモシ轉ジテ長呼トナス者是ナラバ西來回サアアラアアクアアト讀デ善ルベシ又入聲緝合葉洽業ノ韻ムカショリフノ假名ヲ用ヒ來レリ東陽ノウノ假名ヲ用ルト同例ニアラズ故ニ俗ニフックチキト云フトウトノ異ハフノ韻ハ雜掌合掌ナド連聲ニヨッテ促來レリウニ連聲ノ促ナシコレヲ異トスツフト同ジカラズツハ日月ノ類直ニツニシテ連聲シテ促ルモノ日光月光ナド

和讀ノ舊法ナリフノ韻連聲シテ促レバツノ韻ト同ジ執事集解合戰納音接待攝政甲子法度長揖ス鵠立ス颯颯トシテナドノ類促レバツト混ズ促ラザレバフ也偏執小集會合出納六甲佛法揖讓建立ナドイフガ如シ然ルヲ連聲ノ促ニアラズシテ蟄立接壓破笠閶闔ナド屑月勿ノ韻ノ如クヨミナシタルハ非也故澀ノ字ノ如キ俗間音シッニ非レバ通ゼズ醫典姑俗間通用ニ從フモ可也經書ナドニ臨ミテ其非從フハ文盲ノ至ナリ又支那音ヨリ來ル者アリ俗ニ唐音ト云明ヲミントヨミ清ヲシント讀ムノ類也清支那音ツインノ平聲ニシテシンニアラズツイン和人ノ口ニ上リ難シ故ニ謬シテシントナルタトヒシンツイント正シテモ和人平上去入何物タルヲシラザレバ連聲ニ從テ其聲轉ズ其故ハ明ノ音ノ如キ明朝トツヅケバ平聲トナシ明詩トイヘバ上聲トナス四聲已ニ守ラズ呼ブ所似

タリトイヘドモナンゾ支那音ニアランマシテ二合音ノ呼法和人ノ口ニアハザレバ支那音本來ノ面目和讀ノ間ニ有難ケレバ概シテコレヲ譌トスベシ譌ニシテ通ズ故ニ俗音也俗ニ居テ俗ニ從フ改メテ可ナル者改メ改ムルコト能ハザル者姑俗ニ從フベシ松江ナド唯一字支那音ヲ用ル事ソシル人アレドモ明清ノ字モ各獨行ス其外子ヲス|行ヲアン|兄ヲヒン|ナド支那音ノ譌モ多シ訓問ノ韻許運切ナレドモ庭訓ハ玄惠以來キンニ從ヘバ庭訓トナシ難シ不敏清音トナシテ世ニ讀メドモ敏達トヨミ敏馬トヨミ昔ハ謬ラザリシニアト昭然タレバ其謬ニ從フベカラズ論語五月虜慵虐賄モトアテヨミヨリナレル類ト見エタリ左ナル者正音行燈圍爐裏改ルモアンドウイロリ非ニアラネド改メザルモ古讀ヲ存スル也荆鞭前栽ヲ改ムルケイベンゼンザイハ古讀ヲ失スル也四牡ボウ漢ボウ受授シウ漢シウ浮雲フウ漢フウ執鞭シツベン漢シフベン鄒スウ漢シウ

蕃息ソク漢シヨク夫婦フフ漢フウフ芣苢フイ漢フウイ明命メイ漢メイベイ鳳凰ホウワウフウ漢ク戌ジユ漢清細サイ漢セイ祭サイ漢セイ淮ワイ漢クワイナドハコレヲ漢音ノ正ト思フ人モアル樣也卦クワイヲ吳音ニテケ|トヨムヲクワトヨムハ改メ終ヌト云物ニヤ翱ガウ毅ギ危鬼ノ類ハ濁ルベキヲスミ臧サウ漢清吳母清藏從母吳音濁常シヤウ母嘗吳音濁ト同音禪ノ類ハスムベキヲ濁ル又音義ニヨツテ謬ル者ハ安否フ漢フウ音ノ否否ヒ泰ノ否ヒハフサガル否フハイナヤトシ適意ノ適適子ノ適トスル類ナリ宋以來ノ音ニ謬ラルルハ芻蕘ノ芻朱子孟子ヲ註シテ音初トス故ニ人讀ンデシヨゼウトス言刈其蕘朱子詩ヲ註シテ音閭トス芻蕘虞ノ韻ニ屬ス初ノ韻ナルベキ樣ナケレバ朱子ノ謬也芻測愚反蕘力朱反正也シカルヲ誤リ注スル者ノ支那音虞ト魚ト二音マギルル故芻初蕘閭猶和人東ノ字ニタウタフナドトカナヲツケ唐ノ字ニトウトフツケテモ分レザルヲモシトウタウト腰ヲ折テヨ

ム國ヨリシテ觀レバ其誤分明ナルガ如シ和音ノ如キハ虞魚韻大ニ異リ漢人ノ非却テ見易シ韻書支（支那音ツゥイ）ノ韻ノ字齊（支那音ツイ）ノ韻字ニ反シタルモコノ類ナリナマ物シリノ音注ヲタダノミニシタルモ覺束ナキモノ也書經ヲ注セシ蔡沈ノ沈ニ音澄（チヨウ）トツケシハ蒸侵（チンツイーム）ノ韻近キニ粗糙（ソソウ）シタルナリ且明朝ノ音ハ往還ト云事ニ取チガヘ出來テ和音トハ大ニ合ザル事アリ韻鏡ニ就テ考フベシ事長ケレバココニ略ス

○其外又奇音アリコレハ支那音ニモアラズ日本音ニアラヌ筑（チクラ）浦音也禪家回向ニ用ユル唐音ト云者一種又韻鏡家ノ唐音也三音正譌ニ曰韻鏡家相傳之唐音本ニ我呉漢音一更ニ作二唐音一其訣曰宇三伊二跳（ハヌル）者跳矣入聲與ニ拗音一共切レ脚支那音ハ二合音也コノ法ノ通リナレバ二合音ハナシ且灰咍齊ナド支那音跳ズ來ハヤハリライ｜ニシテリン｜ニアラズ支微ノ韻ハ和漢トモニイ｜ナルヲ然ルヲ悉エケセテネトス何ニモナラヌ音ナリ何ノ爲ニセシヤ不審（イブカ）シ又佛家ニツト云ベキヲ達薩（ダルサル）ナド讀リソノ由テ來ル所ヲ人ニ問ヘドモ未分曉ノ說ヲ得ズ韓音ニテモアル事ニヤ猶博雅ノ人ニ問フベシ天台宗ニ阿彌陀經ヲヨム漢音其韻入聲ハキル｜ク｜ハキトス佛（フイ）一國（ケキ）白（ヘキ）ナドノ類ナリ又奇音ト云ベシ

讀書分別

書ヲ讀ムノ法大較四等和書ヲ一部トス經書ヲ一部トス佛書ヲ一部トス雜家ヲ一部トス經書ハ延暦以後漢音ト定メサセ給ヘリ佛書ハ聖德太子以來ノ法ニ從ヘバ呉音ヲ循守スル也和典ハ古ヲ存スルヲ主トスル者ナレバ舊章ニ從フヲ要トス舊章ニ從フ事ヲ俗ニコレヲ讀クセト云蓋古韻譜ナカリシ世ヨリ漸ク音韻ノ道ヒラケテハ當時ノ博士考訂セシ者ニシテ胡亂ナルベキ樣ナシ其內誤ル事モ

アルベケレドモ改ムベキ故ヲ得ズンバ猶其成式ヲ守ルベシサレバ朗詠集ノ紫塵嫩蕨人拳手ノ嫩ハタシカニ嫩蕨ナレドモ猶モノウキト讀來ルコレニテ古訓ヲ重ンズルノ意知ルベシ故ニ日本書紀ノ書ノ字視告朔ノ視ノ字女王祿ノ女ノ字少輔ノ輔ノ字右兵衞右衞門ノ右ノ字有テ讀マズ定考ハ顚倒シテヨム攝津ハ上ヲ略シ紀伊ハ下ヲ略ス訓ニヨメル者モ東市正西市正イヅレモイチノカミニシテ東西ヲ略ス後涼殿ハ上漢下呉相並ブヨク其古ヲ稽ヘテ妄ニ改ムベカラズツトメテコレヲ識者ニ質ス古ヲ存スルノ道ナリサテ和讀ニハ連聲ノ濁法アリ支那ニハ無キコト也此事ハ浮屠家ニ委シク分チテ本濁新濁連聲濁ト分テリ濁音ニ和漢ノ異アリ和ノ濁ト云ハバビブベボザジズゼゾガギグゲゴダヂヅデドコレ程也漢ニテハコレヲ濁トシテ又半濁ド云アリマミムメモナニヌネノヤイユエヨ

ノ類也或ハ次濁トモ清濁トモ云日本ニテハコレヲ清音ト思ヘリ新濁連聲濁他ニアラズ半濁ニナルヲ連聲濁トシ本濁ニナルヲ新濁トス韻書ニハ槩メコレヲ連聲ト云本濁〇〇此點ヲ施シ新濁◌◌コノ點ヲ施シ連聲點ヲ用ヒズ點ヲ用ヒザル者ハ上ヲ跳ル者ハア｜ワ｜ヤ｜ノ三音皆ナニヌネノニ歸スレバナリ連聲ハ本有因緣ノ類也新濁ハ天〇〇花〇〇靈〇〇山ノ類也陰陽ノ陽ニヤウト連聲シテ濁ル然ルヲチチンミヤウト濁ルハ例ノヨミクセナリ今我點ヲ發スル新濁進聲ニス本濁連聲點スルニ及バズ謬誤スル者點ヲ發シテサトシヤスカラシム●ハモト清音誤ツテ濁ル者ニ發ス軍呉音濁郡同上恕心母禪呉濁音玄同上餅漢ニ呉清共ノ類也●●ヲ發スル者ハモト濁音誤ツテ清ム者詣五計反能奴來反硯五甸反齧五結反ノ類也聖經漢音ヲ用ユルガ如シトイヘドモ明微泥孃人過半ナニヌネノマミムメモトナルナリ野壹ノ東見記ニ三

條稱名院頭陀寺ヲトウダ寺ト讀シヲ五山ノ長老感ゼシトアリ其感ゼシハイカナル事ヲ感ゼシニヤシラズサレドモ淸原頼業異端虚無寂滅ト云ヲキヨブセキベツト讀シ由モ擧タレバ世習ニヒカレズ讀シコトヲイフナルベシサレドモ音學久シク講ゼズ數百年來ノ訛謬ヨク一旦ノ正スベキニアラズタトヘバ奬須ヲシユト改ムルニハ難カラネドモ孟子吳音ミヤウヲ讀ンデバウシトハ急ニハ改メ難カルベシ故ニ梅園ノ讀法易詩書春秋ノ四經正シク聖人ノ手ニ出ル者ヲ以テ專漢音ヲ用ヒ孝經論語及三種孟子等漢音ヲ主トシ古音吳音時トシテマジヘ用ユ正ニ世ノ漢音ニ熟スルヲ待ントス連聲ノ如キモ去ルベキ者ハ去ル去リ難キ者ハ姑コレヲ存ス又音ヲ以テ訓ニ代ル者多ク吳音ヲ人用ヒ來レリコノ類改メズ生通坐ヲ辨ズナドコレナリ點ハ簡省ヲ主トス點トハ古ハ本字ノ傍國字ヲ施サズ點ヲ發シテヨミワケタリ今ニヲコトノ傳ナド云コトアリコレ點ト云名ノアル所ナリ點トハ顚倒環回ニ先後ノ次第ヲサシ語尾ノ轉ニ國字ヲ書ス時ニ習フノ類ナリ時ニ習ト書ケルハ對譯ニテ點ニハアラズ讀法ハ點ノ指南ニ從フ點シテ書ヲ讀ムモノ漢讀本來ノ面目ニアラザレバ諸家ノ法一ニアラズトイヘドモ大段古今ノ二ツアリ古點ハ音アリトイヘドモヨク其字ヲ和語ニ譯スルヲ手柄トシコレヲ讀デイカニモ優長ニ訓カチニヨメリ

匹如身後有何事　應向人間無所求

東行西行雲渺渺　二月三月日遲遲

採菊東籬下　悠然見南山

淸家ニハ勿剪勿敗トヨメドモ江家ニハ勿剪勿敗トヨメリ字ハカヘラズシテモスベキハカヘラザルガヨケレドモ今ノ漢典ヲヨム法ハナキリソナヲリソナド和語メカシキハ用

捨スル也今ノ點ハ隨分煩冗ヲサリ簡省ニツキ音ヲ先ンジ訓ヲ後ニス和語ニテ讀ムモノヲ和語メカシト云ハアヤシキ樣ナレドモ走(ワシル)ヲハシル行(ユク)ヲイク女(ヲンナ)ヲヲフナ考(カンガユル)ヲカフガヘルナドノ類漢典ニハ施シ難シ右繁簡ノ二ツ古今ノ異也今ニテ觀レバ羅山先生春道ノ點ナドイト引長メタル樣ナレドモコノ以前ノ點ニ比スレバ隨分繁ヲ省シタル者其功少カラズ然レドモ世移リ時カハリ用心次第ニ熟シテ山崎闇齋先生貝原益軒先生ナド相續デ其上ヲ正サレシカバ愈委曲ヲツクサレタリトミヘタリ其内近來宇野明霞先生ノ點ハワキテ奇也蓋和語ヲ以テ漢字ヲ譯スルニ古譯未盡サズ今俗語ヲ以テ譯スルニヒツタリ叶フ者アリ且暫(カツシバラク)トヨマズマアチヨツトト訓ズルガ如シサレドモ言ニハ雅俗ノ別アル者ナレバ譯意ヲ知テ雅ニ從フ和歌者流ニ祈レドモ不逢戀ト讀ベキヲ祈テ不逢戀トヨムモ亦點家一ツノ用心ナリ士新ノ點法ハ龍門況復(マシテ)非吾事陰蛩吟(ナキヤンテ)絕秋將盡ナド草紙ヨミニヨミカケタリ太宰春臺俗ニヲツルヲソシリテ三平學文ヤメテ俳諧セヨトイヘリ誠ニ大雅ヲ變ジテ巴渝トナサンモ口惜ケレバキコユルトテ俗話ニモ譯シガタシ漢典ヲ讀ム者ハモト漢字ヲ通ズル爲マデニテ假名物ノ如ク和語ニ一定ノ法ナケレバ其人人ノ思フニ任セテ讀ム者ナレバ强テ一定ニ歸スベキヤウモナシ然レバココニ從遊ノ子弟モ必我ニ一律ナレド思フニモアラズ善カランカ方ニ從フベシ我思フ所ハ心ノユクニ任セテ書ツケ侍リヌ

○字一字他義ナキ者ハ一通リニテスム也他義アル者ハ音注ニヨラザレバ明ラメ難シ音注如字ト云者アリ直音アリ反切アリ點發アリ音注ハ本音ニハ注ナシ尤ノナトムツカシク讀メ兼ルト思フニハツクル也論語由也喭ノ喭ニ五旦反トアル類也其外ノ字ハ本義ニ

ハコレヲ省キ本音ニアラザル時バカリ用ユル也如字トハ譬ヘバ大學章句ニ大學大舊音泰今讀如字トアリイフ心ハ大學ノ大ノ字古注ニハ太ノ字トシテ（太泰同ジ）太誓太甲ナド無上ノ義ナリ大ノ字ノ本義ハ小ノ字ニ對シタル字ナリ無上ノ意ニ觀タル時音泰トシテヲホヒナルノ時ハ音注ナクテスム也朱子ハ八歲ヨリ十四歲マデハ小學ニ入リ十五ヨリ大學ニ入ルト小ニ對シタル大ナレバ音注ナクテスム也サレドモ一且音泰ニシテ見タル事アル故何トモセズシテ置タル時ハ今マデノ通リニ太學トナシテ見ヨウカトノ念ニテ如字トシタル也如字トハ本音ノ如シトイフガ如シ論語ニ十室之邑必有忠信如丘者焉不如丘之好學也朱注焉如字トアリコレモ上ト同例ニテ本音ノママナレバ助字ニシテ意義ナシ於虔反ナレバイヅクンゾト云意ナリ未知焉得仁ノ類也コノ處モ人ガ於虔反ト見ヤウカ

然スレバ十室之邑必有忠信如丘者、ト何ヲキリテ焉不如丘之好學也ノ意ニシテ朱子ノ了見ト大ニ違フト機遣ヒテノ注也故ニ如字ト云字ヲ下スハ嫌ハシキ義アル處也直音反切四聲ノ注義理ニカハルコトナシコノ音注ヲ用ルノ意ハタトヘバ樂本音五角反ニシテ禮樂ノ樂也論語ニ知者樂水、仁者樂山、知者樂、仁者壽、ノ注ニ樂上ノ二字並五教反下一字音洛トアリ五教反音ゴウトヨム時ハ好樂ト續キテコノミネゴフノ意ナリ音洛ノ時ハタノシム也孟子ニ獨樂樂與人樂樂ムト孰樂ノ注ニ樂樂下ノ字音洛孰樂亦洛トアリ和人ハ四聲ヲ用ヰズ訓讀ヲ主トスル故點付キノ本ナレバ音注ニ入用ナシ故ニ音義ニ粗糙出來ルナリコレ等モ點ツキタレバ音注ハ無用ノ樣ニアリサレドモ點ヲ除キタレバ獨樂樂ト云コトニヤ獨樂樂與人樂樂ト云事ニヤ知ルベカラズ故樂樂ト二字ツヅキタルハ下樂音洛ニ

テタノシムト云コトトミセタル故タノシムト定レリ孰樂ト孰ノ字ニツヅキタルモ音洛トアレバコレ又タノシムト定レリガクハ此字ノ本義故音注ヲ用ヒズモシ樂樂（ネガフ）トモヨムベキトモ思フ所ナレバ樂樂上樂五教反下樂音洛トツクル也直音反切義理ニ相違ナシ賢遍反音現トアレバ賢遍反ト書タルモ音現ト書タルモ異義ナシ論語儀封人請見曰、君子之至於斯也、吾未嘗不得見、從者見之、音注請見見之之見、賢遍反トアリ點ヲ施ストキ先コノ法ヲトクト見テ點ヲ施スナリ音注ナキトキミルキクアフノ意ニシテ賢遍反ハアラハルマミユルシメス也故ニ請ノ字ニツヅキタルト之ノ字ニツヅキタルトフタツハ賢遍反トアレバ得見ノ見ハ本義也ト見定ムル也コノ時本義ニテミル也ミルト前ヨリ讀來レル故マミユルト初心ノ時ハ嫌（マギラハ）シキ也唯アフト云程ノコト也賢遍反ナレバ御目ニカカルト云程

ノコト也ココニ於テココハ儀封人孔子ノ從（トモ）ノ者ニ御目ニカカリタキ由タノミテイフニハ前前ヨリヨキ衆ノココニ御出アリタルニハ逢（ア）ハザリシハナカリシ程ニト云カケタリソコニテ從ノ者孔子ニ御目ニカカラセタリト云事也アフモマミユルモ似タルヤウナレドモマミユルト云ハ樣體（ダイ）ノツキタルナリ故ニ朝見相見ナド云ハ禮ノコト也然ラバアフトヨムコソ正ナルベケレドモ見（ミ）ル意アル故ミルニテ置モヨカルベシ知二何州一トハツカサドルト云事ナレドモシルトヨミテツカサドルノ意ニナル例ナルベシ尤近來ノ點ニハ知（チ）タリナド多ク見エタリ此類意得ザレバ用字ノ間不覺出來タル嘗テ人ノ作リシ詩ヲ見シニ覺ノ韻ニテ作リシ詩ニ春夢覺（サム）ト置タリ夢覺（コウ）ノ覺古考ノ反ニシテ效ノ韻ニ屬スル事ヲ忘レタリト見エタリ四聲ヲ注スルニ字ヲ用ユルノ外點ヲ發スルノ一法字ノ四隅ニ平上

去入ノ位ヲ定メ點ヲ發スル事如此（去入／平上）蓋字ニ本韻アリ他義ニ轉ジテ餘韻ニイルタトヘバ衣冠本韻平ナレバコロモカブリ注ニ及バズ去聲トアルガ字ノ右ノ肩ニ點ヲ發スレバキルカンフルト云意衣衣冠冠ト書テモ點發カ音注カヲ見定メザレバ衣衣冠冠ニヤ衣衣冠冠ニヤ知リ難シ尤音注點發ナクテモヨマルルハ上下前後ノ理ニヨリシルル故也字義ト云者ハ同韻ニテモ異ルコトアリ異レバ異ナル方ニ注ヲ用ユタトヘバ朝夕ノ朝ト朝廷ノ朝ト同ジク蕭ノ韻ニシテ朝夕ノ朝ハ知母ニ屬シ陟遙反ニテ當字ノ本義ナリ朝廷ノ朝ハ澄母屬シテ直遙反他義ナルヲ以テコレニ音潮トカ點發ヲ用ユル也故ニ朝°ト點ヲ發シ又音潮トアレバ朝廷ノ朝ト見定ムル也サキニイフ樂ノ點發アレバ憂樂ノ樂ト見定ムルト同意也中庸章句ニ道也者不可離也可離非道也ト云ニ離去聲トアリ離別分離ノ離ハ平聲ニ

テハナルルノ意ニシテ自然ノ意也去聲ハハナスノ意ニテ使然也此注ナケレバ道ハ離レラレズ離レラルレバ道ニアラズノ意ニシテ此注アレバ道ハ離サフトシテモ離タレズ離セバ離サルレバ道ニアラズノ意也論語從我陳蔡者皆不及門ト云ヲ從フト世ニ讀ムハ音注ニ氣ヲツケザル故也此トコロハ去聲ト云注有リシタガフモト此字ノ本訓ニテ平聲ナリ其時ハ孔子陳蔡ヲ過給ヒシ時ツレニナリテユキタル樣也去聲ナレバ從者ノ從ニテ俗ニ云供スル也即從者トナリテ行タル也我ニ供シタル面面ハノ意ニ見タル故去聲トハ註セシ也詩齊子歸止其從如雲ト云ニモ朱傳去聲トアリ注ニ從之者衆也トアリザツト見テハシタガフト同ジ樣ナレドモ下ニ者ト云字ノアルニテ意得ベシコレニ從スル者ト云樣ニテ從者ノ字ヲワリテ之ノ字ヲ入タル也孟子以力假仁者霸、以德行仁者王、俗間通用ノ印

本、覇タリ王タリトツケタリ王タリナレバ活字ニテ去聲トナレバ音注アル筈也音注ナケレバタリノ點下シ難シ强テ點ヲ施サントナラバ覇ナリ王ナリ猶シカランサレドナクテスム所ナリ今一見之、大則以王、小則以覇、此處王去聲トアレバタランノ字除クコトヲ得ズコレ等ノ類遂一コレヲ辨ゼバ日ヲ終ヘ歳ヲ終フトモツクスベカラズ一隅ヲ擧テ其反ヲモトム

言語體用

體立テ用運ス事物往トシテ然ラザルナシ故ニ言語ノ道モ亦體立チ用運スルノ間ナリ蓋書ヲ讀ント欲スル者ハ先和漢語脉ノ異ヲ知ルベシ夫文字ノ道モト支那音ヲ以テ和ニ傳ヘ和語ヲ以テ漢典ヲ讀ム其和語ヲ以テ漢典ヲ讀ム者ヲ和訓ト云支那音ヲ以テ和ニ傳ヘシ者ヲ和音ト云漢字ヲ和訓ニ讀ムハ譯也猶梵ノ摩訶漢ノ大ニアタリ梵ノ般若漢ノ智慧ニアタルガ如シ譬バ梵ノ佛陀漢ニ覺ノ義トス和ニホドケルノ義ヲ以テホトケト訓ス和ノ訓ト云者其實譯ナリ假名ツクルハ對譯ナリ漢人ノ梵語ヲ譯スルハ梵字ヲステテ漢字ニナシタリ猶漢典ヲ假名本ニシタル樣ナル類也和人ノ漢典ヲ讀ムハ漢字ヲ其儘用ヒテ和語ヲ支那音ニ交ヘテヨメル也其國ノ書ヲ讀ムニハ其國ノ語ヲ用ヒザレバ叶ハヌ者也故ニ漢人梵語ヲ漢字ニ直シテモ阿耨多羅三藐三菩提心ト梵漢相マジヘテ其義始テ通ズルナリコノ如ク和人和語ヲ以テ漢典ヲ讀トイヘドモ和語ニ上リ來ラザル者ハ皆漢音ヲ用ユタトヒ訓アリテモ其本義ハ盡シガタキ者也故音訓終ニ廢スベカラズ語脉トハ和ハ體ヲ主トシ用ヲ後トス漢ハ體用主客有テ其義ヲ通ズ和語ノ用ヲ運スル者コレヲテニヲハト云和語ノ運用全クココニ在リテニヲハ又省シテテニハト云文字ニハ出爾乎葉ナド

トモ書テイロイロノ曲説トモアレドモコレ日本ノミアル事ニアラズモシ文字ノ正ヲイハバ而於之者トモ書スベシ是體ヲ運スル者古來未コレヲ運字運法トイハズトイヘドモコレ畢竟面前三尺ノ暗ニ迷フノ故也體用ノ別ハタトヘバ舟ノ體有テモ浮ビ走ルノ運ヲ得ザレバ舟終ニ無用ノ死物ナリ故ニ言語ノ道活ル處全ク運用ニアリ故ニタトヘバ珠ハ體、投ハ用體ヲ運スルニテニヲハ用ヲ運スルヲカカヘドモ分テドモ槩シテテニヲハト云フコレ言語ノ運スル所ナリ珠(二)(テ)投(ス)珠(三)投(ス)珠(ヲ)投(ス)珠(ハ)投(ス)コレテニヲハニテ漢語モ同ジクコレヲ用ユ唯語脈異ルヲ以テ人コレヲ覺エザルノミ今コレヲ漢語ニ寫スルニ(以)珠(而)投ス投(於)珠珠(之)投ス又投珠用ヲ先ジ體ヲ後ニスレバ意(之)ヲ用ユルニ同ジ珠(則)投――コノ意ニシテ運用和漢同ジキヲ知ルベシ故ニ體立テ用運ス死ヲ轉ジテ活トナス

言語アルノ地コレヲスツル事能ハザル事萬國皆一也唯運法ニ於テハ體用主客上下順逆各同ジカラズ夫和漢ノ異和人ハ語尾ニ運シ漢人ハ語頭ニ運スコレヲテニヲハト云者ハ唯其綱ヲ擧ル者ニシテコノ四ニ限ルニアラズ漢語モ亦而於之者ノ四ニ限ルニアラズ和語ノノゾヌランヤケリケンモシカキト云漢語ノ豈嘗蓋亦雖當焉矣乎哉ト云類語脈ヲトクトク考レバ血脈循環他ナラザル者アリ語尾ノ運ヲ以テ語頭ノ運トナス故ニ古ノ譯者ハ和語中語頭ニ置ベキ語ヲ拈出シテコレヲ語頭ニ安ンズタトヘバモトイヘバ語頭ニアリガタシ故ニモ字尾ニヨミツケテ亦ノ字マタト讀リバトイヘバ語頭ニ有難シバ字尾ニヨミツケテ則チノ字スナハチト讀リ和人語尾ノサヘ漢人語頭ノ猶也漢人語頭ノ雖和人語尾ノドモ也如之看來リテ譯意始メテ明ナリ然リトイヘドモ和漢語異ナレバ其虚字コ

レニアツテ彼ニナキモアリ彼レニアツテコレニナキモアリソノ處ハ唯意ヲ以テ通ズルヨリ外ハナシ彼ニアツテ此ニナシトハ兮矣焉些等ノ類和人ノ口ニハ上ラズ又一通リハ上レドモ處ニヨリテ上ラザル類アリ詩ノ俾也可忘禮ノ白也毋ノゴトキ是ナリ又和語漢語ニアマル者ハ嘗逢(テ)嘗逢(ニ)去聲(ヲ)之齊(ニ)ナドナリヨク此意ヲ會スレバ和漢ノ語合否參差ノ間彷彿トシテ其面目ヲ見ルコト有リ蓋和漢讀法ノ異和讀ノ法ハテニハヲヨク詳ニシテ語ヲ下ニ送ル者故ニ上ヲ結バズ下ニ送リ落著ノ地ヲ待テ結ブ然シテ體ヲ先ンジ用ヲ後ニス故ニ連字ノ法勝テ句讀ノ道微也漢典ノ讀法ハ語上ニ絶シテ起ルモノ下ヨリ接ス故ニ重キ事專句頭ニアリ和讀上ヲ結バズ下ニ送リ落着ヲ得テ結ブノ法ニ從ヘバ叔孫武叔之母死。既小斂舉者出戸出戸祖且投其冠括髮。ト讀ベシモシ句讀ヲ主トシテ句尾ヲ收メ

語ヲ句頭ニ起スノ法ニ從ハバ叔孫武叔之母死。既小斂。舉者出。戸出戸。祖。且投其冠括髮。ト讀ムベシ故ニ聖人不凝滯於物、而與世推移。世人皆濁。何不漏其泥。而揚其波。衆人皆醉。何不餔其糟而歠其釃。是句讀ノ法也、聖人不凝滯於物而(句)能與世推移。世人皆濁。何不漏其泥而(讀)揚其波。衆人皆醉。何不餔其糟而(讀)歠其釃ト是和ノ語脈也故ニ和ノ語脈ヨリシテコレヲミレバ句讀ヲ以テ書ヲ讀ムモノテニヲハニ合ヌニ似タル事多シ今試ニ和歌ヲ正シク漢字ニ譯シテ語脈ノ異同ヲ示ス

於所遺身則不慮(之)亦有嘗誓(テ)者之壽之可惜哉

(之)コノ之ノ字和ノ語脈ナレバ用ユルニ及バズ漢ノ語脈ニヨレバコレヲ除ケバ語ヲナサズ(テ)此テノ字漢語ナクテスム也

行暮(矣)而以此下蔭爲舍則花乎將今夕之主人

漢ノ語脈ニヨレバ行暮(矣)ト句ヲタチ而以此下蔭ト而ノ字ヨリ句起ル也

以孰乎亦爲識者雖高砂之松於非昔年之侶(邪)

和語ノ㊁漢語ノカヘルト同樣也强テコノ二ノ字ヲ譯スレバ識人之爲トアルベシ(邪)ノ字漢法除クベカラズ

月不在乎春非舊時之春乎唯我躬則而舊時之躬也

漢ノ語脈(也)ノ字ヲ以テ結ブベシ

花則(歸)於根鳥則歸於舊巢也無知春之往處者也

和ノ語脈上ノ歸ノ字下ノ歸ノ字ノ内ニ含ム猶强テ譯セバ花則於根鳥則於舊巢(之)歸也トモアルベシ

却之猶於想(諸)當手觸(之)乎也雖我書亦不可打置之(之)(焉)

(之)スヲ以テ譯スベキニ似タリ(諸)(之)(之)(焉)漢語除クベカラズ如之ニシテ和漢ノ語脈ヨク辨知スベシ故ニ下ニ迭ツテ落着ノ地ニ至ル語脈ニヨレバ興於詩立於禮成於樂トヨムベカ

ラザレドモ語頭上ヲ接スル者ニヨレバ如此句ゴトニ結ブ者眞面目ナリ然レバ漢典ヲ讀ムノ法ハ其眞ニ近ツクヲ主トスベシ和語ハ自他既往將來テニハニ於テワカル漢字ハ語末ニ於テコレヲ詳ニスル事能ハズ故ニ文スベカラク句讀ニ求ムベシテニハニ求ムベカラズ然シテ句讀ノ義テニハノ盡ス所ニアラズ檀弓ノ二三章ヲ擧テ他ヲ例ス其文ニ孔子先反。門人後。雨甚。至。孔子問焉曰。爾來何遲。曰。防墓崩。孔子不應。三。孔子泫然流涕曰。吾聞之。古不修墓。トコレヲ和語ニテイハバ孔子ハ先ニ反リ給ヒ門人ハ後レタリ(折カラ)雨甚クフリケリ(程ナク門人衆モ還リ)至リヌ孔子爾等還リ來ルコトノナド遲カリキト問給ヒケレバ(雨ツヨクシテ)防墓崩レケル故ナリト曰ケルニ孔子應ヘ給ハズソレ故三タビカヘシテ申シタレバ孔子泫然出涕古不脩墓ト曰ヒケルト云ベシ又工尹商陽。與陳棄疾追吳師。陳棄疾

謂工尹商陽曰。王事也。子手弓而可。〔棄疾〕手弓。〔商陽〕子射諸。〔疾〕射之。〔陽〕斃一人。〔記事〕韔弓。〔陽〕又及。〔記事〕謂之。〔棄疾〕又斃二人。〔記事〕每斃一人。掩其目。止其御曰。朝不坐。燕不與。殺三人。亦足以反命。〔陽〕又齊大饑。黔敖爲食於路。以待餓者而食（音嗣）之。有餓者蒙袂輯屨。貿貿然來。黔敖左奉飲。右執食。曰。嗟來食。（以下餓者）揚其目而視之曰。予唯不食嗟來之食。以至於斯也。（以下黔敖）從而謝焉。（以下餓者）不食而死ス。是等ノ自他諸本ノシテワキノ詞ノ如シ豈テニハノ盡ス所ナランヤ然レバ則和語ハ重キコトテニハニアリ漢典ハ重キ事句讀ニアリ重キ事句讀ニアリトイヘドモソノ讀ム所ハ和語也ココニ於テ句讀テニハ相得テ通ズベシコレヲ以テ末句ニカカユル事アレバ語尾ヲ結バズシテ送ラザレバ和語ニ通ゼザル所アリ喓喓草蟲。趯趯阜螽。未見君子。憂心忡忡。亦既見止。亦既覯止。我心則降。草葉ノ虫ノ趯趯（チラチラ）トシテナク音ヲ聞ニ秋ニ早成ヌレドモマダ君子（ワガツマ）ニ

見ザレバ物思フ心ノ忡忡ト下ヨリツキ上ルニモカクアリトモモシ見亦既覯亦既タランニハ此忡忡タル氣ハ降ラン物ヲト、ウケテトマル也故ニ和讀ノ法ニヨラザレバ和人ハ通ズル事能ハズ故ニ漢語ノ法ニテスム所ハ漢法ニ依ル和ノ語脈ニヨラザレバ通ゼザル所ハ和法ヲ用ユ訓ヲ用ヒ顚倒ノ讀ヲナス皆和ノ語脈ニ從フ也點ノ用ハ本字ノ義ヲ通ゼントナリ點ニ誤ルコトアレバ其義塞ガル今左傳ノ印本ヲ見ルニ（卷十二）陽虎曰。吾車少。以兵車之旆。與罕駟兵車先陣。ト云ベキヲ以兵車之旆。與罕駟兵車先陣。ト點ゼシ程ニ罕駟ハ陽虎ガ敵ナルヲ陽虎ガ身方ノ様ニハナレリ孟子志士不忘在溝壑。勇士不忘喪其元。ト云ヲ在ルヲ忘レズ喪フヲ忘レズトツケタル故義理ヲナサズ又不忍其觳觫若無罪而就死地。ト觳觫若トシテトカ云フベキヲ其觳觫トシテ罪無フシテ死地ニ就ガ若キニ忍ビズトツケタル

程ニ餘所ノ事ノ樣ニナレリ親過大而不怨是愈疏也。親之過小而怨是不可磯也トツクベキヲ磯ス可ラザル也ト附ケタル故終ニ通ズ可ラザルノ語トナレリ漢ニテハ字ノ四聲ヲ點發ニテ見定メ句讀ヲキリタル儘ニタガヘズ讀メバ聞エズトテモ讀法ハスム也此方ニテ和歌集物語ナド讀ムガ如シ聞エザレドモ讀ムル也漢典ハ無點ナレバ讀難シ聞エヌ者ヲ無理ニ讀テ點ヲ施セバ右ノ通リノ樣ナル事出來ル也故ニ自分ニ讀ムバカリハ其通リ也點ナド施シテ善カラザレバ人ヲ誤ル者ナレバ愼ムベキコト也予幼キ時、詩、誰謂雀無角。何以穿我屋。誰謂汝無家何以速我獄ノ章ヲ讀ンデ百端通ズルコト能ハズ後誰モ謂、雀無角何以穿我屋誰謂女無家何以速我獄ト云ベキヲ點ニ誤ラレタルコトヲ知リヌ三體詩ニ不知何樹幽崖裏。臘月開花見北人トハ劉言史北國ノ人ニテ初テ南國ニ來リ幽崖中臘月ノ花ヲ

見テ見馴レヌ故ナント云樹ゾト怪ミタルヲイヅレノ樹ゾト點ツケタル程ニドノ樹ゾト云意ニナリテワケモナク成レリ又和語ハ語尾ノ轉ズル所既往見在將來イヅレカニカタヅカザレバ落着ナク漢語ニハ貪着ナキ所多シイヅレ落着入用ノ處ハ既見將隨分ワカツベシ苦シカラザル所ハ眞面目ニヨルベシ故ニ公冶長雖在縲絏之中シノ字ナケレバ見在ニ嫌ハシ魯人爲長府トスナケレバ既往ニ嫌ハシコレヲ以テ既往見在將來ワカレズシテスマザル時ハカクノ如クヨミ分ツベシ自佗モ此例也サナキハアマリクダクダシクナル程ニ還テ漢語ノ眞ヲ失スル事モアリ論語ニ夫君子之居喪。食旨不甘。聞樂不樂ト貝原點ニツケタルモ食旨聞樂トイヘバ既往ニナルヲ忘テ也尤子細ナル點ナリサレドモ漢語本來既往將來ナシソノ眞面目ニ就テイヘバ食旨不甘。聞樂不樂也和語ヨリ和語ニウツリタ

ル上ノ事也サテ和人ハ體ヲ先ンジ用ヲ後ニスル癖アル故カヘリ過テ意義ヲ失スル事多シ詩ノ標有梅。其實七兮ナルヲ標チテ有梅トカヘリ孟子ノ矢人豈不仁於函人哉ト云ヲ仁ナラザランヤトヨム程ニ本意ヲ失フ樣ニナレリ阿房宮賦。明星熒熒。開粧鏡也綠雲擾擾梳曉鬟也。渭流漲膩。棄脂水也。煙斜霧橫。焚椒蘭也。ノ本意ナルヲ無理ニカヘル程ニ客轉シテ主トナレリカヘリテ讀ムトカヘラズシテ讀ムト得失同クバカヘラザルガ漢讀ノ本意也且字坐ヲ諳ンズルニモ益アリ詩ナドハ調ヲ主トスル者ナレバカヘラズシテ還ツテ調ノヨキコト多シ瞻彼淇奥。綠竹猗猗。相鼠有皮。人而無義。匈奴似欲知名姓休傍陰山更射鵰。昔記山川是今傷人代非ナド還テ調ノ通暢ヲ覺フ、サレドモ秖今只有西江月。曾照吳王宮裏人句ヲ隔テテモカヘラザレバ結句落著ナシ右イフ如ク和語ハテニハ合ザレバ用ヲナサズサレドモ前ヨリ用ヒ來リテ人覺エザル事アリ伏シテ以自愛ヲ伏テ以レバ自愛愼莫云云ヲ愼ンデ云云スルコトナカレナド讀メリ願クハ上南山壽一杯ハヨシ、悔敎夫壻覓封侯祈逢睿藻日邊來ナドヲ悔ラクハ敎シコトヲ祈ラクハ逢フコトヲナドイヘルハ因循シテ覺エザル也

詳略點

漢典ヲ讀ム者ハ和語ヲ修スル爲ニアラズ其用唯漢語ヲ達スル爲ノミナレバ古ニ異リトイヘドモ無用ノ點ハ省クベシ昔ハ詩書文選ノ類兩點ニ讀ミ又詩曰云云トイヘリナド重複多カリキ可ラク不ラマク無ラマシカバハ繁冗ナリ入則孝出則弟南北云云トシ給ヘリナドハ無キ字ヲソヘタルナリ近來諸家トモニ此紛擾ヲバ大槩省クナリ無用省ク時ハ諳誦ニ便ニ頗分陰ヲ惜ムノ助トナルタトヘバ車中ニシテシリヱカヘリミズ、トクモノイ

ハズ、ミヅカラ指サザズ、トソランジタル時ハ車内不後顧不疾言不自指トアルカモシラレズ直ニ車中不内顧不疾言。不親指ト諳ンズレバ覺エヤスクシテ讀ムニハヤク且ソノ字モ粗記得スベシ檀弓舊點復、楔齒、綴足、飯、設飾、帷堂、並作ニテ簡明ナルヲ古人ハ復　楔齒　綴足　飯　設飾　帷　堂並作ナドクハシキ樣ニシテ畢竟粗也且ナキ字ヲステ假名ニ用ユルコトヤムヤムコト得ベキ程ハヤムベシ有澹臺滅明(ト云)者。有爲神農之言許行(ト云者)ニテスムト(云)ト(云者)ハ衍也臨之以莊則敬孝慈則忠ニテスムヲ敬(有)リ忠(有)リ食無求飽居無求安ニテスムヲ飽ン(事)ヲ求ル(事)ナク安カラン(事)ヲ求ル(事)ナクナド餘リ煩シ子來雲聚ト讀バ子ノ(如)ク雲ノ(如)クト讀ズトモスムベシ故ニ鼎鐺トシ玉礫トスト讀ミテ我ハ置クナリ詩ニ葛之覃兮(云)。施于中谷維葉萋萋(タリ)黃鳥于飛集于灌木其鳴(クヿ)喈喈(タリ)。孟子始舍之圉圉

焉(タリ)少(有テ)則洋洋焉(タリ)悠然而逝。ソノ圈ヲ設クル者無用ノ贅言ナリ省キテ可也タリトハ、トアリ、トナレリノ略言也、タリ、トシテ、ナド省キテ却テ本意ニ適フ所多シ世亂鬱鬱久爲客。路難悠悠常傍人ノ(トメ)ハナクンバアルベカラズ鬱紆(トメ)陟高岫。出沒(ノ)望平原鬱紆出沒ハ地形也(ノ)ヲツケタレバ人ノ樣ニナレリ飄飄(トメ)何所似。天地一沙鷗(トシテ何ノ)ト運スル法ハアルマジ此飄飄タル何ガ所似天地ノ間唯一沙鷗ノ意ナレバ(トメ)省クベシ朔雪飄飄(トメ)開雁門トアレバ雪ガヒラヒラトシテ雁門ヲ開キタル樣ナリ(トメ)ヲサレバ邊庭風雪飄飄タル中ニ關ヲ開キテ馬ヲノリダシタル勢アリ、カ樣ナルハ柏子合ヨリツケテ義ヲ考ヘザル故也何處秋風至ル蕭蕭送雁群六ツカシトテ略スベカラズ又カカユベキヲカカヱザル故離レ離レニキコユルアリ吹角當城片月孤トイハズ吹角當城片月孤也ト云此日登臨曙色開トイハ

ズシテ此日登臨曙色開ト云類通ゼザルニハアラズ意親シカラズ憶醉君家春草芳ナド憶醉君家春草芳。ナド讀タルハ已ニ支離ニ屬ス杕之杜、揚之水ノ之ハ之子ノ之ナリ如之何ノ之カアリ心之憂其ニサス所アリ皆讀ズンバアルベカラズ日食之ノ之ノ字虚字ナリ讀メバ通ゼス文字ニ點ヲツクルト假名ヲツクルト同ジカラズ點ハ本文ニソヘザレバカナハザル所バカリニ入ル義ナリ然ルヲ于於ノ字アルニ別ニ㊁ヲ點シ也ノ字アルニ又(ナリ)ヲ書キタル多シ又下ノマハサルル字ハマハシ様覺束ナシト思ヒテツクルコトアリコレモ點發ノ例ニ從ヒ本義ニハツケズ傍義ニツクベシ其其此此ノ如シコノコトハ貝原ノ點例ニモ見エタリ自自不ナドトアルモ點モト初心ノ爲ニ設ル者ナレバ苦シカルマジ猶豈況未蓋不ナド最無益ナリ、カクノ如クンバ一向假名ツケタルガマシナルベシ此理ヲ以テ類推セバ思半ニ過ベシ

餘義

和書ハ成式ニ循守ス經典ハツトメテ漢音ニス佛書ハ呉音也歴史諸子詩文雜家一定ナリ難シ最ヨミ難シトスココニ於テ音韻ノ古今漢呉ヲ辨ジ謬訛非奇時トシテ幷セ用ユ和漢儒佛ノ讀法處ニ從ツテ常式ナシ聖經實ニ漢音ヲ主トスレドモ前ニイフ如ク漢音ノ正行ヒ難シ故ニシバラク詩書易春秋ノ外他音ヲ雜ヘザル事能ハズ序文注文愈下ラザル事能ハズ故イカントナレバ其間雜家佛俗語一一一雜レバ也且近來諸先生嘗ニ臨ミテ漢音ヲ用ヒ平生ノ稱讀曲ニヨルヲ故實トス大學孟子論語家語禮記詩經月令檀弓公羊淮南通鑑鄭玄杜預孔穎達ナドノ如シ古讀ナレドモ孝經曲禮ハ用ヒズ孝經曲禮ト云樊須ヨシ須ハ古呉音

○子曰ノ字古來シノノタフマクト讀ミ來レ

リ以テ成式トシテ用ルモ然ルベキカサレドモ梅園ノ讀法ニハシイフト稱ス蓋今世ニヨム所モマタ一ナラズシノノタフマク、シノタフマク、シノタマハク、シノタマフ、シイワク、シイフ也其ノタマフト云者ハ宣賜（ノリタマ）フノ意ニシテ其謂（イヒ）ヲ尊ム也畢竟生民以來孔子ノ如キ聖人アラザルヨリシテコレヲ尊崇シテ訓ヲカヘタルナルベシ夫聖經ヲ讀ムノ義ツトメテ古先生聖王ノ禮義ニ適フニ志ス和典ノ成式ヲ守ルト同ジカラズ今論語ノ書法ヲ考ルニ孔子門人及凡凡ノ人ノ問ノ對ニ皆子曰トアリ魯公ハ勿論當時列國ノ君其外季孫氏等ノ問ニ及ブマデ例ヲ變ジテ孔子對曰トアリコレ貴キヲ貴ム也ソレ孔子ハ祖述堯舜憲章文武伏羲神農黄帝已ニ易傳ニ出、堯舜ヨリシテ下禹湯文武周公世ニコレヲ聖人ト稱ス故ニ是等同ジクノタフマクト稱ス然シテ稷契ハ堯ノ兄弟益皐陶ノ德皆堯舜禹ト咫尺ノ間也

然シテ太公望ハ文武ノ師也成王ハ周公ノ君也豈ノタマフヲ降スニ忍ンヤ今君親ノ前ニシテ君親ノ尊ム所ヲ慢ス亦君親ヲ慢スルニ近カラズヤ伊尹モ亦經中已ニ元聖ト稱スノタマフヲ降スベカラズ然レバ則太甲ハ伊尹ノ君トスル所亦降シ難シ太甲已ニノタマフナレバ夏啓武丁モ亦ノタマフ也夫論語ノ書タル實ニ孔子ヲ宗トストイヘドモ君臣上下ノ分ハ亂ルベカラズ豈子路門人ヲシテ臣タラシムルノ過ト齊シキ事ナカランヤ且記者孔子對テ曰ト改テ書タル所ノ如キ魯及齊衛ノ君季孫氏ノ類孔子降スベキカ夫（カノ）人ノ徒アグベキカ是ヲ難義トス大ニ書法ノ意ヲ失スルニ似タリ夫曰ノ字ノ本義褒貶ノアル所ニアラズ只イフト云者此字ノ本義也コレヲ悦バシムルニ道ニ非ザルヲ以テスルハ君子ノ悦ブ所ニアラズ聖人ヲ尊バントナラバ其道アルベシ豈當ラザルノ言ヲ設ケテコレヲ貴

ンヤ又コレヲイハクトシテイフト云者ハ近來諸家問ヲ意フ爲トヨミテ、トハク、ヲモヘラク、スラクト云言ヲ用ヒザレバイフノミイハクト讀ムベキ樣ナシコレヲ以テ今問フ意フノ例ニ從フナリサリトテ和書國字ノ書カタク共通リニ書ケルハコノ例ニアラズ漢典ハスベテ一例ニ從フ

○國人世ニ國民トヨム者ハ伊勢物語ニソノ女、世人ニハマサレリトアルヲ玄旨法印闕疑抄ニ世ノ人トノノ字ヲ入レテヨムベキ也後字多院ノ御諱世仁ト申セシヨリノチ文字ヲ入テヨム事ニナレリ五經ニモ國人ヲクニタミト讀ムモ後嵯峨院ノ御諱ナルベシトアリシカレバ世ノ人國タミト讀ムベキカ然レドモ經書ハ專義ヲ禮ニ斷ズベキ也天子トイヘドモ萬世名ヲ諱ムノ禮ナシ禮ニハ舍故而諱新トモ逮事父母則諱王父母。不逮事父母則不諱王父母トモアリコレ周公孔子ノ法ナレバ學者循守スベキ事也決シテ無禮ニアラズ

○事ヲ世ニツカフマツルトヨム也サレドモ漢典ニテハツカフルトヨミテ事足レリ續日本紀ナドニモ奉仕トカケリツカヘタテマツル也兩字ノ義也弄持遊挑搖上ナド兩字ノ義ヲ一字ニ訓セルモ多キ事ナレドモ前ニイフ如ク漢典ハ省キテスム所ハ省キテ可也故ニ漢典ニ點ヲツクルト國字ヲ書スルト同ジカラズ國字ヲ書スルニハタトヒ文ヲ修スルニハアラズトモ少シ遊アルベシ漢典ヲ讀ムガ如キハ急迫ナリ漢典ノ點國字ノ書ヲ讀ガ如キハ緩慢也

○幾多幾ヲイクバク幾多幾許イクソバクトヨムモヨシ古歌ニアシベコグタナナシ小舟イクソタビ行歸ルラン人モナミ

○句讀句ハ大ギレ也讀ハ小ギレ也讀モ句モ一樣ニ傍ニキリタルモアリ句ハ傍讀ハ中ト分チタルモアリコレ本法也句讀ノ別和歌ニ

テイハンニ　秋ノ田ノ。カリホノ。イホノ。苫ヲ。アラミ。我衣手ハ。露ニヌレツツ。

○州ノ字漢典ニ於テ連聲ヲ以テ濁ル廿州:揚州:ナド也サレドモ本邦ノ州名連聲ヲ用ヒザレバ清音モ亦可ナラン

○有喪者、有禮者、君子者、將命者、守門者、皆音ヨシ養老ナド禮ノ名也訓讀スベカラズ

○藐姑射和書ニハハコヤトヨメドモ藐音莫射音亦

○卒人ノ死ヲ卒ト云ハ士聿反シユツ也ソツトヨメバ倉卒士卒ノ卒

○人物ノ名稱思ノ外ノ音モアリ又嫌シキモノナリ一隅ヲ擧テ他ヲ例ス黑怡音眉怡孤竹ノ君ノ姓後漢司　王況アリ玉音肅冒頓音墨特萬俟音木共夷人ノ複姓三國ノ時暨艶輟耕錄音結トス後漢書ニ鸞鳥縣アリ鸞音爵僻怪ナル者ハ姑置ク近ク用ル者ニハ胡毋氏毋丘氏綦毋氏音無ニシテ母ノ字ニアラズ地ノ諸馮人ノ馮婦輟耕錄ニ皆皮氷切トアリ祭遵ノ祭ハ側界反ニシテ祭祀ノ祭子例反ト同ジカラズ咎繇ハ皐陶ト同字ニシテ咎姑勞反咎犯ノ時ハ舅犯ト同字ニテ咎巨九切陶潜雍陶姓ノ時ハ音挑名ノ時ハ音遙劉向向秀姓ノ時ハ音餉名ノ時ハ音許亮切サテ名ニハ說、史記陳渉世家注凡人名皆音悅、且戰國衛策注、古人以且名者、皆子余反、盧綰ノ綰史記注烏版反唐房琯ノ琯唐鑑音注烏官反食其食、我ノ食音異、高適李適之ノ適、施隻切、可汗ノ可音榼ナル類、讀書ノ道容易ナラズ初學ノ徒草草ニ看過スル事ナカレ

○不ノ字漢音ヲ用ル者モ呉音ヲ用ル者モ天下通ジテ阜ノ呉音ノ如ク短聲ヲ用ヒテ不仁不義不道不直ナド讀習ハセリ定メテ古ノ博士等故アリテ讀習ハセル故アルベシト久シク疑ヒシガ今少シク誘スル所アリ蓋此字虞尤勦宥勿等ノ韻ニ收メテ甚多韻多義ナリ先

說文韻譜ニハ不上聲方久切トシテ不鳥飛上翔不下來也从一一猶天也象形トアリ不ノ字ハ誠ニ下ニ居ラヌ字也然シテ不下來也トイヘバ不仁不義ナドノ不ノ字ノ意モアル樣ニ見ユレドモ只フワフワト浮ム樣ナガ本義ト說タル樣ニ見エタリ事冗ニ涉ルトイヘドモ先正字通ニ依テ佗義ナル者ヲ擧テ本義ヲ沙汰スル助トスルコト如左

不漢音フ呉音フ ゥ上聲俯久切音缶與可否通王莽傳司監若此可謂稱不漢書叙傳以不濟可上諭其信註言宣帝命趙充國擊西羌充國不從固上屯田策以所不濟所可也又魏書李順傳世祖問朕此行師當克以不並與否同コレニヨレバ先此上聲ナル者ハイナ、イナムノ義也。

不漢音フ呉音フゥ平聲尤韻音浮未定之辭晉陶潛詩今我不為樂知有來歲不和語ニテ何レモイナヤト讀テ通ズル程ニ前ノ上聲ナル者トワカリカヌル也サレドモ俯久切ナル者ハ可ト云字ニ反スル字故ニ其上ノ意ヲサウデハナイトモドキタル辭也ココニテハ未定之辭トイヘバ不ノ字ノ上ノ字ヨリモハヤ定ラヌ意ヲ帶ル也今ハテ樂ンダガヨヒワイノ今モシ樂マザルナラバ來年カフ有ラフヤラ有マヒヤラ知レヌゾノ意也古今韻會曰韓退窮文曰可數也不注平聲讀トアリ俯久切ノ上聲ナレバカゾヘラルルカサウデハナイカ也平聲ニ讀メバカゾヘラレフカカゾヘラレマイカ也意味アヒ餘程違フ也其佗ハ音義倶ニ別也

不ハイ灰韻音胚與丕通書大誥爾丕克遠省馬融作不與詩周頌不顯不承同ト云云是顯ナラズ承ズト讀テハキコエズ故ニ丕ニト讀テ置也朱傳ニテハ可不ノ不ニシテ豈ノ字ヲ加ヘテ反語トナシタルモモト此訓ヨリ來レルニヤト思ハル

不フ模韻音孚與柎通花蕚跗也詩小雅常棣之

萃、鄂不韡韡、又齊萃、不注山、因萃跌而比擬之、不讀如跌、胡傳讀不如〇、非、コレ不ヲ讀ンデ花ノウテナトスル也

不又晉書汲郡人不準諸韻書音浮トシタルヲ正シテ音彪トアリ彪ノ字ノ事ハ前ニ辨ゼリ

不又音符古詩日出東南隅行、使君謝羅敷、還可共載不、叶下夫愚、コレハ尤ノ韻、音浮ナル者ノ義ヲモチテ夫愚ニ叶ハセタル也

不上聲紙韻音彼、荀子賦篇、君子所敬、而小人所不、註謂小人所鄙也、與可否之否音別義通、與否滅之否音同義別、也字彙ニハ叶韻トアリ音ハ否滅ノ否ニシテ義可否ノ否ノ義トスル也故ニ注ニ鄙トアルハ敬ノ反ヲイヘル也

畢竟コレ餘義不仁不義不道不直ノ不ノ字ノ音義ヲ定ムル者ニアラズ不仁不義等ノ不字彙ニモ正字通ニモコレヲ本義トシテ最初ニ出セリ故ニ正字通說ヲ駁シテ此說曲而不通非不字本義トアリ蓋不仁不義ノ不ノ字ハ、ハク、フツノ二音ニシテフツヲ以テ支那音ハ通用スルトミエタリ字彙ニハ博木切音卜非也末也歟勿切音弗與弗同、ホクフツ少シ差別アル樣ナリ正字通ノ說ハ二音カハレル樣トモ見エズ不博木音卜、不然也、不可也、未也周禮服不氏、掌猛獸教擾之法、服其不服者、楊時偉、正韻牋、引入平聲尤韻不音浮非、又敷勿切、音弗、與弗同、今吳音皆然正韻、不亦作弗、韻牋泥孫氏定正、以沈約不音弗為謬、亦非トアリ又曰、不字、在入聲者、方音各異、或讀通入聲、或ハ讀杯入聲、溫公切韻圖、定為補骨切、今北方讀如幇鋪切、雖入聲轉平、其義則一也宋孫奕示兒編曰、文字中惟不字、關利害、韻書、府鳩方久二切、施于詩賦押韻、無不可者、至于官吏指揮民庶、將帥號令士卒鄉校教訓兒童、必以補骨切呼之、トアレバ不仁不義等ノ不、彼方入聲ニヨム事分明也此不ノ

字儒書中下ニ用ル事稀也佛書中ママアリ其一ヲ擧テ之ヲ例セン金剛經須菩提於意云何可以身相見如來不、不也世尊不可以身相得見如來上ノ不ハ句尾ニツク卽上聲俯久切呉音不ナル者下ノ不ハ句頭ニアツテ切韻圖補骨切ナル者卽下句世尊(不)可以身相得見如來ノ不也故ニ不也ト讀リコレハ字ノ置所常ナラヌ故點發ヲ用ル也其故ハフツト讀タレドモ不可以身相ノ不ハ本義マドフ所ナキ故點發音注ナキ程ニフツノ音ヲ不也ニ限リタル樣ニ讀ナセリト見エタリ同經ニ如來有慧眼不、如是、有法眼不、如是、不也、ハ此如是ニ反對スル字ニテ如是ハサウヂヤニテ有慧眼ヤト云時ソウヂヤ有ルト云位ニテコレヲ不也ニテ承レバ有慧眼ヤイヤサウヂヤナヒト云位也正字通ニ未也トアレドモ未ハイマダ云云セザルノ未ニアラジ未無ト通ズ無ノ字ノ意ナルベシ古今韻會ヲ檢スルニ不モ弗モ同ジク勿

ノ韻分勿切ニシテ不ハ無也集韻通作弗、通志ニ云、不本鄂不韡韡之不、音趺、因音借爲可不之不、音否、因可否之義借爲不可之不、音弗、此因借而借也シカレバ不ニ無ノ義アル也又文章ニ弗ノ字書タル處モアリ不ノ字書タル處モアリ不ハ意輕シ弗ハ意重シナド云說モアレドモ同音同義カハル事ハナシト思ハル切音圖補骨切ナレバ沒韻音ホツ分勿切ナレバ勿韻音フツ音異ナレドモ同義也コレニ因テ意フニ公山弗擾、公山不狃、同音ナル事明也然レドモ今通用シテ弗ハフツ不ハフト讀分チ來リ俄ニ分勿補骨ノ切ニ復シ難シ彼方ニテモマギラハシキ事有シニヤ古今韻會ニ不ノ字古有二音讀如缶者方浮之轉聲也讀如俯者方于之轉聲也今俗皆逋骨切宜無古音也トアリ正字通北方ノ方音割鋪切ノ平聲モアリサレドモ今不ヲ平聲ニモ用ヒ難シ因テ今姑ク讀法ヲ立テテ曰玉篇ハ唐時ノ音不ノ注逋負切（負房久切 音ヒウ中）

略スレバ音フウ音ブ濁チ正トス　呉府牛ニ切鳥飛上翔不下來也又弗也詞也ト同義ニ釋シタレバ漢人入聲トナシテ讀モノヲ姑置テ玉篇ニヨリ有ノ韻上聲トナシ漢音フウ呉音フトナシテ讀ム已事ヲ得ザルニ出スモシ達者アリ辨析シテ當ヲ得ル者アラバ我スミヤカニ其說ニ從ハントス

○佛書ヲ內典ト稱シ儒書ヲ外典ト稱ス至當ノ言トモ思ハレズヤハリ儒書佛書ト稱シテ然ルベシ儒書ト稱スレバ廣キ事ニシテ必聖人ノ書ノミニ限ル事ニアラズ王充論衡ナド儒書儒書トイヘル雜書ニ涉リテ廣クイヘリ

今春池邊子呂、自鶴崎來就塾、以晉之讀書之法、頗與世異、問其故、爲書其梗槩、以貽之、謂之梅園讀法者、固陋之私、非抗之於四方之謂也、

安永癸巳秋八月

門人長田俊卿京師ニアリ不ノ字ノ義ヲ尋シム因テコレヲ龍草廬ニ問フ草廬ノ答ニ曰不ヲ漢音呉音トモニフウトトナヘ申ソロ然ルニ今ノ和人ハフートー音ニ唱ヘツケ申候事ハ漢呉和ノ別ヲシラヌ故不ノ字ヲ見レハイツモフトノミ唱ヘテ此フトハ何ノ音ト申事モ氣ガツカヌニテ候サル故ニ不仁不儀ナド漢音ニモ呉音ニモナル事ト存ジ候ハ大成チガイニテソロ不義不仁ノ不ハ入聲ニテソロ入聲ユヘフツト下ニツノヒビキナクテハナラヌ事ニテ候ヲツノヒビキナキハアヤマリ音ニテソロ然レドモ不義ヲフツギ不仁ヲフツジントヨムニ音便アシキ故フギフジントノミヨミ申候事ニナリシモノニソロ且又入聲トテフツクチキヲアラハニハイハヌガ日本ノ故實ニテ候ヨリテフジンフギトノミヨミ申ソロ又不義不仁ヲフギフジントヨミタルハ漢音ヂヤト思ヘルモ大誤ニテソロ不義ヲフギトヨムハ和音ニテソロ漢呉音ニテハナクソロ和音トイフ事ノアルヲ多クハ知

ラヌ人ノミニテソロ日本音ハ音ノミニテ韻ナクソロソレ故日本ノ音ハ一字ガナノ音ニテソロ漢（カラ）ノ人ニ一字ガナノ音ト申コトハ決シテナキ事ニテソロ尙委シキコトハ御咄ニ可申入ソロトアリ又今城周左衞門ナル人ニ問ケルニ其答左ノ如シ不ノ字字彙等ノ如キ後世ノ字書韻書ニハ本音不（フツ漢音　プチ呉音）トス弗ト同ジ且中華當時ノ音ミナ然リ故ニ岡島冠山ノ所著ノ唐譯便覽唐話纂要ノ類ノ華音プ或ハプツノ假名ヲ施ス然レドモ古キ字書韻書玉篇韻鏡シタガフ時ハ不（フウ）ノ音也ト龍野氏ノ論ハ和音ニ歸ス今城氏ノ說ハ古音ニ歸ス管見ト相合ズ因テ兩說ヲ合セ記シテ覽者ノ參考ニ供ス

安永庚子六月　三浦晉　重記ス

梅園讀法 終

子歳漫錄

豊後杵築　三浦　晉

芙蓉

爾雅、曰、荷、芙蕖、郭璞曰、芙蕖別名芙蓉疏曰、江東人、呼荷華、爲芙蓉、詩家稱芙蓉者、皆荷花也、荷花八出、駿之富士、八峰聳空、詩家指爲芙蓉、終芙蓉專名於富士、雖然山峯上尖下圓、若未敷蓮華、可以通稱芙蓉、閱大明一統志、華不注、在濟南府城東北、虎牙傑立、孤峯特起、李白詩曰、昔我遊濟都、登華不注峰、茲山何峻秀、綠秀如芙蓉、又九華山、在池州府青陽縣南、舊名九子山、唐季白以山九峯如蓮花、乃更名九華、其詩、天河掛綠水、秀出九芙蓉、又東泉山、在嚴州府淳安縣東北、其一支南出、曰紫瑞峯、當龍池之上、望之如青芙蓉、元洪震老詩、青蓮浴秋水、浮出龍王宮、又壽山、在金華府永康縣東、明李曄詩、雙澗橋老五老峯、分明朶朶翠芙蓉、又佳山、在紹興府蕭山縣西南、元張庭蘭詩、會稽之山天下無、宛如碧海浮蓬壺、佳山一朶更奇絕、半空涌出青芙蓉又崆峒山、在韶州府城南、宋孝朴詩、雲根秀出碧芙蓉、烟晃霞霏瑞靄中、又天柱閣、在安慶府、宋郭祥正詩、群山奔來一峰起、千丈芙蓉碧霄裡、又按衡州府衡山、盤繞八百里、有七十二峯、十洞、十五巖、三十八泉、二十五溪、九池、九潭、于鱗送人詩曰、青天七十二芙蓉、文徵明亦有白銀盤浸紫芙蓉、之句、可以觀矣、

王昌齡閨怨詩

閨中少婦不知愁、春日凝妝上翠樓、忽見陌頭楊柳色、悔敎夫婿覓封候、　女子養在深閨、迎爲人之婦、未知世路之艱難、雖前日嘗送郎之從軍於陌上而其意等閒、未知征伐之苦辛、離索之難期、由不知、而靚妝嬋妍以上樓焉、亦未有意于慕別望遠、上樓騁望之間、忽見前日送郎陌頭之柳色、未幾條長綠深、念時過物換、白駒過隙、春色易老、別路遙迢、良期程遠、百感一時湊、仍悔敎夫婿覓富貴、以私情欲罷夫之征伐、益見少婦之癡態

王昌齡西宮春怨詩

西宮夜靜百花香、欲捲珠簾春恨長、斜抱雲和深見月、朧朧樹色隱昭陽、　夜靜無人、花香襲人、而君王不可見、感舊憶今、春恨如絲、欲捲簾而望之、而終不捲、仍舊而垂、欲彈琵而寫情、而終不彈、徒斜抱之、竟夜傍徨、深見月色朧朧隱於昭陽宮樹中三四一下、結句倒裝、如此二詩、最用字之精巧者、

杜甫秋興詩

昆吾御宿自逶迤、紫閣峰陰入渼陂、香稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝、佳人拾翠春相問、仙侶同舟晚更移、彩筆昔曾干氣象、白頭吟望苦低垂、

秋興之作者、老杜在峽中感秋而作也、杜昔嘗與岑參兄弟泛舟於美陂而遊樂、又嘗進三大禮賦、玄宗奇之召試文章、詩及此二事、蓋其感秋、何以感、秋玄宗登極、勵精政事太平四十年、明宰賢相輩出、殆將比隆於貞觀、晚節志弛氣怠、姦權並進、終失天下、杜逢亂離而流落楚蜀矣、以艱難之日、想長安山川、佳麗繁華、舊遊之笑語歡樂、宛然在目、由哀夫姦邪竊祿、賢正去朝、故其意謂昆吾御宿之逶迤回遠、紫閣峰北、斜入渼陂、是想像所曾遊之景也而此地有田、有樹、由所見而言、鸚鵡者、巧言之鳥也、稻者、養人之穀也、而人不得食其稻、鸚鵡啄其粒、而猶其有餘、是姦邪巧言之飽於上、良民餒於下也、梧桐者、棲鳳凰之樹、而鳳凰已不棲、梧桐老矣、是君子已去、其棲亦老矣、賢正已去、姦邪亂國、因想夫佳人拾翠春相問、與遊侶同舟至晚不休、太平之行樂、不可復得矣、嗚呼少壯之日也、擒筆作賦以于明主、今也流落峽中、或吟其詩、或望其處、吟愈傷其懷、望不見其處、唯白髮低垂、將死此中、傷讒懷國數歡樂、感少壯無限情懷、

○古來說倒裝者舉此詩曰、當言鸚鵡啄餘香稻粒、鳳凰棲老碧梧枝而倒言云云、雖然鸚鵡粒者、言非人之粒、鳳凰枝者、言雖老非他鳥之棲也、雖如倒而意、實不倒、蓋倒裝唐人多此體矣、如杜尤不少、欲言五尺童高於黃鶴化爲老翁似白鳧則

言黄鵠高於五尺童、化爲白鳧似老翁、欲言久拚雙鬢如野鶴、則言、久拚野鶴如雙鬢、欲言得赴成都歸茅屋、則言、得歸茅屋赴成都、欲言尚有生長明妃村、則言、生長明妃尚有村、欲言留連細草侵坐軟、帳望殘花近人開、則言細草留連侵坐軟、殘花帳望近人開、欲言未從容相見故人、常閒寂獨愁多病、則言、多病獨愁常閒寂、故人相見未從容、欲言謀良夜醉欲縱酒、散紫宸朝初還家、則言、縱酒欲謀良夜醉、還家初散紫宸朝、欲言琥珀杯薄春酒濃、瑪瑙盌寒氷漿碧、也則言春酒杯濃琥珀薄、氷漿盌碧瑪瑙寒、欲言雪融城樓濕、雲去宮殿低、則樓雪融城濕、宮雲去殿低、李白清平調詞、本欲言衣裳想雲容想花而言、雲想衣裳、花想容、秋浦歌、本欲言緣愁三千丈白髮似固長、而言白髮三千丈、緣愁似個長、謂之三千丈者、猶燕山雪花大如席之口氣也、其外張說、若使巢由同此意、不將蘿薜易簪纓者、若使此意同巢由、不將蘿薜易簪纓也、王昌齡、遷客離憂楚地顏者、遷客楚地離憂顏也、張均、洲白蘆花吐、園紅柿葉稀、者、蘆花吐洲白、柿葉稀園紅也、許渾詩、山風吹盡桂花枝者、山風吹盡桂枝花也、

寧 附無寧毋寧

雲漢詩ニ圭璧既卒、寧莫我聽、朱注ニ寧猶何也トアリテ俗語ニドウシテト云ホドノ意也、後漢鄧禹傳ニ、盜賊群居、無終日之計、財穀雖多、變故萬端、寧能堅守者也、コレモ同意也、衞風ニ胡能有定、寧不我顧、コレハ箋ニ寧猶曾也トアリテスナハチ也後漢崔駰傳、帝謂竇憲曰、卿寧知崔駰乎、曰、斑固數爲臣說之、コレ曾ニ近カルベシサレド甞ノ字ノ義ニアフ論語ニ禮與其奢也、寧儉、喪與其易也、寧戚又與其媚於奥、寧媚於竈、朱注ニ不若不如ヲ以テコレニアテタリ説文ニ願詞也トアリコレ俗語ニイツソト云意ニカナフ論衡變虛ニ宋景公ノ時、熒惑守心、子韋曰、可移於民、公曰、民死、寡人將誰爲也、寧獨死耳、コレモ同意也、淮南說山訓ニ寧百刺以針、無一刺以刀、

潜夫論、貴忠寧見朽貫千萬、而不忍貸人一斗、コレモ上ノ意ノ様ナレドモタトヒト云意ニテ雖ト云字ヲ置べキ處ニ用キタリ後漢傳俊傳、上謂俊曰、今日罷倦甚、諸卿寧憊乎、鄧禹傳、鄧禹見光武、光武見之甚歡、謂曰、我得專封拜、生遠來、寧欲仕乎、コレラハナントト云意也、漢書霍光傳民間讙言霍氏毒殺許皇后、寧有是乎、趙充國傳、將軍士寒、手足皸瘃、寧有利哉コレラハ豈トイフ義ニ近シコノ故ニ楊烱詩ニ、寧爲百夫長、勝作一書生、ハタトヒヒノ意也李嶠詩ニ寧知天子貴尚憶武侯廳、トハ豈ノ意也明史文苑傳李夢陽傳、帝謂尚書劉大夏曰、若輩欲以枝幾夢陽耳吾寧殺直臣快左右心乎コレハナントシテドウソト云意也又無寧トモアリ左傳襄三十年、賓至如歸、無寧菑患、杜注言見遇如此、寧當復有菑患邪、無寧寧也、トアリ無寧又母寧トモカケリ毎母ハ語ノ助聲ニテ意義ナシ故ニ左襄二十四年、母寧使人謂子子實生我、而謂子浚我以生乎、トハサキノタトヒノ例也、

劉氏曰、觀呂子衡、(寧)(富)久貧者邪、三國志呂範傳

師古曰、後人(豈)(敢)復舉人(乎)後漢酷吏傳

子胥曰、何夫子之怒盛也、聞一女子之聲而折道(寧)有説(乎)

專諸曰、子視吾之儀、(寧)類愚者(也)、何言之鄙也、吳越春秋伍員奔吳

仲應曰、當知必死、故爲之耳、(寧)可以一人之命、救百姓於塗炭、三國表術傳

(寧)得自引深藏巖穴(耶)司馬遷與任少卿書

(寧)有利(也)、趙充國傳見上

雖信在質、(寧)(詎)可、春秋非左隱三

(寧)(可)不安己而移於他人(哉)世説德行

嘗附嘗曾

嘗經也、トアリテ過往タル事也、テニハニ過去ノシト云事アリコレ也俗ニハタト云譬ヘバ逢シ逢タト云類也コレヲ文ニ上スレバ嘗逢也論語、嘗從事於斯矣、史天官書、自初生民以來、

世主曷嘗不曆日月星辰、又封禪書、自古受命帝王曷嘗不封禪、嘗ハ辰羊切ニテ常ト同音ニテ嘗常トモニ漢音ハ淸呉音ノミ濁ナリサルニヨリ常ハツネヲ本義トスレドモ嘗トモ通用セリ酉陽雜俎支諾皐中何諷常買得黃紙古書一卷、又同、狂者信夫、盛署擁絮、未常沾汗、類也又曾モ嘗ト通ジ用ル也曾遊モ嘗遊ノ音也墨子親士、綏賢、忘士而能以其國存者、未曾有也、又修身、思利尋焉、忘名忽焉可以爲士於天下者、未嘗有也、共ニ同意也、王維集、借問迎來雙白鶴已曾衡岳送蘇耽モ嘗ナリ又將來ニ用キタルハ試ノ意ニテカツテノ意ハナシ孟子梁惠王齊宣王曰、我雖不敏請嘗試之、列子黃帝篇壺丘子、謂列子曰、嘗試與來、又曰、嘗又與來、ト嘗ハナムルト云字ニテ味ヲミル意ナリカツテト讀ベカラズ

[戰國策趙]齊威王(嘗)爲仁義(矣)

曾附僭嘗

說文、詞之舒也、字彙、咨登切、乃也、則也才登切、嘗也、又不料之辭、又反辭、トアリテ、スナハチ本義也、文選曾何足少留孟子、爾何曾比予於是、ト何曾曾何ノ異アレドモ、反意ハ何ノ字ニ歸シテ曾ハ說文ノ意ニモカナヒ乃ノ訓ニモ近カルベシ曹子建集、諫伐遼東表、曾何憂於二敵、何懼公孫乎、ト何ハ兩句ニヲキ曾ハ兩句ニ冠ラシムル語ナレバ意ヨクキコユ戰國趙策、左師公曰、老臣病足、曾不能疾走、モ是也、管子七、夷吾之事君、無二心、公曰、其於我也、曾如是乎、注曾則也、則能無二心如是乎、トアリ又毛詩、僭ノ字アリ

感切義曾ニ同ジ又嘗ヲ曾ノ意ニ用ヒタルモアリ書言故事、晉謝安造桓溫、溫甚喜、言平生、歡笑竟日、既出溫問左右、頗嘗見我有此客否、注嘗曾也トアリ論語曾謂泰山不如林放乎、又曾是以爲孝乎コレ反辭ニシテ豈ノ意也俗語ニテナントト云ニアタルベシ朱注曾是以爲孝乎

ノ曾ヲ嘗ト釋セリシカレバ曾ニ是以爲レ孝乎、ト聞ユザレド林放ノ章ハ嘗トナシテ解スベカラズ

曾是以爲レ孝乎 論語

驥曾以引ニ鹽車一矣、垂レ頭落レ汗、不レ能レ進、論衡狀留

故

故ハ字書ニ舊也事ノ因也トアリテフルキト云字ニテ前ニアルコトヲウケテ下ヲヲコス也カルガユヱトハカクカクアルガユヱ也カクアルハ前ヲ承ル也、ユヱハ下ヲ起ス也故ニ多クハ句頭ニ置リサレドモ句尾ニヲケルモアリ春秋襄三十年、某人會ニ于澶淵一、宋災故、也ノ類也佛書ニハ以ニ此因緣一故、ニナドト過半句尾ニ置リカトキリテルガユヱノ反シレ也ザルニヨリテ和書ニハ多クカレトヨマセタリ俗語ニソノケコノケト云ハカレノ反ケナレバ其故此故也コレ本義ナリ又ワザトト云意ニ用ヒタルアリ字書ニ固爲レ之也トアル是也コト

サラト訓ジ來レリ蔡中郎故斷ニ一絃一以問ニ文姬一ト云ガ如キハワザト一絃ヲ斷タル也論衡雷虛、人誤以ニ不潔淨一飮ニ食人一、人不レ知而食レ之耳、豈故擧ニ腐臭一以予レ之哉、如故予ヘバ之、人亦不ニ肯食一、又同物勢、儒者論曰、天地故生レ人、此言妄也、夫天地合レ氣、人偶自生也、猶ニ夫婦合レ氣、子則自生一也、夫婦合レ氣、非ニ當時欲レ得レ生レ子、情慾動而合、合而生レ子矣、且夫婦不ニ故生一レ子、以知ニ天地不ニ故生一レ人也、コレラニテヨク聞ユベシ畢竟自然ノ意ニ對スル也司空曙酬ニ張芬一詩、勞シテレ君故ニ有ニ詩人一贈、欲レ報愧レ不レ如、同意也、又固ノ字ニ通ズルアリ戰國策、豫讓謂ニ襄子一曰、君前已寬ニ舍臣一、天下莫レ不レ稱ニ君之賢一、今日之事、臣故伏レ誅、補曰、故固通、又大故薄故ナド云ハ大事細事也又モト故キドト云字ニテ前ノゴトクト云意ノ處アリナヲト讀リ杜甫詩ニ信宿漁人還泛泛、清秋燕子故飛飛、章孝標歸燕詩、舊壘危巢泥已落、今年故向ニ社前一歸ノ類也ナヲトヨメバトテ猶トハ意大ニタガヘリ世說鄧艾口

吃語稱芥芥、晉文王戯之曰、芥芥定是幾芥、對曰、鳳兮鳳兮、故一鳳コレラハ本元ナドト同ジコトナリ世説故是ノ字多シ

輒

輒正字也、輙ハ俗字也、說文、車兩輢也トアリ輢ハ車ノ旁也、車ト相倚意アリ故ニ字彙、車相倚也又忽然也トアリスナハチト訓セリ文選李陵答蘇武書、陵不難刺心以自明、刎頸以見志、顧國家於我已矣、故每攘臂忍辱、輙復苟活、韓文、自九月至明年二月之終、皆晨入夜歸、非有疾病事故、輒不許出、忽ハユルカセト訓ズコノ二條皆ユルガセノ意アリ常ニ用ル心ハ車相倚也、忽然也ノ意モ相兼テヲイヲイトヤガテト云意ニテ即ノ字ト對ス即ノ字ハ甚急ニ輒ノ字ハ意尤ユルヤカ也譬バ輒死トイヘバヤガテ死スル也即死トイヘバソノママ死スル也漢書得璽綬、不輒上、ハヨホドアヒヲ置タル也、三國志引魏氏春秋曰、成濟兄弟、不即伏罪、ハ早速罪ニ伏スルコトヲセズ也コノ不輒不即ヲ照シ合セ考フベシ三略、不為事先、動而輒隨、漢書蕭何傳、為令約束、立宗廟社稷、宮室縣邑、輒奏、上可許以從事、即不　奏、輒以便宜施行、同霍光傳、上輒怒曰、大將軍忠臣、先帝所屬以輔朕身、高誘呂氏春秋序、故復依先師舊訓、輒乃為之解、論衡、儒者見鳳凰麒麟、輒而知之、則是謂見聖人輒而知之也、ナド考ヘシ故輒乃輒而トモツヅキタリ又動輒トツヅキタリヤヤモスレバスナハチト讀來レリサレドモコレハ上ノスナハチノ意ハナシ兩字相得テヤヤモスレバ也故ニ字書ニ輒ハ每事即然也トアリ二字ヲヤヤモスレバト讀ベシ

豈

廣韻、安也焉也、曾也、字彙、非然之辭、也俗語ニナニトテト云意也曾也トハ反辭トスル也曾也、豈意トハナニトテ思ハンヤトテ意ニ反スル也サレドモ史記滑稽傳、王曰、笑豈有說乎トハ

ナント說カアルカトツヨク責タル也大體豈ト云ハ哉ヲ應トスルガ通例ナリサレドイヅレノ字モアリ

(豈)非レ象ニ新垣等一(哉)　文選上書吳王

(是)(豈)人情(也)(哉)　孟子告子

仲尼(豈)賢レ於レ子(乎)　論語子張

其所ニ以得レ然者、(豈)(徒)人事(哉)　文選　論

(豈)(唯)與レ主、亂亡者亦如レ之焉、同

隱公之問、(豈)(止)爲ニ仲子一廟一而止(哉)　東萊博義

問羽

太祖得レ郃甚喜曰、昔子胥不ニ早寤一、自使ニ身危一(豈)若ニ微子去レ殷、韓信歸レ漢(邪)　魏志張郃傳

所ニ以守レ關者、備ニ他盜一也、日夜望ニ將軍一、(豈)(敢)反(邪)　漢書高帝紀

聖與レ仁、則吾(豈)(敢)　論語

(豈)以レ爲レ非レ是而不レ貴(也)　孟子滕文公

(豈)(惟)口腹有ニ饑渴之害一、人心亦皆有レ害、孟子盡心

當ニ亦謝レ官去一、(豈)(令)ニ心事違一、王維送ニ張五歸レ山詩

肯

肯敢トモニアヘテト訓スレドモ義大ニ同ジカラズ肯ウケアフ也論衡問孔、心服臆肯トアリ不肯ヲガヘンゼズトヨミ來レリ論語序說孟氏不レ肯レ隨レ郕ナリ戰國燕策、蚌方出曝、鷸啄ニ其肉一、蚌合而箝ニ其喙一、兩者不レ肯ニ相舍一、コレラノ處敢ノ字ニテハ聞エズ

廉如ニ伯夷一、(何)(肯)步ニ行數千里一、而事ニ弱燕之危主一乎、信如ニ尾生一、(何)(肯)揚ニ燕秦之威於レ齊、而取ニ大功一乎哉、戰國燕策

況　附矧況

況矧同義ニシテ前ノモノヨリ大ニシテ云辭也、イハンヤト訓セリマシテヤト云言ニカナヘリイハンヤトイヘバ下ヲヲヤトウクル也乎ノ字ヲ應トス通例也猶諸例下ニ出ス又滋也トアリテマスマストモヨメリ詩大雅、亂況マスマス斯削ラルコレ也別段ノ事也俗ニ况ノ字ト混ズ况ハ發語之辭、詩小雅、况也永歎、コレ也況ト相ア

ヅカラズ
好善優於天下、而(況)魯國(乎)、孟子告子
千乘之君、求與之友、而不可得也、而(況)可召(與)
孟子萬章
(況)(乎)以不賢人之招、招賢人、(乎)同
聖人不悅下愚、而(況)(乎)子胥、越絶書叙外傳記
父子猶然(豈)(況)兄弟(乎)漢晉春秋審配獻表譚夷見三國志注
夫帝有天下者、以荒而亡國、(況)諸侯(哉)有一其
荒、亦不免于亂亡之禍、(況)其兼(哉)天祿閣外史
色荒
善、鄭以勸來者、猶懼不蔵(況)不禮(焉)左隱六年
精神擾、自無所知、(況)其散(也)論衡論死
(何)(況)因萬乘之權、假聖王之資(乎)文選上書
是故我弟子不應生念肉想、(何)(況)食噉(也)法苑
珠林食肉部
(況)(乎)不得已者(哉)文選與稽茂齊書
(況)(乎)得失不可量(耶)蔡邕集諫伐鮮卑表
(矧)曰其克從先王之(烈)盤庚上

神之格思、不可度思、(矧)可射(思)詩大雅抑

微

論語、管仲相桓公、霸諸侯、一匡天下、民到于今受
其賜、微管仲、吾其被髮左衽矣、註微無也、左傳昭
元年、劉子曰、美哉禹功明德遠矣、微禹吾其魚乎、
同ジヨリテ某ナキナラバト云處ニ用來レリ
于鱗微吾竟長夜ノ類也又戰國趙策、左師公謂
太后曰、今三世以前、至於趙之爲趙、趙王之子孫
侯者、其繼有在者乎、曰無有、曰微獨趙、有在者乎、
曰不聞也、注微非也、トアリ微獨趙ト云意也
又公子牟且東、而辭應侯、應侯曰、公子將行矣、獨
無以教之乎、曰、且微君之命命之也、臣故且有効
於君同意ナリ

非

非ハ是ト對スル字ニテ是トサシテ云ウラ也
譬ヘバ物ヲ見テ石乎ト云ニ石ナレバ是トサ
シ石ニアラネバ非トサスコノ故ニ俗語ニソ
レデナイト云コトニアタレリ漢書李夫人卒、

上思念不レ已、方士少翁言能致二其神一、迺夜張二燈燭一、設二帷帳一陳二酒肉一、而令下上居二他帳一、遙望上レ見好女如二李夫人之貌一、還レ幄坐、而歩、又不レ得二就視一、上愈益相思悲感、爲作レ詩曰、是邪非邪、立而望レ之、偏何姍姍其來遲トアリ是耶トハ李夫人ニソレガ也非耶トハ李夫人ニソレデナヒカ也是耶非耶歌ニヨメハソレカアラヌカ也中庸、非二天子一、不レ議レ禮モ天子デナケレバ也不レ有不レ在ト訓同ケレドモ義大ニカハレリ

然附如若爾乎焉

然ハシカリト訓スシカリハシカアリ也シカハソノ通ナルコト也如若爾モシカリト訓ジテソノ通也、譬バ火ヲ指シテ火カト問ンニ人コレニ答ヘテ然リトイハンコレソノ通也如若ハ上ニシカリトスル處アリヨリテ然ノ字ヨリウスシ譬バ如レ火火ノ様ナド云ガゴトシ爾然ハ上ニ居ラズ如若ハ上下ニヲル上ニヲレバ似タル事ニナリ下ニヲレバ然ト通ズ然ノ字上ニヲルハ然ドモ然而ノ類ニシテ而ト通フ也サレドモソノ通ノ意也只句尾ニヲル寸ハ如若爾相通ズ乎焉モ同意也譬バ始舍レ之、圉圉焉、少則洋洋焉、悠然而逝ト云ヲ舍レ之圉圉爾、少則洋洋爾、悠焉而逝トモ圉圉如洋洋如悠乎而逝トモ圉圉若、悠爾而逝トモイヅレニモ置ルル也人ノ言ヲウケテ然トスルニハ兪モ通ズル也シカリトハソノ通也洋洋ノ字ニ然ヲツクレバ然ノ字洋洋タル事ニナリテソノ辭ノアソビトナル悠ノ字ニ然ヲツクレバ然ノ字悠ナルコトニナリテ其辭ノアソビトナル如レ由不レ得二其死一然ト置シモ不レ得二其死一焉トヲケルニ同ジコト也又通ゼヌ處モアリ自若自如ヲ自然トハ用ガタキ類也又然ノ字ニツキ思ヒ出セルコト書付侍ル夫戰國已來文教上ニ講ゼス言語モ名物モ只行ナリニナリハテテ終ニ一種ノ俗文字出來レリソノ文字ヲ繹スレバ義理ニモ叶ハズワケモシラレヌ様ニ

ナレリ今言ニサト云コトアリ即然ナリシカノ反サナクサリハシカリ也シカリハシカアリ也、然如然雖然雖然雖然然程然而有若人ナルベキヲ左左樣乍去去共去共去程扨偖去人ナドト書程ニ終ニサト云コトモシレズナリモテ行ヌソノ外嗚呼畏ナルベキヲ穴賢トナシ愛ヲ目出度トナス類鮎ノ年魚トナリ梭ノ筬トナルヨリモ愚ナリ又爲ト云ヲ尊長ニ對シテハ仕ルト云同等ニハ致スト云尊長ノ爲ルヲバ遊バズト云同等ノ爲ルヲバ成サルト云カハレル處ニ次第ヲバツケタルモノ也サレバ寢起ヲ御夜御晝トイヘバ上モナク尊ム言ト聞ユルヲマダタラデ御靜御目覺ト云樣ニ彌アヤシクイヤシキ言トハナリヌ

以

テニヲハハ和語ニバカリアルニアラズモト字ヲ運ブ者ナレバ漢ニモアリ只語異ルニヨリ用法同カラズ用法異ルニヨリ彼ニナキ所ニ我ニアリ我ニアル所ニ彼ニ無シテ彼ト此トヲ合シ難シ合シ難シトイヘドモ意ヲ潜ムレバ通ズル也、暫和漢通ズル所ニテイハンニ和ノテニハ而以故等ノ字通ズ和讀ハテニハニ働カセテ皆體ニナル字ヨリイフ漢ニハ體用字ノ上下ニテ働カセテ運字ヲ用ヒザルコト多シニニハ之於于越焉以等ノ字通ズ用上體下ニテニノ意其內ニ運スル也譬バ從義ト義之ニ從ト同キニテ知ルベシヲニハ之於乎以等ノ字通ズ又用上體下ニテヲノ意其中ニ運スル也譬バ問異ト異之問ト同キニテ知ベシハニハ者則也等ノ字通ズ又勢急ナレバ無テ通ズル也大學孔氏之遺書トシテモ大學者孔氏之遺書トシテモ同キニヨリテ知ベシ和語ニテハヲヲニトハヨマレザレドモ漢字ニテ運スレバ之ノ一字或ハヲニナリ或ハニニナルハ和語ニヲト限ルヲ或ハ以ニ合シ或ハ之ニ合スルト同キ也和漢ノ異也漢語ハ一字一

義ヲ具スル者故一字ノ尾働カズ運或ハ別字ニ託シ或ハ體用上下ニアリ和語ハ數聲ニテ一義ヲナス者故ニ一字ノ尾自由ニ轉ズ故ニトカク體字ヲ先ンジ用字ヲ後ニス此故ニ漢語ハ運下ニアリ和語ハ運上ニアリ其故ハ其本亂而末治者否矣。財聚則民散。是漢語運下ニアル也和讀ノ意ナレバ其本亂而末治者否矣。財聚則民散。如此サル故ニ漢字ヲ讀ニハ和漢ノ意ヲ兼テ―レバ―ト云コト則ノ字ニカナヒテ―ト云コト而ノ字ニカナヘドモ彼ハ言ノ首ニヲクヲ我ハ言ノ後ニ置寸ハ句讀モ切難シサルニヨリイヤニナレドモ其本亂而末治財聚則民散。ト讀テ漢字ノ運法纔ニ存スサレバ漢字ニテハ聚ト云タル寸字尾ニ運スル者ナケレバ聚リテカ聚レバカ知レズ和語ハ聚リ聚レバ聚リテトヨメバ早ココデ下ノ字ヲ呼出ス也サテ何トゾ運聲ヲカラザレバソノ字讀ベカラズ聽其言而信其行漢語ノ意也和語ノ

運法ナレバ其言之聽而其行之信是也怒室色市ト云ベキヲ左傳ニ室於怒市於色ト書タルハ彼ニテハ倒法ナレドモ和語ニテハ順也其外雖亦嘗可所也ナド委クハ本條ニ就テ考フベシ以ハスベテモツテ訓シ來レリサレドモ意ハ其處ニヨリテ一概ニアラズ先テ|ト云意ノ所多シ而ノ字モテ|ニテ大樣ハ通ズル也陶淵明歸去來辭兩句ヅツヲ上句ニハ以字ヲ用ヒ下句ニハ而字ヲ用ヒタリ雲無心以出岫鳥倦飛而知還ノ類也是ヲ雲無心而出岫鳥倦飛以知還ト置テモカハル意ナシ微以爲知訐以爲直モ此例也又ヲ|ノ運ニ協フ所多シ吾以女爲死矣以其子妻之ノ類ナリ又字ヲ隔テテモ此意ナル所アリ譬バ孔子以其子妻之ヲヲ|ノ字ヲ下ニウツセバ其子上ニヲリ孔子下ニヲルベシ其子孔子以妻之ヶ樣ナル處ニテ運法考フベシ堯曰咨爾舜天之曆數在爾躬云云舜亦以命禹舜亦堯ノ舜ニ命ジラレシ言以禹ニ

命ゼシ也子路問丈人曰子見夫子乎、丈人曰、四體不勤五穀不分云云見其二子明日子路行以告コレモ同例ニテ以ハ丈人ノ云タルコト爲タルコト以告セシ也夫顓臾昔者先王以爲東蒙主ノ以モ上ノ顓臾ノ字ヲモチテ顓臾以東蒙主トセシト也是等和語ニ訓シラレザレドモ意ハ通ズル也又用ノ字モ以ノ字ト通ジテ用ヒ來レリ易ナドニ多シコノ所和訓ノモツテノ訓ヨク協フ怨是用希トアリ虚字也俗ニニテ或ハデト云コノ所也以文會友以友輔仁孔子辭以疾ト云モ辭退ヲ病氣ト云以ナサレタル也蓮葉ノ濁ニシマヌ心以テ何カハ露ヲ玉ト欺クモ是也義以爲質禮以行之孫以出之不以言擧人不以言廢人カヘルトカヘラヌニテ主客輕重ノ意ハアレドモ譯スレバ此通也有一言而可以行之者乎以何而何ト以而而以トアルモ和語ニアテテ見レバ只デ也二字ノ義通ズル故也片言可以折獄者其由也與詩者

可以興可以觀コレ等讀ガタケレドモ意通ズ皆用ノ意也又故ノ義アリ楚辭屈原見放漁父見而問之曰子非三閭大夫與何故至於斯屈原曰擧世皆濁我獨淸、衆人皆醉我獨醒是以見放コレヲ何以至於斯是故ニ見放トカヘテモ通ズルニテモ考フベシ子貢問曰孔文子何以謂之文子曰敏而好學不恥下問是以謂之文ノ故用相通ズベシ因也トアリ字彙心以形役志以氣移理以欲昏性以情鑿ト云ヲ引ケリ畢竟以費畔以中牟畔モ是ナルベシ又只語ノ助聲マデニテ意ヲ具セザルモアリ子以柔繫于沼于沚于以用之公侯之事コレ也不知命無以爲君子モ同例ナルベシ左傳公及莒人盟于浮來以成紀好也トアリ公會于潛、修惠公之好也トアル同文法ニテ以字ヲ略スレバコレモ同例ナルベシ又不使大臣怨乎不以トハ用也古人秉燭夜遊良有以也トハ故也夫以伏以ハ意也視其所以ハ爲也無以則王乎トハ已也詩江有汜之

子歸之子歸不我以トハ傳能左右之曰以謂挾己偕行也トアレバ俗ニツルルト云言也左傳以孤而入モ是也此類ハ皆實字ニテ運義トアヅカラズ以上以來ハ因ノ義ナルベシ
莒人曰魯人朝夕伐我幾亡矣我之不共魯之以注以魯故也 左傳昭十三年
侈放之以 同十八年

國人

伊勢物語ソノ女世人ニハマサレリトアリ闕疑抄ニ世ノ人トノノ字ヲ入テヨムベキ也後宇多院ノ御諱世仁ト申セシヨリノ文字ヲ入テヨムコトニナレリ五經ニモ國人ヲクニタミト讀モ後嵯峨院ノ御諱ナレバナルベシトアリシカレバ世人國人ト讀ベキカサレドモ經書ハ專義ヲ禮ニ斷ズベキ也天子トイヘドモ萬古名ヲイムノ禮ナシ禮ニハ舍故而諱新トモ逮事父母則諱王父母不逮事父母則不諱王父母トモアリコレ周公孔子ノ法ナレバ學者循守スベキコト也決シテ無禮ニアラズ世人國人ト直ニヨムベキコト也

見說 附聞說解道

論衡道虛、世見黃帝好方術、則謂帝仙矣、又見鼎湖之名、則言黃帝採首山銅、鑄鼎、而龍垂胡髯、迎黃帝矣、コレニヨッテミヨ見モ亦聞也見說ヲミルナラクトヨメリ見ノ訓ヲ誤ルノミナラズ說ヲ虛字トナスモ非也トクヲキクト讀ベシ酉陽雜俎、見舶主說、見梵僧菩提勝說、ノ類證スベシ聞說解道皆此例也、李白詩、解道澄江淨如練、令人却憶謝玄暉コレヲ解スナラクトヨマセタル點アリシカラバ杜牧詩、却憶誦仙才格後、解吟秀出九芙蓉、コノ吟モナラクトヨムベシヤ

集

集詩經ナドニヰルト訓ジ來レリ集ハ聚也アツマルコトヲキルトモ云歌ニタキル雲ナドヨメリサレドモ詩經ナド必聚ルトノミ見ベ

カラズ論語翔而後集トハ山梁ノ雌雉トアレバ一箇也字彙ニ安也就也トモアリ止ル意也論衡道虚、魯般墨子刻木爲鳶飛之三日而不集、コレニテヨクキコユル也

破

老杜絶句二月已破三月來、萬齊融詩、計程頻破月、注盡也トアリ黄山谷詞天涯也得江南信、梅破知春近、破折ノ義ヒラクル也

思

兂字ヲ仄トシ活字ヲ平トスサレドモ唐劉廷琦詩、銅臺宮觀委灰塵、魏主園陵漳水濱、即今西望猶堪思、況復當時歌舞人、ハ活字ヲ側トナセリ元趙子昂萬柳堂詩、年把荷花來勸酒、歩隨芳草索題詩、誰知咫尺京城外、便有無窮萬里思ハ兂字ヲ平トナセリ

事

ツカフマツルト多クヨメリサレドツカフルトヨミテヨシツカフマツル續日本紀ナドニモ奉仕ト書リツカヘタテマツルノ兩字ノ義也尤弄ブ挑ルナド兩字ノ義ヲ一字ニ訓セルモ多キコトナレドモコレハサナクテスム處也

幾多

イクバク或ハイクソバクトモヨミ來レリコレ又苦シカラジト覺ユ古歌ニアシベコグタナナシ小舟イクソタビ行歸ルランシル人モナシ

靨

詩ニ多ク靨ノ字アリ酉陽雜俎前集ハ曰、近代粧尚靨、云云呉孫和寵鄧夫人、嘗醉舞、如意誤傷鄧頰、愈痕不滅左頰有赤點、更益姸也、諸婢欲要寵者皆以丹青點頰而進幸焉トアレバ今ノホフベニ也

姓名

馮婦　輟耕錄曰舜生諸馮又馮婦等皆皮氷切

曁艶　同三國時有曁艶、乃呉人附陸杭傳、當音

且　結不音暨也
戰國衞策有殷順且、注曰、古人以且名者、皆子余反如夏無且、唐且、龍且、且之類是也

食其　同魏策有司馬食其注音異基史記索隱曰、酈審趙三人、並以六國時有司馬食其、慕其名也、

扁鵲　酉陽雜俎云、扁布典切、今歩典非也、

絮　綿｜絮息據切曲禮｜羹抽據切姓漢有｜舜尼據切音女

祭　｜祀之｜子例切春秋｜伯後漢｜遵側界切

說　史記陳涉世家注曰凡人名皆音悅

適　太宰純曰高｜李｜之皆施隻切

瑯邪代醉編僻姓　䮾音萬　軤音呼　裼音喧　厙音敕
余音蛇　ゼ切彌也　䜹音盤　學拱　欣亥
糲昨　俞丑　賫孤　受倒　求義　叄陜

萬侯　同音木共夷人複姓

冒頓　同音黑特夷人複姓

玉況　同後漢司徒玉音宿

咎　咎繇ノ時ハ皐陶ト同字姑勞反也咎犯ノ時ハ舅犯ト同ジク臼九切字彙晉｜犯臼九切與舅同｜繇姑勞切姓也又作皐向秀劉向陶潛雍陶

炅　桂　香　炔　代醉編｜｜｜｜皆音炅

胡毋氏　毋丘氏　綦毋氏音無毋字ニ非

子蔵漫錄終

詩轍叙

蓋今之詩猶古之詩也。周家三百篇之與李唐近體。厥制裁雖異乎。厥溫柔敦厚之旨。則同揆而無二致也。我聖和亡論乎古昔矣。近世至治百五十年矣。於是乎大雅之音勃興。而海內作家。日月隆隆乎。夫盛也矣。是亡他。昭代雍熙之化之所致也哉。其既如斯。則其際有二三之寸俊者。深乎其道。熟乎其教。而能俾益學者也。予之所識。豐後國東三浦安貞氏。實其人也。博覽多識。文辭惟富。譔著惟夥。故嘗有關西夫子之稱焉。近着一書。名曰詩轍。自夫周詩楚騷漢魏六朝之作。逮唐之近體以來。宋元明清。及我聖和之上世。至今日。大凡所關系于詩之綷。盡其蘊。究其奧。細大亡殘。而論之評之。遂大成斯書矣。寔可稱諸家之金科玉條也哉。弊門下平野元仗生亦豐人也。幼而從學于安貞氏。故以客冬携斯書。來傳安貞氏之意。問叙于不佞公美。公美一粲卒業。擊節嘆曰。勤矣哉期書也。誠邦家之光也哉。夫龍、龠之瘞乎豐獄也。和璧之沒乎荊岫也。世無識者也。予之一讀斯書也。豈不雷煥陵陽乎。繡梓之舉胡晩哉。速焉速焉。乃蕪陋之言。冠卷首。以完上元仗氏云。

天明甲辰花朝

彥子前文學伏水人草廬龍公美譔併

書于時年七十也

詩轍序

詩可教歟。可教也。世有不用其教而爲之者。或直情徑行。或索隱行怪。有韻而文。其爲君子言何辨焉。然推推輪之始。葛天氏八闋。唐虞明良。鄉雲。其猶傚迯象星乎。感事而哦。觸物而賦。未見儵爚環瀞。七香五采之華。亦惟

直情徑行。有韻而文。是爲大輅之質也。蓋黃帝造焉。殷人質焉。周人飾焉。智創巧述。古詩有漢魏。近體有李唐。其軌既立矣。其軌既立。則一器三聚。六材以良。坎坎然用其力。惟日不足。審曲面執。甘苦應手。直者如生焉。繼者如附焉。規之以眡其圜也。萬之以眡其匡也。縣之以眡其輻之直也。水之以眡其平沈之均也。量其藪以黍以眡其同也。權之以眡其輕重之侔也。蓋軫梁輈輗軏具焉。玉象木革丹艧備焉。厹矛重英龍旂載焉。駿駿然四牡駕焉。雝雝然八鸞和焉。步趨有式。軒輊得所。是爲大輅之全矣。於是後君子不能變其以軌。乃範吾藝苑。其心以爲與其以不吾知者嘗吾技。則豈不得已。其無以嘗吾技者乎。則病者乎。寧爲之詭遇。一朝而得獲十禽。不如不詭遇。而終日不獲一之愈也。無有乎爾。則亦無有乎爾。惟其有之。唯以似之。故世代雖邈矣。則殷輅周與斯在焉。縱令超乘而上者。

猶且謂能不爲殷輅周與者。乃能爲殷輅周與者。是竟不能廢殷輅周與矣。而彼自暴自棄者。相誇相安曰。生斯世爲斯世。何世無情。何世無言。吾有眞性情。吾有活手段。吾不欲澆淳散朴。吾自我作椎輪之始而已。夫椎輪之始。豈有成軌可守。文飾可尙有乎。直情徑行。索隱行怪。無可忌避焉。何必役役然敝精神。徒爲不可嘗之技。乃所成不遇假漢魏似李唐。而爭髣髴於與骨已朽之人哉。是無他焉。徒知大輅之質。而未知大輅之全也。乃不分虎豹之鞹。與犬羊之鞹異。易豆屨以璧珪。有君子彬彬之言。獨拾其齵者。戇者。歊者。柞者。摰者。材不完者。月不稱者。轂不眼者。幬不廉者。蚤不正者。自爲珍焉耳。一何陋也。　三浦山人。以其塵垢粃糠。陶鑄此編。不遑顧夫自暴自棄者。乃憫將用其教。而若未得之者。而不秘授之剞劂氏焉。且以余託名於末契。兼使訂金根。又啓行其首。余於　山人。幸同時。

竊有遂秣馬執鞭之忻慕。則不欲辭也。嗚呼此編也。其愼爾而下迴者。其說圓也。其擧爾而纖者。其說精也。其樸屬而徹至者其說正也其般畝而馳不隊者。其說確也。其積理而堅。踈理而柔者。其說明也若讀此編者。執古御今。則澤而杼。山而侔。以廟以郊。國中以策彗郵勿驅。塵不出軌。輪轉轍成。不債於大風。城門齧焉。鮒魚處焉。奚仲家伐而合天下之轍。轍乎轍乎。其始可與敎詩已矣。

天明改元之冬陽月

友人　日出藩文學　喬維嶽　撰

吳超程赤城　書

詩轍目次

詩轍卷之一

豐後　處士　國東郡　三浦晉　安貞　著
友人　日出藩　喬維嶽　彥駿　閱

大意

爾ノ曹黄口、佔僤ノ暇、亦詩作ルコトヲ學バント欲ス、其志嘉スベシトイヘドモ、余詩ヲ能スル者ニ非ザレバ、爾兒輩ノ爲ニ、正シク表シテ南ヲ指スコト能ハズ、然リトイヘドモ少年輕薄、未先賢作詩ノ故轍ヲ繹ネズ、僅ニ時師ニ、二四不同、二六對、夾平、下三聯ノ訣ヲ聞テ、妄ニ佗人ノ作ヲ議センコトヲ恐ル、因テ匆匆ニ先達作詩ノ正變、循フベク避クベキノ例ヲ擧テ、コレヲ指授ニ代フ、唯學淺ク書乏ク、其意ヲ經ル所モ匆匆ナレバ、意フニ謬誤多カルベシ、只爾ノ曹、稍稍書ヲ讀事ヲ得バ、宜ク成書ニ就テ檢校スベシ、何ヅ再兔園冊子ヲ用ンヤ、蓋此書、近體ヲ語ツテ、古體ニ及バズ、常格ヲ審ニシテ、僻怪ニ略ス、其諄諄トシテ苦口ニ之ヲイフ者ハ、本爾黄口ノ爲ニシテ、之ヲ成立ノ士ニ告ルニ非ズ、爾ノ曹速ニ書ヲ續コトヲ得テ、之ヲ以テ醬ヲ覆ハンコト、是我素願ナリ、

詩起

蓋詩ハ、毛詩序ニ、詩者、志之所之也、在心爲志、發言爲詩、文心雕龍ニ、樂府、凡樂辭曰詩、詩聲曰歌、トイヘリ、故ニ詩ハ、志ノ言ニ發スル者ニシテ、言フ所ノ辭乃詩ナリ、言テ足ラズ、咨嗟咏歎スルノ餘、音響節族ヲナス者、迺歌ナリ、然シテ詩ノ經見スル者ハ、尙書股肱喜哉。元首起哉。百工熈哉。ノ虞舜ノ歌ヲ始トス、周家ノ風雅頌、楚ニ於テ離騷トナリ、漢代ニ至テ、五言蘇武李陵ニ起リ、七言武帝柏梁ノ詩ニ起ルトス、サレドモ明徐禎卿談藝錄ニハ、甯戚扣牛、已肇南山之篇矣、トアリ、甯戚ハ、齊桓公ニ事ヘシ人ナリ、爾來荊軻

樂府

易水歌、稍ク七言ノ體ヲ具フ、其佗古作ニ七言モアレドモ、後人書中ニ出タレバ、取難キ由、明陳無功ノ文章緣起ノ注ニイヘリ、若其淵源ヲイハヾ、書ノ五子之歌、鬱陶乎予心、顏厚有忸怩、五鄭風緇衣、適子之館兮、還予授子之粲兮、周頌敬之、日就月將、學有緝熙于光明、七言ナドナルベシ、サテ詩集ニ、古樂府ト、古詩ノ部ヲ分テル故ハ、上ニイヘル如ク、詩ハモト樂章ニテ、音響節族、金石ト相和シテ成ル者ナリ、其後漢ノ蘇李ナド、一體ノ詩ヲ作リ出シテ、樂官ニ領スルニモ非ズ、其文辭ヲ專貴ムコトニナリテ、樂府ニ在テ、金石ニ和シテ歌フ者ト、相共ニ吟咏シテ唱和スル者ト、二途トナレリ、其後詞客、又其筆力ニテ、樂府ニ擬シテ作リタル程ニ、其古詩近體ノ中ニモ、亦樂府ヲ題トセルアリ、李白玄宗ニ召レテ作レル三首ノ如キ、卽淸平ノ調ニテ、樂章

古新樂府

トナレル類也、故ニ今ノ詩トイフ者ハ、詩ト樂章ト雜レリ、是故ニ其作、蘇李以來、近體ノ作ト字句ノ法ヲ同ウセザル樂章ヲ、古樂府トシテ其部ヲ分チ、法ヲ同ウスル樂章ヲ、新樂府トシテ其部ヲ分タズ、是詩ト云、樂府ト云ノ差別ナリ、サテ漢ヨリ魏晉ニ移リ、五言專行ハレテ、七言ハ未盛ナラズ、

本邦詩起

本邦ニテハ、世ニ大津ノ皇子ヲ始トストイヘドモ、實ハ
淡海帝ノ皇太子、大友皇子、始テ詩ヲ唱給ヒテ、侍宴一絕、

皇明光日月、帝德載天地、
三才竝泰昌、萬國表臣義、

懷風藻ノ開卷ニ載タレバ、是ヲ濫觴トスベキ也、

古體近體

蓋詩ニ對ヲ用ユルト用ヒザルトノ二ッアリ、對無キヲ散詩ト云、對ヲ用ユルヲ儷句ト云、散モト古詩ノ體トイヘドモ、靑靑子衿、悠悠我心、覯閔既多、受侮不少、

「殲彼小醜、殪此大兇」三百篇ニ見エ、猶易ニ、水流濕、火就燥、雲從龍、風從虎、書ニ、滿招損、謙受益ナド出タレバ、由テ來ルコト久シ、詩文共ニ、古體ハ散體ナリシガ、魏晉以來、ソロソロト對偶ニナリ、六朝ニ至ッテハ、漢ノ雄渾、次第ニ靡縟ト麗シク、氣象大ニ衰ヘタリ、ソレヨリ唐ニ推移リ、其儷句ヲ其儘ニ用ヒ、ソレニ法度ヲ加ヘ、漢魏雄渾ノ氣象ニ復シ、一種ノ律ト云者ヲ創メタリ、重ネテ此事ヲ審ニ論ズルニ、五言蘇李ヲ始トシテ、蘇武已ニ、征夫懷遠路、遊子戀故鄕ノ聯アレバ、胎ヲ託スル事ハ、始ヨリス、サレドモ晉ノ陶淵明アタリ迄ハ、一體散詩ナリ、淸沈德潛古詩源、晉陸機ヲ遂開出排偶一家ト論ジタレドモ、其實劉宋謝靈運、盛ニ對儷ヲ用ヒ、齊謝玄暉ニ至リ、終ニ古體ヲ一掃シ、後世律家ノ基ヲ建テタリ、律トハ法度ノ謂也、律ト云字ノ出處ハ、尙

律原

書ニ、聲依永、律和聲ト云是ナリ、律實ニ唐ニ興ルトイヘドモ、其濫觴ヲ推セバ、齊謝眺王融沈約、聲病ヲ建テシニ起ル、唐ハ隋ノ禪ヲ受テ、天下ヲ有テリ、唐ノ世ニ、律詩出來タル程ニ、隋以前ノ詩、風モ、滄浪詩話ニ擧タル如ク、建安漢末、黃初魏、正始同、太康晉、元嘉宋、永明齊、齊梁兩朝、南北朝通魏周ナドノ、色色ノ體アレドモ、槩シテ之ヲ古詩ト云ヒ、唐ニ創メタル律ヲ、近體ト云、故ニ詩ノ大段、古體ト近體トノ二ツナリ、今ノ詩ヲ學ブ者、古體ヲ置キ、小律ヲ以テ詩門トスレバ、近體ノ法、爾少年ノ先ンズル所ナリ、故ニ說專近體ニアリ、偶古體ヲ說者ハ、唯餘波ノ及ブ也、古體、字ノ多少、句ノ長短、

律體

整齊錯雜定則ナシ、近體、字ハ五六七言ノ三等ニ定メ、體ハ律排律絕句ノ三體ニ定メタレバ、先其體三三ノ九ト見エタリ、其內、六言ハ其作微ナリ、諸家ノ選、多ク其門

ヲ設ケズ、是ヲ以テ近體、大槩五七言律排律絶句六體トイハンモ可也、而シテ七言排律モ、亦作者甚少シ、九體ノ外、六句ノ律ナキニ非ズトイヘドモ、其作尠ケレバ、五言律、排律、絶、七言律、絶、詩門ヲ設ルニ足レリ、近體ハ、韻必平ニ限ルニ論ナシ、サレドモ熟ク古集ヲ讀ムニ、變化ノ到ル所、側韻律ナキニモ非ズ、唯體ヲ具ヘテ微ナリ、又白氏長慶集ヲ看ルニ、格詩律詩ノ別アリ、而シテ格詩、又歌行雜體ト並ベイヘバ、五七言文字ノ整齊タルニ就テイフニヤ、又其集ノ部類ヲ考ルニ、律部ノ内ニモ、側韻體ヲ始トシテ、短古トモ云ベキ者共多ク雜ハレリ、今ノ律法ニ由テ考レバ、濫リナル様ナレドモ、長慶集ハ、樂天自元稹ト共ニ集メタル者ニシテ、是晩唐作家ノ人人ナレバ、古今ノ詩體ニ罔カラン様無シ、且意フニ、元白詩ヲ以テ一世ヲ風靡シテ、世人コレヲ元和體ト云、白ノ詩ニモ、制從長慶辭高古、詩到元和體變新トモ作リタレバ、一家ノ法定メテ有ルナルベシ、假令サリトモ、是ハ長慶集ノ法ニシテ、前説ニ非ザレバ、天下古今ニ通ズベカラズ、古今ノ通説ヲ繩墨トスレバ、先達ノ輯ムル者モ、古今ノ混淆ナキコト能ハズ、見ル人宜ク意ヲ留ムベシ、古詩、文字句數ノ定則無レバ、短古モ有トイヘドモ、大半長篇ナル故、律ノコトヲ、短作短述短篇杜短章白ナドトモイヘリ、然ルニ白集ニハ、七律ヲ屢長句ト稱セリ、五律中ニ此稱ナシ、而シテ七言古中ニモ、長句ヲ以テ稱セシコトアレバ、只七言トイフ事ナルベシ、然レバ則短ノ字ト相妨ゲズ、蓋古今ノ別、字句ノ數、定則アルト無トニ分ル、字句已ニ定則アリ、其法ナキコト能ハズ、其法一タビ立テ、後ノ作者コレニ由ラザルコトヲ得ズ、近體ノ法、

專聲律也、今詩ノ引證專唐ニアリ、足ザル所、宋元明淸ヲ以テ之ヲ補フ、淵源或ハ古ニ泝リ、餘波或ハ　皇和ニ及ブ、蓋當今ノ世、明李干鱗ノ唐詩選、詩ノ政ヲ海内ニナセバ、二三子モ亦諷詠メ、ヨク諳誦ヲナス、故ニ引證スル所、煩シク其詩ヲ錄セズ、其佗集ニアル者ハ、擧テ搜索ノ勞ヲ省ク、干鱗選中ノ詩トイヘドモ、偶コレヲ擧ル者ハ、指示ニ急ナル所アレバ也、古體近體ノ異、干鱗ノ選ニ就テ之ヲイフニ、沈佺期古意ノ詩モ、七言八句也、宋之問至端州驛題壁詩モ七言八句也、體ハ同ジ七言八句ナレドモ、法異ルニ由テ、古近分ルル也

體法格式

其法或ハ格ト云、或ハ式ト云、製トモ云、製ハ物ヲ製スルヨリシテイフ言ニシテ、法格式ヲ立ルノ意也、法格式佗アルニ非、正字通ヲ按ズルニ、格ハ式也、舊法也、式ハ取法也トアリ、故ニ體以テ法ヲ立ツ之ヲ格ト云、コレヲ式トイフ者ハ、法制舊キニ取ルノ謂也、故ニ體製先立テ格式乃定ル、詩律ノ成ル所也、之ヲ用ルノ道ヲ法ト云、昔周公、成王ヲ輔ケ、禮樂ヲ制作シ給ヒシニ、時移リ物變ジテ、其儘行ヒ難キコト有シトキ、時ノ君子、事ニ臨ンデ其宜キニ從ヒ、斟酌シテ用ヒタリ、是ヲ變禮ト云、ソレガ又後ニ至リテハ、其變又則トナリ、正變兩ツナガラ後進ノ式トナレリ、夫車ヲ用ル者ハ、道轍ニ從テ成ル、是之ヲ軌ト云、是ヲ以テ天下ノ車ヲ作ル者、前轍ノ製ニヨラザレバ、軌ヲ同ウシテ其道ヲ馳ルコト能ハズ、故ニ今縱然作者有テ、絶妙好辭先達ニ踰ルコト有トモ、故轍ハ改ム可ラズ、是ヲ以テ製トハ、字ヲ以テ句ヲ定メ、句ヲ以テ體ヲ定メ、體中聲韻ノ協和ヲ定ムル者ナリ、然メ後達者、其製ニ從テ驅馳スルノ間、正ヲ守リ奇ヲ出シ、或ハ聲韻ニ變化ヲナシ、或ハ對

律起先後

偶ニ錯綜ヲナシ、或ハ其禁ヲ犯シテ其正ト合シ、或ハ其變ヲ盡シテ其常ニソムカズ、猶後ノ君子事ニ臨ンデ禮ヲ變ジ、其變經ニソムカザルガ如シ、是妙技ノ致ス所、無法ト似テ同カラズ、亦後人ノ法トナル、是ヲ格ト云、法中格立ツ、後人ノ驅馳スル者、皆則ヲ此ニ取ル、千萬ノ變化、天地ヲ動カシ、鬼神ヲ感ゼシムル者、皆此外ニ出ズ、古人體製格法ヲ言テ、動モスレバ相混ズ、宣ク審ニ辨ジテ、誤ルコト無ルベシ、是ヲ以テ詩律學バズンバ有ベカラズ、律ハ總名也、分ツテ言ヘバ、律アリ、排律アリ、絕句アリ、陳隋以前ニ對シテ近體ト云、近體、五言ヲ先トス、七言ヲ後トス、律ヲ先トス、絕句ヲ後トス、五言七言トハ、五字七字ト云事ナリ、故ニ近體、字ハ五六七字ニ製ス、韻ハ平一韻ニ製ス、古詩ノ一言ヨリ十餘言、韻平上去入、意ニ任セテ、變化常ナキト同

千字律詩

宋明

カラズ、是ヲ以テ近體、句ハ四句八句ノ間ナリ、只排律、五韻ヨリ放ツテ、五言子美及ニ百韻、即千字也、然トイヘドモ、專長篇ヲ用ヒ、千字律詩ト稱セシハ、元白ニ成レリ、是元和年間ノ事ナル故、亦元和格ト云、故ニ長律ハ專晩唐ニ盛ナリ、宋ノ王黃州、敷衍シテ百五十韻ニ至テ極マル、七言排律作者希ナリトイヘドモ、施肩吾百韻ニ至ル、然レドモ是畢竟、文人才ヲ角スルノ事ニシテ、興象ノ道ニ非ズ、排ハ列ナリ、儷句ヲ數聯列スルノ義ナルベシ、サテ此三體字句韻法度アル故ニ、總テ之ヲ律ト云、サル故ニ李漢韓文公ノ作ヲ集メテ、絕句モ亦律中ニ收メタリ、南宋祝穆ノ事文類聚モ亦然リ、蓋近體ノ詩ハ、初唐ニ興リ、盛唐ニ盛ニ、晩唐ニ衰フ、是千載ノ定論ナリ、宋元明皆唐ヲ摸擬シテ、各別境ヲ開ク、宋ハ晩唐ヨリ因循スル者也、南渡ノ後、嚴羽卿ナ

例　體法格式

專聲律也、今詩ノ引證專唐ニアリ、足ザル所、宋元明清ヲ以テ之ヲ補フ、淵源或ハ古ニ泝リ、餘波或ハ　皇和ニ及ブ、蓋當今ノ世、明李于鱗ノ唐詩選、詩ノ政ヲ海内ニナセバ、二三子モ亦諷詠メ、ヨク諳誦ヲナス、故ニ引證スル所、煩シク其詩ヲ錄セズ、其佗集ニアル者ハ、擧テ搜索ノ勞ヲ省ク、于鱗選中ノ詩トイヘドモ、偶コレヲ擧ル者ハ、指示ニ急ナル所アレバ也、古體近體ノ異、于鱗ノ選ニ就テ之ヲイフニ、沈佺期古意ノ詩モ、七言八句也、宋之問至端州驛題壁詩モ、七言八句也、體ハ同ジ七言八句ナレドモ、法異ルニ由テ、古近分ルル也、其法或ハ格ト云、或ハ式ト云、製トモ云、製ハ物ヲ製スルヨリシテイフ言ニシテ、法格式ヲ立ルノ意也、法格式佗アルニ非ズ、正字通ヲ按ズルニ、格ハ式也、舊法也、式ハ取法也トアリ、故ニ體以テ法ヲ立ツ之ヲ格ト云、コレ

ヲ式トイフ者ハ、法制舊キニ取ルノ謂也、故ニ體製先立テ格式乃定ル、詩律ノ成ル所也、之ヲ用ルノ道ヲ法ト云、昔周公、成王ヲ輔ケ、禮樂ヲ制作シ給ヒシニ、時移リ物變ジテ、其儘行ヒ難キコト有シ日、時ノ君子、事ニ臨ンデ其宜キニ從ヒ、斟酌シテ用ヒタリ、是ヲ變禮ト云、ソレガ又後ニ至リテハ、其變又則トナリ、正變兩ツナガラ後進ノ式トナレリ、夫車ヲ用ル者ハ、道轍ニ從テ成ル、是之ヲ軌ト云、是ヲ以テ天下ノ車ヲ作ル者、前轍ノ製ニヨラザレバ、軌ヲ同ウシテ其道ヲ馳ルコト能ハズ、故ニ今縱然作者有テ、絕妙好辭先達ニ踰ルコト有トモ、故轍ハ改ム可ラズ、是ヲ以テ製トハ、字ヲ以テ句ヲ定メ、句ヲ以テ體ヲ定メ、體中聲韻ノ協和ヲ定ムル者ナリ、然メ後達者、其製ニ從テ驅馳スルノ間、正ヲ守リ奇ヲ出シ、或ハ聲韻ニ變化ヲナシ、或ハ對

偶ニ錯綜ヲナシ、或ハ其禁ヲ犯シテ其正ト合シ、或ハ其變ヲ盡シテ其常ニソムカズ、猶後ノ君子事ニ臨ンデ禮ヲ變ジ、其變經ニソムカザルガ如シ、是妙技ノ致ス所、無法ト似テ同カラズ、亦後人ノ法トナル、是ヲ格ト云、法中格立ツ、後人ノ驅馳スル者、皆則ヲ此ニ取ル、千萬ノ變化、天地ヲ動カシ、鬼神ヲ感ゼシムル者、皆此外ニ出ズ、古人體製格法ヲ言テ、動モスレバ相混ズ、宜ク審ニ辨ジテ、誤ルコト無ルベシ、是ヲ以テ詩律學バズンバ有ベカラズ、律ハ總名也、分ッテ言ヘバ、律アリ、排律アリ、絕句アリ、陳隋以前ニ對シテ近體ト云、

律起先後

近體、五言ヲ先トス、七言ヲ後トス、律ヲ先トス、絕句ヲ後トス、五言七言トハ、五字七字ト云事ナリ、故ニ近體、字ハ五六七字ニ製ス、韻ハ平一韻ニ製ス、古詩ノ一言ヨリ十餘言、韻平上去入、意ニ任セテ、變化常ナキト同カラズ、是ヲ以テ近體、句ハ四句八句ノ間ナリ、只排律、五韻ヨリ放ッテ、五言子美及ニ百韻、即千字也、

千字律詩

然トイヘドモ、專長篇ヲ用ヒ、千字律詩ト稱セシハ、元白ニ成レリ、是元和年間ノ事ナル故、亦元和格ト云、故ニ長律ハ專晚唐ニ盛ナリ、宋ノ王黃州、敷衍シテ百五十韻ニ至テ極マル、七言排律作者希ナリトイヘドモ、施肩吾百韻ニ至ル、然レドモ是畢竟、文人才ヲ角スルノ事ニシテ、興象ノ道ニ非ズ、排ハ列ナリ、儷句ヲ數聯列スルノ義ナルベシ、サテ此三體字句韻法度アル故ニ、總テ之ヲ律ト云、サル故ニ李漢韓文公ノ作ヲ集メテ、絕句モ亦律中ニ收メタリ、南宋祝穆ノ事文類聚モ亦然リ、蓋近體ノ詩ハ、初唐ニ興リ、盛唐ニ盛ニ、晚唐ニ衰フ、是千載ノ定論ナリ、

宋明

宋元明皆唐ヲ摸擬シテ、各別境ヲ開ク、宋ハ晚唐ヨリ因循スル者也、南渡ノ後、嚴羽卿ナ

ル者アリ、始テ宋詩ノ唐詩ニ非ザルヲ見ツケ、滄浪詩話ヲ著ハシタリ、明人ハ宋ノ弊ニ懲ルル者ナリ、故ニ豪壯富華、一跳シテ李杜ニ抗セントス、サレドモ明一代ヲ夷考スレバ、初明ハ調唐ニ近シ、谷宏、行經華陰、

雲開太華倚三峯。　積翠遙連渭水東。
遠塞雁聲寒雨外、　離宮草色暮烟中。
秦關日落行人少、　漢時天陰古樹空。
寂寞武皇巡幸處、　祀前木葉起秋風。

如此唐詩ニ髣髴タルモアリ、宋調ニ株守スルモアリ、世ノ所謂明調トハ、國初ノ劉基高啓ナドヨリ、次第ニ李夢陽、何景明、李于鱗、王元美ナドノ徒出デテ、之ヲ唐詩ニ復ストイトイヘドモ、其實亦一境ヲナス、今書ヲ學ブ者ヲ見ルニ、其始力ヲ窮メテ、其師ノ字形ヲ摸ス、稍ゝ字形髣髴トシテ、已ニ運筆ノ精神ヲ得ル事アレバ、字形舊樣ニ

使事

アラズ、終ニ已ガ字樣ヲナス、有才ノ徒、彼奴婢輩、主翁ノ命ヲ受テ奔走スルト、同カラズ、故ニ此徒、唐ヲ學ブトイヘドモ、實ニ已ガ詩ヲ作ル也、夫詩、唐虞ヨリ陳隋ニ至ツテ、其體屢變ジタリ、唐已ニ律ヲ製シテヨリ後、詩體ニハ替レルコトナシ、唯詩風ヲ論ズルコトニナリタリ、是亦勢然ラザルコトヲ得ズ、宋詩ハ、羽卿之ヲ論ジテ云、近代諸公、作奇特解會、以文字爲詩、以議論爲詩、以才學爲詩、夫豈不工、終非古人之詩也、且其作、多務使事、不問興致、用事必有來歷、押韻必有出處、讀之反覆、終篇不知著到何在、トイヘリ、詩ハ興象ヲ主トシテ、文字才學コレヲ輔クベキコト也、然ルニ興象主トナラズ、文字才學ヲ主トシテ作ルコトヲイフ也、使事トハ、用事ト同コトニシテ、故事ヲ使フ事也、故事ヲ使フ事ハ、古ヨリコレアルコトナレドモ、畢竟興象ヲ得

西崑體

テ、ソレヲ故事ニテ妝點スル程ノコトナリ、本詩人ノ本色ニ非ズ、然ルヲ唐李義山以來盛ニナリテ、宋人ハ巧ニ來歷ノ文字ヲ拈出シ、專故事ヲ用ヒタリ、之ヲ世ニ西崑體トイヘリ、又略シテ崑體トモイヘリ、サテ此西崑體、世ニ能イフコトナレドモ、其ワケシレズ、東涯ノ秉燭譚ニ考出シテ曰、西崑唱酬集ト云書アリ、宋眞宗ノ時、王欽若錢惟演等ガ詩ヲ集メ、楊大年序シテ曰、凡五七言律詩、二百四十七章、其屬而和者、又十有五人、取玉山册府之名、命之曰西崑唱酬集ト云ト、是ニテ明ナリ、王欽若等、李義山ガ詩ヲ好ンデ、金玉龍鳳等ノ字ヲ使ヒ、多ク故事ヲ用ユ、故ニ西崑體ト云ナリ、李義山ニ預ルニアラズトイヘリ、是ニテ察スベシ、今爾ノ曹、明人ノミ、盛ニ故事ヲ用ユルト思フハ、李義山及宋人ノ詩ヲ見ザル故ナリ、盛唐ノ諸公ハ、詩興象ニアリ、故

宋人用事

ニ用事ハ希ナリ、宋明ノ人ハ、故事文字ヲ主トシテ、興象是ニ由テ得ル故、故事主トナレリ、是ハ宋明同一病ニシテ、ヲナジク李義山ノ宗門ナリ、サレドモ用事ノ態ハ、宋明大ニ同カラズ、蘇東坡、悼其妾朝雲作、

不似楊枝別樂天、恰如通德伴伶玄、
阿奴絡秀不同老、天女維摩總解禪、
經卷藥爐新活計、舞衫歌扇舊因緣、
丹成逐我三山去、不作巫陽雲雨仙、

朝雲甞テ子有テ早ク夭ス、故ニ阿奴絡秀ノ事ヲ用ユ、然レドモ是猶遠カラズ、遠近等爭滕薛長、東西鷗背秦晉盟ト云ノ類ニ至テハ、其境ヲ開クコト大ニ別ナリ、而シテ宋元ニ變ジ、元明ニ變ゼリ、明人用事ノ

明人用事

體モ、元人已ニ其先驅ヲナセリ、虞伯生、輓文丞相詩、

徒把金戈挽落暉、　南冠無奈北風吹、
子房本爲韓仇出、　諸葛安知漢祚移、

雲暗鼎湖龍去遠、月明華表鶴歸遲。何人更上新亭飲、大不如前灑涙時。宋ノ舊色ヲ變ジテ、明ニユクノ漸見ツベシ、サテ滄浪、用事必有來歷、押韻必有出處、トテ譏リシハ、來歷出處ヲ嫌フニハ非ズ、サレバ老杜ノ詩ナドモ、一字モ來歷無キハナシトテ、後人譽タリ、詩家ノ禁忌ニアラズ、唯明人ハ熟套アリ、宋人ハ古今生熟ニ論無リシニヨリ、カクイヘル也、蘇東坡雪ノ詩ヲ賦シテ、凍合玉樓寒起粟、光搖銀海眩生花、是ヲ王荊公ニ見セケルニ、荊公、道書ノ肩ヲ玉樓トシ、目ヲ銀海ト云ヲ、用ルヤ否ヤト有ケレバ、東坡退ヒテ、荊公ノミ、只此出處ヲ知ルトイヒ、荊公モ亦其能事ヲ用ルヲ嘆ジタリ、是等ニテ考フベシ、サレドモ人各其智ヲ闘ハシムルハ、勢ノ至ル所ニシテ、全ク宋ニ始ルニモ非ズ、唐ノ時ニモ、韓定辭ト云者、鎮州王鎔ノ書記ト

シテ、燕帥劉仁恭ニ聘ス、劉韓定辭ガ知ザル所ヲ以テ困メントス、定辭先、盛德好將銀筆述、麗何堪與雪兒歌、ト作リテ、彼ヲ屈シタリ、蓋銀筆ハ、梁湘東王、筆ニ金銀斑竹ノ三品ヲ分チテ、德行精粹ナル者ヲ紀スルニ、銀管筆ヲ用タリ、雪兒ハ、歌舞ヲ能セシ李密ノ愛姬ト云、如此ハ、只廣記ヲ人ニ誇ルコトニシテ、全ク詩ノ正聲ニ非ズ、故ニ明人ハ、晉以上人ノ耳目ニ熟シタル者ヲ拈出シテ、瑣碎鄙俗、奇怪艱澁、其避ル所也、故ニ、風定軒窗飛豹脚、雨餘欄楯上蝸牛ノ如キ、宋人ハ奇巧トシ、明人兒童ノ語トス、押韻出處ノコトハ、詩人和韻數度ニ至レバ險韻ニ困シム、故ニ諸書ニ於テ、出處ノ字ヲ得テ新奇ヲ競フ、是ヲ以テ其風雅ヲ害スルヲ忘ンデ、云爾也、唐人ハ興象ヲ貴ム、宋明ハ用事ヲ好ム、然シテ宋人ハ踏襲ヲ忌ム、明人ハ摸擬ヲ務ム、宋人ハ道

理ヲ好ム、明人ハ道理ヲ忌ム、宋人ハ議論ヲ好ム、明人ハ議論ヲ忌ム、是其大ニ境界ヲ隔テ、仇讐ノ看ヲナス所也、宋ハ晩唐ヨリ因循シタル故、次第ニ痩細リ、ソレヨリ理窟ニ陷リ、儒者道ヲ説事、禪徒ノ偈頌ノ様ニナルモ出來レリ、朱子、

忽然夜半一聲雷。萬戶千門次第開。
識得無中含有處。許君親見伏羲來。

邵康節、禍如許免人須諂、福若待求天可量、ナド云様ニモナレリ、サレドモ宋朝ノ詩ハ、皆如此ナリト云ニハアラズ、劉原父、別官妓作ノ如キ、何ゾ盛唐ニ譲ラン、其詩、

玳筵銀燭徹宵明。白玉佳人唱渭城。
更盡一杯須起舞。關河秋月不勝情。

魏野、

尋眞誤入蓬萊島。香風不動松花老。
採芝何處未歸來。白雲滿地無人掃。

豈中唐ヲ失センヤ、林和靖、退筆、

神功雖缺力猶存。架卓珊瑚欠策勲。
日暮閑窗何所似。灞陵憔悴李將軍。

宋調ニ非ズト云ニハアラズ、幽味咀嚼ニ餘アリ、唐人ノ詩ハ、本富家ノ厨下ノ如シ、有ザル所ナシ、明人宋調ヲ分チテハ、素饌肉味ト分レタリ、譬バ、芹泥隨燕觜、花蘂上蜂鬚、仰蝶粘落絮、行蟻上枯梨、共杜ノ類ハ、素饌ニ歸シ、吳楚東南坼、乾坤日夜浮、杜甫山從人面起、雲傍馬頭生、李白ノ類ハ、肉味ニ歸ス、今明調ト云者ハ、嘉靖世宗隆慶穆宗ノ比ヲ盛ナリトス、今ヲ距ルコト二百年餘、我朝ニテハ、天文永祿ノ頃ナルベシ、明人ハ宋ノ弊ニ懲テ、之ヲ矯タル物故、唐人ノ雄渾豪壯ナル場ニ眼ヲ著テ、同感慨ニテモ、醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回。ニ擊節シテ、可憐無定河邊骨、猶是春閨夢裏人。ト云様ナルヲバ、甲斐ナシト見タリ、サルニ由テ、城頭一片西山月、多少征人馬上看、落日蒼

茫秋不斷、青天七十二芙蓉ト云様ノ景ハ有テ、無情有恨何人見、月曉風清欲墮時、（陸魯望咏蓮）卷荷忽被微風觸、瀉下清香露一杯、（韓偓池塘）ナド云様ナル境ヲバ、敢テ言ズ、畢竟此モ一時彼モ一時ニシテ、長短肥瘦各有態、玉環飛燕誰敢憎ノ謂ナルベシ、故ニ、萬物靜觀皆自得、四時佳興與人同（程明道）ハ、宋人得意ノ境ニシテ、悲歌碣石虹高下、撃筑咸陽日動搖（元美）ハ、明人得意ノ境也、宋人ノイフ所、明人言フコト能ハズ、亦敢テ言ハズ、明人ノ所言、宋人言フコト能ハズ、亦敢テイハズ、之ヲ平觀スル時ハ、魯ノ封父ノ繁弱モ、晉ノ密須ノ鼓モ、各之ヲ己ガ寶トストイヘドモ、其實ハ、共ニ之ヲ周室ニ得タル者ト思ハル、且又一首ヲ以テ、一人ヲ揜ス可ラズ、一人ヲ以テ一世ヲ揜フ可ラズ、故ニ其珉筵尋眞ノ唐ニ逼リ、忽然夜半ノ偶頌ニ陷ルモ、共ニ宋調ノ眞面目ニ非ズ、

儒者氣象

東坡、春宵一刻價千金、花有清香月有陰、王荊公、

金爐香燼漏聲殘、翦翦輕風陣陣寒、
春色惱人眠不得、月移花影上闌干、

以テ宋調ノ面目トナスベシ、滄浪詩ニ就テイヘバ、城頭一片、落日蒼茫、最唐ニ逼ルトイヘドモ、畢竟摸擬ニ出ル者ニシテ、此老ノ面目ハ、

憑將白雪寫朱絲、總是人間此調悲、
縱是霓裳君莫管、古來能得幾鍾期、

此首ニアルベシ、是乃宋明各唐人ノ外ニ、一境ヲ開ヒテ、一時ヲナス者然リ、サテ晩唐、李義山白樂天議論ヲ好ミシヨリ、宋ニ至リテ、理學興ルニ會シ、詩理窟ニ墮チ、性情道理ニ拘ハラレ、風雅ノ意ヲ失シヨリ、一種儒者ノ氣象トテ、世ニ忌ルル様ニナレリ、詩ハモト儒者ノ物ナリ溫柔敦厚詩ノ教也、今ノ人ノ、儒者ノ氣象トテ斥クル

者モ、舜ノ元首股肱ヨリ、五子之歌、三百篇、後ニ下リテモ、君子防未然、不處嫌疑間、瓜田不納履、李下不正冠、嫂叔不親授、長幼不比肩、ナドトモ云、子弟可不慎、慎在選師友、師友必長德、中才可進誘、百應遞司空圖色ヲ戒メテ、六龍飛轡長相窘、更忍乘危自著鞭、强チ宋人ノミヲ尤ムルコトニモ非ズ、宋ノ胡澹菴、骨鯁ヲ以テ十年海外ニアリ、北歸ノ日、湘潭胡氏ノ園ニ飲テ、十年許歸時一醉、傍有梨頰生微渦、ト作リシハ、侍妓黎倩ヲ指テナリ、朱文公之ヲ見テ、自警ルノ詩作テ、世上無如人慾險、幾人到此誤平生、文天祥元ニ囚レテ在シニ、元將張弘範、宋ノ張世傑ヲ招クベキ書ヲ、文天祥ニ賴ミケルニ、人生自古誰無死、留取丹心照汗青、ト書テ送レリ、元李世亂レ、賊江西吉安曠家ノ婦ニ逼リシニ、婦人壁ニ一詩ヲ題シ、其子ト共ニ自殺シケル聯、孤兒未必從佗

性情

姓、一女何曾侍二人、ナド、秋霜暾日、懦夫トイヘドモ奮起セントス、朝暮諷誦シテ肝腸ヲ洗滌スベシ、詩ノ以テ與スベキニ非ズヤ、聲ハ永キニ依ルニテ、聲調ハ最力ヲ用ユベキコトナレドモ、餘リ風調ニノミ泥ミテ、性情ノ正ト云ヲバ忘レ、雖敷獨向東方去、漫學佗家作使君、ト云樣ノ詩モ唐三百年中僅僅ノ作トナス、片手打ノ論ナルベシ、淸沈德潛、古詩源ヲ選スルニ、詩非諱理、亦何可悖理也、トテ、仲長統、畔散五經、滅弃風雅、ノ詩ヲ擯ケシ事、後世詩ヲ選スルノ法トスベシ、有德者ハ必有言ニテ、唐人、夕陽無限好、只是近黃昏、ト云モ、甚含畜アレドモ、明道ノ不須愁日暮、天際是輕陰、ト云ルハ、敦厚猶餘有テ覺ユ、カクイヘバ、宋調好キノ樣ニ我ヲ思フベケレドモ、近來餘リニ抑宋揚明タル故、斯ル辨モ入ル事也、是故ニ平觀ノ心ヲ以テ、各各其境ヲ

學詩

窺ヘバ、皆拾フベキ佳句アリ、數フベキ所アリ、漢魏三唐トテモ爾ナリ、又其上ニ人人ノ好尚モアル者ナリ、是故ニ、明ハ明ノ佳境アリ、宋ハ宋ノ佳境アリ、近體ヲ學バントナラバ、文選ノ詩ヲ讀ミ、李杜ニ本ヅキ、盛唐諸家ニ資テ、性ノ近キ所ヨリ入ラバ、詩以テ代テ變化ストモ、正的ニ誤ルコトアラジ、夫選集ト云者ハ、選者ノ好ム所主トナリ、選者ノ調ニ落ル事、勢ノ到ル所ナリ、然レドモ亦選集ニ非サレバ、諸家ノ氣骨モ具ヘズ、唐詩正聲、唐詩選、其好尚ニ落ル所モアレドモ、富麗高爽、選ノ傑然タル者也、先是等ヨリ入リ、諸大家ノ面目ヲモ窺ヒ、其外代代ノ詩集ニモ渉リ、變化ヲ觀、興象ヲ助ケ、歩驟ノ羽翼トナスベシ、道德義理ニ拘ハルコトハ、何レ人情ヲイフ樣ニハ、摸寫シ難キ者也、シカル故、道德義理ヲ述ルハ、贊銘古詩ノ流ニ宜ク、人情ヲイフハ、

詩變

今日ノ詩ニ宜ク覺ル也、夫唐人ノ詩ヲ賦スルハ、情ト景ト也、而シテ用事ハ情中ニ在リ、六朝ノ比、詩モ文モ對偶ニナリタル如ク、明ニ至ッテハ、文モ詩モ皆用事ニ成タリ、其ニ古人ノ面目ニハ非ズ、故ニ明詩用事ヲ主トス、情景其内ニアリ、是其別境ナル所也、王敬美ノ論ニハ、詩ニ古今ノ變アリ、兩漢ノ古詩、曹子建ニ至ッテ一變シ、又謝靈運ニ至ッテ一變シ、唐ニ至テ又大ニ變ズ、唐以後其變ヲ盡ス者アラズ、然レバ唐人ノ涎ヲ嘗メ、即景ニ意ヲ造ラバ、空拳ヲ張テ、市肆萬人ノ觀ニ當ラントスル也、故ニ今事ヲ用ル者、宋ヲ超ヘ唐ニ繼グ所ナリ、故事ヲ使フハ病ニ非ズ、故事ニ使ハルレバ是法華ニ轉ゼラルル也トイヘリ、其後袁中郎出デ、務テ王李ヲ排シ、白樂天東坡ヲ慕ヒ、又一家ヲナセリ、中郎ノ言分シハ、夫人文ハ、兩漢ニ質シ、詩ハ盛唐ニ質

ス、然ドモ兩漢ノ文ノミ吾文ニハ非ズ、盛唐ノ詩ノミ吾詩ニハ非ズ、中郎ガ文ハ、中郎ガ自爲セル文ナリ、中郎ガ詩ハ、中郎ガ自爲セル詩也ト、故ニ其詩ニ曰、莫把佗人來比我、同牀各夢不相干ト、其體之ヲ公安體トイヘリ、其後又鐘伯敬譚元春ナド出テ、公安ノ淸眞ヲ變ジテ、幽深孤峭トナス、之ヲ竟陵體ト云、今ヤ胡淸一統、太平百年、物窮レバ變ズル習ニテ、明人ノ百年萬里、紫氣黃金、山野蕭散ノ景ニモ、冠裳黼黻ヲ加ヘ、人ヲ送レバ、イツニテモ豐城ノ劍、雪ニ逢ヘバ山陰ノ棹、熟套百篇、同相ニ歸スルニ厭キ、宋詩モ再取ラレタリ、淸汪琬ノ意ニ謂、淸詩選序詩無唐宋一也、今四唐之初盛中晩二唐與宋、然宋詩出于唐、唯均是肉也、載雋菹脯羹、其大小精觕濡乾之質不同、而味同、其若酒若醪、若醯醢、所以佐之味不同ト、誠ニ寒逝キ暑來リ、秋去リ春至ル、自然ノ道理ニテ、嚴滄浪以下、能涇渭ヲ分ツトスル者、又混流ニ歸ス、歸スルガ如シトイヘドモ、淸ハ自淸ノ一境アリテ、復宋響ニ非ズ、熟套ヲ厭ヘバ、奇ニ落ツ、奇僻ヲ忌メバ、陳腐ニ歸ス、富麗ヲ惡メバ、枯瘦ヲ致ス、淡泊ヲ矯レバ、濃厚ニ過グ、勢ノ至ル所然ザルコトヲ得ズ、サル故ニ、詩風ハ代代ニ變ジテ、一定ナルコトナシ、然シテ其代ノ好尙アリ、其人ノ好尙アリ、樂天詩名ハ、一時ヲ風靡シテ、慕ハヌ者ナシ、サレバ大曆ノ比、一女子ヲ賣ル者アリ、其長恨歌ヲ唱ルヲ以テ、其價ヲ求ムル事數十萬、雞林ノ宰相、百金ヲ以テ其作一篇ヲ唐ニ求メ、日本君臣、其存ノ日ニ當ツテ、其詩ヲ以テ皆拱璧ノ看ヲナセリ、然レバ詩名ノ一世ニ高キコト、古今一人ト謂ツベシ、サバカリナリシ樂天ナレドモ、今ハ沙汰スル人モナシ、杜子美ノ詩、韓退之ノ文、當時ニ强チ賞ス

ル人モ無リシガ、杜詩ハ、韓退之元微之推尊シ、韓文ハ、二百年後歐陽永叔、壁角ノ弊篋ニ擧テヨリ、後世終ニ詩文ノ宗トナレリ、夫人我好マザル調ハ、下里巴渝トナシ、我好ム所ハ、陽春白雪ノ如ク思フ、彼我思ヲ易ヘ、好尙各異ル者ヨリ、市朝ノ士、山林ノ趣ヲ知ラズ、草莽ノ間、宗廟ノ美、百官ノ富ヲ見ザレバ、誠ニ莫向人前爭彼我、桃紅李白一般春、ナルベシ、嗚呼詞壇ニ登テ旗鼓ヲ執リ、文場ニ馳驅シテ鹿ヲ逐ントスル人ハ、左ニ挫キ、右ニ折キ、牛耳ヲ執テ主盟ト成ントテ、サモアルベキカ、吾儕田園ノ逸民、犢ヲ牽テ溪ニ飮ヒ、童ヲ携ヘテ圃ニ灌グ、月ノ夕、花ノ晨、物ニ觸レ、情ニ感シ、唯懷ヲ寫スルノ料ニアツル者ハ、興ニ乘ズレバ舟ヲ放テ行ク、興盡レバ棹ヲ收メテ歸ル、病無キニ呻吟セズ、自羽ヲ刻ミ商ヲ引クノ手無レバ、傍人ノ是非、我ヲ病シムルニ足ザルモ、詩人ノ情ニハ負カジト、自許シ侍ヌ、是故ニ此冊子、博ク索メ遠ク搜リ、備ヲナサントノ望モナク、爾二三子、兎ヲ獲ルノ蹄、魚ヲ獲ルノ筌トセント欲スルノミ、魚兎ニ於テ獲ルコトアラバ、速ニ此筌蹄ヲ棄ヨ、

○少年輩、敏捷ヲ以テ人ニ誇ル、徒ニ其德ヲ損スルヲ見ル、古人ニモ、閉門覓句陳無己、對客揮毫秦少游、トテ、遲ト敏ト、其ニ名ヲ傳フ、假令聲ニ應ジテ作シタリトモ、不美ナラバ何ゾ稱スルニ足ラン、若其傳フ可ンバ、生涯一聯ヲ得ルトモ可也、故ニ遲敏ハ姑置ク、只其巧拙如何ト觀ルベキ也、漢ノ時、枚皐ハ文章敏疾、長卿ハ制作淹遲ナリシカドモ、美ハ長卿ニ殘レリ、サレドモ一概ニハイフベカラズ、宋ノ元祐ノ頃、遼ノ使者來レリ、東坡ノ名ヲ聞テ、之ヲ困メントス、三光日月星ヲ以テ、屬對ヲ請

フ、東坡介者ニ謂テ曰、我對テ子對ズンバ、大國ノ體ヲ全スル所ニ非ズトテ、コレヲシテ謂シメテ曰、四詩風雅頌ト、使者愕ク、因テ徐ニ、某モ亦一對有リ、四德元亨利ト謂テ、貞ノ字ヲ言ス、使者口ヲ開ントス、坡曰、我豈其一ヲ忘ンヤ、今兩朝兄弟ノ邦ニシテ、卿外臣タリ、我仁祖ノ廟諱、豈犯スベケンヤト、使者大ニ屈伏シヌ、元初丘機山ト云者アリ、福ニ遊ブ、福人之ヲ屈セントト欲ス、五行金木水火土ヲ以テ、對ヲ請フ、機山口ニ隨テ對テ曰、四位公侯伯子男、四等ノ位ハ、公一位、侯一位、伯一位、子男同一位、孟子ニ見エタリ、明、劉文成初テ太祖ニ見エケルニ、帝方ニ食ニ向給ヒヒシガ、食シ給フ所ノ斑竹ノ箸ヲ擧テ、コレニ一詩ヲ賦セヨト宣ヒシカバ、文成直ニ、

一對湘江玉竝看、二妃曾灑涙痕斑、

ト誦シケル、帝秀才ノ氣味也ト宣ヘリ、文成猶未也トテ、

漢家四百年ノ天下、盡在張良一借間、

終ニ太祖ノ歎ヲ得キ、若事機會ヲ失セバ、縱令佳言麗句有トモ、賊過テ張弓ナリ、南禪寺ノ村菴、七歳ノ時參內シテ、不意來天上揮毫賦野詩ト作リシヲ、座中皆宿搆也トシテ肯ザリケレバ、折柄其朝雪ノ降ケルヲ、山亦朝來有愁否、須臾變作白頭翁ト賦シテゾ、衆ノ疑ヲ散ジケル、近來紀ノ祇園南海、早慧、十五歳ノ時、人光風霽月常惺惺法ト云テ、屬對ヲ求メシカバ、鳶飛魚躍活潑潑地ト對ヘケル、或時新題ヲ以テ、五律百首、一夜ニ作リシヲ、人宿製カト疑シカバ、再客ヲ會シ、題ヲ客ニ乞ヒ、續ヒテ一百首ヲ咏セシトカヤ、此輩此厄ニ方ッテ、若此機捷無ンバ、何ヲ以テカ此重圍ヲ出ン、已遲澀ノ才ヲ以テ、人ノ敏捷ノ美ヲ掩ハンハ、募母西施ヲ妒ムノ類也、機會ニ

六義

後ルル少年輩、己ガ拙ヲ掩ハントテ、佗ノ敏捷ヲ譏ルベカラズ、不恨自家麻縄短、只怨佗家古井深、此言宜ク一日三タビ復スベシ、

詩義

卜子夏詩序ニ曰、詩有六義焉、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌、今按ズルニ、賦比興ハ義ト云ベシ、風雅頌ハ義ト云難シ、左傳ニ三類ト云コトアリ、杜預コレヲ風雅頌ト註セリ、風ハ國風、周南ヨリ豳風ニ至テ、多ク里巷歌謠ノ作ニ出ル者ニシテ、天子巡狩ノ時、矢ネ観ル所、正風變風ノ別有トイヘドモ、總テ之ヲ一類トス、雅ハ朝廷ニ用ル樂歌ノ詞、亦大小正變ノ別アリトイヘドモ、是一類也、頌ハ郊廟ニ用テ其功徳ヲ頌スルノ樂歌、商周魯ヲ幷セテ一類也、樂歌ト云ハ、樂器ヲ揃ヘテ、歌フ所ノ詞也、謠トハ里巷ノ男女樂器ヲ待ズ、徒ニ歌謠スル者ナリ、サレドモ之ヲ樂官ニ入レテハ、樂器ニ和スル程ニ、朱傳ノ序ニモ、多出於里巷歌謠之作トアリ、故ニ詩經、風雅頌ノ三類ヲ分ッテ相混ゼズ、賦比興ノ三ハ、其類アルニ非ズ、唯詩ヲ製スルニ臨ンデ、此三義ノ外ニ出ルコト能ハズ、義トハ、俗ニ云ワケナリ、賦ト云ワケハ、其詩ノ作リ様、何ノ手モナク、月ヲ見テ哀レナレバ、月哀レナリト云、花ヲ見テ面白ケレバ、花面白シト、其儘述ル事ナリ、詩ヲ作ルニ、此様最多シ、故ニ詩ヲ作ルヲ、賦ストモイヘリ、比トハ、ヨソヘテイフ也、興ハ、物ニ觸テ其情ヲ興ス也、是定説也、然レドモ亦ココニ議無キ事能ハズ、竊ニ管見アリ、未之ヲ有道ニ正サズ、詩人玉屑ヲ見ルニ及ンデ、碧溪ノ説ヲ載ス、其大略ニ曰、六義凡詩中皆有、一曰風、非國風之風、（賦比興無異義）五曰雅、六曰頌、非大雅小雅之雅、商頌周頌之頌、

也、風風也、敎也、凡風化之所繫、皆風也、賦者、鋪陳其事、比者、引物連類、興者、因事感發、雅者、陳其正理、頌者、美而祝之、以詩考之、則采采卷耳、不盈傾筐、爲興、天生蒸民、有物有則、民之秉彝、好此懿德、爲雅、古人不必指事言情、而後警戒、其剛柔緩急、哀樂喜怒之間、風敎存乎其中、上以風化下、以風刺上、之ヲ讀デ、我ニ先立テ我心ヲ獲ル者アルヲ悅ブ、雖然其說未全ク同キコト能ハズ、因テ管見ヲ左ニ記ス、蓋子夏ノ詩ニ序スル、之ヲ三類三義ト言ズ、又風雅頌賦比興ト次デズシテ、風賦比興雅頌ト云、豈故無キコトヲ得ンヤ、蓋十五國風、大小之雅、周商魯之頌、三類最分明也、然レバ則唯賦比興ノミニ非ズヤ、然ルヲ唯賦比興ノミヲ義ト言ズシテ、風雅頌ヲ幷セテ義ト云、由是觀之、則三類トスル所ノ風雅頌ノ外、賦比興ト義ヲ相比スルノ風雅頌アリ、名混ズルヲ

賦

以テ、終ニ相擾ルノミ、是ヲ以テ其序ヲ風雅頌賦比興ト言ズシテ、風賦比興雅頌ト云、故ニ詩序其義ヲ解シテ曰、風者、上以風化下、下以風刺上、主文而譎諫、言之者無罪、聞之者足以戒ト、是豈國風ノ解ナランヤ、是以儒先古ニ雅頌トイヒ、南雅頌ト云コト有テ風ト連ネタルコト見エザレバ、雅頌ト竝ブ事無ト、一掃シタル說モアリ、又雅者、正也、頌者、美盛德之形容也ト、是風雅頌ノ義也、賦比興ト相竝ブ所也、賦ハ、其儘ニイフ事ニテ、譬バ李白峨嵋山月歌 詩畧 峨嵋山上半輪ノ月、影ハ平羌江ノ水ニ入テ流ル、因テ月ニ乘ジテ、清溪ヨリ三峽ノ方ニ向ヘバ、兩岸山聳テ、今夜ハ、月見テ渝州ニ下ラント思ヒシニ、清暉モ得見ズ下リシト、有ノ儘ニ作リタル也、賦ハ直ニ賦スル者ナレバ、隨分其境ヲ得ルニアルコトナリ、元稹、聞白樂天左降江州司馬詩ノ如

詠物

キ　詩畧　死ニ垂トスル病ノ牀、親友ノ遠謫ヲ聞ク時、燈暗ク雨窗ヲ撲ツ、一段ノ悽愴、人ヲシテ泣シメントスル者ハ、其境ニ入タル故ナリ、許渾、日暮酒醒人已遠、滿天風雨下西樓ト、異曲同工ト云ベシ、「詩家詠物ノ一法アリ、古賦皆一物ニ就テ、增衍附益スル者ナレバ、又賦ニ屬スベシ、蓋詠物ノ一體ハ、其物ヲ形容シ、賦序シテ摸寫スルニアリ、老杜、觀岷山沱江圖、五言排律、咀嚼スベシ、七律ニハ、張說、假松篇、王維、勅賜百官櫻桃、李頎、聞梵、杜甫、吹笛、五律ニハ、杜審言、和康五望月、杜甫、房兵曹胡馬、絕句ハ、溫庭筠、楊柳枝ノ類、皆然リ、此ニ擧テ一首ヲ例ス、唐王泠然、古木臥平沙、

古木臥平沙。摧殘歲月賒。
有根橫水石。無幹拂烟霞。
春至苔爲葉。冬來雪成花。
不逢星漢使。誰辨是仙槎。

雙關

是又題ヲ起句ニ用ヒタル例也、「又全題ヲ隱シ、其詩ヲ見テ、其物ヲ知ラシムル者アリ、所謂暗體ナリ、

我向君家尋自家。自家先得到君家。
君家不說自家事。見了君家見自家。

一語モ鏡ニ涉ルコト無トイヘドモ、分明ニ是鏡ノ詩也、然シテ三句重韻、亦奇法ナリ、「又二物ヲ詠ズルニ、上下ニ分ツテ詠ズルヲバ雙關法ト云、張祜、愛妾換馬、

綺閣香銷華廐空。忍將行雨換追風。
休憐柳葉雙眉綠。御愛桃花兩耳紅。
侍宴永辭春色裏。趁朝休立漏聲中。
恩勞未盡情先盡。暗泣西風兩意同。

風

此法猶句法中ニ詳ニス、可併考、風ハ、諷トモ同樣ニテ、有ノ儘ニハ得イハズ、善ヲ惡シトモ抑へ、惡キヲモ善トモナシテ云事アル故、諷諫トモイヘリ、張謂、杜侍御送貢物詩ノ如キ、詩畧　是南國ノ珍寶ヲ、上ノ御

用ニテ、段段催促アリ、杜侍御ソレヲ宰領シテ上ル者ナルヲ、然ハ言ズシテサレバ昔ハ銅柱朱崖ナド云南ノハテハ、人モ漫ニ行ザリシ處也シ程ニ、漢ノ比天子、大臣ヲ、伏波或ハ横海ナド云將軍ニ拜シ、辛キ軍ナド有テコソ、漸内屬ヲモシタリシ處ナルガ、今ハ聖澤廣大ナル故ニ、箇樣ナル南徼ノ人モ、此方ヨリノ敎諭モ待ズ、其境ヨリ出セル珊瑚樹ナド貢獻スル故、獬豸冠戴ケル侍御、之ヲ取次奉ルトテモ、何ノ勞スル事モアラズ、サレドモ遙ケキ處ナレバ、道路ノ間、山ヲ踰テハ、馬疲レテ前程ノ暮ニ及ブヲ愁ヒ、水ニ浮ミテハ、舟孤ニシテ春寒ノ風波、運漕爭ガ容易ナラン、昔老子モ、難得之貨ハ、貴ム事ナカレトアリ、古來南國ノ貢難得トイヘルコトナレバ、足下今如是辛苦シテ送來リ給フトモ、天子道路ノ艱難ヲ想像給ヒ、多分ハ御覽

譏刺

ゼラル丶ニ忍ビ給フマジト、タシナマセタル所、風諫ト云者ナリ、譬ル樣ニテ、刺ル意アリ、故ニ下以風刺上トモイヘリ、風ハ刺ルノ意アル者故、隨分溫厚ニ、圭角ナク、忠厚ノ意ヲ主トスベシ、刺ノ字、康熙字典ニ、詩大雅、天何以刺、毛傳、刺責也、風刺微文譏切、使聞者自感寤也トアリ、已ム事ヲ得ズシテ、ソシルトハ訓ズレドモ、責ノ意也、風刺ヲ譏ト云モ、左傳、季札觀于周樂、自檜以下無譏トアレバ、間然ト云程ノ事ト思ルル也、忠厚ノ意無レバ、其言出ス辭モ意劣リセラルル也、宋韓魏公、楊州ニ知タリシ時、王荆公簽判タリ、書ヲ讀デ旦ニ達シ、略假寐シ、盥漱ニ及バズ、府ニ上ル事アリシカバ、君少年毋廢書、不可自棄ト云ケルヲ、一生含ンデ、魏公薨ゼシ時、幕府少年今白髮、傷心無路送靈輀ト、昔ノ少年ノ語ヲ忘ザリシ也、魏公己ヲ知ザルノ短ヲ譏リ

比

テ、魏公ノ德ヲ損ゼズ、還テ己ガ薄キヲ、後世ニ顯シタリ、愼ザル可ンヤ、比トハ、老杜ノ詩ニ、風濤暮不穩、捨棹宿誰門、世穩ナラズ、恃ムベキ方ナキヲ、風濤ニ比シテイヘリ、張籍、逢賈島作ハ、是ヲ奪胎シタルナリ、

僧房逢著欵冬花、　出寺吟行日已斜、
十二街中春雪徧、　馬蹄今去入誰家、

是比シテ諷スル者也、賈島ハ、本無本トテ僧ナリシガ韓退之ニ勸メラレテ、還俗シタリ、定メテ張籍、雪後寺ニテ逢シナルベシ、折節逢タル僧院ノ、庭陰幽寂ノ間、欵冬花ノ、梅ノ初咲キナド云樣ニ、人ニ知ラルル物トモナシニ、開キタルハ、意ニ籠テ面白ク覺ヱツルニ、又俱ニ立出レバ、長安一面ノ雪ニ、夕日ソト陣キタリ、餘リニ雪モ深シ、何方ヘ立ヨリテ休マンヤト、相談シタル也、欵冬僧房ノ幽寂ヲ棄テ、日暮レ雪深ニ吟フ事カナト、比中風アリ、古說ノ樣ニ、欵冬ハ賈島、春雪ハ小人、日ノ斜ナルハ、時ノ昏キナド、一一比シテ見ルハ、穿鑿ニシテ、風人ノ義ヲ失ス、比ハ佗物ヲ假テ此物ニ比スル也、送君還舊府、明月滿前川、トハ、趙氏ヲ送ルニ依テ、趙家ノ故事ヲ用ヒ、折カラ照セル月ヲ、璧ノ光ゾト見テ、其才ニ比シタリ、竇鞏、諸兄弟已ニ達シ、己獨場屋ノ間ニ來ル事ヲ述懷シテ、放魚ノ詩アリ、

黃金贖得免刀痕、　聞道禽魚亦感恩、
好去長江千萬里、　不須辛苦上龍門、

章孝標、下第ノ時、歸燕ノ詩アリ、

舊壘故巢泥已落、　今年故向社前歸、
連雲大廈無棲處、　更向誰家門戶飛、

賈島、下第ノ折カラ、裴晉公新ニ第ヲ立テ、池ヲ鑿リ竹ヲ栽ヘ、臺榭ヲ起サレシニ、賈島此度ノ下第ハ、裴公ノ惡マルルニヨリ、選ニ當ラズト云者有ケレバ、深クコレヲ

憤リ、ソノ庭内ニ詩ヲ題シテ曰、

破卻千家作一池、不栽桃李種薔薇、
薔薇花落秋風後、荊棘滿庭君始知、

何レモ下第ヲ述懷スル作也、竇鞏ハ黄金此魚ヲ贖ヒ得テ、之ヲ水中ニ放ツ、禽魚モ恩ヲ感ズルト聞ク、汝豈感無ランヤ、是ヨリ愼ンデ、辛苦シテ禹門ノ險ヲ犯シ、龍ト成ンコトヲ求ムルコトナカレ、恐ラクハ人ニ得ラレテ、刀俎ノ患有ン、長江此去テ長キコト千萬里、往テ自在ニ樂メトハ、古來顯達スル者、多ク後禍ニ逢フ、今我不遇、實ニ後禍ヲ免レシムル者、是天恩也、禽魚スラ猶放生ノ恩ヲ感ズ、況人ヲヤ、我將ニ去テ江湖ニ隱レントス、仕進ヲ求テ人ノ魚肉トナラジト也、章孝標ハ、燕ニ比ス、舊壘ノ故巢、久シク棲ザレバ、泥已ニ落ラン、然レバ恃ムベキ故巢ニモ非ザレドモ、社前ニハ昔棲慣シ處トテ歸ル也、回ラシ望メバ、彼方ニハ大厦雲ニ連レドモ、巢フベキ便モナシ、今歸ルトモ、如何ナル人ノ門戶ヲタドリテカ飛ベキト也、賈島ハ、人ノ宅ヲ奪ヒ、園池ヲ開キ、朝廷ノ爲ニ賢者ヲ進メズ、小人ヲ引用シ、敗亡ニ至リテゾ、思知ラレントナリ、竇ハ憤ツテ怨ム、章ハ自不遇ヲ傷ム、賈ハ憤怨罵詈ニ近シ、竇鞏意薄ク、孝標意厚シ、賈島ハ大ニ詩人敦厚ノ意ヲ失ス、杜牧之湖州ニ遊ンデ一女ヲ見ル、年十歲餘、眞ノ國色也、杜コレト後期ヲ爲シテ曰、吾ヲ待コト十年セヨ、十年ニシテ來ラズンバ、郎佗ニ適ケトテ去リケリ、其後十四年、杜又湖ニ來リテ尋ケルニ、彼已ニ人ニ從フコト三年、子二人ヲ生メリ、ココニ於テ杜牧詩アリ、

自是尋春去較遲、不須惆悵怨芳菲、
狂風落盡深紅色、綠葉成陰子滿枝、

韓退之ノ侍姬二人アリ、一人ヲバ絳桃ト

比興

云、一人ヲバ柳枝ト云、韓退之佗ニ出ケル隙ニ、柳枝退之ノ家ヲ逃レ去レリ、退之詩アリ、

別來楊柳街頭樹、擺亂春風只欲飛、唯有後園桃李在、留花不發待郎歸、

是比ニシテ興ナリ、「サレバ宋蘇麟、近水樓臺先得月、ト云詩ヲ、范文正公ニ獻ゼシハ、己ガ薦擧ノ遲キヲ恨メル也、「又其意ヲ設ル事、甚深幽ナル者アリ、司空圖、看南北史感偶、

設意深幽

佳人自折一枝紅、把唱新詞曲未終、祇向眼前憐易落、不如抛擲任春風、

是ハ、南北ノ比ハ、父祖天下ヲ取レバ、子孫ハ最早人ニ有セラル、梁武帝、侯景ニ臺城ニ圍マレ、飢死シタマヒシガ、自我得之、自我失之、亦復何恨、ト宣ヒシコトナドヲ籠テ、アタラ花ヲ、手ニ折テ樂ミシモ、程ナク我手ノ中ニ花散レバ、ワキテ悲ク覺ユル也、寧此花ヲ我手ニ折ラズバ、我手ノ中ノ春ニモアルマジ、咲ク時ハ人ト共ニ樂ミ、散ル時ハ人ト共ニ惜ミ、唯春風ノ儘ニ任スベキ物ヲトイヘル也、「又景中深ク意ヲ寓スル者アリ、比ノ類ナリ、宋人最多シ、司馬溫公、初夏ノ作、

景中寓意

四月清和雨乍晴、南山當戶轉分明、更無柳絮因風舞、唯有葵花向日傾、

初夏雨後ノ寓目、畢竟平平ノ語ノミ、雲盡テ山色分明、風和シテ柳枝動カズ、葵花日ニ從テ傾ク、正シク立テ物ニ昡セズ、與與トシテ君ニ向フコトヲ忘ザル者、景中深ク意ヲ寓ス、興トハ、物ノ觸ルルニ從テ、我本情ヲ引興スナリ、杜荀鶴、新雁、

興

暮天新雁起汀洲、紅蓼花疎水國秋、想得故園今夜月、幾人相憶在江樓、

水邊ウラ枯ナル草ナド、限ナク哀ナルニ、暮方月ノ見エ渡ル比、雁ノ起ルヲ見テ、因

テ想フ、我故郷ノ方ニハ、誰彼モ、渠ハ何方ニテヤ、此隈ナキ月ヲ見テ、此方ヲ望ミ懐フ覧ナド、樓ニ倚テ想ヒヤルランド、興シタル也、是興ノ正體ナリ、「銭起、暮春歸故山草堂、

谷口春殘黃鳥稀、　辛夷花盡杏花飛、
始憐幽竹山窗下、　不改清陰待我歸、

春ノ暮ツ方、久シブリニ、故山ニ歸來ツテ見ルニ、谷ノ戶ノ春モ、纔ニ黃鳥ノ聲殘リ、花ハ盡ルニ向トシテ、殘レルト見ユルモ、今日カ明日カニ成ヌ、因テ興ジテ、サテサテ兼カトイヘル樣、二首共ニ、怨意ヲ摸寫シテ神ニ入ル、然シテ崔詩最巧ナル所、李白ニ讓ル所也、若天然ノ趣ヲ措テ、餘リニ面白ク作ラントスレバ、本眞ヲ失ヒ、作リ木ヲ見ル如ク、如何ニモ面白キ樣ナレドモ、暫スレバ見ザメシテ、本來ノ竹樹、天然ノ趣ヲ得ルニ及ザルガ如シ、「然シテ其巧ノ內ニモ、正奇アリ、王世貞、古意、

傳君移戍古梁州、　明月心懸隴水流、
莫怪夢魂逢不得、　書來依舊玉關頭、

夫モト玉關ニ戍ス、然ルヲ人傳ニ聞ケバ、近比戍ヲ古梁州ニ移セル由也、月ヲ見テ夜夜ノ心、梁州ノアル方トテ、隴水ノ流行方ニコソ、懸テ向フナルニ、如何ナレバ夢ニモ不逢ヤト疑シニ、書ヲ得テ見レバ、戍ヲ移セシトハ、傳聞ノ非ニシテ、ヤハリモトノ玉關ノ頭ナリ、アラヌ方ヲ思ヒケレバコソ、夢路ニモ逢ザリケレト、巧ノ內ノ正也、「ソレヲ猶奇ニ求ル寸ハ、若見江魚須慟哭、此中曾有屈原墳、ト云樣ニモナル也、

「王昌齡、採蓮曲、

荷葉羅裙一色裁、　芙蓉向臉兩邊開、
亂入池中看不見、　聞歌初覺有人來、

劉商、觀獵ノ詩、梁園射盡南飛雁、淮楚人驚陽鳥稀、是等高廷禮、唐詩品彙ニ收ムル所

トイヘドモ、予常ニ惜ム、衣ト荷葉ト一色、蓮花與人面同樣ニテ、子細ニ看テモ、花バカリト見ユルニ、歌ノ聲ヲ聞テ、サテモ人モ有ケリト知リヌ、梁園ノ獵ニ、淮楚ニ往ク雁少クナリ、彼地ノ人モ驚クベシトハ、趣ヲ設ル事大ニ陋シ、錢起、石井、

片霞照石井、泉底桃花紅、
那知幽石下、不與武陵通、

桃花影倒ニ水中ニ映ズ、桃源ハ本仙境ナレバ此石ノ下ノ水流レテ武陵ニ通ズルカモ知ラズト、是皆巧ノ奇邪ニ走ル者也、詩ノ本色ニアラズ、詩道ハ、昔ヨリ禪ニ譬ヘテ、不渉理路、不落言筌、最上乘第一義諦ニアリ、有功德、無功德ニ如ズ、月ニ遊ビ、花ヲ詠メテ、日ヲ暮セ、佛ニナルナ、アタラ我身ヲ、此歌ヨク思フベシ、王維、

木末芙蓉花、山中生紅蕚、
澗戸寂無人、紛紛開且落、

仙佛

是其境ヲ得ル者也、乃聖諦第一義、羚羊挂角、無跡可求、而後意匠經營ノ中、務テ雅俗ヲ分ツベシ、是天ニ登リ、地ニ入ルノ岐也、「夫詩人ノ興趣ト云者ハ、規規拘拘トシテ、陳仲子ノ廉ノ如ク、尾生ノ信ノ如クナレトニハ非ズ、故ニ人ヲ花トモ、月ヲ雪トモ、

燕山雪花大如席、片片吹落軒轅臺 李白 トモ、
大華峰頭玉井蓮、開花十丈藕如船 韓愈 トモ、
蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身 白居易 トモ

云ハ、詞華ノ常ナレバ、仙ニ成タリトモ、佛ニ成タリトモ、興ヲ得テ境ニ入ラバ、何ノ不可ナルコトカコレ有ン、サレドモ見聞ニ癖著キテ、仙中ヨリ來リ、仙中ニ去ルナド、趣ヲ設ケタルヲバ、人怪マズ、佛中ヨリ來リ、佛中ニ去ルナド、趣ヲ設ケタルヲバ、人還テ實ノ感ヲナス、是ヲ三階ヲ以テ反セズトス、故ニ東坡、前世德雲今我是、依稀猶見妙香臺トハ、太白、湖州司馬何須問、金

粟如來是後身ト同口氣也、然ルヲ此等ノ詩ニ由テ、東坡ハ、前身僧也ナド云說モ出來レリ、近來ニテイハヾ、徂徠蓮光寺ニテ笋振舞ニ逢テ、時緣玉版參禪味、得與東坡作後身ト作レリ、是ハ東坡、廉景寺ニ玉版和尙ニ參ゼントテ、其友劉器之ヲ紿キツレ行テ、笋ヲ燒テ食セ、是卽玉版也ト云シ故事ヲ踏ヘテ作レリ、寺ニテ竹子食タレバトテ、豈東坡ガ再來身トナルコトヲ得ンヤ、是乃癡人ノ前ニ夢ヲ說ナリ、先年卽非錄ヲ見侍シニ、王陽明一日山寺ニ遊ビ、其院ノ封鎖甚固キアリ、陽明之ヲ開ント欲ス、寺僧此中定僧アリ、閉ルコト已ニ五十年、開ク可ラズト云、陽明聞ス、發ヒテ見ルニ、龕中ノ僧、貌酷陽明ニ肖タリ、而シテ壁間ニ偈ヲ題シテ曰、

五十年前王守仁、開門原是閉門人、
精靈剝後還歸復、始信禪門不壞身、

雅

五十年前トイハヾ、閉門原是開門人ト云ベシ、開門原是閉門人ト云ハバ、五十年後ト云ベシ、倉卒ノ間、定僧モ平側ニ置泥マレタリト見ユ、雅ハ正ニテ、詩ノ三百篇モ、思無邪ノ三字ヲ以テ蔽フトアリ、詩ハ人情ヲ云者ナリ、四角八面ナランハ人望ナシ、サレドモ情ヲ淫佚放蕩ニ肆ニセンハ、邪ニ非ズ、國風、淫奔放蕩ト見ユルモ、是淫人等、自其醜行ヲ述タルニ非ズ、美行ノ詩モ、自其美ヲ述タルニ非ズ、只傍ヨリ、惡ケレバ其惡キヲ傷ミ、善ケレバ其善キヲ贊テ、作レル詩ドモ多カル也、故ニ凱風美孝子也トアリ、孝子自其孝ヲ賦スルニ非ズ、靜女ノ詩ニ、靜女其姝、俟我城隅、愛而不見、搔頭踟躕モ、序ニハ刺時也トアリ、先輩詩ヲ作ルニ、儒者ノ氣象ヲ著ベカラズト云シモ、陋儒ノ氣象ナドトモ云ベキカ、詩ハ儒者ノオサムル者ナリ、詩ヲ學ブニ、誰カ三

百篇ヲ祖トセザル者有ヤ、溫柔敦厚詩ノ敎ニ非ズヤ、興スベク、觀ルベク、群スベク、怨ムベキ者、詩ニ非ズヤ、故ニ詩人ノ情、溫柔敦厚ニシテ、正シカルベキコト也、明末南京ノ院妓、林秋香トイヘル者、人ニ嫁シテ後、舊時ノ相知、又一見セント欲スル者アレバ、扇ニ柳ヲ畫キ、

昔日章臺舞細腰、　任君攀折嫩枝條、
如今寫入丹青裏、　不許春風再動搖。

トハ、詩ノ雖速我訟亦不女從ノ意アリテ、嘉スベシ、又同ク妓王賽玉トイヘルガ、其即ニ寄テ、

舊時巫山一夢中。　佳期回首已成空。
即心亦是浮萍草、　莫怪楊花易逐風、

ノ作、詩ノ子惠思我、褰裳涉溱、子不我思、豈無他人ト意ヲ同ウスレドモ、鄭ノ詩ハ、詩人ノ國人ノ思フ所ヲ述タルニテ、王ガ作ハ己ガ蓬キ心ヲ、其儘ニ言出シタルナレバ、是ヲ詩人ノ意ニ愜ヒタリトハ、言難カルベシ、詞調鄙俗モ雅ニ非ズ、性情正ヲ失スルモ雅ニ非ズ、僭偽差謬モ雅ニ非ズ、性情ノ正ヲ棄テ、思邪ナレト云敎ハアラズ、其性情ノ正ト云ハ、惟精惟一、允執厥中ト云コトニモ非ズ、憂喜憤怨、皆人ノ情ニシテ、樂ンデ淫セズ、哀ンデ傷ラズ、是其正ナリ、必偈頌ノ如クニシテ、性情ノ正ト云ベキニモアラズ、于鱗選中ニ就テ云ンニ、魏徵ノ述懷、張九齡ノ感遇、王維ノ九日懷山中兄弟ノ類、儒者ノ氣象別ニナシ、老杜ハ、古今ノ大家ナリ、其作總テ君ヲ思ヒ社稷ヲ憂フ、王師未報收東郡、城闕秋生畫角哀、滿腹ノ忠憤、何ゾ詩ノ絕調ニ妨ゲン、王昌齡、送李浦之京、小弟鄰莊猶漁獵、一封書寄數行、啼、友愛ノ情、人ヲシテ潸然タラシム、我常ニ雍陶、寶應縣ノ詩ヲ讀ンデ、其君ヲ敬スルノ意、君在ザルノ地ニ弛ベザルヲ愛ス、

雪樓當日動晴寒。渭水梁山鳥外看。
聞說德宗曾到此、吟詩不敢倚闌干。

詩ニ善戯謔兮不爲虐兮ノ戒アリ、王維笑周文輕漢武ノ作、何ゾ諷言ノ甚キ、是ヲ乘陽氣行時令作ニ比スレバ、別手ニ出ルガ如シ、羅敷ハ貞女也、使君ノ挑ヲ拒ンデ曰、使君自有婦、羅敷自有夫ト、然ルヲ杜審言、自使君タランヲ願フ、何ゾ面皮ノ厚キヤ、萬楚、五日觀妓テ、誰道五絲能續命、卻令今日死君家ト、我是等ノ詩ヲ見ル毎ニ、頭痛ヲ發ス、訓解此詩ヲ因五日出遊而刺當時歌妓之盛也ト云リ、夫譏刺ノ言ハ、分明ニ言ズトイヘドモ、其意隱然トシテ、言外ニアル者也、詩中其意ナシ、注家回護ス、贔屓ノ沙汰ナルベシ、于鱗唐詩ヲ選シテ、唐詩盡于此トハ、于鱗ノ大言ニシテ、所謂英雄欺人ナリ、是我私言ニモアラズ、當時王元美胡應麟ナドモ、其選ニハ異論有キ、夫飄逸沈鬱、激烈慷慨、豔語放言、詞家ノ所忌ニ非ズトイヘドモ、溫柔敦厚ノ義ヲ失シテ、思想邪ニ入ランヨリハ、猶偈頌ヲ作ルガ增ナルベシ、「世ニ菅丞相左遷ノ寃ヲ憤リ、天ニ祈リ、其厲終ニ雷ト成リ、讒人等ヲ震殺セシナド云リ、サレドモ昌泰四年九月十日、公太宰府ニアリ、去年此日御宴ニ侍シ、君富春秋臣漸老、恩無涯岸報猶遲ト作ラセ給シヲ、睿感アリ、御衣ヲ脫ギ、カヅキサセ給シ事、思出給ヒ

去年今夜侍淸涼。秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此、捧持每日拜餘香。

此詩ニ由テ、菅公ノ心事明ニシテ、他說辨ズルヲ待ズ、詩ハ志ナレバ、内ノ思外ニ發スル也、風雅ニ負クハ、詩人ニ非ズ、「雅ハ正ナリ、今ノ詩人、 幕府ヲ詠ズル者、 天子ト分タズ、諸侯ヲ詠ズル者、皇子ト混ズルモノアリ、唯富麗ニシテ調善ケレバ、善キ樣

ニ思ヒナシテヤ居ルラン怪シ、今ノ人信ズル所ノ滄浪詩詩ニモ、劉公幹、贈五官中郎將詩、昔我從元后、整駕至南鄉、過彼豐沛都、與君共翺翔、是曹操ヲ元后トシ、操ノ譙郡ヲ豐沛ニ譬ヘタリ、又王仲宣從軍ノ詩、籌策運帷幄、一由我聖君、又竊慕負鼎翁、願厲朽鈍質、是身ヲ伊尹ニ比シ、曹操ヲ湯王ニ比ス、是等ヲ擧テ譏リタリ、今ノ文人、足利將軍ヲ足利王、豐臣太閤ヲ豐王ナド云リ、日本ニテ王ノ字ヲ稱スルコトハ皇孫ニ限ル制也、其外ニハ足利義滿以來、明ノ天子ノ封冊ヲ受テ、彼邦ニ對シテハ、王ト稱シタレドモ、我天子ヨリ賜ル所ハ、征夷大將軍ナリ、然シテ秀吉ハ、大政大臣ニ進ミ給ヘリ、大政大臣ヲバ望ミ給ヒシカドモ、日本ノ王號ニ望ナシ、明天子ノ號望ミナリ、此義ヲ小西行長沈惟敬、中ニテ拵ヘ、日本王ノ冊文トリテ、和睦ヲ計ラヒケル、

太閤此冊文ヲ聞テ、大ニ怒リ、再朝鮮ノ役起レリ、太閤モ暴戾ナル樣ナレドモ、君臣ノ分ニ於テハ、殊ニ愼マレシ也、サレバ醍醐ノ花見ニモ、山ヲ御幸山ト謂ケレバ、「名ヲモカヘ、改テ見ン御幸山、花ハ昔ニ、替ラザリケリ、」ト詠ジ玉ヘリ、斯ル例モアレバ、旁以テ王ナドトハ、稱スマジキ事也、夫君子ハ、一言以爲知、一言以爲不知、故事ヲ使フ者、此用心ナキハ、滄浪ノ罪人ナリ、又詩ニ議論ノ一派アリ、六義ニ於テ、屬スル所ヲ知ラズ、姑之ヲ雅ニ序ヅ、蓋議論古ヨリ有之、老杜又議論ニ長ズ、樂天義山ヨリ愈盛ンニ、宋ニ至テ極マル、明人其弊ヲ矯ルヲ以テ、務テ忌ム、忌ムモ唐人ノ本色ニモ非ズ、只初盛ノ比ノ議論ハ、渾厚ニシテ圭角ヲ露ハサズ、唐太宗ノ蓬瀛不可望、泉石且娯心ト云モ、議論ナリ、昔秦皇漢武、長生不死ナド云コトアル樣ニ覺エテ、海外ニ、

蓬萊チヤ瀛洲チヤナド云テ、活タ仙人ノ居ル島ニ、ツヒ行ルル事ノ様ニ、胡亂堪タルヲ、人間何ゾ長生ノ地有ン、此泉石ニ心ヲ娛シマシメテ、死ズシテ生テ居ヤフト也、「崔署、九日登仙臺、呈劉明府詩ノ如キ、是議論ノ本色ナリ、

漢文皇帝有高臺。此日登臨曙色開。
三晉雲山皆北向、二陵風雨自東來。
關門令尹誰相識、河上仙翁去不回。
且欲近尋彭澤宰、陶然共醉菊花杯。

今日重陽高キニ登ルベシ、幸漢文帝遺跡ノ高臺モアル程ニト、朝トク夜明ケ方ニ登リタリ、サテ登臨シテ望ヲ騁ルニ、昔戰國ノ比ハ、韓趙魏ナド云大國、外秦楚燕齊ナドト、衡ヲ天下ニ爭シモ、今ハ其跡モ無ク、只北ニ向ヘル雲山ノ形勢ノミ、昔モカクゾト思フ計ナリ、又此方ノ二陵、其一ハ、文王雨ヲ避給ヒシト言傳フルガ、其文王ハ、昔語ニテ、避給ヒシ時ノ様ナル雨ハ、今朝モ降ルト見エテ、搔暮テ文日モ分タズ、人生幾バクゾ、朝夕ベヲハカラズ、サレバ此臺ハ、昔文帝道ヲ問給ヒシ跡ナルニテ思ヘバ、仙人ハ不死ノ道アリテ、此山川ノ様ニ、昔ニ易ラズアル由ナリ、サレドカカル仙人アリテモ、昔函關ノ令尹喜ハ、氣ヲ望ンデ老子ノ通ラルルヲ知レリト聞ケリ、我ハ其仙人ヲ知ル術モ無レバ、ヒヨト仙人ニ逢タリトモ、仙術問事モナルマシ、マシテココニテ文帝ノ逢給ヒシ河上公ハ、其時ギリニテ還ラレズ、然レバ此仙人不死モ、朧朧ノ沙汰ナリ、山川ト壽ヲ同ウスルコトモナルマジ、通我モ無キコトドモ思ハンヨリ、近キ彭澤ノ宰殿ヘ見舞ヒ、陶然ト世ノ中ノ事共打忘レ、菊花ノ殘酒ヘ醉タシト、言遣リタル也、「杜牧、秦始皇ノ陵ヲ經テ、一路靑山秋草裏、行人唯拜漢文陵。トハ、

論ジ得テ穩當也、象外ノ趣有テ、詩人諷諭ノ體ヲヨク得タリ、「ソレヨリ李義山、侍臣最有相如渴、不賜金莖露一盃、トハ、漢武帝、方士ニ欺カレ、長生ノ説ニ惑ヒシコトヲ譏リ、漢武金莖ヲ置キ、是ニ溜レル露ヲ、玉屑ニ和シテ飲メバ、仙人ニモナルト欺カレシハ、餘程疎キコト也、其比幸ニ、侍臣司馬相如ハ、消渴ヲ煩フテ居タリ、其露ヲ一盃飲セテ御覽ゼラルレバ、其儘シラルルコトナルニト、論ジタリ、「朱子、玉顏自古爲身累、肉食何人爲國謀、ト云ヲ、以詩言之、是第一等之好詩、以議論言之、是第一等之議論、ト評シラレタリ、斯ル類ニテ、勢餘程烈シクナリタリ、是本訓トスベキコトニテハアレドモ、詩ハ元人情ヲイフ者ニシテ、議論理窟ハ、本色ヲ失シ易シ、「白居易、明妃ヲ賦シテ、

漢使卻回憑寄語、　黄金何日贖蛾眉、
君王若問妾顏色、　莫道不如宮裏時、

明妃胡中ニアリ、漢使ノ回ルニ遇ヒ、賤妾誠ニ黄金ニ誤ラレテ、胡國ノ人トハ成ヌ、何トゾ今更ニモ、黄金此身ヲ贖フコトヲ得テ、再故郷ニ歸ル事ナキニヤト、親シキ方ニ言送リ、君王ノ問給フベキ樣ハ非ザレドモ、儻ヤ千ニ一モ、思出給ヒ、我顏色ヲ問給フ事アラバ、カクナン憔悴シタリトハ勿語リソ、或ハ召モ還サレンカト、癡想シタル所、實ニ婦人ノ情ヲ摸寫シ得タリ、」然ルヲ後ニ至テハ、陳澗、

驪山舉燧因褒姒、　蜀道蒙塵爲太眞、
能遣明妃嫁夷狄、　畫工元是漢忠臣、

周ノ幽王ハ、褒姒ノ色ニ溺レテ驪山ニ亡ビ、唐ノ玄宗ハ楊貴妃ニ由テ、蜀ニ蒙塵シ給ヒヌ、由是思之バ、毛延壽ガ黄金ノ賄無キニ忿リテ、昭君ヲ惡ク畫成セシヨリ、其顏色ヲ元帝畫ニテ御覽ジ、遣ハサルルニ

臨ミ、其容貌畫ト同カラザルヲ怒リ、毛延壽ヲ殺サセ給ヒシカドモ、若昭君漢ニ留リ、君寵ヲ專ニセバ、驪山蜀道ノ變有ンモ知ラレズ、然レバ明妃ヲ漢宮ニ置ザリシコト、畢竟漢家ノ忠臣ゾト、理窟ニ落テハ、枯木生寒巖三冬無暖氣詞人ノ本色非ズ、然トイヘドモ是猶紙上ノ空談也、樂天ノ比、徐州張尙書ノ愛妓ニ、盻盻トイヘル有シガ、尙書死シテ燕子樓トイヘルニ引籠ミ、節ヲ守リテ在シガ、樂天盻盻ガ詩ヲ見テ、韻ヲ次テ贈テ曰、

今春有客洛陽回。曾到尙書墓上來。
見說白楊堪作柱。爭敎紅粉不成灰。

盻盻此詩ヲ反覆シテ讀ミ、泣テ謂ケルハ、我公ニ後レテヨリ、死スルコト能ハザルニハ非ズ、只百載ノ後、我公色ヲ重ンジ、死ニ從フ妾有シトテ、公ノ淸範ヲ玷サンコトヲ恐レテコソ、カクハ存ラヘケル也トテ、舍人不會人深意、訝道泉臺不相隨ト作リ、其後食セズシテ死シケルトゾ、夫生ヲ以テ死ニ殉ズルハ非禮也、盻盻禮ヲ以テ身ヲ處ス、樂天不當ノ論ヲナシテ、盻盻ヲ殺ス、議論ノ慘ココニ至ッテ極マル、樂天何ノ故ゾ、明妃ニ婉ニ、盻盻ニ毒ナル、怪ムベシ、宋謝疊山囚レテ元ニ去ル、張叔仁之ヲ送ッテ、此去好憑三寸舌、再來不直一文錢。ト云ケルヲ、疊山之ヲ得テ甚稱セシガ、燕ニ到リ、終ニ食ヲ斷テ死シタルトハ、大ナル相違也、

頌

頌ハ美ヲ贊スル意ナリ、諺言ト同カラズ、君子成人之美、不成人之惡也、凱風ノ詩ヲ擧テ例スベシ、凱風之序曰、凱風美孝子也、衞之淫風流行、雖有七子之母、猶不能安其室、故美七子能盡其孝道、以慰其母心而成其志爾ト、是傍ヨリ七子ノ意ヲ酌テ作レル也、其人ノ作トセバ薄シ、其詩二曰、

凱風自南吹彼棘心棘心夭夭母氏劬勞
凱風自南吹彼棘薪母氏聖善我無令人
爰有寒泉在浚之下有子七人母氏勞苦
睍睆黄鳥載好其音有子七人莫慰母心

凱風ハ南風乃物ヲ生長スルノ風也、棘ハ力ナキ小木ニテ、自立難キ物ナリ、棘ノ力ナク立難キニ、子ノ身ヲ比シ、南風ノ棘ヲ吹テ長ズルニ、母ノ養育ヲ比シ、カクバカリ七人ト云、用ニモ立ザル子共ヲ、生育シ、給フ事、慈愛如何ゾヤ、カカル聖善ナル人ニシテ、室ヲ安ジ給ハザルハ、我我善カラザル故也、水モ水ノ德アレバ、其處ヲ潤ホス、我等善カラマシカバ、爭カ母氏ノ苦勞シ給ハン、此方ニ來鳴鳥モ、淸和宛轉ト其音ヲ好スルニ、我我ハ箇程大勢有ナガラ、何故母ノ心ヲ慰フルコト能ハズシテ、カク身此室ニ安ジ給ハヌゾト、歎キタル也、母不善ニシテ、母ノ不善ヲ見ズ、身ヲ責テ、美ヲ母ニ歸ス、是頌ナリ、「予常ニ張籍節婦ノ吟ヲ愛ス、是ハ張籍佗鎭ノ幕府ニ在シヲ、鄆帥李帥古、書幣ヲ以テ之ヲ辟ケルニ、張籍卻ケテ納ズ、詩作ッテコレニ寄テ曰、

君知妾有夫贈妾雙明珠感君纏綿意繫
在紅羅襦妾家高樓臨池起良人執戟明
光裏知君用心如日月事夫誓擬同生死
還君明珠雙淚垂恨不相逢未嫁時

自守ルコト確乎不可拔、其意直ニ、其辭婉ナリ、義以爲質、巽以出之、書幣卻ラルトイヘドモ、師古モ亦其義ニ感ズベシ、故ニ風賦比興雅、何レモ頌意ナキ時ハ、譏刺調戲ニ渉ル、溫柔敦厚ノ義ニアラズ、劉禹錫、王叔文ノ黨ニ坐シテ、司馬ニ貶セラレシガ、後十年餘ヲ經テ、朝ニ歸リシニ、時ノ宰相省郎ニ任ゼントセシガ、紫陌紅塵拂面來、ノ詩ニ、其人トナリヲ薄ンセラレ、再出テ播州ノ刺史タリキ、婦人其夫ニ獲ラレザ

詩用

レバ、其家ヲ去ル、回首謂小姑、莫嫁如兄夫、女子勿李白去婦詞ノ李白去ト ハ、其婦ノ不良トスベシ、女子勿啼汝父賢、必不嫁汝狂少邊、元吳季淳棄婦吟ノ元吳季淳ト ハ、其婦ノ淑德想像ルベシ、拘憂操ハ琴曲ニシテ、文王姜里ノ幽ヲ云詞也、其詞ニ、迷亂聲色、信讒言兮、等ノ語アリ、韓文公、文王ノ意ニ非ズトシテ、此操ヲ作テ曰、嗚呼臣罪當誅兮、天王聖明、聖人ノ心、恐ラクハ如是ナラン而已、東坡獄中ノ詩、聖主如天萬物春、小臣愚暗自亡身、亦同、

○東厓辨疑錄ニハ、詩ノ風賦比興雅頌トハ、詩ヲ用ルノ義ニシテ、詩ノ體ニアラズ、鄭玄風雅頌ノ三ヲ經トシ、賦比興ノ三ヲ緯トシテ、詩ヲ說タレドモ、詩之大序、及周禮大師職、皆風賦比興雅頌ト列シタリ、鄭氏ノ說ノ如クナラバ、風雅頌賦比興ト云ベシ、風賦比興雅頌ト謂ベカラズ、是故ニ滄浪之水、本詠水之清濁而歌、則固是賦也、而民間傳播、孺子亦能歌之、則可以謂之風矣、漁父取其與世推移之道、則是比之也、夫子感其有自取之道、則是興之也、若用之于朝廷、于郊廟、則又可以爲雅爲頌矣、詩之具六義、可以此例推之、トアリ、此亦面白キ說ナリ

詩轍卷之二

豐後　處士　國東郡　三浦晉　安貞　著

友人　日出藩　喬維嶽　彥駿　閱

諸體之原

體製

滄浪詩話曰、風雅已亡、一變而爲離騷、再變而爲西漢五言、三變而爲歌行雜體、四變而爲沈宋律詩、五言起於李陵蘇武、或云枚乘七言

起於漢武柏梁、四言起於漢楚王傅韋孟、六言起於漢司農谷永、三言起於晉夏侯湛、九言起於高貴鄉公、有古詩、有近體、有絶句、有雜言、有三五七言、有半五六言、有一字至七字、有三句之歌、漢高大風歌是也、有兩句之歌、荊卿易水之歌是也、有一句之歌、漢書枹鼓不鳴董少平。又漢童謠、千乘萬騎上北邙、梁童謠、青絲白馬壽陽來。皆一句也、按ズルニ、滄浪ニ言ヲイハズ、明、陳懋仁、續文章緣起曰、吳越春秋曰、古ノ孝子、不忍見父母爲禽獸所食、故作彈守之、其歌曰、斷竹、續竹、飛土、逐肉、竹彈之謠、神農前已有之、三言、同人註、梁任彥升文章緣起、曰、國風、江有汜、三言之屬也、漢元鼎中、作天馬歌、乃三言起、四言ハ、舜勅天之命、惟時惟幾ヨリ、肱股元首歌、五子之歌ノ三四ノ章、スデニ體ヲ具セリ、只叙事布詞爲一體者韋孟ニアリ、八言、清沈德潛、說詩晬語曰、班史東方朔八言七言

唐律之始

上下、然東萬詩不傳、而八言體、後人無繼之者ト、其八言七言上下トハ、八言七言ノ詩上下篇有ト云事也、十言、續文章緣起ニ、李白、黃帝鑄鼎於荊山鍊丹砂ノ句、十一言、杜甫、愼勿見水踴躍學變化爲龍ノ句、李白、紫皇乃賜白兔所擣之藥方ノ句ヲ引トイヘドモ、是皆只句ノ數ナレバ、全詩ハアラズト見ヱタリ、十一言、緣起ニ二句ヲ引ト雖、杜甫、王郎酒酣拔劍斫地歌莫哀、我能拔爾抑塞磊落之奇才ノ一聯ノ全キニ如ズ、近體ノ來由、唐書曰、建安後、訖江左、詩律屢變、至沈約、庾信、以音韻相婉附、屬對精密、及宋之問、沈佺期、尤加靡麗、回忌聲病、約句準篇、唐才子傳曰、自魏建安、迄江左、詩律屢變、至沈約鮑照、庾信、徐陵、以音韻相婉附、屬對精緻、及佺期之問、又加靡麗、著定格律、遂成近體、學者宗尙、語曰蘇李居前、沈宋比肩、詩ハ上ニイヘル如ク、一言ヨリ十餘言ニ至テ

モアル者ナレドモ、先大方ハ、五言ヲ主トシテイフ事也、世ニ所謂沈約ノ詩病ナドモ、只五言ノ設ナリ、七言ハ、後五言ニ準ジテ立テルト思ハル、其五言ノ始ハ蘇李ナリ、梁鍾嶸詩品ニ、其由テ來ル所ヲ推シテ曰、夏歌曰、鬱陶乎予心、楚謠、名予曰正則、雖詩體未全、然是五言濫觴、逮漢李陵、始著五言之目、而シテ兩漢ノ詩人、世ニ知ラルル者、蘇武李陵、卓文君、班婕妤、東漢ノ班固、蔡邕父子、孔明、秦嘉等、僅僅トシテ已ニ魏ニ迫レバ、五言モ亦古ハ得難シ、然レバ五言、漢魏漢魏ト稱シテモ、多クハ魏人ノ述作也、而シテ其詩ハ、雄渾ノ氣象ヲ以テ行ル、韻法アルノミニシテ、聲律ニ渉ラズ、代ハ魏ヨリ晉、晉ヨリ宋齊梁陳ト推移レリ、沈約ハ世梁人ト稱スレドモ、齊ノ代ニ當ツテ、王融、謝朓ノ徒ト、相共ニ聲律ノ道ヲ建立セリ、即四聲一百七韻ノ別、八病等ノ目也、

而沈氏ハコレヲ周顒ニトル、謝朓沈約等四聲ヲ用ヒテ、詩新變ヲナス、其體コレヲ永明體ト云、永明ハ、齊武帝ノ年號ナリ、聲律トイヘバ、聞ニ遠ケレドモ、近クイヘバ、自是以前ノ詩ハ、氣象ノミヲ言テ、口障リ耳障リノ事ニ渉ラズ、鍾嶸ノ所謂、范侯讃論、謝公賦表、辭氣流靡、罕有挂礙、斯蓋獨悟於一時、爲知聲之創首、ト云所也、鮑照庾信徐陵ノ徒ノ音韻婉附トハ、句調ヲ取リ、口ニ出デテ礙ラズ、耳ニ入テ響ヲナスナリ、夫ヨリ次第ニ聲音諧和ニ走リ、句數對法ヲ定メ、句中ノ四聲、其位粗定マレリ、是乃尤加靡麗、回忌聲病、約句準篇ナリ、著定格律、遂成近體ナリ、サレドモ、反粘粗通シテ、興象ヲ以テ移易轉換ス、未一定不換ノ法アラズ、盛唐諸家、亦家家ノ三尺法ヲ持ス、浪華竹山所著詩律兆曰、大氐聲律寛於初唐、完於盛唐、嚴於中唐、極於晩唐、若李商隱之

倫、每篇秩然、不復拗換、又曰、宋人體製大變、以取後人訾謷、然其聲律、大氐守盛唐之法、有時乎馳騁於吳體、明人振體製、羹牆於開天、而其聲律大氐晚唐焉、依無復餘裕矣、盛唐ノ時、未晚唐ノ法アラズ、初唐ノ時、未盛唐ノ法アラズ、六朝ノ初唐ニ於ル、漢魏ノ六朝ニ於ルモ然ナレバ、泝ッテ其足ザルヲ見ルトイヘドモ、流ニ沿ヘバ其苛ヲ見ル也、今一定ノ法律、晚唐ニ立シヨリシテ之ヲ觀レバ、齊ニ萠シ、陳隋ニ拆シ、初唐ニ葉生ヒ、盛唐ニ花シ、實ヲ晚唐ニ結ブガ如シ、若說ココニ至ラザレバ、只二四不同、二六對ヲ聲律ト意得、コレヲ守ラザル者ハ、漢魏モ江左モ同樣ニテ、初盛ノ詩ハ、平側合ハヌト思フ計リ也、沈隱侯、聲調ヲ論ジテ曰、宮徵相變、低昂異節、前有浮聲、後須切響、一簡之內、音韻盡殊、兩句之中、輕重悉異、ト、是二四不同、二六對、反粘ノ外、聲律諧和

古體
近體

ノ道アル事知ルベシ、陸士衡、文賦音聲之迭代、若五色之相宣トイヘリ、故ニ永明體已ニ立テ、八病未行トイヘドモ、婉附ノ道成ッテ、唐律ココニ基セリ、尋去尋來ッテ之ヲ思フニ、八病ノ說、唐以前ニ守ル人ナク、唐以後ニ述ル人ナケレバ、假令是ヲイハンモ閑議論也、然共此說世ニ曼衍スルコト久シ、詩ヲ學ブ者知ラズンバ有ベカラズ、故ニ以下喋喋ヲ辭セズ、蓋五言古詩、代ヲ以テ變ジ、人ヲ以テ易リ、散詩對偶トナリ、古韻沈韻ニ變リ、聲調諧和ノ事生ジ、陳隋ニ至リテハ、勢大ニ唐律ニ迫ル、故ニ楊用修六朝ノ詩ヲ集メテ、五言律祖ト號スト、詩藪ニ見エタリ、蓋李氏天下ヲ有シテ、唐律新ニ成ル、唐律立ニ及ンデ、唐以前散詩律祖ヲ論ゼズ、槩シテ之ヲ古體ト云ヒ、唐體之ヲ近體トイヘリ、五言古詩、句數ニ長短ハ有レドモ、五字ノ體ニ異アラズ、

然ルヲ滄浪詩話ナドニ、建安體、黄初體、云云ト、樣樣體ヲ分チタリ、此體ノ字ハ、ココニ云體製ノ體トハ、同字別義也。體製ノ體ハ、字句長短ノ製ニ就テ云、建安黄初ナドノ體ハ、只詩ノ風姿ノ事ニシテ、江淹雜體三十首ト云モ、同五言ヲ、三十人ノ作者ノ風姿ニ作リ分タル者ニシテ、後世倣陶淵明體、倣韋蘇州體ノ體也、後世五言古詩ノコトヲ通ジテ選體トイヘリ、滄浪此非ヲ論ジテ曰、選詩、時代不同、體製隨異、今人例謂五言古詩爲選體、非也ト、蓋此選ハ、文選ヲ指シテ云也、故ニ古詩トハ、唐律ニ非ザル者ヲ槩シテイフ者ニシテ、之ヲ分テバ、蘇李モアリ、陶謝モアリ、云云ノ體其中ニアルナリ、又近來ノ詩選ニ、七言古詩ト立タルモ、アラマシノ部分也、餘姚宋公傳、元詩體要ニハ、之ヲ二體ニ分チ、七言ニ純ナルヲ、七言古體トシ、句ニ長短アル者ヲ長

短句體トシ、三百篇ノ如ク、離騷ノ如ク、詩餘ノ如キ者ヲ雜古體トス、然モアルベキコト也、沈約立ル所ノ八病ニ曰、平頭、上尾、蜂腰、鶴膝、大韻、小韻、旁紐、正紐ト、而シテ之ヲ解スルノ說、諸家異同アリ、王弇州藝苑巵言ヲ按ズレバ、平頭ハ、五言兩句十字ノ中、第一字ト第六字ト、同ク平聲ヲ用ル者、風勁角弓鳴。將軍獵渭城ノ此類也、上尾ハ第五字、第十字ト同ク平ヲ用ユ、起句ヲ平字ニテ起シタル者也、西北有高樓。上與浮雲齊。是也、是又他韻ヲ用ルヲ主トシテ言フト見エタリ、蜂腰ハ、一句五字ノ中、第二字、第五字、上去入ヲ同ウスル者、遠與君別者、是也、鶴膝ハ第一句ノ第五字、第三句ノ第五字、同聲ヲ用ル者、客從遠方來。遺我一書札。上言長相思。下言久離別。或ハ上ヲ同ウシ、去ヲ同ウシ、入ヲ同ウスルモ同病也、平上去入、是ヲ聲ト云、和語用ヲ四聲ニ取ラズ、是

音韻聲

ヲ以テ爾少年輩、末其字義ヲ解セズ、因テ是ヲコヽニ載ス、蓋字ニ音韻聲ノ別アリ、音トハ響ノ首ナリ、韻トハ響ノ尾ナリ、響トハ、字ハ惟其響ヲ用ユル者也、暫カノ字ヲ擧テ言ンニ、カト響ク内、尾ニハ早、アト云者從フ也、其響收ラントシテアトナル所、韻ニシテ、カト呼出ス所音ナリ、音首韻尾ニ、響成ルトイヘドモ、ソレヲヨブニ抑揚アリ、其抑揚ヲ以テ四聲成ル、故ニ東平董上凍去穀入和呼其別ヲ覺エズ、只入聲クヲ以テ收ルノ故ニ、コレヲ識別スルコトヲ得タリ、平トハ呼出ス響ノ上ラズ下ラズ、促ラザル也、上聲ハ揚リ、去聲ハ衰フ、入聲西土ノ響ニテハ、フツクチキヲ用ヒズ、惟穀ト促ル、於是上揚リ、去低リ、入促ルヲ以テ其響側ツ、故ニ之ヲ總テ側ト云テ、平ノ一聲ニ敵ス、故ニ聲ハ猶フシト云ガ如シ、和讀聲ヲ用ル事ナキ程ニ深ク察セザレバ誤ル、學者宜ク、心ヲ用ヒザルベケンヤ、

大韻

サテ大韻トハ、其詩ニ押タル韻中ノ字ヲ、上九字ノ内ニ用ユル也、胡姫年十五、春日獨當壚、端坐苦愁思、攬衣起西遊ノ類也、

小韻

小韻トハ、其詩ノ韻ニ押タルニハ有ネドモ、同韻中ノ字、二句十字ノ内ニ散在ス、薄帷鑒明月、淸風吹我襟、是類也、大韻小韻共ニ字ノ處ハ定ラズ、

二紐

傍紐正紐、紐ハ字ヲ結ビ合スル氣味也、正紐ハ竪ノ結ビ合セニシテ、傍紐ハ横ノ結ビ合セ也、横ニハ異音同韻ヲ列ネ、竪ニハ同音異聲ヲ重ネタリ、唐神珙羅文反様ニ、眞平整上正去隻入ヲ竪トス、眞平照母第三等征同甄同之同ヲ横トス、僧無相ノ九弄辨ニ、竪ヲ正紐トシ、横ヲ傍紐トストアリ、

八病之辨

所言、傍紐、十字中已有田徒年反定母四等平字不得著寅寅疑演字、演以淺反、喩母第四等上、延以然反、喩母第四等平、等之字、正紐、十字中已有壬如林反、日母第三等平、字、不得著衽汝鴆反、日母第三等去、任任

疑荏、荏如甚反、日母第三等上、等之字、氷川詩式、正紐壬如林切、日母第三等平紝汝鴆反、日母第三等去任任疑荏、荏如甚反、日母第三等上入人執反、日母第三等入、正紐一句内有壬字、更不得犯紝任入字、我本漢家古牙反、見母第三等平、女、來嫁古訝反、見母第三等去、單于庭係正紐、傍紐一句中有月魚厥反、入、字更不可用元愚袁反、平、阮虞遠反、上、願魚怨反、去、共是疑母第三等字、丈直兩反、定母第三等上人且安坐梁呂張反、來母第三等平、陳將欲起係傍紐、而シテ五字中急、十字中緩ノ訣アリ、上ニ一句内ノ字アレバ、一句中相犯スヲ最忌ム、二句十字ハ緩也ト云コトナルベシ、然レバ一聯ノ外ナルハ忌所ニ非ズト見ヱタリ、右詩式ニ所引ノ詩ハ、巵言ニ合シ、竪ヲ正紐トシ、横ヲ傍紐トス、傍韻者、緣聲而來、相忤也、然字從連韻而來相參也、若金平錦上禁去急入與陰平蔭上飲去邑入是連韻紐之竪ニ紐ナリ若金與陰、及飲與錦、此傍會與之相參横ニ紐ナリ是正紐傍紐不同也ト云説、詩ヲ引ト戾ラザレバ、元阮願月ノ語、偶考ヲ失スルニ似タリ、宜ク一句中有月字、更不可用元愚袁反、疑母第三等平、遠雲阮反、喩母第三等上萬無販反、微母第三等去、字トスベシ、事文類聚ニ、流力求反、來母第三等平、丘去鳩反、溪母第三等平、爲正紐、流見上柳力久反、上、來母第三等、共爲傍紐、詩人玉屑、流丘作流久擧有反、見母第三等上、是前説ニ反ス、非也、由是觀之、彼方ニテモサダカナラザリケン、律體ノ守ル所ナラバ、小童トイフトモ、豈知ラザルコトヲ得ンヤ、故滄浪曰、四聲設於周顒、八病嚴於沈約、蔽法不足據也ト、喬彥駿沈約詩ヲ撿セシニ、此禁ヲ犯ス者多多、然レバ滄浪ノ沈約ヲ嚴ナリトセシモ、言ヒ古リタル説ニ就テ、察セズシテ言タルナルベシ巵言ニ此八病ヲ判ジテ曰、風勁角弓鳴、將軍獵渭城、風與將何損其美、西北有高樓、上與浮雲齊、雖隔韻何害、律固

無是矣、使同韻如前詩ノ鳴之與城、何妨、蜂腰望盡似猶見、遠與君別者、近體宜少避之、亦無妨、鶴膝第五字與第十五字同、八句倶如是則不宜、一字犯亦無妨、大韻小韻傍紐正紐之四病、尤無謂、不足道也ト、コレニテ沈約八病、唐律ノ本務ニ非ザル事知ルベシ、今按ズルニ、巵言ノ此說、斷ハ則可也、八病ヲイフニ於テハ、猶遺ス事アリ、詩人玉屑ヲ雜考ルニ、平頭ハ、第一ト第六ト、ノ二字ニアラズ、第一二ト第六七ト、ノ同聲今日良宴會、讙樂莫具陳ノ類ナリ、上尾、平ヲ用ルノミニモアラズ、玉屑ニハ、第五字、不得與第十字同聲、如青青河畔草、鬱鬱園中柳、トアレバ、去入ニ通ジテ、此例ナリ、蜂腰第二字不得與第五字同聲、如聞君愛我甘、竊欲自修飾、是ナリ、平頭ノ說、玉屑ヨシ、後ニ引ク秘府論ノ說備ハレリ、上尾蜂腰兩說相得

朝綱八病

テ全シ、唐律ニ四不同ノ禁有テ、其病名無シ、大江ノ朝綱ハ、音人ノ孫、玉淵ノ子ニシテ、村上帝ニ事ヘ、一時ノ文宗タリ、時西土五代ノ季ニ當レバ、唐ヲ距ルコト未遠カラズ、此人八病ノ目アリ、ソレ一家自製スル所ノ者乎、抑承ル所アル乎、今其說ヲ考ルニ、一ニ平頭病、上句第一二字、與下句一二字、同平上去入、但第一字同平不爲病ト、是玉屑ノ說ト近シ、昔僧空海、道ヲ求メテ海ヲ渡ル、乃

桓武天皇、延曆二十三年ニシテ、唐ノ德宗、貞元二十年ニ當ル、意ヲ竺典ニ刻ムトイヘドモ、傍又思ヲ文苑ニ通ズ、歸朝ノ後、文鏡秘府論ヲ著ス、其詩式ノ如キ、マノアタリ唐人ニ面授口訣スル者、大ニ詩家ノ闕ヲ補フベシ、其書ニ曰、調聲之術有三、曰換頭、曰護腰、曰相承、護腰相承、下ニ出ス、換頭ハモト平頭ノ事也、下ニ引ク所ノ詩、コレヲ雙

換頭トシテ最善トイヘリ、雙トハ兩句括スル故ニ置タルナルベシ、若競、蓬州野望、飄颻宕渠域、曠望蜀門隈、水共三巴遠、山隨八陣開、橋形疑漢接、石勢似烟回、欲下他鄉淚、猿聲幾處催、若カクノ如キヲ得ベカラズンバ不歸江畔久、舊業已凋殘、平子歸田處、園林接汝墳ノ類亦妨ゲズ、亦名爲換頭、然不及雙換、又不得句頭第一字、是去上入、次句頭、用去上入ト、此說以テ以上ノ聚訟ヲ決スベシ、

一條帝長德三年、省試詩論アリ、是ハ大江匡衡ノ養子時棟、是年ノ省試ニ詩ヲ獻ゼシニ、大內記紀齊名、其瑕類ヲ擧テ下第セリ、省中ノ故事、是日文章博士、諸儒ト式部省ニ會シテ判定スル事ナルニ、此度諸儒匡衡ト議セズ、匡衡憤ッテ、疏シテ其冤ヲ訴フ、ココニ於テ此論アリ、論本朝文粹ニ出ヅ、內平頭ノ事アリ、匡衡曰、平頭有二等之病、上句第二字與下句第二字同聲者、亘病也、必避之、上句第一字、下句第一字、同上去入者、雖立爲病之文、不避之トアリ、匡衡ノ說、文時ニ據ル、文時ハ、コレヲ唐律ニ考ルナルベシ、二上尾病、五言之第五字、與第十字、七言之第七字、與第十四字、同平上去入是也、三蜂腰病、五言七言、每句第二字與第四字同平上去入、但上句平聲不爲病、四鶴膝病、五言上句之第二字、與下句第九字、不同平上去入是也、五下三聯病、五言七言、每句三字連同聲是也、六念二病、一首中、有同字同意是也、七越韻病、用相似之韻也、八越調病、或有餘句、或有不足句ト、此說甚明ニシテ、今日詩家ノ病トスル者也、若此法ヲ守ル時ハ、平頭病ヲ避レバ、側ニテ入ル者、第二句ノ第二字平トナリ、平ニテ入ル者、第二句ノ第二字側トナル、上尾病ヲ避レバ、起句イツニテモ韻ヲ踏ズ、二四六八

韻ヲ踏メバ、一三五七ノ第五字皆側トナル如此ナレバ、五七言共ニ起句踏落シトナル、此說五言ニハ得テ、七言ニハ失ス、但七言ノ踏落シモ、明人ノ忌ム樣ニハ盛唐ノ諸公ハ忌ズ、晩唐ニ至リテハ、七言モ側起甚多ク見ユ、或ハ彼方ニモ是等ノ新說有シニヤ不審シ、而シテ其蜂腰病ヲ避レバ、二四不同トナル、上句平聲不爲病トハ、夾平苦カラズト云コト也、此蜂腰病ノ事、本二五ノ法、今刊行ノ卮言ニハ二四トアリ、筆誤ナリ、ココニ二四ヲ以テ蜂腰トスルハ、朝綱ノ新意ナルベシ、故ニ長德ノ詩論ニモ、ヤハリ二五ニ歸シテ見ユ、時棟ノ句ニ曰、寰中唯守禮、海外都無怨、齊名之ヲ難ジテ外怨皆去聲、蜂腰病ヲ犯ストス、因テ諸詩髓腦、文章儀式等ノ書ヲ引テ、何以本朝隨時之議、猥背唐家不易之文、トアレバ、唐朝及第韻律ノ法有シ樣ナリ、ココノ論

ハ、匡衡ハ、二五同聲ハ、上句ノ法ニシテ、下句ノ法ニアラズト云、齊名ハ、上下ノ句共ニ避ト云ノ論ナリ、今唐詩ヲ作例ニ依テ、之ヲ思フニ、平韻ノ詩ナラバ、上句ニイフベクシテ、下句ニイフベカラズ、側韻ノ詩、聲律ヲ正サバ、下句ニ忌ベシ、其故ハ○●○○●此句ハ二五忌難キ樣ナレドモ、側中上去入ノ迭ニスベキ聲アレバ、其法守ルベシ、●○●●○此句ハ二五共ニ一同平聲、イカンゾ蜂腰ノ病ヲ避得ン、故ニ祕府論、聞君愛我甘竊獨自修飾、君甘非病、獨飾是病トイヘリ、二公ノ論、ココニ及バザルハ何ゾヤ、不審シ、蓋且コノ時、朝廷ノ議、二五蜂腰ニ歸スレバ、二四蜂腰、朝綱唐律ニ考ヘテ設ル所ナルガ、識者ノ斷ヲ待ツ、然レバ則卮言ノ說ヲ長ゼリトス、下三聯病、每句トアレバ、上句側側側、下句平平平ヲ忌ム者ニシテ、一句ヲ云モノニ非ザ

ルニ似タリ、沈法ノ大小韻、正傍紐、朝綱詩家ノ急ニ非ズト見テ、換ルニ下三聯、念二、越韻、越調ヲ以テスルナルベシ、越韻相似ノ韻トスレバ、五渡溪頭躑躅紅、東韻嵩陽寺裏講時鐘、冬韻ナルニヤ、暮蟬不可聽、落葉豈堪聞ナルニヤ知ラズ、越調ノ餘句トハ、意已ニ盡テ、字句足ラズ、長語ヲ以テ之ヲ補フノ類ナルベシ、不足ノ句トハ、字句盡テ、意ヲ盡サザル者ナルベシ、蓋八病ノ目、モト五言ノ爲ニ設ク、七言ヲ云者ハ、朝綱例ヲ以テ推スナルベシ、上尾病、平頭病ノ例ヲ以テ推セバ、五言之第四字、第五字、與第九字第十字、七言之第六字第七字、與第十三字第十四字、平上去入ヲ同ウスベカラザル者ナリ、故ニ其上句平聲不爲病也ノ句、夾平ノ事ナルベケレドモ、七言第一句ハ、作例平起ヲ法トシ、五言モ平起ヲ強テ病トセズ、サル程ニ夾平トナシテ意ハ聞ユ

ル様ニテ、起句ノ法ヲ遺セバ、筆足ラザルニ似タリ但於起句、五言之第五字、七言之第七字、同平亦不爲病、トイハバ、尤全カルベシ、明胡元瑞詩藪、新宮實壯哉雲裏望樓臺ノ陰鏗ノ詩ヲ稱シテ、平頭上尾ノ病ヲ除クトイヘリ、平頭トハ、新雲ノ字ヲイハズシテ宮裏ノ二字ヲ云、哉ト臺ト上尾病ニ非ズトセズ、起句ニ於テハ、唐人病トセザル故、是ヲ論ゼズト見ヱタリ、然レドモコレヲ平考スルニ、此聯上尾ニ於テハ胡說盡サズ、平頭ニ於テハ、扈言ノ盡サザルヲ見ル、朝綱八病ノ說ニ因テ見レバ、二四不同トハ蜂腰病ヲ避ルノ訣ナリ、而シテ二四其訣有テ、二六其病名ナシ、一大缺事ニ非ズヤ、因テ竊ニ之ヲ補ッテ曰、八病モト五言ノ爲ニ設ク、然レバ則七言ノ二六不對、亦二四ノ同ト同ク蜂腰病ニ屬スベシ、但沈約タツル所ノ法ニハアラズ、祕府

二四
二六

論、二四同聲、雖世無的目、甚於蜂腰、トイヘリ、五律、唐人多ク側ヲ以テ起セバ、頗上尾病ヲ避ルニ似タリ、同韻己ニ用ヒザレバ、隔韻何ゾ用ヒンヤ、朝綱五言ノ例ヲ推シテ、七言平起モ亦上尾病トスルハ誤ナリ」、祕府論曰、大韻名觸地病、小韻名傷音、傍紐亦名大紐、正紐亦名小紐、其名爽切病、元兢曰、近代咸不以爲累、サテ近體ノ事、沈宋ニ定レル由ナレドモ、其詩式アル沙汰モ聞カズ、然レドモ其格ハ、是ヲ律中ニ點檢シテ知ルベシ、今時師ノ童蒙ニ教ユル所ノ聲律ノ法、唯二四不同、二六對ニ止マル、其變法、夾平ノ一法ノミ、其二四不同、二六對ノ訣、出ル所ヲ審ニセズ、明以來ノ書ニハ稍稍見ヱタリ、或云、古昔衣冠、直ニ海ニ航シテ唐ニ學ブ、是唐ヨリ傳ル所ノ者ト、或ハ其然ラン乎、詩律兆曰、輓近有若陳西文黄美發、乃著書有一三五不論、二四六分明

反粘

平起
側起

正格
偏格

等之說ト、辨後ニ載ス、然シテ二三六七ノ句、一四五八ノ句ト、聲律ヲ反スルノ目ヲ聞ズ、姑コレヲ平頭病ニ屬スベシ、」且通例、起句第二字目ヲ側ニスルヲ側起、平ニスルヲ平起ト云、明、游子六詩法入門、春臺斥非編等モ、是ニ從ヘリ、サレドモ氷川詩式ナドニテ考レバ、第二字ヲ側ニスルヲバ、側入ト云、側起トハ、第五字ヲ側ニスル者ニシテ、俗ニ云踏落シ也、第二字ヲ平ニスルヲバ、平入ト云、平起トハ、第五字本韻ヲ以テ起ス者也、詩藪等コレニ同ジ、平起、七言ニ於テハ、正法トシ、五言ニ於テハ變法トス、」而シテ律製側入ヲ正格トシ、平入ヲ偏格トス、正偏ノ二譜、コレヲ左ニ記ス、圖圈ノ象、塡詞圖譜ニ、○爲平、●爲側、譜、平而可側者用◒、側而可平者用◓、大約上半爲現譜之音、下半爲通用之法ト云說ニヨル、其上半爲現譜之音、下半爲通用之法トハ

ニト書タルハ、平ニスルガ定レル音ナリ、ソレヲ◒トアルハ、側モ通用セラルル法ヲ示スト云事ナリ、◓コレ又前ニ反シテ知ルベシ、正格、

◓●○○● 結句合
○○●●○ 起句反

◒○○●● 二句粘
◓●●○○ 三句反

◓●○○● 四句粘
○○●●○ 五句反

◒○○●● 六句粘
◓●●○○ 七句反

以下反粘之二字略之、宜傚之、偏格、

◒○○●●
◓●●○○

◓●○○●
○○●●○

◒○○●●
◓●●○○

◓●○○●
○○●●○

詩法入門平起ヲ以テ法ヲ立タレドモ、五律ハ側起ヲ以テ正トス、句首ノ第一字隨意ナルモ妨ゲズトイヘドモ、盡同聲ノ竝バザル用心スベシ、詩人玉屑ニ曰、唐明翟詩、多用正格、如杜甫詩、用偏格者、十無二三ト

起聯

章解

イヘリ、今杜律ヲ檢スルニ、詩四百首ニ向トシテ、偏格百首ニ過ズ、其言徵アリ、律體四聯八句、一二ヲ起句、起聯、首聯、發句、開句、破題トモ云、破題トハ、先ココニ於テ題意ヲ説破スル也、題意ヲ説破ストハ、譬バ、杜子美十七夜詩ニ、秋月仍圓夜ト作ルガ如シ、今連歌ナド、發端ノ句ヲ發句ト稱スルモ、是ニ資ルナルベシ、三四一聯、五六一聯、是ヲ對偶ノ聯ト定メタリ、故ニ三四ヲ前聯、五六ヲ後聯ト云、又前解後解トモ云、而シテ此前解後解ニ別義アリ、三百篇ノ如キニ見ヨ、詩一篇ト云者ハ、數章ヲ重ネテ篇ヲナス、其一章ハ數句ヲ重ネテナス者也、其章即解ニシテ、二句ヲ一聯、二聯ヲ一解トス、故ニ王僧虔曰、古曰章、今曰解ト、是ヲ以テ律ヲ二解トシ、前四句ヲ前解ト云、後四句ヲ後解ト云、ココニ於テ前聯後聯ヲ前解後解トイフ者ト、名同ウシテ實異

前聯
後聯
結聯
全篇

ナリ、淸王翼雲古唐詩合解凡例云、漢魏多五言不轉韻、今註唐古詩、每於轉韻分解處見神情、是解ハ分解ノ意ナルヲ釋ス、我友喬彥駿曰、此事王翼雲ニ先立テ、順治ノ比金人瑞ナル者アリ、書ヲ著シテ、唐才子詩ト云、前後解ヲ說出シテ、唐ノ七律ヲ解スルコト、六百首ニ滿ツト、我未見其書、以佗日ヲ竢ツ、前聯又頷聯撼聯ト云、後聯又頸聯警聯ト云、詩學入門ニハ、腹聯トモアリ、而シテ又前後二聯ヲ冰川詩式ニ、中聯トモイヘリ、七八ヲ結句、結聯、末聯、結尾、落句ナド云、大江朝綱ハ、發句、胸句、腰句、落句ト云リ、玉屑曰、第一聯破題、欲如狂風卷浪、勢欲滔天、第二聯頷聯、欲靈龍之珠、善抱而不脫也、亦謂撼聯者、欲其雄贍遒勁、撑開天地、動搖星辰也、三聯警聯、欲似疾雷破山、觀者驚愕、第四聯落句、欲如高山落石、一去不回ト、是其大意ナリ、正偏二格、聲律一定ナリ、正

側起
腰

格ヲ以テ之ヲ言フニ第二字側ニテ入ル者、第四字必平ヲ以テ受ク、此第一句、平起モ亦妨ゲズトイヘドモ、上尾病ヲ避レバ、側起正ナリ、凡句、下ヨリ數ヘテ第三字目、五言ナレバ、上ヨリ第三字目、七言ナレバ、上ヨリ第五字目、コレヲ腰ト云、腰一三五七ノ句ハ平、二四六八ノ句ハ側、但七言ノ起句、平ヲ押スルニ由テ側ニ從フ、是正法也、其故ハ｜｜●○●、｜｜○●○、是ヲ拗句ト稱スルニ由テ考フベシ、陳子昂、春夜別友人、

銀燭吐青烟　金樽對綺筵
離堂思琴瑟　別路遶山川
明月隱高樹　長河沒曉天
悠悠洛陽去　此會在何年

古唐詩合解、此詩ヲ收メテ、八腰字皆側聲、不覺其病、然亦當戒トアルニ由テ考フベシ、今按ズルニ、八腰側トイヘドモ一三五七、乃病ニシテ、二四六八ハ、則其正也、其

第一字

思字

最拗スル者ヲ以テイハバ、變格中ニ載タル所ノ唐球ノ作、一三五七ノ腰側ニシテ、二四六八ノ腰平、即盡正式ニ反スル者也、講ヲ照シテ考フベシ、腰拗スルニ意ヲ著ベキ爲ニ、唐人調聲ノ術ニ護腰ノ法アリ、秘府論庾信、誰道氣蓋世、晨起帳中歌ヲ引テ曰、此爲不調、宜護其腰トアリ、氣帳共ニ去聲ナリ、是ニ由テ之ヲ考フレバ、八句共ニ第一字ノ三無法ニ近シ、サレドモ彼此平頭ノ說、孤平孤側等ノ說、相照シテ見レバ、其位一定ニ歸ストイヘドモ、移易スルコトヲ得、無法ニ近キ所也、只悉平ヲ竝べ側ヲ竝ベンハ、布置宜ヲ失ストモ謂ツベシ、

且此詩王翼雲、思ノ字ヲ側トイヘリ、通例ハ、死底ヲ側トシ、活底ヲ平トス、サレドモ古人用ヒ得テ然ラザル者アリ、韓昌黎集、寧懷別時苦、勿作別時思、唐詩正聲、劉長卿、帝子不可見、秋風來暮思、皇明一統志、趙子昂、萬柳堂詩、誰知咫尺京城外、便有無窮萬里思、古今詩刪、明劉基、軒轅如固有、千載起人思、明詩解、蔣山卿、可憐別院無顏○、翻信長門有怨思、是皆死底、コレヲ支ノ平韻ニ列ス、劉廷琦、即今西望猶堪思、況復當時歌舞人、是乃活底、却テ之ヲ側ニ用ユ、常例ト相反ス、離堂思琴瑟、ノ思モ活底、常例ノ平ナレドモ、劉廷琦ノ詩ノ例ニテ、琴ノ平字ヲ夾ミタル也、死活ノ義、正字通相沓切音司、慮也、洪範思曰睿、睿作聖、管子思之思之、又重思之、息字切音思、意緒也、陸機文賦、澄心凝思トアレバ通例ナル者字義ノ正ニシテ、上ニ常ヲ反スル者ハ詞家ノ私也、韓昌黎集ヲ讀ニ、旋吟佳句還鞭馬、恨不身先去鳥飛音義サキヲ平トシ、先ダツヲ去トス、然ルニ此詩コレニ反ス、作例アレバ、人ノ作咎ムベキニモ非ザレドモ、字家ノ通義ニ非ザレバ、少年輩法トルベキ事ニ非

鶴膝

ズ」二三五七ノ句尾共ニ側ナリトイヘドモ、上去入、一類ニ歸スルヲ忌ム、乃鶴膝病ナリ、戴叔倫、除夜宿石頭驛、

旅館誰相問、去　寒燈獨可親。
一年將盡夜、去　萬里未歸人。
寥落悲前事、去　支離笑此身。
愁顏與衰鬢、去　明日又逢春。

王維、送楊少府貶柳州、

明到衡山與洞庭、　若爲秋月聽猿聲。
愁見北渚三湘遠、上　惡說南風五兩輕。
青草瘴時過夏口、上　白頭浪裏出溢城。
長沙不久留才子、上　賈誼何須吊屈平。

同韻病

謝茂秦、同韻病ヲ論ズ、亦鶴膝病ナリ、只其差別ハ、鶴膝ハ、佗韻ノ同聲ヲ兼テイフ、同韻病ハ、一韻ノ同聲ヲ云ナリ、其說ニ曰、子美居夔州、上句曰、春知催柳別、農事聞人說、別說同韻、王維溫泉上句、新豐樹裏行人度、聞說甘泉能獻賦、度賦同韻、此非詩家正法、章

排律

碣、上句皆用翰韻、尤可怪也、トアリ、サレドモ、章碣ノ詩ハ、別ニ此體ヲ製シタル者ニシテ、常格ニ非ザレバ、此法ヲ以テ咎ムベカラズ、其作異體ニ出セリ、同韻隔韻ノ別アリトイヘドモ、王說ノ如ク、一犯ハ恕センモ苦シカルマジ、」サテ右ニ陳ヌル通ノ諸病ヲ除キ去テ、乃正律也、聲律無佗、絕句ハ是ヲ半截ニシ、排律ハ是ヲ排比ス、故ニ律ヲ正體トシテ、八句四韻ヲ排キ、中ニ二韻ニテモ、四韻ニテモ、幾韻ニテモ入ル、一韻、三韻、五韻ナド入ルルハ變法ナリ、」排律ノ本體ハ、六韻十二句也、故ニ排律ハ、律ヲ排キタル者ナレドモ、詩ノ始ヲイヘバ、モト長編ノ儷句、四韻ヨリハ多カリシ程ニ、四韻ヨリ後トモ云ベカラズ、故ニ文體明辨ニ、排律原於顏延之、謝瞻、諸人、唐興始爲專體、而有排律之名、トアリ、律ニ比スレバ、句數多キニヨリ、四韻ノ通リニ作リテハ、

甲斐ナク見ユル故、高古ニ作リ、文字故事變化モ多クスル者也、故ニ同書ニ相續デ曰、布敍之法、不以鍛錬爲工、而以布置有序、首尾通觀爲尙、排律ノ本體、六韻十二句、前後二解ノ間ニ韻ヲ挿シ入ル、何ヲ以テ是ヲ本體トイフトナレバ、唐ノ士ヲ取ル事、詩ヲ以テス、其取ル所ノ詩、乃六韻ナル者也、此士ヲ取ルノ擧ヲ試ト云、試ハモト漢、武帝、經義對策ヲ以テ士ヲ擧シニ萠セリ、

散比

詩ノ對無キ者ヲ散詩ト云、對ヲ用ユルヲ比語ト云、其六韻、初ノ一韻二句ハ起リ也、末ノ一韻二句ハ結ビ也、起結二聯ヲ除ヒテ、

八比

中四韻八句、コレヲ八比ト云、其四韻、初ヲ兼題、又領比ト云、次テ頸比又中比ト云、其次ヲ腹比ト云、其次ヲ後比ト云、

試

試ト云者ハ、毎歳仲冬、郡縣ニ課セ、才子ヲ擧シム、故ニ之ヲ擧子ト云、計偕トテ、コレガ冬分、京師ヘ勘定ニ上ル役人ト伴ヒ、閱試トテ、禮部院ト云ニテ試ラル、勿論身言書判ナドトテ、試ラルル事、一事ノミニモ非ズ、其試ラルル處ヲ場屋ト云、武士ドモ兵衞ヲ設ケテ之ヲ衞ル、サテ諸國ノ擧子、題ヲ受テ詩ヲ賦ス、其詩ヲアラタムル人ヲ考官ト云、終ニ其選ニ遇フヲ及第ト云、收メラレザルヲ下第落第ト云、及第シテハ進士ト云、場屋ニシテ、上ヨリ出ル題ヲ得テ賦スル詩、乃五言六韻也、主司ノ望ニヨリ、八韻トモ、四韻トモ請フ事アレバ、官限四韻、官限八韻ト注ス、韻ハ題中ノ字、平側共ニアレバ、大半平、或ハ側ニテモ、意ニ任スル也、平字無レバ、側中ニテ選ミ用ユル也、是モ主司ノ望ニテ、佗韻ヲ用ユレバ、又官韻某ノ字ト註スル也、溫庭筠ノ、試ニ入テ、八タビ又手シテ、八韻成リシト云モ、官韻トコトハリタリ、試院絕句ノ作ハ、祖詠、終南陰嶺秀、ノ一首ノミ、是ハ祖詠試ニ應ジテ、纔

側韻
排律

ニ四句ヲ得テ、有司ニ納レシカバ、有司其故ヲ問フ、祖詠應ヘテ詠意盡タリト云シ由ニテ、例ニ非ズ側韻ヲ用ユル者ハ、聲律協ハズ、陳隋ノ體ニシテ、排律六韻ニ擬スル者ノ樣ナリ、淸毛奇齡、唐人試帖ヲ得テ世ニ行フ、當時世ニ及第詩選ト云者是ナリ、乃唐人及第ノ詩ナリ、其側韻ナル者ヲ檢スルニ、聲律平韻ノ如ク整齊ナラズ、然ルニ江、時棟ノ詩ハ側韻ニシテ、齊名聲律ヲ辨ジテ、以本朝隨時之議、背唐家不易之文、トアレバ、其引ク所ノ諸詩髓腦、文章儀式等、彼ヨリ試詩ノ法傳ヘタル者ノ如シ、而シテ試帖ニ載スル所ニ側韻ノ作、都テ式ニ合スル者ナシ、亦怪カラズヤ、只側韻中合作一首ヲ得タリ、齊ト不齊ト二首ヲ擧テ、相照サンコトヲ要ス、其不齊ナル者、張謂、落日山照曜ノ作

徘徊空山下、山失ス　晼晚殘陽落、　起
圓影過峯巒、　半規入林薄、夾平　頷比
餘光徹群岫、平夾　亂彩布幽壑、　頸比
石鏡共澄明、　巖潭佐昭灼、唐律許ス　腹比
樓禽去杳杳、上同　晩烟生漠漠、粘　後比
此意誰復知、側夾　獨懷謝康樂、夾平　結

粘反ハ大槩アル樣ナレドモ、聲調和セズ、題下ノ注ヲ按ズルニ、曰、題無平字者、如石鼓玉燭類、必用側韻、題字平側俱見者、任其擇用、始知唐詩原有側韻律、孫月峯作排律辨體、特出側律一門、非誤也ト、唐士ヲ排律ニ取テ、而側六韻比體ヲ用ユレバ、側韻排律有ト云コト故アリ、齊名唐家不易之文ト云モサモアルベシ、只唐代ノ試詩、聲律守ラザルヲ如何トモシ難シ、其纔ニ得ル所ノ合作一首、乃豆盧榮、春風扇微和ノ作

春晴生縹緲、　軟吹和初遍、
池影動波瀾、　山容發蔥蒨、
遲遲入綺閣、　習習披芳甸、

五韻律

樹杪颺鶯啼、階前落花片、
韶光恐閒放、旭日宜游宴、
文客拂塵依、仁風願廻扇、

古唐詩合解曰、排律用三解六韻、此正局也、媚習六韻、則雖百韻、總把八句中間、排進去、或十六句、二十句、二十四句、一解一解排去ト、先此通ニテ、六韻、八韻、十韻、十二韻ト飛デ、七韻、九韻、十一韻ト、奇數ニハ餘リ作ラヌ也、同書五韻ノモノ一首ヲ收ム、張子容、寄松陽李少府、

西行礙淺石、北轉入谿橋、
樹色烟輕重、湖光風動搖、
百花飛亂雪、萬嶺疊青霄、
猿挂臨潭篠、鷗迎出浦橈、
唯應賞心客、玆路不言遙、

此作ヲ載セテ、此篇較五律、多二句、在轉處、非排律正格也、詩中雖有解數、亦有不拘四句者、唯視氣格何如耳、トアリ、變體ナリ、サテ右イヘル如ク、試ニ用ユルハ、六韻ノ五言排律、唐ノ定制ナリ、本邦ノ昔ハ、經國集等ヲ見ルニ、七言ヲモ用ヒタリト見ユ、

試用七言

平入側入

七言律詩、又五言八句ノ變ナリ、是ヲ以テ聲病ヲ論ズル事モ、昔ハ專五言ニアリシ也、正偏格ノ事、沈氏筆談、五言ニ言テ、七言ニ言ザルモ、斯ル故ナルベシ、然ルニ氷川詩式、始テ七律ニ正偏ヲイフ事五言ト同ク、側入ヲ正トシ、平入ヲ偏トス、然レドモ唐人ノ作例、五言ハ側入多シテ、七言ハ平入多シ、其少キ者ヲ以テ正トシ、多キ者ヲ以テ偏トスベカラズ、又五言ニ上二字ヲ加ヘタル者トスレバ、平入正格ナルニ似タリ、若然リトセバ、起句平ヲ以テ起スヲ變トシ、側ヲ以テ起スヲ正トスベシ、然ルヲシカラズ、五言側起ヲ貴ミ、七言平起ヲ貴メバ、是又穩ナラズ、故ニ以下七律ノ譜、沈氏七言ニ正偏ヲ言ザルニ倣テ、平入側

入ノ字ヲ掲グ、平入之譜、

◒○◒●●○○　◒●○○●●○
◒●◒○○●●　◒○◒●●○○
◒○◒●○○●　◒●○○●●○
◒●◒○○●●　◒○◒●●○○

側入之譜、

◒●○○●●○　◒○◒●●○○
◒○◒●○○●　◒●○○●●○
◒●◒○○●●　◒○◒●●○○
◒○◒●○○●　◒●○○●●○

韻ハ諧和ヲ貴ム者ナレバ、平側類ヲ以テ從フベシ、如此ナレバ、獨孤平ナキノミナラズ、孤側モ亦アル事ナシ、劉禹錫、自朗州至京、戲贈看花諸君作、

紫陌紅塵拂面來、無人不道看花回、
玄都觀裏桃千樹、盡是劉郎去後栽、

盧綸、邊庭春怨、

春風昨夜到楡關、故國烟花想已殘、
少婦不知歸未得、朝朝應上望夫山、

拗

平起　側起

此二首、詩法入門ニ載セテ正式トセリ、同書一三五不論、二四六分明、ト分訣アリ、誰人ノ言始メシ語ニヤ、一三五ハ緩也トハ云ベシ、不論トハ言難カルベシ、且五言ノ第三字、七言ノ第五字ノ如キハ、一句ノ腰ナレバ聲律定レリ故ニ其式ニ合ザルヲバ拗體トイヘリ、七言一三ノ字、第五字ニ比スレバ隨意ナリ、宜ク譜ヲ照スベシ、聲調類ヲ以テ從フヲヨシトス、故ニ譜◒○◒――――如此者、下ヲ側ニセバ、○○●上ヲ平ニスベシ、上ヲ側ニセバ、●○○下ヲ平ニスベシ、●○●孤平トナスハ、聲律ノ忌ル所也、今初學ノ爲ニ移易スベキ者ヲ分ツテ、其道ニ入易カラシム、且五律平起ハ正ニアラズ、上尾病ヲ犯セバ也、排律絶句是ニ同ジ、七律ノ五律ト異ル者ハ、五律ハ、側起ヲ正トス、七律ハ平起ヲ正トス、

對起

聲法

是唐以前七言古詩ノ時ヨリ然リ、五律ノ平起、上尾ヲ犯ストイヘドモ、唐律以テ忌トセズ、何ヲ以テ是ヲ云トナレバ、詩藪唐五言律、起句之妙者ト數ヘタルハ、皆平起ニシテ、次ニ側起高古者ヲ擧タリ、七言ノ側起ハ、落韻トイヘバ、正式ニアラズ、然レドモ盛唐ノ諸公亦ママ有、晩唐ヨリ宋ニ至リテハ愈多シ、明人弊ヲ矯テ之ヲ忌事唐ニ愈ル、對起ノ如キハ、七言トイヘドモ、側ヲ押スル、又常ナリ、杜、去年登高鄴縣北、今日重在涪水濱、ノ類ナリ、然レドモ、風急天高猿嘯哀、渚清沙白鳥飛回、ナド平ニ起シタルモ少カラズ、五言又同ジ、袁中郎、對起則言句脚尾不押韻、非對則必照韻起也、是亦五七言所同也ト云、サレドモ是七言ノ法ニシテ、五言ノ法ニ非ズ、中郎誤レリ、春臺ノ斥非編ヲ按ズルニ、五言第二字ヲ平ニシテ韻アルノ句、第一字必平、金樽對綺筵、晴光轉綠蘋、七言第二字ヲ側ニシテ韻アルノ句第三字必平、萬古千秋對洛城、不似湘江水北流、是モ亦唐律一定ノ法、晩霞對洛城鳥啼竹樹間、萬戶擣衣欲暮秋傾倒百壺夜未央等ノ如キ、佳ナラザルニ非ズ、之ヲ聲病トス、若其第一字側ニシテ第三字平到來生隱心主人孤島中ノ如キハ、時トシテコレアリ、然レドモ數十百首ノ中、僅ニ一二句ノミ、明人王元美、哭李于鱗排律一百二十韻、第二字ヲ側ニスル句六十句ニシテ、一句モ此法ヲ犯ス者ナシ、七言ノ句、之ヲ犯者唐ニハ崔惠童一月主人笑幾回明ニハ、李于鱗、黃鳥一聲酒一盃、僅ニ一二ナリ、但第二字側ニシテ、第五字平笑問客從何處來明日忽爲千里人昨日少年今白頭ノ如キモ、亦百中ノ一二ノコト、正字通ヲ閱スルニ、煩君一日殷勤意、示我十年感遇詩、ト云句、十字ヲ侵韻音諶ト註シ

下三字法

タレバ、此處實ニ平ナルベキコト益徵スベシ、一句當陽本現成。平平側側側平平。ニテ、自然ノ節奏アル者ナレバ、一三五不論ノ訣、間然ナキ事能ハズ、又春臺、韻アル句ト云所、意ヲ認ムベシ、五七言共ニ韻ヲ押セザル句ハ、聲律寬ナリ、積水不可極、草木歲月晚、黃鶴一去不復返、江風徹曉不得寐、南朝四百八十寺、ナド云類、韻ヲ踏タル句ニハ見ズ。上句トイヘドモ、箇樣ナル態ハ、佳境ヲ得タル上ノ活手段ニシテ、尋常ノ好ム事ニ非ズ總テ本格ヲハヅシテ作ル者ハ、ソレ程ノ手柄ナクテハ愜ハズ、隨分力一盃避ルニシクハナシ、韻礎上腰ニ當ル處側ヲ格トス、故ニ古人○●○如此ナルテ拗句トイヘリ、サレドモ、是又訣アリ、之ヲ唐人ニ檢スルニ、最律詩中二聯ニ於テ謹シム、起結ノ聯、絕句ノ如キハ頗緩也、王昌齡ノ絕句、唐三百年ノ間、李白ト只二人

ト稱ス、然ルニ其絕句ヲ見ルニ、此禁ニ於テ甚拘拘タラズ、苦固ク株ヲ守ラバ、聲韻ニ得テ、是ヲ佳境ニ失センモ亦知ベカラズ、是唐人ノ事ニ臨ンデ、拗體、下三聯、夾平、下三字ノ側平側、平側平等、不甚忌トコロ也、今ノ句、其側平側平側、平、及夾平ヲバ忌事ヲ知ラズ、下三聯ニ至ッテハ大ニ忌ム、是定メテ江朝綱ノ八病ノ說ヨリ起レルナルベシ、然レドモ朝綱ノ云所ハ、下三聯對ヲイフ者ニシテ、偏ノ下三聯ノ句ヲイフニ非ザルニ似タリ、偏用共ニ律ノ本色ニ非ザレバ忌ベキコト也、サレドモ杜、主人爲卜林塘幽、儲光義、新林二月孤舟還、子鱗ノ律ニ嚴ナルモ、廣陵城上秋瀟瀟ナドアリ、其請君聽我秋風辭トハ、題名改ムベカラザルニ起ル、先例ト少シク別アリ、絕、第三句ノ下、側側側最多シ、張說、聞道神仙不可接、樓顥、一去姑蘇不復返、又律中王績、

東皐薄暮望、徙倚欲何依、杜審言、雲霞出海曙梅柳度江春、王維、須使外國使知飲月、支頭岑參、秦女峰頭雪未盡、胡公陂上日初低。杜甫、秋水纔深四五尺、野航宛受兩三人、但沈佺期、誰爲含愁獨不見、王維、朝罷須裁五色詔、是ハ上秋風辭ノ類ニテ、獨不見ハ曲ノ名、五色詔コレ又熟語、改ムベカラザル故也、蓋五七律ノ異ル所、七律拗聯ヲ用ユ。五律ハ頗嚴ナリ、拗字ハ五律、七律ヨリ寛也、又一聯中、句ノ上下ニ因テ異ル者ハ、上句ノ聲律寛ニ、下句ノ聲律嚴ナル事、五七言法ヲ同ウス、五言ノ拗法、｜｜●●●、｜●○○最多シ、｜｜○○○、｜｜●●○少シ、｜｜●○●｜｜○○○ママ又アリ、｜｜●●●、｜｜○○○無ニハアラズ、最稀ナリ、上句ヲ側平側ト置テ、下句ヲ平平平ト置タルモ上句ヲ側側側ト置テ、下句ヲ平平平ト置タルモ、七言ニテ同ジ拗體ト、古人論

ジタレバ、五言、腰字ノ法ト照シテ、其同キヲ知ル、但此法、七言ニハ多クシテ、五言ニハ少シ、｜｜○●●、｜｜○○○是モ亦稀ナリ、●●●●●、○○○○○、是變法ニ非ズ、只詞家ノ曲筆、異體ニ出セリ、右下三聯ヲ用ユル者ナリ、杜、誰憐一片影、相失萬重雲、世人共鹵莽、吾道屬艱難。張九齡、湘浦多深林、青冥晝結陰、于鱗、春雨花冥冥、斜陽倒玉餅、謝榛、誰騎五華馬、不惜千金裘高適、蒼茫遠山口、豁達胡天開、而シテ王維對雨作、

促織鳴已急、輕衣行向重、
寒燈坐高館、秋雨聞疎鐘、
白法調狂象、玄言問老龍、
何人顧蓬徑、空愧求羊蹤、

二度迄同法ヲ用ヒタリ、下三聯對、七言ニ多クシテ、五言ニハ甚少キヲ以テ訣トス、盛唐ニ於テ最少シ、僅ニ得テ其例ヲ出ス、孟浩然、硯山不可見風景令人愁、起岑參、清

相承

搖縣郭動、碧洗雲山新。前聯 常建、山光悅鳥性、潭影空人心。後聯 李嶠、英靈已傑出、誰識卿雲才。結 七律中ニハママアリ、王維、草色全經細雨溼、花枝欲動春風寒ノ類ナリ、老杜、題省中院壁、

掖垣竹埤梧十尋。洞門對雲常陰陰。
落花遊絲白日靜、鳴鳩乳燕青春深。
腐儒衰晚謬通籍、退食遲回違寸心。
袞職曾無一字補　許身愧比雙南金

二處マデ用ヒタリ、謝茂秦ナドモ、秋冷河亭燕子去、風生塞笛梅花飛ナドトモ作レリ、又上正シク下拗スル者ハ、孟浩然、水樓登一望、半出青林高、王世貞、偶爲湖上酌、已異城中觸。起 儲光羲、浮雲歸故嶺、落月還西方。中 岑參、謝君賢主將、豈忘輪臺遊。上句側ヲ多クスレバ、下句平ヲ多クス、詩話中末其目ヲ見ズ、秘府論ヲ見テコレヲ相承ト謂テ調聲ノ一ナルヲ知ル、其說謂、相承者、若上句五字之內、側多平少、則下句以三平承之、用三平之術、向上向下二途、其歸一也、三平向上承者、如謝康樂、溪壑斂暝色、雲霞收夕霏、上句唯有溪一字是平、四字是側、故下句之上三平承之、故曰上承、如王中書、待君竟不至、秋雁雙雙飛、上句一字是平、下句末三平承之、向下承也、是聲調ヲ以テ對スル也、舊國見何日、高秋心苦悲、孤雁不飲啄、飛鳴聲念群、杜 共老 皆是同一法、大暑去酷吏、淸風來故人 杜 小 又其變ナリ、五字盡側ナル類ハ、第四字必平ナルベキ句ニアリ、而シテ律中盡側ナル句ハ儘アリ、五字盡平ナル句ハ甚少シ、故如何トナレバ、合シテ之ヲ側トイヘドモ、側中自上去入ノ別アリ、上去入、其內入雜ハル故、一聲ナラズ然シテ平ハ唯一聲也、故ニ側ヲ用ユル句ハ、五字皆側ノ句有テ、平ヲ用ユル句ハ、多シトイヘドモ、四平ニ過ズ、是ヲ以テ下三字側ヲ

聯ヌルトモ、上上上、去去去、入入入、ト云様ニ用ユベカラズ、唐人高騈、清溪道士人不識、上天下天鶴一隻、カク入聲三續ケタルハ珍シキ事也、サレドモ是ハ側韻ナレバ近體ノ引證トハナシ難シ、是乃側字連用ノ訣ナリ、詩ニ正法アリ、隨分正法ニヨルベシ變法ヲ用ユル事ハ、只佳境ヲ得ル上ニアリ、佳境見ヤスキ者ニ就テ之ヲ云ニ、

宋喩汝楫、征夫、

白骨茫茫散不收、　朔風吹雪度瓜洲、
斜陽欲落未落處、　照盡行人今古愁、

此五側、一字モ變易スベカラズ、是乃詩人得意ノ境、此故ニ、擲水月在手、弄花香滿衣、于良史　黄鶴一去不復返、白雲千載空悠悠、崔顥　皆得意ノ境ニ至ッテ、達者聲律ニ拘拘タラズ能コレヲ考ヘハ、思半ニ過ン、又五言、韻ヲ押サル句ノ第二字平ニシテ、七言韻ヲ押サル句ノ第二字側ナルハ、五言ノ第四字目、七言ノ第六字目、必側ナルベシ、然ルヲ平字ヲ置テ上下ヲ側ニスル者、俗コレヲ夾平ト云、一三五七ノ句、五七言共ニ之ヲ忌ズ、詩藪、陳陰鏗、夾池竹、

夾池一叢竹、　垂翠不驚寒、
葉醸宣城酒、　皮裁薛縣冠、
湘川染別涙、　衡嶺拂仙壇、
欲見葳蕤色、　當來兎苑看、

此作ノ唐律ニ合フ事ヲ論シテ、唯起句及五句、拗二字、而非唐律之所忌ト云、二字トハ、叢與染也、老杜、送遠、

帶甲滿天地、　胡爲君遠行、
親朋盡一哭、　鞍馬去孤城、
草木歳月晩、　關河霜雪清、
別離已昨日、　應見古人情、

同新月、

光細弦欲上、　影斜輪未安、
微升古塞外、　已隱暮雲端、

拗句

河漢不改色、關山空自寒、
庭前有白露、暗滿菊花團、
是誠ニ本色ニ非ズ、達者境ヲ得テ如此ナラバ、間然スベキニアラズトイヘドモ、初心ノ人顰ニ傚フ可ラズ、然ルヲココニ擧ル者ハ、是ヲ觀テ唐律ノ忌不忌察スベキ爲ナリ、且右ニイヘル、一聯中、上句法寛ニ、下句法嚴ナルコト知ベシ、俗ニ孤平ヲ忌ト云事ヲイヘリ、肝心ナル事ナリ、孤平ヲ忌時ハ、大槩聲調諧フ者也、是モ下句別シテ意ヲ用ユベシ、五七言同樣ナリ、今俗◐●●○●◐○○●○是拗法ニシテ、正法ニ非ザルヲ、二四不同ノ禁ヲ犯サザレバ、正法ノ樣ニ意得、◐●●●●◐○○●○是モ上ト同ジ拗法ナルヲ、二四不同ノ禁ヲ犯ス故、大ニ失格ノ樣ニ思フハ、聲律ニ不案內ナル故也、此故ニ此二法共ニ拗句ト云、詩人玉屑曰、拗句、魯直換字對句法、如只

夾側

今滿坐且檜酒、後夜此堂空月明、淸談落筆一萬句、白眼擧觴三百盃、云云、其法於當下平字處以側字易之、苕溪漁隱曰、此體本出於老杜、寵光蕙葉與多碧、點注桃花舒小紅、一雙白魚不受釣、三寸黃柑猶自靑、云云、今俗謂之拗句ト、是唯對聯ノ三ツニモアラズ、上句●●●●如此ナレバ、側疊萬古意、橫爲白馬磯、李白ナト下句ノ腰ヲ側ニシタルモアレドモ、歲月不可問、山川何處來、戴叔倫 野老不識拜、兒童頻指看、王世貞ト云ニ平ヲ勝セタル、相承ノ正法ナリ、夾平、上●○●、下○●○ニテ受タルハ、急度拗法、又上●○●下●○○トシタル、正法ニハ非ザレドモ、唐人熟套トシテ用ヒタレバ、憚ラズ用ヒテヨシ、又側中平ヲ夾ミタルヲバ人皆知リテ、平中側ヲ夾ミタルヲバ、世多ク知ラズ、夾側、例ナキニ非ズトイヘドモ、先達モ亦之ヲ用ユルコト稀ナリ、

先避テ可ナルベシ、其詩、孟浩然、二月湖水清、家家春鳥鳴「八月湖水平、涵虚混太清、北闕休上書、南山歸敝廬、李白、楚水清若空、遙將碧海通、是必見テ失粘トナスベカラズ、サレバ古人ノ詩ヲ、ザラザラ讀テ、平側モ強テ貪著セズ、只ダダクサニ作レル樣ナル所、最失粘モ有ベケレドモ、許スコトニハ許シ、許サヌ事ニハ許サズト知ルベシ、」五字仝側ノ句ノ如キ、唐律中屢コレヲ見ルトイヘドモ、五字仝平ノ句ハ、枯葉知天風ノ句ヲ古來稱ス、其外李白、周子横山隱、開門臨域隅ナド僅僅トシテアルモ、皆古詩ニシテ、近體ノ作例ニ非ズ、寛嚴ノ間、其例ヲ考ヘズ、妄作ヲナサバ、必識者ノ笑ヲ招カン、」杜子美ハ律ニ於テ自在三昧ヲ得タリ、其機軸自出ス所也、于鱗ハ、義山ノ故轍ヲ守ル其縱横ニ不滿也、故ニ其唐詩選ニ序スル、杜ヲ王維李頎ヨリ下シテ曰、子美篇什雖多、憒焉自放矣、李獻吉ハ、杜ヲ學ブ者也、其機軸ヲ窺フ事アリ、故ニ曰、唐法律尤嚴ナル唯杜、變化莫測ル亦唯杜、今二四不同、二六對、毎聯反粘ノ法ヲ用ユル上ヨリシテ觀レバ、憒焉自放ノ説ハ聞ヘテ、法律尤嚴ノ説ハ通ゼズ、總ジテ物ヲ觀ルニ、流ニ泝ルト、流レニ沿トノ別アリ、法律尤嚴ノ説通ゼザル者ハ、流ニ泝ルノ蔽也、蓋　本邦モト自　本邦ノ語アリ、漢字入テ後、方語ヲ漢字ニ合ス、之ヲ譯ト云、譯語ヲ訓ト云、未譯ノ響ヲ音ト云、今訓彼ガ語ニアラズ、音又彼ガ音ニアラズ、彼ニアラザルノ音訓ヲ用ヒテ、彼書ヲ讀ム、四聲終ニ用ル所ナシ、於是彼ガ用器、我虚器トナル、平上去入ハ、心頭強テコレヲ記スルノミ、天平子上聖去哲、入耳ニ辨ズル所ニアラズ、入聲僅ニフツクチキノ訣アリトイヘドモ、甲入紅平急入休平ハ辨ズベカラズ、蓋擊

漢魏　齊梁

壤卿雲ヨリ、唐ニ至ッテ、詩體屢變ズ、唐初句ヲ二韻絶四韻律ニ約シテ、四韻ノ中二聯ヲ對位トシ、佗ノ二韻散對隨意トシ、四韻ノ外、排律ノ一門ヲ開キ、以テ四韻ニ準ズ、聲律ハ則二四反聲二六同聲ノ位定マル、是所謂回忌聲病、約句準篇也、夫漢魏ノ詩ハ雄渾滾出、氣象ニ在テ聲律ニアラズ、齊ニ至ッテ謝朓、沈約、王融ノ徒、聲律ノ法ヲ立テテ、詩一變ス、是時未唐法アラズ、聲平上去入ヲ分チ、各各相鋪テ其音ヲ操ル、故ニ其聲ノ迭ニ相鋪ク者、但平ト側トノミニアラズ、上ト去ト入ト聲相序テテ節奏ヲナス、故ニ其所謂八病、鶴膝ヲ除クノ外、法一聯ノ外ニ出ザレバ、聲調一聯一聯ニ在テ、通篇反粘ノ法ナシ、二五蜂腰ノ禁有テ、二四反聲ノ忌ナシ、側聲相重ナルトイヘドモ、上去入ノ相鋪ク、諧和其内ニアリ、是齊梁ノ正聲ニシテ、後世ヨリシテ

陳隋　初唐　盛唐　晩唐　于鱗

觀テ、失調ニ似ル所ナリ、陳隋ニ至ッテ、其法愈密ニ、通篇反粘ヲ顧ルノ意アリ、沈宋聲調ヲ立テテ、二四反聲、通篇反粘ノ法成ルガ如シトイヘドモ、猶齊梁以來一聯宛ノ法勝テ、興象ニ從ッテ、反粘活轉シ、平與側相雜ユルヲ正トストイヘドモ、上去入相雜ハルニ當ッテ、平ヲ假ラザルノ奇アリ、盛唐之ニ由テ密ヲ加フ、晩唐反粘一定、側ヲ以テ平ト相分チ、其位定マル、コレ李義山以來ノ詩律ニシテ、上去入相鋪クノ法隱レ、三側一平ト對ス、于鱗氏ノ詩ニ於ル、聲譜ノ反粘用事ノ好尚、飾ルニ金玉龍鳳ヲ以テス、氣格聲調ハ同カラズトイヘドモ、義山ノ故轍ヲ守ッテ、盛唐以前ノ面目ニハ失ス、李白、柳色黃金嫩ノ詩ヨリシテ觀レバ、正拗ノ法ハトクヨリ立シ事ト見エタリ、是ヲ以テ子美聲律ニ拘束スルヲ譏リテ、從前作詩苦トイヘバ、其拗中自ノ

彼此

機軸有テ、取次ニ字ヲ下セシ者ニアラズトシルベシ、晩唐以來其奇ヲステテ、正ヲ執ル、初盛ハ移易轉換ヲ字句ニ縱ルス、後世ハ其秩然ヲ好ム、彼間ニハ、上去入錯綜ノ響ヲ以テ、連側猶其節ヲ知ル、此間ニハ、一平一側ヲ以テ聲調ヲ律ス、是ヲ以テ今ノ世ニシテ古ノ聲律ヲ査ス、唯其鹵莽ヲ見ル、今正ヲ以テ奇ヲ律スルニ、五律ノ如キ初唐ニ拗聯多ク、盛唐ニ少シ、盛唐五律ノ拗聯ニ於テハ忌ム、七律ニハ忌ズ、七律ノ拗聯、盛唐ニハ拘ラズ、晩唐ハ密、明人ハ嚴、傍韻、落韻、晩唐末ニ多クシテ、初盛ニ少ク、明律ニ忌ム、若此境ニ悟ラザレバ、爭カ漢魏ノ滾出、齊梁ノ音韻婉附、杜律ノ嚴ヲ知ラン、又爭カ初盛ノ拗非拗ヲ知ラン、若世世ニシテコレヲ品題セバ、虞韶夏時殷輅周冕、各其宜キアリ、下流ニアル者ヲ以テ、泝ッテ其源ヲ非トスベキニ非ズ、于鱗、

義山ノ聲調ヲ用ヒ、老杜自出セル機軸ヲ律ス、於是ニ夢陽ノ嚴トスル所、于鱗以テ放也トス、故ニ傍韻セズ、落韻セズ、拗法ヲ用ヒズ、整齊ヲ以テ唐ヲ睥睨ス、此モ亦一時也、元美滄溟ノ說ヲ議シテ曰、子美固不無利鈍、終ニ是上國武庫ト、此言之ヲ得タリトス、今ノ詞人ハ、于鱗ヲ宗トスル者也、故ニ草堂ノ律、靑蓮ノ絕未讀ズ、滄溟ノ律絕已ニ諳誦ス、唐人一生ノ作、三四首ヲ拔テ、唯四百六十五首ニ盡ク、李王ノ作、咳唾盡珠、如此ナレバ、滄溟ノ唐人ニ勝ル、幾十百倍ナルヲ知ベカラズ、是乃峨眉天外雪中ニ看ル所カ、亦怪ムベシ、予懶ニシテ其詩ヲ檢スルコト能ハズ、近比林東溟ノ著スル詩則、于鱗ノ詩律ヲ擧テ曰、五七律中、隔句扇對、蜂腰、偸春之格ナシ、拗體、五律一百九十九首ノ中、僅ニ三詩、七律三百四十八首、僅ニ一詩二四反聲、一首モコレヲマモラザ

ルモノナシ、五月五日ノ詩二四反聲ヲ守ラズ、唐人ニハ往往有之、五言三五同聲、七言五七同聲、是拗句也、五律中犯之者十七句、七律中犯之者二十四句、第三五七句ニ至ツテハ、絶テナキ所ナリ、下三連、五律中九句、七律中二首、夾聲ニ非ズシテ、側間孤平、五律中一句モコレナシ、七律中コレヲ犯ス者八十五句ナリ、シカドモ、三五七句ニ多クシテ、四六八ノ句絶テ無シ、夾聲、五律中、十六句、七律中、僅ニ三句、七絶三百三十八首ノ內僅ニ一首、側起ノ詩、僅ニ一首、ナリトイヘドモ、亦對起ナリ、出韻ナシ、出韻ハ、起句佗韻ヲ用ユル者也、五七同聲、唐人不必忌、于鱗忌之、大ムネ如此、是乃唐律明律ノ異也、大樣ニハ明律トイヘドモ、最嚴ナルハ、于鱗也、元美ハ然ラズ、七子コレニ繼グ、外モ拗聯ハ餘リ用ヒズ、其他ハ大低唐律ニヨル、故ニ明律トハ、之ヲ嘉靖七子ニ歸スル也、此故

ニ、明律、唐律ノ外ニ別法アルニ非ズ、唯寬嚴ノ間也、今于鱗ノ詩ヲ好ム人、唐律ニ倣フヲ以テ、聲律ヲ知ラズトスルハ非也、唐律ヲ好ム人、佳境ヲモ得ズシテ、失粘ヲ以テ唐人ニ擬スル者ハ、殊更ニ非也、故ニ初學于鱗ノ法ニ從フベシ、得意ノ境アラバ、事ニ唐律ニ從ハンモ何カ苦シカルベキ、詩ニ病アリ、病ニ甚忌アリ、不甚忌アリ、畢竟詩ハ佳境ヲ得ルニアリ佳境ヲ得ルニ至ツテハ、聲律繩墨ノ外ニ出レドモ、其絕調タルヲ失セズ、佳境ヲ得ザル日ハ、宮商自調ヒ、金石鏘鏘タルモ、詩ニ於テ何ゾ益サン、故ニ李白、故人西辭黃鶴樓ノ如キ此人ノ字、豈改難キ者ナランヤ、然ルヲ改メズ、是唐人ノ境也沈約八病唐人強テ忌所ニアラズ鶴膝病ノ如キサキニ已ニ出セリ、氷川詩式此二詩ヲ引テ、此失律非為格、詩貴知病、此亦詩中一病、唐人亦不甚忌ト

念二　越韻　起承轉合

アリ、朝綱ノ所謂念二ハ同意也、同意同字、誠ニ病トスルニ足ル然レドモ、同字疊字ノ差別アリ、同字ハ病ニシテ、疊字ハ病ニアラズ、越韻ハ大概傍韻失韻ノ類也、絶句ノ聲調ハ律ノ半截ニ異ルコトナシ、其首尾ノ法、第一句ヲ起句ト云、乃事ヲ起ス也、第二句　ヲ承句ト云、起句ヲ承ル也、第三句ヲ轉句ト云、一二ノ意ヲ置テ一轉スル也、又折句トモ腰句トモ云、一首ノ腰トナリ、上ヲ下ニ接スル也、一首ノ腰トハ第三句也、一句ノ腰トハ、五言ノ第三字、七言ノ第五字ナリ、第四句ヲ合句、又結句ト云、起承ト轉トヲ結ンデ合スル也、我幼キ時ニ人ニ詩ノ作リ様ヲ習ヒシニ、其人左ノ詩ヲ擧テ、起承轉合ヲ教ヘキ

薄暮層巒雲擁腰、傾盆大雨定明朝、
老僧八十眉如雪、起抜門前獨木橋。

雲暮合ニ山ニ懸ルカト起シ、明日ハ定メテ大雨ト承タリ、ソコヲ老僧八十眉如雪ト、一二ニ縁モ無キ様ニ轉ジタリ、起テ門前ノ獨木橋ヲ抜ケバ、此僧モ雲ノ山ニ懸ルヲ見テ、明朝ノ大雨ヲ察シケリト結ベリト也、是行儀前ナリ、起承轉合ハ、本絶句ノ法也、律ヲ論ズル者、是ヲ四韻ニ配シテ云シ説モアリ、一通リ通ズル様ナレドモ、律ハ中ニ聯ハ、偶儷ヲ以テ情景ヲ摹寫スル者ナレバ、强ニ承轉ニ入用ナル事モナシ、故ニ元、范德機曰、起承轉合、施之絶句則可、施之於律則未盡、何獨第二聯爲承、第三聯爲轉邪、泥此則非律詩之法度矣、ト也、サテ律ノ製、韻ハ平ニ限ルト見セタリ、側韻律ノ事、未全無シト云ベカラズ、然リトイヘドモ、大ニ其本色ニ非ズ、彼方ニテモ見一ナラズ、故ニ諸家側韻律ヲ論ズル、多クハ齊梁ノ詩體ヲ以テ、之ヲ律ニ混ズ、其故ハ、唐家詩律ノ法度成書ナシトイヘドモ、

側韻律

其詩ニ就テ考フレバ、亦粲然タリ、律ハ法度也、法度ニ由ラザル者ハ律ニ非ズ、故ニ隋以前偶儷ノ句、音韻婉附ノ響ヲ以テ作ル勢律體ニ逼ラザル事ヲ得ズ、然レドモ唐家建立ノ法ニ非ザレバ、之ヲ律トスル事ヲ得ズ、隋以前韻ニ平側ノ差別ナシ、聲ニ反粘異同ノ次第ナシ、近體ハ則平韻ヲ以テ正式トス、唐詩中、側ヲ以テ韻トシ、對偶儷語ヲ以テスル者往往アリ、然レドモ聲韻守ラズ、反粘常ナシ、是ヲ漢魏ノ古詩ニ比スベカラズトイヘドモ、所謂江左之變體、音韻婉附、屬對精密、ト云者也、老杜望嶽ノ詩、遊龍門奉先寺詩、高廷禮、唐詩正聲ヲ選ンデ、是ヲ古詩ニ收ム、其後萬曆ノ比、閩中ノ邵夢弼、杜律ヲ集ルニ方リテ、望嶽ノ詩ヲ卷首ニ收メテ曰、此詩似古詩、而體裁實律、與後遊龍門奉先寺、不可以用側韻類爲古詩ト、是體裁律ナレバ、側韻ヲ用ユルモ、古詩ニ非ズト云コト也、其望嶽詩、

岱宗夫何如、齊魯青未了、
造化鍾神秀、陰陽割昏曉、
盪胸生層雲、決眥入歸鳥、
會當凌絕頂、一覽衆山小、

豈是ヲ聲調諧和ト謂ンヤ、正聲古詩ニ歸ス、眼アリトス、氷川詩式、高適九日酬顏少府作ヲ擧テ側韻律トス、其詩、

簷前白日應可惜、籬下黃花爲誰有、
行子迎霜未授衣、主人得錢始沽酒、
蘇秦憔悴時多飲、蔡澤悽惶世應醜、
縱使登高只斷腸、不如獨坐空回首、

明、陳繼儒、名公詩選ナドニモ、七律中ニ、聲韻諧ハザル側韻ノ七言八句、又前解ハ側韻、後解ハ平韻等ノ詩ヲ收メタリ、濫甚シ、故ニ諸書ニ側韻律トテ擧タルモ、聲律諧ハズ、江左體音韻婉附ノ者ヲ以テ、菽麥ヲ辨ゼザル也、然ラバ則側韻律、果シテ無キ

カ復然ラズ、變化ノ到ル所、文人筆ヲ弄スルノ餘、已ニ此體ヲ成ス、只後ノ詩ヲ言フ者、其擧グベキヲ措テ、其措ベキヲ擧グ、是ヲ以テ濫ヲ致スナリ、氷川詩式曰、五言律側韻、唐人作者最少、惟僧靈一、西霞山夜坐、載姚合極玄集其作、

山頭成壇路、幽映雲巖側、
四面青石牀、一峯苔蘚色、
松風靜復起、月影開還黑、
何獨乘夜來、殊非盡所得、

靈一姚合共ニ中唐ニシテ、已ニコレヲ律トイヘバ、律ナシト云ベカラズ、然レドモ是ヲ律トスレバ、聲律頗緩シ、江左體ト何ゾ撰マン、予ガ觀ル所ヲ以テスレバ、王維、故南陽夫人樊氏挽詞二首、五言四韻ニシテ前首平韻ノ律體、後首側韻、聲調格ニ合ス、

石窌恩榮重、金吾諸騎盛、
將朝毎贈言、入室還相敬、
疊鼓秋城動、懸旌寒日映、
不言長不歸、環佩猶將聽、

其次ハ子美屏跡ノ詩徵ニ拗ヲ用ユ、

衰年甘屏跡、幽事供高臥、
鳥下竹根行、龜開萍葉過、
年荒酒價乏、日併園蔬課、
猶酌甘泉歌、歌長樽擊破、

只二ノ下三聯ヲ用ユルト、夾平ヲ用ユルト而已、乏動ノ二字協ハザルガ如シトイヘドモ、諸詩ヲ檢メ之ヲ考ルニ、實ニ側韻詩ノ法ナリ、其故ハ、四聲ノ內、平字ヲ韻トスレバ、上去入ヲ雜ヘ用ヒテ上句ノ尾トス、上聲ヲ韻トスレバ、平去入ヲ雜ヘ用ヒテ上句ノ尾トス、去入同例ナリ、而シテ平多ク三七ノ尾ニアリ、王詩ハ去韻、重動上聲ニ屬ス、杜詩亦去韻跡乏入聲ニ屬ス、樂天ニ至ツテ、側律多シ、其和思黯相公雨後

林園四韻、去韻寘末ヲ進退シテ、首聯頸聯ノ上句上聲ヲ用ユ、

新晴夏景好、　復此池邊地、寘
烟樹綠含滋、　水風淸有味、未
便成林下隱、　都忘門前事、寘
騎吏引歸軒、　始知身富貴、未

五言排律ノ側韻、前ニ出セリ、乃豆盧榮、春風扇微和作、去聲霰韻、只放ノ字相犯スノミ、七律、氷川詩式、高適九日ノ詩ヲ引者ハ非類也、白詩、送王使君赴任蘇州、因思花迎新使感舊遊寄題郡中木蘭西院、一別ノ作、上聲賄韻、第五句ノ尾上聲トス、結聯拗ストイヘドモ、亦唐律ノ常ニアル所、

一別蘇州十八載、　時光人事隨年改、
不論竹馬盡成人、　亦恐桑田半爲海、
鶯入故宮含意思、　花迎新使生光彩、
爲報江山風月知、　至今白使君猶在、

同長安早春旅懷拗法ヲ以テナス、第五句ノ尾、同用ニ入聲、

軒車歌吹喧都邑、　中有一人向隅立、
夜深明月卷簾愁、　日暮靑山望鄕泣、
風吹新綠草芽拆、　雨灑輕黃柳條溼、
此生知負少年春、　不展愁眉欲三十、

六句律ノ事、後ニ論ズ、序ヲ以テ側韻律爰ニ書ス、同襄陽舟中、結句拗ス、

下馬襄陽郭、　移舟漢陰驛、
秋風截江起、　寒浪接天白、
本是多愁人、　復此風波夕、

同寒食臥病、

病逢佳節長歎息、　春雨濛濛楡柳色、
羸坐全非舊日容、　扶行半是他人力、
諠諠里巷踏靑歸、　笑閉柴門度寒食、

六言モ亦後ニ出ストイヘドモ、側律ココニ出ス、李夢陽、明山草亭、拗處多シトイヘドモ、六言ニ於テハ、律ニ疑ナシ、

舊業門前五柳、　綠橘黃柑數畝、

烟霞不負閒身。社稷空餘白首、
看月天柱峯頭。採藥洞庭湖口、
扁舟薄暮歸來。疑是滄波釣叟。」

古詩文選ニ收ムル所、體自一ナラズ、蓋唐ノ前ヲ隋トス、隋ハ陳ニ受ケ、陳ハ梁ニ受ケ、梁ハ宋、宋ハ晉、晉ヨリ魏漢ト泝ル、六朝トハ、乃晉宋齊梁陳隋ナリ、唐人ノ詩ヲ作ル、唐律ヲナサザレバ、六朝ヲナス、六朝ヲナサザレバ、漢魏ニ泝ル、然レドモ畢竟唐體、意ヲ模擬ニ刻ムニ非ズ、于鱗ノ如キハ、意ヲ設ル事甚高シ、六朝ヨリ唐ニ至ッテ、取ル所ナシ、獨漢魏ヲ以テ古詩トス、模擬ヲ以テ髣髴ヲ求ム、故ニ望嶽龍門、顧ルニ暇アラズ、是ニ於テ世ノ詩ヲ學ブ者、模擬ヲ漢魏ニ務メテ、六朝ノ詩廢シ、其次第ヲ言フ者ナシ、五言モト散體ニ初マリ、儷語ニ終フ、晉ハ魏ニ受テ、其風猶古ナリ、陶淵明眞率ヲ以テ與ヲヤル、猶儷體ニ陷ラズ、淵明ハ晉亡ビテ、宋ノ代迄生タル人也、宋ニ至ッテ謝靈運出テ、專儷語ヲ用ヒテ、詩一變セリ、梁ニ至ッテ、沈約四聲ヲ定メ、一百七韻ヲ分チ、韻法大ニ變ジ、四聲ノ調嚴ニ、是ヲ以テ儷語ヲ行ル、亦詩家ノ大變、唐律ココニ胚胎ス、故ニ予以爲、古意盡於淵明、儷語興於靈運、聲律成於沈約、時乃齊ノ永明ノ頃ニシテ、王融謝朓等ト此事ヲ誘フ、コレヨリ梁ヲ經、陳ニ入リ、其風愈盛ナリ、ココニ於テ沈謝鮑何ノ徒、李杜ノ大家トイヘドモ、稱賞ノ詞、屢詞句ニ見エタリ、由是觀之、則六朝律祖ノ一體、盛唐ノ諸公擊節シテ、唐人ノ體ココニ承タリ、於是儷語散體二派トナレリ、時運已ニ移リ、風ノ古ニ非ザルヲ傷ミ、慨然トシテ古ニ志ス者、陳子昂、李白、杜甫、韓退之ノ輩ナリ、故ニ李白、自從建安來、綺麗不足珍、ト云、韓退之、齊梁及陳隋、衆作等蟬噪、ト云、高棅ノ正聲ニ

唐律已成

ハ、散儷竝ビ收メ、于鱗ノ選ニハ、散體ヲ主トセリ、滄溟ノ集ヲ讀ンデ、自儷語ヲ一掃シテ、蘇李ニ刻意シ、唐詩ニ取ザル故ヲ知ル、嚴滄浪評子美、憲章漢魏、取才於六朝、ト云リ、是于鱗ト異也、唐人ハ、總テ取才於選、詩トテ、梁昭明太子ノ文選ニ取レリ、文選ハ、漢魏晉宋齊梁兼收ム、明人ハ、古今ノ作ヲ陳ネテ、コレヲ品題シ、是則漢魏也、是則齊梁也、陳隋也、ト分チ、模擬ノ門戸ヲ別ニスル者也、故ニ唐人ハ唐ヲ作ル、明人ハ漢魏ヲ作ル、世ノ五言古詩ニ志ス者、コノ來由ヲ知テ、自門戸ヲ尋ヌベシ、散體ハ猶古ヲ守ル、儷體ハ、駸駸トシテ唐律トナル、唐人體ヲ定メシ上ヨリイヘバ、律排律絶句ノ別アリトイヘドモ、六朝ノ人ハ、排モ律モ知ラズ、不知不識トイヘドモ、音韻婉附、聲調自然ニ唐律ニ入ル者、陳陰鏗、安樂宮、排律ト云ベシ、

新宮實盛哉、　雲裏望樓臺、
迢遞翔鵾仰、　聯翩賀燕來、
重檐寒霧宿、　丹井夏蓮開、
砌石被新錦、　雕梁畫早梅、
欲知安樂盛、　歌管雜塵埃、

北齊蕭愨、上之回、五律ニ合ス、

發軔城西畤、　回輿事北遊、
山寒古道凍、　葉下故宮秋、
朔路傳淸蹕、　邊風卷畫旒、
歲餘巡省畢、　擁仗返皇州、

第三句ノ下三字皆側、唐人不甚忌、故ニ古詩源此詩ヲ擧テ、聲律倶調トアリ、五絶ニ合スル者、梁江總、

心逐南雲去、　身隨北雁來、
故鄉籬下菊、　今日幾花開、

七絶ニ合スル者、隋末無名氏ノ作、是ハ煬帝奢侈ニシテ、汴河ノ堤ニ、柳ヲ盛ニ栽エ、巡遊無度ヲ傷ミ、帝ノ歸ランコトヲ望ム、

王子之歌ノ嘆アリ、可レ愛、

楊柳青青著レ地垂。楊花漫漫攪レ天飛。
柳條折盡花飛盡、借問行人歸不レ歸。

律ト絕句トノ異ハ、四韻モト律ノ本體ナル故、絕句ヲ古詩ニ近シトス、五七絕ノ異ル所ハ、七絕ハ聲律諧和ヲ主トシテ、五絕ハ拗ヲ厭ハズ、絕句ト云名目、諸說分明ナラズ、文體明辨ニ、絕ハ截也、半截律詩者トイヘドモ、五絕ハ五言短古ノ變、七言ハ七言短歌ノ變、五絕之體兩京ニ起ル、其時未五律アラズ、七絕四傑ニ起ル、其時未七律アラズト、是胡元瑞ノ說ニシテ、絕句ハ淵源律ヨリハ古キ者ニテ、律ヲ截タル者ニハ非ズト也、又其意ニイフ、六朝ニハ短古ヲモ、槩シテ歌行ト云、唐ニ至ッテ絕句ト云、絕ヲ截ト云ハ、步出城東門ハ、漢人ノ詩中ヨリ四句ヲ截リ、自君之出矣ハ、魏人ノ詩中ヨリ四句ヲ截タレバ、律ヲ截ニハアラズ、古詩ヲ截ルノ絕句ナラントモ見タリ、是前說ヨリ勝レリ、然レドモ絕ヲ截トスルモ、正說ナリヤ否ヲシラズ、詩藪又絕句ヲ、宋劉昶ニ始マルトス、此說據ルベキニ似タリ、南史宋劉昶、兵敗奔魏、棄母妻、惟携妾一人、騎馬自隨、慷慨作斷句曰、

白雲滿レ鄣來、黃塵暗レ天起、
關山四面絕、故鄉幾千里、

斷即絕也、詩篇大方ハ長シ、倉卒口ニ信セテ四句ニ止マルヲ以テ、斷絕之義ニ取リ、斷ヲ絕ト轉用スルナルベシ、漢魏四句ノ小詩アリトイヘドモ、絕句ト言ズ、南史劉昶傳曰斷句、正德傳曰一絕ハ、絕句ノ名宋ノ時已ニ立ト見ヘタリ、又元瑞曰、七言絕句ハ、杜審言渡湘江、贈蘇綰書記ノ詩ヲ、始テ絕句ノ體ノ成レル者トシタリ、五言絕モ律ノ一體ナレバ、正法ヲ主トスベシ、然リトイヘドモ、唐以來不甚論聲調、袁中郎

絕句之始　五絕

五十絕句

曰、五言絕句貴拗體、七言絕句貴諧和、周伯弢、五七律及七絕ヲ輯メ、是ヲ三體詩法ト號シ、五絕ニ及バザル者ハ、此故ニヤト思ハル、絕句ノ聲律、律法ト異ル事ナシ、今諸家ノ選、七絕ニ於テ、側韻ヲ收ムル者、聲音守ラズ、是ヲ律體トスルニハ非ズ、側韻モト短古、短古降ツテ風調高カラズ、唐人從ツテ是ヲ作ル、故ニ終ニ是ヲ絕句ノ調ニ雜ヘ收ム、古風モト平側ヲ論ゼズ、側韻即

短古

短古、何ゾ平側ヲ論ゼン、短古トハ乃長篇ニ對スルノ名也、短古必四句ニ限ルニハ非ズ、凡二三句ヨリ、五句六句八句十句ノアタリ、皆短古ナリ、唐詩嚴選也トイヘドモ、側韻猶幷セ收ムル者ハ、風調絕ニ同キヲ以テ也、調古ナレバ、絕ト同フスベカラズ、下山歌ノ如キ是也、李白、峨眉山月歌ハ近調也、古文眞寶、コレヲ短古ニ入タルハ非也、聲韻諧ハザレバ、平韻トイヘドモ短古也、聲韻諧フ者トイヘドモ、側韻、律ノ本色ニ非ズ、マシテ平側守ラザルヲヤ、蓋四句ノ短古、韻ヲ換ル者モアリ、王勃、寒夜懷友詩、

北山烟霧始茫茫　南津霜月正蒼蒼
秋深客思紛無已　復值征鴻中夜起

王勃集ニ之ヲ雜體トイヘバ、絕句トハセズ、然レドモ劉方平、烏棲曲、高廷禮コレヲ品彙ノ絕句ニ收ム、其詩、

畫舸雙艣錦爲纜　芙蓉花發蓮葉暗
門前月色映橫塘　感郎中夜渡瀟湘

前詩先平、後詩先側、其外二三四一韻ナル者、岑參入關先寄秦中故人、

秦山數點似青黛　渭水一條如白練
京師故人不可見　寄將兩眼看飛燕

今坊間ニ、四家絕句ナル者アリ、李白、白鼻騧、

銀鞍白鼻騧　綠地障泥錦

細雨春風花落時、揮鞭直就胡姬飲、

コレヲ收ム、類ヲ知ラズト謂ツベシ、白居易、花非花、

花非花、霧非霧、夜半來、天明去、來時春夢幾多時、去似朝雲無覓處、

長慶集是ヲ古體ニ收メタリ、王縉、青雀歌、

林間青雀兒、來往翩翩遶一枝、莫言不解啣環恩、但問君恩今若爲、

韓翃、柳氏ニ贈ル詩、

章臺柳章臺柳、舊日青青今在否、縱使長條似舊垂、也應攀折他人手、

柳枝答テ曰、

楊柳枝芳菲節、可恨年年贈離別、一葉隨風忽報秋、縱使君來豈堪折、

是ハ此比、唐亂レテ賊二京ヲ覆シ、柳枝韓翃ノ妻ナリシガ、亂離避難ク、尼ト成リテ、法堂寺ト云ケルニ棲ケルヲ、賊將沙吒利、見テ其容儀ヲ愛シ、刧メ以テ歸リケル、時ニ韓翃淄青ノ書記タリ、此事ヲ聞テ、竊ニ此贈答アリ、虞候許俊ナル者、此詩ヲ感ジ、終ニ柳氏ヲ奪ヒ還シテ、韓翃ニ與ヘシトナリ、此詩第一句ヲ六字ニシタル者ナリ、張志和、漁歌、第三句ヲ六字ニス、志和モ唐人也、其詩三首、

西塞山前白鷺飛、桃花流水鱖魚肥、青蒻笠綠蓑衣、斜風細雨不須歸、

右一

松江蟹舍主人歡、菰米蓴羹亦共餐、楓葉落蘆花乾、醉宿漁舟不覺寒、

右二

雲溪灣裏釣魚翁、舴艋爲我西復東、江上雨浦邊風、更著荷衣不歎窮、

右三

四句共ニ押韻者、今ココニ三首共ニ擧ル者ハ、詩數章ヲ疊ム者、每章其新ヲ要スルヲ示ス也、樂天自詠五首ノ結、何異睡著人、

不知夢是夢、何異食蓼蟲不知苦是苦、皆此法ヲ用、亦三百篇ノ遺意ナリ、右ノ諸作絶句ノ調ナリトイヘドモ、實ニ是短古ナリ、復混ズベカラズ、

七言排律

七言排律、諸家其作少シ、杜子美清明作、

此身漂泊苦西東、右臂偏枯半耳聾。
寂寂繫舟雙下涙、悠悠伏枕左書空。
十年蹴鞠將雛遠、萬里鞦韆習俗同。
旅雁上雲歸紫塞、家人鑽火用青楓。
秦城樓閣烟火裏、漢主山河錦繡中。
風水春來洞庭濶、白蘋愁殺白頭翁。

古唐詩合解、白傅ノ七言排律ヲ載テ曰、七言排律、作者罕傳、五言排律亦罕傳于中唐以後、如七言排律則尤難於精嚴所以選家多不入帙ト、

三韻律

三韻律、其作亦少也、李白送內尋廬山女道士李騰空、

君尋騰空子、應到碧山家。
水舂雲母碓、風掃石楠花。
若戀幽居好、相邀弄紫霞。

此作猶拗ス、李益塞上式ニ合ス、

漢家今上郡、秦塞古長城。
有日雲長慘、無風沙自驚。
當今天子聖、不戰四庚平。

李白送羽林陶將軍作、結聯雖拗、亦七言ノ三韻律ナリ、

將軍出使擁樓船、江上旌旗拂紫烟。
萬里橫戈探虎穴、三杯拔劍舞龍泉。
莫道詞人無膽氣、臨行將贈繞朝鞭。

六言律

六言律、唐人ママアリ、只其行ハルルコト盛ナラズ、洪容齊唐人ノ絶句ヲ集メシニ、七絶七千五百首ヲ得、五絶二千五百ヲ得、六言纔ニ四十二滿タズト云リ、畢竟調ヨカラヌ者故ナルベシ、律調ハ、字ニ腰アリテ、下ヨリ上ニ數ヘテ、第三字ノ處ニテ、之ヲ折ル者ナリ、六言ハ畢竟混句也、サレドモ亦法アリ、自下第三字腰位也、第三字ニ

折ルモアレドモ、是ハ變法ナリ、其故ハ、三言ノ句ヲ、二句重ネタルト、別無ケレバ也、故ニ六言一聯ヲ作リ出シテ、三言四句ノ樣ニナレバ、大ニ六言法ヲ失スト意得ベシ、祕府論、五言、上二字爲一句、下三字爲一句、六言、上四字爲一句、下二字爲一句、七言、上四字爲一句、下三字爲一句、トイヘバ、是乃唐人ノ訣、我杜譔ニアラズ、重ネテ六言ノ法ヲ考フルニ、二四不同、二五對ニシテ、五言ト同ク、側起ヲ常トスルニ似タリ、律側入ヲ擧テ、平入ヲ例ス、盧綸、送萬臣、

把酒留君聽琴　誰堪歲暮離心
霜葉無風自落　秋雲不雨空陰
入愁荒村路細　馬怯寒溪水深
望盡青山獨立　更知何處相尋

是猶拗調、因テ明高啓、瓊姬墓ノ作ヲ以テ補フ、

夢別芙蓉殿頭　斷釵零落誰收
土昏青鏡忘曉　月冷珠襦恨秋
麋鹿昔來廢院　牛羊今上荒丘
香魂若怨亡國　莫與西施共遊

絕句、劉長卿、尋張佚人山居、

危石纔通鳥道　空山更有人家
桃源定在深處　澗水浮來落花

是六言聲律ノ正ヲ得タル者也、五七言、文章ヲ以テ譬レバ、讀ンデ五字七字ニ到ルノ處句ニシテ、二字四字ニ到ルノ處讀ナリ、是腰ノ處也、故ニ腰トハ、句中微讀、上下相接スルノ間、其接ヲ用ヒズ、一句混然トシテ讀下ス者ヲ、混句ト云、六言、三字三字ナルヲ好マザル故、微讀ノ地位設ケ難シ、是ヲ以テ六字一直下、或ハ上四下二、二四不同、二五對トナル、是故ニ五七言ノ法ヲ以テ推サバ、｜｜●○●｜｜｜○●○若此ナランハ、宜ク拗法トナスベケレドモ、上三字下三字ト、キラザレバ、夾ムベキ

遊ビ字ナキ程ニ、却テ是ヲ正法トス、王維、田園樂、

採菱渡頭風急　策杖村西日斜
杏樹壇邊漁父　桃花源裏人家

二四不同ナレバ、起句ノ下、頭風急頭ノ字、失粘ニ出デテ、接句ノ下、邊漁父漁ノ字、七言ノ夾ミ平ト同例ニシテ、失粘ニ非ザル也、皇甫冉閣李二司直所居雲山、初聯末聯ト相拗シテ、一三ノ句ノ第五字、又拗ヲ用ユ、

門外水流何處　天邊樹遶誰家
山色東西多少　朝朝幾度雲遮

且カクノ如ク作ルヲ、問頭ノ詩ト云、四句共ニ問ヲナスノ句ナレバ也、側韻、元李孝先雪晴ノ詩、律ハ已ニ前ニ出、

雪乾玉飯初香　月瘦珠胎猶小
閉門不見臞仙　白鶴橫江清曉

六言ノ律法右ノ如シ、然ルニ游子六詩法入門ヲ著シテ、爲以二四六定平側、而シテ二四反聲、二六同聲ノ、七言ノ法ヲ用ユ、其二四反聲ハ可也、二六同聲ノ法行フベクンバ、若押韻ノ句ノ第二字側ナルベキ時、韻ヲ棄テテ側字ヲ換フケンヤ、不押韻句ノ第二字平ナルベキ時、側ナルベキ第六字、平ヲ以テ換フベケンヤ、若如此ナラバ、韻法聲律ト竝ベ行フベカラズ、子六身唐山ニ在リ、書ヲ著シテ敎ヲ垂ル、此鹵莽ヲ致スハ何ゾヤ、又國字ノ小冊子ニ、詩法正義ト云アリ、六言ノ聲圖ヲ載セテ、六言ハ、起句第二字平ナレバ、第二句第二字側、起句第二字側ナレバ、第二句ノ第二字平、其佗ハ只韻法ノミトアリ、可笑、是誠ニ齒牙ニ挂ルニ足ラズトイヘドモ、兒輩ノ爲ニコレヲ標ス、

○我豐日出藩ノ文學喬彥駿、鳳渚ト號ス、予交ヲ締ブ事久シ、議論動スレバ人ノ意

表ニ出ヅ、其八病ヲ論ズル、亦世人ノ言至ラザル所也、ココニ書シテ、爾ノ曹ニ示ス、其說曰、八病之目、出於沈東陽、其說來尚矣、然檢本傳、無所見、但在南史陸厥傳、擧沈謝永明體之事、纔有平頭上尾蜂腰鶴膝之稱耳、因搜之唐以上書、以余固陋、王通中說云、李百藥曰、吾上陳應劉、下述沈謝、分四聲八病、剛柔淸濁、各有端序、阮逸註其下云、四聲韻起自沈約、八病未詳、夫阮逸弘覽贍聞、猶爲未詳何也、可怪焉、其於詩話、自李淑詩苑類格、至王元美巵言、游子六入門、其目同、而其所以爲目者、各有牴牾也、余初視其有牴牾、以爲八病非東陽之三尺乎、而南史已有其目矣、又何可疑、其唯宋人爲稱首、祖襲拾唾、不辨其爲何物、服子遷所謂、苟挹流末、畎澮相承、不窮河源、惡睹崑崙者乎、不獨一豪求而已、不若求之宋以前、唯恨寒鄉乏書、無由就而正焉、後讀　本邦僧空海文鏡祕府論者、乃得其說、是親承唐人者、甚爲可信、其言曰、平頭詩者、五言詩、第一字不得與第六字同聲、第二字不得與第七字同聲、同聲者、不得同平上去入四聲、犯者爲犯平頭、上尾詩者、五言詩者、第五字不得與第十字同聲、名爲上尾、蜂腰詩者、五言詩、一句之中第二字不得與第五字同聲、言兩頭麁、中央細、似蜂腰也、鶴膝詩者、五言詩、第五字不得與第十五字同聲、言兩頭細、中央麁、似鶴膝也、以其詩中央有病、大韻詩者、五言詩、若以新爲韻、上九字中、更不得安人津隣身陳等字、旣同其類、名犯大韻、小韻詩、除韻以外、而有迭相犯者、名爲犯小韻病也、傍紐詩者、五言詩、一句之中、有月字、更不得安魚元阮願等之字、此卽隻聲、雙聲卽犯傍紐、亦曰、五字中犯最急、十字中犯稍寬、如此之類、是其病、正紐者、五言詩、壬衽任入四字爲一紐、一句之中、以有壬字、更不得安衽任入等字、如此之之

類、名爲犯正紐之病也、當以此說爲準繩、而斧正後世牴牾焉耳、且聞魏甄思伯、以東陽聲病、爲不依古典、妄旨穿鑿、乃取其少時文詠犯聲處、以詰難之、今質之文選初學記所載東陽之作、不啻少時文詠、雖其晩年篇什、犯平頭上尾、蜂腰鶴膝、大韻小韻之病者、往往而有、偶未見犯正紐傍紐者也、余別有八病考一編、諸家異同、及東陽自犯者、頗委悉焉、蓋夷考其事、行不掩言、自擬自犯、定知東陽、屢有商君自窘之歎矣、要之、韓人崔滋補閑集、引風騷客論云、平頭上尾、蜂腰鶴膝、大韻小韻、正紐傍紐之病、是好事者閑譚、是爲得也已、晉按ズルニ、八病、滄浪コレヲ弊法ト云、客論是ヲ閑譚トス、然レドモ空海ハ、唐ニ遊ビシ人ナレバ、唐ニ此法アリシ事審也、サレドモ梁暨隋其法行ハレズ、唐人諸家ノ詩ヲ集メテ、之ヲ觀レバ、唐律亦コレト同カラズ、然レバ是時、此說人ヨク之ヲ誦シテ、唐律別ニ世ニ行ハレシナラン、

○六言モ、古詩雜言中ニハ、三字三字ニシテツクル、近體六言法ト異ナリ、

詩轍卷之二

詩轍卷之三

豐後 處士 國東郡 三浦晉 安貞 著
友人 日出藩 喬維嶽 彥駿 閱

變法

體製一タビ立テ、驅馳スル者之ヲ範トス、範トハ法也、法ニ取ルガ故ニ、是ヲ格ト云、聖人井田ノ法ヲ見ルニ、方里ニシテ九百畝、中ニ井ノ字ヲ畫スレバ、九區トナル、一區百畝、八夫八區ヲ受テ、其公田ヲ田ヅクル、是定制也、モシ此定制ノミヲ以テ田ヲ

取ラバ、方里ニ足ザルノ地ハ、皆耕サザランカ、然レドモ、其定制ヲ受ル事アレバ、山谷崎嶇ノ間トイヘドモ、此法施スベカラザル所ナシ、是定制ニ由テ變化百出ナリトイヘドモ、法ノ出ル所一也、一也トイヘドモ、山陵谿谷ニ施スニ於テハ、或ハ公田端ニアリ、或ハ百畝數區トナリ、其形ヲナスヤ、變ジテ月ノ如ク、圭ノ如ク、帶ノ如ク、鋸歯ノ如キ者、皆方里九百畝、井然トシテ公田正中ニ在ル者ト差ハズ、是變ノ常ヲ變ジテ、常ト一ナル所也、故ニ變ハ正ノ活所ナリ、體製ノ正、已ニ之ヲ上ニ辨ズ、唐初沈宋一タビ律ヲ製シテヨリ、詩ヲ言フ者、皆コレニヨル、然リトイヘドモ、其各佳境ヲ得、憂悲喜歡、文辭ニ發スルニ臨ンデハ、猶井田ノ法ヲ丘陵谿谷ニ施スガ如シ、其整齊ヲ錯綜シテ變化量ルベカラズ、故ニ善ク兵ヲ用ユル者ハ、正ヲ轉ジテ奇トシ、奇ヲ以テ正ヲナス、臨機應變、轉盼ヲナスベカラズ、若我ハ正ヲ以テ勝ヲ制ス、何ソ奇ヲ用ントイハバ、是兵ヲ知ラザル者也、詩道モ亦カクノ如シ、活意ヲ以テ定制ヲ取ズンバ、舟ヲ刻ンデ劍ヲ求メ、柱ニ膠シテ瑟ヲ鼓スルナラン、律製已ニ定マツテ、事古詩ト同カラズ、是ヲ以テ其體製ニ違フ者ハ律ニ非ズ、槩シテコレヲ古詩ト云、然シテ其律法ヲ變化スル者ハ、變律ニシテ古詩ニアラズ、古詩律體ノ外、宋元ノ詞曲アリ、時變ノ極ナリ、　本邦ニハ、餘リ之ヲ學ブ沙汰モ聞ズ、蓋近體ノ作、詩病忌不忌サキニ之ヲ出セリ、平側ヲ過ッテ置違ヘタルヲ失粘ト云、知テ故トシタルヲ拗ト云、正偏常格ノ外ニ出ル者皆拗也、拗、正字通ニ烏考反、捩固相違也トテ、戾リ違フ事也、俗語ニギッテウトイフ者ナリ、衆議ニ違フヲ執拗ト云、明謝肇淛、文海披砂ニ、

失粘　拗

老人婦人等ノ拗ヲ數ヘタリ、其内見易キ者、老人夜不臥而書睡、不愛子而愛孫、哭無涙而笑有涙、如此類ナリ、又藥方ニ、三拗湯ト云方アリ、甘草炙ラズ、麻黃節ヲ留メ、杏仁尖ヲ去ズシテ用ユル法也、是通例ニ、甘草ハ炙リ、麻黃ハ節ヲ去リ、杏仁ハ尖ヲ去ルニ反スル也、是ニテ拗ノ義知ルル也、故ニ詩ニ拗アルハ、猶禮ニ權アルガ如シ、蓋軍法ニ水ヲ背ニシテ陣ヲ取ルハ禁忌ナリ、然ルヲ韓信ハ、水ヲ背ニシテ軍ニ勝タリ、兵家ニハ是ヲ奇ト云、禮ノ權、兵ノ奇、詩ノ拗、活手段ナリ、高廷禮曰、法嚴而韻諧、意貫而語秀、皇甫子雅曰、詩苟音律欠諧、終非妙境、故無取拗體、於是于鱗ノ詩律ニ於ルガ如キ、拗法ヲ用ユル事甚稀也、是誠ニ正ヲ守ル、間然スベキニ非ズトイヘドモ、奇ヲ出シテ勝ヲ取ルモ、亦兵家ノ常ナリ、唐人ノ手段、正奇兼用ユ、法ハ本五言ニ立ツ、七言ハ、五言ニ資テコレヲ敷衍ス、故ニ律法、側入ヲ常トス、側入常ナレバ二三六七ノ第二字平ヲ粘ジ、四五八ノ第二字、側ヲ粘シテ起句ニ合ス、平入聲ヲ反シテ此法ト一也、ココニ錯綜變化シテ、以テ拗ヲナス、初唐、五七律猶疎、盛唐、五律密ニ、七律舊キニ仍ル、晩唐五七律漸ク合格ニ進ム、而シテ字ノ二四同キ者、多側ナル者、五言ニ多シ、句ノ反粘ヲ拗スル者、七言ニ多シ、五言、句ノ拗スル者、滄溟ノ選ニ載タルハ、陳子昂、晩次樂鄉縣、三四以下、送別崔著作、三四五六、王維、使至塞上、三四以下、排律中、宋之問、未央宮應制、七八以下、張九齡、和許給事直夜、五六以下而已、然シテ拗ノ正律ト正シク反スル者、唐唐球、題鄭家隱居ノ作、コレヲ文體明辨ニ側起體ト云、玉屑ニ、八句側入格ト云、卮言ニ側法ト云、

不信最清曠、及來愁已空、

數點石泉雨、一溪霜葉風。
業在有山處、道歸無事中。
酌盡一杯酒、老夫顏亦紅。

一三五七、第二字盡側、二四六八、第二字盡平、一三五七、腰皆平ナルベクシテ盡側、二四六八、腰皆側ナルベクシテ盡平、第一字、八句ニ通ジテ盡側、皆禁忌ヲ犯シテ作リ出セル也、此唐球ト云ハ、蜀ノ味江山ニ隱レシ人ナリ、詩ヲ作リテハ、其藁ヲコヨリニ撚リ、大瓢ニ入レテ置ケルガ、後病ニ臥シテ、瓢ヲ江水ニ投ジテ斯文苟不沈沒、得者方知我苦心ト云シニ、人新渠トイヘル所ニテ拾ヒ、是唐球ガ作ナルヲ知リテ、世ニ播セリ、然レバ是等ノ聲律モ、苦心中ヨリ來レル者ニシテ、容易ニ置タル者ニハアラズ、氷川詩式、初唐ノ諸作ヲ取テ拗體ニ備フ、然レドモ初唐ハ猶草昧ニ屬ス、故ニ之ヲ略ス、盛唐ニ於テハ、七律中屢奇ヲ出ストイヘドモ、五律ニ於テハ最愼ム、孟浩然、春怨、

佳人能畫眉、妝罷出簾帷。
照水空自愛、折花將遺誰。
春情多艶逸、春意倍相思。
愁心極楊柳、一種亂如絲。

偶アルモ失粘ニ屬ス、學者宜盛唐ヲ以テ準トスベシ、故ニ七律ノ拗法、盛唐用ユレバ、用ユルモ亦妨ゲズ、五律ノ拗法、盛唐愼メバ、愼マザル事ヲ得ズ、然レドモ唐人ノ律法ハ、後世ト同カラズ、其八人ノ家法有テ、一樣ニハ言難シ、李杜同是大家ナリ、而シテ杜ハ、七言ノ律法自在ニシテ、五言ノ律法嚴ナリ、李ハ、卻テ之ト反ス、故ニ盛唐ノ拗律、謫仙ニ於テ多シ、粗數詩ヲ擧テ例ス、沙丘城寄杜甫、

我來竟何事、高臥沙丘城。
城邊有古樹、日夕連秋聲。

魯酒不可醉、齊歌空復情。
思君若汶水、浩蕩寄南征。

登新平樓、
去國登茲樓、懷歸傷暮秋。
天長落日遠、水清寒波流。
秦雲起嶺樹、胡雁飛沙洲。
蒼蒼幾萬里、目極令人愁。

峴山懷古、
訪古登峴首、憑高眺襄中、
天清遠峯出、水落寒沙空。
弄珠見遊女、醉酒懷山公。
感歎發秋興、長松鳴夜風。

折楊柳、
垂楊拂綠水、搖艷東風年。
花明玉關雪、葉暖金窗烟。
美人結長想、對此心凄然。
攀枝折春色、遠寄龍庭前。

秋思、
春陽如昨日、碧樹鳴黃鸝。
蕪然蕙草晚、颯爾涼風吹。
天秋木葉下、月冷莎雞悲。
坐愁群芳歇、白露周華滋。

常律ニ非ズ、後學法トリ難カルベシ、蓋李白ハ、梁陳以來、詩風ノ艶薄ニ移リ、沈約聲律ヲ以テ詩法ヲ立シコトノ、古道ニ非ザルヲ、本意ナク思ヒ、古道ニ復センコトヲ志シケル故、其詩ニモ、大雅久不作、吾衰竟誰陳、トモアリ、故ニ近體、聲律ハ、其屑トスル所ニ非ズ、是ヲ以テ杜甫聲律ニ拘束スルヲ譏リテ、飯顆山ニ出會シニモ、借問何因太瘦生、總爲從前作詩苦、トイヘリ、然レバ自近體ノ詩ヲ作ルニモ、聲律ニ規規タラザリシニゾ、玄宗、アル時宮中行樂詞ヲナサントテ、折柄李白カ寧王ノ宅ニテ、酒ニ醉テ在ケルヲ、急ニ召サレ、此者聲律ヲ薄ンジテ、律ハ長ズル所ニ非ズト思シ召、五

律十首ヲ作ラシメ給ヒシニ、白立トコロニ十篇ヲナシテ、一點モ加フル所ナシ、其首篇本事詩ニ載タリ、

柳色黃金嫩、梨花白雪香、
玉樓巢翡翠、金殿宿鴛鴦、
選妓隨雕輦、徵歌出洞房、
宮中誰第一、飛燕在昭陽、

玄宗モ、李白聲律ヲ好マザル故ニ、チトコマラセアンバイニ仰セ付ラレタル故、李白モ急度聲律ヲ調ヘタリト見ヱタリ、是等相考ヘテ、李白平生ノ從容、今日律法ヲ用ヒタルニテ、正律ノ法愈明ナリ右李白ノ詩數首平側ノ譜ヲ加フル者ハ、拗句ヲ示スナリ、拗字ヲ譜セザル者ハ獨李白ノミニ非ザレバ也、其內律絕ニ下三平ヲ縱ニ用ヒシハ此老ナリ、絕句後ニ出セリ、唐ノ李杜、杜ハ子細ニシテ、李ハ從容ナリ、明ノ王李、元美ハ時時拗法ヲ出シ、于鱗ハ常ニ正ヲ守ル、守ルトイヘドモ、全無キニハ非ズ、故ニ王、山容薜荔古、水氣桃花寒ナドイヘバ、李モ亦白雲海色 落日秋陰來トモイヘリ、夫拗トハ正律已ニ立テ、其立者ニ反スル者也、其事只作者ノ活手段ニシテ、古人其境ヲ得レバ辭セズ、妙處ココニアリ、後ノ人ハ窮シテイフ、拙處ココニアリ、氷川詩式曰、律詩有定體、然時出變體、如兵出奇、變化無窮、尤是驚世駭俗トアリ、是用拗ノ祕訣ナリ、三體詩法曰、拗體必得奇句時出、氷川詩式、拗句ヲ論ジテ、其法以當下平字處、以側字易之、則其氣挺然不群、トアリ、三體詩法、側體ヲ說テ、與拗體相類、トアリ、然レドモ側體ハ短古ノ流ニシテ、拗體ハ變律也、拗體氷川詩式ニ、法與正律相反、首尾自爲平側、謂之變律、已是變ナレバ、一定ナル者ニアラズ、而シテ拗體、拗句、拗字ノ差別、初學辨知スベシ、サテ變律中ノ

正ハ、側入ニハ、王維、酌酒與裴迪ノ作也、巵言ニハ、是ヲ側法トアリ、其說曰、摩詰七言律、自應制早朝諸篇外、往往不拘常調、至酌酒一篇、四聯皆用側法、尤不可學トアリ、ココニ二首ヲ出ス李白、題東谿公幽居、

杜陵賢人淸且廉、東谿卜築歲將淹、
宅近靑山同謝朓、門垂碧柳似陶潛、
好鳥迎春歌後院、飛花送酒舞前簷、
客到但知留一醉、盤中祇有水晶鹽、

岑參、使君席、夜送嚴河南赴長水、

嬌歌急管雜靑絲、銀燭金杯映翠眉、
使君地主能相送、河尹天明坐莫辭、
春城月出人皆醉、野戍花深馬去遲、
寄聲報爾山翁道、今日河南異昔時、

後首、前ノ諸說ニヨレバ、平法、平起體、八句平入格トモ云ベキ者ニ似タリ、是等皆高手佳境ヲ得テ作ル者ニシテ、漫ニ作ス者ニ非ズ、於是唐律變化多シ、明與ッテ、李何王李勃興シ、詩一變ス、明時氣象豪健ヲ貴ミ、辭藻富華ヲ好ム、詩律精嚴、專故事ヲ用ヒテ、景情此中ニ居ル、蓋宋人ノ淸瘦閑雅、用事自在、詩律寬縱、意趣理窟ニ落ルヲ矯ル也、故ニ明律、唐律ニ非ズ、明律ヨリシテ觀レバ、唐律ハ甚寬ナリ、後人ノ成法、昔人未知ザレバ、昔人何ヲ以テカ後法ニ通ゼン、姑ココニ諸家ニ通ジテ、唐人律ヲ用ユルノ意、今ノ人ト同カラザルヲ言ン、崔顥、

黃鶴樓、

昔人已乘黃鶴去、此地空餘黃鶴樓、
黃鶴一去不復返、白雲千載空悠悠、
晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲、
日暮鄕關何處是、烟波江上使人愁、

李白黃鶴樓ニ上リ、此詩ヲ見テ、眼前有景道不得、崔顥題詩在上頭トテ、去テ金陵ノ鳳凰臺ニ登ッテ、詩ヲ得テコレニ敵ス、即鳳凰臺上鳳凰遊ノ拗律也、蓋李白、崔顥ノ

詩ニ膽ヲ墜ス、故ニ鸚鵡洲ニ於テモ亦之ヲ摸擬ス、其作、

鸚鵡來過呉江水、江上洲傳鸚鵡名。
鸚鵡西飛隴山去、芳洲之樹何青青。
烟開蘭葉香風起、岸夾桃花錦浪生。
遷客此時徒極目、長洲孤月向誰明。

崔詩字ヲ疊ム事、黄鶴ノ字三、去ノ字二、空ノ字二、人ノ字二、起句側ヲ以テ起シ、一三ノ句、二四ヲ同ウシ、一ノ句落韻ニシテ二六ヲ反シ、第三ノ句、側ヲ用ユル事六字、第四ノ句下三平、頸聯ノ腰拗シ、草樹川洲ノ字、交股ヲ用ユ、鸚鵡洲ノ作、鸚鵡三、江二、洲三、首句落韻、第二字平ナルベクシテ側、二ノ句、腰禁ヲ犯シ、三四拗法ヲ用ユ、是崔ニ倣フ者也、靑蓮律ヲ以テ鳴ズトイヘドモ、モト杜ト伍タリ、豈妄意ニ如此コレヲ慕ハンヤ、嚴滄浪詩ニ於テ具眼ト稱ス、此崔顥ノ作ニ撃節シテ、唐三百年第一ト稱ス、是乃敎外別傳ノ義ナリ、之ヲ畫ニ譬レバ、則雪中芭蕉ヲ描スルノ手也、其佗平入、頷聯頸聯ヲ拗スル者ハ、沈佺期、龍池篇、側入下ノ三聯ヲ拗スル者ハ、岑參、九日餞衛中丞、錢起、闕下贈裴舍人、韋應物、自鞏洛舟行作、側入下二聯拗スル者ハ、高適、夜別韋司士、岑參、西掖省即事、暮春送李司馬、王維、和温泉寓目、平入下二聯拗スル者ハ、子美、宣政殿退朝、側入結聯拗スル者ハ、賈至早朝太明宮、王維、和賈至早朝也、變化百出、盡近刻詩律兆ニ出ヅ、煩シクココニ贅セズ、其書ニ但側入ノ前聯ヲ拗シタル作バカリ、例考ヘザル由也、作例ナケレバ、作ラザルガ丈夫也、古人ノ變化偶ココニ出ザルカモ知ラズ、又同書ニ◓○◒●○○●、◓●●○○●○、此字法ヲ起聯ニ、杜、重陽獨酌杯中酒、抱病起登江上臺ノ外、初盛諸家、及明末有所考ト云、後聯ニハ、唐明皆無考ト

云、前聯ニハ盛唐無考ト云、結聯ニ於テ、此調不甚多、老杜及初盛皆無考、七絕、起聯末有考、結聯初盛無考、中晩至宋、稍稍準用、明則厪乎云トアリ、是下句第三字平、第五字側ナルベキヲ、其上ノ平ヲ下ニ下シ、下ノ側ヲ上ニ上ゲタルナリ、是ヲ分ツテ見レバ、上句常ニアルノ法、下句モ亦此法ナキニ非ズ、此二句ヲ合スル者、査シ得テ是ヲ得ザルモ奇ナリ、此句古今ノ禁忌ナラバ、諸詩話ニモ擧ベシ、詩ハ詞ノ類ノ如ク、聲調腔子ニ塡テ而シテ後歌フベキニモアルマジケレドモ、イヅレ◐●●○○●○上ヨリ第三字目ノ平ノ位ヲ側ニスルコトハ、イツニテモ念ヲ入ルベキ事ナリ、後輩唯二四不同、二六對ノ訣ノ三ニ安ンジテ、多ク古ニ考ヘズ、故ニ其禁縱郤テ唐人ニ同カラズ、所謂其不同者ハ、下三聯ヲ許サズ、拗體ヲ許サズ、落韻ヲ輕ンジ、拗句

ヲ論ゼズ、押韻不押韻ノ句、聲律ノ異ヲ辨ゼズ、粗ト謂ツベシ、絕句ニテハ、第三句ノ平側起句ト同キ者ヲバ、折腰體トイヘリ、詩人玉屑ニ見ユ、三體詩ニハ、之ヲ拗體ト云、苕溪漁隱ニハ、之ヲ變體トイヘリ、五七言句尾ヨリ數ヘテ第三字ヲ腰ト云トハ、名同ウシテ實異也、此體ヲ律ニテイヘバ、上二聯下二聯ト聲調ヲ反スル者ニ似タリ、又隔句韻ヲモ變體ト云、異體篇ニ見ユ、側入ノ變體ニハ、李白、上皇西巡歌、誰道君王、劍閣重關、平入ノ變體ニハ、劉廷琦、銅雀臺、沈佺期、邙山、佗集ニ就テ之ヲイハバ、枚擧スベキニアラズ、起句ヲ拗スル者ハ、王維、少年行、薛據、落第後口號、

●●○○○●十五能文西入秦。　三十無家作路人。
時命不將明主合、　布衣空惹洛陽塵。

其實ハ二三四ノ句ヲ拗シタル者ナレドモ、多キヲ主トシテ起句ノ拗ト云、以テ見

易キニ従フ也、轉句ヲ拗スル者ハ、劉禹錫、
竹枝詞、
日出三竿春霧消、江頭蜀客駐蘭橈、
欲寄狂夫書一紙、家住成都萬里橋。
結句ヲ拗スル者ハ、品彙、入破第二疊、
長安二月柳依依、西出流沙路漸微。
閼氏山上春色少、相府庭邊驛使稀。
四句共ニ平入ノ式ニ従フ者ハ、張籍、秋山、
秋山無雲復無風、溪頭看月出深松。
草堂不閉石牀靜、葉間墜露聲重重。
熟語連用ハ、聲律ニ拘ハラザル事アリ、王勃、蜀中九日、變體ニシテ、月ノ字平ノ位ナルヲ、九月九日ノ語變ズベカラザルヲ以テ、月ノ字ヲ平ニアテテ見ル故ニ、他席他郷送客盃ト、二ノ句ニテ聲ヲ定ム、又日ノ字ヲ平ニアテテ作ランモ、勝手次第也、盧照隣ノ詩ニ、九月九日眺山川、歸心歸望積風烟是也、山ノ字側ナルベキ筈也、側字勝タルヲ以テ許シタルナルベシ、是連續側字ヲ用ユル正法ナリ、何大復ノ七律、五月五日天氣鮮、艾葉榴花對眼前ト、シテ、以下ノ六句整齊トシテ韻ヲ協フ、是又側ヲ安ンズベキ所ヲ眺山川ト置タルト、反シテ其理ヲ同フス、天氣ノ氣ノ字ノ位平ナルベキヲ、上ニ擧テ、夾側ノ法ヲ用ヒタリ、然レドモ初心避テ可也、于鱗ハ、此重側ニ由テ拗シテ整齊ヲナセリ、
五月五日榴花杯、故園故人北渚來。
君今不飲紅顏去、那有長絲繫得回。
一二拗シタル故、三四ヲバ、急度聲律ヲ調ヘタル也、朝綱、說ニ從ヘバ、蜂腰病ヲ守ル者也、岑參、春興戲贈李侯、
黃雀始欲啣花來、君家穠桃花未開、
長安一月眼看盡、寄報春風早爲誰。
子美、二月六夜春水生、門前小灘渾欲平上、句水ノ字ヲ夾ミシハ、八月湖水平ノ法ト

不守聲律

見エタリ、又同、黄四娘家花滿枝、千朶萬朶壓枝垂、九月九日ト法相似テ疊字ノ法也、疊字ノ法、後ニ出スヲ以テ、ココニ略ス、又全首聲律ヲ守ラザルアリ、短古也、李白山中問答之ヲ讀メバ、飄飄トシテ虚ニ憑リ風ニ御スルガ如シ、是聲律ノ外ニ得ル者ナリ、

問余何事棲碧山、笑而不對心自閒、
桃花流水杳然去、別有天地非人間、

畢竟是等ハ、詩聖自由三昧、口ヲ開ケバ章ヲナス者ナリ、我豐昔寛佐法印トテ、聯歌ノ名人アリ、元旦ニ兼テ慣シ人來リテ、最早歳旦ノ句シ給ヒシヤト云ケレバ、言ハヒテハ、此新シヒ春ヂヤモノ、ト挨拶有ケル、先箇樣ノ場ナルベシ、又下ニ李白ノ詩二首ヲ引ク、此前ニ引ク李白五律數首、其佗ノ諸作合セ考ヘテ、唐ノ諸名家興象ヲ主トシテ、各其調アリシ事、想ヒ知ルベシ、

江左體

東魯見狄博通、
去年別我向何處、有人傳是遊江東、
謂言挂席度滄海、卻來應是無長風、

贈華州王司士、
淮水不絶濤瀾高、盛德未泯生英髦、
知君先負廟堂器、今日還須贈寶刀、

是等ノ諸作、初心ノ間、法トリ難カルベシ、

李嶠、
富貴榮華能幾時、山川滿目淚沾衣、
不見秖今汾水上、唯有年年秋雁飛、

是禹錫竹枝詞ト同ク、第三句ヲ拗スル者ナリ、玄宗皇帝、梨園弟子ノ此詩ヲ奏スルヲ聞給ヒ、凄然トシテ淚ヲ落シ、李嶠ハ眞才子也トテ、啼給ヒシ詩ナリ、古人聲律ノ外ニ妙悟ノ地アルヲ見ツベシ、王維少年行ノ如キ者、律ニ於テハ、老杜卜居ノ詩也、

又コレヲ江左體トス、
浣花溪水水西頭、主人爲卜林塘幽、

變中整齊

近古之別

已知出郭少塵事、更有澄江銷客愁、
無數蜻蜓齊上下、一雙鸂鶒對沈浮、
東行萬里堪乘興、須向山陰上小舟、
玉屑曰、引韻便失粘、既失粘則若不拘聲律、然其對精到、謂之骨含蘇李體、古今詩刪、徐禎卿、洞庭木葉下、瀟湘秋欲空、是等五言ノ同體ナルベシ、夫詩ニ近古ノ別アルハ、聲律ヲ守ルト守ラザルトノ間也、其常格ヲ守ラズシテ、近體ヲ出ザル者、聲律參差ノ中、亦整齊ヲナセバ也、落花游絲白日靜、鳴鳩乳燕青春深、世亂鬱鬱久爲客、路難悠悠常傍人ノ如キ是也、是ニ由テ古選ニ就テ予疑アリ、夫律ノ大法、中二聯ヲ對シ、起結ヲ隨意ニシ、聲韻ノ和ヲトル也、然ルニ古今詩刪、鄭起、閣夜、
西風蕭蕭木葉稀、秋深作客何時歸、
城頭月出照擊柝、江上露白催擣衣、
鴻雁附書遠莫致、烏鵲遶樹驚還飛、
三更不眠欲起舞、躍馬臥龍誰是非、
陳臥子明詩選、及陳眉山、名公詩選、黎民表送李伯承還山、
黄塵拂衣歸去來、酣歌擊筑相徘徊、
青山似惜敬亭別、明月況有金陵杯、
烟中柳條折欲盡、池上浮萍吹復開、
楚江渺然挂席去、知爾萬里遊蓬萊、
邵夢弼ノ杜律、曉發公安詩、共ニ之ヲ律中ニ收ム、是等皆頷頸已ニ對ナキニ非ズ、然シテ聲律ノ沙汰ニ及バザルニ似タリ、假令聲律ニ渉ラズトイヘドモ、頷頸已ニ對ヲナセバ、律ト言ザル事ヲ得ズト云ベキカ、高廷禮正聲ノ選、子美秋風ノ詩、是ヲ古詩ニ收ム、
秋風淅淅吹我衣、東流之外西日微、
天清小城擣練急、石古細路行人稀、
不知明月爲誰好、早晩孤帆佗夜歸、
會將白髮倚庭樹、故園池臺今是非、

是ヲ鄭黎ノ二作ニ比スレバ、頸聯ハ、二四六ノ聲、其位ヲ守リ、頷聯二四同、二六反聲ヲ以テ、其聲ヲ調フ、然レドモ之ヲ律中ニ收ムルコトヲ得ズ、又李白送張舍人詩、高李共ニコレヲ古詩中ニ收ム、

張翰江東去、正値秋風時、
天淸一雁遠、海濶孤帆遲、
白日行欲暮、滄波杳難期、
吳洲如見月、千里幸相思、

老杜秋風ノ作、古詩ニ收ムルヨリシテ觀レバ、此作古詩ニ收ムルモ宜也、鄭黎ノ作、律中ニ收ムルヨリシテ觀レバ、此二作モ、律中ニ在ルベキ事也、左右先達モ近古ノ別ニ於テハ、一同分明ハ無リシト見ユ、蘇子瞻寒碧軒

淸風肅肅搖窗扉、窗前修竹一尺圍、
紛紛蒼雲落夏簟、冉冉綠霧沾人衣、
日高山蟬抱葉響、人靜翠羽穿林飛、
道人絕粒對寒碧、爲問鶴骨何緣肥。

知ラズ、明人是ヲ何レニカ屬セン、若爾ニ我臆ヲ以テセバ、杜ノ秋風、蘇ノ淸風、中ノ二聯猶聲律ニヨレバ、律ニ屬スベキガ如シ、鄭黎ノ作、ヤヤ古調ニ落ルニ似タリ、敢テ自斷セズ、高明ノ決ヲ待ツ、

異體

變ハ常ニ合スル者也、異ハ別ニ一體ヲ設クル者ナリ、是ハ則才子奇ヲ競ヒ才ヲ奮フノ具、故ニ爾ノ曹、之ヲ知テ之ヲ好ム事ナカレ、作ラザルモ詩道ニ妨ナシ、

○香奩體　是詩體ニ異アルニ非ズ、唯深閨婦女、窈窕優艶ノ態ヲナス、即華奢ヤサカタ也、豪爽高邁、田野寒酸ハ、其用ニ非ズ、故ニ楊維禎宮詞ヲ論ジテ、詩家之大香奩也、不許村學究之語ナドイヘリ、元詩體要、其體ヲ擧テ曰、唐人用此體言閨閣之情、乃艷詞也ト、黃伯暘、

變體

雙雙相思鳥、飛上相思樹、
相思雖不同、同是相思苦、
同人、黛眉顰色、
落花雨欲春日西、楊柳鎖烟鶯亂啼。
玉人緘恨不能語、兩蛾對蹙遠山低。
離愁一味如嘗膽、額上蘭煤香半滅、
風流京兆知不知。佗日歸來看濃淡、

○變體　唐才子傳曰、章碣嘗草創詩律、於八句中、足字平側、各從本韻、自稱變體、文體明辨ニハ、之ヲ兩韻詩トモイヘリ、是實ニ章碣ノ始テ制スル所ナリトイヘドモ、葛之覃兮、施于中谷、維葉萋萋。黃鳥于飛、集于灌木、其鳴喈喈。ナドアレバ、淵源久シ、其詩、上句翰換ノ韻ヲ踏ム、下句先仙ノ韻ヲ用ユ、此體上句モ亦韻ヲ踏メバ、宜ク落韻ヲ以テ主トスベシ、此體謝四溟ノ同韻病ト云者ヲ以テ、法トスル者也、鶴膝病ト似テ、鶴膝病ハ、上句ノ下、只同聲ヲ忌ム、一韻ト限ルニアラズ、

東南路盡吳江畔、正是窮愁薄暮天。
鷗鷺不嫌斜雨岸、波濤欺得逆風船。
偶逢島寺停帆看、深羨漁翁下釣眠。
今古若論英達算、鴟夷高興固無邊。

胡盧韻

○胡盧韻　事文類聚引湘素雜記曰、鄭谷與僧齊已、黃損等、共定今體詩格、曰、凡詩用韻有數格、一曰胡盧、一曰轆轤、一曰進退、胡盧韻者、先二後四、轆轤韻者、雙出雙入、進退韻者、一進一退、失之則繆矣、トアリテ、其法定カニ傳ヘタル説モナキニヤ、氷川詩式ニ擧タルモ、唯推量ノ説也、詩式、胡盧韻ノ法ヲ論ジテ曰、胡盧韻、謂前少後多、前二後四、今錄太白詩一首、以備、未知然否、齊已等定此等格、未之有詩、按ズルニ、前説先一後四ト云、後説前少後多ト云、別アルガ如シ、所引ノ詩、獨酌清溪江石上、寄權照夷、

我攜一樽酒、獨上江祖石、自從天地開、更

轆轤

長幾千尺、擧盃向天笑、天回日西照、永賴坐此石、長垂嚴陵釣、寄謝山中人、可與爾同調、

前二後四ト云者ハ、ココニ擧ルノ詩ニシテ、前少數多ハ、二韻四韻ニ限ルト云コトトハ見エズ、先一後四トイヘバ、五韻十句ニシテ、前聯二句、後ノ八句ト、韻ヲ別ニスル樣ナリ、然ナケレバ傍韻、起句ヲ通韻ニ假ル者、李傾送李回ノ如キ乎、是句ヲ數フルニ於テ穩ナラズ、胡盧ノ形ハ、前小ク後大也、今體ノ詩格トイヘバ、下ニ所引近カランカ、李商隱、茂陵、

漢家天馬出蒲梢、苜蓿榴花遍近郊、
內花只知啣鳳觜、屬車無復插鷄翹、
玉桃偸得憐方朔、金屋妝成貯阿嬌、
誰料蘇卿老歸國、茂陵松柏雨蕭蕭、

○轆轤韻　五車韻瑞ニ、二法ヲ擧グ、曰單轆轤者、單出單入、兩句換韻、雙轆轤者、雙出雙入、四句換韻、出入ト云ハ、綆ヲ轆轤ニ架シテ水ヲ汲ムガ如シ、一邊入レバ、一邊出ヅ、氷川詩式ニモ、姑李白妾薄命ノ詩ヲ引テ、古人未有詩、李詩未知然否トアリ、其詩、初一章、屋玉第二章、疎車第三章、收流第四章、草好章ハ一解四句ノ謂也、此詩ヲ覺束ナシトシテ、又評シテ曰、轆轤格、其法疑如前二韻在東字韻、次二韻、入冬字韻、第三兩韻還入東、第四兩韻郤入冬、恐ラクハ、此說ノ如クナルベシ、單雙ノ別ハ、二句ニシテ韻ヲ換ルト、四句ニシテ韻ヲ換ルトノ違ト見エタリ、我友喬彥駿曰、若此說ニ從ハバ、詩必十六句以上ナルベシ、然ラズシテハ、雙轆轤ノ名立ベカラズ、皆川伯恭問學擧要ヲ見シニ、三百篇韻法ヲ引テ、後世樂府有轆轤韻、乃詩人之遺法也、先轍ニ泝ルモノココニ尋ヌベシト、所引臣工一首ヲ擧グ、

嗟嗟臣工(東)敬爾在公(東)王釐爾成(庚)來咨來茹(魚)

進退

嗟嗟保介、維莫之春、亦又何求、如何新畬、
於皇來牟、將受厥明、明昭上帝、迄用康年、
命我衆人、庤爾錢鎛、奄觀銍艾、 凡六部、
是眞先ヲ一ニ歸シテ六部トイフ也、鄭谷
定ムル所、今分明ヲ闕グ、合セ觀レバ、前ニ
用ヒタル韻、又重ネテ出ル事アルハ、轆轤
ノ類也、單雙ノ別ハ、進退韻、單出單入ヲナ
セバ、單轆轤ト稱スベキニ似タリ、進退韻、
果シテ單轆轤ナラバ、雙轆轤、彥駿ノイフ
如ク、八韻十六句以上ナルベシ、今體トイ
ヘバ、排律ノ法ニヤ、以テ明者之斷ヲ待ツ、
○進退韻 韻二ツヲ雜ヘテ押也、一度ハ
サキノ韻ニ進ミ、一度ハアトノ韻ニ退ク
ト云事ナルベシ、隔一句用韻、故亦名隔句
韻、隔句體トイヘバ、扇對ノ詩體ヲ云、李建
勳ノ作、隔句體ニシテ、隔句韻也、
不喜長亭柳、 枝枝擬送君、
誰憐北窗下、 樹樹欲留人、
圓缺都如月、 東西只似雲、
愁看離席散、 歸蓋動行塵、

連珠

宋李師中、贈唐介謫英州別駕、
孤忠自許衆不與、獨立敢言人所難、
去國一身輕似葉、高名千古重於山、
並遊英雄顏何厚、未死姦諛骨已寒、
天爲吾皇扶社稷、肯敎夫子不生還、
○連珠格 疊同字而成者也、白居易題天
竺寺、
一山門作兩山門、兩寺元從一寺分、
東澗水流西澗水、南峯雲起北峯雲、
前臺花發後臺見、上界鐘淸下界聞、
遙想吾師行道處、天香桂子落紛紛、
明ノ嘉靖ノ比、日本ヨリ從終興ト云者、彼
方ニユキ、雨中往曹娥江二律ノ新體ヲナ
ス、是モ連珠ニ屬スベシ、而シテ前詩ハ雙
字、後詩ハ疊字、自別アリ、

新體

渺渺茫茫波潑天、霏霏拂拂雨和烟、

蒼蒼翠翠山遮寺、白白紅紅花滿川。
整整齊齊沙上雁、來來往往渡頭船。
行行坐坐見無盡、世世生生作話傳。
其二、
天連泗水水連天、烟鎖孤村村鎖烟。
樹遶藤蘿蘿遶樹、川通巫峽峽通川。
酒迷醉客客迷酒、船送行人人送船。
此會應難難會此、傳今話古古今傳。

雙字

雙字體、詩學入門、王十朋貢院垂成、雙蓮呈瑞、

大厦垂垂就、佳蓮得得開。
雙雙戴千佛、兩兩應三台。
歎意重重合、香風比比來。
人人宜自勉、齊齊有延魁。

疊句

○疊句格　漢天馬歌ハ、一篇五章、每章ノ首皆天馬徠ノ句ヲ疊ム、三百篇、南有樛木、桃之夭夭、又采采芣苢、ナドノ類也、漢詩、西門行、自非仙人王子喬、計會壽命難與期ノ二句ヲ疊ミ、東門行、今時清廉難犯教言、君復自愛莫爲非ノ二句ヲ疊ミタリ、嵇康秋胡行、富貴尊榮憂歎諒獨多、富貴尊榮憂歎諒獨多絕智棄學遊心於玄默、絕智棄學遊心於玄默、直ニ相疊ム、又相疊ンデ少シク字ヲ變ズル者、李白、少年行、男兒百年且樂命、何須徇書受貧病、男兒百年且榮身、何須徇節甘風塵、又疊句相接スル者、陶淵明、幽室一已閉、千年不復朝、千年不復朝、賢達將奈何、又同句隔句而疊ム者、同人蜀道難、蜀道之難、難於上青天ト云句ヲ始中終ニ用ヒタリ、蓋同句隔句者、李白ニ先達テ梁ニ木蘭詩アリ、奇詩ナリ、左ニ錄ス、

喞喞復喞喞、木蘭當戶織、不聞機杼聲、唯聞女歎息、問女何所思、問女何所憶、女亦無所思、女亦無所憶、昨夜見軍帖、可汗大點兵、軍書十二卷、卷卷有爺名、阿爺無大兒、木蘭無長兄、願爲市鞍馬、從此替爺征、

東市買駿馬、西市買鞍韉、南市買轡頭、北市買長鞭、朝辭爺孃去、暮宿黄河邊、不聞爺孃喚女聲、但聞黄河流水鳴濺濺、且辭黄河去、暮至黒水頭、不聞爺孃喚女聲、但聞燕山胡騎聲啾啾、萬里赴戎機、關山度若飛、朔騎傳金柝、寒光照鐵衣、將軍百戰死、壯心十年歸、歸來見天子、天子坐明堂、策勳十二點、賞賜百千彊、可汗問所欲、木蘭不用尚書郎、願馳千里足、送兒還故郷、爺孃聞女來、出郭相扶將、阿姊聞妹來、當戸理紅妝、小弟聞姊來、磨刀霍霍向豬羊、開我東閣門、坐我西閣牀、脱我戰時袍、著我舊時裳、當窗理雲鬢、對鏡帖花黄、出門看火伴、火伴始驚惶、同行十二年、不知木蘭是女郎、雄兎脚撲朔、雌兎眼迷離、兩兎傍地走、安能辨我是雄雌、

古今詩刪、明鄭善夫擢歌ヲ收ム、三四首尾ノ二字異ルノミ、短古トイフベシ、

毎句用字

鴻雁飛來風雪心、鴻雁飛去天山陰、二月天山風雪淺、六月天山風雪深、

○句用字體　終篇同字ヲ疊ム者ナリ、梁ノ元帝、春日、

春還春節美、春日春風過、春心日日異、春情處處多、處處春芳動、日日春禽變、春意春已繁、春人春不見、不見憶春人、徒望春光新、春愁春自結、春結誰能申、欲道春園趣、復憶春時人、春人意何在、空爽上春期、獨念春花落、還似惜春時、

初唐ノ人ノ七言長篇ニ、上ニ言タル字ヲ、下ニ受テ疊ミタル者多シ歌行ノ變也、張若虛、春江花月夜、劉廷芝、公子行、代悲白頭翁ノ類ナリ、古詩源、梁武帝、西洲曲ヲ讃テ、連跗接萼、張若虛、劉希夷、七言古、發源於此、トイヘリ、西洲曲、初唐古體ノ源トイヘバ、標シテ來由ヲ知ラシム、

憶梅下西洲、折梅寄江北、單衫杏子紅、雙

自君之出

鬢鴉雛色、西洲在何處、兩槳橋頭渡、日暮伯勞飛、風吹烏桕樹、樹下卽門前、門中露翠鈿、開門郎不至、出門采紅蓮、采蓮南塘秋、蓮花過人頭、低頭弄蓮子、蓮子靑如水、置蓮懷袖中、蓮心徹底紅、憶郎郎不至、仰頭見飛鴻、飛鴻滿西洲、望郎上靑樓、樓高望不見、盡日闌干頭、闌干十二曲、垂手明如玉、卷簾天自高、海水搖空綠、海水夢悠悠、君愁我亦愁、南風知我意、吹夢到西洲、

○自君之出矣　是本魏徐幹ノ雜詩、

浮雲何洋洋、願因通我詞、飄飄不可寄、徙倚徒相思、人離皆復會、君獨無返期、自君之出矣、明鏡暗不治、思君如流水、何有窮已時、

ト作リシヲ、後人末ノ四句ヲ取リ、一體トナシテ祖述シタリ、故ニ此題ハ何首作リテモ、起句ト第三句ノ思君如ノ三字ハ、動サザルガ作例也、サレドモ謝茂秦ハ、

兩頭纖纖

自君之出矣、幾度搗秋砧、
蓼蟲不言苦、明月獨知心、

トモ作リタレバ、人ノ作ハ咎ムベキニ非ザレドモ、自作ルコトハ思惟ノ上ニ在ルベシ、劉宋鮑令暉、寄行人詩、自君之出矣、ノ句ヲ發句トシテ、五言五韻ノ詩ヲ常ノ通ニ言流シタルモ見エタリ、同句ノ例ナルベシ、古辭中、兩頭纖纖體ノ作、亦此例ナリ、

兩頭纖纖月初生、半白半黑眼中晴、
腷腷膊膊鷄初鳴、磊磊落落向曙星、

齊王融、

兩頭纖纖綺上紋、半白半黑鴻翔群、
腷腷膊膊烏迷暗、磊磊落落玉石分、

白集此體ニ傚フ者多シ、何處難忘酒、七首、ココニ二首ヲ擧グ、

何處難忘酒、長安喜氣新、
初登高第後、乍作好官人、
省壁明張牓、朝衣穩稱身、

首尾

此時無一盞、爭奈帝城春。

又何處難忘酒、天涯話舊情、青雲倶不達、白髮遞相驚。二十年前別、三千里外身。此時無一盞、何以叙平生。

同體少シク字ヲ變ズル者、「莫隱深山去、君應到日嫌、〔中略〕不如來飲酒、相對醉厭厭。莫作農夫去、君應見自愁。〔中略〕不如來飲酒、相伴醉悠悠。

○首尾吟　邵康節、

堯天非是愛吟詩。雖老精神未耗時。水竹清閒先據了、鶯花富貴又兼之。梧桐月向懷中照、楊柳風來面上吹。被有許多閑捧擁、堯天非是愛吟詩。

絶句、

廬山烟雨浙江潮。未到千般恨未消。到得歸來無別事、廬山烟雨浙江潮。

文體明辨ニ、首尾吟ハ、モト宋ノ邵康節ニ防マルトアリ、然リトイヘドモ、白樂天、達哉樂天行、達哉達哉白樂天ト云句ヲ首尾ニ置ケリ、コレヨリ泝レバ、晉ノ陸機從軍行、起ニ曰、苦哉遠征人、飄飄窮四遐、結ニ曰、苦哉遠征人、撫心悲如何、頗首尾吟ニ近シ、于鱗送公實還南海ノ長篇、起ニ曰、梁生偃蹇誰與倫、梁生偃蹇無與倫、結曰、梁生何爲終蒿萊、梁生愼勿終蒿萊、上ノ詩中ヨリ點化シ來ッテ、一新ヲナス者也、筆次相類スル句連用スル者ヲ云ニ、晉ノ阮籍詠懷、一日復一夕、一朝復一朝、一日復一朝、一昏復一晨、韓退之又曰、一日復一日、一朝復一朝、是等ハ同體ニ倣フ者ニシテ、古句ヲ犯スト云ニハアラズ、又同句ヲ疊用スル者、韓文公雙鳥詩、不停兩鳥鳴、百物皆生愁、不停兩鳥鳴、自此無春秋、不停兩鳥鳴、日月難旋輪、不停兩鳥鳴、大法失九疇。

回文

○回文　詩林廣記ニ云、皮日休、雜體詩序ニ曰、

晉温嶠始有回文詩、回文トハ、倒ニ讀メバ、
又一首ニナル也、東坡金山寺、
潮隨暗浪雪山傾、遠浦漁舟釣月明、
橋對寺門松逕小、巷當泉脈石波清、
迢迢遠樹江天曉、靄靄紅霞晩日晴、
遙望四山雲接水、碧峯千點數鷗輕、
同題織錦圖、
春暮落花餘碧草、夜涼低月半枯桐、
人隨遠雁邊城暮、雨映疎簾繡閣空、
按ズルニ是モ亦未回文ノ正體ニ非ズ、詩法入門云、回文詩者、反覆成章、隨擧一字皆成詩、竇滔妻蘇氏之回文、八百一十二字、縱横讀之、得詩三千七百五十二首、今回文、順讀成一首、倒讀成一首、今學者、止學此法、然ルニ朝鮮ノ李仁老、破閑集、雙韻回文ノ新製ヲ載ス、即李知深感秋ノ作ナリ、
散暑知秋早、悠悠稍感傷、
亂松青蓋倒、流水碧羅長、
岸遠疑烟皓、樓高散吹涼、
半天明月好、幽室照輝光、
順讀傷長涼光ヲ韻トシテ平韻一首、結聯ヨリ讀始メ、光涼長傷ト次第シテ平韻一首、上句ヲ下句トシ、下句ヲ上句ト順讀早倒皓好ヲ韻トシテ側讀一首、又下ヨリ好皓倒早ト次第シテ側韻一首倒讀此法ヲ用ヒテ四首、都合八首ト成ル、又對法ニモ回文アリ、是ト別也、句法中ニ出セリ、和歌ニ回文ト云ハ、倒讀順讀同一首ヲナス者、詩ニテハコレヲ顛倒韻ト云、

顛倒

○顛倒韻　梁簡文帝、
鹽飛亂蝶舞、花落飄粉奩、
奩粉飄落花、舞蝶亂飛鹽、

盤中

詩藪曰、蘇伯玉、盤中詩、謂宛轉書於盤中者、則當亦廻文之類、其詩、
空倉雀、帝抱饑、吏人妻、夫見稀、
黄者金、白者玉、姓者蘇、字伯玉、

家在長安身在蜀、

不知當時盤中書作何狀、必佗有讀法、不可考兵、

○集句　古人ノ句ヲ集メテ、聲韻興趣、已ガ肺腑ヨリ出ル者ノ如クニナス也、餘程古人ノ句ヲ諳ンゼザレバ、ナラザル事ナリ、文體明辨曰、自晉以來有之、至宋王安石、尤長於此、冷齋夜話曰、集句詩、山谷謂之百家衣體、其法貴拙速、而不貴巧遲、晴湖勝鏡碧、衰柳似金黃、古瓦磨爲硯、閑碪坐當牀、人以爲巧、然皆疲費精神、積日月而後成、不足貴也、ト、山谷ノ意ハ、畢竟古句ヲ竝ブル者ナレバ、强記クラベニテゾアル、早ク出來ナンコソ興ヨ、隙懸ケナンニハ、タトヒ好クトモ面白カラジト也、同時、東坡モ亦此體ヲ好マズ、退之驚笑子美泣、問君久假何時歸ノ嘲アリ、宋石曼卿下第偶成ノ集句、

一生不得文章力、　欲上靑雲未有因、

聖主不勞千里召、　姮娥何惜一枝春、

鳳凰樓下雖沾命、　豺虎叢中也立身、

啼得血流無用處、　著朱騎馬是何人、

元詩體要ヲ見ルニ、元人ノ諸作、或ハ淵明ノ句バカリヲ集メ、或ハ子美ノ句バカリヲ集メテ、篇ヲ成セルモアリ、又陳臥子明詩選、楊愼、送楊茂之、七言古詩、搖落深知宋玉悲、登山臨水送將歸、ト云句ヲ挿メリ、是老杜ト楚辭ノ句ヲ取レリ、長篇一聯ノ集句ヲ雜ユ、珍シキ體也、又一體ニ非ザレドモ、類スル者、左ニ記ス、瑯琊代醉曰、韋蟾廉問鄂州、罷賓僚祖餞、蟾書文選句曰、

悲莫悲兮生別離、　登山臨水送將歸、

授賓從、請續其句、妓口占曰、

武昌無限新栽柳、　不見楊花撲面飛、

上句ハ屈原、下句ハ宋玉ヲ摘タレバ、之ヲ唐人ノ集句トイハンモ可也、又屈子ノ此句、琴操ニハ、杞梁妻ノ琴歌トスレバ、屈子

已ニ古句ヲ用ユル乎、

○俳諧　詼諧トモ云、俳ハ俳優俳倡トテ、今ノ狂言者ノ樣ナル者也、詼ハ謔也、嘲也トアリ、諧ハ和ト訓ン、合ト訓スル、本訓ナレドモ、コヽハ諧謔トモ續キテ、莊子ニ齊諧者、志怪者也ト云ノ諧ト同ジ、東方朔ヲ、漢書ニ、口諧倡辨トアリ、又朔雖詼笑ト云所ノ注ニ、詼、謿戲也、詼笑謂調謔發言可笑也トアリ、文體明辨曰、按詩衛風淇奥篇云、善戲謔兮不爲虐兮、後人因此演而爲詩、故有俳諧體ト、和歌ニ誹諧アリ、八雲御抄ニ、俳諧、滑稽、狂言ナド、諸名モ擧タレドモ、大方ハサヨメルベキヤランナドハ、推セラルレドモ、其樣知ルコトナシトアリ、然レバ和歌ノ俳諧ハ、吾徒知ルベキ樣ナシ、但詩ノ俳諧ト云ハ、今世ニイフ狂詩也、狂詩ト云名目ハ、彼ニハ無キ言ナリ、本朝文粹源順、題夜行舍人狂歌ト云アリ、今狂詩ト云ニハ、是等ヲ權輿トスルニヤ、今和俗、謡ヲ連歌ニ倣ツテ、俗諺ヲ用ユル辭、是ヲ俳諧ト云、俳諧者流此說ヲ取ラズシテ、滑稽傳注ヲ引クハ六ツカシ、杜甫、戲作俳諧體遣悶、

異俗吁可怪、斯人難並居、
家家養烏鬼、頓頓食黃魚、
舊識難爲態、新知已暗疎、
治生且耕鑿、只有不關渠、

右俳諧ト續キタル者也、退之寄詩雜詼俳有類說鵬鷃、又劉攽、退之ノ老翁眞箇似童兒ノ句ヲ評ジテ、此眞諧語トイヘリ、猶之ヲ考フルニ、南齊書樂志ニ俳歌辭ト云アリ、其辭、

俳不言不語、呼俳噏所、俳適一起、狼率不止、生拔牛角、摩斷膚耳、馬無懸蹄、牛無上齒、駱駝無角、奮迅兩耳、

其後曰、右侏儒導舞人自歌之云云、俳人ハ此邦歌舞戲役者也、サレドモ彼方ハ天子

ノ樂房ニ正樂ノ人アリ、又此方ノ操歌舞戲、竿上リ、綱渡リ、人馬、梯子藝、ナド云類、皆貯ヘテ、其内ニ部ヲ分ツテアリ、其色色ノ戲ヲ雜劇角觝ナド云、角觝亦角觗トモ書ク、角觝モト戰國ノ時、講武之禮ヲ以テ戲樂トセシヲ、秦更メテ角觝トセショリ、淫樂ノ名ト成レリ、漢書刑法志ニ見エタリ、而シテ今此歌辭盡解スベカラズ、大槩當時狂言ノ道化踊、人ヲツレテ、歌ヒテ出ル樣ノ辭ト見エタリ、其所作ニテ人ノ笑ヲ催ス事ナルベシ、俳諧體ノ淵源トモ云ベシ、俳諧モト發言可笑調謔ノ言ナレバ、詩人偶ニハアル事ナレドモ、詩作ルニハ戒ムベキコト也、故ニ陳永康、詩ノ十戒中、俳諧ノ戒アリ、戲調ニワタル故也、爰ニ序ヲ追テ可笑者數條後ニ擧テ、話柄トナス、唐ノ景龍中、左武將軍權龍褒、詩ヲ賦スルヲ好ム、而シテ聲律ヲ知ラズ、意義ヲ考ヘズ、

十七字詩

アル時夏日ノ詩ヲ賦シテ曰、嚴霜白皓皓、明月赤團團、傍ヨリ是豈夏日ノ景ナランヤト云ケレバ、趁韻トゾ答ヘケル。太子笑ヒ給ヒ、龍褒才子、秦州人士、明月晝耀、嚴霜夏起、ト書給ヒケル、又秋日休懷、

簷前飛七百、雪白後園僵。
飽食房里側、家糞集野蝗。

之ヲ參軍ニ示シケルニ、參軍曉サズ、其故ヲ問、龍褒曰、簷ノ前ヲ鷂飛タリ、此鷂ノ直七百、衫ヲ洗ツテ後園ニ挂タルヲ見レバ、其白キ事雪ノ如シ、折カラシタタカニ房中ニ飯食テ用ヲ辨ジ、野澤蜣蜋ノ集ルヲ見キト答ヘケル、宋ノ宣德ノ比、王將明ト云者ノ家ノ梁ノ上ニ、靈芝生タリ、天子聞給ヒ、其宅ニ幸アリケリ、時シモ梅雨フリ續キ、彼靈芝地ニ落ヌ、無名子是ヲ嘲リテ十七字ノ詩アリ、

相公新賜第、梁上生芝草、

歇後俳諧

爲甚脫玉來膠少、

玉來即靈芝ナリ、是詩ノ一體ニハアラズ、結句ヲマダ有ベキ様ニ、ハヅマセテ人ヲ笑ハセタル也、又南濠詩話曰、袁景文、初貧甚、嘗館授一富家、景文性疎放、師道頗不立、其家別延陳文東、文東甚嚴、一日景文來訪、文東適出、因大書其案云、

去年先生靡恃己、今年先生罔談彼、

若無幾箇始制文、如何教得猶子比、

文東善書、故云然トイヘリ、是ハ千字文ニ、靡恃己長罔談彼短始制文字猶子比兒等ノ句アルヲ拈出シテ、我己ガ長ヲ恃ンデ疎放ナルニ非ンバ、今ノ先生來リテ、前人ノ非ヲ談ズルコトモナルマジ、足下手跡善カラズバ、彼子ヲ兒ノ様ニセラルルコトモナルマジ、御仕合ニ物書レタリト、千字文ノ語、下ノ一字ヲ截リテ、意ヲ其截リシ字ノ內ニ寓シテ作レリ、歇後ノ俳諧トモ云ベシ、誠ニ天地廣ケレバ、アラザル事ハナキナルベシ、事林廣記ニ一ノ話アリ、北齊高祖、郭璞遊山詩ヲ讀ンデ嗟嘆シテ善ト稱ス、諸學士一同ニ唯ス、石動筩ナル者一人應ゼズ、高祖コレヲナジル、動筩曰、此詩何ゾ善トスルニ足ラン、若臣ヲシテ作ラシメバ、能一倍ヲ上サント、帝怒ッテ速ニ詩作ラシム、動筩即誦シテ曰、郭璞ガ詩ニ曰、青溪千餘仞、中有一道士、臣ガ詩ニ曰、青溪二千仞、中有兩道士、臣ガ詩郭ニ勝ルコト豈一倍ナラズヤト、帝大ニ笑フト、是又動筩一時ノ俳諧ナラズヤ、

四聲

平

〇四聲體　唐陸龜蒙、夏日閑居、作四聲體、寄皮襲美、

平聲
荒池菰蒲深、　閒堦莓苔平、
江邊松篁多、　人家簾櫳清、
爲書淩遺編、　調絃夸新聲、
求驩雖殊途、　探幽聊怡情、

平上

上平

朝烟涵樓臺、　晩雨染島嶼、
漁童驚狂歌、　艇子喜野語、
山容堪停杯、　柳影好避暑、
年華如飛鴻、　斗酒幸且擧、

平去

去平

新開窗猶偏、　自種蕙未徧、
書籤風搖聞、　釣榭霧破見、
耕耘閒之資、　嘯咏性最便、
希夷全天眞、　詎要問貴賤、

平入

入平

危簷仍空階、　十日滴不歇、
青莎看成狂、　白菊即欲沒、
吳王荒金樽、　越妾挾玉瑟、
當時雖愁霖、　亦若惜落日、

宋ノ晏殊、汝陰ニ守タリ、梅堯臣往テ之ニ見ユ、將ニ行ントス、殊酒ヲ穎河ノ上ニ置キ、因テ曰、古人章句ノ中、全平聲ヲ用テ制ス、字穩帖也、枯桑知天風ガ如キ是也、恨ラクハ未側聲ノ詩ヲ見ズト、堯臣既ニ舟ヲ引テ、終ニ五側ノ詩ヲ作ッテ、之ニ寄ス、

五律

月出斷岸口、　影照別舸背、
且獨與婦飲、　頗勝俗客對、
月漸上我席、　瞑色亦稍退、
豈必在秉燭、　此景亦可愛、

疊韻

疊韻體、頗ル上ノ四聲體ニ類ス、皮日休山中ノ吟、

穿烟泉潺湲、　觸竹犢觳觫、
荒篁香墻匡、　熟鹿伏屋曲、

第一句ノ平、盡ク先ノ韻ヲ疊ミ、第三句ノ平、盡陽ノ韻ヲ疊ミ、二四入聲屋ノ韻ヲ疊ム、同韻ノ字ニテ疊メバ、四聲相用ユルハ隨意也、四聲體ト異ル所ハ、韻ヲ疊ムト、疊マザルトノ間也、

偏傍

○偏傍體　偏傍類聚スル者、山谷集、衝雨向萬載道中、得逍遙觀、

逍遙近道邊、　憩息慰憊懣、
晴暉時晦明、　謔語諧讜論、
草萊荒蒙蘢、　室屋壅塵坌、

僕僮侍偪側、涇渭清濁渾ス。

○藁砧體　古樂府、

藁砧今何在、山上復有山。
何當大刀頭、破鏡飛上天。

藁ヲウツ砧ヲ砆ト云、砆夫ノ音ナレバ、夫、何方ニ有ヤト起シタリ、山上有山ハ出字ニテ、出テ內ニ在ズト也、刀頭ニハ環アリ、環ハ循テ還ルノ意ニテ、何カ還ラント也、破鏡トハ光缺ル月ナレバ、月季ト見エタリ、月ノ季ニハ可還ト也、是隱語也、此法此詩ヨリ出ル故、藁砧體ト云、

山上有山歸不得、湘江暮雨鷓鴣飛。
蘼蕪亦是王孫草、莫送春香入客衣。

是孟遲閑情ノ詩、夫ヲ思フ作也、起句ハ、夫出デテ歸ラザルヲ云、二句夫ヲ想像リタル也、鷓鴣ハ行不得ト鳴ク鳥也、湘江ニ雨ニ阻テラレテ、歸ル事モ得ズ、又行ク事モ得ザラン乎ト也、蘼蕪ハ芎藭ト云草ノ葉

ナレドモ、ココハ當歸ニシテ見タル、招隱ノ辭ニ、王孫遊テ兮不歸、春草生兮萋萋トアル故ニ、王孫草トイヘバ、遊ビ入テ還ラヌ事ニナル也、故ニ三四ノ意ハ、當歸ト思フモ、亦歸ラジト移リカハル世ノ人心ゾ、ツトメテ留メ言ヲ勿言ソトナリ、大覺禪師、即心是佛頌ニ云、

有節不干竹、三星繞月宮、
一人居日下、弗與衆人同。

節、竹冠ヲ除ケバ、則即ノ字也、星ノ如ク三點シテ、下ニ半月ヲ置ケバ、心ト云字也、日下ト書テ、下ニ一ノ人ト云字ヲ置ケバ、是ノ字也、弗ヲ人ト同ウスレバ、佛ノ字也、是字謎ノ詩也、謎、ナゾト訓ズ、畢竟藁砧ト同類也、

四箇口盡皆方、十字在中央、不得作田字、
道不得作器字、

是詩ニ非ズ、字謎也、解キテ圖ノ字トス、解

ノ法ニ謎ト離合トノ別アリ、往文祿朝鮮ノ役、董一元ナル者アッテ、日本ノ勢ヲ新寨ニ攻ントス、時ニ一女子ノ新寨ヨリ出來ルヲ得タリ、一紙ヲ持セリ、其文曰、

知我姓者、令公之後、埋兒之父、有或之口、無手之按、

時ニ諸葛錄ナル者アリ、此中郭國安アル事ヲ知リ、終ニ謀ヲ通シテ新寨ヲ破レリ、郭氏ハ令公ノ後ニシテ、母ノ爲ニ兒ヲ埋メントセシハ郭巨也、文勢ニ依テ丁寧ヲ致セル也、口ノ字ニ或ヲ合スレバ國也、按ノ字ニ手ヲ離テバ安也、此語郭ノ解ハ謎也、國安ノ解ハ、離合ノ法也、故ニ世ニ皆知ル所ノ絕妙好辭ハ謎解ニシテ、大明寺水ハ、離合ノ解也、鄭谷柳、

半烟半雨溪橋畔、間杏間桃山路中、

會得離八無限意、千絲萬絮惹春風、

或人見テ柳謎トイヘリ、意ハ、一思方知之也、サレドモ、是ハ詠物中ノ一體ニシテ、唐詩選中、官娃宮外鄴城西ノ作モ、是ト同ジ晤體ト云、今俗ニ隱題ト云者是也、扶渡斷橋水、伴歸無月村、杖ニ非ズシテ何ゾ、詠物宜然、謎ト云ヲ待ズ、

有情郎棄我、無情我伴郎、

伴郎雲雨後、棄卻在門傍、

思ヘバ傘ノ謎ナルヲ知ル、韓退之、城南聯句ニ、因飛黏雨動、盜啅接彈驚、上ノ句ハ、蛛ノ網ニカカリタル蟲、蝶ナドノ類、下ノ句ハ、雀ナドト見エタリ、隱體也、又形容ノ語、

形容

思フテ故ヲ得ル者アリ、謎ト同カラズ、宋宗室ノ詩、蛙飜白出見、蚓死紫之長、是今俗ニ云、見立蛙ノ飛上リタルヲ、腹ヨリ見レバ、白シテ出ノ字ノ樣ナリ、蚓ノ死シタルヲ見レバ、紫ニシテ草書ノ之ノ字ノ樣ナル也、

畧題字

○略題字體　是又隱ニ近シ、唐人、奉試詠

青、

地闢(畵)天光遠、春還月(畵)道臨(畵)草濃河畔色(畵)槐結路傍陰。未映君王(畵)史、先標胄子(畵)襟。經明如可拾、(畵)(畵)自有致干(畵)雲。

○離合體　名詩ト云アリ、滄浪詩話耕句トイヘリ、續文章緣起曰、名詩宋鮑照作字謎詩、名數詩、齊王融作四色詩、梁簡文帝作藥名詩、卦名詩、元帝作姓名宮殿將軍鍼穴龜兆歌曲、縣屋車船、鳥獸草樹等名詩、其佗陳隋之際、四氣六甲、八音十二神、十二屬等、未暇悉錄、ト、今一二體ヲ擧テ其繁ヲ省ス、水涉黃牛浦、山過白馬津。(獸名)啼鳥怨別鶴、曙鳥憶還家。(曲歌)澗谷永不變、山梁冀無累、(人名)張籍、答鄱陽客、

江皐歲暮相逢地、黃葉霜前半夏枝。
子夜吟詩向松桂、心中萬事豈君知。

上人名及此詩、彼ヲ離チ此ニ合スレバ、谷永、梁冀、地、黃、半夏、桂、心アリ、和歌ニテハ、昔ナカラ(長良山)ノ山、櫻哉ナドト詠ズル樣ナレドモ、詩ニテハ異體也、是離合也、唐ノ乾符ノ末、客アリ、慶青龍寺ノ僧ヲ訪ヒシニ、事ニ礙ラレテ逢ズ、客怒リ、門ニ二韻ヲ題シテ去ル、

龕龍去東海、　時日隱西斜。
敬文今不在、　碎石入流沙。

寺僧皆解セズ、一沙彌見テ曰、龕ノ龍去リ、時ノ日隱レ、敬ノ文アラズ、碎ノ石入ル、合寺苟卒ト此詩離アッテ合無シ、離詩ト云ベキ者ニ似タリ、離合ノ詩ハ、漢ノ孔融ニ起ルトイヘリ、其詩未離合ノ解ヲ分明ニセズトイヘドモ、是ヲ擧テ以テ其本ヲ標ス、

漁父屈節、潛水匿方。與時進止、出行弛張。
呂公磯釣、闔口渭傍。九域有聖、無土不王。
好是正直、女回于國。海外有截、隼逝鷹揚。

六翮將奮、羽儀未彰、蛇龍之勢、俾也可忘、玫璇隱曜、美玉韜光、無名無譽、放言深藏、按轡按行、誰謂路長、

一二ノ句ニ魚ヲ離チ、三四ノ句ニ日ヲ離チ、魚日ヲ合シテ魯ノ字ヲ得、五六ノ句ニ口ヲ離チ、七八ノ句ニ或ヲ離チ、口或ヲ合シテ國ノ字ヲ得、九十ノ句ニ子ヲ離チ、十一十二ノ句ニ乙ヲ離チ、子ト合シテ孔ヲ得ベクシテ、今乙ノ得ベキ無シ、必誤アラン、十三十四鬲、十五十六虫即融、十七十八文、十九與、二十手、即擧、以テ魯國孔融文擧ノ字ヲ得、

○歇後詩　歇後トハ、六朝ノ比ノ文章ハ、四六文ニナリ、對偶ヲ用ユル故ニ、長キ言ヲバ、末ヲ截リテ用ユ、譬バ詩ニ貽厥孫謀ト云ヲ貽厥ト云テ、孫謀ノ事トナシ、書ニ友于兄弟ト云ヲ、友于ト云テ兄弟ノ事トナス類也、モト言ノ本體ニアラズ、韓退之、斷送一生唯有酒ノ句、破除萬事無過酒ノ句ヲ、黄山谷歇後シテ、斷送一生唯有、破除萬事無過ト作レリ、其外故事ナド用ヒテ、其要ヲ言ヒ取ラザレバ、歇後ニナル也、サレドモ人ノ詩議シ易カラズ、石林詩話ニ、唐彥謙長陵ノ詩、耳聞英主提三尺、眼見愚民盜一抔ト云ヲ、三尺ト謂テ劍ヲイハズ、一抔ト謂テ土ヲイハズ、歇後ノ詩ト難ジタリ、サレドモ韓昌黎集ヲ見ルニ、不覺離家已五千ト云テ五千里トイハズ歇後也ト人難セシヲ、蔣之翹辨ジテ曰、漢高帝紀、提三尺取天下及韓安國傳、本無劍字、古固有如此造語者、公言離家已五千、則知其爲里也トアリ、由是觀之、提三尺、出所アリ、一抔或ハ來歷アルカ、然レドモ之翹、唐彥謙ノ爲ニ冤ヲススヒデ未退之ノ爲ニ其說ヲ明メズ、李白集、大鵬賦、激三千以崛起、向九萬而迅征、悲清秋賦、不知去掓吳之幾千、

ト太白ハ猶昌黎ニ近シ、木華海賦、已ニ一越三千ノ語アリ、

吃語

○吃語詩　宋蘇子瞻製シタリ、皆牙音ノ字ヲ用ユ、故ニ音ニテ讀メバ、吃人ノ物言フガ如シ、

江干高居堅關扃。　耕犍躬駕角挂經。
孤航繋舸菰茭隔、　笳鼓過軍雞狗驚。
解襟顧景各箕踞、　擊劍高歌幾擧觥。
荊笄供膾愧攪聒、　乾鍋更戞苦瓜羹。

雙聲疊韻

○雙聲疊韻　王玄謨、雙聲疊韻ヲ謝莊ニ問、莊曰、玄護爲雙聲、磝碻爲疊韻、是ヲ五音ニテイヘバ、アイウヱヲ、カキクケコハ、雙聲ニシテ、アカサタナ、イキシチニハ疊韻ナリ、故ニ事文類聚、雙聲ノ詩ハ、蝃蝀在東。又鴛鴦在梁。ニ起ル、疊韻ノ詩ハ、梁武帝、後牖有朽柳、ト云ニ起ル、雙聲ノ聲ハ四聲ノ聲ニアラズ、音トナシテ見ルベシ、雙聲ニハ、溫庭筠、棲息銷心象、鶯影映艷陽、疊韻ニハ、陸龜蒙、瓊英輕明呈、竹石滴瀝碧、又上句雙聲、下句疊韻ノ聯ニハ、李群玉、方穿詰曲崎嶇路、又聽鉤輈格磔聲。

切意

○切意　近來詞人、古歌里謠ノ類ヲ擇シテ、詩ニ作ル、全浙兵制日本風土記ト云書ニ、切意ト云リ、

　果結衣木、氣打而以外和外、索木革賴天、
　こけ衣、きたるいははほさむからて
　氣奴氣奴山尼、和皮和事而客乃、
　きぬきぬ山に、おひをするかも、

衣、呼音、過路木、山呼音陽脉、其切意云、苔蘚巖穿衣沒領、霧横山繋帶無腰。江談抄ニハ、苔衣著タル巖ハ、マヒロケン、キヌキヌ山ノ、帶スルハナゾトシテ、白雲似帶圍山腰。靑苔如衣負巖肩。トアリ、是ハ歌ノ意ヲ顚倒シタリ、高師直、鹽冶判官ノ妻ニ貽ル、返スサヘ、手ヤ觸ケント、思フニゾ、我文ナガラ、打モ置レズ、ト云歌ヲ、徂徠譯シテ、

我思美人貽之書、美人不見棄庭除、吾拾吾書歸十襲、心謂美人手所觸、ト譯シタリ、月ヲ見ントテ薄雲見レバ、空ニ知ラレヌ微雪降ルト云歌、長崎ニハヤリシヲ、或人清人ニ譯ヲ乞フ、清人即吟ジテ曰、欲見端娥望白雲、春月朦朧微雪紛、是等切意ナルベシ、徂徠ノ譯、若韻アラバ、翻詩トイハンモ可ナラン、說苑ニ楚鄂君子晳、越人楫ヲ擁シテ歌ヒシ歌、越ノ語ニシテ解セザリシカバ、楚語ニ擇シテススメシコトアリ、然レバ其例モ亦久シ、

○用和事實　和人ノ和ノ事實ヲ用ユルコト、固ニ宜然、只、點化シ得テ高雅ナラザレバ、終ニ俳諧トナル、八居題詠附錄、新井白石、容奇ノ詩アリ、曰、

曾下瓊鉾初試雪、紛紛五節舞容開、
一痕明月茅渟里、幾片落花滋賀山、
提劍膳臣尋虎跡、捲簾清氏對龍顏、

盆梅剪盡能留客、濟得隆冬無限艱、近刻日本詩史此詩ヲ載セテ曰、白石冬日人ヲ訪フ、主人容奇ノ字ヲ書シテ示ス、白石是雪ナルヲ知ッテ此詩ヲ賦スト、夫書ニ善キ人ハ、大分書テ退屈シタル寸ハ、口ニ食ハヘ、左手ニ握リ、足ニ挿シ、頭ニ結ハヘ、或ハ倒、或ハ横、法則準繩ヲ論ズルニ非ズ、是異體ニ載スル所、皆翰林ノ遊戲ニシテ、文人才ヲ弄スルノ事、詩家法式ノ與カル所ニ非ザレドモ、爾ノ曹黃口ノ爲ニ辨別シテ、指南ニ迷フ事無カラシメント也、

○限字　清詩選、孫治春、上貫雨絲風片、烟波畫船下用溪西鷄齊啼、和歌ニ履冠ト云ノ類ナリ、

雨灑罘罳亂竹溪、絲聲繚繞白垣西、
風綃繡褓難描鳳、片影花欄好祀鷄、
烟去韓童疑雷逝、波留蘇小與雲齊、
畫樓慵作廻文綺、船渡中流聽鳥啼、

此韻ニテハ、和漢ノ人共ニ大分作リタリ、此方ノ作、大方八居題詠ニ載タリ、搏桑名賢詩集ニ、烏山輔寛、淸人周元會、閨怨ノ次韻、一二三四五六七八九十、百千萬、丈尺雙兩半等十八字ヲ用ヒ、其韻ヲ限リ、步驟自在、調中唐ニ踰ズトイヘドモ、大ニ合作ト稱スベシ、

二六峯巒五丈溪、築臺百尺望遼西
十年七病終歸佛、一夢三驚動聽鷄
萬樹秋聲雙杵亂、半庭春草兩眉齊
九重城外八千路、時復回頭再四嗁

起結一韻

○起結一韻、承句佗韻者、王建涼州詞、

三秋陌上早霜飛、羽獵平田淺草齊
錦背蒼鷹始出按、五花驄馬餵未飛

歌括

○歌括　詩括トモ云、是ハ何ニテモ、諳ンジ覺ヘタキト思フ事ヲ、韻語ヲナシテ記スレバ、覺ヘ好キ故ニ、記傳ノ便トスル者也、畢竟詩ノ一體トスルニハ非ザレドモ、爰ニ十數首ヲ標スル者ハ、爾ノ曹記誦シテ、益アルガ爲也、此詩括ハ、東厓、歷代帝王世統譜略ニ載スル者ナリ、歷代國號歌、

夏商周秦西東漢、三國兩晋南北爭
宋齊梁陳魏周齊、隋唐五代宋元明

春秋十二諸侯、合爲七雄歌、

齊魯鄭衞陳蔡曹、燕晋及宋秦楚擾
下及嬴氏七雄爭、秦楚燕齊韓魏趙

春秋魯十二公歌、

隱桓莊閔僖文公、宣成襄昭定哀傳
日東開國知何日、閔公二年辛酉年

兩漢帝號歌、

高惠文景武昭宣、元成哀平孺子篡
光武明章和殤安、順質冲帝桓靈獻

兩晋帝號歌、

中朝武惠及懷愍、江左元明迄成康
穆哀相繼傳帝奕、簡文孝武安恭亡

唐帝號歌、

高祖太宗高中睿、　玄宗肅代德順繼、
憲穆敬文武宣懿、　僖昭昭宣二十世、（昭宣即哀帝）

五季帝號歌、
太祖末帝是爲梁、　莊明閔廢之謂唐、
晉終高出漢高隱、　周起太宗世恭亡、

宋朝帝號歌、
太祖太宗眞仁英、　神哲徽欽都汴京、
南渡高孝傳光寧、　理度恭端終帝昺、

元朝帝號歌、
世祖成宗武仁英、　泰定明文寧順正、
混一中原知幾年、　八十九年共十世、

明朝帝號歌、
太祖建文成祖起、　仁宣景英憲孝武、
世穆神光喜懷宗、　福唐永曆失率土、

明帝年號歌、
洪武永樂洪熙興、　宣德正統景泰盛、
天順成化及弘治、　正德嘉靖傳隆慶、
萬曆泰昌天啓後、　崇禎十七明祚竟、
猶有小朝續如絲、　弘光隆武永曆垂、

右兩漢兩晉唐宋ハ、歴朝提錄ノ載スル所ニシテ、其佗東厓ノ作、猶古作ヲ檃栝シタルモアリ、明祚懷宗ノ崇禎ニ終ルトイヘドモ、猶餘燼ノ消シ盡サザルアリ、是ヲ以テ帝號歌ノ結、年號歌ノ七八ハ、竊ニ之ヲ補フ、下ニ　本邦　帝號歌ヲ出セリ、是ハ昔幼ナカリシ時、勢州ヨリ得タリ、其國ノ僧西譽ト云人作之云、

神武綏靖安寧始、　懿德孝昭孝安嗣、
孝靈孝元開化後、　崇神十代寶祚盛、
垂仁景行及成務、　仲哀神功應神帝、
仁德履中反正崩、　允恭天皇二十世、
安康雄略與淸寧、　顯宗仁賢武烈逮、
繼體安閑宣化帝、　欽明繼世三十代、
敏達用明崇峻皇、　推古舒明皇極尊、
孝德齊明與天智、　天武四十皇統繁、

持統文武及元明　元正聖武傳ニ孝謙ニ
廢帝稱德又光仁　桓武定ム鼎ヲ五十添
平城嵯峨淳和世ノ　仁明文德淸和傳
陽成光孝宇多後　醍醐天皇六十延
朱雀村上冷泉院　圓融華山一條紹
三條後一後朱雀　後冷泉院七十朝
後三白河堀河帝　鳥羽崇德近衞繼
後白河ノ院二條院　六條高倉世八十
安德後鳥土御門　順德後堀四條院
後嵯峨深草龜山ト　後宇續テ世ヲ九十展
伏見後伏後二條　花園後醍光嚴興
光明崇光後光嚴　後圓融ノ院一百承
後小松ノ院稱光院　後花後土後柏原
後奈正親後陽成　後水明正百十孫
後光明ノ院後西院　靈元東山中御門
櫻町桃園又女帝　後桃園讓ル
今上ノ尊
結ニ至ツテハ、實祚移ルヲ以テ、晉改メ

偈頌

補フ、
〇偈　偈蓋モト天竺ノ歌詞、續文章緣起ニ曰、偈、晉ニ釋鳩摩羅什、附沙門法和ニ十偈、世貞云、偈、梵語也、梵語有長短、何以五言、鳩摩羅什、支婁、輩、增損而就漢也、其後禪徒直ニ二詩ヲ取テ頌トス、梵語モト漢語ト別ナレバ、漢ノ韻法字數アルベキ樣ナシ、是漢體ニ倣フ者也、偈翻ス頌、頌與詩混ジ易シ、唯禪意有ルト無キトノ間也、宋ノ祖元、虛堂ニ詣リシニ、虛堂送ル僧ニ、相送當門有修竹、爲君葉葉起ス淸風ヲノ偈ヲ擧テ示セシニ、祖元、此頌只是閑語、無些子ノ巴鼻ト云シモ、頌意無キヲ貶セルナルベシ、元亨釋書ニ見エタリ、享保中、駿淸見寺ノ僧陽春、江湖集略註ニ序シテ、偈頌ノコトヲ說クコト頗詳ナリ、其說ニ曰、有客曰、瑠璃燈ノ頌、舊解以爲有ト底意、若爲ニハ單ニ賦スト燈火ヲ、是詩而非頌也、予曰、卿之所謂底意者、詩之所謂比也、夫比者、詩之一體

詩餘

此集往往有焉、卿言失矣、夫偈者梵語、其云偈多、此云頌、頌是風雅頌之一、而亦是詩之一體也、詩序曰、美盛德之形容、以成功告神明者也、孔氏曰、頌之言容、歌成功之形狀也、若夫衲子雅頌皆是美道德之形容、讚佛祖之成功也、或有貶剝道德、抑逼佛祖、是美道德、讚佛祖也、或有唯詠風物、唯述情志、語意脫灑、亦異乎彼俗子情識憎愛之作也、若墮俗情者、不是衲子詞、故凡衲子歌詠、謂之頌、全是詩也、今世江湖把頌詩作兩橛者不少、强作句面句底解者、亦由之、是ニテヨク聞ヘタリ、故ニ禪衲ノ偈頌ハ、見性ノ場ヨリ語ヲ下ス者故ニ、其體裁ハ則詩ニシテ、而其意則諸家偏ニ佛乘ヲ讚スル者ト同カラズ、

詞之來由

○詞　詞ト云、曲ト云、唐以前ニモアレドモ、宋ノ詞、元ノ曲トイフ詞曲ハ、宋元ニ興ル者ニシテ、唐マデハ無キ事也、詞、詩餘トモ云、小詞、長短句、塡詞ナドトモ云、字數句數、五七律絕ナド云樣ニ定マレルニ非ズトイヘドモ、其調其調ノ字數句數平側急度定マレル者也、其故ハ、詩ハ歌フベケレドモ、文士ノ吟詠スル所ニシテ、樂章ニモアラズ、詞ハ專樂章ニテ、其調アレバ、其字句聲調ヲ分ツ故ニ、其調ゴトニ、其法ヲ異ニセリ、故ニ兒輩見テ詩集中ニ載セタル詞歌曲ノ想ヲ爲スベカラズ、明何良俊草堂詩餘ニ、其由テ來ル所ヲ詳ニス、其大意ニ曰、樂音人心ヨリ生ズル者ニシテ、里巷歌謠ノ辭、自然ニ節奏ニ當ル、三百篇ヨリ、漢ノ郊祀、房中ノ外、鐃歌等、皆樂ノ歌也、蘇李創メテ五言ノ詩體ヲ造リ出ストイヘドモ、樂官ニ領セザル故、樂ト詩ト分レタリ、魏晉以來、曹子建ノ怨歌行七解、晉曲トス、佗横吹、相和、平調、淸調、淸商、楚調、諸曲、六調竝ビ用ユ、故ニ陳隋ノ作者、猶樂府ノ歌

詞之篇目

辭ニ擬シテ、屬詠工ナリトイヘドモ、聲律乖ク、唐ニ至ッテ、太宗玄宗音ヲ審ニシ給ヒテ、歌曲起ル、李太白ノ清平調、王維ノ鬱輪袍、及王昌齡、王之渙ノ諸人、略小詞ヲ占シ、伎人爭ヒ傳ヘタリ、天寶ノ末ヨリ、此事モ亦荒ミヌ、李太白ノ作レル、憶秦娥、菩薩蠻ニ詞ニヨリ、創メテ此製ヲナセリ、聲調十二律ヲ比シ、篇目ヲナシ、二百餘調ニ至ル、此故ニ、詩ハ盡歌フト云者ニモアラズ、詩餘ハ、專歌フ爲ニ設ケタル者故、聲律ノ調第一也ト、夫篇目トハ、醉春風、蝶戀花、明月斜、ナド云樣ノ者、各其篇目ノ出處ハ、據有ル事ナレドモ、是ハ調ノ事ニシテ、詩作ルニ、題ニ依ル樣ノ事トハ別也、サテ此詞モ衰ヘテ、金元ニハ歌曲トナレリ、サレドモ今ニ至テ彼方ニハ、世間之ヲ用テ詠歌スル也、故曰、詩亡テ而後有樂府、樂府闕テ而後有詩餘、詩餘廢シテ而後有歌曲ト云云、篇目ニ據有ト云ハ、蝶戀花ト云ハ、梁簡文帝、翻階蛺蝶戀花情ト云ヲ截取シ、醉春風トハ、太白、絲管醉春風ト云ヲ截取シ、明月斜トハ、呂洞賓、

明月斜、秋風冷、今夜故人來不來、教人立盡梧桐影、

ト云ヲ取ル也、故ニ之ヲ玉樹後庭花ト云モ、陳后主ノ曲ニモ非ズ、之ヲ霓裳羽衣ト云モ、明皇ノ度スル所ニモ非ズ、固ヨリ題ニ非ザレバ、其事ヲ詞ニ述ルニモアラズ、

詞之所用

又塡詞名解ヲ按ズルニ、塡詞雖屬小道、然宋世、明堂封禪、虞主祔廟之文、皆用之、比于周漢雅頌樂府、亦各一代之制也、トアレバ、關係モ亦小ナルニ非ズ、同書曰、王阮亭曰、唐無詞、所歌皆詩也、宋無曲、所歌皆詞也ト、詩詞ノ辨知ルベシ、塡詞ト云コトハ、同書ニ、宋政和中、中貴使越州ニ往キ、古碑陰ニ於テ詞ヲ得テ、無名無譜、錄シテ進メシカバ、

名義	詩餘三調	詞譜

上命シテ塡腔、因詞中句、賜名魚遊春水ト
アリ、腔ハ譜ノ圖星也、圖星ヲ定メテ、ソレ
ニ字ヲ塡ルノ意ト見エタリ、已ニ之ヲ魚
遊春水トイヘバ、其譜成テ其調立ツ也、古
今詞論、詩餘謂之塡詞、則調有定格、字有定
數、韻有定聲、至句之長短、雖可損益、然亦不
當率意爲之ト、是ニテ聞ユル也、其體大槩
小令、中調、長調ノ三等也、小令ハ猶絕句、中調ハ
猶律、長調ハ猶長篇、其詞ヲ譬ヘテイハバ、詩
ヲ謠ノ辭トスレバ、詞ハ組ノ辭ト云ガ如
シ、詩ニ似テ似ヌ境アリ、一二ヲ擧テ其意
ヲ得ン事ヲ要ズ、繡牀斜凭嬌無那、爛嚼紅
絨笑向壇、獨抱濃愁無好夢、夜闌猶剪燈花
弄ト云ガ如シ、左右和人ノ手ニハ合カヌ
ル者ト思ハルル也、塡詞圖譜ニ由テ、小令
數首ヲ出ス、蒼梧謠、四句、二韻、十六字也、其
譜、

○ 一字 ◓ ● ○ ○ ● ● ○ 七字平起 ○ ◒ ● 三字 ◒ ● ● ○ ○ 五字叶

眠。月影穿窗白玉錢、　無人弄、移
過枕函邊。

荷葉杯、六句、二十三字、四側二平韻也、其譜、

◓ ● ◓ ○ ○ ● 六字側起 ○ ● 二字叶 ● ○ ○ 字

楚女欲歸南浦、換平　朝雨、　濕愁紅。

● ○ ◒ ● ● ○ ● 七字換側 ○ ● 二字叶 ● ○ ○ 三字叶前平

小船搖漾入花裏、　波起、　隔西風。

是溫庭筠ノ作トアリ、溫ハ唐人也、其時詞
ナシ、唐人ノ作ヲ取テ、詞ニ度シタルナリ、
庭筠ノ作ハ、六言、五言、七言、五言ノ四句ノ
詩ナリシナルベシ、李白淸平調ノ詞ナド、
詞中ニアルモ同樣ナリ、雜言ノ內整齊タ
ル者、江南春、六句、三韻、三十字、譜傍ニ附ス、
冠準、

波渺渺、句　柳依依。平起句　孤村芳草遠、句　斜

日杏花飛（叶句）江南春盡離腸斷（句）蘋滿汀洲人未歸（叶句）

周美成浣溪沙、愈整齊タリ、

小院閑窗春色深、重簾未捲影沈沈、倚樓無語理瑤琴、○遠岫出雲催薄暮、細風吹雨弄輕陰、梨花欲謝恐難禁、

景同叔玉樓春、

綠楊芳草長亭路、年少拋人容易去、樓頭殘夢五更鐘、花底離愁三月雨、○無情不以多情苦、一寸還成千萬絲、天涯地角有窮時、只有相思無盡處、

檃括

檃栝トハ、箭ヲ矯ル器ナリ、故ニ古作ヲ直シテ用ユルヲ檃栝ト云、詞ニ檃栝ノ一法アリ、草堂詞餘、東坡赤壁賦ヲ檃栝シテ詞調ニ入レタルアリ、朱希眞秋霽、

壬戌之秋、是蘇子與客、泛舟赤壁、擧酒屬客、月明風細、水光與天相接、扣舷唱月、桂棹蘭槳堪遊逸、又有客吹洞簫、和聲鳴咽、

○追想孟德困周郎、到今空有當時蹤跡、算只清風明月、取之無禁用不竭、客喜洗盞還再酌、既已同醉、枕藉舟中、始知東方昇然白、

聯句

○聯句　又聯詩トモ云、寄合作リノ詩也、世書ノ元首股肱ヲ始トス、喬彥駿之ヲ非トシテ曰、元首股肱ハ賡和ノ始ナリ、續文章緣起、泊宅編ヲ引テ、式微ノ篇ヲ始トス、是ハ劉向列女傳ニ、黎莊公夫人、莊公ノ意ヲ得ズ、其傅母夫婦之道、有義則合、無義則去、意ヲ得ズンバ胡不去トテ、詩作ッテ、式微式微胡不歸ト云ケルヲ、夫人聞テ、夫人之道、一而已矣、何ゾ婦道ヲ離レンヤトテ、微君之故、胡爲乎中路、ト屬ケル、我ハ是ヲトルト、此說據ルベシ、是ヲ降ッテハ、漢武柏梁體アリ、樂府古題要解コレヲ始トス、明、雋李蔣之翹、韓文ノ注ニモ、柏梁ノ下、顧

愷之、桓玄、殷仲堪、陶淵明、皆此作アリト云リ、古詩源ニ、梁帝、光華殿ニテ聯句シ給ヒシニ、曹景宗魏ヲ伐ツテヨリ返ル、時韻已ニ盡テ只競病ノ二字ヲ餘ス、景宗賦セント請フ、坐ノ人景宗ノ武人ニシテ、韻險ナルヲ怪ム、景宗韻ヲ得テ、去時兒女悲、歸來笳鼓競、借問行路人、如何霍去病、ト賦シテ、人ヲ驚カセシヲ引リ、詩人玉屑、引雪浪齋日記曰退之聯句、古無此法、自退之斬新開闢、余觀謝宣城、陶靖節、杜工部集、皆有聯句、言自退之斬新開闢則非也、其寄合作リノ詩、古詩ハ姑置ク、李白改九子山爲九華山聯句、

五律聯句

妙有分二氣、靈山開九華、李白 層標遏遲日、半壁明朝霞、高霽 積雪曜陰壑、飛流歙陽崖、韋權輿 青熒玉樹色、縹緲羽人家、李白

排律聯句

是五律也、「宋之問、靈隱寺ニ至ツテ、鷲嶺鬱岧嶢、龍宮鎖寂寥、ノ句ヲ得テ、屢吟甚苦メリ、時ニ一老僧アリ、曰、少年何ゾ樓觀滄海日、門對浙江潮、ト言ザルト、因テ之問其篇ヲ終ルコトヲ得タリ、其僧駱賓王ニテ有シト云說モアリ、是排律ノ聯句也、「又高麗ノ使、唐ヘ至ルトテ、海ヲ過ルニ、沙鳥浮還沒、山雲斷復連、ト云句ヲ得テ、打案シケル時ニ、賈島詐ツテ梢人トナリテ有ケルカ、棹穿波底月、船厭水干天、ト作リシカバ、高麗ノ使復詩ヲ言ザリシト也、是ハ五絶ノ聯句也、

五絶聯句

「宋ノ時王仲至、少游ト、恭敏李公ニ謁シテ、燕閑堂ニ飯ス、卽席聯句、

七律聯句

黃葉山頭初帶雪、綠波撙酒暫回春、欽臣
已聞壁月瓊枝句、更見朝雲暮雨人、觀
老愧紅妝翻曲妙、喜逢佳客枚懷新、欽臣
天明又出桃源去、仙境何時再問津、

觀

七絶聯句　**異代聯句**

是七律ノ聯句也、又後ニ出セル、唐宣宗、終歸大海作波濤ノ作ハ、七絶ノ聯句也、異代相足ス者ハ、唐文宗、人皆苦炎熱、我愛夏日長ト云ニ、薫風自南來、殿閣生微涼ト、柳公權聯子シヲ、宋ニ至ッテ東坡、美ル所有ッテ、箴ムル所ナシトテ、一爲君所移、苦樂永相忘、願言均此施、清陰分四方、是也、又最奇ナル者ハ、唐人一字ヨリ九字ニ至ル聯句、

倍字聯句

東（鮑防）西、步月、尋溪（嚴維）鳥已宿、猿又啼（鄭槩）狂流礙石、迸笋穿階（成用）望望人烟遠、行行蘿徑迷、探題只應盡墨、持贈更欲封泥（允初）松下流時何歲月、雲中幽處屢攀躋（張叔世）乘興不知山路遠近、緣情莫問日過高低（賈弇）靜聽石下潺潺足湍瀨、厭聞城中喧喧多鼓鼙（周頌）

一聯分屬

宋、晏元獻、維揚大明寺ニ過リ、落花ヲ見テ、無可奈何花落去、ト有ケルヲ、王琪、似曾相識燕歸來ト屬ケルニヨリ、公其才ヲ愛シ、終ニコレヲ上ニ薦メラレシ由、是一聯中、分ッテ相屬スル者、此邦ニテモ、弱柳不勝鶯ト云題出ケルヲ、匡衡朝臣、春眠定鴛衾重、トシテ、下ヲ以言ニ讓リケレバ、以言、老將腰疲鳳劍垂ト相屬テ各一篇ヲ終タリ、聯句ハ、意氣相投、筆力相等者、然後能爲之ト、古人モイヘリ、隨分然アルベキ事也、畢竟一座ノ興ニシテ定マレル事ニモアラズ、

昌黎聯句

韓退之ノ創メシ者ハ、自一體ニシテ、雪浪齋斬新開闢トスル者、其故アリ、蓋退之創ムルノ聯句ハ、詩ト隔アリ、故ニ以上ノ者、聯詩ト云ベクシテ、昌黎ノ製スル所ハ、體裁古ニアラズ、聯詩ノ舊面目ニアラズ、是ヲ以テ韓文自聯句ノ部ヲ分ツ、本集載スル所十二首、短キ者ハ二韻、長キモノハ百五十三韻、韻、平ヲ押スルモ、側ヲ押スルモ、隨意ト見エタリ、但換ユル事ハ無シ、

中ハ近體ノ如ク對ヲトリテ、平側ノ吟味ハ見エズ、我言ヒ懸ケタルヲ、人ニ讓ル者故、一意ニ貫キ難シ、是ヲ以テ賦ノ如ク敷衍スル樣ニナルハ、勢ノ然ル所ナルベシ、其相屬グ樣モ一樣ナラズ、詩法入門ニ、有人各一句、集以成篇、有人各二句者、有人各四句者、有人各一聯者、有先出一句、次者對之、就出一句、前者對之者、ト、其人各一句ト云者ハ、柏梁ノ體ニシテ、韓文ニハ無シ、其人各二句ト云ト、人各一聯ト云ハ、一事ナルベシ、是亦韓文中莎柵聯句、纔ニ二韻四句ナル者一首ノミ、人各四句者ハ、晩秋郾城夜會聯句是也、先出一句、云云ナル者ハ、開卷ノ城南聯句、乃百五十三韻、最大篇ナル者也、其佗會合聯句ハ、二句宛ヲ更シテ、末四句宛ヲ更スル間ニ、八句ヲ一ツ雜ヘタリ、鬪鷄聯句ハ、初ハ二句宛ヲ更シテ末ハ四句宛、中ニ六句一ツアリ、納涼聯句、二句、

二句、二句、十八句、二十二句、十六句、二十二句ト續キタリ、秋雨聯句ハ、二句ヲ更シテ、八句、八句、十句、四句、四句ト續キタリ、征蜀聯句ハ四句ヲ更シテ六句、六句、十句、十句、十句、十句、十二句ト續キタリ、雨中寄孟刑部者ハ、二句ヲ更シテ、十、十、十、十二、十二ト續ケリ、遠遊聯句ハ、二句ヲ更シテ、十、十、八、八、十六、十八ト作レリ、會合聯句ハ、韓愈、孟郊、張籍、張徹ニシテ、其次ハ、籍、愈、郊、徹、籍、愈、郊、徹、愈、籍、愈、郊、愈、籍、愈、郊、愈、郊、愈、郊、愈、籍、郊、愈、郊、愈ナリ、遠遊聯句ハ、郊、愈、二人ノ聯句ノ中ニ、只李翺二句、中ニ入レタリ、然レバ大抵、初ハ整齊、末ハ隨意、人ノ列次モ亦然リ、只數句ヲ一人續ケテ詠ズル者、易シト思ハル、其城南聯句ノ如ク、竹影金瑣碎、孟郊 泉音玉淙淙、琉璃剪木葉、韓愈 翡翠開園英、流滑隨側步、孟郊 搜尋得深行、遙岑出寸碧、ト韓愈對ヲシ懸ケテ、孟郊又其對ヲ屬ギ、

又次ノ聯ノ上句ヲシ懸ケテ愈ニ讓ル、是聯句中ノ難キ者也、此體蓋韓愈ニ始マル、元詩體要ニ就テ考ルニ、先始ノ人五句作リ、次ノ人四句宛相讓ル、然ル寸ハ、イツニテモ人ノ仕懸タル對ヲ、己屬テ人ニ渡ス、然シテ終ノ人又奇句ヲ出シテ篇ヲ終フ、聯句ハ才ヲ角スル者ナレバ、然モアルベシ、

本邦聯句

本邦ニテハ、大津皇子、

天紙風筆畫雲鶴、　山機霜杼織葉錦、

後人コレニ續デ、

赤雀含書時不至、　潛龍勿用未安寢、

トアリシヲ、始トスベシ、而シテ今言フ聯句ハ、和製ニシテ、漢法ニアラズ、連歌ヨリ出タルニヤ、韻法限アリ、多ク隔句對ニテ

近製聯句

起ス、隔句對ナラザルヲ、獨句ト云、平側詩ノ通リ、先唱フ者ヲ唱句ト云、繼者ヲ對句ト云、其法頗詩ト異リ、皆此方ノ造爲也、故ニ鳳城聯句ノ序ニモ、本朝之準式、有異于殊域也ト書ケリ、韓退之聯句ノ中ニハ、寄孟刑部聯句ノ中間、欲知相從盡、靈珀拾纖芥、欲知相益多、神樂鎖宿懲、德符仙山岸、永立難欹壞、氣涵秋天河、有朗無驚湃、ト云隔句對アレドモ、法ニハ非ズ、然レバ和ノ聯句ハ、別段ノコト也、鳳城聯句トハ、慶長ノ比、

上皇甚聯句ヲ好マセ給ヒ、侍臣僧徒ヲ集メ、綴リ給ヒシ聯句集也、依テ本邦聯句ノ事ヲ案ズルニ、我連歌ニヨリテ、彼方聯句ト相雜ヘテ立テタルナルベシ、

連歌

本邦ノ連歌、古ヨリアル樣ナレドモ、畢竟其昔ハ、唯寄合讀ノ歌ニシテ、天治中ニ撰ミ給ヒシ金葉集ヨリ、連歌ト云名ハ出來リ、ソレヲ昌黎ノ聯句體ニ倣ヒ、五十モ百モ鎖ル事ハ、八雲御抄ニ近代ノ事トアリ、ソレヨリ又詩歌ヲ竝ベテ鎖リ合セ、和先漢後ナレバ、和漢聯句トイヒ、漢先和後ナレバ、

和漢漢和

漢和聯句ト云、忍ブ夜ハ、雨モ中中、便ニテ、沙濕履無聲ナド云類ナリ、誠ニ人巧ハ變果シナキ者ナリ、サレドモ、是モ其淵源ヲ尋レバ、淸少納言ニ、內ヨリ頭中將ヲシテ、白樂天、蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草菴中、ト云聯ヲ、上ノ句バカリ書セ給ヒ、末ハ如何ニ如何ニト急ガセ給ヒケレバ、有ノ儘ニ下ノ句書テ出サンモ、無下ニ心劣リセントト思ヒ、草ノ菴ヲ誰カ尋ネント、書テ奉リシゾ、其濫觴ナルベカラン

詩轍卷之三

詩轍卷之四

豐後　處士　國東郡　三浦晋安貞　著
友人　日出藩　喬維嶽　彥駿　閱

篇法

詩者、心之畫也、ニテ、憂樂苦歡ニ任セテ、詠ジ出セル者也、サレドモ、古人ノ作例ニ據ラザレバ、成ル事能ハズ、其例乃格也、古人ノ詩ヲ賦スルモ、最初格ヲ立テテ、ソレニ合セテ、詩ヲ作リ始メタルニハ非ズ、然レドモ拔群ノ才人共、精神ヲ凝ラシテ作リタルヲ、後ヨリ觀レバ、トカク然サナクテハ善カラヌ程ニ、其後ノ人ノ爲ニハ、是ヲ作例トスル也、故ニ詩ニモ文ニモ、其篇法字法ヲ摸ニシテ、ソレニ合セテ作レトニハ非ズ、作リ得ルニ隨ヒ、宜カランニハ、我ヨリ古ヲ作サンモ、何カ苦カルベキ、其宜キノ得難キニ由テ、之ヲ古人ニ稽フル也、一

過脈

篇ノ體ハ、古人常山ノ蛇勢ニ譬ヘタリ、蛇ト云者ハ、頭ヲ抑ユレバ、尾護シ、尾ヲ抑ユレバ、頭救ヒ、中ヲ抑ユレバ、首尾來リ救フ、又脈ニモ譬ヘタリ、脈ハ幹ニテ、其極ヲ絡ト云、一身ノ骨ハ別別ナレドモ、脈絡骨肉ヲ能維シ、是ヨリ生氣ヲ運ラス故、毛髮ノ末迄モ、生生ノ氣注ガザル所ナシ、是ヲ脈絡貫通ト云、詩モ一篇ノ全體、生生ノ氣往キ渡リ、ココヲ撃チカシコニ應ズル樣ナラザレバ、偏枯痿躄ノ人ヲ見ル樣也、故ニ過脈照應ナド云事アリ、前後左右ヲ照シテ見ルニ、應ゼザル所アレバ、活セザル所アリ、於是推敲ヲ下シ、活潑ニ至ル、俗ニ緣ノ有無ヲイフ、蓋此境ナリ、此故ニ、一句一句ハ、骨ノ別別ナルガ如シ、脈其別別ノ上ヲ過テ、氣血ヲ注ゲバ、肩臂ヲ使フベク、臂指ヲ使フベシ、是ヲ過脈トモ、過接トモ云、是ヲ以テ句句聯聯、承ル事モ、轉ズル事モ、

造句　鋪叙　過接

其品ハ樣樣替レドモ、只脈ヲ過スニアリ、乃全篇ノ句續キ也、能合點シテ作レバ、過脈照應ハ、自然ト具ハルモノナリ、具ハラザルガユヘニ、過脈照應ニ言アリ、言有テ而後全篇ノ脈絡貫通シ、自常山ノ蛇勢ヲ具フ、是ヲ以テ活潑流動ノ中、正ヲ出シ奇ヲ出スノ故、轍ヲ畜ハヘ、詩家ノ用ニ具フベシ、句造リヲ造句ト云、鋪叙トハ間配ナリ、轉折トハ轉ジテウツリ目ナリ、過接ハ移リナリ、カヽル色色ノ法ヲ立テテ、局促ノ具トナセトニハ非ズ、畢竟點檢ノ具ト意得ベシ、蓋體製ト篇法トノ異、體製トハ、古詩ノ外、律體ノ詩ヲ製シタル也、篇法トハ、則詩ノ作リ方也、故ニ其異ナキニ非ズトイヘドモ、體製モ亦格也、法也、篇ニ於ルモ亦格也、法也、體製已ニ立テ、大抵、篇法アリ、韻法アリ、句法アリ、字法アリ、篇法ハ、一首全篇ノ法ナリ起承轉合ハ、モト絕句ノ法

トイヘドモ古詩近體ニヨラズ、此意得ハ皆無テ協ハザル事也、先一篇ノ法、虛實ト云コトアリ、虛トハ情也、實トハ景也、何レノ句トモニ、虛實ノ外ニハ出ザレドモ、律ハ中二聯、絕句ハ轉句、ココニ意ヲ用ル也、周弼三體詩法、絕句、實接虛接、其說ニ、絕句之法、大抵以第三句爲主、以實字寓意接、則轉換有力、虛接、以虛語接前二句也、亦有語雖實而意虛者、於承接之間、略加轉換、反與正相依、順與逆相應、繹而尋之、有餘味、トアリ、然レバ實ヲ正順トシ、虛ヲ反逆トス、實トハ、朝元閣上西風急、ノ類、虛トハ、復恐匆匆說不盡、ノ類、那知今夜長生殿、ノ如キハ、所謂意虛也、律ノ四實トハ、頷聯頸聯共ニ景、四虛トハ、頷頸共ニ情、前實後虛、前虛後實、其變也、四實曰、開元大曆多此體、四虛其反也、不以虛爲虛、以實爲虛、トアリ、又七律ナドハ、句ノブル者故、景物ノ中ニ於テ、情思通貫ヲ要トス、律ハ句法對法ニ拘ハラレ、情離レ離レニナリ易キ程ニ、首尾貫通他體ヨリ難シ、又其雜ル者ハ、前虛後實ヲ正トス、其故ハ、前虛シテ後實スレバ、後重クシテ詩ニ力アリ、太中以後多此體、至今宗唐詩者尙之、トアリ、太中ハ、宣宗ノ年號ニシテ、晚唐也、後虛スル者、弱ニ流レ易シ、故ニ唐人此體最少、必得妙句不可易、乃就其格、トアリ、サテ四實ノコト、疊景トモ云、李夢陽ノ說ニ、凡疊景ニハ、半濶大ナレバ、半細小、コレ律詩ノ三昧、杜詔從三殿去、碑到百蠻開、ト大ニ言ヘバ、野館濃花發、春帆細雨來、ト細ニ、浮雲連海岱、平野入青徐、ト寓目ノ大景ヲ述レバ、孤嶂秦碑在、荒城魯殿餘、ト感懷ノ小景ヲ述トアリ、又情景雜ヘ用ユル者アリ、詩法入門ニ、景中寓情者、水流心不競、雲在意俱遲、情中寓景者、捲簾唯白水、隱几又靑山、情景相觸而不分者、感時花

灑涙恨別鳥驚心、一句景、一句情者、白首多年病、秋天昨夜涼、此用心モ亦知ラズンバアルベカラズ、而シテ中二聯、一聯ハ景ヲイヒ、一聯ハ情ヲイフハ、通例ナリ、景ヲ以テ一二ヲ起シ、情ヲ以テ七八ヲ結ブ者、初唐ニ多ク、三四ヲ以テ一串トナス者、晩唐ニ多シト、胡元瑞イヘリ、多シトハ、初盛ニハ少シト云ニテ、無シト云ニハ非ズ、三四一串トハ、太白、口號贈盧徵君鴻、

陶令辭彭澤、　梁鴻入會稽、
我尋高士傳、　君與古人齊、
雲臥留丹壑、　天書降紫泥、
不知楊伯起、　早晚向關西、

此類也、子美、淵道除寒經氷雪、石門斜日到林丘、モ一串也、同人、和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅見寄、

東閣官梅動詩興、　還如何遜在楊州、
此時對雪遙相憶、　送客逢春可自由、
幸不折來傷歲暮、　若為看去亂鄉愁、
江邊一樹垂垂發、　朝夕催人自白頭、

是等ハ、二聯共ニ各一串也、後ニ出セル蜂腰格ナドモ、三四一串ナルベシ、サテ右虛實ノ諸說ハ、皆情景二ツト見ユ、故ニ用事ハ情ニ屬シタリ、明朝ニハ、用事ヲ其外ニ立ツ、胡元瑞、詩ハ摸景ト述情ト、其外ハ用事也、用事ハ、詩ノ正體ニ非ザレドモ、景物限アル者ナレバ、是ニテ筆力ヲ助クルトイヘリ、唐人ハ景情ヲ主トシテ、用事情中ニアリ、明人ハ專用事ヲ主トスル故、淸景還テ故事ノ內ニアリ、景ヲイヘバ、行車麥秀隨春雨、臥閣花深對夕陽、情ヲイヘバ、纔逢狗監先老、能到龍門客自深、如シ、尤唐人此境ナシトイフニハ非ズ、專ココニ從事スルト、是ヲ以テ筆力ヲ助クルトノ別、乃唐明ノ異ナリ、用事、唐人多ク五言排律ニ用ヒタリ、五言排律ハ長篇ナル故、情景

バカリニテ布置セバシ、是ヲ以テ故事竝ニ經史子集ナドノ文字ヲ、括出シ來ツテ幅ヲトレリ、故ニ排律ハ、同唐人ナガラ、別手ニ出ルガ如ク見ユルハ、事實勝テル故ナリ、詩モ作リ習フ比ハ、何ノ辨ヘモナキ故、先一二ヨリ作ル程ニ、結ブ比ハ力ナクナリテシマフ也、ソレヨリチト合點ユクト、絶句ハ三四、律ハ對ヨリ設クル故、チト見處アレドモ、得ト見ル時ハ、絶句ハ一二、律ハ起結ニ、精神ナク、續ギ際見ユル者也、李白杜甫ナドノ詩ヲ見レバ、トカク首ヨリ先ニ作リテユキタル者ト見ユル也、首ヨリ作ル迚モ、先布敍ト云者ハ、無クテ叶ハヌ也、其布敍トハ、大ダタヒヲ立テ、韻字配リ、一篇摸樣ノ設ケナリ、サナケレバ、一句一句ニ、行當リ行當リ作ル樣ニナルナリ、然アリテハ佳篇ハ得ラレズ、律ハ、中二聯對ヲモツヲ通例トス、コレヲ變ゼシ古人ノ手段、後世ヨリ名ヲ設ケテ、又後ノ格トセリ、

偸春

○偸春格　是ハ、領聯ノ對ヲ拔テ、起聯ニ置キ、起聯ノ散ヲ、三四ニヤリタル也、此格ノ事、古人體トモイヘリ、又體明辨曰、起聯相對、而次聯不對者、謂之偸春體、言如梅花偸春色而先開也、トアリ、側入、王勃、城闕輔三秦、是也、平入、杜子美、寒食對月、

無家對寒食、有淚如金波、
斫卻月中桂、淸光應更多、
仳離放紅蘂、想像嚬靑蛾、
牛女漫愁思、秋期猶渡河、

偸春反格

頸聯ヲ對セザル者ヲ反格トス、郎士元、送錢拾遺歸兼寄劉校書、

墟落歲陰暮、桑楡烟景昏、
蟬聲靜空館、雨色隔秋原、
歸客不可望、悠然林外邨、
終當報芸閣、携手醉柴門、

蜂腰

對無キヲ散行ト云、只散ズトモ云、故ニ此反正、三四散行、五六散行トモ云、下ノ一意ノ體ノ如キ、說詩晬語ニハ、通體但散ストイヘリ、

○蜂腰格　頸聯バカリニ、對ヲモタセタル者也、文體明辨曰、凡頷聯不對、卻以十字敘一事、而意與首二句相貫、至頸聯方對者、謂之蜂腰體、言已斷而復續也、七律ニテハ、崔顥黃鶴樓、李白鸚鵡洲等ノ詩、此格ニ入ルベシ、總ジテ偸春蜂腰ノ類、五律ニ專用ル事ニシテ、七律ニハ餘リ用ヒズ、故ニ專五律ヲ擧グ、王維、送岐州源長史歸、側入、

握手一相送、心悲安可論、
秋風正蕭索、客散孟嘗門
故驛通槐里、長亭下槿原、
征西舊旌節、從此向河源、

李白、觀胡人吹笛、平入、

胡人吹玉笛、一半是秦聲、
十月吳山曉、梅花落敬亭、
愁聞出塞曲、淚滿逐臣纓、
卻望長安道、空懷戀主情、

蜂腰反格

太白ノ五律、此體ヲ用ユル者儘多シ、李白春風三十度、空憶武昌城、孟浩然、落日晴川裏、誰言獨羨魚、排律ニ此法多用ヒタリ、對ヲ頷聯ノミニ用ユル者、爲反格、陸龜蒙、茶人、

天賦知靈草、自然鍾野姿、
閑來北山下、似與東風期、
雨後探芳去、雲間幽路危、
唯應報春鳥、得共斯人知、

對法數品　對結

四聯皆對、或ハ上三聯對ヲ持チ、或下三聯對ヲモツノ類、例擧ルニ暇アラズ、對起ハ多シ、例ヲ略ス、對結ハ則杜甫、萬里黃山北、園陵白露中、請看石上藤蘿月、已映洲前蘆荻花其例ナリ、絕句ニハ最多シ、對起兩ナガラ韻押スルモ、起句ヲ落韻ニスルモ、勝

手次第也、絶句、對起ヲ前對ト云、對結ヲ後對ト云、律、頷聯ヲ前對、頸聯ヲ後對ト云者ト、名同ウシテ、實異リ、三體詩法ニ、後對ノ事ヲ、此體唐人用之亦少、必使末句雖對而詞足意盡、若末嘗對、不然則如半截長律、皚皚齊整、無結合、コノ論未盡、絶句、後對順下シテ結ブ事、是ハ周弼ノイフ所ノ如シ、只初盛ノ人ノ如キ、此體甚多シ、滄溟選ニ就テモ考フベシ、且一二ノ中ニ、結ブ意持ニテ、シマリヲ入レ、三四ヲ散ラシテ、バツト對シタル者モ、亦盛唐ノ人ニハ多シ、王勃、蜀中九日、杜審言、渡湘江、ナドノ類、周弼イフ所ノ如キ者也、李白、上皇西巡歌、誰道君王行路難乎、今六龍西幸シテ見レバ、萬人歡ブガ故ニ、地轉錦江成渭水、天廻玉壘作長安、岑參、封大夫凱歌、日落角鳴リ、千群皆降ル、故ニ、烽燧才斗ノ邊警モ無ク、洗兵魚海雲迎陣、秣馬龍堆月照營、軍了ツテサツト降ル雨ヲ、洗兵雨ト云也、是等ノ體、擧テ數ヘ難シ、前後共ニ對ナキ者、汎汎タレバ、其例擧ルニ暇アラズ、

一意

○一意　周弼、三體詩ヲ選ンデ、一意ノ門ヲ立テタリ、其說曰、唯守格律、揣摩聲病、詩家之常、若時出法度外、縱橫放肆、外如不整、中實應節、ト云云、然レバ蜂腰格ハ、兩對聯ノ內、一對聯ヲ去テ、散聯トナス、一意始終對ヲ用ヒズシテ、聲律ノミヲ用ヒテ、散詩トナス者、近カランカ、サレドモ其選中ニ擧ル者、唯後ニ出ス一首愜フベシ、夫聲律守ラズ、對偶ナキ者ハ、調古ナラズトイヘドモ、古詩ノ流ナリ、對偶ナシトイヘドモ、聲律已ニ諧フ、蜂腰ノ兩度變ズル者ニシテ、猶律ノ一體ニ具フベシ、然レドモ、作者稀也、僧皎然、尋陸羽不遇、

移家雖帶郭、　野徑入桑麻、
近種籬邊菊、　秋來未著花、

扣門無犬吠、欲去問西家、
報道山中出、歸來每日斜

陸子モ今ハ家ヲ移サレ、少シ郭モ近ク成リツレドモ、住ム人カラニ、桑ヤ麻ナド生ヒ茂レル間ニ、徑ヲ通ジテ、城市ニ近キ風情モ見エズ、近キ比ノ住居ナレバ、漸クコノ比ニコソ栽ツラント見エテ、痒ケタル菊ノ未開カザルガ、籬邊ニアリ、扉ノ閉タルハ、サゾ人ヲ厭ヒテヤ、儻クハ内ニヤ在ル覽ト、門ヲ扣キタレド、犬サヘ咎メズ、サテ有ルベキニアラネバ、徒ニ歸ルベキモ本意ナク、去シ方歸コン程モ問マホシク、其西ナル家ニ立ヨリテ問ヘバ、イヤ彼山人ハ何方ヘ往ルルニヤ、コナタヲ出デテ歸來ル比ハ、イツ迚モ、日ノ暮方ノ事也、今暫ハ待給ヒテンニヤナド、會釋シタルヲ、ツト言下シタル故、一意トモ云ナルベシ、今按ズルニ、此體必晩唐ニ始マルニアラズ、孟浩然訪天台作、李白夜泊牛渚懷古、ナド、盛唐ノ諸家、已ニ其作アリ、ココニ孟浩然ノ詩ヲ擧グ、

掛席東南望、青山水國遙
舳艫爭利渉、來往任風潮
問我今何適、天台訪石橋
坐看霞色晩、疑是赤城標

此前聯ヲ、蹉對ト云シ人モアレドモ、利渉、往來ト對セズ、蹉對ニアラズ、李白牛渚ノ作、古唐詩合解曰、以古行律、不拘對偶、蓋情勝於詞者ト、其詩ココニ略ス、是等ゾ、周弼一意ニ適フベク覺ユ、律ハ中間ニ對ヲ挾ム、中對聯ニ妨ラルレバ、本意滯リ易シ、故ニ一意モ亦律ノ一體也、サレドモ詩ハ、畢竟近古共ニ、一意ニ非ザレバ、脈絡貫通セズ、對聯竝起ルトイヘドモ、一意貫迪セザレバ、詩ヲ成サズ、古人ノ詩皆然リ、過脈ノ用アル所也、一首ヲ擧テ是ヲ例ス、杜甫、

一片花飛減卻春、風飄萬點正愁人、
且看欲盡花經眼、莫厭傷多酒入脣、
江上小堂巢翡翠、苑邊高塚臥麒麟、
細推物理須行樂、何用浮名絆此身、

是子美、志ヲ得ザル事アルノ比、曲江春ノ名殘ヲ惜ムニ興シテ作レリ、詩ノ意ハ、春ノ名殘ハ、花一片落ルヲ見ルサヘ、早春色モ減卻スルカト心苦キニ、今朝ハ早嵐吹來テ、アヤナク散行ヲ見レバ、情ニ勝難シ、酒ハ宿疾ニモ妨ゲ、衞生ニモ善カラザレバ、人モ禁ジテ、自モシカ思ヘドモ、カク吹シキル跡ニハ、春ノカタミト詠ムベキ花モアラジ、又來ン春モ恃難シ、今暫ノ春ゾ、ハヤ盡ナンズル花ノ、眼ニ遮ル程ハ、先ハ見ヨカシ、中リヤセマジト厭ハズ、今日ハ此花ノ木陰ニ飲メト、自下知シテ、サテ一轉シテ、曲江ノ上ニハ、衣冠打ツドヒテ、面白ク樂ミシ高堂モ、今ハ翡翠ノ巣フ處トナリ、苑邊ニハ、王公貴人ノ墳墓肅然トシテ、塵モ置ザリシガ、今ハ誰詣ル人モ無ク、墳前ノ石麒麟モ、倒レタル儘ニ、起ス人モナシ、細ニ物ノ道理ヲ推シテ見レバ、富メルモ貴キモ、水流レ花謝シテ、春ノ宿リヲ知ル人ノ無キ如ク、何レカ恃ムニ足ルベキ、假ノ浮名ニ、此身ヲ絆サレテ何カセン、寧有ラバ、飲デ行樂セヨト、初ヨリ終ニ續ケリ、然レバ一意ノ一段ハ、古詩近體皆同意ナリ、

○奪胎換骨　詩ニ蹈襲ト云事アリ、蹈襲トハ、前ノ人ノ作リタル詩意ヲ取テ、我物ニシテ出ス也、又偸ムトモ云、詩家ニテ忌事ナリ、李淑詩苑ニ、偸語ト偸意ト偸勢トヲ、三偸ト云リ、是モ蹈襲也、サレドモ初テ詩ヲ學ブ兒輩、詩道ヲヤヤ合點スル間ハ、許スベシ、其故ハ、限アル文字ニ、同キ花鳥風月ニ對シ、カハラザル人情ヲ述ル事ナ

レバ、一一古人ノ言シ事ヲ避ントナラバ、情況文字只奇怪ニノミ渉リナン、マシテ汗牛充棟ノ詩卷、然目渉ルベキ樣モナシ、目觸タリトモ、悉記スル事モ叶フマジ、詩ヲ罷ルヨリ外ハアルマジ、サレバ此蹈襲ノ謗ハ、唐ノ比ヨリ已ニ有シ事ナリ、唐ノ時ノ僧惠崇、以詩自負ス、河汾岡勢斷、春入燒痕青ノ句アリ、一僧其古句ヲ偸ムヲ嘲リテ、

河汾岡勢司空曙、　春入燒痕劉長卿
不是師兄偸古句、　古人詩句犯師兄

又魏周輔、嘗作詩上陳亞、犯古人一聯、陳亞禮ヲナサズ、周輔又絶句ヲ上ツテ曰、

無所用心唯飽食、　爭如窗下作新詞
文章大抵多相犯、　剛被人言愛竊詩

陳亞乃韻ヲ次デ曰、

昔賢自是堪加罪、　非敢言君愛竊詞
叵耐古人多意智、　預先偸子一聯詩

事實ニ相似タリ、宋ニ至リテハ、蹈襲ヲ忌コト甚シク、唯前人ノ言コトヲ經ザル語ヲ、言ハントノミ求メシ故、雪ヲ賦スレバ、斜掩闕角龍千尺、澹抹牆腰月半稜、看來天地不知夜、飛入園林總是春、ナド云事ニ成レリ、サレドモ其中又奇趣ヲ得ル者アリ、翁施龍過鑑湖ニ、

昨年曾過賀家湖、　今日烟波大半無
唯有一天秋夜月、　不隨田畝入官租

唐人ハ材ヲ六朝ニ取ルトテ、六朝ノ人ノ語ナド、自由ニ用ヒタリ、其内ニハ、新意ヲ出セルモアリ、陳腐ナルモアレドモ、唯點化シ得ル所ヲ競ヒシ也、故ニ沈佺期、人如天上坐、魚似鏡中懸ト云、杜ハ、春水船如天上坐、老年花似霧中看トモ云リ、又何遜、

家本青山下、　愛上青山上、
青山不可上、　一上一惆悵、

ト作リ、斐迪ハ、

結廬古城下、時上古城上、
古城非疇昔、今人自來往
猶泝リテイハヾ、古詩十九首ノ中、
生年不滿百、常懷千歲憂。
晝短苦夜長、何不秉燭遊。
爲樂當及時、何能待來茲。
愚者愛惜費、但爲後世嗤。
仙人王子喬、難可與等期。

西門行六解、
出西門步念之、今日不作樂、當待何時。解一夫爲樂、爲樂當及時、何能坐愁怫鬱、當復待來茲。解二飮醇酒、炙肥牛、請呼心所歡、何以解愁憂。解三人生不滿百、常懷千歲憂、晝短苦夜長、何不秉燭遊。解四自非仙人王子喬、計會壽命難與期、自非仙人王子喬、計會壽命難與期。解五人壽非金石、年命安可期、貪財愛惜費、但爲後世嗤。解六

共ニ漢代ノ作ナレバ、何レゾ一ツハ竄栝シタル者ナルベシ、箇樣ノ類古人ニ於テハ、仔細アル事ナルベケレドモ、初心ノ間ハ、遠慮宜カルベシ、又詩ニ摘用ト云事アリ、

摘用

摘用トハ、今ノ世ニイフ切拔ナリ、唐人ハ能古人ヨリ摘用シタリ、故ニイツモ獅子ニ牡丹、竹ニ虎ナレドモ、畫工ノ妙ハ、畫ク度ニ新ナリ、宋人ハ蹈襲ヲ厭ヒ、人ノ言コトヲ經ザル境ノミヲ探ル程ニ、艱澀奇僻ニ渉ラザル事ヲ得ズ、明人此弊ヲ監ミル事アリ、故ニ摘用ヲ厭ハズ、誠ニ蹈襲モ、亦詩家ノ所忌ナリトイヘドモ、其義ヲ寛ニシテ、摘用ヨリ入ベシ、摘用已ニ熟シテ、古人ノ文字、我文字トナル、古人ノ文字我文字トナレバ、其言フ所、其學ブ所ト近シ、故ニ詩ヲ敎ユルノ道、明人宋人ヨリ正シ、近比服子遷、唐詩、忽見陌頭楊柳色、悔敎夫壻覓封侯ト云ヲ、明妃曲ニ、忽見白草原頭色、始識身非漢地人ノ聲調ヲ學ブ事、如此ニシ

テ、能相似ルコトヲ得ン、是子遷自創ムルニ非ズ、于鱗已ニ、醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回ト云ニ由テ、縱使寄衣君莫管古來能得幾鍾期ト摸シタリ、始ヨリ三重韻圓機活法ナド集メ、己ガ意ニ任セ、文字故事、探リ出シテ作リタランニハ、學ビ終リテモ、左シテ、大澤ニ陷リ、再タビ詩ノ正道ニハ至ルマジキ也、サレバトテ、已ニ詩モ作ル程ニナリテ、陳腐ヲ甘ンジ、前人ヲ蹈襲センハ、口惜カルベシ、彼太宰德夫ハ、滄溟ニ不滿ナル人也、其著スル所ノ詩論ニ、于鱗送吳郎中、草色秋迷彭蠡澤、不知何處弔番君ノ詩ヲ論ジテ曰、此末句ハ李太白、日落長沙秋色遠、不知何處弔湘君ヲ偸ムナリ、湘君ハ舜ノ妃ニシテ、舜巡狩シテ蒼梧ニ崩シ給ヒシカバ、妃コレヲ慕ヒ、自湘水ニ投ジ給ヒシヲ、後人祠ツテ湘君ト號ス、古人ノ死ノ憫ムベキ者、太白遷客ト作テ、

コレヲ弔セント欲ス、番君ハ吳芮也、吳芮ハ秦楚ノ際ノ豪傑、漢ニ歸シテ長沙王ニ封ゼラレ、數世國ヲ傳ヱタレバ最得意ノ人也、芮ノ死何ノ弔スルコトカコレアラン、吳姓ノ人ヲ送ルニハ、的切ナリトイヘドモ、事實當ラズ、是乃偸語、最爲鈍賊、トアリ、今按ズルニ、李詩、日落長沙秋色遠、トハ、不知何處ト云ノ前按也、草色秋迷彭蠡澤、ト云モ、不知何處ト云ノ前按ナレバ、三ノ句モ、亦李詩ト同意ナルベシ、其語美ニシテ麗トイヘドモ、蹈襲ノ謗ヲバ免レズ、其所謂三偸、李淑曰、詩有三偸、偸語、最爲鈍賊、如傅長、日月光太淸、陳後主、日月光天德、是也、偸意、事雖可罔、情不可原、如柳渾、太液微波起、長楊高樹秋、沈佺期、小池殘暑退、高樹早涼歸、是也、偸勢、才巧意精、略無朕跡、蓋偸狐白裘手也、如嵆康、目送歸鴻、手彈五絃、王昌齡、手携雙鯉魚、目送千里鴻、是也、論詩者世

多ク此ヲ稱ス、然レドモ、此説、蹈襲ヲ忌ム中ヨリ來ル、末的論ト言難シ、故如何トナレバ、日月光太淸、日月光天德、前ヲ蹈ヘテ隨分作ルベシ、太液微波ノ聯、小池殘暑ノ聯ヨリ來ル、亦何ゾ妨ゲン、モシ箇樣ノコトヲ嫌フトセバ、一向怪僻奇異ナルコトヲイハンヨリ外ハアルマジ、予ヲ以テ思ヘバ、偸語トハ、杜、水流心不競、雲在意俱遲ト云ヲ、李群玉、水流寧有意、雲汎本無心ナド云ノ類ニヤ、謝無逸、忽逢隔水一山碧、不覺擧頭雙眼明トハ、韓退之、遙岑出寸碧、遠目澮雙明ト云語意共ニ取タレバ、好ムベキニ非ザレドモ、敷衍ノ道ニハアルマジキコトニモ非ズ、目送歸鴻、目送千里鴻モ、偸語トイハヾ、偸語ナルベシ、只李白鳳凰臺ノ如キ、崔顥ノ狐白裘ヲ偸ムニ充ツベシ、許渾、日暮酒醒人已遠、滿天風雨下西樓ト作リシハ、元稹、暗風吹雨ノ句ノ勢ヲ偸

ミ得タリ、謝肇淛、半夜寒燈數行淚、滿天風雨下西樓ハ只許渾ノ語ノミヲ偸ム也、故ニ古人ニ取ルノ間、奪胎換骨ノ法、講ゼズンバアラズ、冷齋夜話曰、不易其意、而造其語、謂之換骨法、規摹其意、形容之、謂之奪胎云云、以下換骨ニ所引ハ、鄭谷、十日菊、自緣今日人心別、未必秋香一夜衰ヲ氣不長トシテ、王荊公、千花百卉凋零後、始見閑人把一枝ノ類ヲトル、奪胎ニハ、後ニ引ケル、一別二十年、六年波浪ノ詩ヲ説ケリ、如此トキハ、胎ト云モ、骨ト云モ、形容ノ造語ニテ、意ニ當ツベキ者ナシ、是ヲ以テ不易其意ノ、不ノ字ヲ除ヒテ之ヲ觀レバ、骨ノ字、意ニ當ツベク、胎ノ字、語ニ當ツベシ、此語本山谷ノ語ニシテ、惠洪引テ之ヲ解ス、諸書ニ引者、不ノ字ナキモノナケレバ、我説非邪、然レドモ、其實形ヲ取テ神ヲ換ルト、神ヲ取テ形ヲ換ルトノ、ニナレバ、ココニ不ノ字

ヲ去テ曰、易其意、而仍其語、爲換骨法、用其意、而易其語、爲奪胎法、故換骨者、巧在假其胎、奪胎者、巧在取其骨、故爰分二門、謂兩反相得之境、若以惠洪之意、則有立意不同者、是我之所以分奪胎換骨之二門也、故ニ此書ニ奪胎ト云者ハ、其意ヲ其儘ニシテ、其胎ヲ換タル也、俳諧師貞室、芳野ニテ、「コレハコレハ、トバカリ花ノ、芳野山、」ト云句、是俳諧ノ詞ニシテ、和歌ノ詞ニ製シ難キト云コトヲ、　靈元法皇聞シ召サレ、「中中ニ、ヨム言ノ葉モ、ナカリケリ、富士ノ白雪、富士ノ白雪、」ト遊バシケル境也、換骨トハ、其胎ヲ其儘ニシテ、其意ヲ換タル也、「梅ノ花、ソレトモ見エズ、久堅ノ、アマギル雪ノ、ナベテフレヽバ、「梅ノ花、ソレゾトニホフ、久堅ノ、アマギル雪ハ、ナベテフヽレド、」是也、故ニ骨ヲ換ルトハ、精神ヲ換ルナリ、精神ヲ換ル者ハ、胎ハモトノ通リ也、胎ヲ奪フ

トハ、文字ヲ換ルナリ、文字ヲ換ル者ハ、意ハ其通リ也、元元裕之、平湖曲、

秋風拂羅裳、　秋水照紅妝、
擧頭見郞至、　低頭采蓮房、

是李白、擧頭望山月、低頭憶故鄕ノ胎ニシテ、彼ハ、月ヲ見テ鄕ヲ憶フヲ骨トス、其骨ヲ換テ、女子所歡ニ嬌ルノ態トナセリ、故ニ其語、故キヲ用ユルヲ以テ、意ノ愈新ナルヲ覺フ、是ヲ以テ之ヲ稱シテ、元初第一ノ作トナス、李蓋、聽涼州曲詩ニ、王勃、人情已ニ南中ノ苦ヲ厭テ去ルニ、鴻雁那從北地來ト身ノ事ヲ、雁ニ託シテ咎メタル結ヲ、起句ニ、鴻雁新從北地來、聞聲一半却飛回、トハ、大ニ新意アリ、學者倣フベシ、權德輿、岑嘉州磧中ノ作ヨリ、新意ヲ出シテ、今夜不知何處泊、斷猿淸月引孤舟ト作リシニハ、勝リテ覺ユ、若其新意ヲ得ザルハ、李群玉、老杜ニ偸ンデ、貌態祇應天上有、歌聲

豈合世間聞陳腐踏襲見ルニ足ラズ、其胎ヲ奪フ者、陶淵明、桃源詩ニ、雖無紀曆誌、四時自成歲、ト云意ヲ、唐人トリテ、山僧不解數甲子、一葉落知天下秋、ト作レリ、顧況ノ詩、一別二十年、人堪幾回別、言ハ、別レテ今已ニ二十年、二十年ニシテ一回會フバカリニテハ、別ヲ惜ムコトサヘ、屢ハ有マジケレバ、今日ノ別ノ難キゾト、恨メル也、此意ヲ其儘、宋舒王、與故人、

一日君家把酒杯、六年波浪與塵埃、
不知烏石江頭路、到老相逢得幾回、

一日君ガ家ニ酒杯ヲ把シヨリ、世ノ波浪塵埃ニ隔テラレテ、六年ニシテ、此烏石江頭ノ路ヲ經テ尋ネタリ、六年ニシテ漸ク一度尋ル位ニテハ、老ユク末迄モ、尋ヌルコトノ、屢ハアルマジキカトナリ、蓋三偸ノ內ニテイヘバ、偸意ト一ナルベシ、又蹈襲ニモアラズ、換骨ニモアラズ、佗人ノ句ヲ、題ニ丸出シニシテ、點飾スルコトモアリ、薛據ノ詩ニ、省署開文苑、滄浪學釣翁、ト作リタリ、杜子美、解悶ノ作、

沈范早知何水部、曹劉不待薛郎中、
獨當省署開文苑、兼泛滄浪學釣翁、

其意、昔何遜ハ、沈約范雲ノ徒ニモ、早ク知ラレシニ、此薛據モ、曹植劉楨ノ樣ナル時節ニモ生レナバ、速ニ人ニモ擧ラルベキニ、然樣ノ時ニモ遇ズ、殘念ナリ、サレドモ薛據ノ詩ニ、云云ト作ラレシガ、其如ク、一度ハ省署ニ當ッテ文苑ヲモ開キ、又今ハ荊南ニアリ、釣魚ノ翁ヲ學ビ、江湖ノ樂マデ兼ラレタルハ、面白シト、遠謫ヲ慰シタリ、發句ニ佗ノ得意ノ境ヲアゲ、二ノ句失意ヲ說ク、是悶也、三ニ昔ノ得意ノ境ヲアゲ、四今日失意ノ境ヲ、得意トナシタル所、乃解也、字ヲ增タル者ハ、夜足沾沙雨、春多逆水風、杜甫 巫山夜足沾沙雨、隴水春多逆水

風樂天字ヲ減ジタルハ、漠漠水田飛白鷺、陰
陰夏木囀黃鸝。王維水田飛白鷺、夏木囀黃鸝。
李嘉祐是ヲ李肇、李嘉祐ノ詩ヲ、王維トリタ
リトイヘドモ、嘉祐後輩ナレバ、王維トル
ベキ様ナシ、大奄相ノ論也、頗相類スル者
ハ、梁何遜、薄雲巖際出、初月波中上、杜甫、薄
雲巖際宿、孤月浪中翻。盧綸、孤村樹色昏殘
雨、遠寺鐘聲送夕陽。喩鳧、樹色含殘雨、河流
帶夕陽。古樂府、今日牛羊上丘壠、當時近前
面發紅。黃山谷、今日牛羊上丘壠、當時近前
左右嗔。韋應物、春潮帶雨晚來急、野渡無人
舟自橫。宋寇萊公、野水無人渡、孤舟終日橫。
然ドモ初心ノ手本ニハ成難カルベシ、若
其淵源ヲイバヾ、魏武短歌行ニ、呦呦鹿鳴、
食野之苹ノ詩ヲ、四句迄其作中ニ載シ入レ
タリ、ソレヨリ派リテイヘバ、喓喓艸蟲、趯
趯蟲螽、未見君子、憂心忡忡。ハ、召南艸蟲、小
雅出車、共ニアリ、無逝我梁、無發我笱、我躬

不閱、遑恤我後、ハ、小雅小弁、邶風谷風、共
ニアリ、南山烈烈、飄風發發、民莫不穀、我獨
何害、ハ蓼莪四月共ニ有テ、南山ヲ冬日ニ
作ルノミ、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄氷、ハ、
小旻ノ詩ニシテ、戰戰兢兢、如履薄氷ハ小
宛ノ詩ナリ、鷄鳴曲、舍後有方池、池中雙鴛
鴦、鴛鴦七十二、羅列自成行、鳴聲何啾啾、聞
我殿東箱、相逢行、入門時左顧、但見雙鴛鴦、
鴛鴦七十二、羅列自成行、音聲何雝雝、鶴鳴
東西箱、此二首又共ニ漢代ノ作、各何レカ
取リ、何レカ取ラレタルノ、別ハアルベシ、
然レドモ世ノ意匠景物異ルコトモナキ
モノナレバ、同作モアルベシ、昔
嵯峨天皇、西山ノ大井川ノ邊、嵯峨殿ニテ、
如月ノ比、小野篁ニ、詩ヲ作リテ奉レト有
ケレバ、紫塵嫩蕨人拳手、碧玉寒蘆錐脫囊
ト云句アリ、
天皇御感有テ、之ヲ宰相ニ進メ給ヒシカ

バ、世コレヲ野相公ト稱シキ、後唐ヨリ、樂天ノ詩集ヲ贈リ來リシヲ見レバ、巌嫩人拳手、蘆寒錐脫嚢ト云句アリケルトカヤ、サレバ斯人ハ、樂天ト世ヲ同ウシテ、相共ニ傳ヘ聞テ慕ヒケルガ、白氏閉閣唯聞朝暮鼓、登樓空望往來船トハ、篁ヲ思フテ作レリトモ、此方ニハ言傳ヘタリ、又紫塵碧玉ノ聯ノミナラズ、相公、內宴春日作、著野展鋪紅錦繡、當天游織碧羅綾ト云聯モ、白氏文集渡リテ後、之ヲ見ルニ、野草芳菲紅錦地、遊絲撩亂碧羅天ノ句有ケルトゾ、此集始メテ來リシ時、

帝深ク秘シ給ヒ、閉閣ノ聯ヲ、白ノ作トナシ、空望ノ空ノ字ヲ、遙ノ字ニ直サセ給ヒ、篁ニ示シ給ヒケレバ、遙ノ字空ニ換給ハバ、益美ナラント奏シケル、

帝モ驚セ給ヒ、是聊汝ヲ試ル也トテ、本集ヲ見セシメ給ヒシト、カカル同工ノ人モアリ、又同時ナラズトテモ、前ニイヘル如ク、白先輩ノ作ニ、盡ハ渉ルマジ、若渉ル人有トモ、盡ハ記シ得マジ滄溟ナドハ、カカル境ヲバ恕シテ、只其境ニ入タレバ、取タリト見ヱタリ、サレバコソ衞萬、李白ノ、祇今唯有西江月、ヲ、竝ビ收シテ、張祜、崔顥黃鶴樓ノ結ヲ蹈襲シテ、鄕國不知何處是、雲山漫漫使人愁ト云ヲモ收メ、且白モ草色秋迷彭蠡澤、共作リタルナラメ、然レバ强ニ咎ムベキニモアラザレドモ、骨ヲ換ルノ手段ナクンバ、顰ニ傚フノ謗ハ、免カルマジ、李白、山隨平野盡、江入大荒流、杜甫、星隨平野濶、月湧大江流、李白、人分千里外、興在一盃中、高適、功名萬里外、心事一盃中、孟浩然、山寺鳴鐘晝已昏、漁梁渡頭爭渡喧、岑參、渡口欲黃昏、歸人爭渡喧、柳宗元、嶺樹重遮千里目、江流曲似九回腸、白居易、闇遮千里目、悶結九回腸、岑參平明端笏陪鵷列

薄暮垂鞭信馬歸。李白平明拂劍朝天去、薄暮垂鞭醉酒歸。李、萬重關塞隔、何日是歸年。杜、今春看又過、何日是歸年。李、眼前無俗物、身外即僧居。杜、眼前無俗物、多病也身輕。李、靖節先生尊長吝。廣文先生飯不足。杜、甲第紛紛厭粱肉、廣文先生飯不足、岑參、今夜不知何處宿、平沙萬里絕人烟。孟浩然、日暮孤舟何處泊、天涯一望斷人腸。李遠、有客新從趙地回。自言曾上古叢臺。馬戴、有客新從絕塞回。自言曾上李陵臺。共ニ同時ノ人ナレバ、互ニ相模擬セズ、偶然ナルコトモ多カルベシ、然レバ賈島、故人如不賞、歸臥故山秋。ト云モ、李白、主人若不顧、明發釣滄浪。ト云ヨリ、出ザルカモ知ラズ、「サレバ大江朝綱、菅原文時ト、才名世ニ齊シカリシガ、帝二人ニ、白集第一ノ詩ヲ、選ミ進メヨト勅アリシニ、兩人共ニ、不醉黯中何得去摩圍山月正蒼蒼ノ詩ヲ奉リシドゾ、或時ニハ、某皇孫ノ宅ニシテ、庭中ノ花ヲ詠ゼシニ、朝綱ハ、此花非是人間種、瓊樹枝頭第二花ト作リ、文時ハ、此花非是人間種、再養平臺一片霞ト作リシハ、世ニ美譚トナシテ傳ヘタリ、「詩ニ比スレバ、文ハ廣キ者也、サレドモ宋王懋、曾テ籠中翦羽、仰看百鳥之翔、側畔沈舟、坐閱千帆之過、トシケルガ、時任忠厚ト云人、投時相啓ヲ見シニ、側ヲ岸ニ作ルノミニシテ、カク同キ聯アリシ由、野客叢書ニ見エタリ、「續洞上初祖傳ニ、相州鎌倉圓覺寺ノ不聞禪師、元ニ至リ、一日錢塘口ニ散歩セシニ、官吏異域ノ人ナルヲ察シ、擒ヘテ武昌ニ送リシ時、禪師館壁ニ題シテ曰、

孤筇遠入異鄕雲。　滿耳語音渾不分。
唯有簷頭深夜雨。　蕭蕭猶似舊時聞。

近世清ヨリ歸化ノ僧高泉ノ、著スル山堂清話ヲ讀ニ、福省ノ海濱ニ漂船アリ、其中

ノ人物、儀具濟楚ヲ極ム、省主貴人ナルヲ知リ、觚翰ヲ以テ前ニ置キ、信ヲ通ゼシム、其人卽賦詩曰、

日出扶桑是我家。　飄搖七日到中華。
山川人物般般異、　唯有寒梅一樣花。

其末ニ書シテ曰、某日本國某王之子、因月夜泛舟不覺隨風至此ト、省主見テ歎ジテ曰、異方之人、亦有才如此可嘉、命有司以盛禮欵待、具大舟送回、予及至此邦詢其人、並無有知之者ト、此二作、共ニ和人ニシテ、共ニ唐山ニ入リ、其辭異リトイヘドモ、其境情ノ同キヲ以テ、其構思期セズシテ同ジ、共ニ美トスルニ足レリ、西大寺ノ喬然、宋ニユキテ、橋直幹ノ石山ノ詩、蒼波路遠雲千里、白霧山深鳥一聲ト云句ヲ、霞千里、蟲一聲ト、二字カヘテ、宋人ニ見セケレバ、宋人ニ雲千里、鳥一聲トセバ、佳ナランイハレシハ、詩ニ不案内ナル事知ラレテ、恥カシ、左ニモ右ニモ、詩ハヨク作ラザレバ善カラズ、善ケレバ如何ナル罪モ、赦サルヽト見エタリ、又宋王元之、本白樂天ヲ學ビタリ、嘗テ商州ニ在リ、春日雜興ノ詩ヲ作ッテ曰、

兩株桃杏映籬斜。　妝點商州刺史家。
何事春風容不得、　和鶯吹折數枝花。

ト作リシヲ、其子嘉祐、老杜漫興ノ詩ヲ記シテ、

手種桃李非無主、　野老牆低是我家、
恰似春風相欺得、　夜來吹折數枝花、

トアレバ、此作ヲ易ント請シニ、元之忻然トシテ改ズ、又詩作ッテ曰、本與樂天爲後進、敢期杜甫是前身、最興有テ覺ユ、又謝茂秦、嘗テ牡丹ヲ詠ジテ、

花神默默殿春殘。　京洛名家識面難、
國色從來有人妒、　莫教紅袖倚闌干、

トセシガ、後羊士諤、越女含情已無限、莫教

長袖倚闌干ト云句アルヲ見テ、總ニ此作ヲ删リ棄タリ、是又王元之ト意ヲ反シタリ、作リ出セル詩ノ、古人ト同カランハカナシ、王元之改ザリシモ輿アリ、四溟ノ删棄シモ餘義ナキ事也、又相似ルノ中ニ、最奇ナル者ハ、安積氏ノ湖亭渉筆ニ、明ノ太祖、藍玉ヲ誅スルニ當ツテ、孫蕡ト云者モ、亦刑セラル、其絶命詩、

鼉鼓三聲急、　西山日又斜、
黄泉無客舍、　今夜宿誰家、

此作ニ先立コト七百餘年、我國ニテ、大津ノ皇子、臨刑詩、

金烏臨西舍、　鼓聲催短命、
泉路無賓主、　此夕誰家向、

ト、絶テ相似タル由イヘリ、サレドモ忠義水滸傳ニ、萬里黄泉無施舍、三魂今夜落誰家ノ語アレバ、孫蕡ハ是ニ據ル者ニシテ、水滸傳ニ所引、大津皇子ノ作、自然ト合フ

ト見エタリ、阿部仲麿、天ノ原ノ歌、鵜飼信興和漢雜笈ニハ、奈良帝ノ勅命ニテ、仲麿西國ニアリ、月ニ對シ、老母ノ病ヲ懷ヘル歌トシテ、後漢李氏江州ニアリ、月ニ對シ、老母ノ病ヲ懷ヒ、仰望天涯、情月傍郷山明ノ詩ヲ引テ、之ヲ異域同情ト言リ、實世ニ傳フルコトアリ、慶長ノ比、日本ノ商船明ニ渡リシニ、

郎在固陵妾在越溪、
海棠花發或東或西、

ト云ヲ專謠ヒケリ、程ナク歸リテ聞ケバ、此方ニハ父ハ吾妻ヘ、子ハ不知火ニ、櫻花カヤ散散ニト謠ヒケルトゾ、斯ル境ヲヨク考ヘテ、妄ニ舌長ク、人ノ作ヲ非トスベカラズ、又態ト古人ノ句ヲ取タルハ、太白、佗日相思一夢君、應得池塘生芳草、是謝靈運、池塘生芳草ノ句ニヨリテ也、解道澄江淨如練、令人卻憶謝玄暉、又玄暉、澄江淨如

練ノ句ヲ用ユル也、杜牧之又之ニ倣ッテ、李白、廬山秀出九芙蓉ト云句ヨリ、御憶誦仙才、格後、解吟秀出九芙蓉、又宋ニ至ッテ、蘇子瞻、送人之嘉州、

峨嵋山月半輪秋、　影入平羌江水流、
謫仙此語誰解道、　請君看月時登樓、

此詩モト古詩也、蔡蒙齋聯珠詩格ニ、裁シテ絶句トナセリ、眞ニ絶句トスルニ堪タリ、是モ亦古例アリ、漢ノ古詩ニ、

歩出城東門、　遙望江南路、
前日風雪中、　故人從此去、
我欲渡河水、　河水深無梁、
願爲雙黄鵠、　高飛還故郷、

ト云詩ヲ、上二韻ヲ取テ、絶句トナセリ、上ニ出セル、自君之出矣、モ此例也、又相逢行、長篇也、後人終ノ三韻ヲ裁シテ、三婦豔トナセリ、蔡子是等ノ事ニ依テ、裁スルナルベシ、駱賓王、秦塞重關一百二、漢家離宮三十六、明謝復古、漢主離宮三十六、樓臺處處起笙歌、崔顥、黄雀啣黄花、翩翩傍簷隙、晩唐郭氏奴、黄雀啣黄花飛上金井闌、是等ノ如キハ、偸ムト云ニモ非ズ、新意ヲ出スト云ニモアラズ、祖述ノ一法也、復知ラズンバアルベカラズ、又自相犯ス者ハ、王維、萬國仰宗周衣冠拜冕旒、九天閶闔開宮殿、萬國衣冠拜冕旒、李白、三山半落青天外、二水中分白鷺洲、我行倦過之、半落青天外、若待功成拂衣去、武陵桃花笑殺人、功成拂衣去、搖曳滄州傍、功成拂衣去、歸入武陵源、居易、松樹千年朽、槿花一日歡、松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮、苑花似雪同隨輦、宮月如眉伴直廬、宮花似雪從乘輿、宮月如霜坐直廬、于鱗、白雲湖上酒家春、那更桃花照眼新、白雲湖上酒家春、坐愛青山誤此身、予未許渾集ヲ見ズ、一樽酒盡青山暮、千里書回碧樹秋、ノ聯ハ、其集中三タビ出ヅト、江談秒ニイ

ヘリ、又世、東坡、水光瀲灩晴正好、山色空濛雨亦奇ノ句アルヲ知テ、水光瀲灩猶浮碧、山色空濛已斂昏ノ句アルヲ知ラズ、平淮忽迷天遠近、青山久與船底昂、波平風軟望不到、故人久立烟蒼茫、人口ニ膾炙シテ、渉平風軟望不到、孤山久與船低昂ノ句アルヲ知ラズ、又東坡、李白峨嵋山月ノ兩句ヲ采用ユルヲ以テ、同人、四十九年非、一往不可復、ノ聯ヲモ采用ユルヲ知ラズ、是等猶全同キ者ニアラズ、謝茂秦集、胡笳曲、

砂磧茫茫黑水流、　胡兒六月換羊裘、
駱駝背上吹蘆管、　風散龍堆作冷秋、

漠北詞、

大漠蕭蕭黑水流、　胡兒七月換羊裘、
駱駝背上吹蘆管、　日暮長風動地秋、

定メテ、嘗テ作レル詩ヲ覺ヘ忘レ、重ネテ作レル時、諳記シ出テテ、舊樣ヲナシ、點檢スル時、ヨシヨト、其儘置タル者ナラントヲ覺ユ、楊維貞、朱簾乍捲西山雨、一片青峰拄笏看、上句王勃ノ句、暮ヲ乍ニ換フ、徐中行、燕臺感舊欲向月明歌郢曲、不禁霜露濕人衣、下句李白ノ句、知ヲ禁ニ換フ、于鱗、明妃曲、天山雪後北風寒、抱得琵琶馬上彈、上句李益ノ句、海ヲ北ニ換フ、是古人ノ偶アル所トイヘドモ、偸語ノ甚シキ者、初心ノ徒必傚フベカラズ、又梁陶弘景、隱居シテ居ケルニ、天子ヨリ、山中何所有、ト勅問アリシカバ、弘景直ニ其辭ヲ承テ、

山中何所有、　嶺上多白雲、
只可自怡悅、　不堪持贈君、

是人言ニヨル者也、南濠詩話ニ載ス、張伯雨茅山ニ在シニ、僧アリ來リ謁ス、伯雨、花徑不曾緣客掃、ノ子美ノ句ヲ書シテ示ス、僧足シ成シテ曰、

久聞方外有神仙、　只作華陽古洞天、
花徑不曾緣客掃、　石牀今許借僧眠、

穿雲去汲燒丹井、帶雨來耕種玉田、
一自茅君成道後、幾人騎鶴下蒼烟、
亦弘景ノ詩ト事相類ス、又一詩ヲ傳テ大ニ異ルモアリ、李白烏夜啼ノ五六、本事詩ニハ、停梭向人問故夫、欲說遼西淚如雨、杜常華清宮ノ一ニ、焦氏筆乘ニハ、一別家山十六程、曉來和月到華清トアリ、王灣北固山下作、本事詩ニハ、江南意ト題シテ、
南國多新意、東行伺早天、
潮平兩岸失、風正一帆懸、
海日生殘夜、江春入舊年、
縱來觀氣象、唯向此中偏、
トモ傳フ、思フニ是等、其人ノ始テ作リタルモ、世ニ傳ヘ、推敲シタルモ、世ニ傳ヘテ、カク異同アルナルベシ、又一詩數字ヲカヘテ、作者異同ノ說アル者、宋楊大年生レテ數歲、猶モノイハズ、一日家人抱テ樓ニ登ルニ、偶其首ヲ觸ケレバ、兒忽、

危樓高百尺、手可摘星辰、
不敢高聲語、恐驚天上人、
ト吟ジ出セルトモ云、又蘄州黃梅縣峰頂寺、人至ルコト稀ナリ、曾阜ナル者介タリ、上ッテ梁間ニ一榜ヲ得タリ、拂滌ヒテ謫仙ノ詩ヲ見ル、夜宿峯頂寺、擧手捫星辰云云トモイヘリ、又一字ヲカヘズ、作者異ルモ傳ヘタリ、傳聞誤ルヨリナルベシ、

○點化　點化トハ、前人ノ作ヲ、語意共ニトリテ、ヨクナシタル也、イハバ檃栝タル也、宋諸名公好ンデセシ事也、
雨前初見花間葉、雨後兼無葉底花、
蛺蝶飛來過牆去、卻疑春色在隣家、
是唐王駕晴景ノ作、王荊公飛來ヲ紛紛ト改メタリ、又筍詩、急忙且喫莫躕躇一夜風雨變成竹、ト云フ朱喬年、
春風吹落籜龍兒、戢戢滿山人未知、
急喚蒼頭劚烟雨、明朝吹作碧參差、

除陵、鴛鴦、
山鷄映水那相得、　孤鸞照鏡不爲雙、
天下眞成長會合、　無勝比翼兩鴛鴦、
魯直之ヲ點化シテ、題畫睡鴨曰、
山鷄照影空自愛、　孤鸞舞鏡不作雙、
天下眞成長會合、　兩鳧相倚睡秋江、
之ヲ蹈襲ニ異リトハイヘドモ、畢竟蹈襲ノ類也、前人ノ作ヲ雌黃スルナリ、不恭ナルコト也、宋ニハ流行シ事ナレドモ、好マシカラヌコト也、セズトモアルベシ、サレドモ、古人ノ作ヲ點化シテ用ユルハ、常ニアルコト也、王廷相、芳樹作、
芳樹不相惜、　與藤相縈繫、
歲久藤枝繁、　見藤不見樹、
兪安期、鐘藤謠、
鐘藤纏樹枝、樹枯藤作樹、隣婦媚私郎、歲久翻作私郎婦、
點化ノ功無キニハ非ズ、未精神ヲ全ク換ルトハ言難シ、

翻案

○翻案　前詩ヲ案トシテ、其趣ヲ打翻シテ裏表ニ作ル也、漢高大風歌、
大風起兮雲飛揚、威加海內兮歸故鄕、安得猛士兮守四方、
ト云ヲ、李白、但歌大風雲飛揚、安用猛士守四方、杜、因得百錢卜、消息問君平、ト云ラ、李、升沈應已定、不必問君平、王文海、鳥啼山更幽、ト云ヲ、王介甫、一鳥不啼山更幽、ト云ノ類ナリ、

影略

○影略　象外　賦トハ其儘ニ詠ジ出セル也、直叙ト言ヘルモ別ノ義ニアラズ、唯其儘ニイヘル也、ソコヲソレトイハズシテ、其意ノ現ルルヲ象外ト云、影略モ亦相似タリ、形寫トモ風影トモ云、詩作ル人、此境ヲ得ザレバ、妙境ニ悟入スルコト能ハズ、象トハ、我意ヲ屬スル所ノ象ナリ、我意ヲ屬スル所ノ象ハ、此ニ在テ、語ハ象ノ外

ニアル也、和歌ニ、月ヤアラヌ、春ヤ昔ノ、春ナラヌ、我身ヒトツハ、モトノ身ニシテ、ト云ガ如シ、祇園南海曰、影寫、古人鏡花水月、又風影トモ評シタリ、譬バ月影ニ、梅竹ノ窗ヘウツリタル姿也、梅ニハ氷肌玉骨、竹ニハ篩金戛玉等ノ類ニ、云出ハ拙シ、唯讀人考ヘテ、實ニ然コソト感ズル樣ナル、鏡中ノ花、水中ノ月、有トハ見ヱテ、手ニ取ラレザル故、風影モ云、是詩中ノ第一義、王昌齡、秦時明月漢時關ノ一句、又嶺色千重萬重雨、斷絃收與淚痕深ノ一首、孟浩然、松月夜窗虛ノ一句、錢起、曲終人不見、江上數峯青、此類ニテ知ルベシ、明王越、邊城春雪、

二月中旬雪猶飛、　邊城草木得春遲、
不知上苑新桃李、　開到東風第幾枝、

モト邊城ノ雪ヲ賦シテ、三四上苑ノ花ヲイフ、是影寫ノ手也ト譽タリ、晉按ズルニ、此作實ニ初心ノ摸楷トスベシ、喚呼照應、象外ノ境アリ、合作トスベシ、サレドモ斧鑿有痕、謂之作家之手段則未也、冷齋夜話、論象外句曰、比物以意而不指言某物、無可上人詩曰、聽雨寒更盡、開門落葉深、是以落葉比雨聲也、又曰、微陽下喬木、遠燒入秋山、是以微陽比遠燒也、今按ズルニ、袁石公詩律ヲ論ジテ、素練抹林雲氣薄、明珠穿草露華新、コレヲ上應下呼トシ、林花著雨臙脂落、水荇牽風翠帶長、コレヲ上呼下應トス、是ヲ以テ類スルニ、聽雨ノ聯ハ、乃所謂上應下呼者ニシテ、微陽ノ聯ハ、乃上呼下應者也、而シテ石公應呼ノ目モ、未穩當トハ云ベカラズ、畢竟上比下解、上解下比トモ謂ベシ、象外ノ面目ニハ當難シ、顧況、山中、

野人自愛山中宿、　況是葛洪丹井西、
庭前有箇長松樹、　夜半子規來上啼、

詩ヲ見テ乃顧況客中ノ作ナルヲ知ル、ココハ意ナキ野人ダニ此幽寂ヲ愛ス、マシ

テ葛洪丹ヲ煉シアタリ、昔モ戀シク、再出ベキ意モアラザルヲ、旅舍ノ庭前一箇ノ長松樹ニ、夜深ケテ子規ノ、不如歸去ト啼ニ、歸思シキリニ動キテ、得留ラズト、歸思ノ如何トモシ難キヲ、象外ニ影略シタリ、邊城春雪ノ作ニ比スルニ、數層ヲ高ウス、モシ直敍セバ、懷古ノ作許渾、金陵、英雄一去豪華盡、只有青山似洛中ト云ベキヲ、影略スル者、劉禹錫、石頭城、

山圍故國周遭在、　潮打空城寂寞回
淮水東邊舊時月、　夜深還過女牆來

又顧況ノ上ニ出ヅ、蓋劉己ガ意ヲ屬スル所ハ、東晉全盛、人物輻輳、車馬、途ニ塡ルノ處也、而シテ其言ヲ寓スル所ハ今也、謝壘山曰、山圍故國周遭在、山無異東晉之山也、潮打空城寂寞回潮莫異東晉之潮也、淮水東邊舊時月、夜深還過女牆來、月無異東晉之月也、而求東晉之宗廟宮室、英雄豪傑、亦不可見ト、コレ許渾ト同意ニシテ、意象中ニアルト、象外ニアルトノ別也、又許渾、有客ト居不遂、薄遊沂隴者ト題シテ、

海燕西飛白日斜、　天門遙望五侯家
樓臺深鎖無人到、　落盡春風第一花

題ヲヨク審ニシ、亦ヨク詩ヲ審ニスベシ、其題ト詩ト應ゼザルガ如キ所、便其妙ナル所也、夫燕ハ人ニ傍フ者也、傍フ所モナク、日ノ斜ナルニ向ヒ、帝里ヲ出去ル時、泥ヲ含ムベキ處モアルラン者ヲト、此方ヨリ遙ニ望メバ、天門ニ接シテ、貴寵ノ宅アリ、其貴寵ノ守モ、今棲ミステツ、庭中ノアタラ名花、靜意ナク風ニ散行キヌ、鶴群長遶三珠樹、不借閒人一隻騎ト云ガ如シ、深鎖ノ二字、燕來往シ難キノ意アリ、象ハ人ノ家ナキ也、然シテ語ハ家ノ人ナキ也、含蓄限ナシ、又前詩ニ一等ヲ進ム、此詩、牽ニ見レバ比ノ如シ、審ニ觀レバ影略ナリ、其

故如何トナレバ、比ナレバ、燕ヲ詠メ、隱然トシテ客況其内ニ顯ル、此詩ハ許渾、客ノ不遇乖離ヲ憐ンデ、其方ヲ望メバ、西ニ飛ブ燕モアリ、仍テナガメ天門五侯ノ宅ニ及ビ、有家無人ヲ見テ、有人無家ヲ感ズル也、若是ヲ比トナサンニハ、望ムハ燕ノ望ム也、意穩ナラズ、杜、國破山河在、城春草木深。山河在トハ、社稷ノ無キ也、草木深トハ、人民ノナキ也、李華、芳樹無人花自落、春山一路鳥空啼。亂後寥落ノ景、自空ノ二字ニ悉ス、我平圭王弇州、老能逢盛世、貧且傍微官ノ二句ニ擊節ス、能逢盛世ハ、人ノ喜ブベキ所也、サレドモ日少壯ニ非ザレバ、實ニ己ガ才用ユル事ヲ得ズ、感與不遇同、且傍微官、官豈願フ所ナランヤ、饑寒ノ爲ニ栖栖タリトナリ、是故ニ詞壇ニ遊ブノ人、象外ノ境ヲ知ラズンバ、毎篇平平タラン而已、然イヘバ詩ヲ作ル者、趣

明暗

ヲ皆象外ニ求メヨトイフニ似タリ、若ク思ヲ運サバ、叉奇ニ入リ怪ニ走ラン、故ニ直叙詩ノ本體ニシテ、最上乘涅槃妙心ハココニアリ、是ヲ以テ悟入上自由三昧ヲ得レバ、象外ニ遊ビ、象中ニ居ル、風比巧淡、所適トシテ佳ナラザルナシ、返景入深林。復照青苔上、明人、夜魚不受餌、石上坐秋月、等ノ如キ、即第一義諦ナリ、サレドモ亦其中巧ナル者アリ、杜子美、安祿山ニ囚ハレシガ、漸賊中ヲ免レテ、肅宗皇帝ノ行在所ニ到リシ時、死去憑誰報、歸來始自憐。賊中ヲ出シ千辛萬苦、順ニ歸シテ其幸ヲ悅ブノ象、無限意思情態、只十字ノ中ニ盡ス、直叙ノ妙、誰カ之ニ尙ヘン、

○明暗二體　詠物ナラズトモ、アルベキ事ナレドモ、先詠物中此二體ヲ分ツ、題ノ字ヲ直ニ見セテ、其儘ソレト作リタルハ、明體也、題面ノ字ヲ詩中ニ出サズ、考ヘテ

ソレト知ルハ、暗體也、暗體トハ、俗ニイフ隱題也、畢竟詩ハ皆明體也、新メテ明體ト云ニ及バズ、只暗體アルヨリシテ明體トイヘバ、暗體主也、謎詩ト相類シ、影寫ニ粗似タリ、詩法入門、明體、黑鷹、

黑鷹不省人間在、　度海疑從北極來、
正翮搏風起紫塞、　玄冬幾夜宿陽臺、
虞羅自覺虛施巧、　春雁同歸必見猜、
萬里寒空只一日、　金眸玉爪不凡材、

暗體、白鷹、

雪飛玉粒盡淸秋、　不惜奇毛恣遠遊、
在野只教心力破、　干人何事網羅求、
一生自獵知無敵、　百中爭能恥下韝、
鵬礙九天須卻避、　兔經三窟莫深憂、

黑鷹題注云、起句卽道出題目、故謂之明體格、白鷹題注云、隱隱詠題、無題目字、唯含意焉、謂之暗體、唐詩選、溫庭筠、楊柳枝モ、暗體ナリ、

○起結　大篇小篇ニヨラズ、詩文ヲ隔テズ、起結、首尾ヲナス者ナレバ、尤意ヲ留ムベキ事ナリ、結ノ結ビ得ザルハ見易ウシテ、起ノ起シ得ザルハ見難シ、サレバ謝玄暉ノ大江流日夜、客心悲未央ハ、昔ヨリ起句ノ絕唱ト稱セリ、サレドモ起結必一首而已ニアルコトニモアラズ、贈答シテ一首尾ヲナス者アリ、昔明ノ太祖、一日微行シテ、伶人彭友信ト云者、始テ京師ニ至リシニ、遇給ヘリ、折節虹ノ起ケレバ、明祖一聯ヲ口占シ給フ、

誰把靑紅線兩條、　和雲和雨繫天腰、

友信聲ニ應ジテ、

吾皇昨夜鑾輿出、　萬里長空駕綵橋、

帝感ジ給ヒ、召テ之ヲ北平布政司トナサレシト也、卽聯詩也、老杜、黃河詩、二首ヲ聯ネテ首尾ヲナセリ、其一、

黃河北岸海西軍、　椎鼓鳴鐘天下聞、

鐵馬長鳴不知數、胡人高鼻動成群、

其二、

黃河西岸是吾蜀、欲須供給家無粟、
願驅衆庶載君王、渾一車書棄金玉、

杜律秋興八首諸將五首ノ如キ、次第アリトモ見エズ、何氏林亭十首ノ如キ、始中終アリ、明人傚之者多シ、

○擷腰　解鐙　一聯ノ巧ハ字ニアリ、一篇ノ巧ハ鋪敍ニアリ、タトヘバ佳對二聯ヲ得ンニ、コレヲ分ツテ見レバ賞スベシ、一篇トナセバ體相犯ス、是ヲ以テ一篇ノ法、務メテ同相ヲ忌ム、其或ハ情景ヲ相雜ヘ、或ハ景中大小ヲ別チ、或ハ叢聚ヲ病トスレバ、只同相ヲ避ルノミナリ、擷腰トハ、第三字上下ノ四字ヲ擷ル也、解鐙ハ、一二ヨリ三四順下シテ、第五字ニ送ル也、卽流水ノ法也、擷腰解鐙病ニ非ズ、徒ニ擷腰ヲ用ヒ、徒ニ解鐙ヲ用ユルヲ、長擷腰長解鐙トテ、病トスル也、二體ニ限ルニアラズ、錯綜ノ間、唯始テ旅途ニ就キ、行ニ從ツテ、山川都邑ノ新ナルヲ見ルガ如クナランヲ要ス、五七言同ク然リ、長擷腰ノ詩、上官儀、曙色隨行漏、早吹入繁笳、旗文縈桂葉、騎影拂桃花、碧潭寫春照、青山籠雪花、

○東坡嘗論作文之法曰、作文如行雲流水、初無定質、但常行於所當行、止於所不可不止ト、是啻作文ノ法ノミ獨然ルニアラズ、作詩家ノ訣モ、如此ト知ルベシ、

韻法

押韻、和俗ニ韻ヲ蹈ト云、詩體ニハ、古今ノ異モアレドモ、韻ヲ踏コトハ、古今一轍也、踏コトハ古今一轍ナレドモ、其法ハ古今同カラズ、蓋漢魏以來、五七言ニナリテノ韻法、古ニ異ル所ハ、古人ハ、助字ヲバ韻字ノ外ニ置ケリ、元首明哉、股肱良哉、庶事康哉、就其深矣、方之舟之、就其淺矣、泳之游之、

「牆有茨不可掃也、中冓之言不可道也、」椒聊且、遠條且、ナド云類也、偶ニハ、其虚其邪既亟只且、ト助字ヲ韻ニシタルモアレドモ、是ハ稀ナル例ニテ、變法ナリ、同只且ノ字ナレドモ、嵇康、仰落驚鴻俯引淵魚盤于游田其樂只且後世ノ詩ニテハ、カク韻ニ踏ム、正法ナリ、故ニ後世ノ詩ニテハ、古辭三百篇等ニ擬スルノ外、助字トモ韻ニフムベシ、借問何由太瘦生「眼中之人吾老矣、助字ヲ韻トスベシ、是ヲ古今用韻ノ異トス、」張鱗之ノ韻鏡、梅誕生字彙ノ直横圖ノ如キ者、コレヲ韻譜ト云、韻會韻瑞ノ如キ者、之ヲ韻書ト云、上古ノ時、韻ハ有リシカドモ、韻譜ハ無リシナリ、故ニ譜無カリシ世ト、譜出來リシ世ト、古今同キコト能ハズ、韻法大抵、古韻今韻、協韻、鄕韻、詩家ノ用、借韻、落韻、失韻、傍韻、通韻、重韻、疊韻、分韻、和韻、和韻中、又分同韻、依韻、用韻之三、而趁韻、險韻、啞韻、寛韻、窄韻、平韻、側韻、葫蘆韻、轆轤韻、進退韻、雙用韻、倒押、强押、促句韻、換韻、不換韻、盡押韻、全不押韻、アリ、古詩ノ韻法アリ、近體ノ韻法アリ、ソレ今ノ世ニ、古韻ハ傳ハラネバ、梁ノ沈約ノ定ムル所ニ、依ラザル事ヲ得ズ、マシテ唐人取士ニ詩ヲ以テスルモ、全ク之ニ依ルヲヤ、後世今ノ韻ヲ以テ古韻ヲ讀ム、古韻終ニ得ベカラズ、終ニ協韻アリ、

古韻

「古韻トハ、鴥彼晨風、鬱彼北林、左傳ニ、翹翹車乘、招我以弓、林風韻ヲ同ウシ、乘弓韻ヲ同ウスルノ類也、」

今韻

今韻トハ、沈約所分ノ、四聲一百七韻ナリ、分チ得テ韻ニ不類ナシ、不類ナキノ法ヲ以テ、不類ノ韻ヲ律ス、

協韻

故ニ風協林テ風トナリ、弓協乘テ弓トナル、是也、是モ古韻ニ非ズトテ、取ラヌ人モアリ、サレドモ音韻ノ古呼知ルベカラザレバ、今ノ古書ヲ讀者、皆聲ヲ平上去入ニ分チ、韻ヲ東冬江支ニ用ユレバ、

有來レル協韻モ、亦廢シ難キニ似タリ、沈約音韻ヲ定メテ、陳隋以下依之故ニ沈約以前ノ詩ヲ、沈約韻ニテ見レバ、失韻ノ如シ、譬バ魏左延年、從軍行

苦哉邊地人。一歳三從軍。
三子到燉煌。二子詣隴西。
五子遠鬪去、五婦皆懷身。

西ハ唐音モ跳ザレバ、協ハセテ讀ムト見ヱタリ、文眞古ハ通ジ、今ハ分ツ、沈約ノ法ニヨラバ、無韻ノ詩ト謂テ可也、蘇武別李陵詩、

黄鵠一遠別、千里顧徘徊、
胡馬失其群。思心常依依。
何況雙飛龍。羽翼臨當乖。
幸有絃歌曲、以以喩中懷
請爲遊子吟、泠泠一何悲。
絲竹厲清聲、慷慨有餘哀。
長歌正激烈、中心愴以摧。
欲展清商曲、念子不得歸。
俛仰内傷心、涙下不可揮。
願作雙黄鵠、送子共遠飛、

滄浪詩話ニ、韓退之此日足可惜篇、凡雜用東冬江陽庚青六韻、歐陽公謂退之遇寛韻、則以旁入他韻、非也、此乃用古韻耳、於集韻自見之、トイヘリ、其後ニモ、古韻ヲ好メル人モアリ、鶴林玉露曰、楊誠齋曰、今之禮部韻、乃是限制士子程文、不許出韻、因難以見其工耳、至於吟咏性情、當以國風離騷爲法、又奚禮部之拘哉、魏鶴山亦云、除科擧之外、間賦之詩、不必一一以韻爲較、況今所較者、特禮部韻耳、此只是魏晉以來之韻、隋唐以來之法、若據古音、則今麻馬等韻、元無之、歌字韻與之字韻通、豪字韻與蕭字韻通、言之及此、方是經雅ト、通雅ニ互聲ノ例アリ、曰、說文、顚蹎闐以眞爲聲、烟咽以甄爲聲、馴紃以川爲聲、詵駪以先爲聲、是皆先眞韻中、互

爲聲也、如天亦叶人、田之音陳、可知古先眞多通、亦猶覃侵東蒸之通、麻多入虞、灰多入微、庚多入陽之類也、又曰、古田與陳通、戰國策陳軫、史或作田軫、陳敬仲、世家作田敬仲、荀子田仲、史鰌田仲、即陳仲子、詩應田縣鼓、宋書樂志、應輮懸鼓トアリ、互聲トハ、田先ノ聲ニアレバ音テン、眞ノ韻ニ入レハ音チンナリ、然レバ後ニ出セル大津首ノ詩、眞ノ韻ニ烟ノ字アル、古音ニシテ互聲スレバ音イントヨムベシ、サルニヨリ、纔ニ虎關ノ三重韻ヲ見テ、人ノ韻礎ヲ非譏スベカラズ、サレドモ此韻久シク行ハレテ、近體ハ、此韻ヲ以テ興リシ者ナレバ、辭賦贊銘ノ類ニアラズンバ、異樣ヲ好ムベカラズ、縱令詩中ニ用ユトモ、古詩ナルベシ、明陳元贇ト云者、國初ノ頃歸化シテ、石川丈山深草ノ元政ナドト、詩盟ヲ結ビシ人ナリ、元元集、謁拜亞相源敬公寢陵詩、七律春鱗因城隣ト押タリ、自注、城音中、古韻通用唐李適詩、化工妝點洛陽春、柳絮飛花散滿城ト引ケリ、サレドモ近體ニテハ、失韻ト云ベシ、

郷韻

郷韻トハ、其方角ハカリニ用ヒテ、天下ニ通ズル雅正ノ音ニアラザル者也、詩林廣記曰、韓退之、方橋詩、

非閣復非船。　可居兼可過、
君欲問方橋、　方橋如此作、

作音佐、詩人用事、有乘語意到處、輙從其方言者、亦自一體、但不可以爲常耳、呉人以作爲佐音、退之用此語ト、コレナリ、

落韻

古詩ハ、平韻側韻、隨意ニ用ユ、近體ハ、專平韻ヲ押シテ、側韻ヲ押セズ、於是起句ノ韻法、五言側起ヲ正トシ、七言、平起ヲ正トス、七言ニシテ平起セザレバ、之ヲ號シテ、落韻ト云、故ニ同是側起也トイヘドモ、落韻ノ稱ハ七言ニ限ルコト也、

借韻

詩人玉屑、婁虔餘、

失韻

滿額、鵝黄金縷衣、　翠翹浮動玉釵垂、
從教水濺羅襦溼、　疑是巫山行雨歸、

是ハ借韻也、サレドモ之ヲ落韻トイヘリ、二名亦相通ズト見ヱタリ、名同ウシテ義別ナリ、且落韻ノ名、平側ニ限ラズト覺ユ、傍韻モ亦借韻也、借韻ハ一篇ニ通ズベク、傍韻ハ起句ニ在ベシ、是其異也、借韻トハ、一首中佗韻ヲ借ル事、李白鸚鵡洲、全首庚韻ニシテ、青ノ字ヲ借リ、杜甫九日崔氏東山草堂、眞韻ニシテ芹ノ字ヲ借ルノ類ナリ、或ハ之ヲ失韻トモ云、サレドモ委ク論ズレバ、失韻借韻差別アリ、實ノ失韻ハ誤押ノコト也、宋蘇子美、松江長橋觀魚、

鳴櫓莫觸蛟龍睡、　擧網時聞魚龍腥、
我實宦遊無況者、　擬來隨爾帶筌箵、

筌箵ハ、魚ヲ捕ル籠也、此詩第二句腥ノ字ヲ押タレバ、下平九青ト定メテ、箵ノ字青韻中ノ字ト思ヒテ、結句ニ押シタル也、サレドモ、廣韻箵集韻、青ノ韻ニ收メズ、庚清ハ通韻ナリ、此字モシ通韻中ナレバ、古韻ヲ用ユルトカ、通韻ヲ借ルトカ、云ニモナルベシ、サレドモ箵モト上聲迥韻中ノ字ナレバ、平側ヲ隔テテ借ルベキ道ナシ、故ニ之ヲ誤押ト謂テ、實ノ失韻ナリ、平側ヲ隔テズトテモ、通韻ニ非ザレバ誤押ナリ、

傍韻

傍韻ハ、通韻ニテ起句ヲ補ヒタル也、是ハ起句ニ限ルコトナリ、謝茂秦是ヲ論ジテ、七言絶句、盛唐諸公、用韻最嚴、盛唐突然而起、以韻爲主、意到辭工、不假雕飾、或命意得句、以韻發端、混成無跡、宋人專重轉合、刻意精練、或難於起句、借用傍韻、牽強成章、トアリ、言ハ、唐人ノ詩ハ、起句ヨリ作ル、故ニ本韻ヲ用ユ、宋人ハ、三四ヲ先得ル故、起句ノ韻字ヲ難ンズ、故ニ之ヲ、カタハラ通韻ニ求メテ押ムト云コト也、サレドモ、盛唐ノ人トテモ、儘有ルコト也、李白、犬吠水聲中、

通韻

重韻

桃花帶雨濃、李頎、知君官屬大司農、詔幸驪山職事雄、ナドノ類ナリ、明王守仁、歸興ノ作、一絲無補聖明朝、兩鬢徒堪長二毛、コレモ韻末遠カラズ、謝茂秦、許子何處來、相留半日間、最傚フベカラズ、シカシナガラ是ハ、來何處ヲ誤寫シタルカトモ、思ハルル也、通韻トハ、東冬也、支微齊也、魚虞也、佳灰也、眞文元也、元寒刪先也、蕭肴豪也、歌麻也、庚青蒸也、覃鹽咸也、六朝アタリ迄ハ、通押シタルコト多シ、唐人ハ、古詩ニモ大概イム、近體ニ稀ニアルモ、失韻病ニ屬ス、傍韻モ通韻ナリ、但起何ニ限リテ、通韻ノ字ヲ押スルナリ、支微ハ多シ、齊ニワタルコトハ少シ、眞文、又文元ハアリ、眞元ニワタルコトハ少シ、寒山ハ多シ、元仙ハ少シ、肴豪ハ多シ、蕭ニワタルコトハ少シ、庚青ハ多、蒸ニワタルコトハ少シ、覃鹽咸ハ、狹韻ナレバ例稀ナリ、重韻トハ、同字ヲ押タルナリ、又複韻トモ云、三百篇ニテイハバ、胡爲乎株林、從夏南、匪適株林、從夏南、詩道草味ノ時節ハ、禁忌法度ト云コトモナカリシ故、瑕瑾ト云コトモ無シ、蘇武ノ詩、古詩十九首、栢梁、梁甫等、重韻、行文ノ間、字ノ重出相厭ハザルガ如シ、杜甫飲中八仙ナドモ、此法ヲ以テ行ルナリ、昌黎ノ詩ナドモ、古詩ニハ、時時古韻複韻ヲ用ユ、是古ニ傚フ者ナリ、龕ヲ以テ失スルニハ非ズ、蘇子瞻送江公著詩、忽憶釣臺歸洗耳、亦念人生行樂耳、ト重用シ、自注其下曰、二耳義不同、故得重用ト、是ハ義異レバ、同字用ユベシトシタリ、嚴滄浪以テ非トス、陳子昂、

故人洞庭去、楊柳春風生、
相送河洲晩、蒼茫別思盈、
白蘋已堪把、綠芷復含榮、
江南多桂樹、歸客贈平生、

前ノ生ハ生枯之生、後ノ生ハ、平常ノ意、同

華花

字重用、東坡以前ヨリアリ、古風タリトモ、大槩ハ避テ可也、近體ニ於テハ、決シテ用ユベカラズ、且華ノ字、華トスルハ略ナリ、後世榮華文華京華ナド、此華ヲ用ヒ、草木ノ葩ニ、花ノ字ヲ用ヒタリ、本花ハ華ノ省字ナリ、サレドモ、今ハ、華花竝ベ用ユル事ハ忌ズ、但地名華山華陽ナド、禡韻去聲ニ屬ス、京華中華ハ、ハナヤカナルノ意ニシテ、地名ニ非ズ、平聲也、

同字

同字ノ事律中ニハ、韻ニアラズトテモ忌ム、同字異聲、榮華平聲太華去聲ノ如キハ、別字ト同ジ、同字同聲トテモ、韻ニフムニ非ザル所ハ、傍犯妨ゲズ、

傍犯

傍犯トハ生枯ノ生、平生ノ生、明月正月、子雲白雲ノ類也、又一字ハ韻ニアリ、一字ハ句中ニアル、許スベシ、然レドモ、既ニ前ニモ出タル如ク、詩義中ノ鏡ノ詩、三句一字ヲ以テ韻トシ、又首尾吟、前後一韻ナルガ

疊韻

如キハ、別段ニ疊法ヲ立タレバ、此例ニアラズ、子美杜鵑行、西川有杜鵑、東川無杜鵑、涪南無杜鵑、雲南有杜鵑、江南古曲、魚戲蓮葉東、魚戲蓮葉西、魚戲蓮葉南、魚戲蓮葉北、亦異曲同工、作者此地位ニ到レバ、規矩繩墨ヲ離レテ、自許ス所アル者也、規規トシテ論ズル所ニ非ズ、サレドモ此疊韻モ、詩ニ、父兮生我、母兮鞠我、拊我畜我、長我育我、顧我復我、出入腹我、トアリ、シカルニ此蓼莪ノ詩モ、得ト味ヘバ、我ノ字ヲ助字ノ意ニ見テ、鞠育復腹ト踏テ、欲報之德、昊天罔極、ノ二句ニ至リテ、始テ韻ヲ踏替タルト云ニモ非ズト見ユ、サレドモ同字ヲ踏タルニ相違ナケレバ、慥ニ例ニ引ベキ事也、又古詩、飲馬長城窟行ニ、客自遠方來、遺我雙鯉魚、呼童烹鯉魚、中有尺素書、長跪讀素書、書中竟何如、ト韻ヲ疊ミタルモアリ、

晉人那呵灘曲、

我去只如還、　終不在道邊、

隔句疊韻

我若在道邊、良信寄書還。

隔句疊韻者、白集、啄木曲、莫買寶剪刀、虛費千金直、我有心中愁、知君剪不得、莫磨解結錐、虛勞人氣力、我有心中結、知君解不得、莫染紅絲線、徒誇好顏色、我有雙淚珠、知君穿不得、莫近紅爐火、炎氣徒相逼、我有兩鬢霜、知君消不得。

分韻

分韻ハ、詩ヲ賦スルニ臨ミテ、一百七韻ヲ分ツトモ、又字ヲ分ツテ賦スルトモ、古語詩句ヲ截テ韻ニスルトモ、其時ノ興ニ從フコトニテ、畢竟宿構ヲサセマジト云コトナルベシ、韻ヲ分チテ取タルニハ、得某韻ト書ク、字ヲ得タルニハ、得何字ト書ク、韻古語詩句ヲ用ユトハ、東坡集、送蔣穎叔詩引曰、穎叔出使臨洮、軾與穆父仲至同餞、各賦詩一篇、以今我來思爲韻、致諡歸之意、軾得我字、此引詳カニ書タル故、ワケ能分ル丶也、又古語ヲ一人ニテ分チ賦スルモアリ、同集、與王郎昆仲及兒子邁、遶城觀荷花、登硯山亭云云、分韻得月明星稀四首トハ、句ヲ採リテ各一句宛ヲ得、其句數宛ノ詩ヲ作ル也、猶委ク下條ニ出ス、

和韻

和韻ハ、晩唐、元稹白居易劉禹錫等ノ唱酬ニ淑マル、詩ハ此贈ツテ彼答フルヲ以テ、贈答ト云、我唱ヘテ人和スルヲ以テ、唱和ト云、喬彥駿嘗テ此義ヲ細ニ辨ジテ曰、同是和ノ字、贈ルニ答フルモ和スルト云ハ、和即答ノ意也、某人ノ何作ヲ和スルトハ、題ヲ同ウスルノ意、彼言出スヲ、我ツケテ歌フ、是贈答唱和ノ別也ト云云、謝靈運東陽溪中贈答、

可憐誰家婦、緣流灑素足、
明月在雲間、迢々不可得、

答

可憐誰家郎、緣流乘素舸、
但問情若爲、月就雲中墮

是ハ一人ノ作ナレドモ、贈答ト云者ハ、先

同韻　次韻　用韻

是等ノ詩ヲ意得ニシテ作ルベシ、唐裴晋公出討淮西、過女几山題詩曰、待平賊壘報天子、莫指仙山示老夫、韓退之和之曰、敢請相公平賊後、暫携諸吏上崢嶸、唱和ノ正體ナリ、サナケレバ聲ノ寄合テ咄スル樣ニナル者也、故ニ昔ノ贈答ニ、韻字ノ拘リナシ、唯和スル者ハ、答來意而已也、文體明辨曰、和韻有三體、一曰同韻、謂同一韻中、而不必用其字也、二曰次韻、謂和其原韻、而先後次第各因之也、三曰用韻、謂用其韻、而先後不必次也、古人賡和、答其來意而已、初不為韻所縛、如高適贈杜甫云、草玄今已畢、此外更何言、杜和云、草玄吾豈敢、賦或似相如、退發湘潭、寄杜甫云、相憶無南雁、何時有報章、甫和云、雖無南過雁、看取北來魚、誠ニ唐詩選ニ載タル、賈至早朝ノ唱和モ、結皆鳳池ノ故事ヲ以テ、來意ニ應ズ、ソレガ韻ヲ和スル樣ニナリテ、來意ニ應ズル意ハ、

趁韻　險韻

薄クナリタリ、和韻ハ、畢竟才ヲ鬪ハシムルコトニテ、晩唐ヨリ宋ニ至ツテ往復シバシバナリ、嚴羽和韻最害人詩ト云シヨリ、明ノ七子ナドハ好マザリシ也、且才乏ケレバ、趁韻ノ失ト云コトアリ、其韻字ヲ趁テ其聯ヲナス故、其一聯ハ成就シテモ、首尾ニ徹シテ脈絡貫カヌ事ナリ、又六箇敷僻ナル字ヲ押スルヲ、險韻ト云、劇韻トモ、强韻トモ云、險韻ハ僻澁ニシテ、雅馴ナラザル故、大雅ノ徒ハ取ラズ、然ルヲ强テ其韻ヲ歩セントスレバ、彌僻澁奇怪ヲ作サザルコトヲ得ズ、固ヨリ唱和ニ妨ナケレバ、韻ハ歩セズトモヤミヌベシ、サレドモ來意ニ答フルハ、和韻ヨリハ難キ者ナリ、來意ニ答フル意モナク、韻ヲ歩スル事モナクシテ、互ニ唱酬シ、兩聲相語ルノ態ヲナサン事見苦シ、聲律拗ヲ忌ムハ、晩唐ノ風也、今ノ人遵守ス、和韻詩ノ從容ヲ害

啞韻

スルモ、拗ヲ忌ノ從容ヲ害スルモ、傍觀スレバ事相似タリ、然レバ和韻ハ晩唐ノ人ノナス所、急度作ルマジト、意地張ル一ニモ及ブマジ、興ニ任スベシ、又支鹽ヲ啞韻ト云、物言ヒノハタラカヌニ義ヲトル、サル故イミシ人モアレドモ、支ハ字ヲ收ムル事廣シ、鹽ト同カラズ、

寬韻

寬韻ハ、他韻ト廣ク通ズ、元寒刪ノ類也、

窄韻

窄韻ハ、覃凡ナドノ字少キ韻也、

和韻先後

サテ又和韻ノ事、唐ヨリハ、日本サキニ始マレリ、林學士一人一首、大津首、和藤原大政遊吉野川韻詩ヲ擧テ曰、本朝於是始見之、且在元白劉酬和之前、則可謂奇也ト、藤大政トハ淡海公也、其詩ハ、

地是幽居宅、山唯帝者仁、
潺湲浸石浪、雜沓應琴鱗、
靈懷對林野、陶性在風烟、
欲知歡宴曲、滿酌自忘塵、

今懷風藻、本韻ノ詩ハ、集中ニ見エズ、題下仍用前韻ト注セリ、又葛井廣成モ、藤大政佳野ノ作ヲ和シテ、仍用前韻四字ト注シタルアリ、世ニ和韻ハ、元白劉ノ唱和ニ始マルト云ヘリ、然レドモ元稹上令狐相公書ニ、某與同門生白居易友善、居易雅能爲詩、就中愛驅駕文字、窮極聲韻、或爲千言、或爲五百言、律詩以相投寄、小生自審、不能有以過之、往往戲排舊韻、別創新詞、名爲次韻、蓋欲以難相挑耳トアレバ、元稹ニ始リテ、白氏ト才ヲ競フ者ナリ、然ルニ續文章緣起ヲ讀メバ、和詩梁武帝同王均、和太子懺悔詩、始爲押韻トアレバ、六朝已ニ此事アルニ似タリ、本邦ノ和韻、元白ニ先タツトイヘドモ、梁人ニ法トル事アルニヤ、切ニ怪ム、梁已ニ此事アリ、唐代タトヒ之ヲ用ヒズトモ、元白ノ大家、何ヲ以テカ之ヲ知ラザルヤ、詩人玉屑ヲ見ルニ、宋寇萊公、侍兒アリ蒨桃ト云、酒ヲ行ラシテ歌フ、公

之ニ束帛ヲ贈ル、內人詩ヲ以テ公ニ贈ツテ曰、

夜冷衣單手屢呵、幽窗軋軋度寒梭、
臘天日短不盈尺、何似妖姬一曲歌、

公和シテ曰、

將相功名終若何、不堪急景似奔梭、
人間萬事君休問、且向尊前聽豔歌、

鶴林玉露、徐淵子九日、

衰容不似秋容好、坐上誰憐老孟嘉、
牢裏烏紗莫吹卻、免教白髮見黃花、

和、

呼兒爲我整烏紗、不是無心學孟嘉、
要摘金英滿頭插、明朝還是過時花、

東坡集、姪安節遠來夜坐三首、皆同韻ニ、起句嶸、二句聲ノ字ヲ踏タルガ、第三首シテハ、落第汝爲中酒味、吟詩我作忍饑聲、トモ落韻シタル有、又詩林廣記、司馬溫公邵康節ノ來ランコトヲ約シケルニ、期過テ到ラザリケレバ、溫公候康節ヲ、

淡日濃雲合復開、碧伊淸洛遠縈迴、
林間高閣望已久、花外小車猶未來、

康節、

君家梁上年時燕、過社今年猶未迴、
爲罰誤君凝望久、萬花深處小車來、

是等ヲ照シテ考レバ、韻ヲ和スルニ、起句落韻ナルヲ、本韻ニテ補ヒテモ、首句ヲ平起ニシタルヲ、落韻ニナシテモ、苦カラズ、且失禮ニモナラズト見エタリ、松井何樂詩法要略ニ曰、和韻來詩ノ連字ヲ犯スコトナカレ、二字續キヲ犯スサヘ不可也、マシテ三字ヲヤト、此言誠ニ是也、サレドモ徘徊躊躇ナド云樣ナル連綿字ハ、强テ易ヘントスレバ、卻テ詩體ヲ損フ也、此意得モ亦アルベシ、

依韻

依韻ト云、同韻ト云一事也、

追和

又蘇東坡以來、追和ト云コトアリ、追和トハ、時ニ當ツテ唱和スルニ非ズシテ、古人ノ

和歌

詩ヲ、今追テ和スル也、

小舟眞一葉、下有暗浪喧、
夜棹醉中發、不知枕几偏、
天明問前路、已度千銀山、
噫我亦何爲、此道常往還、
未來即早計、已往復何言、

是東坡追和陶淵明飲酒韻也、詩林廣記曰、東坡謂、古之詩人、有擬古之作矣、未有追和古人者也、追和古人之詩、則自東坡始ト、其外長篇ヲ和シタルコトモ、其例多シ、又和歌者流、人詩ヲ寄レバ、其韻ヲ、歌ノ尾ニ置テ和トス、詩ヨリ和歌ヲ和スル、細川玄旨法印、九州道記ニ、敷島ノ道スナホナル御代ニ逢テ、恵久シキ箱崎ノ松、ト云ヲ和シテ、

始識逢君情所鐘、向來相約對開窓、
帝都門外莫言遠、千里同風一樹松、

是等ヲ法トスベシ、蓋和韻ハ、前詩ノ興趣

換韻

文字ヲ用ヒザル者、才多ク筆巧ミナルヲ覺ユ、蘇子ノ如キ者是ナリ、古體ハ、平韻側韻、或ハ通ジテ一韻ヲ用ヒ、或ハ數韻ヲ轉ズルモ、隨意也、但五言古ハ、一韻終篇ヲ正トス、數韻ヲ轉ズルヲ奇トス、歌行體ノ如キハ、是ト同ジカラズ、韻ヲ踏カエル事ハ換韻又轉韻トモ云、古唐詩合解ニ、高適、人日寄杜二拾遺詩ヲ、三解三韻、古風ノ正調トイヘリ、サル事ニテモアルヤ知ラズ、蓋其轉韻ノ句、必韻字ヲ押ム也、其換樣ハ、何句ト限リタルコハナシ、劉延芝、代悲白頭翁詩ナドハ、最初ハ、二句二句ニテ踏カエタリ、イカニシテモ、換韻ノ第二句皆韻アリ、王維、終南有茅屋、前對終南山、是五言ノ正法ニテ、踏落シタリ、第三句ヨリ七言ニウツレル故、終年無客長閉關、ト又韻字ヲ用ヒタリ、又杜甫、陪王侍御同登東山最高頂宴詩、

姚公美政誰與儔。不減昔時陳太丘。
邑中上客有杜史。多暇日陪驄馬遊。
東山高頂羅珍羞。下顧城郭消我憂。
清江白日落欲盡。復携美人登彩舟。
笛聲憤怨哀中流。妙舞逶迤夜未休。
燈前往往大魚出。聽曲低昂如有求。
三更風起寒浪湧。取樂喧呼覺舟重。
滿空星河光破碎。四座賓客色不動。
請公臨深莫相違。迴船罷酒上馬歸。
人生歡會豈有極。無使霜露霑人衣。

上愁玉階空佇立、宿鳥歸飛急、何處是歸程。長亭連短亭。

此ハ、毎二句ニテ韻ヲ換タル也、畢竟歌行ノ類ハ、句モ韻モ、意ヲ得テハ自由ナル者ニテ、定規ハナキ者ト見ヱタリ、サレドモ初心ノ間ハ、鳥ノ鷓鴣ノ眞似モイヤナリ、隨分先古人ノ句法韻法ヲ稽ヘ、以範我馳驅ベキコト也、サテ飲中八仙歌、毎句押韻タリ、元詩體要、盡押韻者、一門ヲ立テテ、栢梁體ト云、栢梁ハ、モト平字ヲ押シタレドモ、側ヲ押シタルモ、通ジテ其内ニ收メタリ、其說曰、漢武臺成、詔群臣、各賦詩、毎句用韻、後人遂名爲栢梁體、曹丕效之爲燕歌行ト、葫蘆轆轤進退韻ハ、異體篇ニ之ヲ悉カニス、又李白元丹丘歌、元丹丘愛神仙、朝飲潁川之清流、暮還高岑之紫烟、三十六峰長周旋、長周旋躡星虹、身騎飛龍耳生風、橫河跨海與天通、我知爾遊心無窮、始ハ隔句韻ニシテ、終ハ毎句押韻、畢竟古詩用韻自在ナル故ナレバ、遂篇ニ說難シ、只堂ニ上リ堂ニ入ハ自其自由三昧ヲ得ン、明詩解、朱應登樟樹詞、聲調已ニ諧テ、接句モ亦韻ヲ押ス、初心ハ遠慮スベシ、

盡押韻

樟樹鎭前江水流。羅山脚下稲花秋。
青樓小婦不知愁。捲上珠簾看客舟。

雙用

雙用韻ハ變體也、異體ノ篇ニ載ス、其他絕

短古韻

由韻裝倒

句結ノ韻一二ト異ル者ハ、異體中ニ載セタル、岑參春興戲題ノ作、一二ト三四ト、韻字平側ヲ異ニスル者ハ、體製篇ニ載タル、王勃懷友、劉方平烏棲曲也、二三四一韻ニシテ、起句佗韻ナルハ、同篇、岑參寄秦中故人作也、皆律ノ常法ニアラズ、概シテ短古トナスベシ、夫韻字定局アリ、聲律定位アリ、語意順下シ難キ時ハ、其文ヲ錯綜シテ意ヲ成ス、之ヲ倒裝ト云、退之春雪ヲ詠ジテ、窺沼鸞入鏡、度橋馬行天ト云ベキヲ入鏡總テ五解二十句、前三解、一韻連用ストイヘドモ、轉韻首句ノ格ヲ用ヒテ、皆首句韻ヲ押スル者アリ、國初以來書鞍馬、神妙獨數江都王ナド踏落シタルハ、甚稀ナリ、サレドモ古人詩中ニハ、段段起得テ奇ナル者アリ、李白行行且遊獵篇、邊城兒生來不讀一字書、但將遊獵誇輕趫、胡馬秋肥宜白草、騎來躡影何矜驕、又飛龍引、黃帝鑄鼎於荊山、鍊丹砂、丹砂成黃金、騎龍飛上太淸家、雲愁海思令人嗟、句ヲ以テスレバ、韻ヲ押セザルガ如ク、韻ヲ以テスレバ句シ難シ、大家ノ手段也、又五言古中ニモ、七言歌行ノ韻法ニ類スル者、稀ニアリ、漢詩、飮馬長城窟行、

靑靑河畔草、　綿綿思遠道、
遠道不可思、　宿昔夢見之、
夢見在我傍、　忽覺在佗鄕、
佗鄕各異縣、　展轉不可見、
枯桑知天風、　海水知天寒、
入門各自媚、　誰肯相爲言、
客自遠方來、　遺我雙鯉魚、
呼童烹鯉魚、　中有尺素書、
長跪讀素書、　書中竟何如、
上有加餐食、　下有長相憶、

李白、長干行、黃山谷ハ、之ヲ李益尙書ノ詩也トイヘリ、

憶妾深閨裏、烟塵不曾識、
嫁與長干人、沙頭候風色、
五月南風興、思君下巴陵、
八月西風起、想君發楊子、
去來悲如何、見少離別多、
湘潭幾日到、妾夢越風波、
昨夜狂風度、吹折江頭樹、
淼淼暗無邊、行人在何處、
好乘浮雲驄、佳期蘭渚東、
鴛鴦綠蒲上、翡翠錦屏中、
自憐十五餘、顏色桃李紅、
那爲商人婦、愁水復愁風。

同　菩薩蠻詩、蠻又作鬘、塡詞名、解曰、西域婦人首裝也、太中初、女蠻國入貢、危髻金冠、纓絡被體、號菩薩蠻隊、東涯名物六帖、天女舞ト譯シタリ、宋人詞ノ淵源トスル所ノ者也、

平林漠漠烟如織、寒山一帶傷心碧、暝色

倒押

入高樓。有人樓鸞窺沼行天馬度橋。ナド、上手ノ手段ニアルコト也、此法語ニ窮メイヒタル樣ニテハ、愈醜ヲマス、唯順下スルヨリ潤色ヲ得ズンバ其詮ナシ、詩作ラヌ人ノ、ナド順ニ言下サズシテ、倒裝スルゾト、問ケルニ、我答ヘテ、望月ノ駒今ヤ引ラン、ト云コソ順ナレドモ、今ヤ引ラン望月ノ駒、ト云テ、其詞愈優ニ雅ナルニ非ズヤト、云ケレバ、點頭シキ、韻字ヲ上下シタルヲバ倒押ト云、韓愈孟郊、差參瓏玲、湖江、慨慷、ナド用ヒタルニハ、群雌孤雄、文苑ニ跋扈ス、憎ムベシ、氷川詩式、千鐘、萬鼓咽耳喧攢雜啾嚄沸虓塡、秖今年方四十五、後日懸知漸莽鹵。コレヲ押韻ノ一法ニ擧タルハ、咲フベシ、黄山谷、西巴人ノ名ナルヲ、蹤羨不如放麑樂羊終愧巴西ト用ヒタルハ、愈甚シ、文選中ニモ、江淹、相思巫山渚、悵望陽雲臺、韻ノ爲ニ陽臺ノ雲ト云コトヲ得

ズ、サレバ宋時高州貢院ニシテ、士子詞賦ノ中、韻ヲ來儀之凰鳳ト押シケレバ、主文一首ヲ贈レリ、

考試到州高。吾徒愧冒叨。
來儀賦凰鳳。素節詠羊羔。
騷客稱原屈。貪人嫉饕餮。
如何得元解。歸去學潛陶。

強押

詩林廣記ニ見ユ、韻字合ザルヲ以テ、無理ニ韻ヲ合ハスルヲ、強押ト云、鮑明遠、離心壯爲劇、飛念如懸旗、懸旌ノ字アッテ、懸旗ノ字ナシ、韻ニ抱ハラレテ旗トナス、拙ト謂ベシ、古詩源曰、易旌爲旗、古人亦有此種、強押ト、但強韻ハ、押シ惡キ字ノ謂ニシテ、強押ト同カラズ、

促句

促句韻トハ、三句宛ニテ韻ヲ換ル也、逐句韻トモ云、元次山大唐中興頌ナドモ、同一法也、促トハ、今一句フムベキヲ、早ク促メタル也、逐トハ、後ヨリ逐事ノ急ニシテ、今一韻ヲ踏ニ、暇ナキノ意ニヤト思ハル、促句韻ノ法、二疊ニモ、三疊ニモ、其例見ヱタリ、

蘆花如雪灑扁舟。正是滄江蘭杜秋。
忽然驚起散沙鷗。平生生計如轉蓬。
一身長在百憂中。鱸魚正美負秋風。

二疊六句、促句ノ本體也、是ヲ詠ズルニ、韻ヲ按ジテ讀ザレバ、三韻ヲ詠ズル樣ニ成テ、促句ノ法ヲ失ス、

單殺

又句法ニ單殺アリ、促句トマギラハ敷モノ也、單殺トハ、雙殺ニ對スル言也、雙殺ハ句ヲ偶ニスル也、單殺ハ、句ヲ奇ニスル也、促句モ單殺ノ類也、單殺ト促句トノ差別ハ、促句ハ三句ニ限ル、單殺ハ、前ノ句數ニカモハズ、一句ナル也、其一句或ハ首ニアリ、或ハ尾ニアリ、唐人無題ノ詩ニ、

楊柳梟梟隨風急、
西樓美人春夢中。翠簾斜卷千條入、

李白飛龍引、鼎湖流水清且閑。軒轅去時有

弓劍、古人傳道留其間同例ナルベシ、コレ起句奇也、韻法ヲ考ヘザレバ、促句ノ疊マザル者ニ似タリ、若韻法ヲ以テ之ヲ考レバ、第二句韻ヲ押セズ、故ニ起句奇ニシテ、結雙殺ナルヲ知ル、漢高大風歌ナド、促句疊マザル者共イフベキ乎、但三句ノ法、漢高ニ始マルニハ非ズ、尙書元首ノ詠、詩ノ經ニ見スル者ノ首ナレバ、三句尤古ト云ベシ、老杜江行、

曲江蕭條秋氣高。　菱荷枯折隨風濤。
遊子空嗟垂二毛。
白石素沙亦相蕩。　哀鳴獨叫求其曹。

韻法ニ由テ考レバ、第三句單殺也、促句ノ如クナレドモ、促句ナレバ、四ノ句ヨリ韻カハルベシ、然ルヲ第四句ニ韻ヲ押ザレバ、則第三句單殺ニシテ、四五ヲ一聯ニシタル也、一聯ト雙殺ト、又同樣ニアラズ、雙殺ハ、二句一讀ニシテ、一聯ハ、二句一對ナリ、

雙殺

單殺トハ、子美贈王郎司直詩ニ、且脫劍佩休徘徊ノ句、韻ヲ照スニ、上ニ押ム仄ノ韻ヨリ來レバ、單殺也、ココニ於テ眼中之人吾老矣ノ句、又單句トナル、韻法ニ由テ知ルベシ、雙殺ハ、蘇子瞻、祀潮州韓文公詩、作書詆佛譏君王、要觀南海窺衡湘、歷舜九疑弔英皇、韻字其間ニアリトイヘドモ、其實十四字一句、即雙殺ナリ、飲中八仙歌抔ハ、通篇韻ヲ押スル作也、サレドモ一人一截ナラザレバ、讀ベカラズ、一人一截トナス時ハ、雙單殺ノ法自見ハル、詩ハ韻ヲ押セザル者ナシ、孔雀東南飛ノ詩ノ如キ、微ニ韻アルニ似テ、韻守ラズ、長ケレバココニ略ス、漢時采蓮曲、

全不押韻

江南可採蓮。　蓮葉何田田。
魚戲蓮葉間。
魚戲蓮葉東。　魚戲蓮葉西。
魚戲蓮葉南。　魚戲蓮葉北、

連韻　疊韻　轉韻　疊連　擲韻　重字　同音　擲韻

韻法ノ變、ココニ至ッテ極マル、

○祕府論、連韻、疊韻、轉韻、疊連韻、擲韻、重字韻、同音韻ノ七種ヲ出セリ、連韻ハ、平起本韻ニ從フ者也、疊韻ハ、第五第十ハ、元ヨリ韻ナルニ、第四第九モ、下ノ韻ノ字ヲ疊ム者、看河水漾瀁、望野草蒼黃是也、轉韻ハ、換韻也、疊連韻ハ、疊韻ノ類ナリ、唯疊韻トイヘバ、上句側ニテ起リ、下句平韻ニ入ル、疊連韻トハ、平起、羈客意盤桓、流淚下闌干、是ナリ、擲韻ハ、句中韻字ヲ用ユル者、不知羞不敢留、孤客驚百愁生ノ類也、重字韻ハ、望野草靑靑、臨河水活活ノ類ナリ、同音韻ハ、字別ナレドモ、音同キ者、今朝是何夕ト云、夜寐不安席、ト云類也、此無妨トアリ、數多ク出シタランハ如何ナリ、是等、畢竟不急ノ察也、其內擲韻知ズンバアルベカラズ、一句詩之ヲ用ユルト、用ヒザルノ二體アリ、體製篇ニ出セル、千乘萬騎上北邙ハ一韻也、抱鼓不鳴董少平ハ一句二韻、即擲韻ナリ、一句詩ハ、擲韻スベテ多シ、二句詩ノ擲韻、漢書胡廣傳、

萬事不理問伯始、天下中庸有胡公

晉書王坦之傳、

盛德絕倫郗嘉賓、　江東獨步王文度、

上句ノ三擲韻ナル者ハ、同書諸葛恢傳、

京都三明各有名、　蔡氏儒雅荀葛淸

輟耕錄ニ、一句兩韻ヲ短柱トイヘリ、元虞伯生、折桂令曲、

鑾輿三顧草廬、漢祚難扶、日莫桑楡、深渡南瀘、長驅西蜀、力拒東吳、美乎周瑜妙術、悲夫關羽云殂、天數盈虛、造物乘除、問汝何如、早賦歸歟、

是別韻ヲ擲ッ者也、サテ蜀術ノ二字ハ、中州之韻、入聲似平聲、又可作去聲、故魚虞相近トアリ、所謂鄉韻ナリ、

○詩ニ韻アルハ、家ニ礎アルガ如シ、礎堅

固ナラザレバ、家正シク立事能ハズ、故ニ韻礎ト云、是ヲ以テ詩人ノ韻ヲ愼ムコト、匠師ノ礎ヲ愼ムガ如クナルベシ、譬バ唐詩、夜半宴歸宮漏永、薛王沈醉壽王醒ト云ガ如キ、是唐玄宗ヲ詠ズルノ詩ニシテ、二王ハ、玄宗ノ兄弟也、楊貴妃ハ、モト壽王ノ妃ナリシヲ、玄宗謀ヲ回ラシ、壽王ノ方ヲ退カセ、暫女道士トナシ、追追宮中ニ入レ給ヒヌレバ、壽王ニハ、面白カラヌ意アルベシ、其後二王共ニ、玄宗ノ侍シ給フ所ニ替ルコトモナク、二王ノ仕ヘ奉ルニ替ル事モ無ク、共ニ君ノ御宴ニ侍シ、終夜渥恩ニ浴シ、限ナク酒ナドタフベ、稍夜深ケテ退散シツ、偖二人ナガラ御宴ニ侍シ、天氣モ是ヨリ接シ奉ルモ、少シモ替ル事トテハ無キ者ニ、同酒ニ薛王ハ痛ク沈醉シ、壽王ハサマデ醉ザリケリト、唯醒ノ一字ニ、限ナキ情態ヲ模寫シ、精神全ク韻字ニアリ、爰ニ意ヲ認テ、韻法ヲ會スベシ、サリトテ、韻字ハ盡如此巧ナレト云ニハアラズ、此意ヲ能會シテ作ル時ハ、只サラサラト、水ノ流レテサヘザル樣ニイフ中ニモ、シツカリト動カヌ所アル者也、又緩ヤカニテモ、其美ヲ妨ザルモアリ、明梅鼎祚、春詞、

海棠殘月照人低、枕上關山路欲迷、
生怕啼鶯驚曉夢、垂楊不種異關西、

此西ノ字ハ、東ニテモ、邊ニテモ、ト動ケドモ、押韻礎ノ美ヲ妨ゲズ、崔顥孟門行ハ、面白キ詩ニテ、唐詩選ニモ收メタリ、サレドモ北園新栽桃李枝、根株未固何轉移、枝ノ字ハ無テアルベキヲ、字ノ足ザル故、無理ニ入レテ韻ヲ合セタル故、入齒ノグハヒ惡ク成タル樣ニ、ブラツク也、白壁微瑕ト言ザル事ヲ得ズ、

五絶韻法

○五絶拗ヲ貴ム者ナレバ、正律ノ法ハ定マレル事ナレドモ、自在亦苦カラズシ

タル者ナレバ、正律ヲ用ヒザル詩ハ、韻法モ如何樣ニシテモ苦カラザル也、古人ノ例ヲ擧ンニ、唐詩選ニテモ粗足レリ、側入側起、聲律諧フ者ハ、夜送趙縱作、側入平起、聲律諧フ者ハ、平蕃曲、平入平起、聲律諧フ者ハ、汾上驚秋、平入側起、聲律諧フ者ハ、班婕妤、子夜春歌、平入平起、聲律拗ス、贈喬侍御、平入側起、聲律拗ス、易水送別、側入平起、聲律拗ス、贈喬侍御、平韻ニシテ、一三側ヲ用ユ、臨高臺、側韻ニシテ、一三平ヲ用ユ、此ニハ、上尾病ヲ犯サザル故、韻ノ正法也、其外怨情、平韻ニシテ、起句佗平ヲ用ユ、伊州歌、傍韻ヲ用ユ、竹里館、側韻ニシテ起句佗側ヲ用ユ、春曉、一二四側一韻ヲ用ユ、孟城坳、四句ノ礎皆側、裴迪鹿柴、側韻ニシテ起句平、轉句側、唯平韻ニシテ起句側、轉句平ナル者ヲ收メズ、是亦儘アル者也、王昌齡送胡大作、是也、

荊門不堪別、況乃瀟湘秋、
何處遙望君、江邊明月樓、

然レバ五絕拗、韻法ナシトイハンモ可也、然レドモ變法ハ佳境ヲ得テ用ユベシ、然ナケレバ彌拙ヲ增ス、七言四句ナルハ、側韻ナレバ、第三句ハ、極メテ平ナリ、

音義

○初心ノ間ハ、音義ヲ知ラズシテ、韻ヲ取違ユル事アリ、譬バ行ノ字、數行輩行ナドハ、ツラノ義ニテ、陽唐ノ韻也、獨行閑行ナドハ、ユクノ義ニテ、庚耕清ノ韻也、德行孝行ナドハ、ヲコナヒノ義ニテ、敬ノ韻ニ屬シテ去聲ナリ、ヲコナフト活字ナレバ、ユクノ意ニテ又平也、涯ノ字、人通ジテ五佳ノ反ヲ用ヒテ、ガイト讀ム、是ハ佳ノ韻ノ時也、麻韻ニ收レバ、五加反ガ、支韻ニ收レバ、魚羈反ギ也、故ニ相去萬餘里、各在天一涯、古詩十九首 支韻ニ屬シ、孤舟相訪至天涯、萬點雲山路更賒、劉長卿 麻韻ニ收ムル者也、滄浪

ノ浪、陽ニ屬シテ平、波、浪ノ浪、漾ニ屬シテ去短長ノ長ハ、陽韻ノ平、少長亭長等ノ長ハ、知丈反上聲、是ニ準ジテ念ヲ入ベシ、此問ノ人ハ通ズル樣ナレドモ、唐人ハ悉皆通ゼズ、

○分韻ノ法モ亦多方也、書法ハ、分韻某字トモ、分韻得某字トモ、只得某字トモ、分得某字トモ、又分韻トモ、探韻トモ書テ、某ノ字ト指サザルモアリ、白集ニハ、得某字韻、賦得某字トモアリ、其內得韻ト云ハ、一東二冬云云ヲ截ル也、得字トハ、一字一字ヲ截ル也、故得韻東、得東、韻杯、又鬮韻名物六帖ニ岩栖幽事ヲ引ケリ、分韻ハ其通リノ事也、韻字ヲ分ツハ、少シク用心アリ、譬バ昔韋鮑ノ二生アリ、一生ハ馬有テ妾ヲ求ム、一生ハ妾有テ馬ヲ好ム終ニ其所好ヲ以テ互ニ相換フ時ニ、紫衣ノ冠人二人出來リ、江淹謝莊也ト稱シ、江淹詩ヲ賦セントス、謝莊題ヲ請フ、江淹以妾換馬ヲ以テ題トシ、捨彼傾城、來其駿馬ヲ以テ、韻トセント定メテ、詩ヲ作レリト云コトアリ、其事ノ虛實ハ、論ズルニ足ラズトイヘドモ、誠ニ其席ニシテ、命題得韻ハ先如此、緣アル所ヨリ探リ來ルベシ、是故ニ、韻ハ成語ヨリ分ツベシ、又孰事テモ用ユ、韓退之同賓韋尋劉尊師不遇、韓ト賓韋ト三人也、同尋師ノ題ノ三字ヲ分ッテ韻トセリ、又同人送鄭尙書序末曰、公卿大夫士、苟能詩者咸相率爲詩、以美朝政、以慨公南行之思、韻必以來字者、所以祝公成政、而來歸疾也ト、是滿坐通ジテ一韻ヲ用ユル也、是ニ先立テ杜集、章梓洲水亭、同用荷字韻モノアリ、其成語ヲ分ツモ、古人ノ例亦一道ナラズ、場屋ニテハ、題中ノ字ヲ意ニ隨ッテ拔取リ用ユ、平側隨意ト云內、平字ヲ取用ヒタル例多シ、平字ニ非ザレバ、近體ニ非ザル故

ヲ以テナルベシ、又句ヲ分チテ作ルアリ、譬バ兩人ニシテ、一人ハ月明星稀ト云句ヲトリ、一人ハ、烏鵲南飛ト云句ヲトル也、如此ハ、韻字四アル故、一人前四首宛也、是ニテモ分句トハイハズ、分韻トイフ、又當時句ヲ以テ韻トスルアリ、東坡送安節題ニ、伯父送先人下第歸蜀詩云、人稀野店休安枕路入靈關穩跨驢安節將去爲誦此句、因以爲韻、作小詩十四首送之、是ナリ、于鱗同元美與子相公實分賦懷太山得鐘字、是題ヲ分チ韻ヲ分ツ者ナリ、又分韻ニハアラズ、其時ニ臨ミ、韻ハ何ニスベキゾト請コトアリ、宋祖後池ニ幸シ、月ニ對シ酒ヲ置キ、當直學士盧多遜ヲ召シテ、詩ヲ賦セシム、多遜請韻、兒ノ字ヲ賜フ、因テ賦シテ曰、

太液池邊看月時、　好風吹動萬年枝、
誰家玉匣新開鏡、　露出清光些子兒。

和例

此事群芳譜月下、桐江詩話ヲ引テ出セリ、和人ノ韻例、此外ナル者アリ、文華秀麗ハ、延暦弘仁ノ比ノ詩ヲ集メタル者ナリ、是ヲ見ルニ、題字各三字、三字ノ尾ノ字ヲ韻ニ押シ、君臣唱和數十首ナルアリ、其一ヲ擧テ他ヲ證ス、藤冬嗣、河陽花、

河陽風土饒春色、　一縣千家無不花、
吹入江中如濯錦、　亂飛機上奪文紗、

宛然トシテ初唐ノ詩也、箇樣ナル例、彼方ニモアルニヤ、佗日ノ考索ヲマツ、經國集ヲ閲スルニ、試詩ニ己ガ名ノ字ヲ以テ韻トシタルアリ、小野春卿、奉試賦照膽鏡ノ作ニ、衣裳整下綺羅色、容貌妝前桃李春。ノ類是也詩ヲ贈ルニ、サキノ名ヲ犯スハ不敬ナリ、自ノ名ヲ犯スハ苦シクモアルマジケレドモ、奉試トアレバ勅旨ナリ、君前臣名イフノ意ニテモ創メシヤ、サレドモ戲嬉ニ近シト云べシ、奉試ノ本式ナレバ、

照膽鏡ノ三字ノ中、何レニテモ取ルベキコト也、尤アノ方ニモ、是ニ似タルコトアリ、東坡集、廣陵劉貢父孫巨源劉莘老ニ會シ、其字ヲ以テ韻トシテ、同ク賦セシ事アリ、字ハ佗ヨリ稱スル者也、サレドモ昵近ニ幾シ、唐才子傳ニ、郭曖昇平公主ヲ尙シテ、一日宴アリ、李端ニ詩ヲ求ム、李端頃刻ニシテ成ル、錢起在坐、其宿製ナランコトヲ疑ヒ、己ガ姓ヲ韻トシテ、又一律ヲ覓ム、端復立所ニ賦ス、新開金埒看調馬、舊賜銅山許鑄錢ノ聯アリ、

○韻法之奇者、按古詩源、夏后鑄鼎銘、

逢逢白雲。　一南一北、　一西一東。

九鼎既成、　遷于三國、

曰北與國爲韻、而以一西一東之句間之、章法甚奇、樂府、

行胡從何方。　列國持何來。

氍毹𣰆毲五木香。　迷迭艾納及都梁。

鮑明遠、梅花落、

中庭雜樹多、偏爲梅咨嗟。問君何獨然、念其霜中能作花、霜中能作實、搖蕩春風媚春日、念爾零落逐春風、徒有霜花無霜質、

曰、以花字聯上嗟字成韻、以實字聯下日字成韻、格法甚奇ト言ハ、念其ノ句ハ、モト十二字一句ナルニ、其一句ヲ二折ト成シ、上七字ヲ上ニ附ケテ、上ノ韻ヲ結ビ、下五字ヲ下ニ附ケテ下ノ韻ヲ起スヲ云也、笴按ズルニ、結又花質兩韻相結ブ、同書又舉漢古詩、十五從軍征、八十始得歸之詩八韻、歸誰累飛葵羹誰衣者、曰、通章支微韻、而押羹二句不入韻中、最是搖曳之至、非古人不能用韻也、

○古詩ニ、入聲ヲ通ジテ韻ニ押スル事、東人詩話、舉其例其終、歷觀古人、入聲通押者、百中之一二ト、是亦知ラズンバアルベカラズ、

○清沈德潛說詩晬語曰、漢五言、一韻到底者多、而靑靑河畔草、一章一路換韻聯折而下、又歌行轉韻ノ法ヲ序デヽ曰、轉韻初無定式、或二語一轉、或四語一轉、或連轉幾韻、或一韻疊下幾語、大約前舒徐、後則一滾而出、欲急其節拍、以爲亂也、又曰、歌行不轉韻者、李杜十之一二、韓昌黎十之八九、後歐蘇諸公、皆以韓爲宗、

詩轍卷之四

詩轍卷之五

處士　國東郡　三浦晉　安貞　著

豐後　友人　日出藩　喬維嶽　彥駿　閱

句法

詩ハ、字ヲ積テ句ヲ成ス、字ヲ言ト云、近體ハ五六七言也、而シテ二句ヲ一聯トシ、二聯ヲ一章、又一解ト云、於是絕句ハ、一解ヲ以テ一篇トシ、律ハ、二解ヲ以テ一篇トシ、排律ハ、三解ヲ以テ正トス、若排ケバ幾解ヲモ疊ム、其變ズル者ハ、又半解ヲモ重ヌ、故ニ一解半ニシテ三韻ナル者モ亦アリ、篇ヲ數ユルヲ首ト云、首ト云事、出處分明ナラズ、一首尾ノ略ナルベシ、一本トイヘルモ、一本末ノ略ナルベシ、首、又詩ノ兔首ニ據ルトモイヘリ、壼䉥錄ニハ、史記曰、儋傳、蒯通爲短長說八十一首、ヲ始トイヘリ、而シテ數篇ヲ重ヌルヲ什ト云、故ニ今ノ人ハ、詩篇詩什ナド、ヲ、一樣ニ用ユレドモ、モト同カルベカラズ、其故ハ、什ノ字ハ、本人ヲ偏ニシテ、十ノ字ナレバ、十人也、軍法ニ、五人ヲ組合セテ伍ト云、十人ヲ組合セテ什ト云、サルヨリ轉ジテ、人ノ食器ノ類、十人前ヲ一具トスル故、諸ノ調度ノ事ヲ什

器ト云、是ヲ以テ詩經、鹿鳴之什、白華之什ト云モ、各十篇ヲ紀スルノ名也、左雅ノ蕩之什、頌ノ閔予小子之什、共ニ十一篇ナレドモ、是ハ餘ノ属スル所ナキヲ籠テ、大數ニ從フナリ、是ヲ以テ魯頌僅ニ四篇、商頌僅ニ五篇ナレバ、之什ノ紀ナシ、故ニ今詩什佳什ナドイハンハ、後世詩ヲ十首宛ニ紀スルノ法ナケレバ急度十首ニハ限ルマジケレドモ、篇トハ差別アルベキ也、句ハ局、或ハ區ノ意ニテ、疆ヲ隔ツルナリ、正字通ニ、辭之絕爲句、詩關雎注疏、句古謂之言、魯論注疏序解正義曰、句必聯字而言、句者局也、聯字分疆、トアリ、句古謂之言トハ、思無邪ト云ヲ、魯論ニ一言以蔽之ト云ノ類ナリ、然レドモ文章ナドニ、幾萬言ナド云ハ、一字ノ事ナリ、右詩ノ一句ヲ一言ト云タル、論語ノ正據モアレドモ、今ノ詩ヲイフ所ハ、定メテ一字ノ事トシ、言重ネテ句

トスル事、定式ナリ、又句ト云ベキヲ、語ト云タルモ、後世ノ書ニハ見アタリ、サテ章ハ、句ヲ統テ篇ニ綴ル者ナレバ、モト何句ニテモ、一貫トナスベキ程一章ナル事、文章モ同一法ナル故ニ、關雎ハ一篇三章ニシテ、一章ハ四句、二章ハ各八句、葛覃ハ六句章ヲナシ、麟趾ハ三句章ヲナストイヘドモ、後世ノ詩ニテハ章卽解ニテ、二句一聯、二聯一解、一解卽絕、二解卽律、三解爲排、是近體不易之法也、サテ絕句一解、四句起承轉合ヲ大法トス、律ハ四聯、起頷頸結ト分ツ、絕句ハ短キ者故、勢急ナリ、律ハ長キヲ以テ其意寛也、前ニイフ若ク、起承轉合ハ絕句ノ法也、律ハ起結ヲ要トス、中二聯ハ鋪叙ヲ主トス、情景ノ間、用事ヲ以テ之ヲ妝點ス、夫絕句、起句ハ一篇ヲ起ス者故、最大事也、然レドモ第三句肝心ノ處ナリ、楊仲弘モ、宛轉變化工夫全在第三句トイ

ヘリ、上二句ヲ下ニ接スル故ニ、接句トモイヘリ、上下ノ接口ニテ、親シケレバカナシ、疎ケレバ支離ス、作者宜ク意ヲ用ユベシ、第二ハ、上ヲ承ケ下ニ送ル場ニテ、意ヤヤ緩シ、合ハ起ト勢侔シ、サリナガラ起句ハマギラカサル丶者也、結句ハ紛ラカサレヌ者也、然シテ其起承轉合ト云モ、一通リノ鋪叙也、固ク是ニ非サレバ適ハヌ者ト思フベカラズ、古人ノ詩ヲ點見スルニ、轉法ヲ用ヒタル詩ハ却テ少シ、唯接スルニ念ヲ入レタリト見ユ、作リアゲテ見レバ、相應ニ轉句ハアリ、轉ゼズトテモ、上ニヨク接スレバ苦シカラズ、接スルニ虛實アリ、實景ニテ接スル者ハ轉ジタル樣ニ見ユ、虛情ニテ接シタルハ、轉ゼヌ樣ニアル者也、譬バ張祜、虢夫人ノ詩ノ如キハ、首ハ虢國夫人承主恩ト揭ゲテ、朝ハ早アクルヲ遲シト、馬上ニテ金門ニ入ラルト、夫ヨリ轉ズルニハ非ズ、二ノ句ニ接シテ、如何サマ色ノ白ヒ自慢ニテ、素顏ニチト薄ク黛バカリヲハキテ、至尊ノ御前ヘ出ラルゾトハ、二三四共ニ起句ヲ承タル儘ナリ、

「張籍、秋思、

洛陽城裏見秋風、欲作家書意萬重、
復恐匆匆說不盡、行人臨發又開封、

洛陽ノ客舍秋風ノ起ツニ驚キ、久シク便モナクテ打過ヌ折カラ、使モアル由ナレバ、彼此ト思續ケテ、家書ヲ認メ置ツルモ、家ノ事ヨリ、親戚朋友コレカレト言ヒヤリ度事ノミニテ、使ノ起ツニ臨ミテ、ヤレ先待テ、此用モマダドウヤラ書落シタル樣ナルト、又封ヲ開ケルト承ルヲ以テ接シタリ、轉意ナシ、袁石公、畫松篇ヲ以テ首句ニ起ル者トシ、步出城西門詩ヲ以テ、第三句ニ起ルトス、言ハ、一二ハ閒語ニシテ、第三ニシテ本題ヲ說出セバ也、畫松、

畫松有似眞松樹、待我尋思記得無。
曾在天台山上見、石橋南畔第三株。

歩出城西門詩

歩出城西門、悵望江南路、
前日風雪裏、故人從此去、

又按ズルニ、遊人五陵去、寶劍直千金、ノ詩ハ、第二句ニ轉ジ第三句ニ承ケタリ、何處秋風到、蕭蕭送雁群、ノ詩ニ、轉句ナシ、承ルヲ以テ接シタリ、「李白越中懷古、初越王勾踐破呉歸、ト起シテ、二三同意、二ハ臣歸家ノ榮、三ハ君歸國ノ榮、往時ヲ想像スル者象外ナリ、結轉ジテ象中ニ入來ル、是賓ヲ以テ主トナスノ手段、カカル全盛モ只今唯鷓鴣ノ飛ノミト、轉合ヲ併セテ末ノ一句トナス故ニ、二三同ク承句トナル、「又一句一意ナル者ハ、晉顧覬之、

春水滿四澤、夏雲多奇峰、
秋月揚明輝、冬嶺秀孤松、

續文章緣起、毎句冠以春夏秋冬字トイヘバ、和歌ニ所謂冠ノ體ニ似タリ、子美、

兩箇黃鸝鳴翠柳、一雙白鷺上青天、
窗含西嶺千秋雪、門泊東呉萬里船。

顧體ニ合スルニ似タリ、「孟浩然送人、

君登青雲去、余望青山歸、
雲山從此別、涙溼薜蘿衣。

是三句ニ結ビテ、四句ニ承タリ、「元陳剛中、

老母粤南垂白髮、病妻燕北倚黃昏、
瘴烟蠻雨交州客、三處相思一夢魂。

一二三ハ鋪敍、第四句只結ノ一法、起承轉ヲ用ヒズ、詩ノ意ハ、老母ハ粤南、病妻ハ燕北、我ハ交州ニ客タリト、鋪敍シテ、逢者トテハ夢バカリト、落句ニ結ビタル也、筆次ニ記ス、三十年前南海ノ行脚ノ僧ヲ留メテ語リシ、其僧ノ言ケルハ、紀藩ノ士金田氏ノ妻、十八ニナリケル、夫ノ江戸ノ邸ニ在ケルニ、詩ヲ贈テ曰、

夜雨野梅瘦、春風萱草肥。
借問章臺柳、幾條纏客衣。
一自空閨ヲ守ッテ瘦タルヲ云、ニ春來母ノ壯健ヲ報ジ、三四郎ノ行樂ヲ思フ、鋪紋法アリ、怨ンデ怒ラズ、大ニ愛スベシ、張繼、
楓橋夜泊、
月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。
姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船。
是モ象外ノ意ナリ、象ハ曉天ニアリ、意ハ客愁ニテ夜深ル迄マドロマザリシト云ニアリ、其意ヲ得ザル故、此詩六箇敷ナリテ聞ヘズ、蓋張繼楓橋ニ舟ヲ泊シ、曉方鐘ニ打驚カサレ、月モ落チ、夜明烏モ啼渡リ、霜ノ雪カト思フ計リナルヲ見テ、昨夜ノ事ヲ思ヒ續ケテ作レル也、故ニ第二句ヲ起句トスベシ、其故ハ、昨夜舟ヲココニ泊セシニ、漁火蓬窗ヲ射テ旅愁寂寞終夜寢ズ、疲出デテ纔ニ睡ヲナサントスルニ、ハヤ鍾ノ聲枕ニ傍フ、因テ我終夜寢ザリシ事ヲ說出シテ、實ニ昨夜ハ寢ザリケン、マドロマントスルニ、早告渡ル聲ナレバ、ヨモ曉ニハアラジ、夜半ニテコソアラメト、曉鐘ヲ聞惑ヘル儘ニ、夜半鐘ト置リ、本意只旅愁徹曉不寢ト云コトヲ妝點セル也、其本意ヲ見出サザル故、水中月ヲ捉ヘントシテ得ズ、解夜半鐘ニ懸リテ、六箇敷ナレリ、サテ諸家夜半鐘ノ有無ヲ徵出スルニツケテ、一體夜半ニ鐘ヲ撞事ハ稀也シト思ハル、寒山寺ノ夜半鐘ノ名高キハ、此詩ヨリノ事ナリ、此詩ニテ察スレバ、寒山寺ニハ、夜半ニハ撞ザリケント覺ユ、サル故曉鐘ヲ、ヨモ曉鐘ニハ非ジト怪メル也、ヨシヤ姑蘇ニ從來夜半ノ鐘撞來ルニモセヨ、サキニ聞シヲバ忘レテ、今曉鐘ヲ朦朧ノ中、又夜半鐘ト思ヒ惑ヘリトシテモ聞ユル也、故ニ夜半鐘ノ有無ハ、此詩ノ美

ヲ害スル所ニアラズ、有無ノ二解ヲ竝ベ觀レバ、無トスル者長ズルニ似タリ、有トスレバ、前ニ聞シ夜半鐘ヲ朦朧ニ屬ス、朦朧ニ屬スルモ、强解ニハ非ズ、後說ノ如ナレバ、夜半鐘ヲ實ニ聞シハイネヌ前也、夜半鐘ト認シハ睡後也、夜半鐘二重ニナル也、二ツ出セル者ヲ二ツニ遣フハ、上手ノ手段ナリ、韋莊、東陽酒家贈別、

天涯正嘆異鄕身。又向天涯別故人。
明日五更孤店月、醉醒幾處各沾巾。

此月ナドモ、二重ニ作リタル月ナリ、天涯異鄕ノ身ト、是ヲ社心苦敷思ヒシニ、今ハ水魚ト思フ足下ニサヘ、別ニ臨ミヌ、今宵ハ五更迄、孤店ノ月ニ名殘惜ミテ、酒ナド酌ヌ、明日ヨリハ、醉モ醒ルモ、諸共ニ各地ニ索居シテ、此孤店ニ見シ月ヲ、互ニソレゾト想出シテ、巾ヲ沾サントナリ、僅ノ文字ヲ數ニナシテ遣フコト、其人ノ手際ナ

拙起

リ、又拙起トハ、首ハ平平ニ作リ起シテ、後ヲ立波ニ云取リタルナリ、劉禹錫、和令狐相公別牡丹作、

平章宅裏一闌花。臨到花時不在家、
莫道兩京非遠別。春明門外即天涯。

絕句贅箋云、此詩言人臣不可恃聖眷也、春明門即長安京城門也、大臣位尊名盛、朝承恩、暮嶺海、禍福不可必、一出京城門去君側漸遠、萬一有奸邪柔佞欺負之人造讒誹謗、熒惑上聽寵辱轉移、特頃刻間、欲入朝辨明不可得矣、春明門外、一句絕妙、平章事即相ナリ、起句殊ニ拙シ、誰トテモ意ヲ歷ズシテ作ルベキ句ナリ、二モ亦超出スル事モナシ、相公一闌ノ牡丹花ヲ看給ハン迚社、カク作リ立給フナルニ、公ノ事有テ、開クニ臨ミテ、洛陽ニ赴キ給フ、兩京ノ間遠キ道法ニモ非ズ、ヤガテ歸リ來ッテ、殘レル春ヲ樂マントノ玉フガ、ツクヅク世態人情

ノ、變リ易キヲ思回ラセバ、暫ノ間ニモ、如何ナル讒ヤ入ランズ、聖慮一タビ轉ジテハ、君前ニ侯スル事モ、成難クナランモ覺束ナシ、洛陽ハ遠シ、此京城門ヲ、一足踏出スガ天涯ゾト、結句ニ限ナキ感慨ヲ含マセテ、能一二ヲ引起セリ、予常ニ愛杜工部、九日之詩吟之、其詩曰、

去年登高郪縣北、　今日重在涪江濱、
苦遭白髮不相放、　羞見黃花無數新、
世亂鬱鬱久爲客、　路難悠悠常傍人、
酒闌卻憶十年事、　腸斷驪山清路塵、

當讀起聯、未覺其勝已、至次聯、若稍進歩、然未見其奇、至世亂路難、若斷岸絕壁、可望而弗可至焉、及誦落句、宛似望空中樓閣、紫翠明滅、不可得而轉盼、前之如拙者、如西施捧心、愈增其姸、是眞煉丹爲金之手、人間豈多得焉哉、

○句法ハ能其管到不管到ノ所ヲ察スベシ、管ハ領ト云ガ如シ、上ニ置タル字ノ領スル字ト、領セザル字アリ、一句ノ中ニテモ、君向瀟湘我向秦ハ、門對寒流雪滿山、ナド云對ヲトリタルハ、上ノ四字、下ノ三字ニ管到セズ、サル程ニ司空曙、欲報瓊瑤愧不如ト云句ハ、欲ノ字、下ノ第七字マデ管到ス、于鱗、欲寄一枝君自賞、ト云句ノ欲ノ字ハ、枝ト云字マデ管到スル也、此故ニ句ハ七七ト分レテモ、實ハ一句ナルアリ、須臾宮女傳來信、言幸平陽公主家、應有春魂化爲燕、年年飛入未央棲ノ類是也、徂徠絕句解拾遺、于鱗、誰將一片峨嵋雪、濯錦江寒萬里來ト云句ヲ釋シテ、將ノ字ノ下ニ、管到寒字トシテ、寒ノ字ノ下ニ、上十一下三ト注セリ、是等ニテ能工夫スベシ、對ハ物ヲ二ツ雙ベテイフ者正也、サレドモ上句下句ニ貫通シテ管到スル者アリ、縱被微雲掩、終能永夜清、幸不折來傷歲暮、若爲看去亂

鄕愁是流水對ト云、行雲流水ノ句ト云ハ、是ト別ナリ、和讀ニシテカヘル者ハ、漢人同一ニ讀下ストイヘドモ、上受下接シテ、其意六カシ、和讀ニ順下スル者ハ、次第相逘テ其語易シ、行雲流水ノ句トハ、スラスラト滯ナキ也、春日鶯啼修竹ノ裏、仙家犬吠白雲ノ間、是也、

○對ノ法、事文類聚ニ曰、李淑詩苑、唐ノ上官儀曰、詩有六對、一曰正名對、天地日月是也、二曰同類對、華葉草芽是也、三曰連珠對、蕭蕭赫赫是也、四曰雙聲對、黃槐綠柳是也、五曰疊韻對、彷徨放曠是也、六曰雙擬對、春樹秋池是也、又曰、一曰的名對、（此以下所引之詩畧此而下出）二曰異類對、三曰雙聲對、四曰疊韻對、五曰連綿對、六曰雙擬對、七曰回文對、八曰隔句對、祕府論擧二十九種ノ對曰、一曰的名對、二曰隔句對、三曰雙擬對、四曰聯綿對、五曰互成對、六曰異類對、七曰賦體對、八曰雙聲對、九

曰疊韻對、十曰迴文對、十一曰意對、右十一種、古人同出斯對、十二曰平對、十三曰奇對、十四曰同對、十五曰字對、十六曰聲對、十七曰側對、右六種ノ對、出元兢髓腦、十八曰隣近對、十九曰交絡對、二十曰當句對、二十一曰含境對、二十二曰背體對、二十三曰偏對、二十四曰雙虛實對、二十五曰假對、右八種ノ對、出皎公詩議、二十六曰切側對、二十七曰雙聲側對、二十八曰疊韻側對、右三種出崔氏唐朝新定詩格、二十九曰總不對對、是皆唐人詩式ニ出ル者、弘法是ヲ次第スル而已、

一曰的名對、兩書同ク「送酒東南去、迎琴西北來ヲ引ク、的名對、正名對トモ、正對的對切對トモ云、祕府論ニ、元兢、正對者若堯年舜日ト云ヲ釋シテ、聖聖相敵ス、上句ニ松桂ノ善木ヲ用ヒ、下句ニ蓬蒿之惡草ヲ用ユルハ、正對ニ非ズトイヘルハ、異類對ヲ分テルニ似タリ、予ヨリシテ之ヲミレバ、

合掌

堯舜桀紂、即天地日月ノ意、拘ハル所ニアラズ、是即對ノ正、老、杜、日月低秦樹、乾坤繞漢宮、江間波浪兼天湧、塞上風雲接地陰、冠裳黼黻人ヲシテ敬仰セシム、合掌對ハ病ナリ、同ジ物ヲ竝對スル也、鳳渚曰、合掌中意字ノ別アリ、字ノ合掌トハ、返ニ歸ヲ對シ、迴ニ遙ヲ對スル類ナリ、意ノ合掌ハ、人餘リイハズ、清田君錦、藝苑談ニ、柳塘春水漫、花塢夕陽遲、好句ナレドモ合掌ストイヘリ、意ヲ用ヒザレバ、ツヅケ坐シ、ツヅケ行キ、ツヅケ動キ、ツヅケ靜マルゾト、今此言ヲ敷衍シテ左ニイフ、詩人玉屑、一事兩用ヲ擧テ曰、劉越石、宣尼悲獲麟、西狩泣孔丘、謝惠連、雖好相如達、不同長卿慢、唐初餘風猶未殄、陶冶至子美始淨盡矣ト、然ルニ、羞將短髮還吹帽、笑倩傍人爲正冠、帽冠ノ二字、何宣尼孔丘ノ病ト異ラン、其外謝靈運、出谷日猶早、入舟陽已微、古詩十九首ノ中、三五明月滿、四五蟾兎缺、アリ、是時對法未立、故ニ箇樣ノ重複アリ、沈約能說詩病、然ルニ、夕行聞夜鶴、晨征聽曉鴻、此破綻ヲ致ス、

當句自犯

詩藪曰、當句自犯、尤爲語病、又頗一事兩用ニ近シトイヘドモ、杜、更尋嘉樹傳、不忘角弓詩、明、高啓、梅花、雪滿山中高士臥、月明林下美人來、敷衍シ得テヨシ、一事兩用詩ノ病ニシテ、兩句一意モ亦詩ノ病也、而シテ詩ノ兩句一貫ト云ハ、風波不起處、星月盡隨身ナド云類ニテ、詩中ノ一體、兩句一意ト同カラズ、

兩句一意

兩句一意トハ所謂意ノ合掌、齊、謝朓、魚戲新荷動、鳥散餘花落、兩句共ニ有情物ヲ動カス也、梁、王籍、蟬噪林愈靜、鳥啼山更幽、兩句共ニ有情動テ物自靜ナリ、王荆公集句ニ、風定花猶落、鳥啼山更幽、如此而後靜中有動、動中有靜、始テ無瑕トス、唐、宣宗、弔白樂天、

綴玉聯珠六十年。　誰敎冥路作詩仙。

兩首一意

浮雲不繫名居易、造化無爲字樂天。
童子解吟長恨曲、胡兒能唱琵琶篇、
文章已滿行人耳、一度思卿一愴然、
頷頸共ニ兩句一意ナリ、尤歌行古樂府ナドハ辭ヲイカニモ敷衍スル場アル時ハ、兩句一意モ兩聯一意モ用ユル事アレドモ、律ニ於テハ一病ナリ、」又唐乾寧ノ比、秭歸縣ニ、僧懷濬ト云者アリ、何處ノ人トモ知レズ、人ノ既往將來ノ事ヲ云ニ、甚神驗アリ、刺史于公衆ヲ惑スヲ恐レテ、之ヲ繫ヒテ仕所ヲ問シム、僧詩ヲ以テ答テ曰、
家在閩山西復西、其中歲歲有鶯啼、
如今不在鶯啼處、鶯在舊時啼處啼、
ワケノ分事モナケレバ、再度コレヲ詰ケルニ、僧又、
家在閩山東復東、其中歲歲有花紅、
而今不在花紅處、花在舊時紅處紅、
ト答ヘケル、于公奇異ノ想ヲナシテ赦シケリ、此僧定メテ海外ノ人ニテモ有ラン抔トモ云ケルトゾ、人皆此僧ノ幻怪術中ニ落タリ可咲、如斯ハ兩首一意ト謂ベシ、」

異類

一曰異類對、風織池間樹、蟲穿葉上文、鳥飛隨去影、花落逐搖風、上官儀六對中、同類對アリ、花葉ニ草芽ヲ以テスルノ類トス、祕府論ニ同對アリ、解曰、同對者、若大谷廣陵、薄雲輕霧、同類對者、雲霧、星月、花葉、風烟、霜雪、云云ト、夫詩家ノ對ニ於ル、一定ノ偶ナケレバ、如此ハ閑議論、不急之察ト謂ツベシ、」詠物ノ法ハ、多ク一物ヲ賦スル者ナレバ、是非同類相對ス、子美觀畫詩、霏紅洲蘂亂、拂黛石蘿長ノ如シ、詠物ニ非ザル作、作リ樣惡ケレバ幅ナシ、モシ妙手ヲ經バ是對ノ正也、僧歸夜船月、龍出曉堂雲、細草偏承回輦處、飛花故落舞觴前、異類對本色ニ非ズトイヘドモ、唐人ノ作甚多シ、「海上碧雲斷、單于秋色來、城池百戰後、耆舊幾家殘、

同異混用

「悵望青天鳴墜葉、巑岏枯柳宿寒鴟」「食隨鳴磬巢烏下、行踏空林落葉聲」眞訣自從茅氏得、恩波寧阻洞庭歸」晝漏稀聞高閣報、天顏有喜近臣知是ナリ、」又一聯、上ノ字ハ同類ヲ以テ正ク對シ、下ノ字ハ異類ヲ以テ散對スル者アリ、九月寒砧催木葉、十年征戍憶遼陽」白狼河北音書斷、丹鳳城南秋夜長。又謝榛、落日浮雲天外色、淸秋白藕露中花、是ナリ、然レドモ猶是上下景也、孟浩然、鄕淚客中盡、歸帆天際看、景ヲ以テ情ニ對ス、異類對ノ巧麗ナル者乎、杜春來準擬開懷久、老去親知見面稀、尤古怪、準擬親知ノ對、猶尋常七十相對スルノ故態ナリ、」又句

句中帶不對字

中對セザル字アレドモ、佗ノ字ニツレラレテ對ヲナスアリ、杜、安得仙人九節杖、拄到玉女洗頭盆、于鱗、宛馬如雲開漢苑、秦兵二月走胡沙、是也、」

異類奇者

又異類ノ奇ナル者、少少後ニ摘ム、杜、獻納開東觀、君王問長卿、「四十明朝過、飛騰暮景斜」「江海故人少、音書從此稀」「王室仍多故、蒼生倚大臣」「酒肆人間世、琴臺日暮雲」明、劉基、偶應非熊兆、尊爲王者師」林鴻、不見長安日、愁上古吹臺、皆此法ナリ、于鱗、落木飛風鴻雁下、白雲秋色大行多」「大壑秋陰生蜃氣、扶桑白色照樓臺」

地名

「又地名ヲ以テ對スル、丹鳳城、白狼河、鳷鵲觀、鳳凰臺、ト云ガ如キ、誠ニ的對ナリ、ソレヲ論ゼズ、唯地名ニ地名ナレバ、文字ニ拘ハラズ對シタルハ、江涵一柱觀、日落望鄕臺、已低魚復暗、不盡白鹽孤」「虛歷金華省、何殊地下郎、「憶昨賜霑門下省、退朝擊出大明宮」是皆大家奇ヲ出ス者、或ハ時トシテ試ムベシ、常法トナスベカラズ、」

偏枯

又詩病ニ偏枯ト云アリ、異類ニ紛ハシキ者也、此ニ擧グ、蓋偏枯トハ、半身健ナレドモ、半身自在ナラザル病ナリ、異類對ハ、右ニイフ如ク、思ノ外ナル物ヲ持來ツテ對シタルナリ、サレドモ

異類ト云迄ニテ、兩句共ニ働アレバ、半身不隨トハ云難シ、偏枯ハ、一句ハヨク言カナヘタレドモ、好キ對ヲ得ザル故、半身病メルニ譬タリ、或人ノ聯句ニ、初看神馬藻、ト云ニ、未識佛牛花、ト屬キタルヲ、人人感ジ、サテ佛牛花ハ如何ナル花ゾト問ケレバ、其人袖カキ納メ、我未識佛牛花ト答ヘケルニゾ、人皆欺レタルヲ知テ、大ニ笑ヒヌトナン、其滑稽ハサル事ナレドモ、是又偏枯ノ喩ニ引ベシ、故ニ山如仁者靜、ト、論語ヨリ句ヲ得タルハ、風似聖之清、ト、又孟子中ヨリ文字ヲ拈出シタリ、故ニ周顒宅作阿蘭若、婁約身歸窣堵婆、ト、梵語ナレバ、梵語ヲ以テ對シ、三盃軟飽後、ト、酒ニ醉事ヲ軟飽ト云俗語ヲ用ヒタレバ、晝寢ノコトヲ黑甜ト云俗語ヲ取リ、一枕黑甜餘、ト、聯ネタリ、五代ノ末、呉越錢氏ノ宰相皮光業、行人折柳和輕絮、飛燕啣泥帶落花、ト云聯ヲ得、自モイミジト思ヒ、人モ從テ賞シケルヲ、或人柳ニ絮アリ泥ニ花ナシ、偏枯巧トスルニ足ラズトサミシケリ、サレバ延喜ノ比内宴、菊散一叢金、ト云題ニテ、善相公、酈縣村閭皆富貨、陶家兒子不垂堂、ト云聯ヲ得テ、頗自誇ルノ意アリ、菅家見給ヒテ賞詞ナシ、善相公心好カラズ、建春門ニ於テ其故ヲ問フ、富貨ノ字、恨ムラクハ潤屋ニ作ラザリシコトヲト有ケルニゾ、善相公欣然トシテ改作有シト、是モ史記千金之子不垂堂ト云ヨリ、大學ノ富潤屋ノ字ヲ照シ用ヒ給ヒシ也、昔許氏ノ人虞姓ノ人ヲ連夜尋ケルニ、內ニ在ザリシカバ、夜夜出遊、知虞公之不可諫ト壁ニ題シケルヲ見テ、時時來擾、何許子之不憚煩、ト屬タリ、只其手柄ハ、孟子ノ語ニテ嘲リタルヲ、孟子ノ語ニテ對ヘタルニアリ、是ニ由テ予竊ニ思フ事アリ、子美早朝ノ作、旌

旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高、龍蛇ハ、旗旗ノ動クヲ形容スル者ニシテ、燕雀ハ、諸家ノ註ドモ考フルニ、皆眞ノ燕雀トシタリ、註家猶考出ヲ遺ス所アル乎、若是眞ノ燕雀ナラバ、上句ノ龍蛇ハ、旌旗中ヨリ來ツテ、下句ノ燕雀ハ、宮殿中ヨリ來ラズ、且燕雀僚友ヲ賞スルノ語ニアラズ、杜ガ詩律ニ老ルモ此失アリ、後學豈易易トシテ題ニ臨ムベケンヤ、童子側ニアリ、進曰我聞コトアリ、王建、裝簷玳瑁隨風落、傍岸鵁鶄逐暖眠、下句ノ鵁鶄ハ眞ニシテ、上ノ玳瑁ハ形容ナリ、趙嘏、桃花塢接啼猿寺、野竹亭通畫鷁津、啼ク猿ハ眞ニシテ、畫ケル鷁ハ假ナリ、以テ偏枯トスベシヤ、余曰、於汝善問トス、猿鷁死活ヲ隔ツトイヘドモ、死活モト對、且此三字、寺ト津ノ字重シ、猿鷁ハ之ニ帶ラルルモノ也、雙鳳闕萬人家亦何妨ゲン、且玳瑁皮ハ竹箨ノ一名ナレバ、鵁鶄ト好對、其詩ノ瑕瑾ニアラズ、

雙聲　三曰雙聲對、秋露香佳菊、春風馥麗蘭、上カキクケコ、下ラリルレロ、

疊韻　四曰疊韻對、放蕩千般意、遷延一箇心、上アカサタナ、ハマヤラワ、下エケセテネ、ヘメエレエ、疊韻體猶異體ノ部ニモアリ、

連綿　五曰連綿對、祕府論曰、聯綿對者、不相絶也、一句之中、第二字第三字、是重字、即名爲聯綿對、看山山已峻、望水水仍清、殘河河似帶、初月月如眉、ナド引ケリ、亦霏霏赫赫ノ疊字ヲ用ルヲモ、同ク聯綿トイヘリ、チト差別アルベシ、異體篇ノ連珠雙字等ノ所考フベシ、

雙擬　六曰雙擬對、祕府論曰、夏暑夏不衰、秋陰秋未歸、兩夏擬一暑、兩秋擬一陰、ト、乍行乍埋髮、或笑或看衣、是一三同字ヲ用ユル者也、可聞不可見、能重復能輕議、月眉欺月論、花頰勝花是中ニ二字ヲ隔ツル者、又曰春樹春花、秋池秋日、琴命清琴酒、追佳酒、思君念君、千處萬處、如此之類、名曰雙擬對、是等ノ解ニ由テ考レバ聯綿

對ハ、同字ヲ直ニ疊ミ、雙擬對ハ、同字ヲ隔テテ疊ムノ別ト見エタリ」七曰回文對、情親因意得、意得因情親、此句誠ニ倒讀スベケレバ、回文ナリトイヘドモ、字ニ依ラズシテ、意ニ回文アルニ似タリ、聯綿對ハ、字直ニ疊ミ、雙擬對ハ、字ヲ隔テテ疊ミ、回文對ハ、句ヲ隔テテ疊ム者ニ似タリ、故如何トナレバ、回文體ハ、一首ノ作法ナリ、回文對ハ、一聯ノ法ナリ、其別ナキ事能ハズ、是予ガ斷然トシテ、以テ之ヲ分ツ所也、因テ唐詩七律ヲ擧テ例トス、「聯綿對、李白、冬夜夜寒覺夜長、沈吟久坐坐北堂、樂天、忠州州裏今日花、廬山山頭去年樹、「一日日知添老、病、一年年覺惜重陽、劉駕、樹樹樹梢啼曉鶯夜夜夜深聞子規、「雙擬對、杜甫、戎馬不如歸馬逸、千家今有百家存、即從巴峽穿巫峽、便下襄陽向洛陽、王勃、故人故情懷故宴、相望相思不相見、樂天、劉郎劉郎莫先起、蘇臺蘇

臺隔雲水、「回文對、去歲荊南梅似雪、今年荊北雪如梅、「今年花似去年好、去年人到今年老、「落花有意隨流水、流水無情送落花、明王弇州、秦女曲、邯鄲倡姬秦國母、秦王相國邯鄲賈、邯鄲大賈秦仲父、仲父舍人秦假父、是等モ回文ノ類ナルベシ、回文體ノ詩ハ、異體篇ニ出ヅ、「聯綿複字ヲ用ユル者、霏霏斂夕霧、赫赫吐晨曦、即連珠對ナリ、律體複字ヲ用ユル、一聯ニ止マル、之ヲ過レバ冗ニ渉ル、古詩ニハ、青青河畔草、三聯中六タビ疊字ヲ用ヒタリ、疊字ノ極ナリ、是ヲ過テハ、韓退之、南山詩中、延延離又屬、夬夬叛還遘、喁喁魚闖萍、落落月經宿、誾誾樹牆垣、巘巘架庫廐、參參削劍戟、煥煥銜瑩琇、敷敷花披萼、闟闟屋摧霤、悠悠舒而安、兀兀狂以狃、超超出猶奔、蠢蠢駭不懋、七聯十四疊用スルニ至ル、然レドモ此南山詩ハ、古人之ヲ上林子虛ノ賦ニモ比シテ、南山賦トモイフ

ベキ程ノ、筆ノ立方ニテ、尋常古詩ノ例ニアラズ、故ニ此前ニ或連若相從、或蹙若相鬪、或妥若弭伏、或竦若驚雉、ト云ヨリ、或ノ字ヲ用ル事五十有餘、忽轉シテ此疊字連用ヲナス、近體ノ禁ムル所、古詩トイヘドモ、大篇權衡抑揚ノ宜キヲ得ズンバ、漫ニ言ベキニ非ズ、」八曰隔句對、又扇對ト云、續文章緣起ニ、斑婕妤ノ詠扇、孔融、呂望老匹夫、管仲小囚身、ニ本ツクトイヘバ、其由テ來ル事久シ、四句ヲ以テ一對ヲナス者ナリ、五言ニ多ク、七言ニ少ク、律ニ少ク、古詩ニ多シ、于鱗是等ノ體好マザリシヨリ、明ヲ學ブ人ハ、多ク作ラズ、五律、鄭谷、吊僧、

幾思聞靜話、　夜話對禪牀、
未得重相見、　秋燈照影堂、
孤雲終負約、　薄宦轉堪傷、
夢遶長松榻、　遙焚一炷香、

絕句ハ、對語分明ニナキヲ要ズ、老杜、哭台州司戶參軍蘇少監、

得罪台州去、　時危棄碩儒、
移官蓬閣後、　穀貴沒潛夫、

又唐人ノ作ニ、

去年花下留連飲、　暖日天桃鶯亂啼、
今日江頭容易別、　淡烟衰草馬頻嘶、

三韻律ニハ、樂天、山中與元九書、

憶昔封書與君夜、　金鑾殿後欲明天、
今夜封書在何處、　廬山菴裏晚燈前、
籠鳥檻猿俱未死、　人間相見是何年、

二四ニハ對ヲ用ヒザル者、李白、送段淑、

白鷺洲前月、　天明送客回、
青龍山後日、　早出海雲來、
流水無情去、　征帆逐吹開、
相看不忍別、　更進手中杯、

太白ノ歌行、團扇對ヲ用ユル事アリ、

去年何時君別妾、　南園綠草飛胡蝶、
今歲何時妾憶君、　西山白雪暗秦雲、

玉關此去三千里、欲寄音書那可聞。韓退之、罇酒相逢十載前、君爲壯夫我少年。罇酒相逢十載後、我爲壯夫君白首、上句僅ニ一字ヲ易ヘ、下句僅ニ二字ヲ易フ、又隔四句、白集、長相思、九月西風興、月冷霜花凝、思君秋夜長、一夜魂九升、二月東風來、草折花心開、思君春日遲、一日腸九回、又雜言ニハ、上陽白髮人、秋夜長、夜長無寐天不明、耿耿殘燈背壁影、蕭蕭暗夜打窗聲、春日遲、獨坐天難暮、宮鶯百囀愁厭聞、兩燕雙棲老休妒、各下聯ニ至ル迄、對語ヲ用ユレバ、陳腐生色ナキヲ以テ、後ニ至ツテハ、對ヲ用ヒザルナルベシ、隔六句者、同集、婦人苦、婦人一喪夫、終身守孤子、有如林中竹、忽被風吹折、一折不重生、枯死猶抱節、男兒若喪婦、能不暫傷情、應似門前柳、至春易發榮、風吹一枝折、還有一枝生、隔句ノ最參差タル者、韓退之、淮水出桐柏山、東馳遙遙千里不能休、

互成　賦體　意對　平對　奇對　字對

淝水出其間、不能千里百里入淮流、其所謂互成對、祕府論、天地心間靜、日月眼中明、玉釵珠翠纒、象榻金銀鏤、ナドノ句ヲ引ケバ、數竝ベテ互ニ成ルナルベシ、賦體對、雙字雙聲疊韻ノ類、一體トスルニタラズ、意對ハ、辭對セザレドモ、意對スル也、平對ハ、平常之對、若青山綠水トイヘバ、行儀前ノ對ト云事ニテ、奇對ノ註、既非平常、是爲奇對、ト云テ、漆沮四塞、會參陳軫ノ如キ、漆七ト通ジ、參軫ト同ク、二十八宿ノ名ヲ以テ對ス、如此者、出奇而取對、故謂之奇對、トアレバ、平對ハ、奇對アルニ因テノ名、定メテ平對ノ一法アルトハ見エズ、字對ニ、桂楫荷戈ヲ引ク、其義ハ、上ハ桂ノ楫ニシテ、下ハ戈ヲ荷フ也、サレドモ荷ハ蓮ノ別名ナレバ、義ハ異レドモ、字ヲ以テ相對スル也、故ニ曰、字對者、謂義別字對、詩ヲ引テ曰、山椒架寒霧、池篠韻涼颷、何用金扉敞、終醉石家崇。

側體

山椒ハ山頂ナリ、池篠ハ池傍ノ竹ナリ、頂ト竹トハ對セザレドモ、椒ハ木ノ名ナルヲ以テ、椒竹ト對スル事ヲ得、石家崇ハ石崇ナレバ、上ノ敵ノ字モ實スベキ事ナレドモ、崇ハ高キノ義アル故、敵ノ字ト對スルナリ、聲對ハ若曉路秋霜トアリ、路ハ霜ト對セザレドモ、路露聲ヲ同フスルヲ以テ、霜ノ聲ニ取ル也、所引ノ詩ニ曰、初蜂韻高柳、密蔦桂深松、蔦ハヤドリ木ナリ、鳥ト聲ヲ同フストアリ、サレドモ動ト植ト相對ス、異類對トスレバ、煩シク假聲ヲ用ルニ及バズ、側對ニ曰、馮翊龍首ノ對、馮翊偏ヲ除ケバ馬羽、以テ龍首ニ對ス、又泉流赤峰ノ對、泉ノ字、水ヲ除ケバ白ノ字、以テ赤ノ字ニ對ス、忘懷接英彥、申勸引桂酒、英彥ハ人ナレドモ、英ハ花ブサ也、酒ハ傍酉ナリ、側ハ平側ノ側ニアラズ、字ノ偏傍等ニ取ル、故ニ側傍ノ意ナリ、故ニ字側對トモ云、右意對以下瑣細ニ分ツトイヘ共、總シテ假對ノ類、如此分別シ得テ對ヲ作レトニハ非ズ、作リタル跡ニ、是等ノ事アル也、以下ノ諸目、皆唐人設クル所ノ者ナリトイヘドモ、冗ニシテ益ナシ、ココニ略ス、總不對對ハ、唐人詩式ノ外ニ見エタレバ、空海ノ加フル所ナルベシ、散詩ノ事ナリ、下ノ對ノ字聞ヘズ、

假對

假對、異類ニ比スレバ其法疏ナリ、此地一爲別、孤蓬萬里征、一從襄陽住、幾度梨花飛、酒債尋常行處在、人生七十古來稀、八尺曰尋、倍尋曰常、ト云義アルニヨリ、義異レドモ、字ヲ假テ對ヲナセリ、住山今十載、明日又遷居、遷ニ千ノ聲アリ、假テ十ニ對ス、捲簾黃葉落、開戶子規啼、子ニ紫ノ聲アリ、假テ黃ニ對ス、眼昏常訝雙魚影、耳熱何辭數爵頻、ココハ數盃ト云事ナレドモ、爵雀ト通用スルヲ以テ、雙魚ニ對ス、是ヲ

借韻

借韻對トモ云、畢竟上ニイフ奇對字對聲

句中自對

對亦只假對ノ分而已、此外講ゼズンバアルベカラザル者數條、コレヲ後ニ列ス、

○句中自對之對　句中已ニ自對ス、故ニ下句ノ字、上句ニ對セザレドモ、能對ヲナス、白狗黃牛峽、朝雲暮雨時、桃花細逐楊花落、黃鳥時兼白鳥飛、コレヲ胡越同舟體トモ謂ヘリ、其尤奇ナル者ハ、赭圻亦赤岸、擊汰復揚舲、赭圻屯ヲ以テ赤岸山ニ對シタル故、擊汰ヲ以テ揚舲ニ對シタリ、老杜、長年三老遙憐汝、捩柁開頭捷有神、樂天、天上定應勝地上、支機未必及支琴、滄浪詩話ニ、杜甫、小院回廊春寂寂、浴鳧飛鷺晩悠悠、李嘉祐、孤雲獨鳥川光暮、萬井千山海氣秋、是

就句

ヲ就句對トモイヒ、當句對トモ云ヒ、又就對トモ云、當句ニ就テ對ヲトルノ意ナルベシ、引トコロノ詩ニ由テ考レバ、上ト同キ樣ナレドモ、上四字ノ間ニ、句中自對シ、下三字ハ、上句ヲ以テ下句ニ對ス、上ト微シク異レハ、胡越同舟ト別體ナルニヤシラズ、詩法入門ニハ、白首丹心依紫禁、一麾五部淨三邊ト云ヲ引ケリ、白狗桃花ノ類ナリ、又同書ニ、白狐跳梁黃狐立、婦女行啼夫走藏ト云ヲ引テ、

當對

當對トイヘリ、同書ニ、

子母

子母字句ト云アリ、一句內二字爲子母也、社日陰多晴較少、春風曉暖雨猶寒、更漏有無風逆順、紙窗明暗月高低、竹疎烟補密梅瘦雪添肥、亦句中自對ノ類ナリ、

轉句自對

又轉句自對ノ法、南海明詩俚評ニ、袁凱、一聲新雁三更雨、何處愁人不斷腸ト云ヲ評シテ、如此數ノ文字ヲ上下ニ分ツテ、鬪ハシメ用ル事、盛唐ノ嫌フ事ナリ、宋朝ノ人、此體多シ、一爐柴火三杯酒ト云ガ如シ、甚卑シト、此論實ニ是也、然レドモ亦其人ノ巧拙ニアル而已、我藩山本克敬ナル者アリ、健齋ト號ス、詩ヲ南郭服子ニ學ンデ、屢其賞ヲ受ク、落梅花ノ詩ニ、

聯珠

拗句

笛裏梅花白雪紛、隨風散入洛城雲、
五更吹起十年恨、憶在蘆龍塞外聞、

○聯珠句　連珠ト同カラズ連珠ハ前ニアル如ク、疊字ヲ對スル也、古詩ニハ、疊字ヲ數疊メルモアレドモ、律ニハ、三度ハ疊ミ難シ、五律ハ字少キ内故、疊字愈用ヒ難シ、聯珠トハ、只同類ヲ數疊ミタル事也、遠山芳草外、流水落花中、百年雙白鬢、一別五秋螢、高江急峽雷霆鬭、古木長藤日月昏、又實字ヲ疊ム例ニ、風雨晦明淫、跛躄瘖聾盲、ヲ引ケドモ、箇樣ナルハ、歌枯ナドニハアルベシ、詩家ノ辭ニアラズ、句法ノ一體ト成スニ足ラズ、

○拗句　野客叢書ニハ、換字拗句法トイフ、山接夏空險、臺留春日遲、已近苦寒月、況經長別心、勸君更盡一盃酒、西出陽關無故人、是拗腰ニアリ、二四不同、二六對、ノ禁ヲ犯サザル故、初心ノ間ハ、平側合フタル樣ニ思フ也、數條ヲ後ニ摘ンデ、以テ參考ニ供フ、詩藪ニ集メタルハ、杜、側身天地更懷古、回首風塵甘息機、盤渦鷺浴底心性、獨樹花發自分明、黃魯直、黃流不解浣明月、碧樹爲我生涼秋、蜂房各自開戶牖、蟻穴或夢封侯王、歐陽永叔、滄江萬古流不盡、白鳥雙飛意自閑、文潛、白頭青髮有存沒、落日斷霞無古今、拗ハモト聲律不諧トシタル者ナレドモ、其内諧和ノ意ヲ能含ムベシ、清人王士禎分甘餘話曰、唐人拗體律詩有二種、其一、蒼莽歷落中、自成音節、如老杜城尖徑側旌旆愁、獨立縹渺之飛樓、諸篇是也、其一、單句拗第幾字、則偶句亦拗第幾字、抑揚抗墜、讀之如一片宮商、如許渾之溪雲初起日沈閣、山雨欲來風滿樓、趙嘏之湘潭雲盡暮山出、巴蜀雪消春水來、ト、實ニ此二端ニ過ズ、子美、世亂鬱鬱久爲客、路難悠悠常傍人、崔顥、黃鶴一去不復返、白雲千載空悠悠、起

句、杜、臥病擁塞在峽中瀟湘洞庭虛應空、崔、魯、一百五日又欲來梨花梅花參差開、參差ノ中自整齊アリ、サテ此一百五日ノ聯、拗中亦尤奇ナル者也、其故ハ、五言ニテモ、全側ノ句ハ有易フシテ全平ノ句ハ希ナリ、七言ハ猶更也、側ヲ置事モ上去入雜ヘ用ルハ多シ、一入百入日入欲入トシキリニ偏用シタルハ稀也、初心ノ間、拗ヲ用ユトモ、遠慮アルベシ、

○文章歐冶ハ、元ノ陳繹曾ノ著スル所也、聲ヲ論ジテ曰、五言律、七言絶、貴諧和、七言律、五言絶、貴拗律、ト是ハ體製ニ就テイフ、前ニ出セル拗律ヲ主トシテイフト見エタリ、サレドモ元代マデノ律法、嘉隆ト好尚同ジカラザリシコト見ツヘシ、

○支那音、世ニ唐音ト云、唐話俗ニ唐人口也、唐ノ代ノ音ヲ唐音ト云トハ別ナリ、我邦ニ唐話ト云類ヲ、彼間ニテ唐言トモ云、禪語ニ、萬古八風吹不入、西天人不會唐言、ト云是也、卽梵語ニ對シテ云也、唐音トイヘハ、唐代ノ音學ニマガフ故ニ、支那音ト云、彼土我西ナルヲ以テ、又西音トモ云、今文字支那ヨリ來ル者ナレドモ、其呉音ト云者モ、漢音ト云者モ、支那ノ面目ニ非ザレバ、和音ニテハ、牆ヲ隔テテ物ヲ見ル氣味合ニテ、字義句法等誤ルコト多シ、知ル人アラバ學ビ、平生モ音韻ノ間ニ氣ヲ著クベシ、先此方ノ言ニテイハンニ、敏馬浦トイヘバ、不見ニ通ジ、岩手山トイヘバ、不言ニ通ズル如キ、和語ニ通ゼズンバ、爭カ其意ノ所在ヲ知ラン、劉禹錫竹枝詞、

楊柳青青江水平、聞君江上唱歌聲、
東邊日出西邊雨、謂是無晴還有晴、

コレ晴ト情同音ナル故、彼郎江上ノ歌聲、無情トイフテモ、情アルゾト云、日出ルト雨降ルトヲ、無晴ト謂テモ、晴アルゾト通

ヘル也、此體ヲ坡仙集ニ、吳歌格借字寓意トアリ、和語ハ通ハザル故、之ヲ心ニ思フテ得也、近刻學問捷徑ナル者ヲ見ニ、釋大潮、宇士新ニ、呼火口乾、呼雪齒寒、ト云ケレバ、士新聲ニ應シテ呼虎風生ト對ヘシト、是誠ニ和音ニ求ムベカラズ、又曰、紀人國產ノ橘子ヲ徂徠ニ贈ル、徂徠謝シテ曰、南州嘉樹后當栽生子欲如屈子才屈子橘子相通ズルヲ以テ也、南郭唐音ヲ知ヲズ、屈子ヲ屈原トス、大ニ殺風景也ト、是便吳歌格カ、和人ハ必此失アルベシ、和人ノ和語ニ於ルサヘ、細心ニ求メザレバ、風身(蚊蟬)ニ入(衣魚)テ還ル(蛙)サノ道(蚤)ト云ヲ、徒ニ打聞テハ、諸蟲ノ名ノ、其內ニアルヲバ覺エザル也、サレドモ彼方雜書中、音ノ近似ヲ以テ滑稽ヲナス者、往往コレアリ、細心ニ之ヲ玩ベバ、別ニ有靈犀一點通、諸詩解諸詩話ヲ讀ニ、此格ニ言及ス事モ、餘リニ見エザレハ、常常

ノ事トハ見エズ、假面目モト眞面目ニ如ザレバ、爾曹良師ニ値ハヾ之ヲ學ブベシ、不幸ニシテ良師ニ値ズンバ、仔細ニ玩索シテ、務テ是ヲ髣髴ニ得ベシ、然レドモ西音ヲ肆フノ人、我四聲ヲ知ザルニ乘ジテ、人ヲ欺者アリ、詩平側分ツベキノミナラズ、上去入分ツベシト云ヒ、跳字多キハ調ニ入ラズト云者アリ、上去入分別スベキノ境アリ、上ニ已ニ唐式ヲ引テ之ヲイヘリ、平上去入ヲ嚴シク分チタルハ、王介甫也、通例ニハ非ズ、盡ク四聲ヲ吟味スベキ者ナラバ、古人腔子ノ設、如是粗ナルベカラズ、蒼莽歷落ノ間、七月六日苦炎熱、返照入江翻石壁、客心爭日月、霜黃碧梧白鶴棲、詩學ニ老ントナラバ、務テ之ヲ古ニ昭査シテ、佳境中拘拘タラザルノ境アルヲモ知ルベシ、モシ唐律ニ有ザル者ヲ以テ、局促ヲ致サバ耻ベシ、嚴儀卿曰、音韻忌散緩、

亦忌迫促、沈隱侯曰、前有浮聲、則後有切響、一篇之內、音韻盡殊、兩句之中、輕重悉異、花ヲ揷シ、庭ヲ造ルニモ、凡百ノ事、同相ハ人ヲシテ厭シメ易ケレバ、此言ヲ正トスベシ、迫促ト云ハ、入聲ヲ云樣ニモ聞ユレドモ、徐昌穀談藝錄、翩翩堂上燕、疊字極促、乃佳、トイヘバ、跳字也、今人ノ作中、跳字續ケバ、多ク指點シテ和習トス、サレドモ行文ノ間、境ニ觸レテ偶然トシテ發ス、古人忌ズ、卮言、謝茂秦ノ風生萬馬間ノ句ヲ摘デ、排比聲偶爲一時之最ト譽タリ、今唐詩選正聲ニテ、粗拾ツテ監考ニ供フ、四字ナル者ハ擧ルニ勝ズ、五字聯用者、劍門横雲峻、長松響梵聲。常願奉金仙、潭影空人心。霜劍轉龍文。青山空向人。禪心江上山。悵望青天鳴墜葉、不盡長江衰衰來。雲間東嶺千重出、青楓江上秋天遠。艱難苦恨繁霜鬢、人傳郎在鳳凰山。想像精靈欲見難。其佗煩敷擧ズ、張說、不惜流膏助仙鼎、願將楨幹捧明君。ハ、上句ニ貫ヒテ聯用九字ニ至ル、李嘉祐、淸梵林中人轉靜、夕陽城上角偏愁。ハ、下句猶四字ヲ點綴ス、蘇頲、東望望春春可憐、更逢晴日柳含烟。宮中下見南山盡、城上平臨北斗懸。ニ至ツテハ、一解中不跳者僅六、司空曙、

紅燭津亭夜見君。繁絃急管兩紛紛。
平明分手空江轉、惟有猿聲滿水雲。

ニ至ツテハ、一首ノ中不跳者七、跳ルニ合口開口ノ別アレドモ、眞韻之ヲ併モ收ムレバ、皆同響ニ歸スルナリ、是等ノ作、今人ニ有シメバ、必指摘シテ和習トセン、西音ニ通ゼザレバ、彼方言語ノ面目ニ通ジ難キハ勿論ナリ、然ルニ能其音ニ通ズト稱スル輩モ、其詩文中或ハ顚倒愆義ヲモ見レバ、身漢地ニ生レ、漢語ノ中ニ長レル面

目ハ、得易カラズト見ヱタリ、然共一匹錦、背面而殊、均之是物ト、云ガ如ク、和語ニ咏ジテ調ヨキハ、西音ニテモ善シ、和讀ニ棘喉澀舌ナルハ西音モ然ナリ、唐音マナベル方ヨリハ、唐音ノ調シラザレバウタハレズトモイフ、唐音學ヲ排スル方ヨリハ、此說ヲ取ラズ、古樂府以下、陳隋以前ノ詩モ、是ヲ管絃ニ被シメ、失拈側韻ノ作モ、皆樂房ニ取ラレタレバ、唐音取ラザル說モ、其故アリ、盍簪錄曰、墨客揮犀、子瞻嘗自謂、平生有三不如人、著棊、喫酒、唱曲也、然三者亦何用如人、子瞻之詞雖工、而多不入腔、正以不能唱曲耳、學齋佔嗶、又言坡詩不入律、人或謂、日本人不操華音、故詩不成律、然古今作者、如蘇長公、其詩猶不入腔調、是知聲律之妙、自在巧拙之外、是ニヨレバ、唐音知ザレバ歌ハレズト云モ、其人ノ杜撰ニ非ズ、然レドモ東厓ノ說ノ如ク、詩ノ美ハ自其外ニアリ、サテ支那音ノ事、世多ク華音ト稱ス、華ノ稱、栗山潛鋒、保建大記之ヲ辨ジテ曰、近學墮乎市井、文不振乎搢紳、憎乎舊典、而不之顧、或呼元明為中華、自稱為東夷、殆幾乎外視萬世父母之邦、而無蔑百王憲令之著矣ト、中彼者、自外也、華彼者、自夷也、朱舜水、僧即非ハ、儒家佛家ノ歷歷ニテ、明末海ヲ踏ンデ我ニ歸化セリ、二子皆彼ヲ指シテ、唐ト云、唐山ト云、今長崎ニ來ル商客等、常ニ唐山ト云、人ノ國ニ居ルノ禮ヲ得タリ、堂堂タル　日出之邦、屹トシテ獨立ス、豈彼雞林流虬ノ、其封冊ヲ受ケ、其正朔ヲ奉ズル者ト伍ヲナサンヤ、朝鮮李東廓、嘗テ我邦ニ於テ詩アリ、曰、文武雄才大都會、詩書舊業小中華、是詩中ノ語トイヘドモ、虛譽ト謂ベカラズ、萩府小倉尙齋、韓人ニ對シテ、我邦山水九州外、不借胼胝大禹功ト、詞人外國ノ人ニ對スル、苟此意

得ナクンバ、大ニ國體ヲ辱メ、遠ク禮ヲ知ラザルノ譏ヲ招ントス、亦悲カラズヤ、

○倒裝　顛倒錯綜句ナリ、鶴林玉露ニハ、反句トイヘリ、倒裝ヲ說ク者、老杜、香稻碧梧ノ聯ヲ以テス、予往年筆シテ童蒙ニ示セシ者アリ、其儘左ニ出セリ、

昆吾御宿自逶迤、紫閣峯陰入渼陂、
香稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝、
佳人拾翠春相問、仙侶同舟晚更移、
彩筆昔曾干氣象、白頭吟望苦低垂、

秋興之作者、老杜在峽中、感秋而作也、杜昔嘗與岑參兄弟、泛舟於渼陂而遊樂、又嘗獻三大禮賦、玄宗奇之、召試文章、詩及此二事、蓋其感秋、何以感秋、玄宗登極、勵精政事、太平四十年、明宰賢相輩出、殆將比隆於貞觀、晚節志弛氣怠、姦邪交進、終失天下、杜遭亂離、而流落楚蜀矣、以艱難之日、想長安山川、佳麗繁華、舊遊之笑語歡樂、宛然在目、哀夫姦邪竊祿、賢正去朝、故其意謂、昆吾御宿之逶迤回遠、紫閣峯北斜入渼陂、是想像所曾遊之景也、而此地有田有樹、由嘗所見發興曰、鸚鵡者巧言之鳥也、稻者養人之穀也、而人不得食其稻、鸚鵡啄其粒、非啻啄其粒、啄猶有餘、是姦邪巧言之飽於上、方正良民之餧於下也、梧桐之枝、本棲鳳之處也、而鳳不得棲其枝、梧桐徒老矣、是君子已去、其棲亦老矣、賢正不在、姦邪亂國、因憶夫佳人拾翠春相問、與遊侶同舟、至晚不休、太平之行樂、不可復得矣、當少壯之時也、摛筆作賦、以于明主、今也流落峽中、或吟其詩、或望其處、吟愈傷其懷、望不見其處、唯白髮低垂、將死此中、傷讒懷國、數歡樂、感少壯、無限情懷、○古來說倒裝者、舉此詩曰、當言鸚鵡啄餘香稻粒、鳳凰棲老碧梧枝、而倒言云云、雖然此言鸚鵡粒者、言非人之粒也、言鳳凰枝者、言雖老非佗鳥之棲也、是非倒也、蓋倒裝唐人多

此體矣、如杜最不少、欲言五尺童高於黃鵠、化爲老翁似白鳧、則言黃鵠高於五尺童、化爲白鳧似老翁、欲言得赴成都歸茅屋、則言得歸茅屋赴成都、欲言尙有生長明妃村、則言生長明妃尙有村、欲言春風轉香飄合殿、淑景移花覆千官、則言香飄合殿春風轉、花覆千官淑景移、欲言道暍思需黃梅雨、宮恩敢望玉井氷、則言思需道暍黃梅雨、敢望宮恩玉井氷、欲言高秋實總饋貧人、來歲花還舒滿眼、則言高秋總饋貧人實、來歲還舒滿眼花、欲言留連細草侵坐軟、悵望殘花近人開、則言細草留連侵坐軟、殘花悵望近人開、欲言未從容相見故人、常閴寂獨愁多病、則言多病獨愁常閴寂、故人相見未從容、欲言謀良夜醉、欲縱酒散紫宸朝初還家、則言縱酒欲謀良夜醉、還家初散紫宸朝、欲言琥珀杯薄春酒濃、瑪瑙盌寒氷漿碧、則言春酒杯濃琥珀薄、氷漿盌碧瑪瑙寒、欲言雪融城樓

濕、雲去宮殿低、則言樓雪融城濕、宮雲去殿低、欲言已入雲端霾風磴、誤疑江麓過茅堂、則倒其句言、誤疑茅堂過江麓、已入風磴霾雲端、李白淸平調詞、本欲言衣裳想雲容想花、而言雲想衣裳花想容、秋浦歌、本欲言緣愁三千丈、白髮如個長、而言白髮三千丈緣愁如個長、謂之三千丈者、猶燕山雪花大如席之口氣也、其外張說、若使巢由同此意、不將蘿薜易簪纓、者、若使此意同巢由、不將簪纓易蘿薜也、張均、洲白蘆花吐、園紅柿葉稀、者、蘆化吐洲白、柿葉稀園紅也、意是法似自梁丘遲、巢空初鳥飛、荇亂新魚戲、來、項斯、山當日午回峰影、草帶泥痕過鹿群、即是山回峰影當日午、草過鹿群帶泥痕也、對中倒上順下者、久捺野鶴如雙鬢、遮莫鄰鷄下五更、上句、則久捺雙鬢如野鶴也、許渾詩、山風吹盡桂花枝者、山風吹盡桂枝花也、爲韻顚倒也、王昌齡、遷客離憂楚地顏者、遷客楚地離

蹉對

憂顔也、是爲聲律顚倒也、劉禹錫、舊人唯有何戡在、更與慇懃唱渭城、者、舊人唯有更與慇懃唱渭城何戡在之意、其言更者見戀戀相送、非一席一筵、草草分手者、是由今聞天樂、追憶昔日之離歌也、猶與李白當言只今唯有曾照吳王宮裏人西江月、而言只今唯有西江月、曾照吳王宮裏人同一法、爲句顚倒也、讀者不解句法、以爲此時唱渭城渭城豈相逢之曲哉、

○蹉對　交股對トモ云、引違ヘテ對スルヲ言、莊子、樂出虛、菌成蒸、ト云ベキヲ、樂出虛、蒸成菌、ト書ケルヲ、古人引ケリ、李華弔古戰場文、降矣哉終身夷狄、戰矣哉骨暴沙礫、終身骨暴、此二字蹉シタリ、日華留偃蓋、麈尾轉春風、唐人詩帖日華對春風、偃蓋對麈尾、宋王荊公嘗テ詩アリ、曰、春殘葉密花枝少、睡起茶多酒盞疎、惠洪多ヲ親ニシタシトイヘリ、是密少ニ對シ、新疎ニ對セント也、

雙關

江朝宗聞テ、是本蹉對、疎對密、多對少、古人ノ句法ヲ知ラズトテ譏レリ、蹉對又變態多シ、王維、城外青山如屋裏、東家流水入西鄰、崔顥、晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲、孟浩然、野老就耕去、荷鋤隨牧童、牧童野老ニ對シ、就耕、荷鋤隨、ニ對ス、蹉ノ奇ナル者アリ、コレヲ其前ニ査スルニ、晉張華、穆如灑清風、奐若春華敷、ト云アリ、意有テ此蹉ヲナスカ、抑偶然カ、

○雙關法　詩義詠物ノ處ニ出セル愛妾換馬ノ詩是也、高適、送李少府貶峽中王少府貶長沙ノ作モ、雙關法ナリ、但前聯ハ、上句屬李、下句屬王、後聯ハ、上句屬王、下句屬李、雙關ノ變法ナリ、正變常ナシ、巧拙ハ作者ノ手段ニアリ、樂天酬牛相公二十四韻、白老忘機客、牛公濟世賢、ト起セショリ、終篇上句自言ヒ、下句牛ヲイヘリ、注曰毎對雙關、分敘兩意、

互體

○互體　上ニアル者ヲ下ニ含マセ、下ニアル者ヲ上ニ含マスル也、老杜風含翠篠娟娟淨、雨裛紅蕖冉冉香。上句風中有雨、下句雨中有風、宋楊誠齋、綠光風動麥、白碎日翻池。上句風中有日、下句日中有風、

○故事疊用　東坡左角看破楚、南柯聞長滕左角ハ莊子、蝸角左ニ蠻氏右ニ觸氏ノ國アルト云ヲ引ケリ、南柯ハ卽淳于棼夢ニ南柯ノ太守タリシ故事、破楚ハ劉項ノ爭、長滕ハ滕薛爭長ノ事也、又隔句疊用者ハ、劉禹錫題欹器圖、

秦國功成思稅駕、晉臣名遂歎危機。
無因上蔡牽黃犬、願作丹徒一布衣。

一三ノ句ハ李斯ガ事ヲ用ユ、二四ハ晉諸葛長民、劉裕ノ劉毅ヲ誅スルヲ見テ歎ジテ曰、貧賤常思富貴、富貴必履危機、今日欲爲丹徒布衣、豈可得也ト、コレヲ引用ヒタル也、欹器ヲ詠ジテ、毫モ欹器ニ涉ラズ、而シテ欹器ニ切當ス、詩ニ老ルニ非ズンバ、爭カ此境ヲ得ン、宋ハ白戰不許持寸鐵、トイヘルモ、此作ニ比スレバ、大ニ愧ル色アリ、詩作ラント思フ人ハ、能此意ヲ含蓄スベシ、

以二對一

○以二對一　長德年中、省試詩論ニ、紀齊名、時棟ノ功名嘲傳說、巧思拉般爾、トセシヲ、魯般玉爾二人ノ名ヲ一人ノ傳說ニ對スベカラザル由ヲ難ズ、匡衡樂天幸逢堯舜無爲日、得作羲皇向上人、ト云句ヲ引テ辨ゼリ、是匡衡ノ雄辨ニシテ、實ハ樂天モ詩病ヲ犯セル者ナリ、

一句兩節

○一句兩節　兩句一節トハ、上ニ出セル兩句一貫ナリ、一句兩節ハ是ニ反シテ、却テ一句兩節トナル、玉屑ニハ、黃庭經、上有黃庭下關元、ト云句ヨリ出トイヘリ、張平子四愁詩此體ナリ、老杜不知兩閣意、肯別定留人、又小麥青青大麥枯、誰當穫者婦與

姑丈夫何在西擊胡上四字ハ問語下三字ハ答語、コレヲ問答法ト云、サレドモ其實ハ、一句兩節ノ法ナリ、又兩句ヲ以テ問答ヲナス者、李白獨不見ノ詩ニ、白馬誰家子、黃龍邊塞兒。

○詩中用助字　牀頭曆日無多子、借問別來太瘦生、子與生初不當輕重ト、玉屑ニ見エタリ、其故ハ無多太瘦タリト云程ノ事ニテ、子生ニ意義ナシ、無多子ト云ハ、モト臨濟大悟ノ時、黃蘗佛法無多子トイハレシコトアリ、太瘦生ハ、李白杜ニ贈ル、借問緣何太瘦生ト云句アリ、秉燭譚曰、正字通云、語辭生猶些也、宋姚宋佐、梅花得月太淸生、范石湖、尋幽險絕太奇生、禪語ノ作麼生太俗生太遲生ナドヲ引ケリ、焦氏筆乘、借問白頭翁垂綸幾年也、王昌齡依止此山門誰能郊此也、孟浩然

○論腰　句ニ腰アリ、五七言共ニ、下ヨリ

數ヘテ三字目ナリ、句作リ、五言、○○、○○○七言、○○、○○、○○○是ヲ正法トス、○○○、○○○○是ヲ折句トス、張文潛曰、古人作七言詩、其句脈多上四字、而下以三字成之、退之乃變以上三下四、如落以斧引以纆徽雖欲悔舌不可捫是也ト、退之ハ文章ノ大家、詩モ亦麗語ヲ好マズ、故自モ橫空盤硬語ト云テ、亦一家風ナリ、爾ノ曹ノ摸擬シ得ル者ニアラズ、學ブベカラズ、一說ニ、七言二二三トスレバ、五言ニ、上ニ二字著ケタル樣ナリ、左樣ナラヌ樣ニスベシトテ、歐陽永叔、靜愛僧時來野寺、獨尋春偶過溪橋、盧贊元、想行客過梅橋滑、免老農憂麥壠乾ナド云事アリ、邪說ナリ、用ユベカラズ、上四下三ト折ルモ、上ノ四字、二二ト行ク語脈ノ意得ナキハ、對玉山人雖老矣、見恒河性故依然、東坡烹野八珍邀父老、燒窮四和伴兒童、魏野ナド亦折句ノ類ナリ、折句

ノ法數稱二二三ノ語脈ヲ含ム者ハ、調自ヨシ、顧我老非題杜客、知君才是濟川功、上一下六杜甫日色纔臨仙掌動、香烟欲傍袞龍浮、上二下五王維百歲無多時壯健、一春有幾日晴光、同上樂天故園書動經年到、華髮春唯兩鬢生、上三下四崔塗橋横水木已秋色、寺倚雲峰更晚晴、同上二魏野上五下二ノ句法ニハ、杜、永夜角聲悲自語、中天月色好誰看、穩ナラザレドモ、先ココニ具フ、上六下一ハ詩法入門ニ、微紅幾處華心吐、嫩綠誰家柳眼開、予想フニ、上一下六ハアルベシ、上六下一ハ有ルベカラズ、七言上三下四ハ猶可也、五言上三下二ハ愈作ルベカラズ、李白、天上白玉京、十二樓五城、大家ノ作トイヘドモ、下句語ヲナサズ、法トルベカラズ、唐詩選中、早晚薦雄文似者、ノ句アリ、選中ノ惡句ト意得ベシ、腰ナキ句ヲ混句ト云、野客叢書、藏千尋布水、出十八高僧、一千尋樹直、三十六峯寒、ナドアリ、白詩折節此調アレドモ、盛唐ニハ稀ナリ、選詩ニ、服食求神仙、多爲藥所誤、岑參、遥憐故園菊、應傍戰場開、何レモ下句混句ナレドモ、岑詩ハ下三字ノ語脈ヲ含ム故、調常ト同キガ如シ、七言ハ混句忌マズ、杜、我已無家尋弟妹、君今何處訪庭闈、白、綠浪東西南北水、紅欄三百九十橋、子鱗、山東十二諸侯國、海濱五百義士鄕、腰アル樣ナレドモ、其實混句也、語脈ヲ尋ネテ知ルベシ、老杜白帝城最高樓、分甘餘話ニ所謂蒼莽歷落ノ者、

城尖徑昃旌旆愁、獨立縹緲之飛樓、
峽坼雲霾龍虎睡、江清日抱黿鼉遊、
扶桑西枝封斷石、弱水東影隨長流、
杖藜嘆世者誰子、泣血迸空回白頭、

第二第七混句、領聯上二下五、聲調ヲ併セテ常法ニ非ズ、杜牧故鄕七十五長亭、子鱗靑天七十二芙蓉、皆混句也、

君不見例

○君不見例　君不見呉王宮闕臨江起、ハ、是ヲ七言上ニ加ヘテ、起句ニ用ユル者也、岑參蜀葵花歌、之ヲ六字句中ニ置テ、結ニ用ユ、其詩、

昨日一花開、今日一花開、今日花正好、昨日花已老、人生不得恒少年、莫怪牀頭沽酒錢、請君有錢向酒家、君不見蜀葵花、此詩毎二句換韻、而起結疊花字者三言、亦奇法、

篇中連用者、白集馴犀詩、君不見建中初、馴象生還放林邑、君不見貞元末、馴犀凍死蠻兒啼、又杏爲梁詩、君不見馬家宅尚猶存、宅門題作奉誠園、君不見魏家宅屬他人、詔贖賜還五代孫、是皆篇中ニ連用スル者也、結ニ連用スル者ハ、同上陽人、君不見昔時呂尚美人賦、又不見今日上陽白髮歌、此末ノ不見ハ不聞ノ意ト見ヱタリ、又岑參胡笳歌ニハ、直ニ君不聞胡笳聲最悲、トモアリ、又不見トバカリ二字ニテ。君不見ノ意ニモ用ヒタリ、劉宋鮑照、不見長河水、清濁俱不息、是五言ニ用ユル者、七言ニハ、李嶠、不見祇今汾水上、唯有年年旅雁飛、于鱗不見薊門秋草色、愁心明月滿姑蘇、絕句解、不見ノ上ニ君ノ字ヲ置テ見セタリ、又魏陳琳飲馬長城窟行、君獨不見長城下、死人骸骨相撐拄、獨ノ字ヲ漆テ句中ニ入レタリ、于鱗、白頭明日事、君不見交情、五律中ニ裁シ入レタリ、

用古句

○用古人句者　詩成白也知無敵、花落虞兮可奈何、白也詩無敵ハ、子美李白ヲ憶フノ句也、虞兮虞兮奈汝何ハ、項羽垓下ニテ、虞氏ニ別レシ歌也、猶詩病偏枯ノ所ト照シ見ルベシ、

畧字

○略字者　樂天浪淘沙、一泊沙來一泊去、一重浪滅一重生、是乃一泊沙來一泊沙去、一重浪滅一重浪生、ヲ略スル也、明王穉登、一半秦聲半楚聲、秦娥調瑟楚娥箏、是乃一

句數字數

半秦聲一半楚聲、秦娥調瑟楚娥調等ヲ略スルナリ、

○古詩句數定リナシト見エタリ、尤五言ハ文字ノ數モ五字ト限リ、雙句ノミニテ單句ナシ、サレドモ李白去婦詞ニハ、五言六十句ノ中、第十三句目ニ、自從結髮日未幾ト云七言ノ一句ヲ雜ヘ、同君馬黃ニ、全詩五言十六句、君馬黃我馬白、ノ三言兩句ニテ起シ、文選陸機猛虎行、全詩二十句、起聯二句、渴不飮盜泉水、熱不息惡木陰、ト六言ナリ、要スルニ、是皆古樂府ノ辭ニシテ、五言ノ本色ニ非ズ、此體ニ傚ハントナラバ、思慮アルベシ、歌行ハ、一言ニテモ二言ニテモ、三言四言、乃至十有餘言ニテモ、單句ニテモ雙句ニテモ、勝手次第ト見エタリ、李白憶秦娥、

簫聲咽、秦娥夢斷秦樓月、秦樓月年年柳色灞陵傷別、樂遊原上清秋節、漢陽古道音塵絕、音塵絕西風殘照漢家陵闕、

是サキノ菩薩蠻ノ詩ト、後世詞曲トナシテ用レドモ、此時詞ハナシ、是等ニテ、文字遣ヒ工夫スベシ、李白行路難、昭三白骨縈爛草、誰更掃黃金臺、行路難歸去來ト三言ニテ結ビタルモアリ、是等近體ノ事ニ非ズトイヘドモ、書シテ蒙士望蜀ノ意ニ供フ、

安字

字法

改章難於代篇、代字難於代句、トテ、字ヲ置事容易ナラズ、故ニ古人モ、吟安一個字、撚斷數莖鬚トイヘリ、明王世懋、崔顥黃鶴樓ノ詩ト、李白鳳凰臺ノ詩トヲ論ジテ、日暮鄕關何處是、烟波江上使人愁ト、總爲浮雲能蔽日、長安不見使人愁ト、同使人愁ナレドモ、日暮鄕關烟波江上、本指著ナシ、登臨スル者未愁ヘズ、烟波使之愁レバ、使ノ字用ヒ得テヨシ、浮雲蔽日、長安不見、逐客實

自愁フベシ、是使ムル者ヲ須ヒズ、使ノ字用ヒ得テヨカラズト、兩詩ノ優劣ヲ、使ノ字ニ分テリ、唐末王貞白、作御溝詩曰、

一派御溝水、　綠槐相蔭清、
此波涵帝澤、　無處濯塵纓、
鳥道來雖險、　龍池到自平、
朝宗心本切、　願向急流傾、

自冠絕無瑕トシテ、僧貫休ニ見セケレバ、貫休此詩甚好トイヘドモ、猶一ノ剩字アリトイヘリ、貞白無興ニ坐ヲ起ケルニ、貫休此公敏キ人ナレバ、追追來ラレントテ、掌ニ一字書テ待ケルニ、貞白ヤガテ回リ、忻然トシテ此中涵帝澤ト云、貫休掌ヲ開示セバ、果中ノ字ヲ書タリ、彼此思ヒ合セテ字ヲ下スノ難キヲ知ルベシ、故姑江寧ノ兩首ヲ擧テ、佗ヲ例ス、西宮春怨、

西宮夜靜百花香、　欲捲朱簾春恨長、
斜抱雲和深見月、　朧朧樹色隱昭陽、

彼此ト物ニ應接多ケレバ、花ノ香ナドハ聞ヘヌ者ナリ、西宮寂寞、百花モソト打薰リタル樣子、イトシメヤカニ得ナラズ覺エタリ、月花モ面白カラント、心惡ク、簾ヲ卷キシバシ詠メバヤナド思ヒシニ、又何ヤランムシクシ氣ムツカシク成テ、見バヤト思ヒシ花モ見ズ、欲捲ト云ニテ、捲ザリシ事シラルヽ也、雲和ハ瑟ノ名ナリ、サラバ瑟ニテモ奏デナント、取出シタレドモ、コレモ奏ヅベキ心ニモナラズ、故ニ之ヲ斜ニ抱キ、簾捲キヤラズ、瑟奏デヤラズ、春ノ夜ノ朧ナル月影ノ、君ノイマセル昭陽ノ樹ノ間ニ、半隱レタルヲ見ルトナリ、定カニモ見マホシキ月ノ、樹ノ間ニ朧ナル影ヲ、簾ヲ隔テ見タル情、如何ゾヤ、靜トイヒ、香ト云、欲スト云、斜ト云、深ト云、豈一字ノ容易ニ下スアランヤ、同閨怨、

閨中少婦不知愁、　春日凝粧上翠樓、

忽見陌頭楊柳色、悔教夫婿覓封侯

是初來ノ婦、歲ノ比十六七ニモヤト思ハル、閨中ト置タル者ハ、養レテ深閨ニアリ、迎ラレテ人ノ婦トナル、閨必父母ノ家、夫ノ家ト分辨スベカラズ、相兼テ見ルベシ、始テ此比人婦トナリ、素ヨリ世ノ中ノ定メ難キ事モ知ラス、人ト共ニ我夫ノ軍ニ從フヲ、其家ノ人人ニ從ヒ送リ、モラヒ泣ナドシテ歸リ、猶等閒ニ打過ス、折節風日モ好キママニ、靚粧嬋娟トシテ樓ニ上リ、別ヲ慕ヒ遠キヲ望ムニモアラズ、四方ノ氣色打詠メ居タル內、何トナク物サビシクナリテ、ヒヨト此頃夫ヲ送リシ陌ヲ見シニ、路邊ニタテル柳ノ、其頃ハ猶春メケル色トシモ無リシニ、幾日モアラヌト思フ內、條長ク綠深クナリヌ、因テ時過ギ物換ルニ驚キ、俄ニ夫ノ戀シクナリテ、馬鹿ナ本ニ夫ヲヤルマヒ物ニ、立身ノ望モ、夫婦相見ル上ノ事ゾト悔ヒタリ、國家ノ爲ニ征戍スル身ノ、婦人ノ力ニテ、行ヲ留ムル事ノナルベキヤ、ソコヲヤルマヒ物ニト思ヒタル所、少婦ノ癡想、益十六七ノ分別ト思ハル、說得テ宛然トシテ閨中ノ少婦ナリ、不知愁ト云、忽ト云、色ト云、再動スベカラズ精神渟渟トシテ、常山ノ蛇ノ勢アリ、故ニ詩ハ一字トシテ容易ニ下スベキニ非ズ、同文字トテモ、上下ノ置場ニテ、優劣成ル也、譬バ山岳助兵衞ト云バ、婆シキ山民ノ名ニシテ、岳山兵衞佐トイヘバ、勇勇敷將ノ名トモ聞ユル也、サレバ源英明夏日ノ詩ヲ作ツテ、池冷水無三伏夏、松高風有一聲秋、ト云ヲ、菅文時、水冷池無三伏夏、風高松有一聲秋、トセシガ、滿坐皆其詩學ニ老タルヲ稱シキト、サレドモ思ヒ過レバ僻ニワタル事アリ、文時源爲憲ノ、鶴閑翅刷千年雪、僧老眉垂八字霜、ト云

ヲ、翅閑鶴刷千年雪、眉老僧垂八字霜。ト改シハ、巧ニ傷ラル、ニ似タリ、

○古詩ニハ、同字ハ勿論、ヒトツ韻字ヲサヘ、屢フミテモ作リタリ、是其禁ナケレバナリ、ソレガソロソロ六朝ニナリ、禁忌ト云事出來タリ、同字ハ勿論、同意ノ字モ忌メリ、同意ノ字トハ、朝聞遊子唱離歌。昨夜微霜初渡河。ト作リテ、關城曙色催寒近、御苑砧聲向晩多。ト朝曙夜晩竝ベ用ユ、終ニ詩家ノ病トナル、故ニ古體ハ同字ヲ許ストイヘドモ、近體同字ヲ許サズ、同字ハ猶可ナリ、同意ハ所謂念ニ、古體トイヘドモ頗遠慮スベシ、同字トイヘドモ、義異ルハ傍犯ト云テ、强テ苦シカルベカラズ、詩人玉屑、詩體總論ニ、徐陵ノ文ヲ引テ、陪遊馺娑、騁纖腰於結風、長樂鴛鴦、奏新聲於度曲、ト云、厭長樂之疎鐘、勞中宮之緩箭、ト云ガ如キ、長樂宮ト、長樂ムト、傍犯ニシテ重複ニ非ズトス、明人ハ頗忌ム樣ナリ、重複即同字也、王摩詰、出塞、

居延城外獵天驕。白草連空野火燒。
暮雲空磧時驅馬。秋日平原好射鵰。
護羌校尉朝乘障。破虜將軍夜度遼。
玉靶角弓珠勒馬。漢家將賜霍嫖姚。

是モ領聯拗シタリ、此詩空字將字馬字各二、連空ノ空ハ、天トイフガ如ク、實字也、空磧ノ空ハ、ムナシキニテ、虚字也、將軍ノ將ハヒキユルニテ、官名也、將賜ノ將ハ虚字也、傍犯忌ズ、只此馬ノ字實字ナルヲ以テ、重複トス、ヨク出來タル詩ナレドモ、瑕トナル事ヲ、古人モ惜メリ、崔顥黄鶴樓、人ト云字二ツアリ、前ハ昔人、後ハ己ヲサス、意同カラズ、サレドモ佗詩ナラバ猶忌ムベシ、是ハ字ヲ疊ムヲ以テ、體ヲナセル詩也、摩詰ノ詩ハ、殊ニ同ク句尾ニ置タル程ニ、取分テ忌ナリ、又杌圃擷餘ニ、重複ノ事ヲ

論ジテ、重複ハ古人ハ寛ニストイヘドモ、今人ハ必嚴ニスベシ、任彦升哭范僕射詩、一首ノ中、三タビ情ノ字ヲ押シ、又沈雲卿、天長地濶ノ詩ノ、三ノ何ノ字、王摩詰、暮雲空磧ノ、二ノ馬ノ字、又一從歸白社、不復到青門トシテ、青菰臨水映、白鳥向山翻ト、青白ノ字重複スル者ハ、モト皆點檢ヲ失スル者、又摩詰獨坐悲雙鬢トシテ、白髮終難變ト云ガ如キハ、語異レドモ意重ナル、又九成宮避暑ノ作ニ、衣上鏡中林下巖前ト置タル類、皆同病宜ク避ベキ由イヘリ、尤サモアルベキ事也、沈佺期龍池篇、崔顥黃鶴樓、李白鸚鵡洲ナド、皆疊字ノ法則トナスベシ、又兩句ニ同樣ニ疊メルアリ、杜甫、白帝城中雲出門、白帝城下雲傾盆、同樣ニ疊ム故ニ、聲律ノ論ナシ、下ノ帝ノ字、平ニアテテ見ル、王昌齡丹陽城南秋海陰、丹陽城北楚雲深、上ノ陽ノ字、側ニ當テテ見ル、一聯中側字僅ニ三字ナリ、明郭登、甘州城西河水流、甘州城北胡雲愁、上ノ州ノ字、側ニアテテ見ル、側字僅ニ二字、尤變調トス、杜氏金縷衣曲、

勸君莫惜金縷衣、　勸君須惜少年時、
花開堪折直須折、　莫待無花空折枝、

上下同樣ニ連ネ用ユレバ、聲協フコトナラズ、然レドモ其協ハザルハ病ニアラズ、故ニ出傾杜海雲王水雲郭縷年杜ノ處ニテ聲ヲ合スル、是法ナリ、

句頭疊字

句頭疊字者、李白、陪從祖濟南太守、泛鵲山湖作、

湖闊數千里、　湖光搖碧山、
湖西正有月、　獨送李膺還、

此法已ニ晉人子夜春歌ニ見ユ、

春林花多媚、　春鳥意多哀、
春風復多情、　吹我羅裳披、

律中用此法者、清詩選、吳兆騫送嚴伯玉、

相期且對酒、　相見輒悲歌、

相逢有如此、相思知若何。
晴川疎樹遠、落日亂山多、
別後豐湖月、聞鐘應獨過。

二句中四疊字者、方秋崖、一枝密密一枝疎。一樹亭亭一樹枯。邵清甫、一炷清香一卷經。一輪明月一張琴。李商隱夜雨寄北作、句ヲ隔テテ巴山夜雨ノ字ヲ疊ム、此類例聯珠詩格ニアリ、總テ上ノ句ヨリ、下ニ孕ミ出シタル法アリ、沈佺期邙山ノ詩ノ接句、城中ノ城ハ、第二句ノ洛城ニ承ケ、結句山上ノ山ハ、北邙山上ヨリ帶來ル也、謝榛登輝縣城見衛水思鄉、

城外河流白練長。城中萬戸共秋光。
秋來偏作還家夢、河水東流到故鄉。

城ノ字ヲ疊ミタルハ上ニアル通リ也、三四ニ秋河ノ二字ヲ疊ミタルハ、邙山ノ詩ト同一字法ナリ、蘇頲東望望春春可憐。是モ亦疊字ノ一法也、宋張横渠芭蕉ノ詩、一

字ヲ疊用セリ、其疊ム所ノ新ノ字、字字新也、

芭蕉心盡展新枝。新卷新心暗已隨。
願學新心長新德、旋隨新葉起新知。

今二三ノ例ヲ擧グ、古詩中ニハ、李白飛龍引、騎龍攀天造天關、造天關聞天語、長雲駕車載玉女、載玉女過紫皇。ナド疊ミタルアリ、畢竟是等ニ定マレル體ナシ、作例ヲ得ト考ヘタル上ハ、境ヲ得ルニ隨ヒテ自在ニ作ルベシ、聲律一定ノ法アリトイヘドモ、佳境ヲ得ルニ至ッテハ必シモ拘ハラズ、初心ノ間ハ愼ムベシ、追追心ニ得テ手ニ應ズル時アリ、自許ス時、人モ許ス者ナリ、李白、

兩人對酌山花開。一盃一盃又一盃。
我醉欲眠卿且去、明朝有意抱琴來。

是皆聲律ノ外ニ得意ノ境アリ、近頃服子遷、夜下墨水、

金龍山畔江月浮。江搖月湧金龍流。
扁舟不住天如水、兩岸秋風下二州。

此法コレ盛唐三昧ノ法、佳境ニ入ル者也、コレヲ靑蓮集中ニ置トモ辨ズベカラズ、

○詩ニ字眼ト云アリ、句中意味ノ最關カル字ノコトナリ、律ニ限ルコトニ非ザレドモ、字眼トイヘバ、對聯ニテイフコト也、古人虛字實字ヲ分チ用ヒタレドモ、分ツニモ及バズ、肝心トナル字也、響字トモイヘリ、上下ニ應ズルニヨリテイフト見ユタリ、先五言ノ第三字、七言ノ第五字トイヘリ、然レバ各腰ノ字也、入門ニハ、其佗ニアル所ノ者ヲ鍊字トイヘリ、畢竟ヒトツコトナリ、旅愁春入越鄕夢夜歸秦雪意未成雲就地、秋聲不斷雁連天、圓荷浮小葉、細麥落輕花、返照入江翻石壁、歸雲擁樹失山村、ナド引ケリ、サレドモ意猶汎ナリ、勳業頻看鏡、行藏獨倚闌、頻ニト云ニテ每年空ク過ルニナリ、獨ト云ニテ佗ハ各得意シタルヲ知ル也、殘柳宮前空露葉、夕陽江上浩烟波、空浩ノ二字ヲ古人字眼トイヘリ、然マデ替レル事モナキ樣ナレドモ、サラバトテ試ニ此二字ヲ置カヘ見ルベシ、其時ココニ骨ヲ折タル事ヲ知ラン、只腰ニ當ルヲ字眼ト立タル故、佗ニアル所ヲ鍊字ト云、秋後見飛千里雁、月中聞擣萬家衣、見ルト云字乃書ヲ傳ヘザル也、聞ト云字乃衣ヲ授カラザル也、草枯鷹眼疾、雪盡馬蹄輕ト云ガ如キ、コレヲ竝ビ鍊ルトイヘル、枯疾盡輕相照應シ、疾輕ノ字、枯盡ノ字ニ依テ安頓シテ對聯ニ非ザレドモ、鍊字ノ工夫ハアルベキコトナリ、近頃京師笠原雲溪、送僧作、

巴水橋頭落月斜、衲衣侵曉向天涯、
馬蹄莫失東歸路、雪白長安十萬家、

人口ニ膾炙シタル詩ナリ、僧萬菴見テ暗

ヲ以テ白ニ代ヘント云シトゾ、上ニ莫失ノ字アリ、暗ノ字最妙トス、字ヲ錬ルノ工夫トスベシ、呼ンデコレヲ字眼トイハバ、字眼ト呼ンモ通ズベシ、サレドモ古人眼ト錬トヲ分チ置タレバ、分チテヨシ、唯名ニ依テ實ニ迷ハンヲ恐レ、喋喋トシテ辨ヲ下ス、劉禹錫、松滋渡望峽中、

渡頭輕雨灑寒梅。雲際溶溶雪水來。
夢渚草長迷楚望。夷陵土黑有秦灰。
巴人淚應猿聲落。蜀客船從鳥道回。
十二碧峰何處所。永安宮外是陽臺。

是雲雨ノ二字ヲ錬レリ、遠ク峽中ヲ望ンデ、彼ハ昔蜀先主ノ永安宮ノ在シ所ナリ、其アナタ即楚襄王ノ巫山ノ神女ハ、朝ニハ行雲トナリ、暮ニハ行雨トナラント云ヲ、夢ミシ陽臺ゾト敎ヘラレテ、ソレヨリ峽中ヲ見渡シタリ、渡頭ニ初春ノ雨ノ、ソト梅ニ永ギテ通リタルヨリ打續キテ、遠

所字義

方ハマダ晴ヤラヌ雲間ヨリ、雪解ノ水ノ水上增リニ降リ來リヌ、此雲ト雨ト尋常ノ雲雨ナリ、草長ク連リテ、夢渚ハ定カナラズ、土黑ク見エテ、夷陵即白起ノ舊跡粗知ルベシ、是望中景ノ大ナル者ナリ、而シテ漕行キ漕返ル船ニ、巴人蜀客ノ旅情ナド思ヒ續ケ、誠ニ等閑ノ雲雨モ得ナラズ覺ヘ、炭炭ト打續キタル山ノ中、ドコノドレゾ彼十二峰ナラン、カナタハ陽臺ナルニト、思ヒ續ケタルナリ、等閑ノ雲雨ヲ以テ、終ニ陽臺ヲ望ミ得タルノ趣ヲナシタリ、處ト所ト和訓同ケレドモ、義大ニ同カラズ、所ハ和語ニノト云者也、處ハ定カニ處也、何處所ゾ、アノ靑ヒ所カ、此靑ヒ所カ也、訓譯示蒙ニ、アテドト譯スルモ此義ナリ、是等ハ格別傑出ノ作トモ見エザレドモ、文字ニ用ユルノ法甚精シ是等ヲ考ヘテ、得ト字法ヲ悟ルベシ、總テ文章詩歌ニ

字眼

至ルマデ、一篇脈絡貫通スベシ、モシ脈絡貫通セザレバ、痿人ノ我物ナガラ、手足ノ用ヲ辨ゼザルガ如シ、又才足ラザレバ、始ハ物物言出シテモ、シマイ尾細ニ成ル、是ヲ龍頭蛇尾ト云、俗ニイフ緣ノ續ク樣ト云モ是ナリ、雨芳洲ノ橋窗茶話ニ、影移行子、蓋香撲侍臣衣ト云ヲ、影移ノ句ハ、上ノ春露條應弱ノ上ヨリ來リ、香撲ノ句ハ上ノ秋霜果定肥ノ上ヨリ來ルトアリ、律聯皆カクノ如ク作ルト云事ニハアラネドモ、心得居ルベキ事ナリ、

○胡應麟一等向上ノ位ヨリ、字眼混成ニ及バザルノ論アリ、石之有眼、爲硏之一病、ト云語ヲ引テ曰、句中有眼、爲詩之一病、如地坼江帆隱、天清木葉聞、杜以下同故不如地坼荒野大、天遠暮江遲也、返照入江翻石壁、歸雲擁樹失山村、故不如藍水遠從千澗落、玉山高並兩峰寒也ト云、其故ハ、詩ハ唯一體

疵瑕

混然トシテ、天工ノ物ヲ見ル樣ナルガ最上ナリ、ココゾ手際ト作リタルハ、造化ノ萬物ヲ混然トシテ孕ミ出セル境ニハ非ズト云事也、カカル所ヲ知ラズシテ、仔細ニ意ヲ用ユル事ヲセズ、作家肺腑ヨリ流出セル所ニ擬セント欲セバ、木ニ緣リテ魚ヲ求ムルナルベシ、

○總ジテ名作ト云ニモ、瑕ハアルモノナリ、ワザト重ネタル外、同類打重ナリタルハ、皆病ナリ、只一體ノヨク出來タル故ニ、美トシテ取リタルモ、白璧ノ微瑕掩ヒ難キ者アリ、今ノ世ニ、唐詩選ヲ精選トテ用ユレドモ、此病ハ每每アリ、佗ノ處ニ出セル者ココニ略ス、蘇頲和幸望春宮詩ニハ、宮中城上回輦處、舞觴前、同人和幸大平公主莊詩ニハ、樓下橋頭花間竹裏雲漢邊ト用ヒ、綦毋潛宿龍興寺作ニハ、第二句ニ、松清古殿扉トシテ、其調ニテ、燈明方丈室、珠

置字工夫

繫比丘衣ト作リ、李白峨嵋山月歌ニハ、峨嵋山平羌江淸溪三峽渝州ト、地名ヲ重ネタル王維和賈至早朝詩ニハ、絳幘曉籌翠雲裘閶闔宮殿衣冠冕旒仙掌袞龍詔佩ノ如キ疊用シタル、張祜胡渭州詩ニ、亭亭寂寂ト對ヲトリ、又雲山漫漫ト疊ミタルハ、是等ヲ叢聚病ト云、皆其詩ノ瑕疵ニシテ、詩格ニ入ル事ニ非ズ、妄ニ其病處ヲ例トシテ、己ガ拙キヲ掩フベカラズ、

○復字ノ事、前ニ言フ如クナレドモ、一句疊三字者、吳融、一聲南雁已先紅、摵摵凄凄葉葉同、同人、染不成乾畫未消、霏霏拂拂又迢迢、兩句連三字者、白樂天、新詩三十軸、軸軸金玉聲、是句中ニ用ル者、疊ムヲ以テ巧ヲナス、疊字ニテ詩ヲ起シタルハ、沈佺期龍池篇、崔顥黃鶴樓、李白鳳凰臺ノ類、前疊字ノ條ト照シ見ルベシ、

○祇園南海ノ明詩俚評、丁寧苦口ニ作詩ノ法ヲ說ク、高啓宮詞、水殿雲廊三十六、不知何處月明多、是三十六宮ノ中、寵愛最深キ處、只一處アリト云事ナレバ、大方ハ水殿雲廊三十六、昭陽獨自月明多、ナドト作ルベシ、王世貞西宮怨、誰憐金井梧桐露、一夜鴛鴦瓦上霜、露ノ霜トナルト云事ナレバ、大方誰憐金井相桐露、已爲鴛鴦瓦上霜、ナドト作ルベシ、不知何處、及一夜ト云字ニテ、詩トナレルナリト、爾ノ曹、字ヲ下スノ間能思フベシ、

斡旋

○好語アリテモ、引回ス者ナケレバ、車有ツテ行事能ハザルガ如シ、鶴林玉露曰、要活字幹旋、生理何顏面、憂端且歲時、名豈文章著、官應老病休、何與且字、豈與應字、乃幹旋也、幹旋如車之有軸、幹烏括反、

拆開

○用字有拆開之法、老杜、麒麟不動爐烟上、孔雀徐開扇影還、麒麟香爐、孔雀尾扇ヲ拆開シタリ、委波金不定、照席綺逾依、邵注以

金波綺席拆開、顛倒用之、唐人試帖、般堯泰、玄都開秘錄、白石禮先生注列仙傳有白石先生、拆開ハ字ノ連綿スル間ヲ、佗字ヲ以テワルナリ、滄溟絶句、摩挲金馬宮門外、解云、索靖薊子訓事、借用拆金馬門、漢將飛來入戰場解云拆飛將軍字、新開金掌露華香、解云、拆用金華字、比仙人掌上露、

○用事用字、唐突ヲ忌ム、唐突ナレバ、常山ノ蛇勢ナシ、尤驟雨ノ倏、至ルガ如ク、伏兵ノ遽ニ起ルガ如キハ、其例ニ非ズ、後ニ此事イハントテ、前ニ先其地ヲ占ルヲ、文章家ニテ、伏案張本ナド云、詩モ亦シカリ、是乃照應ナリ、子美兵戈不見老萊衣、于鱗、西風蕭瑟病相如老萊相如シモニ照應ナシ、唐突ニ歸ス、又杜、醉把茱萸仔細看、呂齡、江畔逢君醉不迷、于鱗、那得相看不醉還、酒ノ字無シテ醉ノ字アリ、照應ナシ、大家カク酒ヲイハズシテ、醉トイヒタレバ、コレヲ例トセンモ苦シカラジナレドモ、唐突ノ病ニ近カルベシ、但杜、醉把茱萸ノ作ハ、全篇ヲ融シテ、酒意其中ニアル故ニ、唐突ニ非ズトモイフベキカ、

詩轍卷之五

題名

詩轍卷之六

豐後　處士　國東郡　三浦晉安貞　著
友人　日出藩　喬維嶽彥駿　閱

雜記

詩ヲ作レバ必、題ヲ命ズ、題ハ額ノ事ニテ、人ヲ見ルニ、先目ニ懸ルハ額也、額ヲ見レバ先其人知ラルヽ也、門堂ナドニ懸ルヲ、額ト云ト同意也、又字書ニ、題目也、題諦也、審諦其名號也、トモ註シテ、其一篇ノ名

無題名

目也、昔ノ人ハ、詩ニ題ハ命ゼザリキ、書ノ元首ノ詠、五子之歌、卿雲、撃壤、只其事ヲ取テ名トス、三百篇ニ至リテモ、關關雎鳩ト云故、其字ヲ摘テ關雎ト云ノ類也、唯雨無正ノ一首、如何ナル故ニヤ名アリ、古詩十九首ニモ名ナシ、ソレヨリ後、公讌詩、補亡

題著詩字

詩ナド云ニ、多ク詩ト云字ヲ著ケタリ、後世ハ、詩ト云字ヲ用ヒズ、題モ亦唐宋ノ別アリ、故ニ嚴滄浪曰、唐人命題、言語亦自不同、雜古人之集而觀之、不必見詩、望其題引、而知其爲唐人今人矣、予竊謂、詩題亦文章之一體、唯其文務要簡、簡而古矣、雅而達矣、

命題

如此而已、爾ノ曹、詩作ル法ヲ學ンデ、題ヲ命ズル法ヲ學バズ、亦事ノ缺タルニ非ズヤ、題ヲ命ズルヲ學ブ事、古人ノ題ヲ氣ヲ著ケテ見ル事也、假令詩相應ニ出來タルトテモ、命題拙ケレバ心劣セラル、者ナリ、古人詩ヲ得テ題ヲ命ズルアリ、題ヲ得

絶句偶成

テ詩ヲ作ルアリ、絶句偶成ナド云ハ、詩作ツテ、後有ノ通リニ書テカヒヤリタルナリ、又不意顯シ難キ故ニ、カク書テ置ルモ

無題

アリ、無題ト云モ、大方ハサモ有氣ナレドモ、元詩體要ヲ見レバ、別ニ無題ノ一門ヲ立テヽ、曰、無題之詩、起唐李商隱、多言閨情及宮事、故隱諱不名、而曰無題、其間用隱語也、身無綵鳳雙比翼、心有靈犀一點通、春蠶到死絲方盡、蠟炬成灰淚始乾之類可見

雜詩

ト、可考、雜詩、祕府論ニハ、古人所作、元有題目、選入文選、失其題目、古人不詳、名曰雜詩、是蓋唐人ノ說如此ナレバ、失題ノ詩ノ名目ノ樣ナリ、サレド穩ナラザルニ似タリ、李善曰、遇物即言、不拘流例、ト、此說長ズルニ似タリ、杜甫、秦州雜詩十四首、只取雜タ

詠懷

ル詩ナリ、詠懷ハ、祕府論ニ、詠其懷抱之事

詠史

トアリ、詠史、文章緣起ニ、鍾惺曰、古人詠史、不指定一事、寫意而已トアリ、詠史モト懷

樂府題

アリ、古人ヲ假用ヒテ、己ガ意ヲ述ルヲ本體トス、曹子建三良ノ詩ハ、父操死シ、兄ニ黜責セラレ、父ニ地下ニ從ハザルヲ悔ルナリ、題意相作フハ常ナリ、題ハ此ニアリ、意ハ題外ニ在ルモアリ、老杜ナドノ作ハ、唯詩作リタル後、題著ケタル詩多シ、ソレ故、題ヲチヨト引ツケタル迄ナルモアリ、カヽル類、題面ニヨリテ詩ヲ解スベカラズ、又三百篇ニ倣ヒ、詩ノ首字ヲトリテ、洞房歷歷ナド置タルモアリ、カヽルハ、詩題ニ局セズ、意題外ニ溢ル、蓋題名主トナツテ、詩其事ヲ序ス、是題ノ正ナリ、然レドモ作者活手段ヲ得レバ、如何樣トモ作ラルヽ者也、最古樂府ナドノ題ハ、飲馬長城窟行ト云題ニテモ、飲馬長城窟事モ見エズ、折楊柳行ト云題ニテモ、折楊柳事モ見エズ、此事、アノ方ニテモ分曉ナラザリシニヤ、詩藪ニモ、樂府自魏失傳、文人擬作、多與

竹枝詞

題左、愚意、當時但取聲調之諧、不必詞義之合也、其文士之詞、亦未必盡爲本題而作、陌上桑、木言羅敷、而晉樂取屈原山鬼以奏、陳思、置酒高堂上、題曰箜篌引、一作野田黃雀行、讀其詞皆不合、蓋本公讌之類、取塡二曲耳、其最易見者、莫如唐樂府所歌絶句、或節取古詩首尾、或截取近體之半章、於本題面目、全無關涉、細考諸人原作、則咸自有謂、非緣樂府設也、白集、聽想夫憐ノ詩アリ、曰、長愛夫憐第二句、請君重唱夕陽開ト、自注云、王右丞詞云、秦川一半夕陽開、此句尤佳ト、此右丞ノ句ハ、溫泉寓目ノ詩ニシテ、想夫憐ノ題ニアラズ、是ニ由テ、詞ト調ト相關ラザル事ヲ知ル、故ニ唐詩選、成德樂、胡渭州、水鼓子ナド云類、皆此意ニテ、其題ハ調ニシテ、辭義ハ己ガ意ヲ行ル也、竹枝詞ナド云モ、モト劉禹錫ニ起レリ、禹錫建安ニ至リ、小兒竹枝ト云フ歌フヲ聞ニ、鼓笛ニ

子夜呉歌

テ、音中黄鐘之羽、其卒章激昂如呉聲、ト、此調ヲ以テ、男女ノ情ナド作リテ、歌ハセタル也、元詩體要ニ、本夜即之音、依聲製詞トアリ、竹枝ノ義ニ關カル事ナシ、李白詩ニ、子夜呉歌アリ、晉書ニ子夜者、女子名、子夜造此聲、トアリ、此聲ヲ造ルトアレバ、聲調ノ事ナリ、故ニ子夜ト云モ、呉ト云モ、但聲調ノ事ニシテ、題意ノアル所ニアラズ、陶淵明、採菊東籬下、ノ詩ナド、題ハ飲酒ト命ジ、序ニハ既醉自娯ノ境トシ、詩中ニハ、既醉ノ意ニ見エズ、畢竟ハ自得ノ境、尋常題命ノ意ト同カラズコヽハ上手ノ手段也、先ハ大槩題意ヲ會シ、題ニ作リカナヘ、其後意題外ニ溢ルルモヨシ、題ヨリ一轉シ、轉ズルモ苦シカラズ、和歌者流、題面ニ拘拘タルト同カラズ、是モチト合點行ザル内ハ成難シ、初心ノ間、先律義ナルガヨシ、題ハ大槩、雜題、詠物、樂府也、雜題ハ定體

送別留別

ナシ、詠物ハ敷敍形容ヲ主トス、別詩、居ル人ユク人ヲ送ルハ、送別、ユク人居ル人ニ別ルヽハ、留別ナリ、留別送別、和俗ハ必和ス、彼間ノ人、留送ヲ和スル事ハ甚少シ、

以句入題

○古人ノ詩句ヲ以テ題トスル事、梁元帝以前ヨリ有ト、續文章緣起ニアリ、已ガ句ヲ以テ題トスル事、其始ハ知ラズ、篇ノ首ヲトル者、終ヲトル者、中ヲトル者、白集毎毎出タリ、韓昌黎集、以起句爲題之外、起句ノ字ヲ截テ題トスル事、落葉不更息、斷蓬無復歸、ト云ヲ截テ、落葉送陳羽、ト書キ、汴泗交流郡城角、築場千步平如削、ト云ヲ截テ、汴泗交流、贈張僕射、ト書タリ、奇法也、子美、天末懷李白、ト題セシモ、起句涼風起天末、ト出來タルヨリ、其天末ノ字ヲ拈出セルト見エタリ、退之ノ題、命ト似タル樣ナレドモ、遙ニ面白ク覺ユル也、滄溟、蕭蕭篇ト書シハ、此目別ニアルニ非ズ、毎詩蕭蕭

顧題

ノ字アル故ナリ、題ニカク言ザル時ハ、每詩同様ノ複字、却テ醜ヲ致ス也、意得アルベキ事ナリ、

○詩題面ニ拘拘タラズトハ、詩家自由ノ位也、題詠應試應制等ノ作ハ、顧題トテ、隨分題ニ覷シ、離レヌ様ヲ優トスル也、唐中宗景龍三年正月晦日、昆明池ニ幸アリ、樓ニ御シ群臣ヲシテ詩ヲ賦セシメ、其内佳ナル者一首ヲ得テ、新翻御製曲ニナシ給ハン迚、群臣ヲシテ悉樓下ニ集ラシメ、上官昭容ヲシテ選マシム、其詩百餘篇、須臾ニシテ、樓上ヨリ紙落テ飛ガ如シ、各其名ヲ認テ、懷ニシ退ク、唯沈佺期宋之問ノ二詩下ラズ、ヤヽ時ヲ移シテ一紙飛墜ツ、競取テ之ヲ見レバ、佺期ノ詩ナリ、之問ノ詩ハ、唐詩選、春豫靈池會ノ作ナリ、其評、蓋二詩工力相敵ス、然トイヘドモ、宋詩、不愁明月盡、自有夜珠來トハ、晦日昆明池ノ意健擧、

獨脚鼎足

沈詩落句、微臣彫朽質、羞覩豫章材、詞氣已竭タリト云ニ、沈乃服シテ爭ザリキトゾ、毛奇齡、唐人詩帖ノ奧ニ之ヲ論ジテ、乃是應試顧題之法、昭容取之有以也トアリ、又同書ニ、和賈至早朝ノ作、杜子美ヲ以テ無法トスルノ說アリ、無法トハ、顧題ノ法ナキナリ、其故ハ起聯、五夜漏聲催曉箭、九重春色醉仙桃ニ、仙桃木王母ノ故事、朝事ニアラズ、第二聯、旌旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高、堂成テ燕雀賀スルノ事、朝時ノ境ニアラズ、題ニ早朝ト云、星初落、露未乾ヲ本色トス、日ノ暖ナルハ、早時トシ難シ、已ニシテ朝罷香烟携滿袖、早朝ニ非ズシテ、退朝也、是無法、律ニ非ズト論ゼリ、高李ノ唐詩ヲ選スル、獨コノ詩ヲ遺セルモ、カヽル故ニヨルナルベシ、

○題、其指ス所ノ多少ニヨリテ、獨脚鼎足ト云事アリ、張從政、儒門事親、夫醫之治病、

猶書生命題、如秋傷於溼、冬生咳嗽、是獨以溼爲主、是書生之獨脚題也、如風溼暍三氣合爲霍亂、此猶書生之鼎足題也、トアリ、唐史、靑除夜、

單題

今歲今宵盡、明年明日來、寒隨一夜去、春逐五更回、氣色空中改、容顏暗裏催、風光人不覺、已入後園梅、

是ハ唐開元ノ比、史靑上表シテ、昔陳思王七歩ニシテ詩作ルハ、遠ナリトセズ、我五歩ニシテナサントナリ、明皇即此題ヲ賜ヒシカバ、直ニ聲ニ應ジテ作リシ詩ナリ、是除夜ノ外ニ他事ナケレバ、獨脚題也、而シテ單題又獨脚題ト似タリ、獨脚題トハ、字數ハ幾字ニテモ、指ス所一ニ歸スル者也、單題ハ、月トカ、雪トカ、一字題也、元

鼎足

謝宗可、雪月梅、

苔枝擎重半朦朧、漠漠梨雲夢不同、

香護嫦娥眠玉鑑、影隨姑射下瑤宮、冰蟾光透南枝夜、翠羽聲凄古樹風、天上人間渾一色、幾分春意有無中、

雙脚

是即鼎足題ナリ、雙脚題トスベキ者ハ、同人水中雲、

絮閣冷蘸碧琉璃、舒卷還如溼未晞、蒼狗倒隨天影落、玉鱗低入鏡光微、濃遮晩浪搖秋月、淡隔淸漪漾夕暉、莫怪巫山臺下雨、凌波好向夢中歸、

歸題

○冰川詩式、歸題格ハ、始中佗事ヲ謂テ、結聯ニ至ッテ本題ニ歸ス、藏頭ハ、始中景情ノ寓スル所ヲ謂テ、結題意ニ歸ス、其別ハ、歸題ハ結明體ヲ用ヒ、藏頭ハ結暗體ヲ用ル也、梁劉惲、擣衣詩四首、前三首只情事、末一首ニ至テ始テ擣衣ヲ說出ス、亦歸題ノ類ナルベシ、

樂府

○毛晉、樂府古題要解跋云、漢武帝時、乃立樂府、以李延年爲協律都尉、擧司馬相如等

歌行

數十人、造爲詩賦、同論律呂、以合八音之調、蓋樂府之所肇也、元詩體要云、樂府之名、始於漢房中之樂、繼而汲官、以薦郊祀、後於燕射朝饗、亦皆用焉、歷代沿襲、蓋有古樂府新樂府之別、其音調多有不同、今不復識別、樂府トハ、天子ノ樂人ノ所在ナリ、故ニ當ノ詩ハ、詩經ノ風ノ類ニシテ、徒ニ吟詠スル者ナリ、樂府ハ之ヲ郊廟ニ薦メ、宴饗ニ供スル者ナレバ、之ヲ金石絲竹ニ合スル者ナリ、故ニ鐃歌橫吹淸商曲ナド云コトアリ、サレドモ後世詩人ノ作ハ、樂府ト云モ、樂府ノ題ヲ作ル迄ニシテ、終ニ題詠ト遠カラズナレリ、サレドモ李白沈香亭ノ作ナドハ、玄宗御遊ノ爲ニ、淸平ノ調ニテ歌ヒシ也、故ニセイヘウデウト讀ベキナリ、

○歌行、正字通、庚韻、相如傳、爲鼓一再行、師古曰、行謂引也、古唐詩合解、杜甫短行贈王即司直下、樂府有長歌行短歌行、蓋言人壽命不可妄求、唐人每用樂府題、不必用其意、謂之今樂府、

書名不書

○人ト唱和スレバ、唱和スル相手ノ姓名ヲ書ス、和賈至舍人早朝ト云ガ如キ是也、至尊ナレバ誰ト指サズ、侍宴安樂公主新宅、奉和幸望春宮ノ如キ是也、太子ノ如キモ指サズ、賈曾奉和出苑矚目ハ、太子也、

應制

天子ヨリ仰付ラレタルヲ、應制ト云、六朝ノ人ハ、多クハ應詔ト書タリ、

應令　應教

應令應教ノ別、秦法、皇后太子稱令、諸侯王稱敎、貴人ノ仰ニテ作ルヲ、應命ト云、

應需

平人ニ乞ハレタルヲ、應需應徵ト云、雨芳洲、橘窗茶話ニ、徵文應需、徵是徵發之徵、需是需索之需、竝謙詞與求字大差ト、是亦知ズンバアルベカラズ、

應試

サテ應制應試ト別アル事、唐人試帖ニ之ヲ辨ジテ曰、應制其體有七律長律、但即事而不命題、與應試稍異ト言ハ、應試ハ定

マレル出題ヲ受テ、題面ヨリ韻字ヲ拈出シ、五言六韻ノ詩ヲ作ル、應制ハ、其事ニ即テ其題ヲ命ジ、七言律、五言排律、六韻ニ限ラズ作リ出ストナリ、又按ズルニ、應制、唐人ノ作、七言絶句モ往往見エタリ、

○題ニ詳略アリ、王勃、杜少府之任蜀州トハ、送ノ字ヲ略シタリ、釋處默、聖果寺、駱賓王、靈隱寺、皆登遊ノ作ニシテ、寺ヲ詠ズルニハアラズ、子美、張氏隱居ニハ、題ノ字ヲ加ヘ、崔氏東山草堂ニハ略セリ、九日藍田崔氏莊トアリテ、遊トモ宴トモ無シ、崔顥ハ黄鶴樓ト書キ、李白ハ登鳳凰臺ト書タリ、子美ハ八月十五夜月ト書キ、王建ハ十五夜望月ト書タリ、高適ハ送劉評事賦得征馬嘶ト書キ、于鱗ハ席上鼓歌送王元美ト書タリ、白氏、期不至トハ、聞エバ聞ユレドモ、簡ニ過タリ、期宿客不至トハ、ヨキ程ナリ、韋應物ハ聞雁トカキ、白居易ハ賦得聽塞鴻ト書リ、其別ハ、聞雁ハ親ク聞ケル也、賦得トハ、題詠ノ意アリ、サレドモ題詠ナレバ固ク賦得ト書ニモアラズ、劉禹錫、金陵懷古ハ、樂天ノ宅ニテ、元微之韋楚客等ト、出題ノ作ナレドモ、賦得トモ書ズ、滄溟、謝中丞枉駕見過トハ詳也、秋日許郭殷見枉鮑山山莊トハ略セリ、仲鳴蒲桃ト書タルハ、只仲鳴ノ蒲桃ト云様ナレドモ、故人更比相如渇不向金莖夜夜看トイヘバ、仲鳴贈蒲桃ナリ、李杜史蜀扇ト書タルモ同例也、襲生緋桃栽、解ニ子ノ字ヲ加ヘタリ、今日爲栽三徑裏、トアレバ、襲家ノ緋桃、其子ヲ己ガ家ニ栽シナリ、尤佶屈ナル書法也、子美、冬日有懷李白、春日懷李白、有懷トイヘバ、日主ニシテ李白客ナリ、懷トイヘバ、李白主ニシテ日客ナリ、差別ナキニアラズ、孟浩然ハ上岳陽樓ト書セズ、臨洞庭ト書ス、徐程工夫ヲ用ヒタリト見ユ、酌

洒與裴迪ハ、詩中ノ字ヲ括出セリ、題ノ書様面白ク、愈興アリテ覺ユ、又于鱗、孤山吟社得菲字、同子與賦、謝茂秦、遊嵩高山、同莫子明、贈陳給事晦日、ナド書シハ、

題法正倒

題中ノ倒裝ナリ、于鱗、寄劉子方斗酒、ト書キ、李夢陽、送酒鄭生、ト書ク、事同ウシテ、書法主客ヲ倒ス、子美、船下夔州郭宿雨溼不得上岸、別王十二判官モ、別王十二判官ノ六字上ニアレバ、早ク聞ユル也、又題バカリニテ、

題用註法

詩意聞ヘ難ケレバ、題中直ニ註法ヲ用ヒタルモアリ、張說、還到端州、前與高六別處、前ノ字以下ハ、則詩ノ註文也、

簡走

簡ストハ、詩ヲ手紙ニシテ遣スナリ、走スルトハ、小者ニ持セ遣ス也、太史公牛馬之走ト云ト同意、走ラシメテト訓シタルハ、誤ナリ、

即事

即事トハ、其人ノ何ゾ有テ、其事ニ即テ作レル也、前ニ引ク唐人詩帖應制ノ言可考、

即興

即興モ其意ナリ、

即席

即席ハ、即席ニテ作ルニテ、其儘

慶賀壽

ソコニテノ作也、吉事、言ヲ以テスルヲ慶ト云、貨財ヲ以テスルヲ賀ト云、貝ハタカラニテ、文ニ於テ貝ヲ加フルヲ賀トソ、故ニ昏禮不賀、人之序也、ナド云モ、祝儀ノ物ツカハサヌト云事ナリ、故ニ人ノ壽ヲ祝スルモ、幾十ヲ壽スト云ヲ正法トス、サレドモ決シテ賀スト八イハズト、人ノ作ヲ咎ムベカラズ、圓機活法共ニモ、人ノ幾十ヲ賀スト出セリ、東坡集、朱壽昌得母蜀中、以詩賀之、又借前韻賀子由生孫、太夫人之生日、書小詩賀スナド、詩ヲ一貨ト見テ書ケルナルベシ、白集、喜劉蘇州恩賜金紫、遙想賀宴、以詩慶之ハ、賀慶ノ字ヲ書分ケタリ、斥非篇曰、壽詞別設題、其法以龜鶴松竹等物、以テ其人ヲ祝スル如キ、彼方ニハ無トイヘリ、

過訪

訪ハ、其人ヲ折角見舞ソ也、過ルハ、立ヨル也、

贈呈

贈ハ、隔テテモ席上ニテモ、詩ヲヤルナリ、呈ハ、指上ル也、此類一一指示

人名題法

シ難シ、其引伸觸類ヲ待ツ、

○斥非編曰、凡贈答詩ノ題引、或ハ在詩前、或ハ在詩後、皆必低一字書、爲定式、如題中書其官號姓字、必提之、或高於詩、或與詩平頭、雖詩中亦然、非唯官號姓字爲然、凡指其人之詞、皆提之、禮也、又曰、世儒有詞宗詞伯之稱、朝鮮又亦然、余不肯用之、其外雅丈英文雅伯ナド書ク、甚人ヲ俗殺ス、秀才ナド彼間ノ人書タル、彼方ニ其科アリ、才子ヲサシテイフニハ非ズ、詩題前後ノ義猶後ニ具ス、

同姓自稱

○字士新、姓氏解曰、凡姓ヲ稱スル事、自稱ニハ、只名ノ上ニ姓ヲ加ヘ、字ト號トニハ、姓ヲ加ヘズ、同姓ノ人ニ對シテハ、其祖先同ウシテ、同宗ト定タルニハ、父子ヨリハジメ、其親疎ニ從ヒテ自稱シ、無服ノ人ニハ、宗人ト稱シテ、皆我姓ヲ稱セズ、同姓ナレドモ、祖先別ナレバ、異姓ト同ジ、コレ同

同姓稱佗

族ニ對シテ自稱フル者也、自ヨリ佗ヲ稱スルモ亦然リ、李白、族叔刑部侍郎曄、及中書舍人賈至ト、賈至ニハ姓ヲ書シ、李曄ニハ姓ヲ書セズ、杜甫、季夏送鄉弟韶陪黃門從叔朝謁詔ハ杜韶ナリ、從叔ハ、注ニ杜鴻漸トス、然ルニ送李八秘書赴杜相公幕、注又杜鴻漸トス、李八ヨリ杜相公ヲ見タル故、姓ヲ書ケルナラン、其外子ノ宗文宗武、固ヨリ姓ヲ用ヒズ、但杜位ニハ、五七律中皆姓ヲ書セリ、杜位從叔トアリ、後世詩ヲ錄スル者、加ヘタルモ知ベカラズ、孟浩然集、示孟郊詩アリ、其佗チラチラ見ルコトアリ、錄者ノ手ニ出ル乎、子細アル事乎、或ハ別出ノ事モアルベシ、文選ニ陸士龍兄ニ答フルニハ兄機ト稱シ、士衡弟ニ答フルニハ弟子雲ト書ケルガ如キ、兄ニ名ヲ稱シ、弟ニ字ヲ稱セン由ナシ、記者ノ失ト見ヱタリ、彼此合セ考レバ、譬バ叔姪ノ間ナ

僧稱　氏

レバ、寄伯某ニ寄叔某ニト書キ、自ノ具名ニハ、姪某ト書キ共ニ姓ハ書セズト見エタリ、猶予程赤城ニ問者後ニ出セリ、子美舅ニ贈ル題モ、只十一舅トアリ、是ハ自ノ具名ハ拙杜甫トモ書タルニヤ、又姓氏解ニ曰、沙門ノ姓ハ釋ナリ、同ク釋氏ナル人ニ對シテ、釋ヲ書ザルハヨシ、又俗人ニ於テモ、歸依ノ居士ニ偈ヲ示シ、其外法事ニテ交ルニ、釋ヲ書ザルモアシカラズ、唯俗人ニ對スルニ、釋ヲ省ベカラズ、僧ノ字ヲ姓ニ代ルモ亦可也、俗ヨリ沙門ニ對スルモ是ニ同ジ、雙名ノ人、親交ニ對シテハ、或ハ姓ヲ省ク事アレドモ、沙門ニ對シテハ姓ヲ省ク可ラズ、是内外ノ別トイヘリ、氏ノ字、家ノ字ノ意ニ用ユルアリ、孔氏之遺書トハ、孔子家ノ遺書也、佛氏老氏モ、佛家老家ナリ、張氏隱居、崔氏莊ナドモ、詩作ッテ贈ル所ハ、指ス人アリト見ユレドモ、題意ハ泛也、自分ノ

名字

身ヲ何氏トハ云難シ、某氏再拜ナド書タルハ、女ノ所稱ニシテ父方ノ姓ナリ、某氏之姉妹姑ナドイヘルハ、夫ノ方ノ氏ナリ、子美元日寄韋氏妹トハ、韋氏ニ嫁シタル子美ノ妹ナリ、名ハ生レテ父ノ名ヅクル者故、尊貴ノ人ヨリモ、其人ヲ貴メバ、稱セズ、我身ヨリハ名ヲ稱スルヲ禮トス、字ヲ稱スルヲ不敬トス、字ハ元服ノ時、冠賓ヨリ命ズル者故、佗ヨリハ字ヲ稱スルヲ禮トス、故人ニ贈ル詩中ニ、誤ッテモ向ノ人ノ名ヲ犯スベカラズ、大不敬トスル事也、尤二名不偏諱トテ、徵在ト云名ナレバ、徵在トダニ續カズ、徵ト云、在ト云バカリハ、苦シカラズトイヘル古禮也、日本ハ、諱ノ事強テ貪著ナケレバ、二名偏用ハ苦シカルマジ、唐人題名、多ク名ヲ用ヒタリ、賈至舍人ナド云類ナリ、是其時贈答ノ書法ニアラズ、ヒカヘニ書タル所ト見ユ、其故ハ、

單名
複名

李白ハ聞王昌齡左遷ト書シ、元稹ハ聞白樂天左降ト書ス、昌齡ハ名ナリ、樂天ハ字ナリ、元稹ノ題ハ、贈リシ儘ニ認タルナルベシ、明人ノ集ハ、多ク字ヲ書テアリ、今日ノ詩稿、明人ニ從フベシ、如在ノ義ナリ、滄溟ナドノ書法ハ、相昵ベル人ニハ姓ヲ去リ、チト隔ツルニハ、姓ヲ用ヒタル樣ニモ見ユ、秋前一日、同元美茂秦吳峻伯徐汝思、集城南樓ノ書法考フベシ、單名トハ一字名也、太宰純ト云ノ類ナリ、複名トハ二字名ナリ、伊藤長胤ノ類也、姓モ一字ナルハ單姓、二字ナルハ複姓ナリ、複名ハ、上ノ字ヲ截テ、下ノ一字ヲ用ルモ苦シカラズ、攀龍龍トバカリ書キ、長胤胤トバカリ書ケル類ナリ、但表疏公文ニハ、此省ヲ用ヒズ、姓氏解曰、疏奏ノ類、官位ノ下ニ、臣某ト書テ、姓ヲサル事アリ、又輕キ文翰ニ、雙名ノ人ハ、姓ヲ省テ名ヲ書コトアリ、單名ハ必姓ヲ加フ、人ニ對スルニ非ザレバ、號ノ下ニ姓ヲ省テ名ヲ書タルモアリ、人ヲ稱スルニハ、名字號諡、官爵職業、居地望地、皆姓ヲ加ヘテ妨ナシ、後世親シキ朋友ニハ、文句ノ間ニ、姓ヲ省テ字ヲ書事アリ、文ノ題ニハ、親友ニモ字ヲ稱スレバ、必姓ヲ加フ、

○名自稱シ、字人ヨリ稱スルハ常ナリ、サレドモ名ト字トヲ同ウスル人アリ、又名ハアレドモ置テ、自モ字ヲ稱スル人アリ、コレ以字行ト云、

生日
壽

○野客叢書、以十年爲一袠、故ニ居易六十三ノ詩ニ、年開第七袠、七十二シテ、行開第八袠、ト作レリ、八十ヲ慶シテ、開八袠之期トセシヲ、登八袠トスベキヨシ辨ゼリ、生レ日ヲ生辰誕日ナドイヘリ、天子ノ誕日ヲ聖節ト云、觴ヲ奉ジテ祝スルヲ、上壽ト云、爲壽トモ云、天子ニ限ルコトニハアラズ、人ノ幾十ヲ壽スルト云ハ、壽酒ヲ上ル

晬

コト也、年賀ヲ壽スルニ誕日ヲ用ユルヲ正法トス、誕日ヲ初度覽揆トモ云、是ハ楚辭ニ、皇覽揆余于初度分トアリ、註ニ覽ハ觀也、揆度也、初度之度、猶言時節也トアリ、賀日誕日ニ非ザレバ、コレヲ用ヒズ、子生レテ百日ヲ百晬ト云、來歲生日、盤ニ草木飮食、官誥筆研、算秤經卷、針線應用ノ物ヲ盛ル、コレヲ試兒晬盤ト云、兒先拈者ヲ以テ徵兆トス、是ヲ試晬ト云、小兒ノ盛禮トス、孟元老夢華錄ニ出タリ、字書ニ、兒生一歲曰晬、

詩貴著題

○事文類聚、詩貴著題條、曰、唐人題西山寺詩、終古礙新月、半江無夕陽、人謂冠絕古今、以其盡得西山景趣也、金山寺、留題寺影中流見、鍾聲兩岸聞、天多剩得月、地少不生塵、最爲人傳誦、要亦未爲至工、若用之於落星寺、有何不可云云、滁州西澗ハ、水淺シテ不勝舟、江潮ノ至ル所ニアラザルニ、韋應物、

春潮帶雨晚來急、野渡無人舟自橫ハ、佳句トシテ傳ヘタリ、然レバ其處ノ景ニ協ヒタリトモ詩不美ナラバ取ルニ足ラジ、儻其作佗景ニ通ズトモ、詩美ナラバ傳フベシ、一槩ニモ言難カルベシ、サレドモ詩作ル者、此意得大事也、江北海、日本詩史、三宅觀瀾、寄京師人詩中、三更燈火波心市、十里絃歌岸上樓ヲ論ジテ、爲攝之安治川作則佳矣、鴨水滇滇、曾不容刀、波心二字、殊無謂、句佳トイヘドモ不足賞、我聞肥ノ釋大潮、始テ東遊之時、箱根ニテ、岡高花易曉、湖濶月難沈ノ句ニテ、蘐園ノ諸子ニ識ラレシトカヤ、予未東海ノ勝ヲ探ラズ、此句ヲ玩ンデ、其景目中ニアルガ如シ、

書韻書句

○二韻ハ絕、四韻ハ律、排律ハ六韻、知レタル事ナレバ、題下ニ註スルニ及バズ、排律長篇ニ及ブハ、幾韻トシルスコトモアリ、白集ニ六韻トイハズシテ、十二句ト云、其

題用日月

外唐宋ノ人ノ言ニ、或ハ五十韻トイハズシテ、五百言ト云、或ハ何百何十何字トコトハリタルモアリ、

○題ニ何月幾日ト書カバ、詩中ニ其意アルベシ、杜十二月一日ト題セルハ、今朝臘月トコトハリタリ、十七夜トアルハ、秋月仍圓夜、トアリ、七月一日トアルハ、層棟高軒已自涼秋風此日灑衣裳トアリ、白、十二月二十三日トアルハ、案頭曆日雖未盡、向後唯殘六七行、ト作レリ、七夕前一日、九日前一日ナド、題ニ置ンハ此意得アルベシ、

擅場　壓卷　名家　大家　詩料　宿構　宿製正

○擅場トハ、送別宴會、一切大勢集リテ作レル詩ノ、第一ナルナリ、壓卷トハ、一部詩卷ノ中ノ、又トナキ秀逸ナリ、名家トハ、上手ト云程ノ事ナリ、大家トハ、名人ト云樣ナル者ナリ、詩料ハ、詩ニナルベキ道具ナリ、宿構トハ、トクヨリ工夫シ置ケル也、腹藁トモ云、宿製ハ作リ置キナリ、正、是正、乞正、

推敲

正雌黄、郢斤、慈斤、慈斧、直シヲ請フ言也、正ハタヾスナリ、雌黄ハ黄ナル者也、モトノ字アシケレバ、雌黄ニテ塗リ、書直ス故也、晉王衍、言未安コトアレバ、隨テ更改ス、時人コレヲ口中雌黄トイヘリ、郢斤ハ、郢人堊漫其鼻端、使匠石斲之、運斤成風、ト云ヨリイヘリ、此ニ因テ成風トモ云也、已作レル詩ノ字ヲ、得ト考ルヲ推敲ト云、是ハ賈島、僧推月下門、僧敲月下門、ト鍊シヨリ云ナリ、推通回ノ反ニ讀ベキヲ、謬リテ吹ノ音ニ讀來レリ、紛敷程ニコヽニ辨ズ、此字推量推遷ナドノ時ハ、音吹也、易ノ寒暑相推、同ジ、是唯推ナリ、通回ノ反モ、ヲスハヲスナレドモ、手ヲ以テ物ヲ推ナリ、月令、天子三推、諸侯九推、左傳、或輓之、或推之、史記、解衣衣我、推食食我、ノ類ナリ、サレドモ彼方ニテモ紛シキニヤ、韻書等ニ混雜シテ見ユ、晉安風雅、沈周、小雨櫺窗風自推、手添香炷撥

潤筆

爐灰揚循吉、台州位重百寮知、聖主虚懷獨見推、其別知ルベシ、潤筆トハ、人ニ文筆ナドタノミテ、ソレニ物ヲ贈ツテ謝スルヲ云、吟社トハ詩會ノ席ナリ、敵手トハ、碁ニテイヘバ相碁ト云位ナリ、

吟社　敵手　批

批トハ書尾ニ字ヲ書スル也、天子臣ヨリ上ル所ノ表奏ノ尾ニ、答ヲ書給フヲ、御批勅批ト云、唐李藩遷給事中、制勅有不便者、黄紙後批之トアリ、

點

點ハモト筆ヲ以テ滅字ノ制ナレドモ、今ハ字ノ傍ニ點ズルヲ云、

塗沫

ケス事ヲバ、塗抹ト云、故ニ批ト點トヲ用ヒタルハ、批點ナリ、批シテ評シタルハ、批評ナリ、

批

批ハ語ナリ、未成文トスルニ至ラザレドモ、已ニ批ノ名アレバ、文ノ一體トスルモ可ナリ、然レドモ詩ヲ以テスル者モアリ、昔閩主繼鵬、姫李春燕ヲ愛シテ、其元妃梁國夫人ヲ廢セントス、其臣葉翹上書シテ諫ム、閩主其疏ノ後ニ批シテ曰、

春色曾看紫陌頭、亂紅飛盡不禁秋、人情自厭芳華歇、一葉隨風落御溝、終ニ梁國夫人ヲ廢セリ、小窗別記ニ見エタリ、

白戰

○白戰ト云事アリ、是ハ詩人才ヲ鬪シムル事ニテ、歐陽永叔蘇子瞻ナド、好ンデセシコトナリ、體物語ヲ忌トテ、雪ノ詩ナレバ、玉月梨梅練絮鷺鶴皓素銀鹽袁安東廓ナド云樣ノコトヲ禁ズルナリ、白戰トハ、空手ニテ人ト戰フ也、東坡ノ詩ニ、白戰不許持寸鐵、ト云ヨリナリ、然レドモ詩ハ興象ヲ貴ム物ナレバ、タマタマ一時ノ戲謔ニハ、アリモスベケレドモ、唯才ヲ鬪シムル迄ノ事ニテ、興象ヲ害スル事ナレバ、初心ノ人ナド、必好ムベカラズ、

詩筒

○詩筒ハ詩ヲ入ル、フクロナリ、詩牌ハ、詩ヲ書ク版ナリ、詩筒ノ式、

詩牌

圖

簽

中ニハルヲ簽ト云、書付ヲスル所ナリ、吉禮及平常、紅簽ヲ用ユ、凶事ニハ、藍簽トテ、青紙ヲ用ユ、書簡ニソヘテ遣セバ、只上トバカリニテモヨシ、サナクバ自佗ノ姓名ヲ記スベシ、肩ニ封印有ルベシ、」サテ詩牌ハ右イフ通リノ物ナレドモ、亦明ニ別ニ詩牌ト云モテアソビアリ、畢竟酒宴ナドノ興ニ設タル者ニテ、今詩牌譜、刊本世ニ行ハル、其序ヲ考フレバ、唐白樂天、分司東洛時、朝賢悉會興化亭送別、時酒酣各請一字至七字、詩以題爲韻、コレヲ據トセリトアリ、是ヲ引シハ、詩句ヲ切テ、字ヲ得ルト云ニハ非ズ、坐客主人ニ一字宛七字貫ヒ、

ソレニテ興趣ヲ定メ、月ノ題ナラバ月ノ韻、花ノ題ナラバ麻ノ韻ト、定メシヲイフト見エタリ、詩牌譜ハ、明ノ呉興ノ王良樞字ハ愼卿ノ、編次スル所ニシテ、愼卿ハ之ヲ金陵朋輩ノ家ニ得タリ、舊法ハ四百字、愼卿二百字ヲ加ヘテ、六百字トナス、其法、先六分四方ニ版ヲ製ス、其版即牌也、其版一片ヲ一扇ト云、其六百字、三百字ハ平、三百字ハ側、牌面ニ一字宛、平ハ朱字、側ハ墨字ト書分ケ、合セテ六百扇、外ニ椿牌トテ、詩牌二扇合セタル大サニシテ、詩伯ト云二字ヲ書シ、コレヲトル者、其席ノ主宰タリ、而シテ詩伯、其六百扇ノ内、四百扇ヲ取テ四ニシ、平側ヲ平分シ、坐客大勢ニテモ、詩人四人ト定メ、百字ヅヽ、四人ニ與フ、四人各百字ヲ受取リ、此内ノ文字ニテ詩ヲ作ルナリ、其作リ様ハ、其百字ヲ得ト見テ、其内ニテ韻ヲ定メ、文字コレアレバ、題

鼓吹横吹

挽歌

ハ、月ヨカルベシ、花ヨカルベシ、何何ヨカルベシト見テ、詩伯ニ、韻何題何ト定メタル由コトハリ、詩出來テ牌ノ字ヲ竝ブルヲ鋪牌ト云、サテ韻字ノ多少ニ依テ、絶律、猶多クハ古詩ニテモ、四五六七言、思ヒ思ヒニ作リ出スナリ、右ニ就テハ、疊錦聯珠合璧煥彩ナド、色色ト作リ樣ナドモアリ、詩伯二百扇、不時補換ノ用アリ、是本一坐興ヲ催スノ事ナレバ、字ノ增減、制ノ緩嚴、鋪牌ノ變化、折ニ觸レ興ニ從ヒ、新意ヲ出サンモ、何カ苦シカルベキ、

○說詩晬語曰、朝會道路所用、謂之鼓吹曲、軍中馬上所用、謂之横吹曲、詩藪曰、元李孝先云、郊祀若頌、鐃歌鼓吹若雅、琴曲雜詩如風、

○崔豹古今注、薤露蒿里、竝喪歌也、田横自殺、門人傷之、爲之悲歌、言人命如薤上之露、又謂人死魂魄歸乎蒿里、至孝武時、李延年乃分爲二曲、薤露送王公貴人、蒿里送士大夫庶人、使挽柩者歌之、世呼爲挽歌、晉書禮志曰、漢魏故事、大喪及大臣之喪、執紼者輓歌、新禮以爲、輓歌出於漢武帝役人之勞、歌聲哀切、遂以爲送終之禮、雖音曲摧愴、非經典所制、違禮設衒枚之義、方在號慕、不宜以歌爲名、除不輓歌、摯虞以爲、輓歌因倡和而爲摧愴之聲、銜枚所以全哀、此亦以感衆雖非經典所載、是歷代故事、詩稱君子作歌、惟以告哀、以歌爲名、亦無所嫌、宜定新禮如舊、詔從之、右ノ通ナレバ、輓歌トハ、小人ニ言事ニハ非ズ、晉又按ズルニ、二書輓歌ノ始ヲ漢ニ歸ス、然レドモ左傳、公孫夏國子、桑掩胥ニ死ヲ勸メテ、將戰、命其徒歌虞殯、杜注シテ、虞殯ハ、送葬ノ歌曲トアレバ、其來ルコト久シ、

倣擬

○倣擬ノ二字、似テ同カラズ、倣ハ、正字通、法也、倣也、擬ハ、像也、儀也、揣度以待也トア

代作

リ、故ニ倣陶淵明體トイヘバ、陶淵明ノ體ヲマヌルナリ、擬陶淵明トイヘバ、陶淵明ニナリテ作ルナリ、昔ヲ以テイハンニ、右軍ニ倣フトイヘバ、羲之書シ通リヲ、摸倣スルナリ、右軍ニ擬ストイヘバ、右軍ハ此通リゾト、身ヲ右軍ノ場ニ置テ書ク也、揣度以待ト云モ、後ノ事ヲ、カウシタラバカウ有ント思フ事、其場ニナリシ意ニテ、倣フ意ハナシ、詩ノ未見君子、憂心忡忡、亦已見止、亦已覯止、我心則降、ト云ヲ、通解ニ既見ヲ擬議之辭トイヘリ、逢ザル故ニ、心上リ築ク、於是逢タル後ヲ今擬シテ、逢モシ見モシタルナラバ、此忡忡タル者モ降ランニト也、是揣度以待也、代某ト云ガ如キハ、某ノ人ノ作ルベキヲ、我代リテ作ル也、滄溟ノ五言古、代文帝、代明帝ノ類ハ、其人ノ詩ヲ、未盡所長ト見テ、作リタル者ナレバ、意其人ヲ凌ヒデ、擬ヨリ上ル事一等、元

古意　長歌短歌　警策　斧鑿之痕

美擬漢童謠ト言ズシテ、記漢童謠ト云、皆文人自負ノ言也、又古意ノ題、明詩俚評ニ、凡此題、古詩ニハ必男女君臣ノ間ノ怨ヲ叙ヅル事多キ故、其意ヲ作ル事ヲ云、大方ハ男女ノ怨ヲ云リ、盧照隣長安古意、驕奢ヲサシタル詩ナレドモ、其意古詩ニ通ズルヲ以テ名付タリ、長歌短歌、古今注云、言人生壽命長短定分不可妄求也、

○警策、策トハ馬ノ箠也、正字通、陸機文賦、立片言以居要、乃一篇之警策、註馬因策而行疾、文資片語而理明、以一言入衆辭中、若策之警馬也、六經亦有警策語、詩之思無邪、禮之毋不敬、是也、一篇中ノ肝心ナル所ナリ、策ノ字、册筴ト通ズル時ハ、字義別ナリ、警句トハ、是ハト人ノ目ヲサマス句ナリ、警聯トハ、對ニ就テ云ナリ、

○斧鑿之痕トハ、上手ノ細工ニハ小刀目手斧目見エズ、下手ノ細工ハ、分明ニ見ユ

妥貼　斤兩　三處思量　地名

ル、其手際ナリ、妥貼トハ、糊ニテ物ヲヒツタリト著タル事ニテ、字ヲヨク置所ニ置コナシタルナリ、斤兩ト云語ハ、衡ノカケ目ヨリ起リテ、ツリ合ノ輕重ナリ、

○朱子語類曰、歐公言、作文有三處思量、枕上、路上、厠上、

○東匡刊謬正俗中、詩ヲ學ブ者、知ズンバアルベカラザル者數條ヲ左ニ摘ミ、聊己ガ意ヲ雜ユ、曰、今以本國地名之與漢地類似者稱之、以播磨稱番陽、以築紫稱紫陽類、甚多、且築紫乃西海九州之總稱、紫陽則一小邑、其稱亦不倫、今人如尾陽肥陽甲陽等稱、以陽字作州字看、不知何據、誠ニ本邦ノ地名、コレヲ詩文ノ中ニ用ルニ、雅馴ナラザル者多シ、因テ文人其地名ヲ改作シ、又漢名ヲ混用シ、大ニ其實ヲ失ス、是ヲ詩中ニ於テスルガ如キハ可ナリ、題ヲ命ズルハ、實ヲ記スル筆ナレバ、慥ニ書ベシ、サレバ明帝都ハ順天府ニシテ、古ノ燕ノ地ナル故、北京燕京ナドイヘリ、長安ハ古ノ雍州ノ地ニシテ、秦ニ咸陽ト云、漢ニ長安ト云、即明ノ西安府ナリ、北京ト路程遙ニ隔タレリ、于鱗詩中ニモ、題ニ長安ト云ルハアラス、然シテ詩中ニハ、春風躍馬出長安、胡烽不斷接長安ナド、モ作リ、又少シク其名ヲ變ジタルハ、同人、遠公此日應相咲、也學蓮花社裏人、是白蓮社ノ事也、堪是尊前幾知己、那能不愛叔牙山、是鮑山ヲ轉ゼルナリ、余一日鳳渚ト語ツテココニ及ブ、鳳渚、韓人補閑集詩僧元湛、謂予云、今之士大夫作詩、遠託異域人物地名、以爲本朝事實、可笑、如文順公南遊曰、秋霜染盡呉中樹、暮雨昏來楚外山、雖造語淸遠、呉楚非我地也、未若前輩、松京早發云、初行馬坂人烟動、及過駝橋野意生、非特辭勝趣勝、言辭甚的、予答曰、凡詩人用事、不必泥其本、但寓

都

意而已、況復天下一家、翰墨同文、胡彼此之有、僧服之、ノ文ヲ出シテ、我ハコレニ左袒ストイヘリ、地名實ニヨリ、其詩亦美ナランハ、以テ尙フルナシ、興象ノ間、蜃氣浮動、暫空裏ノ樓臺ヲ湧出センモ、道理ソムカザラン程ハ、文苑ノ幻花、何ゾ許サヾルベケン、題ノ如キハ、記實ノ文章奈良ハ平城、京師ハ平安、宣ク明霞集ノ書法ニ從フベシ、託異域人物トハ、南郭、相中覽古、穆公一去秦良盡、無限丘墳知者稀、賴朝ヲ以テ穆公ニ託シタリ、苦カルマジキコト也、此自以下、印色ニ至ルマデ、正俗ノ説チ勦説メ、管見相雜ユ、讀者須就本書質之、

○同書ニ、都字、後世專稱天子所居、然春秋之時、國各稱都、雖下邑、有廟則稱、トアリ、故ニ今ノ文人、江戶ヲ江都ト稱スルモ可也、西京ニ對シテ東都ト稱スルハ、頗江都ト云ニ、及バザルニ似タリ、大名ノ城下ヲ都ト云モ、文字ニ於テ害ナシ、和訓ミヤコ、鄙ニ對シテ天子ノ所居ナリシカレバミヤコノ訓、京師ニ施スベシ、都ノ字ニハ、帝都皇都ナド云テ、始テ其義ヲ具フ、

官號

○又曰、姓下稱官爵封號、係佗人之稱呼、如柳柳州杜工部、皆後人之稱耳、官邑皆上之所賜無次于己之姓下之理、

諸侯

○今ノ大名ハ、諸侯ナリ、侯ト稱スル者當レリ、彼方ニテハ、郡ト州ト別ニシテ、日本ノ州隷郡ト同カラズ、故ニ郡ニ太守アリ、州ニ刺史アリ、今ノ文人、我邦國ノ守アルニナラヒ、何州ノ太守ト書クハ、彼邦ニ先蹤ナキコト也、

太守

本邦ノ例ヲ以テイヘバ、上總上野常陸三國ハ、　親王任ジ給フニヨリテ、此三國ニ限リテ、太守ト云、餘國ハ皆守ニシテ、太守ニアラズ、是ヲ以テ右三國ニハ、守無シテ介ナル者、佗國ノ守ニ當ルナリ、然レバ今俗間通稱ノ太守ト云者、和漢共ニ其例ナシ、且　當代ノ制ハ、封建

姓氏

ト云者ニメ、武家ノ世ニナラザル以前ハ、郡縣ノ制ナリ、太守刺史ナド云ハ、郡縣ノ世ノ事ニシテ、今ノ世ニハアテ難シ、

○姓ハ本ナリ、氏ハ末ナリ、姓ハ天子ヨリ賜ハル者ニシテ、氏ハ姓ヨリ分レタルナリ、本邦ノ人、高貴ニ進メバ、氏族有トイヘドモ、姓ヲ名ニ冠ラシム、源、尊氏平、信長ノ類也、平人ハ氏族ヲ稱ス、是モ俗ト云者ニシテ、定マレル制アルニモアラズ、故ニ其姓氏ヲ稱スル事、文人各己ガ臆ニ取ル、徂徠ハ、荻生ヲ置テ物部ヲ修ス、南郭ハ直ニ服部ヲ修ス彼邦ノ人ナドモ、孟孫叔孫季孫ノ族ニナリテハ、族ヲ稱ス、姓ヲ舍ルニハ非ズ、姓ハ本ナレバ、繁キヲ紀シ難シ、譬バ同ク源ト稱シテモ、嵯峨清和宇多醍醐村上花山三條ナド・、姓ダニ所出一ナラズ、其内清和源氏ノ一流サヘ、其幾族タルヲ知ザレバ、彼邦ノ人ノ如ク、氏族ニ從フ者宜キニ似タリ、又異國ヨリ歸化セシ人ハ、天子コレヲ受給ヒテ、各姓ヲ賜ハリタリ、秦ノ姓ハ嬴氏ナレドモ、此方ニテハ秦ト賜ハリ、漢ノ姓ハ劉氏ナレドモ、此方ニテハ大藏ト賜ハリタリ、然レバ各其祖ノ榮トスル所ニシテ、己ガ氏族是ニ由テ明ナル所、尤惡ムベキ事ニ非ズ、然ルニ今ノ文人、間異國ノ姓ニ復スル人アリ、久ク其雨露ヲ被フリ、久ク其土地ニ居リ、其爵ヲ受ケ、其粟ヲ食ミ、祖先　天子ノ賜ヲスツ、律ニ謀背本國潛從他國ヲ、謀叛ト謂テ、十惡ノ一ニ數ヘタリ、不臣孰カ是ヨリ甚カラン、サテ姓ヲ修スルコトモ久キ事ナリ、複姓以上、文字ノ輕重ヲ選ンデ重キ方ヲ取ルト見エタリ、故ニ藤原菅原ナドハ、原ノ字ヲ去テ、大江小野ナドハ、大小ノ字ヲ略セリ、今ノ先生方、思ヒ思ヒニテ、伊藤太宰ナドハ修セズ、服部宇野ナドハ修

セリ、此義ハ、魯季孫孟孫ヲ季孟ト稱シタル古例無キニシモアラズ、周代ノ事ヲ考レバ、獨姓ノミニモアラズ、顔子淵ヲ顏淵、南宮子容ヲ南容抔、姓字共ニ省シタルモアリ、又孟反ヲ孟之反、介推ヲ介之推抔、助字ヲ入タルモアリ、又彼司馬相如ヲ馬相如、東方朔ヲ方朔ナド、モ、操觚ノ間ニハ用ヒ來レバ、是ヲ修スルモ故ナキニ非ズ、修不修ノ義ハ則姑置ク、我ハ修シテハ嫌歟ト思フ程ニ、修スルコトヲ用ヒズ、名ハ主人ニ從フトイヘバ、人ノ改修シタルヲ、此方ヨリ正スコトハ、不敬ナリ、今人ノ姓氏ニ於ル、書修スルノミニ非ズ、又文字ヲ換革ス、藤原藤トナリ、藤又草冠ヲ去テ滕トナル、サレドモ是ハ篆文ナド藤ノ字ナケレバ、猶義アルニ似タリ、ソレガ物好ニナリ、屛風ノ畫ナド張換ル樣ニ心得テ、掘氏ハ屈、三閭大夫ノ裔ニ擬シ、長谷部氏ハ張、留侯ノ子孫ニ贅セントス、彼方ニモ此例ナキニハ非ズ、元魏ハモト北狄ノ種ニシテ、漢風ヲ慕ヒ、丘穆陵氏穆氏トナリ、勿忸于氏、于氏トナル類、其中ノ一字ヲトル、紇骨氏胡トナル類、音ヲ假ル、普氏周トナル類、義ニ取ル、拓跋氏長孫トナル、解スベカラズ、胡譯定テ其故アルベシ、此類頗近シ、サレドモ是ハ、其天子ノ改給フ事ニテ、私ノ義ニ非ズ、又晉束晳、漢ノ疎廣ノ後ナリシガ、足ヲ去テ束ト改メ、宋眞德秀ハ、愼氏ナリシカドモ、孝宗ノ諱ヲ避テ眞トシ、敬暉ノ後、偏傍ヲ分ッテ苟氏文氏トモナリタレバ、是又先蹤ナシトハ謂ベカラズ、サレドモ彼ハ公行スル者、此ハ私行スル者、其別ナキニアラズ、公行セズシテ私行ス、姓氏ヲ以テ玩物トス、祖先ヲ慢スルノ道ナリ、又氏族ニ和字ナル者アリ、畠山梶原辻塙ナドノ類ナリ、其儘ニ用ユル事

名諱

苦シカラズ、本邦古典ノ書法考フベシ、又按ズルニ、晉書八王傳、汝南王亮ノ子、司馬宗、罪ヲ得テ殺サル、貶其族爲馬氏、徙妻子于晉安ト云事モアレバ、姓ヲ省クノ、貶義ニナル事モアリ、

○諱トハ名ノコトナリ、サレドモ其別アリ、名ハ字ニ對シテ生時ノ用ナリ、諱トハ、諡ヲ作リテ其名ヲイム故ニ、死後ノ用ナリ、杜甫ノ父杜閑ナレバ、杜ノ名ハ甫ニシテ、子美ノ諱ハ閑ナリ、子美閑父ノ名ナル故、一生詩ニ閑ノ字ヲイハズ、其曾閃朱旗北斗般北斗閑ト云フコトヲ得ザレバ也、サル程ニ、其人ニ對シテ其名其諱ヲ犯スベカラズ、杜甫李白ニ贈リテ曰、南尋禹穴見李白、李白杜甫ニ贈リテ曰、飯顆山前逢杜甫、互ニ其名ヲ稱シ合タリ、古人質朴相親ミテノ言ナルベシ、此例アリトモ、汝ノ曹宜クコレヲ避ベシ、

釋氏稱呼

○印月江、儆虚菴ナド、名ヲ剪テ一字ニシ、號ノ上ニ加フル事、釋門ノ家習、故ニ明、宋景濂ヲ景濂宋公ナド、モ用ヒタリ、本邦ノ人ナド、頼朝源公、時頼平公ナド稱スル、皆倒語也、士大夫ノ法トスベカラズ、

印章

○印姓名ハ合セ刻ム、字ノ印、號ノ印ニハ、姓ヲ合セ刻マズ、詩文ニ印ヲ押スニ、名ノ印ヲ上トシ、字ノ印ヲ次トス、若號印ヲ押セバ、又其次ナリ、姓名ノ印ヲ押サズ、字號ノ印ヲ押スル、不敬ナリト、正俗ニイヘリ、或人曰、西土ノ書ヲ見ルニ、字印ニ姓ヲ合刻スルアリ、然レドモ用ユベカラズト、宋吾丘子行ガ學古編ニ論ゼリ、但明甘暘旭ガ印正ニハ加ヘテモ、苦シカラヌ樣ニイヘリ、號印唐山ノ書ニ、姓字ノ下ニ押スルヲ見ズ、且署名ノ法ニモ、弇州山人王世貞トコソアレ、王世貞弇州山人トハ署セズトイヘリ、時予偶萬姓統譜ヲ檢ス、元美ノ

序アリ、上ニ王氏元美、下ニ弇州山人ト押セリ、予模稜ノ手ヲ持シテ、淸人程赤城ニ問フ、詳ニ左ニ記ス、

謹問

一、詩題、或書詩之前、或書詩之後、不知此間有敬慢之別否、

一、檢古詩題、其於同姓之人、多舍姓又曰、於同族之人、自稱者、曰男、曰弟、曰從弟、曰云云、若此則自佗不稱姓、如末安者、以請明敎、

一、印勿論于先押姓名、次押字印、如號印、或見押名字之下、或見押名字之上、常稱先號後姓字、由是觀之、似當在上者、不知以從何爲是、

程赤城答

承問詩題等三則、不揣固陋、謹就臆見所及、按欵詳覆、

一、寫詩題、或有前後、原無區別、大抵詩文之題、在前者多、而塡詞之題、率多在後、

一、凡作詩文、若贈同姓、自應祇列名字、其於有服制者、當以服制相稱、倘與他姓、定必寫姓、其世交戚屬、又當按其名分相稱矣、

一、名號圖章、或上或下、亦無定制、大約先用名、而後用號、乃爲正理、若先號而後名、印率多出于鄕宰宄屬、傲慢殊非正體、

印具

○關防ハ肩印ナリ、長印トモイフ、印入ヲ印斗、印肉ヲ印色印油、印肉入ヲ印池、印色池、印色函、印色盒、印色匣、小サキ印ヲ小印、又戳兒、印ノ朱字ヲ朱文、白字ヲ白文、詩箋ヲ吟箋、名物六帖ニ出タリ、

朱印

○士氏俗說贅辨、狩野永納畫印序ヲ引テ曰、本朝上古位記御請印、泊太政官ノ印ノ外、朱印アラズ、建仁元久ノ間、禪門異國ノ所爲ニ倣ヒ、文人畫師是ヲ用ユト云云、今

青印

日印色、縣官唯朱色ヲ用ユ、然レバ朱色用ユベカラザルガ如シ、然リトイヘドモ、詩文書畫、是ヲ公朝ニ上ルトイヘドモ朱印以テ押スレバ、翰墨中ニ於テ之ヲ用ルハ、強ニ僭ト云ベカラズ、翰苑印色ノ用二、朱ト青ト也、朱ヲ吉トス、青ヲ凶トス、青或ハ墨ヲ用ユ、喪ニ居ル時ノ用也、吊者モ亦朱ヲ用ヒズ、吉ヲ以テ凶ニ臨マザルナルベシ、又青肉ナキ時ハ、朱印ヲ押シ、四偶ニ墨點ヲ加ルモ可ナリ、

詩箋

○詩文ニハ、必其名ヲ署スベシ、名ヲ署セザルハ、
至尊ニ係ル、號ナド書クハ、慰ミ書キ也、人ニ對スル事ニアラズ、儻人ニ對スルコトアラバ、卑賤ノ人ニ施スベシ、故ニ號ヲ書スレバ、拜字謹字ナド用ユベカラズ、

○人ニ物ヲ斷紙ニ書テ贈ルハ失禮ナリ、サレドモ唐紙ハ餘リ廣シ、全紙ハ不自在ナルニヨリ、諸家皆半幅ヲ用ユ、心安キ方、又ハ遠方抔、封ノ大ナルモ煩シケレバ、斷紙モ時宜アルベシ、尊長ノ方ニ贈ルニハ、餘紙アリトモ切ベカラズ、先ノ方ヘ左白左潔ナド書テ置ベシ、コレヲ書クハ、先ハ白紙ゾトコトハリテ、向フノ人ヘ、心遣ヒサセマジト也、禮也、今唐紙ヲ小片紙トナシ、草木花鳥ヲ印シ、通用スルモ、隔心ナラン方ニハ、遠慮スベシ、

僭稱

○王モト天子ノ稱也、秦始皇天下ヲ混一ニシテ、自德周ニ踰エ、三皇五帝ヲ兼タリトシ、因テ自皇帝ト稱シ、王ヲ以テ公侯ニ比ス、故ニ王號ノ輕クナリシハ、秦始以來也、

本邦ノ制、松下西峯ノ異稱日本傳ヲ見ルニ、曰、三代實錄曰、謹檢天長九年十二月十五日詔書、稱某王子者、王號止於五世、資蔭不過六世、典制斯在、沿來浸久、是以六七世

賜姓及嵯峨天皇諸子繼體外、賜姓令列於人臣、勤勞于王室、其後四世賜姓、以爲例、近代貞成親王後、號親王、清仁親王之裔、任神祇伯者、稱王氏、此外無王氏ト、然レバ則王ト稱スル者ハ、天子ノ裔トイヘドモ、世世相承ル事能ハズ、唯足利鹿苑院、明朝ノ爵ヲ受テ、彼國ニ向テ日本國王臣某ト稱ス、 皇家ニ於テ、大ニ不廷トス、 國家興テ其僣跡ヲ用ヒ給ハズ、 文廟在職ノ日、議有テ天子ハ天皇也、 幕府國王ト稱シ奉ラン事、於義テ害ナシト、因テ朝鮮ノ答書、初テ國王ト稱セラル、然リトイヘドモ 德廟紀藩ヨリ入給ヒ、又 東照宮ノ舊典ニ仍ラセ給ヒキ、有難キ事ナリ、爵ト云者ハ天子ヨリ下ニ賜ハル者ナリ、下ヨリ上ニ獻ズル者ニ非ズ、八佾シテ庭ニ舞シ、雍ヲ歌ツテ徹スルハ、孔子之ヲ疾マセ給ヘリ、春秋ノ時吳楚稱王、サレドモ孔子春秋ヲ修スルニ當リテハ、其僣號ヲ黜ケ、モトノ子爵ヲ用ヒ給ヘリ、然ルニ今 先王ノ道ヲ以テ自任ズルノ徒、上ニモ用ヒ給ハザル僣名ヲ、冒シ進ムル事、何ゾ諂諛ノ甚キヤ、今 柳營ノ盛業、齊桓晉文ノ業ニシテ、其功德大ニコレニ踰ル者也、仲尼之門五尺之童、愧言桓文之事者、荀子ノ言ナリ、仲尼之徒、無言桓文之事者ハ、孟子ノ言也、周室衰弱ニ當ツテ、能諸侯ヲ抑ヘテ、周室アル事ヲ知ラシムル者ハ、齊桓晉文也、故ニ孔子管仲ニ於テ許其仁、大其功、且有微管之歎、其管仲ヲ稱スル者、乃桓公ヲ許ス者也、春秋ハ游夏ノ徒モ一辭ヲ贊スル事能ハズト云、其書小半ハ則桓文ノ事也、荀孟ノ言、我コレヲ徵スル事能ハズ、且今縫掖ノ徒ノ外、貴賤上下、公ト稱シ奉ル者當レリ、

佳節之作

○佳節ノ作、九日最多シ、七夕コレニ次グ、三日五日是ニ次グ、元日ノ作最少シ、今ノ風俗ハ、年中ニ一首作ラヌ人モ、先歳旦トテ作ル也、其詩ハ、最目出度事ヲ取集メテ祝スル也、祝スルモ苦シカルマジケレドモ、感慨ヲ決シテ言出サヌモヲカシ、又歳旦ノ作ハ、是非作ラザレバナラヌト覺ヘタルモヲカシ、子美、不見朝正使、啼痕滿面垂、居易、同歲崔何在、同年杜又無、共ニ元日ノ作也、今人必言出サジ、只藤井懶齋、七十元日作、七袟今朝何所待、野花薰骨墓間田俗ヲ出ルコト遠シ、

和製

總ジテ日本ニテ、唐ニハナキ例ヲナス事、此類多シ、禪家ノ聯句、又詩和歌題ヲ著ル類、其尤ナリ、詩ハ漢人讀テ通ゼザレバ、用ニ立ザル者ナリ、和歌題モ、漢人通ゼザルハイナモノ也、寄スルノ戀ノト云字、一席ノ興ハサモアルベシ、嚴然トシテ之ヲ詩卷ニ載センハ、殺風景ナリ、

用事

○用事ハ、古ヨリアルコトナレドモ、盛ニナリタルハ、晩唐ヨリ宋明ニ至ツテ極マル、詩ノ李杜ヲ以テ規矩トスル、古今ノ定論也、故ニ嚴滄浪モ、以李杜爲準、挾天子以令諸侯也、トイヘリ、李杜ノ詩、興象ヲ主トシ、用事時時妝點ヲナス、宋明ノ詩ノ蒙求ヲ讀樣ナルハナシ、老杜用事老練、五更鼓角聲悲壯、三峽星河影動搖、上句、禰衡傳ヲ用ヒ、下句漢武故事ヲ用ユ、婦人在軍中兵氣恐不揚、李陵傳、軍中豈有婦人乎ノ語ヨリ來ル、用事ノ訣、水中著鹽、飲水乃知鹽味、此境ヨク尋ヌベシ、サレドモ詩法變化一定ナケレバ、淸新庾開府、俊逸鮑參軍トアラハナルモアリ、然シテ宋人ノ用ヒ馴タル故事アリ、又明人ノ用ヒ馴タル故事アリ、其用法モ亦同ジカラズ、蓋唐ハ諸體アラザル所ナシ、賓至、奉誠園聞笛ノ作、一絕

用事

中、楚荘丙吉陳思向秀四事ヲ用ユ、初學ノ人法リ難シ、

曾絶朱纓吐錦茵、　欲披荒草訪遺塵、
秋風忽灑西園涙、　滿目山陽笛裏人。

又用事ハツトメテ誤ラザル樣ニスベシ、唯使龍城飛將在ノ詩、其美ヲ以テ、于鱗モ選中ニ收メタレドモ、用事ノ誤ハ、遺憾ナキコト能ハズ、サレバ宋祖ハ、清儉寡慾、嬪御至少、トコソ世ニイヘルヲ、許渾凌歊ノ詩ニ、宋祖凌歊樂未回、三千歌舞宿層臺、トハ、儉德ノ君ヲ以テ、薄德ノ主ノ如ク作リナセリ、蔽賢ノ罪遁ルベカラズ、謹ズンバアルベカラズ、

○故事トハ、フルキ事ニテ、過往シ事、專詩中ニ用ユ、又當時マノアタリニアリタル事ヲモ用ユ、老杜昭陵ノ作、玉衣晨自擧、鐵馬汗常趨、トハ、太宗ノ陵ニ、當時有シ奇特ヲ言タル也、又自分ノ詩ヲフマヘテ作レルモアリ、白樂天、去秋共數登高會、又被今年減一場、トハ、其前年、須知菊酒登高處、從此多無二十場、ト云詩ニヨリテナリ、是等ハ其多キコトナレバ、例スルニモ及ブマジケレドモ、初心ノ爲ニ筆ス、

詩癖

○唐楊炯、好ンデ、古人ノ姓名ヲ用ヒシカハ、世コレヲ點鬼簿ト云、駱賓王、好ンデ數對ヲ用ヒシカバ、世コレヲ算博士ト云、宋王岐公、好ンデ金玉珠碧ノ字ヲ用ヒシカバ、其兄コレヲ至寶丹ト云シ由、玉屑ニ見ユ、秦少游、好ンデ豔麗ノ字ヲ用ユ、世以テ小石調トス、詩藪ニ見ユ、子美ハ好ンデ時事ヲ云、世詩史ノ稱アリ、于鱗動モスレバ風塵ノ字ヲ用ユ、故ニ李風塵ノ名アリ、鄭谷好ンデ僧ノ字ヲ用ヒ、魏野好ンデ鶴ノ字ヲ用ヒシカバ、仲先筆苑多籠鶴、鄭谷詞壇愛惹僧ノ譏アリ、按ズルニ當今ノ人ノ作、陽春白雪、紫氣黃金、至寶丹ヲ服スル者、

多カラズトセズ、點鬼簿、蝦耕錄ニハ、文章用事、塡塞故實、舊謂之點鬼錄、亦謂之堆朶死屍トアリ、算博士、塡詞名解ニハ、卜算子トアリ、

妙悟

○詩ニ妙悟ノ所アリ、詩家コレヲ禪ニ比シテ、最上乘第一義正法眼藏トセリ、是ヲヤハリ禪ト思フ人アリ、詩家ハ、只詩ノ妙悟ニコレヲ假テイフ也、モシ直ニ之ヲ直視見性衣鉢ヲ傳ル者トセバ、黃龔德山ノ詩ハ、實ニ李白杜甫ニ勝ルベシ、

驚人

○驚人句ト云ハ、興趣尋常ノ外ニ出ル者也、詩林廣記、韓退之、大華峰頭玉井蓮、開花十丈藕如船ナドヲ引キ、韓子蒼、衡嶽圖ノ詩ヲ載テ曰、

故人來自天柱峰　手持石廩與祝融
兩山坡陁幾千里　安得置之行李中
然レバ則靑蓮、白髮三千丈、燕山雪花大如席、宋陸務觀、磅礴崑崙三萬里、不知何處可埋愁ナド、驚人句ト云ベシ、子美、語不驚人死不休トハ、唯佳句ヲサス、

戲調

○戲調トハアザケリアヘル事也、今所謂ワルクチ也、孟浩然春曉ノ詩ヲ、盲子詩ト云、僧處默、到江吳地盡、隔岸越山多、ヲ分界堠子ト云タリ、宋雍ハ盲人也、黃鳥不堪愁裏聽、綠楊宜向雨中看ノ詩アリ、劉隋州ハ目明ナリ、細雨溼衣看不見、閒花落地聽無聲ノ詩アリ、時人評曰、有眼作無眼之詩、無眼作有眼之詩、張祜石枝詩ニ、鴛鴦鈿帶拋何處、孔雀羅衫屬阿誰ト云ヲ、樂天見テ問頭ノ語トイヘリ、二句共ニ人ニ物ヲ問樣ナル句故ニ、シカイヘリ、張祜聞テ樂天長恨歌、上窮碧落下黃泉、兩處茫茫皆不見、ト云ヲ、目連經ト云テ、嘲リカヘセリ、イフ意ハ、目連母ヲ尋ルガ如シト也、羅隱牡丹ヲ詠ジテ、若教解語應傾國、任是無情也動人ト云ヲ、曹唐嘲リテ、是女子障ヲ詠ズル

トイヘリ、女子障ハ、女ヲ畫ケル障也、羅隱答テ猶足下漢武宴西王母樹底有天春寂寂、人間無路月茫茫ト云ノ鬼詩ニ勝ルト言ケレバ、曹唐口ヲ噤ミケリト、又一說ニハ、周繇ナル者、羅隱ノ詩ヲ女子障ト譏リケレバ、羅隱足下自從春草生不敢下階行、ト云怕蛇ノ詩ニ如何ト云ケルトモアリ、是等人ノ作リタル詩ヲ難ジタル也、カク戲調シテモ、蓋其詩ノ瑕トナル事ニモアラズ、又宋紹興中、福州之人某、四海想中興之美ト云題ニテ、第ヲ取シヲ、帝召テ年ヲ問給ヒシニ、七十三ト對フ、幾子アリヤト有シニ、未娶ノ由申ケレバ、帝哀ニ思召シ、内人ヲ出シテ之ニ賜フ、時人相語曰、新人若問郎年幾、五十年前二十三、宋王琪張亢、共ニ晏元獻ノ幕客タリシニ、王琪張亢ガ肥タルヲ嘲リテ、牛ト云、張亢王琪ガ痩タルヲ嘲リテ、猴ト云、或時王琪張亢觸牆成

八字ト云ケレバ、張亢王琪望月叫三聲ト對ケル、又東坡ノ妹、額廣ク中高ナル面ニテ有シガ、十歲計リノ比、東坡ドコカラニテモ、額ノヨク見ユルト云意ヲ、蓮歩未離香閣下、梅妝先露畫屏前、ト云ケレバ、妹兄ノ大髯ナルヲ詠ジテ、欲叩齒牙無覓處、忽聞毛裏有聲傳ト答ヘケル、總テ箇樣ノ事ハ、德ヲ損フコトニテ、君子ハセズ、サレドモ是等ハ皆一時ノ戲謔ニシテ、抱腹ニ供ストモ謂ベシ、昔吳孫權以來、江東ノ地ヲ有シ、帝ト稱シテ有ケルガ、其後孫皓司馬氏ニ亡サレ、身晉ニ入レリ、武帝之ニ戲レテ、南人ハ好ンデ爾汝ノ歌ヲナスト聞ケリ、頗能センヤト有ケレバ、孫皓折柄酒ヲ飲ケルガ、其觴ヲ擧テ、帝ニ進メテ曰、

昔與汝爲隣、今與汝爲臣、
上汝一杯酒、爲汝壽萬春、

含血噴人、先汚其口、爾ニ出ル者爾ニ反ル、

菅武人ヲ慢リシヨリ、自萬乘ノ帝位ヲ辱メタリ、今落書ト云ハ則匿名書ナリ、斯ル德ヲ害スルコト、道ニ志サン者、深ク愼ムベキ事ナリ、

口占

○口占トハ、唯口ニテ云タル儘ナリ、口占メ寫スト云モ、口占ハ唯口ニテイフ迄ナレバナリ、通鑑綱目、漢武元光二年之下、漢安國曰、臣聞、人君謀事、必就祖發政、占古語、重作事也、集覽曰、占古語、猶云古人有言曰、占之瞻反、口占也、トアリ、

口號

口號ハ、口ズサミニテ、最早詩ニ成タルナリ、口占ハ、一首ニ足ズシテモ、口ニ占シタル儘、又足リテモ其通リ也、

口詩

此邦ニテハ、口詩トモイヘリ、又句詩トモ書ケリ、菅丞相左遷ノ時、播磨明石驛ニ止マリ給ヒケルニ、驛ノ長イミジク思ヘル氣色ヲ御覽ジテ、驛長莫驚時變改、一榮一落是春秋、ト口詩賜ヒケルナド云コトアリ、

詩讖

○詩讖トハ、其作リシ詩ノ、後ニ思ヒ合スル事アル也、讖、說文驗也、トアリ、俗ニ未來記ト云樣ノ事ナリ、唐宣宗潛龍ノ日、後苑ニ拘ハレ、殺サレントシ給ヒシニ、中官仇子良、詐ツテ馬ヨリ落テ死シ給ヒシト稱シ、因テ漸ク其身ヲ脫シ、香嚴閑禪師ニ投ジテ剃髮シ、禪師ト廬山ニ瀑布ヲ觀ル、禪師、

穿雲透石不辭勞、　遠地方知出處高、

ト賦シテ暫思ヒ煩ヒタルヲ、宣宗、

溪澗豈能留得住、　終歸大海作波濤、

ト續キ給ヒシガ、終ニ寶祚ヲ繼セ給ヒヌ、明太祖、太子ヲ懿文太子ト申シ、其御子郞建文帝也、二人曾テ太祖ニ侍シ給ヒシニ、太祖命ジテ新月ヲ賦セシメラル、太子、

昨夜嚴陵失釣鉤、　何人移上碧雲端、

太孫、

雖然未得團圓相、　也有清光遍九州、

詩妖

誰將玉指甲、掐作天上痕、
影落江湖裏、蛟龍不敢吞。
太祖無興ニ思召ケリ、後太子ハ、太祖ニ先立テ失給ヒ、太孫位ニ即給ヒシカドモ、叔父燕王ノ爲ニ、天下ヲ失ヒ給ヒ、髮ヲ剃テ僧トナリ、湘湖ヨリ蜀ニ之キ、雲南閩廣ノ地ヲ經、成祖仁宗宣宗ヲ歷テ、南寧ヨリ出給ヒ、世モ迥ニ隔タリシ事ナレバ、英宗之ヲ迎ヘ、西内ニ置キ奉リキ、太子不得團圓相、太孫影落江湖裏、蛟龍不敢吞、皆未來記ヲナシタリ、本事詩ニハ、詩徵トモイヘリ、又童謠ノ類、怪シキ詞ノ民間ニ行ハレテ人ヲ惑スヲ、詩妖ト云、晉書五行志ニ、君炕陽而暴虐、臣畏刑而箝口、則怨謗之氣、發於歌謠、故有詩妖、トアリ、

詩禍

○詩禍トハ、詩ニ依テ禍ヲ得ル也、李白ハ、沈香亭ノ詩飛燕ヲ用ルニ因テ、進ム事ヲ得ズ、蘇軾ハ、國事ヲ詩中ニ言ニ因テ、獄ニ繫ガル、明ノ太祖ノ時、僧來復字ハ見心ト云者、眷顧厚カリシガ、或時大内ニ召レテ、食ヲ賜ハリシカバ、奉謝ノ詩作ツテ曰、

琪園花雨曉吹香、手挽袈裟近御牀、
闕下彩雲生雉尾、座中紅茀動龍光、
金盤蘇香來殊域、玉盌醍醐出上方、
稠疊濫承天上賜、自慚無德頌陶唐、

太祖見テ大ニ怒リ、是我ヲ以テ反朱トスル也、朕無德陶唐ヲ以テ頌スル事能ハズトスル乎、何物ノ姦僧ゾ、敢テ大膽如此トテ、終ニ之ヲ誅シ給ヒヌ、明祖ハ朱氏也、殊字、反ヲ偏トシ朱ヲ傍トスレバ也、李白飛燕ノ如キハ、其忌諱ニ觸ル、故ニ詩家コレヲ摘テ忌諱病ト云、來復ノ詩ノ如キハ、急度忌諱トモイヒ難シ、傍突病ナルベシ、結念不密、此慘毒ニ繫ル、實ニ尊貴ノ人抔ニ上ル詩ハ、ワキテ愼ムベキ事ナリ、是明祖宿憤有テ、此詩ニ洩ケルカモ知ラネドモ、實

詩禍

ニ其主ノ薄德ナリ、蘇子瞻檜ヲ詠ジテ、根到九泉無曲處、世間唯有蟄龍知ト作リシヲ、時相忌テ、神宗ニ今陛下飛龍在天、然ルヲ己ヲ知ラズトシテ、地下ノ蟄龍ヲ求ム、不臣ニ非ズシテ何ゾト申セシヲ、神宗彼自檜ヲ詠ズ、何ゾ朕ガ事ニ預ラント宣ヒケリ、東坡明祖ニ遇タラマシカバ、虀粉トナルベシ、懼ザルベケンヤ、且思フニ世詩ノ禍ヲ云テ、其福ヲ言ズ、亦詩道ノ寃ナラズヤ、唐王維安祿山ガ亂ニ、賊ニ執ヘラレテ菩提寺ニアリ、時ニ祿山等、凝碧池ノ上ニ宴ヲ設ケテ、其音樂ノ聲、菩提寺ニ聞ヘケレバ、私ニ此詩ヲ口號ミテ、裴廸ニ示シケル、

萬戸傷心生野烟、百官何日更朝天、
秋槐葉落空宮裏、凝碧池頭奏管絃、

其後賊平ギテ、僞官ヲ受シ者皆罪セラレシガ、王維ハ、此詩行在所ニ聞ヘ、特赦サルル事ヲ得タリ、元世祖ノ臣ニ、郝經ナル者アリ、宋ニ使セシニ、宋人拘ヘテ歸サズ、郝經雁ヲ得テ、帛ニ詩ヲ題シ、雁足ニ繫テ放セシニ、元主之ヲ汴梁ノ昆明池ニ得タリ、因テ伯顔ヲシテ兵ヲ帥ヒテ、行人ヲ執フルノ罪ヲ問シム、宋人終ニコレヲ歸ス、往來十五年、事絶テ蘇武ト似タリ、是等至誠ノ感ズル所、人豈忠信ヲ主トセザルベケンヤ、其書帛詩、

霜落風高縱所如、歸期回首是春初、
上林天子援弓繳、窮海纍臣有帛書、

鬼詩

○鬼詩鬼作ハ、幽靈ノ詩ナリ、草木子、范德機得秋夜雨止修竹間、流螢夜深至之句、喜甚、既曰、語太幽、殆類鬼作トアリ、東庄成童ノ時、仁齋此句ヲ擧テ、古人此句ヲ以テ、鬼作トスルハ何ゾヤト問レシカバ、東庄命人悚然ト答ヘラレシトゾ、

摘用

○詩人玉屑曰、擇字之精、始乎摘用、久而自

贈答詩體

出肺肝ト、切磋ノ法、昔ヨリ詩ヲ學ブノ良法トセリ、

○贈答ノ法、贈詩七言ナラバ、答詩七言、贈詩律ナラバ、答詩律、來時ノ體ヲ用ユルヲ以テ、定法トス、若コレヲ變化スル時ハ、其故ヲ注ス、皇甫冉、酬張繼、悵望南徐登北固ノ七絶ハ、來詩六言ナリ、夫故題ニ序ヲ加ヘテ、懿孫余之舊好、祇役武昌以六言見懷、余以七言裁答トアリ、東坡集、次周燾韻詩有序曰、周燾遊天竺、觀激水作詩曰、拳石耆婆色雨青、竹龍驅水轉山鳴、夜深不見跳珠碎、疑是簷前溜雨聲、東坡和之云、

道眼轉丹青、常於寂處鳴、
早知雨是水、不作兩般聲、

是ハ唯韻ヲ次デタルニテ、贈答ニハアラズ、白集、來詩排律ノ和ニ、句數ノ延タル者多シ、題下ニ皆其事ヲ注セリ、古體五七雜言、亦同意也、サレドモ此類ハ、句數マデ均フスルニハ及バズ、

澁體

○唐徐彥伯、文ヲ作ルニ、多新奇ヲ求ム、龍門ヲ虬戶トシ、金谷ヲ銑溪トスルノ類、時ノ人是ヲ澁體ト謂タリト、今幾日ト云ヲ幾烏幾兔、幾年ト云ヲ幾天ナド、好ンデ書ク人アリ、徐彥伯ノ徒乎、

唐明

○春臺詩論曰、盛唐之詩、如上林宜春苑中之花、異種奇品、燦爛照眼、中唐之詩、如富人名苑花、雖不及上林宜春、又各有奇觀、晚唐詩、如野草花、雖不足悅目、猶有自然采色、此皆天造、不假人工也、明詩如剪綵之花、雖亦燦爛照眼、然無生色、人工所成也ト、是固ニ定論ナリ、サレドモ是大抵ヲ論ズル者ナリ、若一首一首ノ上ニ就テイフ時ハ、明詩皆唐ノ下ニ出トハ謂ベカラズ、

唐明

○同書唐明ノ異ヲ論ジテ曰、唐人ハ有事則作、猶未多作、而シテ明人ハ多作ヲ務ム、唐人ハ古樂府ヲ擬作セズ、而シテ明人ハ

之ヲ好ム、擬作ハ晉人ニ始テ、明人ニ盛ナリ、是亦唐明ノ異ル所也、明人哭詩輓辭、累篇不下十餘首、否レバ則長篇數十百詩以テ其哀ヲ見ルコト無シ、易所謂躁人之辭多ノ謂カト、又曰、杜子美、秋興詠懷雜詩ノ如キ、篇ヲ重ネ章ヲ疊ム者、蓋一日ノ所爲ニ非ズ、贈答敘別、遊宴賞詠、歡樂悲哀、一時興感ノ作、重篇疊章罕也ト、是大概ノ辨也、白香山等ニ至テハ、重篇疊章、恐クハ明人ノ下ニ出ズ、

三變

○文章歐冶、字變聲變篇變ヲ載タリ、字變、一句內忌併、一聯內、非對者忌繁、隔聯忌字相似、一篇忌句相似、聲變、兩句不得相併、兩聯不得相似、篇變、二者篇篇欲變、若一題聯賦者、變制不變律、コレ亦緊要ノ語、

格字

○詩格式ノ格、サキニ已ニ說リ、又詩家ニ格ノ字ヲイフ別義アリ、乃風格骨格ノ格也、詩林良材後編ト云者ヲ見シニ、其義ヲ能說ケリ、其意ニ曰、格、說文木長貌ト訓スルニ本ヅキテ、長ト見ルベシ、夫今和歌ヲ詠ズルニ、長ト云事アリ、其詠ジ出シタル內ニ、詞ニモ巧ニモ拘ラズ、長ノ高キト卑キトアリ、詩ノ格ノ高下モ亦然リ、讀過スル間ニ具リテ、此ト言聞セン術ナシ、只詩ノ長ト解シテ見ル、第一ノ口授ナリ、古人モ柳子厚、孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪ト詠ゼシハ、其格高ク、鄭谷、江上晚來堪畫處、漁人披得一蓑歸ト作リシハ、格卑キキ由論ゼシ杯イヘリ、

韻字

韻ノ字、韻礎ノ韻ノ外ノ義、正字通曰、士人軼群者曰韻、李白、風韻逸江左、又逸韻動海上、畫六法之一曰、氣韻生動ト、是一義ナリ、又曰、凡物有節族者曰韻、唐詩、粲粲繁星駕秋月、稜稜霜氣韻鐘聲、顧野王、韻風輕鶯韻緩、霜重落花遲、是等ノ字義、韻ニ志ス者知ズンバアルベカラズ、韻本禹問反、音運也、我邦從來インノ音ニ用ヒ來ル事ハ、唯

間剩　套

顧野王玉篇ノミ、鎭反ナルニヨレリト、僧無相三音正譌ニ見エタリ、軼群ノ軼ハ、字書ニ過也トアリ、楚辭軼迅風于清源ト云ヲ、從後出前ト注シタレバ、カケヌケタル氣味ナリ、

○間語間字ハ、ムダゴトムダ字也、剩語剩字ハ、ナクテスム字語ノ餘リタル也、套語ハ、定マリテ居ル語也、熟套ハ、遣ヒ慣タル定マリ事也、舊套ハ、前ヨリ定マリタル事也、

贏得　取次

○初心ノ爲ニ、詩家日用ノ字義ヲ、先達ノ辨ニ得、又竊ニ己ガ意ヲ附シ、左ニ載セテ曰、贏得トハ、贏餘ノ贏ニテ、何事モヨキコトハナキガ、是計リハ利得也ト云意ニテ、東坡、贏得兒童語言好、一年强半在城中、一年大カタ城中ニアリシカバ、兒童ノ物言ヒノ好ク成シ計リハ、利得也トナリ、取次ハ、ツイデヲトルト云字ニテ、出次第ニト云意也、杜詩經過自愛惜、取次莫論兵ヲ、邵二泉注ニ、挨次而去也、ツギツギニ推シテ行ク也、唐詩紀事ニ、李陵橋上不吟取次之詩、顧凱笔頭豈畫尋常之物、盡饗錄、勝手次第ト譯セリ、古人ハシドロモトロト訓セリ、チト意違フ樣ナリ、

拚

拚ハ、字書ニ、判拌ト同トアリ、打捨テ管ハヌ意也、正字通、方言、楚人凡揮棄物、謂之拌、通作判、トアリ、今俗ニ放下シテノクルト云類也、杜詩、縱飲久拚人共棄、トハ、世ニ用ヒラレ人ニ知ラレバ、チト人柄ノ心遣ヒモアルベケレドモ、トテモ世ノ人ニモ棄ラレタルニ由テ、思儘ニ飲デ、一向捨テヽノクルト云意也、溫庭筠、夜聞猛雨判花盡、夜强キ雨降タレバ、花モ盡テシマヒケン迚、花ニ意遣ヒモナク、ヤツテノケタル也、韋莊、一生惆悵爲判花、トハ、花ヲ打捨タル故ニ、一生惆悵スル也、

逗

逗ハ、逗漏ノ義、李長吉、女媧煉石補天處、石

阿　欺　蒼茫　司

破天驚逗秋雨、高季廸、疎林逗明月、散亂成清影、ト、以上ノ諸説ハ、東厓秉燭譚ヲ勘説ス、逗、近來詩語解、遺響逗芭蕉ナド引テ、在ト訓セリ、サレドモ東厓ノ引トコロハ、逗漏ノ義ト見エタリ、阿ノ字、山阿阿彌陀ノ類平ナリ、老杜、守歳阿戎家、王荊公、凍雲深閉阿香車、兄ヲ阿哥、弟ヲ阿弟、伯父叔父ヲ、阿父、父ヲ阿爺、タソヲ阿誰、佛氏ノ阿難、皆葛韻ニ收ム、洪武正韻、單ニ平聲トナスハ、俗間ノ音ニ誤ル也、欺ノ字、字書ニ、詐也、陵也、妄也、ナドアリ、韓退之、雪詩、欺梅併壓枝歐陽永叔、雪詩、寒欺白酒嫩、ナドハ、詐ノ義ニハ非ズ、即陵ノ義ニテ、俗ニ鬼ヲ欺クト云ノ欺ニシテ、冷艷全欺雪、是也、以上安積氏湖亭涉筆ニ據ル、蒼茫ハ平也、側ニ用ヒタル例、白居易、寒銷春蒼茫、東坡、愁度奔河蒼茫間、蘇子美、淮天蒼茫背殘臘、江路委蛇逢舊春、自注、蒼茫側聲、又司ハ平、側ニ用ユ

相　琵　中

ル例、白樂天、四十著緋軍司馬、男兒官職未蹉跎、又、一爲軍司馬、三見歲重陽、相ノ字側ニ用ユル者、同人、爲問長安月、誰教不相離自注、相思必反、琵ノ字、側ニ用ユル者、同人、四絃不似琵琶聲、張祜、宮樓一曲琵琶聲、以上宋王楙、野客叢書ニ出ヅ、是等初心ノ間、先遠慮宜カルベシ、中興之中、左傳杜序、陸德明音義、丁仲反、當興而興、杜詩、今朝漢社稷、新數中興年、萬里傷心嚴譴日、百年垂死中興時、中酒之中、漢書樊噲傳、師古註、飲酒之中、不醒不醉、太白、醉月頻中酒、迷花不事君、東坡、君獨未知其趣爾、臣今聊復一中之、後人中興平讀、中酒側讀、每每兩失ト、説詩晬語ニ出ヅ、耳慣ズ怪シキ樣ナレドモ、野客叢書、中酒之中、多ク平トシテ用ユルニ、齊己柳詩、穠低似中陶潛酒、軟極如傷宋玉風、トハ、前漢樊噲傳、軍士中酒ノ注、竹仲反ト云ニヨリテ、用ヒタルベシトイヘバ、中

烟

若爲

叵耐

閑

酒ノ中、平ニ用ユルヲ常トスト見エタリ、戴叔倫詩ニモ、林花○落處、頻中●酒、海燕●飛時○獨倚闌トアリ、烟ノ字、火ノ氣ナルハ勿論ナリ、其佗ノ烟ト云ハ、靄ノ字ヲ用ユベキ處ニ用ヒテ、烟波烟花等ノ如キ、皆氤氳冥濛ノ狀也、霞ノ字ハ、ホデリ、一名ヤケ、朝ヤケタヤケノヤケ也、又若爲ヲ如何ゾト訓ズル事、唐詩中マヽアリ正德ノ比、朝鮮來聘ノ時、此方ノ人、若爲ノ字ヲ遣ヒシニ、李東郭怪ミ訝リケルヲ、雨芳洲、通鑑宋明帝紀、泰豫元年下、但問心若爲耳、ト云句ヲ檢出セルナド、以上橘窓茶話ニ辨ゼリ、叵ハ、可ノ字ヲ反シテ、叵ト書テ、不可ト訓ズ、故ニ叵耐ハ耐ベカラザル也、ベカラズト附難キニヨリ、無據耐ガタシト訓ゼリ、是ヨリシテ難ノ字ノ側ノ場ニ、人皆用ユルハ、大ナル誤也、偸閑ヲアカラサマト訓セリ、アカラサマトハ、暫ノ義也、サレドモ偸閑

等閑

懇

苦

慇懃

丁寧

ハ、忙敷中ニテ、暫時ノ隙ヲ樂ム事也、山谷、九衢塵裏偸閑、程明道、將謂偸閑學少年ノ類也、等閑ハ、ナヲザリト訓ズ、何トモナキ意ナリ、尋常也ト注スレドモ、意少シカハリアルベシ、瀟湘何事等閑歸、等閑識得東風面、ノ類、不用意也、懇ハ、ワリナキナリ、懇求懇請、ワリナク請求ルナリ、苦、ネンゴロトヨメドモ、懇ト別ナリ、苦諸苦求ハ、ゼヒゼヒト請求ルナリ、ニガシト云ヨリ轉用シテ、クルシムト訓ス、辛苦ナリ、苦死欲トハ、死ヌル程ホシキ也、苦憶トハ、ウチ嘆キテ、ツヨクナツカシキナリ、然レバ莫怪憑闌苦回首、モ、闌干ヨリドウゾミエハセマヒカト、氣ヲツクシテ望ム也、慇懃、恭シキヲイフハ和習ナリ、委曲貌ト注シテ、和語ノ丁寧ナリ、詩ニ慇懃ト云ハ、クリカヘシイフ也、猶先ニ出セリ、丁寧、情好ノ厚キヲ云、是又和習ナリ、クリカヘシイフナリ、丁

芳　冷　兮　當

寧回語屋中妻ナドアリ、芳ハ、モト香草ノ總名也、紅芳春芳年芳幽芳ナド、花ノカヘ言也、芬芳餘芳ナドハ、但草花ノニホヒ也、人ノ美譽ニ譬フト巨耐以下、徂徠譯文筌蹄ニイヘリ、又同書、冷ノ字ノ下ニ、冷笑ハシレ笑フ、冷眼看ハ、餘所目ニシロシロト看ル、冷語ハ、餘所ノ事ノ樣ニチラリト言フト、苛按ズルニ、解未痛快ヲ得ズ、只曖マリノ無ヒト云意ヲ帶テ見レバ、能聞ユル也、兮ハ、歌末ノ餘聲、前句ヲ歌了リテ、次句ヲ歌ヒ足ス間ニ用ヒテ、後ノ句尾ニハ置ズ、故ニ詩ニハ、七言ハ第四字目、五言ハ第三字目、一字タラヌヲ、イレテ數ヲ合スルト、徂徠訓譯示蒙ニ出セリ、サレドモコレ楚辭ノ法ニシテ、後世詩文ノヨル所也、三百篇ノ如キハ、蓼彼蕭斯零露湑兮、既見君子我心寫兮、燕笑語兮、是以有譽處兮、ナド句尾ニ置タルコト多シ、當ハ、正當的當ニ

應　須　消　合　與兼和　坐

テ、カフアル筈ト極ムル辭、汝當努力、明日彼當去、應ハ、料度ノ辭ト注シテ、推度ルナリ、應有春魂化爲燕、年年飛入未央棲、須ハ、モチユルト字ニテ訓ル辭ナリ、當ノ字ヨリ强シ、須來須去、コヒデ叶ハヌ、イナヒデ叶ハヌ也、消、須ト同ジ、俗字入用ナド云程ノ詞、合當ト同トアリ、サレドモ、詩家ニハ、然アルベキニト多クハ讀セテ、サウアラフ者ガト云所ニ用ヒタリ、林司山釣臺、

三聘慇懃起富春、如何一宿便辭君、
早知閑脚無伸處、只合空山臥白雲、

又與兼和共ニト、讀メドモ、兼ト和トハ、上ノ物カチ、下ノ物劣ル、與ノ字ノ時ハ、上下相持也、又與ノ字、爲トモ讀メドモ、與ハ、トモニスルノ意ヨリタメト讀ム、東風不與周郎便、銅雀春深鎖二喬、兮與乞與說與ハ、アタフルノ意ニシテ、ソケテヤル、乞テクルル、イフテヤルノ意、亦同書ニ據ル、坐、

無端

南海ハ、列朝詩集、于鱗詩ノ注ニ、坐ハ忽也、非坐臥之坐ト云ニ取著テ、ソゾロニト讀デモ、其儘ノ意也トイヘリ、徂徠ハ、文選鷲沙坐飛ノ注ニ、無故而飛ト注シタルニ本ヅキ、絶句解ニ不覺無故ナド注セリ、子細モナク何トモナキノ意、徂徠ノ說勝ルニ似タリ、又坐到酒樓前、ナドノ如キハ、坐臥ノ坐月華星彩坐來收。モ、サウシテ居ル內也、無端、古唐唐台解、徐安貞、聞隣家理箏詩、北斗横天夜欲闌、愁人倚月思無端。ニ注シテ、無端ハ沒頭緒也ト云、ドレ絲口ト云事モナク、フツプト思出ス也、李商隱、錦瑟無端五十絃、一絃一柱憶華年ト云モ、錦瑟五十ノ絃、ドレトモナク、觸ルルニ從ツテ憶フト云コトニテ、無端憶華年ト云ベキヲ、倒裝シタル也、又合解、賈島、無端更渡桑乾水、ノ註ニ、無端猶言無故、謂不知是何緣故、竟由不得我作主、此解ニテ觀レバ、フツト、ト云訓ニテ、大方アフ、ソゾロト讀モ善カルベシ、劉禹錫、無端陌上狂風急、驚起鴛鴦出浪花、王荊公、無端隴上翛翛麥、横起風寒占作秋、考フベシ、又釋大典詩語解ヲ按ズルニ、

早晚

早晚ノ字、春雨黯黯塞峽中、早晚來自楚王宮、言朝暮也、早晚雲門去、早晚開吟向澶川、猶言幾時也、此中多逸興、早晚向天台、猶言不日也、

曉夕

曉夕雙帆歸鄂渚、愁將孤月夢中尋、亦猶早晚也、

明到

明到他日應到也、明到衡山與洞庭云云、思君明到闔門日、爲遣東風寄紫烟、

慇懃

慇懃ノ字、慇懃望城市、雲外暮鐘和、委曲也、慇懃竹林寺、能得幾回過、委曲屬心也、慇懃好去武陵客、莫引世人相逐來、委曲囑言也、唯有春風最相惜、慇懃更向手中吹、憐貌也、

謝

謝字、多謝東林月、相送出虎溪、拜賜之義也、寄謝悠悠世上兒、不爭好惡莫相疑、以言相告之義也、郊居謝名利、謝絶也、錦江何謝曲江池、謝ハ讓也、

向

向字、對也、趣也、莊

向來

子、园而近向方、註、於也、匹馬向桑乾是對趣、義也、精廬向此分自有花開向客中何當置酒向平臺群雄競起向前朝郤向單于臺下來、皆訓於、潯陽向上不通潮淒淒不似向前聲以上以前也、向晚、向老、天下郡國向萬城將及也、向非劉顒爲地主、爲設辭、向傳繡斧度瀟湘已往也、明時向阻青雲夢、自往以來也、欲問向來陵谷事、野棠無語笑春風幾處敗垣圍廢井、向來一一是人家古昔也、向來同賞處、惟恨碧林曛向來吟秀句、不覺已昏鴉同時也、向來仙客不知愁猶從來、詩家ノ語、平常用慣タルヲモ、初心ノ間ハ、等閒ニ看過シテ、心ヲ用ヒザルコト多キ故、猶數件ヲ得テ左ニ記ス、見說聞說聞道ノ類、道モ說モイフノ意ニシテ、見モ聞モ同クキク也、見說ハ俗語ニシテ、小說類ニ多ク見エタリ、見ヲ聞ト訓ズル事、字書ニハ徐リ見

見說　聞說

エネ共、論衡、世見黃帝好方術、則謂帝仙矣、又見鼎湖之名、則言龍迎黃帝矣、ナドアレバ、輓近ノ語ニハ非ズ、淸李燧詩、鶯藏密柳聲難見花隱寒烟色不分世ニ是等ノ說道ノ類ヲ、虛字ト見テ、ナラクトヨミ、又解道說道ナドヨムモアレドモ、聞道聞說ナド實メ讀ベシ、是唐ノ時ノ語也、酉陽雜俎曰、見郁主說、見梵僧菩提勝說、如是者、如何ゾ是ヲ虛ニシテ讀コトヲ得ン、解道モ同例也、李白、解道澄江淸如練、令人卻憶謝玄暉若コレヲ解スナラクトセバ、魯直、憑誰說與謝玄暉、休道澄江淨如練、杜牧、郤憶謫仙才格後、解吟秀出九芙蓉此道、字吟字モ、ナラクト讀ベシヤ、ヨク思フベシ、事冗ニ涉ルトイヘドモ、重テ說道ノ實字ナルコトヲ辨ジテ曰、道ハ、詩ノ中冓之事、不可道也、孝經ノ、非先王法言不敢道、ノ道也、樂天、朝來渡口逢京使、說道烟塵近洛陽、又從道風

耐可　其奈 其如

光似帝京イハセテ置ク也、滄溟、想道故人滄渴久、秋來爲摘滿林霜是ハ張明府ノ柿ヲ贈シ時ノ詩也、故人ハ、自指シテイフ詞、我渴ノ久ク快クナキ咄ヲ想出サレテ、此肺ヲ潤ス霜ヲ摘レシト也、且句首ニ有ガ如キ、ナラクノ訓ナヲ用ユベシ、白詩神仙但聞說、靈藥不可求、此處豈ナラクノ訓ヲ下スベケンヤ、且李白解道ノ字、無人解道取涼州ト同義ニシテ、樂天、日暮風吹紅滿地、無人解惜爲誰開、又始知解愛山中宿、千萬人中一人無皆同一法也、道ノ字、一道、巴江自是來竹裏泉聲百道飛ノ類、スヂト云コト也、夢華錄文殊普賢各於手指出水五道トアリ、耐可ノ字、點本多ク可キニ耐タリトアレドモ、五車韻瑞ヲ檢スルニ、李白、耐可乘明月看花上滿船ヲ釋シテ、猶言如何可トアリ、其奈其如ノ字、樂天最好ンデ用ヒタリ、下ニ何ノ字ヲ拘ヘタルモアリ、

隔是　不分

拘ヘザルモアリ、何意ヲ審ニスルニ、其ノ字ヲ加ル時ハ、イカンガセント云程ニ、セマリテ强キ也、其奈山猿江上叫、故鄉無此斷腸聲、莫道近臣勝遠使、其如同是不閑身、其如丹墀上、君恩未報何、隔是ハ、羅山東見記、己ニ是也、白氏文集ニアリ、唐ノ時ノ言トアリ、不分ノ字、杜詩、不分桃花紅勝錦、生憎柳絮白於綿、古來生憎ヲアナニクヤ、不分ヲネタヒカナト訓ゼリ、邵二泉、分別也、不能分別也、ト云ヨリスレバ、不分ハ、此等ニテ云、メッチヤニテアヤナシトモ云ベシ、左右不分ト、音ニテ讀ニシクハアラジ、晉山氏抄ニ、不分ノ分ヲ忿ト見テ、不分即不忿也、正是忿意也トイヘバ、俗語ニ好コトヲ不好ト云類ニテ、腹立ヤナド訓ズベシ、樂天憤淮寇未平詩、不分氣從歌裏發、無明心向酒中生、是ハ忿ノ解ニアタルベシ、滄溟自憐一日成三賦、不分傍人賜錦袍、徂徠

解、猶云嗔它、盍簪錄ニハ、引事文類聚曰、庾翼書、少時與右軍齊名、右軍後進、庾猶不分、曰、小兒輩賤家鷄、皆學逸少書、蓋言不自知分也、分去聲、

生憎

生憎生怕ノ生ハ、生人ノ生ト見ヱタリ、生ハ熟ニ對スル字ニテ、生人トハ、平常慣ザル人ノ事也、生憎生怕モ其意ニテ、平生意ニタクハヘテ、然思フニハ非ザレドモ、不圖サシカヽリテ、アナニクヤアナ怕ロシト思ヘル也、

卻

卻ノ取ノト云字、俗語ニテ、上ヨリ帶來ル者ニシテ、其字ニ義ヲモタズ、卻ハノケテシマフノ意、閑卻ハ、ムダニシテノケタト云意也、售卻ハウツテノケタ、老卻ハ、年寄テシマフタ也、

取

看取領取、取ハ看領ノ助聲ニテ、深キ意ナシ、强テイヘバ得トノ意也、請君看取鬢邊絲ハ、得ト此鬢ノ白キヲ看テ下サレヨ也、

看來

看來ハ、カンガヘテミレバノ意也、袁宏道、天上看來偸律重、玉桃一顆誦人間、又理學類編曰、朱子曰、水經曰、崑崙五萬里、看來不會如此遠、蓋中國去于闐二萬里、于闐去崑崙、無緣更有三萬里、

不會

不會ハ、合點ユカヌ也、又ハマラス也、無緣ハ、俗語ニ等ナシニテ、考ヘテ看レバ、合點ガユカヌ、三萬里アルハズハナヒト也、

看

看來、又目ニテ見タルニ用ヒタルモアリ、ソレモ得ト見ルノ意ハ離レズ、東坡詞、細看來不是楊花點點是離人淚、又看ヲミスミスト訓スル時ハ、見ル內ト、徂徠譯セリ、

破

破、ヤブルハ常ノ義也、杜、二月已破三月來、萬齊融、數程頻破月、注ニ盡ナリトアリ、王世貞、我繫漁舟問苕雪、玉簫吹破碧桃花、是ハ開拆ノ意ニテ、吹開也、

碧桃

碧桃花ハ、白桃花也、スベテ色字、其儘ナラザル者多シ、青眼青牛ノ青ハ黑ナリ、マタ綠雲綠鬢ノ綠モ黑也、蒼鬢ノ蒼ハ、黃髮ノ前也、紅泉ト云コトヲ、合點ユカズ思ヒシニ、詩語解、字士新ノ說ヲ擧テ、言其顯露、猶徒

殺

跳謂之赤脚ニテ、蒙ヲ啓キヌ、愁殺惱殺咲殺等ノ殺、和語ニテ咲コロス、惱シコロスト云テ聞ユル故、誅殺ノ殺ノ樣ニ意得ベカラズ、和語ノ咲コロス惱シコロスモ、誅殺ノ意ナケレバ、晉書有殺衛玠、ト云ノ殺ノ意ハナシ、チトツヨク咲フ愁フ也、所戒反去聲ニテ、殺トヨムベシ、

殘

殘、ノコルハ常ノ義ニシテ、詩家盡ルノ意ニ用ヒタル所多シ、其時ハ只音ニテ殘スト讀ベシ、雪殘鵶鵲、又多時此類也、秋欲殘、月末殘、ノ義ナリ、

殘雪

又殘雪ト云ヘバ、春ノ雪トスルハ常ナリ、冬ノ雪モ、殘レルヲバ殘雪ト云、明千家詩、鄧伯羔、隴頭消息憑誰寄、殘雪寒梅未吐花、般奎、除夕旅懷、半榻愁眠殘雪夜、不知明日是新年、

初月

初月ハ、多ハ上弦ノ月也、然レドモ下弦ノ月ニモ云也、梁何遜、薄雲巖際出、初月波中上、下句ニ曰、露清曉風冷、天曙江光爽、是的ニ下弦ノ月也、

多少

多少ノ字、南海明詩俚評ニ、スベテ皆多キノ意ト謂タレ共、是ハアノ方ノ俗語ニテ、フトサノ程ヲバ大小ト云、長サノ頃アヒヲバ長短ト云、忠義水滸傳ニ、ツルベ程ト云ヲ、吊桶大小ト云、八尺バカリノ身ノ長ト云ヲ、八尺長短、身材トイヘリ、多少モ此例ナリ、故ニ同書ニ、一樽ノ酒代ドレホドゾト云ヲ、多少錢一桶ト云重サトレホドノ禪杖ゾト云ヲ、多少重的禮杖ゾト云、オマヘドレ程ノ酒ヲ買ゾト云ヲ、官人打多少酒トイヘリ、故ニ多少、疑問ノ時ハ、ドレホドノ、イクツゾノ意ニシテ、疑問ノ意ナキ時ハ、數ト云、幾等トモナキト云意也、故ニ花落知多少、トハ、花ガドレホド落タカ知ラヌ也、多少樓臺烟雨中ハ、數ノ樓臺烟雨中也、南山雨歇春流急、多少遊魚上淺沙、數ノ遊魚、イクラトモナキ遊魚、ト譯シテ當ルナリ、隨意任他、一任、任教、從教、儘教、遮莫、共ニサモア

ラバアレト訓シ來レリ、サレドモ字先本訓ニ讀テ其意ヲ會シ、而後和訓ヲ假ルベシ、譬バタトヒト云訓ノ字、向使何、藉使何、雖使、縱然、饒使ト讀ミ、モシト云訓ノ字、若使何、設使何、ト讀ニ、タトヒモシト訓スル意ヲ得ベキガ如シ、サモアラバアレトハ、ツカアルナラバ、意任セニシカアレト、是ヨリカモハヌ意也、吳姬緩舞留君

隨意

醉、隨意青楓白露寒、離席ハ歌舞ニシテ、離憂モ動ゼズ、離憂ヲ動ズレバコソ、青楓白露寒キモ、身ニシミテ哀レナレ、今夜ハサルニ非ザレバ、心任セニ寒カレトナリ、自

任佗

是無心愛良夜、任佗明月下西樓、其此カタハ、夜ヲ面白シト思フ心モ浮ネバ、佗トハ月ヲ指シテ、アノ月ノ西樓ヲ下ルモ、勝手次等ニ下レ、今暫シトモ得思ハヌゾトナリ、仙山不屬分符客、一任凌空錫杖飛、仙山ハ、我如キ俗客ノ物ニハナラヌ、御僧ノ錫杖ノ空ヲ凌ヒデ飛ニ、モツハラ御任セ申スト也、儘ハ、モト盡ト同字ナリ、ママト訓セリ、正字通、唐人詩ヲ引テ盡君花下醉青春、註、盡君、猶言任君也、俗作儘トアリ、武朝

儘教

宗、宮詞、只有落紅官不禁、儘教飛舞出宮牆落花散シテ飛去レドモ、公儀ヨリ御カモ

遮莫

ヒナク、儘ニシテ宮牆ヲ出シムル也、遮莫ハ、唐人ノ俗語、鶴林玉露俗語儘教是也、トアリテ、遮莫鄰雞下五更、雞ガ鳴テ夜アケニナルナラバ、ヨシ鳴セテ置ケ也、遮音析也、是字義ニテ求難シ、終古ノ字、周禮考工記車輪ヲ說テ曰、輪己崇則人不能登也、

終古

輪己庳則於馬終古登陁也、古註曰、終古猶言常也、陳仁錫註曰、終年如登坡陁然、楚辭註、古之所終、謂來日之無窮也、トアリ、唐詩、終古垂楊有暮鴉、常ニ有暮鴉ヤハリ有

行矣

暮鴉ナリ、行矣、左傳ニハ行也ト書リ、師古

好去

外戚傳注ニハ、好去ト同トイヒタレドモ、

足　撲　不管　只管

好去ハイタガヨヒ也、慇懃好去武陵客、莫使世人相逐來是也、行矣ハ、行ニクキ所ヲ、務メテ去シムルノ辭、行矣愼風波是也、足ノ字、タルハ常ノ義ニシテ、ヲレ一盃ニ行屆キタル意ナリ、サレドモ不足ノ反對ト見レバ、餘ル意アリ、故ニ先多シト云和訓幾シ、俗語ニテイハバ、餘程アルナリ、石底松生足傍枝、石ニ出來タ松ノ脇枝ガ餘程アルトナリ、花發多風雨、人生足別離、花サクト思ヘバ、無用ノ風雨饒シ、是程澤山ニハアルマヒト思フニ、世ノ中ニハ、花ノ枝ニ別ルル樣ニ、離別ト云モノモ、ヨツポドアルゾト也、撲ハ、ウツト訓ス、書ノ若火之燎于原、其猶可撲滅ナド、擊ノ意ナリ、詩花撲玉缸ナドノ類ハ、字書ニ拂拭也、ト訓ズル者當ル、管ハ、支配也、故ニ不管ハ、我支配セズニテ、カモハヌナリ、是ヲ以テ只管ハ、不管ノウラニテ只カモフナリ、故ニヒタ

更　轉　且　姑　自

スラト訓セリ、更ハ、字書ニ再ト訓シテ、百官何日更朝天ト云ガ如キ所モアレドモ、大方ハチト隔アリテ、和語ノイトドト云訓近カルベシ、轉ハ、ウタタト訓ジテ、タダモノナリ、譬バ夜轉寒トイヘバ、夜次第ニタダモノト寒キナリ、夜更寒トイヘバ、モウ下地餘程寒カリシガ、猶打ソヘテイトド寒キナリ、且ハカツシバラクトテ、假初ノ意ナリ、故ニ俗語ノマアト云訓アタル所多シ、姑ノ字マアノ訓ノ的當大意同ジ、自ヲノヅカラハ、天然ノ場ナリ、ミヅカラハ、我ヨリイヘル言ナリ、自是仙才不自知、上ノ自ハ天然ニシテ、下ノ自ハ我身ヅカラナリ、漢語ハ一ナレドモ、和語ハ少シノカハリアリ、又俗ニ云ヤハリノ場アリ、水自潺湲日自斜、盡無雞大有鳴鴉トハ、亂後ノ氣色ヲ、水ハヤハリ潺湲トシテ流レ、日ハ毎日ヤハリ斜ニシテ、昔ニカハラヌ

ニ、人無ケレバ、人ヲタヨレル雞犬ハ無クナリテ、唯鴉ノ鳴ノミナリト云意ナリ、」

猶

元自猶自モヤハリ也、」猶ハ、上ヲ承テ、和語ニイフ、サヘ、ダニ、スラ、ヨク當ル、又ハ不ノツカヌマダニ當リテ、于今ト云程ノ場多シ、不ノツクマダハ未ノ字ニテ、マダ寢ヌ人ヲ、空ニ知ル哉、ノマダ也不ノツカヌマダハ、淀ノ渡リノマダ夜深キニ、ノマダナリ、」

唯獨

唯獨義相近シ、下ヨリバカリトカヘリ讀テ、ヨク聞ユ、獨獨坐獨行ナドイヘバ、一人ト云訓アタル樣ナレドモ、一人ノ意ハナシ、侘ニ對スルノ意ニシテ、己バカリ也、詩ニ、予美亡此、誰與獨處、ニテ考フベシ、」

切頻

切頻二字トモニシキリト讀ユヘ、初心ノ間ハ、意得違ユルコトアリ、頻ハ頻數トツヾキテ、幾度モシバシバ也、切ハ字ノカヘシノ時、カヘシトヨメドモ、カヘスノ意ハナシ、セマルト云樣ノ意ニテ、譬バ東德紅ノ功、德ト紅ト別別ニヨメバセマラズ、二聲ヲセマリテヨメバ東也、サル故、切ノシキリハセマルコト也、」

忽乍

忽乍ノタチマチモ、忽ハ俄ナル意、思ヒ設ケヌ意アリ、乍ハ觚家ニ、乍大乍小、乍遲乍數抔ヒヨツトヽ云意ナリ、」雖ハ、上ヨリタトヒト讀下シテ、ヨク聞ユ、故ニ漢人ノ文章ニハ、縱トイヘバ、雖ヲ重ネズ、和人ノ文章ニハ、心得違ヒテ、縱雖何ト、用ヒタル事マヽ多シ、是故ニイヘドモトイヘドモ、言フト云意ハナシ、」

衣

依依人ニ衣ト云意ニテ、離レヌ意アリ、」依稀ハ、古唐詩合解ニ、依稀ハ似、猶云不差大槩也、」

好

好ト云字、好惡ノ好、美好愛好ノ意俗語ニハ、ズンド、イカウ、ト云義モ具シ、ヨシ、ヨケン、又タヘタリ、ベシ、ト云位ノ場ニ用ヒタリ、唐人、綠淨春深好染衣、是好ノ字ノ正法ナリ、老杜、永夜角聲悲自語、中天月色好誰看、此聯ヲ古來、悲ヲ角聲ニ属シ、好ヲ月色ニ属

シタル說アリ、中天月色好トイヘドモ、誰トカ看ンノ意トス、六ツカシ、字士新是ヲベキベシヲ以テ通ザリ、ヨシノ義訓ナルベシ、宋時洪景盧金ニ使ス、兼テ接伴ト敵國ノ禮ヲ用ヒント約セシニ、金人驛門ヲ閉テ供饋ヲ絕ツ、景盧懼ツテ其禮ヲ易フ、是禮モ風疾有テ、常ニ頭ヲ掉ケルニ、由テ時人嘲テ曰、

一日之饑禁不得、　蘇武當時十九秋。
傳與天朝洪奉使、　好掉頭時不掉頭。

唐ノ干襄陽、戎昱ノ歌者ヲ召シテ歌シム、歌者歌テ曰、慇懃好取襄王意、莫向陽臺夢使君。干コレ戎昱歌者ヲ送ルノ詩ナルヲ聞テ、之ヲ昱ニ歸ス、コレ好惡ノ好ト見ヱタリ、于鱗、古詩、春風何處不花開、何處花開不看來看花何處好空回。是字士新ノ訓ニアタル者也、岑嘉州、臨河客舍詩、城上望鄉應不見、朝來好是懶登樓。ベシノ解通ズ、若

杜律ノ解ニ從ヘバ、上三下四ノ句法トナサザルコトヲ得ズ、于鱗絕句、好ノ字、腰ニ用ユル事數ニシテ、徂徠ノ解、其處ニ從ツテ義ヲ變ズ、特操ナキニ似タリ、ココニ擧テコレヲ示ス其詩、楊州十月梅花發、江上春光好。贈誰、不是故人能載酒、祇今秋色好。誰看。短褐憐君又遠遊。如今白璧好。誰酬。已知客裏黃金盡、杯酒相看好。是誰。以上皆上五下二ノ法トス、句法ニ於テ穩ナラズ、上四下三ハ七言ノ正、于鱗正ヲ好ンデ變ヲ好マズ、好贈誰、好誰看、好贈誰、好誰看、又タエント作シテ可也、何好ノ字ニ限リテ、上五下二ノ法トスベキ、山中儻值看花伴、醉裏新詩好共題。好共題也道酒如春水薄、樽前無日好無君。君ナキヲ好トスルナキハ、情ノ厚キ也、酒薄キモ、情厚シトイフ事也、身爲漢主分憂吏、何必龔黃好讓人。此詩ニ至ツテ言當自任也ト、是字書ニ注セザ

ル所トイヘドモ、義ノ訓ズベキ者、宜ヲベキト訓ズルガ如シ」

望

望ノ字、常ニ側ニ用ユ、陽唐韻ニ平聲ナルヲ見テ、混ジ用ユル事アリ、須子細分之、先古人陽唐韻ニ用ヒタルヲ檢シテ見ルベシ、大方ハ只相望トノミ遣ヘリ、然レバトテワキノ相望ハ、又側ニ用ヒタリ、其故ハ、日ト月ト向ヒ合ヒタルヲ望ト云、畢竟對スルノ意ニシテ、瞻望眺望ノ望ト同カラズ、蘇子瞻送子由、雲海相望寄此身、陳后山集、吾母亦念我、與爾寧相望詿、相望言各在天一方、杜詩、人事多錯迕、與君永相望、是陽唐望ヲ用ユルノ通例也、韓退之、我材不與世相當、戢鱗委翅無復望、樂天、煦沫誠多謝、搏扶豈所望、明楊愼、冷冷風馭不可馹、降望大壑心悠哉、偶如此者アリ、」

將

大將ノ將ハ、名稱ニテ死字、側也、將軍ノ將ハ、軍ヲ將ユルノ將ニテ、活字、平ナリ、」

故

故ノ字、シカクアルガ故ニヲ略シテ、カルガユヘニト讀ムハ、常ノ義ナリ、其外モト云、云義アル也、世說ニ、鄧艾口吃、唯艾ト云ベキヲ、艾艾ト云ケルヲ、晉文王戲レテ、艾艾定是幾艾ゾト有ケレバ、鳳兮鳳兮、故是一鳳、ト答タルガ如キ是也、」又猶ノ字ノ義アリ、杜甫、淸秋燕子故飛飛、章孝標、今年故向社前歸、是也、」又ワザトト云一義アリ、コトサラニト訓ジ來レリ、蔡中郞、故斷一絃、以問文姬、是ワザト琴ノ絃ヲ一スヂ斷テ、ドノ絃ゾト文姬ニ問タル也、司空曙、勞君故有詩人贈、君ニワザワザト御苦勞カケテト云意也、コトサラニト云訓、俗語ニハ當ラヌ樣ナレドモ、徒然草ニ、犬ハ守リ防グツトメ、人ニ勝リタレバ、必アルベシ、サレド家每ニアル者ナレバ、コトサラニ求畜ズトモ有ナン、トアレバ、俗語古義ニソムケルナルベシ、」

也

也、古ヨリマタト訓ジ來レリ、俗語也、故ニ詩ニハ用ユレドモ、雅文

ニハ用ヒズ、也ノ字ハ、句尾ニアレバ語ヲ終ヘ、句首ニアレバ語ヲ發ス、正字通ニモ發語之辭トシテ、岑參、也知郷信日應疎ノ句ヲ引ケリ、總テ句首ニアル發語之辭トアルハ、和語ニテ引合スベキ語ナキ故、アヽノ、マタノト、ツケテ置タルナルベシ、又復亦等ノ意ハナシ、聯珠詩格、玉樓天上高多少、也有騷人學苦吟、又淸樽對月酌不已、也向蓬窗坐至明、

卻

卻ハ、俗ニ結句ト云ニ叶ヘリ、施肩吾、雁來不帶平安字、卻帶邊風入帳寒、和、唱和ノ和ハ側、陽春寡和ノ類ナリ、和合ノ和ハ平、不知和月落誰家ノ類ナリ、不須苦問牛和女、與ノ意、亦和合ノ義、平也、

如若

如若、儻皆モシト讀來レリ、如若ハ、下ヨリ何何ノ如クナラバト、カヘリ讀メバ意通ズルナリ、

儻

儻ハ意重シ、正字通、或然之辭、儻忽不可期也、トアリ、千ニ一モト云程ノ事也、

莫

莫、然スナド禁ズルナリ、又處ニヨリナカランヤト、反語ノ處モアリ、

斗

斗ノ字、頓ト通ズ、韓昌黎集、長沙千里平、勝地猶在陰、況當江濶處、斗起勢非漸、又、山作劍攢江寫鏡、扁舟斗轉疾、疾如飛、又吟君詩罷看雙鬢、斗覺霜毛一半加、注引東坡詩曰、黃昏斗覺羅裳薄、引後山詩曰、斗覺文字生淸新、

如

如ノ字、韻字ニ用ヒタル事アリ、明七才子集、湖上靑衫草色如、東坡、夜夢嬉遊童子如、父師檢責驚走書皆ゴトシト訓セリ、意ハサルコトナレドモ、字書ニ、然也、似也、同也、トモアレバ、然リトカ同トカ讀テ置ベシ、チト我儘ナル韻法ナリ、法ルベキコトニアラズ、

風塵

風塵、杜老ハ常ニ干戈ノ事ニ用ヒ、滄溟ハ專世塵ノ事ニイヘリ、コレヲ晉書ニ考フルニ、兩ナガラ其據アリ、陶璜傳、風塵之變、出於非常、齊王冏傳、當隨風塵、待罪於初服、ノ如キハ、干戈ヲサス、王戎傳、王衍神姿高徹、自然是風塵表物、戴若思傳、安窮樂志、無

芙蓉

風塵之慕ノ如キハ、世塵ヲサス、
○富士山、八峯空ヲ挿ム、之ヲ望ムニ、面面三峯相同ジ、故ニ近來詞人、之ヲ指シテ芙蓉ト云、初學富士ノ芙蓉タルヲ知テ、諸峯皆通ジテ稱スベキヲ知ラズ、予先年嘗テ其事ヲ筆シ置ケリ、今コレヲ故紙堆中ニ得テ、左ニ筆ス、曰、爾雅曰、荷芙蕖、郭璞曰、芙蕖別名芙蓉、疏曰、江東人呼荷華爲芙蓉、詩家稱芙蓉者、皆荷花也、荷花八出、駿之富士、八峯聳空、詩家指爲芙蓉、芙蓉終專名於富士、雖然山峯、上尖下圓、若未敷蓮花、可以通稱芙蓉、閲大明一統志、曰、華不注在濟南府城東北、虎牙傑立、孤峯特起、李白詩曰、昔我遊齊都、登華不注峯、茲山何峻秀、綠秀如芙蓉、又九華山、在池州府青陽縣南、舊名九子山、以山九峯如蓮花、乃更名九華、其詩、天河挂綠水、秀出九芙蓉、又東泉山在嚴州府淳安縣東北、其一支南出、曰紫瑞峯、當龍池之上、望之如青芙蓉、元洪震老詩、青蓮浴秋水、浮出龍王宮、又壽山、在金華府永康縣東、明李畢詩、雙澗橋西五老峯、分明朶朶翠芙蓉、又佳山、在紹興府蕭山縣西南、元張廷蘭詩、會稽之山天下無、宛如碧海浮蓬壺、佳山一朶更奇絶、半空涌出青芙蕖、又崆峒山、在穎州府城南、宋孝朴詩、雲根秀出碧芙蓉、烟晃霞霏瑞靄中、又天柱閣、在安慶府、宋郭祥正詩、群山奔來一峯起、千丈芙蓉碧霄裏、又按、衡州府衡山、盤繞八百里、有七十二峯、十洞、十五巖、三十八泉、二十五溪、九池、九潭、于鱗詩、青天七十二芙蓉、是也、而明人文徵明、有白銀盤裏紫芙蓉之句、張佳胤、有海西削出千芙蓉之句、義可以觀矣、而號芙蓉峰者、在廣之衡山、稱芙蓉嶺者、在婺源、其他不關峰、以芙蓉名者甚多、出謝在杭文海披沙、

詩歌

○古冠蓋異域ニ往來シ、文物彼ニ資リ、詩道モ亦盛ナリ、故ニ詩家六義ヲ説キ、八病

ヲ說キ、詩式ヲ說バ、和歌又六義アリ、八病アリ、和歌式アリ、學文講ゼズ、詩亦衰フ、古ハ詩題ヲ以テ和歌題ニ入ル、今ハ和歌題ヲ以テ詩題ニ入ル、定家百人一首アリ、林家一人一首アリ、歌ニ三十六歌仙アリ、石川丈山、三十六詩仙アリ、歌合セハ、左右ヨリ各歌一首ヲ出シテ、判者ヲシテ勝負ヲ分タシム、於是乎詩合ノ擧アリ、藤兼良、文安詩歌合序曰、詩歌合ト云者ハ、上古ヨリ有ケンヲ、記シ傳ヘザリケンニヤ、中比建仁ノ攝政、此道ヲ下ニ廣メ侍リシ後、元久ノ上皇、其道ヲ上ニノベマシマシケラシトアリ、向陽子、一人一首曰、凡詩歌合者、詩二聯、歌二首、合之是例也、又詩一聯、歌一首、相對者、曰相撲立詩歌合、又徂徠ノ南留別志ニ、絕句ヲ三行三字、律詩ヲ五行三字ニ書クト云ハ、歌ノ懷紙ノ眞似ヲシテ、五山ノ僧ノシ出シタルナルベシト書ケリ、サモ有ゲナリ、

童謠

○贊、箴等ノ類、古モト詩ト遠カラズ、童謠ニ至ツテハ既ニ詩ナリ、左傳鸜鵒歌ノ如キ、最觀ルベシ、風土記所載ノ祝辭、

祝辭

君乘車我戴笠、他日相逢下車揖、
君擔簦我跨馬、他日相逢爲君下、

宛然トシテ古詩ナリ、諺ノ如キモ、韻法ナキモアレドモ、大學、子惡苗碩ノ諺ヨリ、史記、當斷不斷、反受其亂、孟子、雖有智慧、不如乘勢、ノ如キ皆韻アリ、愼子、不聰不明不能爲王、不瞽不聾、不能爲公、愈詩ニ逼ル、又語アリ、韻法擲韻ノ條ニ詳ナリ、多クハ其時ノ人ヲ評判シタル語ナリ、晉書顧愷之傳、桓玄與愷之同在仲堪坐、共作了語、愷之先曰、火燒平原無遺燎、玄曰、白布纏根樹旒旐、仲堪曰、投魚深淵放飛鳥、復作危語、玄曰、矛頭折米劍頭炊、仲堪曰、百歲老翁攀枯枝、有一參軍云盲人騎瞎馬臨深池、仲堪眇目、驚

諺

語

駢語

曰、此太逼人、因罷、コレヲ語トイフトイヘドモ、大ニ漢武柏梁ノ唱和ニ似タリ、詩ノ變ナリ、又文章ノ中、詩ノ如ク對ヲ用ユルモノヲ、駢語ト云、才非一鶚、難居累百之先、智異衆狙、遂起朝三之怒、ト云ノ類ナリ、本邦延喜天暦ノ比ノ文章、皆駢語ナリ、

掩韻

○本邦掩韻之戯アリ、韻塡トイヘリ、是ハ古集ノ内、人ノ耳慣ザル詩ヲ抽出シ、韻礎ノ一字ヲ掩ヒ、人人左右ニ對坐シ、彼此拔取リテ番ヒ、其韻ヲ射ルナリ、而シテ其勝負ヲ爭ヒ、負タル方ハ、負業トテ饗應スルナリ、源氏物語、榊巻ニ出ヅ、

和詩

○詩ハ、人情ノ言語ニテ盡ス事能ハズ、咨嗟詠嘆ノ餘ニ發スル者ナレバ、何レノ國ニモアルベキ事也、本邦ニ成ル者ヲバ、歌ノ字ニテ昔譯シタル故、詩ノ字ヲカラウタト訓セリ、サレ共畢竟歌ト云モ詩ナレバ、和歌ヲ正譯セバ、和詩トイハンコソ的當ナラメ、詩律兆ニ、始テ國詩トイヘリ、

梵詩

命名當レリ、唐義淨三藏、南海寄歸傳ヲミルニ、安咀囉太子、馬鳴尊者、共ニ詩歌アリ、馬鳴又佛本行ノ詩ヲ作ルトアリ、是天竺ノ詩ナリ、經文中ノ偈モ、梵語ヲ漢語ニ譯シタレバ、眞面目ハ見エザレドモ、亦詩ノ類ナリ、仙臺僧梅國、櫻陰腐譚曰、五天南海、盛好詩文、殆過漢地、與此方作例、尙無異也、大學士伐撥呵利、出家歸俗、往復七回、自嗟詩曰、

出染便歸俗、　離貪還服緇、
如何兩種事、　弄我如嬰兒、

是如何ナル書ニ出タルコトニヤ、和梵本來沈約ノ聲韻ヲカラズ、梵ニシテ詩アラバ、和歌ノ漢詩ニ假ルコトナキガ如クナルベシ、若然ラズンバ、唐詩ノ法傳ヘテ梵ニ入ル乎、漢人此杜撰ヲナスカ、正ニ之識者ニ問ベシ、梵ノ韻法ハ、アイウエオノ長

短呼ニ過ズ、悉曇字記考フベシ、安永戊戌ノ秋、予長崎ニアソンデ、舌人吉雄耕牛、松村君紀ニ逢テ聞ニ、阿蘭陀ナドニモ詩アリ其名ヲゲヅイーキ又ハアルスト云、亦韻ヲフム由ナリ、阿蘭陀ハ字僅ニ二十有五、其韻法ヲ問ヘバ、五韻有テ之ヲ用ユトナリ、梵ニテアイウヱオト次ヅルヲ、AEIOUト次ヅル也、物眞ニ逢モノハ、事一轍ニ出ヅルト見ヱタリ、今俳諧者流、國字詩ト云者ヲ作リテ樂ムモ、此韻法ヲ用ユ、是モ自然ト相叶フ者ナルベシ、偖此國字詩モ、近來ニ出トハ見ヱタレドモ、淵源ハアル事也、僧一休、靈照女ノ贊ニ、

汝ガ親ノ笊ツクリ、
馬祖ニダマサレテ。
寶ヲウミニスツル、
阿龐居士ガムスメ。

ト物語ニ見ユ、此物語ハ、一休沒後、百八十餘年ヲ過テ後ニ成ル書ニシテ、過半ハ一休ノ意ニ非ズト見ユレバ、强テ徵スベキニハ非ザレドモ、箇樣ナル者ハ、人家ノ珍トシ藏ムル者ヲ得テ、寫シタルモ多カルベシ、

○今此邦歌謠ニ、其辭ノ外ニ、餘聲ヲ雜テ、其節奏ヲ助ルコト有、彼方ニテモ有ト見ヱタリ、盍簪錄ニ、上梁詩句首ニ兒即偉ト云三字アルヲ、擧重勸力トアレバ、コヽノテウサヤエイサ也、晉書五行志ニ、京師兒鈴曹子ヲ歌フニ、其唱曰其奈汝曹何トイヘバ、今相ノ手ナド云樣ノコト也、樂志、阿子及懽聞歌、歌畢輙呼阿子汝聞否、後人衍其聲以爲此二曲ト、和漢同日ノ譚ナリ、

○南宋嚴滄浪曰、夫詩有別材、非關書也、詩有別趣、非關理也、然非多讀書多窮理、則不能極其至、所謂不涉理路、不落言筌者、上也、詩者吟詠性情也、盛唐諸人、惟在興趣、羚羊

挂角、無跡、可求、故其妙處透徹玲瓏、不可湊泊、如空中之音、相中之色、水中之月、鏡中之象、言有盡、而意無窮、詩ノ教コレヨリ善キハナシ、詩ヲ學ブ者、能此意ヲ得バ、才ニ從ツテ成ル事アラン、

詩轍卷之六 大尾

詩轍跋

山人閑居、童子在側、曰、願聞詩文之別、山人曰、善哉問也、蓋古者、書與畫不遠、觀之於籀文而可識焉、詩與文相近、誦之於詩書而可考矣、於是散爲賛銘、爲歌辭、爲離騷、詩之變也、自漢而後、字句始定、詩與樂府、或分或合、而詩則五言爲宗、漢焉而魏、混然散行、齊梁以下、儷語諧音、其風大變、唐人取二者、儷散音韻、麗華雄渾、雕琢以爲律、七言繼盛也、律體已立、而唐以前者、總爲古詩、以分近體、其所謂古詩、非古之古詩也、自後世等上之、則漢魏六朝、大不類其體焉、於是渾然散行者、與律祖相隔、唐人制律、而後行不拘律者、乃唐之古詩也、是時未有摸擬之門、則其慕古風者、亦與今之優孟者異也、夫詩文原未遠、則其流派亦伴、六朝之文法、騈儷厥後、聲音抑揚、宛然長篇之詩也、及韓昌黎氏興、和其不然、竟去其陳言、行以古道、詩雖硬語盤空、而對語聲律、馳驅由其節、則詩文之別以遠焉、初盛之諸公、方其草創、聲音自從容、晩唐因循、詩律漸細、至明李滄溟氏、以極其嚴焉、嗚呼書畫非他技、詩文本同胞、明體雖詩文異其趣、而同出於摘用、則江漢共歸東流、今胡清氏矯其弊、文風再變、則詩亦從之、童子曰、唐律之從容、明律之整嚴、不識孰適從焉、曰、昔者李廣之行師、軍無部伍、營無刁斗、就

善水草則止舍、程不識則正部曲治營陳、至明軍士不睡、而各立威於邊郡、爲一時之名將也、未能李廣、則爲不識、若能李廣、則李廣奚不可焉、曰、律分則有絕、總則絕歸律、亦有說乎、曰、律之立以四韻焉、唐之造也、絕則來遠、終行之以律法、故總之於律、考之南史、宋劉昶奔魏之二韻、謂之斷句、梁正德之奔魏、以內竹火籠之詩、楨幹屈曲盡、蘭麝氛氳銷、欲知懷炭日、正是履霜朝、曰一絕、則蓋二韻而斷絕、止于一解之謂也、絕之來遠矣、童子唯唯而退、維天明乙巳秋、久旱得雨、早涼初動、二三子告詩轍刻成、申記與童子語者、以履其終、

三浦晉印　安貞

浪華藤世衡寫

獨嘯集自序

予十五而志于詩。家唯有周伯弜氏三體詩集。因讀之。作語數千言。然窮鄕下邑。無可與言詩者。戊午之冬。遊于府。始聞徂徠物氏國唐詩。然未得其要。己未正月。謁伯章先生。而後得聞其詳言。於是乎。始知有唐宋之辨。競競業業。於此五年矣。探龍淵而把驪珠。則吾豈敢焉。然射者必志於鵠。及其至與不至也。有寸而畫。予舊稿積堆案焉。退顧其所作。可謂兎園冊子者也。消閒之暇。筆之削之。僅得一百首。雕蟲之小技。何是以藏。然爲之猶賢乎已。故錄以爲一帙。號謂獨嘯集焉。

時維寬保三癸亥年

浦安貞　自序

目錄

獨嘯集

浦安貞　撰

元文四己未年

送桑路白

璵樹風清月欲低。玉壺春酒爲君携。平明分手空山裡。一片白雲送馬蹄。

足曳山 俗號西天台山故語及茲

陰壑冥冥夕日沈。天台松栢鬱蕭森。祇今縱有胡麻在。霞起赤城不可尋。

弔綾文春喪賢弟

西州分手各西東。萬里離魂思不窮。尺素飛來人不見。鶺鴒原上月朦朧。

塞下曲

邊風蕭颯別魂銷。夢裡相思古路遙。泣上龍堆望京洛。天涯秋色雨蕭蕭。

愁

西窗月落葉飛頻。何事秋聲愁殺人。寒夜五更燈下淚。不堪寂寞灑衣巾。

塞上曲 元文五庚申年

黃雲殺氣滿漁陽。刁斗聲中盡望鄉。少婦不知青海月。沙場夜夜斷人腸。

高田送人

白鷺洲邊草色新。他鄉相送淚沾巾。明朝舟揖向東去。忽是烟霞萬里人。

憶吹笛友人

富口別離後。不聞玉笛聲。窗前螢火度。樹裡杜鵑鳴。憶此盃中物。與君月下傾。何時再携手。更見故人情。

暮雨 予時客中津

金牛山畔向東望。不盡浮雲隔故鄉。難那江城垂暮雨。使人却憶薜蘿房。

旅夜書懷 同時

江城擊柝夜將闌。秋氣西來牛斗寒。同是中天孤月色。故鄉親友共誰看。以上十首

塞下曲

匹馬戰回日欲沈。黃雲殺氣夜陰陰。蓬萊闕下一投筆。將請長纓報始心。

送客

日暮白雲中。送君思不窮。渡盃凌海浪。飛錫逐秋風。樹杪人烟翠。橋邊楓葉紅。前期又何日。分手各西東。

閨怨 得安字

秋來霜露下長安。遙想邊庭夜正寒。獨取金挍月前織。欲因漢使寄桑乾。

元文辛酉六年 則寬保元年

少年行

珠襦鏤帶照金鞍。三尺玉鞭手裡寒。更向章臺吹長笛。美人樓上捲簾看。

暮春

青青楊柳拂窗寒。谷口無人春欲闌。細雨新晴花如錦。東風輕到竹闌干。

明妃曲

羅衣風冷思悠悠。彈罷琵琶獨自愁。何事單于臺上月。多情却異漢宮秋。

其二

琵琶一曲淚沾巾。誰計黃金誤此身。翠黛金釵零落盡。玉顏猶自漢宮人。

三日寄人

夭桃花下日將夕。蘭亭風光眞耐惜。綠水青山君自看。遊人誰是舊賓客。

送僧之長州

送君鷲嶺白雲間。一片長江遠故山。風靜布帆挂斜月。天邊何處古文關。

塞下曲

金勒銀鞍白玉鞭。歸來飲馬鷿鵜泉。相逢不謂封侯事。擬向盧龍擒右賢。以上十首

烏夜啼

城上烏啼愁緒多。聲聲如泣又如歌。狂夫不解遼西月。同照秦川錦上梭。

訪人

柴門不鎖薜蘿垂。恰好尊前倒接䍦。一曲浩歌醒

復醉風流何讓習家池。

少年行

十二街中走馬遊。春風花滿鷫鸘裘。金丸彈盡日將暮。直向新豐舊酒樓。

采蓮曲

十里風淸綠水洲。千枝婀娜滿中流。紅粧渾是吳宮女。素手采蓮不自由。

客中聽子規

萬里還家夢。覺來思轉迷。沾巾淚已盡。時有子規啼。

暮春憶人

寂寂風光暮。倚欄望翠微。天涯回雁斷。夢裡故人稀。帶雨林花落。啣泥燕子飛。空餘芳草色。孤客不思歸。

夜泊

布帆夜泊海西城。城外回首遠水平。萬里江山遊子淚。數行鴻雁故園情。月明難作還家夢。風冷愁聞擣練聲。縹緲孤舟從此去。不知何處又沾纓。

夜訪人

雲霧千峰散。梧桐一葉飛。新涼先入席。冷露已沾衣。幸有盃尊在。其如儔侶稀。浩歌夜將曙。乘興轉忘歸。

秋夜

西風蕭瑟碧梧寒。明月高懸夜欲闌。自是紫門人不到。詩成獨倚竹闌干。

訪金谷子

海城幽興好登臺。麈尾雅談又快哉。魚龍影動秋江冷。鴻雁聲迷夜雨來。酒酣高閣淸風起。詩就連城明月開。主人相送柴門外。轉似習家池上回。以上十首

留別金谷子

蕭瑟秋風暮。多情欲別難。行盃歎未半。擊柝夜將闌。月上梧桐淨。霜凝橘柚寒。故園何處是。江外路漫漫。

同

携手同遊桂水濱。交情自勝故鄉人。停盃惜別離亭月。一曲渭城淚滿巾。

其二

西風吹葉點離盃。秋色瀟瀟歸思催。匹馬東望山簇簇。不知何處是天台。

喜小串君至

千山萬壑鬱崔嵬。一半斜陽隔水開。今日初迎珠履客。不妨黃葉滿青苔。

題竹翁隱居

結第江海頭。風物似滄洲。林外雲山出。窗前島嶼浮。談玄揮麈尾。乘興棹扁舟。忘却人間事。朝朝伴白鷗。

寛保二壬戌年

山中

高松影落夕陽間。獨倚柴門見鳥還。林下長無車馬跡。白雲依舊遶青山。

得子登見寄書及詩賦此答贈

鴻書喜見報平安。重疊雲山道路難。此地看花多感慨。何時携手磬交歡。明珠影合千巖曙。白雪歌成三月寒。流水調高誰得識。匣琴莫漫向人彈。

采蓮曲

錦纜牙檣映水新。芙蓉爭發若耶濱。木蘭舟上采蓮女。半是吳王宮裡人。

閨怨

梧桐葉上動秋聲。無那邊關萬里情。唯有漢天明月夢。夜來還到受降城。

同

空館相思夕。紗窗月欲低。東風吹妾夢。直到大荒西。以上十首

同

近聽黃花戍。又移洮水西。不知關塞路。夜夜夢魂迷。

送僧

江山萬里與雲長。金錫翩翩去故鄉。衣裡之珠若明月。知君到處有清光。

同

東望江山畫裡分。離亭落日暫留君。懸帆十八灘頭月。飛錫三千里外雲。

明妃曲

月隱城頭胡角哀。獨披氈帳暫徘徊。磧西雲暗看烽火。可是單于夜獵回。

哭烏東皐

丹旐飄飄恨有餘。茂陵秋冷憶相如。可憐千歲凌雲筆。牀上空留諫獵書。

夜

愁聽陰蛩座夜闌。亭亭明月出雲端。籬邊黃菊經霜馥。井上碧梧含露寒。萬里清風催木葉。五更長笛度闌干。猶餘離恨千行淚。空作山陽思舊看。

月夜書懷

春愁未盡又逢秋。屈指歲華如水流。記得去年今夜月。與君携手上西樓。

同

明月亭亭照四鄰。梧桐葉上露華新。登樓欲散窮途恨。却有秋聲愁殺人。

暮歸

斜陽十里白雲低。萬壑千山望轉迷。茅屋不知何處是。烟嵐日落暮猿啼。

遙同淸香山之姬島

西風解纜去江城。一片湖聲兼櫓聲。海上烟波蜃氣動。洲前斜日客心驚。霜飛兩岸紅楓冷。雲散千峰落月淸。處處山川耐乘興。東征不是爲蓴羹。以上十首

思人

杯酒思君獨倚樓。孤鴻聲斷使人愁。遠遊縱有江山勝。不及鄕園明月秋。

訪僧不値

孤笻偶至虎溪東。秋滿禪林木葉紅。金錫不知何處去。柴門空鎖夕陽中。

對月

明月亭亭照夜扉。捲簾迎月思依依。光臨水面魚龍動。影入林間烏鵲飛。病筆難裁希逸賦。桂花應滿嫦娥衣。西樓此夕何須睡。遮莫隣雞催曙暉。

答人

一片隋珠掌上寒。投來淸影滿闌干。先容非識如

明月。定是今宵按劍看。

秋夜迎僧賦

山野蒼茫雲不晴。袈裟今夕此相迎。風吹松樹琴音發。雨入楓林金氣清。蟲響微寒生四壁。詩成明月動連城。禪心縱厭塵氛色。豈背故人投轄情。

夢凶人

君向泉下去。吾在人間泣。泣淚已沾衣。蟲聲一何急。此夕芳魂入夢來。夢裡相逢悲喜催。曉來芳魂何處去。簾前殘月使人哀。

古行宮

自從玉輦西行蜀。金門不鎖莓苔綠。似有開元供奉人。猶唱霓裳羽衣曲。

西宮怨

西風如水透羅裳。欲奏雲和春恨長。日落金門銀鎖合。遙看鳳輦幸昭陽。

夜猿啼

明月峽頭秋月明。繫舟遙聽峽猿聲。三聲正是堪腸斷。況復清宵徹曉鳴。

逍遙軒

青山三十里。偶上古層樓。林暗獮猴嘯。草枯麋鹿遊。飄零空對月。搖落獨悲秋。此處無塵事。應憐野性幽。以上十首

寄藤正藏

一生襟袍向誰開。清夜思君獨上臺。明月遠兼江水湧。征鴻遙拂塞雲來。斗間光動豐城劍。籬外花香彭澤盃。借問西園舊賓客。幾人元是建安才。

聞雁有感

晚色蒼茫望不分。西風吹雨雨紛紛。孤鴻聲斷秋雲裡。不是愁人不可聞。

美喜墓

昨與親族親。今與麋鹿鄰。憑將愁裡淚。寄與泉下人。青山綠水長不改。白雲明月似昔時。嗚呼之子不可見。墓畔懷古淚如絲。

冬夜感懷

舉頭遙羨雲間月。屈指空思泉下人。永夜窗前眠不得。招魂吟罷獨傷神。

次西白師平等院之韻

古梵樓頭雙鳳凰。不知經歷幾星霜。逢人欲問當年事。唯有川流惹恨長。平等院閣上置雙鳳凰隨風搖動

寄人

舊遊如夢裡。良會復何時。歲月悠悠盡。風光冉冉移。煙籠踈竹暗。雪滿古松垂。獨座山樓上。靜吟春樹詩。

涼州詞

青海雲飛秋月明。月中回首洛陽城。胡笳遙起單于塞。羌笛長吹驃騎營。

長門怨

瑱樹淸風夢不成。水晶簾外夜雲輕。無情最是鳳樓月。一入長門宮裡淸。

春宮曲

一片東風微月開。淸香暗度殿前梅。平陽歌舞千餘騎。夜夜昭陽侍宴回。

雪夜

晴色逶迤入畵圖。淸風吹盡夜雲孤。滿天明月滿山雪。更使氷心在玉壺。以上十首

村行

素雪晴雲相映新。偶携多暇到溪濱。溪中流水猶含凍。溪上塞梅先報春。

寬保三癸亥年

癸亥元旦

鄰鷄垂曉報春來。初日新臨溪上臺。佳氣遙浮城北樹。淸香暗度簷前梅。千江湖水兼雲湧。萬里煙霞映日開。此日靑尊幸無恙。親朋同酌屠蘇盃。

江上春望寄賀子登二首

年華冉冉夢中流。幾向東風思舊遊。赤馬關遙斜日斂。金牛山遠暮雲浮。月光隱見波間璧。蜃氣動搖江上樓。春樹空遮登眺眼。歸鴻聲斷使人愁。

其二

娥眉之北水悠悠。藜杖憑高意轉幽。湖漲先浸鵬際日。煙開忽見海中樓。一行回雁銜蘆度。萬點遙山帶雪浮。自是江湖多逸興。應須乘月棹扁舟。

夢遊一精舍得一句因繼之

門前繋馬待斜暉。如帶浮烟繞翠微。林外雲晴迎嶺月。雪裡花開照柴扉。靜聞幽壑猿聲斷。轉覺上方塵事稀。素志平生在山水。一場春夢不相違。

春夜書懷

歸雁聲哀思不平。殘燈影冷夢難成。自驚雙淚春來切。誰識千憂吟裡生。月照梅花星始落。風吹松樹雪新晴。蒼然景物無人見。轉動山陽聽笛情。

春夜偶雪

千巖積雪逈玲瓏。晴色無邊眺望通。高閣夜間聞遠笛。春天雪盡見歸鴻。五更星月踈簾外。百里山川明鏡中。枕上片時攀桂夢。曉來猶遶廣寒宮。

迎𣍐政後賦

風起春天夕日曛。野梅花落此迎君。相逢故有詩人贈。請見門前出岫雲。

與島義見賦

柴門春色自蓬蒿。靑眼相逢興轉豪。取醉莫辭金谷酒。天將煙景假吾曹。

陪諸君遊花王園得家字

春盡江城踏落花。城頭霞起日將斜。欲隨佳客問奇字。載酒屢過楊子家。以上十首

賓至

雨後輕風花未殘。花間相値罄淸歡。詩成筆下雲烟動。歌就曲中春雪寒。欝欝長松低蹊路。蕭蕭脩竹拂闌干。携來掌上明珠色。半夜高懸旗樹端。

早起

溪邊整履步。滿目曙光淸。雲際絳河沒。林端殘月明。桃花含露重。柳葉帶風輕。幽賞一何極。忽然詩思生。

送綾伊承之東武 明月歌

江上遙山明月出。月下遙聞櫂歌聲。櫂歌一曲唱未了。一面湖水與月生。月明湖平堪解纜。白浪明月雪漠漠。江上松林烏鵲飛。江中金波魚龍躍。桂香暗度千萬里。淸影遙照十五城。風流還添南樓興。詩賦忽動西園情。征帆明日向東去。江上明月好誰見。刀環不知又何年。月不把手淚如霰。重聞櫂歌聲再起。斜月沈沈曙色開。行矣別離何足惜。

看君他日晝錦回。

藤田翁宅與子登同賦

曾遊遠客偶相尋。赤馬關東八面陰。微雨三更聞擊柝。雄風萬里賦披襟。轉添王粲登樓興。不淺陳遵投轄心。何用孤琴奏流水。座中元是舊知音。

同諸子遊富永子江亭

高樓相値思何窮。擊筑酣歌慷慨中。城上松聲兼浪起。江頭樹色和烟空。紘飛郢國千年雪。賦就蘭臺萬里風。莫怪詩篇多麗句。滿堂賓客盡豪雄。

天中寺 在中津城西謂山金牛山

金牛山上樹蒼蒼。樹杪躋攀古梵宮。落日回首舊城郭。暮雲流水畫圖中。

金華山 在金牛山西一千名鈴熊

金華山上靄斜暉。小路崔嵬入翠微。芳樹花搖鳥去靜。幽蹊草暗人來稀。板橋烟斷晴虹動。水郭雲生素練飛。自是望中多逸興。晚鴉聲裡轉忘歸。板水改長遠

留別賀子登

江樓相値感流年。蹤跡回頭轉耐憐。座惜尊前月將落。壯心明日又風烟。

秋閨曲

邊雲殺氣隔漁陽。白草青天塞路長。夢覺空閨風似水。紗窗明月照流黃。

偶成

松竹陰陰蹊路斜。衡門半鎖度飛鴉。南窗酒覺淸風起。不讓紫桑處士家。以上十首

客中値雨 次小串君匀

綠鬢他鄉客。斑衣故國情。雁飛書不到。燈盡夢難成。江海烟波暗。關山夜月明。曉來風雨至。寂寞旅魂驚。

訪僧

綠水青山入畫圖。給孤園外野烟孤。夜深明月懸松杪。知是高僧衣裡珠。

對月

一行賓雁入雲沒。數聲秋砧隨風發。高梧露滴夜將闌。獨捲疎簾對明月。

寄藤田翁兼懷孟昭元龍二子
自從江城一分手。汀洲烟樹空回首。子雲元是奇字工。秋來幾人能載酒。
同
白雲明月正逢秋。銀燭青樽憶舊遊。一日故人投轄處。不知誰共倚江樓。
同
汀洲烟樹杳重重。西望空看落日春。碧海連天秋色遠。雲間畫出小芙蓉。
同
九月風霜秋欲殘。征鴻飛盡白雲寒。關門不鎖相思夢。清夜還過十八灘。
訪隱者
白屋蕭然生事空。自憐明月與清風。雲埋谷口人遊少。一路青山旗樹中。
十月十三日夜夢美喜
歲月荏苒盡。愁思寂寞生。不堪吟斷回頭望。萬里銀河月影清。雪晴遙天孤雁高。風起翠壁片雲小。

屈指舊歡逐東流。臥聞逝水思渺渺。孤魂分明入夢來。相見唯有涕淚催。曙鐘聲裡看不見。凄風殘月送餘哀。
夢金子詩並序
去年九月。逢金生于桂川。未幾歸鄉。生也。垂鈞於滄海之濱。予也見雲於青山之廬。道路邈爾。不常相見也。今秋雖再至桂川。有故而不能留焉。予爰九月十七夜。散步弄月。向五更而就睡。夢生來揖予而語。語及六國七雄諸史百家。曰如洪河。雄辨動人。予亦喜而酌酒賦詩。須臾生辭去。欲曳衣留。則忽焉覺矣。殘燈幢幢。斜月沈沈。蟋蟀響於階。熠燿飛於軒。雞聲向曉。四無人聲。忽惆悵而龍鐘。爲賦一詩曰
離居五十里。迢遞西南峰。隔岸雲藏月。對門藤繞松。心隨寒雁去。恨與夜烟重。猶憐片時夢。相見又從容。以上十首
共詩百首

獨嘯集畢

附錄

辛酉年夢得此句　題雲
一向成都縣裡動。又連白帝城邊浮。
壬戌年夢得此句　題塞下曲
颪連西極起。蕭瑟五原秋。
壬戌之十二月得此句
今年今夜裡。明日又逢春。
癸亥年夢得此句　遊兩子山作
門前繫馬待斜暉。
同年又得此句　謁德貞上人作
蔥蔥佳氣遶〇〇。四面青山雪未融。
癸亥之九月夢得僧寄我詩其內有此句。
故園黃葉也自落。一望萬里素秋來。
延享元甲子十一月夢得此句
芳草青青雪青青孤鶴層宵拂青青

春遊草

豐國東郡　三浦晋　安貞

春興　安永辛丑二月二十日

吟筇何得此中間。書出烟霞雨後山。寄語桃花風日暮。留春不謝待吾還。

答人　二月二十一日　時予在高田某侯辟晋　晋賦此以答介者

樵蹊不與世間通。高臥東山異謝公。占得烟霞吾已老。清風鶴唳白雲中。

訪上田翁　二月二十二日　追憶舊遊其到此地總是春時

御許山西羽客家。長留春色酌紫霞。塵容異此風光好。毎到唯添鬢上花。

宿別府子莊　二月二十四日　莊在三毛門

行行問樵子。遙指夕陽間。雲暮野烟合。林明宿鳥還。桃花臨澗水。松樹隱仙山。偶爾飮君酒。春紅復上顏。

望菩提峯雪　二月二十五日　菩提峯即求菩提山

探奇未到古仙蹤。日出雲烟五色重。五色雲間隔花見。春天雪捧玉芙蓉。

柳浦感懷　二月二十七日　柳浦在小倉藩之東海邊

海山今古鬱葱葱。殘雨斜陽感慨中。一旦廟謨達鳳闕。九重帝坐鎖龍宮。從茲寰宇歸垂拱。終使藩籬轉競雄。唯爲由來周鼎重。猶懸日月仰蒼穹。

述志　並序　二月二十八日

晋常謂子弟曰。我有護身之符。要爾曹佩之。書之曰分。蓋人之各不能護其身者。以皆不安其分也。君焉而務于君之分。臣焉而務于臣之分。父焉而務于父之分。子焉而務于子之分。則天下欲不皡皡熙熙。而豈得焉矣哉。唯夫不知其分焉。處癸望壬。得辛求庚。自下剝上之念。弗忘于衷。蹻禍機從之。烝烝下民。天賦之。以甲以乙以丙。以丁。而天之所賦。乃已所守之分也。已所守之分。乃已可務之地也。若悖驁弗之守。則爲不君焉。爲不臣焉。爲不父焉。爲不子焉。是以人宜愼守天賦之。豈可寓意於進

取哉。然則果不可進取乎。於乾之九二有之曰。見龍在田。利見大人。見龍者何。龍德而不能隱也。在田者何。有濟世之用於己也。而後待大人之應而動焉。如是而已。夫好安逸。惡勞苦。戮役於人。樂奉於人。則人情之常。而利害之趨避也。利而趨之。害而避之。苟知所採擇。於道何戾。唯徇情不返。顛倒其思。觀造物之露跡。一隻見。一隻從。吉凶得失。善惡榮辱。無往不然焉。故高粱腐腸。粉黛蹙命。登高而後墜。縱意而後悔。如甘餐腐腸之餌。以耽眠蹙命之鬼。苦觀之相距。復幾。故奉於人者其長也。役於人者其民也。於是爲其長者役於常索蓊與牧。以保我豢我焉。爲其民者。出粟米。彊徭役。以奉之安之焉。故下焉者。雖無宮闕輿馬粉黛肥甘之奉。而施政之人。爲之設衞護。輔政之人。爲之警災眚。於是乎我施施然而起。于于然而息。我勞于彼之所逸。而逸于彼之所勞。苟無義以裁之。吾弗知其所趨避矣。予嘗有題諸葛武侯圖詩曰。誤爲先生窺龍氣。不得天間不起雲。大丈夫之進世。唯有此一擧焉。尊於天下者。有爵焉。有德焉。故以其貴於己者與富於己者。則王公不能以奪于我。亦不能以尙于我。苟舍夫天賜以趦趄囁嚅于人。則豈不怍彼蒼蒼焉哉。三十餘年之前。諸侯有辟晋者。謝曰。朝汲孖溪之水。夕臥孖山之雲。於我乎足。是行也。次桂水之夕。有人携書來曰。某侯欲普之解褐。嗚呼我猶少壯也。尙知才不足執人之役。守天之所賦。況乎犬馬之齒。六十纔少一。日薄崦嵫。菟裘之外復何營。是以鶴唳之作以答之。既又有人語某藩一大夫有繾綣之意於晋。因述所思。以示所守云。

擲金附大鑪。不問復如何。輕裘緩帶春風中。昇平
久浴堯恩波。人間三島滿架書。階前豐草懶不除。

縣吏爲我取直廉。爲我晏眠護我廬。君不見富春山中遁榮者。羊裘閒釣大澤魚。釣臺幸有伸足地。焉截人禍上人車。

自豐望長門盡是往時戰爭之地 二月晦在小倉藩作

割據長餘山海險。百年戰馬屬黃粱。扁舟繫在桃花岓。留取烟霞與釣郞。

經松江（ショウエ） 三月三日

鱸魚未上釣。松江綠春水。我爲故山花。不待秋風起。

中津訪賀子登 三月四日

江山無恙昔遊家。相逢東風醉紫霞。四十年前人孰問。雙垂白髮對鶯花。

彩雲亭待星居道人 三月五日子登姓賀來名元龍號玉淵又稱九九子彩雲則其亭名在津城豐後街星居山人者釋智明之號蠻徒居正行寺寺在城之東南

烟花三月滯津藩。病懶不登甘露門。遙識袈裟未起定。闌干獨領別乾坤。

衝雨到唯泉寺 三月七日唯專寺在正行寺中

啼鳥飛花日漸沈。還將風雨到珠林。昏鐘如不引迷路。猶在雲烟深處尋。

訪星居道人不値 同

方外人間携手難。開門重到鎖春寒。狻猊焚斷爐烟暮。留與江山停客看。

値風雨宿唯專寺門教師以維摩見戲 三月八日

無如驟雨暴雨風何。走入山門脫綠蓑。奪得暫占方丈室。傍觀咲殺老維摩。

辛丑春三月邂逅渡邊君于津城倉文學之宅。君拍掌曰。我五日前夢見子於一古刹中。賦得五律以乞子雌黃。今而得相見。我作詩以實其事。子是正以實其事。蓋其賜可謝。其責不任。爲和其作。 三月九日

因探奇絕境。得遇海城濱。爲道勞君夢。還能接我神。風烟重隔地。鴻鯉定爲隣。懷璧由來美。何須彫琢人。

留別鈴子文 三月十日

想吾老矣恐峻嶒。琴酒斯樓何日登。別後相思向

東望。峨嵋餘出白雲層。（峨嵋在我國東郭）

倉文學植松（三月十日。姓倉或名巠字善卿。教授于津藩。人稱龍渚先生）

龍渚先生此繫匏。一生志業爲書抛。問奇人散過春雨。手自栽松待鶴巢。

無暗（クラナシ）渚（ハマ）春曉（三月十一日。無暗渚世謂倉無濱。倉無無暗和訓相通。濱猶彼日無渚。渚在中津城之東北。有豐日別神廟。所祭則天照太神也。父老相傳。神功皇后北伐之時。龍出神廟而飛。龍燈今猶以風雨之夜來懸松上。故土俗呼曰龍王濱云）

神昔驅龍起風雨。龍將風雨送王舟。王舟東返龍亦蟄。龍火猶將風雨浮。花映城樓天欲曙。月含烟樹水如秋。東方未上扶桑日。五色雲蒸大八洲。

孤松嶼（三月十二日。孤松嶼常呼曰一本松。島在龍王渚之東。此松相傳曰養老年間物。嶼有應神原廟。標曰澳八幡宮）

枀亹千尋臨海孤。應神原廟鎖城隅。蒼龍直捲雲烟上。初日晴懸頷下珠。

龍王渚　同

造物爲吾開畫圖。龍王洲渚海城隅。波漂落日樹如泛。烟沒歸鴻山欲無。紫氣相重埋赤馬。白雲不斷接蜚狐。仙簫誰待月明弄。風暮松間有鳳呼。（赤馬常日赤間。間馬和讀相通。古昔罷關之地。乃在長門。彥山任豐前彥。此指曰日子。日子與蜚狐和讀相通）

歸輿　三月十三日

江上蘼蕪春欲空。飛花關意夜來風。家山辜負懷鄉望。鎖在蒼烟紫靄中。

過串春鄉　三月十五日　春卿是春長次子

水聲山色故人家。燕子將雛飛日斜。惆悵狂風驅驟雨。曉來吹折一枝花。

歸家　同

春遊誤歸久。此日伴棲鴉。洗耳水雖濁。采薇途不賒。花香携我袖。畫意落誰家。幾暮少兒女。立門望阿爺。

歸家題桃花

牆東碧桃樹。朵朵傍書窗。不負歸來約。留花映酒缸。

思西遊久矣。是春以二月二十日上途。踰桃樹嶺。沿桂水而下。詣菟狹。往留小倉。以與蘭山禪師舊相識。往來靜泰院。留此七日。上巳前一日。發小倉。三日至中津。與倉龍渚賀玉

淵。遊十日。以三月望還家。往返二十有六日。其間串春卿失掌珠。島蘭皐溘焉逝矣。松良平從我遊者。亦與其母氏相繼而沒。長州僧禪佐。自去秋來。就塾讀書。忽動桑梓之念。曰。不二旬將還來。與其侶到府之靈龜堂。靈龜堂主人佐藤定八。因其子卯作在塾俱讀書。染痾不起。卒上鬼錄。庭園春猶在。人事如棊。愴然淚下。爲各作其哀歌。以向靈之來聽。

哭島蘭皐

聞君昨日赴冥期。傳信猶疑或誤辭。胡蝶夢隨風雨盡。杜鵑聲入海天悲。何乘孤鶴探仙洞。定在靑山摘紫芝。永訣回頭春再過。城西花月把盃時。去春予飲翁之城西小亭雨來不見是爲永訣

哭松良平

與君相別未多時。春色歸來總是悲。雨濺山櫻隨澗水。狂風又傍李花吹。

哭僧禪佐

不厭山烟海樹重。還鄉將拜兩慈容。需衣未道多時別。金骨何圖此處封。澧水唯留新小碣。瀛城空隔舊雙峰。無爲又向人間路。吹夢淸風送曙鐘。佐長州洞春寺之徒寺在萩城中瀛城和讀相通

梅園詩集序

六十已邁。古稀少六。顧念往事。茫如夢寐。征途荏苒。舊歡孰收。蓋上自所怙恃。至其遊戲盃酒。吟嘯風月。今也其人。或歸烏有或邈隔山川。繾綣之間。取舊作。風咏之。其可喜不哀。其人其地。風景情懷。百之事故依稀皆在心目焉。斯固於人爲長物。而於我則感興之繇。故題下注支干者。思想有繫也。昔者陶靖節之文章。皆題年日或夫其意同於我乎。

天明丙午仲春　二子山人　三浦晉　識

乾隆五十二年歲次丁未仲夏吳超程赤城

書於崎館之積翠樓

梅園詩集卷之上

豐國東郡　三浦晉　安鼎　著

垂釣　延亨甲子

垂釣清溪曲、溪上人語稀、菰蒲隨意暗、鷗鷺近人飛、遊魚聚還散、終日坐石磯、

擬古贈賀子登

芳樹發奇花、清夜馨香新、攀此將遺誰、西方有美人、美人不可見、淚下霑衣巾、此物何足貴、但願長相親、

宿山家

初日照疎簾、宿雲出幽谷、昨夜風雨聲、知是牕前竹、

九日

夜來微雨裛閒庭、風帶秋雲曙色暝、此日登高客何處、邯鄲江上亂山青、

酬利子東武見寄　乙丑

大江潮湧雪光清、雙鯉迢迢憶侶情、幕府樓臺連

海起、諸侯邸第接雲平、歸鴻春度三千里、明月夜懸十五城、縱有煙霞催遠興、離羣焉得不沾纓、

秋懷代客賦

西風吹木末、復使壯心傷、身作扁舟子、年年在異鄉、夜聲窗外雨、秋色鬢邊霜、唯有還家夢、不辭江海長、

長埼贈大潮禪師時余歸期已逼

掌上美珠照衲衣、江山攜處有光輝、先容已識如明月、步至龍淵空手歸、

塞下曲

將軍鐵騎去平戎、自許麒麟第一功、戍卒長城長不返、葡萄移在上林中、

宰府廟

廟前池水鏡光平、虹落畫橋斜影清、白日空階松自老、凄風金殿月初明、當時不辨浮雲色、終古徒含魏闕情、遠客再催懷舊淚、觀音寺裡暮鐘聲、

早發熊本向八代

高麗門西天欲曉、擊柝聲中行人少、行行猶未說刀環、回首雲外羨飛鳥、

暮歸　丙寅

疎鐘聲裡散羣鴉、行出前村落日斜、一路青山微雨外、閒雲歸處是吾家、

楊柳枝詞

錦纜牙檣去不歸、隋隄依舊綠依依、楊花似記當年事、猶向行宮在處飛、

姬人怨服散

學得神仙不死方、朝來玉盌露凝香、丹砂漸近成金日、早已秋風入洞房、

夜夜吹簫欲駕鸞、仙宮十二玉闌干、從來天上春應好、不似人間月影寒、

古意

一輪高秋月、夜夜臨古堞、使妾長思君、不使君思妾、

妾薄命

落日照綺窗、當窗織流黃、心悲章難成、停梭所思長、憶昔賤妾初嫁年、爲妾畫眉自嬋娟、菱花臺前

春寂寂、桃李花飛無人憐、珠丸出彈冶遊園、蕭郎尋春入誰門、始信人情隨時變、比目鴛鴦已食言、金釵棄擲色漸暗、日移花影使人感、梁上雙燕空自語、機中孤鸞向誰覽、依依楊柳隔紅樓、交枝連陰綠欲浮、中有病葉似妾身、風前飄零不待秋、

古意

故故雙飛燕、含泥落玉闌、闌前春寂寞、應笑繡孤鸞、

寄人

雁盡書難寄、花飛倒玉缸、春夢結不得、曉月入斜窗、

隴頭吟

隴頭之水嗚咽流、隴上之月臨關愁、去時征人三十萬、駐馬低頭齊咿嚘、單于遁逃不臨磧、將軍且勒燕然石、凱歌還經隴頭路、隴水潺湲隴月白、

海石榴一種名楊貴妃戲題

胡虜煙塵夜暗關、上皇相伴下驪山、香魂已向蓬萊去、一枝春色落人間、

懷谷石翁

分手風煙年幾移、曾遊屈指轉堪悲、扁舟乘月尋禪窟、匹馬攜壺向習池、夜雨偏知勞遠夢、江山況復隔相思、歸鴻望斷蒼茫外、不識何邊寄一辭、

古意

琵琶絃斷夜、還思畫眉年、不忍强含態、爲君要可憐、

出塞

胡塵猶未靜、麟閣豈論功、都護雄龍劍、將軍碧玉驄、牙旗含落月、畫角起秋風、何勒燕然石、鐃歌入漢宮、

隣人贈梨

筠籠相贈暗香輕、顆顆明珠含露淸、還笑當年病司馬、文園日日望金莖、

經古墓 寛延戊辰

紅顏鏡裏幾回新、古墓蕭條野草春、停策斜陽漸無影、百年長夢馬蹄塵、

七夕怨

十二樓臺彩雲中、長安七月起秋風、砧聲欲動半輪月、漏移斗轉漸朧朧、牛女夜過烏鵲渡、乞巧奠前多白露、誰家少婦能學琴、從來何解絲中苦、暫彈秋風塞上曲、曲聲宛轉斷復續、龍庭北望雲接山、兩地夢魂兩躑躅、人間歡樂能幾時、不似天上有佳期、十五嫁君牀未暖、君重邊功與妾辭、金徽彈盡月欲低、萬年枝上鴉雙棲、仰視銀河萬里色、永夜空伴嫦娥啼、

題扇

紈扇如明月、黃花栽此中、清香無覓處、素影與微風、

送僧

多病天涯客、白雲歸興長、安禪千里月、淸梵五更香、挑燭龍蟠鉢、裁詩玉滿囊、江山授衣日、前路愼風霜、

蕭寺雪

空王樓閣枕江開、積雪玲瓏古法臺、淸梵罷時淅瀝度、長風起處婆娑回、天花暗滿珠林發、夜月還窺繡帳來、玉漏上方聲自斷、碧鷄下界曉相催、

和矢澤子送平井君之江都

護江寒色挂帆分、客路三千又送君、天外芙蓉含白雪、暮中樓閣擁青雲、

雪中遊二子寺

鬱鬱松林細路開、雪中斜出雨花臺、春歸階樹梅先發、雲鎖仙家鶴始回、檻外明珠風拂落、堂前冷蕊鳥銜來、遠公精舍淸如水、不覺匡廬暮景催、

宮詞　己巳

深院春將盡、餘香散舞衣、落花若無意、更近玉階飛、

悼慈藏院大圓慧團禪師

卓錫青山三十年、袈裟謝世素秋天、龍飛雲霧空留鉢、珠擲江湖不起烟、仙梵遺聲聞落葉、孤墳新築對晴川、長松亂竹雙峰路、日暮蕭條滿樹蟬、

中秋坐雨

烏鵲橋邊秋色多、浮雲空自隔嫦娥、淒風一夜池亭雨、細聽微微灑敗荷、

上二子山

路入仙宮十二重、片雲流水自相從、淸風日暮聞孤鶴、知是蓬萊第幾峰、

赤馬關 庚午

海潮如雪遶靑山、王氣一朝終此間、鳳輦不歸春幾暮、烟霞依舊古文闕、

短棹春風古帝州、靑螺月出滿珠浮、赤間關下孤舟客、繫得鄕愁不遣流、關下卽海、當東有滿珠乾珠之二島、神功皇后之遺跡云、

柳拂紅樓霞彩輕、銀箏誰爲漫含情、行人不解相思曲、錯作春風離別聲、

贐得遣妓

閒中鶴一隻、三載獨相攜、一夜東風起、向他珠樹棲、

水島夜泊

繫舟江岸待西風、雪浪春驕海若宮、雨遶篷牕燈欲滅、關山移在夢魂中、

客夜

殘燭微微漏自長、夢魂何夜不還鄕、疎鐘曉度天涯雨、認得愁聲滴客堂、

遊嚴島

他時想像蓬萊島、脚踏仙蹤思盡遠、松樹幽聞傳廣樂、山花細見繡春衣、霞生高閣蜃新動、雲遶長橋龍欲飛、塵蹟自憐難再到、斷烟斜雨立殘暉、

須磨懷古

蕭索雄圖慘淡雲、誰將蘋藻吊江濆、帝都冠蓋趨千里、鳳輦風塵傍六軍、松老影疎廷尉坐、岸崩沙沒大夫墳、世間無復魯陽手、不引殘暉回紫氛、

明妃曲

强掃蛾眉辭漢家、空垂環佩向龍沙、哀音新動胡兒淚、一夜關千落琵琶、

奉哭伯章先生

蕭條蘺露入秋聲、過雨空原日已傾、扶病嘗陪看夜月、招魂何計哭墳塋、黃花彭澤悲陶令、遺草文園憶馬卿、囊裡聚螢牕外雪、無緣書劍見先生、

采蓮曲

露滴明珠墜粉紅、淸香日暮滿湖中、低歌一曲沙

棠棹、別有芙蓉不耐風、

美人

美人年幾春三五、素手銀針引金縷、珠簾風暖百花香、凭闌自繡雙鸚鵡、

擣衣

擣衣秋欲暮、霜露入荒園、更製新衣愛、將酬聖主恩、風悲不成夢、月苦一銷魂、離思空中響、難持寄塞垣、

塞下曲

行樂十年丹鳳城、琵琶自覺可憐情、秋風一夜龍沙月、變作三軍揮淚聲、

怨詞

秋聲金井桐、風起冷銀燭、挑燭拂琵琶、絃斷不成曲、君自有他心、誰見一片玉、君意若可回、此絃何難續、

送綾惟勤之江都　寶曆辛未

一曲悲歌日欲低、河梁分手各東西、渚淸鷗鷺隨孤棹、山遠烟霞埋馬蹄、峽樹哀猿聲裡轉、鄕園胡蝶夢中迷、高樓題賦堪催感、黃橘思親不得攜、千里後期空惜別、十年前路更含啼、天晴仙嶽餘春雪、月落函關聽曙鷄、驛使歸時花片片、王孫到處草萋萋、江都元是風雲地、莫使雄心易慘悽、

春日偶成

經濟非吾事、詩書伴臥遊、酒醒風滿檻、曲罷月臨樓、山任歸雲擁、花隨春水流、堯天多雨露、好此飲黃牛、

莫愁歌

盧家少婦年十四、淸容不假紅粉媚、蛾眉宛轉當牕織、嬌態含得無限思、仙術玉佩起輕風、鬱金蘇合香薰籠、白玉闌前春不老、海燕雙雙棲此中、

宮詞

一自仙桃種漢宮、可憐春色鎖宮中、落盡殘紅不結子、瑤階白露起秋風、

過慈藏院有感

處處紛紛飛落花、重來舊院憶袈裟、諸天仙梵餘啼鳥、空界香煙駐晩霞、雙樹猶懸開士榻、靑山難

覓白牛車
遶階芳草春將暮　獨倚闌干感物華

贈矢長映

三山此去海茫茫　遠覓神仙不死方　瑤草靈芝摘多少　歸時大藥滿青囊

宮怨

金井梧桐葉未黃　秋風纔自入羅裳　行宮明月笙歌裏　不識銀壺漏始長

寄賀子登

佳人不可見　杳杳阻良音　明月臨階除　卷簾彈玉琴　此聲如可寄　塞外寫我心

關山曲

胡笳一曲客愁新　淅瀝關山傍虜塵　焉得臨風苦吹盡　軍中同是憶家人

客中秋興

蒹葭蒼蒼露爲霜　路半前程思已傷　長流離情雨如線　城上誰家夜擣練　暗和秋風雁啼雲　却作寒雨淚濕裙　可堪前路猿啼處　併與此聲月中聞

閨怨

紅粉自無衒容粧　十年辛苦憶遼陽　歸來唯有章臺月　依舊鴛鴦瓦上霜

首夏雨後寄小串君　壬申

餘香無覓處　遶舍樹陰陰　嶽霧歸雲細　簾明落日沈　酒同殘夢盡　草共故心深　添得終朝雨　泉聲入玉琴

送別

相對淒其已忘言　離情何處復銷魂　試將別曲與明月　十二峯前聽夜猿

詠盆中松

盆中松已老　宛若在林丘　假蓋凌霜覆　清操經雪幽　連山晝隱起　薄霧爐烟浮　未得天台路　先從孫綽遊　長條當戶牖　短葉倚簾鈎　人憶秦皇駕　鳳鳴簫史樓　隔牕含落日　拂檻枕飛流　暑入綠陰盡　暮歸疎影留　伏靈知有否　仙髓那難求　貪見千年色　能寬一日愁　雨殘猶颯颯　涼到始颸颸　雖不養孤鶴　焉敎棲獼猴　興來斟濁酒　坐久想滄洲　豈是世間趣　爲成醉裡謳　敲壺還自和　把琴好誰酬　高臥

待明月清風一樹秋、

夜坐憶人

鳴雁相思隔夜雲、微茫殘燭對紛紛、凄風不轉秋如水、分得愁聲雨處聞、

寒夜憶人

殘更斜月影沈沈、唯有相思與歲深、豈使幽人得無與、夜來風雪滿山陰、

寄中津藤文學

神祖舊封帶礪存、嗣君能聽治安論、江山漸合風雲氣、草樹行承雨露恩、

送阿公　癸酉

傾蓋有如故、相親已一年、前期悲日月、別路怨風煙、苔上懸花榻、鳥啼講法筵、去來君不管、或恐滯天邊、

寄阿上人

不禁離恨在袈裟、胡蝶夢中逐落花、想得邯鄲江上路、法輪春轉白牛車、

夏日阿上人過

行見曾遊夢裏移、袈裟相對不堪悲、休吟明月秋期近、正是與君離別時、

山寺

鬱鬱阿蘭若、松聲灑暮川、枯藤深日月、碧瓦積雲烟、鳥道斜陽外、孤峯殘雨邊、將隨林下鶴、此處學神僊、

夏夜預贈別人

近來偶有數篇成、總是與君傷別情、預恐相思不堪詠、凄風落木起秋聲、

中秋憶阿公詩　并序

去歲此夕、與師坐西樓之雨、語聚散之無定、感節序之行移、予亦有客山良夜擁青燈、薄霧蒼烟知幾層、借問登樓望明月、何如開坐對高僧、三五夜中風雨秋、袈裟相伴倚西樓、明年此夕今將到、何處西樓說昔遊、等之詩、今宵對月憶昨之歡娛、忽如夢中、然而師亦南去、惜然秋懷、實有難摹寫者、聊作小律、以奉酬、

浮盃蹤跡海雲層、明月勾欄獨曲肱、記否去年今

夕雨西樓一夜擁青燈、

共惜流年無奈何、別來明月復臨河、西樓風雨人如夢、不耐清光愁處多、

月夜

落葉紛紛秋可憐、林端明月對人圓、夜清難作人間夢、白露淒風玉樹前、

憶阿上人

我心常在邯鄲水、君意何忘二子峯、明月同懸風雪夢、相思夜夜不相逢、

風月菴 甲戌

垂蘿幽洞少人攀、趺坐相承春草閒、風靜楞嚴留几上、花深如意挂巖間、雲餘鶴嶽青天雪、烟抱海門殘雨山、何事塵容入仙境、復辭仙境向塵寰、

夜雨

千里長江千里情、峽中何處滯歸程、輕舟此夕將風雨、聽到哀猿第幾聲、

哭阿上人三首

與師相見纔三年、蹤跡此中多隔天、風雨樓頭秋剪燭、藤蘿象外夜論玄、飛花相伴迷胡蝶、落月猶懸哭杜鵑、江上計音疑是夢、幾回舒卷意茫然、

茫茫往事思難禁、指數曾遊淚濕襟、日淺空山傾蓋影、江深流水奏琴心、長途已作呑聲別、終夜還勞入夢尋、鉢裏丹砂起龍處、滿天雲霧泣黃金、

無窮心事共誰論、追感如絲引淚痕、笑語依稀猶在耳、形容恍忽暗銷魂、牕前松竹空留跡、洞口烟霞深閉門、代謝人間春不住、落花啼鳥月黃昏、

感懷

稚竹新陰深古砌、老松殘雨滴空庭、憑闌不見同遊客、數點遙山入眼青、

夏夜

千尺長松風滿樓、閒雲不繫思悠悠、池清晚洗人間熱、月出早空天上秋、

歲暮感懷

雪後青山倚檻時、曾遊風物入相思、江南歲暮無消息、腸斷寒梅一樹枝、

雨中感懷 乙亥

風雨兼花鳥、依稀入舊遊、似知愁所在、最是傍西樓、

花遲

春光惱人得、猶自遠芳菲、又恐開花日、早隨風雨飛、

期見花於袂間不果

青山端靄曉陰陰、天上名花玉作林、鶴度時聞空外信、蝶飛偏動夢中心、淸香素影月應好、餘雪薄寒雲定深、元自仙家厭蹤跡、春風一夜若爲尋、

送利行君之東武

明月輕帆挂海門、秋光何處不君思、未諳關左三千路、恐使烟波迷夢魂、

哭綾惟勤

敢辭客路入雲長、男子生來元四方、琴酒十年都是夢、江山何處不堪傷、月明鴻雁書中淚、秋冷鶺鴒原上霜、其見先沒于武欲向天南懸劍去、蘸風吹雨海茫茫、

患眼　丙子

百八淸鐘度化城、病牀欹枕待天明、風香窗外知梅發、雨濕階前覺草生、眼擁浮雲書久廢、鬢留臘雪意新驚、一雙春靜登山屐、辜負煙霞萬里情、

偶成

我家富貴檻前山、一炷淸香春晝閒、猶未分明放風景、淡雲殘雨渺茫間、

十六夜

粉黛青天終不還、月中焉得忘人間、白玉鏡中夜來瘦、可知秋思在仙寰、

寄藤蓮平

數字慇懃寄塞鴻、海雲郊樹感何窮、更分殘夜相思夢、同在淸風素月中、

步雪

迢迢獨伴晩鴉還、人在斜陽欲落間、詩若不成爭得去、殘雲晴雪畫圖山、

遊龍雲寺

數步早知出世氛、松蘿深處氣氤氳、霜降下界寒砧動、風落上方淸梵分、鳥宿空林定中月、龍歸幽

洞雨餘雲、明朝縱向人間去、定自爐香滿袖薰、

酬川子眞自作州見寄

地隔東西渺海烟、通家兄弟見無緣、凄風葉墜啼猿樹、片月書傳旅雁天、握裏明珠須自惜、曲中流水有人憐、桑弧應報斷機愛、躍馬期君書錦年、

聽曉角

萬里平沙月落時、一聲胡角海風悲、夢魂欲度關山路、何事龍庭末曉吹、

偶成

高山一曲水雲冷、餘韻寥寥入杳冥、若使人間傳此調、異時誰作子期聽、

寄賀子登 子登時失偶

短鬢淸霜愁緒邊、夜來何處逐神仙、梅花消息羅浮夢、雪悟悲風落月前、

對雨懷賀子登 丁丑

此去仙山海若煙、佳期杳杳鶴歸年、知君愁緒多何處、無限飛花風雨天、

上二子山

俯見下方青一氣、諸山不與此山羣、啼猿聲自藤蘿落、飛鳥道從鐘磬分、海接長天涵白日、峯含宿雨出浮雲、興來探得龕藏處、折取殘虹釣紫氛、

島蘭皐見和疊二子山韻再次韻

得縱千里登臨目、脚踊風煙思不羣、北海波濤兼雪湧、西藩帶礪入圖分、樓頭鯨吼中天雨、洞口龍歸五色雲、直取孖峯作三島、何須服食出塵氛、

寄衣曲

金井梧桐動秋聲、白玉牕中孤魂驚、沙塞萬里將寄衣、銀燭影前無限情、防秋更逐明月滿、此情此夕無人伴、織時妾心與縷亂、裁時妾腸共錦斷、縫去縫來雙淚垂、淚痕爲寄長相思、十年轉戰未言還、閨中明月容如環、妾身不似函中錦、逐郎直出玉門關、

石垣原

山園舊國鬱岧嶢、遺鏃空原鐵半銷、鬼哭夜隨風雨起、寃魂秋入海濤驕、分爭覇略指揮失、割據雄圖形勢遙、烈士墳前停杖立、歲寒松老草蕭蕭、

秋盡

滿樹悲風葉欲殘、夜來吹雨過前灘、壯心未化寒灰去、不耐流年頻易闌、

卞和

石裡清光天下珍、誰知十二照車輪、如何不待連城價、空示尋常琢玉人、

步月

碧霧如江渺欲流、連峯還與月同浮、吾生有此雲山好、不換人間萬戸侯、

塞下曲

邊警蕭條開鐵衣、平沙望盡斷雲飛、可憐白羽腰間箭、空向陰山射虎歸、

折楊柳得風字

邊警無由向漢宮、鼓鼙漸老舊青驄、笛中楊柳別時怨、吹入沙場日暮風、

分題宴邊將

銀燭金尊映夜光、腰間橫劍説漁陽、青驄七十有餘戰、兩鬢唯懸胡地霜、

春思

織錦無成日下紗、歸飛啞啞欲棲鴉、白玉窗中夜難挪闌干月上海棠花、

中秋無月得間字

驚風飛雨度青山、空負琴尊詠月還、天上桂枝秋不許、風前折取向人間、

送諦幻師東遊　己卯

碧海與天闊、浮盃坐此中、珠明潮浴月、雨晴岸生虹、鼇背三山路、鶴邊千里風、仙遊攀不得、相逐夢魂東、

諸葛孔明

梁甫吟成還自閑、中原金鼓亂紛紛、誤爲先主窺龍氣、不得天間不起雲、

己卯歳暮

此歎不識幾時保、坐見衰容意欲狂、伏祈南山不騫壽、漫思東海長生方、行看前路年華促、惜貪往程日月長、一氣春回殘臘色、江山又是好風光、

除服拜先人墓　辛巳

一路空原春草中、孤墳三尺是吾翁、音容恍惚人如在、日月逍遙水自東、遠嶺殘陽沈宿霧、暮天驟雨入悲風、祇今無復晨昏事、獨掃飛花滿地紅、

市丸叟隱居

青螺碧水一茅廬、鶴髮老翁滿架書、自是神仙人不識、時時來往此中居、

思三圭

往事雲容散、前期川自流、蒼茫千里望、暮色黯林丘、洞靜山如昨、風驚雨似秋、晨昏今不識、骨朽海西頭、

感妹

膝上當年有六子、六子一半早逝矣、造物更覺巧苦人、悲歎只伴妹與姊、願著班衣向堂前、共介尊親樂餘年、一朝不顧翁亦去、紛紛雨雪哭蒼天、雨雪北堂春冷處、聊見二子慰心緒、翁尚在時爾有胎、胎孕十月生一女、從此悠悠成沈疾、年去年來無起日、謂美容忠具慶歡、采樂徒羨不死術、上有呻吟垂白老、下有匍匐求乳兒、暮猿夜鶴猶相慕、千死病中焉不思、忍慘爲寬滿坐悽、加餐欲止慈母啼、神瘁永夜對殘燭、夢苦幾朝待曙雞、先人小祥病裡度、荏苒日月風光暮、自感昊天罔極恩、肩輿扶拜先人墓、憶爾平生事雙親、婉容元自別有春、豈意與翁纔隔年、一堆墳塋正相隣、嬰兒不記所生母、漫望婦女笑擧手、人情此時誰是鐵、吊客相見皆背首、塵生殘機悲鴛鴦、雨灑空原泣鶺鴒、梁舊雙棲養雛燕、水冷孤飛照影螢、水魚三十有六載、細數前事恨如海、眼中遺容耳底聲、帷搖簾動似人在、爲祝繦緥幸無事、長壽行更收人涙、難那無術解母憂、堂上日夜增憔悴、

秋夜

寒砧徹夜動淸霜、獵獵西風入白楊、鬢與秋光催漸短、感隨曉漏覺新長、愁中甲子頻經眼、望裡山川常斷腸、何耐明朝以憔悴、滿籬還對菊花黃、

訪淸文圭不遇

偶入衡門不見君、松間靑靄鎖氛氳、蓬萊知在蒼茫裏、日射東方五色雲、

九日書感二首

風烟無處不悲哉、流到闌前水亦哀、聞說菊花能益壽、收啼爲酌北堂盃、

慘淡浮雲暗結愁、凄涼落日尙含樓、風光不是尋常暮、露冷東籬賞愛秋、

客有需應聲賦詩者乃成、題海上限韻、

日盡海天濶、烟波漸夕暉、吾機可未忘、鷗鷺遠舟飛、

飲馬長城窟行

北風捲沙塞、日沒烽烟晴、懸青海月、羽林年少誇射鵰、踏雪飲馬長城窟、

訪綾元亮

寒山一路獨相求、鷗鷺聰前碧水流、春到尋花可探洞、興來憶子似浮舟、松杉近隔蒼龍窟、雪月斜開白玉樓、吾輩元非濟川具、時時此處飮黃牛、

暮愁

落日松間沒、雨雪颯北風、雲山何限色、皆在暮愁中、

冬夜書感

短髮青燈夜色侵、風傳殘漏曉沈沈、歡娛已附東流水、難那邯鄲夢後心、

來浦鳥居銘

此祠此禱、維黍及稷、於神之道、衡正繩直、

歲除

大藥生前求不得、別來焉有返魂香、鶺鴒原上急風雪、鴻雁聲中暗夕陽、日月無歸啼白馬、歡娛如夢感黃粱、春光一夜好山水、青鏡明朝臘後霜、

當窗織壬午

當窗織停梭淚沾臆、翠眉鏡前爲君畫、紅粉房中爲君飾、明鏡猶照舊時心、洞房長留舊歡衾、誰知鴛鴦機上縷、續去續來思獨苦、邊庭音信久不傳、織成腸斷雙鸚鵡、

寄衣曲

將妾手中縷、作君身上衣、著時仔細見、涕淚灑鴛機、

訪僧不遇

世外乾坤白玉壺、清烟禁斷妙香爐、猶留荷葉雨餘露、遺我高僧衣裏珠、

寄溝秀實

高枕松間臥薜蘿、臥看涼月度天河、君家元近驪龍窟、滄海明珠夜若何、

夏日訪僧院

一蹊趺坐地、殊覺少林幽、稚竹當窗覆、火雲落水流、青山如有約、晩月欲相留、瀉下清香露、風荷先動秋、

別意

多情此日若為裁、一曲離歌別思哀、莫忘松間明月約、清陰不改待君來、

訪玉溪子病

身與孤雲流水隨、幽花閒草步遲遲、虎溪風物秋殊好、知是從前苦作詩、

秋日經三圭墓

天涯一自作仙遊、招得孤魂葬此丘、涕淚千行禁不得、墳前宿草野花秋、

獨酌

一張孤琴一尊酒、黃花綠竹好為友、富貴元自無人爭、水聲山色皆吾有、

清文圭宅

灑落主人意、庭陰松竹間、閑升滄海日、門擁畫圖山、鷺影青天外、漁歌碧霧間、方壺知遠近、雲路覺應攀、

冬夜憶矢雖愚

此生久不見、進步近何如、水聲烟擁裡、林影月來初、援琴彈別鶴、憶信煮雙魚、山陰雪雖好、應讀五車書、

桃 癸未

幽處桃臨岸、飛花風自吹、恐隨流水去、或有世人知、

送友人

狂風與霖雨、春光寂寞晩、離情不可言、落花流水遠、

題畫竹扇面

誰家窗下竹、畫入扇中來、擺月風間度、引秋影自開、

妾薄命

金鼓初來日、提劍走邊城、功名丈夫心、空負桃李情、桃李年年隨流水、胡月秦雲千萬里、鏡面纖塵久任埋、枕上秋風常慣起、夜添海水漏滴遲、滿庭秋草蟋蟀悲、死生天涯長離別、心頭唯認偕老詞、

搗衣

琪樹凄風動早涼、將軍猶自戰漁陽、九重城闕秋如水、萬里關河月似霜、何處錦機餘孔雀、誰家繡帳鎖鴛鴦、空房獨對殘更影、泣取寒衣搗夜長、

柿

後園玉樹屬秋闌、相贈明珠顆顆寒、元是人間甘露味、敢求海上紫金丹、曾從如錦林中摘、更向絳青籃裡看、王母仙桃不錄壽、可憐漢主永憑欄、

對月賦得嫦娥怨

靈丹竊得去乘風、環珮影寒孤月中、天上人間音信絕、可憐神女泣僊宮、

二子嶺遇風雨

晩色陰沈望不分、烟封下界雨紛紛、凌空忽御長風去、脚躡人寰數片雲、

溝乙橘生嫁安東氏之介姉、今春以病歸、經夏度秋不愈、一日訃聞、鴻雁失行、鶺鴒之情如何、聊有此寄、

歸省仙期不得留、淡粧忽伴白雲遊、江天月豁曉如鏡、忍對嫦娥孤影秋、

送與公錫至府限韻　明和甲申

風光惜別逐君還、南指煙霞畫裏山、流水離情無近遠、桃花相送到人間、

哭綾元亮

前郵昨夜風雨起、滿林桃李散隨水、春向人間自往來、人逐流水永逝矣、憶爾梅花素月清、送我等閒惜離情、不意重來猶餘春、北印草樹正吞聲、

宿彥山

投宿彥山舊化城、俯看下界白雲生、華鯨夜自龍宮出、風雨天間報曉鳴、

浮洞海

坐憐鷗鷺自相親、一曲棹歌山水新、兩岸飛花春欲盡、孤舟落日送歸人、

西歸路次訪賀子發、

刀環期預有、路上草草尋、不恨草草分手去、落花芳草春自深、

聞超師喪弟賦寄 師者鸞徒

似厭娑婆苦海間、病牀長揖出人寰、西方縱有蓮臺好、難柰春風花月閒、

客遊二子山

金仙遺蹟石爲室、欲雨彩雲隨龍出、中有蒼顏對圍碁、恐予青山移白日、

寄人遊二子寺

秦皇久望彩雲間、五百玉童長不還、試踏風烟見蒼海、應知縹緲隱仙山、

山亭長夏得藤字

負杖乘涼偶獨登、幽亭路入白雲層、求仙松上風如鳳、掬水山間泉似氷、雨過林園長稚竹、苔封澗戸鎖枯藤、此中元自無炎暑、靜倚闌干待月升、

寄宰府泰賀上人

憶遊蕭院惜年芳、秋暮天涯夢亦傷、赤馬關前邊雁斷、飛狐峯北海烟長、定中雲紫龍降鉢、吟裡露寒珠滿囊、獨拜遙山殘夜月、依稀猶見白毫光、

還宮怨

嬋娟一自鎖長門、粉黛何圖再奉恩、還到金階春欲盡、水流花謝又黃昏、

舊宮人

仙女宮中玉漏遲、淡粧雲鬢舊容姿、鳳簫祕譜都諳得、獨在嫦娥影裏吹、

曉粧二首 乙酉

禁城殘曉漏、長樂度疎鐘、正是花時節、階前雨露濃、試開青銅鏡、徐插玉盤龍、承寵難由命、含悽豈廢容、月明籠桂樹、池霽捧芙蓉、雲鬢凝幽靄、愁眉攢遠峯、自傷七寶殿、未挑御筵釭、

徐拂蛾眉猶未晉、鴛鴦繡帳所思深、空餘明鏡清如月、照得春容不照心、

長干行

水伴落花去、花隨春水流、人道長干樂、長干總春愁、

大洋歌送人之薩州

扶桑東南潤溟渤、波浪吞天勢咆勃、滾滾洪洪無際涯、朝洗日兮夕濯月、霧島雲捧神仙山、海氣虹動龍宮闕、珍寶此中元自有、蚌中明月秋好剖、天南偶逢思予人、爲乞明珠大如斗、

冬初宿川子眞亭待顯禪師不至以寄

白雲紅樹尚留秋、如畫山川滿一樓、來去無心開士錫、散聞乘興故人舟、地隣蕭院聞仙梵、窗對靑螺伴海鷗、鷲嶺岧嶢半輪月、白毫光裡更回頭、

送秋仙鶴之平安　丙戌

臨風不得奈相思、雙淚露寒分袂時、聞說長安好春色、莫教花柳滯歸期、

閨情

鸚鵡籠中日月寒、一朝開許向雲端、隨西到日如傳語、爲報深閨春未闌、

孤燕

猶自飛飛傍畫梁、應憐繡帳兩鴛鴦、細雨春風舊紅顏、似將孤影泣殘粧、

夏晚憶恭平

峽月海煙悲故園、吟懷焉得不消魂、水路一千三百里、扁舟何處夜聞猿、

秋夜長

秦女仙簫和鳳凰、錦衾角枕鬱金香、春暄蛺蝶尋芳草、夜冷嫦娥傷畫梁、白露叢間聞蟋蟀、殘燈帳裏繡鴛鴦、誰思玉漏城南曉、分得秋聲爲短長、

寄高君秉

廿年消息雁蒼茫、何事教人參與商、江海君元懷意氣、煙霞我已定行藏、孤劍流水枕頭夢、雙鬢凄風月裡霜、未改詩書舊時癖、六經緒日莫相忘、

和串君月前懷舊

龍山秋色舊幽溪、水自南流月自西、莫使淸光隨意好、荒園風露有人啼、

矢雖愚舊廬

如今合向九皐鳴、空搏天風入月明、鶴駕不歸年再暮、望中無處不鍾情。

聞笙曲

元自仙宮人不知、笙聲風度月升時、隔牆桃李夜三五、無限春情吹向誰、

暮春別諸弟 丁亥

枝枝一自見風吹、路上垂楊結所思、此別烟霞春幾日、重遊知不與花期、

寄耳公

別後起居思袂衣、秋風春月恨依依、譚詩餘興入傾盞、猶自江邊有雁飛、

別一壺亭

尋君似笑山迎客、辭君如咽水送人、寫入鳴琴君獨聽、不妨蹤跡隔三春、

病中

伏枕六旬猶未起、呻吟情況屬朦朧、清光空負臨闌月、新綠任遮滿地楓、殘喘聊能持溽熱、衰容不待入秋風、元將一氣遊生死、爲跡從他造物工、

寄賀子登 子登喪女

昨夜征鴻傳訃音、爲君淸淚滿衣襟、殘生曉燭風前恨、胡蝶春園夢後心、粧鏡月留空自照、鳴簫聲散杳難尋、斷絃此夕誰能辨、莫寫哀吟入玉琴、

江行 戊子

如字春江如畫山、江村月出炊煙閒、扁舟泝入桃花裡、似與秦人相往還、

富來古城

城上春風野草花、城邊春燕野人家、靑山松老舊禪刹、留得鐘聲向日斜、

粧琦 幷引

我豐東北北江郡、有妝臺、俗謂妝埼、口碑曰、用明帝潛龍日、聞眞野長者女玉世姬有國色、竊出宮、爲長者牧豎、號山路、跨牛吹笛、其音甚哀、長者知其眞龍、大恐惶、奉姬以入京、

上天環珮若爲同、牧笛黃昏牛背哀、滿樹春風花不語、月纖神女舊粧臺、

訪栗文中

春色含殘雨、煙光入夕陰、紫霞青眼舊、丹竈白雲深、花散溪成錦、松低風弄琴、江山不可忘、從此數相尋、

淸春英墓

一百八聲薄暮天、疎鐘遙自梵宮傳、歡娯豈意隔長夜、蘋藻如今薦九泉、雲霧空留龍去跡、江山不卜鶴歸年、風烟寓目春如昨、腸斷麒麟背上煙、

與諸友分題賦逢入京使 己丑

逐臣無路問金鷄、揮手風煙分馬蹄、回首九重明月遠、瓊樓金闕五雲西、

隴頭水

隴月向西落、隴水向西去、隴月夜夜東、隴水歸何處、

己丑春、夢山中失路、有翁使童子引去、得詩以謝、

煙霞迷去路、鷄犬白雲間、唯有桃花水、相引過靑山、

哭河野翁

嗚呼可奈何、此翁不遊世、薤露皎未晞、靈輀向幽棲、白日奄西沈、風氣一何厲、溪激聲欲咽、心緒鬱如締、孤雲中天舉、夜臺寂已閉、感念眷顧恩、不覺涙盈袂、

夢後感懐 去年喪女

夢盡花殘啼鳥頭、無那黃粱炊後愁、莫教風雨驚愁處、或有孤魂化蝶遊、

喜喬彥駿見訪

相思遠自問樵漁、鶴駕天高雨霽初、日月久懸徐孺榻、風流初御李膺車、祇應紫氣衝牛斗、何料靑雲落草廬、或以同知許傾蓋、臨江長好煩雙魚、

盃中畫鶴

猶未搏風沖九霄、紫霞陰裏影蕭條、楊州二十四橋月、待我相携弄玉簫、

息夫人

宮園花好處、寂寞倚闌干、不逐晩風散、何堪曉露寒、

寄淸伯武

所思寄清風白雲遠相送如問歸臥色松陰足幽夢

望嶽

崚嶒西嶽色雙翠半天分倒影沈蒼海孤高出紫氛彩虹不可度廣樂或如聞自笑無仙骨臥看絕頂雲

代黄鏡老嫗 庚寅

華鳥憶昔深閨時菱華拂曙畫蛾眉蛾眉畫成遠山淡自惜春容人未知擬爲雙燕傍簾戶何意孤鸞鏡中舞孤鸞不棲雲遮月手持圓規鬢若縷又憶熊羆虺蛇祥嘗祈兒孫往滿堂秪今不奉昏與晨苺苔久埋夜臺塵典之將供三世佛開雲弄月委他人天地無人訴情欵暗淚長自濕襟滿去去何處路傍春野花芳草與我伴

壽梅軒竹翁六十 辛卯

帝惜神山將流去駕鼇煙波縹緲處五百玉童求不得可憐祖龍回鸞輿吾輩本長三山間讒將仙境爲人寰銀河漲海紫翠中咫尺蓬萊誰不攀何知別有遊仙窟窈窕閉之於溟渤琵琶崎頭鷲巢陰波間雲山綠出沒鷗鷺群近舟蘆葦低覆磯林間松華可代餐江上春雲好裁衣春雲日射彩明滅十有二樓蜃氣結上有駕龍朝帝所之門下有騎鯨之水府之穴花柳春催煙霞早棠梨秋染霜露好畫圖曉開仙人山嫦娥夜遊玉女島主人有仙骨居此水雲涯纔祝甲子初正唱南山時五斗羈不住有酒常盈樽玉壺藏日月黄橘託乾坤與闔一曲入絲桐飄若躡雲御長風莫向美門問要訣名在丹臺玉室中

翁住竹田津琵琶埼鷲巢其地名玉女島指目女島玉世姫之遺跡仙人山則峨嵋山役小角之棲處琵琶埼西有長埼予嘗早秋與一二遊侶泛艇至埼高六七丈頂平松古石崖峻嶒犬牙相囓有石磯可以坐十人舟歷磯崖之間入崖之西面之窟窟則呀然而朗高廣之所致也是乃第一洞也舍舟攀危石探崖穴屈曲轉折踞虎豹登虬龍漸下入舟向北出洞闊可横艇而高可倍之洞門正方如柱梁相施出則煙波渺茫東轉入第二洞綠波沸見底以巖腰入水之勢洞門斜開若望缺月

之半入山、口山相距六七丈、雖比前洞則卑、以篙達巖之下、面弗可達矣、石蜐牡蠣著之、紫苔如海蘿、者蒙茸、淸風拂衣、餘暑頓盡、仍止舟而息、西眄則豐長之山簇簇、自防走豫、黛色決眥、皆洞中之觀也。有一窗而岐、僅可容舟、轉棹入之、舟沒窗中、幽邃甚矣、拍掌則若擲金石、笑語嗁嗁、若鸞鳳之聲、石崖之所助也。已而入第三洞、下闊上尖、比諸前洞、卑而狹也。舟迂行終出巖背、出則舟唯居懸崖喬松之中、舟外無水、今入惘自失、退入第四洞、風景宛如第三洞、反棹入第五洞、橫狹竪長、入五六丈、轉窄轉深、氣颼颼冥奧難測、驪龍之蟠、鮪鱷之伏、亦不可知也。又入第六洞、略若前洞、第七洞、亦深五六丈、弗可復盡、回顧則洞上有窗、方鑿。徑許五尺、又巖分懸上、雖無首尾、如有鱗甲、似騰蛇欲飛去、待雲霧者、第八洞寖小、巨石橫前、弗可搜矣、移舟入第九洞、前面亦開圓窗、自第三者至此、皆北向、迤東崖石亂置、舟宛轉而行、視巖腰突然迸而跨水、如飛霓之起未至、望之或若初日將離海、猶就水者、是爲第十洞、近之則琵琶埼前橫姬島、後秀醫王島、靄靄于有無之間焉、仰望巖下、當中作一圓孔、闊而深、如仰望鐘口、徑七八尺、內當暗而却明、傍必有通明之穴、又傍有石架、可坐一兩人、然弗羽化則又弗可至焉、已而潮落、過洞步磧、西南入第十一洞、行四五十步、洞中之石、皆如銅綠、洞盡處有泉可掬矣、右岐小洞、跼蹐而入、十餘步而盡、甚暗、左岐小洞、開而豁也、匍匐踰之、循崖經第十二洞、洞小而深矣、不可窺也、第十三之洞、入二三十步、穹然以開、與羅漢寺之無漏窟、頗相類焉、洞北數十步、有石標、隨潮之來去、與陸斷續、標又有臺、攀而登之、可巡標游觀、惟北面峻而入海、可跂足而臨、標頗高一二仞之間也、頂有松、偃蓋蔭臺、一奇觀也、當南有石、高於人、文如蜂窠、如龍鱗、目可弄、口難狀、沿水環岸而東、猶有四洞、西者可臥象、次者可臥牛、其次可臥羊、其次可臥狗、亦可以具數焉、

駕龍騎鯨、蓋謂此焉、

代人送田如春歸鄕

僊人之山玉女島、好向此中問不老、君自羽客探
煙霞、春風處處摘瑤草、

送主務竹渭川移家於江都、邸（永安 壬辰）

燕王臺上儲黃金、東指春雲五色陰、仙掌芙蓉晴
雪麗、版圖帶礪瑞煙深、關門不隔各天夢、海月長
懸一片心、顧我本非攀桂者、凌空飛鳥若爲尋、

喜坂子玉至

桃花流水是吾山、琴酒憐君訪閑關、流水縱然送花盡、宿雲長向洞中還、

詠合歡樹

收葉夜先迎素月、敷陰晝自引清秋、歲寒豈獨當矜節、炎熱憐君能解憂、晉代風流餘壘尾、漢臣慷慨駐旄頭、合歡還笑文園令、老使琴心入別愁、

送豐穎祥之江都

劍氣如虹七彩闌、延平津口望君歸、天連漲海斗牛迥、地接毛人鴻鯉稀、百二關河環幕府、三千驛路隔庭闈、灌瓜唯自知無事、不願將隨風雨飛、

清子錫從邦君而東、聞開洋無日、猶泊舟於海口、因以賦寄、

始出庭闈事宦遊、追隨靑翰鄂君舟、寒砧木落淒風暮、早已三千里外秋、

姬人怨服散

丹砂謾道出塵寰、獨夜深窻素影閒、妾自嫦娥月中住、蕭郎何事憶人間、

嫦娥怨

金闕瓊樓玉作闌、清光長傍月宮看、月宮元閑人間路、天上秋風不耐寒、

送原玄意之江都

黃鶴靑天去不留、五雲遙望武昌樓、匣中龍劍隨風雨、海上仙槎拂斗牛、雪月錦囊摘詩草、蒹葭落日逐沙鷗、此遊元爲君恩渥、自異當年季子裘、

歲暮吟

君不見禹門之水九天落、鼓雷噴雪奔赴壑、羣鱗競欲化龍飛、點額何知形勢惡、吳天生我來稆家、使我爲灌東門瓜、東門瓜熟拾其落、秋來對月春來花、天地元自一大鑪、日月風雲皆吾徒、試解糾纏仔細見、醜能成美婦成姑、鑪中之金愼勿躍、一馬一牛任人呼、春風暮兮花飄雪、秋月滿兮蟀吐珠、天子九重垂衣裳、廟堂典謨擬陶唐、股肱吁兪守社稷、予亦長得飽稻粱、負薪歸來雪滿廬、雪明聰聞好讀書、租税輸官布下機、友人遺我酒與魚、有酒有魚眞富貴、兒童屈指數歲除、歲聿云暮矣、

回首五十徂烏兎、五十草玄玄猶白、寂寞閉關意誰慕意誰慕、出門落日曳杖步、雪後青山畫中分、溪清堪摘雪中芹、側見凌得禹門登天險、倏忽起龍驅雨捲風雲、

梅園詩集卷之上畢

梅園詩集卷之下

豐　國東郡　三浦晋　安鼎　著

元日寄懷竹渭川在江都　壬辰

新正曉色紫凝烟、朝賀遙思慕府天、四海恩波堯日月、千年帶礪漢山川、閒花流水無春隔、尺素長空有雁傳、知是芙蓉終古雪、君前裁入九如篇、

春初存順二公惠扇賦此以謝二首

春風自上方吹入後園梅、先侵窗前雪、時傍明月開、

風月遙相寄、春宵滿庭隅、爲白衣裏到、認爲無價珠、

道眼上人七十壽詞

壽尊長自護袈裟、金色頭陀白鹿車、知是五十六億萬、春風相引到龍華、

別意

月出潮自至、月高潮自去、春潮與明月、相思隨行處、

新竹

昨夜風吹籜、新陰暗古道、時時低拂雲、可待幽人到、

與僧訪忠春卿

追隨金錫入雲飛、來款蟠龍山下扉、夜久龍歸山吐月、白雲秋色傍人衣、

送僧師順

隨緣鐵鉢入烟霞、海色蒼茫犯斗槎、玉女島前雲始盡、仙人山上日將斜、華門寒勝剡溪雪、桂樹秋開帝里花、若使法輪得西轉、春風復逐白牛車、

又別

去年此秋與君遇、今年此秋與君辭、欲向閒雲問來去、秋風晩傍石磯吹、

訪藤忠藏病

白雲紅樹舊池臺、如畫青山鑑背開、君自神仙事辟穀、不然何得住蓬萊、

贈向玄瑰

龍宮禁藥都諳得、伏火鼎中金欲成、獨夜洞簫按仙譜、向風吹試鳳皇鳴、

鄉夢

楓紅水濯錦、可是促歸裝、飛夢不相待、先自返故鄉、

日田春寄敬所先生

一違函丈十經年、長路遙山回首憐、氣擁關門秋作紫、珠藏龍窟晩生烟、清風時自經筵發、白雲長臨海樹懸、取與無由還載酒、孤鴻望斷月明天、

復辭悼清子錫

海口八月去年秋、朝宗追隨使君舟、歸期海口秋如昨、有人傳君向丹丘、噫君高堂雙親待、如何獨能作仙遊、千騎東歸君不見、始信天上修玉樓、舐犢倚門情如何、哀哀父母泣白頭、天上不若人間好、魂歸來兮莫久留、

遙題順公禪房

聞君趺坐地、瀟灑出塵寰、階下生雲石、松間帶雪山、制龍甘寂寞、與鶴占清閒、早晩諸天月、高凌烟霧攀、

送田子英遊京師　甲午

此別寧容易、吾衰遙後期、神交唯有夢、祖席孰禁悲、鳥沒烟和樹、雪晴月上梨、雄飛任爾搏、莫負陟岡詩、

贈庭公

飛花流水逝、新樹棲鳥還、鐵鉢飄飄久不下、望斷海東烟月間、吾亦與世相忘者、不妨時時過青山、

送豐公還南海

飄然一鉢復隨緣、舊院何邊樹若烟、空裡樓臺雲吐月、斗南波浪海吞天、難尋金錫東歸跡、徒想法

輪西轉年、別後恐君總無意、秋風朔雁繫書傳、

送綾仲善再遊京師

歸家未幾復辭親、離恨還添白髮新、驪駒一曲數行淚、明月扁舟千里人、波濤曉洗扶桑日、烟樹晴通帝里春、行矣王孫芳草遍、秋風莫負故鄉蓴、

采蓮歌寄竹渭川

露洒芙蓉香度池、無由持此贈天涯、相思可寄清風去、爲傍佳人裙帶吹、

贈田養伯

因逢圓密師、爲問令郎病、屬纊已前月、葬之故山阿、聞之半猶疑、驚定所思多、忌年多年夢、豈意屬南柯、想彼老父母、日月若爲過、夜雨滅殘燭、孤舟漂風波、死者已已矣、如此生者何、

贈藤蓮平三首

仙簫春許與兒弄、白玉佳人按譜聲、老好秦臺桃李月、清風吹送鳳皇鳴、此春令子合巹、

不似女牛隔河望、逐郎遙自向天南、機中縱有鴛鴦好、爭忍深閨咏葛覃、此春令愛從其夫徙江都、

未卜雙飛黃鶴還、東關迢遞白雲間、直將飛夢懸明月、行盡天南萬里山、

剝竹爲經緯、以爲團扇、頗淸雅、爲作賛曰、

一直一圓、一經一緯、人造有賁、織之元氣、

送島養義省親還雲州

氣催霜露透秋衣、千里關山夢欲飛、舟楫雲烟分島嶼、波濤日月轉璿璣、平安二字鴻容到、定省多年客始還、負笈期君重渡海、莫教慈母斷殘機、

贈僧

八萬諸行總遊戲、三千世界一彈丸、玉樓金殿海烟色、夜月晴徐徹底寒、

秋日題畫霜後菊扇

誰將霜後菊、移傍涼月幽、愛不依人熱、伴此山齋秋、

睡起

仙夢難久結、還自月宮歸、桂花紛若雨、天香滿我衣、

宿紫泉亭　乙未

身着雲衣宿海碕、風濤撲枕夢相依、蒼茫不隔方壺路、欲待長風駕鶴飛、

訪庭公不遇

一路柴門鎖紫氛、梅花只自滿衣薰、禪心不記期人夕、何處青山坐白雲、

寄川子眞

聞君近上黃金臺、廿歲歡娛憶酒盃、莫向塵中說聞事、桃花不爲世人栽、

春夜憶庭公

不向人間寄一辭、白雲深處掩茅茨、春風良夜誰相賞、月上梨花若雪枝、

答敬所藤先生客歲見寄之作

美人曾有瓊瑤贈、欲報瓊瑤望美人、美人迢遙不可見、空中樓閣坐傷神、長天遠樹山如畫、芳草孤鴻地自隣、郢調從來爲難和、徒留白雪至陽春、

憶清文圭

風烟分袂幾居諸、坐對參商感索居、四極山前水千尺、空餘雙鯉不啣書、

日出侯賜酒

柴門只任白雲關、天上桂枝無意攀、豈意清香殞月底、還將玉液灌人間、露若竹葉青侵案、雲濺桃花紅上顏、草莽外臣感恩眷、臨風竊自祝南山、

春宮怨

滿庭花不掃、唯有青苔埋、轉認淚痕處、隨雨上玉階、

春暮憶庭公

楊柳陰陰拂綠苔、海棠花謝牡丹開、知君還動人間興、殘夜依稀入夢來、

送僧玄庭還天橋山（天橋山在丹後）

歸思浩然不可留、天風一葉駕扁舟、談玄將伴藤蘿月、傳信空期鴻雁秋、海樹晴開玉女島、龍燈曉上文殊樓、衰遲自覺離情苦、屈指前程待再遊、

秋日暘城訪喬文學

孤棹隨潮秋放艇、仙簫吹月夜乘鸞、軒懸九月芙蓉雪、坐罄數盃鸚鵡歡、一別吟魂天外苦、重來霜鬢鏡中寒、相逢滄海珠無恙、顆顆清光剖蚌看、

陽城送清伯武之東

離筵惜別夕陽西、去路風煙望更迷、奇絶未能探入海、仙山晴雪待君攜、

寄佐藤蕩在浪華

不見雙魚秋上潮、海煙江樹綠迢迢、月明鶴背吹簫處、知是楊州第幾橋、

無題 丙申

風光春幾日、何不作閒遊、目與浮雲盡、興追啼鳥幽、樹分新霽岸、花襍夕陽樓、誰薄世榮者、鷗邊一釣舟、

田養伯後園 主人頬年重喪

風狂雨過草萋萋、雲物依稀日漸低、重入林園覓春色、餘花猶自似含啼、

長野春日社神門銘

應感弗測、體物弗遺、夷兮希兮、雲行雨施、

寄竹井君

朝汲孖溪水、夜臥孖山雲、清時此水堪飲牛、清夜看雲空憶君、

夏夜待人

過雨洗炎熱、竹露滴青苔、松間微風月、猶懸待君來、

楚宮怨

滿園桃李欲闌春、雨撲珠簾寒透身、不管風吹花若雪、君王長伴夢中人、

遙題山潮菴臨池館 潮菴府内之人

君不見邯鄲之水遶芙蓉東注、聲聲汗漫兮不爲際涯中捧芙蓉臨隆國之舊城郭、東望扶桑予可攀蜃氣時結爲空中之樓閣、翠落鶴觀邐迤連四極之出碧水、安期羨門閒風玄圃之遊將就此酌、主人起臥兮此山水間、築館占得壽聲樂、籠畜右軍鵞、松棲王喬鶴、主人之館名曰臨池、池則海兮積一勺、吾未從此遊、應其子之需偶爾有此作、臨風酌酒歌此作、遠望臨池之所在、館遠兮不可見雲茫茫兮烟漠漠、雲烟閃電兮風驅雨、知是龍蛇此中飛躍、

戲題畫松月扇面

我家松雨樹、淸風月出初、何意丹靑竊擕去、併將風月到君廬、

如泉居士墓

自向北邙辭我翁、回頭十七過春風、到來無復典刑在、泣立松濤蘿月中、

送川子眞隨五馬而東、君時有命將留東營、

君命不待駕、往將留武陽、武陽風雲好、況隨五驌驦、隨五驌驦踏風雲、萬里長空虹架梁、水躍天龍山僊女、扶桑日照大東洋、東遊雖云樂、衰遲偏傷隔參商、看雲棹野艇、作花醉羽觴、靑螺碧江入陳跡、匣中孤劍鏡中霜、一聲欵乃發、人阻天一方、出處各有宜、不妨今日異行藏、墨水君隨鷗、紫海我望航、鷗飛不遠過紫海、空傍離人之舟楫翔、行矣君恩本洪蕩、何妨蹤跡屬蒼茫、轂擊肩摩大隱地、壺中有路通仙鄕、仙鄕聞棗大如瓜、御風擕歸與我嘗、

水亭對月

碧落澄潭天倒浮、天香風送桂花秋、人間別有淩雲路、凭月仙宮十二樓、

哭葛陂先生 幷序

人之感知己、千古同情焉、晋之於先生、海山緬邈、固無一面之故、偶見我所著、敢語、謂如爲予期于晋者、有書見寄、且依後卿將見投其著書、晋報書日望其懷璧之到、旣而訃至、曰以八月八日而易簀、悵然自失、惄如調飢、聊爲短作、以代雞絮、

曾依雙鯉寄相思、何意啣來書動悲、過雁空驚傾蓋夢、吹簫難奈駕鸞期、關門紫氣靑天外、海樹凄風落月時、千里神交感知己、爲君啼誦招魂詞、

宿東風堂

豈無不相見、相見每匆匆、昨夜護江雪、扁舟御海風、渚春紫霞底、縮地玉壺中、復向人間世、此遊何日同、

雪後送僧恕乎還妙宜寺

欲別淸風送曙鐘、溫泉西指紫芙蓉、途經合浦月隨錫、寺在雪山玉作峯、臘後煙霞春雁動、空中樓

闇海雲重袈裟誤再思人境得向櫻桃花底逢

別人　丁酉

杖藜相送出衡門君好錦衣歸故園春意不知衰別苦滿天風雪灑黃昏

寄寧公

袈裟自一別柳條幾回新繫書北歸雁遙望丹丘津梅檀林裏踞地猊春風胡蝶夢中人明月夜夜來相照白雲不得往相親

錦江寺海禪師見訪　寺在佐賀關

瀛海波濤撲岸回錦江樓閣倚空開門臨龍女獻珠處闕捧仙家凝露臺飛錫忽攜明月下看山遠入白雲來醍醐肯許人嘗去願向長流借渡杯

睡起

睡起春園曉猶早圖書假我蓬萊島舒卷無心嶺上雲榮枯有時窗前草時屬升平知儒揣身廿間散覺僧好大玄八十休勞問白紛楊子無那老

折楊柳

楊柳煙中千萬絲舊枝折盡新枝垂春風欲結贈君去或恐令人多別離

秋閨思

寒螿何事傍鴛機萬里傳書雁未歸邊關春色任君摘莫使風霜侵鐵衣

客中行

霜落瀟湘樹影稀鄉書空見雁南飛移舟夜泊啼猿岸不耐秋風送搗衣

春日訪綱維則　戊戌

白髮舊青眼清罇新紫霞追隨一條水來醉故人家塵外入三島談餘探五車夢魂可為蝶常在後園花

送徹公還阿州

東望波濤渺合空浮盃一夕駕長風思君共著雲衣臥夜夜孖山煙月中

掩屍詞

婦人懷中抱嬰兒中兒負笈息路岐大兒呻吟在父肩荒村日暮欲雨時爲問汝是何處子自何處來何處之我是西肥瓊浦者家遭顛覆無立錐飄

零南海又向西、肩頭病兒命如絲、路頭拱手待其
斃、悲心欲裂往愬誰、吾聞此語不能去、不覺雙涙
闌干垂、爲借隣人空宅在、藥餌米蔬幷相遺、龍宮
禁方人不傳、膏肓二竪無人醫、狗馬猶自覆蓋帷、
不忍垢衣殮死屍、室內探得一匹布、持此將欲贈
永離、養弟自言母有衣、裁縫嘗供終焉期、我知母
聞必施予、不予恐負母所思、殮殯事了隣伍集、紙
旆飛飛葬山陲、貴賤之路隔雲泥、人情何異破甑、
悲孤童不願停此地、杳追祇犢行處隨、清風明月
長弔汝、他山有石拾爲碑、秖今雨露徧四海、世上
無告有若斯、王侯第宅王爲簾、露濕雨香花滿枝、
桃李春風解語花、春風好傍裙帶吹、天子九重紫
微深、公侯分憂守藩籬、我聞孺子匍匐隱、充之四
海只由推、漢家太宗孝文帝、賈誼猶進積薪辭、草
莽無復苞桑責、含啼爲作掩屍詞、

又登彥山値雨

又登高頂雨紛紛、奇絕幾峰藏在雲、地理無由按
圖見、天香坐覺滿衣薰、樓臺忽向空中湧、鸞鳳時
從風外聞、爲是神州探海得、於今縹緲鎖氤氳、彥山
南北二峰祠諸册二尊、

枕肱亭 幷引

安永戊戌之秋、西肥妙宣寺衞上人、千里遣使、
曰、枕肱亭成、願來臨灑掃而待、晉以詩代簡曰、
來雁繫書度萬山、書中爲許欵仙關、秖林豫掃
間雲待幽洞、松蘿踏月攀、飄然而往、暮秋詣寺、
寺前則海、海外則島嶼陸續、怪岸松老、雲林鶴
巢、畫者可以擲筆、爲賦一律留、
紺園西北一仙關、縮得乾坤藏此間、礀戶有雲風
自掃、煙波無路鳥飛還、海門通海別開海、山際隔
山猶望山、滿地桂花香不鎖、憑闌獨對夕陽閒、

遊長埼春德寺贈菴洲禪師

上方祇樹鬱玲瓏、甘露門前一道通、日靄溪雲明
滅際、樓浮蜃氣動搖中、錫飛與鶴曾相隔、萍跡隨
波且暫同、得對秋光蓮漏短、下山無術縮西東、

長埼旅懷

有客浩然遙憶歸、家山東望雁南飛、波間秋冷將

沈月、對月何人獨搗衣、

自君之出矣

自君之出矣、三載音信絶、思君如螢火、不爲夜雨滅、

贈魚倉龍渚

溪澗遊魚上釣絲、持之將欲贈天涯、到時君若呼童煮、中有行行相憶詞、

春眠 己亥

花鳥能勸酒、醉來閒掩屏、胡蝶如窺夢、傍人枕上飛、

夢遊妙宣寺

金仙臺殿紫陵沈、獨入者闍崛裏尋、猿叫孤峰殘月小、龍歸幽壑宿雲深、花間裊露停香氣、松下輕風送梵音、猶未分明驚破夢、華鯨聲傍舊珠林、

秋經峨眉山

空翠沾衣雨已收、仙源飲馬水爭流、雲埋來路人間界、一朶芙蓉天外秋、

謝吉雄耕牛惠西洋管窺鏡畫

天爲圓蓋地爲輿、造物載我御此車、從來此車人不識、横索漫費汗牛書、海西機巧天下奇、上窺九天下四維、製造巨艦衝風濤、不隔扶桑與咸池、衆星七曜指掌看、五帶六洲一彈丸、萬國動靜爲偵報、朝宗至今許和蘭、憶昨嘗遊瓊浦秋、縱飲耕牛先生樓、先生愛客開盛宴、葡萄美酒白玉舟、邏巴百物逐次陳、經營不同東方人、字似蚼蠰神禹碑、畫能飛動勢逼眞、先生胸中呑大洋、爲我苦說海西狀、禮樂政刑百制度、暦史醫禱殊意匠、還家每憶此歡娯、實感仙遊不可再、先生知我心醉此、遠寄西圖一幅至、輕裝深目鞭鐵驄、郭門望覺恍入空、非君天風假羽翼、焉使人在西洋山水中、

其日所陳、天球、地球、顯微鏡、望遠鏡、驗冷熱器、八分一、西尺、西洋琴、葡萄酒、柑子酒、金水、胃水、猶有數品、盛以琉璃之壺、酌以白玉之鍾、圖書滿架、皆西洋物、披閲之、天文地理國史小說、政刑律令國王葬儀、和漢天篤暹邏等之志、本草湯液、臟腑癖瘍等、百技製造之書、裝以獸皮、大者一册之重、十有餘斤、有開闔設關鍵者、其字者横行、讀法始之於我之讀而畢之處、畢於我之讀而起之處、畫不

主筆意、唯以爲眞爲務、凡百之制度、大異于東方之設、天地之說、雖漢有渾蓋之議、海中星占、周髀算經等之小驗、未能周流大觀、自從西人以機巧之精、巨艦操風濤、實測推步、窮極宇宙、世乃知衆星東行、河漢攢星、及六州居五帶之中、等之義、蓋自國家懲耶蘇之濫、嚴絕海舶、唯和蘭陀以歲償報萬國之動靜、命許來交易、先生能博學西典、爲我譚西洋之風俗、蓋和蘭等之禮、夙興盥漱、拜天、拜國王、拜父母、拜畢就業、有殺生偷盜邪淫妄語之戒、無飮酒之禁、人雖有所窘迫、以自裁爲辱、其國設律甚嚴、最重人命、婦女之墮胎者、發則絞而肆焉、殺人者、折其四肢、棄市而後轘之、和蘭等與國、凡七、七國各有主、七主以世輪督之、以朝六國、知男女配偶、其家議定、告之於官、官名其可爲夫妻者、問情之願否、卒逮父母兄弟、逮內外親戚、逮隣伍里長、皆曰可也、則盡籍其名、以藏、而後許之、於是一合不可離矣、若彊遣之、判夫家產之半與之、其養鰥寡孤獨也、置院畜之、以國入養之、而各以其所習爲務、得所務之贏餘、以給費用、其孤弱者、由其性之所近、分科肆業、立師教授、故自古院中往往出豪傑云、蓋聖人之制禮也、上下及旁親各以四等殺、西方則殺以六等、如天文地理

臟腑醫樂、則世已行焉、唯如西洋蠶食蝦夷之北邊、和蘭陸行至支那之記、先生有翻稿、未成、有成則遺我之約、愚考、東西之人、藥用之異、東人則似調熟穀肉菜蔬以養人、觀用於各味、西人則似造釀酒醴醋醬以養人、觀用於混成、東人務內、西人務外、亦意匠之不同也、禱禳之法、被災之家、祝天曰、不肖獲罪、若幸得蠲除、以幾貨賽之、爲書藏櫝、事了達之於官、官取其賽貨、頒之鰥寡孤獨疲癃殘疾者、曰天賜、八分一乃測日之器、取名於八分乎圓、取其一以製之、驗冷熱器、以藥汁蓄之於硝子之壺、壺頸甚細長、天暖則藥汁上行、熱則達其巓、天涼則藥汁下行、寒極則歸其庭、是先生之所自製、蓋取法於彼國、驗冷熱器之名、見淸張山來虞初新志、考同書、畫法猶有遠視旁視上下三面等之法、以未見爲憾、白玉舟、鐏名、明楊維禎、詩曰、麻姑今夜過靑丘、玉醴催斟白玉舟、胡兒騎馬向郭門之外、則所
貽畫中之景、

濃、孤竹幽人、見余莫向塵中說間事、桃花不
爲世人栽之詩、見惠國詩、其引曰、切欲相見、
而流水杳然、武陵難泝、賦以酬之、

秋風吹雁過文闕、書繫烟波縹渺間、相憶將開洞門待、桃花流水夢中山、

喜大船禪師見訪　庚子

花陰晚駐白牛車、湘水吳山攜入家、自恥春風十年面、唯將霜鬢映袈裟、

寄田養伯

小路村園舊犬雞、相思未得酒相攜、五千文字風塵外、人在桃花深處棲、

近有以賦名聞邦君者、或以終南仕進之捷徑見戯、有感賦以解嘲、

青山白髮小蓬萊、誰向人間說釣臺、流水洞門春不鎖、桃花自恥傍溪栽、

城樓瞻眺應命

初上高城四望通、無邊佳麗擁西東、層樓重閣入天際、綠水青山浮畫中、千樹雲收經宿雨、百花春暖拂闌風、時公子病新愈　渥恩不閉登仙路、攀得蓬萊第一宮、

玉壺亭醉墨

壁上懸壺賣藥、晚招遊客入壺中、壺中別縮乾坤得、塵外長將琴酒終、萬疊雲山揷梁畫、半天鸞鳳過松風、夜來人醉梨花月、夢結仙壇白玉宮、

放生會

鼎湖龍去幾居諸、長自風雲擁帝居、莫怪衆星環拱北、至今恩澤及禽魚、

秦伯龍書至云、至今讀予所著之玄語而不捨、因賦贈之、且去年與生別時、予有日從盤氣搖中出、山向沙鷗沒處浮之句、結意取此以存懷舊之意、川上蓋生所棲之地名、

聞君手不廢玄經、憶昨載罇遊野亭、遙望無由到川上、沙鷗沒處亂山青、

題畫

寺深危樵路、殘日合亂山、鐘聲隱如聽、雲烟杳靄間、

江南曲二首

江南何所有、春草滿江湄、但爲春草滿、使人輕別離、

多情訴不得、金徽手數停、欲向花間語、側有鸚鵡聽、

閨情二首　分體盛晩

連雲甲第雪新晴、滿樹春風畫不成、中有秦臺明月好、仙簫吹入鳳皇鳴、

孤鸞鏡前無限意、難向歸鴻飛處寄、唯爲夜寒漏偏長、停繡徒剪相思字、

予將遊暘城、喬文學以詩促之曰、靑牛何日發梅園、縹渺東天紫氣屯、不是函關相望切、摧來早說五千言、因賦此以答、

龍吟相憶隔江山、匣裏寒光明月環、紫氣不關飮牛者、豐城望入斗牛間、

送山見貞聞長姊之訃音歸省

此行無力省庭闈、泣向悲風魂欲飛、雨雪鶺鴒原上暮、不堪吹灑老萊衣、

泉福寺

鬱密深沈松自關、午時鐘度古僊寰、老槐新竹短長影、濃霧淡烟多少山、氣紫知龍蟠水底、風淸聞鶴唳天間、登臨未盡三千界、須向蘇迷盧上攀、

江樓書感

十年懷抱共誰語、望盡江山雲埋處、欲向來鴻求信書、相呼又過蘆花去、

藤卯作吹笛

笛送離聲風自悲、扁舟雪後憶歸時、江南信斷梅花外、獨向關山月落吹、

春日過如意菴憶庭公　天明辛丑

如意菴前夕日斜、依稀談笑入袈裟、孤鴻影沒空中字、雙鬢霜留臘後花、山月有情懸遠夢、海波無處問浮査、隨緣金錫春迢遞、回首風煙感物華、

贈川子眞罷官

罷爲折腰態、試放釣魚舟、港口風煙闊、市門竹樹幽、夜吟銷世慮、午枕入仙遊、何物不羈侶、寒汀飛白鷗、

望菩提峯雪

探奇未到古仙蹤、日出雲烟五色重、五色雲間隔花見、春天雪捧玉芙蓉、

柳浦感懐

海山今古鬱葱葱、殘雨斜陽感慨中、一旦廟謨違鳳闕、九重帝座鎖龍宮、從玆寰宇歸乖拱、終使藩籬轉競雄、唯爲由來周鼎重、猶懸日月仰蒼穹、

述志 幷序

晉嘗詔子弟曰、我有護身之符、曰分、要爾曹佩之、蓋人之不能護身、由不安其分也、君焉而務于君、臣焉而務于臣、父子焉而務于父子、天下欲不暐暐熙熙而不得焉、唯其不知分、處癸望壬、得辛求庚、仰望相剝、魚貫蹋禍機、甲乙丙丁、天賦己守、所守即分、分乃己所職務之地也、若悖鷙弗守分務職、則君不君、臣不臣、父子兄弟、夫婦長幼、皆將戴角含牙焉、於是進取可愼、然則其道如何、易曰、見龍在田、利見大人、龍德不隱、畜有地、大人有應、渟然而興、予嘗題詩於諸葛武侯圖曰、誤爲先生窺龍氣、不得天間不起雲、大丈夫唯許此一著、夫好安逸、惡勞苦、歎役於人、樂奉於人、是人之常情、而由利害生趨避也、利而趨之、害而避之、苟知所採擇、於道何戾、唯狗情不返、顚倒其思、膏粱腐腸、粉黛蹙命、極高則顚、縱意則悔、若極高縱意、上腐腸之香餌、從蹙命之精魅、苦歎之相距、復幾、今世唯觀上者奉於人、下者役於人、然其上者常遑遑役於索莫與牧、以保我豢我焉、於是乎、我推宮闕輿馬、粉黛肥甘之悶悶者、於彼使之禁暴客、警災眚、施施然陶陶然、未辨其孰優、然則進之輿止、除義吾弗知所趨避矣、蓋爵德之相貴於天下久矣、而爵不可願而得焉、德可求而至矣、人已至於可求而至者、威武不能以奪于我、富貴不能以尙于我、舍此以趦趄囁嚅于人、抑亦何顏、三十年前一侯有意于晉、晉謝曰、朝汲孖溪之水、暮臥孖山之雲、於我乎足、今玆辛丑之春、探豐西之勝、適次杵水、有人投書曰、某侯爾爾子其解褐、嗚呼吾駑鈍少尙不足執人之役、況乎犬馬之齒、六十少一、日薄崦嵫、菟裘之外何營、詩以答之曰、樵蹊不與世間通、高臥東山

異謝公占得煙霞吾已老、淸風鶴唳白雲中、又適某地、主人情熟、剪燭深語、曰、某藩之一老、嘗薦子於其君、晉悵然久之、賦此詩而留、

擲金附大鏞、不問復如何、輕裘緩帶春風中、昇平久浴堯恩波、人間三島滿架書、階前豐草絕掃除、縣吏爲我取直廉、爲我晏眠護我廬、君不見富春山中遁榮者、羊裘間釣大澤魚、釣臺幸有伸足地、焉載人禍上人車、

銜雨到正行寺

啼鳥飛花日漸沈、還將風雨到珠林、昏鐘如不引迷路、猶在雲煙深處尋、

同答明教師

無如驟雨暴風何、走入山門脫綠簑、奪得暫占方丈室、傍觀笑殺老維摩、

倉文學植松

龍渚先生此繫匏、一生志業爲書抛、問奇人散過春雨、手自栽松待鶴巢、

無暗渚春曉 渚在中津城之東北、有豐日別神廟、所祭則天照太神也、予友賀子登曰、父老相傳、神功皇后征伐之時、龍出神廟而飛、今猶龍燈以風雨之夜、來懸松上、故土俗呼曰龍王濱、

神昔驅龍起風雨、龍將風雨送王舟、王舟東返龍亦蟄、龍火猶將風雨浮、花映城樓天欲曙、月含烟樹水如秋、東方未上扶桑日、五色雲蒸大八洲、

龍王渚

造物爲吾開畫圖、龍王洲渚海城隅、波漂落日樹如泛、目入歸鴻山欲無、紫氣相重埋赤馬、白雲不斷接蜚孤、仙簫誰待月明弄、風暮松間有鳳呼、

歸興

江上蘼蕪春欲空、飛花關意夜來風、家山辜負懷鄉望、鎖在蒼烟紫靄中、

哭僧禪佐 佐長州洞春寺徒、寺在萩城中、今春將歸省父母、無幾還來、與其侶赴府、沈痾不起、終沒于府、

不厭山煙海樹重、還鄉將拜兩慈容、雲衣未道多時別、金骨何圖此處封、澧水唯留新小碣、瀛城空

隔舊雙峯、無爲又向人間路、吹夢清風送曙鐘、

夏夜

阿誰辛苦學神仙、騎鶴揚州未有年、高枕溪雲拂衣起、展書林月向窗圓、夢京數到華胥國、壺靜中藏玉洞天、不作相追傍人熱、滴階風露老槐邊、

送山元直還中津

秋風知別意、一葉拂離杯、慵送食場馬、獨登看月臺、地隣無夢隔、海曲有潮回、從此投綸待、雙魚上釣來、

路上風雨

奔雷掣電幾雲重、直要馬蹄行處封、我本無心鼓風雨、停鞭目送上天龍、

憶村守恭

欲向豐城望斗牛、人傳孤劍入西州、夙志未成雲四散、年華不駐水東流、邊海風烟迷遠目、暮村砧杵擣離憂、如何對此能無淚、楓葉蘆花過雁秋、

秋日送柳元龍

聞說華陽洞、瓊花秋堪拾、拾得若攜歸、和之清露吸、馬首風色寒、鐏外江流急、片雲不可追、獨向斜陽立、

送兒黃鶴遊中津　壬寅

欲離先自數歸期、滿樹風花隨水時、臨水若觀春易過、思予雙鬢總如絲、

贈野呂菴

鶴嶽之東四極峯、波間晴出玉芙蓉、他時未得相攜摘、落日蒼烟紫靄重、

酬筑藩文學龜南溟

垂白天涯無日逢、孤雲望斷飛孤峯、清時吾自飲黃犢、隔地人傳學赤松、

來詩曰、咫尺眞人夢寐逢、覺來仍舊隔千峰、何當能罷人間事、却作人間從赤松、

串春卿佩刀　此亦松義士武林隆重之所佩、

誰道干將相得難、君家一劍鏤花盤、赤城千里凌波到、紫氣三更傍檻看、奔電迸從室裡出、神龍知在匣中蟠、曾緣豫讓腰間佩、透骨秋霜徹曉寒、

仲景賛

皇甫謐曰、仲景垂妙於定方、我有取乎斯語
鈞天一曲兮、仙諧無讀兮、天生斯人兮、振金聲於玉、

寄田養伯喪季子永叔

手把天壇白玉簫、仙郎一夜躡雲霄、知君欲枕傷心處、殘燭風前影動搖、

神農賛

天釀斯民、醫養焉起、神兮農兮、識厥弗死、

哭綾監郡伊承

千金君家孤白裘、芝蘭相和匣中留、春風到處花滿樓、綺羅場中無人求、衰遲不得買釣舟、多病漸疲人間遊、終著匣中孤白裘、長臥松風蘿月秋、

悼喬鳳渚

有酒湑之無酒酤、廿年文態奈歡娛、已將談笑供炊黍、誰縮乾坤得入壺、雲暮空原埋玉樹、月沈烟水鎖龍珠、鳳飛不返秋將盡、井上風凄老碧梧

送僧

離恨相追雲傍衣、烟光寒樹轉依微、再期心恐隨緣、錫何處、青山先鶴飛、

新嫁娘

一夜珊瑚枕、窈窕遊仙窟、合歡夢未熟、起望庭闈月、

尼僧幽棲 卯癸

菱華無意弄孤鸞、貝葉梵文晦跡看、自是青山人不到、片雲間月傍蒲團、

送豐禎祥

有姉託童稚、無家養老親、此行思負米、何處問通津、棲鳥幽林暮、落花流水春、不須泣三獻、明月傍車輪、

早秋送藤子固還鄉

故國音書雁未飛、倦遊何得不催歸、朝來一片梧桐露、先自秋風入客衣、

送僧玄雄還丹兼寄庭上座

暮雲秋水幾江山、愛太子陰君欲還、還到如逢庭上座、言猶落魄住人間、

送僧還熊野

玲瓏珠樹舊龍宮、向來尺素定難通、五百玉童消息斷、逢萊鎖在彩雲中、

送僧循軌

暫將金錫挂柴扉、解夏又隨梧葉飛、蹤跡風煙湖海外、不知何處問雲衣、

夢後 今秋失偶

反魂烟斷小香爐、夢覺枕邊燈影孤、往事追懷都是憾、暮年衰病孰相扶、河低片雁迷寒霧、月落慈鴉噪碧梧、待辨訣時婚嫁囑、吹簫與汝伴方壺、

二十年間弄簫夢、覺聞孤鶴度秋江、殘燈猶未枕邊滅、風入芭蕉雨撲窗、

晩歸

歸來四壁寂凄其、坐感空房節物移、徒自微風掃庭待、任地明月入簾窺、春園胡蝶尋花處、秋露寒螿啼草時、一點琉璃燈影冷、照人清淚灑追思、

清音亭夜坐

憶曾與汝逐鶯花、子女相攜遊此家、日暖春風留語燕、酒闌銀燭送棲鴉、寒雲紅葉浦邊鎖、缺月華鯨聲裡斜、欲向嫦娥問蹤跡、人間望斷上天槎、阿岐又謂秋浦、又謂紅葉浦、

豐禎祥魯不巧宦、罷後蕭索、遣妻屏子、北遊海島、蓋急于負米也、聊賦五絕送之、甲辰

一隻遊仙駕、數聲慕母雛、長風籠不閉、任向彼蓬壺、

無家奉菽水、解艇上春潮、春樹靄如薺、回首憶鷦鷯、

縱令丈夫淚、不灑別離間、八十老爺夢、何離海上山、

客衣密密縫、老母手中絲、靄靄倚門月、知君行處隨、

人事一糾纏、窮達自相緣、客路塞翁馬、行行問老天、

峨眉山

四面烟嵐合、中藏石磴斜、廊陰獅子窟、雲標梵王家、風暮猿呼樹、園春鳥囀花、無由駐吟杖、下界噪棲鴉、

贈淑上座將赴豐前見過

山陰晴雪駐禪筇、憶昨吟哦伴伯龍、遠與三十六灘曲、離愁一百八聲鐘、春雲縹緲仙人窟、夕月玲瓏賢女峯、萍水東西南北跡、不知何日又相逢、仙人窟、賢女峯、共在豐前、醫王洋、周防洋、共十八里、之爲三十六灘、此間之人、呼洋爲灘、

千燈寺

昨夜風雨過、飛花滿澗香、住僧淸朝就齋去、白雲鎖門春晝長、童子澗水和花汲、茶代醍醐與客嘗、

送玄梁禪師還松浦

水國秋風動袈裟、別思哀傷心、松浦雁能得幾回來、

岡主務從浪華還、予病不能執謁、聞又將東、聊爲此寄、

豐城攜返劍如虹、徒自呻吟望碧空、龍氣從來易飛動、愁君移紫向江東、

與公錫致仕賦寄

綠酒瑤琴白玉壺、歸來吳下有蓴鱸、從茲江上烟波月、寫入五湖垂釣圖、

送浪華松三雄遊瓊浦

客路長天決眥空、鄉園幾隔海山東、陰雲北接三韓暗、晚日西含五島紅、夢苦淸砧鳴缺月、興闌白露下靑楓、相思若有平安字、何處秋風無旅鴻、

訪玄梁禪師病

秋風示病坐禪牀、試向龍宮探禁方、自是上方塵不到、可知之子疲津梁、

病中聞賀子登之訃

雲烟昨夜暗江城、飛雨驚風人上鯨、滿腹文章歸異物、沾巾涕淚泣同盟、何知劍氣斗間失、空自玉樓天上成、思去思來事皆夢、可堪垂死病中情、

酬曇榮師送柳元龍還兼見寄之作

西遊客子解歸裝、中有天涯相憶章、衰病難攀上方月、隔山遙拜白毫光、

聞常照居士之訃慰池子昌

不二門中一病仙、狻猊蹲處散香烟、多年指染醍醐味、半夜人登都率天、雨灑敗荷寒白露、霜飛衰

柳苦鳴蟬、悲君啼誦蓼莪淚、最在凄風落木邊、

聞笛送川中行還備

慵送歸鞍折柳枝、多情一笛向誰吹、秋風吹灑離人淚、正是關山月上時、

病起尋山斗周

江山風日好、病起試孤筇、春動朧前樹、波涵雪後峯、釣磯探隱處、斷岸認仙蹤、谷口子眞宅、雲深棲鶴松、

步雪到寒汀舍

漠漠紛紛雪亂飛、先春桃李滿荊扉、忽披鶴氅御風到、人道蓬萊海上歸、

別與公錫乙巳

百年官蹟夕陽斜、欲濯塵纓餐紫霞、好是洞天三十六、春風處處拾瓊花、

送毛可眞

滿囊詩興半玄譚、盃酒惜離還暫含、不道梅花消息遠、春風吹夢度江南、

初逢脇子善

白鶴峯陰海岸口、老蚌多年無人剖、今朝試向水底探、中有明珠大如斗、

春風堂主人今年五十、唱隨壎篪、令郎之喜可知、

一雙鳴鶴搏晴空、海外三山路欲通、獻壽梅花香馥郁、春風吹入舞衣中、

串監郡古稀壽詞

八袠行開處、群仙來會家、風知生臥閣、雨覺傍行車、林密接青鳥、杯濃引紫霞、好隨賢子弟、醉此玉桃花、

邊詞

嘗記少年時、夢得此起聯、吟社之徐與、忽憶此事、續足爲一首、

風連西極起、蕭瑟五原秋、沙漠窮天盡、銀河落地流、連錢新駿馬、萬里一吳鈎、擔將雪漢恥、人道冤封侯、

情詞

葉上可憐露、風觸濡緋襦、欲取藕絲繫、絲脆走露

珠、

溝公虛南遊而歸、解裝讀其詩文

有客遙還自海南、囊中明月映歸驂、從來此色人休怪、曾向驪龍蟠處探、

聞笛懷藤子睦

唯餘流水入琴清、咫尺江山隔弟兄、鐵笛一聲霜後月、臨風不那五更情、

漫成

雲鎖柴門松徑閑、嬾眠自覺此中安、南華一卷眞閒事、又跨黃牛傍草看、

偶成

龍門之上深雲霧、龍門之下香餌多、莫動客星煩帝座、好將孤棹泝天下、花陰散帙伴胡蝶、松下草玄閣薜蘿、不識人間歌吹海、幾回凝夢到南柯、

寄佐玄遷讀書平安正法山

華園天子駕龍遊、地布黃金玉架樓、聞子讀書仙世界、層雲隔望帝王州、一尊風月人如夢、萬里烟波雁自愁、幾向鄉園懷樂事、鱸魚上釣護江秋、

遙題日州彈琴松

夢中晃寫洞天月、風裏孤松帝所琴、爲是幽人語仙府、分明昨夜踏雲尋、

送藤卯作

行矣男兒志、生來在四方、衰遲殘日短、離恨暮雲長、匣劍拭星斗、玉簫試鳳皇、舞衣被書錦、待爾入歸裝、

贈人還瀛城

西溟數十百青螺、仙客暫停乘漢槎、洞府昔曾餐白雪、篆文今尙試丹砂、泮宮文物傳寰宇、雄鎭風聲推世家、好折海南梅一朶、瀛城春色醉流霞、

雪後喜田伯龍至 丙午

遠從天姥攜風月、夜度邯鄲江上雪、江風吹雪雪新歇、城樓日射金銀闕、此中有詩淸透骨、投來雪華照人髮、余亦何度邯鄲雪、高向天姥弄風月、

題畫西施

越溪采蓮後、紅顏長不老、不嘗蓮心苦、唯對蓮花好、

訪串春卿

臨水樓臺花盡發、琴尊期醉故人月、五馬昨日停轡看、莫掃春風滿階雪、

僧菴

松偃龍臥地、石峙虎蹲蹊、碧眼一僧在、結茅此處棲、鎖雲藏遁跡、搖月汲清溪、心認再尋路、絕巘疊峯西、

諸葛武侯賛

一潛一躍、以時出處、終吹炎德之餘燼、爭義於勢之去、

贈藤德輿、德輿將來住此鄉

天涯爲不奈情何、欲取雲衣伴薜蘿、自此池塘芳草夢、無勞夜夜度煙波、

奉謁

邦君

去歲營中襲故侯、就封古鎮稻粱秋、蒼生久有雲霓望、白首今看竹馬遊、宗社謨猷本鄒魯、郊原金鼓試貔貅、從茲萬里東朝水、長向扶桑捧日浮、

夏日謁

君侯而還、渥恩便賜馬

延見從容任狂態、辭階驄馬代蒲輪、空原野草好風露、不妨金鞍引世塵、

君侯不察晉之駑鈍、欲見者久矣、惟以晉之老、憐其勞筋力、待杖黎出山、延見之路寢、語而前席、繼賜茶焉、飲膳飛至、乙夜下階、其就舍也、賜燭、近臣送之、將還山也、曰、我欲以籃輿送女、聞其病注、是以命驄馬、詩言此事、

梅園詩集卷之下　終

題梅園詩集後

永松君彝者。予之壻也。天明丙午。與男黃鶴。遊于浪華。持此稿而去。今年戊申。又如浪華。携其所鏤而還。曰願藏諸家塾。以省同志筆研之勞。嗟呼於老父敝帚之謗。則有自此始。於君彝孝友之厚。則有於此加。

洞仙老人　識

梅園詩稿

宿山寺 延享元甲子

雲外諸天近。猿啼山寂寞。夜深人不眠。月中松子落。

寄人 延享二乙丑

年華流水兩悠悠。湖海風烟戀舊遊。琴上高山江上月。相思一夜倚西樓。

發字佐口號

世能無奈別離何。路上誰憐千里歌。從此鄉音日應少。吳橋西去亂山多。

聞笛

江上誰家玉笛聲。寒流將咽鳥將鳴。淸風一夜關山月。吹盡鄉園無限情。

飮馬長城窟行

飮馬長城窟。衆中無一言。平生一匕首。自許報君恩。

秋夜書懷 延享三丙寅

海上烟波夢。樓中風雨秋。悠悠千里客。可未問刀頭。消息雁難到。光陰水易流。凄凄霜露重。遙憶敝貂裘。

閨情

爲將機上淚。寄與隴頭人。自信金閨月。不如邊地春。

寄賀子登 子登時喪父

晨昏事去感流年。素月凄風雪後天。相憶無由到門弔。爲君吟斷招魂篇。

春夜步雪遊山寺 延享四丁卯

空山古路雪初晴。多暇相携入化城。雙樹凝華春自靜。閒庭留月夜偏淸。孤雲暗傍香烟出。繡帳高懸銀燭明。來往平生幽興熟。休敎向曉起鐘聲。

宿山家

谷暗煙埋樹。水淸虹飮流。登仙路應近。雲半嘯獼猴。

寄高君秉

日本之西海色開。潮聲遠自浙江來。驚濤八月兼天湧、彩筆遙思杖叔才。

送人之京、兼寄桑路芸　寬延元戊辰

一曲離歌楊柳新、從玆各自可着春、爲言十載京華客、舊苑鶯花似待人。

寄藤不識

飛花澹蕩柳婆娑、今日風光意若何、雙鬢去經草後變。餘寒白雪曲中多。相思空自託鴻鯉、多病祇餘長薜蘿、楊子亭前春好處、未期携酒遠相過。

中秋大貞廟

金殿深沈玉樹中。瑠璃水色與天通、鵲橋宛轉嫦娥度、不覺仙槎到月宮。

相送曲

班馬鳴兮郭門頭、雲悠悠兮道路修、富貴有命春幾時。君何爲兮萬里遊、

侯家月

長空八月夜珠團、朱邸金門曉覺寒、地接蓬萊天咫尺。風傳仙樂落闌干。

同後藤子遊興導寺

路入松間端靄中。玲瓏珠樹隔龍宮。更敎碁局能留客。爲許詩人來繫驄。清梵聲從天上落。疎鐘響過下方空。招提可是遊仙地。驅石何須望海東。

歲暮對雪有懷又步前韻寄賀子登

月落澄潭天倒開、雪花深鎖月中臺、扁舟佳興多難得、彩筆雄篇知幾回。已是漢宮頒曆後、誰從庾嶺寄梅來。忽忽白馬頻過隙。坐對靑尊感慨催。

答賀子登見答又用前韻時當除夜

各地江山思不開、無由携手共憑臺、新年霞入椒盃動、半夜春隨漏回、宿雁驚風衝雪起、故人過臘寄書來。近來詩句殊淸麗、知向寒梅花底催。

山中　寬延二己巳

可是武陵路、桃花數樹春、溪邊幾家住、知有避秦人。

落梅花

雪裡寒梅色。遙思隴上春、隔牆吹玉笛、可是薄情人。

與綾部子遊姫島 予已再遊

煙波渺渺海天開。蜃氣動搖一片臺。魚鰕非關張翰去。孤舟還伴李膺回。寄言花鳥休相訝。爲愛江山屢往來。仙島無由摘靈藥。不堪將夕棹歌催。

過慈藏院

昨夜梧桐一葉霜。麒麟背上冷爐香。佛前唯有袈裟在。珠樹秋風起上方。

海邊望月

雲山無窮好。秋光滿海濱。肅條明月裡。誰是采珠人。

隔海望故鄕 寛延三庚午

隔海雲山杳。黄昏憶倚閭。短長經驛路。圓缺感蟾蜍。千里親孤劍。幾篇愧五車。歸鴻無意緒。不待我裁書。

送矢長映遊京

此去問君何處遊。長風輕御木蘭舟。且携書劍浮東海。焉得琴尊醉此樓。水接仙山秋不斷。天横銀漢月西流。明珠江上大如斗。爲向驪龍窟裡求。

過慈藏院有感 寶曆元辛未

胡蝶夢殘事已非。徘徊不覺淚沾衣。間花似解無人惜。日暮春風隨意飛。

宮怨四時 春

粧鏡臺前花謝技。嬋妍自覺誤蛾眉。縱教君寵能長保。春色人間復幾時。

同 夏

團扇題詩夜未央。輕羅裁月憶君王。瑤階珠樹秋如至。爭耐凄風玉漏長。

同 冬

添得羅衣玉筯行。十年不惹御爐香。纔餘鵁帳中月。空伴鴛鴦瓦上霜。

題畵

扉掩南山下。林間三經斜。如逢黄菊發。携酒就陶家。

中秋無月有感 去年中秋晴宴伯章先生花王園先生纔没

想得西園月。抱琴上水樓。何知乘白鶴。還更向滄州。雨暗魚龍起。風驚砧杵愁。愁懷與雲物。不復去

年秋。

悵惘詞

燕巢曾巢梁。花開曾開枝。如何臨卭客。白頭不相思。

宿山中

更攬雲臥夢。秋聲起玉枏。淅瀝葉隨風。認作殘夜雨。

寄綾惟勤

重到曾遊地。復如新別時。綵衣違故里。殘柳記前期。雁遠書難寄。秋高氣易悲。空懸江上月。杳杳照相思。

章臺柳　寶曆二壬申

綠拂章臺靄夕暉。楊花三月逐征衣。春風縱使吹成雪。莫遣東西相背飛。

寄臧弁禪師

袈裟誰是最相親。遙憶給孤園裡春。明月應臨靑玉案。烟霞長傍舊綸巾。年花自覺工催老。文采焉知能動人。雙鯉迢迢江水濶。幾封書札到風塵。

戲贈僧　僧名寶州性多病懶墮不能打鉢耕田身不著一錢欲買地建寺矣又善飲酒鄕人笑其迂濶州安然不驚揚眉抵掌語廣州地大寺

起臺未得買山錢。抱病懶耕種秫田。典得袈裟日縱酒。諸天初有飲中仙。

折楊柳

諸君莫折陌頭柳。不怨折去死君手。柳絮隨風化雪飛。花鳥園中相思否。

隻燕　寶曆三癸酉

遠向風烟託此身。含泥遶棟爲誰頻。百花深處將雛日。孤影空餘闌外春。

秋日送別

衰柳春復靑。奈何此別後。臨別一無言。凄其秖分手。

村行　寶曆五乙亥

一帶潺湲水。苔痕倚淺沙。虹懸晴景麗。川曲夕陽斜。新綠雜雲樹。殘紅過雨花。村翁晩留客。杯底引流霞。

春歸

殘花溪畔草初肥。水自東流春自歸。胡蝶風前相逐去。夜來還入夢中飛。

雨歇　寶曆六丙子

一卷玄經水滿溪。殘花落盡草萋萋。春隨風雨歸何處。新樹陰中鳥鳳啼。

雪夜憶子登

詩酒相思不得同。滿空晴雪自玲瓏。山陰一夜好風月。夢在扁舟乘興中

分題月夜泛舟　寶曆七丁丑

人間天上與秋期。流水孤舟雨霽時。回棹廣寒宮裡去。嫦娥此夕弄珠隨。

輓三浦義行翁

住世七十有五年。金成丹竈冷餘烟。中霄乘霍人何處。月暗空原雨雪天。

櫻花　寶曆九己卯

爲是僊宮不易攀。天教此種遺人間。花開時伴嫦娥步。似人蓬萊第一山。

哭河三圭　寶曆十庚辰

河野三圭。諱璋。有志才。從予遊矣。今年庚辰正月。予不幸而失怙。三圭來助喪事。既而與內兄某。遊長崎。予此故不能送之。五月八日訃至。曰以四月二十七日。沒于長崎。二十八日。葬之於禪林寺。法諱豐山富宗信士云。時年二十四

憂裡茫茫無語別。眼中日日望君回。曾期龍窟探珠到。何意鯉魚含訃來。春月秋風總是恨。肥雲豐樹兩催哀。天邊枯骨誰相吊。夢取蘋蘩哭夜臺。

墓下

有父有父在泉下。有兄有兄在泉下。有姊有姊在泉下。有妹有妹在泉下。縱令東流能西流。焉得舊歡回新愁。老母七十晞擁兒。伶俜形容雪垂頭。更無晨昏奉先考。木葉霜華獨自掃。我漸四十無一子。竊恐墳墓委荒草。空將涕淚謝大恩。雨雪紛兮日色昏。終身願作守墳人。身後是非任乾坤。老所母養弟安擁節之女

冬夜書感

短髮青燈夜色深。風傳殘漏沈沈歎娛已附東流水。難奈邯鄲夢後心

阿上人舊菴

鶗鴂雨散漸斜陽。獨坐空林感轉長。鬢髮別來多作雪。袈裟歸去十經霜。地下起君懷得寫。琴中無友調偏傷。欲讀數行題壁字。淚痕先已點衣裳。

采蓮曲

裁得清江一片霞。留春羅綺屬西家。芙蓉深處人相隔。知妒舟中解語花。

寄佐藤子 寶曆十一辛巳

烟波縹緲海東山。更向比中采藥還。玉樹春風花發處。金丹留與寄人間。

送僧林淨

吟嘯何傷無暫同。前期不及入秋風。草芳驛路青春遠。花落離筵晚日紅。海裡樓臺時出沒。波間島嶼或西東。杳然千里浮盃去。人在銀河明月中。

山家

柴荊半鎖絕風塵。百尺長松靜四隣。臘後濁醪釀得馥。簾前晴雪畫成新。山家自有煮芹美。天子焉知炙背春。門外一川清如璧。飮牛還似避堯人。

送友人 寶曆十二壬午

狂風與霖雨。春光寂寞晚。離情不可言。落花流水遠。

新竹

不淺此君憐我情。綠陰長日滿階清。凌雲漸有化龍氣。裁節未成來鳳聲。風度窗中聞驟雨。烟開簾外報新晴。隣人偶贈志憂物。好向琅玕影裡傾。

送書生

尊前一曲奈驪駒。回首秋雲入望孤。他時且約山中贈。携我江邊如月珠。

胡笳曲 寶曆十三癸未

悲笳不可聽。胡沙渺迷道。陣雲慘不開。陰風吹白草。

與津君見訪限韻 和和元甲申

春深洞口鎖煙霞。留飮煙霞洞口家。重向煙霞思洞口。溪流猶自有桃花。

過宰府泰賀上人

青靄紫雲古梵宮。袈裟暫許醉春風。天涯還結相思夢。閒院良霄華月中。

古戰場

一自王門容虎狼。幾年四海起波浪。陣雲猶結天邊雨。殺氣長留沙上霜。盛世元逢堯日月。中州久保漢封疆。草莱竊有獻芹志。願以南山壽聖皇。

又

枯骨空原散不收。沉沉落日暮雲愁。寃魂猶自將風雨。沙上時時洒髑髏。

上北斗峰　明和二乙酉

北斗天咫尺。下界餘斜暉。失却人間路。處處白雲飛。

送隱者　明和三丙戌

興來無復問西東。疑是餐霞又乘風。家在水清山麗處。補陀峯下白雲中。

贈失恃人　明和四丁亥

風木蕭蕭意轉悲。悲君憔悴泣相思。秋來依舊倚門月。不似高堂携橘時。

宿山寺

行分紫翠步蒼苔。危石清溪路轉回。香閣凌空如湧出。孤峯擁霧似飛來。風吹松樹琴傳樂。雪滿仙宮玉作臺。最是沙羅林裏月。夜深時自向人開。

重宿山寺

重分紫翠步蒼苔。更著白雲臥梵臺。明月沙羅林裏色。夜深猶自向人開。

壽膓管水六十翁今年自幕府賜金　明和五戊子

壺中天地醉行盃。甲子人間復幾回。鼇背仙山横霧出。桃源流水濺雲來。黄金已自上臺落。丹竈何勞向老開。須是風清月明處。時時騎鶴往蓬萊。

送清末君

分手寒山雪未晴。哀猿鳴雁入離聲。相思不與浮雲斷。遠自隨風到郡城。

寄懷熊道節

罷官幾載伴沙鷗。夢遶五城十二樓。四極山前烟水濶。白雲明月憶扁舟。

寄喬文學

別時爲我投明月。明月出處深溟渤。爲是淸光動連城。夜夜相望驪龍窟。

送淸禪師聞本師病歸省防州

倉皇正分手。後會定何時。詩卷辭遊侶。病床問本師。雲追金錫遠。月入衲衣隨。從此相思色。長應夢裏期。

送順公　明和七庚寅

峨眉山上拜文殊。飛錫鎭西舊帝都。秋色茫茫海無限。知臨龍窟弄驪珠。

春夜邂逅綾監郡於孖山　安永二癸巳

東亭通夕亦滄洲。明發官期駐不留。山淺正宜迎素月。流淸長好飮黃牛。回雁聲兼餘雪起。靑春色入紫霞浮。壺中亦有閑天地。近逐君還醉水樓。

別坂東里歸琵琶島

閑摺長懸待再遊。烟霞望入琵琶洲。天低四極山如撐。水浸三關地似浮。數字雁歸江上樹。三聲猿叫月中樓。桃花不及人間好。可憶春流繋釣舟。

春思

織錦未成日下紗。歸飛啞啞欲棲鴉。白玉窗中夜難奈。闌干月上海棠花。

夜別存公

衣裡淸光素月天。忽飛金錫躡雲烟。不知何夜隨綠影。又向邯鄲江上懸。

憶喬文學

昨夜春風起城闕。春風吹雪花盡發。相思不得掉孤舟。辜負山陰雪裡月。

春暮寄懷弓俊平

春鴻歸欲盡。不見故人書。可繋相思去。爲傳近何如。

喜玄珠師見訪

錫飛遙件宿雲還。訪我風烟雨後山。袈裟相遇人如月。淸興爭能過等閒。

楚宮怨

漏盡鏡前曙色分。嬋娟殘月對紛紛。東風一夜花隨水。腸斷陽臺夢後雲。

田俊卿携詩至。因思舊盟。

酒邊風驅暑。吟裡月牽秋。因弄花生筆。愈羞雪滿頭。歡娛變雲物。聚散急川流。誰是同盟者。多登天畔樓

夏夜留俊卿

清酌松間月。數盃引君飲。細聽風裡濤。早晩又高枕。

送池邊生還鶴崎

有客忽乘黃鶴歸。風烟遙指舊庭闈。相思千里命仙駕。又向雲山深處飛。

雨夜與周平圍棊。賭詩終輸一首

賭棊浮白入詩篇。日月人間移幾年。爲起蟄龍驅風雨。知吾久託橘中仙。

偶成

林中看易罷。清風涼若秋。夜深人未寐。明月浴溪流。

夢覺

夢覺幽林殘日微。疎松陰落白雲飛。烟霞猶認人間路。直自蓬萊渡海歸。

聞綾監郡隔山宿諸田村。有此寄。

同臥仙觀雲。吏勞各夢神。似知想君處。蟲聲滿四隣。

與僧訪串春卿席上賦

水自白雲瀉。雲山畫不如。山蟠似龍臥。中有故人居。珙樹窺簾月。清香滿架書。陶家興未熟。待我就黃花。

中秋無月。待間字。

驚風飛雨度青山。空負琴尊咏月還。天上桂枝秋不許。風前折取向人間。

同

秋光不肯放塵寰。暮雨隨風灑樹間。縱使驪龍蟠黑處。待吾將取美珠還。

送俊平

秋鴻不繫病來書。風雨江山思有餘。起色高樓秋半處。蚌中明月夜何如。

僧房喫飯

更隨香積飯。得飽醍醐味。秋色本滿廬。不似人間貴。

九日過農原

雨意空原望不分。天香風送襲人裙。無由一過瑤池飲。回首仙山五色雲。

訪僧法蘭

五雲深鎖金仙都。月滿樓臺懸畫圖。不有先容辨無價。定應孤劍按驪珠。

日田憶在家兒

期汝數日返。及到一旬過。秋風衡門月。定應待阿爺。

登慈眼山 在日田

欲試蘇門嘯。躡雲舊化城。長松落天籟。總是鸞鳳聲。

別藤井大簡

離堂一夕恨難禁。預想風烟別後心。縱使相思不相隔。白雲長鎖亂山深

日田別楢原子

何事君西日。令我翻何東。會離太草草。一聲暮天鴻。

天念寺權現鳥居銘

維此仙蹤。遠自養老。仰夫神德。天門之道。社鼓其鏜。盥薦黍稻。有凶斯感。誠敬以保。

步庭公別寧首坐之韶。同寄別

芙蓉南指布金臺。雲樹千山飛錫回。別後寶瓶門月影。氷心留得待君來。庭公詩。有更向寶瓶次處來。寶瓶蓋玄楞宮。指北而言。

悼杉崎君

忽聽君仙去。猶疑傳信非。遠容恍若見。扶病送吾歸。凄風萱草夢。飛雨老萊衣。如何華表鶴。不向人間飛。

春日即事

洞門雲樹鎖蒼茫。不取桃花栽路傍。始覺人間猶未遠。垂楊春繫紫鴛鴦

送綾仲善。兼寄在京諸友。

憑將欸乃入驪駒。月露江山開畫圖。縱放清光隨意好。無心垂手探龍珠。

長夏偶作

青山夾水雲擁閭。柴門晝閉處士廬。散人二三來就閑。共讀漆園老吏書。讀罷紫翠落晩霞。迎月松間對煮茶。圖南任他垂天翼。夢遶後園胡蝶華。

送弓崎俊平

圖書難奈抱痾身。不得孖山雲水親。他日垂楊生左肘。隨風吹入後園春

寺川翁八十壽詞

尋花獨往吟月還。路在青螺若畫間。與物爲春春不盡。餘年好養舊江山。

松陰題禪房

爲厭世人到。柴荆閉上頭。松蔭遮不得。光引滿階秋。

聞琵琶送人

山雲海樹欲離情。一夜回頭望月明。坐中有弄琵琶客。彈作秋風出塞聲。

送豐禎祥從邦君而東。寄島子淵。兼謝其爲我請田山二君之詩歌見貽。

處處清砧楓欲紅。送君迢遞去關東。仙山晴雲青天外。函谷曉鷄秋夢中。千里風雲隨五馬。三年消息託孤鴻。雙珠探得遙相贈。令我還攀白兎宮。

答喬鳳渚見寄三首。用原韻

奔波如日月。風烟擁登臺。正喜海城雁。遠自繫書來。（來詩。徒爲相思切。秋風愁上臺。望中數行雁。無一繫書來。）

送藤九一

邯鄲江上雁南歸。四極山前憶舊屏。一片離情秋不限。白雲遙逐馬蹄飛。

送長田明卿歸省

栞書曾伴舊烏巾。又攬班衣將省親。歸到江山風雪暮。寒梅吹入婉容春。

送恬公

飛錫無由放霍追。白雲遙自與君隨。梅花夫上春應早。待向人間折一枝

步雪暮歸　安永四乙未

山陰掉雪夜深回。圖畫誰家屛障開。歸時失却來時路。依稀終入畫中來。

雨中經普明寺

四顧渾無地。雲霧踏幾重。天風颯如海。龍宮度昏鐘。

暮歸逢順公見訪

袈裟不識走風塵。路入青山殘雨春。拂我閒雲迎月坐。教人却作主中賓。

春日奉和敬所先生見寄高韻

平生安蹇劣。無由賣虛名。晝靜看雲坐。夜清吟月行。元非濟川具。豈動羨魚情。桃李龍門色。春風多送迎。

溝梨水翁七十壽詞

行開八袠宴晴軒。瓜葛德門引子孫。晝裏江山閑日月。壺中栞酒別乾坤。簷花數樹紅低檻。園柳千條綠拂尊。溪口漁舟春不繫。從君我亦問仙源。

春日酬喬彥駿客歲見寄之作。謹步高韻

舊年雙鬢雪。春暮轉相侵。總爲苦吟懶。久孤交態深。雲晴花傍几。風暖鳥和琴。各地無君贈。何披遙夜襟。

三月晦日舅氏宅

地下人間路不同。空追胡蝶送東風。鳥啼花散春如夢。無限傷心落照中。

贈山周禎（周禎遊學于京。舊冬其孺人沒。訃至。今春歸鄉。）

憐汝倉皇出帝闕。關山日夜望家門。鶴飛華表無消息。雨灑班衣有淚痕。千里駕空懷橘夢。孤舟啼月倚閭思。春風莫怨違湯藥。元爲斷機辭故園。

讀順公留別之詩。至扁舟錦字一聯。慨然有感。因繼爲小律以贈之云

扁舟明日天涯去。錦字何時海上傳。別後如吟到此句。豈堪湖海望風煙。

贈庭公寫晉之所著玄語。還丹州。

爲君持贈筌中魚。脫却筌中縱所如。何處江山秋不遍。歸裝莫帶檐頭書。

逢東里

一載相逢復一載。離思秋風灑湖海。　奇絕吾亦探江山。客舍邯鄲置酒待。

暘城別高田生

海樹山雪路不同。秋風分袂各西東。停盃借問君歸處。笑指芙蓉紫翠中。

悼清香山

松樹每來倚。鳳鳴嘯外雲。重來颯如雨。不似舊時聞。

聞佐藤蕩蕩在浪華。因以賤寄二首。

別來回首夢中春。滿樹秋聲落木新。蹤跡風煙長不改。江山似待遠游人。

脇君需題拜三十三處觀音大士紀行之後。賦以贈之

大悲海上有津梁。遍訪仙蹤返故鄉。月出斷山紫浮動。幽人遙拜白毫光。

歲暮喜山田運禎至山

風雪寒山暮。遙思江上梅。故情不相忘。時折一枝來。

二子山尋豪公不在　安永五丙申

不遣錫飛待霍飛。紺園鐘暮欲何依。龍鱗松暗寒春色。玉蕋桃殘明夕暉。鳥囀法華大悲窟。風飄具葉舊禪扉。機緣未熟人間路。歸去相追雲傍衣。

送然公還龍山。兼寄串春鄉。

凌雲鐵鉢夕陽催。幾處烟霞獨袖回。賴有龍山舊盟在。殘花留得待同來。

送豪上人重赴叡山

琵琶湖上紫芙蓉。一味醍醐百尺松。坐斷十年空契潤。歸來三月末從容。降龍鉢自青天落。擲海盃追白鷺從。惜別無由永今夕。又是風烟千萬重。

送長田子穎

天傾銀漢海如流。一片仙查入斗牛。玉女峰前好一風月。從茲又隔幾三秋。

雨中留長田子穎語

漲琴流水響前灘。淫雨好爲投轄歡。晴後白雲相贈別。隨風逐子入長安。

贈岡主務自東都來在本藩

苞桑元自屬君曹。萬里分憂涉海濤。野老不知舟揖急。分雲坐石讀離騷。

送人

停酒將如今夕何。片帆明日隔山河。海樹峽烟無限色。寫盡離情入棹歌。

下暗谷

雲封暗谷雨猶殘。危石深松夏自寒。若有探源人問我。桃花定作武陵看

過如意菴題扇

捉得溪中月。弄爲握裏珠。淸凉別世界。應暫假吾徒

哭敬所先生

走上暮門日欲晡。追懷往事坐踟躕。元期携酒問奇字。豈意焚香泣隙駒。雲慘風催花落雨。海翻波捧月明珠。口碑何用佗山石。一片氷心白玉壺。

期日州僧

鐵鉢不留還向西。月輪長逐杖頭低。明珠南海秋多少。來曰紫烟衣裏携。

送池子昌歸省鶴崎

衰遲不似少年時。意氣翩翩輕別離。長笛一聲人欲遠。亂山千轉夢難隨。應須騎鶴探瀛海。莫道忘羊多路岐。縱爲晨昏辭我去。淸風明月必相思。

寄淨圓律師

金錫隨緣掛。靈鷲仙山陰。白雲解相贈。應識故人心。

送山運貞歸府中

不探驪龍頷下來。淸光何得掌中開。江天秋近如珠月。憶子相携時上臺。

哭豊俊貞名潛字士龍

仙鶴淸風難少留。遙山纖月冷江流。江流不洗人間怨。天上新修白玉樓。

悼荒子祥

仙期人間促。名登玉室中。月出入不返。鶴唳遠天風。

與容談造物

秋風昨夜度江城。漸覺水紋珍簟淸。送盡白雲迎素月。松間恍聽鳳凰鳴。

庭公草菴見月

與君今霄月。期上翻經樓。洞口龍歸雲宿壑。時見

明月上簾鈎。君自來去無所着。看月又將去丹丘。
長空一輪無價珠。露滴白雲衣上浮。溪水好注蓮
花漏。明年月隔兩地秋。

如意菴坐月

雙樹秋霖歇。長空孤雲滅。四隣闃無人。松間坐明
月。

弔末綱兄失恃

一路松間月。何堪秋氣悲。愁聲若風雨。不似倚門
時。

客夜

松鶴沙鷗爲作隣。尊中更畳洞庭春。當闌雲物
如畫。不見山陰雪後人。

歲暮送柳公山

玉樹清風雪如花。溪橋相送立殘月。殘月清風春
相思。溪橋莫使花如雪。

喜僧寂然還

飄件閒雲孤月回。寒衣拂雪奮園梅。天上瓊花春
自早。相思爲折一枝來。

歲暮喜田明卿至

手自江南折一枝。青山雪後問相知。烟霞回首春
風近。花底黄鸝把酒巵。

別庭公　安永六丁酉

幾年笑語附東流。君一欲歸我欲留。相對春宵華
月短。難添漏水引離愁。

宿小串監郡宅

絶無塵中趣。遶簷梅花春。風度幽夢覺。明月曉窺
人。

春暮梅園小集

雨過林園春欲空。琴尊好是與君同。飛花有恨隨
胡蝶。群鷺無心伴釣翁。雲樹畫成懸檻外。乾坤縮
得入壺中。相逢不說人間事。一嘯長松鸞鳳風。

壽藤井君阿母八十

廣樂風傳獻壽時。闌前碧水是瑤池。桃花結子三
千載。從此行將請一枝。

贈酒

一罇高興屬誰人。飛花如錦草如茵。寄語青州舊

從事。去從胡蝶夢中人。

翫月贈席上諸友

蟾宮不肯鎖玲瓏。金闕瓊樓開望中。風送天香飄沆瀣。露含殘雨滴梧桐。埋山雲見移瀛海。凭檻人疑坐碧空。爲約明年各無事。琴書又此願相同。

送多鴛陽樸還府內

江山欲曙紫氤氳。南指芙蓉出海雲。何日片帆懸畫裏。滄浪一曲得尋君。

喜庭禪師自丹到（師丹人。在豐久矣。今茲春還。有書曰。來年又遊豐焉。既而至焉）

期待來年回竹錫。何由今夜得相逢。相逢疑是相思夢。猶恐林風送曙鐘。

還山寄懷喬文學及帆井管南諸君子

交歡三日復離群。石上烟蘿坐紫氛。鴻外青山應望我。松間明月苦思君。無由鷄黍留人語。空使芝蘭滿袖薰。意緒蒼茫收不得。江天夢色入風雲。

送廣田伯龍

花開千里抱琴到。爲慰今朝分手難。頼有江雲解離怨。隨君一夜度邯鄲。

成佛郁天滿宮神門銘

端笏丹闕。垂跡紫陽。有梅在階。仰德之香。

高橋子宅。賦得宮燕（時主人爲其令嗣迎婦）

試探春色啓金屏。桃李花開香滿衣。中有一雙新燕子。翩翩長遶畫梁飛。

初夏喜串春卿見訪

休言咫尺舊相隣。不得含盃共惜春。別後龍山新樹月。中宵亦有依蘭人。

積雨

積雨人不到。寂寞倒酒缸。青苔如有意。傍我讀書窗。

捲簾

欲試前溪水深淺。捲簾曙雲蒼茫間。誰人夜負一半去。令我對此海上山。

以書代簡答西肥衛上人

來雁繫書度萬山。書中爲許向仙寰。祇林豫掃閑雲待。幽洞松蘿踏月攀。

寄遠州順禪人

悠悠来卜再逢期。看月秋來深所思。雙鯉嚫書度滄海。爲看看月憶君詩。

宴藤子睦惜別 此時予將西遊

此行不復多時別。不用含盃所感生。唯爲離聲酒醒急。悲風落木不堪情。

將遊瓊浦。酬寺川子病中見別之作。

虹架殘雲明滅間。蒼茫紫鎖夕陽山。將探沆瀣乘風去。待自芙蓉踏雪還。

一夜川

遠自豐中瀉出谿。玉垂宮花咽如啼。不隨鄉夢東歸去。唯自潸潸流向西。

登絃宣寺呈衛上人

幾經山水度風烟。可是與師有宿緣。雲裏樓臺臨大海。畫中洲渚沒長天。閑花秋馥思詩榻。慧日晴懸講法筵。不得幽期屢遊此。躊躇絕景惜衰年。

留別山本翁 安永七戊戌

盃酒天涯暫得同。還憐萍水又隨風。衰遲此別難重會。只以袈交寄夢中。

留別衛上人

豈不思重到。回頭奈夕暉。袈裟難欲別。補杵轉催歸。雲樹低天際。風雲晤海圻。未期松浦雁。幾日繫書飛。

冬日筑倉持村見藤

不問花時節。不知花主人。徒尋花所在。想像憶餘春。

慰串梅卿 君時娶配而膝上有三子

不向人間說會期。仙宮風雪夜何其。清香曉冷梅花月。猶似羅浮結夢時。

又

征途荏苒人不住。愁中烏兎年欲暮。鶴飛仙山路轉深。孤月空臨三珠樹。

壽賀九六十

皤皤鬢髮映盃清。滿堂絲竹雪初晴。領取江山無限畫。好以風月送餘生。

壽綾富坂先生六十

不騫南指碧芙蓉。取入壽杯起獻公。未掉煙波泛湖上。別開天地坐壺中。梅花當宴偸春發。松樹覆庭與鶴同。無復絃歌入塵事。似追鷗鷺學仙翁。

猪日從弓崎玉渚　安永八己亥

一杯欲引醉青春。言以南山壽老親。元自風光易隨水。鶯花誰是抱琴人。

山家

犬鷄聲隔白雲幽。細路人烟斷岸頭。瀟洒誰占清絕地。浸梅春水洗香流。

散步

若無杖扶老。可那此風光。輕烟嫩柳淡。飛花流水香。看山探畫意。摘藥弄青囊。還期爲催滯。鐘聲報夕陽。

春夜飮市原子。値雨

交歡未罄曉將催。青眼不辭酒數回。風雨林亭春盡處。會離關意惜餘盃。

黑津崎詩並序

巳亥夏四月。與諸子遊黑津。臨海出碕。碕上松覆碕下石疊。明媚清絕。殆非人境。烟波天闊。群峯競秀。青螺白鷗。宛在紫翠微茫之中。傾酒爲口占小詩。其詩

危石虎蹲猊立中。驚濤終日和長風。長風可送扁舟去。同過仙人白玉宮。

諸子請命名於此松。予曰鳳鳴松。人問其說。予笑留一絕

仙松過雨濕青霄。涼露和霞酌一瓢。我醉將牽華胥夢。天風吹入鳳凰簫。

送廣田伯龍

路轉雲遮遠望愁。離盃心恐滯重遊。日從蜃氣搖中出。山向沙鷗沒處浮。別後得詩應附鯉。秋來見月定憑樓。圖書歸去窗前草。不謝人間萬戶侯。

贈淨圓師

想君棲禪地。遙望小芙蓉。雲烟遮不盡。認作飛來峯。

間適贈長田俊卿

幽棲人若問。長日閉柴扉。掬水秋生手。焚香霧傍

衣。雲山忘黻冕。星月試璿璣。流螢如有意。故故照書飛。

夏夜

滿架圖書倦日長。誰將手枕入黃粱。覺來雨洗松蘿月。秋動淸風一夜涼。

秋日來浦串氏莊

窓前孤嶼畫圖晩。岸上淸風蘆荻穐。不向人間弄機事。相追鷗鷺泛虛舟。

水鳥捕魚圖贊 幷引

晋平生不好鷹鷂之圖。惡其殺伐之象也。工藤子日寄此圖需贊。有感。書此以還

一機動兮萬機行。天無意兮觀厥成。

井梧亭

井上碧梧葉。淸風夜動秋。明月窺幽夢。時時到枕頭。

獨行

曙色千山雪漸晴。行鞭瘦馬出荒城。枯碁一局迷殘夢。書卷百年偸太平。花鳥待春將勸醉。烟霞何處不關情。此中無物羈人得。好伴閑雲老我生。

春日過如意菴憶庭公 安永九庚子

如意庵前夕日斜。依稀談笑入袈裟。孤鴻影沒空中字。雙鬢霜留臘後花。山月有情懸遠夢。海波何處問浮査。隨緣金錫春迢遞。回首風煙感物華。

席上贈大船禪師

久見倚門月。海西憶老親。浮盃還舊里。飛錫訪幽人。一別水漂絮。逢霜滿巾。因悲明發別。幾許復經春。

過巖関村

似逐漁郎遠問津。此中如有避秦人。犬鷄聲在雲間聽。夾岸桃花流水春。

送綾監郡使浪華

懸帆落日彩雲間。回首白鷗浮水閑。舟揖何時凌波浪。西棲醉月上東山。

赤松村

不識赤松子。何時此地遊。人淳如太古。月朗似丹丘。出沒隨雲樹。高低石流。無心與物競。自覺入滄

州。

聞子規

綠楊拂枕影參差。時有子規啼上枝。還似繫舟明月岸。家山萬里夢驚時。

雨中喜小串春卿見訪

過雨高灘噴雪寒。淸風五月拂闌干。山雲一夜驅炎熱。洗却千峰與客看。

壽寺島洞雲老人七十

覆庭新竹掃闌松。鶴髮老翁白玉鍾。請見南山不騫色。雲間畫出紫芙蓉。

謝吉武文洞兄見惠自製瑇瑁笠

風飄錦籜滿庭時。拾爲故人縫所思。溪雨山烟幽獨暮。扶筇好詠憶君詩。

以扇子別玄仙

百尺藤蘿枕澗樓。何時又入白雲遊。山中難覓人間贈。分得松陰一榻秋。

中秋無月得烟字

金闕瓊樓隔暮烟。嫦娥密自鎖嬋娟。秋聲偏濺芭蕉雨。夜色遙迷鴻雁天。龍頷懸珠眠海底。桂枝含露濕盃前。明月似憐詞客老。不放淸光照鬢邊。

義善師至

光陰幾隔舊袈裟。回首匡廬入夢賒。方外風烟秋不盡。白雲携得到陶家。

佐玄仙到

紅樹靑山書不如。行吟秋色到茅廬。鶴飛露濕松陰靜。共讀黃牛角上書。

代莊童子送玄仙歸鄕。

賓雁南飛籬菊黃。江山羨子促歸裝。歸時定有庭闈問。唯向寒雲望故鄕。

予將遊陽城喬文學以詩促之曰。靑牛何日發梅園。縹渺東天紫氣屯。不是函關相望切。携來早託五千言。因賦此以答

龍吟相憶隔江山。匣裏寒光明月環。紫氣不關飲牛者。豐城望入斗牛間。

尋喬鳳渚

江山幾載負金蘭。人道詞壇盟已寒。夜夜孤魂慣

懸月。今霄還作夢中看。

與諸子同集淸伯武宅

屋後芙蓉始雨晴。樓前圖書此相迎。琴書同受升平賜。唉語還忘衰暮情。筆底雲煙動春雪。醉鄉日月入蓬瀛。新知舊識皆青眼。四海何嘆少弟兄。

送高山見貞聞長姉之訃音歸省

此行無力省庭闈。泣向悲風魂欲飛。雨雪春分原上暮。不堪吹灑老萊衣。

喜池邊子昌八坂子玉之見訪

青燈白髮舊幽棲。譚到隣鷄報曉啼。雪月多年讀書處。明珠莫惜過江攜。

送池邊子還鶴崎

明滅夕陽樹。蒼茫殘雨山。心隨寒雁去。日送故人還。閉戶有君叩。換愁慰我閑。烟波解離怨。不使夢魂關。

題山元瑞西王母圖

瑤池不隔五雲西。青鳥時來庭樹啼。何用窺園學東朔。仙桃一顆爲君攜。

予訪喬鳳渚於暘城。又過本齋。飲於興南臺。別後有詩見寄。爲次其韻以奉答。因有憶舊遊

暘城餘興又偸閑。取醉林亭霜月間。珠迸銀盤夜剖蚌。霞搖樽酒春生顏。梅花夢隔江頭路。玉樹雲埋雪後山。憶昔君期喬鳳渚。此中連日罄歡還。

歲暮別塾中諸友

直爲歲暮分手去。鄉園風物好迎春。旅裝明日還家解。不識何攜獻老親。

渡邊生爲其大人開六十之壽莚

聞說老萊字。開宴唱千秋。趨庭多日月。長好弄雛遊。

羅經銘

圓外直內。旁礴之畫。立靡攸韮。向知攸擇。弗昭昭信。弗冥冥易。維規維矩。愿斯頑石。

春夜飮孤松亭 天明元辛丑

琥珀之盃白玉舟。百花釀出酒如流。流霞不作人間醉。恍在華胥國裏遊。

題梅

寒梅一樹舊荊扉。斜月空庭玉欲飛。瀟灑都無軒冕態。幽香風裏襲人衣。

松木君孺人七十。以詩伸賀

烟霞無恙古稀筵。盃在紫荊花底傳。自是婉容春不老。好將雞黍送餘年。

送守恭

風烟無處不關情。春盡長空孤雁鳴。日送閒雲若回首。相思牛角桂書耕。

贈菅嘉卿

飛花芳草滿園中。日暮空思碧玉驄。不識元非金谷種。錯臨流水恨東風。

寄田伯龍

春來詩幾首。琴酒誰往還。望極鳥跡滅。蒼茫日暮山。日暮山在伯龍之鄉

送坂東里

與子十餘日。掌中弄地珠。談玄令鬼哭。放活鼓神遊。遠望山遮出。離情水載浮。相期聚螢火。散帙語西樓。

夏夜

雲烟日暮動微雷。驅熱淸風江上臺。可是芙蓉經雨發。傍闌時送暗香來。

雨中

藤蘿松老處。倚檻獨吟詩。燕子非無意。送雨濡硯池。

山中坐雨

靑苔日日上階新。積雨空山折角巾。風動柴扉似人到。淸香一炷玉麒麟。

賦得逢故鄉人

繫舟中有故鄉人。同是風波一葉身。何事十年無事信。及聞淸淚灑衣巾。

書生對月眠

飄然飛寫御天風。萬里長空白玉宮。白玉宮中桂花朶。歸時折得待分公。

又雨

又將飛雨過幽棲。一帶奔波雪下溪。暮色雲間山

出沒。松聲風裏鳳高低。

望嶽

六月炎風氣若蒸。孤峰突兀火雲升。此中自有千尋谷。當底何無泉結氷。

與公錫到時逢立秋

縹緲飛凫落草堂。爲移塵榻逐凄涼。秋風先灑雙蓬鬢。明月空臨敝錦囊。幾度煩君投白璧。曾遊回首感黃粱。松蘿影裏還何夕。高枕同斯幽夢長。

泉福寺

鬱密深沈松自關。午時鐘度古僊寰。老槐新竹長短影。濃霧淡烟多少山。氣紫知龍蟠水底。風清聞鶴唳天間。登臨未盡三千界。須向蘇迷盧上攀。

贈安節

庭樹秋風動。露華多後園。空餘懷橘夢。長泣斷機恩。

題寒山子圖

一幅畫圖眞咲貌。携來索我得詩留。世間多少寒山子。月印波間夜半秋。

秋夜串監郡宅有感 君時失偶

秋陰不是尋常夕。雨灑閒庭蟋蟀啼。何耐空餘枕頭藥。嫦娥獨入月中棲。

秋日書感

憶與袈裟倚此樓。黃花白髮感曾遊。鈴聲風裏無尋處。露冷東籬摘後秋。

月夜小集

爲喜同遊尋舊盟。鬢毛還對桂花明。當闌飲盡盃中月。莫怪吟懷入骨清。

寄淸伯武君 並引

淸伯武君者日出藩之下大夫也。令茲辛丑季春携令郎卓之君赴東都之邸。蓋公命也。卓之君弱冠伶俐而好學焉。從事藩之鳳渚喬先生。又嘗從予而遊焉。其在家溫淸不懈。壎箎相和。初春之末過我。而別臨分手而唯思衰老之不能相待。詎知二豎窺其膏肓。五月纊屬。七月訃達。鵬鷁不成垂天之翼。徒使之摶無何有之鄉。

嗚呼哀哉伯武君之情可知焉。

衰病歸來想愈癯。幾行淸淚別江都。驚風吹破一炊夢。長路空思千里駒。天上玉樓迎彩筆。人間大藥隔蓬壺。斑衣春淺弄雛處。腸斷秋天月若珠。

江樓書感

十年懷抱共誰語。望裏關山雲埋處。欲向來鴻求信書。相呼又過蘆花去。

送誦道師玖珠郡省老夫人

鄕樹千里雲鎖處。秋風遙憶倚門人。倚門明月幾回缺。每聞鴻雁定傷神。

山中訪故人

南北東西總是山。一條溪水流其間。其間修竹長松老。愛此壺中天地閒。
愛此壺中天地閒。林端明月未言還。還期滯得仙家酒。能引春紅上老顏。
能引春紅上老顏。醉來自卜入仙寰。仙寰許否重遊此。南北東西總是山。

送韓子諒歸中津 並序 天明二壬寅

生遠遊六年今昏始還家喜其具慶以勉惜日之愛

斷機縱割愛。堂上幾相思。客夢苦猿叫。歸心嫌鳥遲。東風吹竹葉。細雨濕花枝。莫忘看雲起。嘗嗤陟岵詩。

送柳元龍學醫南遊

手探滄海幾時東。皆決雲山泛碧空。逆浪衝波莫言惡。禁方元自閉龍宮。

美人晝眠和池玄宣

白玉僊人花滿洞。金縷銀針雙彩鳳。倦時胡蝶知尋春。去入東風倚闌夢。

憶渡正卿廬

身背風雲間釣鱸。豫山東折海西隅。滿牀圖籍隣三島。一片孤舟入五湖。紅葉浦邊秋濯錦。驪龍窟裏夜沈珠。相思此景未相過。惆悵煙霞負玉壺。

菅桐廬暮

陳跡長餘風物同。古碑苔上舊花宮。仙蕭鶴背吹何處。落日浮雲縹渺中。

夏夜飲藤子睦林亭

美酒金杯和月飲。十洲三島展圖看。風凉似護人中聖。過雨長松露滴闌。

早秋送山堅楨遊熊灘兼寄柳元龍

陰蛩早傍井闌啼。風動碧梧秋已凄。孤劍不堪天外去。明珠唯待袖中携。離筵數處驚雲散。長笛誰家吹月低。到日如逢柳生道。斜陽望斷萬峯西。

送豐田素貞

會期不識是何時。懶向林間折一枝。目盡天南秋水遠。難題紅葉寄相思。（二子溪之末謂秋水其濱海之地謂秋浦又謂紅葉浦）

題鐘馗圖

終南進士辨虛耗。一片精靈護御牀。竊恐霓裳宴闌處。猶窺玉笛近君王。

大船禪師之書並詩自濃至報曰東遊兩年今春復返玉壺山

探盡東南雲水間。衲衣開再入壺山。詩來莫怪清侵骨。曾摘芙蓉白雪還。

答足立俊貞（來詩以美人比老醜結以纏綿之意）

相思贈我掌中珠。千里秋空清影孤。遵路未能同執手。長留明月繫羅襦。

小監郡幽尋俯謝

圖書隱丹壑。輿馬起蒼生。出處無同跡。喊洋豈隔聲。壺中開日月。塵外一蓬瀛。趨府相逢有。幽期早晚成。

喜藤運平見訪

尊前白髮對雙垂。回首春風竹馬時。天假餘年送華月。琴書相抱盡幽期。

高原子硯匣銘（並引）

豐之國東。一郡六鄉。山龍蟠于其間焉。峰峰或面而起。流流多背而走。巃嵷然而邃焉。養老戊午有緇徒仁聞者。大闢金仙窟於此。曰延力寺。蓋蔓延一百餘區。逮今天門壬寅。相去一千六十有五年。以久矣。鎮西郡官使。日高鎮臺揖斐君佐。高原君。得其故柱於馬城里之練若。爲研匣。以充文房之雅賞。其理順而澤。其質堅而緻。愛護得處。豈限其往焉哉

銘曰

伏就繩墨。仰撑棟梁。引重致遠。牽此舊章。

歲暮得奥南臺病中見寄書幷詩稿有感賦以奉贈

行行雙鯉腹中書。片月孤雲遠憶予。霜老堅氷生斷岸。林昏饑鳥噪荒墟。閑中詩賦新珠玉。病裏丹砂舊藥爐。未得扁舟乘興去。江城風雪夜何如。

歲暮寄池子昌

夢盡美人遠。風雪滿茅廬。借問杪冬月。江上梅何如。

晩行遇雪　天明三癸卯

晩吹從空落。陰雲著地生。蒼茫無所宿。恍惚似浮瀛。林影棲鴉暗。雪花點鬢明。中途梵宮在。天半吼華鯨。

喜豐田佐藤二生見訪

遠自憐衰病。相携問艸萊。朝來春雨好。留客促花開。

春日懷諸觀

春來未見白雲衣。悵望白雲思錫飛。芳草不侵定中夢。梅花零落舊柴扉。

緣珠怨

唯留一死向君家。何以殊思背日斜。日暮香魂多少怨。春風長有墜樓花。

春登陳山　山在國東安岐鄕是黒田如水圍城時麾下所屯之處

春樹禽相和。春田水亂流。春山待雨歇。吟杖入雲浮。城暖麋眠草。海蒸蜃結樓。洲洲人莫問。吾道一青牛。

寶陀寺望田原氏之墟

一帶青溪雨岸苔。青山欲盡出樓臺。風花總似從天墜。仙鹿還看入苑來。烟樹高低黄麥秀。鳴禽上下白楊哀。當時曾是布金處。唯有樵人說月回。

海上眺望次藤德輿韻

茫茫渺渺海將晴。一半殘虹通紫淸。鷗外千山夕陽遠。五雲明滅接蓬瀛。

寄原篤亭自東武還遇大故

此行元惻惻。執手別慈親。暫負倚門暮。唯期調膳春。

歸程風浪隔。悵望物華新。何耐招魂涙。闌干灑卜鄰。

烏夜啼

相呼東去相呼西。丹鳳城頭落月低。悧有離愁同妾者。長留金井碧梧啼。

送藤德輿還鄉

四極峯前萬頃烟。輕舟短棹自神僊。天回銀漢殘星沒。波洗扶桑出日懸。琴酒相携何歲月。風雲不斷遠山川。圖書勝佩黃金印。歸去秋耕種玉田。

送野仙桂還鄉

刀頭月轉轆轤環。一夕西風客欲還。他日邯鄲江上望。峨眉秋色白雲間。

寒汀舍

瀟灑平生漉酒巾。如今猶見葛天民。蒹葭遙引濯纓水。鷗鷺長隨放艇人。雪後諸峰無不玉。爐中伏火別藏春。間雲明月好高枕。地與華胥相作隣。

玉女島　姫島

嬋娟玉女島。徒傳玉女名。玉容不可見。纖月沈間生。

步虛詞

百尺天壇華露淸。風中環佩步虛聲。烟波皓月三山路。鶴在五雲深處鳴。

梅花

年華不改舊風姿。記得曾從海上移。傷心一段無人識。素影淸香月上枝。

杵城春望

梵樓仙閣水雲間。幾載吟筇此往還。羞以衰容對春色。烟花畫出若眉山。

花下贈藤子睦

幾旬相隔抱琴人。恨殺雲山不作隣。若向花間憐我老。時時來往惜餘春。

送僧還濃之臨濘山 臨濘山大船寺在加茂郡僧則祖慶

見說臨濘舊法臺。烟霞淸絕鎖崔嵬。雲連白帝城邊湧。川過驪駒山畔來。別後夢魂懸月谿。天涯歸興値花開。斷機縱有慈恩重。何不春風憶渡盃。大仙寺之前川遠自信之駒岳來直下尾之犬城山去犬山詞人擬之於白帝城云

春日寄興南臺　君時失撐殊

憂君病後長清臞。强自加餐倚杖無。風雨易驚胡蝶夢。雲烟難覓老龍珠。三春涕淚將雛燕。十載音容過隙駒。自古仙山閉靈藥。憑闌獨對月明孤。

春來

數盡窮愁日。擬遣花鳥情。愁心如春草。又逐東風生。

玄梁禪師自肥來暫在我豐泉福寺賦此奉贈

不識底因緣。數來與此筵。日移傾蓋影。路憶渡盃天。棲息深松柏。津梁濶海烟。因悲法輪轉。無復奉金仙。

暮春

落魄人間興漸闌。任佗琴酒對春殘。東風一夜吹花去。長在愁人鬢畔看。

贈野澤水翁　翁嘗喪二女去冬又喪季子

阿姊共從王母飮。阿郎苑裏又竊桃。阿翁不卜携歸日。泣望仙禽鳴九皐。

致語一部贈鼇洲禪師

紫翠雲深甘露門。憶貪佛日上祇園。天花都率宮中下。獅子栴檀林裏蹲。多病難攀開士坐。相思遠寄潛夫論。溪聲不隔廣長舌。千里神交有夢魂。

題人之盆松

誰擲千歲翠。託之白雲根。白雲不可攀。清風時拂軒。好占閑日月。住此別乾坤。

對月有感

去歲牀頭抱病妻。今年牀外聽蟲啼。孤魂不記人間路。長在嫦娥宮裏棲。

送清末子之東武

楊柳堤邊葉下時。寒蟬風笛晩相悲。東關此去三千里。自顧衰容惜折枝。

九日送小串君

賓雁孤舟天一涯。可堪叢菊露中斜。白頭青眼願無事。濁酒明年醉此花。

山上眺望代人賦

欲望鄕園樹。試上孤峯上。孤峯白雲多。鄕樹不可

望。

馬上

馬首佳山水。閑吟向夕陽。老來淡世味。病後空詩囊。得意停鞭處。窮愁遣興長。秋林開錦繡。晚籟入笙簧。

送川仲行還山陽

萬壑凄風秋氣哀。扁舟一夜憶親回。東南初日扶桑上。西北驚濤渤海來。紅樹青山開錦繡。江烟蜃霧動樓臺。不知何處追飛雁。千里音書問老萊。

喜與公見訪時君致仕

尊前白雪映㗛盃。洞口陰雲迎客開。寒花晴向幽林發。夜月晴從碧海來。杜筠青山隔簾爽。濯纓流水傍闌回。他時如著羊裘到。灘上烟霞分釣臺。

病後訪川子眞

風濤未許入蓬萊。還到江南香早梅。知謫人間猶有日。數携山上白雲來。

聞笛送人

吹笛楓葉岸。楓葉墜江濱。休向秋風弄。別有離愁人。

遊妙經寺

清癯老金仙。趺坐舊精舍。精舍靄沉沉。殘日隔林射。留我香積飯。醍醐向我瀉。山影落江波。從君問空假。慈航繫在岸。鹿車晚欲駕。還期紫雲中。天華繽紛下。

送與公錫遊平安

繁絃急管莫想催。千里雲山別思哀。借問皇城新燕子。含泥何處好樓臺。

送與公錫之京兼寄龍草廬 天明五乙巳

扶桑日出霧初晴。萬丈晴虹通玉京。環佩淸風君子國。簫韶遺韻鳳凰城。雲烟遙望蟠龍氣。碧落久傳鳴鶴聲。君自彩毫搖五嶽。東山華月憶詩盟。

遊仙曲送佐玄遷

桃花玉母宅。春風深彩雲。寄語東方朔。愁來幸相分。

喜平元 西歸見訪

爲是天涯相見難。翻疑夢裏謦交歡。明朝江海風

烟別。又作天涯夢裏看。

初逢脇子喜

白鶴峯陰海岸口。老蚌多年無人剖。今朝試向水底探。中有明珠大如斗。

島君見訪

淸言數日慰衰顏。長憶携琴屢往還。芳樹春風盃底月。閒雲流水畫中山。

泝流還廬

一路村閭幽洞西。手自栽桃臨碧溪。獨泝淸流見花下。始知身在武陵樓。（孖溪之下山迫路嶮臨流有一洞曰鬼城）

少年行

一匹青驄七尺軀。仕官不問執金吾。揚鞭直向樓蘭去。腰下吳鈎玉轆轤。

洗硯

燕泥淸曉墜龍淵。百花陰裏洗淸泉。不向毫端起風雨。空沈水底動雲烟。

望夫石

長餘明月若刀環。望斷烟波縹緲間。不作行雲相伴去。江邊空立待人還。

賦得岳陽樓

孤劍飄零一葉舟。天涯始上岳陽樓。半江殘日含吳越。萬頃烟波涵斗牛。瑟調似知湘女怨。秋聲猶訴楚臣哀。鳳凰池畔新鵷鷺。不知漁竿伴白鷗。

喜倉龍渚至兼惜別

何時琴酒重相同。空谷足音華月中。取醉無由永今夕。願將春夢寄東風。

答熊藩馬彥章見寄

聞說朱門月。恩光滿曳裾。西園逐軒蓋。東壁伴圖書。偶自青雲路。遙懷玄草廬。天涯交可結。江上有雙魚。

別藤卯作

一從琴酒醉花開。春自相思到草萊。白首明年得無恙。待君琴酒踏花來。

題孖山華柱

峰接紫微。仰轉衆星皆共北。觀臨蒼海。望道百川遠朝東。

藤伊作見訪　伊作與予同嘗久病

將同乘鶴去、有謫返人間。杖外烟霞遠。松陰日月閑。忘機隨白鷺。採藥入青山。衰暮短幽期。携琴數往還。

玉女島

牛背笛聲斷、何處求環佩。嬋娟江上山。淡籠舊時黛。

聽猿巖

沙羅雙樹老、石磴入紫清。凭闌待明月。風外斷猿鳴。

獅子窟

探入獅子窟。天風落巖後。不見獅子蹲。隱聞獅子吼。

小門山

闌干十二重。闌外白玉峰。誰假摩詰手。雪裏畫芙容。

夏日

枕上暫假鳳凰翼。搏出人間蒼茫色。風吹殘夢涼如秋。悠然又之華胥國。

哭坂子玉

子玉者。鶴崎之人。從予遊者。二十年。天明癸卯。守歲於梅園。甲辰秋又來續書於此。將去曰。冬間又避塵於此。既而杳絕消息。今茲乙巳初秋其姪某來曰。子玉玄冬喪母。今春遊熊本而得病。輿而還焉。五月二十七日沒。辭世詞曰。天命明德。三十八年。飄身一曲。聖道湛然。病革也。謂左右曰。扶我向孖山。左右扶向孖山。忽然而瞑。遺言以辭世之章。藏書一套。菓誼一封遺予。嗚呼子玉年少於我。二十有五。我將祭於子玉。何意使我祭子玉。時方干蘭盆會。時俗。招魂之節。酌玄酒焚清香。哭詩一首。聊代祭文。以尙魂之髣髴來嚮。

去年衰柳縮枝時。淑酒梅園作後期。歲暮鯉魚江上斷。春來胡蝶夢中疑。九重泉路有黃橋。萬里仙山無紫芝。不意殘生憔悴淚。今朝還灑祭君辭。

絕句

何不開書帙。百尺松陰樓。畏日藏遠樹。晩風引早秋。

天女洞

洞蘿如瓔珞。洞雲紫霏微。山花與青靄。結爲天女衣。

秋夜別子睦

獨掃松陰榻。夜夜怨月遲。今夜怨月早。月出與君離。

夢亡妻

孤魂長不忘人間。昨夜分明入夢還。孔雀東南相背處。嫦娥霄漢若爲攀。暫時愛護平生態。十分淸羸永訣顏。枕上烟霞天縹緲。白雲蒼海阻三山。

看月寄綱松齊臥病

縱然沈痾送生涯。愛護洞房人若花。爲憶荒園風露裏。徘徊夜夜望嫦娥。

秋夜留串春卿

濁酒青罎舊羽觴。茱萸猶有摘餘囊。闌前一夜荒園菊。時自西來風送香。

題某神祠之聯

禍福在己。天顧其誠。日鑑在上。淑慝維明。

寄原篤亭

雲鎖柴門松覆闌。懶眠唯向此中安。南華一卷眞間事。又跨黃牛傍草看。

謝淸末子東歸惠華箋

曾從會稽郡。遠到扶桑津。雲樹微茫筆。華禽不斷春。入門拜慈母。披褱問幽人。空對驚風雨。羞無泣鬼神。

松本子居喪賦以吊慰

空山日夕有相傳。萱草露寒人上天。憶昔苦辛嘗藥處。悲風吹入蓼莪篇。

串春卿宅成

淸白節難持。高明鬼易窺。堂成愛階卑。酒醇想民思。新主懇農諭。舊君戒石詞。分憂無失墜。思意願相推。此藩四世之先龍溪公座右常書戒石銘以自警當君今歲就封數有懇農之諭

送小松子

相逢如舊識。相別動新愁。無復相逢日。離愁月下樓。

報阿州徵禪師

病妻別後出塵寰。二女見迎違故山。俗士不知禪搨趣。臨書漫自說人間。

藤卯作來云。多賀墨卿子以八月而沒。予聞之惕焉驚。驚定而淚從之。因賦一詩。託卯作生。以奠其靈之聞之。

科斗梵篆亦可疑。疑團元萌垂髫時。試傾乾坤探條理。因知人間未曾窺。靜掃几案任筆書。不求祿祿世人知。此草誤落墨卿手。問難心知不我欺。從是邯鄲江上鯉。春月秋風傳相思。昨夜藤生逢我語。墨卿已葬澧水湄。墨卿少我應十歲。不意仙遊躐先期。請子歸到供雞絮。爲向墓前誦此辭。

送藤卯作代男黃鶴賦

君吹橫笛我吹笙。相送西樓風月淸。何又西樓坐風月。君吹橫笛我吹笙。

賦得春思贈毛可貞 天明六丙午

花散鳥啼桃李園。微茫初月照黃昏。唯餘裙帶同心結。芳草晴烟寄夢魂。

訪島君祚

春城昨夜雨和風。試覓桃花雲後紅。行渡淸流移步望。碧雞聲在白雲中。

喜水軒

不識迸泉夜滿瀛。餘香殘燭對翻經。闌前晴泛眞如月。起汲淸光收水瓶。

訪阿部生病

一雙黃鶴白雲間。好向仙宮問大還。新樹陰中懸榻待。紫芝行摘過吾山。

小串君將以歸省之次過予不至

柳陰堪繫馬。望望又斜暉。借問障泥錦。省親歸未歸。

聞藤成美之訃 成美者德輿之一字

已矣藤成美。當如此夕何。前月路上唉分手。道取枕衾來相過。元自彎山雲物好。願裁荷衣伴薛蘿。我喜從此相思夢。夜夜不復度烟波。江上昨夜風

雨惡誰知大澤奪龍蛇養雛不作垂天翼招魂徒啼回日戈身後詩篇好風月笛裏涕淚舊山河已矣藤成美當如此夕何

哭藤成美

藤生辭世漸三旬囊裡詩篇泣鬼神江上縱然月如昨不知誰復采珠人

壽山斗周六十

散髮傲塵世投綸眠釣臺連山巃背疊遠水鶴邊回手取忘憂物勸人長命盃不須問仙路窗外卽蓬萊

與諸子飲川子眞

紅塵紫陌暫偸閑携入松陰泉石間琴酒醉古別天地烟霞晴對好江山非梧時動微凉到宿鳥晚銜殘雨還吾亦幽棲憶猨鶴洞門蘿月待人攀

十六夜對月憶修齡

荻花楓葉雁來時孤月片雲多所思還喜淸光秋過半行人屈指近歸期

壽高橋孺人七十

詩書花冉首如蓬長伴嫦娥讀月中爲獻南山一盃壽孤松百尺起淸風

綾輔之從　公之東武

慈母手中線遊子身上衣臨行密密縫心恐遲遲歸吟此遊子吟悲君晨昏違關左龍蟠地山河千里圍中有將軍居節鉞護紫微從來尊垂拱閫外執萬機八百舊諸侯邸第擬帝畿吾　公此述職陽陽建龍旂龍旂淸風起四牡自騑騑　公之季盈缶神人爲相依喜君繼瓜瓞綿綿奉春暉願君崇令德無忝爾庭闈

綾串二君將從　公赴東武枉駕茅堂

天風彩鷁欲追陪回首富春憶釣臺紫騮應繫武昌柳黃菊暫同彭澤盃懷橘夢將雲水隔登樓望入斗牛開高堂各對倚門月想鄉向園衣錦回

島君祚見訪

飛寫相迎空裏舃洞門穊色白雲孤琴尊三日閑風月縮得乾坤入玉壺

熊文明南紀之人也毛人之所居蠻船之所

繫。名山大澤。足跡徧矣。以探珠於龍淵。采玉於崑岡。胸懷決洋。譚能驚人。實奇士也。天明丙午秋留于予數日。將經山陽而還家。賦此以爲別

明代衣冠沒胡國。　皇家圖籍入毛人。正浮瀛海堪探日。好向仙源試問津。萬里關河無斥候。四裔波浪靜烟塵。虞初幸遇昇平日。新志期君寄隱倫。

南瓜墜架。取贈塾生

架上一珠夜墜風。泥濘拂拭色青葱。無光不是連城色。留取丹心寄此中。

寄藤子睦悼其失掌珠

桂樹林頭月上時。滿天風雨令人悲。仙花將發廣寒闕。吹却秋香折一枝。

夢黃鶴

千山風露雁南飛。客子何邊聞搗衣。爲是思鄉情自切。夢魂先度海烟歸。

即事

避穀有眞訣。天壇如可攀。試將烹白石。或恐破朱顏。雪意雲埋樹。寒光日隔山。不從焦子睡。惆悵望仙寰。

憶與東齋

清香憶昔灑衣巾。江上梅花隔美人。自是仙山雲水遠。羅浮雪月夢中春。

冬夜憶勝子善

雪後青天白鶴峯。美人夜對玉芙蓉。芙蓉隔水人如玉。不得瑤臺迎月逢。

冬日喜島君祚至

相思遠寄一枝來。江上風光雪後梅。爲是清香帶烟月。教人一夜在瑤臺。

迎帛春卿賦因憶賢弟仙介從駕在東武時聞府下疫行

柴門舊鎖白雲幽。珠履新携明月遊。詩賦同憑青玉案。琴尊遙想紫貂裘。林間梅蘂雪猶閉。爐上香烟春欲浮。因祝風霜驅瘴癘。天吳護返使君舟。

會藤隱居於子睦山莊留連三日銜雨別

各地江山縮此中。琴書東道醉壺公。放春梅向尊

前發騎鶴遊從枕上通。夜入魚龍天黯澹。風呼鸞鳳雨空濛。朝來分取葛陂杖。他日相思又淩空。

歸途得詩郤寄藤子睦

入洞嘗石髓。出洞靄斜暉。主人別時贈。紛紛雲傍衣。

雪中別僧

清風吹雪曉霏霏。手持水瓶汲月歸。珠玉江山銀世界。天花亂點白雲衣。

歲暮書懷

白雪清風歲暮山。夢殘往事渺茫間。無情一夜梅花月。唯有東流去不還。

丁未元日　天明七丁未

先析梅花望海雲。稽顙拜手望吾君。邸中知淩玄冬雪。一樹春風含露薰。

題畫

疊山送雪出。流水過橋深。誰爲知音者。獨携無聲琴。

題荷亭

悠然凭闌坐。蓮花淨秋水。兒童喚屐屩。呼作周夫子。

訪川俊藏

黃鸝呼我舊村園。過雨埋山欲黃昏。好動夢魂伴胡蝶。花陰駐杖醉琴尊。

送賀千里辭梅園還卿

丹鼎煉金古幽洞。洞天有路入瀛洲。濯纓水自僊源瀉。種玉山懸烟月浮。世上文章鸚鵡賦。人間意氣鷫鸘裘。停鞭試見春園色。風散飛花動暮愁。

春日二三兄弟見訪

相逢無雞黍。春風冷一匏。唯此數盃酒。獨似君子交。

仙子園贈雙丫鬟

綠柳黃鸝仙子家。十三十四翫流霞。可憐春淺雙胡蝶。將傍誰人後苑花。

訪東野子

春風尋到故人居。醉顧衰容感有餘。百歲人間花底酒。江山雖好白駒徂。

訪堀池子

啼鸎舞蝶落花辰。置酒逢迎有故人。天以古　容
假我。花間又醉數回春

飲寒汀舍

城陰海崖久藏蹤。百尺垂蘿千尺松。孤枕晝牽胡
蝶夢。紫霞春湧仙人鍾。落花殘日隨流水。緣樹蒼
烟遶遠峰。余亦從來忌飛動。醉中緇易玩潛龍。

玅見祠

海潤難爲水。帶礪望中小。爲與帝坐通。不作蘇門
嘯。

杵城到清音亭

歸鴉殘日入烟霞。匹馬春風踏落花。唯惜靑山行
欲盡。吟鞭不覺到君家。

飲五畒亭

酌酒長松下。龍吟入天風。天風吹不已。龍影動盃
中。

題床前有水草床上無人唯置一柄扇畫

君今何處之。牀前水草好。牀上明月淸如珠。併留
淸風待君到。

冒雨還山

欲試淩空路臨風鞭雨龍。波濤驚萬頃。烟霧合千
重。不辨塵寰色。如聞都率鐘。故山矯首處。露出碧
芙蓉。

見淸伯武見鏡驚老之作有感

任他明鏡久朦朧。鏡底羞逢鶴髮翁。從前悔我驅
騏驥。春月秋風過夢中。

遊仙曲

月殿雲廊花滿蹊。玉盤天酒客相携。靑松陰鎻神
仙窟。中有雙雙海鶴栖。

枯魚渡河泣

懸水三千仭。洄潏誰敢入。眞龍負風雲。長抱明珠
蟄。發發陽喬魚。相逐香餌集。一旦上香餌。發發何
可及。上蔡兔眠穩。華亭鶴唳急。不見口啣索。枯魚
渡河泣。

送甫公

靑山明月好烟霞。君自浮盃似上査。放鶴難追入

空錫。春風南轉白牛車。

蘭

孤根託絕崖。宿霧滴淸露。山履不逢人。只聞幽香度。

悼英菴川子眞 並序

日遊市中。與君飲。別後六日。得其書披緘。則告我永訣以訴掌珠之幼也。其墨淋漓。如未乾。予見大驚。驚定而淚滴滴而下。因憶君之往事。艸角之日。顯禪師者。携入山陽。終負笈於京師。既而親老。還侍養於膝下。未幾。以善于神農氏之事。有公府之辟。君固不巧宦。又退釣港口。文酒以自娛焉。嗚呼君之就木。一女未嫁。二子猶幼。夫人秋氏守空牀。顧我年踰君已十有三。桑楡雖難期。而殘喘猶引於世。唯願不負友誼于平生。爲賦絕九章。聊慰地下之靈。

負笈嘗藏五嶽圖。煙波皓月入江湖。西山落日雙親遠。囊儲丹砂辭帝都。

仙掌玉露錬丹鼎。宿酒入間醒未醒。宦興漸闌思海鷗。又把漁竿放野艇。

二三巾寫得相同。五畝松陰坐晚風。左手持螯右斟酒。憶搖龍影弄盃中。

青眼別來裁六日。池塘夢傍故人居。等閒曾解風雲色。不意今朝泣此書。

宿昔酣歌物外遊。欲思飛雨灑西棲。春風胡蝶夢中酒。明月烟波江上舟。

只合三珠樹底棲。鸞簫聲轉曉河低。同心不結冷裙帶。人在嫦娥影裏啼。

昨夜驚風驅雨過。閨中夜色月如何。思携膝下如花子。啼桃靑燈念彌陀。

百載晨昏事早非。紫荊花底露沾衣。枕頭猶特殘更夢。華表前邊有鶴歸。

我與介郎得聚螢。殘年扶病可繙經。因將此語焚香告。泉下有靈來到聽。

竹枝詞

芙蓉載載老西灣。燕子年年知社還。一任秋陰隨

意鎖。青天望斷鳳凰山。

秋閨思

丹鳳城上秋月明。丹鳳城裏秋風驚。秋風時卷梧葉落。絡緯夜傍井闌鳴。君王愛馬思苜蓿。下天金鼓振北平。鴛鴦繡期偕老。盧龍絕塞隔死生。君王長在看月殿。金箭銀壺夜幾更。秋風吹到御宴否。千門萬戶擣衣聲。

途中寄佐玄遷

紅楓映如濯。駐馬飲清溪。爽籟碧空落。秋陰曠野低。離情人磋切。遠目送鴻迷。昨日含盃處。江上千樹西。

答烏君祚重陽見懷之作

佳辰黄菊動相思。錦字煩君摘後詩。此日龍山孟嘉病。唯餘烏帽任風吹

路上送別口號

分袂荒原日欲晡。蒼茫烟樹墨模糊。隔川空翠山如黛。畫得灞橋驢上圖。

猩猩賛

或出畫需賛開觀之猩猩著衣帶把盃其體甚閑雅書此以還

飲酒溫克其儀循循。于嗟獸耶人耶。載號載呶亂我籩豆。于嗟人耶獸耶。

病示二子

昇平長足養無能。高枕山雲遶座層。愛爾紫荊花樹好。忘余蒼鬢雪霜增。清癯頗類松間鶴。閑夢猶餘風裏燈。自古龍門波浪惡。不須辛苦曝腮登。

狹野里

候霽修山屐。西阜問所知。燒痕春尚淺。落照日徐遲。松挺淩雲標。蘿懸帶雪絲。此中幽意適。宿鳥擇深枝。

折柳別君祚

殘烟斜雨麴塵絲。折縮垂條贈別離。栽置門前流水畔。春風每動定相思。

酬綾輔之折梅見寄

相憶相通各地神。羅浮雪月一枝春。月中環佩杳何處。夢破清風香襲人。

春園聞鶯

鶯語春園日欲斜。蛾眉淡掃抱琵琶。金門銀鑰通天路。飛在瑤階第一花。

喜賀來子見訪

飛花深夕陽。犬吠白雲鄉。匹馬馱焦尾。一奚提錦囊。煎茶烟遶鼎。酌酒月沈觴。遙望西山爽。幽期待菊黃。

侍宴藥壽亭應命得間字晩來遇雨

盃泛流霞琥珀殷。紅回春色上衰顔。闌前水漾人烟動。雲裏鐘催宿鳥還。玉管如傳鳳凰調。黃金難償畫圓山。莫愁向夕雨遮望。明日鶯花滿樹間。

春山

探盡後山好。又向前山好。前山又前山。猶藏幾山好。

楓江惜春得春字

鬢絲如雪映盃新。感以蜉蝣託此身。寄語楓江好華月。向來猶屬幾回春。

待綾輔之

待君仙觀峰上雪。待君仙觀峰下花。花飛雨歇青楓暗。獨坐清陰讀五車。

題西王母圖

周家天子好遠遊。輿駕西征崑崙丘。竹書紀年曰。周穆王十二年。冬十月。王北巡狩。遂征犬戎。十七年王西征崑崙丘。見西王母。其年西王母來朝。賓于昭宮。西王母山在其間。父老置酒迎華騮。張華博物志曰。周穆王八駿。赤驥。飛黃。白蟻。華騮。騄耳。騧騟。渠黃。盜驪。吹笙鼓簧瑤池水。白圭玄璧朝天子。穆天子傳曰。丁巳天子西征。癸亥至于西王母之邦。吉日甲子。天子賓于西王母。乃執白圭玄璧以見西王母。好獻錦組百純。云云。西王母再拜受之。乙丑天子觴西王母于瑤池之上。西王母爲天子謠曰。白雲在天。山陵自出。道里悠遠。山川間之。將子無死。尚能復來。天子遂驅升于弇山。乃紀其跡于弇山之石。而樹之槐。眉曰西王母之山。世民作憂以吟曰。北徂西土。爰居其野。虎豹爲群。於鵲與處。嘉命不遷。我惟帝女。天子大命而不可稱。顧世民之恩。流涕芔隕。吹笙鼓簧。中心翔翔。世民之子。唯天之望。其保戴勝善爲嘯。其形蓬髮含虎齒。爾雅釋地曰。觚竹。北戶。西王母。日下。謂之四荒。註曰。觚竹在北。北戶在南。西王母在西。日下在東。皆四方昏荒之國。疏曰。西王母者。山海西荒經云。西海之南。流沙之濱。赤水之後。黑水之前。有大山名崑崙之丘。有人戴勝虎齒。有尾穴處。名曰西王母。蓋其人以邦名之。邦以山名之。穆天子傳註曰。西王母如人。虎齒蓬髮。戴勝善嘯。按穆天子傳註如人二字。宜從山海經作有人。爾雅有尾之二字。宜依穆天子傳註削之。西王母唯西裔之人。爾西王母已近印度。蓬髮恐螺髮之類。相如大人賦。則曰吾乃今目睹西王母。皬然白首。戴勝而穴處兮。亦幸有三足烏爲之使。必長生若此而不死兮。雖濟萬世不足以喜。蓬髮虎齒豈異身。虎頭燕頷漢名臣。後漢書班超傳曰。超

行詣相者曰祭酒布衣諸生耳而當封侯萬里之外超間其狀相者指曰生燕頷虎頭飛而食肉此萬里侯相也。

谷神不死世誤讀。漫想鼎成騎龍人。

老子曰谷神不死是曰玄牝玄牝之門綿綿若存用之不動按列子引此全章云黃帝書曰史記漢武本紀曰汾陰巫錦得鼎帝迎鼎至耳泉。齋人公孫卿曰黃帝采首山銅鑄鼎於荊山下鼎成龍垂胡頷下迎黃帝黃帝上騎群臣後宮從上龍者七十餘人龍乃上去餘小臣不得上乃悉持龍頷龍頷拔隨黃帝之弓百姓仰望黃帝既上天乃抱其弓與龍胡頷號故後世因名其處曰鼎湖其弓曰烏號於是天子曰嗟乎吾誠得如黃帝視去妻子如脫躧耳乃拜卿爲郎東使候神於太室

漢帝駐蹕五柞宮。五柞宮中冷春風。

通鑑綱目曰。漢武後元二年春二月帝如五柞宮。立弗陵爲皇太子以霍光爲大司馬大將軍金日磾爲車騎將軍上官桀爲左將軍受遺詔輔少主帝崩

莫向海上覓仙氣。城樓臺殿生霧中。

史記天官書曰。海旁蜃氣象樓臺廣野氣成宮闕本草綱目曰蜃蛟之屬能吁氣成樓臺城郭之狀將而卻見名蜃樓亦曰海市物理小識曰泰山之市因霧而成或月一見當于霧中見城闕旌旗絃歌之聲最爲奇或以爲蜃氣非也又登州鎮太平樓臨海對島海市之起必由于茲每春秋之際天色微陰則見頃刻變幻。島下先涌白氣狀如奔潮河亭水榭應目而具云云葛暄曰氣映而物見霧自涌卽水氣上升也水能照物故其氣淸明上升者亦能照物。氣變幻則所之形亦變幻按我越之魚津藝之嚴島亦時見之邦人曰野狐林曰喜見城梵人曰乾闥婆城釋空海性靈集詠乾闥婆城喩曰海中嚴麗見城樓走馬行人南北東愚者忽觀爲有實智人能識假而空天堂佛閣入間殿似有還無與此同可咲嬰兒莫愛取能觀早住眞如宮

王母山碎仙女出。駕紫雲輦降帝室

竹書紀年曰西王母來朝是指西王母之邦人曰莊子太宗師爲得道者之名曰禺強得之立乎北極西王母得之坐乎少廣西王母之爲仙女自漢武始漢武內傳曰元封元年甲子登嵩山起道宮帝齋七日祠訖乃還閒居承華殿忽見一女子著靑衣語帝曰聞子降帝王之位而屢禱山嶽至七月七日王母暫來帝登延靈之臺王母乘紫雲之輦駕九色班龍而降

天廚氤氳清酒香。五嶽眞圖包錦囊。

同書曰王母自設天廚眞妙非常豐珍上果芳華百味紫芝葳蕤芬芳塡樏淸香之酒非地上之所有文曰帝見王母巾笈中有一卷書盛以紫錦囊王母出示曰此五嶽眞圖也道士執之經行山川百神群靈尊奉親迎欣子有心今以相與當深奉愼如事君父泄示凡夫必禍及也

盤盛仙桃如鴨卵。延靈臺上進君王。

同曰王母命侍女更索桃果須臾以玉盤盛仙桃七顆大和鴨卵形圓青色以呈王母母以四顆與帝三顆自食桃味甘美口有盈味帝食輒收其核王母問帝帝曰欲種之母曰此桃三千年一生實中夏地薄種之不生帝乃止

晩夏病中和脇子善自浪華還見寄韻

方牀珍簟月明中。鶴駕仙遊不得同。一葉將催秋
色到。微風先動老梧桐。

送淸水守業還浪華

如何不使淚痕斑。猶合文書携作閒。江海數勞遙
夢度。風潮終省老親還。抱琴細雨鶯花裏。放艇殘
雲雪月間。帆過上關若回首。六鄕皆似故鄕山。六卿在豐國東郡

七夕病中寄倉龍渚

嫦娥影落漏聲闌。牛女橋前風露寒。吾亦悲秋多感者。愁人此夜若爲看。

重別清水守業二首

楊柳春風八百橋。浩然歸思發蘭橈。相追欲結楊州夢。鶴背聲遙白玉簫。

明日歸帆是攝陽。秋風何事入衣裳。雲海一千三百八。比之離恨不爲長。

奉送　邦君之東覲

雲烟一夜遶闕昏。時見蟄龍出水翔。爕理陰陽論國本。扶持日月向天門。君侯述職將東旆。野老矯頭侍返轅。好是行風行雨處。携歸恩露灑西原。

別矢穀卿

西風明發解行舟。悵望何邊寫別愁。渺渺蒼蒼秋不斷。目求飛鴈倚江樓。

病中歲暮

倒著接羅鞭馬回。習家花鳥好池臺。夢驚輾轉重衾枕。觀去優游違酒盃。玄草青山垂白髮。壯心殘夜撥寒灰。不知餘命春無恙。猶向東風問野梅。

歲暮謝荒卷氏惠家釀白酒時予在牀蓐

甕中封沅瀣。銀漢曉天霜。桂樹月邊露。梅花雪裏香。謝君憐病骨。爲我發金漿。春意歸枯草。芳菲行滿塘。

野君昌庵萱堂八十壽詞　寛政元己酉

高堂獻壽醉慈親。竹葉桃花相映新。愛日懸知日深日。遊絲晴動彩衣春。

送僧還駿清見寺

波浪呑天幾雲夢。星槎拂漢一仙州。軒懸姑射千年雪。門對滄溟萬里流。鼇嶼秋烟開皓月。龍池春水繫虛舟。他時唯在畫圖見。今日相從夢寐遊。（清見之山曰巨鼇清見之池曰古龍）

春日雪田大中携鯉訪病戲示二子

二兒枕上告春廻。餘雪唯知長未開。不識爾曹有祈否。故人携得鯉魚來。

贈田鳴鶴君時有行藏艱

天墻雲路踏青霄。俯見蒼烟橫海嶠。三十六宮珠樹月。春風何處不宜簫。

梅園文集目次

書

序

記

梅園文集

○書

與綾正菴書

長蘇有詩、曰、橫看成嶺側成峰、遠近高底無一同、不識廬山眞面目、只緣身在此山中、足已踏廬山、目親接廬山、而廬山猶難識焉、況以倏忽之年、燿燿之明、臨霄壤之茫茫乎、譚天之學、自軒轅氏以來、比比可數、惟橫看側望、遠測近覗、或以人窺天、或執質望氣、支離糢糊、荒唐護胜、無一得其眞面目者、譚天家取徵於何、推步也、有曆以來、數千百年、第獨步其間者、郭守敬一人爾、諺曰、疑藥與之巴豆、疑曆示之日蝕、晉癡矣、生來不解乘除、加以目疾不能辨彼疇疇、豈敢望彼分推秒步、指昊天於掌、哉、以諺言狗亦齡矣、則晉之癡也、亦踰四十、晉以在田間、識田間事、富農之多養僮僕者、其中必雜疲弱不能執來耜、不解播種者、指揮已成、功當一夫、足下之於數、沈默淵思、獲之天授、非有所受矣、俯仰觀察、有所自見、嘗記十年前、足下聞官置渾儀、準以定平、磁以正方、曰、渾儀所定平正方也、欲置渾儀、猶煩準磁、奚渾儀用爲、此時足下猶弱冠、語能驚人、以晉之無術觀於足下之精詣、則雲泥不啻、惟以晉之齡之長、末之藥、語則竭空空、晉癡也、不知爲足下寬容、傲然前席於譚天地、於是足下之精、晉雖未知之、而晉之情、得伸足下、是所疲弱不能執來耜、不解播種者、亦得容於庸作中乎、今茲九月朔丁卯、曆官不告蝕、足下去年、已斷然曰、明年九月、日當蝕、衆大半排之、小半疑之、親者惕然危之、一年荏苒、白駒早過、期日已至、晉亦與從遊諸弟、晨起待之、其日也、有雲蔽東、已而燿靈離地、漸上辰之初天、陰魄自西南衝、滾滾而大、過半猶進、欲去徘徊、若上弦之前、似下弦之後、望之薄雲經過之中、靉靆如月、眺之斷雲靑冥之際、雖爛爛而光彩慘澹、山川幽靄、若寒天之晨、似陰雨之昏、頃之復矣、初辰終已、蝕七分强、不差所測、於是乎、足下推步之精、雖婦女兒童、亦知之、粗聞之、足

下術不假郭氏之獨步、卓然別爲一家說、其說未成、深自韜、雖韜光彩露外、夫以倏忽之年、燿燿之明、臨芒芒天地、橫看側望、遠測近視、目不可恃、耳亦難信、其形未識、况察其所爲物、知其所爲道乎、於是譚天堪輿、縫掖老釋、醫卜星曆、爲方枘圓鑿焉、已爲方枘圓鑿焉、是以知未得天地眞面目焉、夫天地者、載華嶽不重、振河海不洩、小德川流、大德敦化、萬物並育、道並行、如四時之錯行、如日月之代明、奚不相容之有、詩云、有物有則、則也者、條理也、以條理觀物、如庖丁解牛、雖肯綮相結、奏刀騞然、惟其族、委曲綢繆、視止行遲、見微動力、亦靡所不謋然而解焉、惟於條理未明、或捕風繫影、不念鑿鑿者、簡髮數米者、不知坱坱、意足下之於數、放之於坱坱、而歸無數、分之於鑿鑿、而剖毫釐、於是、用之則不竭、推之則不差、推之事物、不覺鶻突矣、是所推天行於歷歷邪、非邪、非則已矣、非非、則癡者亦將子期于精者、如何稟受之薄、實沈屢爲祟、動輙令人膽墮、如今春、膏肓之二竪再見、皆指謂地下修文郎、惟天惜有才、死復蘇矣、豈翅吾輩之幸矣哉、自不識者觀之、足下之術、似至其奧焉、自顧猶必有未慊者、藥餌之勤、努力發秘、謹慶病之愈、歎其術之精、又求之於大成、近聞微恙小發、偏侍之下、霜露交至、天地幾人、伏希爲道自重、寶曆甲戌

報高軍八

所貽方圓生克二辨、伏讀數回、其言蕩蕩、雖不見其姓字、知是必高人矣。晉也、生于孖山、長于孖山、將老于孖山、未接四方高明之士、日延牧客樵叟、譚其所見可知矣。而不自量、以井蛙之見、著玄語數萬言、經年五回、換草十四、未能成之、癡亦甚矣。繼著贅語、未全成稿、謹讀所貽二辨、侶以晉之玄草、誤落高人之手、而舉其所謬而見誨者、高人之於人、厚哉至矣、晉雖未識其人、心深荷之、而足下欲晉又言其鄙衷、嗚呼晉又何言、夫洪洪天地、有哲有愚、所見亦有向有背、物之不齊、天地之情也。夫論至其極、則必舉天證之、我以天證之、則人亦以天證之、雖各證之於天、而天不言、退決之於人。

則人紛紛。其亦孰決之者。以其大者言之。則儒者不能伏浮屠氏於己之所是。浮屠氏不能伏儒者於己之所是。亘千古經萬里而今並存矣。我爲決之於天。天不言。決之於人。人紛者。其非邪。以其小者言之。則自朱陸鵞湖之論不合。朱徒不能屈陸徒。陸徒不能屈朱徒。亦引至今矣。我爲決之於天。天不言。決之於人。人紛者。其非邪。嗜苦人。深知苦之味。故不以苦易甘矣。嗜甘人。深知甘之味。故不以甘易苦矣。然而嗜苦之趣。不可施之於嗜甘之人矣。嗜甘之趣。不可施之於嗜苦之人矣。是天地之所以如斯之大也。晉自序贅語。曰。我說非于天地邪。人貶我也可。我說是于天地邪。人與我也可。我說是于天地邪。人貶我也誤。我說非于天地邪。人與我也惑。亦此意而所不敢自是。不敢質人也。昔者朱子與象山。論大極不合。往復數回。不能相服。朱子最後所報書曰。我日斯邁。而月斯征。各尊所聞。各行所知。亦可矣。無復望其必同也。晉雖不肖。由嘗已聞方圓生克等說。而不能愛之。發此論。則方圓生克之說。今何可使晉復遽信之。高人亦由已讀我玄語。而不愛之。發此辨。則晉所可言者。既陳矣。何可復使高人愛之。人固各務其所知味。語其所成趣焉耳矣。而亦各有同志。假令筆頭禿。牘堆案。意競辭爭。損則各有焉。益則各無焉。足下以爲如何。冀以此意厚謝高人。秋冷日肅。伏以自愛。　寳曆丁丑

復覺上人

登二子峨嵋二山記。及詩數章。伏讀之。宛轉屈曲。歷歷在目。實若隨衣鉢周旋乎其間焉。山川亦應增麗矣。夫豐者。西海之東濱也。而我國東郡者。其最東者。而又偏北也。以地之僻。不能使騷人墨客。探其奇絕。騁美於天下。今賴讀瓊章玉篇。意實爲之動焉。夫由岳者。豐之望也。峻嶺絕巘皆其支也。唯國東一郡。地脈不與此接。二子崔嵬於中央。別爲國東之望。比之於由岳。則雖小而不牛後於由岳。地勢之所起。西爲屋山。爲猪山。爲烏城。爲千燈。爲鷲巢。東爲彌岳。爲牛岳。爲雄戶山。爲峨嵋。南爲

雄城雖各自有名稱。而實二子之兒孫而圍繞羅列爲二子之別峰者也。晉以長此中數上此巓數上此巓愈審諸峰者。二子之兒孫也。其觀陸則自由布鶴觀南止佐賀關迤南則漲海之波濤日夜吐納。瞳穿皆決。不見際涯。東則豫州洲渚絡繹。北走與防州相壘。又群山蔟蔟。西至赤馬關盡長門之地。赤馬與文字兩關僅絕。而潮通于其間。遠望則如雙闕。赤關之東。佐賀之北。豫豐防長斜圍海。其海謂之石見洋。其形則如泮水。如缺月矣。遠汀長洲參差隱見。海烟山靄倏忽變化。乾坤浮焉。日月浴焉。而二子峙其西面。鍾此景焉。豐地已盡。入海起一島。曰姬島。奇觀盡弗若。洞庭君山恐不足比倫焉。對此也則發傾海爲酒之豪興。或動折虹釣鼇之逸趣。去年亦嘗登眺。時霖始歇。春正深。花鳥繚亂。臨雌雄湍。入總持院。度石橋。經山王祠。詣洞天。憩鹿蹄石。直上仙觀峰。臨風長吟。猶有暗記其作曰。俯見下方青一氣。衆山不與此山群。嘯猿聲自藤蘿落。飛鳥路從鐘磬分。海接長天涵夕日。峰含宿雨出浮雲。與來探得鼇藏處。折取殘虹釣紫氛。聊以塞見問鄙作之責。如其審地形。則爲此記。爲注云蝶首遊記。文與景偕奇。恨未探其勝焉。秋熱猶甚。萬萬自重。　寶曆己卯

與淨圓律師書

昨辱過錫。欣慰何尚。清論之間。所見頗不合。實抱怖懼。夫惟師以英邁之資。久研求佛理。如晉者駑鈍無似。豈敢容口吻於清議哉。雖然師之無碍。使晉竭愚狂。於是不敢憚訴其欵困。蓋晉童稚多欵。干事干物。靡觸弗疑。殆將發寢食。思之思之。歲踰三十。始悟天地有條理。條理也者。陰陽之性。取以爲觀物之規距。今夫嘗起樓於此。雖聚離婁公輸子之徒。營之不授之以規矩。則不保不大者苦。小者窕。平者頗。直者斜。雖明巧不及離輸。而規矩在手。則千仞凌雲。九層駕空。竟得縱萬里之觀。於是條理爲主。聰明亞之。繹條理有法。法則反觀合一。舍心之所執。而依徵於正焉。如此也已矣。條理則天也。反觀則人也。是以以憶度者。則推人於天。取

條理者。則反天於人。天已反人。而天能一于人也。蓋人之觀物。非心則不能。雖非心則不能。而執心而觀物。則不能不爲心所私。心苟有所私。物隨已之觀。故古之人雖聰明持達。而不得條理者。不不能不取則於心。取則於心。則立道於心。故人欲各從事於其祖之所事。從心於其祖之所心。則有其家學在焉。苟欲於天地大觀。則心不可毫著物。蓋教人之法。於我北壤。則東邊有儒佛。西邊有回回天主之法。回回未聞其詳。天主則　國家之嚴禁。世之不傳者。故法唯爲儒佛之二。儒佛雖有所祖述。而儒祖孔仲尼。佛祖釋迦文。釋迦之道。則言出於迦葉之授記。而仲尼之道。則言肇自伏羲之河圖。儒與老者。共自先王之道技。柱下史之說。道於常外。猶齴齵氏之見性於教外。儒祖佛祖。皆人也。人而爲人立道。有所憂。而有爾爲。自天地觀之。亦人之私也。故欲於天地大觀。則須立身於悉陀太子。未託胎於淨飯王宮。太昊氏未點河圖之一畫之前。以取條理。入天入地。潛幽出明。不知者曰。條理亦取諸已之心者。今鑿地於此。鑿爲一尺之虛。則天從爲一尺之堆。今移步於此。人移就十步之前。則天從離十步之後。有意豈得使天從已焉哉。故觀于天地者。取條理。而不取于心。是所以與夫有憂而立教者異也。是以晋則不執役於二家。不執役於二家。則不自知其肩卑於伏羲瞿曇氏。肩卑者。不能照人之項門。已不能照人之項門。則不能不立其脚下。既已立脚下。唯命之聽。不示宜乎。不立脚下。而見人之項門。既一照其頂門。其命可以聽。可以不聽。可以兄也。可以弟也。故觀暈之物之法。反觀合一。舍心之所執。而依徵於正。依徵於正者何。譬如徵日之行於其西。徵大於繞月。徵則在焉。然其實日能束。而暈小於月也。或曰。不持規矩。不設楷梯。萬里之日可縱焉。此陷混中者。非知條理者也。嗚呼使斯人其機鋭其辨雄。則人可屈。論可暢。但於條理。則遠矣。取條理反觀。反火而知水。反地而知天。觀死於生。觀幽於明。見珠者而不眩魚眼之欺。見玉者而不容燕石之誣。

於是見宜斷則斷。不眩人呼爲斷見。道宜繹則繹。不憚人呼爲外道。是以晉竊謂。師知欲於天地大觀。則須自靈山會前來而後向靈山會上去。於此時如來不點頭。則師爲師我爲我。如有破顏微笑。則師提軍持。我舍來拈。而相忘乎孰提軍持。孰舍來拈。隔歷之。亦唯師與晉也。而天地唯其如此圓融之。亦唯師與晉也。天地豈爲圓頂結髮異哉。於是乎師不能來。則晉不能往矣。明和壬辰冬十月庚辰

與弓埼美忠書

昨與子語甚樂。由譚陰陽。未竭所懷。因勞筆研。以卒餘論。蓋陰陽之目。於陽始見。然其所言。或曰道焉。或曰儀焉。或曰爻焉。雖於說易則然。於觀之於天地。猶隔靴搔痒也。加阜呼地之向背于日。借別生義。莫關于此。夫有學以來。歷也既久。歷人不少。雖然猶望洋於觀天地。何以其望洋。不知陰陽也。觀天地有二忌。忌以己意逆在彼者。忌執舊見聞不徵其實。晉雖無似。不屈膝於古人者。有得於陰陽也。陰陽也者條理也。條理也者取義於草木之理也。夫草木之種子。混有根幹莖葉及機觸開物。一能剖析。剖析對待。條理出矣。於是乎其氣從理而運。故其木之生。千華萬葉。雖極其繁。亦唯種子之一性。從理布氣。布氣成物。是以一元之氣唯認一氣一物。而氣物天地也。一一陰陽也。一氣有爲。大物以成。一一者陰陽之末。有各名也。陰陽者一一之已有各名也。氣物即一一也。而一一謂之陰陽。氣物謂之天地。不知者以一一如虛氣物如實。以分之爲支離焉。是乃條理之所不明于世也。唯舍在己者。體在彼者。措舊見聞。徵之於實者。而可始與言之爾。蓋天地之成。爲者乃性體氣物。成者乃陰陽。天地性體沒而露。氣物。氣物露而沒。性體。沒而能見露而能隱。有隱則露亦難知矣。有見則沒亦無所逃焉。條理之態然。而今觀露不察沒。觀見而未知隱。謂之達則未也。夫天地之數唯一。觸之則能一一。自三以上隻奇雙偶。十復一。而百千萬億相積者。於天無所用也。以無所用於天者。求之於天。三才四大。五行六氣。洛書之九。河圖之十。

以聾人之聰明也。一者物之所性。具而全焉。以混成無罅縫爲其貌矣。二者物之所體。剖而對焉。以粲立有條理。爲其貌矣。二立體。則一移居二居則往剖對。二則分一反其性。反能立體於陰陽。合能活物於天地。故性隱體中。體分物中。隱則居彼此。分則立一一。故性剖則一即二。所以爲經。體對則一偶一。所以爲緯也。經緯相結。剖與對對。陰陽之徵不可沒。故世有陰陽之目。而陰陽之體不見。故人泥一一之說焉。夫陰陽之爲體也。以剖以對。以相吐以相食。同居異道。均力反物。蓋其體之竝立。以對能反以反能合。以在一之性中。一一相食。以在二之體中。一一相吐。反之態。枘鑿反物。比之狀。經緯同絲。近言之於身。神盡活身。身盡立神。乃神物互相食之狀也。神活分物。物立分神。乃神物各相吐之狀也。神得身而居。身得神而運。乃其居之同也。神定于運之。身走于立之。乃其道之異也。神竭體弊。體弊神竭。一一力之均也。神則精沒。身則罷露。彼此物之反也。是以一一則體。氣物則物。物則露于氣物。體則見于一一。見者沒其物。露者隱其體。所以一一之歸氣物。陰陽之不同于天地也。體隱物中。故性以氣而見。是以性具一一。氣用絪縕。是以謂之天也地也水也火也雌也雄也動也植也。則沒陰陽。謂之陰也陽也。則亡天地水火雌雄動植。夫已物。其體則其物皆可指摘而教。若體其物。則指易象如何。末體其物。則不得如何以形容之。不得如何以指示之。雖然意識自解。隨迎析之。自然能分別是陽是陰焉。今夫物之生。生也結物。化也解物。而不以生陽化陰。而惑于結陰解陽者。唯意識自解。有不待指示教諭者。雖然古之人顚倒其位。若謂左陽右陰。男陰女陽。白陰赤陽之類。則意識自解。亦不役聰明。則惑矣。吾之頑冥豈敢競穎悟於古人哉。雖然於達觀天地。不屈膝於古人者。知繹條理也。繹條理之道無佗。反火之升而乾。而繹降而濕者於水性。觀地質之闇溼暗濁。而繹乾燥光明於天象。故反此繹彼。目明耳聰。可以人知天。可以生知死。是乃取鎖鑰闢天門也。天門之鎖鑰。反

觀合一。依徵於正彼副墨之子。洛誦之孫。爲鬼爲蜮。動輸魅人。若徒地如彈丸者。天如碧琉璃者。優孟於陳編。推已於非已者。雖辨如懸河。技量則已窮矣。　安永丙申中秋

復西肥衞上人

依僧寂然還遠惠書偶見晉之免園冊誤爲帳中之寵語及欲千里飛錫未果則慚懼背牛且託以高足怒乎師晉何當焉唯以恐負教諭姑謹諾之且所惠方物品品窮鄕之所無殊扶老一枝尊刹之開祖自韓攜還以自栽者節有皺文嶙峋如削玉若投之於葛陂化龍亦弗可識矣自此何難步履深荷高意枕肱亭記薄以塞責唫囈之辭目過投火他將煩恕乎師之頰舌霜墜雪下法體自愛嗣音待春鴻　安永丙申

復賀子登

晉復晉屬記所親聞見孝子之言行以爲愉婉錄由序敝境淨僧欵訴之事致問貴藩管内僧禪海開險之狀來喩縷悉豐西山川歷歷在目因悉金龍道人鑿道碑冥搜之妄實爲愉快於是下問及彼淨僧蓋我國東郡安岐鄕有淨刹曰淨國寺開祖六世曰卓譽同鄕護江有小菴號潮音與本府長昌寺徒爭其所隷事不決本府遂詣東都訴之公廳譽理屈竄於八丈島譽有弟子曰卓榮同鄕近藤氏之子從師在東聞命悲泣不自勝走赴公廳俯伏涕泣他無所辨惟言冀大恩再放譽歸國廳事嚴肅執法在側以爲狎褻侮慢呵逐之翌明又詣泣訴如前日讞司愈怒逐之榮益固矣甞苦楚如蔗日又日月又月烈風甚雨祁寒盛暑迭往歲迎來歲其衲懸鶉其髮鬅鬙無日不詣訴見者爲之悽愴積已六載或云九載事達台聽赦譽歸國命賜榮總古河廢十念寺修之榮於是適總爲十念中興之祖享保辛丑先師譽而沒于總稱欣譽上人由是想彼禪海一敝衲以打鉢而食掬水而飲之身觀彼豐之山迸闢流豐之水怒撲岸人畜過者數遇覆沒之患起大悲心發大誓願欲一修此檀波羅蜜以斧鑿易津梁拯蓋未來際無數之生靈於魚

髖腹中直振奮拳赴鑽堅之嶮星霜三十感致衆力終通一洞道氏永受其賜因感斯二人雖其事弗同而至誠弗已功奪造化以歎我輩百事弗成皆於懈怠是以質其事於足下足下且謂國字易朽以移艸於隷深荷欵悃雖然晉之此設非必廣播之於世但自省無德標後昆慭撫人所爲之善使我子女輩誦以鑑之得遠罪戾塞門往是豚犬若移之於隷見以爲兎裘思以寢處是以業從素意足下諒察其所喩至爲中津之水發源於海部郡則晉惑夫由嶽之爲山崑崙于豐東水自是東西南北流既面地勢漸南低邐迤抵海部犬牙接日不知何從導之抵貴管請以明示。安永丁酉十一月

復倉成善卿

謹披復書再拜讀之謙恭之狀使晉無所措手足晉何靦然當之是以不敢具辭以答盛意幸莫以爲不遜意長者以聖賢之業當拜君鋭精於右文之治經筵之功必有被蒼生者晉孖山一老圃唯解灌培三餘偶讀書魯懶與老相幷雖然其潛心於天地之癖老尙不已雖頗廢卷帙關于其所志者不能無涸轍之思貴藩所新獲日本史見示其梗概深荷厚意唯斯書猶非人間物則非草莽之所敢窺望雖然既沃長者之腹焉無我之耳以之爲今也貴藩多士濟濟天下之圖書珍奇輻輳中有根來翁多藏奇書亦能好士晉昨詣貴藩翁訪晉於旅舍至則晉去聞之于賀子登客歲翁赴平安舟過我國東守風於熊浦物色晉得晉之詩於浦口之寺次韻題壁聞之于寺僧晉感其纒綿者久矣子登前日寄書曰修書以通姓名吾爲子爲介晉惡其唐突是以不敢今其所揭示翁之藏書皆我痼癖對症之良藥他日走函丈應須因長者以謝其偃蹇假東壁之餘光今長者據二酉之富憫晉爲晉賦秦風無衣是乃引西江之水注之於涸轍也若天假良緣異日侍絳帳得聞其所未嘗聞之論繙其所未嘗見之書則枵枵之腹將依長者便便正宜速詣門拜其賜惟老不任筋力未令難衝恐食言於左右是以不敢期以日月若不發

圯上老人之怒於晉幸甚　安永戊戌

復市原玄意

長松百尺煙開日上據梧誦來詩令人飄飄有凌雲之氣所附一卷總是瓊草瑤花仙家不啻蔟重摘來　天明壬寅

復市原篤亭

蒲柳霜下、根株幸得待一陽之來復、勿以爲念、所示侍宴之二律、是似已曾嘗金掌之露、咀嚼則津津、淸溢口頰、所獻木人間之味、恐戟喉痲舌、多罪、

天明甲辰

復萬年禪師

玄梁師、日投其所著之文是非之、又出師之文、議焉之強、晉愚狂、奉指摘一二、退欲自驚、而亦不及、實増踧踖、而師不怒於木李、而瓊玖以報、以知慈海之大、他日有面、以謝不負荊、　天明甲辰

與麻田剛立書

登樓而望。陰靄浮動。紫翠四圍。落日漸低。黃彩變紅。光燿不定。射雲映波。須臾風起蘋末。吹入松間。如驟雨之灑。似鸞鳳之呼。歸而就枕思之。其愛賞而怡心者。雖自眞成。亦與眞隔焉。顧夫諸子百家之說。汗牛充棟之典。多自登樓之晩望。玩味於眼華耳聲之際。夫酒酢醪醴者。成于米者也。不從米求其釀成。各向所嘗之臭味。尋米之面目。蓋聖人者。古善御人之王者。佛氏者。古善說心之邈人。故聖典則治人之法。佛籍則治心之訣。原出于憂世之赴。非憫衆之陷惡。欲將父母之心。救其陷溺也。故璿璣玉衡之察。爲授民時也。器世界之言。自自家心地成也。其佗餘波相及。亦措之於虛遠不急。偶有疑于此。亦泥舊說。囿於人境。無窺其奧者矣。蓋天地容萬物。而人居萬物之一。萬物既立。則萬之性情具。雖給資不佗。而子未肯父。安得火猶水焉哉。是以雖容者給焉。居者資焉。而容者非居者。居者非容者。并者各異其性才。故欲知天。則須舍己以入天境。欲識物。則須舍己以入物境。於是智通天地。通萬物。萬物與我并立。而我居其一。以知天之公。以知人之私。可以始言人之道也。謂之開

人之境也。自古人之不明天地者。以固居人境。以己之位為至貴。以己之智為至靈。以此觀天地。以此窺造化。以此臨萬物也。亦執酒酢醪醴之臭味。以思米之面目也。觀于天地者。先先智焉。未開人境。而固居此焉。以珍重其至貴至靈。以人窺造化。窺竊生妄。金屑為翳。憂世憫衆。雖則仁也。而以人窺造化。非智之事矣。故世稱立言垂範者。提人提意。以思以推。立標為準。居此行此。然人心如面。好尚互異。各以其得者。而為是。為自天出。為胎託於古。非由己之標準者。思撲而滅之。今不提人提意。思推立標準。而得通天地者。惟有條理焉爾。條理之態。一具二。二有一。二即一一。一一即一。知之之訣曰。反觀合一。舍心之所執。依徵於正焉。一而二焉。之謂剖析。一又一焉。之謂對待。一之態者食。二之態者吐。剖析則如泝流而下。食吐之間。觀混粲分合之性。統散全偏之才。對待則隔岸而望。一一之間。觀體用沒露之體。剖對反比之用。而後。試之於用之實。位之虛。力之均。跡之反。利其器以向。盤

根錯節。迎及而剖。仰觀俯察。無往偶者。是以繹之之道。既已見其一。反此以勾彼。彼此以合一。合一則其合。又望于他一。分以知反。合以知比。合合泝原。窮剖析之所來。尋繹不審。則捉賊為子焉。今子以持出之才。專用力於天運之錯綜。晉惟以覘之短計之拙。乾象之態。一仰之於子。而舊交不棄。每寄書有啓晉之蒙。首春所諭數條。卷舒數日。裁領其大意。因擊節嘆曰。嗚呼故人。殆通神乎。何見之至此。有曆以來。其人數百家。今見子之直勝而上之。我何幸此同時。得以聞斯緒言。如製器以知日表有黑子之旋轉。知月體有坳突錯綜之象。知太白有弦望之狀。知土木有附星之運。知緯星之周日而運。驗于月食。知南極之地有大壤。則姑舍之。至察東線之一行。大出于人意之表。至推之之術。我復何言。晉察諸條理。大得通暢。請嘗言之。蓋西規之軸。守中而立。一定不易之位。六合之靜皆繇此。東規之軸。環之而成。萬變不盡之跡。古今之變皆出此。是以一則相合。使二至之日。同行中線。一

則相離。使二至之日。代在二極。是以其合也。軸歸軸。輪歸輪。其離也。軸當輪。輪當軸。離合之間。輪無所不運。軸無所不指。而日無所不往焉。地定處。天變氣。於悠久之際。冬夏換方。晝夜變候焉。知絪緼變化。無不草木鳥獸。萬之物宜。與今大異哉。東西之規。自合迄合。爲一紀焉。於是盡一世變。則成一鴻荒焉。勢之所至。不得不然焉。寶曆中。予猶在藩。頒曆失記食。予獨言九月朔日當食。以予之弱冠。人多不信。至期果如言不違。七年前嘗寄書中有言曰。以往丙午歲正月朔丙午當午時。日將食。奇三年相會。以故而告。我語之於人。人莫肯疑者。信布於前也。其期在來年。舉將見其徵焉。至若東運則其期殆且二百萬年。視其徵焉。今悠久之徵。將與暗中模索。言闇闘者。比焉。調愈高和愈寡。是又何傷。千萬年中。予獨驗于天行。察之。千萬人中。我獨徵于條理。和之。此說前已無古人。若後有來者。必來而取法於此。玄贅二語。猶未合於天。犬馬之齒已老矣。成否唯天知之焉。予欲讀其草。我知其指摘罅漏。補葺之。則實是爲幸焉。唯以書未成。家無副本。門生所寫藏。玄語八卷。借以呈之。贅語則姑緩日月。且往年書中。有如言觀物意不可有所主也。意苟有所主。必牽物於我所僻者。故人意厚。以深銘心肝。然亦有辭于此。夫繹條理之方。此得一痕。而未得所偶。姑假一物。配之。所假未得其眞。又假一物。又不得。又假焉。假假至合而止焉。猶圓之未得直。姑假方。以待佗日之得直焉。猶日之未得影。姑假月。以待佗日之得影焉。條理自古無講之者。五十年兀兀之力。焉得偶偶皆眞。是以書中眞假相雜而存焉。高明以辨之。晋之受賜也多。因思予以不世出之才。窺人不窺之地。然未著之於書。使將開者復閉。將通者復塞。何其躬抱寶而嗇于當世。不慈于來者。日月逾邁。歲不與我。書到之日。速其掃筆硯。幸得殘喘引于世。則晋亦與其惠。同好相投。同病相憐。臨裁書。形神偕往。不知山海之遼焉。

天明乙巳六月朔日

復川中行

客歲十日之歡。依依分手。月出遙山。風笛瀏亮。秋風欲灑離人淚。正是關山月上時。是我送別之辭。爾後每對風月。吟此詩以緬想。鴻書來落。長跪讀之。正當去年別足下之時。悉別後雲遊弄雛之狀。鬱陶始伸。示曰。今秋或將遊筑。不知果否。烟水雲山。令人之夢魂迷東西。又示曰。描著詩轍。亦有同名者。試製一冠之。胡盧所貽皎然詩式。苟千里纏綿之意。受讀知李淑詩苑三儉。既出唐人。魏氏樂譜之賜。豚犬領之。彼當裁復附後鴻。所貽貞節。得便達之。殘生落魄。良緣無期。足下富歲月努力自勉。

天明乙巳冬

答脇子善

昔飲孖溪之水。耕孖山之田。優游遂生。無一長技之以獻人。足下曰。犬馬之齒。不棄之。數致存問。實不敢當。然書中有言。曰。身託生於天地。不知所託爲何物。瞢瞢深媿。此則我宿癖之所存。所託不可知。則託者何可知焉。唯世滔滔自己而觀天地。是以不合天地。足下如實有此憤。姑舍舊典之所說。先達之所論。反觀合一。取徵於天地。條理怡然氷釋。則知世之悶悶者之實悶悶焉。先書由言喪祭。事及鸞敎。來書曰。毀方爲圓。漸復于常。是可嘉焉。晉未領其旨。又不欲上之於喙。唯肉食坐廟堂。考往慮來。稿目爲天下謀者知之。晉野人量食而食之腹。何足以知之。詩又非我所能。雖然溫柔敦厚之所存。相與攄情結盟。不復敢辭。所請之題別錄呈之。豚犬鶴暮秋無恙。自田剛立子之許至。彼固無探龍頷之手。唯望驪珠之所藏光芒熒熒直衝天而還。

與綾輔之

孖山 樵父 三浦晉 奉書

綾近侍足下

春寒猶閉。起居無恙。 足下以剛毅之節。擇在近侍。

恩眷渥至。雖無言責官守之重。外人皆稱其風標。爲與串仙介一雙。風雲之事業。將有所期。雖然晉竊有疑。

君侯　才德淳美。祇有　愼。而屯其膏於是如恭默思道者。如見機將作者。如蟄將冲天鳴將驚人者。於是群下望沛然之雨於雲霓久矣。然物之以頓者。其漸有積也。詩云維天之命。於穆不已。誠之謂也。一之日。二之日。寒氣凜烈。物皆閉藏。然霜雪徵融。草木之萠芽候融處進。故爲善者。分可爲則爲分善。寸可爲則爲寸善。勾踐會稽之棲志決踐姑蘇。既反潛鱗戢翼。如不息者二十年。潛爲其可爲者不已。欲用參天之才者。孳孳養寸苗。亦漸之力也。今士之子弟仰高風。而皆欲進學而不倡之。吏之抱隱憂者。欲言下情而不啓之。何以不爲屯膏於所不宜。不屯。而不屯於所宜屯焉。今

將軍新即位。　白川侯入相。側聞　白川侯者剛斷仁明。墜綱再擧張舊弊日悛。天下又將復

東照宮之舊。聲名隆隆乎興。今

君侯之聲聞雖盛。不如昨　臨鎭之日。是非膏屯於所宜不屯閑。分寸之善之故乎。東　覲之日。以其不已者。　謁　白川侯。不亦潔乎。爾不爾爲。日逝月徂。固陋之心惑。敢質諸足下。天明戊申春二月

答串仙助

世之操觚而著書。鬱然內蘊。絢然外發者。著上也。如入波斯市。攫寶貨。反誇其奇觀者。吾不欲見之焉。所貽閣老白川侯國本論。反覆讀之。知靄然者自中盎外。蓋其意謂。天生此民。耳目肺腸。皆各自足。雖自足。而不可自治。天權才德。爲之上民。出其直苟其平。故天子之所不及。置藩籬治之。藩籬不自足。分職於有司。是以君民以其位。則實隔天壤。以天之所生觀。則貴賤同一。故一亭之長。進之則可被袞冕。以稱警蹕。南面之尊。貶之則可衣青衣。以行酒。然則非體有貴賤。位自爲霄壤。故養於人者能治人。治於人者能養人。亦錯通其功也。故公侯之所有非公侯之士。公侯之所用非公侯之材。公侯之所據非公侯之位。公侯之所使非公侯之民。唯己以爲天吏。奉天職。用天材。以養天之民也。故鞭笞桎梏。則懲其亂民者。惠予褒賜。則賞其和民者。是以君人者。苟生自有土地爵位財貨民庶之心。則傲

然失天吏之心。然則我奉天之職。取養於彼。以通其功也而不自省。奪民之腹。膏梁我之口。裸民之體。錦繡我之身。痛哭流涕其民。盛我之管籥。流亡轉徙其民。飾其輿服殿堂。何其報功之刻而取直之貴。斯心中蠱。是以其一下筆。滾滾洪洪。陽春一布。千樹萬卉。皆盡纖悉。苟以斯心布民心。何世不可治。何人不可化。豈可與攫貨於波斯市。誇其貧兒者同日而語哉。幸矣哉吾儕小人。得擊壤鼓腹於斯俟變理陰陽之日。可不拜而敬哉。故此書則由感爾風而成。此心則先爾風而有。請足下審諸。

天明戊申

與毛利泰元書

春寒猶閉。平安否。僕悠悠迸迎烏菟而已。近日得肥後產吳茅英種。形狀雄偉。氣味大勝。分贈之圃中。執之亦一時之淸賞。　三月十九日

與立菴書

立菴高君足下。晋也姑沒之後。不到桂水。不到桂水。是以不與足下從容相見焉。歡愜如夢。歲月似水。屈指則十有餘年矣。人生幾許。倏忽老將至焉。可勝而嘆哉。時偶得足下之書。書辭慇懃。戀戀之意溢紙。實以深荷。且書中有曰。以晋昔寄書於足下。而足下不報之故。晋亦不報於足下客歲之書。噫晋也。退省其私。則雖尤人者多也。豈至於爲如斯鞅鞅小人之態。以引罪於人哉。足下所謂客歲之書。未知鴻鯉之所之。幸讀來書。以知有此事焉而已。雖讀來書知有此事焉。亦未知其何狀。於是乎中心以隱。管仲有言曰。生我者父母。知我者鮑子。晋不能推信與人交。使人疑之。晋也實有罪矣。足下不惜寸楮。以前書之狀見告。則晋知所答。而有以答之。足下諒察。八月晦。

○序

勾股便蒙序

天下之理。猶剝焦乎。剝盡一層。有一層而存。蓋數之原。與天地偕有。而河之出圖。揭而標之於衆也。今言者歸之隸首。抑末也。然其列六藝。分九章。天亦有待於人。於是乎乃天焉而數也。人焉而術也。

蓋國家偃武之後關孝和有演段之通建賢明有彎弓孤彎之法以來諸家陸續有所建明安永戊戌秋九月晋遊瓊浦主伯麟氏之家伯麟氏姓小比賀讃人也是歲挈家寓此蓋讃有人曰多田文先注意於數有年於是剝先達已剝之餘又進一層所謂指掌往來之術是也仍著松社捷徑二篇以遺來者而伯麟氏受業於其門爲其書之簡奧作爲此篇以通其微云而晋問其人則年才三十有一今春已蚤謝世晋聞之悵然謂伯麟氏曰噫晋之於數猶瞽者與觀場何以容口吻於其間雖然我知之斯人存世必猶能剝其層層亦以示世而斯人既已矣將如之何焉昔者夫子之名之弗聞曾子責之於子夏今二書引而弗發君繇以通其微世繇以達其道田先生者豈不含喫於地下哉公之於世繼述之事也君其勉之仍留此言以代序云　安永戊戌

孤筇引

五十之歲忽而邁焉顧念往事茫如夢寐征途荏苒舊歡孰收蓋上自所怙特至其遊戲盃酒吟嘯風月今也其人或歸烏有或邈隔山川繾綣之間取舊作風咏之其可喜可哀其人其地風景情懷百之事故依稀皆在心目焉斯閑於人爲長物而於我則感興之繇故題下註支干者思想有繫也此豈須擇名哉開卷先見者取以呼之於我乎足

安永癸巳

貞一先生集序

記晋年十七先生召我我往侍垂帷三旬越四年復負笈因留三旬先生循循然息下之鍼石進寘之懷抱若春陽煦秋露肅然爾來以親老路隔偶有趨走不過一再宿冉冉征途烏往兎走四十年一日蒿目憶其往先生不以懶棄我數煩鯉魚腹中實以琳琅瓊琚至其年彌高歲志告以齒安永丙申之春晋欲往問起居則訃音適先到手澤猶在音容弗可視仰之於昊天悔怠於其弗逮玄酒清香走謝罪於墓前先生氣節卓犖不以雕蟲自任故其所作任人之取去門人倉善卿賀子登探

遺珠於深淵。擿棄玉於佗山。此編以成焉。屬序於晉。晉洮類再拜讀之。其汪洋若海者。非蠡量之所能量。唯其中語及晉者。其望聞啓之蒙乎。如立標導迷者有矣。思見求之進乎。如弄花引見者有矣。猶存。若春陽煦秋露肅者於髣髴。晉喟然歎曰。先生沒七年。猶使晉以警勸。嚴如對在。非有德者之言。豈得使人至此哉。先生之賜晉也厚。先生知我。我於先生。唯取自足。何知其餘。雖然。見幽葩一枝之拆。而知江山皆逢春。若夫盛德事業則二子盡之。追懷遺愛於謦咳之昔。攬涕以書。天明壬寅七月

送與津公錫之江戶序

群醜之態。喁喁然者也。亦悻悻然者也。而飲食衣服居處器玩。意智之巧猥情態之求濫。不經而綸之。索將相奪相食。禽獸之不若也。以是故世不得無控掣者。不得無驅馳者。上下立焉。教化行焉。於是教人者食於人。食人者化於人。天地之大德者。生也。故害生者。天地之賊也。是以天生水火木金土穀。人依之以立。天分男女之類。序尊卑之等。人得之以居。所以古之聖人。置司徒以教人。設五官以治材。以贊天地之化育也。蓋人之生于世。或居廣居。立大位。或困陋巷。役負檐。雖執事弗同。而各以贊化育爲務。則隨其分不媿于天。不疚于心。故大君者。主贊天地之化育者也。故培其愛敬。以鋤暴慢。灌其廉恥。以洗鄙吝。天之準。人之儀。知之於學。行之於禮。以正其猥濫飮之食之。教之誨之。至鰥寡煢獨疲癃殘疾。使之各得其所。保其天。乃君之務也。格其非。補其闕。靖其亂。和其難。爲心膂。爲股肱。爲舟楫。爲霖雨。乃臣之務也。出粟米麻絲。作百機械。有無相通以達其用。農賈商賈之務也。水旱妖災祈禳之。養痾疾痛藥石之。巫醫之務也。推至馬之服駕。牛之就耕。豹之守戶。鷄之報曉。猶能有務於造花。是以吾濟小人。居也見凍餒而解推衣食。行也代勞於老疲之負戴。扶趺於眇瞽之倀二。雖不可譚之於大夫之前。而於隨分贊化育。則不讓也而今也則不然。不養天地之和氣。不保嗇天地之材。唯有材者。以其材爲己之材。於是糜其材。秉

勢者以其勢爲己之勢。於是擅其勢游惰之民以其日月爲己之日月。於是偸閑。日費四民所勞苦經營者。作無益害有益爲造化之蠹。是以君相者。爲耆生修隄防誅姦宄保其大和民者爲君上給財貨執力役。於是雖君民體異而迭執其役。同保其和。達此則手足相護。乖此則痿人自厭其躬。是以天下之事。雖比之則不相同而用之則其事無佗焉。蓋自關左之風一偃草。四海不揚波。幾二百年矣。貨幣不爲之于世。人民不爲鮮于此。徒耽皥皥之化。不察是

聖天子賜。不意智分辨之不情慾裁制之唯猥其巧濫其求。於是禿山林。疲民力。架樓連殿。工成而上無藩屛之用。下不蔽人民之風露。五日一絲。十日一縷。累月積年。織鸞刺鳳。非木偶泥塑之飾。則頑童淫妓之用也。而紡績之家不保其凍。焉扶老提幼。罄蓄之力。煦手汗背。辛苦艱難。其新穀之已登。不輸官者盡入債家。狠戾于無用之家。有用之人每有菜邑。三幣本爲通財而設。而今財爲弊所役。世事如此。不亦可怪之甚乎。夫古人之修德行道者。將以內自安外安人。而後之君子。成趣於其所好。驅人於其境。甲則吁。乙則兪。各提是非。以相鬩其疲而後已。町畦已畫。岐路愈多。嗚呼人心之不同。自古曰如其面。孰得能一其嗜好。於是冀與吕歎。雖聖人不能以其所獨。强之於不好之人。然則老佛至諸子百家。各範其家之馳驅。則禽安于樹。魚安于水。亦何相妨焉。既已達此。則知矛盾之無佗于其用。而放漁者於水。放獵者於山。以能通彼此之用。然則使君相志于安天下國家。子弟志于安父兄宗族。各各隨其分志于修其德。能薄于責人而利其用。厚其生。則人心之不異亦如其面。孰達于天下之大同。於是四海一家。熙熙焉。雍雍焉。大道不拒狹斜。溪澗以注大壑。今玆安永丙申之秋。與津君將扈從　邦君之東都。乞言於晉。嗚呼君之此行也。將觀柳營四海之富。百僚之盛。朝覲會同。衣冠玉帛之美。將翶翔于龍鱗鳳翼之士。探石渠。窺天祿。索孔壁汲冢之遺典。將引商刻羽。

金玉其音。鳴其鏗鏘。將探名山大川。弔遺跡。遇奇絕田間老農。無辭以盛行色。臨別述所懷。崇酒于觴進曰。君歲猶壯也。升沈我不卜矣。唯可隨其分樂其位。以贊天地之化育。則進則可以將順其美。匡救其惡。退則可以灌東門之瓜。樂夫天命。復奚疑。依書以贈焉。 安永丙申

送柳元龍遊筑前序

柳生西遊于筑。予送之於孖溪之口。柳生下笈拱手曰。千里之行有一言以贐則幸矣。予因謂曰。吾子此去就良師友。無待于耄人之刺刺。雖然送別臨水。觀於水而有感於心焉。是以送此行乎。夫天不言而示其道。人參錯而繹其義。天之所垂。地之所呈。有思則有得焉。涓涓之溜。未勝濫觴。盈科達漀。沆瀁乎無際焉。騰而爲雨。游而爲露。物皆被其化焉。肅而爲霜。駁而爲雹。莫不受其戮者矣。溟滓混瀚。我觀其珊瑚琳琅。茸鱗鏤甲。老蚌之所含。神龍之所抱。總藏其中焉。靉靆微茫。我觀其暈霓矞霞。空中之樓閣。烟裏之車馬。幻象奇影。亦現其際矣。或柔不浮靡。或剛不沈物。或甘如餳。或酸如酢。或紅若霞之舉。或黑似雲之屯。又見受陽象之光耀而曦曦然。又見乘陰雨之冥晦而熒熒然。我未能極其變焉。吾子此去就良師友。我日夜望子之有成焉。不知爲渦爲濤。捲雪奔雷乎。抑湛若天。恬若鑑乎。滔滔長逝。與彼蒼穹抗勢乎。抑收萬象。玲瓏自照乎。晝淡鹹以偏奉江妃與海若乎。抑容川瀆與天潢。以融其汪洋乎。汨沒吐納。鼓舞極其神乎。抑循天度。以守朝夕之信乎。釀成文采。示燦爛於世乎。抑浹洽膏腴。以贊造物之煦嘔乎。嗚呼我愛其不與物競。盈而愈下。 天明甲辰閏正月

送興津公錫遊平安序

古者仁義之名未立焉。敬天以奉之。建皇極以成人之德。皇之極者。王之道也。斯極既立。剛克于其沈潛。柔克于其高明。歸之於平平正直焉。猶醫之裏者表之。上者下之。復之於常而已。故古人之所德。寬以栗。克柔以立。克亂以敬。克擾以毅。克故禹謙其德。稱罔克。詩美不酬。稱溫克。自修者。克其側

頗之己御人者威福以勸徵焉陶虞用之致協和夏商廸之爲永綏公錫君將待春東遊平安乞言於晉不佞曰以爲我護身之符嗚呼我之所讀者子之所知者也而堯舜之所行乃孔子之所述人之所法乃天之所則也是以仁義之實資諸愛敬之天苟愛而不敬敬而不愛亡以相克者則如火之徒炎上如水之徒潤下焉克歸諸有極後世謂之有禮故天之所則乃人之所法孔子之所述乃堯舜之所行然則雖如取道而異而左之右之將逢其原夫平安者千年之皇都流風善政故家遺俗典章文物猶存焉是以高明之士虎視鳳翥乎其上嘉遯之徒龍潛豹隱乎其下子往學則將有餘師我復何言以我觀子子之明足以自炤其非往也自勉明以炤焉禮以克焉克而克之何往弗通

天明甲辰

奉送

邦君入覲東營序

公夙而岐嶷其志邁然而遠稽之於先王而非法則不學非講文肆武則他無所玩焉不近聲色不趨勢利問安於　兩老公竭誠盡信日愼一日將祭也如見其所齊者薦獻拜起儼如臨其上洞洞屬屬齊齊愉愉其接人啓誠沃人之腹心是以群下無挾侮詐以事之在藩周歲人不見其厲容是以不動聲色一朝肅然其視民如赤子是以民之慕之如父母聲聞洋溢四境之外皆望其風聲最深于易潔靜精微固其所也今茲天明丙午八月以例朝覲營中艦舟既檥以與府內侯交代治裝待其報留國臣庶如離父母之懷晉野人世採樵孖山之陽扃岫幌雲闢而居固無知識有誤以微名漏左右者欲見而憐其龍鍾候葛巾杖履徐步出山延見之路寢優待渥至賜茶前席仰其德輝愈於所聞嗚呼　公之此行徵者何與于望其羽旄然有前眷以蕪辭驢左右若不可乎左右曰何爲不可將有追琢藻繢以發揚明德邪曰不能何以不能曰將有待何以將有待曰若上之德其盛如斯群下之感戴亦復如斯然野人竊有疑或夫推

誠有未至邪。抑群下未體上意邪。恩意尚有所閉邪。抑下情有所塞邪。舊習因循邪。士氣未蘇邪。舊穀漸沒。新穀將登。未聞有慨然爲社稷獻策者。未聞有思紀綱之不振欲舉之者。未聞有憂慮其所職建白之者。未聞有陳所屬之利病告之者。未聞有條衆之所疾苦訴之者。今君上之德。宜有所求而有所容。臣下之義。宜感君上之憂念無所顧慮。 公之孝友四方聞久之。我聞諸侯之孝於夫子。曰。保其社稷而和其民人。既分縣官之民受其芻牧。既分縣官之憂守其藩籬。而報祖宗風梳雨沐之勞。建廟祀之。而事變無常。宜早恩信以結人心。教誨以知所向。使人義以勇其所爲。不虞之應。宜繕兵甲。峙糗糧。修城壘。以謝國家祖宗之恩。是之爲急。而後輕裘緩帶。優游昇平。不亦好乎。晉野人。於是稱之於四方。曰。大哉吾 公之爲孝。薦之鬼神而鬼神饗。施之民人而民人依。我不欲其瑣瑣與夫穿雪尋竿。臥氷求魚之譚。競其美矣。其人唉曰。汝觀夫龍乎。出深水而後能御風雲。亦觀夫車邪。金扼既脫。輪環千里。種而甲拆。芽而枝葉。而後華實可望焉。不慮事情。不分生熟。見卵而求時夜。見彈而求鴞炙。何其子之太早。計。晉聞之。悚然股栗。其顙泚然。曰。兪兪。野人固陋。僻在深山。不解事。一至此。唯年老性急。恐不及鴞炙之賜。不覺爲此唐突。恩海容廣知措狂愚之罪而不問。反以此爲開言路之賚。榮哉西指非復久。願再拜 恩顏。沐膏澤。霖歇氣秋。蘊暑如惔。計路程之遼遠。懷覲省之辛勤。伏以上爲宗社。下爲元黎。深自保愛。感懷恩遇。不知所以言。 天明丙午八月

送清水守業序

生者浪華之人也。來寓梅園有年。余嘗序豐中之孝子。傍舉忠貞廉恥之行。題曰愉婉錄。將欲使子女知所方焉。生一日讀之。潛然嘆曰。人有親。而其盡心如此。而我邈在天一方。定省有闕。思之熱中。言未畢。涙交頤。余慰之曰。人之爲子者。日在膝下。時其溫凊。是雖眞樂事也。然男兒有懷弧之義。夫孝者衆德之所備。始于事親。至不失臣妾之心。今

父兄使子遠遊者。將遺子以困於心。衡於慮者以玉女於成。今孤身容地。遇遇面染。雖然忠信以推。篤敬以行。有以得童僕之貞。則胡越同舟焉。人各病於有已。苦於好勝。若舍之克順。日愼一日。父兄欣欣然。枕衾安于寢。秉彝之道無佗。唯求之於安。孝在安親。忠在安君。仁則以安人。義則以安已。天下之能事畢矣。若弗能俯就之。則日在膝下。養用三牲。而將何爲。既而瓜期近矣。以感之所由而發也。淨寫此一本。以代謦欬因言曰。上之於口則易。行之於躬則難。携離千里。音容不接。還家若有事。怫爾心者。取讀之。養感之所發。以代晝錦。又申之以平生戒子弟者曰。勿以待人者而自處。勿以自律者而責人。勿以我好尚加之於人。勿以小伶俐侮他之敦撲。智極其高明。行勉之於踐履。　天明丁未

逸井大成序

瓜之始大如棗。務逐其蠷。以灌其本。蔓葉既盛。日月以長。然其色青。其味苦。而未發芬芳。無顧問其價者。既而色氣味粗成。急于賣之者。摘藏之於器。色黃味甜。芬芳亦徹。買者不察。取而饋焉。受者雖賞之。而其實在不傷來意。而其不然者不然。恬待其時。拾熟而落。而後籃而饋焉。受者忻忻。華副以勸。親締給以獻君。水之雪之以饗上客。芬芳充腹。清味溢口。於是腐色氣味。不混熟色氣味。井上君。者暘城之人。讀書於孖山有年。今歲以邦君始就封。將辭歸藩。晋長于隴畝。徒知灌培之事。灌瓜之事。可移之於學。則子取之。　天明戊申

○記

枕肱亭記

苦樂異道。相違幾許。轉換如環。詎知去者之非來者。來者之非去者。觀世之樂。其樂亦不一矣。有耽鴆砒、而與虎狼戯、如獼猴之懸崖、捉水底之月、如飛蛾之貪光、爭赴燈火者、有曲其針、香其餌、非罟則穽、悅以勾之、欺以襲之、自禽魚淫泆及與、及族、及父兄、及君上、如鷹鸇之鷙爵、如豺虎之攫兎者、有忍快其慘怛、如猫兒之捕鼠、弄樂其窘迫者、有視身不視佗、收人之所苦、以供己之樂、如絆鸕鷀捕魚、

既獲則扼其喉、取之以自利者如此者猶如寒蟬楚楚其翼吟霜林之落日、如桑蠶爲繭自纏裹、無路于避湯火、又有砥礪其節金石其操如探驪珠於逆浪衝波之中、藏之十襲、雖人買、而雖人不買、而連城之富、則有於我者於是乎、苦樂一環、轉前之所樂、以爲苦、移前之所苦以爲樂、亦唯自取爾、而要之前其樂者、其樂也苦、猶疥人搔出血、充之於無上之樂、後其樂者、其苦也樂、猶探奇絕之境、躡蒙茸、歷崎嶇、應然縱天下之觀、枕肱亭者、西肥大郡妙宣寺衞上人之所構、亭在精舍之西、山深樹老、春錦秋繡、朝烟暮霞、西臨龍窟之無測、邐拖海門之闤闠、峰如飛來臺如涌出之間云、晉所耳、未能目之、令夢魂徒躑躅爾、由其名于亭、想師之高風、其樂蓋在飯食水飲而曲肱之中乎、對斯勝景、樂斯樂、其樂可識矣、是以不敢辭其需、書以謹奉、如彼沙羅淸陰、耽一味之醍醐、俗士何與知其樂、

安永丙申冬至後三日

匏瓜室記

匏瓜匏瓜、無種穋菽麥之用于世、求之於園圃之中、無此何少于菜蔬、雖然圃中未嘗廢之、而其敷葉也、苦其味、其結子也、淡其味、以其淡、是以食者未嘗皷舌大嚼、以致食後之煩悶、大侶君子接物之情至秋已闌匏已謝、則虛己以容、載物以濟、於是不競能於諸蓏、而收功於諸蓏之上、暘城喬君。室曰匏瓜、常兀坐此中讀書、君家世從政、何爲君獨不然、君不幸羅痾、殆將支離踈、是以以其所能教授于藩、徵晉記之、晉曰、唯唯、子若不以不問其名匏瓜之意之所在罪晉、則晉請搜之於臆、以有言焉、吁嗟、子、身居閥閱、齡過强仕、而疾病爲祟、使之不得從政於先大夫後、其使之不得從政於先大夫之後者、乃所以使之能得竭力於典籍者、則天之惠子也、亦不可謂薄焉、天之惠子、已不可謂薄焉、則子將何以報天、我願子從苦于其始、遂事於其淡、開導誘掖、使其君臣有所以矜式、有以容以濟、則是以己之所能、能之於己之所不能也、苟如此、是亦從政也矣、必從政爲從政、惟今之讀書

者不然徒欲執己之旗鼓以驅騁翰墨之野係累他之旄倪開拓己之疆防守之務惟見四郊多壘不然見他孤高杖立者自出藤蔓蓬蓬纏之雖如有所立而其實則依不能以已之蔭庇物東西惟所依之從不然則五日刻一葉十日雕一蟲於濟世之用遠矣與玩茶爭棊以優游歲月又奚擇焉遂言曰副墨之子洛誦之孫何益于士知之於天達之於人取之於古通之於今以今之務繼先大夫之所爲如是而後將上不負於天之所惠子下有報於國家之所待子於是乎記安永丁酉陽月之望孖山逸民三浦晋。

達亭記

蓋士之道講之於學脩之於禮弗脩則無益于講。弗講則罔于所脩脩以行其正以知所向然而所向多岐雲樹丘陵以遮其望不知向誰問其羊不如出雲標凌霄漢躡日月之倒景以察壤土之茫茫於一彈丸岐路繚繞紊亂之狀雲樹丘陵之擁蔽下視悉之就所在取其羊假有田夫給之己請大澤於前有蚩左起涿鹿之霧璿璣天地以定其方何難於獲其一羊佐野翁亭成結構輪奐叔子玄遷從余而遊問名於余余曰此亭也極輪奐致爽塏雖然當雲霧抹林星月藏光謂之洞達未矣願子拔身以置蒼茫曖昧之標以指其所求於掌。則雖有魑魅何得隱其羊於無何有焉於是乎輪奐爽塏以成洞達達乎達乎吾以名此亭叔子頷焉書以爲記。丙午夏

益亭記

主於亭者誰藩之豪家荒卷氏也名亭者誰孖山處士三浦晋也君既富焉而又欲益之者何君世以素封聞國用有闕數納金以奉之我知益富又將益辨且君家天與其富世奪其壽不亦慘乎苟壽富幷益不亦益善乎死生有命。富貴在天豈人之所願而致哉雖然歸命於天者盡之於人而後言之。天道虧盈地道變盈益而不已必決。損而不已。必益故益之道在損又損之君家世有仁厚之稱。是福祚之所綿綿與。君苟繼其志。衣食凍餒。扶

持顚沛。積而能散。施而不德。挐其手輿其足。辨酒中之蛇影。遠花間之蝶夢。巽順以走人之急。則我未知其福之所艾云。

樂壽亭記

當城之南。斷岸臨海。松蘿蓊鬱。眼界轉濶。亭構其間。吾　公以爲游息之所。其望也。負陰面陽。巨浸截斷。而南海之山炭炭然。島嶼縈回迺接我之豐。綿嶽西秀。鶴觀前橫。餘勢一朶迸爲四極峯。其佗瀆沱邐迤。速嗡之神蹟。凝露之仙臺。大友氏之覇圖。出役于雲靄滃然中。其秀者。若仙人之纏雲衣霓裳而立。其橫者。若海鶴之俯就飮啄。其迸者。若芙蓉之新出水。縵走急攢。而丘陵開畫。斜拕遠曲。而江流學字。春華織錦。秋樹刺繡。灘聲回轉。嘈嘈乎有若金和石者。天籟瀏亮。隱隱然有若鳳呼凰者。城樓出霧。何地隣龍闕。姮娥浮波。果路通蟾宮。阡陌縱橫。隴畝棊置。沙嘴近遠。人烟參差。往者。還者。呼者。歐者。犁者。獲者。釣者。漁者。傍堤拾翠者。立岸待舟者。有如與鷗鷺伴者。有如與鹿豕遊者。雨奇晴好。朝變暮換。眞造物者之活畫圖也。　公命孖山布衣三浦晋。撰亭之名。且作記。晋謹上其名。曰樂壽。因言曰。山雖好而得水增其麗。水雖大而待山壯其觀。壯麗不兼。有以餒焉。而考之於夫子之言。則何其智者之一水。其樂。仁者之一山其樂。水也活達流利。赴險而晏如。利而不爭。增動而增下。有容而泱洋焉。山也厚重鎭靜。動之而不動。以卑立高之基。故居尊而泰如下之所仰。瞻德崇業廣。蓋車攻馬同。造父執其轡。輘轢磊落。不蹶不注。我觀動者能用其靜焉。君子之化。不見而章。不動而變。無爲而成。書曰。舞干羽於兩階。七旬有苗格。我觀靜者能致其動也。嗚呼令發言出。無滯礙鬱塞。不亦樂乎。厚重鎭靜。攸久無彊。不亦壽乎。山水一坤輿。動靜同機軸。仁智雖遞其用。而賓諸其源則一也。山得水而麗。水待山而壯。能仁能智。其功可大。其業可久。　公就封未期。國人允懷。提封之外。猶母慕焉。市井草莽之徒。糈酒藉茅。私祈其祉。曰。願予　公壽富康寧。群黎百姓。永拜咸臨之賜。

皆何人獨不然。再拜稽首北面。奉爵上壽曰。維水維山動靜相根。有斐君子。猗智而仁。再奉爵曰。思樂彼水。動就昇矣。維物之所歸且。三奉爵曰。喬兮彼嶽。基命穰穰。維衆之所仰且。又竊自祝曰。予公乾乾。冀初心無荒。令我免容悅之謗。天明戊申八月

○題跋

題采葑錄

皷瑟擊缶雖其聲不同其情則一也子登氏居其先考之喪也詩歌徘諧之徒各寄其辭以慰其哀戚之情云徘諧也者非彼所謂誹諧方言一種之奇文辭也其體製雖不能儔于詩歌之場其哀戚之情則一也豈得謂皷瑟者盡情擊缶者不盡情乎子登氏蓋取其情而而不謂其體之高下是所以名采葑乎　寶曆癸酉

克終和詠跋

予嘗曰、世世相望、既往即今也、時時相繼、將來亦今也、詩曰靡不有初、鮮克有終、書曰愼其終、惟其始、不知始始于何、終終于何、始者終、終者始、相循如環、孰視其端、子登賀子、喪其先人之後、輯舊知相悼之辭、名之曰克終、意子登子之於此集也、有優然肅爾中心不可已者而成、想其慶之歎、誦追念之辭、有髣髴者、有恍惚者、有惕惕焉者、有耿耿乎者、安得不以既往爲今焉、亦安得不以將來爲今焉、然則其終者豈翅終于玆哉、已愼始於前、而克終于今、今始今之終者而愼之、終後之始者而克之、今既往、今將來、愛敬不弛、則死者有享、生者無耻、今名既如斯、終身之孝、豈得不力而克之哉、子登子日寄書要題數語於卷後、懇懇娓娓有不忍辭者、故述其所觸而感者、以贈之云、　寶曆甲戌

書嚴君老大人自書合本象戲經後

人何樂、樂有父母、既有父母矣、又何樂、樂其有壽、既有壽矣、又何樂、樂其無病、既無病矣、又何樂、樂其賢也、嚴君嘗曰、人之老也、不自老、其老是以老矣、我今七十有二、自以爲未老矣、意其已老邪、其已老矣、則務取善於不老人耳、而能踐其言、解難和隙、揚善覩非、如近歲荐荒、解推最務、隣里之所

知也間則書奕之娯。其奕也。取記行書。獨自奕矣。曰。惟供以消日也。此象戯經。以舊列行分卷而難見。夜間秉燭。合書爲一卷。晋謹覽之。字畫壯麗。翻大愈所並書舊日之筆。於是又喜。以樂奉養之益永。南山之壽。不騫不崩。寶暦丁丑重陽。男晋謹識。

題大船禪師菡萏集首

師與我。同生于豐。同長于豐。而不相識焉。以南北地隔然。十年之前。相得而歡焉。蓋其相歡以師之檐頭。不帶他人之書。予亦鼎中頗有和水之火也。爾來踪跡無所物色。今茲安永庚子之春。師有懷橘之省。遂訪我之孖溪之廬。清話數日。歡倍舊日。問其所從來。則山焉而探虎穴。水焉而窺龍窟。終隨緣卓錫於濃之玉壺山慈照禪寺云。其所經歷。禪餘之吟。顏以菡萏。菡萏本蓮。自溪聲廣長舌觀。是亦一味之醍醐。我深指於此。據梧吟之。名山大澤。雲烟縹緲。十年之履歷。恍如相伴江湖之中。交歡幾許。師亦還舊棲。漲海在前。波浪洪蕩。不見玉壺山。唯見豫山若綿横天際。悵然之間。又咏其詩。想其人。時已夜。而風在松上。閑雲歸壑。皓月向人。又恍如相從玉壺之遊者。因爲歌曰。分雲又向舊棲還。坐月玉壺山水間。水月山雲舊詩卷。令人還在玉壺山。羞無蘇乃之鸞鳳之響。不能以達之於空外。因書其詩於卷端。以寄玉壺山。時維四月之望日當癸亥。　安永庚子四月望

題賀來惟次吾嬬紀行後

湖海風烟。驛路山川。雙鳳闕下仰唐之衣冠。細柳營中觀漢之威儀。雖未弄松島八百顆之青螺。而已餐芙蓉十萬尺之白雪。河邊拾石。定是識女支機之物。月中折花。豈非吳剛用斧之樹。我未能入海探出日之方。子何人乘鶴。作搏風之遊。天明壬寅十月

逸孟子

此篇。獲之於一遊僧木巳者。木巳遊肥。獲之於狄鞮氏。狄鞮氏者。獲之於閩賈國愚者云。因問其所出。則不記焉。晋唉曰。孔壁汲冢之所未見。數千載之後。胡清氏何繇獲之。豈得無姦商餌奇衒價焉哉。宜矣不記其所出。讀之數四。翻然曰。劍可以吹

毛、奚妨擬之於于將。璧可以照乘。宜當比之於荊璞。今縷縷數百言。不識者以爲潤于事情。識者以爲功矣。若有實蒿目憂世者。必取斯以永國祚。得對證之藥。棄于不出之於神農經。達醫者不爲蒭蕘之言必察。王者之取善也。規規辨眞假。措大之務也。探河察之於自天河邪。自崑崙邪。則亦有其人焉。我唯取于注之於畎澮。蘇佗苗稼。其文曰、齊宣王。聞國人惡有司。將攻之。憂曰。朕將獲其首惡誅之。不然則亂日至。而國家危焉。爲之如何。孟子對曰。今王之政日非。其吏聚歛之於民。以媚王之左右。是民訴其非。而爲王發其奸也。是社稷之福。而國家將興也。夫民者。不可置諸死地。置諸死地。則甘其死。弗願其生。今王奪民之產。不得衣食。父母凍餓。兄弟妻子離散。是謂之置死地也。置諸死地。則狗鼠猶且嚙人。豈狗鼠之罪焉哉。王今置其民於死地。而欲以死懲之。是抱薪救火也。臣聞之胡齕。曰。王之左右皆曰。宜殺之。弗殺則民輕視其上。莫以壓其下。五尺之童。莫不知愛親敬上焉。詩曰。飮之食之。敎之誨之。民之欲生也久矣。今王遽下令改其政之非。誅有司之不良。以謝其民。彼將號泣來繫于獄。夫賞罰者。天下之衡。今戮無辜。曰以壓其下。詩曰。德輶如毛。奚壓其下爲。吾恐王今日戮一人。明日四方之問罪者至。　天明壬寅

○碑銘

杵城菅廟碑

廟在鎭之西。記曰、元和中、里民有諸富某者、泛海遇颶、漂盪之際、望菅公祠於豫之渚、祝曰、神遣我得還矣、以奉祠、及還相土、見小松懸喬木、自以爲瑞、遂建祠以祀、經歲其松愈茂、人呼曰飛來松、其廟曰菅公飛松之廟、寬文乙巳、　邦君瑞龍公、命除其地之租、置社司、今之中野泰長之祖也、延寶庚申、以地狹隘、卜遷今之所、　君乃賜其地焉、里民子來、殿堂既成、廟號仍舊、粢盛之奉、管籥之音、烝嘗不怠、水旱疾災皆禱、今茲安永庚子、正當百年、里中建碑、需晋記之、晋曰、祀者禳禍祈福、祈福於公、而未知　公之所禱、豈可焉哉、曰、心已合誠、

不祈神護、是　公之禱辭也、蓋　公之初、寬平上皇、爵靡于鶴鳴、望德施之普、然藤氏自從與于輔袞闕、私相位於家、已數世、時平以其門葉、壓此德業、譖以浸潤、剝遠及膚、昌泰天子、暘谷之日、未及魍魅之竄、雲霧徒封姑射之巔、龍德雖見、而上阻大人之應、見幾而作、則羝羊觸藩、而謂舍爾靈龜、觀我朶頤、刻也、饕餮之徒、知爵有威福之柄、而不知德有榮辱奉棄之歸、驅蛇龍、皷雲霧、乘其曖昧、擠之於虺虺、然風雷有聲、金縢悔發、衆感籲伸、榮辱炳如于智力之外、勝威福而直上、　公之薨也、水火震疾、災眚荐臻、衆口譊言、崇至矣、又言、厲見矣、誠者、天道也、誠之者、人道也、心合誠者、則誠之之謂也、天命穆不已、公心齋如、已以升沈、時榮枯、奚爾用此鈌鈌之態、爲、雖然湯旱九年、不歸之於湯、東海三年之旱、歸之於殺孝婦者、何則通天下之情、能容人之爲善、不容人之爲不善焉、厄窮抑塞、委之於命、而傍觀憒憒、寃而屈焉、慝而伸焉、不得訴於人、則欲伸之於幽冥、觀諸恭世子之靈、見狐突、岳武穆之廟、繫秦槐、憒憒內鬱、妖言外漏、人甘唱之、人甘和之、今水莫所忤之、則恬澹瀲灩、奉纖芥浮之、方風激雨漲、奔騰洶涌、崩崖決堤、艨艟艅艎擊爲齏粉、人情亦然、鬱而激焉躍而衝焉、崇可起焉、厲可見焉、妖言可成焉、誹謗可聞焉、猶尙不已、孰知厥極焉、然則其欣欣焉、于于焉、恂恂焉、惕惕焉、亦唯情也已、於是祈福禳禍、唯竭誠以保合大和、和則神護之、神護則人歸、人之所歸、榮名不朽、人失大和、而神厭之、神之所厭、人惡之、人之所惡、患辱兼至、嗚呼彼驅蛇龍、皷雲霧、乘其曖昧、擠人於虺虺者、安知廟食百世、香火遍世、盛名播海外、奕葉爲淸門、棻盛之奉、管籥之音、與霄壤共無窮哉、噫、因作歌以代祝辭曰、

靈於駕、　舞鳳凰、　狻猊肅、　和鑾鳴、
風伯掃、　雨師淸、　釃酒湛、　黍稷馨、
參前倚衡兮禱久矣、　奚止邦家兮寰宇昇平、

安住養國禪寺碑銘

古皇綱之末。解紐。國置其司。郡司隷國。鄉司隷郡。王人及寺社之所食。別有莊園。領其地者。曰領家。中會天步之艱。源賴朝氏興焉。前拔跋扈之姦。後竊控掣之權。而地猶屬國司領家。武人立其間焉。賴朝以武衞。開府於鎌倉。以號令天下焉。於是請爲總追捕使。置守護副國。置地頭逼莊。公家武家肇判。武人逼王人。浸漁蠶食郡國之治熸。而割據之勢成焉。賴朝之嬖姬大友氏有身。使京師守護藤親能擧之。曰能直。親能者姬之姊夫也。能直及長有才略。授豐後守護職。兼鎭西奉行。後世探題之所權輿也。建久丙辰就國。冐族於大友•蓋爲夫人政子諱之也。子親秀稱利根四郎。娶肥前前司三浦家連女。而生賴泰。襲職。親秀次爲重秀。爲能泰。爲直重。爲親直。爲親重。爲親泰。親重親泰與賴泰同母。建長改元己酉。賴泰以親重爲速見郡武者所。稱大炊介。任肥前守。之爲道海公。公之初來。先居鴨川里。以經營木付臺山城。爲速見氏。於是置別業。世在鴨川。數世之後。遷城於今治之東海岸之墟•爾後世襲武者所。漸而天下疆場歸守護•屹而爲方面之主。支分皆爲推恩之侯。如田原戶次吉弘等。實衆。賦稅納已。以從府主之指揮。公性敏。好學練達武事。是歲從兄賴泰。詣鎌倉。翌年謁將軍賴嗣。正元已末。使僧佛山開此釣鼇山安住養國禪寺。寺成。請洛之圓爾禪師。以爲始祖。佛山爲弟二祖。文永中。公在鎌倉。將軍宗尊親王。愛其才。常置諸左右。以具顧問。眷愛渥至。一日公直營中。親王延之。談亘古今。公引證和漢。應對如流。親王拍案嘆曰。文場旗鼓。孤擧卿。拜和漢將軍。從是營中同然。無復呼其名者。弘安辛巳。蒙古侵邊陲。朝發藩鎭之兵防之。府主在鎌倉。促公赴軍。公以部下之卒。三百七十。破賊衆五千於八角島。直取其戰艦五艘而還。同乙酉。卒臺山。壽六十一。葬之此山中。而祀靈於木田之丘。曰和漢將軍之廟。其子能重嗣立。稱阿波守。爲道山公。建迎接寺。改速見氏。爲木付氏。其子貞重嗣之。稱紀伊守。爲道泉公。元亨之亂。屬府主貞宗。伐北條英時。有功。建武丁丑

正月、屬府主貞載與結城親光。戰京師東洞院烏丸、貞載敗績、貞重死之。其子廣輔公、美濃守賴直。有勇武之譽、府主擇麾下有干城之才者七人。以爲部將、賴直其一也。是爲木付氏之中興、應安甲寅、鹿苑公之與菊地氏戰、以府主、爲行衞之警衞。留筑之府中、與田原直平、爲左右先鋒、而諦付公伊豆守親直、而了覺公讃岐守親公、而信佛公遠江守能世、親公與豫人戰死于臼杵姬嶽、能世與周人戰豐前、死于篠崎。蓋能世之死、先親公、而嗣公伯耆守直忠、而道玉公伊勢守親忠、而滿意公大藏少輔親貞。而咲顔公刑部少輔親久、田原氏。城在安岐城主宗傳畔、府主、帥卒五千攻府、弗克。引還。船泊水崎、府兵追之。親久設伏擊斬之。而道意公左京亮親家府主親治。小門山之敗。死於由岳之麓塚原。而道寂公紀伊守親實、而滿意公右近大夫親諸。而宗虎公紀伊守鎮秀。時府與薩爭九州探題。探題者。當時掌一面指令之職也。豐軍敗績于臼之耳川。鎮秀獨全軍。護麾下而還。

與田原氏有宿怨、與宗傳之子宗龜戰。死于安岐。爲天正己卯年矣、而宗冊公中務少輔鎮直。而宗心公左衞門尉統直。至此十七世。子子相承。無兄弟叔姪以相及。同庚申宗龜之嗣、右馬頭親貫。以安岐畔。由族人紹忍之譏也。設砦於鞍掛山。與筑肥爲聲援。時宗麟老于丹生島、左兵衞督義統。襲職掌兵馬。遣將擊之。親貫敗死。府主以田原氏爲名家不可絕祀。以其弟新九郎親家爲繼。安岐之慕舊主者。不服。鎮直受府命、與清田鎮忠、擊而殲之。時天下瓜裂。諸道糜沸。義統承宗麟之餘弊。軍威不震。薩人乘勝長驅。府內已陷。退高崎城。又退龍王城。筑肥諸將。不死于難者皆退走。勢如破竹。薩將新納忠元。進拔日出城。又拔深江城。如潮湧。遂著我城。鼓噪而進。鎮直能撫下。勵以義。防戰甚力。臘至翌二月不拔。鎮直瞰間收敢死之士。直衝其營。薩軍大敗。不再北馬首。國東一郡。於是而安。文祿改元壬辰。豐臣太閤。伐朝鮮。義統以麾下從。同癸巳六月。坐軍法國除。初鎮直守城。統直赴役。

以子甚九郎直清從。直清戰沒朝鮮。以宗國已除。麾下諸將皆罷還。船過門司關下。統直以國耻獨自任。慨然嘆曰。我懷以古處。不若死之安。書絕命之辭三章。自裁投海。實爲六月二十一日。訃至鎭直謂夫人曰。主辱臣死。徇國之時至。相偕自盡。自道海公鎭之。歷載三百四十有五。至亡仍守下壺之節。大木之顚。一繩奚維。而崑玉破碎。片片含淸焉。好學之澤。於是有光。嗚呼威權之歸下。賴朝氏之所豫。其謀雖成。而天下憧憧荷干戈者。凡幾百年矣。生苦鋒鏑。死爲寃鬼。奚其圖之。於始之不淑焉。　東照宮生此災厄。具嘗苦辛。風梳雨沐一掃宇宙。濟四海之瘡痍焉。簡前代之有功于其君。有德于其民者。遠搜其子孫。等而登之。廩祿以顯之。夫木付氏之勳業。祖孫繩繩。麟趾可誦也。冊心二公。崎嶇艱難。不隕家聲。雖有大小之別。比之於楠家。而不敢耻矣。我哀其操之苦。斯而其德之隱晦焉。今茲天明甲辰。距文祿癸巳一百九十有二年。人蹟轉換。釣鼇山兀。闤闠相接。諸刹逼促。洞達鬱茂。非其古焉。雖然殿堂猶存。歷世之主。祭奠不闕。春二月十有八日。當檢非違使別當。從五位下。肥前守。左衞門尉。速見郡武者所。木付臺山城。主和漢將軍。安住養國寺殿。慶雲道海公。五百遠忌。物在人非也。其裔其臣。無復見者來助祭。恐其勳業節義。久而澌盡焉。有志之士。將鑱之於石。謀其不朽。孖山逸民三浦晉。聞美其擧。係以銘。頌其功。曰

豐山崔兮。豐水流且。懿垂範兮。殺彼嘉猷。狐兮弗忘。死首其丘。青史於遺。實俾人憂。海崖之石。美兮如璆。冀勒之此。以傳千秋。天明甲辰

香川文定墓銘

君諱文定字圭祥華名善助本府森本治右衞門宜綿長子母古城氏以寶曆丁丑十二月二十一日生歲十有出嗣同府荒卷門十郎景隣之家有故改姓香川少而聰瑟父母稱孝鄕黨稱弟兼善於音律又能向學秀而不實行年二十安永丙申六月初三病牀屬纊法諱興雲院寂潤月純君未娶故無子親戚議以外家古城氏之子敷重爲嗣

葬于城西一乘妙經寺光瑩之側孖山三浦晋銘
曰

阿練若側　幽居巳閉　天胡奪遽
弗卒其慧　入孝出弟　以能游藝 安永丙申

佐藤周尼墓銘

佐藤君諱秀實字成章稱周尼初學醫於藩松田松隱先生後遊京師會吉益東洞先生唱古方大服其說業成還鄕藩中未有和之者遂去居浪華其蘊以伸乎生好論語爲著論論竊比未成以藏家有自見終不變其守亦好茶與花安永丁酉之秋得疾自知不起掉舟而歸以十一月二十五日沒君以元文丁巳八月十三生至此歲四十有一君未娶故無子法諱白山周尼葬于治西白泉山正寬寺遺言託記於晋仍繫銘曰

維松鬱兮卜君之宅胡以標德確兮刋石
永永丁酉

肥前大邨妙宣寺弟子日翁碍銘

公以安永戊戌十一月二十八日沒于本州重井枝山時歲十有五諡曰日翁俗姓堀池氏以明和改元甲申九月六日而生安永乙未冬十月就深山妙宣寺日衞上人剃髮法諱低頭時歲十有二師爲授法華公受讀二三品卒通終篇公之師兄曰恕乎人自傍謂公曰恕乎之乎見何處公應聲曰於嚴王品見曰豈異人乎人駭其聰慧孝順溫和處置有老練之態事能承師父之志大邨之俗大忌痘焉若會隣鄕出痘則弗與佗通偶見兒之出痘則舁移之於幽僻之地募嘗病痘者以看其病於此死生不通其移兒之地乃重井枝山也今玆痘行公慨然自奮曰科藪之身將跋涉千里豈畏憚逡　巡于玆哉終赴其地遺其毒之慘身終不起師以彼雖妙齡典刑如老成不知嘗老宿之宿因未果暫遊于玆乎因以翁字贈上人徵東豐三浦晋記其墓晋去秋西遊識其人爲之愴然因銘曰

秀而不實　何天之衢　天耶人耶
命夫嗚呼

征矢野元甫翁碑銘

君諱宗辰。字元甫。系自參河守源賴信。出其裔居甲州標葉。而爲標葉氏。移信州征矢野。而爲征矢野氏。其族世事小笠原氏。死國難者九人。詳于家乘及倉城大隆寺碑。高祖曾祖。從于播州明石。立野。豐前中津。食錄四百五十石。父宗政。稱甚助。會侯之國削封移。而奧平侯來臨鎭。乃退隱宇佐郡鳴川。宗政娶小幡氏。生君及二女。長適豐後安東氏。季適藩士跡部長能。君以菽水之艱。運志種杏。葉執名與。延享丙寅。藩君龍源公賜俸。至嗣君與隆公。賜秩百石。俸五口。寶曆庚辰。有故而去中津。小倉與前藩。舊兄弟之國也。聞其落魄。憫有功之不祀。明和丙戌。命延之。君勤先勳於石。以建於大隆寺。安永乙未。中津再辟之。事達小倉。小倉侯允之。不收其祿。以優待之。君反中津而就俸。既而侯卒。遺命復舊秩。君娶荒川氏。有二男四女。長曰宗祥。次曰宗平。宗平字元杏。以奉其祀。門生宗玄者。分俸。爲杏之義弟。四女皆夭。另養　氏之女。今爲藩之文學。倉成亟之配。其銘曰。

幽宮既悶。孰問厥室。灼灼杏林。結賚其實。孖山三浦晉記。天明甲辰

藤永本貞碑陰記

君諱本貞、稱源右衞門、本姓後藤、其先三郎秀本者從大友能直、自鎌倉來豐、守國東郡奈多城、爲奈多氏、宗麟氏之時、其裔鎭基者、諫宗麟而黜、爲南海海賊監、文祿朝鮮之役、大友氏國除、慶長中、黑田如水入郡、鎭基與其二子戰沒、季子鎭信猶幼、避亂於護江、終爲護江之人、君者鎭信七世之孫也、視藤氏之永久、改氏於藤永、貞享中、邦君宗閑公分封三千石於弟圖書君、圖書君擧以爲郡吏、因世事此家、君娶佐々木氏生三男二女、以二言之、長子早夭、次女適河野氏次慶本奉祀、次女適古川氏、季本高、事圖書君于江戶邸、君法論理性、以享保丁酉三月十九日、五十四歲沒、夫人法論壽慶以寛保癸亥正月二十一日、八十六歲而沒、曾孫行忠、修其基、以記其事、孖山三浦晉書、

天明乙巳

賀來子登碑銘

君諱元龍。字子登。姓大神。族賀來。華名吉右衞門。豐前中津人也。其先世事大友氏。嘗由與清田氏爭門地。弗克。走保州下毛郡賀來城。及黑田氏鎭之此。邑竟納鎭。而瓜瓞滋蔓。爲邑豪族。祖惟春。始徒中津。父惟政。娶濱田氏而生君及正長與二女。君早慧。總角就學於藩文學敬所藤先生。先生試學君子喩義之章。問之。君爲辨析利義之分。先生奇曰。可敎受。煦嘔有年。年十有四。以家事客遊于四方。拮据之暇手不廢卷。及還家益孳孳。喜徂徠之說。論孟軻氏之論與孔子不合。有叙舜辨。觀筑人山本氏爲豐中津豐葦原中津國之說。主張其說。有引證辨論。最用意於二豐之事蹟。應永新田氏之亂。慶長黑田氏之戰。及津藩之訟革廢與井市猥瑣之事。故皆娓娓而記。諸家帳中之秘。購求謄寫以藏家焉。平生愛客好飲。意氣激昂。有孔北海之風。每酒酣扼腕曰。丈夫生世可以託名於不朽。何與草木俱生。與草木俱朽爲焉。所交廣。所著多。是以名高于一方。雖老身於釀酒家。能高尙其志。其壯也。

繼父而爲市長。又爲銀鈔局副。其性骯髒。難與俗合。君不以爲意。免職後。閉戶謝客。以著書爲務。至三十餘部。或上木。或藏家。或未脫稿。雖落魄居肆。竟以所志而終。屬纊在天明甲辰夏四月二十八日。去生年享保丙辰六十九歲。娶族惟壽之女。生三男二女。伯統虎。仲高鳳。季應麟。二女與應麟皆先沒。統虎學醫。高鳳奉祀。室亦早逝。君獨與二子處。淸潔如僧舍。遂葬之於城東先塋之側。君平生以其名自處。亭曰彩雲。號曰玉淵。又曰九九子。孖山三浦晋締交最久。臨終託以墓銘。誼不可辭。攬涕繋斯辭。

灃水洄濇。　斯蟠斯眠。　紫氣失風雨。
遺珠墜人間。

和田勇君墓碑

君諱景秀。稱勇。本藩工藤維石翁之子。其先自豫

州來徒杵築。以貨殖爲藩之豪家。翁以其先業弓馬志不在市井。破產肆武技。有四子。教任其性。伯客死于長崎。仲冒寒川氏事紀藩。叔即君。季景乘。字惟策。奉先祀。君少事本藩。爲三輪某假子。稱千嘉。終自扈從。爲近侍。　老太公對馬守。命爲侍姬和田氏之嗣。娶淺井大夫女。生二女。無男。養丸右門之弟爲嗣。俸十有五口。席次武騎隊長。天明癸卯十二月二十七日沒。上距生時延亨丙寅。三十有八年。以終江戶邸。葬之於淺草大雄山海禪寺泊船軒中。法諡香林院梅窗了雪居士。景乘瘞所信遺髮。於城西法西寺考妣之墓側。標石以祭其靈。君爲翁之子。善擧法。兼達喞轡之術。　天明乙巳

後藤德輿碑銘

將執筆先泣。泣罷號筆記。曰。生。姓後藤。名介。字德輿。一字成美。生而未期。母某棄生。父伊兵衞貧窶。纖履酤酒而餬。自懷生。乞乳含哺。及長。目光射人。寒田里佐藤莞爾。奇之。呼教之。授書能誦。課文斐然成章。鄉稱千里駒。年十八遊京。無所恢。歸與其友毛利可貞遊。慨然期志不朽。文彩鬱乎。數訪我於孖山。天明丙午四月。來約移居於孖山。還不幾。訃至。曰。五月十二日沒。年二十有四。噫生可恨哉。夫人。生不見其所生。長不足拔水。臨死無託抱痾瀕死之親者。身死嗣絕。羽翮不摶。空委地。地下則吾不知。於人間則休。生之執父手。爲永訣。其情如何。竟窆其鄉之爲豐大分郡光永里。荊棘松柏。蝶蜂狐兎。二分中元。誰掃其墓。藤翁標石。毛生輯其遺文。三浦晉銘其陰曰

春華秋葉兮。於摧玉樹。天上星月兮。叢間風露。

天明丁未

○諡議

本藩監郡綾伊承君諡議

天明壬寅秋九月三日。藩之監郡。綾部伊承君沒。仍私議其諡。曰。於易蹇爲難。蹇之爲卦。前水後山。遇險而止。遇險而止者。若徒止于此。則安濟其難。於是乎。不能不爲于不可爲焉。是進退之難。所以二十年蹇蹇于東西也。進則水焉。退則山焉。苟非

剛中得節。則詎得不諂上虐下焉哉。公之志。屯然內鬱。沒之後。藩中倀倀若有失。而後翕然知無復人。九五曰。大蹇朋來。象曰。以中節也。宜諡公以爲中節先生。天明二壬寅十一月

日出喬文學諡議

終始一學。屈己就人。優侍公之顧問。屹爲藩之矜式。學勤好問。敎誨不倦。考諸諡法。宜以稱文長先生。壬寅

鳴鶴先生諡議

市原玄意君。將爲其先君子製神主。諡以標其德就予謀之。曰。先君子沒已二十四年。時我童稚。以故託之於母大人。曰。我死。勿遄置主爲諡。彼髫齓之兒。其何識焉。必竢彼嚮學解事。彼將有所處焉。而遇天之不吊。去歲又失恃。永感之下。事急于此也。爲之如何。予曰。嗚呼先君子之望子也厚。遺愛如不違顏焉。中孚九二曰。鳴鶴在陰。其子和之。我有好爵。吾與爾靡之。先君子應辟於此藩未幾而逝。家不斷如縷。而厚望子於今日。而子今有今日。先君子之眼光。猶不落地。宜以爲鳴鶴先生。天明甲辰

○字說

字矢野懋說

矢野氏之子。名懋。冠請字於余。余曰。請字之曰雖愚。傳曰。果能此道矣。雖愚必明。雖柔必强。蓋其功。在人一則己百之。人十則己千之矣。孳以從事於斯。則可以不負其名焉。已不負其名焉。則無愧於古人之言焉。每其音入耳。省之勉之。勿使字爾者。爲世嗤焉。寶曆丁丑

字矢野弘說

矢野氏之子弘。字之曰毅卿。蓋之子總角穎敏。皆望其成器。予愛其早敏。而恐晚成之不遂。因字之以毅卿。曰。學之事。欲終始一。曾子曰。士不可以不弘毅。任重而道遠。非毅則不能致遠。毅乎毅乎。我深望之於之子。天明丙午

○傳

小宮山內膳傳

內膳姓者小宮山氏昌友之子也昌友事武田氏

守松枝城（上州）死於二俣之役信玄卒事勝賴長坂長間跡部大炊惡其忠直竊惡之當與小山田彥三郎相彥三郎賄長坂跡部以物色之勝賴追之當勝賴奔天目山尾而從之請其臣土屋惣藏曰吾其死乎傷君之明生乎失臣之節寧傷君之明而不失臣之節召弟託母妻子而去又問曰長間從歟曰昨亡彥三郎從歟曰囚而十日秋山從歟昨早亡內膳憮然良久曰天其棄武田氏乎君之擧人何至於斯矣歔欷涕數行下終力戰而死　延享丁卯

某士傳

某侯之士妻通隣人夜夜踰牆來鄉黨傳而相語士未知之視牆有跡疑而瞰之果無因陰市一死狸以矢貫之夜後庭急呼家人示之曰我視外人之踰牆而往還隱牆而待而殪之爲此妖所惑也中外復相傳語之稍無言其眞事者數日出其妻鄉黨聞之爲仁且智矣可謂能處變矣　延享丁卯

○雜

韓信論

韓信用兵也摧鋭破堅何其神也晩節末路何狼狽也蓋有說高帝忌刻少恩信非有親故之好不輸至於此哀哉初蕭何追信高帝不得已曰吾爲公以爲將信之於主不亦薄乎當登壇論天下形勢且奇之且恐之解衣衣之推食食之其意岌岌也故下魏破趙也函收其精兵帝之入趙壁也託其過而奪其軍信猶不諭以爲漢王之於我解衣衣我推食食我擅伐齊請王高帝方困於滎陽以爲以危難要我岌岌之意於是成胡越使之王者勢也豈帝之意哉武涉蒯徹之說豈不足於動心者乎使信微有疑意信亦非於不動心者焉項羽之敗也襲奪其軍而徙之於楚信猶不諭終致雲夢之游至於途窮足躓憤然以區區淮陰而叛異哉由是觀之信之叛也非信自叛矣漢激之也從夷其三族漢亦少恩哉雖然信罪亦大也蓋天假手於呂氏歟初信之引兵東也齊已下矣輕聽狂生之說襲巳降殺我名臣蔑上姤功而薄其危要爵

不臣孰大焉從此漢庭君臣側目視之寒心憚之說者責良平以躡足信以蓋世之才據千乘之國坐視漢王之危不發兵請王安得使高帝不怨入骨良平不惱惱躡足當此之時信當受責而賞信猶不愉以爲漢王之於我解衣衣我推食食我何愚也信之生死蓋決此擧由是觀之滅信者非漢矣蒯徹也徹奚爲者爲此厲階說者以徹爲信之箕子以予觀之信之飛廉也不然何不勸信歸下齊之功於酈生止請王急發兵也涓涓不塞洪洪之懼徹之謀者抑末也向使信張鼎足之勢安得與天授之人抗衡陳豨過信信挈手而語何其輕也豨聽之何其函也信者用兵家名士豨者高帝寵臣業不可如斯容易也蓋呂氏誣信語歟舍人上變語歟讀陳豨傳無片辭及此矣以淮陰侯寃哉豨蓋見疑於多客云　延享丁卯

知足解

指馬問之雖孩提之童知其馬矣指劍問之雖庸愚之人知其劍矣伯樂觀之而後知其千里之技張華遇之而後知其天下之寶矣知之者必用之故逾嶮度遐不知其勞焉斬蛟斷金不覺其鈍矣知則知也而愚者之知猶不知也昔者師曠坐堂鼓瑟有客倚門而立從者出曰客何爲曰聽瑟吾聞夫子之於瑟玄鶴降舞鬼神來聽曰何操曰文王之操也聞之又有客亦依門而立從者曰客何爲曰聽瑟吾聞夫子之於瑟玄鶴降舞鬼神來聽曰何操曰操則我未知也二客皆知師曠之妙瑟然要之一客知瑟一客不知瑟也財津子壁榜知足二字自箴賢坦小串子爲之解矣噫財津子蓋有所見此於此乎將有思於此乎人之在陋巷雖蔬食菜羹未嘗不飽雖布衣韋帶居之不惡而傲然自以爲足矣是所謂孩提之童知馬庸愚之人知劍倚門之客知瑟也一旦金紫挽於前聲色富貴推於後安得澹然不動心乎千賞在左如盲美譽在右如聾能有幾人乎於是從容不趨於富貴之岐義之與比可謂知足者矣天下雖大莫富於知足秦楚之富猶有不饜故日夜黽勉合從連衡

之力苟知足則觀之將爲何物哉故於知有眞知則將介視秦楚之富苟能介視秦楚之富可謂一大丈夫矣財津蓋有所見於此乎將有思於此乎予美其意以賛云

學禁　延亨戊辰

勿下以二待一人者一而自處上。勿下以二自律者一而責上人。勿下以二我好尚一加中諸人上。勿下以二小怜愀一侮中他之敦樸上。智極二其高明一。行勉二之於踐履一。

梅園書翰集

○（以下三通門人矢野雖愚に與へられたる者）（別府町清原道彥氏所藏）

貴翰薰誦漸霜露之候推移候處起居御清健御入被成欣慰不過之奉存候野生依舊消日月候御慮懸被下間敷候然は此節佐藤生此地御來遊得と得貴意無此上奉存候佁利に相みへ申候不肖の拙子御得益の處は無覺束候得共隨分可申承候御安心可被下候猶又御宿所にも可然御挨拶可被下候

一、簡儀出來申候處按排不宜候追追に栫出し可申との事に御座候

一、黑鄉子へ答候書とも御覽思過半候由に候得ば於拙も甚本望の御事奉存候條理の義は只只實徵を主と仕次次書にて考候事にて愚拙申候事も天地に合不申候得は僻說にて御座候又先樣固見を取候て論候はばたとひか程の難駁候ても不苦候扨條理千古を經て野子已前致發明候人無御座候故階梯無後座さてさて苦候事に御座候拙自少年齒爲之豁髮爲之禿候得共條理七八分をも得候位に被存候生涯十分の成就は出來申間敷候被仰下醫事鄙衷の通に御座候此地位にて御座候得ば隨分御進み可被成候世間の學習習臆に痛候人は何分說入不申候何ぞ中進候樣に被仰候得ども當時取込申て不能詳候贅語中の一篇是は未脫稿にては無御座候得ども佐藤生へ御謄寫被遣候へと申置候御覽の後御一咲丙丁童子へ御投可被下候御他見御無用と申內多賀子は同調の義御勝手に被成可被下候先は答謝申述度如斯御座候秋氣折角御加餐可被下候恐惶謹言

九月五日　三浦安貞

○

先月十一日の貴答昨日落手御樣子悉之候先

以可申上は別後被爲失掌珠候段驚入御愴神の段自此不堪悵然候折角御加餐可被成候酷暑の候一入御自嗇奉祈候拙子依然として逕烏兎候御懸念被下間敷候

一、御別後條理御探索被成候段彌御厚意にも叶候由左候はば隔山川候とも得一知音候と奉存候夫に付杵築佐野氏の子此内暫在山談天地候に付指示に苦候時渾象の簡儀を致指圖候に付彼生及工藤生細工被致候追て調可申候調候はば定て藤生より沙汰可有御座候實に天地を得るの筌蹄ともなれかしと存而已御座候上方の君子にみせ候ものにて無御座候

一、時俗の風習御嘆息滔々たるもの天下皆是に候得ばとかく難申候浮屠氏などは多候故俗物も多候得ども其内人物も多みへ申候醫流は唐にて尚士にも齒せられず候故甚人物にとぼしく孫思邈ごとき人甚難得候ここにおゐて偶醫をよくする人ありても醫を以て稱せらるるを耻申候本邦近古已來一變化して常人と衣裳形體を異に致候樣に相成候其志をするに只衣裳を美にし俗に媚び人の憐をとり候事遊妓野郎と同態其辨辭聞えきがごとしといへども廿九日は唯糈を得るに在候只德本子壹人此中にあらず本邦醫流の第一品とも可申候歟漫遊雜記をみるに及んで獨嘯子の胸襟やや灑落に相みへ申候後藤氏謹厚且被爲一宗の開祖候得は於醫道に大切に御座候本邦の醫傳見不申候もし宜敷物も御座候はば御しめし可被下候先草草鶴崎方門生歸省に付如是御座候

一、安節へ御加筆猶宜敷申上候他期後鴻候恐惶謹言（文中藤生は雖愚の從舅藤子龍を斥すなり）

六月廿八日　　三浦安貞

○

醫國之義是は先達て申進候と覺申候御難問

御尤の御事に御座候是は拙著身生餘談御覽の上又又可申上候間先略申候惣じて天地の間の事は本一に候故何事も融候位有之候又二に候故斷然と分り候位有之候此間をよく見候處條理の事に御座候其故は譬へば孝の字を擧て說候日は無忠も不幸に候無信も不幸に候無仁無義無禮無智は皆不幸に候不養生も不幸に候不治産業も不幸に御座候忠を擧て申候得ば君は一國の父母に候我父母と仰ぐ所につかへ候忠に候然れば一家の孝に候無忠心して孝道は不出來候無忠心しては仁義禮智皆虛文となり申候忠なくしては妻子奴隸にも道は不被行いづれを擧候事も皆一の位を持候ものに御座候醫より眼開候得ば天下の事非醫事なく候一段下して申候へば商賈にみせ候得ば天下の事悉商賈の事にあらざるなく候又佛事にみせ候得ば風聲水音まで皆佛ならざるなく候故に心病む人惡をなし氣病む人病をなす天地よりして見ればば同一病人天心を病む人を分つて大家に屬し支體をやむ人を以て醫人に屬す庖丁物をみる時皆牛也醫人物にみる時病健の間にあらざるなく候

一、古なきの病あれば今あるの病古なかるべき事條理の道如此みる事に御座候乍去未得徵候未得徵候故博く求申候若彌徵なくんば又其條理を考べき事に候御不審御尤の御義拙も同病の人に御座候或は今行はるるもの又絶する事もあるが吾五十年の壽を以て窺候事たとひ書典有之候迚ち漸堯已來五千年に不盈事に候徵未得候故とかく難申進候折角御考御深索可被成候必可然故可有之候先夜陰老眼朦朧の間相認候分りかね可申候歲暮の御作等御出來の上御暗投奉待候多賀兄定て御安健と奉存候御序可然奉賴候恐惶謹言

十一月卅日　三浦安貞

○（杵築町岡島保男氏所藏）

貴墨拜見秋冷御平善御渾家御凌被成珍重之御義御座候然者新五郎追追歸し候樣被仰聞致承知候拙者も少少細工ども賴候仕舞次第修令も木付日出邊迄指遣候同道爲致返し可申候其節は一日日出迄御かし被下候樣にと存候御賴申入候

一、箱一ッ
是は至て大事之物に御座候何卒明日にも寺町森常藏殿方へ慥に御屆可被下候無間違樣に還可被下候

一、箇天儀くづれ物是は新五郎歸り候迄御預置可被下候

一、書狀前後に成申候此節御使見事の御肴被仰付忝致受納候萬萬追而可申承候愚妻も宜敷申入候恐惶謹言

九月廿三日　三浦安貞

岡島羽仙樣

○（大分郡鶴崎町毛利莫氏所藏）

只今家老中根齊と申人の娚にて御座候足下の義被承及何卒官途の志は有之間敷や拙者へ承合せ吳候樣にとの事にて御座候尤醫家にては無御座候當時困窮被致候へ共君德に於ては御聞及も可被成候明哲慈惠の君に相違無之行末はたのもしく奉存候もし官途の望も御座候はば御取持も可申候此處は先よりも不申來候へ共御夫婦にても苦かるまじ候や其義不被存候て申來候や又又木付の義承可申候いづれに相成候とも御返事不被下候ては拙者こまり候に付兼兼奉賴候已上

極月廿二日　三浦安定

毛利泰元樣

○（東國東郡安岐町渡邊勘藏氏所藏）

當代之豪傑學習一洗の功なきにはあらず候へども甚不修邊幅其末流當今に至て相見候

當時の先生と稱する者以道學而修行の人に目し放蕩を以て風流と稱す故に今の靑袍は其志行却て常人に不及唯白眼以接人晋生質辭藻に拙く偶吟哦仕候も興あれば成し興なければ不作自拙きをしるを以て四方の諸君子と抗衡の望なく候先生に親炙不久候得ども道唯彝倫にあるの所深く服膺仕候條理を取て天地を大觀するに於ては前に不見古人ここにおゐて竊竊乎として章句訓詁をおさむる事不能是を以て晋自量るに晋が所見必四方之諸君子と合申間敷候今日世の晋を望む者皆晋が意に非候是によつて晋竊に望を四方の諸君子にたち候若同調の人御座候はば於御李車而晋これを憚るものにあらず候是無用の言に候得ども彼書中に藤子の事なども見へ申候故心事ちらと書し候必や此意彼地へ御沙汰被下候事にては無御座候鄙意又藤子にあらず候望は四方の君子にたち居申候辭藻に拙く訓詁にうとく經史に不通是自しる處に候榮利に走らず自之分上に安じ候は頗自得の境有之候條理を取て天地を大觀するにおゐて肩古人より卑きを不覺候聊おもふ事有之吐露心情仕候爲狂爲癡亦只從所見而已

即日　晋

富坂先生机下

○（東國東郡中武藏村未綱琢磨氏所藏）

本立殿に承候得者春霖之節御無變御暮被成候段奉賀候拙者無恙消日申過候御安心可被下候正月之比は御祝書忝奉存候自是は取紛御返事も不申述失禮罷過候右申譯旁得御意度如此御座候恐惶謹言

三月二日　三浦安貞

甲原幾平樣

尚尚日本通用の字數御尋日本の字は先いろは四十八字其外和字と申ものむかしは大分

出來候と相見候今はどれはど御座候や不存候杣畠(ソマハタケ)など申類和字にて御座候又俗字と申もの有之候躾糀(シツケカウジ)などの類にて御座候其外漢字大概三萬餘四萬不足ほどと見へ申候しかし急度極り候ものにて御座なく候とかく世世にまし候方にて御座候其外からにても俗字と申ものも別段にありとみへ申候其外は國國にていろいろの字御座候朝鮮の諺文天竺の悉曇各各其の國其の國の字きわまりなき事と被存候

○(以下二通杵築町石田伯介氏所藏)

晋謹て考るに古仁德天皇の御あらかは雨もり露そぼてり其古を推せば太神宮は御供三杵にしてかやぶき也御當代東照宮は江戸修覆の義はおしへを遺し給ひ候新造の義は御とどめ被成候何れの御代にや下馬札新敷出來候得は水戸候より御當代の御法に新規の義なしとて御老中へ御沙汰有之古を見つけ柱をかへ候とも承候近來所所土木の事盛に相成八坂両子も出來當時御宅被思召立候由屋は雨もり風入候而は用立不申候得は定てやむ事を得ざるの御事と奉存候御支配なども當春大變定て御聞にも達候半と奉存候左候ば人民飢寒の徒も多可有御座候文王の民をつかふ事假るがごとくと申候縣令の類は元より民をかるものに候文王民をつかふ事かるがごとしと御座候得ばかる人に手際は別段の事かと被存候民をつかふに時を以するはもとより聖人の敎に御座候當君の儀を承候に民をつかふ事甚御苦勞に思召風聞に承候定て是底の義は御思慮の上とかくに申上るに不及事とは奉存候得どもとかく手付の役人と申ものは存寄候ても人情にひかれ申さぬものに御座候拙義は切磋琢磨を以て君と交を結候得ば君始終の美名を全し給ふ樣にと奉存候古人雖有百術不如一淸と申置

候とかく民人等役目に罷出候ものに御蒸愛壹人にても御減少費省候樣肝心修造あしく候とも美名不多候尤兩子とも當春出來申候得ども是は存寄御座候て一言も不申候成事は不說とも申候得ば無用とも存候へども千一人民痛苦の聲にても有之候ては酸鼻仕事に御座候少少怨言御座候ても主令の耳には入不申物に御座候御老父樣も御堂上に御座候得ばいらざる指出にても可有御座候御覽後唯献芹の志と思召御怒被下間敷候已上

八月廿九日　三浦安定

○

開封御平安の段承知欣然不過之奉存候然ば兼て御賴の廣澤墨帖參候故此節書生方より進申候其外にも宜敷物と被仰候歐陽詢行書文徵明草書參候文徵明進申候歐陽詢も御望に御座候はば進可申候董其昌も參候是は拙者取申候其外小部物參候得共皆形付申候唐詩聯礎と申物一部相殘居申候左傳の義及御尋致赧顏候讀書難字過らしく御座候但今日あたり中はをこし申候萬事期後音候恐惶謹言

三月十九日　三浦安貞

○（以下十一通東國東郡奈狩江村河野登氏所藏）

如仰御慶無盡期申納候御揃被成御安善御踰年被下大慶奉存候今日は乍例達藏殿爲御禮御出殊御取揃御年玉被懸貴意不淺受納仕候當年も御逗留可被成段是にても悅申候隨て手前無恙加年仕候妻も宜敷申上候萬縷期永日の時候恐惶謹言　尙尙御加筆の御禮可然奉賴候已上

正月廿日　三浦安貞

守江良右衛門樣　返上

○

一筆致啓上候彌御平安被成御座珍重奉存候

且此內承候得ば御令室樣御安產段段御母子樣御引立被成候段奉賀候右御歡皆皆樣にも可然奉賴候愚妻も御同然申上候且又今日は達藏殿御歸可被成由御迎にも不參候故御とめ申候得どもいづれにも御歸り可被成由因て不顧思召御返申上候萬萬後喜可申上候恐惶謹言

二月卅日　三浦安貞

守江良右衞門樣

○

貴墨致拜見候然者當春は西邊御遊行當月初御壯健にて御歸國被成候段珍重御儀奉存候不存寄是迄御土產夫夫に御惠贈忝奉存候幾久布賞玩可仕候猶皆樣にも御同然御致吾可被下候愚妻も左申上候恐惶謹言

尙尙辰藏殿御堅固御滯留にて御座候御氣遣被成間敷候已上

三月十五日　三浦安貞

守江良右衞門樣

安節今日病用にて致他出候に付從下拙御同然申上候樣に申置候猶妻もよろしく申上候

○

貴書拜見無程炎熱相催候處御仝家御安寧被成御座慰悅仕候當方無事罷過候然者此節は御直に御尋も可被下覺召候得共少少御痛に因て達藏殿御遣被下猶種種御取揃御惠投忝受納仕候達藏殿も御願に付芳野御參詣被成候由御苦勞と存候內好き御慰とももと奉存候折角御見立無程御還家の上可申承候猶皆皆樣に御致吾奉希候愚妻も宜敷申上候恐惶謹言

六月十二日　三浦安貞

護江良右衞門樣

○

貴札致拜見候秋暑彌御安寧御入被成珍重奉存候拙宅無恙罷過候御繫意被下間敷候然者

御聞達の通拙者儀も長崎表存立來月中旬にも罷立申積りに御座候因て達藏殿をも御遣可被成段海老屋呈次をも同道仕筈御座候御氣遣被下間敷候尤拙者儀は肥前に九月一盃は逗留可仕候諸生衆皆わかく御座候へば先には返申がたく候若年代宜敷才領等御座候はゞ御聞立被成候はばさきにも返し候樣にも可仕候拙者杯八連れ不申候袷と袷羽織肌着合羽是程風呂敷に入背負申筈御座候先許にて寒く相成候はば島木綿にても調へ綿買ひ布子に仕歸り可申と存罷在候爲御用心申上候猶皆皆樣に可然奉賴候恐惶謹言

閏七月廿四日　三浦安貞

守江良右衛門樣

○

貴書奉拜見候寒冷相募申候處皆皆樣御平安御入被成候段珍重不過之奉存候當宅無恙罷過候然者此間は兒輩出痘御聞及に付爲御見舞遠方御丈札猶三種御惠贈被下御事多內痛入候仕合忝奉存候御地へは未疱瘡も流行不仕候御待可被成候此邊當年は甚經手前子ども相揃一時に煩申候處十三四日振には何れも引立悅申候御安心可被下候右御心遣の御禮御母堂樣御令政樣にも可然奉賴候猶愚妻も御同然御禮申上候恐惶謹言

十月廿八日　三浦安貞

守江良右衛門樣　拜復

○

先頃三郎次殿御尋の節は御芳札猶御丁寧御傳聲忝彌御平康歲寒御凌被成候段奉恭喜候誠先頃は御尋問折柄他出不意御意殘念奉存候御兩所樣より御祝儀不淺受納仕候此內御禮愚札指出候定て御落手被下候半奉存候今日達藏殿御用御歸可被成由因て御報申述度如斯御座候猶皆皆樣へ宜敷奉賴候愚妻も御同然申上候恐惶謹言

極月四日　三浦安貞

守江良右衛門様

○

貴札致拜見候寒冷相募候處御渾家御平善被成御座珍重不過之奉存候隨て弊方無恙罷過候然は今日は遠方御事多中御丈札小兒輩痘疹輕相仕廻候迚御祝儀猶達藏殿より歳暮御賀儀御肴兩種愚妻拙生小兒輩迄御祝被下乍例忝祝納仕候當時此邊痘流行候に付達藏殿御出下被成候段段入御念の御儀來陽緩緩可申承候乍憚何も樣樣可然奉賴候愚妻も書面種種申上度旨申出候何事も期永春候恐惶謹言

尚尚近日御眼氣に御座候段御咲止奉存候何卒早速御心好御入被成候樣にと奉存候已上

臘月十四日　三浦安貞

河野良右衛門様　奉復

○

貴札忝拜見仕候如諭嚴寒の砌御座候得共彌御揃御清康御暮被成候由珍重奉存候隨て弊家無別條罷在候乍憚御安意可被下候將又卅忰方迄御加筆被下忝奉存候此間者爲歳末御見舞御子達樣御尋被下其上歳末御祝儀被懸貴意幾久補受納仕候如仰殘臘無餘日罷成候折角御仕舞御超歳可被成候萬萬來陽目出度可申述候恐惶謹言

臘月廿六日　三浦安貞

河野良右衛門様

○

拜見曠昔の握手に今難忘候留滯中御懇意忝奉存候十市病婦樣子承候いづれ溺道口に滯結有之候とは相見申候御投劑面白承候如何宜候や茫然猶一あてあて場にや又元氣つかれ候や遠方より難申候體つよく候はば通劑も可然模稜の手御爲に成候事難申出候以上

極月十日　三浦安定

佐野玄遷様

○

尙其日大紛冗不能即答候彌御清健奉賀候川千里イナ咳出申候如何何卒平快有之候へかしと祈申候猶又灸治は折角可宜候

一、御作拜見面白承候答人の作意味不存候故とかく難申進候

一、ならや善兵衞よりの狀懸御目候寫本二卷と御座候一卷は名字私儀落手一卷は五月抄工藤氏へ參候趣にて御座候是は八阪彌一郎殿の本にて御座候あの方へ屆候樣に相成候や如何御吟味猶彌一郎殿も御逢とも被成候はば右の趣御物語落手有之候樣に仕度女早學問箱に入貴君へ指上候四箱の本も御受取被成候や御しらべ可被下候箱は舊年書物入道中候ならや書狀懸御目候不及御返却候

一、如仰當春は雛生相集殊の外やかましく御座候とかく老境精力も非舊候覺疲勞候人事は却ていやましに覺候御憐察可被下候逸鳳子御出精にて御座候

一、京師大火如何御親類樣方御左右無御座候や唯事夥敷承のみに御座候可惜は書板大分歸烏有候半頓首

三月二日　　三浦安定

佐野玄遷樣

○（以下八通大阪中野豐氏所藏）

貴墨拜誦御全家御壯健寒冷御凌被成珍重奉存候誠御兩家樣御繁昌目出度奉存候祝儀御禮痛入候仕合御座候此內御尋申候節は御他出不得貴意御留守御丁寧御饗應忝仕合奉存候御取方等御世話被成候由乍去海邊付は沙汰も宣敷相聞候山中は御聞及も被存候半近年珍敷凶飢にて御座候

一、御仲兒樣御藥御幼兒樣御傳藥進申候御幼兒樣御藥此節のはそくゐうすく被成御ぬり御痛所に御はり可被成候御仲兒樣のは已前

の通に御用可被成候
一、東光方丈御藥進申候御屆可被下候
一、此間は御追悼被下忝感吟仕候此節の不幸は如何致候や追悼あまり參不申候故別て思召感荷仕候書餘乍慮外御令閨樣にも可然奉賴候恐惶謹言

霜月十五日　三浦安鼎

中田億右衛門樣

○

御手敎拜閲御壯健時下御凌被成奉欣然候然は龜太郎殿近來御不出來の御樣子件件承知御心遣奉察候何れ蟲の業など申樣の事かとも奉存候先御藥調進仕候御用可被成候追々御樣子可承候鴫藏殿御壯健御座候是又御安心可被下候今日取込草草及亂筆候段御容恕奉希候頓首

尙尙家族へ御致意忝乍筆末御内政樣にも可然奉賴候增右衛門殿御平安の由是又可然御申上可被下候已上

十一月廿六日　三浦安鼎

中田億右衛門樣

○

御遠遠敷罷過候沍寒の節御渾家御萬福奉賀候拙無異事罷過候御安念可被下候此間は久久振鴫藏殿御出兩種被懸貴意不淺忝致受納候隨分御無事御逗留にて御座候御案被下間敷候且壹封乍慮外鐺成便に富來久保屋へ御屆被下候樣奉賴乍筆末御内政樣にも可然奉賴候猶重て可申承候恐惶謹言

臘月七日　三浦安定

中田億右衛門樣

○

寒中御健在奉賀候拙無事御繫念被降間敷候今日御遣被下候付米一袋被懸貴意每每御心遣忝奉存候且又日外御賴の愉婉錄寫人無之折節壽助も望候て爲寫候處高料思召も甚如

何敷御座候得共無據鴻藏殿迄進置候御入手可被下候當年凶饑定て彼是御心遣共奉遠察候乍慮外御家内樣にも可然御傳聲可被下候恐惶謹言

尚尙愉婉錄代拾四匁九分と申來候尤正銀にて御座候

十二月十五日　三浦安鼎

中田億右衞門樣

○

昨日より緩緩得拜誦珍重奉存候

一、御姉樣御藥進申候生姜少御入御用可被成候

一、增太郎殿御藥御屆可被成候

一、愉婉錄

一、西州遺事

懸御目候年内中に御返し可被下候

一、五月雨抄

是は御約束は不致候へども懸御目候いづれも損じ不申樣に奉賴候增右衞門殿にも御家内樣にも可然奉賴候已上

閏月十五日　三浦安定

中田億右衞門樣

○

如來命月迫罷成候へ共御渾家御平安被成御座大悅不過之奉存候今日は天氣好御迎被遣鴻藏殿御引取殊更當年は右の仕合故彼是厚御世話罷成忝奉存候隨て件件別幅の通被懸貴意不淺忝奉存候猶御令室樣にも宜敷御禮奉賴候御兩家共に當年は賑賑敷御年可被成奉珍重候別書の御禮家内宜敷申上候當年は別て凶饑彼是御心遣共奉察候松皮食の書付參候故鴻藏殿にも御寫取被成候樣に此内申置候御覽御考の一つにも相成候へかしと奉存候無餘日相成候へば千萬來陽可申述候恐惶謹言

十二月廿日　三浦安鼎

中田億右衛門様
先たちしつまのこの頃折折夢に見
えければよめる
ぬるまのみむかしなりけり鳥羽玉の
夕つけ鳥よ心してなけ

○

覺

一、壹樽
一、歳暮御祝儀　壹封
修令へ
一、足袋　一足
龜次へ
一、白粉　一箱
類へ
一、鬢付　四包
召遣四人へ

右の通御祝被下忝何も一同御禮申上候已上

十二月廿日　三浦安鼎

中田億右衛門様

○

御投書披緘如貴喩寒氣强御座候得共御清門御多福御入被成珍重奉存候拙宅無異事消日月候今日は御事多内壽助兄御入來彼是被懸御心頭御祝儀家内迄も御惠贈不淺受納仕候御紙上にて悉申候得ば秋已來少少御痛處有之候由存不申以書中も御尋不申進背本意候

○（以下六通東國東郡西安岐村中島穆氏所藏）

貴章致拜誦候冷氣御渾家御安健御凌被成珍重奉存候此節御祭に付定藏殿御迎御遣被成御歸し申候因て世悴並又五郎御招被下忝奉存候相勸候へ共小兒故彼是と申候故無據御斷申上候右御答旁御禮申上度如斯御座候となたにも宜敷奉賴候恐惶謹言

十月五日　三浦安貞

瀬戸田政藏様

○

一筆啓上仕候寒威益御安泰可被成御座大悦奉存候然は此間は遠路の處打角御尋問被下忝奉存候併不存寄御來臨廉略の至思召恐入奉存候暮に及御途中定て御難儀可被成察仕候以參御禮申上候筈御座候得共兼て御心安被仰下候に付乍略儀以愚札如斯御座候元藏様にも宜敷奉賴候恐惶謹言

霜月十三日　三浦安貞

松原善太郎様　玉几下

○

遙遙不得芳意御疎濶罷在候然は此間は御通行に付茅屋御立寄被下忝奉存候折柄他出不得御意遺憾の至御座候其節は不存寄一品御携被下忝奉存候右御禮申上度如斯御座候恐惶謹言

九月廿五日　三浦安貞

成吉儀兵衛様

○

爾來愈御徒然御入可被成奉存候菲薄の御菓子如何敷御座候へ共懸御目候折角皆皆様御自愛可被成候どなたにも可然賴候已上

五月廿四日　三浦安定

成吉室平様

○

彌御壯健被成御座奉大悦候然者今日は爲年尾御祝儀御丈札兩種並參子共方迄御祝被下忝奉存候甚取込草草皆皆様へ可然奉賴候已上

極月廿五日　三浦安貞

定藏様

○

覺

一、御祝儀　壹封

一、御樽　壹樽

一、御藥禮　壹封

右
一、壹封　　愚妻へ
一、壹封　　拙息へ
右
何も千萬忝一同御禮申上候已上
極月十三日　　三浦安貞
瀬戸田牧藏樣

○(以下七通東國東郡安岐町永松壯三郞氏所藏)

貴札致拜見候彌御壯健に餘寒御凌被成珍重奉存候拙無恙罷過候然者當年西國思召立候由珍重に奉存候近近御出船の由最早得御意間敷候折角御壯健御歸國緩緩可得貴意候御餞兩種修令より進上可仕候恐惶謹言
尙尙修令も宜敷申上候已上
二月九日　　三浦安定
中野升右衞門樣　奉復
再白御令兄樣へ申上候頃日の御書付委曲承知仕書かへ申候夏大豆の一件は一向不案內にて合點不仕候故かき不申候樣子委敷本書に書入られ候程に御認被下度候來る十二日頃壹人進可申候近近淸書成就仕候廿日より內木付へ差出し申度候と御申可被下候
一、鴫藏殿へ杉苗の事修令より御賴申置候よき雨もふり候壹人取に遣申筈に御座候橫手より奉公人召置候繪踏にかへり候其時分八寄申つもりに御座候無間違奉賴候先三四文位の苗五百見よく候はゞ六百も致所望候此段も御申通可被下候已上

○

近日漸催和暖候彌御平安御凌被成珍重奉存候當年は增右衞門殿にも御參宮彼是御取込可被成奉存候隨て弊方無恙罷過候先頃は令郞御出彼是御心遣被下忝其節取込候て裁復不仕失禮罷過候
一、別件拜見合點仕候義は書かへ申候夏大豆

の義一向合點不仕候此內増右衞門殿申進候定て御承知可被下候御下書出來候はゞ今日御遣可被下候只今淸書半に御座候五六日內相仕廻可申候仕舞次第指出申度候十行にて百枚の外に出申候四五遍も書候故退屈仕候一、鳰藏殿へ老忰より杉萵御賴申置候今日壹人進可申候四文か四方より內に入位五百本程望に御座候使の者もて候はゞ皆御遣可被下候もて不申候はば先もて候程御世話被下候樣に御申可被下候銀札三拾匁爲持進候猶皆樣へ可然奉賴候恐惶謹言

二月十一日　　三浦安定

中田億右衞門樣

○

貴札致拜見候春寒御多福御入被成奉珍重候拙無異事罷過候御安意可被下候鳰藏殿久久にて御入來緩緩申承慰悅仕候殊御肴料御携荷御深志候猶御用事も御座候由大意御紙面致承知候新三郞殿此間御見舞候て御座候粗左樣の御用にも候や重て可申入との御挨拶ともに御座候折節取込荒荒及裁復候猶皆樣へ可然奉賴候恐惶謹言

二月廿一日　　三浦安定

中田億右衞門樣

○

貴墨薰讀時下愈御壯健御入被成珍重不過之奉存候隨て弊方無意事罷過候御安意可被下候然者鳰藏殿御事最早時分爲御目代暫御在宿可被成段御尤の御事奉存候今日御歸家萬萬口述申進候此間は客來に付段段御苦勞懸忝奉存候皆皆樣へ可然奉賴候恐惶謹言

尙尙おゆい樣へも可然奉賴候已上

卯月十七日　　三浦安鼎

中田億右衞門樣

○

拜見頃日は御勢勢の中逗留仕御馳走忝奉存

候無恙罷歸申候途中迄駕籠被下休息仕候然者御息女樣御難義の由相考御藥進じ候御服用可被成是は昨朝より勢相增可申存候理中湯は附子はよく御座候得ども餘藥ちと忌申候即此度煎方中附子とも相加進申候一日二貼にても三貼にても御氣限に御用可被成候

一、下女同症是は土佐郎殿藥相用候樣に被成桂作殿にて此御藥可然候

一、御小兒樣此内の梅干入兼用可被成候御當人は御嫌の由もし御酒御好に御座候はば此内申候古酒三合氷砂糖六匁末となし煮合候方御忌不被成候はば用申度候腹痛の御爲にも可然かに候

一、御介内樣へも宜敷御禮奉賴候暑さつよく御座候得ば御介抱人御丈夫に無御座候ては相なり不申候どなたも御飲食隨分淡泊に過不申候樣にもし其氣味も御座候はばはやく御藥御用御煩不被成候樣奉希候已上

六月廿二日　　安　鼎

中田億右衞門樣

○

朶雲捧讀殘暑甚御座候得共御閤家御平康被成御凌珍重奉存候如貴意拙老も追日て心好最早全快と申程御座候御安慮可被下候病中は彼是と御心遣被下逐一には御禮も難申盡候鴫藏殿御事追追にも御遣可被成段此表流行病も御座候間御見合御遣被成候樣にと奉存候先裁復如是御座候御内政樣にも可然奉賴候恐惶謹言

七月十九日　　三浦安鼎

中田億右衞門樣

○

貴札致拜誦候秋凉早催候得共御渾家御無變御入被成奉賀候御聞達の通愚妻此間は危篤相煩候處近日少少心好相覺候被思召付御尋

の御書中鳰藏殿にも御微恙に因て御尋不被下候由被入御念御義何卒當分の御様子追追御快復被成候樣にと奉存候此內お家も逗留病人介抱致呉深切の義御座候猶又升右衛門殿御尋忝奉存候御內室樣御加書是又可然御禮奉賴候恐惶謹言

八月十六日　三浦安貞

中田億右衛門樣

○（國東町森小彌太氏所藏）

毎每御縷書先德門御清福奉賀事に候拙無恙罷在候御懸念被下間敷候然は貴兄御儀久敷御不快此內は杵築松本氏に途中懸御目御樣子とも承猶安節よりも承申候御壯年とは乍申久敷御瀉申迄もなく御油斷可有之事にては無御座候得ども千萬御自重可被成候胃は一身營養の本其本缺候ては　百出自是甚念懸不已事に御座候存寄も候はば申遣候樣にと御座候得ども樣子伺不申兎角難申候鮎の子のわたを鹽辛に致相進申候はば立處にしるし有之候土用中のうなぎの鹽辛是又宜敷と承候餅を水飴にてよく煮時時服餌致候はばよしと承候先いづれヶ樣成おとけ事も可成參りかね候はばとくと御療治可然候殊に當秋疫痢も候故旁御自愛可御成候

一、御沙汰の通此內又又御城下へ參四五日逗留致候得ども無滯歸山致候

一、序に御尋申候いつぞやウニカウル御用立候を歸り候樣にも覺申候得どもとくと覺不申候故一寸御尋申候置所失ひ御尋候も御心安如期御座候恐惶謹言

七月五日　三浦安貞

○（東國東郡國東町松木峰吉氏所藏）

秋冷御壯健奉察候誠先頃は遠方御入來被下忝奉存候爾來彼是御禮不申上失禮仕候山家の義麁末の至遺憾奉存候爾來藥化此間照恩寺より始て承御無聊奉察候折角御加餐御兩

親様にも御宿付の段様様にと奉存候類子も
段段快く相覺候御念懸被下間敷候恐惶謹言
　九月十二日　　　　三浦安鼎
　小原爲治郎様

○（東國東郡富來町吉武得巳氏所藏）

頃日修令歸候節若宮社式御書付被下忝く落
手仕候不詳の處御尋申事左の通
一、神主と申は誰人に候や
一、大宮司誰人に候や
一、惣撿校祝　同斷
誰村の何がしと申事はしるし可被下候生
地氏は神主に候や大宮司に候や神主と申
人は其つかさにて候や
一、神座は左尊く候や右尊く候や
一、御内殿の内は圖の通に候へば皆皆神の方
にむかひ候様にみへ候左様に候や
一、御殿の内は御神體は社家にて本地の佛像
のつとめ僧に候やつとめば打込に候や

一、御内殿は神體佛像御座候様に承候若宮も
定て左様可有之此處承度候
一、社家の方も御聞護保寺之方も御聞しらべ
被下度候
一、此内棟札の事も申上候近近御遣し可被下
候
一、奈多入幡宮も右の様子委敷承度候とくと
御聞しらべ被下度候
一、奈多明星院も護保寺の通無程常の取行ひ
諷經迄も不仕小僧立溫居迄も不仕候事護
保寺同前に候や猶昇殿出家社人之式圖を
以委敷承度候奉賴候以上
　正月晦日　　　　三浦安定

○（東國東郡來浦村吉武郁爾氏所藏）

先頃逗留の間彼是御世話被下不淺忝奉存候
爾來御平安奉察候昨辨夃より幕候へども無
恙歸宅今日は又又今在家へ罷越御約束の反
鼻霜少少進候他の書狀共又又奉賴候不備

二月廿八日　三浦安貞

源助樣

○（東國東郡姫島村江原虎二郎氏寄贈）

一筆致啓上候然ば當春は御婚儀御調被成候由御滿悦の御儀漸昨日承候御歡乍延引如斯御座候輕少の一種表寸志候恐惶謹言

卯月十四日　三浦安貞

○（同上）

貴墨詳要催寒冷相增候へ共御渾家御壯健御入被成候段奉賀候誠此内は御尋問申入候處御取込の内逗留御馳走忝奉存候任御心安到到御謝辭も不申述甚失禮の至還て預御挨拶痛入奉存候且今日は健吉殿御入來御手作の一種御惠投猶妻小兒迄兩品御遣被下忝奉存候拙事も仍舊消寒光候御懸念被下間敷候他事期後日候恐惶謹言

霜月八日　三浦安貞

小深田磯右衛門樣

○（東國東郡豐崎村朝山重一氏所藏）

先月十八日の貴書昨夕落手仕候暑中御微恙又又御動御勝不被成候段魔軍幽僻の地に窠窟相構時時致刼掠候と相みえ候秋凉も追追推移候得ども鑠金の氣烈猶相覺候折角御自愛御快復奉祈候右體の御義故兼て御噂も御座候御稅駕の義も御手短御取計ひ近近御挂冠も可被成段無事と不存候得ども如拙急流中勇退御手際と存奉候近近御左右も可承猶緩緩風月をも相伴可申樂候成程世には鼎革の風聞も御座候へども若待功成拂衣去武陵桃花咲殺人とも李白は申し候扨拙恙段段御尋被下忝奉存候五月四日已來伏枕色色變態多御座候得共近日は順復食事も快相進氣分も宜敷御座候乍去筋力一向無御座他に扶持を不假と申位にて御座候讀書等は隨分と仕候今一月餘も保養加候はば平生に復し可申候今日始て筆取申候不分明の處御推覺可被

下候御介聞様御賢息様可然奉願候且拙恙難義の時分兒女輩婚嫁の義も無據指急相形付候御丁寧の御紙面忝被仰下候通安心仕候事に御座候秋暑折角御自愛奉祈候恐惶謹言

七月三日　　三浦安鼎

興津左太夫様明窓下

○（東國東郡安岐町印山奨氏寄贈）

以略善次も手前引取申候て城下へ醫業稽古罷出俊藏も當暮引取申筈御座候乍去段段新門も有之候故不相替罷參候富田生書物の義相心得候折角御壯健御仕舞御踰年可被成候來陽萬萬可申承候皆皆様へ何分可然奉頼候恐惶謹言

極月十三日　　三浦安貞

池邊吉左衛門様

○（東國東郡安岐町荒木明氏所藏）

先頃は御立寄申色色御馳走殊安二郎等逗留段段彼是御取持被下忝奉存候爾來無異事罷暮候御安意可被下候然ば戸次次軍記代銀八匁八分にて御座候錢にて御座候得ば百　替にて御座候最早年內一盃の調に社相成申事よ御座候態態御人御遣被下間鋪候草草尙尙御袋様御內様御舍弟様何れにもよろしく奉頼候已上

十二月廿一日　　三浦安定

蕗正平様

○（東國東郡朝來村植田榮氏所藏）

古牒致拜見候

一、今度依忠節　建長三年　大友丹後守頼泰

頼泰は大友の元祖左近將監能直より第三代建長三年は今天明甲辰迄五百三十四年なり

一、今度兩鄉宗徒　　親家

親家二人有木付十三代の城主親家木付六郎左京亮と稱す永正の比の人なり花押を悉にするに是は大友義鎮の次男新九郎親家なり鞍懸の城主田原右馬頭親貫沒落の後義鎮よ

り其家を續しめて田原親家と稱す天正の頃の人なり二百年ばかりなるべし此二通戰忠の義眞の感狀なり
一、今度自最前
此一通きれて文字讀がたく候されども前書にみえ候坪井十郎兵衞みえ候へば親家の家より出候とみえ候
一、父安藝守一跡　親家
一、父安藝守内跡　未考　親董
一、安藝守所望　天文六年　浮標に曰義鑑
義鑑は大友十九代の屋形修理大夫と稱す天文六年より今天明甲辰迄貳百四十八年なり
一、父惣左衞門　天正七月
天明甲辰迄二百六年なり文中七貫文知行七拾石なり府内前代の城主日根野織部正藤原吉明この事を長臣中村氏に尋あり中村申狀古代永樂通寶錢一貫文即正九百六拾文也壹貫文白銀四兩にあたる此時の定價米壹石を銀壹兩として錢拾貫文米四拾石にあたる四物成にして拾貫文百石と成也末位名^メウ^名は一支配の名にして今名主の名ここに起れり
一、掟　壹通
掟と書出す事天下の義以下被相定候事を一つ書を以て被注置紙に書て其家家に被置申也と小笠原家の書に出たり
一、代代扣目錄
以上九通植田家寶無相違候植田家由緒別紙相そへ候外綸旨うつし一通建武は後醍醐天皇の時の年號に候何れも御重寶可被成候已上
天明四年辰閏正月日　三浦晋
植田元左衞門殿
附植田氏感狀後
大神姓相傳ヘテ祖母岳明神ノ裔トス其裔大太惟基ナルモノアリ豐後直入郡緒方庄ニ居レリ依テ緒方氏ト稱スト云又豐後風土記

ヲ按ズルニ小片鹿奥小片鹿臣ト云者アリ緒方或ハソレ是ヨリ出ル乎大友氏ノ豊後ニ來ラザル其族甚盛ナリ大友氏盛ナルニ及ンデ終ニ是ニ歸ス蓋大友ノ家士三黨アリ一ヲ御紋衆ト云大友ノ紋ハ杏葉也一族ミナ杏葉ヲ記章トスル家也一ヲ國衆ト云九州ノ四姓丹部漆島宇佐大神ノ支流ノ徒ナリ一ヲ下リ衆ト云大友能直豊後ニ入シ日鎌倉ヨリ從ヒ來リシ家ナリ大神分レテ三十七家トナル曰佐伯、曰雄城、曰田吹、曰小原、曰大津留、曰田尻、曰賀來、曰稙田、曰小深田、曰敷戸、曰木上、曰下郡、曰東家、曰橋爪、曰神志那、曰上野、曰德丸、曰深田、曰堅田、曰夏足、曰長峯、曰都甲、曰眞玉、曰世利、曰葦荊、曰陳、曰阿南、曰安藤、曰秋岡、曰朽原、曰由布、曰高城、曰奈須、曰朝廂津留、曰稗田、曰小井手、曰森迫、惟基七男アリ長男三田井、二男阿南惟秀、三男稙田七郎秀定、四男大野九郎基平、五男臼杵九郎權太夫惟盛、緒方ノ家ヲ繼グ(元曆ノ頃義經ニ身方シ平氏ヲ追シ緒方三郎惟義ハ此末ナリ此惟義後上野沼田ニ配セラレテ沼田氏トナレリ此緒方ノ家ヲ臼杵トモ云)六男戸次次郎惟家、七男剛太郎惟道、秀定ノ子定綱、其子助綱、其子成綱、其子有綱、有綱ノ子清綱、遠綱、靈山執行有豪親綱康綱女子ニ山科ノ女房草牧ノ女房トミエタリ

天明乙巳春二月　　二子山三浦晋記

〇(以下十八通速見郡杵築町莊野源六氏所藏)

拜見御平安奉賀候今日長世生御迎御遣被成天氣好御仕合奉存候又又御勝手次第御遣可被成候拙無恙罷在候

一、御藥此節又又被仰遣進じ候近日御眼霞候由病毒の所致と被存候重疊御腫氣も崩不申候や瀉おもはくば無御座候や何卒今少しつよく有之候くかしと奉存候

一、毎度彼是御世話辱奉存候又又日出へ參候

樣奉賴候是は日用にても入候得ば從私遣申
等に御座候御取かへ可被下候
一、公子葬儀修了迄御みせ被下候はば入御念
忝拜見仕候今日早早申殘候以上
卯月卅日　　三浦安貞
須摩屋源助樣

○

貴札致拜見候秋冷御平安御凌被成珍重奉存
候此內出府の節は段段御丁寧罷成忝奉存候
去年いもと樣長崎近く罷成候舊遊可被思召
出候
一、今日は長太郎生御出因て御土產の一品御
名御祝儀一封被懸貴意不淺自是も御同然祝
萬歲候
一、石摺代封の儘落手仕候
一、所所屆物每每乍御面倒奉賴候
一、此內も買物御世話罷成當時孔方絕交背本
意候少少銀御座候間先入置申候御受取置可
被下候
一、幸便次第久玄上物壹束御遣し可被下候
一、御令室樣にも可然奉賴候愚妻も宜敷申上
候恐惶謹言
八月廿九日　　三浦安貞
須摩屋源助樣

○

幸使得申上候源濕の節彌御多福御入可被成
奉賀候然に此一通無據用事申遣候何卒慥成
便奉賴候尤魚町山田潮庵是は海老や緣家い
なり町多賀友兒此方にてもよく御座候其外
にても宜敷思召候樣に御屆可被下候
一、きれなし久玄　一束
一、川芎　半斤
右其內長太郎殿御出も御座候はば其節御遣
し可被下候且又申入候只今半夏拵候頃にて
御座候貴店にも定て御調可被成候六七斤程
御調可被下候近來は見事を好みカキ灰を入

候樣に承候願くばカキ灰不入を調申度候無之候はば力に及不申候灰入にてもととのへ可被下候乍御面倒奉賴候早早以上

五月十四日　三浦安貞

須摩屋源助樣

外一通添

○

年賀四海同風申納候御渾家御壯健御踰年可被成奉賀候山中依然迎春光候右御祝詞申述度如此御座候猶期永日の時候恐惶謹言

正月四日　三浦安貞

莊源助樣

○

與白水眞人絕交久矣靑州從事有君之寄來以荷厚意

抄冬季六　晉

莊君足下

○

御手簡忝拜誦今朝草草申置候然ば今夕方參候樣被仰聞忝奉存候此節は急歸申度候故乍無禮同斷申上候又緩緩參上可仕候尤用事有之候間晚景か夜陰明朝にても必御見舞可申上候以上

即日　三浦安貞

須摩源助樣

○

覺

一、貳匁七分五厘

右之通進じ候是は年內安太郎罷越候節賴遣候處彼者失念及遲遲候段氣之毒奉存候乍延引御落手可被下候以上

三月四日　安貞

源介樣

○

此間は暫時邂逅其日薄暮分攣山之薜蘿玉章還壁猶處處之書狀進じ候無爲般公喬則幸甚

五月朔　すゝ武

萬世詞君

詩轍御用に無御座候御返し可被下候每度乍御面倒此書狀相そへ御封じ被下藤井安右衞門樣安貞と被成藤永方へ一部御頼可被下候奉頼候以上

○

名字

永頼　字萬世

彜典曰萬世永頼

安永己亥六月吉　三浦安貞

莊野太郎殿

○

此間は君候御引見誠不存寄御眷顧難有仕合以來家門之榮と奉存候御賀被下兩品御贈被下御深情難申盡忝奉存候右御禮申上度如此御座候他重て可申述候恐惶不悉

六月七日　三浦安定

○

莊野源右衞門樣

○

客冬の貴札落手御淸安嚴寒御凌被成珍重奉存候就て爲年尾御挨拶御樽肴藥料壹封被懸貴意忝致受納候右御禮申述度如此御座候恐惶謹言

尙尙修介義御加筆之御禮何角一同宜敷申述候乍筆末御兩親樣可然奉頼候家語御會讀御座候由文風漸開候趣珍重奉存候以上

正月四日　三浦安鼎

須摩屋源右衞門樣　奉復

○

如仰歲除相逼候御闔門御多祉至祝不過之候然ば今日は御多事の內爲年尾御禮御使札御樽肴御藥料被懸貴意忝致受納候萬縷來陽可申承候乍筆末御兩親樣へも可然奉願候猶所所書狀御屆被下忝存候猶又目錄は不致候所

所返書御届奉頼候恐惶謹言

極月廿五日　三浦安定

莊野源右衛門様

○

貴札忝致拜見候彌御平善寒威御凌被成奉珍重候然ば手前小兒輩出痊之處何も輕十數日起復安堵仕候右爲御見舞見事之御肴一折御惠贈被下不淺祝納仕候右爲可申謝如是御座候恐惶謹言

十月廿八日　三浦安貞

莊野源助様

奉復

○

錦字披封秋冷御安健被成御座恐悅奉候拙御尋無恙罷過候御安意可被下候今日は太郞兄御出思召有之候處少少御不出來俄に御止之由使物語早速御平復之程奉祈候見事御肴御嘉貺忝幾久賞玩可仕候乍慮外皆様可然奉頼候

○

可宜候拙どもいついつより御進め申度候得ども御難儀に思召候半指扣申居候折角御服用被成候轉藥を不被成候由被入御念候御義是又拙之久敷御藥進候義思召次第には御轉藥も可然御事と奉存候

一、日出之一封慥成便に奉頼候

○

御再答拜誦御平安奉賀入候義善師乏義被入御念候義彼僧勝手に宜敷候故鹽飽屋に居候事御心に御さへ被下間敷候

一、正字通御取可被成候夫故脇かた承合不申候披露仕間敷候

一、紙

高橋氏様御望次第御上げ可被下候帳面私方へ御扣可被下候以上

六月十六日　安貞

須摩屋源助樣

○

梅雨中如何山中無事介郎御壯健長二郎殿御出精拙とも毎日ねむるねむる素讀とも承候

一、此内古野便書状進候定て相屆可申候右申進候紙藥種等此節御遣し可被下候尤少分の用事折節申進候御むづかしくば可有御座候得ども通一通御認可被下候無左候ては覺不申候藥種と買物混じてあしく候はば二處に御付可被候奉賴候

一、長太郎殿御手本宜敷物無御座今之千文も子昂と申事に候得どもどふやら僞筆之樣におもはれ申候近日書用大阪へ申遣候間其節徵明一本可申遣候若御用に無御座候得ば此方望手可有之候先御沙汰申置候

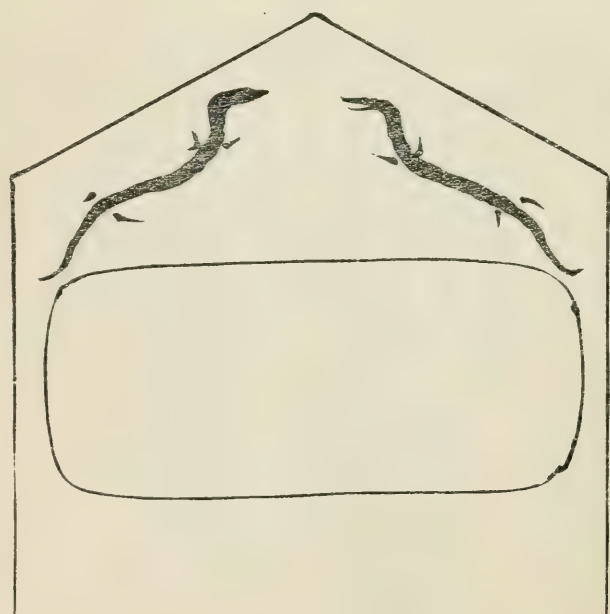
一、此内は舊杵英平も御宿被仰付忝奉存候心頭難盡書候恐惶謹言

五月廿四日　三浦安貞

莊源介樣

○

此間は逗留乍例御丁寧御馳走忝奉存候其夜帶月無恙致還山候

一、此内藥中進候藏出へと御賴申候得共今以

無便候て歸不申候今日之便奉賴候
一、書狀猶又奉賴候
一、石碑螭首の義とくと相考候處篆額と圭首との間に螭を二つほり申事にて螭を頭にをき候事にては無御座候もよふは御考次第大圖は右に記候通に御座候此段斗周翁へ御傳可被下候以上
九月十六日　三浦安貞
莊野源助樣
○（別府町日名子太郎氏所藏）

覺
一、廿一史　四百匁位
綱鑑錄入の十七史にて御座候や眞のせ一史に御座候や兩樣御書わけ被下度候
一、文献通考　四十匁位
文献通考纂にては御座有まじく候眞の文献通考正編ばかりに御座候や正續文献通考にて御座候や是又品品に直段御書わげ被下度候
一、韓柳文　注本全部
御聞繕可被下候
一、康熙字典　八九十百匁位
大本にて御座候や小本にて御座候や是又御かきつけ被下度候
一、明史　直段
右の通重疊奉賴候尤賴候日に至つては駄賃にても取よせ申候事にや如何致方有之候や代物拂かた等御つもり等も替匁候事にや脇氏へ御相談被下候
一、官用唐紙
是は定て直段時時狂ひ可申候是又二百枚直段書付にしてどれ程に御座候や御聞可被下候已上
卯月廿四日　三浦安定
八阪彌一郎樣
○（東國東郡西村藏村三浦榮次郎氏藏）

高田迄幸便致啓上候彌御平安御仕廻可被成奉珍重候周藏殿に此内木付にて逢申候て御様子もとくと承候拙者無恙罷過候此内木付に被召罷出候左の通御座候お類へ御傳可被下候

十一日　八ッ半時御城に上り御目見仕候

上　御服上下

席　御居間

是家老用人近習兒姓醫者御目みへの處也

其處の御目みへは遙に直直也

御目見相すみ候て上にも肩衣御とは御はかまばかり拙者も十徳とり夏羽織にて罷出候夫より一つ間にはいり間を六尺ほど置御咄申上候暮かに御庭拜見を被仰付御前直に御先に御立被遊付まわり御咄共被遊候是は退屈可仕と思召候との御事と奉存候

御前にて御茶御くわし三日上り候處三日共に被仰付御くわし頂戴次の間に下り可被下と申候へども御免無御座御側にて御茶菓子頂戴仕候

夫より暮候ゆゑ支度被仰付候一汁本三菜御吸物御酒御さかな夫より夜四ッ半迄御咄申上夫より下り申候御煙草被召置候にも御挨拶御座候

其日目錄頂戴仕候金子貳百疋也

御前よりの御挨拶御ぬしソウシャレカウシャレ是は御家老衆と御同前の御挨拶に候

其外は手まへドウセヨカウセヨ也

夜ふけ歸り候處御紋付の御提灯中間とほし京原篤亭殿旅宿迄御つけ被下候

十二日　八つ半よりくれ六ッ迄

十四日　同斷

其翌日歸り申候御籠可被下思召候へども

寵嫌と御聞及被遊候故馬可被下由翌日御
馬屋中間御馬被下致歸宿候
右の通の仕合無殘處御事に奉存候ヶ樣に御
座候へども御禮に廻勤と申て御役人の方に
御禮來候事に御座候へども拙者には廻勤の
御禮に入不申左樣に御座候間御家中の御挨
拶格別に違ひ申候御家老中根齊殿に見舞候
處挨拶かわり知行取同前の挨拶に相成歸り
候節は次の間迄御見立中間に被仰は提灯被
下候
十四日には梅酒御前にて被仰付殊の外醉申
候此段お類へ御物語被下悦申樣に御申可被
下候今日急便あらあら申殘候恐惶謹言

五月十七日　　安　貞

貞五郎樣

編纂者附言

藩主松平親賢公天明六年丙午五月十一日十二日十四日三回ニ亘リ先生を召見セラレタリ先生歸山ノ後御目通ノ次第ヲ長女類子婿安東貞五郎氏ニ通知セラレタルモノ即チ此書翰ナリ傳フル所ニ依レバ召見ノ後公家老ニ對シテ「江戸ノ先生ハ日本一ト思ヒ居タルニ安貞ニ逢テ見レバ亦上ナリ客分トシテ師ノ場ニ置ク」ト述ベラレタリトイフ尙傳フル所ニ依レバ謁見談話ノ內容ハ政事ニ關スルモノ頗ル多カリシガ如シ後日所謂丙午封事ヲ上ラレタルハ此際其內命アリシニ依ルト云フ

附録

梅園玄語贅語刻料

一、梅園玄語贅語之儀は洞仙老人年來之精魂を盡され候著述御座候へ共古稀に被及候迄其業を繼後世に傳候程之門弟子も少く甚以殘念之至候銘銘不才之儀は不及是非儀に御座候間上木にても致置千歳之識者を相待程之儀致置度同志三四輩兼て申談候得共高金之儀候故不及力默止直候然所右內存有之候段漏聞て助力可致と被申候同志之衆段段御座候に付此度申合存立申候

一、刻料出錢一口分七十錢三百目と相定候事

一、出錢自今年年無懈怠利息相加候樣取惱可申候尤取惱候儀は當年より十ヶ年と相定可申候事

一、出錢始終元錢にて夫夫差返可申候元錢返辨之年相定候儀は追追連衆相揃之上許議にしたがひ相極可申候事

一、出錢取惱之儀は手野村周平海老屋壽助と相定可申候事

一、同志之御衆中は御姓名御加印可被下候御出錢員數之儀は御力次第たるべし相集候て一口と定可申候押て御加入被下候儀御用捨可被下候事

天明八年申十一月

手野村　周平

佐野玄仙

小原爲次郎

兩子文平

海老屋壽助

銀米惱方

手野村　周平

刻料大積

一、玄語　八卷
本文貳百五十四枚
此刻料正銀三貫八百拾匁
但壹枚に付拾五匁
圖　九十五枚
此刻料七百六拾目
但壹枚に付八匁
〆四貫五百七拾目

一、贅語　十四卷
本文五百七拾九枚
此刻料四貫六百三拾貳匁
但壹枚に付八匁
圖　八枚
此刻料六拾四匁
但壹枚に付八匁
〆四貫六百九拾六匁

二口〆九貫貳百六拾六匁

外に
板本筆料貳貫八百八匁
右大積御座候

○

覺

酉春
一、壹口　銀札三百目　安藤貞五郎
右は御返錢に不及候
一、壹口　無出銀　高田源助

酉春　楠屋
一、壹口　銀札三百目　爲右衞門

酉春
一、壹口　銀札三百目　佐野玄仙

酉春
一、半口　同　百五拾目　岡野屋忠助

酉春
一、半口　同　百五拾目　須磨屋源右衞門

酉春

一、半口　同　百五拾目　八坂彌一郎
酉春
一、半口　同　百五拾目　佐渡屋政右衛門
酉春
一、百目　市原篤亭
酉春　佐和屋
一、貳百目　良右衛門
酉春　和嘉屋
一、貳百目　繼藏
酉春　志保屋
一、百目　伊惣助
酉春
一、百五拾匁　秋吉元安
酉春
一、百貳匁　眞那井唯助
酉春
一、百貳匁　三川俊藏
酉十二月廿九日

一、百貳拾匁　不及返銀　富田昌英
卯三月
一、百五匁　返銀不及　山下秀英
卯三月　大黑屋
一、拾匁　返銀不及　彌三助
卯三月　糀屋
一、七拾五匁　返銀不及　權右衛門
一、無出銀　同家多藏
戊春　中田村
一、百五拾目　億右衛門
戊春　同
一、百目　增右衛門
一、百目　無出銀　小串傳七郎入口
十二月廿九日　千燈村
一、百五拾目　勝藏
一、米三石　兩子文平
一、同斷　同人

一、同斷　海老屋四郎右衞門
一、同斷　同人
一、同斷　溝部有山
一、同斷　同人口入
一、同斷　溝部有山
一、同斷　三浦修令
一、同斷　溝部有山口入
一、同斷　瀨戸田村ー助
〆參拾石
右之分彫刻料に相加申候當申年より兩子文平相預壹ヶ年三石四斗五升づつ懸戻可申候
一、銀札貳百七拾目　小原爲次郎
一、同斷　同人
一、同斷　同人
一、同斷　興道寺
一、同斷　今市喜平
一、同斷　手野村周平
一、同斷　小原村彌太郎
一、同斷　成吉節之丞　瀧平藏
一、同斷　山下元
一、同斷　口入　和平
〆貳貫七百目
右同斷小原爲次郎預り

杵城遺事序

謹考豐後風土記

景行天皇之御寓有菟名手者以治此。得瑞芋獻
天皇喜賜國名豐云按豐國之稱神代既有之意
草昧之時。
所指猶泛。經營以定疆域。蓋在此
朝也。後分之於前後。未詳其時。記曰。豐後郡捌
所。鄉三十。里一百十。驛玖所。烽伍所。寺貳所而
我杵築鎭者。古之木付津而屬速見郡。
天皇之西巡郡有速津媛者迎
龍駕擊殲土蜘蛛之巢窟土蜘蛛者。嘯聚郡盜
之稱也。
天皇賞其功賜其地曰速津媛國。今謂速見者呼
之訛也。爾來二千年。地僻人樸。未聞有卓然者。武
治之初。大友氏爲豐後守護職居府。道海公以大
友氏之支受封於此。有文武之譽。之爲木付氏之
祖。傳至宗冊宗心二公。會宗國除而木付氏亡。至
亡不墜家聲。足以爲道海公之裔。正保乙酉　瑞
龍公臨鎭公之系自
東照宮五世之祖。　棹舟公出以初居參之能見。
其族爲能見。　瑞龍公之孫爲　龍溪公。　公令
德鬱茂邦民之依唯國運不競。天奪其壽。儒臣綾
部安正撰行狀我鎭才德翹然者裁見此數公。吾
恐久而失其事。以世次。先置自撰安住養國禪寺
碑次置　龍溪公行狀將遺之於後昆。龍溪公好
文。鎭之以學術文辭鳴者爲綾部安正。爲山本克
敬安正之志。見于所著家庭指南以踐履爲主。沒
世四十年。吟咏散落將歸烏有。桂林之枝。墜而不
拾崑山之玉。擲而不顧是誰之過歟。因以收之以
遺之於來者焉　天明丁未四月

杵城遺事目次

杵城遺事

綾部進平

伊藤蘭嵎先生有終綾部君墓碣銘云。綾部之先爲丹波綾部人回氏焉。幾世孫從豐後仕大友氏。今失其名。大友氏之滅也。可春稱市松者。行遯居於國東郡麻田邑。老而學佛。遂薙髮爲僧。邑奮報思寺。兵起寺燬。再營以居於。公爲曾祖。諱道一。稱才臟。從居重藤邑。配山本氏。考諱道弘。稱佐兵衞。仕于杵築侯。盡自考始矣。娶小林氏。主公與六女子。公諱安正。字惟木。一字伯章。稱進平。別號綱齋。幼穎慧。受書於其父。強記過人。夙著名。故府命持給月俸。獎異之。後觀光京師。遊于時之宿儒北村篤所。及予伯兄東涯之門。日講經訂史。其徒節適東部也。見室鳩巢服南郭二先生。以稟師授。故其學日殖。譽望隆隆起。春遇優渥。以署其郡篆職。舉民悅其事。上有犯。既隱或在傍。說書開導居多。曆事四主。齒迄七十。遂致仕。然老益壯。手不釋卷。貪益適。樂道融融如也。常日司徒之教降。在師儒。然世以爲是或一道也。其視猶瞿曇之徒。此道之所以不明不行也。遂著家庭指南一卷。專明民五教。其無人言。心以敦倫睦族恭敬忠信。至孝性成。其喪老姚。俱心喪三年。恭儉而剛直。持家有法。奉身淡薄。不妄費。而僕隸欣欣如也。視人之窮乏不振者。輙爲賙恤。不少吝焉。寬延三年庚午九月十九日。無病而終。距生時延寶四年丙辰正月廿九日。凡得壽七十五。葬于速見郡中原山先塋之次。子弟私謚曰有終先生。娶高橋氏。舉子男四人。妥胤。妥三。妥廣。妥彰。妥三先死。女二人。長適佐藤某。先死。次適高橋某。所著反求錄。文集。和歌集。各若干卷。藏于家。予今茲居東安廣。

以與予家有舊。持其行狀。并兒書。來丐銘其墓。系以辭曰。攸好德。永孝思。學古訓。敦詩書。爾之教。人皆師。豐山兮。不崩虧。萬斯年。安于斯。

寶曆二年歲次壬申。春二月。平安伊藤長堅撰

訪島東皐。得湖字。

主人元灑落。家在水西隅。春藻成文字。暮山入畫圖。花香蜂自鬧。江淨鷺如愚。此處無塵事。莫勞問五湖

水西之幽居。寓目大者。不成文字則入畫圖。其小者。感世途之營營於蜂之釀蜜。愛閑居之悠悠於鷺之立水。自是江南野水碧於天中。有白鷗閒似我之意。佳麗清絕。何別問陶朱公

初春寄熊谷竹堂

多病忘詩賦。罷官採綠蘋。書疎情却密。躬隔道相親。故苑梅花月。他鄉楊柳春。春來多所感。華髮未歸臣。

熊竹堂支肥後侯。此時吾公之邸與肥後邸隔一橋。竹堂送先生之西還曰。相逢不許年年度。秋入人間烏鵲橋。既而先生歸藩。無幾而致仕。竹堂數在東。起自言結思彼。領聯見情之親密。頸聯獨對故苑梅之月。憶東武送別之柳

寄富春山人

別後會聞一挂冠。松江投釣十霜寒。遙浮東海忘塵事。將向南溟展羽翰。萬里瑟琴迎客奏。孤庭蘭蕙共君看。壯遊若過豐城去。映斗龍光問舊歡。

先生與山人有舊故。是以情最親。山人已遊東奧。又入京。到浪華。是以待山人之西。山人自次韻曰。一將野服換儒冠。十載風霜不識寒。茶鼎烟馨懷陸羽。鱸魚膾潔憶張翰。棲頭素月伴僧見。湖上青山攜婦看。口口洛浪探勝路。還家有客問哀歡。先生邂逅遊侶。憶山人詩。世上歡娛窮裏得。人間涕淚老來多。亦佳句

田君席上。餞別山子璞之東。

主人官跡抱痾休。偶送行舟一上樓。避暑非關河朔飲。觀濤豫憶廣陵秋。湖光夜動龍宮月。山色晝陰禹穴幽。總爲風霜妨客路。加餐說盡泣還愁。

上解則致仕。主人送客之意。後解則述遊客所歷之景。歸於主客之感慨。隱然似有不可言者焉。

送人之東武

新晴解纜夕陽邊。江柳青青拂餞筵。共計昔遊春幾度。行諳古蹟路三千。海中樓閣烟波動。關外琵琶殘月懸。到日思顏知有喜。南風吹入武城絃。

餞別健齋之東都

柳條含雨向離筵。楚水吳山春可憐。襁褓嬰兒啼膝下。弊廬雙淚別尊前。鄉關月落蓬窓夢。旅店花飛驛路鞭。萬里憑君報兄弟。道吾今日勉衰年。

結落魄猶在宦之意

偶成

窮途阮藉老風塵。八口家肥不厭貧。伏櫪欲歌先對酒。采薇尋跡轉憐春。滄浪水綠悲騷客。桃李花開思古人。聖代祇今明若鏡。吾儕何處得容身。

當時先生當屯蹇。伏櫪不歎唯對酒。采薇不賦唯憐春。接頸聯有羝羊觸藩之意。最爾一小朝。指爲聖代。詞人之辭宜如斯焉爾。

夜集砂白宅

偶入市鄽忘市鄽。蘭窓蕙帳夜蕭然。醉顏長對楓林色。幽夢初醒茶竈烟。意氣豪雄憐少壯。詩篇清絕讓群賢。繁霜鐘響遠天外。不是山中心自仙。

紅塵中之日月玉壺康之乾坤

送別

花前告別向東風。豈與人間行路同。瀛海仙宮何處問。補陀春色幾峰通。十年之子遊關外。今日孤雲入夢中。齒髮對樽半搖落。憐君矍鑠爲誰雄。

是假送罷官之人。遠尋山水者。聯聯景中有情。結非我老而喜人之壯。喜其壯而悲無所用焉。意實悲壯

夏日訪東皐

懶性讀書辱主恩。鶯花閉戶絕塵煩。交歡一日常難得。富貴百年何復論。偶涉西村梅結子。來窺後苑竹生孫。遠山留客燒痕綠。水北兎裘欲並門。

頸聯幽野可愛。唯好冠裳黼黻者不懌

春日和東皐見贈

春風花發照城樓。片片酒旗懷舊遊。擔下負暄衰老樂。江潭作賦故人愁。投閑幾度尋禪窟。罷官何時方釣舟。今日偶從前路過。依然綠水向東流。

東皐者。先生之故人。是先生失意之日。酬東皐者。風暖花馥。以憶昔日之歡娛。我負暄之微忠。魚所獻。子作賦之孤憤。何處寫。回數已往之幽尋。以思將來之閑適。人事變故多態。只一條之東流依然。不異於花下相見之時。

哭東涯先生

秋鴻傳訃雨濛濛。千里愁心哭望東。一代文章崇敎化。百年纖述重儒風。家庭託弟業無墜。地下報親孝有終。臥病尙留封禪草。茂陵何日問遺忠。

記實

中秋有感

强捲踈簾思不平。月前空數故人名。悲秋最惜流年夢。作賦誰憐衰暮情。豈背濁醪催醉綠。任佗華髮帶霜明。南樓回首鴻初到。遠客何無心寄聲。

宮怨

並選一朝入紫宸。豈思恩寵且偏頻。御溝梧葉驚風夕。露井桃花結子春。羅幌曾陪銀燭爛。粧樓自愛玉顏新。偶聞鸚鵡傳天語。不是西宮奉帚人。

並選入朝。彼已桃花結子。我終桐葉入秋。昔嘗同桃御宴之燭。今日獨執粧樓之鏡。君恩已如斷。然樓前聞鸚鵡之傳天語。君思似未斷。未斷之怨若於已斷。世上宮途者。將有爲此姬呑泣者。

山子璞小祥忌

去年執乎送東行。今日招魂望武城。斗米離家遙興疾。窮途泣玉空垂名。黃花老却故人淚。錦字織殘寡婦情。衰晚幾時腸耐斷。九重泉路欲尋盟。

考逢此哀。餘生腸斷。亦不多時。死而後將伸懷於地下。訴之不覺悽愴

喜東皐見訪

不見東皐又幾旬。今朝相値語驚人。官情彌薄讀書牖。碁局自誇漉酒巾。哀客雙垂千里淚。招魂同薦故鄕尊。紛紛雨雪多愁緖。莫使孤吟泣鬼神。

此時兩翁共喪子於東武。訃至之後。初相對。其哀如見于今。

元日

幽鳥今春遷故林。歌聲何日入新吟。春暉歲歲知難報。細草指天是寸心。

行軍行

北出長城萬里餘。胡天月色歷聲踈。君王不識沙場苦。宴罷昭陽待捷書。

我誦笠原雲溪。世主不知人骨朽。宴安日聲餘歡。愴然魂銷。宴罷之字。下得而妙。

遙和子璞武州重九韵

登高應憶故人盃。何處黃花傍客開。休問秋風吟落帽。誰知千載孟嘉才。

休者自休也。孟嘉屬子璞。

春日偶作

閑來無意著潛夫門鎖鶯花對玉壺。借問釣竿長幾尺。五湖烟景似期吾。

宦興漸淡。歸興濃。

暮春遊山寺有感

江南野色夕陽微。新樹蒼蒼宿鳥歸。休唱昔遊春興曲。山花落盡故人稀。

寄青山人

歸程遙卜武昌城。路菊山楓喜色晴。負笈八年千里意。倚門一日三秋情。

初唐

哭山健齋

異材搖落獨悲吟。伏櫪歌殘千里心。久困鹽車無起日。空收枯骨待燕金。

九月十三夜中園村賞月

楓浦錦江秋已深。孤村月色夜沈沈。四郎畫虎五郎馬。此夕三郎誰共吟。

詩不必自若。吟中來者。獨以爲貴

再和侄蘭陵見惠之韻

東遊相遇吳橋濱。分手幾年今耐親。失意看來還得意。烟霞宿好不羈人。

喫得自得。響入宋調。亦不妨也。

從軍行

漢軍十萬向沙場。回首帝卿雲路長。老將談兵夜高枕。轅門不鎖月如霜。

先生一日與子璞賦詩於南郭服子之席。先生乃賦此詩。子璞詩曰。鼓聲未斷還命酒。鐵騎提來血髑髏。先生之作。自杜中天懸明月。令嚴夜寒寥來。子璞之詩。陰寫秋青奪崑崙門之勢。群彥愛子璞之雄驍。求斷於服子。服子哂曰。幕下有高枕之將。而後部下有提髑髏之士。

春日訪東皐

閉戶先生老懶甚。十年一到舊山林。相逢不厭窓前草。春雨過時心自深。

先生公謹杜門。東皐亦同。承謹者。蓋同感相投。

再和東皐見寄

結茅簾外望蓬壺。宦蹟百年元自愚。且喜交遊與無尺。天將風月假窮徒。

必愚結茅於此。天幸假風月。使我徒優游其間。

聞東皐病愈。喜有此寄

昨日聞君辭世塵。今朝還値再生春。春風好是携多暇。仙島烟霞問故人。

述懷

行處皆窮途。抱樽倚市門。歸來賦未就。謹讀錢神論。

送妥胤宦遊東都五首

梅雨晴來好。餞筵分乎遲。前程幾千里。愼莫迷多岐。仕途戒多口。多口爲禍府。縱逢作賦才。愼莫及鸚鵡。勝地多春色。冶遊日陽斜。武溪雲霧裏。愼莫問桃花。一步期千里。青雲壯士心。流年人易老。愼莫懈分陰。先師有遺訓。孜孜念謙光。名都風俗美。愼莫傚疎狂。

父子遠別之情。出中誠惻怛。宜當如是。一句一涙。

山本克敬 綾部有終先生山本友石墓誌銘別錄

秋夜偶成

滿城秋意動。浴罷簟文清。微雨十年感。疎燈獨夜情。詩書崇古道。文字恥虛名。六諭敷風化。弗勝報聖明。

病中

抱病感秋早。鬢邊霜色斑。夜涼侵臥内。曉月照衰顏。文字誰藏拙。青雲非可攀。不知蒲柳質。幾日住人間。

夏日過島子莊得人字

居類柴桑宅。門臨廣瀨津。土肥宜種。江淺好垂綸。層嶽懸雷雨。激湍洗世塵。謝君金屈酒。能醉倦遊人。

夏日同青庵訪安部丈郊居。

故人一自賦歸田。十里風烟嗽石泉。偶伴曲江池畔客。來聞茂樹苑中蟬。暑天扇枕鶴鳴起。午蔭展書牛背眠。早晩追隨淸隱跡。青山得買樂餘年。

水樓避暑。得愁字

仙嶽高懸百尺樓。潮聲六月入涼秋。披襟萬里雄風至。對酒三江驟雨收。鵬際雲搖分島嶼。檻邊月

湧想滄州偶然半夜聞吹笛清韻遥生醉者愁。

此時護老盛唱明詩。海內一變。子僕在其間。亦受其化。如此作。足以翱翔諸子。結則歡樂極兮哀情多之意。隱然有警人之意。然二公之詩。其實用意於唐。綾先生之作。似慕杜者。山公則幾江寧子瑛。塞下曲。有胡笳夜動長城月。邊馬曉嘶大漠霜之聯。最爲雄拔。以全首不愜不收之

同諸君遊宗玄寺。得羅字。

貞公精舍白雲阿。書劍相攜攀薜蘿。仙掌泉隨金錫湧。鷹山雨傍石屏過。玄論揮麈天花墜。翻譯傳經貝葉多。來此自憐牽俗累。人間歲月易蹉跎。

似王右丞。

姬人怨服散

阿郎謾說學長生。玉樹林中搗藥聲。深坐碧窗明月夜。吹簫未作鳳凰鳴。

玉椀凝香瑞霧珍。長期駕鶴出風塵。若何珠樹瑤臺月。莫似人間桃李春。

送江子舍歸江中。分得離字。

攜手薰風賦別離。汗漫同醉又何時。雲多青草湖邊色。相映堪從白玉羈。

又得安字

離亭酒綠夜光寒。休唱函關行路難。匹馬風嘶曉雲外。故山如黛接長安。

閨怨二首

丹鳳城西落月流。一雙鴻雁向邊州。寒衣今到蕭關否。樓上凄風漢地秋。

玉門關裏月如霜。泣望天涯別恨長。縱是封侯能得志。紅顏早已老沙場。

胡笳曲

月裏吹笳霜欲飛。紅顏一夜老金微。閨中唯有素秋色。不識斯聲混鐵衣。

河氏水樓望江。得簫字。

層樓落日第三橋。蜃氣如虹海色驕。妓樂方舟共潮下。江天吹滿鳳凰簫。

秋夜飲桃林亭。得仙字。

樓上銀河秋倒懸。杯尊絲竹自神仙。洗天風雨晴如鏡。讓客廣陵八月篇。

春夜聞笛用李白韻

夢回瑤笛斷腸聲。霞外月殘烽火城。落盡梅花吹折柳。翩翩巧起玉關情。

故苑梅花落笛聲。閨人夜泣鳳凰城。璇璣織罷月光淡。解釋風前無限情。

閨・空月淡。笛聲瀏亮。吹入落梅之聲。要遠人之解釋。此不奈何之情。

落梅花

笛裏梅花白雲紛。隨風散入洛城雲。五更吹起十年恨。憶在盧龍塞外聞。

別人

天涯客路入雲長。千里追陪五驌驦。湖上月殘鏡山曉。馬蹄踏破板橋霜。

湖上曉望宛然在目

十六夜集島氏宅別藤波兄之東都。得何字。

澤國江山奈別何。殘尊重唱月前歌。武關到日人相問。滄海明珠秋轉多。

武中若逢故人之問。藩中之子弟。皆堪從事。

不寢

睡鄉途阻夜如秋。魚眼護燈送曉籌。不是龍團能作祟。百年流落上心頭。

子璞早孤而擔家累。官微而多病。落魄從事。身在東武。妻死孤存。憂念可識焉。子璞失偶。綾先生有詩曰。大勞千里子喃房。之子爭堪泉路長。東武城中月如水。愁人爲試反魂香。子璞之枕。此時何得安。噫。

春宮曲

金鎖春深歌吹遐。君王何處駕羊車。風飄翠幌日將午。長晝雙蛾對落花。

子璞驥足不展。沒身監事。今誦此詩。爲之愴然。

春江曲

花映清江海燕歸。天涯消息隔年稀。楚烟容鎖靡蕪色。未使春光入客衣。

孟遲詩曰。靡蕪亦是王孫草。莫送春香入客衣。靡蕪本芎藭。辭家作當歸用。燕歸而即不歸。鎖當歸之色。不使其香入客衣。楚烟可恨。

九日寄川泉

城陰秋色獨含盃。故苑黃花開不開。處處登高應有賦。同遊誰是大夫才。

田園四時。限韻。

門外採桑路。艷歌當午歸。不看五馬過。只有落花飛」

修竹深如簀。新荷大似盃。此中高臥穩。驟雨驅凉來」

前川鱸正美。自釣日嘗鮮。時與隣翁偶。負藜社鼓邊」

雪晴村落樹。鴉背夕陽寒。孫康書千卷。夜來相照看」

長干行

橫塘春十五。桃李海風凋。不解織羅綺。解蕩木蘭舟。

凋字一篇之骨子。含門前零落鞍馬稀老大嫁爲商家婦之意。以此能過少時般樂優遊度日之脈。今男女少小誇冶容。不務耕織。不知日月之逾邁。至桃李花謝。雖始覺之。亦只日昃之離。不鼓缶而歌。足以爲大耋之差。缶之爲器。賦其聲素。歌者樂之發。今卑其可務。遺老後之悔者多矣。古昔孟春。天子親載耒耜。躬耕帝籍。季春后妃躬桑。以共郊廟之服。詩有豳風。書有無逸。段武丁學甘盤。遯于荒野。雖天子既爾。况非天子者乎。今上於人者忘此戒。下於人者文華績藻。武夫不稼。婦女不葛。至

家產盡。祖業廢。不得日昃之離。猶尤之於人。我摘先達可感之詩。以寓詩書無逸豳風之意。使讀者知國家之有本。唐李紳憫農。鋤禾日當午。汗滴禾下土。誰知盤中飱。粒粒皆辛苦。無名氏蚕婦。昨日到城郭。歸來淚滿巾。遍身綺羅者。不是養蚕人。聶夷中傷田家。二月賣新絲。五月糶新穀。醫得眼前瘡。剜却心頭肉。我願君王心。化作光明燭。不照綺羅筵。偏照逃亡屋。王建當窓織。嘆息復嘆息。園中有棗行人食。貧家女大富家織。翁母隔墻不得力。水寒手澁絲脆斷。續來續去心腸爛。草蟲促促機下鳴。兩日催成一匹半。輸官上頭有零落。姑未得衣身不着。當窓却羨青樓倡。十指不動衣盈箱。同田家行。麥收上場絹在軸。的知輸得官家足。不望入口複上身。且免向城賣黃犢。田家衣食無厚薄。不見縣門身卽樂。伊藤仁齋先生田家。公家初換新知縣。諭令若金命若懸。郭外一區汚下宅。溪南十畝墓前田。官來吏糯閭中橋。吏去雞餘管裏綿。忍餒忍寒今忍受。侯門賣女納青錢。笠原支薔憫農。帶兩芸鋤帶月耕。百般辛苦豈計榮枯。粱滿穗。非君食。猶祝官廷鞭朴輕。近得肥潘藪祭酒養蚕詞。讀之能悉農桑辛苦之狀。此時靈感公。當世治。稱天下第一。學校之設立乎上。慈孝之風行乎下。結以觀入勢。其職不忘其行。其詩曰。五日不梳髮。十日不畫眉。戴勝降桑土。安得理容姿。丁壯刈大麥。腰鎌赴東菑。童子尋芳草。驅犢在西陂。蚕事集。一身拮据欲控誰。野桑代遠楊。含桑折低枝。所欣王稅薄。績成有餘絲。願織翁姑帛。以御冬雪時。

家庭指南序

道豈遠焉哉。求之斯至。至雖而邇。而未得所方。則
咫尺茫洋。蓋君子之道。本諸身。以徵諸民。故百世
以俟聖人而不惑。有終綾先生周旋龍蟠鳳翔之
士於海內。終以鳩巢先生爲歸。事親得歡心。於鄉
黨恂恂如。歷事吾　侯三世。最承知於　龍溪公。
公孝慈自踐。廉恥誘衆。不役志於物。以上奉下
恤。爲己之任。見近侍之墜懷橘。曰。緊爾將遺母耶。
見獻生魚。曰。速放。何用此圉圉焉者。爲戒石之銘。
常在坐右。倡文督武。待用於　國家。每問民之所
疾苦。數賞孝順貞廉。臨鎮裁八年。民心歸風聲樹。
討論經史。咨諏事務。先生思致身報之。春日有詩
曰。春陣歲歲知難報。細草指天是寸心。蓋其志也。
公即世之後。爲監郡。遭關西植稗皆腐。道殣相
望。議不與時合。退朝沈吟。家人進火。先生喟然曰。
使得我所思。亦脚踏水亦歉。杜門有日。彌益愼。謂
子女曰。人自有天爵。非趙孟之所以貴賤。顛踣之
際。若致狼狽。則失天之所賜。取辱於清議。經冬至
春。講析經義。以獎家人。既而罷職就散。寂寞自守。
優游送老。寬延庚午九月易簀矣。蓋先生之爲兒。
家嚴復之翁。書謙卦佩之。於是服膺沒身。深韜其
光。聲樂華飾。不至于家。與人之臣子語。諭以忠孝。
有終之謚。取諸謙之九三。以夫人之爲道。以人治
人焉爾。以人。故明其倫。治人。故稽其則。各正性命。
保合大和。親親九族。疏平百姓。堯之所致雍熙也。
故五品之不遜。使司徒敬敷五敎。夫人之爲品。親
折疏合。則條肄橫斜以繁。其五之者。舉要以御繁
也。蓋倫理之說。禮哀公問。夫婦。父子。君臣。有別親
嚴之則。白虎通。以君父夫之三。爲臣子婦之綱。諸
父。諸舅。族人。昆弟。師長。朋友。以紀。立敬義序親尊
舊之敎。衛石碏。君臣。父子。兄弟。有義行慈孝愛敬
之目。禮運。君臣。父子。兄弟。夫婦。長幼。言仁忠慈孝
良弟義聽惠順。晏子。君臣父子兄弟夫妻姑婦言令
共慈孝愛敬和柔慈聽。中庸。君臣。父子。夫婦。昆弟。
朋友。推以智仁勇。且周禮之謂孝友順。謂孝友睦

姻任恤倫隱然在其中而其目漸繁焉自是君臣
父子兄弟之外晏子則謂夫妻姑婦王制則加長
幼朋友賓客子産則增姑姊甥舅昏媾姻亞推而
擴之也自父而祖曾高自子而孫曾玄父子之叔
伍甥舅兄弟之姻亞娣姒父五分丹八列疏中師
弟以道爲父子之親長幼以齒準兄弟之義不由
要推之奚以親睦司徒之所以五傳所謂皐多而
刑五卷多而服五上附下附列也之意歟五品無
明解季文子說父義母慈兄友弟共子孝然末的
言是五也至孟子直言父子之親君臣之義夫婦
之別長幼之序朋友之信而以品爲倫此目與禮
運中庸粗幾矣而其則禮運則各各而配中庸則
混混而推朱子本乎孟子從乎中庸而溯乎尚書
撫切於倫理者以爲小學可謂爲學者立基矣雖
然世之讀書者汎焉以廣漫焉以文肆然以辨蔑
視謹愿敦樸者唉其不達是以世滔滔不務所務
焉於是爲子弟正揭標窮原以乘其流矣衰衰盈
科左右之宜勿論于六經諸子百家亦將擧爲其
用焉是與人大阿授以其柄也以執要而其言簡
也以御繁而莫所不該也　先公嘗試之人皆如
在春風之中　公之訃之到鎭民之噣泣芒者解
體還廬相泣忘收之則德之入人心也深宜矣哉
其有所以獻乎上有所以徵乎下雲待龍而興龍
得雲而降膏澤於是觀牛刀之能割雞焉斯書背
將謙德藏今宜承謙光而顯也令嗣伊承不果其
志令孫輔之慨先人之志弗繼祖訓之無以傳命
諸剞劂問序於晉欲讓之於佗則抱經於函丈者
幾盡因記聞見之所及言春華秋實有灌培之本

天明乙巳春正月丁丑門人三浦晉謹識

家庭指南

有終綾部先生著

男　妥胤　伊承
　　妥彰　剛立
孫　佐　輔之　校
孫婿　與津彜孝　公錫
門人　三浦晉　安貞　批

予語諸生曰、物之受命於天、莫不各有當然之則、有馬則有可乘之則、有牛則有可耕之則、馬而不可乘、牛而不可耕、則馬不馬矣、牛不牛矣、一草一木、一物一事、皆有其則而不相悖也、汝知之乎、曰然、曰詩云、天生蒸民、有物有則、民之秉彜、好是懿德、有人則有人之則、則即道也、何爲人之道、汝知之乎、曰未也、曰天之所生、地之所養、惟人爲大、其道至貴、故爲學之要、莫急於知人之道焉、予自幼志于學、每遇先覺、必問爲學之要、或曰、明明德、或曰、求仁、又曰、仁義而已、又曰孝悌而已、丘如讀六經、各有六經主義、其如此則初學之士、茫洋而不知所向也、不知所向、則無所進修、予思之久矣、所謂人之道、倫理是也、故聖人之教、以明倫理爲本、學問之道、以知之爲先、夫古今之久、莫世不有人倫、天下之廣、莫事不由人倫、故無貴賤、無男女、告之易諭、聞之無疑、不過高遠、不下卑近、精粗本末、一以貫之者、莫切於是焉、古昔聖賢之治天下、躬盡人之道、皇極斯建、禮樂由起、設爲庠序學校、教以人倫、使天下之人以明倫理、風俗淳厚、所謂王道也、孟子曰、舜明於庶物、察於人倫、由仁義行、非行仁義、是也、五品五教之教、實原於堯舜、載在經典、炳如白日、聖人人倫之至也、人之教人、豈有他道哉、夫天之寵人、莫不與之以仁義禮智之性、故於父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友之倫、自有親義別序信之道、所謂天下之達道也、人之外無有此道、亦無知此道者、故人與天地參、爲三才、庶物依人而育、萬事以人而成、人而無知人之道、知而無行、則與禽獸奚擇、三才不立、物失其所、孟子曰、人之有道也、飽食煖衣、逸居無教、則近禽獸、聖人有憂之、

使契爲司徒、敎以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、此乃人之道也、學者實識以有此道爲人、以無此道爲物、則當始識不可不學此道、識之而後可以明明德、可以求仁、可以行孝悌、可以講六經之義、董仲舒曰、必知自貴於物、而後可與爲善、朱子曰、聖賢千言萬語、只是欲明倫理而已、初學之士、所宜切問近思也、小子曰、聖人之道、以五倫立敎、非唯學者知之、雖武人俗吏、異學之徒、莫不言之、然聞予之說、於予心有所感發、願審其義、父子有親、何言也、曰、二氣交感萬物化生、凡有形氣者、無不本於父母、然有父子、而父其父、子其子者、惟人爲有之、以此觀之、則父之一字、於人尤可貴重矣、且夫禽獸牝牡無別、有母無父、惟母子相親、其始乳哺恩親之誠、未嘗有與人異也、及其長也、離散分處、則子忘母之恩、母忘子之愛、骨肉之情、於是乎絕、是其所以爲禽獸也、人之有道也、雖死喪流離、父子不相見、而千里瞻望、百歲追慕、況於鞠育敎誨之慈、晨昏定省之奉、恩親交至乎、骨肉之親、有不相已者、故立人之道、曰、父子有親、若夫及其長、慈愛淺衰、孝敬日疎、父子相親、無與路人異、則其於禽獸、何以別乎、君臣有義、何言也、天之生物、有類爲群、而無有上下、無分尊卑、惟人有君臣之道、仁以臨下、敬以事上、合體相保、如元首股肱、故立人之道、曰、君臣有義、若夫君不君臣不臣、尊卑無禮、上下侵陵其相視、如土芥寇讐、則其於禽獸、何以別乎、夫婦有別、何言也、凡有形氣者、莫不有男女之道、惟人知有別、故必待父母有命、媒妁往來、六禮既備、而始成室家、一爲婚也、則妻吾妻、夫吾夫、之死無他、故立人之道、曰、夫婦有別、若夫禽獸牝牡無別、聚麀亂類、故雖育子、無父之恩、此其所以爲禽獸也、苟不告而取踰墻相從、狥情肆慾、夫婦瀆亂、則其於禽獸、何以別乎、兄弟有序、何言也、凡禽獸生子、同胞相育、同氣相愛、然至於其敬長愛幼彝倫式叙、曰兄曰弟者、惟人爲有之、故立人之道、曰長幼有序、若夫鬩于牆、爭于外、偏愛私藏、爲賊讐者、則其於禽獸、何

以別乎、朋友有信何言也、乾爲父、坤爲母、人物化生、民吾同胞、視如兄弟、輔仁責善、然諾無違、同寮相讓隣保相救、其於與國、敬禮不怠、其於故舊、貧賤不忘、如此而後、事立國寧、故立人之道曰朋友有信、禽獸之爲類也、見食而爭、見害而不救、昨日爲群、今日相食、知馴而不知敬、此其所以爲禽獸也、同鄕爭利、同朝爭權、妒能蔽賢、忘舊違約、大小强弱以勢侵陵、則其於禽獸何以別乎、由此觀之、則人與禽獸之分、在親義別序信五者而已、所謂無敎、則近禽獸、豈不然乎、凡天下之事雖萬機百行、善惡得失、紛紛錯雜、不可枚擧、而除五倫之外、無復一事可以立言、故天下之治、五倫之治也、天下之亂、五倫之亂也、一家之福、五倫之福也、一家之禍、五倫之禍也、不學而踐此道者、善者也、學而修此道者、賢者也、生而盡此道者、聖人也、行而化天下者、王者也、假而馭天下者、覇者也、外之立敎、爲或過或不及之說者、謂之異端小道也、故學也者、學此道也、敎也者、敎此道也、朱子小學一書、立其次第敎法、分明親切也、初學之士、受敎不惑、求道不遠、則知聖經之爲大道而不疑、知異端之謬初頭而不惑、自四子六經、至歷史諸子、猶手執五彩之絲、目分之、膳具五味之食、口嘗之、議論有所本、工夫有所用、行有所修、自近行遠、下學上達、精粗無二致、今古無異道、此學之大體大要也、且夫本邦、敎法未備、故王侯大人自幼寡聞、偶爲之言學者、不明于此、則立敎無基、爲說多端、非徒使聽者、明無所開、行無所進、其於政事無小補而已、至使吾道與異端衆技之敎、相爲伯仲、此聖學之大患、俗學之所致也、諸君深察焉、

正德四年甲午三月

讀綾部氏家庭指南

夫學所以明人倫也、昔者有虞氏之帝天下、始命司徒寓以五敎、而人倫之敎、蓋權輿乎斯焉、三代聖王迭興而御世、必建學立師、爲敎於天下、豈有他哉、亦明人倫而已矣、當是時、道無異論、人無異

行、士之觀禮泮癰、承化成均、賢知知之、愚不肖由之、知之者、以爲負重致遠之林、由之者、以爲孝悌敦樸之俗、恂恂如也、粥粥如也、此其敎之所以傳萬世而無弊也歟、周亡學校廢、漢唐科擧之學起、其主文柄於上者、以賢良文學、洽聞宏辭、率天下、而天下之士、翕然嚮之、自是以來、世之從事於學者、務爲誇聞識之多、衒文辭之美、曾不知遜志下學、覃思遺經、以講古人爲己之學、甚者、恣委巷之橫議、毀前脩之成範、空言無當、實行日耗、遂使一世之人、藐視吾儒之道、以爲不預國家與身心事、往往至與杜下葱嶺之敎同等、或有好古君子、左袒吾儒、亦不過爲之一長吁、安知儒者喪其灋守、而自取之乎、今觀綾部進平所著、家庭指南、纚纚數百千言、莫非明倫理、崇名敎旨哉言也、嗚呼使世之誦灋孔氏者、皆如斯人、豈有道學不明之患哉、然進平之言、今之老師宿儒、將以爲陳腐而厭棄之、至其可以爲實際之學、聖賢立敎之的旨、則余之愚、蓋獨知之矣、進平亦幸其學與余合、欲得一言副之、以爲左券、義不得辭、爰述所聞於古者、贈焉、

享保九年、歲次甲辰、秋九月十五日、鳩巢老人室直淸識、

書家庭指南後

今天下談道者。言人人殊。言旣殊。則心之所思者亦異。分而爲九流七略。散而爲諸子百家。各相是非。而竟無定論。然至于其身之所履。則未必能外聖人之道而獨立焉。世之孝悌忠信。慈愛廉讓者。不翅誦法周公孔子者之所尙。雖悖而爲異端。叛而爲蠻貊。亦莫不以爲善。故聖人說仁。而天下悅之。聖人說義。而天下從之。推之萬世。而無復異論。然則爭之乎口舌之間。不如驗之實踐之必可信而有益也。

絅齋子。西歸之次。枉顧弊舍。求書其所著家庭指南後。其書專就彝倫。明其條目。不趨虛遠。不務繁瑣。親義別叙信之實。粲然乎一篇之中。其有感於

古之道乎。其有懲於末造之多岐乎。宜可信而可傳也。

享保十年乙巳臈月　伊藤長胤　謹書

跋

昔歳杵築伊承綾部君、奉公事來于吾府、始獲締交、予深服其質直純茂、績學而不勸矣、今玆庚子夏復至、廼來往叔舊、豆觴相饋、言譚蓋纚纚如也、一日出示斯冊曰、吾子幸寓目、請寘一言於末簡、冊蓋爲其考有終先生家庭指南、予謹受續、掩卷嘆曰、懿哉先生之好學也、學所以明人倫、陶虞之治、魯鄒之教、揭典謨而垂經訓者、舍是奚適焉、自非先生崇正術之深、務實踐之篤、惡得若玆之剴切較著、簡而盡矣乎、將傳移叔世偸薄流蕩之風、納諸淳朴之域、喚醒詭異險恠架虛鑿空之士、進諸坦夷之途、先生之志勤矣、抑伊承君之翹楚於一藩也、雖出于天資之秀乎、今知其有資於家庭陶鎔也、故曰、人樂有賢父兄、善夫、敬書以奉還、安永九年庚子仲秋、

大阪府　竹山居士　中井積善

家庭指南序

聖人は人倫の至り也其天下に王たりし御身みづから人倫の道を全しおさめ行ひ給ふより天下の人倫をして各人の道により本づきつとめ治んことをこころとし給ふ故に國國所所に學校をたて四民をおしへみちびき人倫を明らかにして上下風俗をなし天地位し萬物育し世を永くたもち給ふされば其代の政のそなへ教への道を禮といひ樂といふなり其言を法とし其行ひを則としてこれを書にしるしとどめて永く後世の人主身を治め人をおさめ給ふ手本とはなししなり是を聖人の道といひこれを儒者の學といふ聖賢の君おこらず學校の政すたれしよりして先生の道くだりて儒家者流にありといへ共多は遠きにはせて近きをわすれひろきをむさぼり文辭にふけり人倫日用の學においては切にきはめさとる人すくなしかるが故に其おしへ統紀なく聖代の遺教をうしなふに似たり故に世の人おもへらく學問は儒者の業仁義は學者の道なり是をしるもとよりよししらざるも又まされりと甚きは其學者をみる事異國の人に逢ふがごとくにして其心も其事もはじめより我と相あすからざるもののごとし是もとより人主人を教るの政なく世の人學をしらざるのならひとはいへども其あやまちを責るに半は學者の其道をうしなふに本づけり予拙してきくことすくなしといへども竊にこれをうれふ故に嘗て家庭指南一篇をあらはして兒輩に示しさとす其說經典にとり集めまま又愚夫愚婦の言にこころみて纔に童蒙の道しるべとなすのみ我聞あやまつに毫厘を以てすればたがふに千里を以てすといへり若近き教をあやまちなば彼遠きをきわむるに至りてかならず千里をたかへざるものはあらじ兒輩其近きを以ていとひすつる事なかれ

家庭指南

（編纂者曰本書は漢文家庭指南の大意を假名文に認め其女の高橋家に嫁せるに與へられたるものなりと云）

予小子につげて曰天地の物を生ずる其品數をしらずといへども命を天よりうけて各其性とすこれを其徳といひ則といひ道といふかれが性はよくこれが道を行ふ事かなはずこれが性は又かれが道を行ふ事あたはずたとへば牛は耕すの則を性の徳として乘行事馬のごとくなる事あたはず馬は乘行の則を性の徳として耕すこと牛のごとくなる事あたはず鷄の晨を告犬の戶を守る皆其則なり若牛にして耕すのみちをしらずば牛の形にして牛にあらず馬にして乘行のみちをしらずは馬のかたちにして馬にあらず人の一身についても目の見耳の聞手のとり足の行又一物一物の則あり其則を失へば耳目手足の名のみにして其用をなす事なし一草一木一物一事みな其則ありて其用を相なして悖り違ふ事なし汝これをしれりや小子曰まことにしかなり予曰形にありて手足耳目物にして牛馬鷄犬のごとき各其則とする所誠に明らかにしられたりそれ人は萬物の靈として其智能の物にこへたる事いふにをよばざる事ながらかの禽獸のごときも智能人にまされる所もまた多し是ぞ人の則として其性物より貴くして物其をよばざる所とするの道何をかとるや小子曰吾まどふ事甚しいまだこれをしらず予曰天の生る所地の養ふ所ひとり人を大なりとす故に其則至りて貴し學問の要人の則をしるより急なるはなし予父母の教育を蒙りて幼より書を讀事をしり長

ずるにしたがひて先輩に逢ふ毎に學問の急務をとふあるひは明德をあきらかにするより先なるはなしと或は仁を敎るを本とすと又曰仁義のみとまた曰孝弟のみとこれみな聖賢の敎にして至極の言也然れども予愚にしてきく所はし多し是を通はしてさとる事あたはず且みづから六經を讀に六經各六經の主義ありその讀ところ義實にして其聞ところ端多しかくのごとくなれば初學の士彼をやとらん是をや主とせんとして進み修るの便りなきに似たり予是をおもふ事ひさし詩曰天生蒸民、有物有則、民之秉彝、好是懿德、と懿德とは人倫の道理これなり故に聖人の敎五倫の道理を明かにするの外なし學問の道これをしるより先なるはなし古より今に至りて幾萬年の久敷世として人倫のあらざるの時なく天下の廣き日に萬機の政多しといへども人倫にかからざるの事なし故に貴賤となく老幼となく是をつくるに諭し安く此理を聞てうたがひなし其說近くして遠く卑くして高し本よりして末粗きより精きに至りてのこす事なし敎これより切なるは是常行日用の道なれば也むかし先王の天下を治め給ふ躬みづから人の道をつくせり故に人倫至極の則ここにたちて禮樂ここにおこりそなはり國國所所に學校を設なして師をたて賢をすすめて敎るに人倫を以てせり天下の人をして各人の道をあきらかにして風俗あつく睦じからしむ是を王道といふ孟子曰舜明於庶物、察於人倫、由仁義行、非行仁義、と五品といひ五敎といひ其敎實に堯舜より施し來れり其ごと經典に載て明なる事白日のごとし聖人は人なり人の人をおしゆる何ぞあやしくことなる事のあらんや夫惟天萬物を生る中に人を以て長とす故に仁義禮智の性をそなへあたへて人の美德となさしむ故に父子君臣

夫婦兄弟朋友の倫におゐて、自親義別序信の道あり中庸にいはゆる天下の達道なり人の外もろもろの萬獸此道理をそなふる物なく此みちをしる物なし故に人の小なるを以天地の大なるにならべて三才と稱しもろもろの生る人によりて育する道をとげよろづの事人を以て成就すかくのごときの人に生れて人のみちをしる事なくしりて行事なくば人の貴き所何れの所にかあらん三才のみちやぶれもろもろの物其所を失ふ孟子曰人之有道也、飽食煖衣、逸居無教、則近禽獸、聖人有憂之、使契爲司徒、敎以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、とこれ所謂人のみちなり學者實に此道あるを以て人とし此道なきがゆへに禽獸たる事をしらばはじめて此道の學ばずしてかなはざる事をしるべし實にこれをしりてのち明德を明かにするの工夫あるべく仁を求るの力を用ふべく孝悌の道を講ずべくかの六經の義其本づく所をしるべし董仲舒曰、必知自貴於物、而後可與爲善、朱子曰、聖賢千言萬語、唯是欲明倫理のみと初學の輩たしかに問近くおもひこころむべき事にあらずや小子曰聖人の道五倫を以て敎を立る事學者これをしるのみにあらず武人俗吏實學の輩といへどもこれをしらずといふ事なし況や小子書讀業をうくるのはじめより是を聞事久し然るに今先生の言を聞て心のうごきさとる所有に似たり願くば五倫の義を詳につけさとし給へ父子有親とは何なる事をいふや答曰陰陽の二氣交り感じて萬物起生するの理りにて形氣有もの父母に本づかずといふ事なし然れども父と子と相親みて我父を父とし我子を子とするものはただ人のみにして禽獸は相しる事なしこれよりしてみよや先其父の一字人におゐて貴び重んずべき事を知べし禽獸のごときは牝牡

別道なきが故に母あれども父なし唯其母と子と相親む事をなすのみなり其始うみはごくみなれしたしむ所の誠においては人に異なる事なし漸く長ずるに随ひてひとたび離れわかれ遠ざかりぬれば子は母の慈しみを忘れ母は子の愛しみを忘る親子の親みこれよりしてたへ又おもひしたふ心なしこれぞ禽獸の所なり人の道あるは不幸にして胎内に父を喪ひ生れて地を異にして父子相みる事なしといへども千里の外に相おもひ百年の後におもひしたふいはんや父として膝下にやしないつくしみおしへみち引子として晨にかへりみ夕にさため枕を扇ぎ衾を煖むるの奉養を自つとめて其親愛こもごもいたるにおいてをや骨肉の至情自ら相やむ事なし是其道の物にこへて貴き所なれば人の道をたてて父子有親といへり若其長ずるにをよんで父は父の道を失ひ慈愛の心私にへだてられ子は子のみちを失ひて孝敬のこゝろ慾にうばはれ父子相互ひに路人をみるがごとくなるにいたりては禽獸において何を以てわかたんや君臣義ありとは何をかいふや天の物を生る皆其類ひをわかちて群り居る事をなすしかれども上下の分なく尊卑の序をしらず唯人のたぐひのみ君臣上下の道有て仁を以て下に臨み禮を以て上につかへ禮を合て相保つ事一身のごとし故に人の道を立て君臣有義といふ義とは物差別ありて宜しきを相なすの理なればなり若君として君の道をうしなひ仁を推て衆を養禮を以て臣をつかふ事をしらず臣として臣の道を失ひ身を致して上につかへ信を守りて事に服する事をしらず上下こもごも利をとりて相にくみ相うらむるに至りては禽獸と何を以てわかたんや夫婦有別とは何をかいふや凡形氣あるもの男女の道あらざるはなし然れ

ども唯人のみ別道ある事をしる故に媒の禮なくしては其名をだに共にしらず幣をうくるにあらざれば兩家交り親むの義なし婚禮をなすの後は吾妻を妻とし吾夫を夫として永く守りてたがふ事をはぢとす故に男女は別有て後父子親といへり夫婦は人倫のはじめともいへり別道なき時は其子父をしらず然れば何を以て父に親しむ事をなさんここを以て人の道を立て夫婦有別といふ禽獸のごときは女をともにして其類をみだるゆゑに子を育すといへども父の恩ある事なし是禽獸のいやしき所なり人にして父母の命をまたずしてめとり墻をこへてあひ從ひ我情慾をほしひままにして夫婦の禮をみだる時は其禽獸におゐて何を以てわかたんや兄弟序ありとは何をかいふや凡禽獸の子を育するもゑなを同じて相生じ氣を同じて相愛すとはいへどもさきに生るるを長として敬ひの

ちに生るるを幼としていとうしみ兄と名づけ弟といひて其次第あるは唯人のみこれを知る故に人の道をたて長幼序ありといへり然るにうちにして爭ひ外にして友なはず或妻子の愛に引れ或は家のたからを貪りて兄弟相にくみうらむるに至りては禽獸において何を以てわかたんや朋友有信とは何のいひぞや乾を父とし坤母として人物化生するの理よりおす時は人と人とはもとより同胞の親の友愛の道ありて其相交多兄弟の義あり故に我仁をたすけ彼が善を進め信を守りて約をたがへず近くして同期の友に相讓り遠くしては相くみするの國は敬禮怠る事なく昔したしかりしは今貧賤なりとも忘るる事なくかくのごとくなる時は萬事行れて鄕國うれひなし故に人の道を立て朋友有信といふ禽獸の群をなすは食物をみては牙をかみて爭ひ客にあふては相すくふ事なしきの

ふは伴ひけふはそこなふ馴る事をしりて敬ふ事をしらずこれ其賤き所なり若人にして郷を同じくして利を爭ひ期を同して權をきそひ能あるをねたみ賢なるをいみ舊きを忘れ約を違へ大は小をおかし强は弱をのみ互に冠讐をなすがごときは禽獸におゐて何を以てわかたんやこれを以てこれを觀れば人と禽獸のわかちは正しく親義別序信の五つの者にあり故に孟子無教則近禽獸といへり信ならずやおよそ天下の事百行萬機彼是緜をみだすがごとくにして其端多しといへ共五倫の外に出で一事一言のいふべき物なき事をおもひ察すべしされば天下の治るといふは人倫の治るなり天下の亂るるといふは人倫の亂るるなり一家の福といふは人倫の福也一家の禍といふは人倫の禍なり學ずして此道をふみ行ふ人は善者なり學びて此道をおさめひろむるは賢者なり生れながらにして此道をつくすは聖人なり躬行ふて天下の風俗を化するを王者といふ此道をかりて天下をひきひしたがはしむるを覇者といふ或此道を外にして敎を立或過或は及ばざるの説をなすを異端といひ小道といふなりかの學といふは此道を學びきはむるなりおしへといふは此道を敎へ弘むるなり朱子小學の書其次第敎法ことに分明なり初學の士敎をうくるにあやまる事なく已に求る事日用に切なる時は聖人の敎の大道中正天を終るまたつひへなき事をしりて疑ふ事なく異端の説其はじめをあやまる事をしり或過或は及ざる説をわきまへ察し其心に生て其政に害ある事を知て惑ふ事なく四書六經より歷史諸子に至りてたとへば手に五色の絲をとりて日これをわかち膳に五味の食をそなへてくちこれをなむるがごとくにして工夫用る所をしり德修るところあり議論本づく所

ありて近きより遠にゆき下學して上達し精粗二致なく今古異道なき事をしらん是聖學の體要也予おもふに王侯大人は幼より學きく事すくなく敎へ導くの道あさしたまたまとしたけ給ひて道にこころざし治に求めありて學びとはん事を願ひ給ふもこれが爲にこたへ諭す人未體要大本の理に明らかならざるが故に敎を立る事基本なく說をなす事端多し聞人其智ひらくる所なく其行ひすすむ所なし況や政事においで小しき補ひなきのみにあらず聖人の道をして異端衆技の類ひとならべ稱するにいたらしむかくのごときは俗學のいたす所にして聖學の大患なり諸君ふかく察し給へ

有終綾部先生花王園集目次

詩

有終綾部先生花王園集

男　妥胤伊承　輯
孫　佐輔之　補
門人　三浦晋安鼎　校

送保村子序

保村君。將行東武。飲餞淺井養齋。維暮春。女子習國俗。饗偶人。因告曰。君觀夫偶人乎。艶食華衣。善盡美盡金夫見之。不如醜婦者。何也。眞僞不同。而無情之可感也。今士大夫。言色威儀。堂堂有惠。下民望之。不如木訥者。何也。內外不同。而無誠之可動也。君生權門。早登仕途。才美學篤。衆之所具瞻也。若夫誠之可貴。君固知之。知者能告之。行者不厭言之。其不厭言也。此予之所以不厭告之也。不敢贈言。君請思之。

贈山本健齋之東都序

今茲乙未之秋九月下旬山本健齋將于役於東武鳴呼即今外奔邦君凶問內養慈母疣痾其進退迫切殊可特憐察矣瀕行慰之曰檢束酎知士之行也立身行道子之孝也吾子雖微賤承事于左右久矣嘗數嘉奬曰敬也學行可期今不幸而蚤棄捐其盛德實行宜共社稷永存矣吾子夙志不怠學業有成則其所以上追報邦君之知下繼述慈親之志者蔑以加焉實思察此義何傚兒女戀戀之態耶鳴呼邦君仁德孰不愛戴一旦聞訃如喪考妣貴賤老幼無不慟哭然賢不肖異思則其所以追慕者未必無厚薄遠近之殊。顧能哀邦君者。能憂斯道者也。能憂斯道者。能憂斯民者也。其至能憂斯民。自非所謂先天下之憂而憂者。未可爲至也。吾子之於仁。果至于此。則追慕邦君於他日其必有切於今日者能欲使其所以哀之意。厚且遠焉。噫嘻命耶。今吾何言。偲偲于吾子者。所以竊奉邦君遺意也。吾子勉焉。

按棄捐下。宜有頌邦君之德行數語。而本書無之。亦可以爲闕文。

送妥三之東都序

妥三年十七、始仕將東、顧父安正。擧盃告之。曰。汝讀魯論記之乎。孟武伯問孝。子曰。父母唯其疾之憂。夫疾者事不成。況於事君乎。夫子固愼之。然則爲人臣子者。飮食起臥。寒暑風雨。不可日不愼也。不可時不戒也、然人知愼身體之疾。未知憂心術之疾也。醫藥嘗論。而師友不擇。鍼灸自治。而學習不勤者。徒知保其小者。忘養其大者。非惑乎。夫子答武伯。其言至哉。其義廣哉。古人曰。宴安酖毒。三也幼弱。假寡欲者。敬恐夫酖毒不近。能養其性不懈。則天之祐之、眉壽萬年。勉旃。三也曰唯唯。願書焉。因賦此詩、併書以贈。

秋風解纜客衣新。離思悠悠江海濱。千里家書莫勞筆。平安二字好酬親

花王園記

正德四年。甲午季春。邦君親折園中牡丹二枝來。特賜之臣安正。曰。插之書齋。以慰讀書之勞。臣安正頓首拜受。大抵人之愛物也。其趣不一矣。周揚之於蓮。或比之六郎。或比之君子。林趙之於梅。或惆悵而傷神。或微吟而相狎。何其異哉。各於其黨也。恭惟我公之愛牡丹。與世人異矣。孟子曰。有天爵者。有人爵者。富哉言也。物亦然。若夫松之節操。竹之勁直。乃其天爵也。拜之大夫。稱之此君。乃人爵也。所謂修其天爵。而人爵從之者也。我公崇道好學。盛德日躋。臣安正陪侍講筵。四年于茲。寬假顏色。令盡至愚。其所修者。可以知而已。其愛牡丹。愛其天爵也。牡丹者產於洛陽。而不生山野。斯不亦擇而處仁乎。托根於畹。而不至莫延。斯不亦富而好禮乎。高而不危。以其不長不茂也。滿而不溢。以其不傾不垂也。望之儼然。即之也溫。威而不猛。和而不流。郁郁乎文哉。此其天爵。而自然富貴者也。如蓮。君子則君子矣。如菊。隱逸則隱逸矣。然或似忘世避人。而自潔者。孰若其國色天香。上自王公。下至庶人。親之來之。自有寬裕盛大之氣象。至若後百花而開。先群卉而萎。斯不亦先天下之憂而憂。後天下之樂而樂者乎。宜乎爲花王也。善哉愛天爵也。斯乃人爵從之者也。若不知德而徒好

色者。庸人之愛而已。君子之所不取也。以之賜臣。則其勉臣之恩意。昊天罔極。斯亦臣之富貴也。夫豈可不永思哉。因以名園。竊倣古人其示不忘云。

小栖軒記

正德甲子之秋。陪二客。燕于小栖軒。主人語予曰。壽福祿榮。子孫之繁。此三者。人情之所欲。而不可求而得者也。其所欲雖有大小。而其分願則一也。幸而得之者。無烟霞泉石之趣。則非得樂三者之全也。得三者。而有烟霞泉石之趣。然非國家閒暇。身得清閑。則輙不復樂其樂。以終斯生也。此人世之所以難求而得也。予也。歷仕三世。累進職秩。知命而致仕。惠養殊厚。耳順猶健。家事忘匱。有兒有孫。共浴殊恩。加之結茅對江山。開園通田野。東皐舒嘯。友擊壤之民。北窗高臥。比羲皇上人。其進退榮樂。皆是主恩之所致也。予復奚求。吾子思如之何。僕曰。翁能知足。實希世之幸也。顧安得無求乎。請叩其兩端。翁進席曰。不可求而得者。則既得之。可求而得而未得者。則有一焉。夙走仕役。未嘗得下帷之暇。故不能縱心宇宙。尙友古人。雖愛烟霞泉石。未審其感其興。眞面目否。桑楡追悔。駟亦不及。其幸而得者。有時易移。可求而得者。存于身無失。予欲使二子及時勤學。進報洪恩。退得眞樂。此予結草之微意也。吾子爲予記焉。申之以詩。乃置之座右。以示二子焉。蓋翁之知足。貽厥孫謀。不亦可乎。大抵君之於臣。恩禮難至。子之於親。孝敬易致。而吾君之待翁。既至于此。則二子奉翁。不可以不孜孜焉。苟能如是。二子忠孝兩立。君父之仁慈。不亦大且遠乎。乃記翁言。題一律於楮尾。不恥拙陋者。欲成人之美也。翁氏箕浦。名某。小栖其別號也。

仕宦歸來事事幽。十洲三島接菟裘。沙鷗睡足菰蒲晩。胡蝶夢迷蘭菊秋。永沐主恩知至樂。特垂家敎有嘉謀。兒孫欲遂乃翁志。餘力經園秉燭遊。

讀清音亭記記附詩

安正廿餘年前。遊京師。謁東厓先生。受敎數月矣。將還拜辭。曰。先生一浮海而西。僕臨江而候先生

曰。諸。願之久矣。自是以來。情不能忘。夢寐或逢迎。謦欬請益。覺後與兒輩言之。望東長歎。長歎不已。呈詩述懷。去秋有詩。曰。勝遊不廢觀濤興。敬待仙舟鋤草萊。奈何先生老將至。僕犬馬之齡。亦既傾。期先生於海西者。情漸衰矣。頃日賜城下瞽者。懷文一篇來。訪僕城西敝廬。曰。此東厓先生爲吾邑原田生所著。淸音亭記也。拜讀數四。慨然增感。其言曰。予躬無官繫之所拘。而不得遂山小之懷。子也家世食祿。勤渠乃職。而不待登涉之勞。坐得超然之樂。相遇之幸不幸。有如此者。夫。嗚呼先生以不遂山水之懷爲不幸。則以不遂浮海之觀爲不幸。亦可知也。僕每觀夫賦命之不齊。獨自思之。有德者不得位。有位者不好德。民亦鮮久矣。讀書者不才。有才者不讀書。才美遂不見好學。不遇師。遇師者不勤學。學則不固。何其不齊耶。余與原田生。同州接境。余受業先生。僅三月矣。生也親炙數歲。尙富歲月。況其亭一得佳名。傳聲千載。何生也多幸。而余也不幸。不堪長歎。賦此寄呈。遙憶先生之遐想。瞽者名只遊。賜城下富家之子也。幼而失明。性好文雅。諳和史記古事。通醫善鍼。原生之所識也。每來訪余。未嘗不問先生之書到否。如只遊者爲幸乎爲不幸乎。先生憐察焉。乙卯季冬

詩

史隱上堂琴瑟閑。餘錢無術買靑山。秋天霜後夜鐘響。春苑花時黃鳥還。二字題亭遙寄思。一篇作記聊怡顏。遊觀莫厭豐城遠。猶有龍光射斗閒。

按此篇。本稿不著題。若寄東厓先生書然。雖然初有廿年遊京師謁東厓先生之語。後有一篇作記聊怡顏之詩。今斷爲記。有識者正諸。

小記 本無題

予嘗將出。顧座右。見童子展故紙二幅於案上。拈毫將書。問曰是爲何人所書乎。童子曰不知也。是家母之所賜也。乃以白紙代之。既而展玩屢屢。正而不俗。美而不艶。知非今世能筆者所能及也。附工藤橋宇遊京師。令賞鑑家茂入相之。茂入曰。西三條家稱名院公條公眞蹟也。三世善書。王公之

所貴重也。若全備則爲至珍。因藏諸篋底久矣。一日童子之母造妹家。得一幅來。與予曰。若其缺失者乎。閱之則其中簡也。序次之乃爲四季和歌一卷。每季各二首。御製并公卿內侍作者十二人。京師書肆島本某偶來。固好事家也。出而示之。某三嘆而不措。持還而裝飾之。再正之了珉。了珉曰。逍遙院實高公眞蹟也。公也公條之父。而在後水尾帝之時。爲和歌宗。實不易得之物也。嗚呼此一卷。一落人間。埋沒塵埃幾年于玆。放失錯亂。已將爲童子見點汚。而幸而免也。終併其所脫簡。以爲全本。其浮沈顯晦。如有命然。予有感記焉。豈玩物之云哉。

按每季各二首。疑每季各三首。

二南論

孔子謂伯魚曰。女爲周南召南矣乎。人而不爲周南召南。其猶正牆而立也與。陰陽天道之大經也。夫婦人倫之大綱也。陰陽得其正。則四時行焉。百物生焉。夫婦得其正。則五敎立焉。百姓安焉。故曰男女有別。而後父子親。父子親而後義生。義生而後禮作。禮作而後萬物安。夫言天者。窮理於空虛。未知察之陰陽。至切之中。其治人者。論道於高遠。未知本之夫婦至近之際。故政刑威武。御下者常易得。德敎風化成俗者常難得。若夫文王后妃。以聖配聖。外內道正。禮樂由生。人極立于此。王化行于彼。非止邦國君臣。夫人妻妾。觀感儀刑。以成一時之風俗。周祚八百。創業二南。則當時學者。何莫學夫詩乎。且詩爲風。本人情自然之感。發咨嗟咏歎之餘。則其學焉者。詠歌舞踏之間。所以感發興起者。譬如遊鶯華之園。而心自懷春。步蟋蟀之叢。而情偏悲秋。況乎二南得之情性之正。爲風詩之正。則其感發善心。敦化風俗。又可默而識矣。子思子曰。君子之道。辟如行遠必自邇。辟如登高。必自卑。夫家之於國。夫婦之於人倫。其卑而邇者也。大抵人心。卑者慢之。邇者忽之。嗚呼自古國家盛衰。政事興廢。推究其所由來。莫不本閨門之淑慝焉。智足以制斷國命。明未能察中冓隱微之間。威足

以匡合列國。禮未能正妻妾嫡庶之分。何則學厭卑近。德忘本始。其於修心齊家。闇於瞽者。怯於惰夫也。或求福於百世。未知孕禍於衽席。或望治於四海。未察伏亂於蕭牆。此豈非牆面而立也者哉。學者實知不爲周南召南。其猶正牆面而立也。則始免牆面而立而已。夫子曾曰。興於詩。立於禮。蓋禮始於謹夫婦。不可不學也。不可不謹。享保庚子

富春山人書此後。曰。故人綾生有好學而爲人所稱。相別三十年。日遇於江都親族之家。生示以二南論。一見乃知熟讀性理書。用工之久矣。點綴華語。捃摭遺意。求之武人。不可多得。實是老學究聲口。足以爲鄉里子弟。嚮道之助也。雖卓識特見之士。亦可以擊節。何暇評及陳腐酸餡哉。

夢說

或問曰。吾鄉某夢忽有神人。衣冠儼然。告曰。當汝之居之東北之隅。嘗瘞金一甕。今以與汝。汝勿疑焉。如是三夜。乃就夢中所指之處。掘地數尺。果得一甕。中藏二石。石膚粗似金。不知是夢果如何。予答之曰。人心本靈。仁義爲之主。則靈于仁義。利欲爲之主。則靈于利欲。故君子喩於義。小人喩於利。此其心術。黑白之所由分也。夢之爲夢。吾未識之。然而且晝君子者。夢寐亦君子。昏夜小人者。白日亦小人。寤寐一心。晝夜一身也。由是觀之。則其取舍去就。是非好惡。雖夢寐。未始不同旦晝之所存也。若夫君子。在夢中。人誘之以利。則必賤之避之。終不與之言。若夫小人。在夢中。人說之以義。則必迂之拒之。未肯信之。此寤寐一心。自然之符也。某有是夢。則有是心可知。苟有是心。則雖無是夢。而旁蒐得之之方。夫蒐得之之方不措。則雖非東北土中。亦有偶得所求者焉。夫利心感利夢。利夢感利心。循環不已。則其靈者彌靈。而非唯自信之。妖言妄語。一家信之。一鄉信之。藉口筆書。以欺罔蠱惑天下後世者。豈非萌芽於一念利心哉。若夫靈于仁義者。仁心感仁心。義氣感義氣。培養不已則其靈者彌靈。而非唯自信之。法言德行。一家化之。

一鄉化之移風易俗以感發興起天下後世者亦豈不根抵於一心仁義哉所謂差之毫釐繆以千里者也昏暮遺金楊震還之墻陷得錢李母埋之戲言出於思也戲動作於謀也可不察哉可不戒哉乙未仲夏

應伊東祐之之需字其子說

屈伸窮達天道之常而人世之時也故屈者吾知其伸窮者吾知其達雖有大小遲速之差理勢無終不然矣伊東祐之夙信聖學勵志力行雖身居貧賤爲織者所重予產于同鄉爲輔仁之友廼父道善翁吾先人之舊知也溫厚恭謹鄉黨稱善焉其有是父有是子何有是德無是報然而橋梓寒悴仕途不進斯其屈且窮時乎甲午仲夏初生男請予字之蓋其屈者伸伸者長大則知伊東子孫其必長大矣乃倣國俗曰長之助於乎祐之培養加勉兒之夭者自是長大慈愛何加勿怠勿怠

山本克敬號健齋說

山本克敬需號於予時與敬等講論周易因曰人之姓名自有一卦上下之義敬以山爲姓山爲艮象因連艮上之卦而觀其象宜期敬之志業者其大畜歟艮上乾下爲大畜乾健也宜號健齋蓋其多識前言往行以畜其德者乃敬之素志也敬幼而孤特立勤學貧居奉母鄉黨稱孝可謂剛健篤實輝光日新者矣若夫大畜之全德譬如泰山敬之所畜聚猶丘陵然敬豈安丘陵而止哉所期在泰山耳彼千仭之山虧功一簣者皆柔弱之所致而今古之遺憾也敬若不健將爲蒙乎將爲剝乎吾不知其說也乙未仲夏

尾越某別號說

尾越某從松田丈學醫有年乙未初冬已服醫服專業其業松田丈來需予別號說語曰人而無恒不可以作巫醫易曰恒久也宜號之曰久菴因戒之曰醫之爲道固雖小道死生之際專執其柄其任不亦大乎尤不可無恒也其恒且久何以能之仁人之安宅也義人之正路也居安宅由正路所以恒其德也仁以察病義以投藥所以恒其道也

若夫志于名譽。爭其功者。以人疾病。資己榮利。一欲其生。一欲其死。難乎有恒矣。勉旃久庵。不恒其德。何以得久哉。

中原某字說

醫松田丈來。需門人中原氏字。予曰原。地之平者也。宜字之曰平甫。且夫物平而後得安。天氣平而四時行焉。地理平而舟車通焉。其於人亦然。氣血平而身體安焉。心志平而德行修焉。平之義。不亦博乎。若夫天地之不平。責在人主。氣血之不平。責在醫術。心志之不平。責在學問。然則心氣之不平。平甫安得辭其責耶。果能欲平二者。在自强不息而已。

原廣正字說

孟子論大丈夫曰。居天下之廣居。立天下之正路。原氏之子。勵志於此。自名曰廣正。正其家字也。今玆丙午。行役東都。來求字說。予字之曰愼叔。愼叔幼而孤也。夙執古典。來學久矣。不拘時。不習俗。仕優而益不懈。此乃大丈夫之所爲也。予惟居夫廣居。立夫正位。久而下移。不愼焉得。伊勢神廟。命武尊。曰。愼而勿懈。帝堯戒曰。戰戰慄慄。日愼一日。地隔東西。時有先後。觀其敎戒。未嘗不同也。廣正愼哉。詩曰。嗟予子行役。夙夜無已。上愼旃哉。猶來無止。以此觀之。又此先考之遺敎也。廣正愼哉。

書牘二篇

足下幸承命。遙催東都之行。意氣揚揚。如大鵬刷翼。可謂繼先人之志。報慈母之恩矣。一時榮行。何以加之。況海陸千里。尤多曠觀乎。內生浩然之氣。外窮國手之妙者。將在此行焉。曷勝健羨。聊具微儀。以佐奉檄之喜。幸哂納之。

宇佐祠官。到津君之子玉泉子。近聞慈母之恙。自東都歸覲。侍養之暇。辱惠書并文一篇。曰此島先生之贈文也。不佞丙辰之春。從邦君而東留數月矣。每會醫勝田翁。言必稱島君。天不假良緣。不得一見而去。遺憾何極。今幸得讀其文。不亦說乎。君言曰。宇氏七十五世之後。必有大興家聲者。其在

於子乎。亦宇君之餘慶也。不佞措文嘆曰。島先生之知到津氏也深。而望玉泉子也。重且遠。玉泉子。欲何以酬其知。何以成其言哉。其勉旃也哉。若夫家君奉神之勤。固衆之所知也。島君之言可信也。但至叙其事。則有未可信者。有不可信者。則於其可信者。人將不信。噫爲玉泉子父子者。誰欺欺神乎。此語焉而不詳乎。擇焉而不精乎。君子於其言。無所苟而已矣。不佞爲二君惜之。玉泉子再東。請島君。改之可也。否則莫以文傳于人。不佞樂成人之美。況也文中有過及賤名者。不可逡已。今臨還璧。書此告之耳。

呈崎陽聖壽山道本禪師書并詩

遙聞大名。景慕日久。去秋偶遊筑肥。窮途於崎陽。留僅三日。欲拜謁猊下。無緣通介紹。因賦一律。留諸舘主。過汚嚴矚。辱賜尊和。捧誦數四。感愧交至。僕於禪師。受生異域。學殊內外。況孤陋不才。何幸得是知遇乎。咋踵門下。咫尺千里。今隔千里。詩中如面。嗚呼人世之遇不遇。與時違者。亦自如此哉。

乃裁野詩一章。敬謝厚意。謙光上人。亦見惠芳和。併爲机上之珍。僕近蒙東行之命。旅裝鞅掌。下遑附別緘致謝。悃悃。爲逡鄙作於上人。加正斤。惟至幸。伏冀垂慈炤。癸卯仲冬

詩

一封留燕石。千里報蠙珠。飛錫凌東渤。渡杯住海隅。法流禪味淡。文字我才孤。請看豐城劍。寒光射斗無。

附和

次韻奉和綾部安正居士見寄崎陽諸公再請政定　支那道本

新詩迢遞寄崎陽珍秘人同肘後方氷雪神情凌朔漠芝蘭氣味憶沅湘多　錦段持相贈豈有瓊瑤作報章但使空山能一會拾薪煮茗話深長

按原詣今逸姑待檢出

上邦君龍溪公啓

正德元年。辛卯之冬。臣安正。伏蒙嚴命。侍講孟子集註。至于甲午仲夏。終其編焉。臣素生寒微。夙辱

食祿嘗無下帷之暇。豈有侍講之才。然感希世之恩。略述管見之言。其間進祇覲宗之行。退提政事之綱。自非好學之篤。何至于今日。此豈曰君臣一朝之喜哉。實上下萬世之慶也。此日過蒙鼎言。辱領殊錫。曷任榮感。戰慄。殊增愧赧而已。臣聞人主之業。守成難於草創。何以守之。非文不能也。文者何也。四書六經是也。蓋人主治邦家也。猶良工作宮室。良工不由規矩準繩。則雖有良材。而不能營作宮室也。人主不由四書六經。則雖有俊良。而不能善治邦家也。信哉。文德人君之利器。威。武文德之輔助也。吾　本朝舊典。陵夷不復振。殄倫之教益熾。仁義之學未明。王侯無教。唯武是勤。故上鮮振綱令德。下乏識治良才。此天地之否塞。億兆之不幸。可勝嘆哉。天運循環。時遇開泰。　東照宮。時乘嘉運。爰創鴻基。內體仁德。外奮威武。萬邦心服。文治寢興。盛業紹承。向于百年。然道難開于王侯。學相成于庶人。噫天何愛斯道邪。噫人何不與斯道耶。恭惟吾君仁恕溫謹。寡欲力行。夙嗣封爵。躬親政事。內垂情古典。外盡力武備。聲伎遊宴。淡然無所好。其守成之備。可謂正大且久遠矣。蓋誠者物之始終。無誠無物。其立志之始。踐履篤實如斯。則其成德之終。大化淳流。豈不期哉。然學難進而易退。欲易從而難制。且夫人主。常慣于諛詞。而遠于直言。人臣動牽於勢利。而忘於忠義。惜夫才蔽於無人。行衰于寡黨。故戰戰兢兢。不夙夜戒懼。則因循怠荒而能終者鮮矣。詩曰。靡不有初。鮮克有終。臣至愚至陋。不得竊不爲君侯三復此語也。臣感激之餘。不敢得默止。終忘僭越。敬貢鄙誠。伏冀察寸忠。恭奉和盛韻。伏應嚴命。下誠曷任。激切屏營。臣安正誠惶誠恐頓首百拜。

詩

經筵陪侍展書編。盛敬日躋德象賢。幸沐殊恩羞且懼。愚臣無識豈欺天。

　按此篇。又不著題。姑以啓書。竢校出之日。

龍溪公詩　孟子講了

公餘孳孳對陳編。講習三年愧古賢。雲霧晴來江

海畔。文花先發太平天。

夢中反求錄

年號支于之春。恭承嘉惠。竢罪草廬。嘗圖司馬溫公獨樂圖于屛風。且寫其記。偶遊情畫中。致思獨樂。午漏沈沈。憑几假寐。夢溫公從容就席。進余曰。汝獲罪明公。杜門不出。篤學力行。已向耳順。勤勞四十年。侍講亦有年。遠近不失信。恤孤救窮。外內用心。可謂勤矣。今也何故所貶黜也。僕避席對曰。我公賢明。罪在小人。今日之事。復何言哉。公曰此是學也。勿有隱情。僕曰。諾。公實吾師也。僕何隱耶。正也小人也。本乏志用。身輕任重。奉命之初。喟然歎曰。靡不有初。鮮克有終。吾命與時違。豈其久哉。宰臣在上。先進在右。唯辭讓循前轍耳。爾來於今五年。語曰。足食足兵。民信之矣。僕雖不佞。念玆在玆。故將順其美。以憂恩澤不偏。勸勉其義。以患下情不通。謙以行。廉以處。不和者和。疑者信。僚屬孜孜。兆足以行矣。長宰歎曰。萬卒易得。一將難得。今也我公得人哉。使僕撰座右銘。扁諸廳堂。銘曰。儆戒無虞。罔失法度。罔遊于逸。罔淫于樂。任賢勿貳。去邪勿疑。疑謀勿成。百志惟熙。臨下以簡。御衆以寬。罰弗及嗣。賞延于世。宥過無大。刑故無賞。罪疑惟輕。功疑惟重。進思盡忠。退思補過。將順其美。匡救其惡。請東厓先生。書之以進焉。雖不心誠求之。而久假而不歸。惡知非其有也。噫一日暴之。十日寒之。不唯衆楚人咻之而已。巧言如簧。忠言逆耳。竟抱忠獲釁。抱信見疑。况壬子凶飢。千里無生稼。歷觀古今。書籍所不載也。 大君發倉。種糧遍賑。貪餒蘇息。拜東就業。加之。馳使遠近。賑貸侯國。海西郡國。分賦有差。竊惟無爲民父母之心。則無爲民父母之政。悲夫。大小牧伯。不憂失恩於下民。而懼得尤於政府。故以賣恩求名爲先。無救飢惆死之實。或罪歲束手。或託病滅口。縱能爲姑息。如大旱灌水。濟活何及。飢寒交厄。道殣相望。海西餓殍。以百萬數。噫命耶時耶。如吾蕞爾邊鄉。窮餓不可支。今玆邦君朝東。宰臣當路處置莫不善。然當是時。四隣遠近。得失毀譽之說。紛紛巷湧。雖知

言而必不行。而不忍立而視其死。猥進鄙策。不納求牧與芻不給。僕少不媚時流。好直忤旨。宰臣以爲。駁議時政。沮爾之事。噫不知沮爾之事。乃所以成爾之事。而駁議時政。乃所以忠謀政事也。當此之時。讒諛易行。忠臣結舌。古曰。天子之逆鱗易犯。而上官之意指難違。信哉。正也駑劣。固非張膽正言。吐露赤心者。然道不同。不相爲謀。不合則逆前日之褒。卽今日之貶也。今日之所憂。前日之所慮也。正也。恩深分厚。之死無佗。若何臣之不遇。乃下民不遇也。於是乎決心歸職。此其所以致貶黜也。若夫條三事辜臣。不待自證明。衆知其枉。公也亦由是觀之。其情可知矣。唯恨君聽之不聰。讒諛之蔽明。公嘗曰。平生所爲。未嘗有不可對人言者。僕亦曰。平生之所爲。未嘗有不可對公言者也。此公之靈之所明鑑。而僕所自安也。願公憐吾垂教。公曰。忠信得罪。自古有之。其曲彌高。則和者彌寡。君子在困也。有言不信。汝愼而勿言。但平日所爲。夫言過舉。有悔悟者乎。對曰。固有之。舉其大者五語之。僕初自東還。齡向自立。鄕無先覺。爲衆所推。門徼客貴。身卑言高。倡僻邊未聞之教。講武人未習之禮。過感先公之知。執經進講。先公聽明。下士治德。篤信不懈。臣感激盡誠。欲令公成明德。立治功也。故其言高。其行僭。倡之者少。忌之者多。此不知其量之過也。其失一也。子夏曰。信而後諫。未信則爲謗己。先公早逝。嗣君襲封。庚午之秋。再奉命侍講。其書。朱子小學。及學庸魯論。君不怠焉。相勤焉。凡十年來。然而未嘗見一前席者。則其不信亦明矣。辭不得命。間講范氏唐鑑。可謂吐不時之義。於諱言之朝矣。左右爲僕寒心。安得無悔。其失二也。子思曰。其爲物不貳。則其生物不測。僕進而說者。心術也。仁政也。退而聽者。表褋也。聚斂也。以昭昭語人。以昏昏聽人。其於進退語默之際。雖欲不貳。而可得哉。夫如此則於政事。何補之有。於學術。何益之有。其失三也。子夏問政。子曰。無欲速。今也天下侯國。政教衰敗。士民罷弊。聚斂整辨爲賢。節用施民爲愚。大抵以苛察御下。以巧僞欺上。風俗澆

薄。習以爲常。僕雖不肖。從事以來。有意欲興政以賑民。廉恥以草俗。令吏各盡其才。方今邦君恭己任賢。元宰秉政。斷機決事。莫言而不行。一時群僚。趨承唯諾。惟恐不及。僕之戇也。屢出迂遠之言。論時務之急。非唯力不能救之而已。遂逢彼怒。此欲速之所致也。其失四也。君子見幾而作。不俟終日。吾君相忘醴久之。僕不早察。已至今日。上下交取辱。其失五也。然而其勢不得止。僕將如之何。且當是之時。進退得意。今將謂吾何。公其察焉。公曰。蘭蕕無並。鎖長相傾。仲尼曰。道之將廢也與。命也。公伯寮。其如命何。且直道事人也。雖聖之和者。而不免三黜。況乎汝嗜雅厭俗。好尙或殊。富貴不求合。情趣苟同。貧賤不易意。後世無子游。而踐滅明之行。生于今之世。樂古之道。來者不拒。行者不追。一時交友。雖骨肉不及也。遂致挾朋樹黨之嫌。罪之來不亦晚乎。汝嘉獨樂之說。圖象焉愛之。徒嘗獨樂糟粕。未甘獨樂滋味。自今以往。與予同樂。甘其滋味。其可而已。僕曰。唯唯。敬聞命。僕必得一技安之。公莞爾向畫圖去。歌曰。營營青蠅止于棘。讒人無止。交亂四國。偶有友人來。乃以夢中之語告之。俯而不答。亦將獨樂者歟。將有感公之歌歟。

按。年號支干。享保癸丑也。有諱而不審也。享保壬子之秋。關西三十餘國。稻生小羽蟲而盡枯。先生是時爲郡篆職。爲當路所諱。竟罷其職。又按紹述文集。有此銘跋曰。右凡二十句。首八句。尙書所載。益之言。次八句。皐陶之言。終四句。孝經所載。夫子之語。聖賢彝訓。布帛菽粟。奚容後學之取舍。此乃事君從政之要者。故應或人之求而書之。享保十六辛亥冬。服子遷氏。批此後曰。恍如見子之志。

豐後州杵築城西。天滿天神新廟重建。上棟銘

寬永八年。庚申之夏。遷新廟于此以來。于茲三十九年矣。崇信日篤。祭祀年勤。然殿小地窄。柱楹蠹蝕。恭純住後。慨然有重建之志。且嘗得神像一軀。護奉日久。欲併安置本社。乃請諸吏城主市令松平君。益以數畝之地。於是城市商賈。競趨乃事。聚

材鳩工。奚斷爰度。彫刻精巧。柱礎堅緻。始于春之孟。成于夏之仲。遷有日。泰純請紀。恭惟治隆則俗美。俗美則神尊。神尊則國安。國安則事無不成焉。詩云。豈悌君子。神之所勞。時和年豐。民受其福。安正謹記其事。繫之以銘。曰。

美哉始基　爰斷爰遷　煥乎一新　彌高彌堅
本邦文宗　朝廷孚光　德光上下　氣塞天淵
梅封瑞雪　松籠祥煙　民斯享祀　敬用古蠲
庶千萬載　百福攸全

故豐前刺史松平朝散大夫源公行狀 并序

正德五年。八月十日。吾先公龍溪公。卒江戸邸第。享年二十有五。襲封僅八年矣。嗚呼其令德懿行。豈敢稱述之哉。然臣過侍講讀。凡五年所。無日不接恩光。先後實二年矣。常假顏色。令盡鄙誠。故其德容嘉謨。仰之望之。非復外臣之比。於是撫其所親見熟聞者。謹記以寓哀慕之意焉。僕嘗歷觀古今王侯好學問者。固不爲不多。然謙遜篤實者常鮮。而矜代淺露者常多。況本邦保傳之道久廢。故其志于學者。未知大意偏膠形跡。故施之政事。泥而不通。試之家庭。拘而不行。終歸罪於古典而後止矣。先公一聞王道篤信深體。專婁躬行。未必欲遽施政事也。故令德益盛。感化彌厚。假令天假之以年。而成其志業。豈唯一方士民化其政教而已哉。上助聖代之治。下成郡國之望也必矣。今也不幸雖大業不成。然令嗣孝孫。法其所行而行之。愼其所戒而戒之。則雖傳之百世。何以不臧。夫君子治行其於師賢從善也無方。況若父善行嘉言比之他人信從景慕之實。自不能無差別者。固臣子之至情也。今也嗣君尚幼。何望繼述之責方來以孝爲治。不可以不思遺德。若一思之。何得不問其審耶。此臣之所以竊狀之微意也

公諱重休。源姓松平氏。本野見氏。別號偕樂。幼名傳三郎。後更市三郎。其先參州松平七家之一也。和泉守。德川信光公玄孫。大隅守。松平重勝公。始封總州關宿。乃公六世祖也。承傳世次。具于家譜。

考諱重榮。豐後杵築城主。朝散大夫日州刺史。妣某氏。以元祿四年辛未。六月四日。生杵築城中。襁褓失恃。九年丙子甫六歲。遷居江戶邸。幼而溫恭孝謹。事適母某氏。如親母。先後出入。無有怠慢之意。大夫人鍾愛之厚。不異所生。旣長而德器克成。尊長之前。禮容不惰。唯諾必謹。不近牀席。不移几杖。出告反面。自履禮度。其於室老舊臣。特加禮待。一言不罵。傳婢倘有過失。還爲之彌縫。至家人兒輩。一無偏愛。出則扈駕未嘗有所擇。若有不得從者。言屢及之。必齎甘旨。及還賜之。其父母莫不捧之流涕。素不好籠畜禽鳥。或饋金魚。一見放之池。侍者曰。是魚待人生育。非他禽鳥之比。曰。其然。予尙不忍視其困。遂遠之。稟性多病。未嘗有所學習。而强記穎敏。粗知禮誦書。向成童。始學射御。及劍術。日夜用意。數歲而善其術。寶永二年乙酉。年十五。始加元服。是歲叙朝散大夫。任民部少輔。後更豐前守。五年戊子。年十八。先公致仕。公襲封。明年夏六月。娶駿河守松平定陳女。本月賜暇。始就

封邑。任政臣。禮遇加厚。優待舊勳。恩例有差。邑長里胥。及乳母老婢。各有惠賜。始巡視封內。訪純孝敦篤者。褒嘉賜賞。察貧約孤寡。給糧復產。闔境感服。移花塢。闢林園。以爲講武之場。屢會諸士。督其藝術。親自馳馬試劍。勸勉備至。夜使侍臣讀本朝舊記軍談。以論其得失。自幼至今。習以爲常。且使僕講習經義。有故不果。明年己丑。入覲江戶。頻年采地大儉。尋第宅延燒。命放鷹犬。罷聲樂。被服居處。務從省約。明年庚寅。隨例歸邑。使家人田中自强。講大學章句。至平天下章。怡然前席。曰。有是哉。凡有所省悟。他日更覆講焉。自此而後。講習四書。議論益親切。講畢必讀通鑑綱目。凡興亡治亂之所由。得失利病之所分。反覆詳論。莫不嘆嗟焉。元旦。朝服焚香。讀孝經一遍。必先擇日。使侍臣講一章。而後繙佗書。雖射御之講。至新歲初儀。禮容益謹。凡將讀聖經。向案肅容。執卷而戴之。讀了復戴焉。敬置諸案。未必投之席。伴讀者。指要義告之。則措箋斂手。反覆玩味。久而愈厚。且雖曲藝小伎。以

其事召臣。則必加禮待。夜必講文詩。發興賦詩。嘗有寒夜吟。曰。凛凛風刀寒裂膚。開窗呵爪思農夫。可憐茅屋竹扉裏。酒食衣衾有又無。其仁心及民之實。往往溢詩中者如此。或使侍臣讀本邦舊記。記其人物變故。或授筆硯。侍輩同習字法。但隨其所長。而夜課不同。二更就寢。報曉鼓即起。雖倦勞閑寂之日。未嘗方晝就枕也。饔飧有常。時非有燕饗。膳羞不二肉。四時灸兪穴。攝生最愼。農隙率郡臣。狩獵以講武事。且屢連騎。馳騁山野。以試馬足。過泉石佳處。必駐馬賦詩。或命從者和詩。歸路必過別業。執經聽講。習以爲常。是歲復巡行下邑。其褒賞純孝。賑給單窶。倍加厚焉。且年者艾而無惡聲。宗族和睦者。見之有惠。屢召邑吏。詰民家利病。豫下命。禁修路獻珍。以致煩擾。然民間親戴之情。自下得已。往往以竹茅搆憩息之所。稍設茶菓。而勞從者。尊駕始到。責吏毀之。閭境相傳。曰。明公不食言也。偶握麥穗視之。從者曰。實是下品之物也。曰。此蒼生之所爲命也。何比金玉哉。士婦老幼羅拜路傍。如迎父母。願爲之用。奔走不止。旅客遊衲。感歎曰。豈弟君子。民之父母。斯公之謂歟。歸城之後。召邑宰曰。吾封邑之民。乃懷抱之子也。特擇汝等。託其敎育。以立生業。須勸善恤窮。以成風俗。夫富民兼幷之害。其弊已久。雖非一旦可改。宜常推誠。令其均平。此乃下民長久之計也。且富民居宅。往往無度。須爲之制。神社佛宇。亦甚華侈。一旦雖妄作之。而修補不繼。使其所信者。而終有所厭。此愚民之所不計。宜令察得失。而無其蔽。且語近臣。曰。賞孝子貞婦。非徒褒揚其人。亦可以感發後來。吾嚴君。嘗所賞賜者。其姓名行實。或失記載。予欲考其行事紀之。因歎曰。豈唯此而已哉。邑雖褊小。治敎自可有其具。語曰。勿欲速。予必有期。正德四年甲午。公。年二十有四。夏五月覲宗期已迫。一日召內外諸吏。各任處守之事。因曰。凡法之不行。由近者之不謹。汝等宜知廉恥。使諸士有所矜式。又召某某曰。內臣有所請問講議。莫辭。又親筆條制三件。戒飭諸士。大旨謂。宜守舊章。專治文武之道。

宜裁省冗費。以繕修軍器。不可恃武門素業。而怠荒。若夫一旦有事。則假諸士之力。以報國家也。汝等宜勵其志節。以爲其備。士之有用。豈止一事哉。矧才有長短。何責備一人。宜學其所長。諳練其術。因分日演習武藝。親書其式而授之。且命老士數輩。爲之訓督。又正堂置四書大全。孝經。忠經。及本朝軍記。且陳弓馬劍戟等具。以聽宿直之士隨意講習。禁置碁局。因是一府吏士。皆奮發興起。莫不精勤焉。其在東都。尊嚴齡及古稀。愛日之奉。無所不至。尚恐違之。屢諭侍臣。承順其心。頻延名醫。備謀醫養。乙未之夏。構亭於水次。爲尊嚴清署之所。其結構次第。躬自指揮。至燕器弟玩。一無不用心。尊嚴聞其經營。心陰悅之。至期落成。尊嚴歡適殊甚。嘗謂曰。父老子襲之間。乃多爲佞諛者所誑。自極奢侈。而儉奉養者。往往而有。豈非不孝之甚哉。如予倘不知讀書。安知其言之誑耶。不亦幸乎。回祿之後。室堂狹隘。燕器未備。左右屢以爲言。公處之泰然。曰。苟合矣。無一毫不豫之色。每暇日講習

經史。凡文武諸藝。學習不置。東都隱士。高木某。年老窮孫吳之術。屢招延之。講論有年。嘆曰。曾憂吾道無所寄。今幸得其人。叩兩端傳之。是歲六月十三日。賜告歸邑。已卜行日。偶羅微恙。及八月初旬。殊危篤。百藥不治。衆醫束手。親戚諸臣。不知所爲。凡遊客工商。嘗一入門來者。雖未嘗接聞。忽聞病革。各投家事。奔走祈禱。無所不至。及廝役奴隷之賤。至忘寢食佇立茫然。呼天不已。八日之夜。召老臣。曰。予病不療。憾不能終養老親。而今而後。一託汝等。凡事承順。宜安盛慮。且承尊嚴命以弟爲嗣次遺命家人。曰。享世日短。惠政無及。汝等宜致忠於嗣君。又曰。須申于官。送葬洛西妙心寺。大父君墓左。氣息甚迫。不欲盡言。老臣伏聽遺命。曰。天道有知。貴體必復和。倘有不幸。某等何敢忘附託。請勿煩尊慮。又命侍臣。更出佩劍二鞘。置枕上。蓋以備殉葬也。視者莫不揮淚。痞積乘虛。煩悶殊甚。然辭令嚴正。一不及他事。越十日夜。戌亥之交遂絕。棺槨之制。殯殮之儀。誠謹誠勤。而護送靈柩於洛

西。十八日昧爽發引。比屋張燈。陳列拜泣。相謂曰。聞今郡國有三賢公已喪其一。豈不痛哉。驛路居民。往還旅客。往往稱仁聞。莫不拜靈輀而嗟悼焉。九月四日。送葬于妙心寺聖澤院。大父君之墓左。初使者到杵築。告公之疾。處守群臣。相顧失色。農商工賈。及神官僧侶。懇祈無不盡。唯恐不及。二十日之夕。訃到。慟哭之聲。相傳達四境。此日未申之交。家家相告曰。急步來報曰。灸而得奇效。諸臣趨城。農商聚巷。至兒童奴婢。徒跣匍匐。歡喜而不已。距城三四里南北。隔江同時。言而不違。窮問其言。遂無知者。衆以爲異。既而飛書與訃俱到。始報九日之夕。延醫進鍼。利便開氣。頓有新功。老公悅甚。勞醫賜服。親戚群下。懽抃相賀。猶杵城聞吉音。是日即發書於杵築也。嗚呼隔越千里。未報其信。忽然先知者何也。蓋君臣一體。至誠感應。其理不可誣矣。二十三日。奉遺命到。諸臣造衙。內臣捧書讀之。衆皆哀慟。不知所措焉。既而相謂曰。臣等不知奉社稷。何以堪處。海濱居民。織席爲業。已待秋晴。

乾茅沙上。亘六七里。忽聞凶問。棄茅仆地。相泣還家。吏雖慰勉焉。而無收之者。其至收獲。曰。天蓋使此粟。得獻我公。市中有狂人。一慟曰。如我者不死。而何喪此君。數月之後。有遊僧。嘆曰。吾經過是邦。往往聞涕泣之聲。問之則曰。喪吾仁主。曰仁政何哉。泣者曰。好民之所好。惡民之所惡耳。至矣哉。凡士民哀慕之切。如喪考妣者。可知矣。公。天資寡慾。內無嬖幸。外無弄兒。閨房肅然。訓導有義。出入必携書。共俱講禮。如孝經。小學。列女傳。求和字註解之本。授之夫人。夫人。溫雅貞靜。內治有義。克事舅姑。進退有禮。老婢妾媵。自服恩意。其哭我公。頓絕復蘇。既而親召老臣。謀事由義。辭色誠切。無婦女戀戀之態。且扶侍婢。侯老公之前。或慰或哀。其辭氣迫切。左右莫不飲泣焉。嗚呼淑德雖得天資。而非唱和之正。其何至此。公無玩物之心。被服器用。一無所擇。撫幼安老。遇下有恩。耆老侍食。必命羞甘毳。盛暑祁寒。命必賜座。嘗宴內齊。召庖人。調羹不和。蓄縮聳汗。公少嘗而更進之。侍臣深察恩意。

動容相顧耳。既徹。而庖人謝過請罪。厨監曰。豈公之意哉。遂不問焉。侍童懷橘。誤墮於公前。曰。汝欲遺母乎。又有觸几上香爐者。畏縮而退。乃召曰。汝有弟乎。嬉戲如何。其寬恕委曲。率皆此類也。每歲當暑就驛路。途中駐駕。從者必擇清凉。若近肆店。則命遷駕。曰。予耳目之所及。徒卒豈得安哉。使聞者忘勞。傭夫馬子。相謂曰。願歲歲爲此君用矣。一日過禪菴。主僧有詩。公和之。先命侍臣推敲焉。既而對僧吟讀至推敲字。偶不讀下。乃顧侍臣質問。而後讀過焉。其辭色容貌如讀他人之詩。聊無用意其間者。其無毫華飾之態如此。平居與衆談。言無及文書。笑娛溫溫。容聲猶童齡。故左右之臣。無老無少。無舊無新。各樂得其意。而不知盛德寬廣。以能有容也。然至論事。義理正確。嘗左便殿。語侍臣曰。凡創業之主。立得大體。則後世雖有庸主佞臣。未得遂變亂紀綱。本邦人牧。多以力定焉。故其政刑法禮。可觀者鮮矣。此所謂上無道揆也。下無法守也。因稱其家法嚴正者一兩家。而喜尙之。蓋盛慮在于此。良可惜也。又曰。天下戴 東照宮神德。昇平已久矣。豈非生民至幸哉。然因循慣安。武備日廢。俗逐奢華。士民倍困窮。有先識者。安得不長歎耶。故嗣立之後。屢點檢所藏兵器。常用意繕修焉。屢誦小笠原君（筑後守長定）言。曰。頃有外國聘問。咸曰。國家之盛事也。因修葺市店。華飾帷帳。此誇國家之盛。以予觀之。殊非盛事。而却供識者之笑耳。凡 朝廷盛事。唯在出令與任官而已。何者。未竟一朝。都下士民論其得失。引及外國。傳貽千載。今所謂盛者。又不踰朝拜進退。執政應對。官使行裝。冠昏賓饗而已。可謂事表襮矣。幕下諸士。日品評一時列侯。曰。某也仁。某也虐。某也儉。非唯取褒貶於今日。遂流是非於千載。此之不察。欲以外飾末禮。夸耀一時。不亦謬乎。吾以爲確論而不忘。又嘗嘆曰。近世諸家。財用不足。以故隣並聘問。親戚燕集。一切謝絕。此豈美事哉。矧使家臣流離困苦。雖有其故。多奢靡之所致也。蔽俗至此。不可復救。又曰。士大夫。好評論醫師巧拙。僧侶臧否。是皆非時政所

闕。觀其爲人。多是職事不治。義理不講。備員進退。徒事餔餟。予甚恥之。惡之故口不欲言。耳不欲聞耳。一日燕居。召某曰。大抵初政可觀者。不能其終。初學可嘉者。無全晚節。予常自懼。某拜答曰。甚哉我公好德之親切。世有人本爲功名治行。內無好學之實也。夫學未至好。則爲物所移。此其所以不克終也。又曰。好善似易實難。君子不可以不戒。其所以奪志者。請審之。答曰。如尊命是也。不內外交養。則何以得成。夫人君常富。故玩物焉。常貴故慢賢焉。常安故淫色焉。三者奪志之尤者也。公改容曰。汝言是也。汝言是也。翌日特召某。曰。昨汝所答。最深切也。予服膺不失。爲作箴。某謹作三箴獻之。又表黃庭堅戒石銘。扁諸座右。某待燕居。謹告曰。方今政事多端。不遑寧處。且講習武。恐有勞役之患。曰此忠愛之言。宜自念焉。然不曰死生有命乎。賢強之質。逸樂而夭者。不爲不多。尫羸之人。出入勤辛。百憂攻擊。而保上壽者。亦多矣。況人生無用於人者。必有害於人。君不治君職。則有害於民。與其生有害於民。不若速死之爲愈。且聞宴安鴆毒。孜孜勤事。還有保生之理。節飲食。守禁忌。予素所愼也。汝等莫爲念。嗚呼公齡未及而立。積學日淺。自非天資之美。安有若是篤且弘哉。安正不才。至於其德之感人。雖未敢得形容。然而卽耳目之所及。不用一毫文飾。直載其事。乃使某等子君孫。待拜讀之。庶幾知其令德盛慮。不可以限量而識。嗣君將來。德業固有其所本焉。臣綾部安正拜泣謹識。

牧伯之任。其寄可謂重矣。受之於大君。承之於祖宗。一方之生靈。賴其司命。一號令之發。一擧動之微。不可不惕然以警省焉。然生長於富厚之中。而不嘗艱難。故質美不充。弊習易遷。或不能守其宗祧。載於史冊者可考也。豐州杵築城主。朝散大夫龍溪源侯。粹美之德。本乎天稟。藉閥閱之世業。而能仁儉愛士。敦尚文事。克修武備。靡習不染。政擧人安。其捐館也。都內史民。如失怙恃。實惠之及物者然也。恨天不永其年。不

能充其施也。其府之士綾部安正。素以文學受知。時時以道義勸誘。眷待頗厚。因紀其事行之可傳者。著爲行狀一篇。請予跋其後。予也生平未嘗執謁。一得造侯之門下。然予之識安正也久矣。因書其後。曰。侯之莅鎭。施澤於民未久。然創業垂統。爲可繼。則其善之將乎後者。將永世有賴。侯之志固不虛。而安正之文之。亦將有稗於令子賢孫。與聞君子之道者。宜樂稱其美云。

享保七年壬寅。九月日。京兆伊藤長胤謹跋

山本友石墓誌銘

友石諱克敬。山本氏。別號健齋。豐後杵築人。父宗碩。豐前小倉人。母牧氏。宗碩善碁。始來受廩。養某之子祐巴爲兒。後生友石。未幾而父死。祐巴爲繼。友石十餘載而始仕。別居養母。母以壽終。時友石在東都。祐巴治喪。亡何祐巴早世。二孤尙幼。特給養依友石。艱辛交臻。友石處之不憂。內外莫不竭力致誠。寡嫂二姪共悅服。友石多病。嘗疾危篤。余問之。自吟一律莞爾。今記其結句曰。不知蒲柳質。幾日住人間。幸而蘇焉。自是以來十餘年。自言一日無忘痞痛。今玆甲寅七月。我公朝覲。友石陪從。到府一月餘。疾發終焉。噫天何奪斯人。其爲人也。溫雅恭謹。孝于寡母。順于家兄。在官不懈。鄕俗親睦。才性精敏。少好學。讀書略通經史。不走勢利。不習時流。澹泊以恒其德。愈貧愈勤。頻疾益勵。嘗講四書集註。周易傳義。春秋左氏傳。學術益進。儒雅之士。皆慕與之交。先公龍溪君。好學。眷遇異他。親書一絕賜之。嗣君特增俸勵學。然不進仕籍。命矣夫。初客東都。就正肥後侯儒臣熊谷先生。一過京師。謁東厓先生。先生謂余。曰。山生成就可期。到于東都。始師南郭先生。學詩賦。先生已稱其才。後又東也。屢謁請益。詩才益進。吾鄕言詩。實友石之惠。而先生之澤也。小倉侯醫官。士伯曄也。徂徠先生之徒也。素以文聞。與余相識久。今春求余。觀其古詩今體數十首。乃復書而言曰。友石有詩才。嘗聞之南郭之言。今始觀其詩。不圖其調之至於斯也。予固不如。比之先師高第弟子。伯仲之間也。惜乎

附稿於蠹魚。吾子蓋爲告南郭先生而梓行之。予固樂成人之美。亦將爲之謀。乃和友石所寄詩。且復書薦擧不已。友石披書曰。伯曄愛念之厚。推讓之過。恐有失言之謗。吾何敢當之。卷書不出。不幾而東。懷稿訪先生。不遇。亡幾而沒。蓄積之懷。終爲泉下之恨。一旦聞訃。知與不知。莫不嗟惜。況乎以吾之年長。來遊三十年。義同兄弟。至此奈何得爲情。仰嘆斯文屯難。俯哀善人無福。娶森氏。生一男二女。妻先亡。男與次女尋夭。再娶吉田氏。方姙。友石以元祿己巳八月二十五日。生于杵築城下。享保甲寅十月六日卒。年四十六。身歷仕四世。凡三十年。葬于城北下谷英信寺。友人工藤正勝。原廣正。小川正鼎等。起墳。遙寄書徵銘。乃採其所與共知之狀誌之。尙不盡韞匵之美者。欲慰其志於地下也。銘曰。

生而抱玉。死而有光。他山之石。琢磨成章。

祭良叔孺人文

維享保二年。歲次丁酉。七月十日。孝子安正。敢昭告顯妣良叔孺人。小林氏尊靈。嗚呼哀哉。星霜易移。秋又過秋。露泣風悲。七年一日。無日不思。予於妻孥。一守家規。簡孝與忠。永思不欺。吾女三齡。愛敬自知。撫育常視。德繼仁慈。吾姉吾妹。有孫有兒。來祭此辰。相愛戲嬉。敬供菜菓。醲醴獻卮。祭之以禮。靈茲來儀。嗚呼哀哉。尙饗。

祭田中君文

維享保十二年。歲次丁未。六月二十有五日。綾部安正。敬祭故大夫田中府君之靈。德本孝悌。名顯忠貞。公生權門。夙振家聲。英邁果斷。志度含宏。身勞四世。實惟干城。敬待加厚。特召再東。貽謀固契。士庶歌功。公之知予。著藥籠中。將行殊託。申誠罄衷。公已弱齡。武術精選。會友學文。議論雄辨。晩改章編。餘力黽勉。知非克改。虚己拜善。篤信勇爲。心豈可轉。頻哀三子。以理消遣。噫天不慈。賦命何淺。一疾不起。蒿里寅餞。忽遭此辰。心悽目泣。嗚呼何恨。天寵報公。家嗣聰達。講道校文。奉慈惟孝。在官克勤。早任顯職。不忝舊勳。瑟琴好合。蕙蘭吐芬。嘗

識易田。克耕克芸。予爲欲顯。才讓言短。予敬欲告。聞寡見罕。爰采爰盛。揮淚捧盌。神幸一顧。歆吾悃欵。嗚呼哀哉。

後得一本梜之。安正之下。有以園菜芳潔之五字。敬待加篤。作敬待彌厚。貽謀罔契。作貽謀心契。

祭復之先生文

維享保十七年。歲次壬子。三月二十一日。正當顯考復之先生三十三回諱辰。孝子安正。孝女豐。及慈孫等。敬陳薄奠。恭祭尊靈。嗚呼哀哉。志存疢疾。行成寡欲。顯孝之生。窮鄕染俗。一顧不及。誰知絕足。飄然高擧。遙侶鴻鵠。天未假時。命途跼蹐。遭家不造。棄榮受辱。吊寡撫孤。既富既足。愛衆親仁。强解桎梏。執經勵業。戰兢撿束。一仕三擧。推恩頒粟。先妣歸助。家道益親。戒奢貴儉。睦族善隣。嗚呼哀哉。歲月何頻。烏啼花落。三十三春。東役西勞。復臨此辰。或先或後。五女同逝。正也與豐。相悲饗醴。正也不肖。恐辱遺體。不敢怠遑。繼晷秉燭。幸沐國恩。奉職進禮。甘旨可再。吾退負米。吾妻柔順。杯捲手洗。三男二女。惟孝且弟。采芳采菲。追遠揮涕。尊靈來格。莫俾我底。嗚呼哀哉。尙饗。

祭小串新藏文

維元文二年丁巳。十一月乙酉朔。九日癸巳。安正聊以菲薄之奠。敬祭養弟新藏甫之靈。嗚呼哀哉。何賦命之不減兮。獨悙悙以離憂。今玆秋熱之熾兮。儵悒而疾弗瘳。維孟冬之甲子兮。魂魄飄悲首丘。寂乎城北蓮社兮。卜窀穸在良儔。越辛巳初聞喪兮。忽周章失所由。悵旻天而涕泣兮。讀遺札哀窮愁。夢寐念以悽愴兮。夫冥冥夜臺幽長大息而窮蹙兮。心煩憯以綢繆。嗟汝幼弱采學兮。傚孟母擇隣。悙悙久而敬之兮。爰同爨而守貧。乃翁之溫且厚兮。與予約爲兄弟。既同東而予獨返兮。索居二七俾汝底天外。悠悠長思親兮。寤寐期還歸負米。何懷夫榮與辱兮。瞻望而如調飢。父兮憂衆憐閔兮。可奈何天不慈。遙招魂重惆悵兮。顧予不遇怨咨。哀人世不直兮。嘿嘿以儵伊。胥嘉汝之愚諄

兮、遂寡慾以令終。見全夫食色性兮、吾戀戀哀固窮、爰使兒奉喪事兮。至誠豈所不通、淸酌薰橘抽芳兮、吾將徜返忡忡、飛霜紛月色寒兮、神來自東。尙饗、

祭仲子妥三文

元文四年己未。六月十三日。頑父安正、使長子妥胤。聊以新麪新蔬、致奠於亡男妥三之靈。嗚呼哀哉、三也。胡早逝矣、汝生爲次子。吾欲敎育膝下而觀其成、何願早馳仕路。遠赴覊旅哉、三也甫十七、不圖出身。從五馬而東。何不幸也。今茲之夏、五月十二日。羅痘不起。六月四日訃到。父母兄弟。仰天慟哭。且恨隔越三千里。不執手訣焉。嗚呼三也、質朴恭敬。幼而不爭、稍長寡言。夙興自梳、掃堂習書。衣服卷帙、整整不亂、敬兄愛弟、恂恂不懈、讀書習禮。馳馬試劍、凡所受業、莫不善焉。吾憶必得天之寵。長保其福、何謂予之罪逆。禍及汝之身、嗟汝之魂今安在哉、友人之子半也、長汝一歲。自幼善友、況復仕也同年。行也同日、其在東都也同舍。出入進退、莫日不相追隨。半也、先亡于痘、三也亦亡于痘、其日相後僅十九日。不知有盟如是邪、不幸如是邪、嗚呼死而有知邪、不邪、若有知也、半也必期汝於泉路、泉路又有邪、不邪、詩人曰、九重泉路泉路盡交期、泉而有之邪、然則汝等必携手向西、一問故國曾遊之地、予老矣、半也之父亦老矣、相後二子幾時、地下必修舊盟、欲見汝與半、翩翩射雉、隨意遊戲、不然則何時何處、得解此憂、爰薦薄奠、聊示慈念、吾兒有靈、一來嘗之嘗焉則宜頒之半也。半也亦未嘗不飽、嗚呼哀哉。尙饗、

祭平井君文

噫天不慈。生賢無祐、吾友井君穎敏淑茂、一方豪傑。誰出其右、夙喪父母。嬛嬛在疚、盡忠仕途、游志藝圃、執經卷舒、修行肥瘦、命途嗟跌、妻逝女幼。去歲于役、千里馳驟、病魔一襲、莫之能救。一朝聞訃、呼天顚仆。身沒名存、將夭將壽、時維初夏。綠陰雲逗。後嗣致誠、薦蘋酌酎。君之於予、義亡貧富、鄙言有取。心刻骨鏤、彷彿如見、在前在後忽焉何去、無

聲無臭。一寸誠心。爲君盥漱。一片香烟。爲吾三嗅。
嗚呼哀哉。尙饗。

古詩

東都値尊考復之先生諱辰

親昔携吾來。再遊雖不在。二十五春秋。采蘋又采菜。今朝帶涙憶家鄕。空望孤雲獨斷腸。泣執遺經讀還泣。受教膝下我安志。

明妃曲和山健齊韻

一朝忽誤百年身。琵琶可堪馬上塵。孤鴻聲斷漢天月。王孫不歸胡地春。一片堪鏡盈眼朦朧。萬里赤心獨玲瓏。胡酒勸醉氊帳夢。鳥驚單于夜鳴弓。可憐紅顏風雲侵。元是漢宮畫工心。唯恨君王不自察。顧眄角枕與錦衾。天下佳人焉得來。樓上鸞鳳去不回。青塚何時慰芳魂。永望塞北黃雲堆。

和藤紫城除夜韻應需

龍田山下廻錦水。錦水清處此棲止。歲暮偶唱白雪歌。白雪何必爲小枝。椒酒甜兮金橘酸。世人何求思漫漫。古琴一張書萬卷。三冬文史幾篇殘。忽然夢裡芳草生。欲與胡蝶長結盟。歸鴻遙傳千里信。讀之還驚年序更。

俳優行

君王置酒具兼珍。嘉肴進獻股肱臣。庭中結構極壯麗。牀上微風揚芳塵。綠竹俱起刷衣裳。藝態極妍妙舞長。邪正賢愚若好色。狂態寫出世人腸。玉闌干前涙空垂。水晶簾種使人悲。內人傳命賜錦繡。一時恩榮誰如斯。夜來連燭不獨映。滿堂殊觀更有興。遠近傾耳聽新聲。吾王庶幾無疾病。城頭月落烏噪枝。歡樂極兮歎古今。狂言戲動君能察。勸善懲惡古人心。君不聞。尼父爲邦放鄭聲。鄭聲由來奪神情。庭上重奏千秋樂。聞之一夜白髮生。

是時先生侍講　邦君賜散樂於羣臣先生與焉因有此作

水石歌

豐水滾滾流而來。穿石盈科自不窮。不知水石生何世。爲雲爲雨起祥風。若使洪土無水石。烟霞何處得與適。水石由來待人顯。清興爭知名利客。君不見春水浮花花自清。秋夕映月月更明。佗山石

兮可磨玉滄浪水兮可濯纓又不見人生百年如水流功名富貴似塵浮吾今七十懶無匹俯仰乾坤共誰遊

古詩一首 並序 舊稿失題

今歲壬辰之秋七月十日正當先妣良淑孺人。小林氏小祥諱辰吾友田中丈平井丈野野村丈淺井丈入江丈清末丈及島後藤藤井山本。伊東松村。安部等諸賢。辱就親戚。供奠靈前或臨門致懇或詣墓竭誠加之寄書投詩千里慰諭。方今諸賢東役西勤事如蝟毛而愛眷及茲。先妣之榮幸不佞之哀感何堪筆謝不佞從國奠而除喪。承君命而復職。此孝子之痛恨而不佞豈安而從之哉今茲之夏。五月上旬邦君艤于木付。發東都之行。不佞陪從而到難波乃乞數月之暇。修業于洛下。此雖欲繼嚴考之遺志。而不失難遇之時。然去几筵不與祭奠則不孝之罪。亦無所辭焉。嗚呼諸賢之於親舊厚之有餘。而不佞之報先妣事之不盡也自愧自哀不知所言。聊賦五言古詩一篇以謝諸賢云。

去年秋之孟慈堂忽仙遊。冥路更無蹤黃泉不通舟眼垂千行淚。心積萬斛愁喪次有國制一轍六十州公室有舊章。豈得不率由從公于洛陽吾將何所求讀書正有道繼晷焚膏油。四序流不已異方更悲秋設奠臨小祥。望鄉獨悵惘唧唧蟲聲咽。瀼瀼露華浮。吁天何爲者。百物供吾憂何朋友之厚。就家薦芳饈。尺素投千里。慰此歲月周先妣感榮幸孝子堪嘆啾韓公何人哉吾心獨自羞何以謝諸賢情長言爰適。

五言律

七夕孀婦吟

星期何易到秋自此宵悲錦帳風初冷玉階露暗垂臥迷孤枕夢。覺積半衾思。長恨吾誰訴紛如不理絲

思字、古人有以活底爲側者、即今西望、猶堪思、況復當時歌舞人、是也、有以死底爲平者、帝子不可見、秋風來暮思是也

暮春遊中島

偶従三春別。來催半日唫。舟移蘭棹短。酒有郢筒斟。茂樹聳江口。小樓滿水心。殘紅無覓處。追蝶惜分陰。

酬洛西春叟隱士見寄

武陵同斟瓢。別後夢相邀。洛水今垂釣。華山薄采蕭。空投梁苑賦。自遠聖明朝。何日掃林下。共君燒墮樵。

附山本敬呈南郭先生

遙従遠遊客。頻懷天外人。氷開春藻麗。花發彩衣新。萬里書當絶。十年恩日親。歸期秋欲半。莫惜夜光珍。

頷言山子頸言服子
起結併言二子

失題

古廟通幽處。畫中半日涼。長流千里遠。二國一橋横。稚竹傍闌綠。新荷卷露香。參商十年恨。高枕醉相忘。

和貞上人韻

塔勢山西聳。路遙野水明。衲衣脩竹露。禪榻百年情。作賦黄花發。談經白髮生。秋來祇樹色。迎月有餘清。

甲子初春寄安胤官遊東都

官遊猶弱冠。到處自爲隣。昨嘯京華月。今吟細柳春。書稀千里客。懶甚百年身。時戴太平日。天涯意氣新。

九月八日過東皐宅

門關千仭岡。江洗九回腸。吏隱常繙卷。微官來忘忙。岸松懸半月。籬菊向重陽。黍稻萬餘石。頃爲春酒香。

月夜訪山寺限無字

靈場佳氣鬱。新廟北山隅。城聳秋光映。天低帆影孤。清霜凝橘柚。閑月上楸梧。極目風塵盡。潮平雁有無。

秋夜作寄東武遊客

相思悲永路。孤劍匣中鳴。新刻披六諭。下情仰聖明。月高吹鳳管。家近聽機聲。焉得凌風翮。聯翮渡滄瀛。

簡東武永岡君

遠別三千里。好音屢喜聞。八行遙寄我。一字未酬君。滄海期明月。芙蓉望夏雲。衰年斷腸客。欲道淚紛紛。

寄德貞禪師

相逢豈徒然。方外本翩翩。誰識靑雲意。獨憐白髮年。喫茶期夜月。握手祝安禪。來歲縱無恙。懷公萬里天。

去秋德貞禪師住能州總持寺近聞羅微恙過勝任宅奉懷

老懶稀吟步。尋花到水鄕。相逢交態淡。遠望別情長。歸雁春三月。病僧天一方。何時迎杖錫。同賦坐禪傍。

田君席上餞別子璞之東得同字

送君千里東。千里思何窮。離、席、忽、飛、雨、城、樓、晩、生、虹、帆分仙島去。賦過帝都雄。江左多才子。客中調自同。

席上得湖字

主、人、元、灑、落。家、在、水、西、隅。春、藻、成、文、字。遠、山、入、畫、圖、花、香、蜂、自、鬧。江、綠、鷺、如、愚。此、處、無、塵、事。莫、勞、問、五、湖。

寄德貞禪師

江亭梅雨霽。衣鉢此相携。文字龍蛇動。袈裟翡翠迷。潮來漁艇轉。海遠客天低。行盡靑雲路。雪山留偈題。

初春喜安貞步雪至

山村三十里。雪裡報春來。玉屑飛還碎。梅花散復開。三餘勤爾學。七步更誰才。依舊書窗照。莫言興盡歸。

初春寄熊谷竹堂

多病忘詩賦。罷官採綠蘋。書、疎、情、卻、密。躬、隔、道、相、親。故園梅花月。他鄕楊柳春。春來多所思。華髮未歸臣。

今春克敬東。託小詩。遙呈上南郭先生。幸賜報章。賡韻奉謝。伏乞定政。

薰風千里到。執瑟試歌詩。傾蓋幾年過。執鞭何日

期。人生歎易老。聖代喜同時。彷彿夢中調。晤言醒復疑。

南郭詩出附錄

七言律

訪春山人

山畔幽居澗水濱。藥爐丹竈四時春。松杉鬱鬱通禪窟。桃李陰陰伴隱淪。白髮彌勤三世業。青囊能保百年身。樽前吟斷歸來賦。愧帶風塵逢故人。

奉呈室鳩巣先生

曾聞門下頌鱣後。天祿論經幾度秋。蘭室春催芳草夢。歌臺月映鳳池頭。三千里外期君久。二十年來再客遊。卻恨相逢言不　一雙白璧向誰投。

夏日訪島東阜邂逅一二緇素懷富春山人

千里別　三載過。微涼邂逅八川河。世上歡娛窮裏得。人間涕淚老來多。客思淺草寺邊飲。僧唱金華山北歌。不知故人今健否。薰風垂釣五湖波。

富春山人、與先生世相識、山人後隱東海、頸結蓋及此事焉、

田君席上餞別山子璞之東

主人官蹟抱痾休。偶送行舟一上樓。避暑非關河朔飲。觀濤豫憶廣陵秋。湖光夜動龍宮月。山色晝陰禹穴幽。總爲風霜妨客路。加餐說盡泣還愁。

頷聯、上句屬致仕之主人、下句屬東遊之客子、結則主人與賓、同感慨、

秋日島東阜寄示貞上人一律次韻奉寄

聞說上方山月明。幾回幽夢帶鐘聲。清篇最愛遠公雅。狂態應憐賈島情。梅竹開門禪榻淨。稻粱夾路野田平。滿天秋色南樓夜。佳興一懷灑酒生。

初春送到津生之東武

東行隨例逐紅塵。肅拜靈宮辭二親。寒月含珠帆影轉。煖風吹雪馬蹄輕。背諳桃岸武溪路。再到柳營幕府春。萬里橋邊應計日。二乂口上莫垂綸。

到津氏世爲宇佐大宮司

送人之東武

新晴解纜夕陽邊。江柳青青拂餞筵。共計昔遊春幾度。行諳古堆路三千。海中樓閣烟波動。關外琵琶殘月懸。到日恩顏知有喜。南風更入武城絃。

賀原翁七十

草廬負郭避車塵赤馬關西碧海濱壽宴承歡三顧恵舊恩報主百年身杜鵑雲入洛陽夢楊柳風回幕府春黃髮莫辭重命駕班衣歲歲奉親新

原翁小倉藩士嘗在京師有杜鵑之名句

舟中

滄溟駕鷁遠朝東鵷鷺翺翔送我公二十年前人幾在三千里外客多窮故園殘夢蓬窗月枕底斷魂灘上風情異舟中若胡趣旅懷吟就喚阿同

自註曰件姪安貞

夢東涯先生

珠履從容入夢魂呼兒投業掃柴門無能自愧雙蓬鬢薄酒情親老瓦盆千載敎風期聖主百年間暇沐神恩哲人長逝文猶在涕淚迎君濕墨痕

自註曰近求得仁齋先生手簡一通結句及此

城中訪原愼叔同賦官松

一寸託生經幾年十圍成幹蔭城邊尋常誰識棟梁用歲晚初憐操節堅翠色含霜凌武庫梢頭懸月照文筵盤根深處神龍臥三顧何時欲御天

語孟會終日用呉明卿韻賦

世教從來歎易移賓筵勸醉遭明時風香蛺蝶芝蘭苑綠泛蛟龍雲雨池自古斯民由直道至今小子學夫詩同遊正路歸安宅新綬不論腰下垂

餞別健齋之東都

柳條含雨向離筵楚水呉山春可憐襁褓嬰兒啼膝下孱廬雙涙別尊前鄉關月落蓬窗夢旅店花飛驛路鞭萬里期君多子弟道吾今日勉衰年

附山本敬寄熊谷竹堂

三載離鄉萬里遊錦江添涙向東流歸鴻忽覺家人夢乳燕頻催遠客愁心緒低頭鳴寶劍平安寄語送行舟無能任職有何補春日空期黃麥秋

此詩蓋先生爲郡監日之作故結聯云爾

偶成

窮途阮籍老風塵八口家肥不厭貧伏櫪欲歌先對酒采薇尋跡轉憐春滄浪水綠悲騷客桃李花開思故人聖代祇今明若鏡吾儕何處得容身

家肥之肥、疑有誤、故入之故、當作古、上已用滄浪之水、下宜用桃源之花、不然則詩入偏枯、悲濯纓、憶避秦、而後與結聯、情神相接○伏櫪不歌惟飲酒、采薇不賦惟哀春、接頸聯、有羝羊觸藩之意、蓋附一小朝、指爲聖代詞人之辭、宜如斯隱。

用前韻答默齋君附令兒見寄

山陰幽處小城西。乘興兒童雪不迷。送臘勝花頭上發。尋春芳草夢中題。腐儒交態黃金空。市隱風流靑眼低。歲暮茂陵誰共問。憐君多病馬鄉齊。

夜集砂白宅

偶入市廛忘市廛。蘭窗蕙帳夜蕭然。醉顏長對楓林色。幽夢初醒茶竈烟。意氣豪雄憐少壯。詩篇清絕讓群賢。繁霜鐘響遠天外。不是山中心自仙。

紅塵中之日月、玉壺裏之乾坤、

男胤將東髓禪人見兼寄賦此答謝

清梵林中近若何。烟霞相値一春過。杜鵑聲遠望松桂。胡蝶夢殘迷薜蘿。長晝披書詩思懶。衰年送客別情多。禪餘吟就添行色。正是芙蓉白雪歌。

送別

花前告別向東風。豈與人間行略同。瀛海仙宮何處問。補陀春色幾峯通。十年之子遊關外。今日孤雲入夢中。齒髮對樽半搖落。憐君瞿鑠爲誰雄。

初春飲橫山良仙宅和田中陽軒韻

故城迎客愧斯身。胡蝶夢中少壯春。梅照賓筵清興至。雨催夜飲晤談新。東風有恨霜殘鬢。聖代不妨酒入脣。千里與君歎易隔。暮年何處卜芳隣。

夏日訪東皐宅

懶性讀書辱主恩。鶯花閉戶絕塵煩。交歡一日常難得。富貴百年何復論。偶涉西村梅結子。來窺後苑竹生孫。遠山留客燒痕綠。水北兎裘欲並門。

頸聯幽野可愛、惟喜冠裳黼黻者不懌、

十五夜

良夜幾秋迎弟昆。露荷風竹沐君恩。雲晴好隱烏皮几。醪熟爲斟老瓦盆。千里晚潮驕海若。一輪明月闢天門。坐中偶有遠方友。故詠南陵憶故園。

十五夜下宜有贈某之字

中秋偶作寄東都男胤

秋風疎雨鬢毛衰。老去登樓迎月遲。何處清砧添

別恨天涯飛雁寄相思三年爲客勞搖筆一夜望鄉獨賦詩同帶光千里興佳期每値卜歸期

遲字自老去來不自月字來

春日和東皐見贈

春風花發照城樓片片酒旗懷舊遊擔下負暄衰老樂江渾作賦故人愁投閑幾度尋禪窟罷官何時方釣舟今日偶從前路過依然綠水向東流

島東皐者先生之故人是先生失意之日酬東皐者風暖花馥以憶昔日之歡娛我負暄之微忠無所獻子作賦之孤憤何處寫因歎已往之幽尋以思將來之閑適人事變故多態只一條之東流依然不異昔日花下相見也

敬奉賀鳩巢先生七十華甲

門接昌平風教和武城春暖發絃歌雲披南極天呈瑞霞泛東瀛日浴波環堵下帷勤業早經筵前席著勳多玉壺遙酌爲君壽長路三千欲奈何

自註曰用先生歲初韻

自是仁人天爵饒何須仙路問松喬德輝高仰西山雪豪氣遠回東海潮函丈論文三載過日邊獻壽寸心遙祇今聖代能迎老更讀韋編期杖朝

初夏遊深江泥玉師先至淺井翁不至

十里春殘杜若洲綠雲深處記曾遊林間謖屈支公錫江岸空回張翰舟明月久期南海蚌洪濤兼思廣陵秋醉題華表謝神廟千載誰知壯士憂

和俗呼燕子花爲杜若神祠之鳥居爲華表

賀宗玄堂頭和尚說法

大闢禪關四望通百年祇樹轉青蔥鳳鸞垂翼諸天近龍象如雲古殿雄一線香烟生瑞氣六時梵唄入薰風請看三尺豐城劍還在主盟掌握中

寄南郭先生

百年龍臥倚金城芝浦銀臺雲氣橫關外交遊歌郢調門前長者停車聲月從南海蚌中湧露自仙人掌上傾何恨久難逢狗監天將不遇就君名

和維道禪師見寄

老大春寒禮節慵化城初到慚塵容遠遊篇就揮如意禪榻話殘聞梵鐘海月披帆三百里夏雲回首一孤峯期君金錫鳴天外還向故山歸興濃

自註曰今茲師催本山之行

初春德貞禪師見訪。有詩奉和。今茲催本山之行。因而及之。

潮聲新湧香臺東。三島雲開萬里風。汎汎浮盃春自動。迢迢客路夢先通。烟霞催別舊禪窟。雪月添香古梵宮。聞說越山淸似玉。秋鴻飛度畫圖中。

田大夫席上送貞上人住總持寺

高臥十年情轉幽。林園依舊枕江流。南山色傍紗窗動。海島雲連綠樹浮。佳興始迎開士錫。浩歌遙引野翁舟。袈裟縹緲天涯去。千里月明懷此樓。

哭東涯先生

秋鴻傳訃雨濛濛。千里愁雲哭望東。一代文章崇敎化。百年繼述重儒風。家庭託弟業無墜。地下報親孝有終。臥病尙留封禪草。茂陵何日問遺忠。

實記

長子胤將東因賦此兼憶南郭先生

天涯路隔恨離群。送客黃梅堪贈君。長守草廬嗟白首。憶遊江左望靑雲。佳篇仰見東山雪。彩筆遙搖北斗文。之子到時秋既近。幸陪蘭室日將薰

長子胤將東因簡故友高蘭亭

一別參商二十春。緘書難得夢魂親。百年微祿頭如雪。千里窮交涙濕巾。賦就不慙驚海內。才高自似避風塵。迢迢長路送之子。之子何時見故人。

中秋書懷

偶鋤庭草望淸光。天上陰晴感慨長。同學故人今有幾。一方才子半他鄕。明珠須待連城價。寒鏡更添雙鬢霜。風月從來不虛度。此宵猶醉酒樽傍。

哭兒安三

東行一別死生違。老涙潸然萬事悲。遺札幾封留在几。病軀千里夢知歸。雲低乳燕遠梁去。日暮孤螢穿竹飛。泣望天涯腸耐斷。芳魂何處獨依依。

中秋有感

强捲疎簾思不平。月前空數故人居。悲秋最惜流年夢。作賦誰憐衰暮情。豈背濁醪催醉綠。任佗華髮帶霜明。南樓回首鴻初到。遠客何無意寄聲。

喜東皐見訪

不見東皐又幾旬。今朝相値語驚人。官情彌薄讀

書孎。棊局自誇漉酒巾。哀客雙垂千里涙。拓魂還
薦故鄕蓴。紛紛雨雪多愁緒。莫使孤吟泣鬼神。

讀書孎園主漉酒巾園客二翁之子官遊在江戸時囟問並至

秋日訪友人閑居

聞君秋水釣鱸魚。折簡招吾霽景初。山色遙迎遊
客歩。川聲近報故人居。三餘不廢鳴琴興。百歳堪
繙滿架書。羮膾勸盃醒復醉。交情自與世情疎。

答利行生見寄

少年爲客武陵源。春去秋來霜露繁。夢裏自憐懷
橘奉。宦遊長感倚門恩。登高無恙黄花色。極目偏
消月夜魂。寒雁忽傳千里曲。不堪吟斷共誰論。

桐江從與移攝。偶遇令任克甫之舍。喜贈

別後曾聞一掛冠。松江投釣十霜寒。遙浮東海忘
塵跡。將向南溟展羽翰。萬里琴瑟迎客奏。孤庭蘭
蕙共君看。壯遊若過豐城去。映斗龍光問舊歡。

桐江即富春叟叟之和詩見附錄

宮怨

自誤芳年早入宸。宸遊日日獻媚頻。羅裙奉帚長
門曉。玉指捻花小苑春。妙曲遙傳金屋宴。仙桃曾
試御厨新。如今不得浣紗婦。何擬鴛鴦夢裏人。
並選一朝入紫宸。豈思恩寵且偏頻。御溝梧葉驚
風夕。露井桃花結子春。羅幌曾陪銀燭爛。粧樓自
愛玉顏新。偶聞鸚鵡傳天語。休學西宮失意人。

後首頷頸交關、結有味、覩嘗世變、而後知其辛酸、

山子璞小祥忌

去年執手送東行。今日招魂望武城。斗米離家遙
與疾。窮途泣玉空垂名。黄花老郤故人涙。錦字織
殘寡婦情。衰晩幾時腸耐斷。九重泉路欲尋盟。

結意可憫

早春喜諸賢携樽見訪

綈絕扶病畏春寒。豈意淸樽罄舊歡。海内交遊儒
命駕。故人消息問加餐。青雲望斷邯鄲夢。白雪吟
成刻曲看。酒後不妨歌伏櫪。一盃千里又何難。

哭女

香魂此去向何鄕。夫在遠方子在牀。襁褓解衣多
涕涙。塵埃掩鏡耐悲傷。室家三載琴瑟合。故苑一

春蘭杜芳。誰識錦腸風月詠。還添愁恨寄空房。

自註曰今春二月自府中皈寧五月生女七日後卒

五言絕句

別藤秀才還鄉

秋色故園好。翩翩歸思催。東籬菊如錦。應照彩衣開。

詩歌何日値。秋思自今長。少婦如相問。莫言疾更狂。

田園四時　春

映門楊柳綠。長耕告言歸。賦作負暄坐。時看禽鳥飛。

夏

秧稻微風動。久忘河朔盃。東陵途不遠。有客送瓜來。

秋

孤村楓片片。三徑菊鮮鮮。南畝稻粱熟。應憐寡婦邊。

冬

乞火到隣舍。常憐三子寒。前村滿天雪。自在畫中看。

述懷

行處皆窮途。抱樽倚市門。歸來賦未就。謹讀錢神論。

五絕起句用佗韻者美人捲珠簾深坐顰蛾眉

明妃曲

夜夜邊聲動。閨中不耐悲。忽然雙淚下。無復戎王知。

邊月催歌舞。閨中似有恩。胡姬浪語咲。妾那解方言。

春江曲

悠悠春水綠。少女不知名。歌罷停舟語。莫教鷗鷺驚。

行行采白蘋。植杖憩江濱。曲浦鴻歸盡。不忘故苑春。

擣衣

征婦夜鳴杵。家家響不孤。秋風吹送去。能到玉關

無。

寡婦吟

涕泣撫遺腹。胞衣是父恩。何時看日月。陟岵一招魂。

寄島隱居

結弟江海北。鷗鷺自相從。後圃瓜應美。泛舟問老農。

秀葉生發舟赴洛予疾不得送行賦此贈別

百年功業意。題柱遠遊吟。師友常難遇。孳孳惜寸陰。

臥病衰年別。今朝出餞難。多情重寄語。語語是平安。

奉懷南郭先生

南澗采藻蘋。芳洲搴杜若。春水日東流。吾思竟何託。

送妥胤宦遊東都五首

梅雨晴來好。餞筵分手遲。前程幾千里。愼莫迷多岐。

仕途戒多口。多口爲禍府。縱、逢、作、賦、才。愼、莫、反、鸚鵡。

勝地多春色。冶遊日易斜。武溪雲霧裏。愼莫問桃花。

一步期千里。青雲壯士心。流年人易老。愼莫懈分陰。

先子有遺訓。孜孜念謙光。名都風俗美。愼莫習疎狂。

塞下曲　父子遠別之情自肺腑中來者爲是

霜白凜兵氣。將軍鳴劍歌。歌闌望漢月。少婦夢如何。

送僧

世界皆禪榻。豐山是故鄉。鐘聲遙到處。想我鬢邊霜。

七言絕句

宿大津驛寄洛陽伊藤東涯

三秋奇遇十年恨。千里相期咫尺違。從此東風關

外路無邊春草夢相依。東涯和詩見附錄

和山子讃

社鼓傾城幾日紛。石橋偶度虎溪雲。雪晴青翰應無恙。醉向東風懷鄂君。

經春社之絡繹、入山寺之幽寂、酒後眺望、思入我君之

雪夜答健齋以詩見招

滿城雨雪逐風飛。范叔淸貧憐布衣。歲暮窮途來往少。門前輿盡幾人歸。

昔時之雪、人乘輿而來者衆、今日之雪、且不見門前輿盡而飯之人、寥落甚矣、增見健齋之厚、

元日

幽鳥今辰遷故林。歌聲何日入新吟。春輝歲歲知難報。細草指天是寸心。

造次不忘向君、出身事君上者、宜以此詩爲心、蓋先生移居之年正、

春日郊行

城北新晴春色深。櫻花夾路晝陰陰。韶光如此年年少。禽鳥自成遊客吟。

暮春小集得門字

城裏風溫烟雨繁。鶯歌一曲對芳樽。何妨老大鋤庭草。桃李春闌花滿門。

弔慰島東阜哭外舅小串翁

故人一去隔幽明。無奈十年傷此生。樹老花殘秋色少。山庭寒月照秋情。

送仲井生之東都

涼風解纜暮潮平。千里曲成渡海瀛。露濺離筵新月夜。獨留故苑賦秋聲。

七夕偶作寄熊谷竹堂

星期河轉度年遙。織女脫機雲霧綃。異客同歌千里曲。吳門秋思隔宮橋。

竹堂者、熊本侯之儒臣、是時我侯之邸、與熊本侯之邸、纔隔一橋、竹堂和此詩曰、相逢不許年年度、秋入人間烏鵲橋、全詩載附錄

雪夜喜山健齋訪予城南茅舍讀書

憐爾歲寒倚草廬。故人自愧綈袍疎。城南乘輿夜來雪。窗下分光滿架書。

初春城西訪友人因懷東武二賢弟

負郭新正梅始開。故人淑酒醉徘徊。今朝遠客相思否。千里春來書不來。

蕭然環堵傍風塵。遊客相思幾度春。千里應憐楊柳色。十年元是折腰人。（一作別恨不勝楊柳色十年況是折腰人）

松田三伯之令妹陪　駕而東三伯遊學京師作此寄懷

客衣新就淚泣然。十歲女郎向日邊。千里相逢關下水。水聲還入別離篇。（逢坂關在京師之東關東關西之所分相逢關蓋謂此也）

暮春訪願成寺泥玉上人

來往十年前路斜。江隈秋色似仙家。喜君霜露老無恙。長駐朱顏對菊花。

送貞上人西遊

春林留偈百花飄。二首九關行路遙。莫向西天飛錫去。故山衣鉢近寥寥。

從軍行

萬里離家苦遠征。手中鳴劍倚長城。繁霜暴露沙場骨。纔是麒麟閣上名。（唐詩曰憑君莫話封侯事一將功成萬骨枯）

北出長城萬里餘。胡天月色雁聲疎。君王不識沙場苦。宴罷昭陽待捷書。（世主不知人骨朽宴安日日醫餘歡是雲溪之詩也吾每誦此詩愴然淚下宴罷之字下得有味）

絕漠茫茫月色昏。胡笳徹曉動軍門。朔風吹送天山雪。萬卒承恩繒纊溫。（書纊之溫非綿非絮）

和愼叔値中秋自東武見寄

明月吟成東海來。今朝偶値菊花開。肅然環堵無人問。誰是登高作賦才。

江樓書感

一上高樓感慨多。人間幾度苦風波。誰知千載楚臣恨。休唱滄浪漁火歌。（郭功甫、寄詩於蘇老、曰、莫向沙邊弄明月、夜深無數采珠人）

客中行

宮柳青青春日斜。相憐相賞異鄉花。客中對酒皆兄弟。一曲高歌似在家。

無限離情誰共言。十年辛苦在都門。夢魂不識客中恨。夜夜分明遊故園。

遙和武州子璞重九韻

登高應憶故人盃。何處黃花傍客開。休問秋風吹落帽。誰知千載孟嘉才。

明妃曲

長安萬里隔長城。獨向邊塵恨不平。強弄琵琶學胡語。胡姬咲殺漢宮聲

詔武難奏于鄭聲之間也久矣

一入畫圖長斷腸。紅顏截截老邊霜。驚魂難作漢宮夢。泣坐草于氈帳傍。

娥眉翠黛凋朔風。百年身在胡塵中。夢魂陪宴覺還泣。未必逢人說漢宮。

王弇州詩曰宮監攜前言不淂更將双淚滴心頭

從軍行

漢軍十萬向沙場。回首帝鄉雲路長。老將談兵夜高枕。轅門不鎖月如霜。

送僧之能州

薰風相送夕陽開。別後秋江北地來。無限各天連瀚海。不知何處寄浮盃。

春宮曲

佩玉鏘鏘降紫宸。宮牆花發鳥來馴。金莖春暖多承露。分得近臣思寵新。

一二是外臣退朝見宮苑之花鳥思及宮中

送然譽上人東遊

飛錫十年西復東。江風解纜恨無窮。與公携手芝山下。今日相思如夢中。

遠公行色逐歸鴻。相送離情兄弟同。隴坂川梁能到否。為題二字寄春風。

仲冬廿五日兒輩相約過訪後藤生作此遙寄

百里朔風雲若飛。村行相約不相違。回頭吟取雪中興。人謂少年漁獵歸。

元旦

三冬日暖値新正。微雨今朝春色生。庭上紅梅似催醉。鬢白雪不勝情。

寄東武二三子

天涯游子有誰憐。離恨今朝又一年。千里莫勞芳草夢。春風無恙舊青氈。

春夜宴

月色朦朧夜宴新。相逢相值幾回春。滿堂總是青雲客。還問百年舊主人。

歳暮偶作

歳寒茅屋傍村邊。一朶梅花開臘前。罷官十年鬢若雪。更無人問舊青氊。

春日偶作

閑來無意著潛夫。門鎖鶯花對玉壺。借問釣竿長幾尺。五湖烟景似期吾。

胡蝶倦飛夢自濃。落花片片世塵重。樂羊何日得高枕。篋裡謗書餘幾封。

附男妥胤簡倉城香月牛山

洛陽城裏始相知。千里歸家有此兒。今日送兒多感慨。故人莫怪鬢毛衰。

此衰自多感來、不必數年是幾、又曰、牛山之和詩載附錄、

答玄宇生中秋見懷

故人東去路悠悠。況復風塵悲素秋。千里何時賦明月。琴樽共倚武昌樓。

送清末生之東武

江頭分手夕陽曛。離恨老來堪送君。此去馬蹄何日到。迢迢客路雪紛紛。

予時侍先生、先生示此詩、曰、言迢迢驛路紛紛雪、驛路迢迢、雪紛紛、是熟套、如此用來、考之於舊例如何、晋賦所記、唯唯而退、後讀吳越春秋塗山之歌、有言曰、綏綏白狐、九尾痝痝、其由而來也久矣

行色映江開酒樽。西山白雪照黃昏。遙憐十載倦遊客。夜夜期君勞夢魂。

春日集淇竹亭

雨後江山春色回。異鄉梅柳好啣盃。何思十載窮途客。今日逢君披老懷。

中秋懷男妥胤門生宏生

賓鴻初到暮雲間。同對金樽秋興閑。遊子辭京何處泊。歸橋懸月望鄉關。

賀然譽上人自洛歸住松岳山

春潮千里乘盃歸。雲霽香臺映曙暉。師弟相逢恩不淺。袈裟欲比老萊衣。

遠公來去本無心。千里逢迎良緣深。今日諸天多雨露。春色向榮祇樹林。

暮春遊山寺有感

江南野色夕陽微。新樹蒼蒼宿鳥歸。休唱昔遊春興曲。山花落盡故人稀。

悼友生

秋天傳訃雁空飛。遙望秋雲心事違。明月獨懸千里淚。芳魂何處著班衣。

寄青山人

歸程遙卜武昌城。路菊山楓喜色晴。負笈八年千里意。倚門一日三秋情。

哭山健齋

嗟爾才名三十年。蓬蒿依舊抱寒氈。山陰興盡人何去。吟斷陽春白雪篇。

異材搖落獨悲吟。伏櫪歌殘千里心。久困鹽車無起日。空收枯骨待燕金。

春日訪東皐

十載風塵少信音。綾交焉比世人心。山濤一自別湖海。春雨蕭條脩竹林。

閉戶先生老瀨甚。十年一到舊山林。相逢不厭窗前草。春雨過時心自深。

先生有公之譴、久閉門東皐亦同承譴者、同感相投焉

送僧

金錫翩翩向北陸。淸風明月自相隨。禪餘莫廢高山曲。萬里逢迎有子期。

再和東皐見寄

結茅籬外望蓬壺。官跡百年元自愚。且喜交遊興無盡。天將風月假窮徒。

贈土伯曄

武陵分手故鄉還。空抱壯心老世間。明月賦成獨吟否。朝朝西望古文關。

和南郭先生悼山子璞韻

人去豐城寒雁來。一篇白雪共誰開。休言古劍埋精彩。此夕光芒匣裡回。

服子詩並引、曰、山友石、自豐齋詩稿至、訪予不在、携歸客舍、俄而沒、其友綾部君、爲悲其事、徵予題遺草、予亦爲之愴然作、兼代弔詞、豐城古劍此携來、擬向張華匣裏開、不意斗間風雨變、天南一夜化龍回、

春雪小野生饋酒有懷用答

老懶春寒依故扉。交情今夜不相違。雪中賴有盃中贈。也勝門前輿盡歸。

再遊姫島精舍

海中精舍自無塵。二十年前舊主人。今朝相値鬢如雪。烟霞不改惜餘春。

聞東皐病愈喜有此寄

昨日聞君辭世塵。今朝還値再生春。春風好是携多暇。仙島烟霞問故人。

雪後和東皐初春韻

江城新歲鳥聲和。水北餘寒酒氣多。一曲歌成春雪遍。君家遠似帶銀河。

哭東皐

豈思雙淚灑墳塋。三十餘年風月情。昨聞吾兮今哭汝。寄來春酒未全傾。

九月十三日夜中園村賞月

楓浦錦江秋既深。孤村月色夜沈沈。四郞畫虎五郞馬。此夕三郞誰共吟。

詩不必自苦吟中來者爲貴

令任蘭陵和拙韻見惠再和贈之

東遊相遇吳橋濱。分手幾年今耐親。失意看來還得意。烟霞宿好不羈人。

喫得自得響入宋朝亦不妨焉

答加藤生自東武見寄

身老家貧臥草萊。解嘲不就郤徘徊。縱使子雲識奇字。今日何人載酒來。

奉和東涯先生自洛見寄

半懷鄉國半懷洛。千里豐城嘆斗文。八月星槎西向去。攀君一欲度青雲。

此時已生有江戸○○所寄載附錄

送淺井生歸鄉

先雁東來先雁歸。客中把手贈言稀。秋深三徑欲多露。爲報平安扣竹扉。

月夜陪宴

玉樹露多月上初。水晶簾捲意何如。夜光盃冷君王醉。爲獻武昌比目魚。

暮歲小集得年字

江村吏隱本翩翩。一曲高歌白雪篇。相値壯心未全老。恨將霜鬢向新年。

送別

迢迢驛路思無窮。千里揚鞭雲霧重。伏櫪歌成堪送客。應憐老驥向東風。

乙卯初春

青氈華髮老風塵。夢裡偶然遊富春。椒酒一盃官情懶。烟霞深處欲○○。

辛丑九日

家姪沈痾欲小安。曾懷落帽有餘懽。金銀低發籬邊菊。稚女折來纖指寒。

歸來得問茱萸女、今日登高醉幾人、之意言、仍病患、不能登高、盖稚女慰病兒情態可愛

王昭君和人之韻

誤入畫中誤此名。那堪胡馬北風鳴。應憐歲歲春歸去。青塚長留報漢情。

乙丑春日

舊廬何處我將歸。芳草夢中知昨非。今日春光誰共賞。人間七十古來稀。

是歲先生古稀非客中作起句陶靖節行將休之意

秋憶逆旅友人

憐君行役苦衰年。遠到浪華千里船。十二日程餘幾驛。勞勞亭上月初圓。

哭女

一慟別娘如老何。窮途況復斷腸聲。那知花下春風詠。卻作雨中薤露歌。

有終綾部先生花王園集附錄

門人　三浦晉安鼎　輯

綾部道弘傳

伊藤東涯先生

綾部道弘者。豐後人也。其先出于丹州綾部。因爲氏焉。子孫徙豐後。臣于大友氏。大友氏既滅。祖可春。父道一。皆隱德不仕。道弘天資剛直。夙有至性。幼時嘗往叔父家。家人欺其稚弱。待不以禮。道弘冒夜潛逃。經曠野一里餘。歸于其家。父母大駭。異

其有膽志。時年八歲。自是慰撫最至。試授古文數百言。一過上口。誦不待復。父母歎其强記。鍾愛特甚。道一嘗竊歎曰。里無良師。家乏遊資。使千里名駒。長爲駑材。十七而喪母。日夜號呼。廬于墓左。躬畚沙石成墳。將冠。爲家貧就官于隣封。時時歸覲。有餘力。讀書習醫。每奉甘旨。以致終養。旣而艱苦困頓。東漂西泊。不寧居者有年矣。其兄久病。貧產告匱。至典田宅。道弘歸鄉。而筮仕木付鎭松平侯。分歲奉以贖還其田里逋稅。兄終而二子尚稚。道弘號哭。撫字以得成立。素敦親黨舊故。救難解紛。不辭其勞。不接非禮之色。不耳不正之聲。對長官直言不諱。衆始憚其嚴。而久信其恩。稱爲吾鄉伯夷。自處節儉。不喜華飾。偶有人遺彩服於其子。遂不許服。曰。先君貧素棄世。常恨養之不如志。吾亦辛勤多年。幸享俸資。暖養兒女。若之惠也。况人情易於奢。而難於儉。予非不愛兒也。不欲使習奢耳。又善相劍。偶有不知其良而貨之者。待之主主還之。不以私之。其操行大率類此。敎子以四書。小學及古文詩。未嘗習聲伎博局之事。居常熟玩易四書。晚年世事紛沓之間。未嘗廢卷。國家前代之迹。名臣義士之實。其所見聞。歷歷請悉。掩卷試問。一無差遺。其子安正祇役在東武。遺書曰。予生長蓬蒿。嘗嶮艱。心存聖猷。未償夙志。思再世必得遂其願。爲娶汝母。生二女。幸得汝生。而年已强仕。早覺衰羸。思不及見汝之成立。今汝知勤學。吾願足矣。汝孝亦大矣。夫道不外於人倫。勿馳空文。以遠日用。凡事無害於義者。須從時俗。勿妄違國禮也。親友覽書感涕。元祿癸卯之秋。得口疾。踰年殊劇。安正尚在武城。拘于職守。不得乞假。會其友伊東信益來東武。道弘寄語曰。予疾已劇。應與汝永訣。莫牽私情。而虧公義。若必歸省。必爲不孝子。論語者。古今之常經。不可不一日讀焉。嘗所寫往謙卦辭。汝亦須守之無違也。其佗無所言。是歲三月廿一日遂逝。享年六十六。時元祿十三年庚辰之歲也。

野史氏曰。人性剛直者。多傷于悻戾。且不肯爲

學。綾部復之翁。天資剛正。而能執謙信道。不亦難得之士乎。吾先人常尊信論語。以爲宇宙之至寶。又以謙爲要道。著在先訓。且戒子弟。不用心于凡百雜技。見翁之所志。相契者多矣。在存日得相面。其必爲知己。觀其事狀。還增悵恨。

良淑孺人小林氏傳　　伊藤東涯先生

小林氏。名七。豐後人也。後改大原氏。其先在攝州三田。仕于松平侯。侯移封于豐後高田。後徙木付。遂爲木付人。父曰政次。孺人性資溫純。處己寡默。素爲父兄所憐愛。既笄喪父。哀毀過禮。鞠于伯兄三友。三友好學讀書。故孺人亦稍通詩文。曉義理。同寮綾部道弘。剛正有行。素好學。與三友相善。因以孺人室于道弘。既而母氏愛念。寄于道弘家。孺人溫凊甘旨。晨昏不怠。宗家時匱。道弘賑給盡力。孺人亦屢招遺孤。或給衣糧。不復吝嗇。良人嘗有二寓客。待遇數年。遂無倦色。客服其恩。其後連遭喪禍。二女亦殤。哀慟感疾。遂成積塊。歲四十八。携小女。詣于伊勢太神宮。是冬感中風。自是左癱不遂。其子安正。日待膝下。口讀經史。二女子亦在側。誦古詩文。及國事小說。以娛之。有客來談。則論說移日。花月之辰。招雅士賦詩。安正爲同志所招。歸或及夜深。必問其所談。及有詩否。子弟偶有賦詩者。必就孺人吟弄。其耽文也如此。天性雅潔。植花移石。不喜籠養禽鳥。指其馴集樹間者。曰此吾籠中之物也。一日隣家遺火。延及其家。安正狼狽救免。盡亡其家什。孺人聞之。不復問資財之在亡。曰。是成吾兒之孝矣。一日婢誤薦熱湯。殆爛指頭。孺人尚持其器而呼婢。小女方梳而遽往取之。叱婢之不謹。且謂孺人何不急投之。孺人笑曰。此何心哉。不復爲問。其寛柔如此。雖久在病。精爽不亂。恬靜無爲。未嘗爲欲死厭生之言。正德元年辛卯。七月十日。疾作而終。享年六十三。臨終不復言談。不稱佛號。平生未嘗問三世之事。人無復知其意如何者云。

野史氏曰。大抵婦人之性。柔暗而躁。故處親眷之間。多致紛戾。良淑孺人小林氏。事母而孝。從

夫而順。敎子而有方。待親黨、接家人、莫不各當其道。敦尙典籍。而不信奇袤。不惟其家風之有素。而誠天稟之有超于人。宜託彤史。以爲內範。

正德壬辰之夏。豐州木付鎭官、綾部伯章甫。介人來訪。時時論文談經、服其雅度云。其先考妣皆好學。爲人所宗。出其所草行狀二通。示予請作小傳。閱其狀。處于僻遠之地。嗜學力行。不易得矣。聞伯章甫、在其鄕、而服膺先馴。講明聖學。其土人士、服化者多矣。色養幾年。既沒欲托其事于簡策。其志不亦美乎。不辭不文。爲傳其大較云。時九月三日也。

按此文紹述文集。作移封于豐前高田後從豐後。今就實改之

復之綾部君墓誌銘

考德論行。窮觀士君子之所繇成。莫不推本其家之敎矣。夫父兄之於子弟。非必禁令督責之嚴也。然躬行之化。觀感之美。自其齠齒結髮、至于壯歲。固漸漬德行。被服儀刑、不遷於異物、習性若天賦。故服膺義禮、學惟恐失、涵育於蒙養正。則聖麗澤於造次必敎也。頃綾部伯章來訪。一再相見而知誠實好學。拔乎流俗。而後携來父母行實二冊。乞予銘墓。閱了眞知斯人得于家敎。家敎不亦大乎。姓源氏綾部。諱道弘。字佐兵衛。別號復之。其先出于丹之綾部。遂以命氏。後移豐之後州。事大友家。家祖可春老而出家。鄕有金剛山報恩寺。以爲中興祖師。其子諱道一。字才藏。復之其弟三子。母山下氏。甫八歲。訪叔父。而怒僕隸無禮待。不辭而夜中獨歸。路十里餘。皆山野無人地。父母大驚。喜其有勇。性甚强記。授文章數百字。一遍而記。最鍾愛焉。曰。吾家千里駒也。奈窮僻無良師。年十七。丁母憂。哭泣悲哀。躬運沙石。以築墳墓。人嘆其孝。年十九家貧故事隣邦侯家。路二百里。每休暇。必定省。自給廉薄。常薦甘旨。求師學經。兼讀醫書。年二十六。丁父憂。哀毀骨立。辭仕遊于東西。兄佐右衛門羅病。不能勤業。故歸鄕。年三十二。事木付侯。分秩半贍兄稅。年三十四。娶大原氏女。木付有大原武

右衞門諱三友。（後冒小池氏）温和詳雅。篤好聖學。素與君友。講究聖經。及爲同寮。以妹妻之。年三十六。兄卒。二子尙幼。君甚痛哭撫育。君患疫疾。不知人者數日。延醫村井玄察診脉。察曰。竹扉茅屋。諸葛之廬也。君曰。唯恥諸葛之德耳。察曰。有豪氣可治矣。服藥月餘而復矣。察感前言。爲交異佗。與講醫書。元祿丙子。伯章勤于東武。受學於方叔先生。戊寅秋。君寄書於伯章曰。余生于窮僻。長於艱險。學志不遂。欲得嗣成志。而先產二女。呼天爲嘆。生汝時過四十。質本蒲柳。偏恐不及汝學。而今汝仕優志學。余願足矣。實是孝子。蓋聖人之道。人倫而已矣。能明乎人倫。則學之正也。徒馳空文。而無益實用。非學之正也。凡事不害於義。則宜從國俗。苟異流輩者。非聖學之旨。己卯秋。咽喉生瘡。踰歲彌急。伯章從侯在武江。庚辰侯邸火。且有護法事之官命。難乞歸省。君之執伊東某。來于東武。傳語伯章曰。余疾急矣。應其永訣。前年汝母疾。優命使歸侍。方今多事。不宜乞暇。汝惟不懈學。則爲孝。於余足矣。

何效兒女環侍之態乎。蓋論語一部。聖門之全經。不可以一日不讀焉。遺言竭此。須戒愼焉。女豐與書伯章。勸歸侍。引陳情表。反覆懇切。三月廿一日。君卒。年六十六。伯章不得奔喪。親朋相助。葬于城西中原。此秋伯章歸鄉。封墳墓。君忠誠事侯。侯屢增祿秩進職事。而君好恤孤賑貧。救厄扶急。故親戚朋舊。以至賤夌僕從。莫不感恩以念爲其用。禔身有法。未嘗見非禮之貌。非義之言。待人有禮。全由謙讓早遜之趣。而未有憍慢夸毗之態。然見尊貴及宰臣。鯁直敢言。無所畏避。而無少諂諛之言。故不容于時。人雖憚其嚴厲。而後服其誠篤。人稱吾鄉伯夷云。常尙節儉。或贈華衣於伯章。（于時八九歲）命不使服焉。外姑曰。之子幼少。而人之所贈。何以奢靡焉。君曰。先考窮困而終。歲月日夜。不忘于懷。故不忍美衣食。而人情易奢靡。處儉難。余愛兒至矣。故不欲少習奢靡耳。常好閱刀劒。察利鈍。偶買一劒。後良工磨之。其價數十倍。欲訪舊主而還之而不得。獻社以爲神寶。其廉大抵如此。伯章幼授

四書。小學句讀並講其義、嘗曰。躬行莫若謙德。因書謙卦象辭、以與伯章、生平嗜書。客旅之日。必携四子、雖世事紛冗。未嘗廢誦讀、就中本國治亂盛衰、古今忠臣義士、歴歴強記。無少遺漏。一男六女。二女夭。詳于孺人誌銘曰。

君生退陬、時不知學。獨自興起、志何其倬、不依師友、眞是豪傑、宜矣令嗣、也不改轍、

正德壬辰九月五日北郡可昌謹識

孺人小林氏墓誌銘

周家之治。基於大姒、孟子之學、胎於三遷、其關關之德。觀感之美、皆是婦人柔順貞淑之所爲、卒之其功滿乎四海。被于萬世、則豈謂閨閤者流、其職在中饋女紅、其勤非問學文字乎、孺人之力養成伯章之學、則伯章之所教化、豈可復限量乎、

孺人小林氏、(後爲大原氏)諱七娘。其父諱政次。字佐左衛門。娶小池氏之女、生三男一女。女即孺人。其先攝之三田人、未付侯。自三田移豐前、再移豐後、時佐左衛門從來、孺人爲人、溫順寡默。年十七。丁父憂。悲哀踰禮、殆生疾病、兄武右衛門、(諱三友有故冒母氏)好學能書。素與復之君善。故嫁。時年十九、生一男(號伯章)六女。母小池氏、甚愛孺人、來共同居、定省竭力。復之君。兄卒、二子猶幼。家又貧窮。孺人恤孤賑給陸續不吝于復之君、嘗有二客。寓託數歳、禮待加厚。始終如一、二客感恩懷德。如奉慈母、以至于死、年二十六。哭兄、年三十九、丁母憂、哀毀骨立、此冬喪女、連遭凶變。生積聚病、百方治療、略得痊矣、年四十八、冬發中風。左半身不遂、時伯章官於武城。翌年賜暇歸省、留僅旬半。又赴武城、父母戒之曰、汝弱食祿、近有増秩進職之恩、方今官事繁冗、命暇歸侍、浩恩莫大焉、自今竭力、莫以父母爲眞吾之孝子。庚辰三月、哭復之君、伯章又在武城、不得歸省、其秋歸家。家居月餘、赴于武城、孺人兄(新兵衛忠和爲森本氏後)共是友愛、宅亦隣並、有珍饌佳菓、則不分無食與嫂最睦。家事大小、聚謀而成、半日不見、互來起居。故伯章託孺人。壬午秋、賜暇歸家、孺人迎喜、稱二女貞順。侍婢勞勤曰。三年以降、杜門絕客。雖親朋就兄家而起居、偏恐二女羸瘦生疾、侍婢不

堪辛苦。幸見開門迎客。一家團圝。戊子冬。西隣失火。延燒屋宇。伯章共左右擁孺人去。財寶什器。掃地矣。親戚友朋來吊。而嘆美扶孺人而無餘儲。伯章恐孺人聞以爲憂。使人人弗爲此言。然孺人聞之曰。吾兒之志也。何以什器爲。談笑自若。不少挾于懷。及搆堂室。裁衣服。造什器。未嘗問財之所費。一日乞湯。婢謬進熱湯。殆爛手指。而猶持碗呼。婢女被髮來助。曰。蓋投碗乎。孺人笑曰。此何言耶。此何言耶。終不責婢。其寛柔大槩如此。己丑冬。浴湯畢。昏睡三日。旬餘稍復。然左聽右忘。夕不記且。而古語詩歌。諳記不忘。正德改元。七月七日。痰塞飲食不下。越十日卒。年六十三。葬于城西中原。復之君墓左。

伯章爲人孝弟。歲月日夜。侍于膝下。或抵親戚。或遊山水。相與扶助隨與從行。未嘗須臾離。孺人性喜父字。病牀。常使伯章講經。或使二女讀詩文及歷史等。從容無倦。有客來講書。則移牀以聽。毎雪花風月。使伯章招風雅友而賦詩。伯章行同志會遊。則深更不寢。待還而問有詩否。騷人寄來佳什。小子吟詠詩賦。則先呈孺人。若有奇句逸趣。乃與伯章評之。愛花而培植。移石而成趣。且喜禽鳥之遊于庭樹。曰。此我樊籠也。去來亦任意。飲啄不煩人。禽鳥之樂。亦是吾人之樂。醫田中陽軒。療孺人多年。曰。老人臥疾。辭藥而期死。衣食奉養。不求所欲。子婦陪侍。屢謝勞苦。此世俗之情。避諱之言。使爲孝子者。反苦心慮。其害不少。孺人病十餘年。未嘗有此等言色。疾固歲久。而元氣不絶者。安心靜慮之功。非藥餌醫療之力。偉哉斯人。伯章孝心。逆思若有遠使之命。命嚴無隱。然不忍離病。當致仕而侍養。告于孺人。曰。一家生全。皆是主恩。恩固不可忘。而去就須決于懷矣。莫以浮沈爲念。不敢強留。而竟不乞。蓋甘榮耽位。辨髦其親者。伯章之罪人也。長女嫁復之君。姪安孝。以亡兄之志。寡嫂之乞。次嫁安松純眞。次嫁清末貞與。季兄森本氏養以爲子。妻男重義。銘曰

有行爲本。有文爲華。佐夫睦戚。敎子克家。嗟咨孺

人孰與爲儔。一片銘石。千載碩休。

正德壬辰九月初五比郁可昌謹識

送綾部進平歸杵築序

綾部進平氏。豐州杵築人也。杵築去東都三千里。阻絕海陸。最爲僻遠。自正保中。故市正君。分銅竹。來臨茲土。僅僅以蕞爾之邑。居窮微之表。而其治下士皆好學。彬彬有君子風。雖刺君三世底績之使然。亦進平氏與有力焉。先是杵築醫士工藤生。爲余說。進平氏首唱小學之敎於本藩。凡子弟有志於學者。攝齊挾策。接踵於門。日成聚。進平氏敎之以倫理爲先。與人子語。言孝。與人臣語。言忠。殆若嚴君平生彥方之於鄕人。余聞爲之聳然。會是歲春。杵築侯執玉帛。覲東都。進平氏從侯。留數月。因工藤生紹介。見余於駿臺之廬。相對欵語津津。更僕移晷。不休。有如數十年舊識。他日又惠然肯來。與余嘆吾道之衰替。以爲今學校既廢。世道之責。降在儒家者流。宜講聖賢之書。明人倫之敎。爲務。實爲吾輩之任。嗚呼眞知言哉。吾於進平氏之學。雖未知其測源所漸。然以其所見論之。亦可謂能得吾心之所同者矣。今廼知工藤生之言。不吾欺也。但嗟相見日淺。忽言乖離。不得與之上下其議論。啓關鍵。開窻牖。階高明而上達。會群言於一觀。是爲可恨耳。於其行。餞言以代驪駒之歌。

享保甲辰秋九月十五日鳩巢老人室直淸書

伯章綾部君閣下　北郁可昌　稱伊兵衛

昨辱手敎。幷惠刻蘇及錫餉。感荷感荷。然鈞翰之褒。浮實之譽。開緘辟易。汗背赬顏而已。夫聖人之敎。必務本而後末。務本者。莫先於孝。人而能孝。則事君必忠。居官必廉。臨難必死。百行從此而立。衆善從此而進。聖學從此而成。其至也感天地。應于神明。賢弟思欲用力於孝。則聖學之務。已過半矣。蓋天地神明。猶尙感應。余雖無似。白頭於聖業。凝眼於儒敎。不可以無感於此。況先君及儒人。行實不可以無誌。故無顧不文。應賢弟求耳。歸裝不日。離懷無涯。世事紛冗。不暇作長箋。無塞贈言之責。萬萬昭亮。

呈綾部契夫梧右　水足安直（稱半助肥後侯儒臣）

足下去歲之秋遊諸名山。而過于弊府。意外遇蒙來問。班荊悤悤之中。有倡有和。而殆將尋竹馬之盟。然乍逢乍別。不能竭一日之餘歡。可以喜焉。可以恨焉。爾後不一書以謝之。疎懶因循。迄于今。惟祈寬恕。足下動止佳勝也否。不佞無恙。豚兒亦依舊。從事佔畢。請莫煩清慮。同僚熊谷生。今夏從寡君而歸。聞足下往日之過訪。驚感說項不已。顧別來忽然一暮。恍惚如夢中之事。不堪追感。聊裁尺素以候。鄙詩二首錄呈。少寓遠懷耳。幸賜一瞥。辰下露結爲霜。若時自重。臨書無任瞻依。不悉頓首

書綾部氏祭妹文後　東涯先生

易之取象。陽爲善。爲明。爲男子。爲君子。陰爲惡。爲暗。爲小人。爲婦人。故陰之爲德。雖或柔順可取。而多失于躁。鮮克有立。自古中饋之德。能列史冊者無幾。吁亦難矣哉。豐州　氏婦。綾部氏貞靜之性。本乎天賦。幼而無違。長而有識。天不永其年。竟斃于疾。不亦可惜乎。伯兄絅齋氏。爲文祭之。狀其平生。寄示于予。嗚呼始終惟一。其閫儀之無缺乎。不可以不傳。爲題其後云。　享保己亥之歲

題家庭指南後

嘗聞豐州杵築。有綾部伯章。能事父母。郡人皆稱焉。妻及姉妹。順而則之。子姪皆蘭質也。仕故豐牧。以其實學厚遇焉。交友之道。自證其有信。是家嚴之教。亦居多云。其同僚淺井氏所說也。余一自省。一仰慕。第恨不得其人。而與其道已及十餘年。今茲甲辰之春。從杵築侯。東市正。來東都。僕亦從寡君。邂逅于寮舍。其人篤厚破觚。眞吾黨奇士也。工夫著實。議論直截。與余平日所見。如水投水。未見不同。其邸亦纔隔橋耳。故得頻頻相會。會則未始不移晷而忘歸。七夕和其詩。曰。相逢不許年年渡。秋入人間烏鵲橋。一會而先慮其離。交情所不能已也。綾子示所編家庭指南。曰。我道敎愚夫愚婦。猶醫療小兒之病。爲至難矣。凡窮土僻壤。鄕無學校。伍乏善人。仁義性命之談。未嘗夢見者也。斯書之作。敎之以五倫之目。由無人而不有也。勵之以

人之有親義別叙信。所以大異於禽獸。由近而易入也。要其歸。則以凡天下、治亂興廢、賞罰得失、不出乎此五者。非如異端之說、離之自私、似是而非也、庶乎愛物之志有在、余撫掌嘆曰。有是哉、孟軻氏曰。言近而指遠。守約而施博。詩曰弗躬弗親、庶民弗信。斯作也決知信而施博也、如彼者儒先生。白首紛然。拘拘于詞賦章句之末、未聞以明倫覺斯民。當今之時。實晦暝日月也、今講官室鳩巢公。一讀其書。亦賞其說不異公所見、爲說贐之、僕不敢贅焉。凡其人雖亡。其書存焉、謂之不朽、其人行。而其書傳。謂之不索居。亦可也、人間光景顏色將衰、且白安知幾歲之後。不復相遇相問其名乎、唯其書儼伯章也。至其德敎。余亦將載半而歸家。以是告別。

享保甲辰九月竹堂熊谷直平書于東都邸舍

按此文雖題家庭指南後、亦是送先生序之意。是以姑去彼就此也。熊谷竹堂者肥後侯之儒臣

先府君有終先生行狀

先府君、諱安正、字惟木、初字進平、別號綱齋、又曰伯章、姓綾部、本出自源、其先住丹之綾部、遂以爲氏。後移豐後、臣于大友氏、大友氏既滅、子孫離散、曾祖可春、字市松。妣某氏、家于國東郡武藏鄕、麻田可春老而出家。居金剛菴。鄕有報恩寺、先是罹兵火。可春再興。故以爲中興祖、道一字才藏、妣山下氏、遷隣邑重藤、隱居不仕、考復之府君、諱道弘。字佐兵衞、妣良淑孺人、小林氏、生一男六女、男卽先府君也。復之府君始仕于杵築城主我先侯瑞龍公。延寶四年丙辰正月二十七日、先生生于杵築、自幼志氣異人、甫八九歲、考府君親授句讀、求師學書。比及十四五歲、講授四書及朱子小學、性素好文字、强記過人、如尋常之話、古語姓名、人試重問之、無所不記。元祿五年壬申、年十七從考遊東都。明年還歸、愈勉愈習。日夜無倦、夜輒秉燭五更而休。七年甲戌、年十九、始受秩、八年乙亥、適東、數月而還、明年丙子又東、留七年。師方叔先生官

事多劇。方夜繙書。服苦盟氷。以便不睡。考府君贈書。曰。予生長蓬蒿。備嘗艱阻。未遂夙志。意再世必成之。娶汝母。先產二女。及于汝。生而年已過強仕。早覺衰羸。恨不及見汝學。而今汝勤學。吾願足矣。喜而不寐。實吾孝子也。夫道明人倫而已。勿徒馳空文。以失日用。凡事無害於義者。宜從時俗。勿妄違國禮也。衆感嘆。十一年戊寅。增秩爲史。是歲以妣孺人病危篤。賜恩歸省。留僅旬餘。又東。考妣餞曰。汝自幼食祿。近有增秩。命賜歸侍。恩莫大焉。以往竭力。勿以父母爲。十三年庚辰。聞考府君之病。時侯邸火。且有護法事之官命。不得乞歸省。友人東。致府君之語。曰。予疾益劇。當與汝永訣。勿有以私情虧公義。論語。聖門之全經。不可以一日不讀焉。嘗所寫往之謙卦。亦宜守之。其佗無遺言。無幾計到。是歲令襲先祿。九月乞而歸省。不日而東。十五年壬午。賜還明年癸未召而東。從駕而還。寶永元年庚申。從于靈覺公之東。到攝大坂。賜還。正德元年辛卯。丁內艱。葬祭以禮。喪考妣。皆心喪三年

如不除服者云。先是學業漸進。友生來學。孺人之在疾也。奉養殊謹。寶永中。將有遠使命。先生以爲命嚴不可辭。看疾不忍離。當先致仕而侍養。而未乞。一日隣家失火。延及于家。先生在側救免。家什盡亡。憂。孺人聞之。使家人秘弗爲言。孺人亦不問。曰以成其孝也。孺人雅而有文。先生常侍側。讀書賦詩。偶往同志之所。必懷草齋甘旨。孺人亦不寐而待歸。其侍艱和歡。大概如此。鄉黨稱孝云。龍溪公。好學尊賢。初先生侍講大學章句。自是而後侍讀侍講。無日不進見。二年壬辰。公東。舟行百三十里從到大坂。請過京師。見東涯篤所二先生。及其徒數輩。日講問經義。論難學術。且出所草考妣行狀二卷。正之。就以乞文。東涯先生曰。色養數年。既沒。欲託其事于簡策。其志不亦善乎。篤所先生曰。思欲用力於孝。則聖學之務。已過半矣。蓋天地神明。猶尚感應。余雖無似。白頭於聖冊。凝眼於儒教。不可以無感於此。於是小傳成于伊藤氏。墓誌成于北郡氏。留三月餘而還。時年三十七。以公好學。

恩寵甚崇、常得盡其心。公之好學也、篤信實體。專務躬行。故德業益盛。封內大化。五年乙未。八月十日公即世、於是乎失遇、先生譔公行狀一篇、東涯先生。爲之跋、心源公嗣立。享保九年甲辰。從東。見鳩巢南郭竹堂春叟諸先生。交誼皆切、春叟考府君之執也。公弟臨皐君。好學、侍講孟子、數月而還。明年己巳。賜俸十五口。列騎士、侍講論語、及范氏唐鑑。朱子小學。十四年己酉。年五十四。增秩監郡。數有直言、多見納用。十六年辛亥、賜采地百石、俸三口。明年壬子、海西大凶饑。士無生稼、先生在職勞苦。志乖於時、明年癸丑。以不能世事、遂辭職、復始。以故明年甲寅、賜俸十二口。代采地。時年五十九。事詳反求錄、元文三年戊午。世子幼、有侍讀命。欲辭不能。四年己未。公即世。世子嗣立。是爲今公。復有侍講命、不得已而就職。寬保中。妥胤官遊東都。賦五絕五首戒曰。梅雨晴來好、餞筵分手遲。前程幾千里。愼莫迷多岐、仕途戒多口。多口爲禍府。縱逢作賦才、愼莫及鸚鵡。勝地多春色、冶遊日易斜。武溪雲霧裡、愼莫問桃花、一步期千里、青雲壯士心。流年人易老、愼莫擲分陰、先子有遺訓、孜孜念謙光、名都風俗美、愼莫習疎狂、延享二年乙丑。先生年七十。告老致仕、春秋五年、靜居樂道甫壯也、崇信聖學。浸心經典。日旰忘食。夜分不寢孜孜勉勵、每有講授、必以論語及諸經、不騖虛遠。不拘末說、要欲使聞者、知聖學之務、不外倫理生平所言論、與人子語。言孝、與人臣語、言忠。切磋懇至。不爲屈撓。不知文學者。亦就得聞道、雖沈思專精博覽書傳。閒閱百家書、而不好爲之說、 本朝儒術漸轉、稱孔孟已後一人者頻出、而往往詆譏程朱之緒業。其書交出。其徒爭說。人或問其得失。先生不對。及數乃曰。方今文學盛興、才子比出。言古學古文者過半矣。非不美、非不盛、顧是誰力與。下有程朱二先生者、出而闢之門、天下孰獲見其閫奧乎、當時爲業也、其書若干。其言巨萬、不保無一差失、縱令有差失。口不欲言。吾師二先生、如彼諸子學。非吾願也。又問曰。無益識者、而有損初學。又問。

曰。人各有志、從其所安而已、竟不肯說。既而歎曰。自學校之政不興、先王之教、降在儒家者流、其學焉者。論道講書、多走岐路、世人以爲。學問。儒者之業也、仁義學者之道也、知之可也、不知亦可也、甚焉則視學者、非曾四民、視浮屠。猶與外國之人立言論。意趣始不相關者。此固無教之所致。而其責半于學者。正德中。遂著家庭指南。一卷。縷縷千有餘言。專明親義別叙信之實。投刺來學者數百人。厚尚倫理。善辨義利者十數輩。生平製作。必請東涯南郭二先生正之。且好賦和歌。師京師風竹亭自嘯翁。寬保中。翁遺書曰。汝所學熟。自今而後。初學所賦。汝宜正之。先生固辭。又令人致意。先生曰。翁愛念之功。於是乎過矣。予每値風月。偶亦賦以述情遣興。未全務功緻。况於他人事乎。竟不應。又不以語人。性謙恭有威。剛直有德。不視非禮色。不聽非禮聲。食不貳味。衣不服美。進退崇禮。家政主儉。有窮乏者。必分賑之。濟人艱難。成人壯志。人有蒙其澤。凡三十餘家。少壯相遇者。無思不服。晩年家貧。居之怡然。近歲漸覺衰羸。而未嘗手不執卷。體勞則令兒輩誦之。近妥胤等。會三兩輩講論語左氏傳。講則先生移床而聽。卒之前日。妥胤侍坐。曰。汝等壯歲宜勉之。予老不能見汝等之成。徐幹中論曰。君子不憂年之將衰。而恤志之有倦。此二句嘗題於座右。是予之志也。指壁莞爾。其尚德大概如此。歷仕四世。侍講三世。有榮有辱。前後實五十年。所著家庭指南。反求錄。文集。詩集。和歌集。凡八篇。娶高橋氏。男四人。妥胤。妥三。妥廣。妥章。女二人。長適佐藤氏。次適高橋氏。長女次男先逝。寛延三年庚午。九月十九日。年七十五。而卒于家。無疾如睡。越二十一日。葬于速見郡。中原山中。先塋之次。封墳崇四尺。私謚曰有終先生。後以二十日。爲忌日。門生十餘輩。奔事助費。四年辛未。六月庚辰。

男妥胤謹狀。

有終綾部君碣銘

綾部之先。爲丹波綾部人。因氏焉。幾世孫徒豐後。仕大友氏。今失其名。大友氏之滅也。可春稱市松

者。行遯居於國東郡麻田邑。老而學佛。遂薙髮爲僧。邑舊有報恩寺。兵起寺燬。再營以居。於公爲曾祖。祖諱道一。稱才藏。徙居重藤邑。配山下氏。考諱道弘。稱佐兵衞。仕于杵築侯。蓋自考始矣。娶小林氏。生公與六女子。子公諱安正。字惟木。一字伯章。稱進平。別號綱齋。幼穎慧。受書於其父。强記過人。夙著名。故府命特給月俸。以奬異之。後觀光京師。遊于時之宿儒。北村篤所。及予伯兄東涯之門。日講經訂史。其從節適東都也。見室鳩巢。服南郭二先生。以京師授。故其學日殖。譽望隆隆起。眷遇優渥。以署其郡案職。擧民悅。其事上。有犯无隱。或在傍說書。開導居多。歷事四主。齒迨七十。遂致仕。然老益壯。手不釋卷。貧益適。樂道融融如也。常云。司徒之敎。降在師儒。然世以爲。是或一道也。其視猶瞿曇之徒。此道之所以不明不行也。遂著家庭指南一卷。專明民五敎。其與人言。必以敦倫睦族。恭敬忠信。至孝性成。其喪考妣。俱心喪三年。恭儉而剛直。持家有法。奉身淡薄不妄費。而僕隷欣欣如也。視人之窮乏。不振者輙爲賙恤。不少吝焉。寛延三年庚午。九月十九日。無病而終。距生時延寶四年丙辰。正月廿七日。凡得壽七十五。葬于速見郡。中原山。先塋之次。子弟私謚曰。有終先生。娶高橋氏。擧子。男四人。安胤。安二。安廣。道彰。安三。先死。女二人。長適佐藤某。先死。次適高橋某。所著反求錄。文集。和歌集。各若干卷。藏于家。予今玆居東。安廣以與予家有舊。持其行狀。幷兄書來。丐銘其墓。系以辭曰。

攸好德。永孝思。學古訓。敦書詩。爾之敎。人胥師。

豐山兮。不崩虧。萬斯年。安于斯。

寶曆二年歲次壬申春二月平安長堅譔

祭有終先生文　　工藤安世（號丈菴仙臺侯醫官）

維寛延三年歲次庚午。十二月日。矯宇藤安世。謹以淸酌庶羞之奠。遙告有終先生綾君之靈。曰。嗚呼遭時之不遂。山頹梁壞。千里聞訃。不勝驚怛。余幼在豐州夙遊先生之門。先生視吾猶子。口授而命。親炙芳型。負笈有年。而余及弱冠。慈父見背。因

歸于東都。而東西隔絕。其後先生會來于東都。握手唉語。又已敘別。垂三十年。不得會面。如參與商。遂至永訣。寧不肝腸寸裂乎。嗚呼先生之學。博古該今。不事文飾。本于實踐。其積於中者。洪如江河之停畜。其發於外者。爛如日星之光輝。一國敬慕。學者雲集。先生誨而不倦。開口說五倫之道。鄕里沐化。翕然嚮風。積累之久。行著于事。才著于用。補贊國政。將大有爲之。有故宦途蹉跌。先生不以介懷。退而修德力行。至晚而不衰。此固世之所難。而未足以議先生之彷彿也。其積德重望。不暇瑣錄于茲。嗚呼余於先生。義重恩深。今也欲往執紼。而千里行程。不能會其喪。情何可極。哭泣馳辭。具茲醪羞。嗚呼哀哉。尙饗。

詩

邦君龍溪公所賜三首

孟子講了

公餘孳孳對陳編。講習三年愧古賢。雲霧晴來江海畔。文花先發太平天。

和綾部安正有感韻

爲掃書窗案上埃。鶯花非樂別求媒。藝園日日傳心術。新柳風添生意來。

留別

滄海雲晴水色賒。東行千里向天涯。藝園分手思無盡。回顧西江一樹花。

鳩巢先生

和綾部君忠韻

余講書于高倉學館。君一日來會其席。次故第六句及此

家在城東俯碧流。戶庭蕭瑟候蟲秋。百年舊學逢青眼。千里新交愧白頭。預想河梁分袂別。豈忘館下抱經遊。慇懃爲謝瓊瑤贈。不惜闇中明月投。

東涯先生

訓謝綱齋丈自豐見寄韻

千里波濤險。無緣追釣船。曾思遊輦下。幾度沂晴川。自愧雕蟲技。徒增犬馬年。欣然　覿面。舒卷誦清篇。

綱齋文。春仲東行之次。自大津見寄一絶。次韻別裁一詩。以代面晤

千里西來千里去。人情世故巧相違。歸驪到日秋風裏。剪燭何時綺席依。

潭府周旋知健在。城中誰與講斯文。華京比日困炎熱。移榻松陰一簇雲。

南郭先生

豐州綾部君東也。有詩見投。余病不能和。今年唯山生。從其君東。乃致語戀戀。誼同故人。山生西歸。託此奉寄。

別來西望素秋通。有客遙傳萬里風。臺起圭恩延郭隗。學成邑俗化文翁。豐城古劍搖龍氣。滄海明珠開蚌中。歲歲朝宗青翰上。幾時復侍鄂君東。

豐州山生至得綾部君見寄作賦答

東朝侯服客。西信友生詩。徒致相求切。何由再會期。天涯依落日。海外少來時。幸對山濤飲。未勞交絶疑。

篤所先生

次韻綾部賢弟見寄

千里何緣通一辭。隔年契濶覩梅枝。贈言綣繾無佗事。須愛芸窗春日遲。

綾部賢弟以詩見寄用韻答謝

曾識塵間富貴浮。彩毫叢裏蘊風流。聖門猛省無佗事。只作終身君子憂。

春叟先生 富逸郎田省吾

老夫潛隱十年還淺草舊棲此日遇故人綾綱齋翁於任克甫之舍因綴一絶求和

去鄉十歲釣江濱。五月風烟長可親。何料故園三徑草。蕭蕭忽著舊時人。

遙贈海西綾綱齋詞宗

幽僻寄簞瓢。長年忘送邀。一烟耽耽三徑草蕭蕭。寤寐耽丘壑。交遊避市朝。頻懷風雅友。因報老漁樵。

桂山先生 桂山義樹稱三郎左衛門

答綾綱齋見貽送其西上。

仙侶原棲海外洲。愛看河漢隔衣流。牛氈未暖人先去。一舸無風夢更浮。橋柚烟疎沙岸夕。梧桐月落驛門秋。飛鴻別後迢迢度。不惜新詩供臥遊。

竹堂先生

和七夕韻答綱齋見寄

曾怪風雲路自遙。情多文字動盈綃。相逢不許年年度。秋入人間烏鵲橋。按此時肥後侯邸與杵築侯之邸僅隔一橋

奉和綾伯章先被寄韻

豐城休問劍。經理自精神。白髮三年別。青山千里春。長橋君不見。近市客皆新。數有瓊瑤贈。何堪報故人。

奉和綾伯章賢契見贈

千里開封字字新。可憐官路共甞辛。生還鄉國直何意。白髮蒼顏復遇春。

牛山先生香月啓益

走奉和伯章老儒辱示韻

文字十年盟自舊。昨遊洛北今西隈。伯牙琴得善聽鼓。彭澤菊從到處栽。二酉洞中思老拙。六醫堂下媿仙才。窗前不拂葱葱草。愉悅遠方朋亦來。

走和綾部儒伯之辱示韻

文盟幾載兩心知。喜見故人有此兒。家學出藍還卓犖。斯文今日又何衰。

藍洲先生士伯曄

答綾部君見寄

一篇白雪映人來。唱罷綈絕情轉催。假使雙龍竟難遇。請看紫氣斗間開。

孤高東望小芙蓉。此地相思歲月重。赤馬關前多過客。留君何日伴猶龍。自註曰豐後州由布山或號筑紫富士

交情甞署翟公門。意氣平生無感恩。對汝一彈流水曲。此心不爲世人言。

水足屏山安直稱半助博泉其子

綾部契丈遠自杵築來訪賜一絕卒次其韻

奉謝

邂逅故人問我居。神交千里豈期書。海邦從本脉相接。鯉雁勿言風月疎。

水足博泉遇豐州綾部君

秋風吹海島、人步白雲天、匹馬寒山小、一杯片月鮮、采萍嘆邂逅、舉手謝聯翩、相顧視長劍、乾坤亦悅然、聖壽山道本禪寺 清人在長崎

次韻奉和綾部安正居士。見寄崎陽諸公、再請政定

新詩迢遞寄崎陽、珍秘人同肘後方、氷雪神情凌朔漠、芝蘭氣味憶沅湘、多 錦段持相贈。豈有瓊瑤作報章。但使空山能一會、拾薪煮茗話深長。

茗南沈玉田 同

次寄崎陽諸公之作

融和風日羨春陽、脉脉神馳天一方、驥足不聞歸萬里、鷗盟還望渡三湘、遙知瀚海添遊屐。却喜崇山有報章。金蘭自信高千古、折柳亭邊寫恨長、

次韻答綱齋綾翁 是富逸之詩當入春叟先生下

一將野服換儒冠。十歲風霜不識寒、茶鼎烟馨懷陸羽、鱸魚膾鑿憶張翰、樓頭素月伴僧賞、湖上青山携姉看。忝孝洛浪探勝興。還家有客問哀歡

原祭

晋曰、此篇方輯先生之文、孫輔之什、獲之於遺稿篋中、不記姓名、既已不記姓名、未可以猝之爲出先生之手、既獲之於遺稿篋中、則不可爲是非先生之文、肆屏棄、數四玩索、其論與鄙衷協、於是置之於卷末、竢他日考證之成、

祭祀之理、古人所難言、故其言之不甚明晰。唯論語祭如在焉。復何用如爲、彼實不在焉。而我在之、故曰如。不在而在之。愛敬之道盡矣。戴記所稱、說有粹有駁、學者擇焉而不精、往往荒唐其說、而流於怪誕、余甚憫之、今撫其粹者、連綴成篇、欲以作如在註脚。然其言之不明晰、吾未如之何已。學者深察焉、庶或獲之。昔歲湯之山、有老猴病、下山而臥于巖側、人多往而觀者。衆猴抱菓而饋焉、嗽水而哺焉、弗食則環坐而啼、及其死也、益饋焉、積菓沒頭、捲樹葉而盛水、寘于其次。視其口、含菓五六枚、口呿而不合云、嗟乎猴其肖人乎哉、亦可以觀祭祀所由起矣、故曰祭出於人情之不可已者也。

祭者。所以追養繼孝也、是故孝子之事親也。有三

道焉。生則養。沒則喪。喪畢則祭。養則觀其順也。喪則觀其哀也。祭則觀其敬而時也。盡此三道者。孝子之行也。夫祭者非物自外至者也。自中出。生於心者也。心怵而奉之以禮。致其誠信與忠敬。明薦之而已矣。不求其爲。此孝子之心也。（以上祭統）孝子將祭祀。必有齊莊之心。以慮事。以具服物。以修宮室。以治百事。夫婦齊戒沐浴。奉承而進之洞洞乎。屬屬乎。如弗勝。如將失之。以其慌惚以與神明交。庶或饗之。孝子之志也。祭不欲數。數則煩。煩則不敬。祭不欲疏。疏則怠。怠則忘。是故君子合諸天道。春禘秋嘗。霜露既降。君子履之。必有悽愴之心。非其寒之謂也。春雨露既濡。君子履之。必有怵惕之心。如將見之。齊之日。思其居處。思其笑語。思其志意。思其所樂。思其所嗜。齊三日。乃見其所爲齊者。祭之日入室。僾然必有見乎其位。周還出戶。肅然必有聞乎其容聲。出戶而聽。愾然必有聞乎其歎息之聲。是故先王之孝也。色不忘乎目。聲不絕于耳。心志嗜欲。不忘乎心。致愛則存。致愨則著。著存不忘乎心。夫安得不敬乎。（以上祭義）人死斯惡之矣。無能也。斯倍之矣。是故制絞衾。設蔞翣。爲使人勿惡也。始死脯醢之奠。將行。遣而行之。既葬而食之。未有見其饗之者也。自上世以來。未之有舍也。爲使人勿倍也。之死而致死之。不仁而不可爲也。之死而致生之。不知而不可爲也。夫古之人胡爲而死其親乎。（以上檀弓）祭之宗廟。以鬼享之。徼幸復反也。（以上問喪）

詔祝於室。坐尸於堂。用牲於庭。升首於室。直祭祝于主。索祭祝于祊。不知神之所在。於彼於此乎。或諸遠人乎。祭于祊。尚曰求諸遠與。（以上郊特牲）唯祭祀之禮。主人自盡焉爾。豈知神之所饗。（以上檀弓）主人自盡其敬而已矣（以上郊特牲）

祭巒山三浦先生文　　脇　蘭室

于支月日、速見脇長之、恭以清酌之奠、敬祭巒山先生之靈、嗚呼先生、卓乎獨識、夙覺天地於條理、縱然健筆、以決振古之宿疑、洞觀宇宙之邈、究搜造化之秘、包羅錯綜、一物莫遺、三語十萬、立言大備、惟其精微、竅論太邃、門生學徒、或未克食其胾、矧一時耳傅面交、何得萬一於其旨、謷謷聱評、爲怪爲異、先生超然、不復介意、千載之下、俟乎有知己、有知己無知己、惟天之爲、世俗用舍、曷疚其志、此夫所以爲先生、我見其益可尙耳、長之不敏、於條理之說、固瞢焉莫之或知、唯生係同洲、自少聞先生德義之懿、中心欽慕、仰望無已、雖世途擾擾、不屢侍講帷、耳目所及、一二有識、嗚呼先生、履行淳正、其跡孔偉、惇重天倫、固秉民彝、淵博之學、謙冲自持、優游盤桓、高尙其事、鑿飮耕食、遠身富貴、又善誘人利物、愛惠周庇、不以赫赫而衒于世、不以憒憒而廢於己、鄕俗化德、薰陶同美、門人得栽、各自成器、編纂著作、皆可充翫著、夫我豐蘋文、寥乎無聞舊矣、先生斯生、突然崛起、煥煥炳炳、瞻文長詩、萃昧之際、一倡風靡、儼然主盟、四方奉規、長之執謁、歲年最邇、先生寵待、推與殊至、長之雖頑、豈不感知、嗚呼先生之跡、誰不墮淚、而予尤傷者、葢亦有以、我一爲天下、哭於失一偉人、二爲我豐、哭於斯文中墜、三爲己、哭於無復我知、其二也公情也、其一則私、若夫公也、猶可慰矣、唯其私情、不可諼已、嗚乎哀哉、尙神來饗、

讀贅語賦寄三浦修齡　　脇　蘭室

命駕度鹿嶺、投宿依桂川、欣語賀來生、展覽贅語扁、齎之還吾廬、跪讀殆廢眠、於戲洞僊子、識見何明淵、窮索造化原、論列始草玄、世俗如充耳、相顧徒哀然、更服鐵穿勞、終得玉振全、已博又已密、兀兀三十年、宜矣條理說、精竅眞無前、惜哉人長逝、遺籍未遠傳、寰區如彼大、寧無解談天、誰發藏山秘、因顯遯野賢、一向邑都布、將與日月懸、掩卷屢嘆息、悵望孖溪邊、殘雪埋行路、春鴻繫詩箋、恍疑携子手、探勝在林泉、情誼仍切切、筆翰轉翩翩、京

幾會客遊、龍鳳共周旋、深欽研鑽力、芳聲不恭先、斯文有斯男、濟美自聯綿、孝思重繼述、舊緒忍棄捐、所願謀不朽、鳩功勿遲延、

寄三浦修齡在京師　脇蘭室

一世良朋獨有君、何如頻歲嘆離群、身遊上國觀風壤、業屬千秋究典墳、楊外殘花春寂寂、枕頭幽夢夜紛紛、桂叢無恙棲遲處、幾日歸來就白雲、

梅園先生肖像之贊　帆足萬里

峨眉之山、高峰軼雲、降生先生、英儁超群、洞窺天地、殫極鬼神、條理之說、數十萬言、闡發幽賾、以覺斯民、屢辭聘命、抗志守玄、遺像肅然、想見其人、

戊辰二月　帆足萬里拜贊

本邦大儒　同

本邦儒者、如惺窩羅山、眞有功勳斯文、事屬草創、始踏之、楨軒藤樹白石徂徠仁齋東涯、所長各異、皆可稱大儒、如吾邦洞仙先生、亦可參此流、其他雖有設博之學卓異之行、抑亦可以爲次耳、

巒溪　同

巒溪東下直如繩、富永絲長呼欲應、洞仙逝後英靈盡、喬木何邊下馬陵、富永洞仙先生所居、絲長亦村名、

圖翼引　矢野雖愚

馮兮、翼兮、紛兮、若兮、仰混淪、俯磅礴、日月交錯、風雷摩蕩、山海羅前、品物眩目、以燿燿之明、察大物之實、難矣、謹考、有書契已來、談天地者、幾乎、或病于其形體、或乏于測驗、或欲以理盡之、或欲以容窮之、或死灰物、或奇幻事、其門雖多、無一得其的者、先生姓三浦、名晉、字安貞、豐陽人也、家世耕二子之陽、其幼好學、精理博物、已文已史、專深思於此、既而有得、提天地之條理、徵事物之實測、於是入幽出明、折微分秒、經緯粲然、品物井然、合之洪洪濛濛、分之片片鑿鑿、憫吾徒之倒懸、著玄語二卷、中作此圖、使于指掌、追著贅敢之二語三語合爲一帙、蓋事物之條理、於玄盡之、贅則有討論、敢則有所敢言于古成說、蓋其說不敢徵於稽古、又不阿於今說、以天說天、以地說地、莫法非於斯、故不合則定說成語之不言、合則芻話兒言之依、蓋

古人之說物也、大言則天與地、小言則秒與微、豈晉其大窮于天地、其小盡于秒微哉、惟天地者實形之統名也、陰陽者氤氣之巨名也、總之言物、物以對事、事有感應天命弁之、天地之所以天地、陰陽之所以陰陽始見、歷視古今、未無莫人之見至此焉、故文離焉、糢糊然、是以其說理也、推人及天地、故其論也、以有意誣無意、以五行語造化、以方圓論天地、以好惡測鬼神、以煩碎數品物、豈其足語本然哉、則先生之高于此者、能知條理、條理當前、觀彼萬物之擾擾焉、猶庖丁之解牛、條理也者何、陰陽也、陰陽也者何、一一也、人開口皆言陰陽、然陰陽之條理、莫古人于先生、而先生常不自是、曰、條理則吾信、語條理則於盤根錯節豈得不謬哉、以條理駁我、我甘受其罪、子徒勿從我說以從條理、入我室執我戈、逐我是我所期也、先生之義盡于玄贅敢、不外于玄、雖然身生之條理、人倫之親疏、略于玄而詳於贅、君臣之道、夫婦之際、略于二語、詳於敢語、不可不在于一帙中者也、蓋玄之作、起于一而至無窮則其言簡而繁矣、事繁言簡、疑乎古今、成其說、故讀者、有驚者、有咲者、有惡者、有排者、有疑者、先生曰、一信一否、古今然、是我所爲說也、雖然論或有定于不定之中、噫先生說不由于定說、故其說也奇也、非奇讀者奇之也、其說也新也、非新讀者新之也、學難于學正、智難于復素、而此書以簡遇奇新之人、世將寡于讀者、讀猶將寡其人、況於知而味之者、若有知而味之者、欲舍而豈得哉、若欲知天地、當以天地觀天地、欲讀三語、須以三語解三語、則其幾矣、因略書其例、以附於玄語首、嗚呼終古莫見到于此、窺斎之說塞天下、知而信之亦難其人、直幸優游昇平之日、親炙先生之業、只才魯智暗之恨、冀世之君子、有捨彼而取此者、寧執其鞭、是直之所願也矣、

寶曆甲申春正月

門人　矢野直謹識

祭洞仙先生文

矢野毅卿

我梅園洞仙先生、初童丱時、抱疑於天地、年三十、

而始悟天地有條理、遂撰梅園三語三十餘萬言、以興古來不傳之學、而立萬世不朽之言、豈不盛德大業哉、蓋天地之間、事物紛若、條理難繹、不可得端倪、加之、幽明之際、鬼神出沒、萬國殊敎、百家異流、或者欲令其同者異、異者同、於是衆訟喧然、是非鋒起、光覺既已如此、後進將奚適從、是以反觀一法、唯可立準於天地、條理之道、喩諸貝錦、氣物相織、經緯爰立、萬彙鬱郁、文章以成、雖粲然如可觀、而渾渾乎、浩浩乎、如望大洋、不知其津涯也、若夫高則登山測之、卑則入地度之、探魑魅之窟、遊荒忽之野者、實非知條理者也、孔子曰、聽訟吾猶人也、必也使無訟乎、斯語有焉、又重引古典、贊之曰、無偏無陂、遵王之義、無有作好、遵王之道、無有作惡、遵王之路、無偏無黨、王道蕩蕩、無黨無偏、王道平平、無反無側、王道正直、會其有極、歸其有極、嗚呼先生已沒二十四年、今玆文化九年十一月、孝子孝孫、相共圖修追遠之禮、卜曰將在近焉、弘雅辱外姻之列者、于玆有年、謹書近作一篇、以代薄儀、伏冀精靈之來享爾、

讀玄語

矢野毅卿

陰陽分一氣、體物自渾渾、反觀獲次序。左右逢其源、大哉天地道、昔賢未及論。學習任我好。至公無一存。西土窮理術。南海虛無言。莽蕩與勃窣。誰復立勝幡、飄然凌太淸。來朝紫微垣。帝座翳華蓋。星象繞天門。廣樂空中起。竦聽蕩精魂。下視淫濁世。始知斯道尊。上昇人所希。雲路徒攀援。俗緣迷不復。終身沒塵昏。

梅園贅語上梓引

矢野毅卿

宋朱文公、平日於前修遺書言行、極力輯錄、加之發明、於是周程張邵之學、得文公益顯、至度千載不煙滅、及其沒也、囑其子及門人、戒以勉學修正遺書爲言、經曰、君子多識前言往行、信矣哉、自古詩書經藉、何爲而存焉、蓋古之聖賢、多記前言往行、著事物之所以然、其意在傳之於後世、以俟作者贊天地之化育、故爲其徒者、纂修惟謹、令不散逸、是以當君師制作之任者、得其遺傳、以獲考往

蹟成大業、向者我藩綾部有修先生、夙服鄒魯之學、以實行踐履爲本、其志見於所著家庭指南、嘗撰我先君
龍溪公行狀、以貽後昆、又重作國字行狀、令婦人童稚閭閻田野之民得諷誦仰頌明德、可謂勤矣、我洞仙先生、蚤歲受業於有終先生、其後於家庭指南作序批、詩文則手自裒集繕寫、又著愉婉錄、多錄封內士庶孝順有德行者、杵城遺事、載和漢將軍逸事、及有終先生、山本健齋、詩文、其餘若我州租、賦、田畝制度、郡縣故事、古今沿革、皆有其書、要領備具、俾後人沿流泝源、不至迷惑、其賚大矣、先生嘗據天地條理、著梅園三語數十萬言、曰玄語、曰贅語、同敢語、敢語既刊行于世、顧玄贅二語、尙藏在篋笥、令嗣坦齊先生及門人故舊親戚、悼日月之逾邁、慨家學之往絕、共謀贅語上梓、達玄洋、佐野玄、盟徒俟贅語竣事、又欲鐫言語、是復古人之盛擧矣、余願幹事數君、迄梅圖全書竟工、記門人故舊、諸出力者、姓名功勞、別爲一卷、付其書、一藏官府、一藏孑山佛寺、以圖不朽、嗚呼余宿疾莫愈、年增羸憊、自謂難復久於世、恐不及見其盛擧、故爲之引以勉諸君、

文化十一年甲戌冬十月

復三浦安定　　麻田剛立

其書共に彼生に直樣御渡申候則壽肋殿御見分にて御調被成候代六拾貳匁とやら三匁とやらと申儀にて御爲登被成候金銀は餘程餘り候趣御座候藥箱は小子も道具屋に參り見分仕候處少少小ぶりには候へ共御勝手宜しく候半と奉存候今壹つ大ぶりは外箱等餘程げふさんにて不宜歟候委細の義は壽助殿へ御きき可被下候。

一壽助殿御償用に付御登坂無存懸久振りにて得貴意其御元の御樣子委敷承之大慶仕候是も昨夕當表御出立御乘船にて御座候無御歸國と奉存候何角御承知可被下候。

一玄語天地の部御舊本末御手の届き不申事

も御覺被成候に付又又御換稿被成候由御苦勞奉存候追追御成就奉希候贅語身生の部御副本御せり立被成何卒春中には爲御見可被下候旨海山奉待候何樣貳百丁も御座候ては御寫本も大躰の御義にては無之御延引之程御尤至極奉存候被仰下候如く御互に老境にて候へば氣力も餘りおとろへざるうちに一日もはやく拜見仕度願ひ候事御座候圭介樣へも此段被仰上何卒御苦勞奉存候へ共早く御寫取り被成候樣ひとへに奉希候

一四十萬年の說古大近小等之事小生實驗より存付候事共書付置候樣每每被仰下奉承知此間壽介殿も御出立迄に相語候て先生へ御見あけに可被成と被仰候略御受合も申かかり候へ共中中布算とても容易の義にても無之出來かね申候何卒當月一盃にもしらべ申出來仕候はば早速可懸御目候吳吳も壽介殿に申入候通り何分條理の事に至てはことごとく先生へゆづり一言も不申述候所存に御座候只少少古今實驗に本き候て數之可被推處纔百餘萬年の事を除候故其推測の年數等あらまし書付可入高覽候左樣思召可被下候

一舊年家庭指南御講じ被成候由姉方よりも申越至て大慶本望に奉存候旨申來候於小子も無此上大悅至極に奉存候於此義は段段厚く御世話被下候處成就仕佐太郎始何れも本望の義に奉存候

一贅語天地訓出板に付小拙へ一本御惠投被下千萬忝奉存候朝夕拜見仕萬萬辱奉存候此節當所疫邪大に流行死人も餘程有之候程の事故手透無之貴答も大略何も高免可被下候尙奉期後音候頓首

三月六日　麻田剛立

三浦安定樣貴復　三浦修齡

寄加藤周平

昨日は貴書忝拜誦如諭春事爛珊益御清福被

成御起居候由珍重奉存候小生先達鶴崎行無
恙歸山仕候贅語校定五冊出來仕候然處大阪
加藤周貞物故中候段承申候甚當惑仕候右計
音北浦鍵屋にて承候故歸路綾部顯藏殿懸御
日左候儀序に、御斷申候處御藏屋敷淺野重兵
衞殿へ賴候はば埓明き可申重疊左樣に相成
候はば出狀此方に可遣此より書中相添可遣
と被仰候右の通にて宜敷候哉御考可被下候
先日の銀子は加藤へ遣候事は御見合可被成
候其内拜顏右體の義も得と御熟談仕度候
一、先達ては良介殿御無難御歸國奉祝候尙又
弊宅へも御出被下候由他行不得貴意候其節
は爲御土產種種御惠被下忝被存候是よりは
彼是御無音耳罷過候右荒荒得貴意候萬拜眉
頓首

三月廿七日　三浦修齡

加藤周平樣

思堂先生行狀

辻達撰

先生姓三浦。諱黃鶴。字修齡。俗稱主鈴。號思堂。又號坦齋。孿山先生之長子也。其世系具于孿山先生墓誌。幼而穎悟。能記誦國史。長而通天文暦算經史百家之書。紹述家學。大有補修。又善書及醫。醫蓋繼父祖之業也。孿山先生之易簣也。門生在塾者數十人。皆留事于先生。先生在家。敎授數年。歎窮鄉乏師友。無質問之功。寛政壬子之春。發憤託家眷於姻戚。負笈遊于京攝之間。時年二十九。大坂中井履軒。麻田剛直。父執也。見而甚重焉。將赴京師。請履軒。曰。淇園老野狐。幸勿爲所魅。已至京師。周問諸儒。無中意者。時孿山先生墓碣未立。嘉福井嚴助之德行。示所著行狀。而請撰碑文。大坂篠崎守道書。守道固所友善。後造皆川淇園。與語而有所發明焉。退曰。野狐窟中實藏異寶。遂執贄而學。業大進。淇園亦甚重焉。臨別有詩曰。豐西彥俊彥。立志絕凡儔。其結曰。千里比肩立。安論別離憂。還家門人益進。家在孖山之下富永村。自肆于山水之間。躬耕隴畝。妻子躬炊爨。嘗有詩曰。無

能是間事。身世一漁竿。門外青山色。終年與我安。其志可見也。鄕里有貧困者。必躬自訪問恤惠。先君剛健公。新興泮宮。厚禮徵先生。以爲教授。先生不得已解褐。携家徙城下。使弟大年留守墳墓。公屢引見。禮待渥至。將大用也。未幾公薨。及今公立。會郡縣有事。選爲郡尹。先生幼長村落。民之疾苦悉知之。未施治。百姓欣抑焉。未得展其材而罷。復遷爲郡尹。教授如故。蓋順民望也。先生終身。以校正先人之遺書爲己任。所著詩文棄而不錄。其存者門人手錄。或唱和之作而已。性簡易淳正。接人以誠。捨己取于人。皂隷之言必察。其在職。通曉下情。隷達庶事。數上疏言當世之務。論事直言面爭。雖權貴無所畏避。後以病辭職。不聽。文政二年己卯正月十日卒。朝野悼惜焉。享年五十六。葬郭西來泉寺。娶永松氏。生一男四女。男夭。長女嫁矢野殼卿。次歸于余。次公側室。養安達氏之子惟厚。爲嗣。以季女配焉。惟厚令達輯先生言行。欲以傳于後。達以辱姻婭。義不得辭。因採錄其所聞見如此。

書杵城菅廟碑橋本之後

洞仙三浦先生、學極天人、言成一家、如深山大谷、人望其鬱然邃然、而莫測其底蘊也、是先生自書杵城菅廟碑稾本、其文辭書法、亦非可以世間文人之伎倆評論之、龜齡老人得之、欲裝而爲卷、傳之於知先生者、余善其知所貴也、謹識其後、

天保十二年辛丑重陽前三日

小竹學人篠崎弼

碑中所記安永庚子余生之前年距今六十有二年也

帝國大學玄語贅語借覽公文書

史第八八號

左記之書籍二部本學史料編纂上ノ參考ニ供シ度候間暫時御貸付相成候樣致度候且梅園先生ノ傳記モ御所藏ニ候ハバ併セテ御貸付相成度候此段及御依賴候也

東京帝國大學

明治三十二年五月

文科大學長文學博士井上哲次郎

三浦大明殿

一、玄語

一、贅語

追而乍御手數本書ハ可成小包郵便ニテ御回送相成候方都合宜存候郵便料ハ逐而返進可致候此段申添候也

史第八八號之二

本年五月中史第八八號ヲ以テ玄語並ニ贅語借覽之儀及御依賴候處危篤之御病人有之候趣ニ候ニ御取調御回送相成候段深謝之至リ暫時借用致置度候ニ付別紙之通リ證書差出候間御檢收相成度候此段及御回答候也

明治三十二年九月二十八日

東京帝國大學

文科大學長文學博士井上哲次郎

三浦大明殿

追而本文書籍之函蓋ニ玄語八冊贅語十四冊ト記載有之候得共贅語ハ十二冊ニ有之候間爲念申進置候否御一報ニ預リ度候尤右函ハ運搬中ノ不注意カ餘程毀損致居候得共包紙及ビ書籍ニハ異狀無之候又小包郵料返金致度候ニ切手剝落候部分モ有之不明瞭ニ候間是亦御申越相成度候此段申添候也

史第三五一號

貴家御所藏ノ玄語外二點永永借用致シ深謝ノ至リニ候右ハ疾ニ返進可致筈ニ候處謄寫等ニ日子ヲ要シ甚ダ延引致候今般入用相濟候ニ付別紙總長謝相添返進候間御檢收被下度候此段御挨拶旁申進候也

明治三十九年十二月十五日

東京帝國大學

文科大學長文學博士坪井九馬三

三浦榮二郎殿

追テ本文書籍ハ本日小包郵便ヲ以テ發送

致シ候間御入手ノ上ハ乍御手數差入置キ候借用證書ハ御返付被下度候又右書籍ヲ收メ候ハ前年御送付ノ際途中ニ於テ毀損致候故今般新ニ相造ラセ候間左樣御承知被下度御函蓋ハ其儘返進致候此段申添候也

御所藏之書籍永永借用致史料取調上參考ト相成候段深謝至候今般目錄之通リ返進致候間御檢收相成度候敬具

明治三十九年十二月十五日

東京帝國大學總長濱尾新

三浦榮二郎殿

目錄

一、玄語　八冊

一、贅語　拾貳冊

一、欒山先生行狀　壹冊

以上

作者之聖（梅園文庫開庫祝詞）

余ガ愛敬スル同郷有志諸君ノ豫テ計畫セラレシ梅園文庫ノ幸ニ松平總裁以下ノ御盡力ニヨツテ意外ニモ成功ヲ速カニシ二月四日ヲ以テ開庫式ヲ擧グラルル由ヲ聞キ欣喜雀躍ニ堪ヘズ余ハ遠ク他鄕ニ在リ加フルニ老ヒテ且ツ病ムヲ以テシ式場ニ列スルコトヲ得ザルヲ恨ムト雖モ尚ホ一片ノ拙文ヲ寄セテ此ノ盛擧ヲ祝スル光榮ヲ得ルコトヲ悅バズンバアラズ

顧フニ梅園先生世ニ即キシヨリ百二十四年ヲ經タレドモ餘澤未ダ斬エズ鄉黨ノ婦女子スラ先生ノ名ヲ耳ニシ先生ノ德ヲ仰ガザルナシ盛ナリト謂ツベシ然レドモ能ク先生ノ著書ヲ讀ミテ先生ノ力量ト眞價ヲ知ル者ニ至テハ蓋シ甚ダ少カラン是レ先生著書ノ未ダ世ニ現ハレザルモノ多ク且ツ其漢文ニ係ルモノハ甚ダ解シ難キニヨルナラン余ハ不肖ト雖モ夙ニ家庭ノ教ヲ受ケ先生ノ道ヲ私

淑セシコト年有リ今試ミニ一言ヲ以テ．先生ヲ評論シ將來此文庫ニ就テ先生ノ著書ヲ讀マントスル者ノ參考ニ供セントスルモ亦無用ニアラザルベシト信ズ

古語ニ曰ク「作者ヲ聖ト云ヒ述者ヲ明ト云フ」孔子ハ聖ヲ以テ自ヲ居ラズ嘗テ曰ヒケラク述ヘテ而シテ作ラズ信ジテ而シテ古ヲ好ム竊カニ我老彭ニ比ストイハレシモ孔子ハ衰周ノ世ニ生レテ詩書ヲ叙シ禮樂ヲ修シ春秋ヲ著シ天下後世ノ爲メ學問ノ規則ヲ定メ道德ノ本源ヲ明カニシタレバ作者ノ聖ト云ハザルヲ得ズ支那ノ古代ニ在テ伏羲神農黃帝堯舜以下周公孔子ハ聖人ト稱セラレタリ然レドモ聖人ハ支那一國ニ限レルモノニアラズ印度釋迦佛猶太麻西及ビ基督ノ如キ希臘ありすとーとるノ哲學ニ於ケル英國にゆーとんノ理學ニ於ケル華盛頓ノ政治ニ於ケルガ如キ亦皆作者ノ聖トスベシ吾ガ日本ニテモ聖人ナクンバアラズ上古ノ神聖ノ御方ハイトカシコケレバイハズ中古以來菅原天滿天神ヲ聖廟ト稱シ近世中江藤樹ヲ近江聖人ト稱シタリキ此二君ノ盛德萬人ニ傑出セラレシハ相違ナシト雖モ其學術ニ至ツテハ菅公ハ儒敎ヲ崇メ佛法ヲ尊ビ詩歌ヲ善クセシト云フニ過ズ藤樹ハ王陽明ノ良知說ヲ擴張セルニトドマリ非常ノ大發明アルヲ聞カズ作者ノ聖ト稱センコト如何カアランカ伊藤仁齋荻生徂徠山崎闇齋二宮尊德翁ノ如キ各一家ノ學ヲ立テ特長ヲ有スト雖モ恐ラクハ聖域ヲ去ルコト尚ホ遠カラン唯梅園先生ニ至ツテハ博學宏才諸家ノ長所ヲ採リシ外別ニ一機軸ヲ出シ條理學ヲ創造シ天地ニ則リ人道ノ標準ヲ定メラレタレバ作者ノ聖ト云フニ余ハ敢テ躊躇セズ故ニ余ハ先生ヲ日本ノ聖人世界ノ大人物ト推サント欲ス斯ル人物ノ同郷ニ生レシハ同郷ノ面目ナリト

云ハズンバアラズ今ヨリ少年諸彦ノ文庫就テ先生ノ著書ヲ讀ム者ハ一字一句ト雖モ是ヲ輕輕ニ看過スベカラズ深思熟慮シテ其意味ヲ了解セラレタシ蓋シ先生ノ著書中格言甚多シ「情ニ遊デ理ニ裁ス」ト云フ一語ノ如キハ余ガ亡父竹溪ノ終身服膺セシ所トス但シ先生ノ生レシ時ハ世界ノ氣運未ダ開ケズ天文物理ノ術尙ホ幼稚ナリシガ爲メ先生ト雖モ言ノ形氣ニ渉レルモノハ間間舊來ノ誤謬ヲ襲フヲ免カレズ故ニ先生ノ著書ヲ讀ム者先生ノ本意ノ所在ヲ察シ文詞ノ末ニカカラザランコト必要タルベシ希クハ善ク先生ノ指導ニヨリテ智德ヲ開發シ日本國民ノ名譽ヲ全フスルコト有ラン是レ余ガ切ニ同郷ノ少年諸彦ニ望ムトコロナリ是ヲ祝詞トス

明治四十五年二月四日

南豐後學元田直愼デ述ブ

梅園先生逸話集小引

偉人の逸話を知るは偉人を學ぶ捷徑なり、蓋し逸話は能く人の側面を語るものなるが故に之れに緣りて其人に接近し易ければなり、予公務の餘暇を以て專ら梅園全集の編纂に從ふや、豫て先生の遺著と共に其の逸話をも拾集せんことに留意したれども得る所甚だ多からざるを遺憾とす、且つ錄する所或は誤謬のあるあり從て累を先生に及ぼすものなきを保せず、大方の敎を待て他日の補正を期す、題して逸話集といふと雖も玆に收むる所は所謂る逸話のみにあらず、予が編纂に從事せし間に於て先生に關して得たる所感をも陳述せり、讀者並せて之を諒せよ、

明治四十五年六月廿二日

藤井專隨識す

梅園先生逸話集

目次

梅園の學風
梅園、蘭室、萬里

梅園先生逸話集

藤井專隨輯

〇富永村、二子山

梅園先生は關西夫子又豐後聖人の稱ありて豐後の片田舍なる國東郡富永村とて、昔時杵築領の一村落に生れし人なり、國東郡は豐後の東北角、海中に突出する半島にして、一雙の山勢西より東に走り、溪を隔てて相對する山腹に茆屋數十の落落たるを見るもの、卽ち是れ古の富永村にして、今は富永、常清、兩子、糸永の四部落を合して西武藏村と稱せり、國東郡今は東國東、西國東の二郡に分ち、西武藏村は東國東郡に在り、村より西方二里許、雙峰對峙して高く群山に拔くものあるを見る、是れ卽ち所謂る二子山なり、先生の二子山に眷戀たるや、其別號を鐘山といひ孖山といひ二子山人と云へるに徵すべく、今も村民の話に據れば、先

生少時日として二子山に遊ばざるなかりきと云へり、先生は日夕此山の佳氣に對して崔嵬高遠の氣を養ひ、以て其の偉大をなせしか、

○字　號

先生名は晋、字は安貞、後ち幕嗣の名を避けて安鼎に作りしも幾もなく初の名に復したり、號は攣山、孖山、二子山人の外、園に梅樹多きを以て梅園と號し、園下を東溪といふより東川居士とも又洞仙とも號し、更に無事齋主人の號あり、又季山の號を用ゐたる由なれども之を書せしもの今殆ど存せず

○唐崎夜雨の圖

先生幼にして奇警なり、其明快にして穎利なる論理的頭脳は、八歳の幼時既に人を驚かせり、先生の家に近江八景の圖の屏風ありけり、八歳の幼兒なる先生は唐崎夜雨の圖を指して其父君に此は何の圖かと問へり、其圖に炬火を點して蓑笠を着たるにても夜にして雨ふるものなるを知るべしと父君の答へけるを、先生は納得せで、目にて見るをこそ景とは云へ、暗黑の中爭でか望を馳するを得ん、之を情に屬するは可なるも之を景に屬するは不可なりといひけるより人皆其の奇言に驚きたりとぞ、

○西白寺の字彙

先生幼時學問に志せしも斯る片田舍のこととて師友に乏しく、其家も貧しくして、多く書を買ふを得ず、稗官雜史など隨て得れば隨て之れを讀みけるが、家を距ること一里許りの所に寺ありて一冊の字彙を藏しけるより、難字に遇ふ毎に之れを記し、積んで數十字に至れば其寺に就きて字彙を檢することと月には數十回に及びしとなり、其寺は辨分の西白寺ならんと云へり、

○師綾部絅齋、家庭指南、花王園集

先生年十六始めて杵築の城下に出でゝ藩儒

綾部絅齋先生に師事せり、絅齋人と爲り剛直にして夙に業を室鳩巣に受け篤く程朱を信ず、家庭指南一卷を著して専ら彝倫を明かにせり、此書深く筐底に秘められしこと七十年、後天明五年に至り其孫輔之此書を刻するに當り、梅園先生時に年六十三歳、本文に精細なる批評を加へ、且つ卷首に序文を書せり、絅齋の三男にして先生の益友たる麻田剛立、大阪より先生に寄せたる書翰に曰く、

舊年家庭指南御講じ被成候由姉方よりも申越至りて大慶本望に奉存候旨申來候、小生に於ても無此上大悦至極に奉存候、此儀に於ては段段厚く御世話被下候所成就仕、佐太郎始め何れも本望の儀に奉存候云云

右の書翰は梅園先生が其の家塾に於て先師の遺著を講じたるを綾部家の一族は之を以て先人の光輝を發揚せしものなりとして喜び、且つ先生が家庭指南の上梓に盡力せられしに對して謝意を表したるものなるべし、先生は又先師の詩文及其師友間贈答唱和の詩文を蒐集編纂して花王園集と名けたり、蓋し先生の微意、先師の遺芳を後昆に傳ふるに在り、　玆に梅園全集を編纂するに當り、家庭指南、花王園集を共に附錄として全集中に收めたるもの亦先生當年の微意に副はんことを期するの意に外ならざるなり、

○草　履

先生の初めて絅齋の門に入りし時は、絅齋の年六十六歳なりき、富永村より杵築城下へは山越四里許りなるを、十六歳の一少年は日日經を抱きて往復するに常に跣足なりき、師絅齋見て之を憐み、家人に命じて草履を與へしむ、少年謝して之れを受け、穿て出づと雖ども、門を出づるや直に脱ぎ、沙を拂ひ、之れを懷にして歸る、翌日來るや跣足平日の如し、而して師の門に至るや復た草履を懷より取出し穿き

て入る、其用意如此ものありき、又先生自身所用の草履は常に先生自ら造られたりと傳ふるものあり、

○師藤田敬所

先生年十七、豐前中津の藤田貞一先生に招かれ往きて之れに從へり、貞一敬所と號し中津藩の文學たり、氣節卓犖、彫蟲を好まず、梅園從遊三旬、敬所は梅園の才を愛して其職を繼がしめんとせしも一子のことゝて父母之れを許さゞりしかば辭して家に還りしが、才藻之れより日に進めり、後四年又往きて侍するもの三旬、其後は一再に過ぎず、敬所安永五年の春を以て梅園の年五十四歲の時に歿しぬ、門人倉成龍渚、賀來子登最著はる、共に梅園と親交あり、龍渚敬所に繼ぎて藩儒たり、梅園の少時師事せし所のものは、綱齋敬所の二人なりき、

○自製天球儀、臺覽の榮、關係文書

先生年二十餘にして躬ら天球儀を製出せり、而して之れ全く山中獨學の造詣なり、其智力創見已に一世を驚倒するに足れり、行狀に「童艸大に疑を天地造化に抱き之を思ふて得ず、數、寢食を廢するに至れり、年二十餘稍天學の書を讀み、仰觀俯察して自ら其の器を製し其象を模して以て運轉の大意を知れり、大意知るべしと雖も其疑ふ所にあらず」といへるもの即是なり、此の天球儀は今猶後嗣三浦榮二郎氏の宅に保存せり其形態如何は全集卷首に揭げたる遺品の寫眞に依りて一班を伺ふを得べし、其構造は赤道に接して漸く圓く、兩極に近きて次第に扇平なるものを極軸鐵線を以て貫き、二十四五度に傾斜せしを二本の支柱にて架上に支へたり、南北の直徑六寸三分三厘、周圍一尺九寸七分あり、而して繞らすに地平環を以てせり、球の全面は地漆にて塗り、星宿は白漆にて細かに記し、黃赤道と寒暖

熱の三帯圏は同じく色漆にて區劃し、天河は銀色の色漆にて塗り別てり、其構造は現今のものに比較せば極めて簡單素朴のものなりと雖も軌劃星象の描寫は驚くべき精細を極めたり、先生が之を回轉しつつ玄象の研鑽に寢食を忘れられたる當時の苦心は、今猶新なる手澤によりて髣髴するを得べし、之に對するもの覺へず肅然として襟を正さざるを得ざるものあり、去る明治四十年　皇太子殿下本縣に行啓ありし時、此の天球儀は玄語の草稿と共に　台覽の榮を辱ふせり、傳ふる所によれば、當時　殿下は此の天球儀に關して文書の存するものありやを御下問あらせられたるが、説明官は奉答する材料のなかりしを遺憾とせりといふ、今先生の書翰中天球儀に關するものと推讀せらるゝものを左に抄出すべし、但し先生は之を天球儀といはずして簡天儀又は單に簡儀と稱せしものの如し

門人矢野雖愚に與へたる書翰に曰く

簡儀出來申候處按排不宜候追追に揃出し可申云云、

又曰く

杵築佐野氏の子此内暫時山に在り天地を談じ候に付指示に苦み候時渾象の簡儀を指圖致候に付彼生及工藤生細工被致候追て調可申候調候はば定めて藤生より沙汰可有御座候、實に天地を得るの筌蹄ともなれかしと存ずる而已に御座候、上方の君子に見せ候ものにて無御座候云云

門人岡島羽仙に與へたる書翰に曰く

簡天儀くづれ物是れは新五郎歸り候迄御預置可被下候

〇祖父徹山、益友剛立

梅園先生が數理思想に長じたる淵源を尋ぬれば先天的には數學に長じたる祖父を有せしことと之れが素をなし、後天的には友人麻田

剛立に得る處尠からざりしが如し、祖父徹山は天性剛毅にして撓まず、機巧の技に工にして、兼ねて數術に精しく、自ら編める算書二卷あり、剛立は綾部絅齋の第二子にして天文學の大家なり、剛立が梅園に贈りし書翰に曰く

四十萬年の說、古大近小等の事、小生實驗より存付候事共書付置候樣每每被仰下奉承知候

又曰く

何分條理の事に至りては悉く先生へ讓り一言も不申述所存に御座候

梅園より剛立に贈りたる書翰には

乾象の態は一一之を子に仰ぐ

といひ、其返書を得ては

嗚呼故人殆ど神に通ずるか

と嘆稱せり、又梅園曾て剛立に書を贈りて輿地に關する硏問をなし返書を見て剛立を以て天下の奇才なりと嘆美せしこと歸山錄に見へたり、兩雄相許し相敬するの深き遺墨千古に香んばし、但し剛立は梅園よりは十二歲の年少者なれば梅園の二十餘歲の天球儀製造は全く山中獨學の造詣にして剛立の與る所にあらざるなり、

○遍　阿

寶曆の頃遍阿といへる一僧高野より來りて二子寺に止る、年齡梅園先生より長せること四五歲許り、先生深く此僧に推服し書を學べりと傳へらる、且つ先生は遍阿を以て或は大石主稅の遯世せしものにあらざるかを疑へり、先生が斯る疑を抱きしは遍阿と談偶赤穗義士に至る每に未だ曾て紅淚潸然緇衣の袖を濡ほさざるなかりしに據ると傳へらる、此說俄に信ずべからずと雖も愉婉錄に語る所と對照せば此間何等かの消息を傳ふるものの如し、愉婉錄高野山遍阿法師の章に曰く

さてかく語りし人は寶曆の頃高野より來

りし遍阿といへる僧なり、われ此僧には方外の交りわきて深かりき指を屈して數ふれば此人世を辭して已に二十餘年云云此僧の筑紫にさまよひしはもと日向の古月禪師を慕ひてなり、渡海の頃は古月已に世を去れり、よりて後席の下に臘に坐し、其後身を雲水に任せここに遊べる三年ばかり止まりて心の隈なく語らひしが此人威儀甚端嚴、三年の間終に跛倚の形を見ず、いつも朝しのめには起き趺坐して日の出るを待つ衲衣身を放つことなし、予五十年來接する所かかる端嚴の人を見ず、物よく書き詩歌もたしなめり、佛の道說けるさまも世の常とは同じからず云云、寶暦四年閏二月二十九日年三十九速見郡小浦風月菴にして寂を示す云云此僧たへて俗姓を語らず、後聞けば藝州上田主水に仕へし安宅左仲といひしが遁世せしにてありしとぞ、

之に依りて遍阿の人物を想像するに威儀端嚴道念堅固にして詩書の餘儀亦造詣深かりしが如ければ片田舍にしては當時罕れに見る所の風格なりしなるべし從て先生が此僧に書を學びたりといふは蓋し事實なるべし啻に書道を問ひしのみならず修養上幾多得る所ありしなるべし、若し夫れ遍阿をもて大石主稅にあらざるかといひしが如きは容易に信ずべからず、然れども寶暦四年に三十九歲にて死せりとせば其生れたるは享保元年にして元祿十六年を距る十二年なり年代合せずといへども懸隔遠からず從てかかる想像の起りしも多少の理由なきにはあらざるべし、しばらく父志の口碑を存して他日の研討に供ふ、

○墨竹

先生詩書雙絕の外、畫も亦一家の造詣あり、現今存するもの墨竹最多し、他散見する所のも

の、鳥居、團扇、龜等の極めて簡單なる一筆畫に過ぎず、蓋し畫は先生に於て僅に餘戲のみ、然れども墨竹は優に專門の堂奧に迫るものありと評せらる、

○彫　刻

富永村の村社宮畑神社に一對の隨神を藏す、是は上方より求めたるものと信せられ居たるが、文久年間塗替の爲め京都より職人を雇ひたるに之は素人の作なり、袴の括り方間違ありと云へり、木地洗濯中頭部二個に割れ、其內側に

玉眼を入申候
于時寛保四年四月
吉日富永の住人安貞
作之

と墨黑黑と自筆にて記載しあるを發見せられ則ち素人の作なること判然せり、寛保四年は延享元年にして、先生二十二歲の年なり、先生は居常煙草の代りに、人來り談話の時は人形を彫刻せられ居たりと傳へらる、然れば此の隨神も亦斯る餘技に成りしものならんか、然れども其彫刻彩色等精巧を極め殆ど專門家の壘を摩するものあり、先哲の多能、敬服の外なし、玆に全集編纂に際し隨神を撮影すると同時に頭部を解見して內側の文字をも撮影して之を卷首に揭げたり、

○社參、墓參、高橋素菴

先生が日日三回墓參せられしことは廣く人口に膾炙する所なるが、村社に參拜せられしことも亦日日三回なりしと傳へらる、先生の社參墓參は一面に運動を兼ねられしやにも想像せらる、而して社殿墓畔若くば途中にて書見せられしとも屢屢なりしと傳ふ、墓參の路畔にもと溜池あり、塾生此處に水浴するもの多かりしが先生は之れを禁せられしものの如し、蓋し水の清潔ならざりしが爲ならんか、故

に諸生水浴中先生の墓參を見かけては各各葉山に潜伏するを常とせり、一日高橋素菴水浴中先生通過されしかば、素菴驚き盥を冠り水中に身を潜め居たるが、盥動かざれば先生は只盥の水上に浮べるものとなし心を留めず池塘に腰をおろして書見せられ居たるが、素菴は時間を計り先生は已に去られたりと考へ盥を取り除けたるが爲め、遂に先生に見咎められ折角の苦心水泡に歸せりといふ、

附言　曾孫安行役所引より弟駿二郎同行にて時刻も違へず東泉寺の墓所に日參せられたりといふ、庭訓の深く且つ遠きを見るべし、東泉寺は杵築町北台にして、黄鶴先生の墓此處にあり、

〇旅行三回

先生の一生中旅行といふべきもの只三回あるのみ、其一は延享二年二十三歳の時、宰府熊本八代及長崎に遊べり、此行の證跡としては梅園詩集に只三首の詩を殘せるのみ、何等學問上資益する所ありしとも見へざるなり、其二は寛延三年二十八歳の時伊勢參宮を爲せり其紀行を東遊草といふ、二月十一日出發山陽道より大阪奈良を經て三月八日大廟に詣で、歸途琵琶湖を渡り、比叡山を經て京都に入り、大阪より船路金比羅を訪ふて、廿三日歸鄕せり、紀行頗る詳細なれども、大阪京都にて一人の學者を訪問せし記事なし、然れば此行亦尋常參宮探勝の旅行に過ぎざりしなり、其三は安永七年五十六歳長崎再遊の旅行なりとす、此行の見聞を筆せしものを歸山錄となす、三回の旅行中學問上意味あるもの只此行あるのみ、

〇長崎旅行

先生の再び長崎に遊ぶや、有名なる舌人吉雄幸作松村安之丞に面會し最も吉雄幸作と親かりしが如し、吉雄氏の宅にて、天球地球、顯微

鏡、望遠鏡、寒暖計等をも一見したり、顯微鏡は後吉雄氏より寄贈され先生大に之れを喜び長篇の詩を贈りて其好意を謝したり、其器今猶舊宅に保存せり、撮影して以て卷首に揭げ置けり、尙ほ先生は吉雄より蘭字を學び羅馬綴りをもて姓名を記すことを得たり、然れども遂に蘭書を讀むこと能はざるを深く遺憾とせられたり、要之先生は長崎再遊によりて當時泰西の新知識に於ては得る所少からざりしと雖も、玄敢二語は已に稿を脫し贅語亦已に數稿を重ねたる後のことなれば、先生獨得の條理學の硏究には殆ど何等補ふ所なかりしものの如し、此行長子黃鶴外門人海老屋呈次守江達藏等數輩を携へて一行總べて十二人なりき、此旅行前達藏の父良右衞門に宛てたる先生の書翰に曰く

袷と袷羽織、肌着合羽、足程風呂敷に入、背負申笘に御座候、先許にて寒く相成候はば、島木綿にても調へ、綿買ひ布子に仕り歸り可申と存罷在候爲御用心申上候云云

八月十三日より十月十三日に者る滿二ヶ月間の旅行を企つるに際して其行裝何ぞ其れ簡單なるや、また以て先生が簡易生活の一班を見るべし、

○梅園先生と蘭化先生

解體新書の譯者を以て有名なる前野良澤蘭化先生は中津藩の官醫なり、而して蘭化先生と梅園先生とは同じく享保八年の生れなり、但し梅園は二子山下に生れ蘭化は江戶の藩邸に呱呱の聲を揚げたり、梅園蘭化共に馥郁たる國香を千古に留めたる同鄉の二大偉人が其生年を同じくし、且つ同一通詞吉雄幸作に就きて蘭字を學びたるは亦一奇ならずや、即ち蘭化は明和七年四十八歲を以て、梅園は安永七年(此年帆足萬里先生生る)五十六歲を以て共に長崎に遊べり、即ち梅園の長崎行は

蘭化のそれより後るること八年なりとす、而して梅園の長崎行より四年前即ち安永三年に於ては豫て蘭化の手に由りて經營せられたる、我邦譯書の嚆矢たる、且つ本邦醫術上に一大革新を促したる彼の解體新書の上木成り、吉雄通詞は之に序文を書せり、嗚呼二先生の關係や如此密接なり、而も今日に於て未だ此間の消息を語る文書の發見せられざるは甚だ遺憾なり、

○梅園塾、學禁、責善會

先生は自ら梅園と號せしのみならず、其家塾亦梅園と稱せしなり、家塾梅園はいつの比より開きしやを知らざるも、塾制を作りしは明和三年正月にして即ち先生四十四歳の時なり、先生の謙遜なる常に門生を呼ぶに諸兄弟を以てせり、而も其家法は甚だ嚴にして如何なる富貴の子弟にも塾中の勞役を分たしめ寒中と雖も敷蒲團を敷かしめず、此は門生にのみ責めしにあらず先生自身も五十以上に至るまで蒲團を敷かざりしといふ其敎は忠愛孝慈を尙び互に善を責めて實踐を努むるに在り、即ち朔望に責善會を開き門生を一堂に集め相互に責善忠告を爲さしむ、其の制に曰く

勿以待人者而自處。勿以自律者而責人。勿以我好尙加之於人。勿以小怜悧侮他之敦樸。智極其高明。行勉之於履踐。

と、清水守業を送る序には平生子弟を戒むる言として此語を記せり、又單に學禁と題して此語を書せる書幅往往見る所なり、梅園責善會の日は小さき杖を席上に置けり、其意は不肖の身を以て人の掌上の珠を預ること恐れても餘あり、杖は畜生を鞭撻使令する者なり、諸賢堂堂たる五尺の身は父母の遺體何ぞ鞭撻を用ひん、今杖を責善會の席に用ゆるは非法を禁ぜんとする不言の責なり、人の肌膚を傷

はんとするにあらずと云へり、即ち不言の責を尙びて羞恥の心を養はしめ自ら其身を愼ましめんとするは梅園塾の修養法なりしなり

○塾生、杜若花

塾生一日先生に請て往て村社祠畔池中の杜若花を賞す、發するに臨み先生命じて曰く、歸るとき杜若花一二莖を折り來れ、祖先の靈前に獻せんと欲すと、塾生唯唯として去る、其の歸り來るや即ち數十莖を折來りて先生に奉れり、先生其中より只二莖を取りて餘は皆之を池に反さしむ、且つ曰く、子等何ぞ心無きや、祖先の靈前に手向くる何ぞ如此多きを須ゐん、天物を暴殄する此れ之れを謂ふなり我之れを取らざるなりと、先生の心を用ゆる凡そ此の如し、

○毛利太玄

帆門の逸足毛利空桑勤王奇行を以て一世に聞ゆ、其父太玄は梅園門下の高足たり、太玄名は舍、字は可貞、太玄は通稱なり、人と爲り溫雅清潔醫を以て業と爲す、詩を能くし書を善くす、人推して醫中の巨擘と爲す、初め醫を鶴崎の醫中山某に學び、後梅園先生の門に遊び醫業及儒學を學ぶ、刻苦勉勵苟も懈怠せず、業成り歸りて門を開くや來りて治を請ふもの日夜雜沓す遠近大に依賴せり、太玄の壯時家極めて貧なり梅園先生に從學するや常に自ら墳籍衣物を擔ふて富永村に往來せり、墳籍衣物を包むに物なし之れを西隣渡邊忠五郞に借りて之れを用ゐたりといふ、其窮乏思ふべし、又草鞋を買ふの錢なく跣足にて富永村に往來せしこと屢屢なりき、其の梅園先生に事ふるの日自炊して以て給す、先生其精力超群を愛し、其貧窮至骨を憐み、其奉ずる所の菅公祠畔林木の枝葉を採て其薪に充つることを許されたり、其鶴崎富永の間を往來せしこと幾

年未だ曾て茶店に立寄りたることなし、日出神社境內に巨大平坦の盤石あり、其の石上に憩ひて辨當を喫するを例とせり、後ち學成り家に歸り醫業大に行はるゝや、曾て日出侯の依賴に應じ駕籠にて往來せり其際必ず辨當を携へ之れを喫するにまた曾て茶店に立寄らず、特に彼の神社境內の巨石に憩ひて食事をなし、墳籍衣物を擔ひて往來せし書生時代を追懷して今昔の感に入るを樂めりといふ、

○梅園塾の隣火と太玄の消防振

毛利太玄梅園先生に事ふるの日、一日隣家火災起る塾生皆狼狽顚頓して己れの衣物を纏めて去り林中に避く、太玄獨り急に先生の屋上に攀ぢ上りて消防に努力す、衆生亦來集して共に之れを防ぐ、終に燒けざることを得たり、後先生悉く塾生を集めて訓誡して曰く、隣家火を失するに當りて塾生たるもの自己の衣物のみを纏めて避け去る、其用意何ぞ其れ容易輕薄なる、思慮なきも亦甚し、此の如き時に當りて此の如きは塾生の義を失ふものなり、以後能く心を用ゐ其宜きを得るを勉むべし、太玄の如き一も自他の衣物器什を問はずして直に火に赴きて之れを撲つ、火滅せば其害衣物器什に及ばず、智慮あるの措置なり、我之れを嘉賞す、今日より太玄を門生視せず、之れを客遇すべしと、以後待遇殊に厚し、人以て榮と爲す太玄拜辭して受けず、

○太玄の紀念樹

太玄梅園先生に從遊するの日、一日先生に請て先生の前庭に一株の松を手栽せり、其松成長して今猶後凋の勢天に聳ゆ、

○師弟の情味

太玄梅園塾を辭するに當りて先生惜別の詩あり曰く

滿囊詩與半玄談、盃酒惜レ離還暫含、

不レ道梅花消息遠。春風吹レ夢度二江南一

師弟情味の醇き如何ばかりぞや、亦以て梅園塾風の一班を窺ふべし、

○屢辭聘命、抗志守玄、

先生は平生陶弘景韓康伯の爲人を慕ひて夙に嘉遯を尙べり、されば年三十五の時玖珠侯の辟ありたれども

朝飮孖溪水。夕臥孖山雲。於晋乎足矣。

と稱して辭して就かず、後五十九歲の春、豐前に遊びし時、久留米侯禮聘の意あるを告げて仕官を勸めし人ありければ詩を作りて之れを謝せり。其詩に曰く、

樵溪不與世間通。　高臥東山異謝公。
占得烟霞吾已老。　淸風鶴唳白雲中。

又小倉藩の家老が先生を其の君に薦めんとするの意あるを聞き亦詩を作りて志を述べ遂に仕へずして家居せる、又白河樂翁公の政を執るや、先生の名を聞きて拔擢の意ありしも先生の死に遇ふて果さざりしなりといへる說あり、此說若し事實にして天亦年を先生に假し、柴野栗山に代りて天下の文柄を握らしめば異學の禁を見ずして學術の進步一世を驚かすものありけんを惜むべきの至りなり、然れども此の如きは寧ろ先生の志にあらざるべし、先生が綾部富坂に寄せたる書翰に曰く

榮利に走らず自の分上に安んじ候は頗る自得の境に有之候

と、先生の志は終に何物も奪ふべからざるなり、後萬里先生が梅園先生の肖像に題せし贊中に屢、辭聘命、抗志守玄の語あり、能く此の間の消息を道破せしものと謂ふべし、

○當時の學界に於ける先生の名聲

先生は終に四方の禮聘に應せず、飽まで孖溪の水を飮み、終生孖山の雲鶴を友とせしが爲めに、其の學德と著述と共に群儒に傑出するものありしに拘はらず、其名聲却て甚だ著は

れず、世其名を聞くも其詳を知るものは鮮し然れども當時の學者に推服されしこと決して尋常にあらざりしは其の證跡歷歷たり、

(一)彥根藩文學龍草廬、詩轍の序に曰く
博覽多識、文辭惟富、撰著惟夥、故嘗有關○西○夫○子○之稱、

(二)筑藩文學龜井南溟は當時關西儒林の重鎭たり、其の先生に贈れる詩の起句に曰く
咫尺眞○人○夢寢逢、

(三)敢語の上木成るや、先生先づ四方の諸名家に各一本を贈りて批評を需められたり、然るに敢語固より彼の尋常一般樣に依りて胡蘆を畫きし著述とは大に其趣を異にし、先生獨特の哲學條理の新說に基きて彝倫を講じ大義を明にせしものなれば、當時久しく程朱陸王の性理說に囚はれたる學者の頭腦は愼重に之を硏討評論するの雅量と忍耐とを缺ぎ、妄評徒らに囂囂たり、就中某大家の如きは一讀の下之れを座に擲ち邪說以て我が机上を汚さしむべからずと絕叫せりといふ、蓋し敢語に湯武の放伐を非議したるは聖人の徒にあらずといへる意なるべし、是を以て先生は何ぞ吠聲の嗷嗷に憂戚せんといひて益、其操守を固くせり、斯る間にありて獨り浪華の碩儒高葛陂一面の識なかりしにも拘はらず遙に同情を寄せ熱心に玄語の上木を慫慂し來れり、先生が千古の知己と稱せし所以、

(四)先生の友人にして天文學の大家なりし麻田剛立は、何分條理のことに至りては悉く先○生○に○讓り一言も不申述候所存に御座候云云、

(五)先生の門人にして後樂翁公及び中井竹山の推薦により熊本藩に聘せられし脇蘭室は先生を君○子○人○又謙○厚○之○老○師○と稱せり、又其の祭三浦先生文に曰く我一爲○天○下○、

哭於失一偉人、

（六）先生の學說を脇蘭室より傳へて出藍の譽ある帆足萬里は先生を以て本邦之大儒と稱し、先生の肖像に贊して洞覽天地、殫極鬼神といへり、

（七）樂翁公は先生の名聲を聞きて拔擢の意ありしも先生の死に逢ふて果さざりしと傳へらる、

（八）平安の碩儒福井小車、先生の碑文を撰するや、先生を稱して君子之儒といへり、

（九）浪華の篠崎小竹は先生の筆蹟杵城菅廟碑稿本の後に書して曰く

洞仙三浦先生、學好天人、言成一家、如深山大澤、人望其欝然邃然、而莫測其底蘊也、

先生が當時の儒林に如何に推重せられしかを見るべし、

〇先生の自重自信

先生が當時の學界に推重せられしこと此の如し、而して先生の自重自信も亦尋常にあらざりしを見る、即ち先生が綾部富阪（綾部絅齋先生の長子）に寄せたる書翰の一節に曰く

條理を取りて天地を大觀するに於ては前に古人を見ず、玆に於て竊竊乎として章句訓詁をおさむること能はず、是をもて晉自ら量るに、晉が所見四方の諸君子と合申間敷候、今日世の晉を望むもの、みな晉が意にあらず候、是によりて晉竊に望を四方の諸君子に絕ち候、若し同調の人御座候はば、李車を御するに於て晉之れを憚るものにあらず候云云、天地を大觀するに於て肩古人より卑きを不覺候

〇陶弘景韓康の爲人る慕ふ

先生が平素陶弘景韓康の爲人を慕ひしことは行狀の語る所なり、陶や韓や如何なる人ぞ、玆に小傳を記して讀者の參考に供す、

陶弘景字は通明、秣陵の人、讀書萬卷、一事知ら

ざれば深く恥となす、年十二歳にして葛洪の神仙傳を讀み、晝夜研尋便ち養生の志あり、齊の高帝引て諸生の侍讀となす、永明中朝服を脫して神武門に掛け上表して祿を辭す、晩年華陽詞に隱れ華陽山人と號す、性松を愛し庭院皆之れを植へ毎に其響を聽き欣然として樂となす、嘗て人に謂て曰く、吾れ朱門廣厦を見、其華樂を知ると雖も往かんと欲するの心なし、高巖大澤を望めば立止み難きを知るも恒に自ら之に就かんと欲すと、三層樓を築き自ら其上に居り弟子其中に處り、賓客其下に處り、物と遠絕し、避穀導引の法を善くす、年八十五、病なくして逝く、眞白先生と諡す、梁武帝蚤く之れと遊ぶ、位に即くや之れを徵せども出でず、大事あれば諮詢せざるなし、時人之れを山中宰相といふ、

韓康字は伯休、後漢の時霸陵の人、家世著姓なり、康藥を長安の市に賣り、價を貳せざること三十餘年、時に女子あり康に從て藥を賣る、康價を守りて二にせず、女子怒りて曰く、公は是れ韓伯休なるや乃ち價を二にせずと、康歎じて曰く我もと名を避く今女子みな知る何ぞ藥を賣るを用ゐんと遂に霸陵の山中に隱る、連りに徵さるれども起たず、桓帝元纁安車を備へて康を聘す、康安車を辭して自ら柴車に乘り晨を冐して使者に先ちて發す、亭に至る、亭長は韓徵君の亭に過ぐべきを以て方に人車を發して道を修む、韓の柴車幅巾を見るに及びて以て田叟となし其牛を奪はしむ、須らくありて使者至る、牛を奪へる翁は乃ち徵君なり、後竟に道中より遁去る、

○藩主の召見

天明五年新に封を襲がれし杵築藩主剛健俠、先生を召して之を見んことを欲せられしも、先生已に六十三歳の老體なれば其の筋骨を勞せんことを憫みて、其の山を出づる折を待

たれけるを先生斯くと聞きて、虚譽をもて實禮を受くるは吾志にあらずとて、足を裹みて城下に至らざること一年許りに及びたるが、明年五月杵築城下楠屋に重態の患者あり先生の來診を懇請せしを以て、先生已むなく之れに應じて城下に出でければ、侯は此の機を以て宿望を達せんとて先生を召見せられたり、即ち天明六年五月十一日十二日及び十四日の三回に亘りて召見せられたり、先生歸山の後御目通りの次第を長女類子の婿安東貞五郎に通知せられたる書翰あり、能く當時の光景を悉せり、同書翰によれば、侯は家老の禮を以て先生を待ち、出入に近臣燭を執て案內し、歸山の折は先生が駕籠嫌ひの由聞召され て、御廐の馬を給せられたり、是れより屢屢召見せられて禮遇優渥、息賚絕えず、見ゆる每に談國務に及べりといふ、

○剛健侯

先生を召見せられたる剛健侯は、能見松平家第十三代松平駿河守源親賢公と稱し、剛健院殿日新崇光大居士と諡せし方にして、第十一代寛量侯の二男なり、天明五年四月令兄第十二代恭衷侯の養子となり、五月家督を襲ひ、豐後杵築三萬二千石、江戶城詰帝鑑間を命せられ、天明六年十二月叙爵ありたる方なり、第九代龍溪侯(寶曆五年より正德五年に至る)に次きて最も民望あり令名頗る盛なりし各君なり、侯先生を召見の後家老に對して、「江戶の先生は日本一と思ひ居たるに安貞に逢て見れば亦上なり客分として師の場に置く」と述べられたりといふ、侯の鑑識の高きを見るべし、階級制度の嚴格なりし時代に於て山中の一村夫子を迎へて直に家老の待遇を與へ、加之、先生をして

夫れより一つ間にはいり、間を六尺ほど置き、御咄申上候、幕方御庭拜見を被仰付、御前

直に御先に御立被遊、付まわり御咄共被遊候、是れは退屈可仕と思召候との御事と奉存候云云、

御菓子頂戴、次の間に下り可被下と申候へども御免無御座、御側にて御茶菓子頂戴仕候、

夜四ッ半まで御咄申上候、御煙草被召置候にも御挨拶御座候云云、

十四日には梅酒御前にて被仰付殊の外酔申候、

と長女類子に報せしめたる、恰も古の明君股肱の賢相を招き膝を接して國事を議するの趣ありて、眞に破格の待遇といふべし、此の一事以て剛健侯の如何に賢明なる君侯なりしかを想像するに餘あり、

○丙午封事、山中家老

先生の剛健侯に召見せらるゝや、第一日は八ッ半進見、夜四ッ半退出、第二日と第三日とは共に八ッ半の進見、暮六ッ退出せり、謁見時間としては隨分長時間といふべし、侯が如何に先生を待つに熱心なりしかを想像するに餘あり、而して談話の内容は先生の書翰中一語之れに及ぶものなし、然れども一語之れに及ばざるもの寧ろ其消息を洩せるものにあらざるか、即ち花鳥風月の閑問題のみにあらざりしを知るべし、後日所謂る丙午封事(先生の召見せられしは天明六年丙午の歳なり)を上り政務治術の要道を論じたる如きは謁見當時の内命に據りが滿腔の經綸を披瀝せしものにあらざるなきを知らむや、されば剛健侯は此の封事を尊重せられしこと經典の如く、曾て机上を下さず、日夕襟を正して之を閲讀せられたり、侯の在職中藩政の改廢頗る見るべきもの多かりしは先生の獻替に成りしものの多かりしと傳へらる、先生が平素其の爲人を慕ひし陶弘景は梁武帝の諮詢に應せしか

ば時人之れを山中宰相と稱せり、先生が當時の藩治に貢獻せし所を以て見れば、先生を以て山中家老と稱するも亦溢美にあらざるべし、

○梅園文庫、梅園全集

先生逝きて後茲に百二十餘年、去る明治四十二年の秋に至り、杵築地方に於て先生に關する紀念事業の企圖せられたるもの二あり、其一は梅園文庫の設立にして其二は梅園全集の編纂是なり、爾來着着其行を進め茲に明治四十五年の春を迎ふるや、文庫は已に壹萬餘圓の基本金寄附の決定額を得、二月四日を以て開庫の式を擧げ五千餘冊の圖書を備へて公衆の閲覽に供するを得るに至れり、之れと相前後して全集も亦已に其編纂を了し目下印刷中なれば其の江湖に紹介せらるるは當に數旬日を出ざるべし、而して是れ何れも松平子爵總裁の下に經營せられし所のものなることは特筆すべき事實なりとす、九代龍溪侯、十三代剛健侯を出せし名譽ある松平家は今や第十七代松平子爵を得て錦上更に花を添へ、益〻其光輝を發揚しつつあるを見て轉〻欽尙に堪えざるなり、

○矢野毅卿

先生剛健侯に謁せしとき侯深く先生の器に服し切に仕を勸めらる、先生固辭す、然れども侯の盛意を感佩し、約するに今より適當の人材を養成して之れを進めんことを以てせり、時に小姓たりし矢野弘甫めて十四歲、怜悧にして字を好む、强記人に過ぐ、一たび目にせしことは決して忘れず、其材を愛して携へて山に歸り、之れを輔育すること子の如くす、居ること三年業大に進めり、此に於て剛健侯召して侍臣となし息遇甚だ厚し、遂に鳥銃隊長となり藩學の敎授を兼ね且つ用人となり老職を輔佐し藩治に貢獻する所少からざりしなり、弘

學は毅卿、蕉園と號す、教授となり用人となりし後も家貧にして兄を養ふに俸の三分の二を以てし、常に豆腐滓を飯に雜せて食となせるも人に貸借せず、歳暮には人皆負債に苦しむも、蕉園は戸を掩ふて書を讀むこと平日の如くなりきと、亦先生の高足たるに負かず、其著條理餘譚一册は先生の條理學を傳へて之を闡明せんことを努めたるものなり、其詩文集を蕉園集と名く最も七言歌行に長せり、當時江都の大窪詩佛詩を善くするを以て聞ゆ、而も亦自ら以て蕉園に及ばずと爲せり、其造詣の深きを知るべし、

○瘟瘽日

先生曾て妻に命じて灸をすへしめしに適適隣家の老嫗來り之れを見て、今日は瘟瘽日として灸を忌む日なりと言へるを聞き直に止めしめたり、老嫗用を終へて歸りし後、再び灸をすへしめんとせしに、妻訝りて曰く今日は最早止めたるにあらずやと、先生笑ふて曰く、瘟瘽日は已に歸り去りたり、且又瘟瘽日は人によりて有るならんも我にありては無き日なりとて灸をすへしめけるとぞ、先生の人に逆はず迷信に陷らず自信の强き大概此の類なり、

○落雷

先生一日客僧と對談中偶、雷雨大に至り、霹靂一聲庭樹に震へり、僧愕然として顏色土の如くに變りたりしかば、先生は端然として動かず從容として謂て曰く、貴僧も亦一驚を喫せられたるかと、僧愧ぢて答へず忽忽辭して去れりと、是れ行狀の語る所なり、亦以て先生平生の修養を見るべし、

門人高原竹窓落雷の畫を作り贊を先生に請ふ、先生直に筆を取りて菅公の去年今夜侍清涼の七絕を書して與へられたりといふ、彼の行狀に語る所の落雷に關する逸話と此の畫

贊との間に直接の關係は固より無かるべしといへども、相對映して自ら先生が落雷に對する思想の一班を窺ふを得べきが如し、

○高原竹窓

高原竹窓名は建弘、中武藏吉廣の人なり、讀書を梅園塾に學び兼て畫を能くし別に又彫刻に巧なり、壯年の頃即安永八年籾殼入りの文珠を作り置きたるが後五十餘年を經て藩主に知られ、之れを獻上して夫妻終生二人扶持を賜はるの榮を擔へり、於是再び之れを作らんと思ひ立ち文政十一年七十一歲の高齡を以て籾殼入りの福神大國主命を彫刻せりといふ、梅園先生の贊せし落雷の畫幅と籾殼入福神の彫刻物とは現今國東町加藤甲子二氏の所藏する所なり、甲子二氏の祖母は即ち竹窓の女なり、

○勤儉慈愛、慈悲無盡講、家訓

先生自ら奉ずること節儉にして、飮食、衣服、器皿等一も偏好あるなし、而して家に餘裕あれば必ず之を貧民に頒ち施すを常とせり、門生中貧にして學資に苦むものあれば之に衣食を給し、蔬糲といへども倶に共にして其志を遂げしめんことに力めたり、又遠方の人來り訪ふものあれば盛饌ならざるも必ず食を供し、歲末には窮民に米穀を賑はすを以て每歲例と爲せり、嘗て村内の困窮者を救はんが爲め、村の有志より錢又は米穀を募り、先生自ら之が監督の任に膺れり、其方法は豐年に息を出し歉歲に窮民を賑はさんとするにありて、先づ最窮の者より救助して次第に稍や困窮するものに及ぼしたりしかば、凶年飢歲に遭ふも餓死を免れ先生の德を慕はざるはなかりき、寶曆で年即先生年三十四歲贅語起草の年に設立したりといふ慈悲無盡即ち是れなり、慈悲無盡講の旨趣及び約束條項は收めて梅園拾英の內にあり、其文は平易に其意は深

切に五倫五常を說きて一家一村睦しく、貧病孤弱不具無告の徒を救ひ合ふべきを諭せり、此の約束は明治の初年まで持續したれども、廢藩置縣の後大小區を置かれたる時、隣村と合し町村制を布かれ西武藏村に併せられたれば、有志者三浦喜十二氏等相謀り積立の金穀を以て田二反を購入し、大字富永の共有財產と爲したりといふ、此の無盡は設立已來百數十年の今日に至るも尙能く之を持續し貧民をして其恩澤に浴せしめたるもの先生の遺德に依るにあらずして何ぞや、先生は此の如く節儉にして施與を好む即ち勤儉にして又慈愛の性に富めり、此は稟性の然らしめたるなりといへども、幼時父儀一より「人たるものは宜く慈を以て心と爲し、勤儉を以て本と爲せよ、然れども唯勤めたりとて用を節せずんば裕ならず、用を節したりとて勤めずんば足らず、されば勤儉兩ながら得て慈善の志立ち而して事行はるべきなり」と誨へられたるを深く心に銘じたるが爲めなりといふ、

○常識圓滿、調停の才

先生は非凡の哲學者なりしも又常識圓滿に發達し、頗る調停の才に富めり、先きに杵築藩支封の民、黨を結びて亂を作し、將に城に入らんとすると聞くや、先生之れを路に要し、懇ろに利害を說き事終に平ぐを得たりき、又某村の神官十數人、寺僧と事を爭ひ其騷動八ヶ村に及ぼしたることあり、村吏、郡宰、其間に周旋したるも和解せず、終に藩廳に訴へて裁判を仰ぎたれども、先生が仲裁を試みしや、雙方其非を悟り、大事に至らずして局を結べり、其他隣保に口論不平の事あれば其間に立ちて和解するに未だ曾て服從せざるはなかりきといふ、蓋し是れ先生が學問常識併せ得て調和圓熟、玲瓏透徹、渾然玉の如き人格なりしに依らずんばあらず、宜なる哉豐後聖人の故ある

や、

○顯彰、感化

先生尤も心を孝子順孫節婦忠僕の顯彰に留め、其の事蹟の世に知られざるものは或は之を官に告げて褒賞を得せしめ、或は之を鄕邑に募りて其窮を救助し又は自ら米鹽を饋りて孝養を終へしめ、其他鄕黨の子弟に對しても、小善も之を褒め小不善も之を誡めけるほどに、人皆其嚴を憚り其恩に感じ、無賴の徒すら心を改め之を德とせざるはなく甚しきは合掌禮拜して之を謝するものあるに至れりといふ、偉人の感化力は殆ど奇蹟に類す、

○終焉、後嗣

先生晩年中風に罹りしが、其死は今より百二十四年前なる寬政元年己酉三月十四日に在り、其前日病革るや、家人門生を召して一一訣別し、畢りて曰く、「我手を正くせよ、我足を正くせよ、我首を正く南に嚮はしめよ、新衣を以て故衣に更へよ」と命じ、男黃鶴に向ひ著書の改竄すべき所を指點し、夜半に至りて復た言はず、其曉に此世を辭し去りぬ、享年六十七なり、嗚呼先生が一息猶存する限り學者たる天職を忘れざりし處、千古學界の典型と謂ふ可し、此の月十七日宅南先塋の次に葬り寺島氏と合葬す、遺命に因りて私諡を贈らず、碑石表面に䕨山先生墓と橫題し、四面に碑文を刻せり梅園先生の祀を承けし長子黃鶴修齡は主鈴と稱し、思堂又は坦齋と號し幼より穎悟長じて天文曆算經史百家の書に通し、家學を紹述し、又醫業を繼げり、履軒を訪ひ淇園に質して發明する所あり、後ち杵築侯に仕へて敎授となり又郡奉行たりしが下情に通ずるを以て百姓欣仰せり文政二年年五十六にて卒しき、思堂永松氏を娶りて一男四女ある、男は夭し、長女は矢野毅卿に嫁し、次は辻玄陽に嫁し、次は杵築侯の側室たり、季女に配するに安達氏

の子惟厚を以てして家を嗣かしむ、其子安之桑園と號し、桑園の養子は今の孫六、世世杵築に住せり、其富永村なる先人の廬を守れるは次男玄龜字大年の子孫なり、大年も亦需を業とし又能く書を讀む、其長子大淵は篠崎小竹の門に學びて家聲を墜さす、次子安肅は分家して安岐に住し、大淵の養嗣は大明、大明の養嗣は今の富由即ち榮次郎、世先業を守りて需たり、梅園先生始め西氏を娶り又渡邊氏を娶る、故ありて皆去る、後寺島氏を娶りたるが先づ歿す、男二人黄鶴玄龜即ち是なり、女三人、長は夭し、一女は永松氏に嫁し、一家は安東氏に嫁せり、

（碑文の撰者福井小車

先生の碑文を撰みたる福井小車は幕府の醫官なり、名は軏、小車は其字、巖介と稱し、衣笠山人と號す、楓亭の二子榕亭の弟、父の後を繼ぎて幕府の醫となる、兼て宋學を攻め文詞を善くす、人と爲り敦厚にして客常に滿つ、著す所春秋折中あり、寛政十二年歿す、

黄鶴自ら撰みたる先府君攣山先生行狀及び先生の遺著等を携へて、先生の歿後五年即ち寛政五年京都に行き福井氏を訪ねて碑銘の撰文を依賴せしなり、先生の碑文を特に福井氏に依賴せしは如何なる縁故に據れるか、文書の徴すべきもの未だ發見し得ざるは甚だ遺憾とする所なり、蓋し其德行を慕へるものなるべし、福井氏も亦梅園の爲人を知りて其の撰文を榮として快諾せしものの如し、碑文の初に撰文を諾せし理由を述べて曰く

予未だ先生を識らずと雖も已に其の賢にして文なるを聞けり、因て其狀を考ふれば則ち嘗て聞きし所よりも賢なり、其書を見れば則ち又其狀する所よりも賢なり、益、先生の賢にして文なると其狀の誣ひざるを知れり、既に之れを賢とすれば則ち焉くんぞ

ぞ其德を記せざるを得んや、乃ち其故を叙す、小車は先生を賢にして文なりとなし其德を記すと稱したれども、此碑文は只黄鶴所撰の行狀を短縮せしに過ぎず、何等適當の推稱を加へたるを認めず、固より小車の推稱先生の偉大を損益するに足るものにあらざれば、僅に記實に止めたるは寧ろ小車の大に注意せし所なるやも知るべからずと雖も、要するに此碑文は撰者文章共に不似の憾を遺すものといはざるを得ず、

○碑文の揮毫者篠崎三島

先生の碑文を書せし篠崎三島は大坂の儒者なり、名は應道、字は安道、三島は其號、又郁州と號す、家元と商を業とせり、四十歳にして始めて業を改めて儒となり、宋學を唱ふ、來り學ぶもの甚だ衆し、其才學一時に著はる、又書を善くし詩を巧にす、人と爲り濶達にして事を處する明快、人と言ふ處廻避するところなし、文化十年歿す、年七十七、子なし、加藤吉翁の子弼を養ふて、家を嗣がしむ、弼な即ち小竹なり、吉翁は元と豐後杵築の人、醫を業として大坂に寓す、か丶る緣故に據り黄鶴は碑文の揮毫を三島に委囑せしものなるべし、

○碑文に關する遺命と中井兩先生（竹山、履軒）

黄鶴が蘭室に寄せたる書翰に據れば、梅園先生は中井竹山履軒兩先生の中何れかに碑銘の撰文を依賴すべきことを遺命し、且つ蘭室は中井の門に遊びたることなれば、蘭室に依りて中井氏に依賴すべきことをも遺命せり、黄鶴は此の遺命に依りて書を蘭室に寄せて、此儀許容さるれば蘭室の手元まで草稿を送らんと云ひ、又中井氏には黄鶴自身にも曾て伺候したることはあれども蘭室の親炙には如かざれば蘭室の取做を賴むといへる旨を述べたり、然るに碑文は遺命と全く別人に依て

作られたり、是れ抑如何なる事情なりしか、蘭室が黃鶴の依賴を中井氏に取繼がざる譯なく又蘭室之れを取繼ぎて中井氏之れを拒絕する理由もなし、竹山は綾部伊承と親交あり、曾て其依賴に應じて家庭指南に跋文を書せり、竹山又蘭室を推重敬愛せしこと尋常にあらず、されば梅園の爲人は伊承及蘭室より十分に傳聞せること明なり又梅園曾て履軒より白石の蝦夷志を借りて疑義を履軒に質したること歸山錄に見へたれば生前文字の交はありしこと疑ふべからず、斯る間柄なれば蘭室より梅園の碑文を而も其遺命に依りて依預されたらんには竹山や履軒や何れも快諾すべき筈なり、然るに遂に此事なかりしは甚だ怪むべきことに屬す、黃鶴の書翰は今猶毛利莫氏の藏する所なり、此外に何等歟是に聯關する書翰なきか詮索されたれども何等見當る所なかりしは遺憾の至なり、左に黃鶴より蘭室に宛てたる書翰の全文を揭ぐべし、

亡父於焉之節碑銘之義中井兩先生之中何ニテモ相賴候テ相調候樣遺命仕候、尤賢兄御從遊之儀ニ候得ハ御憑申候テ可宜ト申置候乍御面倒御請被下候ハバ誠以可含笑於地下、千一許容有之候ハバ早速以草稿賢兄マデ可得貴意候、僕モ嘗テ得識荆候得共不若賢兄之親炙候、以參御賴申上度候得共制中態ト相扣候

御病翁近況如何御勞心相察候、僕失恃已來心胸欝陶殊ニ來賓酬酢旁大ニ失意罷在候、恨寒卿不能得益友如貴兄者相切磋殊益悵恨耳、賢兄實天賦之英才豈僕輩之所企及哉、往執牛耳於翰墨之場者、又皆屬望於足下、在吾儕將依賴不堪景慕之情頃聞有微恙、願加省察、萬期後鴻、頓首

五月二十三日　黃鶴

儀一郎樣

斯くの如き遺命あり斯くの如き書面ありしに拘はらず遂に中井兩先生の撰文を得ずして福井小車に依賴したる點、且つ福井小車に依賴したるは梅園逝去してより五年の後のことなる點より考ふれば此間何等歟の事情なき能はざるなり、且つ夫れ當時の儒林を回想するに、名聲海內に聞ゆるもの決して乏しからず、所謂寬政三博士の外、筑に龜井南冥あり肥に藪孤山あり京に皆川淇園あり備に菅茶山あり、されば當時關西の學界に於て其人を求むれば中井兩先生にあらずんば福井小車を措いて他に梅園の碑文を屬するに足る人なしといふ程の事情にてもあらざりしがごとし、予未だ此間の消息を深く研究せずといへども聊か所見あり茲に記して大方の教を請けんと欲す、

梅園先生は高德の哲人なることは當時の儒林に廣く推服され居たりと雖も其學說は先儒未發の卓見なるを以て世論紛紛未だ一般儒林に遺憾なく領會され居たりとはいふべからず、梅園先生自ら贅語に序して

我說非か、人我を駁するや可なり、我說是か、人我に與する可なり(譯文)

といひ又敢語に序して

何ぞ吠聲の哤哤に憂戚せん(譯文)

といへる如き當時先生の學說に對して如何に非難攻擊の多かりしかを想像するに難からず、加之先生歿せし翌年は所謂寬政異學の禁發表せられたり、かかる際に於て世論未だ定まらざる獨創の哲學を唱道せし、動もすれば異端を誤解され易き傾向ある異彩的人物の碑銘を撰文することは意外の累を作者に及ぼさずとも限らざりしを以て特に第一流の學者を煩はすことを差控へたるものにはあらざるか、然れども是れ全く余の想像に過ぎざるなり相當の文書を發見するにあらざ

れば容易に斷定せらるべき問題にあらざるなり且らく記して大方の敎を待つ

○梅園先生肖像　其一

梅園先生の肖像現存せるもの二あり、一は文窓の筆に成り他は東籬の筆に成る、前者は東國東郡武藏町綾部克太氏の所藏にして、後者は速見郡杵築町佐野長次郎氏の所藏なり、其年代を考ふれば前者即ち文窓の作先にして後者即東籬の作後なり、然れども世に廣く知られたるものは東籬の作のみ、蓋し其の贊者が萬里先生なるに依るか、文窓の作は從來殆ど世に知られざりしものなれども、其高風淸標寫し得て躍如たり蓋し傑作なり、箕山の贊、贊としては無類の長文にして亦以て珍となすに足る（上卷卷首の寫眞是なり）、田邊文窓は富永の人にして谷文晁の門人なりと傳ふ、綾部仲善の請に依て之れを描きたるなり、而して仲善之れを得て贊を其師由良箕山に請へり、箕山名は孫助、梅園先生より三歲の年少者なり、箕山四歲にして父を喪ひ、八歲にして梅園先生の友藤波先生に句讀を受け、十六歲にして藩に仕へ、二十八歲にして多病且つ母已に歿せしを以て、決然仕を辭して京に出づ、箕山自ら同邦勉友と稱すれども其の桑梓を辭するの前如何なる交遊ありしか文書の徵すべきものなし、然れども秋沖、鳴鶴、淸章、文圭、仲善の徒何れも初め浦門に學び、後ち京に出でゝ箕山の門に遊びたるを以て、梅園箕山二家の間書信の贈答あり、著書の交換あり、神交極めて深きものありしが如し、是を以て箕山は居常一度故山に歸り梅園を訪ひ問を擧げ疑を質し益を請はんと欲せしが、其の訃音に接して失望せし旨を述べたり、蓋し箕山は梅園の爲人に深く推服せしものありしが如し、贊中言へるあり、

其人溫宣篤學。名德無雙。

又其銘に曰はく

攸降孖岳　攸潜東川　攸託醫方
攸奉詩書　攸極三才　攸冀一巾
攸著文賦　攸服俊秀　攸斆邦國
攸達公家　攸昂齊聖　攸垂后則
攸福壽耉　攸錫孫子　作描英靈
作敬祇肅　攸貽口碑　攸勒贊銘

同邦晩友寓京　由儀併書

○梅園先生肖像　其二

腰懸けて花瓶の梅に對へる梅園先生の肖像を揮毫せしは片山東籬なり、東籬名は藤弘、東籬は其號、又九畹と號す、中津の人にして代代染工たり、家名を更沙屋といへり、曾て京都に遊びて畫を丸山應擧に學び又文學を梅園先生に學び、遂に奥平家の畵師となれり、後ち斯道の奥義を十市石谷に傳へたりといふ、石谷は杵築の人なり、長崎の鐵翁、石谷の畵を見る毎に歎賞して「古法を以て新機軸を出せるもの未だ此の如きを見ず、石谷の如きは眞に名家なり」といへりとぞ、以て其の造詣の深かりしを察すべし、聞く南畫にして人物に巧なりしは石谷の長所なりしと、石谷曾て萬里先生の肖像を描き、又百蟲百花の圖を作れり、共に精巧を極め今や天下の逸品となれり、而して石谷が斯くの如く人物畵に長じたりしは能く其の師片山東籬の衣鉢を傳へたるによるといへり、以て東籬の造詣如何を察すべし、斯る名家の筆に成れる肖像に萬里先生の賛を得たるは梅梢月を得たりといはんか、錦上花を添へたりといはんか、萬里先生曾て孔子の像に賛して萬里敬讃と書せり、而して今梅園先生の肖像に賛して萬里拜讃と書せり萬里先生が如何に梅園先生に傾倒しつゝありしかを見るべし、此の肖像は曾て石板摺として頒たれたりしを以て今や縣下到る處に先生の肖像を見るに至れり、而して畫家の梅園先

生を寫すもの殆ど之れを粉本とせざるなし、全集下卷卷首に掲げたる肖像寫眞は佐野氏所藏の原本より撮寫せしものなり、

○遺墨の語句

先生人の來りて書を請ふものあるに當り書して之を與ふるや、其人に最も適切なる語句を撰み以て感悟砥礪の資に供し自省發奮の機を與へんことを努めゝれたり、而して其最多きものは「知恥」の二字若くは「恥をしれ」の四大字なり、以て敎化の方針の何れにありしかを知るべし、今先生の遺墨中多く見受くる語句を玆に蒐記すべし、

知恥。

恥をしれ、

爾俸爾祿民膏民脂下民易虐。上天難欺。

莫賤於乞。莫辱於偸。莫暴於奪。莫慘於殺。

自天祐之吉無不利。

無念爾祖。聿修厥德。

顯允君子。莫不令德。

勞謙君子。有終吉。

居仁由義大人之事備矣。

乘人之車者。載人之患。衣人之衣者。懷人之憂。

鳴鶴在陰。其子和之。

鳶飛戾天。魚躍于淵。

閒中今古。醉裏乾坤。

春與物爲春。

峰秀階前。

鶴雲。

不貧天功則莫所用欺。不費天物。則莫所用奢。

瓜田不納履李下不正冠。

白髮老閑事。

身の程をしれ。

上を見な。

○栽樹殖林

先生は先儒未發の卓見を以て萬有の根本義を探求せし我邦稀有の哲學者なりしと雖も、

必しも高遠を以て旨とせず、同時に經世實用の學を忘れざりしなり、是を以て其著書中政務治術に關するもの若くは殖産興業の必要を說けるもの少からざるなり、特に先生が一面醫を業とし、一面深奥の學理を研鑽しつつある間に於て、自ら率先して種樹栽培の事を行ひ、以て地方農民を指導勸誘し、專ら心を民力の休養と實業の奬勵とに留められしは、後世識者をして嘆賞措く能はざらしむるものあり、現時西武藏村地方人士が比較的栽樹營林の思想に富めるは惟ふに先生の遺風餘德の感化にして豈偶然ならんや、左に先生の遺著遺墨中栽樹營林に關する語句と現在の二三の事蹟とを紹介すべし、

丙午封事の中に曰く

社寺内に楠檜杉等を神木同樣仕立置くべし、此は手間費えずして御用の時至極重寶なるべし。

豐後梅は御領內の特産物なれば繁殖せしむべきに、今は追追枯れて盡きんとするの傾向あり、惜しき事なり、植繼がせられ度事。

中田村の親族中野億右衞門氏へ送れる書翰中に曰く

鵞藏殿へ杉苗の事修介より御頼申置候、良き雨も降り候、一人取りに遣し申筈に御座候云云先三四文位の苗五百見よくば六百も致所望候云云　又曰く

鵞藏へ悴より杉苗御頼申置候今日一人遣し可申候四文か五文より內に入位五百本程望に御座候使のものとて候はば皆御遣可被下候とて不申候はば先もて候程御世話被下候樣に御申可被下候銀札三十匁爲持遣候云云

斯くて先生の栽植せられし梅林は數多ありしならんが現に存在するものを擧れば、

一、庭園の梅木

庭園内に椹の大木あり亭亭として天空を摩し周圍三尋に餘る實に得易からざる良材なり此外木犀銀杏等同時代に植えたる老木多し、

一、字一町畑の杉林

屋後に在り廣大なる杉林なるが或る時代に伐採せしため今數十株を存し植繼ぎの杉檜と共にます〳〵繁茂し一株の價約百金なりと云ふ老杉森森として晝猶暗く坐ろに百數十年の往時を偲ばしむ、卷首杉林の寫眞は即是を撮影せし也、

一、字德ヶ迫の杉山

居宅の西南數丁の所に在り是亦先生の經營せられしものなるが當主榮二郎氏の先老大明翁の學資に充つるため伐採したりとて今は唯其の切株と植繼ぎの杉檜を存するのみ、

○梅園とスミス、價原と國富論

先生に贈位の御沙汰(明治四十五年二月二十六日附)ありし翌月東京高等商業學校講師法學博士福田德三氏は一橋會雜誌第七拾八號論說欄に「三浦梅園著、價原を同人に頒つの序」といへる一文を掲げ雜誌附錄として價原の全文を掲載して一橋會同人に頒たれたり、玆に該序文の要點を摘錄すべし、

此度畏くも從四位を追贈せられたる三浦梅園が學名は知らざる人もなかるべし、是れ贈位の事ありし所以にして此際特に梅園のことを追懷せしむるものあり、然るに此碩儒に價原の著ありて德川時代の經濟論中出色のものたることは餘り知られず、梅園が德川時代有數の經濟學者の一人として數ふべきものなるを始めて世に示したるは專ら學友河上(肇)教授の効に歸すべし、即ち教授は去三十八年五月の「國家學界雜法」に「三浦梅園の價原及本居宣長の玉くしげに見はれたる貨幣論」

てふ有益の一文を寄せて「しかるに此人にして價原の著ありて經濟學上一家の見識を述べたるものあることは世人の多く知らざる所なり」とて其大體を紹介せられたり、予も驥尾に附して其誌上に論じ置けることあり、然るに近頃我校の圖書館に價原の寫本を藏することを見出し借受けて之を見るに當時の學生たりし山口誠一氏が自ら筆寫して母校に寄贈せられたるものなるを知れり、其凡例によれば「謄寫の目的はかかる古き時代偏僻の地にかく進歩せる經濟的觀察をなせし人あるを示さんが爲めなり」とありて三十五年五月の日附を附せり、即ち河上教授の論文に先つ實に三年なり、氏の篤志誠に感ずべく其の着眼誠に仰ぐ可きなり、予も一昨年學友瀧本誠一氏の藏本を借り受け手寫し置きたり、思ふに河上氏が見られたるは同じき本ならんか、近頃山崎法學博士も帝國大學の藏本を筆寫せしめられたりといふ、瀧本君は最近に別寫本一種をも得られたり、されど同氏舊藏のものは恐く篠崎小竹の自筆にかかるべしとのことなれば茲には其を復寫せる予の自筆の稿本を取りて剞劂に附し一橋の同人に頒つことしたり、予は每年三月九日(アダム、スミス國富論第一版の日)を紀念せんと希ふものなれば、本年は我一橋會雜誌を籍りてスミスに因緣ある本邦學者の此の隱れたる名著を顯はしスミスを懷ふと共に梅園の學恩に謝する所あらんと欲するものなり、何故に梅園と其價原とがスミスと其國富論とに因緣ありや、乞ふ左表を見よ、

アダム、スミス		三浦梅園	
生年	一七二三年		享保八年(一七二三年)
歿年	一七九〇年		寛政元年(一七八九年)
國富論の初刊	一七七六年三月九日	價原撰述	安永二年四月(一七七三年)

即ちスミスと梅園とは完全なる意味にての

同時代人にして生るるに年を同ふし、死するに唯一年を前治するのみ、而して茲に收むる價原の撰述は實に「經濟學の經典」の出版に先つ三年の前にあるなり、元より彼をもて此と比肩せしめんは不當なること言ふまでもなし、然れども何等の經濟學なかりきと豫斷せられ居る我德川時代にもスミスの書より三年の前に這箇の名著あることを知るは興味あることとならずや云云、

尙拙稿「梅園の貨幣論とボアギユベールの貨幣論」を見られたし云云、

○梅園三語、玄語の舊稿

先生學問の精粹は蓋し梅園三語にあり畢生の精力を傾倒せし所なり、其の改草換稿の年所回數苦心慘憺たる先景は行狀具さに之れを語る、玄語は二十三年に亘りて二十三回に及び、贅語は三十四年に亘りて十五回に及び、敢語は四年に亘りて四回に及べり、而して先生の舊宅には今猶先生手書の稿本を藏す、就中先生の苦心を最も具體的に說明しつゝあるものは玄語の舊稿數十冊なりとす、就て之れを展せんか、文字は皆謹嚴なる細楷にして一たび書き改めし稿本の裏面に又も書き起したるあり、墨又は朱にて加除添刪したる上を更に全紙面に縱橫の線を塗抹したるあり、是れ皆玄語二十三稿の隨一なり、誰か肅然として襟を正し先儒困苦の精力に對して滿腔の敬意を表せざるものあらんや

○玄理思索の苦心

門人矢野雖愚に寄せたる書翰に曰く

條理千古を經て野子已前發明致し候人無御座候故階梯御座なく、さて〳〵苦み候事に御座候、拙少年より窗之れが爲に豁き、髮之れが爲に禿げ候へ共條理七八分をも得候位に被存候、生涯十分の成就は出來申間敷候

と先生が玄理思索の困苦や玆に亦其一班を窺ふを得べし、蓋し玄語の文字は新語を獨創して我より古をなし、人をして其奇を眩せしむ、例へば日月といはずして日影といひ、水火といはずして水燥といひ、方圓といはずして直圓といふの類擧げて數ふべからず、其名を命ずるや新、其義を取るや殊に、片言隻句古人の稱に依らず、其說に我古人を忌むにあらず古人まだ條理を論せずして其襲踏すべきものなきを以てなりといへり、脇蘭室の先生を祭る文に曰く

惟其精微、竅論太邃、門生學徒、或未克食其截、

と況んや後人をや、然れども歲月を積みて塾讀玩味せば其學未だ必しも全然窺ひ難きにはあらざるべし、

○梅園とデカルト

西洋近世哲學に於ける唯理學派の開祖デカルトは、近世哲學に於ける大組織を立てたる最初の人なりとす、新時代の學問界の精神即ち從來の思想に依傍せずして根柢より新しく確實に萬事を考へ直さんといふ思望は彼に於て最も猛烈に發揮されたり、

デカルト謂らく、眞正の知識は確固不動の根基の上に立たざるべからず、而も世間一切の事物は疑ふべきもののみ、唯吾人の疑はんと欲して疑ふ能はざるものは我の存在なり、何となれば一切の事物を疑ふとのは我に外ならざればなり、而して疑ふといふことは思ふの一種なり、我が思ふといふこと確實ならば之と共に思ふ者即ち我れの存在することは疑ふべからず、是に於て我思故我在といふ命題を得たり、之を彼が哲學の出立點として一切知識の基礎として討究を進め誤有る哲學問題の解決を試みたり、デカルトが此の我思故我在の一句は實に近世自由思想の初聲なりしなり、

我が梅園先生の哲理研究の態度は西洋近世自由思想の急先鋒たらしデカルトの其れと頗る相似たるものあり、梅園先生玄語例旨に謂へるあり、

晋は垂髫より觸る所總て疑へり、解く者耳に咻すと雖も語て徹すべきなし竊に夢寐の語と爲す、思て偏せり、以て無權の衡と爲す、故に人の言に曰く火は陽なり故に熱し、水は陰なり故に寒しと、晋は則ち以爲らく、陽なるものは何すれぞ熱き、陰なるものは何すれぞ寒きと、人の言に曰く、陽は輕くして昇り陰は重くして降ると、人の思ふや此に至りて止むも晋の疑や是に於て已に甚し、隆然として烏きもの何すれぞ視る、遂乎として谷き者何すれぞ聽く、目は何すれぞ聽かざる、耳は何すれぞ視ざる、人は是に至りて釋くも晋は釋くこと能はず、人之れを古に聞き之れを書に得れば便ち言ふ、晋は則ちまだ全く信ずる能はず、天地に於けるや荒唐散漫として說き、死生に於けるや恍惚曖昧として言ふ、驗を僻に取り否を空に懸く、人は則ち意に介せざれども晋は則ち懌然たること能はず、反覆して之れを思ひ沈潛して之を釋ね、俯仰の間に小窺あるに似たり竟に自ら量らず此に玆述あり、蓋し此述たる、一一の條理に由りて以て則を天地に取るなり、則ち敢て古と計校せず云云、

其の研究的態度の眞摯にして根本的なる、彼のデカルトの其れと對照して毫も遜色あるを認めざる也、本邦哲學史上梅園の價値は啻に是れに止まらず、更に一層大なるものあり、梅園とカントの比較是なり、

○梅園とカント

德川幕府が程朱を以て官學の宗とせしより當時の大儒をもて任ずるものも多くは性理の説に局せられ別に發明する所なかりし時

代に於て、梅園卓犖不羈一家の新學說を唱道せしは識見の一世に超逸するを證するものにして啻に本邦哲學史上の一大異彩たるのみならず西洋哲學史に對照すとも極めて優越なる座席を占むべき巨匠なり、從來學者の研究此處に至らざりしは甚だ遺憾なり、

西洋近世哲學に於て其研究の根本的にして其の組織の廣大且精密なるものカントの右に出るものなし、カントと梅園との比較は極めて興味ある研究なるべきを信ず、

佛人デカルトを祖とせる唯理學派と英人ベーコンを祖とせる經驗學派とを折衷し理性と經驗とを融和して圓滿なる解決を與へ以て近世哲學史上に一新時期を劃したる大哲學者をカントとす、即ちカントは兩派に對し極めて公平なる研究を遂げ而る後兩派の中庸を失する點を指摘し、吾人の認識は形式と內容とより形成せらるるものなることを唱道し、以て近世哲學史上に一新生面を開きたり、カントの哲學を論述したるものは即ち純粹理性批判、實踐理性、批判、賞鑑性批判の三批判論是なり、而して梅園に玄語贅語敢語の三大著述所謂梅園三語あり、カントの三批判と梅園三語との間には年代に關し且つ內容に關して極めて興味ある對照を有す、

年代比較表

三浦梅園		イムマヌエル、カント	
享保八年	梅園生	一七二三年	
享保九年		一七二四年	カント生
寶曆三年	玄語起稿	一七五三年	
寶曆六年	贅語起稿	一七五六年	
寶曆十年	敢語起稿	一七六〇年	
寶曆十三年(三)	敢語脫稿	一七六三年	
明和六年		一七六九年	純粹理性批判着想

梅園	カント
安永四年(一)玄語脫稿	一七七五年
天明元年	一七八一年(1)純粹理性批判出版
天明八年	一七八八年(2)實踐理性批判出版
寛政元年(二)贅語脫稿	一七八九年
梅園歿(六十七歲)	
寛政二年	一七九〇年(3)賞鑑性批判出版
文化元年	一八〇四年　カント歿(八十一歲)

一見直に讀者の注意を引きし如く梅園とカントは其生年僅に一年を異にせるのみ、即ちカントは梅園より一つ弟にして十四年間長生せり、梅園は三十一歳にして玄語の稿を起し拮据二十三年換稿亦二十三回、五十三歳に至りて漸く完成せり、而してカントの純粹理性批判は其の五十八歳の時第一段は出版されたり、其の編述は僅に四五ヶ月にして成し了へたるものなれども實は着想已來十二年間の熟慮の結果なりとは彼れの自ら語る所なり、即ちカントの純粹理性批判は其の着想に於て梅園は玄語に後るること十六年、其の完成に於て玄語に後るること六年なりとす、吾人は先きに福田博士のスミスと梅園との年代比較表に依りて本邦經濟學史上極めて意味深長なる事實を認めたるが、今又カントと梅園との年代比較に依りて本邦哲學史上頗る意味深長なる事實を發見せしやの感あり、而してカントと梅園とは只其全く同時代の人にして其著述の年代相近く其の體裁關係の相似たるに止まらず、其思想の內容に於ても亦頗る相接近せるもののあるを認めらる豈世界哲學史上の一大奇遇ならずや、

○梅園三語とカントの三批判

梅園三語とカントの三批判との內容を比較

對照すれば左表の如し

玄語　天地を說く―純粹理性批判　認識を說く
贅語　天人を說く―實踐理性批判　道德を說く
敢語　彝倫を說く―賞鑑性批判　美學を說く

梅園が玄語に於て、天地萬有の眞相を知らんと欲せば、天地より己れを見るべし、己れより天地を見るべからずと說き、萬物生化の理を以て天地間の現象を說明し、一條の妙理宇宙を貫徹すと喝破せしは、カントが純粹理性批判に於て、吾人認識の對象は本體にあらずして現象なることを論證せしと異工同曲ならずや、梅園の所謂天地より己れを觀るものは、カントの所謂物如の本體にして、梅園の所謂己れより天地を見るものは、カントの所謂現象と意義頗る相近からずや、

梅園が贅語に於て、玄語所說の條理に由て古今を論じ以て天地自然と人間との關係を說き、以て己れより見たる天地に適當の意義を與へたるは、カントが純粹理性批判に於て否定せし本體界を實踐理性批判に來りて復活せしめたると對比して頗る妙味あり、梅園の敢語とカントの賞鑑性批判とは內容の比較稍困難なれども前二書の橋梁として夫夫其に缺く可からざる意義を有する點は同一なり、而して敢語は立國の大本を說き治國の要道を教へ國民道德の基礎を講明したるものにして、日本哲學者としての特色を發揮せるものにしてカントに之れなき所梅園の梅園たる所なり、若夫れ當時の儒流漢學心醉の結果、湯武の放伐を賛して聖道となし、動もすれば我邦立國の大本を忘れんとするもの少からざりし時に於て、梅園敢然として惑はず、忠孝の大義を明かにし人心の歸趨を教へて、「天下に二尊あり曰く君、曰く父」と提醒し、「君父と臣子とは自ら定分あり、其位顚倒すべからず」と喝破せし如きは、啻に痛快の文字なるのみ

ならず、名教を維持する千古不磨の達見といふべし、

斯く對照し來れば梅園思索の高邁超逸一世に卓絶し、西洋哲學史に對して實に之れあるに依りて日本哲學史の光彩と尊嚴とを維持することを得るものといふも溢美にあらざるべきを信ず、予は固より梅園カント兩者の價値を諸有る點に於て同一なりと斷定せんと欲するものにはあらざるなり、唯夫れ兩者造詣の奧底に於て頗る異工同曲の點あることを紹介して、何等獨創の哲學なかりきと考へられたる我國にもカントの書より六年前に這箇の名著あることを知るは大に人意を强ふするに足るものありといへる點に於て讀者の首肯を得ば今の目的は達せられたるものなり、若夫れ細目の比較評論に至りては更に筆を改めて大方の教を請ふの日あるべし、

○梅園の學風

梅園先生の學風を見るに其研究は極めて根本的徹底主義にして其思想は飽まで進取的自由主義なり、かかる學風に依りて開拓せられたるもの是れ吾が二豐の學界なるが故に、爾後先生の風を望みて興りたるもの萬里淡窓竹田五岳の諸家を始め凡て自由思想に富み、必ず何らかの新生面を發揮し多少の新領土を開拓せんことを努めたるの形跡歷然たり、然れども梅園は決して彼の横議高論自ら喜ぶ竹林の徒にあらず、常に利用厚生の實用主義を忘れざりしことは事實の證明する所なり、然り實用主義を忘れざりしと雖も、而も輓近の物質主義個人主義等の傾向は毛頭之れを有するものにあらず、極めて穩健なる國家主義の上に立てり、嗚呼先生の如きは眞に穩健なる哲人、有用の學者、圓滿なる偉人といふべし、宜なる哉豐後聖人の稱ありしや、聞く

樂翁公梅園を用ゐんと欲せしが偶、其死に遇て事罷みたりと、天若先生に借すに年を以てし、出でゝ樂翁公學政の帷幄に參じたらんには啻に寛政異學の禁を見ざるのみならず、我邦學界の成績は必ずや更に偉大の發展を遂げたりしならんに、千歳の遺憾と謂ふべし、

〇梅園、蘭室、萬里、

梅園先生は二十三歳五十六歳前後二回長崎に旅行し之に依りて泰西の風氣に接觸せられたり、其程度は知るべからずと雖も、高葛陵に復せし書中に

　年弱冠を過ぎて始めて天地の形態を西學に得て喜ぶ云云

とあるに據るも先生の思想の一部は夙に西學に負ふ所ありしは疑ふべからず、而して再遊の時には幾多泊來の器械と學說とを見聞せられしのみならず、蘭字をも多少學ばれたる證跡あり、然れども遂に蘭書を讀むこと能はざりしは確實なり、而して先生は深く之れを遺憾とせられたり、歸山錄に曰く

　其字讀むこと能はず、身自ら學の博からざるを憾むのみ云云、

と以て先生の志を見るべし、而して先生の此の志を受けて深く西學の有用の學たることを認めたるは脇蘭室なり、蘭室の初めて梅園に謁を請ひしは實に梅園の長崎旅行の七年後なりき、蘭室其著菡海漁談に曰、

　少年の時、天文地理は西洋の學最も精しと思ひ、師を得て學ばんことを願ひけれども、善師に遇はざりしかば空しく年を經る間に、彼も亦怪誕なる教を尙ぶなれば左迄慕ふべきにもあらずと思ふ心づきたるに云云、遂に西學をば問はずしてやみにき、されど怪誕の教だに惑ふことなからせば、實測の術は實に有用の學なり、志ある人は問ふべきものにこそ云云、

即ち蘭室は少時西洋學を學ばんと志せしことありしを證す、是れ當時一般儒流の夢想だも及ばざりし所なり、此志は先に蘭書を讀み得る程に學の博からざるを深く遺憾なりとせし梅園に涵養せられしものに非ずして何ぞや、蘭室は西學を學ばざりしを悔ひて、有用の學、志あるものの學ぶべきを主張せり、其教を受け其志を繼ぎし者は實に帆足萬里なりとす、蘭室は之を梅園に承けて萬里に傳へしなり、萬里他日一部の字典を便として獨學遂に蘭書を讀破し彼の窮理通の大著を完成し西洋研究の先鞭を著けしは、學統上父祖二代の遺志を繼承して之を大成せしものといふべし、宜哉後日米良東嶠の撰びし萬里先生の碑文に左の言あるや、

夫れ學は彜倫を原ね、兼て物理を明かにし、智を開き務を成し、以て原生利用に資するもの、學山先生に基き、而して先生(萬里)に大成せり。

梅園先生逸話集 終

梅園全集下卷終

大正元年九月廿一日印刷
大正元年九月廿四日發行

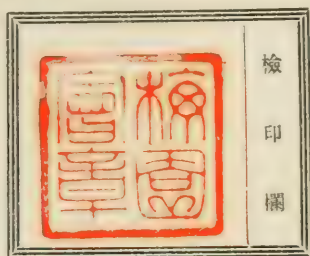
梅園全集上下二卷
正價金七圓

複製不許

檢印欄

下卷

編纂者　梅園會

發行者　辻本卯藏
東京市神田區北神保町十一番地

印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日淸印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地

發行所
東京市神田區北神保町十一
振替口座東京八壹五番
電話本局三四三二番
弘道館

梅園會會則

一、本會ハ梅園先生ノ學說ヲ江湖ニ紹介シ世道人心ニ裨益シ學術界及敎育界ニ貢獻センコトヲ期ス
二、本會ハ前項ノ目的ヲ達センカタメ『梅園全集』ヲ編纂シ且之ヲ刊行ス
三、本會ニ總裁一名會長一名顧問若干名編纂主任一名理事二名及主事三名ヲ置ク

梅園會

總裁　貴族院議員子爵　松平親信
會長　元田直
顧問　拓殖局總裁　元田肇
顧問　文學博士　物集高見
顧問　大分縣知事　昌谷彰
編纂主任　大分縣立杵築中學校長文學士　藤井專隨
理事　高橋文六
理事　阿部七五三吉
主事　加藤依永
主事　大林龜太郎
主事　岡島保男

名譽賛助員

子爵 稻葉順通
男爵 到津公凞
貴族員議員 陸軍中將 男爵 原口兼濟
文部大臣 長谷場純孝
大阪朝日新聞記者 西村時彥
東京帝國大學文科大學教授 文學博士 星野恒
貴族院議員 侯爵 德川賴倫
貴族院議員 伯爵 德川達孝
內務次官 床次竹二郎
貴族院議員 岡田良平
東京高等師範學校長 嘉納治五郎
貴族院議員慶應義塾長 鎌田榮吉
錦鷄間祇候貴族院議員 谷森眞男
文部省普通學務局長 田所美治
貴族院議員 子爵 曾我祐準
貴族院議員帝國教育會長 男爵 辻新次
伯爵 中川久任
東京帝國大學文科大學教授 文學博士 中島力造
文學博士 村上專精
東京帝國大學文科大學教授 文學博士 井上哲次郎
貴族院議員 伯爵 奧平昌恭

贊助員

子爵 大給近孝
貴族院議員 法學博士 桑田熊藏
貴族院議員 男爵 久保田讓
帝室會計審査官 工藤一記
貴族院議員 子爵 久留島通簡
貴族院議員 伯爵 柳原義光
貴族院議員 伯爵 柳澤保惠
伯爵 松平直亮
伯爵 松平頼壽
貴族院議員 子爵 松平乘承
文部次官 福原鐐二郎
貴族院議員 伯爵 寺島誠一郎
錦鷄間祗候貴族院議員 淺田德則
東北帝國大學總長貴族院議員 澤柳政太郎
子爵 木下俊哲
東京帝國大學文科大學教授 文學博士 三上參次
衆議院議員 箕浦勝人
貴族院議員 子爵 三島彌太郎
子爵 毛利高範
（以上イロハ順）

東宮侍醫 池邊棟三郎

東京蠶業講習所長農商務省技師　本多岩太郎
陸軍大佐　小澤季治
大分縣東國東郡長　小野秀胤
陸軍省人事局長　陸軍少將　河合操
第六高等學校長　金子銓太郎
九州帝國大學福岡醫科大學教授　醫學博士　田原淳
京都府立第五中學校長　中野省吾
南滿洲鐵道株式會社理事　野々村金五郎
第一高等學校教授　保田棟太
大審院判事　藤波元雄
大分縣速見郡長　赤鋒文太郎
大分縣立大分中學校長　安倍志摩治
佐野介三
醫學博士　佐野彪太
會計檢查官　三輪一夫
大分縣師範學校長　峰是三郎
三浦榮次郎
三浦孫六
日本銀行文書局長　島郁太郎
重光直愿

（以上イロハ順）